1999
佐久市埋蔵文化財調査報告書　第73集

NISHIIPPONYANAGI

一本柳遺跡群

西一本柳　Ⅲ・Ⅳ

第3・4次調査

長野県佐久市湯川河岸段丘上の弥生～平安時代集落の調査

佐　久　市
佐久市教育委員会

1999
佐久市埋蔵文化財調査報告書　第73集

NISHIHONYANAGI

西一本柳

一本柳遺跡群

Ⅲ・Ⅳ

第3・4次調査

長野県佐久市湯川河岸段丘上の弥生～平安時代集落の調査

佐　久　市
佐久市教育委員会

一本柳遺跡群

西一本柳遺跡

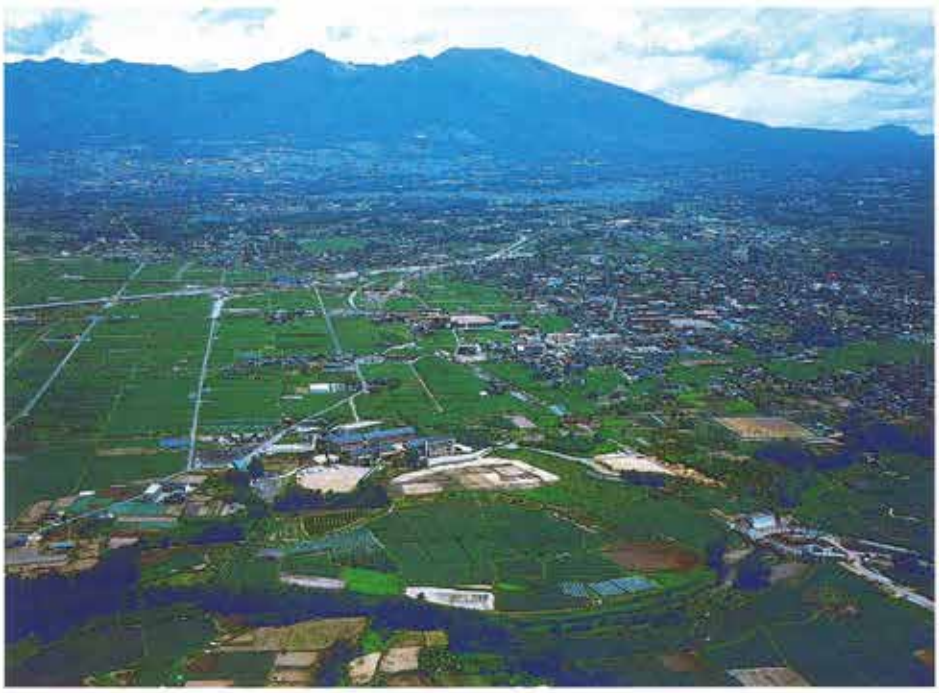
長野県佐久市　湯川河岸段丘上の弥生～平安時代集落の第３・４次調査

1999

第3次調査全景

口絵 2

第３次調査－浅間山を臨む

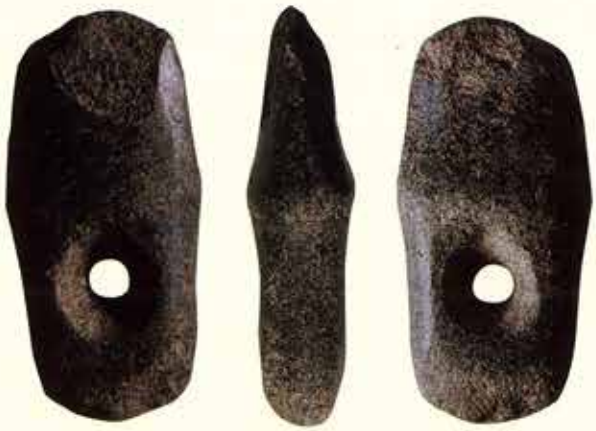


第４次調査－浅間山を臨む

第4次調査全景

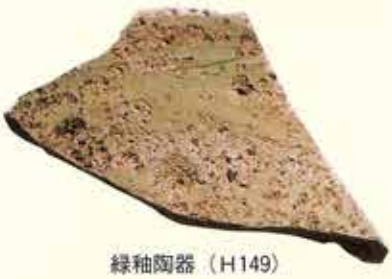
H41号住居址遺物出土状況

鉇尾（M6）



剣型石製品（H44）

丸鞆裏止金具（H186）



緑釉陶器（H149）

円面硯（H149）

「井」刻書須恵器坏蓋（H198）

例　言

1．本書は、国道141号線バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2．調査委託者　佐久市（都市計画課）

3．調査受託者　佐久市教育委員会

4．遺跡名及び発掘調査所在地　一本柳遺跡群　西一本柳遺跡Ⅲ・Ⅳ（ＩＮＰⅢ・Ⅳ）
佐久市岩村田字西一本柳・常木

5．調査期間・面積　発掘調査　平成７年７月24日～11月30日
平成８年４月８日～６月19日
平成９年３月13日～31日
整理調査　平成７年12月１日～平成８年３月31日
平成８年６月20日～21日
11月26日～平成９年３月12日
平成９年４月１日～平成10年３月31日
調査面積　6,550㎡

6．発掘調査は平成７年度は佐々木宗昭・小林眞寿が、平成８年度は須藤隆司・小林眞寿が担当し、整理調査及び本書の執筆・編集は小林眞寿が行った。

7．出土獣骨の鑑定は群馬県立大間々高校　宮崎重雄氏に依頼した。

8．本書に使用した土器実測図の内の一部分は㈱こくそくが作成したものに小林眞寿が修正・加筆したものであり、図版に使用した土器写真の一部分も㈱こくそくが撮影した。

9．遺跡全体図及び航空写真は朝日航洋株式会社が作成・撮影したものである。

10．本書及び西一本柳遺跡Ⅲ・Ⅳ出土遺物等のすべての資料は、佐久市教育委員会の責任下に保管されている。

凡　例

1．遺構の略記号は、住居址－H・掘立柱建物址－F・土坑－D・溝址－Mである。

2．挿図の縮尺は遺構１／80、遺物は１／４を基本としたが、該当しない場合は図中にスケールを示してある。

3．遺構の海抜標高は各遺構ごとに統一し、水糸標高を「標高」として示した。

4．土層の色調は、1988年版『新版　標準土色帖』に基づいた。

5．挿図中の方位は真北を示す。

6．住居址の面積は床面積であり、カマド部分を含んでいる。掘立柱建物址の面積は４隅の柱の芯により囲まれた範囲である。

7．挿図中における土器断面の黒色塗りつぶしは須恵器断面の表現である。また、赤色は土器の赤色塗彩範囲を表現している。

8．挿図中におけるスクリーントーンは以下の表現である。

Letraset Screen Tone

No.204－地山　No.687－焼土　No.786－柱痕　No.1216－カマド粘土範囲

No.320－住居址掘方埋土

No.111－土師器黒色処理　No.1207－灰釉陶器断面　No.769－灰釉陶器釉薬

9．遺物計測表の法量は上段－口径、中段－底径、下段－器高である。重量が必要なものは備考欄に表記した。また、表中に－で表現される数値は計測不可能か、丸底を呈する土器底部である。

10．遺物計測表の備考欄のNo.１等は、遺構図に●と数字で表記された遺物を表している。

11．写真図版の遺物の縮尺は原則として実測図と同一であり、No.は共通している。

目　次

例言
凡例
目次

第Ⅰ章　調査の概要 ……1
　第1節　調査の経緯と経過 ……1
　第2節　調査体制 ……2
　第3節　調査日誌 ……3
　第4節　遺跡の位置と周辺遺跡 ……5
　第5節　基本層序 ……6
　第6節　検出遺構・遺物の概要 ……7
第Ⅱ章　遺構と遺物 ……8
　第1節　住居址 ……8
　　1　弥生時代の住居址 ……8
　　2　古墳時代の住居 ……123
　　3　奈良・平安時代の住居址 ……301
　　4　時代不明の住居址 ……415
　第2節　掘立柱建物址 ……425
　第3節　土坑 ……457
　第4節　溝址 ……467
　第5節　Pit ……495
　第6節　遺構外出土の遺物 ……497
　第7節　Ⅱ次調査における出土遺物 ……505
第Ⅲ章　総括 ……529
　第1節　弥生時代 ……529
　　1　土器様相 ……529
　第2節　古墳時代 ……537
　　1　土器様相 ……537
　第3節　奈良・平安時代 ……546
　　1　土器様相 ……546
　　2　刻書・墨書土器 ……546
付　　編 ……550

挿 図 目 次

第１図　西一本柳遺跡位置図 …… 1
第２図　西一本柳遺跡と周辺遺跡 …… 5
第３図　西一本柳遺跡基本層序模式図 …… 7
第４図　Ｈ１号住居址 …… 9
第５図　Ｈ３号住居址 ……10
第６図　Ｈ２号住居址 ……11
第７図　Ｈ４号住居址（１）……13
第８図　Ｈ４号住居址（２）……15
第９図　Ｈ６号住居址 ……17
第10図　Ｈ７号住居址 ……19
第11図　Ｈ９号住居址 ……20
第12図　H14号住居址 ……21
第13図　H15号住居址（１）……23
第14図　H15号住居址（２）……24
第15図　H16号住居址 ……26
第16図　H20号住居址 ……27
第17図　H23号住居址 ……29
第18図　H26号住居址（１）……32
第19図　H26号住居址（２）……33
第20図　H27号住居址 ……36
第21図　H28号住居址 ……37
第22図　H30号住居址 ……38
第23図　H32号住居址 ……39
第24図　H33号住居址 ……40
第25図　H34号住居址 ……41
第26図　H36号住居址 ……43
第27図　H37号住居址 ……44
第28図　H39号住居址 ……45
第29図　H38号住居址 ……46
第30図　H40号住居址 ……48
第31図　H41号住居址（１）……50
第32図　H41号住居址（２）……51
第33図　H41号住居址（３）……54
第34図　H41号住居址（４）……55
第35図　H41号住居址（５）……58
第36図　H41号住居址（６）……59
第37図　H41号住居址（７）……60
第38図　H42号住居址（１）……61
第39図　H42号住居址（２）……62
第40図　H44号住居址（１）……66
第41図　H44号住居址（２）……67
第42図　H44号住居址（３）……69
第43図　H60号住居址（１）……71
第44図　H60号住居址（２）……72
第45図　H61号住居址（１）……73
第46図　H61号住居址（２）……74
第47図　H64号住居址 ……75
第48図　H68号住居址 ……77
第49図　H72号住居址 ……78
第50図　H82号住居址 ……79
第51図　H86号住居址 ……80
第52図　H87号住居址 ……84
第53図　H89号住居址 ……85
第54図　H95号住居址 ……87
第55図　H97号住居址 ……89
第56図　H99号住居址 ……89
第57図　H100号住居址……91
第58図　H102号住居址（１）……93
第59図　H102号住居址（２）……94
第60図　H103号住居址……95
第61図　H106号住居址……97
第62図　H109号住居址……98
第63図　H113号住居址……99
第64図　H116号住居址（１）……101
第65図　H116号住居址（２）……102
第66図　H117号住居址（１）……104
第67図　H117号住居址（２）……105
第68図　H118号住居址 ……107
第69図　H120号住居址 ……108
第70図　H121号住居址 ……109
第71図　H123号住居址 ……110
第72図　H139号住居址 ……111
第73図　H153号住居址（１）……113
第74図　H153号住居址（２）……114
第75図　H168号住居址 ……116
第76図　H178号住居址 ……117
第77図　H191号住居址 ……119
第78図　H196号住居址 ……120
第79図　H200号住居址 ……121
第80図　Ｈ５号住居址……124
第81図　H10号住居址……127
第82図　H13号住居址（１）……129

第83図　H13号住居址（2）……130
第84図　H17号住居址……132
第85図　H18号住居址（1）……134
第86図　H18号住居址（2）……135
第87図　H21号住居址……136
第88図　H22号住居址……137
第89図　H25号住居址……138
第90図　H31号住居址……140
第91図　H43号住居址……142
第92図　H48号住居址……144
第93図　H49号住居址……146
第94図　H50号住居址……148
第95図　H52号住居址……150
第96図　H53号住居址（1）……153
第97図　H53号住居址（2）……154
第98図　H55号住居址……155
第99図　H56号住居址……157
第100図　H57号住居址……159
第101図　H62号住居址（1）……161
第102図　H62号住居址（2）……162
第103図　H62号住居址（3）……163
第104図　H63号住居址……165
第105図　H65号住居址（1）……166
第106図　H65号住居址（2）……167
第107図　H67号住居址（1）……169
第108図　H67号住居址（2）……171
第109図　H69号住居址（1）……172
第110図　H69号住居址（2）……173
第111図　H70号住居址（1）……175
第112図　H70号住居址（2）……176
第113図　H70号住居址（3）……177
第114図　H71号住居址……179
第115図　H73号住居址……181
第116図　H74号住居址……182
第117図　H75号住居址……184
第118図　H79号住居址（1）……186
第119図　H79号住居址（2）……188
第120図　H80号住居址（1）……189
第121図　H80号住居址（2）……190
第122図　H81号住居址……193
第123図　H88号住居址……195
第124図　H91号住居址（1）……196
第125図　H91号住居址（2）……198
第126図　H92号住居址……200
第127図　H94号住居址（1）……202
第128図　H94号住居址（2）……203
第129図　H96号住居址（1）……204
第130図　H96号住居址（2）……205
第131図　H101号住居址……209
第132図　H107号住居址（1）……210
第133図　H107号住居址（2）……211
第134図　H110号住居址……213
第135図　H119号住居址……214
第136図　H122号住居址……216
第137図　H124号住居址（1）……217
第138図　H124号住居址（2）……218
第139図　H128号住居址……220
第140図　H136号住居址（1）……221
第141図　H136号住居址（2）……222
第142図　H138号住居址……225
第143図　H140号住居址……227
第144図　H141号住居址（1）……229
第145図　H141号住居址（2）……230
第146図　H141号住居址（3）……231
第147図　H143号住居址（1）……233
第148図　H143号住居址（2）……234
第149図　H143号住居址（3）……236
第150図　H144号住居址（1）……238
第151図　H144号住居址（2）……239
第152図　H144号住居址（3）……240
第153図　H148号住居址……242
第154図　H150号住居址（1）……244
第155図　H150号住居址（2）……245
第156図　H152号住居址……246
第157図　H158号住居址（1）……248
第158図　H158号住居址（2）……249
第159図　H161号住居址……251
第160図　H159号住居址……252
第161図　H162号住居址……253
第162図　H163号住居址（1）……255
第163図　H163号住居址（2）……257
第164図　H166号住居址（1）……258
第165図　H166号住居址（2）……259
第166図　H167号住居址（1）……262

第167図　H167号住居址（２）……263
第155図　H150号住居址（２）……245
第156図　H152号住居址……246
第157図　H158号住居址（１）……248
第158図　H158号住居址（２）……249
第159図　H161号住居址……251
第160図　H159号住居址……252
第161図　H162号住居址……253
第162図　H163号住居址（１）……255
第163図　H163号住居址（２）……257
第164図　H166号住居址（１）……258
第165図　H166号住居址（２）……259
第166図　H167号住居址（１）……262
第167図　H167号住居址（２）……263
第168図　H167号住居址（３）……264
第169図　H172号住居址（１）……266
第170図　H172号住居址（２）……267
第171図　H173号住居址（１）……269
第172図　H173号住居址（２）……270
第173図　H176号住居址（１）……272
第174図　H176号住居址（２）……273
第175図　H177号住居址……274
第176図　H179号住居址（１）……276
第177図　H179号住居址（２）……277
第178図　H180号住居址……279
第179図　H181号住居址……280
第180図　H182号住居址……282
第181図　H183号住居址……283
第182図　H184号住居址……284
第183図　H185号住居址……286
第184図　H186号住居址（１）……287
第185図　H186号住居址（２）……288
第186図　H193号住居址……290
第187図　H194号住居址（１）……291
第188図　H194号住居址（２）……293
第189図　H195号住居址（１）……295
第190図　H195号住居址（２）……296
第191図　H195号住居址（３）……299
第192図　H195号住居址（４）……300
第193図　H195号住居址（５）……301
第194図　H８号住居址……304
第195図　H11号住居址……305
第196図　H12号住居址（１）……307
第197図　H12号住居址（２）……308
第198図　H19号住居址……310
第199図　H24号住居址……313
第200図　H35号住居址……314
第201図　H45号住居址（１）……317
第202図　H45号住居址（２）……318
第203図　H46号住居址……320
第204図　H47号住居址……322
第205図　H54号住居址（１）……323
第206図　H54号住居址（２）……324
第207図　H58号住居址……327
第208図　H59号住居址（１）……328
第209図　H59号住居址（２）……329
第210図　H66号住居址……332
第211図　H76号住居址……333
第212図　H78号住居址（１）……335
第213図　H78号住居址（２）……336
第214図　H83号住居址……339
第215図　H84号住居址……341
第216図　H85号住居址（１）……343
第217図　H85号住居址（２）……344
第218図　H90号住居址……345
第219図　H93号住居址……347
第220図　H98号住居址……349
第221図　H104号住居址……351
第222図　H105号住居址……353
第223図　H114号住居址（１）……354
第224図　H114号住居址（２）……355
第225図　H115号住居址……357
第226図　H125号住居址……358
第227図　H126号住居址　360
第228図　H127号住居址（１）……361
第229図　H127号住居址（２）……363
第230図　H127号旧住居址……363
第231図　H130号住居址（１）……366
第232図　H130号住居址（２）……367
第233図　H131号住居址　368
第234図　H132号住居址……369
第235図　H133号住居址……371
第236図　H134号住居址（２）……373
第237図　H134号住居址（２）……374

第238図　H135号住居址……376
第239図　H142号住居址……377
第240図　H145号住居址……379
第241図　H146号住居址（1）……381
第242図　H146号住居址（2）……382
第243図　H147号住居址……385
第244図　H149号住居址（1）……386
第245図　H149号住居址（2）……389
第246図　H154号住居址……390
第247図　H156号住居址（1）……392
第248図　H156号住居址（2）……393
第249図　H157号住居址……394
第250図　H160号住居址……396
第251図　H165号住居址……397
第252図　H169号住居址……398
第253図　H171号住居址……399
第254図　H174号住居址……402
第255図　H175号住居址……403
第256図　H192号住居址（1）……406
第257図　H192号住居址（2）……407
第258図　H197号住居址……409
第259図　H198号住居址……410
第260図　H199号住居址（1）……412
第261図　H199号住居址（2）……414
第262図　H199号住居址（3）……416
第263図　H29号住居址 ……417
第264図　H51号住居址 ……417
第265図　H77号住居址 ……418
第266図　H108号住居址……419
第267図　H111号住居址……419
第268図　H112号住居址……419
第269図　H129号住居址……420
第270図　H137号住居址……420
第271図　H151号住居址……421
第272図　H155号住居址……421
第273図　H164号住居址……422
第274図　H170号住居址……422
第275図　H187号住居址……422
第276図　H188号住居址……423
第277図　H189号住居址……424
第278図　H190号住居址……424
第279図　H201号住居址出土遺物観察表…425
第280図　F 1 号掘立柱建物址 ……427
第281図　F 2 号掘立柱建物址 ……428
第282図　F 3 号掘立柱建物址 ……428
第283図　F 4 号掘立柱建物址 ……429
第284図　F 5 号掘立柱建物址 ……429
第285図　F 6 号掘立柱建物址 ……430
第286図　F 7 号掘立柱建物址 ……431
第287図　F 8 号掘立柱建物址 ……432
第288図　F 9 号掘立柱建物址 ……433
第289図　F10号掘立柱建物址 ……433
第290図　F11号掘立柱建物址 ……434
第291図　F12号掘立柱建物址 ……435
第292図　F14号掘立柱建物址 ……435
第293図　F13号掘立柱建物址 ……436
第294図　F15号掘立柱建物址 ……437
第295図　F16号掘立柱建物址 ……437
第296図　F17号掘立柱建物址 ……438
第297図　F18号掘立柱建物址 ……438
第298図　F19号掘立柱建物址 ……439
第299図　F20号掘立柱建物址 ……440
第300図　F22号掘立柱建物址 ……440
第301図　F21号掘立柱建物址 ……441
第302図　F24号掘立柱建物址 ……441
第303図　F23号掘立柱建物址 ……442
第304図　F25号掘立柱建物址 ……442
第305図　F26号掘立柱建物址 ……443
第306図　F27号掘立柱建物址 ……443
第307図　F28号掘立柱建物址 ……444
第308図　F29号掘立柱建物址 ……445
第309図　F30号掘立柱建物址 ……446
第310図　F31号掘立柱建物址 ……446
第311図　F32号掘立柱建物址 ……447
第312図　F33号掘立柱建物址 ……448
第313図　F34号掘立柱建物址 ……449
第314図　F35号掘立柱建物址 ……450
第315図　F36号掘立柱建物址 ……451
第316図　F37号掘立柱建物址 ……452
第317図　F38号掘立柱建物址 ……453
第318図　F39号掘立柱建物址 ……454
第319図　F40号掘立柱建物址 ……455
第320図　F41号掘立柱建物址 ……456
第321図　F42号掘立柱建物址 ……456

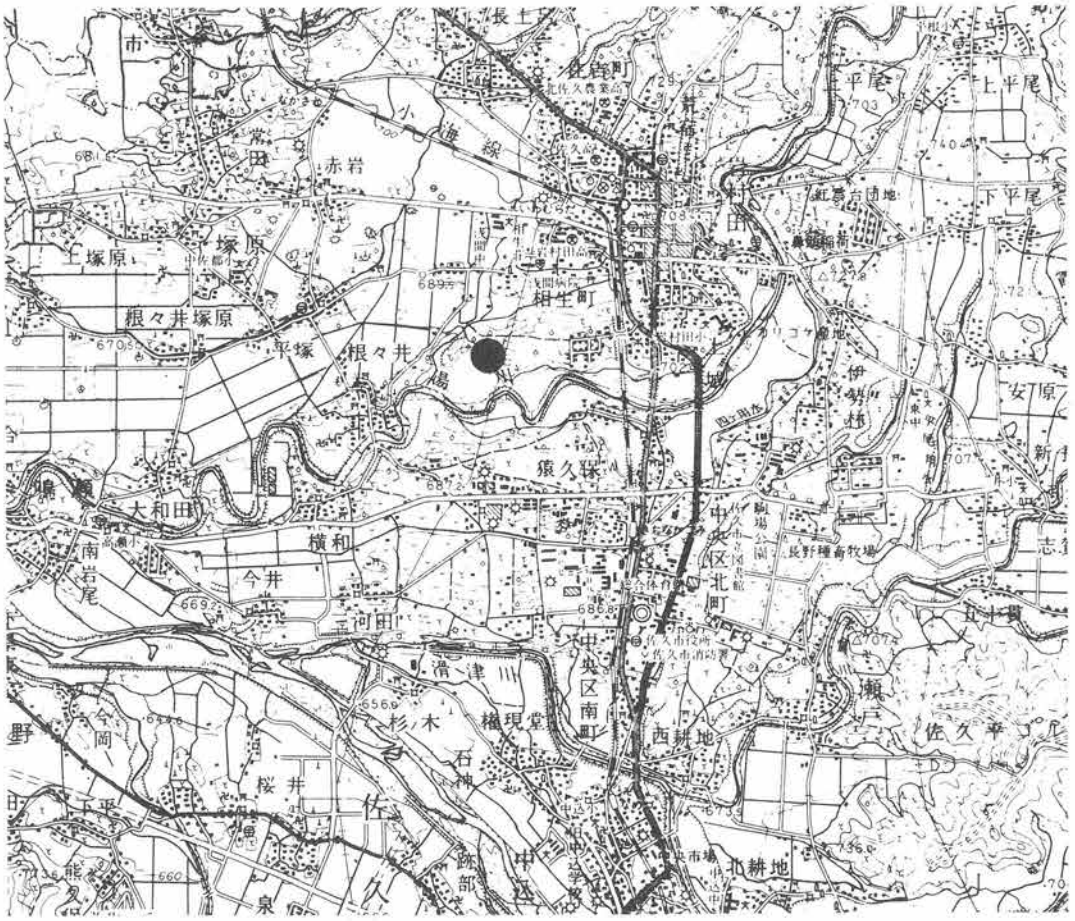
第322図　Ｆ43号掘立柱建物址 ……457
第323図　Ｆ44号掘立柱建物址 ……458
第324図　Ｆ45号掘立柱建物址 ……459
第325図　Ｄ１号土坑（１）……460
第326図　Ｄ１号土坑（２）……461
第327図　Ｄ２号土坑 ……463
第328図　Ｄ３号土坑 ……463
第329図　Ｄ４号土坑 ……463
第330図　Ｄ５号土坑 ……464
第331図　Ｄ６号土坑 ……465
第332図　Ｄ７号土坑 ……466
第333図　Ｄ８号土坑 ……466
第334図　Ｄ９号土坑 ……466
第335図　Ｄ10号土坑 ……467
第336図　Ｄ11号土坑 ……468
第337図　Ｄ12号土坑 ……469
第338図　Ｍ１号溝址出土遺物（１）……471
第339図　Ｍ１号溝址出土遺物（２）……473
第340図　Ｍ１号溝址出土遺物（３）……475
第341図　Ｍ１号溝址出土遺物（４）……476
第342図　Ｍ２号溝址出土遺物 ……477
第343図　Ｍ３号溝址出土遺物 ……479
第344図　Ｍ５号溝址出土遺物 ……481
第345図　Ｍ６号溝址出土遺物 ……481
第346図　Ｍ７号溝址出土遺物 ……482
第347図　Ｍ８号溝址出土遺物（１）……483
第348図　Ｍ８号溝址出土遺物（２）……485
第349図　Ｍ８号溝址出土遺物（３）……488
第350図　Ｍ８号溝址出土遺物（４）……489
第351図　Ｍ８号溝址出土遺物（５）……491
第352図　Ｍ８号溝址出土遺物（６）……493
第353図　Ｍ８号溝址出土遺物（７）……494
第354図　Ｍ８号溝址出土遺物（８）……496
第355図　Ｍ９号溝址出土遺物496
第356図　Ｐｉｔ出土遺物 ……498
第357図　遺構外出土遺物（１）……500
第358図　遺構外出土遺物（２）……501
第359図　遺構外出土遺物（３）……502
第360図　遺構外出土遺物（４）……506
第361図　第Ⅱ次調査Ｈ1･3号住居址
　　出土遺物 ……508
第362図　第Ⅱ次調査Ｈ3･5号住居址
　　出土遺物 ……510
第363図　第Ⅱ次調査Ｈ7･8･9･10号住居址
　　出土遺物 ……512
第364図　第Ⅱ次調査Ｈ11･12号住居址
　　出土遺物 ……514
第365図　第Ⅱ次調査Ｈ12･18･19･21･23･26号
　　住居址出土遺物 ……516
第366図　第Ⅱ次調査Ｈ30･47･49･50号住居址
　　出土遺物 ……518
第367図　第Ⅱ次調査Ｈ50号住居址
　　住居出土遺物 ……520
第368図　第Ⅱ次調査Ｈ50･51･57･58･59･64号
　　住居址出土遺物 ……522
第369図　第Ⅱ次調査土坑･溝址･Ｐｉｔ
　　出土遺物 ……524
第370図　第Ⅱ次調査遺構外出土遺物（１）…526
第371図　第Ⅱ次調査遺構外出土遺物（２）…528
第372図　壺口縁部の分類 ……531
第373図　壺の文様帯 ……531
第374図　壺の文様帯と文様 ……532
第375図　甕口縁部の分類 ……534
第376図　甕の文様帯 ……534
第377図　甕の文様帯と文様 ……534
第378図　各相における
　　弥生時代住居址の分布 …539
第379図　古墳時代土師器坏の分類 ……540
第380図　古墳時代編年表（１）……545
第381図　古墳時代編年表（２）……546
第382図　古墳時代編年表（３）……547
第383図　奈良時代編年表 ……549
第384図　平安時代編年表 ……550
第385図　墨書・刻書土器 ……551
付図　全体図

第Ⅰ章　調査の概要

第１節　調査の経緯と経過

西一本柳遺跡を包括する一本柳遺跡群は佐久市大字岩村田に所在し、湯川右岸の岩村田市街地南部の上野城から、西へ１㎞に渡って続く細長い台地上に展開し、標高689～700を測る。西一本柳遺跡は、一本柳遺跡群のほぼ中央から西半部分をいう。一本柳遺跡群と常木用水を挟んで西方に位置する中西ノ久保遺跡群や、北方に隣接する北西の久保遺跡とは便宜的に別遺跡として分離されているが、ひとつの遺跡群としても捉えられよう。

今回、佐久市により平成４年度に下水道事業に伴い調査が実施された西一本柳遺跡Ⅱの調査範囲を取り込む形で、遺跡内に国道141号線バイパスの建設が計画され、遺跡の破壊が余儀なくされる事態となり，佐久市教育委員会が調査を実施した。



第１図　西一本柳遺跡位置図（１：50,000）

第２節　調査体制

◎調査受託者

教育長　大井　季夫（平成７年６月退任）　依田　英夫（平成７年７月就任）

◎事務局

教育次長　市川　源（平成７・８・９年度）　北沢　馨（平成10年度）

埋蔵文化財課長　戸塚　満（平成７年度）　北沢　元平（平成８・９年度）

須江　仁胤（平成10年度）

管理係長　谷津　恭子（平成７年６月退任）　棚沢　慶子（平成８・９年度）

管理係　田村　和広（平成７・８・９年度）

埋蔵文化財係長　大塚　達夫（平成７・８・９年度）　荻原　一馬（平成10年度）

埋蔵文化財係　林　幸彦　三石　宗一　須藤　隆司　小林　眞寿

羽毛田卓也　冨沢　一明　上原　学

調査担当者　小林　眞寿（平成７・８・９・10年度）　須藤　隆司（平成８年度）

調査主任　佐々木宗昭　森泉かよ子

調査副主任　堺　益子

調査員

井上　行雄　並木ことみ　倉見　渡　和久井義雄　成沢　冨子　堀籠みさと　堀籠　滋子
金森　治代　橋詰けさよ　渡辺久美子　浅沼ノブ江　細萱ミスズ　木内　明美　江原　富子
橋詰　勝子　橋詰　信子　花岡美津子　小林　幸子　宮川百合子　小林よしみ　上原　幸子
堀籠　因　篠崎　清一　清水　六郎　棚沢三之助　樋田　咲枝　柳沢ちなみ　依田　みち
花里香代子　阿部　和人　増野　深志　山浦　豊子　荒井　利男　柳沢千賀子　角田　良夫
小松三喜枝　碓氷　健　萩原　宮子　市川チイ子　岩下　吉代　岩下とも子　岩下　文子
工藤しず子　武田まつ子　武田　千里　堀籠　成子　菊池　喜重　大井みつる　中嶋武三郎
新津　誠　山口　丑男　荒井　かつ　小山　正吉　大井　文雄　中嶋フクジ　中條　悦子
井出徳四郎　安藤　静　中嶋　角治　中嶋　文子　中嶋　良造　中嶋きねよ　中條　繁子
須藤　吉助　相沢今朝義　佐藤　玉枝　高橋かね子　高橋　冬子　田中　章雄　角田　すい
水間　雅義　山田　幸枝　小幡　弘子　飯沢つや子　桜井　牧子　真島　保子　小林　立江
茂木とよ子　岩崎　重子　佐藤志げ子　林　美智子　土屋　貞子　花里四之助　花里三佐子
茂木　幸一　小金沢たけみ　高橋　敬子　佐藤　愛子

第３節　調査日誌

平成７年度

平成７年７月24日～25日

機材搬入。

７月27日～28日

重機による表土削平。遺構検出作業。

７月31日～８月４日

遺構の掘り下げ、実測、写真撮影。

８月７日～８月９日

少年考古学教室開催のため通常の調査は中断。市内小学生有志による遺構の掘り下げと、それに伴う実測、写真撮影を行う。

８月10日～８月11日

重機による表土削平。遺構検出作業。遺構の掘り下げ、実測、写真撮影。

基準線設定開始。

８月12日～８月16日

盆休み。

８月17日～９月５日

重機による表土削平。遺構検出作業。遺構の掘り下げ、実測、写真撮影。

８月24日中込公民館現場見学。８月25日基準線設定終了。

９月６日

ベルトコンベア設置。排土処理の効率化をはかる。

９月７日～11月17日重機による表土削平。遺構検出作業。遺構の掘り下げ、実測、写真撮影。10月11日～20日基準線設定作業。

11月20日遺構の掘り下げ、実測、写真撮影。航空測量準備。

11月29日

現場調査終了。

11月30日

機材撤収。

12月１日～**平成８年３月**31日

土器洗浄、注記、接合、復元、図面修正作業

12月13日航空測量実施。

平成８年度

平成８年４月２日機材搬入。

４月８日

重機による表土の削平。遺構検出作業。

４月10日～４月15日

重機による表土の削平。遺構検出、遺構の掘り下げ、実測、写真撮影。

４月15日ベルトコンベア設置。

４月17日～６月14日遺構の掘り下げ、実測、写真撮影。

６月17日～６月19日

航空測量準備。６月19日未買収地分を残し現場調査終了。

６月20日

機材撤収。

６月21日

土器洗浄、図面整理。

11月26日～平成９年１月13日土器洗い、注記、、土器接合・復元、図面修正。

１月14日～２月５日

土器接合・復元作業

２月６日～３月12日

土器接合・復元、実測、拓影作業

３月13日～３月31日

未買収地の発掘調査。重機による表土削平、遺構検出、遺構の掘り下げ、実測、写真撮影作業。３月31日調査終了。

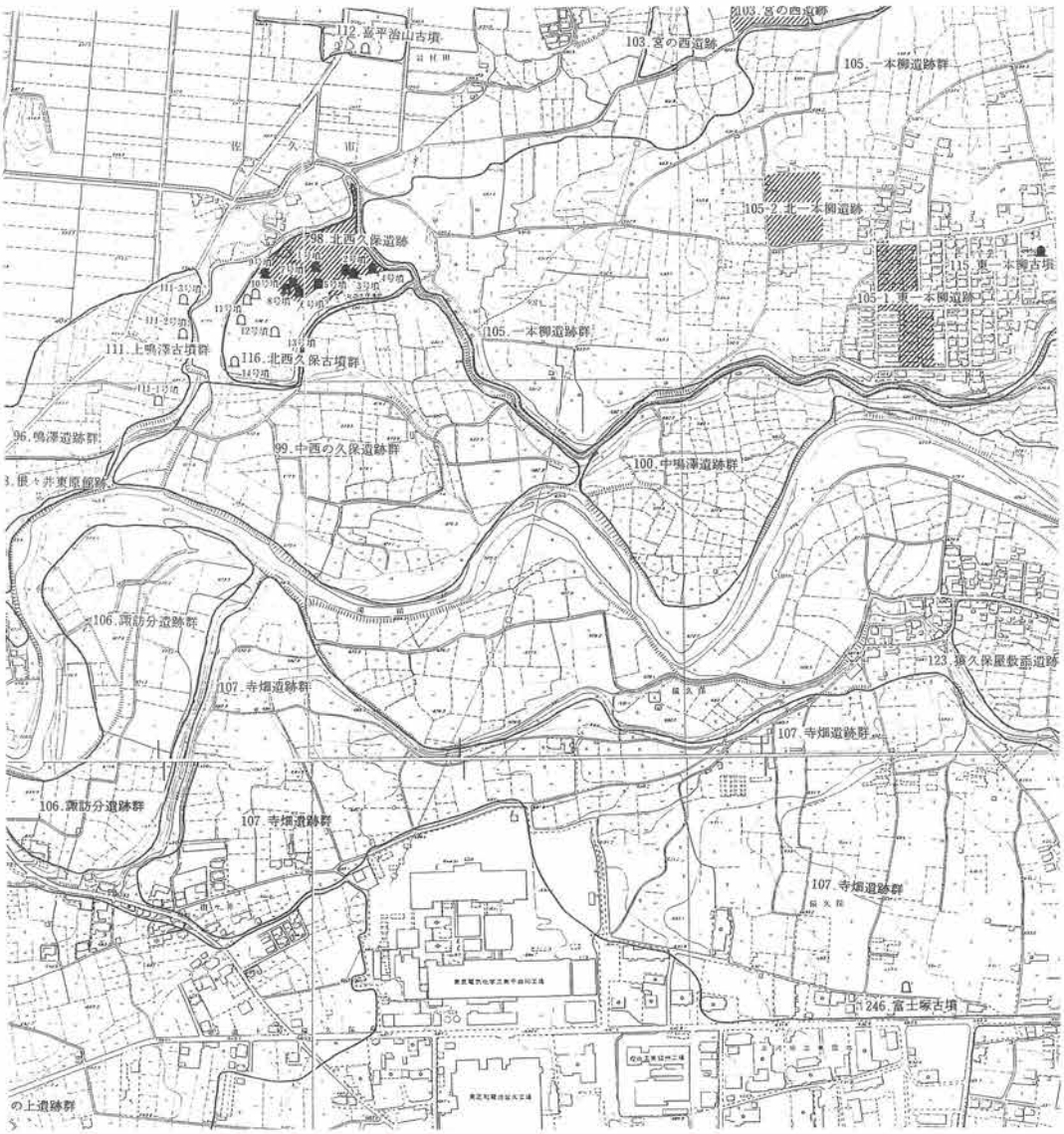
平成９・10年度

平成９年４月～平成11年３月

土器復元、遺物実測、土器拓影、トレス、写真撮影、図版作成、原稿執筆、編集を行い、報告書を刊行する。

第４節　遺跡の位置と周辺遺跡

西一本柳遺跡は、一本柳遺跡群のほぼ中央から西半部分を言い、過去２度にわたる調査が実施されている。（西一本柳Ⅰ－平成３・４年、西一本柳Ⅱ－平成４年）このうち西一本柳Ⅰの調査においては、頸部下を欠損した人面付き土器の人面部分が出土している。また、西一本柳Ⅱの調査では弥生中期～平安時代の竪穴住居址69軒が検出されている。一本柳遺跡群内では、他に昭和43年に宅地造成に伴い調査が実施された東一本柳遺跡から、古墳時代後期の竪穴住居址が５軒検



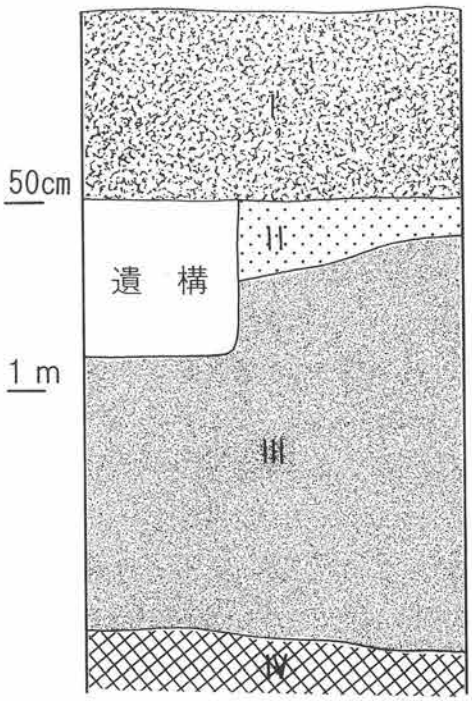
第２図　西一本柳遺跡と周辺遺跡（１：10,000）

出されたのをはじめ、豪華な馬具を出土した東一本柳古墳の調査が昭和46年に、また、弥生時代後期の竪穴住居址７軒、平安時代の竪穴住居址10軒等が検出された北一本柳遺跡の調査が昭和47年に実施されている。周辺部では、上の城遺跡が昭和48年に調査され古墳時代後期～平安時代の住居址が47軒検出されている。昭和58年に調査された西八日町遺跡では、弥生時代中期～平安時代の住居址が147軒検出された。昭和57年に第１次、昭和60年に第２次調査が行われた北西の久保遺跡では、弥生時代中期～平安時代の住居址158軒が検出されたのをはじめ、弥生時代の木棺群・方形周溝墓や大量の埴輪を出土した古墳を含む中期～後期古墳群等貴重な発見が数多くなされた。また、遺跡台地から南に続く斜面には中世の石塔婆群が形成されている。西一本柳遺跡の１段下の湯川河岸段丘上に位置する中西の久保遺跡群では、平成４年の調査で古墳時代後期～平安時代の住居址18軒が、平成７年の調査では弥生～平安時代の住居址34軒が検出されており、立地する河岸段丘こそ異なるものの、連続する地形上に、同一時期の集落が営まれていることから考えて、西一本柳遺跡とことさら別遺跡として捉える必然性はない。さらに同遺跡群の大半の部分には、弥生時代まで遡る可能性を有する水田址を含む３面の水田面の存在が平成８年の試掘調査により確認さており、西一本柳遺跡、中西の久保遺跡群、北西ノ久保遺跡をひとつの古代集落として捉えてみると、居住域、生産域、墓域を想定する事が可能となる。湯川対岸の仲田遺跡でも平成７年の調査により、古墳時代～平安時代の住居址30軒が検出され、奈良時代の鏡である「八花鏡」が出土している。この仲田遺跡の１段上の湯川河岸段丘上に位置する寺畑遺跡では、平成６・７年度に行われた調査により、縄文時代草創期の爪形文土器がまとまって出土している。極めて貴重な発見である。

第５節　基本層序

調査地は平坦であり、遺構検出面は標高690ｍ前後である。基本層序は、Ⅰ層－耕作土が50㎝前後あり、その下層のⅡ層は北から南に向かい堆積が薄くなる。つまり、湯川河岸段丘の縁に近ずくにつれ堆積が薄くなる。このⅡ層は、湯川層の最上層にあたり、砂粒のみで構成される湯川層に、浅間第一軽石流と思われる黄色火山灰が混入したものである。北西ノ久保遺跡の基本層序第Ⅱ層と同一のものであるが、黄色火山灰の混入率は当遺跡の方が極めて高いため、黄色火山灰の堆積層そのもののような部分も見受けられる。明黄褐色（10ＹＲ６／６）を呈する。遺構はⅡ層上面で検出される。Ⅲ層は湯川層であり、砂粒の堆積層である。大半の遺構はⅢ層中に達するため、遺構の壁や柱穴の内面には第Ⅲ層が露出しており、極めて脆い。今回の調査では第Ⅳ層に

達する遺構は存在しなかったためその存在は確認してないが、第Ⅲ層下には追分第一灰流の堆積層が存在する。



第Ⅰ層　耕　　作　　土。

第Ⅱ層　明黄褐色土層（10YR6/6）。

第Ⅲ層　にぶい黄橙色土層（10YR7/2）。

第Ⅳ層　黄褐色土層（10YR5/6）。

第3図　西一本柳遺跡基本層序模式図

第6節　検出遺構・遺物の概要

遺　　構		遺　　物	
竪穴住居址		土　　器	
弥生時代	58棟		弥生土器、土師器、須恵器
古墳時代	75棟	陶磁器	
奈良・平安時代	52棟		灰釉陶器、白磁
不明	16棟		石器・石製品
合計	201棟		打製石斧、打製石鏃、磨製石斧
掘立柱建物址	45棟		磨製石鏃、石包丁、剣形石製品
土坑	12基		編物石、臼玉、紡錘車、模造品
溝址	11条	金属器	
Pit	346基		刀子、紡錘車、鏃、帯金具

第Ⅱ章　遺構と遺物

第１節　住居址

１　弥生時代の住居址

Ｈ１号住居址（第４図、図版一・九十九）

遺構－Ⅰこ４グリットで検出された。調査区域外に延びるため全容は不明である。Ｈ３号住居址を切っている。調査範囲内に炉址は存在せず、３基検出されたPitは全て柱穴と考えられ、その内のＰ１・Ｐ２は主柱穴の可能性がある。２基共に直径15㎝の柱が確認できた。

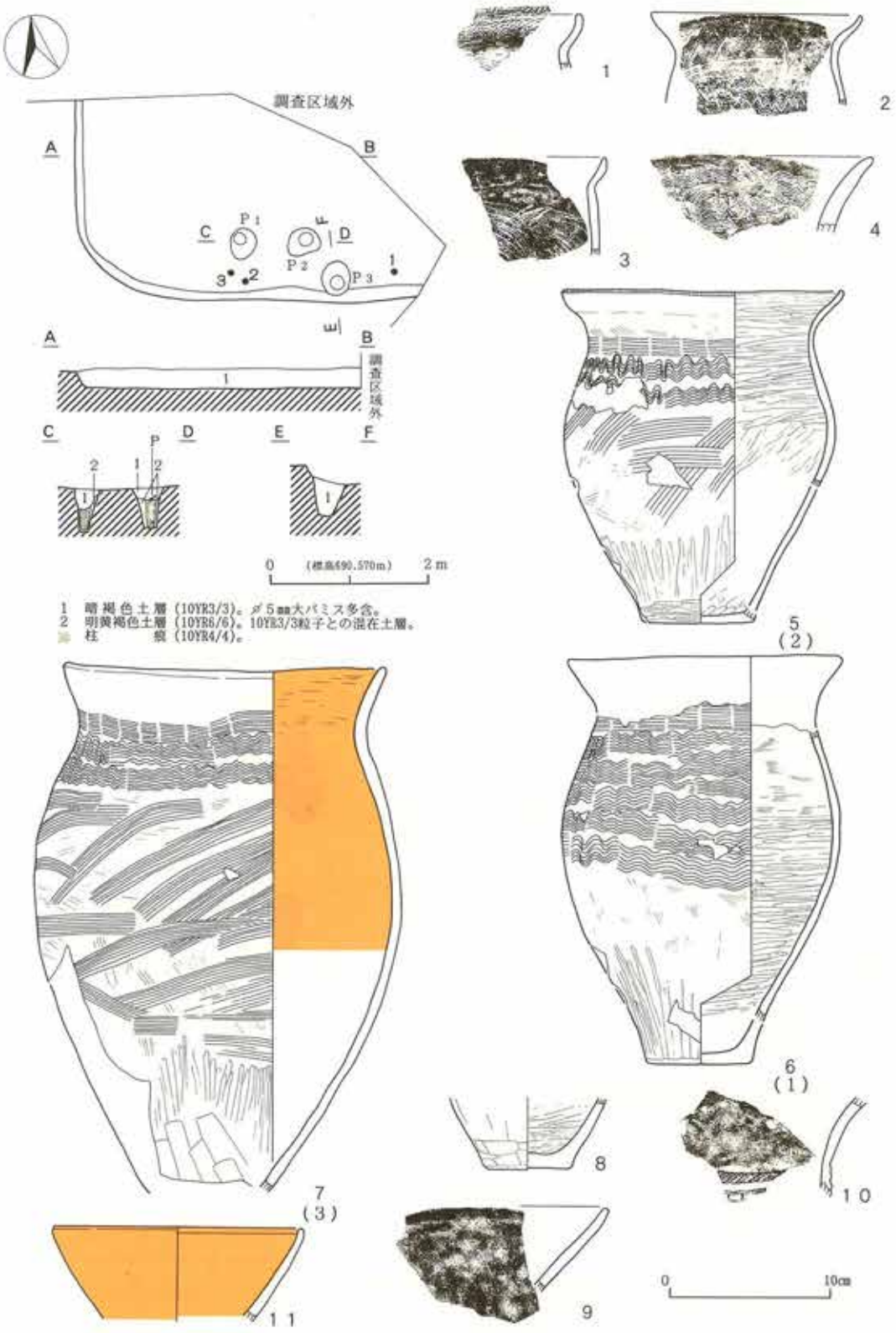
遺物－甕（１～８）、壺（10）、鉢（９・11）が出土している。甕には、完全な受口口縁の１と、受口気味な２・３・５、単純口縁の４・７、不明な６・８が存在する。１・２・５の受口あるいは受口気味の口縁部の土器は、口唇部に縄文が施文されている。口縁部文様帯に施文されるものは、１・４のみであり他は無文である。確認できるものの内、頸部に簾状文を施すものは２・５～７の４個体であり、他は斜走文や波状文が体部にまで及んでいる。２・５～７の内６は体部上半部に波状文が、５・７は簾状文下に２条の波状文を巡らし、体部の下半にまで及ぶ斜走文が施される。施文原体は、縄文と櫛歯状工具の２種類が用いられている。尚、７は内面口縁～体部上半が赤彩されている。壺（10）は、内面に刷毛目調整が施され、外面頸部には、篦状工具による平行沈線により造り出された横位の文様帯に縄文が施文され、その下には篦状工具による刺突列が巡る。赤彩はされない。鉢（９）は、刷毛目調整の後、篦磨きが施されている。甑の可能性もある。鉢（11）は、内外共に赤彩されている。

挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
－１	甕	－ － －	内－篦磨き。 外－口唇：縄文、他は波状文。	
－２	甕	13.4 － －	内－篦磨き。 外－口唇：縄文、頸部：簾縄文 体部：波状文。	
－３	甕	－ － －	内－篦磨き。 外－頸部下斜走文。	

第１表　Ｈ１号住居址出土遺物観察表（１）

Ｈ２号住居址（第６図、図版一・九十九）

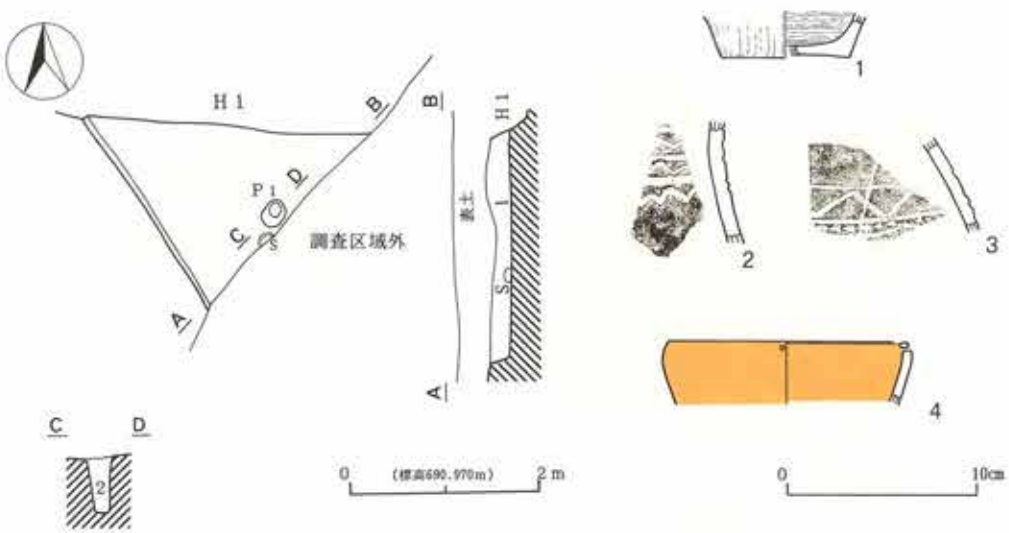
遺構－Ⅰこ６グリットで検出された。調査区域外に延びるため、全容は不明である。Ｍ１号溝址に切られている。調査範囲には炉址は存在しなかった。２基検出されたPitの内Ｐ１は主柱穴と思われる。直径15㎝の柱が確認できた。


調査区域外
A
B
C
D
E
F
P1
P2
P3
1
2
3
4
5
(2)
6
(1)
7
(3)
8
9
10
11
0
(標高690.570m)
2m
1　暗褐色土層（10YR3/3）。φ5mm大パミス多含。
2　明黄褐色土層（10YR6/6）。10YR3/3粒子との混在土層。
柱　痕（10YR4/4）。
0
10cm

第4図　H1号住居址

挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
−4	甕	− − −	内−篦磨き。 外−波状文。	
−5	甕	17.8 6.8 21.0	内−篦磨き。 外−口唇：縄文、頸部：廉縄文、体部：廉状文下に2条の波状文、その下に斜走文。	No.2
−6	甕	17.4 6.6 25.4	内−篦磨き。 外−頸部：廉状文、体部上半：波状文。	No.1
−7	甕	20.4 − −	内−口縁部〜体部上半まで赤彩。 外−頸部：廉状文、体部：廉状文下に2条の波状文、その下に斜走文。	No.3
−8	甕	− 5.0 −	内−篦磨き。 外−篦磨き。	
−9	鉢	− − −	内−刷毛目〜篦磨き。 外−刷毛目〜篦磨き。	甑の可能性あり。
−10	壺	− − −	内−刷毛目。 外−頸部：篦状工具による平行沈線間に縄文、その下に刺突列。	
−11	鉢	15.9 − −	内−赤彩。 外−赤彩。	

第2表　H1号住居址出土遺物観察表（2）

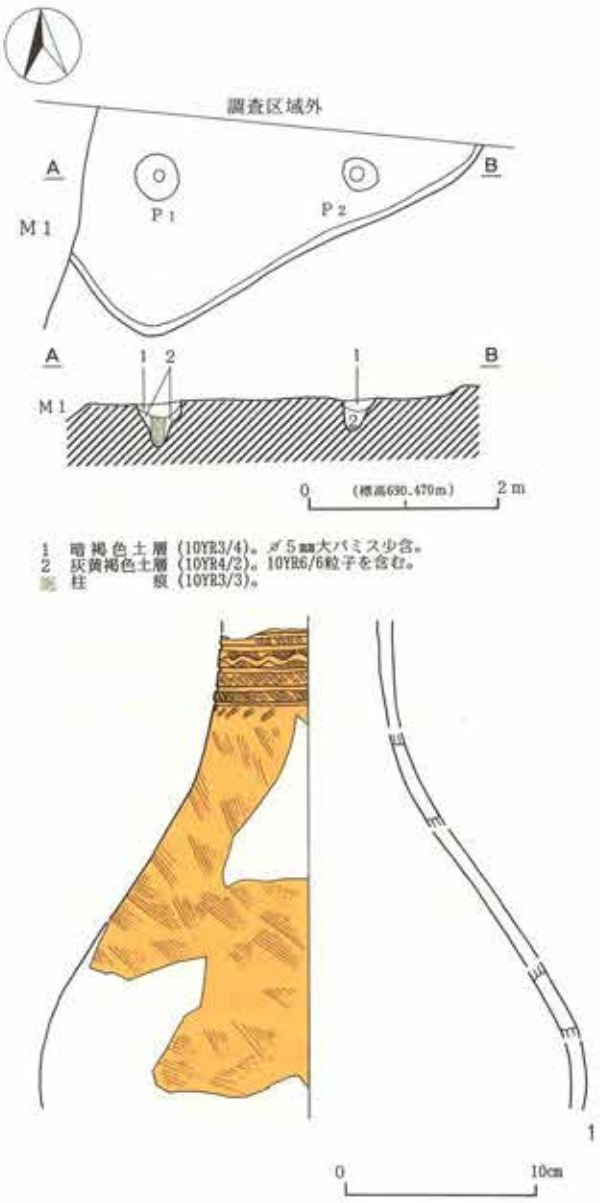


1　にぶい黄褐色土層（10YR5/4）。10YR6/6粒子多含。
2　黒褐色土層（10YR2/2）。10YR6/6粒子少含。

第5図　H3号住居址

挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
−1	壺	− − −	内−器面剥落。 外−頸部：篦による平行沈線間に縄文、波状文が施される。刷毛目を残し、赤彩される。	

第3表　H2号住居址出土遺物観察表



第6図　H２号住居址

遺物－壺が１点図化できるだけである。内面は器面の剥落が激しく、調整等は判然としない。外面頸部には篦による数条の平行沈線が巡らされており、平行沈線間には縄文や波状文が施される。その他の部分は文様は認められず、刷毛目が残されている。赤彩されている。

Ｈ３号住居址

（第５図、図版二・九十九　）

遺構－Ｉこ４グリットで検出された。Ｈ１号住居址に切られ、調査区域外に延びるため、全容は不明である。Pitが１基検出されているが、主柱穴であるか、否かは分からない。

遺物－甕（１）、壺（２～３）、鉢（４）が出土している。全て破片である。甕は底部のみの出土であり、文様は不明である。壺は頸部（２）と体部（３）が出土している。頸部は篦状工具により数条の平行沈線と波状文が交互に描かれている。体部は篦状工具により平行沈線間に鋸歯文が描かれ、その下に刺突列が巡らされる。鉢は内外面共に赤彩され、口縁部には焼成前に穿孔された孔が１カ所認められる。

Ｈ４号住居址（第７・８図、図版二・百）

遺構－Ｉけ５のグリットで検出された。H14号住居址を切り、Ｄ１号土坑に切られている。隅丸長方形の平面形状を呈し、長軸をＮ－10°－Wにとる。覆土の堆積状況は自然堆積である。

挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
－1	甕	－ 7.0 －	内－篦磨き。 外－篦磨き。	
－2	壺	－ － －	内－ナデ。 外－頸部：篦により平行沈線と波状文が交互に描かれる。	
－3	壺	－ － －	内－ナデ。 外－体部：篦により平行沈線間に鋸歯文が描かれ、その下に刺突列が巡る。	
－4	鉢	12.6 － －	内外赤彩。口縁部に焼成前穿孔の孔。	

第４表　Ｈ３号住居址出土遺物観察表

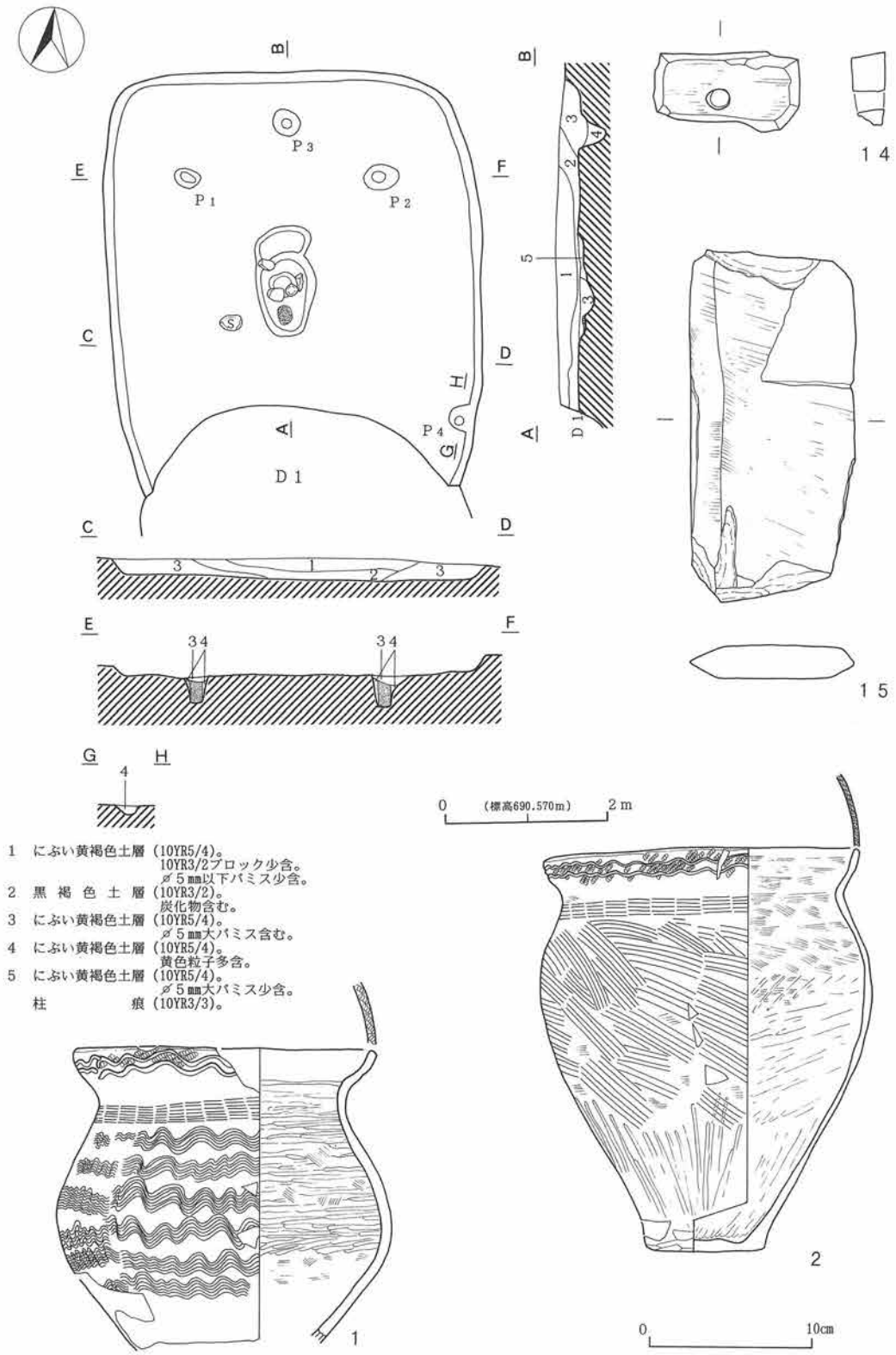
中央北寄りに105×74cmの炉址を有する。炉址内には石組状の礫が４ヶ存在したが、火床とは位置が異なり、石組部分の方が掘り込みは深くなっている。柱穴は４基検出され、その内のＰ１、Ｐ２は主柱穴であり、直径15cmの柱が確認されている。周溝は認められなかった。

遺物－甕（１～３）、壺（７～10）、台付甕（４）、高杯（11、12）、鉢（13）、滑石製石製品（14、15）が出土している。甕は受口口縁を呈し、口唇部に縄文が施される。口縁部文様帯には縄文が施文され、篦状工具による波状文が２条巡る。頸部には、廉状文が巡り、体部下半まで波状文や斜走文が施される。３は体部に連続「コ」字文が施されている。壺は全容が知れるものはない。７のような無文で刷毛目を残すものや、９のような小型のもの、５のように口縁部文様帯に地文縄文が施され、２条の山形文が篦状工具により描かれるもの、８のように体部に篦状工具により山形文が幾重にも描かれるもの、または６のように頸部に篦状工具による平行沈線が数条描かれ、平行沈線間の文様帯に縄文が施されるものなどが存在するが、赤彩されるものはない。高杯は11のように赤彩され、体部が屈曲するものと、12のように口縁に向かい直線的に開く無彩のものが存在するが、11は混入と思われる。鉢は内外面赤彩され、口縁部に篦状工具による２条の波状文が巡る13が出土している。

Ｈ６号住居址（第９図、図版三・百一）

遺構－Ⅰい５のグリットで検出された。H30号住居址を切っている。調査区域外に延びるため全容は不明である。推測される住居の中央やや北よりに、60×40cm×８cmの地床炉が検出された。２基検出されたPitは主柱穴と考えて良いように思われる。覆土は自然堆積で、単層である。
周溝は存在しなかった。

遺物－甕（１～７）、壺（８～12）、台付甕（14、15）、蓋（13）、磨製石鏃（16）が出土している。甕は、単純口縁で口唇部に加飾が加えられるものが多く、加飾には、１・２のような縄文原



1　にぶい黄褐色土層（10YR5/4）。
　　10YR3/2ブロック少含。
　　ø５mm以下パミス少含。
2　黒 褐 色 土 層（10YR3/2）。
　　炭化物含む。
3　にぶい黄褐色土層（10YR5/4）。
　　ø５mm大パミス含む。
4　にぶい黄褐色土層（10YR5/4）。
　　黄色粒子多含。
5　にぶい黄褐色土層（10YR5/4）。
　　ø５mm大パミス少含。
　柱　　痕（10YR3/3）。

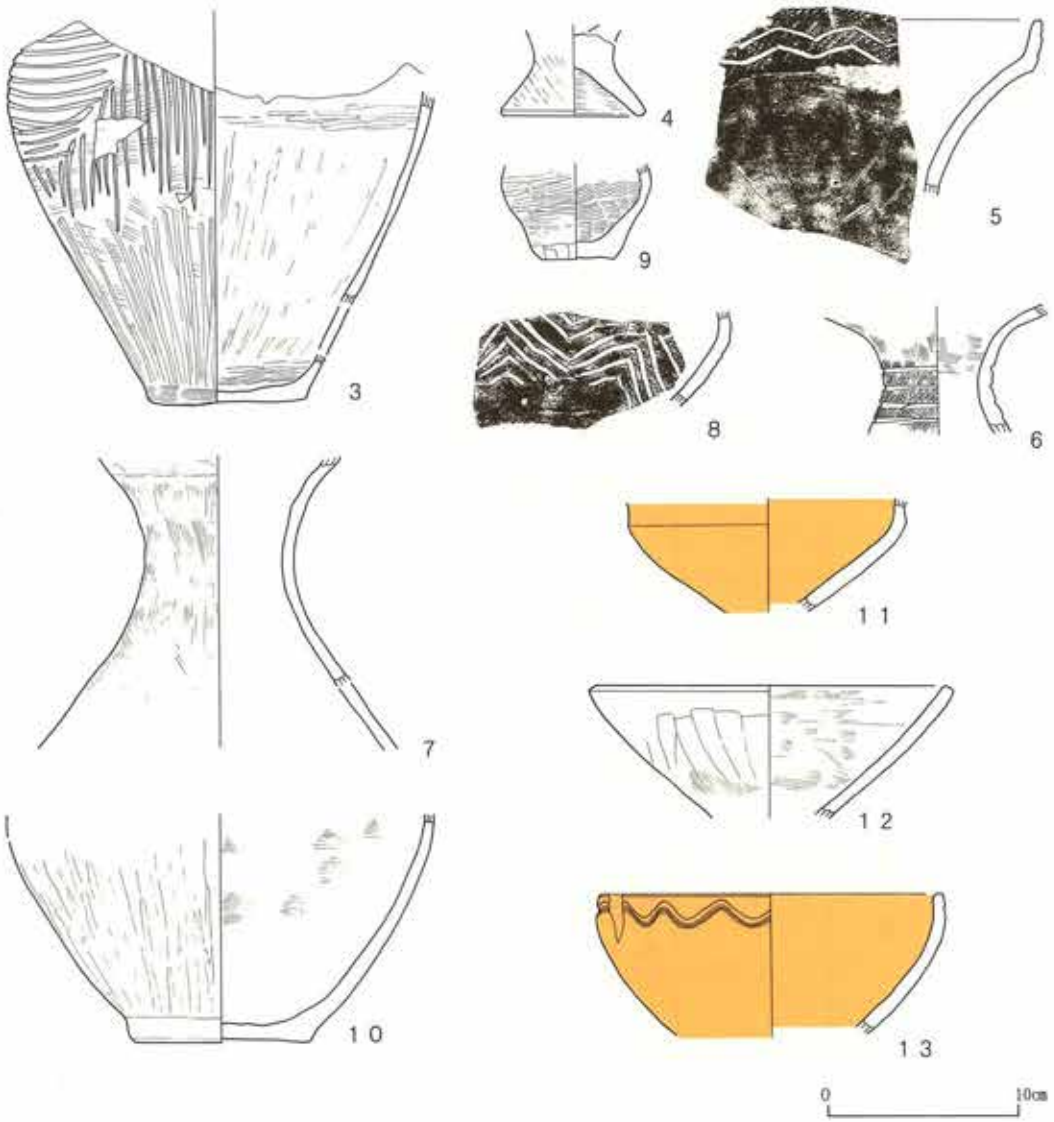
第７図　Ｈ４号住居址（１）

挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
−1	甕	18.0 − −	内−刷毛目→篦磨き。 外−口唇：縄文、口縁：縄文、2条の篦描波状文、頸部：簾縄文、体部：下半まで波状文。	
−2	甕	19.0 7.2 24.8	内−刷毛目→篦磨き。 外−口唇：縄文、口縁：縄文、2条の篦描波状文、頸部：簾縄文、体部：下半まで斜走文。	
−3	甕	− 8.2 −	内−篦磨き。 外−篦状工具による連続「コ」字文。	
−4	台付甕	− 7.0 −	内外刷毛目。	
−5	壺	− − −	内−ナデ。 外−口唇：縄文、口縁：地文縄文、篦状工具による2条の山形文。	
−6	壺	− − −	内−刷毛目→ナデ。 外−頸部：数条の平行沈線間に縄文。	
−7	壺	− − −	内外−刷毛目。	
−8	壺	− − −	内−刷毛目→ナデ。 外−篦による連続山形文。	
−9	壺	− 3.8 −	内−刷毛目。 外−篦削り、篦磨き。	
−10	壺	− 9.0 −	内−刷毛目。 外−篦磨き。	
−11	高杯	− − −	内外−赤彩。	
−12	高杯	18.4 − −	内−刷毛目。 外−刷毛目→篦削り。	
−13	鉢	18.0 − −	内−赤彩。 外−赤彩。口縁：篦状工具による2条の波状文。	
−14	滑石製 石製品	2.25 1.25 5.5		2.1g。 中央やや下に1孔。
−15	滑石製 石製品	5.45 2.5 0.5		11.9g。 両脇刃部状。

第5表　H4号住居址出土遺物観察表

体による押捺や、3・7のような縄文施文が認められる。頸部下には1～3のように、櫛歯状工具による波状文が施文されるものと、7のように櫛歯状工具による波状文を1条巡らし、その下に簾縄文、更にその下に縄文を施すものが存在する。また、4のように受口口縁の甕も存在し、口縁部～口唇部に縄文を施文した後、篦状工具による2条の波状文を施し、頸部には1条の櫛歯

状工具による波状文が巡り、体部には櫛歯状工具による斜走文が施文される。5は単純口縁で頸



第8図　H4号住居址（2）

部に廂縄文、口縁部に櫛歯状工具による波状文が施されるもの、6は体部のみの破片で、全面に櫛歯状工具による波状文が施文されるものであるが、2点共に混入品と思われる。壺は全容が知れるものは出土していないが、頸部と体部の文様帯に施文が集中するものが多い。篦状工具による数条の平行沈線間に縄文を施し縄文帯を描出するもの（9・11）や、更にその縄文帯に波状文や山形文を施文するもの（9・12）、8のように頸部と体部の文様帯間に縦の文様帯を4帯設け、刺突列、条線、波状文を施すものが存在する。口縁部破片である10は、口唇部に縄文と篦状工具

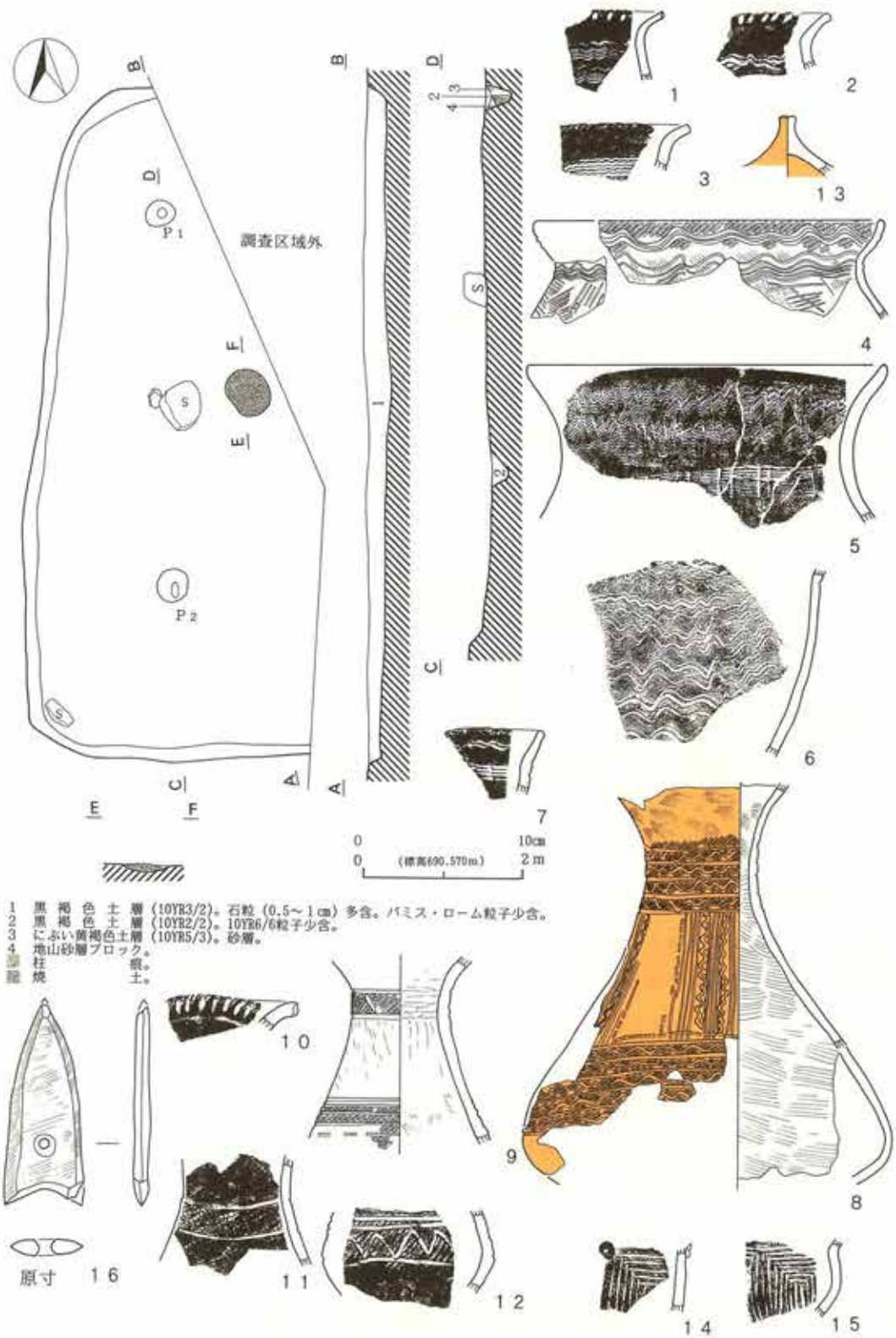
による刻目が施文されている。以上の壺の内８のみが赤彩されている。台付甕14・15は地文として縄文が施され、篦状工具による連続「コ」字文が施文されている。14には更に円形貼付文が加えられている。13は蓋と思われ、内外面が赤彩されている。

挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
－1	甕	－ － －	内－篦磨き。 外－口唇部：縄文原体による押捺。 頸部下：櫛歯状工具による波状文。	
－2	甕	－ － －	内－篦磨き。 外－口唇部：縄文原体による押捺。 頸部下：櫛歯状工具による波状文。	
－3	甕	－ － －	内－篦磨き。 外－口唇部：縄文、。 頸部下：櫛歯状工具による波状文。	
－4	甕	21.3 － －	内－刷毛目→篦磨き。 外－口唇部：縄文。口縁：縄文、篦状工具による２条の波状文。頸部：櫛歯状工具による波状文。頸部下：櫛歯状工具による斜走文。	
－5	甕	22.2 － －	内－篦磨き。 外－口唇部：櫛描波状文。頸部：簾状文。	混入？
－6	甕	－ － －	内－篦磨き。 外－体部：：櫛歯状工具による波状文。	混入？
－7	甕	－ － －	内－篦磨き。 外－口唇部：縄文。口縁：櫛歯状工具による２条の波状文。頸部：櫛歯状工具による簾状文。頸部下：縄文。	
－8	壺	－ － －	内－刷毛目。 外－頸部：縄文、平行沈線、波状文。体部上半：４単位の区画、刺突列、条線、波状文。体部下半：縄文、平行沈線、波状文。赤彩。	
－9	壺	－ － －	内－刷毛目、篦ナデ。 外－頸部：平行沈線、縄文、山形文。体部：平行沈線縄文。	
－10	壺	－ － －	内－篦磨き。 外－口唇部：縄文、刻目。	
－11	壺	－ － －	内－刷毛目、篦ナデ。 外－頸部：平行沈線、縄文。	
－12	壺	－ － －	内－刷毛目、篦ナデ。 外－体部：平行沈線、縄文、山形文。	
－13	蓋？	－ － －	内外－赤彩。	
－14	台付甕	－ － －	内－刷毛目。 外－体部：縄文、連続「コ」字文、円形貼付文。	
－15	台付甕	－ － －	内－篦磨き。 外－体部：縄文、連続「コ」字文。	
－16	磨製石鏃	2.60 1.25 0.25		1.0ｇ

第６表　Ｈ６号住居址出土遺物観察表

Ｈ７号住居址（第10図、図版四・百二）

遺構－Ⅰか８のグリットで検出された。Ｍ１号溝址に切られる。隅丸長方形の平面プランを呈


調査区域外
P1
P2
S
A
B
C
D
E
F
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
0　10cm
0　(標高690.570m)　2m
1　黒褐色土層（10YR3/2）。石粒（0.5～1cm）多含。パミス・ローム粒子少含。
2　黒褐色土層（10YR2/2）。10YR6/6粒子少含。
3　にぶい黄褐色土層（10YR5/3）。砂層。
4　地山砂層ブロック。
柱　　根。
焼　　土。
原寸

第9図　H6号住居址

し、N－10°－Wに長軸方位をとる。長軸長3.8ｍ×短軸長3.05ｍ×壁残高0.2ｍの規模を有する。主柱穴はＰ１・Ｐ２の２基で、炉は柱穴間の中央やや北寄りに、長径43cm×短径38cm×深度６cmの規模を有する地床炉が構築され、１の壺形土器が敷設されていた。Ｐ３、Ｐ４の２基のPitは出入り口に相当する施設かも知れない。また、本址は掘方の調査により拡張されていることが判明した。旧住居址は新住居址よりも、長・短軸長共に0.6ｍほど小型の規模であるが、柱は建て替えられておらづ、炉址は再構築されているもののほぼ同位置であり、床面は嵩上げされている。

遺物－壺（１）、高杯（2.3）が出土している。壺は炉内に敷設されていたため、熱変化を部分的に受けている。赤彩はされておらず、外面頸部に４単位の「Ｔ」字文が施される他は、外面には篦削りと篦磨きが、内面には、刷毛目とヘラナデ、篦磨きが施されている。口径21.4cm×器高－57.4cm×底径9.2cmを測る。高杯は２点出土している。２点共に脚は短脚で脚内部には刷毛目調整が施される。２は脚内部を除き赤彩が施される。口径20.3cm×器高13.8cm底径9.2cmを測り、口縁部が水平に外反する。３は脚のみの出土であり、底径7.5cmを測る。

挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
－１	壺	21.4 9.2 57.4	内－刷毛目、篦磨きヘラナデ。 外－頸部：櫛歯状工具による４単位の「Ｔ」字文。他は篦削り、篦磨き。	
－２	高杯	20.3 9.6 13.8	内－脚内部刷毛目、他は赤彩。 外－赤彩。	
－３	高杯	－ 7.5 －	内－刷毛目。 外－篦磨き。	

第７表　Ｈ７号住居址出土遺物観察表

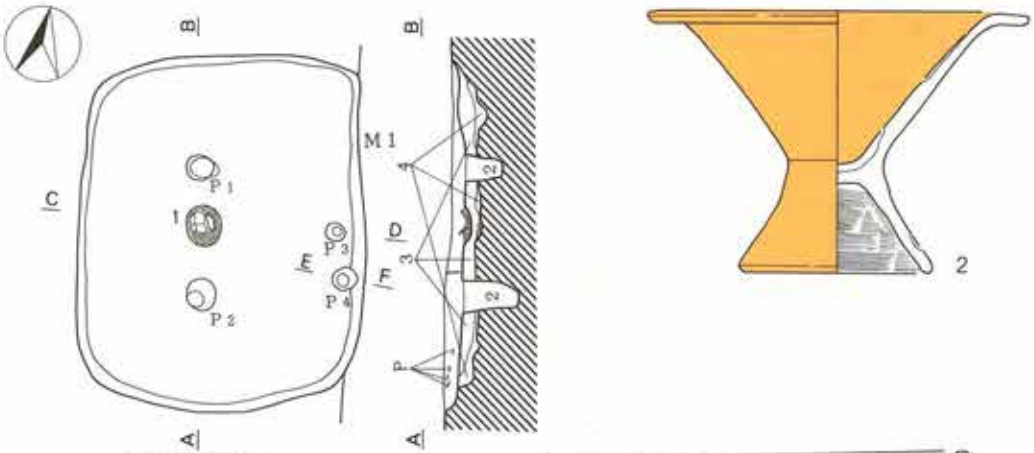
Ｈ９号住居址（第11図、図版三・百三）

遺構－Ⅰお５のグリットで検出された。Ｈ５号住居址に切られ、調査区域外にも延びるため平面形状、規模等は不明である。壁残高は44cmを測る。柱穴、炉址は調査範囲には存在しなかった。

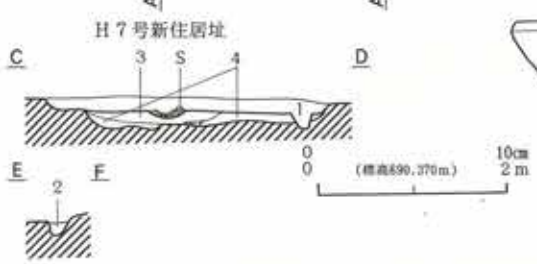
遺物－甕（３～５）、壺（６）、高杯（１）、鉢（２）が出土している。甕は全て破片であり全容は不明である。３は連続「コ」字文と円形貼付文を施すもの、４は頸部に簾縄文を巡らし、体部に櫛歯状工具による波状文を施すもの、５は体部に斜走文が施される。６の壺は赤彩されず、口縁部に櫛歯状工具による斜位の条線を巡らす。１の高杯は脚部のみの出土である。外面赤彩、内面は刷毛目調整が施される。２の鉢は内外面が赤彩される。

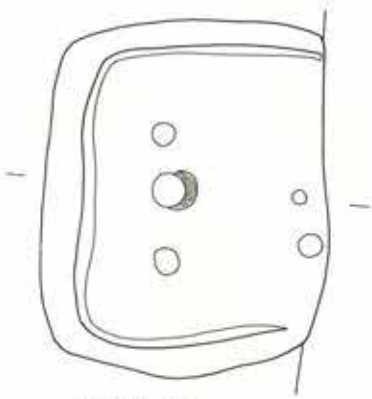
Ｈ14号住居址（第12図、図版八・百五）

遺構－Ⅰけ６のグリットで検出された。Ｈ４号住居址、Ｍ１号溝址に切られている。隅丸長方

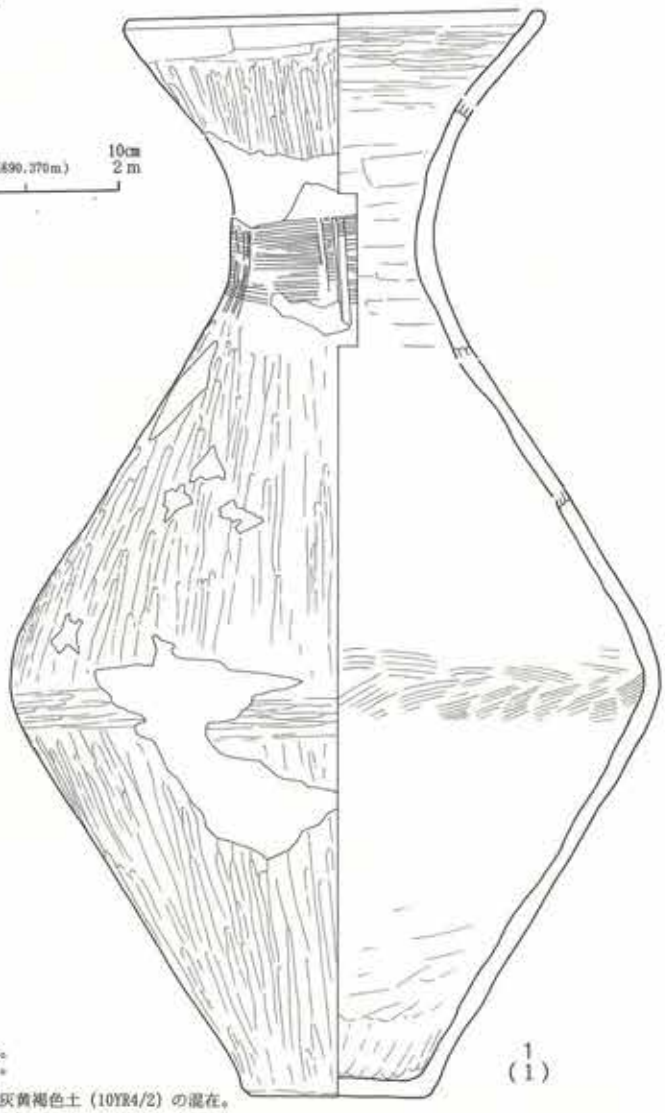


H７号新住居址





H７号旧住居

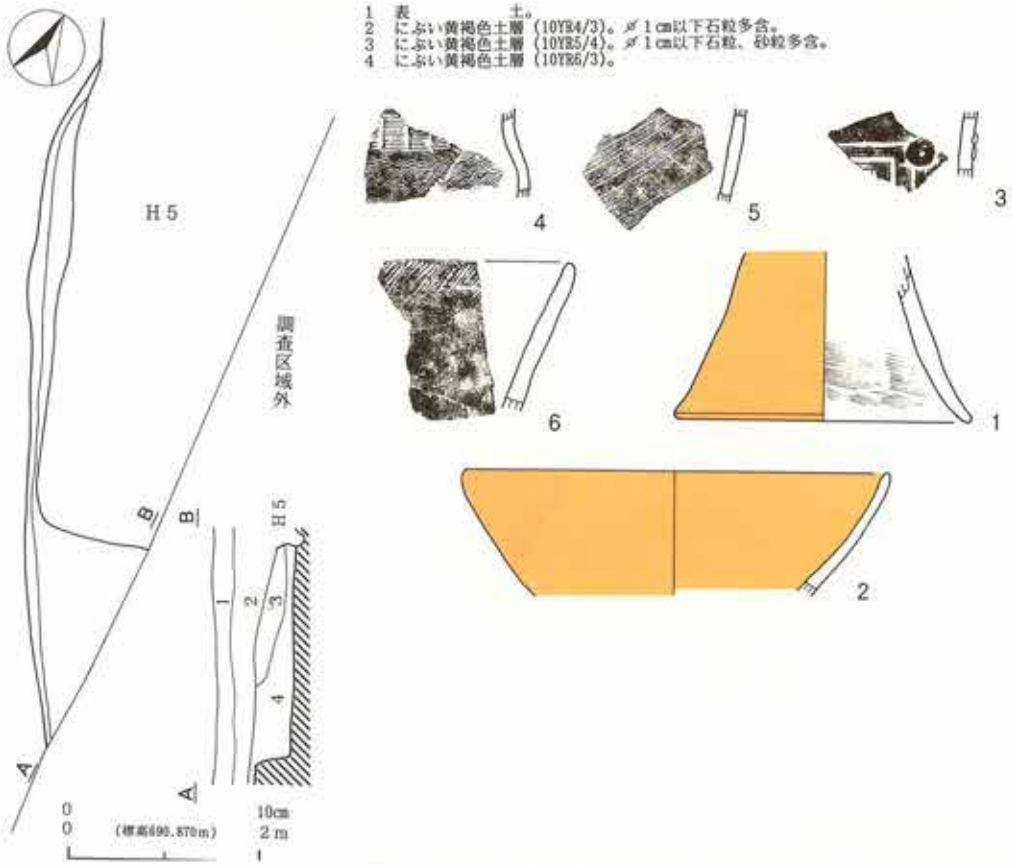


1　暗褐色土層（10YR3/3）。砂質土。10YR6/6粒子少含。
2　灰黄褐色土層（10YR4/2）。砂質土。10YR6/6粒子少含。
3　黒褐色土層（10YR3/2）。
4　掘り方埋土。　地山砂質土（10YR6/6）と灰黄褐色土（10YR4/2）の混在。

第10図　Ｈ７号住居址

挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
−1	高杯	− 15.5 −	内−刷毛目。 外−赤彩。	
−2	鉢	22.8 − −	内外−赤彩。	
−3	甕	− − −	内−篦磨き。 外−連続「コ」字文＋円形貼付文。	
−4	甕	− 15.5 −	内−篦磨き。 外−頸部：縄文。体部：櫛歯状工具による波状文。	
−5	甕	22.8 − −	内−篦磨き。 外−斜走文。	
−6	壺	− − −	内−ナデ。 外−口縁：櫛歯状工具による斜位沈線。	

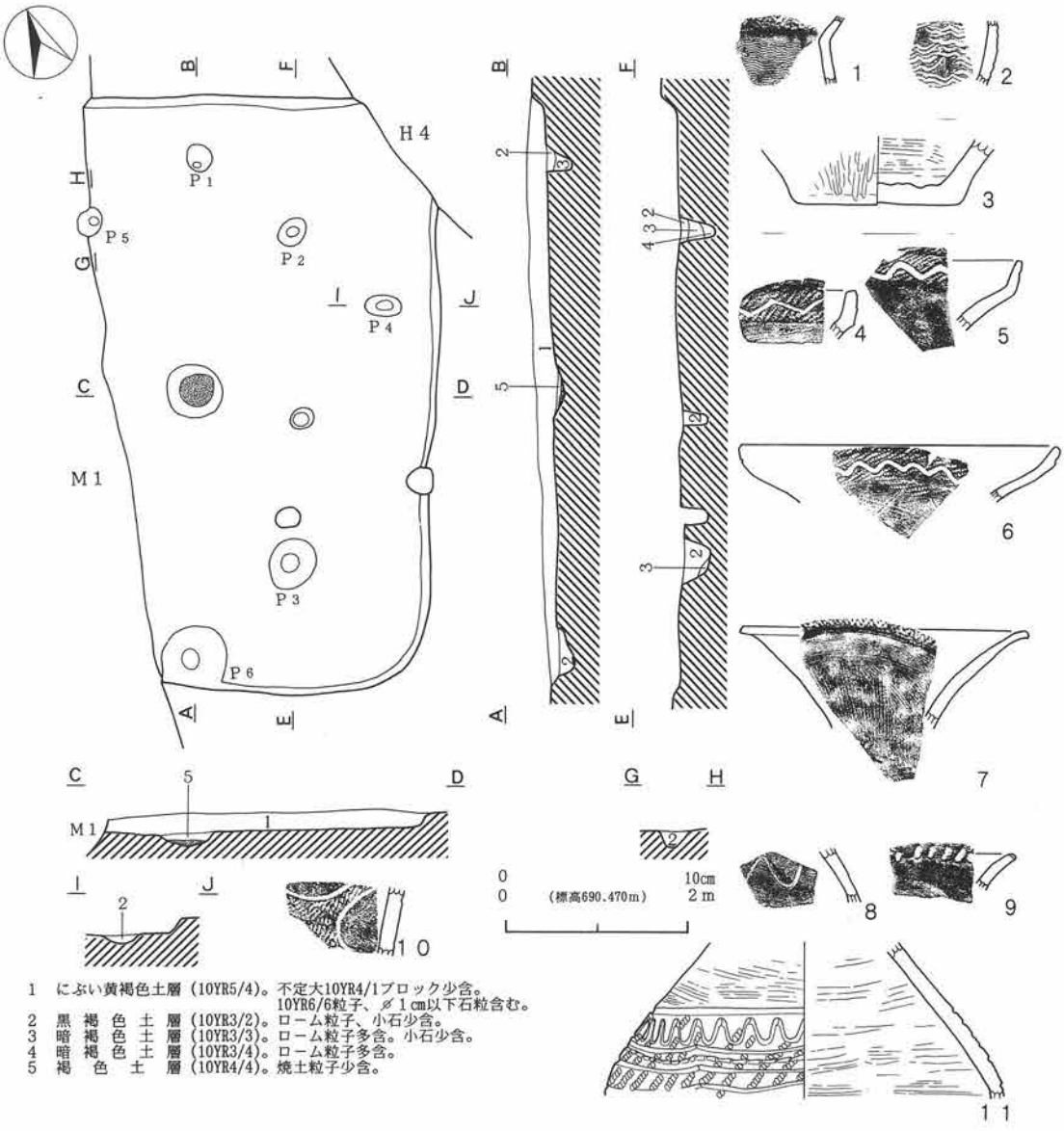
第８表　Ｈ９号住居址出土遺物観察表（２）



第11図　Ｈ９号住居址

形の平面プランを呈するものと思われる。壁残高は0.22ｍを測り、住居のほぼ中央に長径0.6ｍ×短径0.37ｍ×深度0.15ｍの地床炉が構築されている。６基検出されたPitのうちＰ２、Ｐ３、Ｐ６の３基が主柱穴と考えられる。周溝は認められず、覆土は自然堆積であった。

遺物－甕（１～３）、壺（４～９・11）が認められる。10は縄文土器であり混入遺物である。甕は１、２共に櫛歯状工具による波状文が施されている。壺は４～６のように受口口縁で、口唇部に縄文が施され、口縁部には縄文とヘラ状工具による１条の波状文が巡るものと、単純口縁で



1　にぶい黄褐色土層（10YR5/4）。不定大10YR4/1ブロック少含。10YR6/6粒子、φ１cm以下石粒含む。
2　黒褐色土層（10YR3/2）。ローム粒子、小石少含。
3　暗褐色土層（10YR3/3）。ローム粒子多含。小石少含。
4　暗褐色土層（10YR3/4）。ローム粒子多含。
5　褐色土層（10YR4/4）。焼土粒子少含。

第12図　H14号住居址

7のように口唇部に縄文が施されるもの、9のように櫛歯状工具による刺突列が巡るものが認められる。口縁部を欠損するものでは、8のように刷毛目調整の残る器面に、篦状工具による波状文が施されるもの、11のように、篦状工具による平行沈線、波状文、弧線文が巡り、縄文が施されるものが出土している。10は縄文時代後期の土器である。

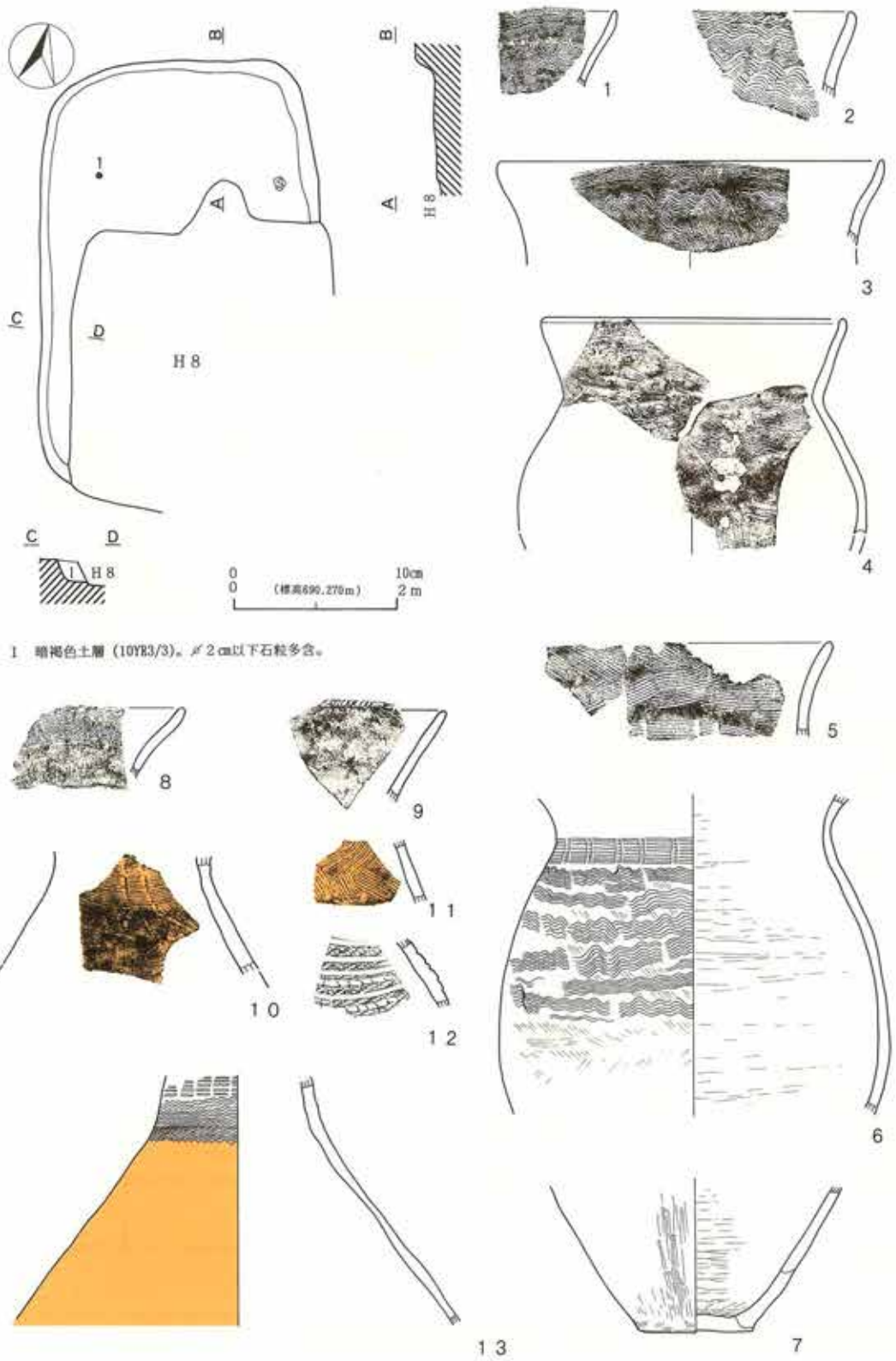
挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
−1	甕	− − −	内−篦磨き。 外−櫛歯状工具による波状文。	
−2	甕	− − −	内−篦磨き。 外−櫛歯状工具による波状文。	
−3	甕	− 8.0 −	内外−篦磨き。	
−4	壺	− − −	内−篦磨き。 外−口唇部：縄文。口縁：縄文、篦状工具による1条の波状文。	
−5	壺	− − −	内−篦磨き。 外−口唇部：縄文。口縁：縄文、篦状工具による1条の波状文。	
−6	壺	17.7 − −	内−篦磨き。 外−口唇部：縄文。口縁：縄文、篦状工具による1条の波状文。	
−7	壺	15.9 − −	内−刷毛目。 外−口唇部：縄文。他は刷毛目。	
−8	壺	− − −	内−刷毛目。 外−刷毛目、篦状工具による波状文。	
−9	壺	− − −	内−刷毛目。 外−口唇部：櫛歯状工具による刺突列。	
−10	縄文土器 深鉢	− − −	内−篦磨き。 外−沈線、充填縄文。	
−11	壺	− − −	内−刷毛目。 外−体部上半：平行沈線、波状文、弧線文、縄文。	

第9表　H14号住居址出土遺物観察表

H15号住居址（第13・14図、図版八・百六）

遺構−Ⅰか5のグリットで検出された。H8号住居址に切られる。隅丸長方形の平面プランを呈し、N−20°−Wに長軸方位をとる。長軸長は不明であるが、3.45ｍの短軸長と0.25ｍの壁残高を有する。柱穴、炉址等は残存部分には存在しなかった。

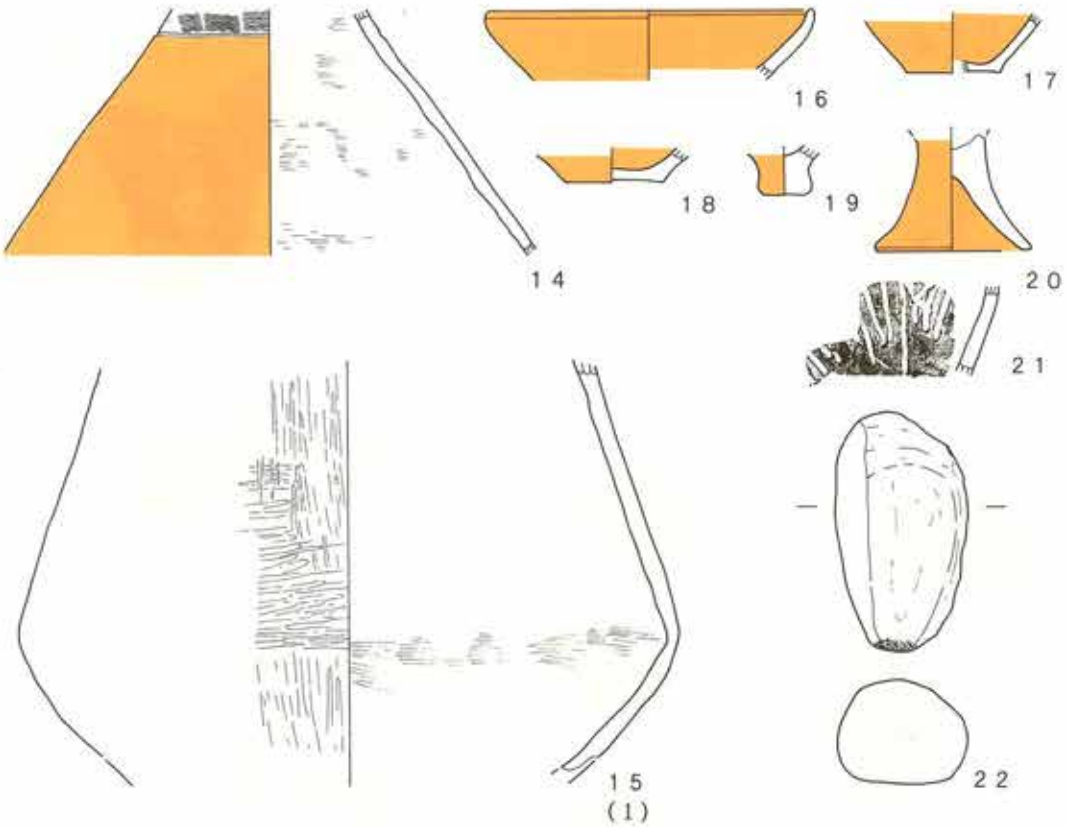
遺物−甕（1〜7・21）、壺（8〜15）、鉢（16〜18）、高杯（20）、ミニチュア土器（19）、敲石（22）が出土している。甕は、櫛歯状工具による波状文が施されるものと（1〜4・6）、斜走文が施されるもの（5）、篦状工具による連続「コ」地文が施されるもの（21）が存在し、波



1　暗褐色土層（10YR3/3）。〆2cm以下石粒多含。

第13図　H15号住居址（1）

状文が施されるものには、4のように頸部にだけ施文するものや、6のように頸部に廉状文が施されるものが存在する。壺には赤彩されるもの（10・11・13・14）と、されないもの（8・9・12・15）が存在する。施文は櫛歯状工具による波状文や廉状文が施されるもの（8・10・13・14）や斜走文が施されるもの（11）、縄文施文で篦状工具による平行沈線や刺突列、弧線文が施されるもの（12）、口唇部に櫛歯状工具による刻目が施されるもの（9）などが存在する。鉢、高坏、ミニチュア土器は全てが赤彩されている。



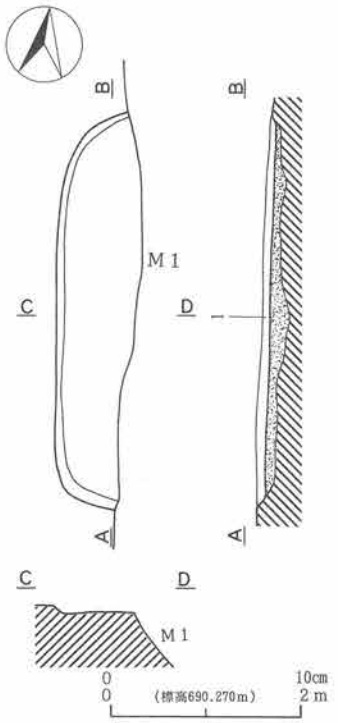
第14図　H15号住居址（2）

挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
−1	甕	− − −	内−篦磨き。 外−櫛歯状工具による波状文。	
−2	甕	− − −	内−篦磨き。 外−櫛歯状工具による波状文。	
−3	甕	24.0 − −	内−篦磨き。 外−櫛歯状工具による波状文。	

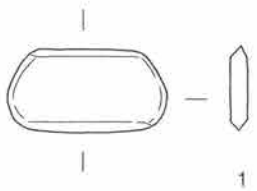
第10表　H15号住居址出土遺物観察表（1）

挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
－4	甕	19.0 － －	内－篦磨き。 外－頸部のみ櫛歯状工具による波状文。	
－5	甕	－ － －	内－篦磨き。 外－口縁：櫛歯状工具による斜走文、頸部：簾状文。	
－6	甕	－ － －	内－篦磨き。 外－頸部：簾状文、体部上半：他は櫛歯状工具による波状文。	
－7	甕	－ 7.0 －	内外－篦磨き。	
－8	壺	－ － －	内－ナデ。 外－口縁部：波状文。	
－9	壺	－ － －	内－ナデ。 外－口唇部：櫛歯状工具による刻目。	
－10	壺	－ － －	内－ナデ、刷毛目。 外－赤彩、頸部：簾状文。	
－11	壺	－ － －	内－ナデ、刷毛目。 外－赤彩、頸部：斜走文。	
－12	壺	－ － －	内－ナデ。 外－篦状工具による平行沈線、刺突列、弧線文。縄文。	
－13	壺	－ 5.3 －	内－ナデ、刷毛目。 外－赤彩、頸部：櫛歯状工具による簾状文、波状文。	
－14	壺	－ － －	内－刷毛目。 外－赤彩。頸部：櫛歯状工具による波状文。	
－15	壺	－ 8.2 －	内－刷毛目。 外－篦磨き。	
－16	鉢	17.6 － －	内外－赤彩。	
－17	鉢	－ 2.1 －	内外－赤彩。	
－18	鉢	－ － －	内外－赤彩。	
－19	ミニチュア	－ － －	内外－赤彩。	
－20	高杯	－ － －	内外－赤彩。	
－21	甕	－ － －	内－篦磨き。 外－篦状工具による連続「コ」地文。	
－22	敲石	12.7 7.0 5.5		680 g

第11表　H15号住居址出土遺物観察表（2）



1　黒褐色土層（10YR2/2）。パミス、小石少含。



第15図　H16号住居址

H16号住居址（第15図、図版八・百六）

遺構－Ⅲけ５のグリットで検出された。Ｍ１号溝址に切られ、H20・H34号住居址を切る。柱穴、炉址等は検出部分には存在しなかった。壁残高0.12ｍを測る他は規模等は確定できない。

遺物－石包丁の未製品が出土している。長辺に刃部を造りだした状態のものである。石材の材質が通常のものと異なるが、石包丁として取り扱った。

H20号住居址（第16図、図版十・百九・百十）

遺構－Ⅲく５のグリットで検出された。H34号を切り、H16号住居址、Ｍ１号溝址に切られる。隅丸長方形のプランを呈すると思われるが、東北・南東の二つのコーナーがＭ１号溝址に切られて存在しないため、0.1ｍを測る壁残高以外は規模は判然とはしない。４基検出されたPitは位置的に均等ではないが、主柱穴と考えてよいものと思われる。Ｐ１からは直径17㎝の、Ｐ４からは直径15㎝の柱痕が確認された。主柱穴間のほぼ中央部には礫を伴う炉址が構築されていた。周溝は認められず、覆土は自然堆積であった。

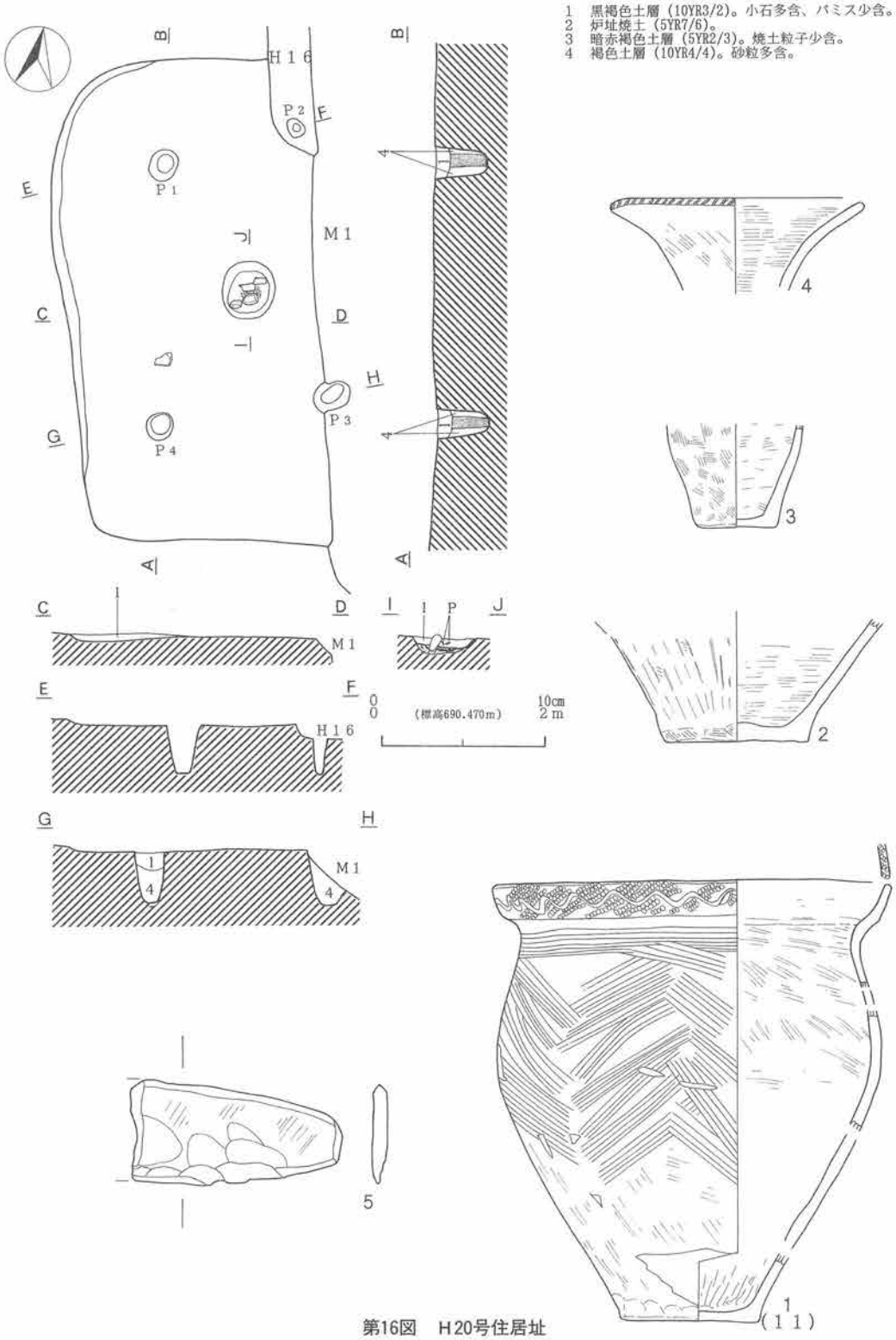
本址がH34号住居址の建て替えなのか、異なる住居であるかのかは判断できなかった。

遺物－甕（１～３）、壺（４）、石包丁（５）が出土して

挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
－1	石包丁	8.4 4.5 0.9		66.2ｇ 未製品。

第12表　H16号住居址出土遺物計測表。

いる。甕は受口口縁で、口唇部に縄文を施し、口縁部に縄文と篦状工具による１条の波状文を巡らしている。頸部には櫛波状工具による条線が巡らされ、体部には斜走文が施文される。内面には刷毛目と篦磨き調整が施されている。４の壺は口唇部に縄文を施す。他の２点は底部しか残存しないため文様は不明である。



第16図　H20号住居址

挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
－1	甕	24.4 8.4 26.0	内－刷毛目～篦磨き。 外－口唇：縄文、口縁：縄文・篦状工具による１条の波状文、 頸部：櫛歯状工具による条線、体部：櫛歯状工具による斜走文。	
－2	壺	－ 8.8 －	内外－篦磨き。	
－3	壺	－ 4.7 －	内－刷毛目～篦磨き。 外－篦磨き。	
－4	壺	15.7 － －	内－刷毛目。 外－口唇：縄文。	
－5	石包丁	6.3－ 3.1 0.4	外－篦磨き。口縁に凹線。	17.3ｇ

第13表　H20号住居址出土遺物観察表

H23号住居址（第17図、図版十一・百十）

遺構－Ⅰく８のグリットで検出された。H22号・H38号住居址に切られる。長軸方位をN－25°－Wにとる。短軸長２・45ｍ、壁残高0.22ｍを測る。１基検出されたPitは主柱穴と考えられ、Ｈ７号住居址と同様な柱穴配置であろうと思われる。覆土は自然堆積で、調査範囲には炉址は存在しなかった。

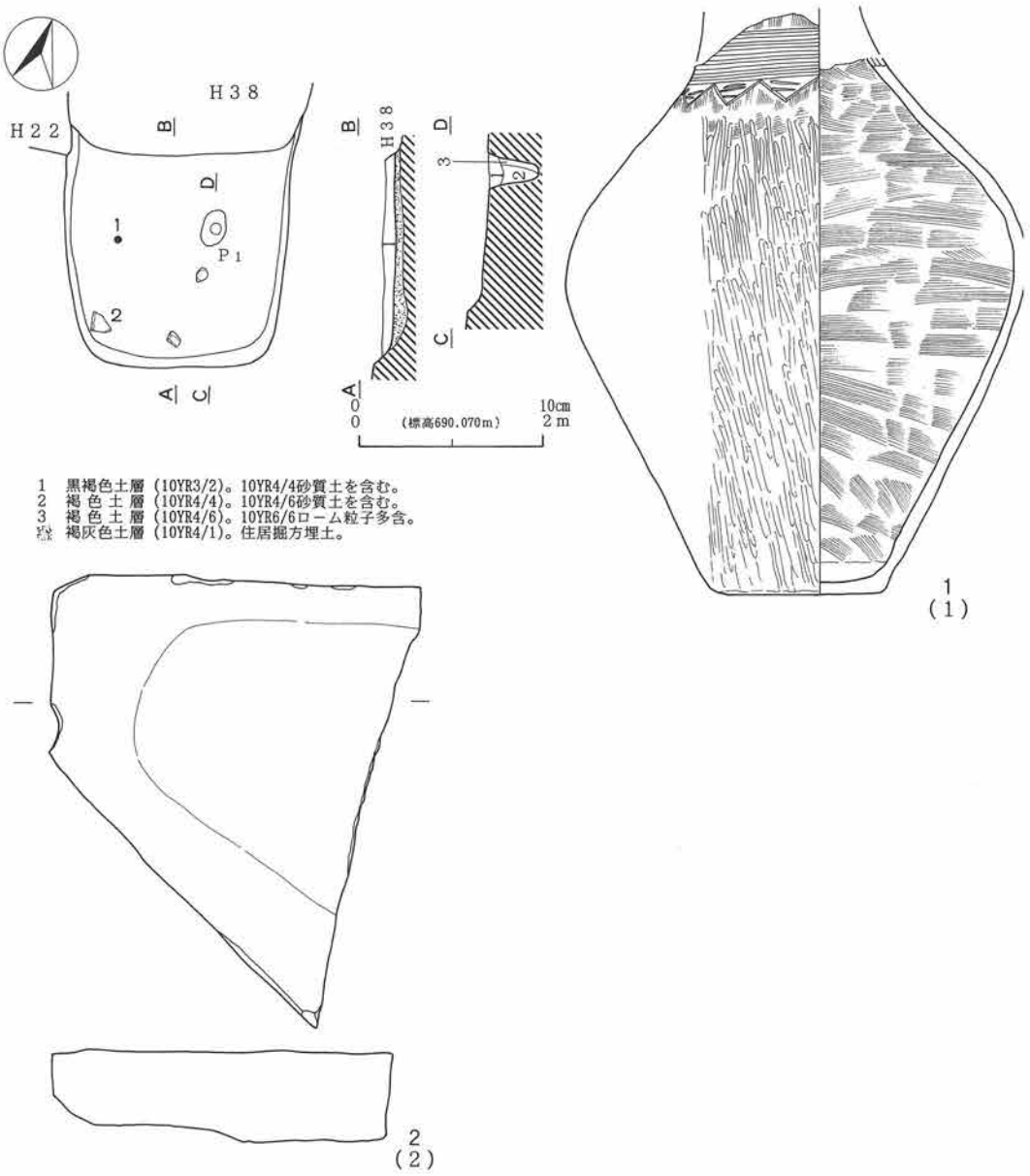
遺物－壺と砥石が出土している。壺は口縁部を欠損するものの、図化した残存部分はほぼ完全である。頸部に櫛歯状工具による横位の条線を巡らし、その最下線から篦状工具による沈線で鋸歯文を巡らしている。鋸歯文の内部には２本の平行短沈線が充填されている。体部の最大径は中央より上部に位置する。砥石は置砥石で、１面だけが使用されている。かなり使い込まれており使用面が若干窪み、縄文時代の石皿のようになっている。住居の南西コーナー下に設置されていた。

挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
－1	壺	－ 4.6 －	内－刷毛目。 外－頸部：櫛歯状工具による条線、篦状工具による鋸歯文、内部に２本の平行沈線充填。体部：刷毛目～篦磨き。	
－2	砥石	24.2 21.0 4.9		3.160ｇ

第14表　H23号住居址出土遺物観察表

H26号住居址（第18・19図、図版十三・百十一・百十二）

遺構－Ⅲか５のグリットで検出された。Ｍ１号・Ｍ３号溝址に切られる。東北、東南コーナー



第17図　H23号住居址

がM1号により切られ存在しないため、壁残高0.2m以外の規模は不明である。4基検出されたPitの内、P1・P3・P4の3基は主柱穴である。3基全てから直径20cmの柱が確認された。炉址は地床炉で長径0.8m×短径0.7m×壁残高0.38mの規模を有し、主柱穴間の中央やや北より

に構築されていた。周溝は存在せず、覆土は自然堆積であった。

遺物－甕（1～4・12～14）、壺（5～10）、台付甕（11・15）磨製石斧、軽石製石製品が出土している。1の甕は口唇部に縄文を、頸部下に櫛歯状工具による波状文が施される。2は口唇部に縄文を施し、口縁部に櫛歯状工具による波状文を2条巡らし、体部上半には櫛歯状工具による斜走文が施されている。内面には刷毛目調整、外面体部下半の無文部分には篦磨き調整が施されている。3は口唇部に刻目を施し、頸部には櫛歯状工具による簾状文を巡らし、体部に櫛歯状工具による弧線文が施される。4は受口状口縁を呈し、口唇部と口縁部に縄文を施す、口縁部には更に篦状工具による1条の波状文が巡らされる。頸部には、櫛歯状工具による簾状文が巡り、体部には櫛歯状工具による斜走文が施される。12は受口状を呈する口縁部に篦状工具による2条の波状文が巡り、頸部に簾状文、体部には連続「コ」字文が施される。台付甕の可能性も有する。13は体部に連続「コ」字文が施されるもので、円形貼付文が付加される。14は内面口縁部が赤彩されている。受口口縁で、口唇部と口縁部、体部上半には縄文が施される。口縁部には、篦状工具による1条の波状文と、円形貼付文が付加され、体部には連続「コ」地文と円形貼付文が付加される。壺5は受口口縁に縄文と、篦状工具による1条の波状文、円形貼付文が施される。頸部下には、縦位の櫛歯状工具による条線の両脇を刺突列で囲み、貼付文を付加する文様帯を4単位施す。外面と内面口縁部には赤彩が施される。6は口唇部に縄文を施し、頸部に篦状工具による平行沈線と縄文を施す。7も頸部に篦状工具による4本の平行沈線を巡らし、縄文を施している。9は頸部の篦状工具による平行沈線間に波状文を施し、縄文を施文している。8・11は底部の破片である。11の台付甕は、受口口縁の口唇と口縁にじょうもんを施し、口縁には篦状工具による2条の波状文を巡らしている。頸部下には連続「コ」字文と円形貼付文が施される。15は口唇部に縄文を施し、頸部下には篦状工具による斜走文が施されている。台部は欠損する。16の軽石製品は円盤状に周辺部を磨って円形を造り出している。17の磨製石斧は刃部の大半を欠損する。基部には着柄によるツブレが著しく、ソケット状の柄に着装されていたものと思われる。蛤刃である。

挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
－1	甕	13.4 － －	内－篦磨き。 外－口唇：縄文。体部：櫛歯状工具による波状文。	
－2	甕	27.0 9.4 31.6	内－刷毛目。 外－口唇：縄文。口縁部：櫛歯状工具による波状文。体部：斜走文。	No.1
－3	甕	17.4 6.6 17.6	内－篦磨き。 外－口唇：刻目。頸部：櫛歯状工具による簾状文。体部：弧線文。	No.3
－4	甕	20.2 － －	内－篦磨き。 外－口唇：縄文。口縁：縄文、篦状工具よる1条の波状文。頸部：櫛歯状工具による簾状文。体部：斜走文。　No.10	

第15表　H26号住居址出土遺物観察表（1）

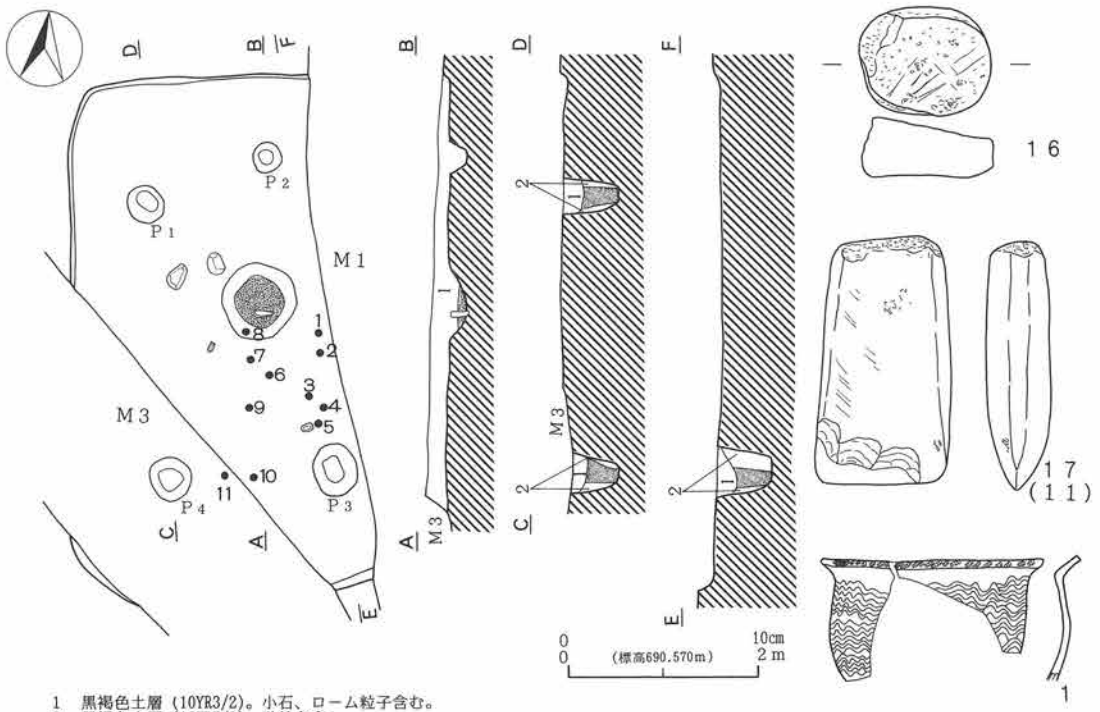
挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
－5	壺	14.4 － －	内－口縁：赤彩。他は刷毛目。 外－口唇：縄文。口縁：縄文＋篦描波状文＋円形貼付文。体部：櫛歯状工具による縦位条線＋刺突列＋円形貼付文。4単位。赤彩。	
－6	壺	15.0 － －	内－篦磨き。 外－口唇部：縄文。頸部：篦状工具による平行沈線＋縄文。	No.8
－7	壺	－ － －	内－刷毛目。 外－頸部：篦状工具による平行沈線＋縄文。	No.4
－8	壺	－ 7.2 －	内外－刷毛目、篦磨き。	
－9	壺	－ － －	内－刷毛目、篦磨き。 外－頸部：篦状工具による平行沈線波状文＋縄文。	
－10	壺	－ 7.6 －	内外－刷毛目。	No.7
－11	台付甕	12.4 － －	内－刷毛目。 外－口唇部：縄文。口縁：縄文＋篦描波状文。頸部下：連続「コ」字文＋円形貼付文。	
－12	甕	14.6 － －	内－篦磨き。 外－口縁部：篦描波状文。頸部：簾状文。体部：連続「コ」字文。	
－13	甕	16.6 5.6 21.2	内－刷毛目、篦磨き。 外－体部：連続「コ」字文＋円形貼付文。	No.5
－14	甕	9.2 3.4 9.2	内－篦磨き、口縁部赤彩。 外－口唇部：縄文。口縁部：縄文＋篦描き波状文＋円形貼付文。体部：縄文＋連続「コ」字文＋円形貼付文。	No.6
－15	台付甕	9.7 － －	内－篦磨き。 外－口唇：縄文。体部：斜走文。軽石製。	No.9
－16	円盤	7.0 5.8 3.2		35 g
－17	磨製石斧	13.2 － 3.4		680 g No.11

第16表　H26号住居址出土遺物観察表（1）

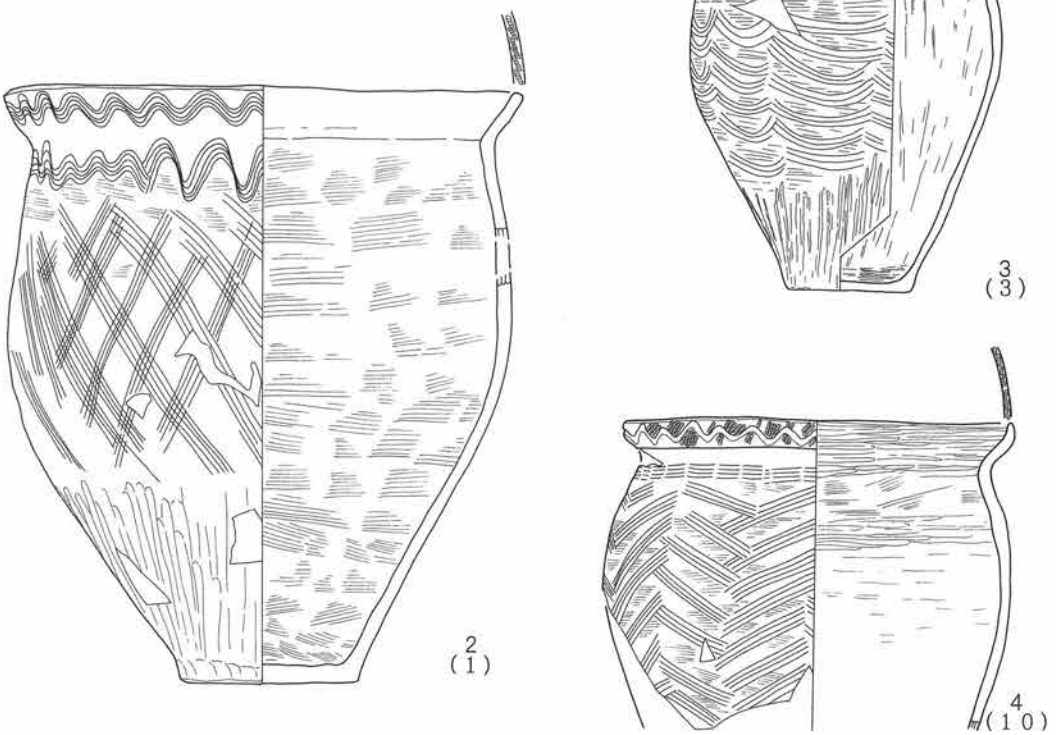
H27号住居址（第20図、図版百十三）

遺構－Ⅰけ9のグリットで検出された。H10号住居址に切られ、H28号住居址を切る。南北長4.84ｍ、壁残高0.15ｍを測るが、住居の半分以上をH10号住居址に破壊されているため、長軸や規模・プラン等については判然としない。Pitは2基検出されたが、主柱穴か否かは判断できない。炉址は調査範囲内には存在しなかった。覆土は自然堆積で周溝は有さない。

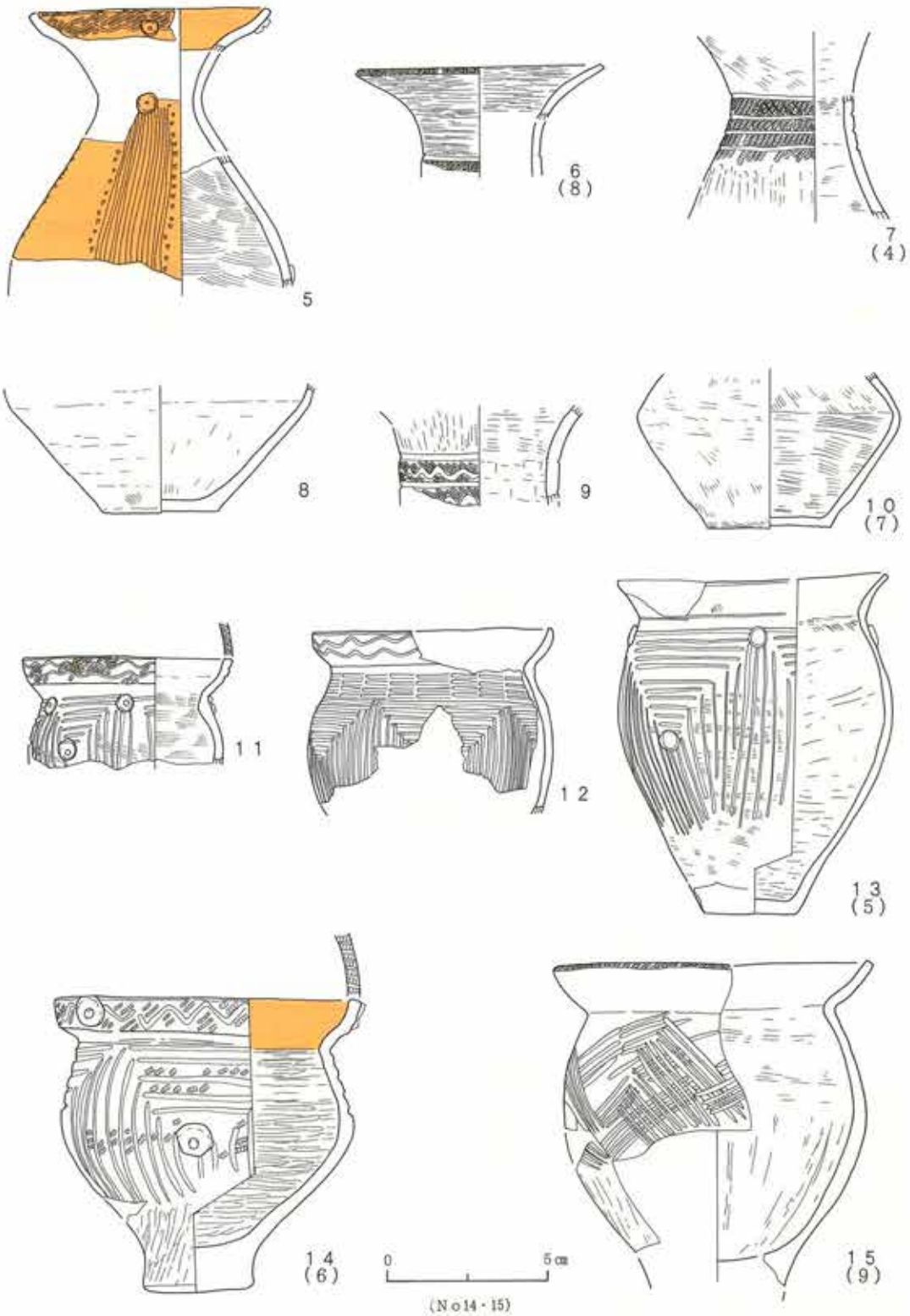
遺物－甕（1～10）、壺（11～18）、鉢（8）、打製石鏃（19）、磨石（20）が出土している。1の甕は端部で短く直立する口縁部に櫛描波状文を1条巡らし、頸部に簾状文、体部上半に波状文、下半には斜走文を施す。2も同様な構成をとるものと思われる。3は口縁部全体に波状文が施さ



1　黒褐色土層（10YR3/2）。小石、ローム粒子含む。
2　黒褐色土層（10YR5/6）。砂粒多含。
　柱　　痕（10YR2/2）。



第18図　H26号住居址（1）



第19図　H26号住居址（2）

れ、頸部には簾状文が巡る。4は受口口縁を呈し、口唇部・口縁部に縄文が施され、口縁部には篦状工具による1条の波状文が巡る。6・7は櫛歯状工具により頸部には簾状文、体部には斜走文が施される。7は底部片で内外面に篦磨き調整が施されている。9・10は台付甕の可能性も有するが、底部を欠損するため甕として分類しておく、体部に篦状工具による連続「コ」字文が施され、10は円形貼付文が付加されている。8は内外面が赤彩される鉢である。壺11・12は赤彩されており、11は縄文が、12は櫛歯による斜位の条線が口唇部に施される。14は頸部に櫛歯状工具による波状文と簾状文、刺突を充填する鋸歯文が施される。13～16は頸部に篦状工具による平行沈線を巡らし、平行沈線間に縄文を施文している。17は体部に篦状工具による弧線文、刺突列、縄文が施される。18は篦状工具により体部に弧線文が施されている。

挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
－1	甕	19.3 － －	内－刷毛目～篦磨き。 外－口縁：波状文、頸部：簾状文、体部上半：波状文、体部下半：斜走文。	
－2	甕	16.0 － －	内－刷毛目～篦磨き。 外－口縁：波状文、頸部：簾状文、体部上半：波状文。	
－3	甕	13.2 － －	内－篦磨き。 外－口縁部：波状文、頸部：簾状文。	
－4	甕	－ － －	内－篦磨き。 外－口唇部：縄文、口縁部：縄文＋篦描波状文。	
－5	甕	－ － －	内－篦磨き。 外－頸部：簾状文、体部：斜走文。	
－6	甕	－ － －	内－篦磨き。 外－頸部：簾状文、体部：斜走文。	
－7	甕	－ 5.2 －	内－刷毛目～篦磨き。 外－篦磨き。	
－8	鉢	15.2 － －	内外－赤彩。	
－9	甕	－ － －	内－篦磨き。 外－連続「コ」字文。	
－10	甕	－ － －	内－篦磨き。 外－連続「コ」地文＋円形貼付文。	
－11	壺	－ － －	内－刷毛目～篦磨き。 外－赤彩。口唇部：縄文。	
－12	壺	－ － －	内－赤彩。 外－赤彩。口唇部：櫛歯による斜位条線。	
－13	壺	－ － －	内－刷毛目～篦磨き。 外－頸部：篦状工具による平行沈線＋縄文。	
－14	壺	－ － －	内－ナデ。 外－頸部：櫛歯による波状文＋簾状文、刺突を充填する鋸歯文。	

第17表　H27号住居址出土遺物観察表（1）

挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
－15	壺	－ － －	内－ナデ。 外－頸部：篦状工具による平行沈線＋縄文。	
－16	壺	－ － －	内－ナデ。 外－頸部：篦状工具による平行沈線＋縄文。	
－17	壺	－ － －	内－刷毛目。 外－体部：篦描き弧線文＋刺突列。	
－18	壺	－ － －	内－刷毛目、ナデ。 外－篦描き弧線文。	
－19	打製石鏃	2.5 1.7 0.3		0.9ｇ
－20	磨石	8.2 4.2 2.7		193.9ｇ

第18表　H27号住居址出土遺物観察表（２）

挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
－1	甕	－ － －	内－篦磨き。 外－口唇部：刻目、口縁部：櫛描波状文。	
－2	甕	－ － －	内－篦磨き。 外－口縁：櫛描波状文。	
－3	壺	－ － －	内－刷毛目～篦磨き。 外－刷毛目～篦磨き、頸部：簾状文？	
－4	高杯	－ 16.4 －	内－刷毛目。 外－赤彩。	
－5	甕	13.6 － －	内－篦磨き。 外－頸部：簾状文、体部：波状文。	
－6	甕	－ － －	内－篦磨き。 外－頸部：波状文、体部：斜走文。	
－7	甕	12.0 5.0 7.8	内－篦磨き。 外－頸部：篦描波状文、体部：斜走文。	

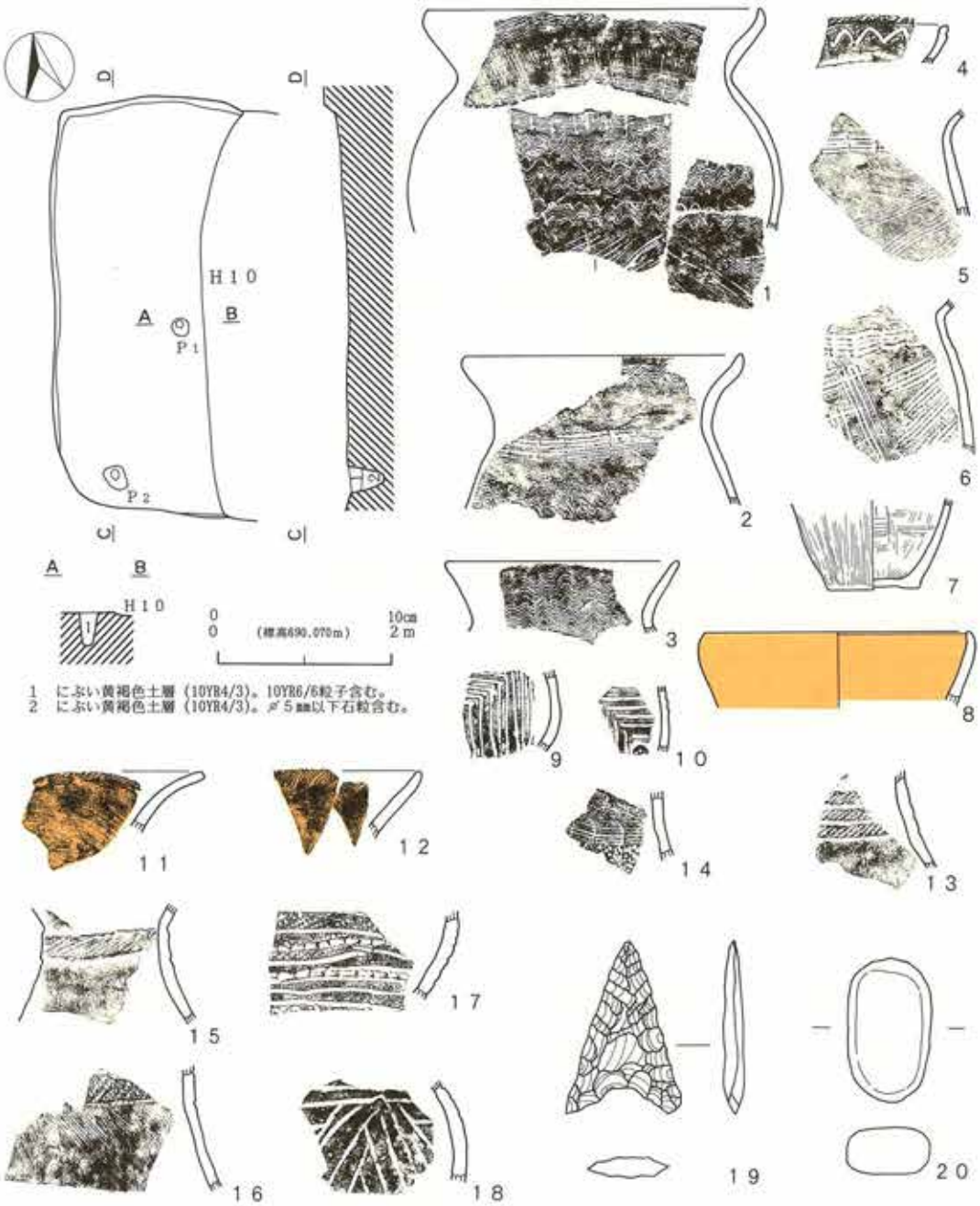
第19表　H28号住居址出土遺物観察表

H28号住居址（第21図、図版百十三）

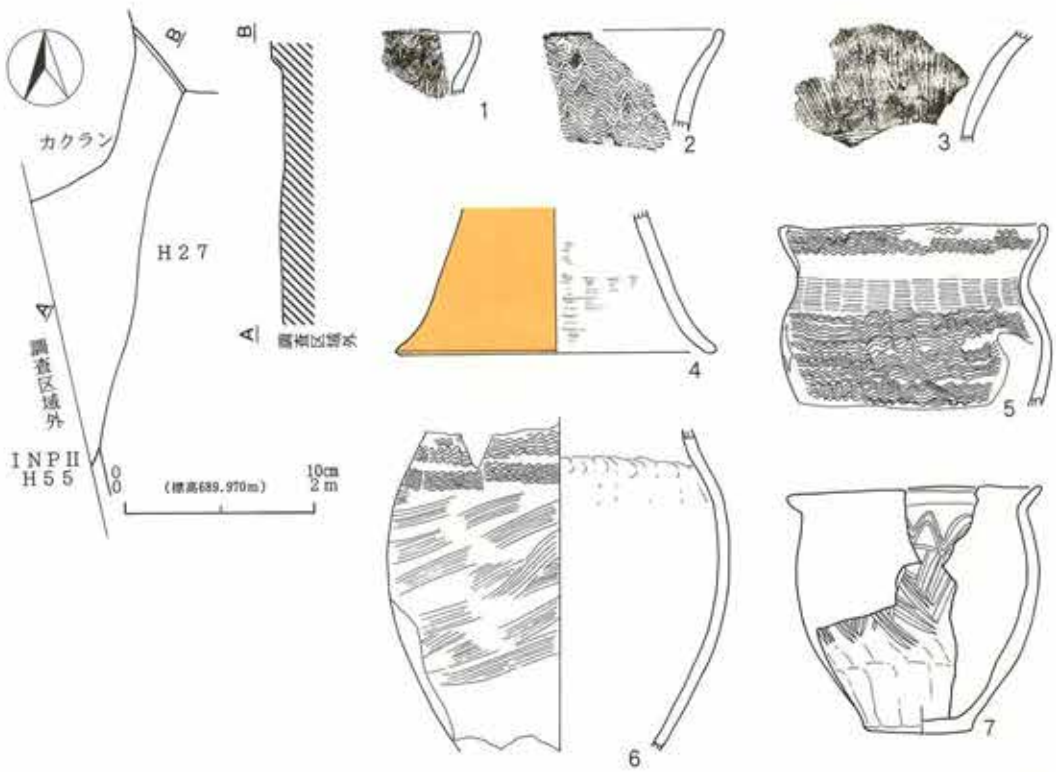
遺構－Ⅰけ10のグリットで検出された。H27号住居址に切られる。本址は２次調査におけるH55号住居址と同一の住居址である。規模については判然としないが隅丸長方形の平面プランを呈するものと思われる。柱穴、炉址は調査範囲内には存在しなかった。

遺物－甕（１・２・５～７）、壺（３）、高杯（４）が出土している。１・２は口縁部に櫛歯状工具による波状文が施されるもので、１は更に口唇部に刻目が付加される。５は受口気味に立ち上がる口縁端部に櫛歯状工具による波状文を１列巡らし、頸部には簾状文、体部には波状文が施

される。6は頸部下に2列の櫛歯状工具による波状文を巡らし、その下には斜走文が施される。7は頸部下に篦状工具による波状文を2本巡らし、体部には斜走文が施されている。壺は口縁部の破片である。内外面に刷毛目・篦磨き調整が施され、外面には廉状文と思われる櫛歯状工具による条線が認められる。高杯は脚部の破片である。内面刷毛目調整、外面は赤彩されている。



第20図　H27号住居址



第21図　H28号住居址

H30号住居址（第22図、図版十四・百十四）

遺構－Ⅰう5のグリットで検出された。H6号住居址に切られる。H6号住居址掘方において検出されたPitは、覆土の観察から本址に伴うものと判断した。調査範囲には、その他の施設は一切存在しなかった。覆土は自然堆積である。

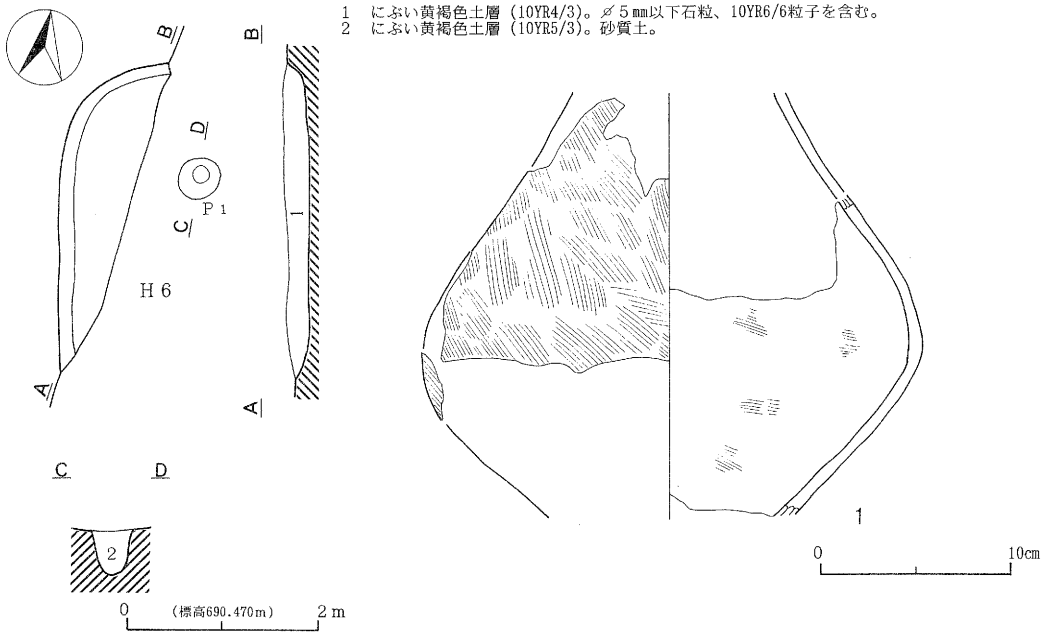
遺物－壺が1点出土している。口縁部と底部を欠損する。内外面に刷毛目調整が施されており、赤彩・施文は残存部分には認められない。

挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
－1	壺	－ － －	内外－刷毛目。	

第20表　H30号住居址出土遺物観察表

H32号住居址（第23図、図版十四・百十四）

遺構－Ⅱき2のグリットで検出された。住居の大部分が調査区域外に延びるため、0.35mを測



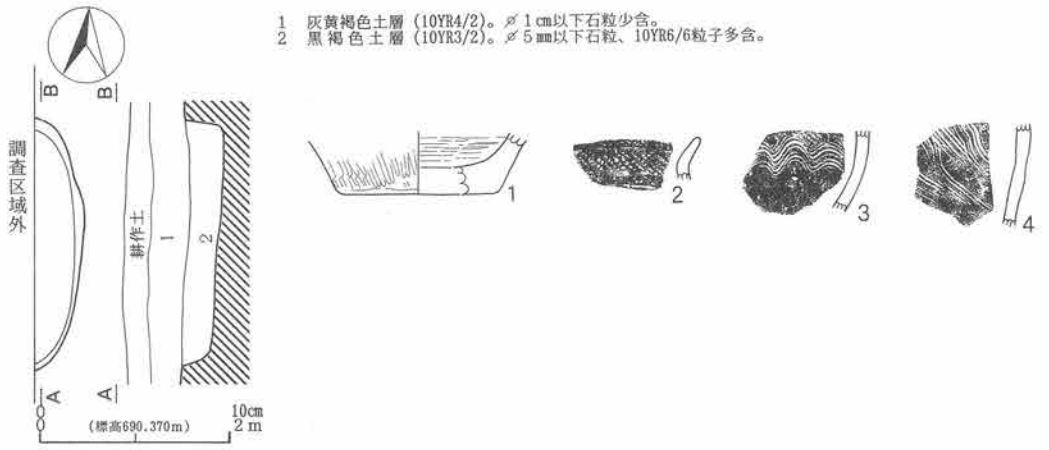
第22図　H30号住居址

る壁残高以外は一切が不明である。出土遺物が全て弥生土器であったためここに分類した。覆土は自然堆積であった。

遺物－図化できたものは全て甕である。1は底部片で内外面が篦磨き調整される。2は口唇部～口縁部に縄文が施されるもの。3は体部に櫛歯状工具による波状文が施されるもの。4は体部に櫛歯状工具による斜走文が施される。

挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
－1	甕	－ 8.0 －	内外－篦磨き。	
－2	甕	－ － －	内－篦磨き。 外－口唇から口縁部：縄文。	
－3	甕	－ － －	内－篦磨き。 外－体部：櫛描波状文。	
－4	甕	－ － －	内－篦磨き。 外－体部：櫛描斜走文。	

第21表　H32号住居址出土遺物観察表



第23図　H32号住居址

H33号住居址（第24図、図版十五・百十四）

遺構－Ⅱか1のグリットで検出された。H25号住居址に切られる。壁残高0.15m以外はH25号住居址により破壊され不明である。Pit、炉址等は調査範囲には存在しなかった。

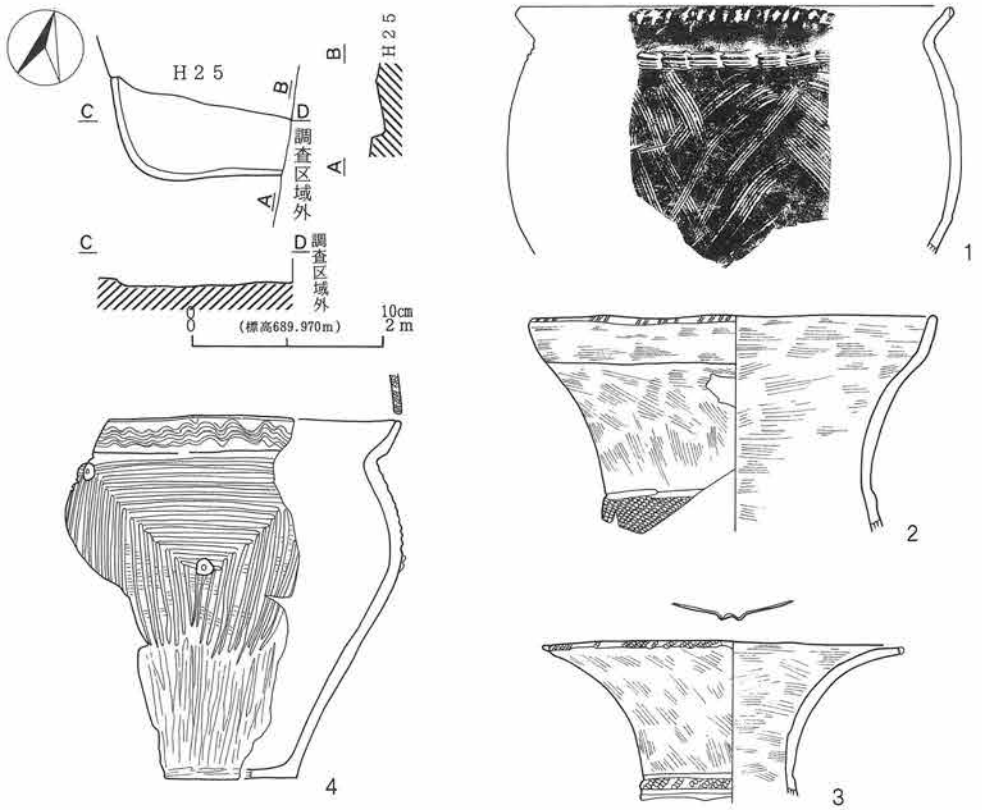
遺物－甕（1・4）、壺（2・3）が出土している。1は口唇部に櫛歯状工具による刺突を巡らし、頸部に廉状文、体部には斜走文が施されている。4は受口口縁で、口唇部に縄文、口縁部には櫛歯状工具による波状文が1列巡り、頸部下から体部には、円形貼付文を伴う連続「コ」字文が施されている。2の壺は所謂「太頸」の壺で、口唇部に縄文が施され、頸部には篦状工具による平行沈線と縄文が施文される。内外面に刷毛目調整痕を残している。3は頸が細く、口唇部に4ケ所の突起を有する他は2と同様である。

挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
－1	甕	22.7 － －	内－篦磨き。 外－口唇部：櫛による刺突、頸部：廉状文、 体部：斜走文。	
－2	壺	21.0 － －	内－刷毛目。 外－口唇部：縄文、頸部：篦描平行沈線・縄文。	
－3	壺	18.4 － －	内－刷毛目。 外－口唇：縄文・突起、体部：篦描平行沈線・縄文。	
－4	甕	－ － 19.2	内－篦磨き。 外－口唇部：縄文、口縁部：櫛描波状文、体部：円形貼付文を伴う連続「コ」地文。	

第22表　H33号住居址出土遺物観察表

H34号住居址（第25図、図版十五）

遺構－Ⅲく6のグリットで検出された。H16号・H20号住居址、M1号溝址に切られる。本址はH20号住居址の建て替え前の住居址の可能性を有する。長軸長5.77m、壁残高0.2mの規模を有し、N－20°－Wに長軸方位をとる。Pitは3基検出されたが位置的に全てが主柱穴とは考えにくい、炉址は住居の中央やや北に位置しており、長径0.74m×短径0.66m×深度0.17mの規模を呈する。遺物は出土していない。

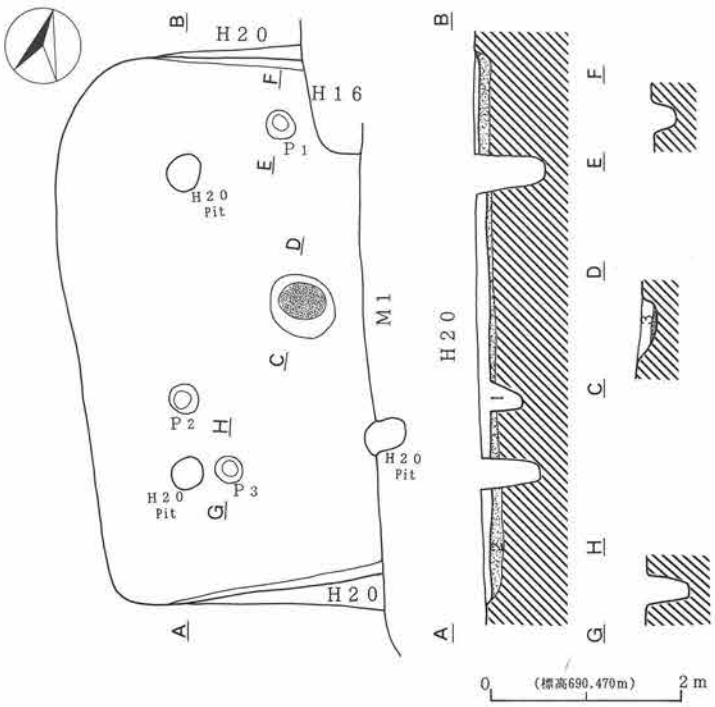


第24図　H33号住居址

H36号住居址（第26図、図版十五・百十五）

遺構－Ⅲこ10のグリットで検出された。第2次調査におけるH61号住居址は、本址と同一の住居址である。今回の調査範囲内では重複関係は有さないが、2次調査時分まで含めるとH13号住居址に切られる。壁残高0.3mを測る。Pitは3基検出されており全てが主柱穴である。2次調査時のP2が主柱穴であり、これを含めて考えると均等に4本の柱が立てられていたものと考えら

れる。炉址は4柱間の中央やや北に石囲い炉が構築されていた。長径0.62m×短径0.45m×深度0.16mの規模を有する。覆土は自然堆積で、周溝は有さない。



1　黒褐色土層（10YR2/3）。
2　黒褐色土層（10YR3/2）。住居掘方埋土。
3　黒褐色土層（10YR3/2）。焼土粒子少含。

第25図　H34号住居址

遺物－甕（1・6・7）、台付甕（5）、壺（2）、鉢（3）、ミニチュア土器（4）、が出土している。1の甕は体部に櫛歯状工具による斜走文が施される。6は口唇部に刻目を施し、頸部には櫛歯状工具による簾状文が巡り、体部には斜走文が施文される。7は口唇部に縄文を施し、頸部には櫛歯状工具による簾状文が巡り、体部には波状文が施文されている。5の台付甕は台部分だけが出土している。脚内はヘラナデ、他は篦磨き　調整が施されている。壺は体部上半の破片である。篦状工具による平行沈線間に刺突を巡らし、更にこれを縦位に分割する垂線を加えている。その下には、平行沈線間に波状文と縄文を施した文様帯が巡っている。3の鉢は内外面が赤彩される。4のミニチュア土器は手捏土器である。

挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
－1	甕	－ － －	内－篦磨き。 外－体部：斜走文。	
－2	壺	－ － －	内－刷毛目。 外－篦描平行沈線、垂線、刺突列、波状文、縄文。	
－3	鉢	－ 8.0 －	内外－赤彩。	
－4	ミニチュア土器	5.0 － 3.5		手捏土器。

第23表　H36号住居址出土遺物観察表（1）

挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
－5	台付甕	－ 5.6 －	脚内－ヘラナデ、他は篦磨き。	
－6	甕	23.2 7.2 24.8	内－刷毛目、篦磨き。 外－口唇部：刻目、頸部：櫛描簾状文、体部：斜走文。	
－7	甕	16.8 － －	内－刷毛目、篦磨き。 外－口唇部：縄文、頸部：櫛描簾状文、体部：波状文。	

第24表　H36号住居址出土遺物観察表（2）

H37号住居址（第27図、図版十六・百十五）

遺構－Ⅰか10のグリットで検出された。H31号住居址に切られる。2次調査のH40号住居址は本址と同一の住居址である。壁残高0.23mを測る。2基検出されたPitは主柱穴と考えられる。炉址は調査範囲内には存在しなかった。覆土は自然堆積で周溝は有さない。

遺物－甕（1）、壺（2・3）が出土している。甕は口縁部片で、櫛歯状工具による波状文が施されている。2の壺は頸部に櫛歯状工具による「T」字文が施される。無彩である。3は体部下半の底部との変化点から底部に向かい内湾するもので、内面刷毛目調整、外面は体部と底部の変化点より上部に赤彩が施されている。

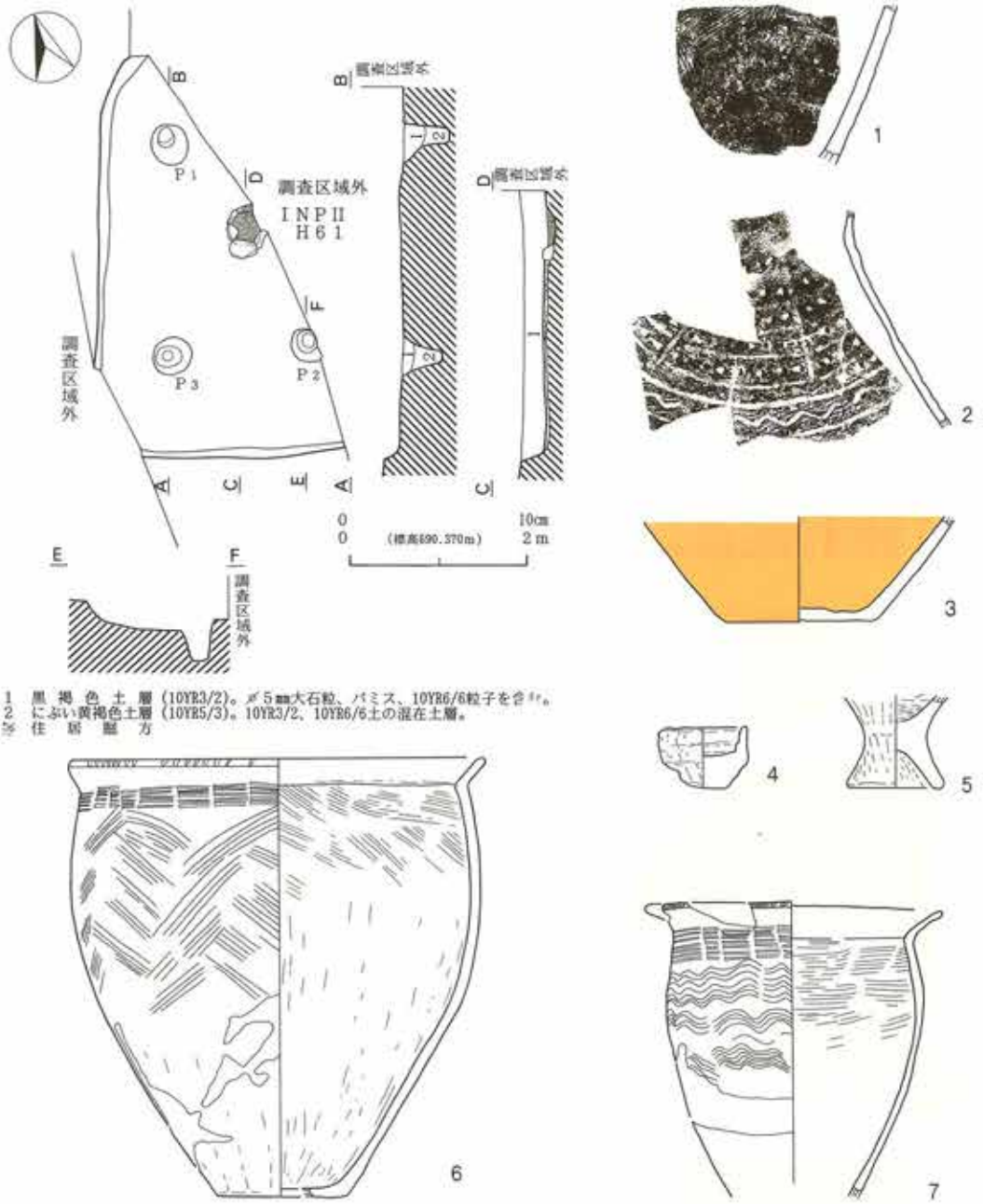
挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
－1	甕	－ － －	内－篦磨き。 外－口縁部：篦描波状文。	
－2	壺	－ － －	内－刷毛目。 外－頸部：櫛描「T」字文。	
－3	壺	－ － －	内－刷毛目。 外－体部：赤彩。	

第25表　H37号住居址出土遺物観察表

H38号住居址（第29図、図版十一・百十六）

遺構－Ⅰく9のグリットで検出された。H10号・H22号住居址に切られ、H23号・H39号を切る。不整形な隅丸長方形の平面プランを呈し、長軸長3.65m×短軸長3.0m×壁残高0.35mの規模を有する。Pitは4基検出されたが主柱穴は判然としなかった。P1・P2の両Pitからは焼土が検出されているが、炉址とは捉えがたい位置に存在する。覆土は自然堆積で周溝は有さない。

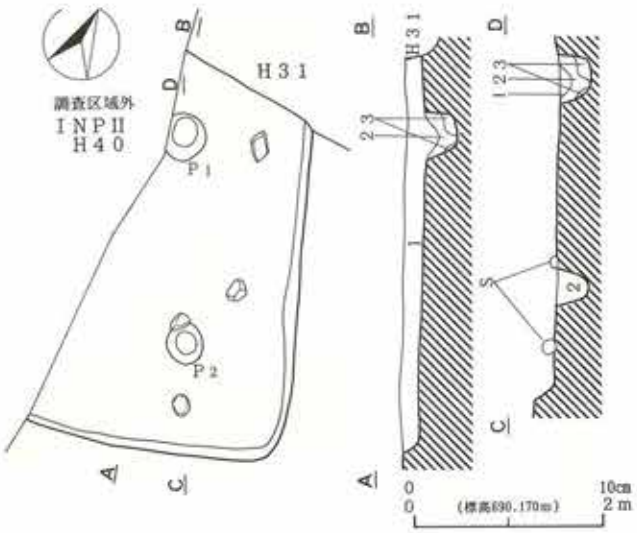
遺物－甕（3～7、9・11）、壺（8）、紡錘車（10）が出土している。3～5の甕は、櫛歯状工具により口縁部に斜走文、頸部に簾状文が施されるもの。6は口唇部に篦状工具による刻目が



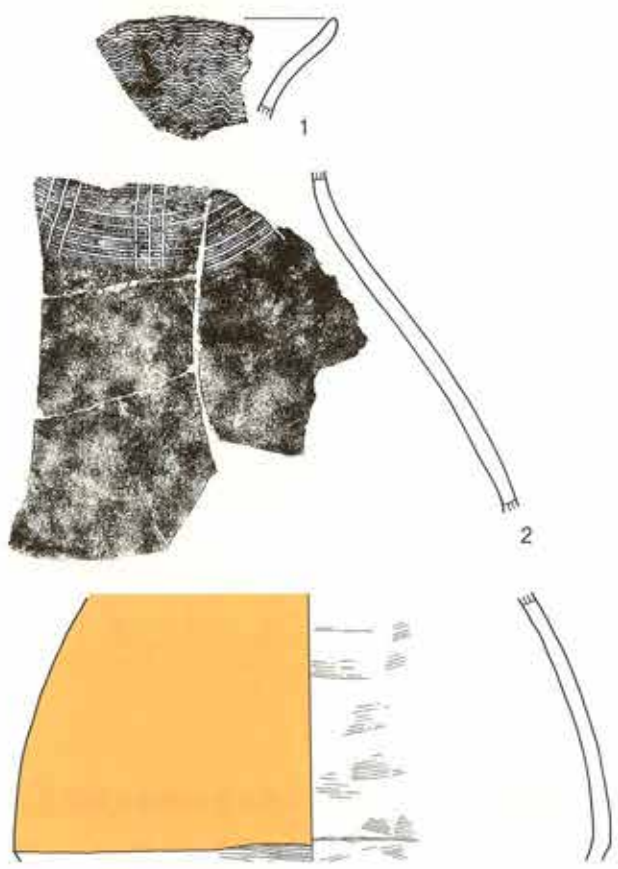
1　黒褐色土層（10YR3/2）。φ5mm大石粒、パミス、10YR6/6粒子を含む。
2　にぶい黄褐色土層（10YR5/3）。10YR3/2、10YR6/6土の混在土層。
※住居壁方

第26図　H36号住居址

巡り、口縁部には櫛歯状工具による波状文が施される。7は櫛歯状工具により頸部に簾状文、口縁部と体部上半には波状文、体部下半には斜走文が施されている。11は櫛歯状工具により、頸部に簾状文、頸部下には2列の波状文が巡る。9は口唇部に縄文が施され、頸部～体部には縄文を



1　黒色土層（10YR2/1）。小石少含。
2　黒褐色土層（10YR2/3）。小石、パミス少含。
3　褐色土層（10YR4/6）。10YR6/6粒子多含。



第27図　H37号住居址

伴う、連続「コ」字文と円形貼付文が施される。8の壺は、頸部の破片で、篦状工具による平行沈線間に縄文が施される。1の高杯は無彩で脚内に刷毛目、坏内と外面は篦磨き調整が施される。2は脚内を除き赤彩される。10の紡錘は焼き物で、土器片を再利用したものではなく、当初から紡錘車として焼成されている。

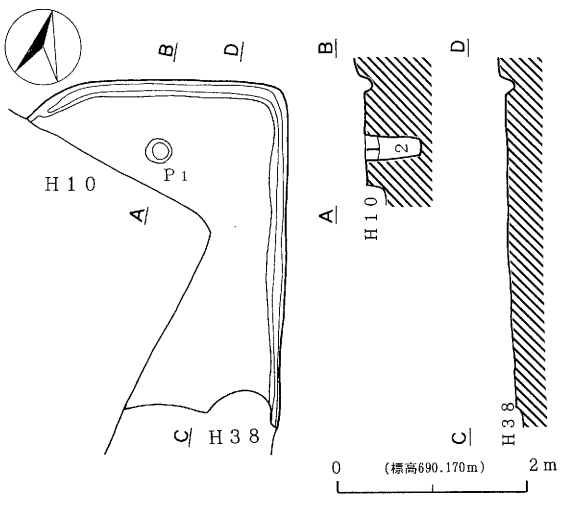
H39号住居址

（第28図、図版十六　）

遺構－Ⅰけ9のグリットで検出された。H10号・H22号・H38号住居址に切られる。長軸長及び短軸長は不明であり、壁残高0.15mを測る。平面プランは判然とはしないが、隅丸長方形を呈するものと思われる。1基検出されたPitは主柱穴と思われ、その位置から考えるとH7号住居址のような長軸方向に2基のPitが配置される構造となるようである。炉址は調査範囲内には存在しない。覆土は自然堆積で、調査範囲内の壁下には床面から8cmの深度を測る周溝が巡らされていた。本址からは遺物の出土は認められないが、住居の重複関係、弥生時代以前の遺構が当遺跡では認められない事等から、本址を弥生時代の住居址とした。

挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
－1	高杯	－ 6.1 －	内－脚：刷毛目。坏部：篦磨き。 外－篦磨き。	
－2	高杯	－ － －	内－脚：刷毛目、ヘラナデ、他は赤彩。 外－赤彩。	
－3	甕	－ － －	内－篦磨き。 外－口縁部：斜走文、頸部：簾状文。	
－4	甕	－ － －	内－篦磨き。 外－口縁部：斜走文、頸部：簾状文。	
－5	甕	－ － －	内－篦磨き。 外－口縁部：斜走文、頸部：簾状文。	
－6	甕	－ － －	内－篦磨き。 外－口唇部：篦状工具による刻目、口縁部：波状文。	
－7	甕	－ － －	内－篦磨き。 外－口縁部：波状文、頸部：簾状文、体部：上半は波状文・下半は斜走文。	
－8	壺	－ － －	内－ナデ。 外－頸部：篦状工具による平行沈線間に縄文。	
－9	甕	－ － －	内－篦磨き。 外－口唇：縄文、頸部下：縄文＋連続「コ」字文＋円形貼付文。	
－10	紡錘車	4.4 4.4 0.9		
－11	甕	16.4 － －	内－篦磨き。 外－頸部：簾状文、頸部下2列の波状文。	

第26表　H38号住居址出土遺物観察表

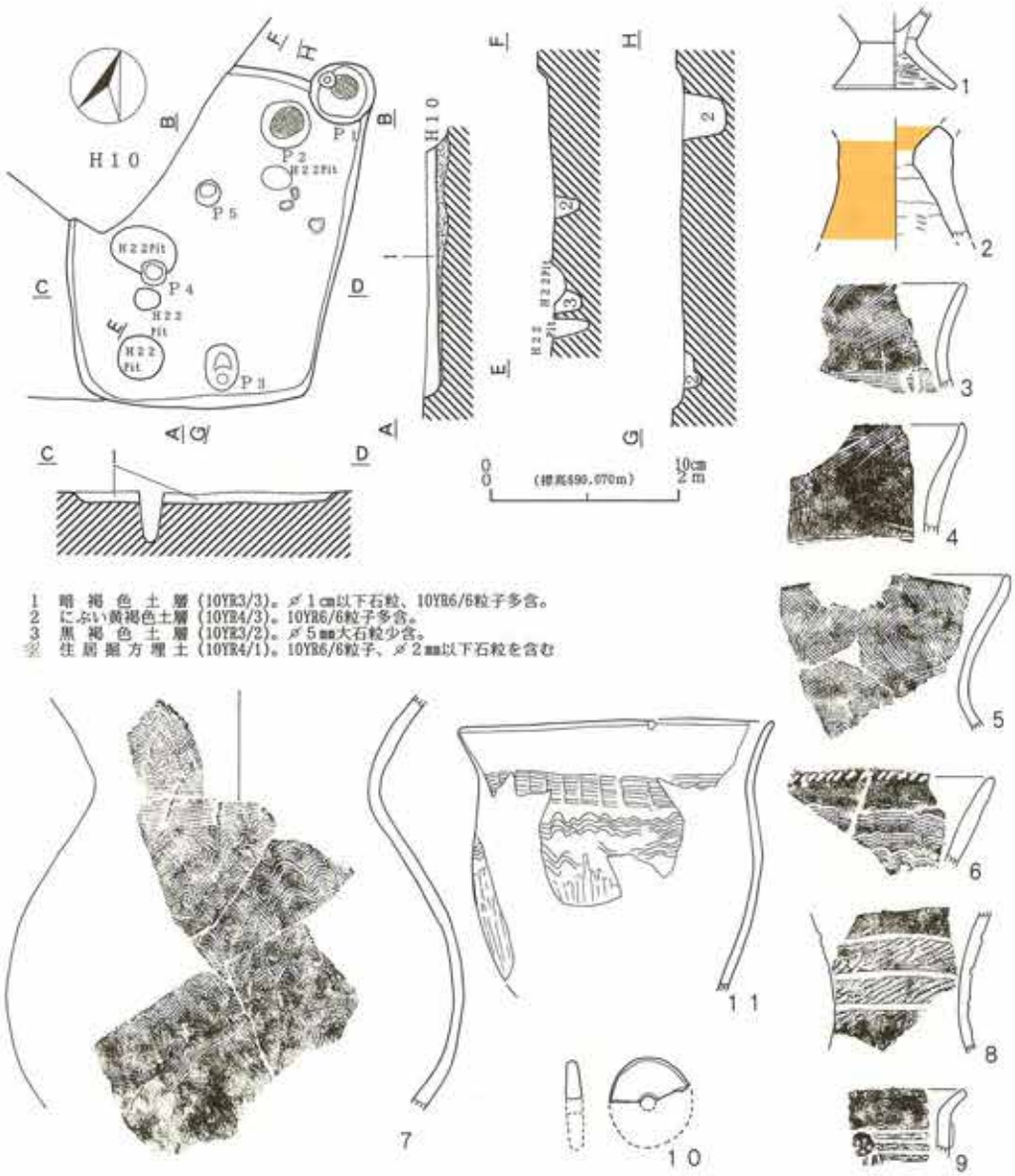


1　黒褐色土層（10YR3/2）。小石、10YR3/3粒子を含む。
2　褐色土層（10YR4/4）。小石、10YR5/6砂粒を含む。

第28図　H39号住居址

H40号住居址（第30図、図版十七・十八・百十六　）

遺構－Ⅱこ6グリットで検出された。M1号溝址に切られる。住居の約半分が耕作により削平されているため長軸長は不明である。短軸長4.6m、壁残高0.12mを測り、N－8°－Wに長軸方位をとる。6基検出されたPitの内P1～P4の4基が主柱穴である。P3・P4から直径15cmの柱が確認されている。P5・P6の2基のPitについては、壁下に構築され周溝がこの2基の部分で途切れて



第29図　H38号住居址

いることから、出入り口に関係するものかもしれない。炉址は主柱穴間のほぼ中央に構築されていた。長径0.68ｍ×短径0.55ｍ×深度0.15ｍの規模を有し、南側に礫を４ケ並べた地床炉である。前記したようにＰ５・Ｐ６が位置する南壁下の1.2ｍほどを除き周溝が巡らされている。覆土は自然堆積であった。

遺物―甕（４・７～９）、台付甕（５）、壺（６）、高杯（３）、鉢（２）、砥石（１）が出土し

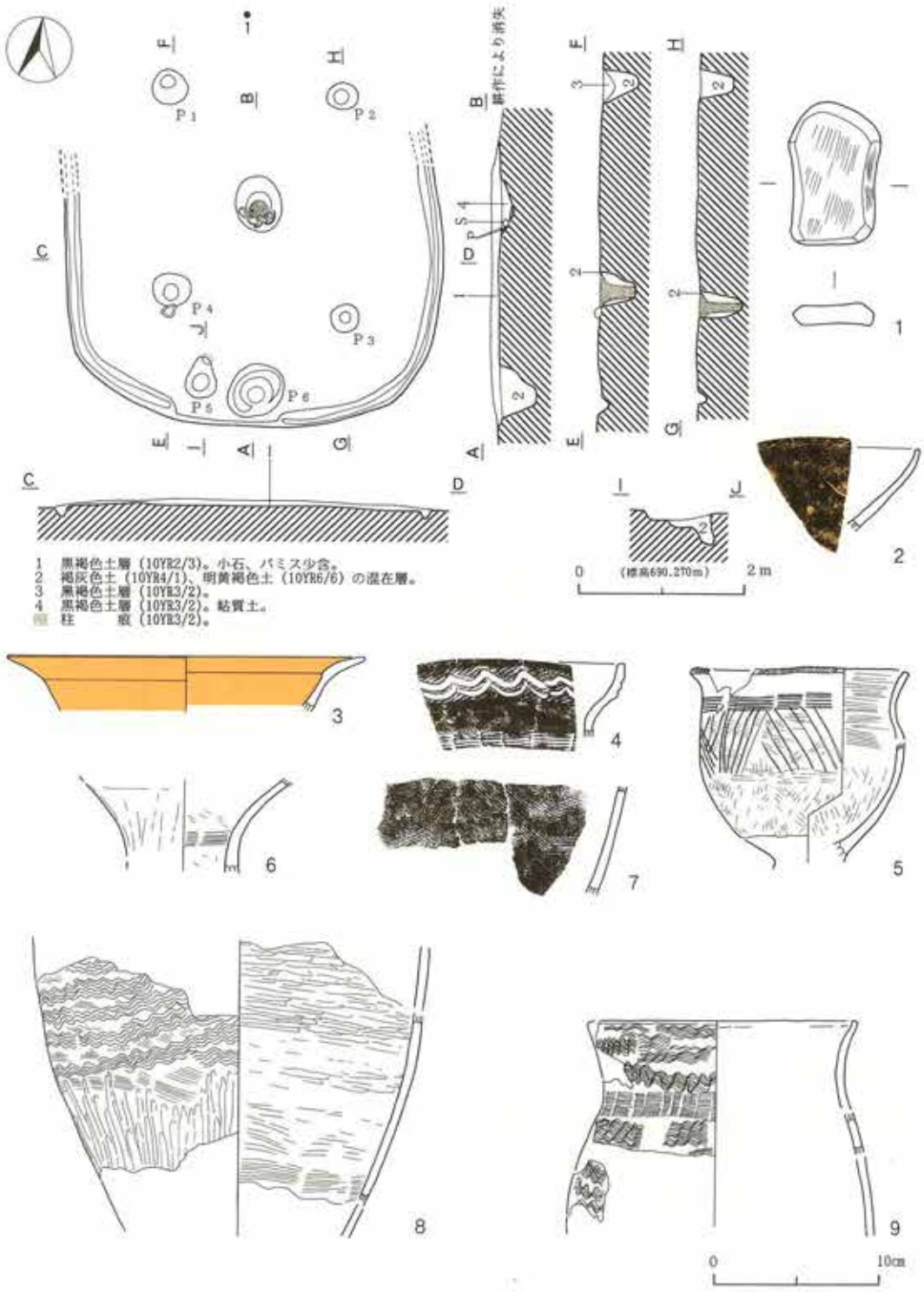
ている。4の甕は、受口口縁で口唇部と口縁部に縄文が施され、口縁部には篦状工具による2条の波状文が、頸部には櫛歯状工具による簾状文が巡る。7は櫛歯状工具による斜走文が体部に施されている。8・9は櫛歯状工具による波状文が施されるもので、9は頸部に簾状文が巡る。台付甕は口唇部に縄文を施し、頸部には櫛歯状工具による簾状文が巡る。体部上半には篦状工具による斜走文が施される。壺6は頸部片で、残存部分には施文は認められない。高杯3は内外面赤彩され、口縁部が内側に稜をなして大きく外反する。鉢2は口唇部に縄文を施し、内外面が赤彩されている。

挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
－1	砥石	8.7 5.6 1.4		90g
－2	鉢	－ － －	内－赤彩。 外－赤彩、口唇部：縄文。	
－3	高杯	29.5 － －	内外－赤彩。	
－4	甕	－ － －	内－篦磨き。 外－口唇部：縄文、口縁部：縄文・篦描波状文、頸部：櫛描簾状文。	
－5	台付甕	12.8 － －	内－刷毛目、篦磨き。 外－口唇部：縄文、頸部：櫛描簾状文、体部：篦描斜走文。	
－6	壺	－ － －	内－刷毛目、ヘラナデ。 外－篦磨き。	
－7	甕	－ － －	内－篦磨き。 外－体部：櫛描斜走文。	
－8	甕	－ － －	内－篦磨き。 外－体部：櫛描波状文。	
－9	甕	16.0 － －	内－篦磨き。 外－口縁部・体部：櫛描波状文、頸部：簾状文。	

第27表　H40号住居址出土遺物観察表

H41号住居址（第31～37図、図版十九・百十七～百二十二）

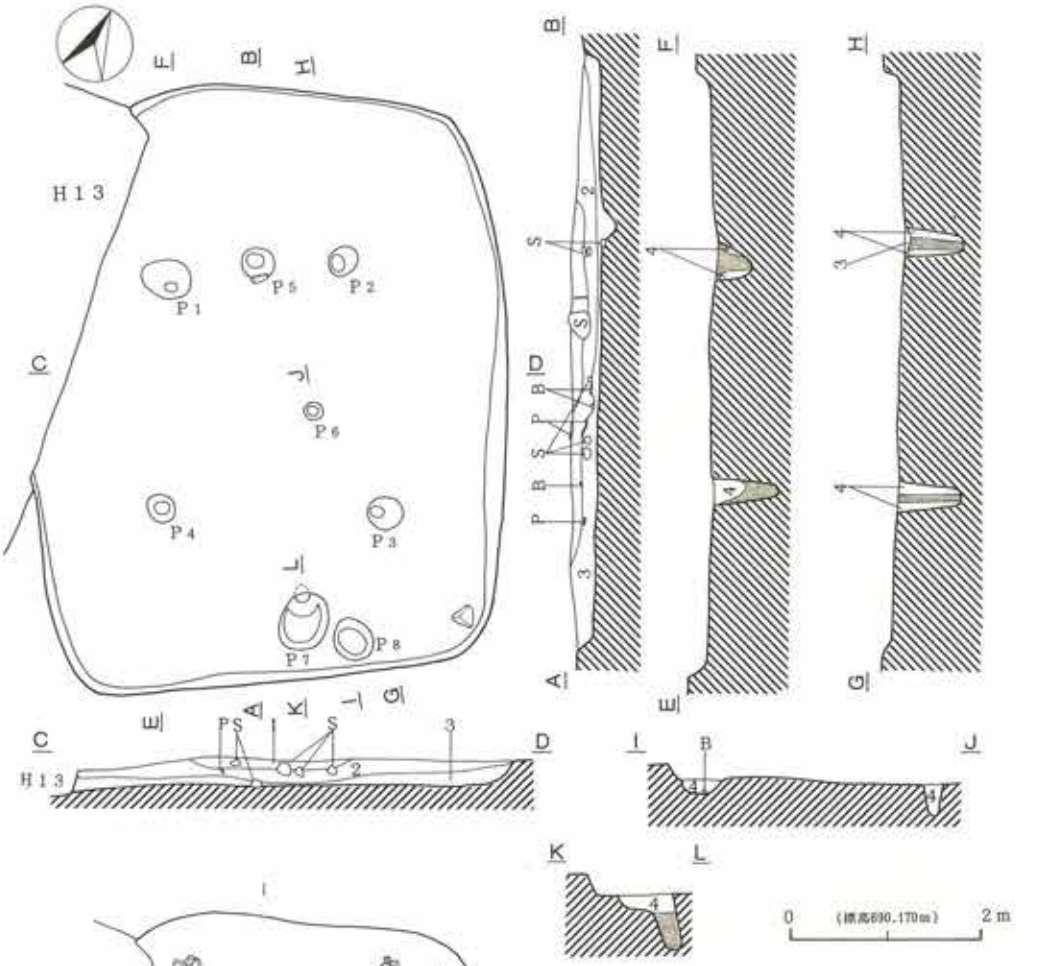
遺構－Ⅱあ8グリットで検出された。H44号住居址を切り、H13号住居址に切られる。H40号住居址との重複関係は不明である。隅丸長方形の平面プランを呈し、長軸長6.4m×短軸長4.78m×壁残高0.3mの規模を有する。N－35°－Wに長軸方位をとる。8基検出されたPitの内、P1～P4が主柱穴であり、全から直径8～18cmの柱が確認された。また、位置的に考えてP5は炉と思われるが、焼土は確認できなかった。本址は覆土の観察から焼失家屋であることが判明しているが、大量に出土した遺物と共に獣骨や礫が出土し、灰の堆積が床面に達している事から推



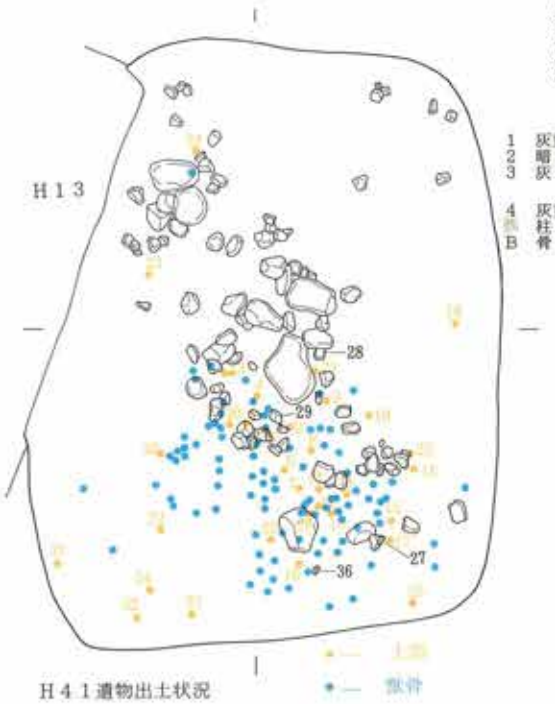
第30図　H40号住居址

測すると、住居の廃絶から時間を隔てずに上屋が焼去され、その際に何らかの祭祀が行われたと思われる。あるいは、祭祀を行うために住居が焼去されたと思われる。周溝は認められず、覆土は人為埋土である。

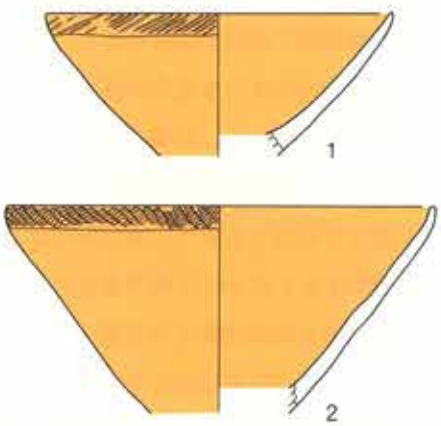
遺物－鉢（1～9）、高杯（10～15）、甑（16・17）、甕（18～38・40～44・46）、台付甕（45）、壺（47～62）、磨製石鏃（64～70）、打製石鏃（72）、石包丁（71）、敲石（73・75）、磨石（72・74・75）、凹石（78）が出土している。鉢は1・2のように口縁部に櫛歯状工具による斜位の条線や波状文が施され、内外面が赤彩されるものと、施文されずに内外面が赤彩される3～8のようなもの、更に、赤彩されずに頸部に櫛歯状工具による波状文を施す9が存在する。高杯は全てのもが脚内を除き赤彩される。口縁部は10のように端部で水平に開くようである。甑は単孔で内外面刷毛目調整後篦磨きを加えている。甕の施文は全てのものが櫛歯状工具により行われる。口縁部と体部に波状文を施し、頸部に簾状文を巡らす18～29・32のようなものや、口唇部に沿って1列の波状文を巡らし頸部に簾状文、体部に波状文を巡らす33のようなもの、33の体部波状文下に斜走文を加える31のようなもの、または、18～29・32の体部波状文下に斜走文を加える34・40・46のようなもの、更には口縁部を無文帯として頸部に簾状文を巡らしただけの37のようなものや、体部に波状文を施す35、斜走文を施す36・41・44、口縁部に斜走文を施し、頸部に簾状文を巡らし、体部には波状文を施文し、さらに口縁部と体部に円形貼付文を付加する42、口縁部無文で頸部に簾状文を巡らし、体部に斜走文を施文して、内面を赤彩する41、無文の43などが存在する。台付甕は45が1点出土している。台部のみの破片である。壺は受口口縁の口縁端部に波状文を巡らし、頸部に簾状文、その直下に数列の波状文を巡らす48～50、52のようなもの単純口縁で頸部に簾状文、その直下に数列の波状文を巡らす47のようなもの、あるいは、頸部に簾状文、波状文、横位条線などと共に鋸歯文を巡らすもの（56・57）、頸部文様帯の下端に分帯線を巡らし、波状文や簾状文、横位条線を施す53・54・59のようなもの、頸部に「T」字文を施す58、口縁端部に斜位条線を巡らす55などが存在する。赤彩はされるものが希であり、49は内面口縁部、57・62は外面体部に赤彩が認められる。磨製石鏃は小型の64から大型の68のようなもの、あるいは孔をもたない70のようなものが認められる。形態的に細分することも可能ではある。石包丁は破損品が1点出土している。打製石鏃は黒曜石製で有茎である。敲石・磨石は遺跡の南側を流れる湯川で採取したと思われる礫を利用したもの。凹石は便宜的にこのように呼称したが、住居内に固定して使用する臼であろう。本址からは、この他に多量の獣骨や鹿の角、淡水に棲息するものか海水に棲息するものかは不明であるが、巻き貝の貝殻や、赤色顔料の小さな固まりなどが出土している。遺物も住居址覆土の2層下より出土したものは、埋没時点での一括性は保証された遺物群である。本址の原稿執筆時点では獣骨の鑑定結果は出ていないので、動物の種類等の諸々の情報は不明である。詳細については付編を参照していただきたい。



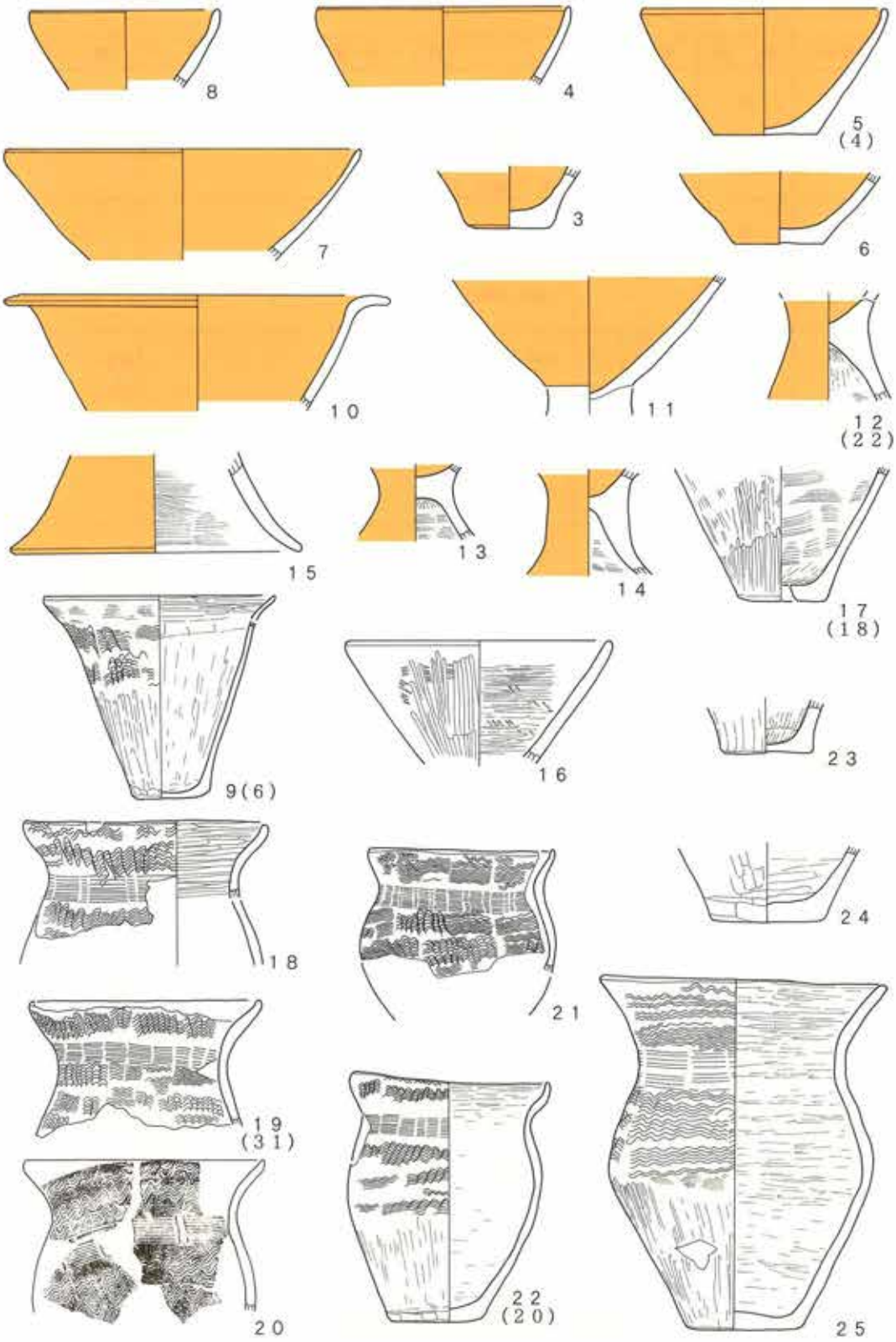
1　灰黄褐色土層（10YR4/2）。砂質土。
2　暗褐色土層（10YR3/4）。礫多含、炭化物少含。
3　灰白色土層（5YR8/2）。灰の堆積層。住居床面に密着。
　　本層と2層の間から獣骨（焼骨）が出土。
4　灰黄褐色土層（10YR5/2）。10YR6/6粒子、φ2cm以下石粒を含む。
P　柱　　痕。
B　骨



H41遺物出土状況



第31図　H41号住居址（1）



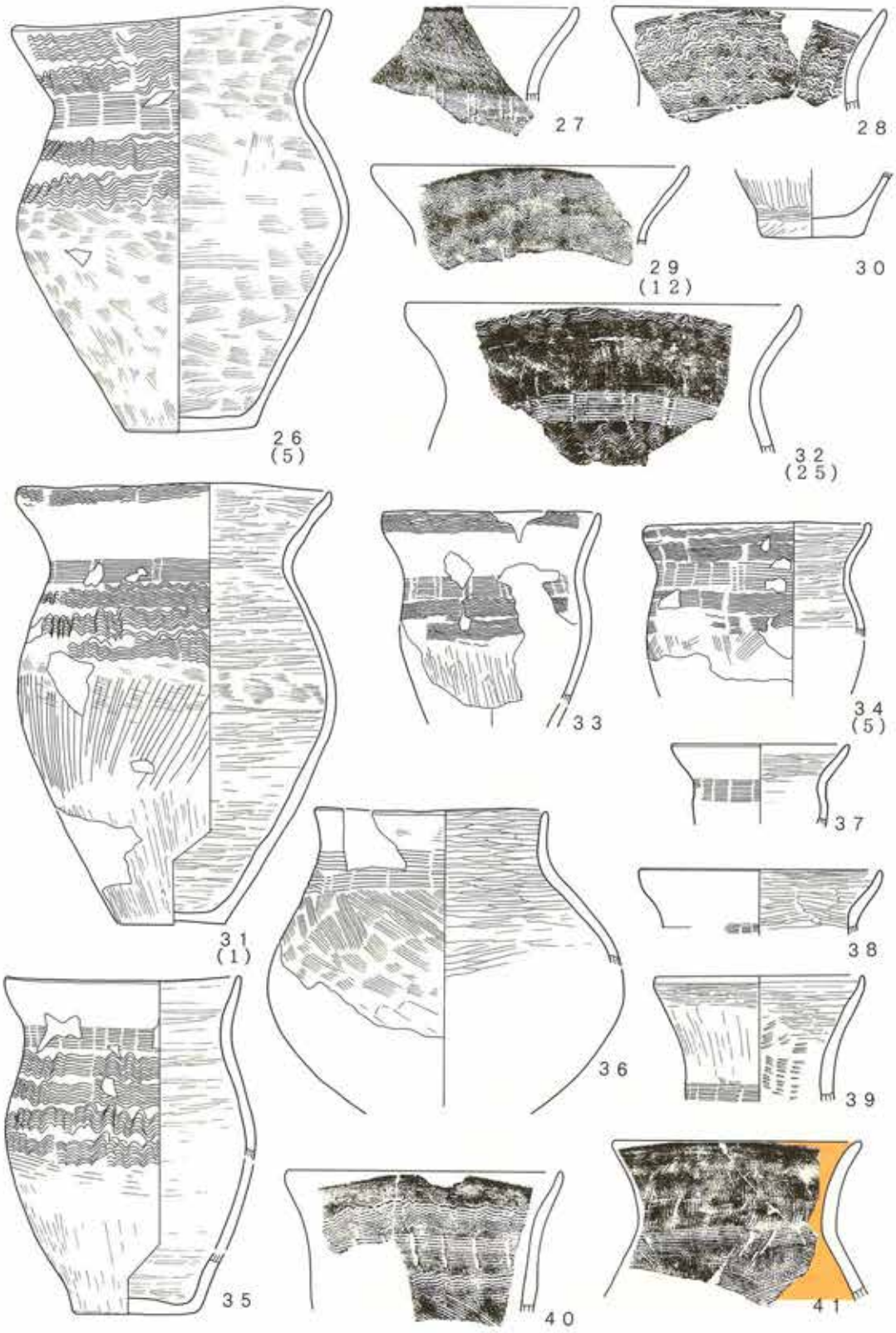
第32図　H41号住居址（2）

挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
−1	鉢	18.3 6.2 7.6	内−赤彩。 外−口縁部：櫛歯による斜位条線、赤彩。	
−2	鉢	22.1 7.2 10.1	内−赤彩。 外−口縁部：波状文、赤彩。	
−3	鉢	− 4.7 −	内外−赤彩。	
−4	鉢	16.0 − −	内外−赤彩。	
−5	鉢	15.4 6.6 8.0	内外−赤彩。	No.4
−6	鉢	− 5.6 −	内外−赤彩。	
−7	鉢	22.4 − −	内外−赤彩。	
−8	鉢	12.0 − −	内外−赤彩。	
−9	鉢	14.6 4.0 12.8	内−篦磨き。 外−頸部：波状文。	No.6
−10	高杯	24.3 − −	内外：赤彩。	
−11	高杯	− − −	内外：赤彩。	
−12	高杯	− − −	脚内刷毛目、他は赤彩。	No.22
−13	高杯	− − −	脚内刷毛目、他は赤彩。	
−14	高杯	− − −	脚内刷毛目、他は赤彩。	
−15	高杯	− 18.4 −	脚内刷毛目、他は赤彩。	
−16	甕	17.0 − −	内外−刷毛目〜篦磨き。	
−17	甕	− 5.4 −	内−刷毛目。 外−刷毛目〜篦磨き。	
−18	甕	15.2 − −	内−篦磨き。 外−口縁部・体部：櫛描波状文、頸部：簾状文。	
−19	甕	17.4 − −	内−篦磨き。 外−口縁部・体部：櫛描波状文、頸部：簾状文。	

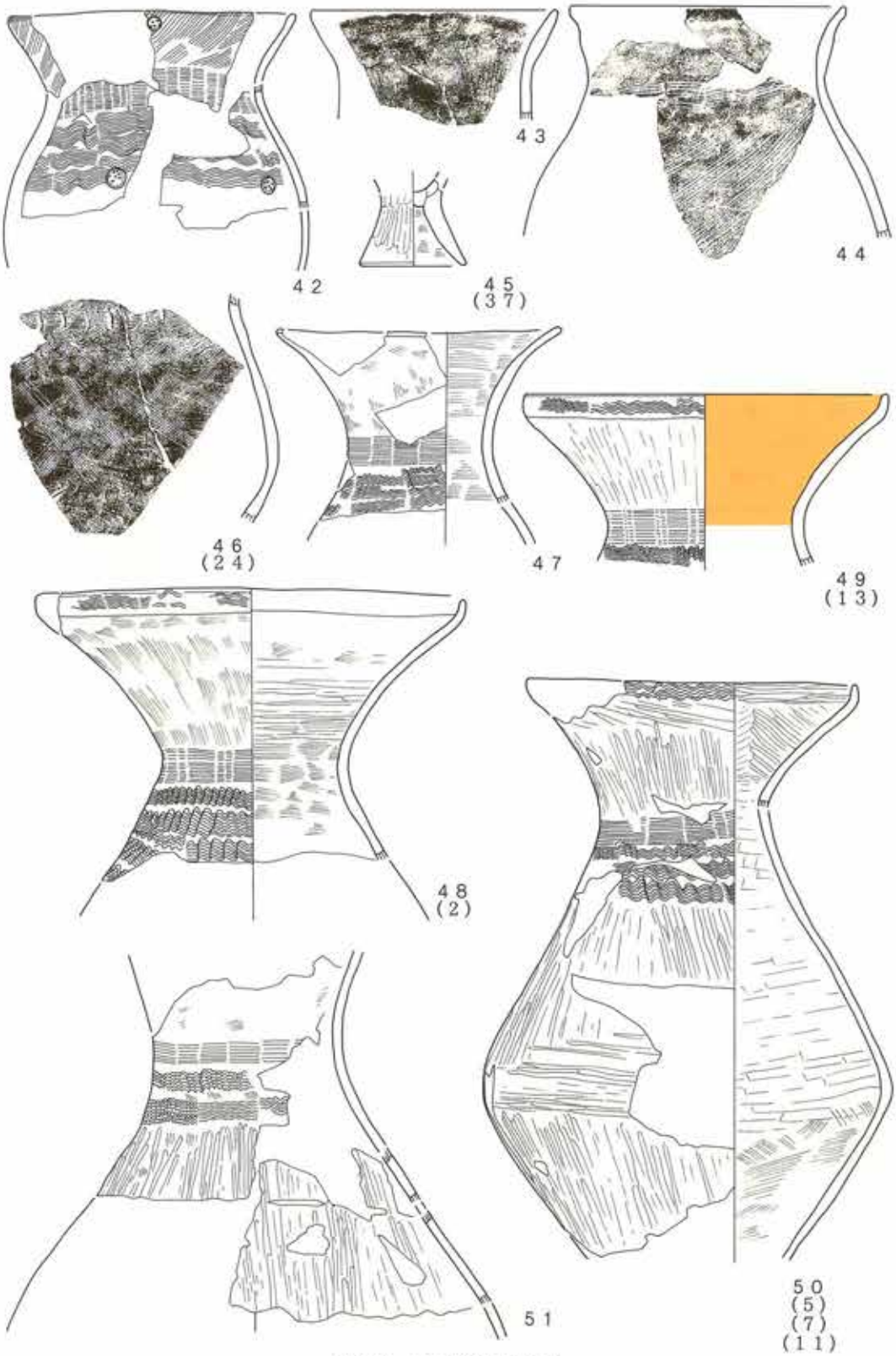
第28表　H41号住居址出土遺物観察表（1）

挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
－20	甕	14.6 － －	内－篦磨き。 外－口縁部・体部：櫛描波状文、頸部：簾状文。	
－21	甕	11.8 2.1 6.0	内－篦磨き。 外－口縁部・体部：櫛描波状文、頸部：簾状文。	
－22	甕	12.4 5.4 －	内－篦磨き。 外－口縁部・体部：櫛描波状文、頸部：簾状文。	No.20
－23	甕	－ 7.0 －	内外－篦磨き。	
－24	甕	－ 5.6 －	内外－篦磨き。	No.4
－25	甕	18.0 6.8 22.0	内－篦磨き。 外－口縁部・体部：櫛描波状文、頸部：簾状文。	
－26	甕	20.4 8.2 26.0	内－篦磨き。 外－口縁部・体部：櫛描波状文、頸部：簾状文。	No.5
－27	甕	－ － －	内－篦磨き。 外－口縁部・体部：櫛描波状文、頸部：簾状文。	
－28	甕	25.4 － －	内－篦磨き。 外－口縁部・体部：櫛描波状文、頸部：簾状文。	No.6
－29	甕	22.0 － －	内－篦磨き。 外－口縁部・体部：櫛描波状文、頸部：簾状文。	No.12
－30	甕	－ － 5.9	内外：篦磨き。	
－31	甕	20.0 6.6 28.0	内－篦磨き。 外－口縁端部・体部上半：櫛描波状文、頸部：簾状文。 体部下半：斜走文。	No.1
－32	甕	25.3 － －	内－篦磨き。 外－口縁端部・体部上半：櫛描波状文、頸部：簾状文。	No.25
－33	甕	13.6 8.2 －	内－篦磨き。 外－口縁端部・体部上半：櫛描波状文、頸部：簾状文。	
－34	甕	14.4 － －	内－篦磨き。 外－口縁部・体部上半：櫛描波状文、体部下半：斜走文、 頸部：簾状文。	No.5
－35	甕	15.0 7.8 21.0	内－篦磨き。 外－頸部：簾状文、体部：櫛描波状文。	
－36	甕	14.8 － －	内－篦磨き。 外－頸部：簾状文、体部：斜走文。	
－37	甕	11.3 － －	内－篦磨き。 外－頸部：簾状文。	
－38	甕	15.5 － －	内－篦磨き。 外－頸部：簾状文。	

第29表　H41号住居址出土遺物観察表（２）



第33図　H41号住居址（3）



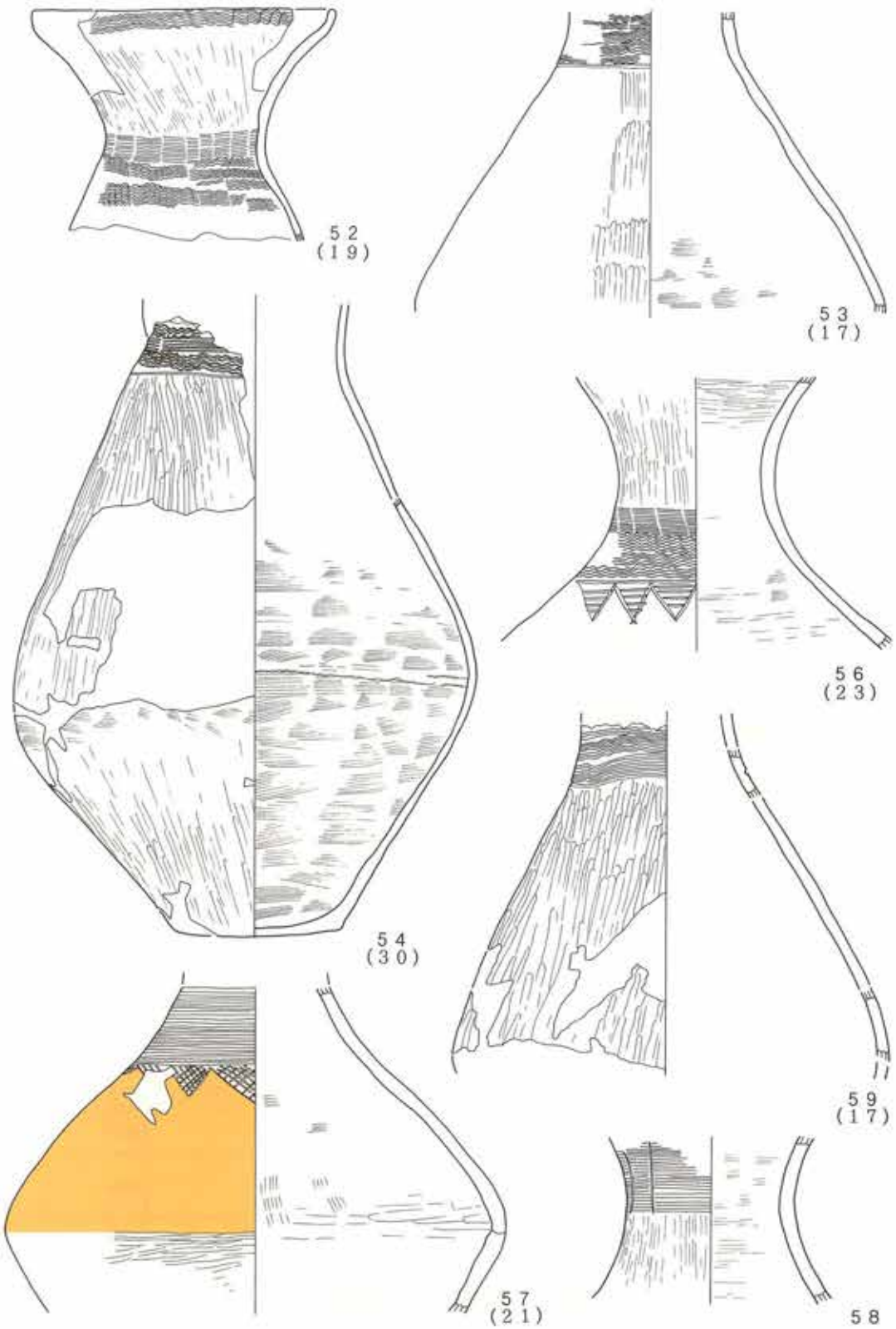
第34図　H41号住居址（4）

挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
−39	壺	13.0 − −	内−刷毛目〜篦磨き。 外−頸部：廉状文。	
−40	甕	17.2 − −	内−篦磨き。 外−口縁部・体部上半：櫛描波状文、頸部：廉状文。	
−41	甕	15.9 − −	内−篦磨き。 外−口縁部・体部：櫛描波状文、体部下半：斜走文頸部：廉状文。	
−42	甕	17.8 − −	内−篦磨き。 外−口縁部：斜走文＋円形貼付文、頸部：廉状文、体部：櫛描波状文＋円形貼付文。	
−43	甕	15.6 − −	内−篦磨き。 外−刷毛目。	
−44	甕	17.4 − −	内−篦磨き。 外−体部：斜走文、頸部：廉状文。	
−45	台付甕	6.7 − −	内−刷毛目。 外−篦磨き。	No.37
−46	甕	− − −	内−篦磨き。 外−口縁部・体部上半：櫛描波状文、体部下半：斜走文、頸部：廉状文。	No.24
−47	壺	18.0 − −	内−刷毛目。 外−頸部：櫛描波状文、廉状文。	
−48	壺	17.0 − −	内−刷毛目。 外−口縁端部：櫛描波状文、頸部：櫛描波状文、廉状文。	No.2
−49	壺	22.9 − −	内−刷毛目、赤彩。 外−頸部：櫛描波状文、廉状文。	No.13
−50	壺	28.0 12.0 18.1	内−刷毛目。 外−頸部：櫛描波状文、廉状文。	
−51	壺	− − −	内−刷毛目〜篦磨き。 外−頸部：櫛描波状文・廉状文。	
−52	壺	18.4 − −	内−刷毛目。 外−頸部：櫛描波状文、廉状文。	No.19
−53	壺	− − −	内−刷毛目。 外−頸部：櫛描波状文。	No.17
−54	壺	− 10.2 −	内−刷毛目。 外−頸部：櫛描波状文。	No.30
−55	壺	− − −	内−刷毛目。 外−口唇部：櫛歯状工具による刻目。	
−56	壺	− − −	内−刷毛目・篦磨き。 外−頸部：櫛描波状文＋廉状文＋鋸歯文。	No.23
−57	壺	− − −	内−刷毛目。 外−頸部：櫛歯状工具による平行条線＋鋸歯文。赤彩。	No.21

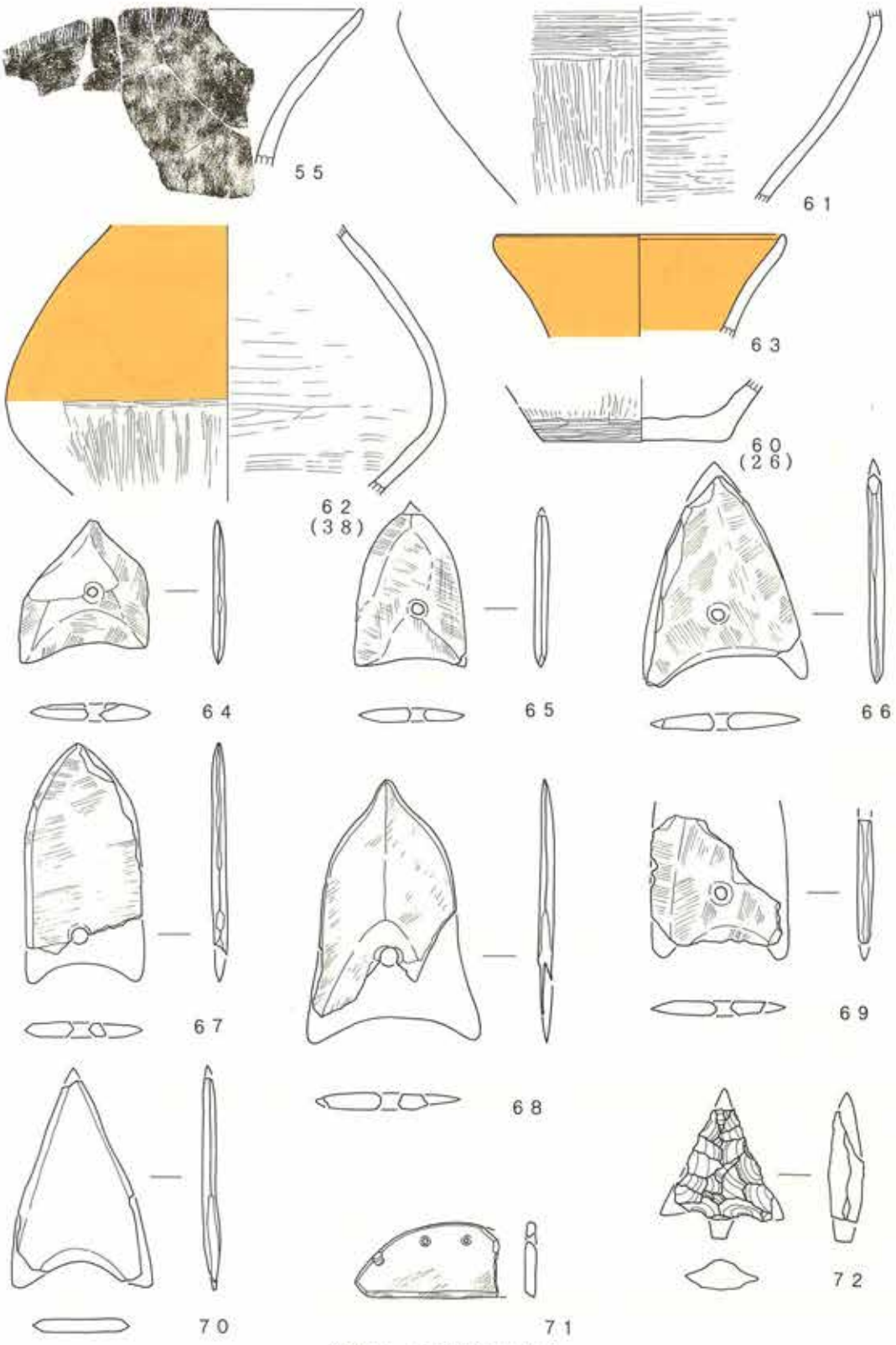
第30　H41号住居址出土遺物観察表（2）

挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
－58	壺	－ － －	内－刷毛目。 外－頸部：「T」字文。	
－59	壺	－ － －	内－ヘラナデ、篦磨き、刷毛目。 外－頸部：平行沈線間に櫛描波状文。	No.17
－60	壺	－ 11.2 －	内－ナデ。 外－篦磨き。	No.26
－61	壺	－ － －	内－刷毛目。 外－篦磨き。	
－62	壺	－ － －	内－刷毛目。 外－体部上半：赤彩、体部下半：篦磨き。	No.38
－63	壺	15.2 － －	内外－赤彩。	
－64	磨製石鏃	2.3 2.3 0.3		1.4 g
－65	磨製石鏃	2.4 1.7 0.2		1.3 g
－66	磨製石鏃	3.25 2.3 0.25		2.8 g
－67	磨製石鏃	3.35 1.8 0.25		1.7 g
－68	磨製石鏃	3.75 2.1 0.3		2.5 g
－69	磨製石鏃	2.0 1.9 0.25		1.2 g
－70	磨製石鏃	3.25 1.95 0.2		1.7 g
－71	石包丁	9.0 4.8 0.7		51.1 g
－72	打製石鏃	1.75 1.55 0.45		1.2 g
－73	敲石	－ 5.6 1.9		230 g No.27
－74	磨石	12.0 5.5 3.1		460 g No.28
－75	敲石・磨石	13.5 7.8 2.1		320 g
－76	磨石	10.2 4.2 2.5		200 g No.36

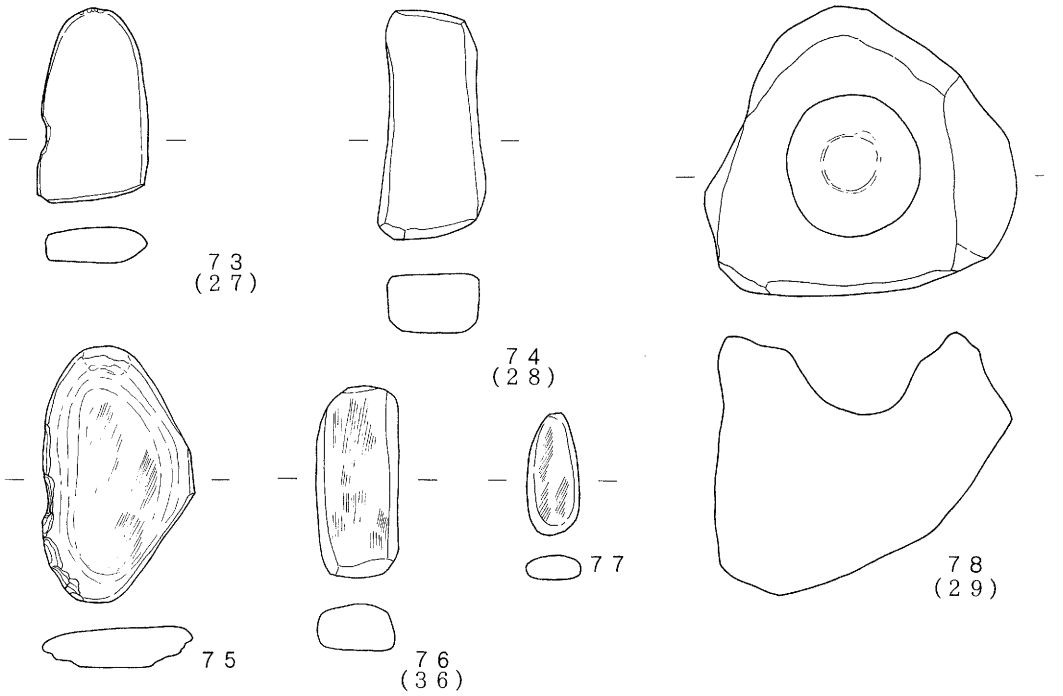
第31表　H41号住居址出土遺物観察表（3）



第35図　H41号住居址（5）



第36図　H41号住居址（6）



第37図　H41号住居址（７）

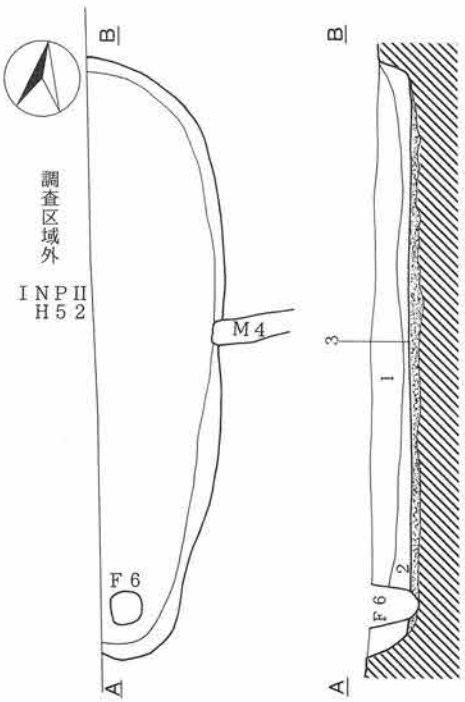
挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
−77	磨石	6.5 2.8 1.2		30.9ｇ
−78	凹石	16.0 15.3 13.0		2390ｇ №29

第32表　H41号住居址出土遺物観察表（４）

H42号住居址（第38・39図、図版二十・百二十二・百二十三）

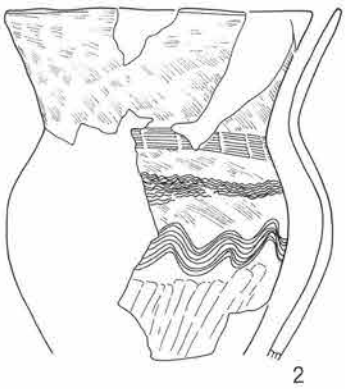
遺構－Ⅲく９グリットで検出された。Ｆ４号掘立柱建物址・Ｍ４号溝址に切られる。第２次調査におけるH52号住居址は本址と同一の住居址である。平面形状は隅丸長方形を呈し、壁残高0.45ｍを測る。第２次調査の際に、炉址と主柱穴と考えられるPit２基が検出されている。しかし今回の調査範囲からはPitは検出されなかった。覆土は自然堆積である。

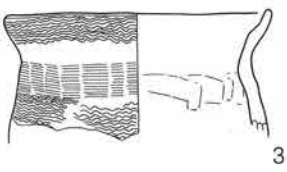
遺物－甕（１～10・19）、壺（11～17）、磨石（18）が出土している。１・２・10の甕は口縁部が無文帯で頸部に簾状文を巡らすもので、２は体部に櫛歯状工具による振り巾の小さな波状文と、大きな波状文を１列づつ巡らす、10は櫛歯状工具による波状文が施される。２のように振り巾の

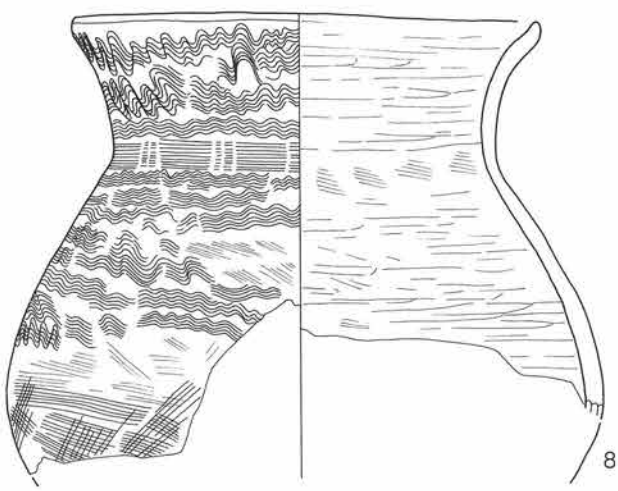


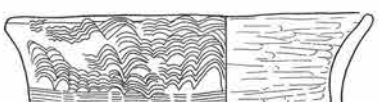
0　10cm
0　(標高690.470m)　2m

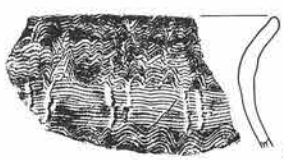
1　にぶい黄褐色土層（10YR4/3）。φ1cm大パミス含む。
2　暗褐色土層（10YR3/3）。炭化物多含。
3　住居掘方埋土。　床直上に10YR2/1の薄い堆積土層。10YR4/2と10YR8/6の混在土層。φ1cm以下石粒多含。





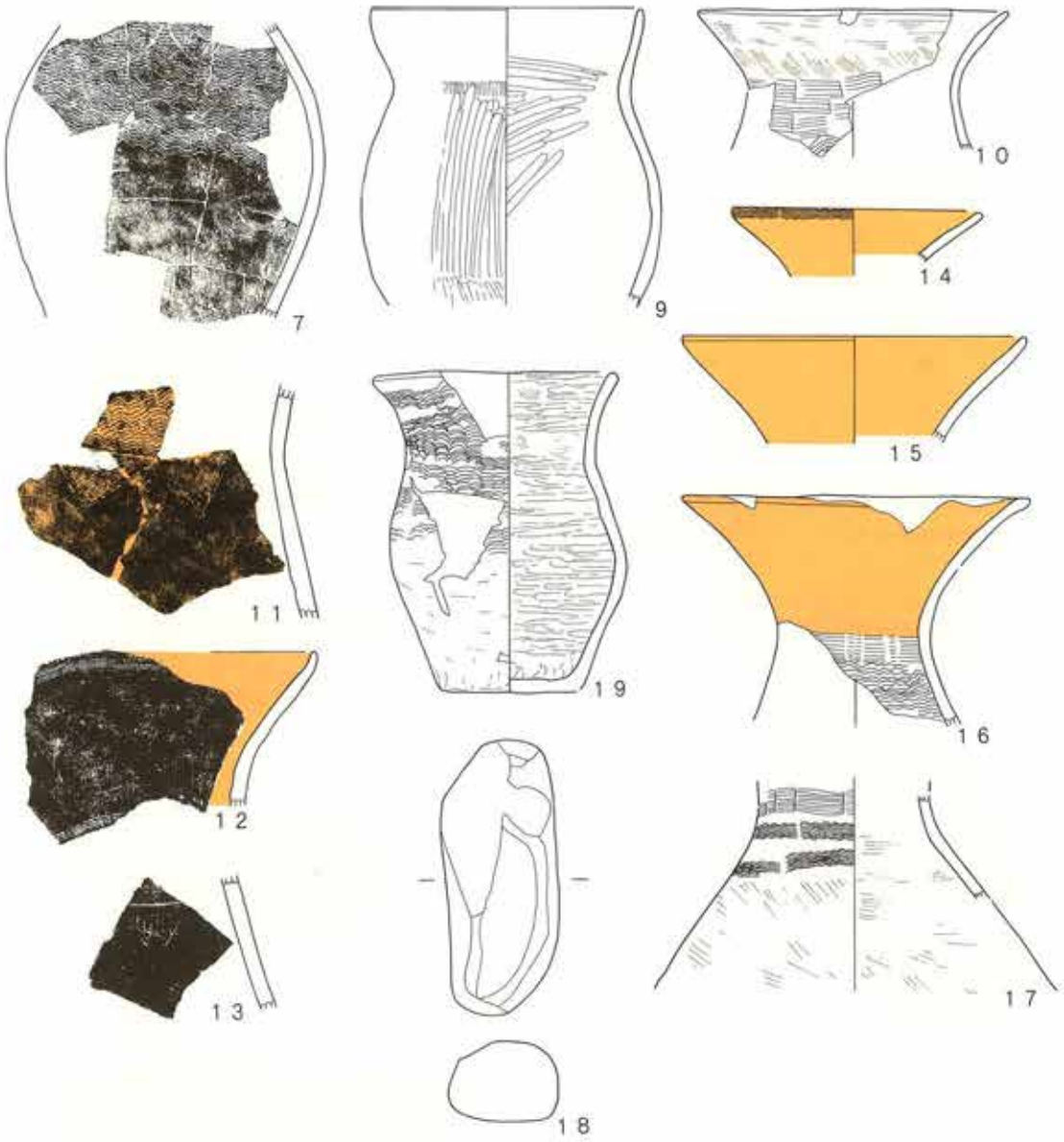






第38図　H42号住居址（1）

異なる波状文を体部に施文するものとしては、6が認められる。3は口縁端部に1列の櫛歯状工具による波状文を巡らし、頸部に廉状文、体部に波状文を施している。4・5は口縁部と体部に櫛歯状工具による波状文を施し、頸部に廉状文を巡らす。8は4・5の施文に体部下半の斜走文が加えられるもの。7は体部片で櫛歯状工具による波状文が施されている。9は内外面に篦磨きが施される無文の土器である。混入品であろう。19は口縁部～体部上半に櫛歯状工具による波状文が施されている。壺は13・17が無彩の他は赤彩される。12・14は口縁端部に櫛歯状工具による



第39図　H42号住居址（2）

挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
－1	甕	－ － －	内－篦磨き。 外－頸部：簾状文。	
－2	甕	8.9 － －	内－篦磨き。 外－頸部：簾状文、体部：櫛描波状文。	
－3	甕	7.1 － －	内－篦削り。 外－口縁端部：１列櫛描波状文、頸部：簾状文、体部：櫛描波状文。	
－4	甕	9.8 － －	内－篦磨き。 外－口縁部：櫛描波状文、頸部：簾状文。	
－5	甕	－ － －	内－篦磨き。 外－頸部：簾状文。	
－6	甕	－ － －	内－篦磨き。 外－頸部簾状文、体部：櫛描波状文。	
－7	甕	－ － －	内－篦磨き。 外－体部：波状文。	
－8	甕	12.4 － －	内－篦磨き。 外－口縁部・体部上半：櫛描波状文、頸部：簾状文、体部下半：斜走文。	
－9	甕	15.1 － －	内外－篦磨き。	
－10	甕	8.5 － －	内－刷毛目～篦磨き。 外－頸部：簾状文、体部：櫛描波状文。	
－11	壺	－ － －	内－赤彩。 外－赤彩、頸部：櫛描波状文・鋸歯文。	
－12	壺	－ － －	内－赤彩。 外－口縁端部：１列櫛描波状文、頸部：簾状文。	
－13	壺	－ － －	内－刷毛目。 外－頸部：櫛描波状文・鋸歯文。	
－14	壺	13.2 － －	内－赤彩。 外－赤彩、口縁端部：１列の櫛描波状文。	
－15	壺	19.0 － －	内外－赤彩。	
－16	壺	9.6 － －	内－赤彩。 外－赤彩、頸部：櫛描波状文・簾状文。	
－17	壺	－ － －	内－刷毛目。 外－頸部：櫛描波状文・簾状文。	
－18	磨石	－ 6.1 4.4		675ｇ
－19	甕	13.2 7.6 17.6	内－篦磨き。 外－櫛描波状文。	

第33表　H42号住居址出土遺物観察表

波状文が施され、12は頸部に簾状文が巡る。16・17は頸部に簾状文と櫛歯状工具による波状文が施される。11・13は頸部に波状文と鋸歯文が施文されている。

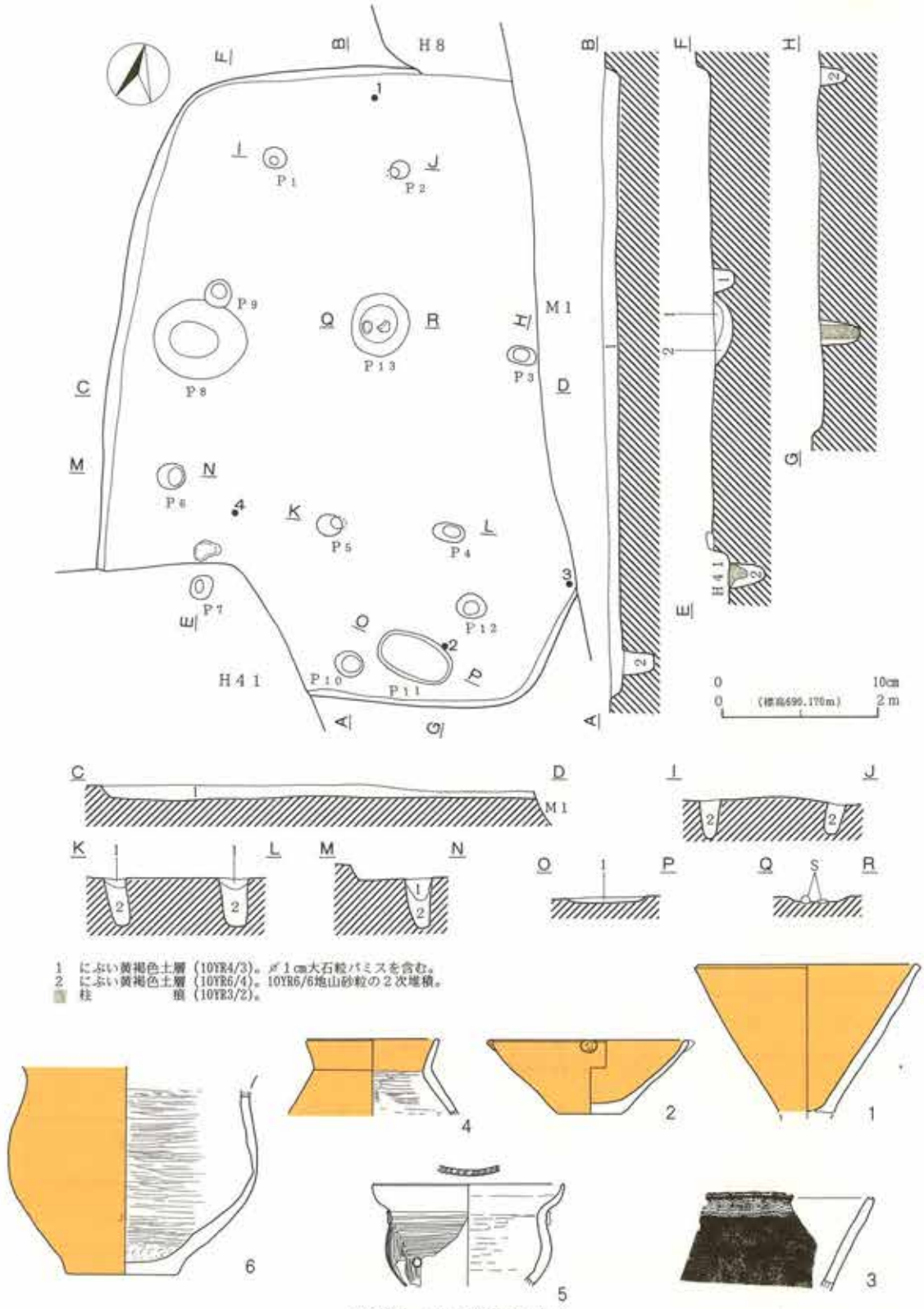
H44号住居址（第40～42図、図版二十一・百二十五）

遺構－Ⅰう7グリットで検出された。H8号・H41号・M1号溝址に切られる。隅丸長方形の平面プランを呈し、長軸長8.2m、壁残高0.2mの規模を有する。12基検出されたPitの内主柱穴はP1・P7・P12の3基であり、P11・P13を除く他のPitは補助的な柱穴であろう。確認された柱はP7で直径20cm、P12で直径17cmであった。炉址は焼土は確認されなかったものの、P13と思われる。位置的には住居の中央やや北に構築されており、地焼炉である。内部に礫が2ケ置かれていた。覆土は自然堆積で、周溝は存在しない。

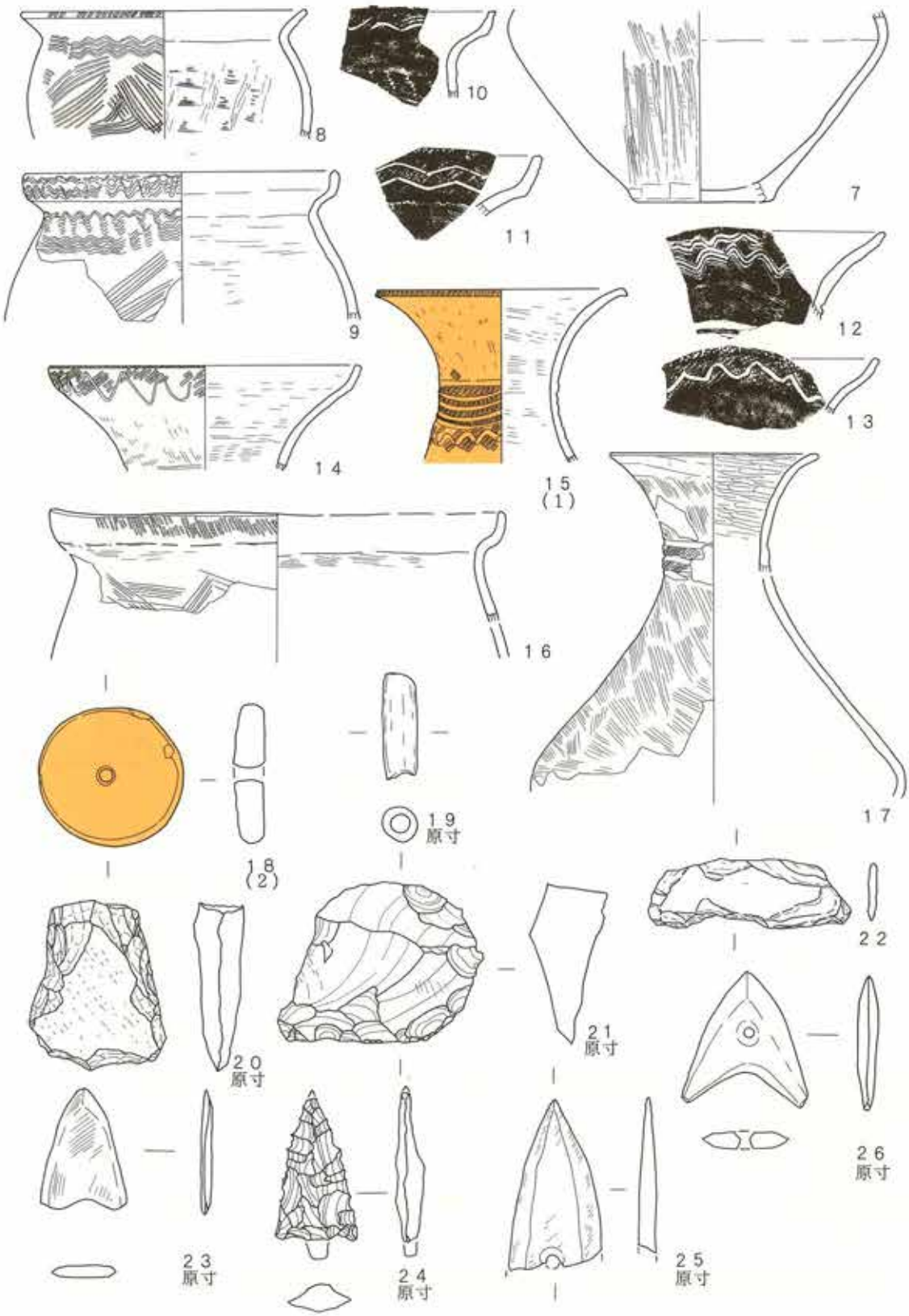
遺物－高杯（1）、鉢（2～4・6）、台付甕（5）、甕（8～10・16）、壺（11～15・17）、紡錘車（18）、管玉（19）、打製石斧（20）、スクレイパー（21）、横刃型石器（22）、磨製石鏃（23・25・26）、磨製石鏃未製品？（27）、打製石鏃（24）、剣型石製品（28）、磨製石斧（29）、磨石（30）が出土している。高杯1は赤彩され、口縁部が直線的に開く坏身の深いもの、鉢は2のような浅いものと、4・6のような甕型を呈するものが存在し、3を除き赤彩される、3は口唇部に沈線を巡らし、口縁端部に櫛歯状工具による波状文が巡る。台付甕5は受口口縁で口唇部に縄文を施し、頸部下には円形貼付文を伴う連続「コ」字文が施文されている。甕には受口口縁の9・10・16と単純口縁の8が存在する。8は口唇部に縄文を施し、頸部に櫛歯状工具による波状文を1列巡らし、体部には斜走文が施文される。9は口縁部と頸部に櫛歯状工具による波状文を巡らし、体部には斜走文を施している。10は口唇部～口縁部に縄文を施し、口縁部には篦状工具による波状文を付加し、頸部に簾状文を巡らす。16は口縁部に縄文を施し、頸部下には斜走文が施文される。壺も受口口縁の11・13・14と単純口縁の12・15・17が存在する。11・13・14は口唇部～口縁部に縄文を施し、口縁部に篦状工具による波状文を付加する。12は口縁端部に櫛歯状工具による波状文を2列巡らし、頸部には篦状工具による平行沈線が巡るようである。15は口唇部に縄文を施し、頸部には篦状工具による平行沈線と弧線文を巡らし最下段に1条の波状文を巡らし、文様帯全体に縄文を施している。17は器面に刷毛目をのこし、頸部に篦状工具による3本の平行沈線を巡らし、その間に縄文を施している。7は底部の破片で、刷毛目調整の後篦磨きが加えられている。紡錘車は焼き物で、土器片を再利用したものではなく、紡錘車として焼成されたものである。管玉も土製である。22は石包丁のような機能の石器であろう。27は長辺の両サイドに刃部が形成されている、磨製石鏃の未製品としたのは、石材が同一であることと、刃部の作り方が似ているからである。28の剣型石製品は先端部を欠損するものの貴重な出土例である。磨製石斧29は蛤刃の大型品である。

挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
－1	高杯	14.6 － －	内外－赤彩。	
－2	鉢	12.6 4.0 4.7	内－赤彩。 外－赤彩。口縁部に突起。	
－3	鉢	－ － －	内－篦削り。 外－口唇部：1本の沈線、口縁端部：1列の櫛描波状文。	
－4	鉢	8.6 － －	内－口縁部赤彩、他は篦磨き。 外－赤彩。	
－5	台付甕	12.4 － －	内－篦磨き。 外－口唇部：縄文、頸部～体部：連続「コ」字文＋円形貼付文。	
－6	鉢	－ 7.1 －	内－篦磨き。 外－赤彩。	
－7	壺	－ 8.8 －	内－ナデ。 外－刷毛目～篦磨き。	
－8	甕	18.6 － －	内－刷毛目～篦磨き。 外－口唇部：縄文、頸部：波状文、体部：斜走文。	
－9	甕	20.8 － －	内－篦磨き。 外－口縁部～頸部：櫛描波状文、体部：斜走文。	
－10	甕	－ － －	内－篦磨き。 外－口縁部：波状文、頸部：簾状文。	
－11	壺	－ － －	内－ナデ。 外－口唇部：縄文、口縁部縄文＋篦描波状文。	
－12	壺	－ － －	内－ナデ。 外－口縁：篦描波状文、頸部：簾状文。	
－13	壺	－ － －	内－ナデ。 外－口唇部：縄文、口縁部：縄文＋篦描波状文。	
－14	壺	20.6 － －	内－刷毛目～篦磨き。 外－口唇部：縄文、口縁部：縄文＋篦描波状文。	
－15	壺	16.5 － －	内－刷毛目。 外－口唇部：縄文、頸部：平行沈線＋弧線文＋波状文＋縄文。	
－16	甕	29.0 － －	内－刷毛目。 外－口縁部：縄文、頸部下：斜走文。	
－17	壺	13.2 － －	内－刷毛目、篦磨き。 外－頸部：平行沈線間に縄文。刷毛目。	
－18	紡錘車	4.7 4.6 1.0	赤彩。	22.5ｇ №2
－19	管玉	1.7 0.5 0.5	土製。	0.6ｇ

第34表　H44号住居址出土遺物観察表（1）



第40図　H44号住居址（1）



第41図　H44号住居址（2）

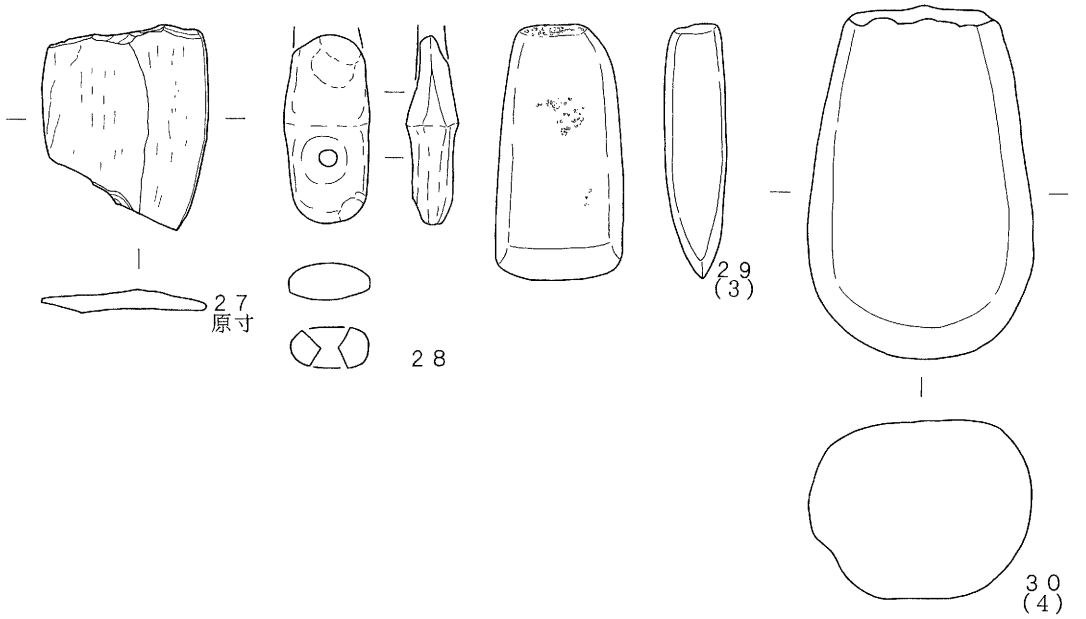
挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
−20	打製石斧	11.2 8.7 3.3		330 g
−21	スクレイパー	2.8 2.6 2.2		10.1 g
−22	横刃型石器	13.2 4.5 0.5		60.1 g
−23	磨製石鏃	2.0 1.4 0.2		0.5 g
−24	打製石鏃	− 1.4 0.4		1.2 g
−25	磨製石鏃	− 1.5 0.3		1.2 g
−26	磨製石鏃	2.2 2.1 0.3		1.1 g
−27	磨製石鏃	− − 0.5		18.0 g
−28	剝型石製品	10.0 4.6 2.1		180.1 g
−29	磨製石斧	13.5 6.6 3.3		590.0 g No.3
−30	磨石	9.4 6.0 4.7		490.0 g No.4

第35表　H44号住居址出土遺物観察表（1）

H60号住居址（第43・44図、図版二十七・百三十五・百三十六）

遺構－Ⅲう6グリットで検出された。H54号住居址、F7号・F8号掘立柱建物址に切られ、H61号住居址を切る。隅丸長方形の平面プランを呈し、長軸長8.5m×短軸長6.6m×壁残高0.35mの規模を有する。N－30°－Wに長軸方位をとる。Pitは9基検出され、この内のP1～P6の6基が主柱穴を構成するものと思われる。柱は確認されなかった。炉址はP1とP6の中間とP2とP5の中間付近に検出された。双方共に地床炉である。規模的には北側の炉が0.67m×0.5m×0.1m、南側のものが短径0.5m、深度0.07mである。掘方から検出されたP7・P8の性格は不明である。覆土は自然堆積で、周溝は存在しなかった。

遺物－甕（1～3）、高杯（4）、甑（5）、壺（6～10）が存在する。1・2は口縁部と体部に櫛歯状工具による波状文が施され、頸部には簾状文が巡る。3は口縁部に櫛描き斜走文を施し、頸部に簾状文を巡らす、体部には波状文が施される。4の高杯は脚部の破片である。外面赤彩、内面には刷毛目調整が施される。5の甑は単孔で、内外面に篦磨き調整が施される。壺は赤彩さ



第42図　H44号住居址（3）

れるもの（7・8・10）とされないもの（6・9）が存在する。文様は頸部文様帯に集中しており、他の部位には認められない。7は櫛波状工具による斜走文が施されるもの、8は波状文と横位条線、9は「T」字文が櫛歯状工具により施文されている。10は篦状工具による斜位沈線が3本の平行沈線間に充填される。

H61号住居址（第45・46図、図版二十七・百三十六・百三十七）

遺構－Ⅲお7グリットで検出された。H43号・H60号住居址、F7号掘立柱建物址に切られる。隅丸長方形の平面プランを呈し、短軸長5.8mを測り、長軸方位N－5°－Wにとる。住居址プランは周溝により確認されたもので、壁は耕作等により削平され存在しなかった。7基検出されたPitの内P1・P4～P6の4基は主柱穴を構成するものと思われる。炉址はH43号住居址により消滅したものと思われる。西壁下の一部分を除き周溝が巡らされている。床面上に炭化材の散乱が一部確認された。

遺物－鉢（1）、甕（2～7・10）、壺（8）、台付甕（9）、磨製石斧（11）が出土している。鉢は内画面が赤彩されるもの。甕は全てのものが口唇部に縄文が施されている。2・4は口縁部を無文帯として、櫛歯状工具により、頸部に簾状文、体部に波状文が施される。3は頸部に1列

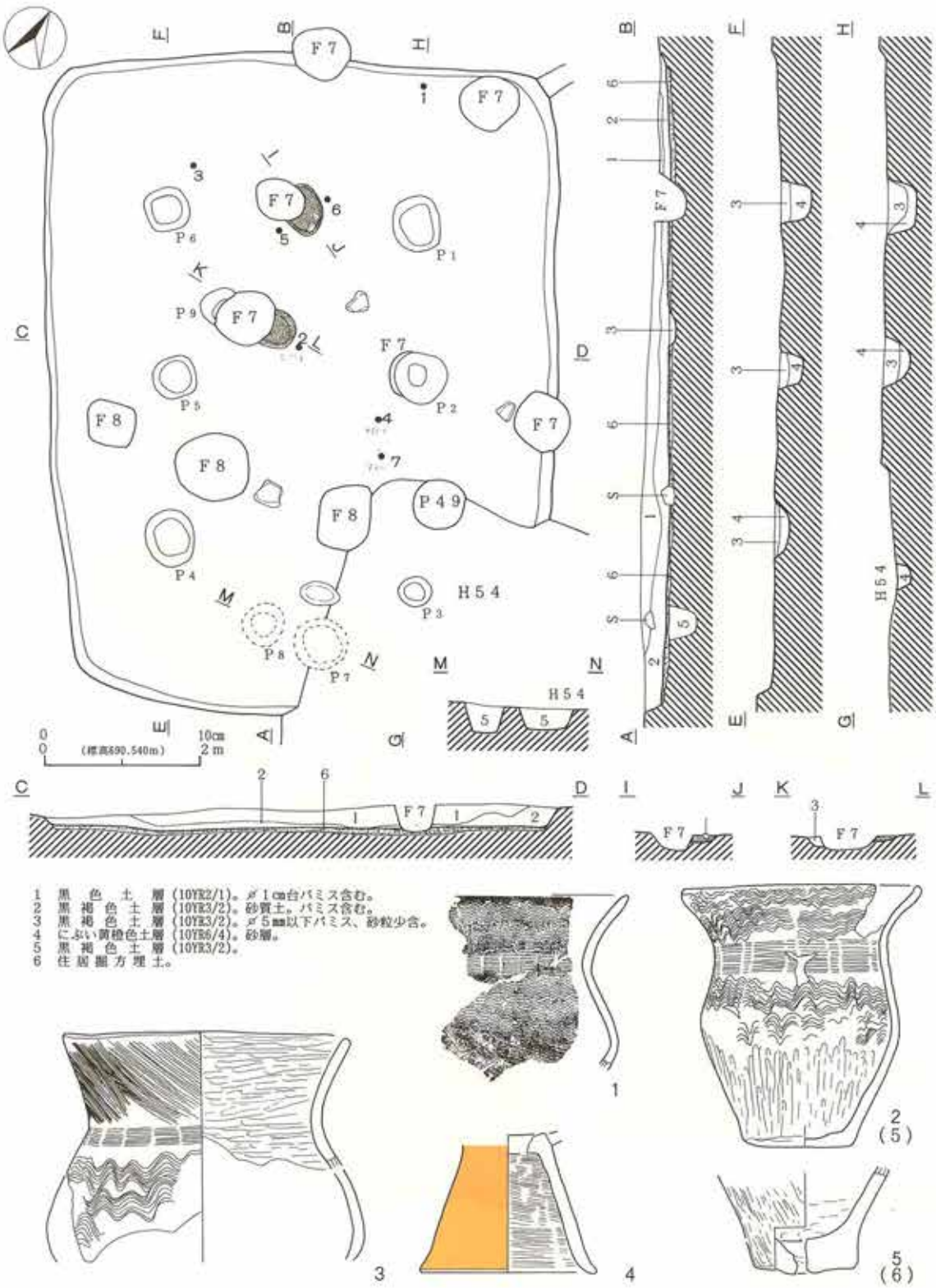
挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
−1	甕	− − −	内−篦磨き。 外−口縁部・体部：櫛描波状文、頸部：簾状文。	
−2	甕	15.4 7.0 17.0	内−篦磨き。 外−口縁部・体部：櫛描波状文、頸部：簾状文。	
−3	甕	18.4 − −	内−篦削り。 外−口縁部：斜走文、頸部：簾状文、体部：櫛描波状文。	
−4	高杯	− 11.5 −	内−刷毛目。 外−赤彩。	
−5	甑	− 6.3 −	内外−篦磨き。	単孔。
−6	壺	− − −	内−刷毛目。 外−篦磨き。	
−7	壺	− − −	内−ナデ。 外−赤彩。頸部：斜走文。	
−8	壺	− − −	内−赤彩。 外−赤彩。頸部：櫛描波状文＋横位条線。	
−9	壺	20.8 − −	内−刷毛目、ナデ、篦磨き。 外−頸部：「T」字文。	
−10	壺	28.6 − −	内−口縁部：赤彩、他は刷毛目。 外−頸部：篦描平行沈線と斜位沈線。	

第36表　H60号住居址出土遺物観察表

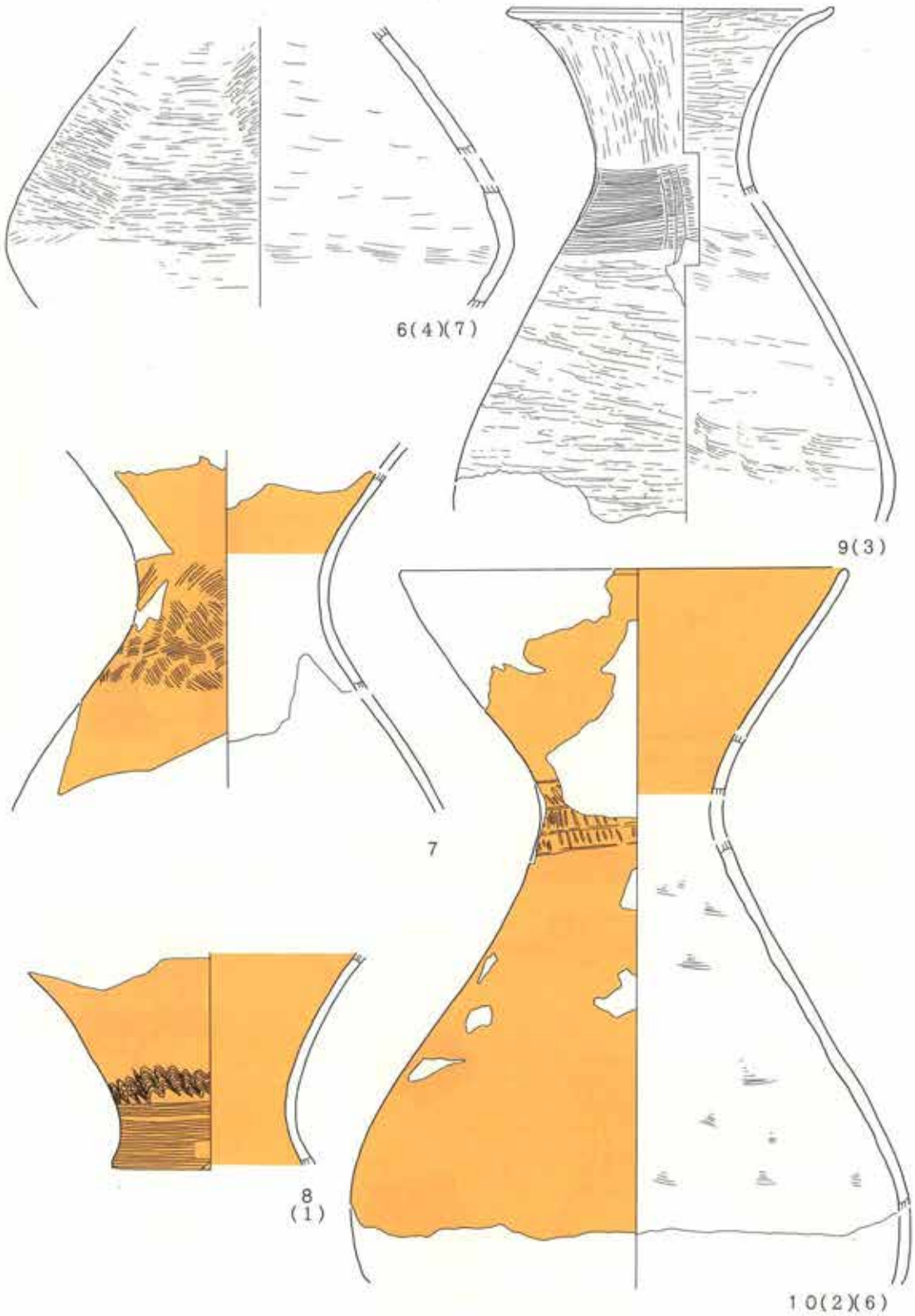
の櫛描波状文が施される。５～７は口縁部に縄文を施し、７は更に篦状工具による波状文が２条巡らされる。６・７は頸部に簾状文が施され、３点共に体部には斜走文が施文される。10は頸部に櫛歯状工具による横位の条線を巡らし、体部には斜走文が施される。壺は無彩で口唇部と、頸部に巡らされる３本の平行沈線間に縄文が施される。台坏甕は口唇部と口縁部に縄文を施し、口縁部には更に、篦状工具による２本の波状文を巡らす。体部には連続「コ」字文と円形貼付文が施されている。

H64号住居址（第47図、図版二十八・百三十九・百四十）

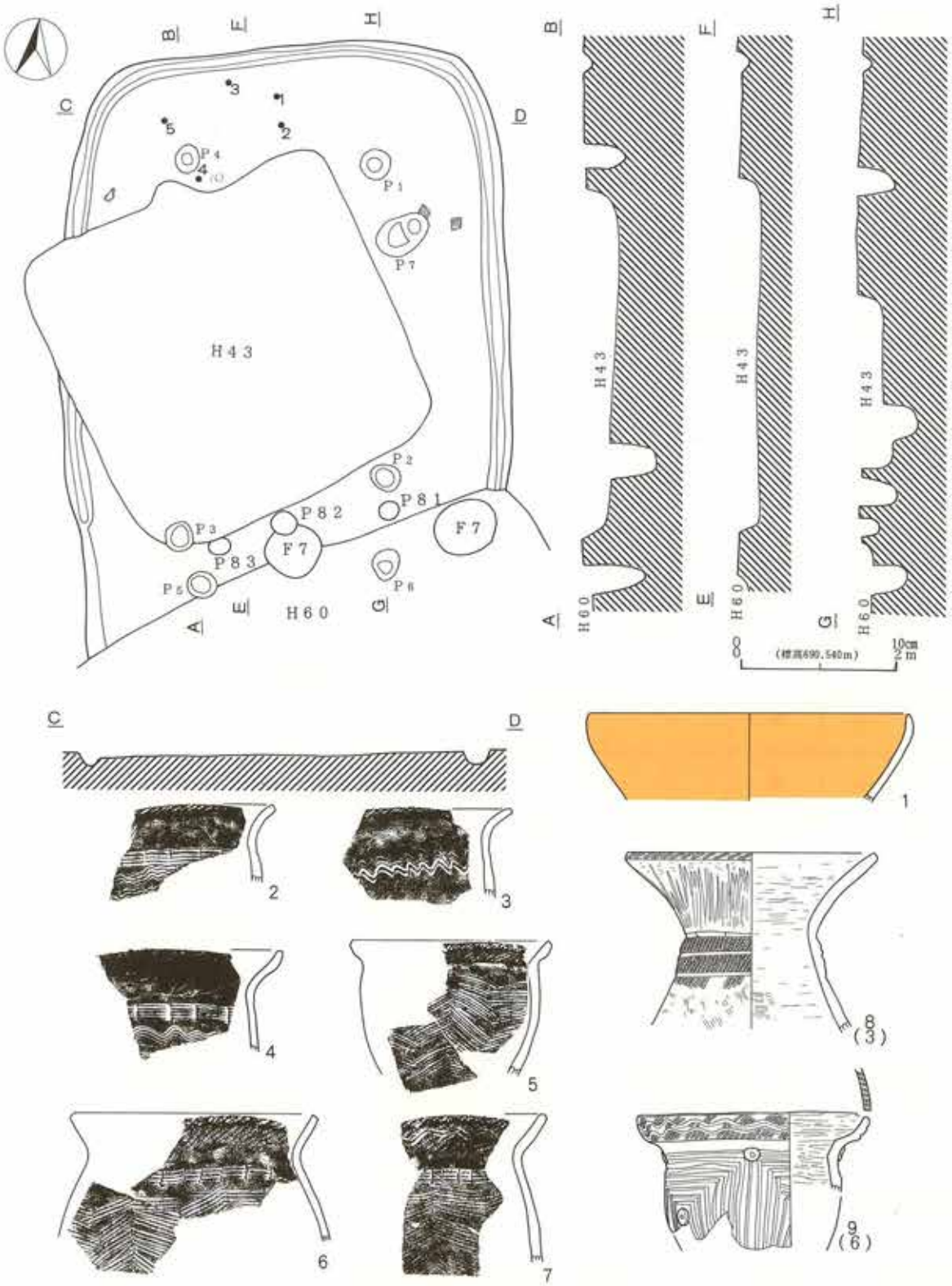
遺構－Ⅴあ４グリットで検出された。H47号住居址に切られ、H82号住居址を切る。隅丸長方形の平面プランを呈し、長軸長5.2ｍ×短軸長4.16ｍ×壁残高0.1ｍの規模を有する。東南隅を含む住居の約半分が調査区域外に延びている。長軸方位をＮ－40°－Ｗにとる。炉址は住居の中央南よりに構築されており、直径0.6ｍ×深度0.15ｍの規模を有する地床炉である。３基検出されたPitは全て主柱穴である。柱は確認されなかった。覆土は自然堆積で周溝は存在しない。



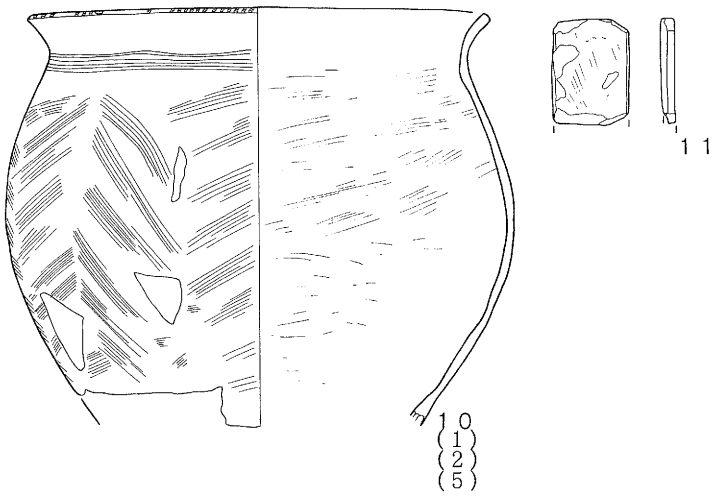
第43図　H60号住居址（1）



第44図　H60号住居址（2）



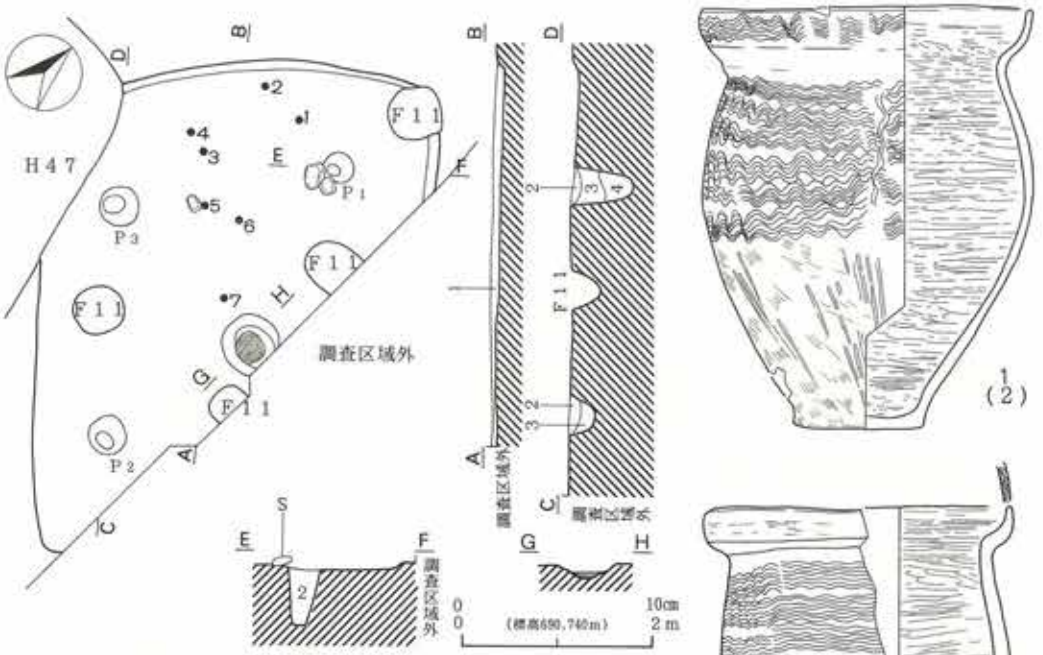
第45図　H61号住居址（1）



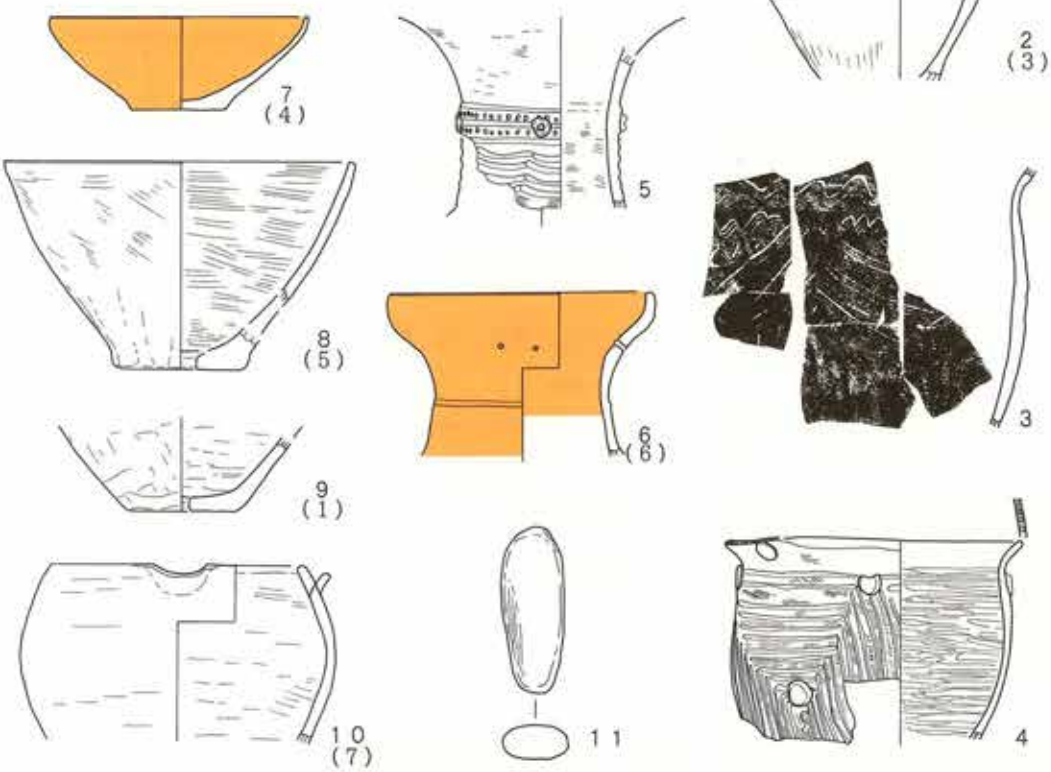
第46図　H61号住居址（2）

挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
−1	鉢	21.3 − −	内外−赤彩。	
−2	甕	− − −	内−篦磨き。 外−口唇部：縄文、頸部：簾状文、体部櫛描波状文。	
−3	甕	− − −	内−篦削り。 外−口唇部：縄文、頸部：波状文。	
−4	甕	− − −	内−篦磨き。 外−口唇部：縄文、頸部：簾状文、体部櫛描波状文。	
−5	甕	13.2 − −	内−篦磨き。 外−口唇〜口縁部：縄文、体部：斜走文。	
−6	甕	16.2 − −	内−篦磨き。 外−口唇〜口縁部：縄文、頸部：簾状文、体部：斜走文。	
−7	甕	− − −	内−篦磨き。 外−口唇部：縄文、口縁部：縄文＋篦描波状文、頸部：簾状文、体部：斜走文。	
−8	壺	16.4 − −	内−刷毛目、篦磨き。 外−口唇部：縄文、頸部：３本の篦描平行沈線間に縄文。	
−9	台付甕	15.0 − −	内−篦磨き。 外−口唇部：縄文、口縁部：縄文＋２本の篦描き波状文、体部：連続「コ」字文＋円形貼付文。	
−10	甕	24.4 − −	内−刷毛目、篦磨き。 外−口唇部：縄文、頸部：櫛描平行条線、体部：斜走文。	
−11	磨製石斧	5.6 4.1 0.8		42.4ｇ

第37表　H61号住居址出土遺物観察表



1　にぶい黄褐色土層（10YR4/3）。10YR6/6粒子少含。
　　φ5㎜以下石粒、パミスを含む。
2　灰黄褐色土層（10YR4/2）。φ1㎝大石粒を含む。
3　にぶい黄褐色土層（10YR6/4）。10YR6/6粒子多含。
4　灰黄褐色土層（10YR5/2）。砂質土。

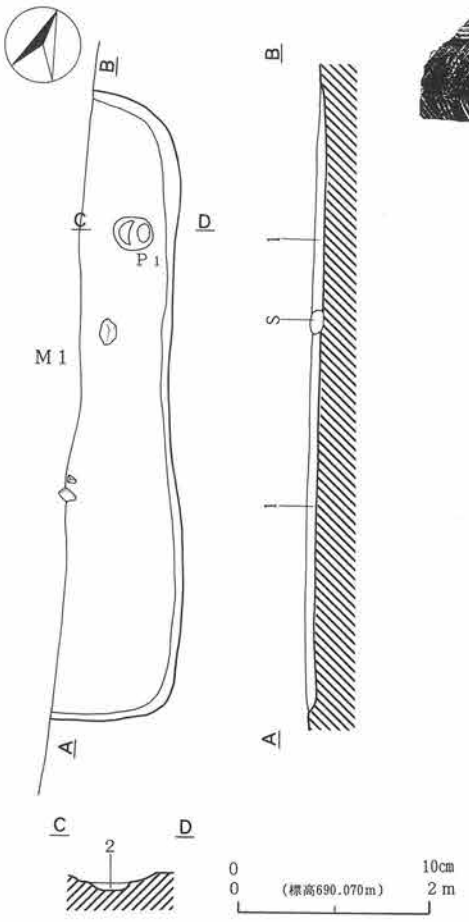


第47図　H64号住居址

遺物－甕（1～4）、鉢（7）、壺（5・6）、甑（8・9）、片口（10）、砥石（11）が出土している。甕1は受口口縁で、口縁部には櫛歯状工具による波状文が巡る。体部は縦位の波状文が器面を4分割し、横位の波状文が施文される。2も受口口縁で口唇部に縄文を施し、体部に櫛歯状工具による波状文が施文されている。3は頸部下の破片である。櫛歯状工具により体部上半に波状文、下半には斜走文が施されている。4は口唇部にじょうもんを施し、体部には篦状工具による連続「コ」字文が施され、全体に円形貼付文が付加される。鉢7は内外面が赤彩される。壺5は頸部片で、篦状工具により平行沈線、刺突列、弧文が描かれ、円形貼付文が付加される。6は内面口縁部と外面が赤彩される。頸部に段を有し、口縁部には小さな円孔が2ヶ穿孔されている。甑は8・9共に単孔で鉢型を呈している。片口は内湾する口縁部に1カ所片口が造られている。11の砥石は自然礫を使用している。

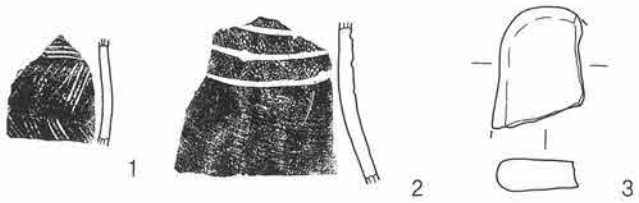
挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
－1	甕	17.6 6.8 22.4	内－篦磨き。 外－口縁部・体部：縦位・横位櫛描波状文。	No.2
－2	甕	16.4 － －	内－篦磨き。 外－口唇部：縄文、体部櫛描波状文。	No.3
－3	甕	－ － －	内－篦磨き。 外－体部：上半櫛描波状文・下半斜走文。	
－4	甕	15.8 － －	内－篦磨き。 外－口唇部：縄文、口縁部：円形貼付文、体部：篦描連続「コ」字文＋円形貼付文。	
－5	壺	－ － －	内－刷毛目。 外－頸部：篦描平行沈線・刺突列・弧文・円形貼付文。	
－6	壺	14.1 － －	内－口縁部：赤彩。 外－赤彩、口縁部：2孔、頸部：段。	No.6
－7	鉢	13.8 4.9 4.9	内外－赤彩。	No.4
－8	甑	18.6 7.3 11.0	内－刷毛目。 外－刷毛目、篦削り。	No.5 単孔。
－9	甑	－ 5.8 －	内－篦磨き。 外－篦削り。	No.1 単孔。
－10	片口	13.4 － －	内－刷毛目、ナデ。 外－ナデ、篦削り。	No.7
－11	砥石	8.8 3.3 1.8		67.7g

第38表　H64号住居址出土遺物観察表



1　灰黄褐色土層（10YR4/2）。〆1cm以下石粒、パミスを含む。
2　黒褐色土層（10YR3/2）。10YR6/2粒子含む。

第48図　H68号住居址



H68号住居址（第48図、図版百四十二）

遺構－Ⅰお6グリットで検出された。M1号溝址に切られる。住居の大半がM1号溝址により消失しているため規模は判然としない、壁残高は0.12mを測った。調査範囲内には炉址は存在せず、Pitは1基検出されたが主柱穴ではない。覆土は自然堆積で、周溝は存在しなかった。

遺物－甕（1）、壺（2）、砥石（3）が出土している。甕は櫛歯状工具により、頸部に簾状文、体部に斜走文が施される。壺は篦状工具による平行沈線間に縄文を施す。砥石は扁平な自然礫をそのまま使用している。

H72号住居址（第49図、図版百四十六）

遺構－Ⅶく2グリットで検出された。H74号住居址に切られる。長方形の平面プランを呈し、南北長3.95m、壁残高0.38mを測る。Pit・炉址・周溝等は存在しなかった。住居とは異なる性格の遺構かも知れない。

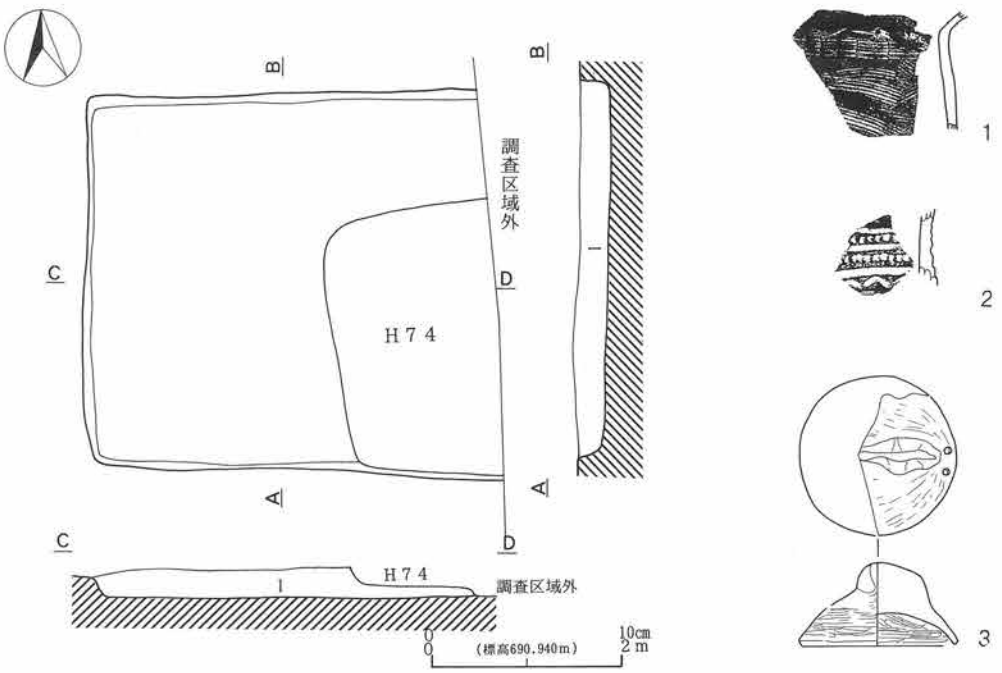
挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
－1	甕	－ － －	内－篦磨き。 外－頸部：簾状文、体部：櫛描斜走文。	
－2	壺	－ － －	内－ナデ。 外－頸部：篦描平行沈線＋縄文。	
－3	砥石	6.6 5.0 1.8		77.1g

第39表　H68号住居址出土遺物観察表

遺物－甕（1）、壺（2）、蓋（3）が出土している。甕は頸部に簾状文が巡り、体部には斜走文が施される。壺は頸部片で篦状工具による平行沈線・波状文・刺突列が施される。蓋は平面は円形を呈し、側面は半球状を呈する。中央に鰭状のつまみが付き、縁には円形の小孔が２孔穿たれている。

挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
－1	甕	－ － －	内－篦磨き。 外－頸部：簾状文、体部：櫛描斜走文。	
－2	壺	－ － －	内－ナデ。 外－頸部：篦描平行沈線＋波状文＋刺突列。	
－3	蓋	－ － －	内外－篦磨き。縁に２孔。	

第40表　H72号住居址出土遺物観察表



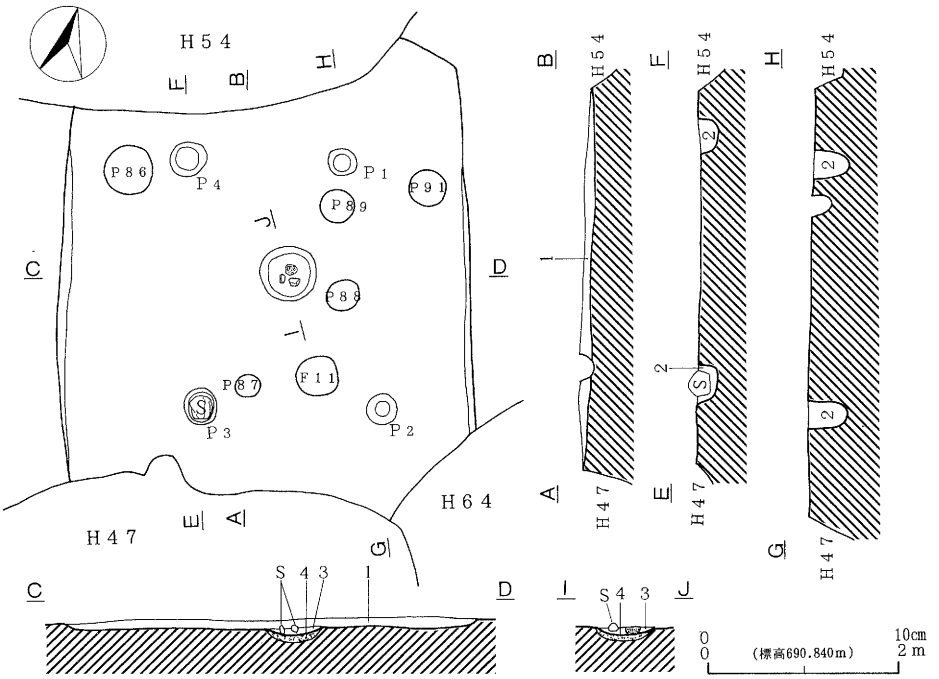
1　灰黄褐色土層（10YR4/2）。φ２㎜以下石粒、パミス多含。人為埋土。

第49図　H72号住居址

H82号住居址（第50図、図版三十七・百五十一）

遺構－Ⅲい5グリットで検出された。H47号・H54号・H64号住居址、F11号掘立柱建物址に切られる。隅丸長方形の平面プランを呈し、東西長4.3m、壁残高0.1mの規模を有する。N－15°－Wに長軸方位をとる。4基検出されたPitは全て主柱穴である。柱は確認されていない。炉址は主柱穴の中央に構築されていた。直径0.58mの円形で、深度0.25mの地床炉である。周溝は存在せず、覆土は自然堆積であった。

遺物－壺が2点出土している。1は小型で残存部分は無文である。内面刷毛目調整、外面には篦磨き調整が施されている。2は口唇部に縄文を施し、頸部には篦状工具による平行沈線が巡り、その間に縄文が施文される。



1　にぶい黄褐色土層（10YR5/3）。φ5mm以下石粒、パミスを含む。
2　黒褐色土層（10YR3/2）。パミス、小石少含。
3　にぶい黄褐色土層（10YR5/3）。パミス少含。
4　炉掘方埋土。

第50図　H82号住居址

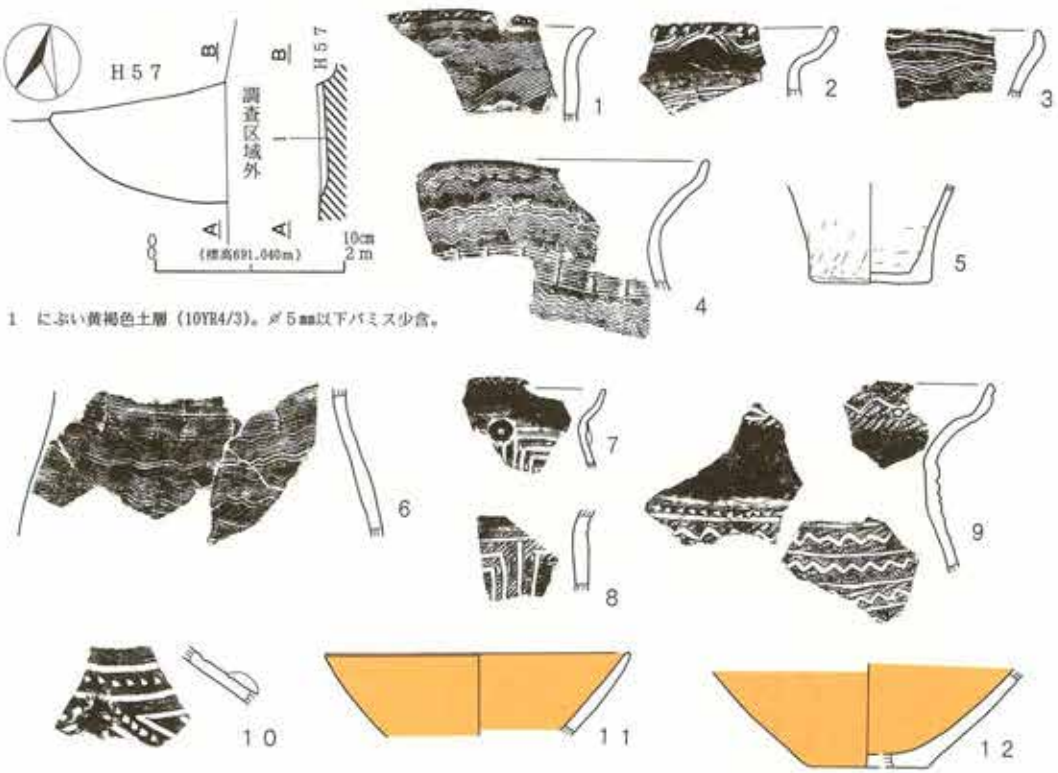
挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
−1	壺	− − −	内−刷毛目。 外−篦磨き。	
−2	壺	− − −	内−篦磨き。 外−頸部：篦描平行沈線・縄文。	

第41表　H82号住居址出土遺物観察表

H86号住居址（第51図、図版百五十三）

遺構−Vえ3グリットで検出された。H57号住居址に切られる。住居の大半はH57号住居址により消滅し、しかも調査区域外に延びるため、極僅かな面積を調査したに過ぎない。壁残高は0.08mである。炉址、Pit等は調査範囲には存在しなかった。

遺物−甕（1～8）、壺（9・10）、鉢（11・12）が出土している。甕1は口唇部に縄文が施され、口縁部には1条の櫛歯状工具による波状文が巡り、その下には斜走文が施される。2は口唇部に刻目が施され、口縁端部に櫛歯状工具による波状文が1条巡り、頸部には簾状文が施される。



第51図　H86号住居址

挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
－1	甕	－ － －	内－篦磨き。 外－口唇部：縄文、口縁部：櫛描波状文、体部：斜走文。	
－2	甕	－ － －	内－篦磨き。 外－口唇部：刻目、口縁部：櫛描波状文、頸部：簾状文。	
－3	甕	－ － －	内－篦磨き。 外－櫛描波状文。	
－4	甕	－ － －	内－篦磨き。 外－口縁部・体部：櫛描波状文、頸部：簾状文。	
－5	甕	－ 6.4 －	内外－篦磨き。	
－6	甕	－ － －	内－篦磨き。 外－頸部：簾状文、体部：櫛描波状文。	
－7	甕	－ － －	内－篦磨き。 外－口唇部：縄文、体部：連続「コ」字文＋円形貼付文。	
－8	甕	－ － －	内－篦磨き。 外－連続「コ」字文・縄文。	
－9	壺	－ － －	内－篦磨き、刷毛目。 外－口縁部：縄文・篦描波状文、頸部：篦描平行沈線・ 刺突列・波状文・縄文。	
－10	壺	－ － －	内－刷毛目、ナデ。 外－篦描平行沈線・弧文・刺突列。	
－11	鉢	16.2 － －	内外－赤彩。	
－12	鉢	－ 6.2 －	内外－赤彩。	

第42表　H86号住居址出土遺物観察表

受口口縁である。3は口縁部に櫛歯状工具による波状文が施される。4・6は櫛歯状工具による波状文が口縁部と体部に施され、頸部には簾状文が巡る。5は底部片で内外面に篦磨き調整が施されている。7は台付甕の可能性がある。口唇部に縄文が施され、体部には円形貼付文を伴う連続「コ」字文が施される。8も連続「コ」字文が施されるもので、縄文も施文される。壺9は口縁部に縄文を施し、篦状工具による1本の波状文を巡らす。頸部には平行沈線が巡り、その間に波状文・縄文・刺突列が施される。10は篦状工具による弧文と平行沈線、刺突列が施され、更に、突起状の貼付文が付加されている。11・12の鉢は2点共に赤彩される。

H87号住居址（第52図、図版三十八・百五十三・百五十四）

遺構－Vい2グリットで検出された。H73号住居址、F22号掘立柱建物址に切られる。住居の

大半は調査区域に延びるため未調査である。南北長5.8ｍ・壁残高0.25ｍを測る。Pitは床面上で４基、掘方から２基検出された。この内のＰ１とＰ２が主柱穴である。柱はＰ２・Ｐ４において確認され、直径15㎝の規模であった。調査範囲内には炉址は存在しなかった。覆土は自然堆積で周溝は有さない。

遺物－甕（１から11）、壺（12～17・19）、高杯（18）、磨製石斧が出土している。甕１・３は口唇部に縄文を施し、頸部に１条の櫛歯状工具による波状文を巡らし、体部には斜走文を施す。２も１・３同様の文様構成と思われるが、体部が存在しないため判然としない。４は口唇部に縄文ではなく、押捺が施されれる点が異なるだけで、他は１・２と同様である。５は櫛歯状工具により頸部に簾状文ないしは条線を巡らし、ここから縦位の条線を垂下させ器面を縦位に分割し、横位の波状文を充填している。６は受口口縁で口唇部と口縁部に縄文を施し、口縁部には篦状工具による２本の波状文を巡らす。頸部下には櫛歯状工具による波状文が施される。７は口縁部に櫛歯状工具による波状文が施される。８は頸部に簾状文が巡り、体部には櫛歯状工具による波状文が施される。９は体部に斜走文が施される点が異なるが、他は８と同様である。10は頸部下に縄文が施される。11は口縁部に簾状文が巡る。壺12は口唇部～口縁部に縄文が施され、口縁部には篦状工具による１本の波状文が巡る。13・15は頸部に篦状工具による平行沈線が巡り、沈線間には縄文が施される。14は篦状工具による平行沈線間に波状文が施される。16は篦状工具による平行沈線と斜走文が施されている。17は無文で内面口縁部と外面に赤彩される。19は底部付近の破片で、内面刷毛目、外面刷毛目調整後篦磨き調整が施される。高杯18は脚部の破片である。外面赤彩、内面には刷毛目調整が施される。磨製石斧20は片刃で基部には着柄の際の痕跡が残っている。

挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
－1	甕	－ － －	内－篦磨き。 外－口唇部：縄文、頸部：櫛描波状文、体部：斜走文。	
－2	甕	－ － －	内－篦磨き。 外－口唇部：縄文、頸部：櫛描波状文。	
－3	甕	15.3 － －	内－篦磨き。 外－口唇部：縄文、頸部：櫛描波状文、体部：斜走文。	
－4	甕	－ － －	内－篦磨き。 外－口唇部：押捺、頸部：櫛描波状文、体部：斜走文。	
－5	甕	－ － －	内－篦磨き。 外－頸部：簾状文、体部：櫛描縦位条線・波状文。	
－6	甕	－ － －	内－篦磨き。 外－口唇部：縄文、口縁部：縄文・篦描波状文、体部：櫛描波状文。	

第43表　H87号住居址出土遺物観察表（１）

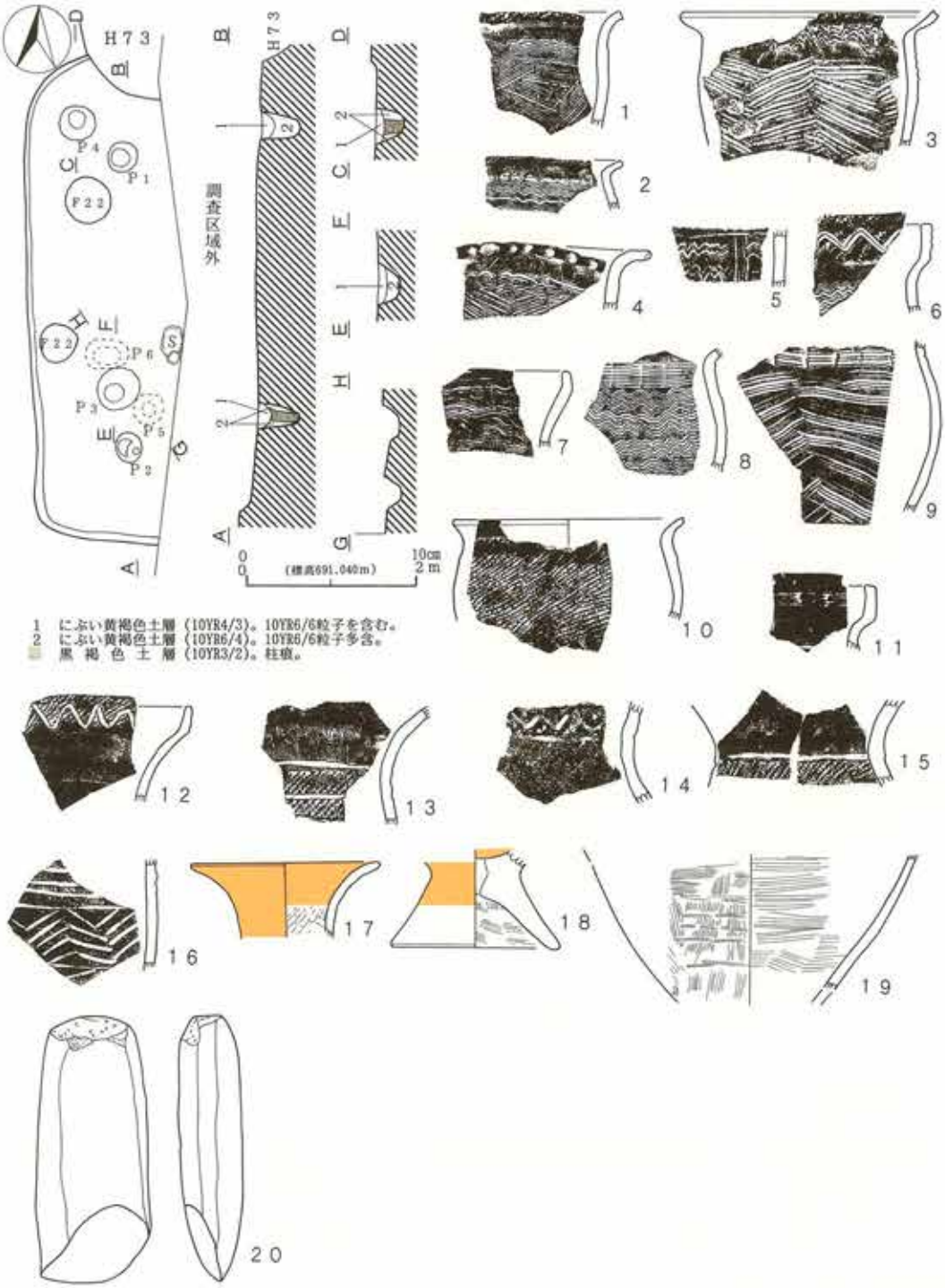
挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
－7	甕	－ － －	内－篦磨き。 外－口縁部：櫛描波状文。	
－8	甕	－ － －	内－篦磨き。 外－口縁部：櫛描波状文、頸部：簾状文。	
－9	甕	－ － －	内－篦磨き。 外－頸部：簾状文、体部：櫛描斜走文。	
－10	甕	13.6 － －	内－篦磨き。 外－縄文。	
－11	甕	－ － －	内－篦磨き。 外－口縁部：簾状文。	
－12	壺	－ － －	内－篦磨き。 外－口唇部：縄文、口縁部：縄文・篦描波状文。	
－13	壺	－ － －	内－ナデ。 外－篦描平行沈線間に縄文。	
－14	壺	－ － －	内－ナデ。 外－篦描平行沈線間に波状文。	
－15	壺	－ － －	内－ナデ、刷毛目。 外－篦描平行沈線間に縄文。	
－16	壺	－ － －	内－ナデ、刷毛目。 外－篦描平行沈線・斜走文。	
－17	壺	9.8 － －	内外－赤彩。	
－18	高杯	－ 11.2 －	内－刷毛目。 外－赤彩。	
－19	壺		内－刷毛目。 外－刷毛目・篦磨き。	
－20	磨製石斧	15.6 6.7 3.8		8.300ｇ

第44表　H87号住居址出土遺物観察表（２）

H89号住居址（第53図、図版三十八・百五十四）

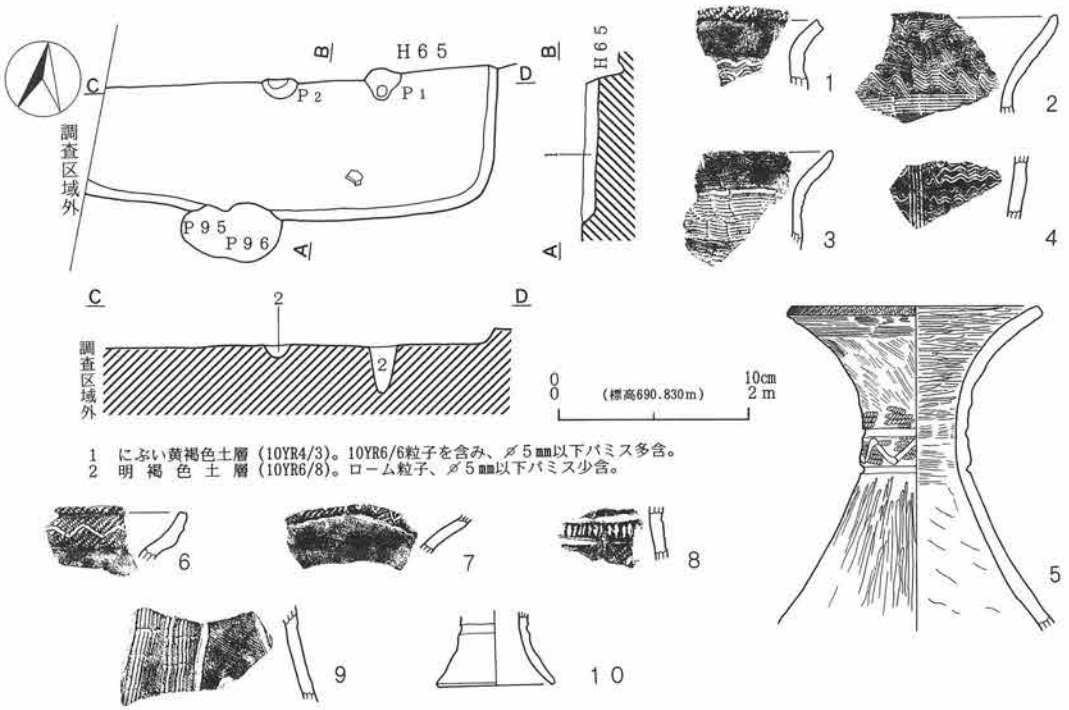
遺構－Ⅶあ６グリットで検出された。H65号住居址に切られる。壁残高0.15ｍを測る。住居の大半はH65号住居址により消滅しているため、規模・形状は判然としない。調査範囲内には炉址は存在せず、Pitは２基検出されているが、住居全体のPitの配置が不明なため、主柱穴かどうかは判断できない。覆土は自然堆積で、周溝は有さない。

遺物－甕（１～４）、壺（６～９）、高杯（10）が出土している。甕１・２は口唇部に縄文を施し、口縁部に櫛描き波状文、頸部に簾状文が施される。３は頸部に簾状文が２段に施される。４



第52図　H87号住居址

は体部に櫛歯状工具による縦位の条線と、横位の波状文が施される。壺５は口唇部に縄文を施し、頸部に篦状工具による２本の平行沈線を巡らし、その間に篦描波状文と縄文が施文される。６は口唇部と口縁部に縄文が施され、口縁部には更に篦状工具による波状文が施される。７は受口口縁の段部分に縄文が施されている。８は頸部に巡らした篦状工具による平行沈線間に刻目を施し、その下部には縄文が施される。９は頸部に篦状工具による「U」字状の懸垂文を施し、内部に条線を充填する。10は高杯の脚部で沈線が１本巡る。



第53図　H89号住居址

H95号住居址（第54図、図版百五十七・百五十八）

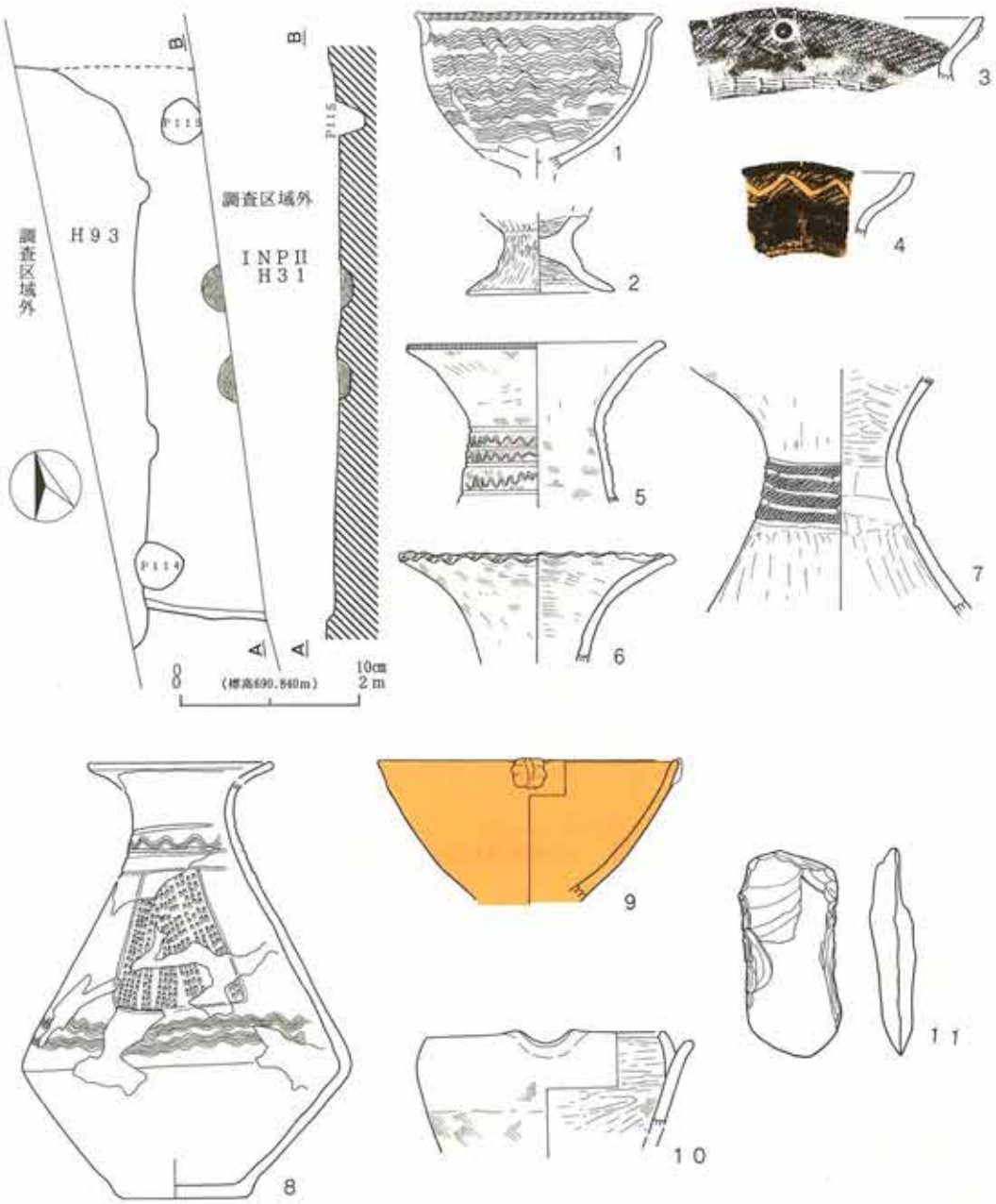
遺構－Ⅶこ８グリットで検出された。H93号住居址に切られる。第２次調査におけるH31号住居址は本址と同一の住居址である。隅丸長方形の平面プランを呈し、長軸長6.12ｍ、壁残高0.12ｍを測る。調査範囲内にはPitは存在しなかったが、第２次調査の際主柱穴と思われるPitが２基確認されている。また、炉址も第２次調査の際確認された２基の継続部分が今回も確認されている。覆土は自然堆積で、周溝は今回の調査部分には存在しないが、第２次調査の際には断続する周溝が確認されている。

遺物－台付甕（１・２）、甕（３・４）、壺（５～８）、鉢（９）、片口（10）、打製石斧（11）

挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
−1	甕	− − −	内−篦磨き。 外−口唇部：縄文、頸部：櫛描波状文。	
−2	甕	− − −	内−篦磨き。 外−口縁部：櫛描波状文、頸部：簾状文。	
−3	甕	− − −	内−篦磨き。 外−頸部：簾状文。	
−4	甕	− − −	内−篦磨き。 外−体部：縦位条線・櫛描波状文。	
−5	壺	13.6 − −	内−篦磨き。 外−口唇部：縄文、頸部：篦描平行沈線間に縄文と波状文。	
−6	壺	− − −	内−篦磨き。 外−口唇部：縄文、口縁部：縄文・篦描波状文。	
−7	壺	− − −	内−ナデ。 外−口縁部：縄文。	
−8	壺	− − −	内−ナデ。 外−篦描平行沈線間に刻目、下部に縄文。	
−9	壺	− − −	内−ナデ、刷毛目。 外−篦描沈線文内に条線。	
−10	高杯	− 6.2 −	内−ナデ。 外−沈線。	

第45表　H89号住居址出土遺物観察表

が出土している。台付甕１は口唇部に縄文を施し、体部には櫛歯条工具による波状文が施される。台部は欠損する。２は台部のみの出土である。脚内篦ナデ、内外面篦磨き調整が施される。甕３は口唇部～口縁部に縄文を施し、口縁部には更に円形貼付文を付加する。頸部には簾状文が施される。４は口縁部～口唇部に縄文を施し、口縁部には篦状工具による１本の波状文が付加される。壺５は口唇部に刻目を巡らし、頸部には篦状工具による平行沈線間に波状文が施され、櫛歯状工具による刺突が充填される。６は口唇部に縄文原体による押捺が加えられる。７は頸部に巡らされた篦状工具による平行沈線間に縄文を施している。８は頸部に篦状工具による平行沈線間に波状文を巡らし、体部最大径部分に「U」字状の文様帯を垂下させ、内部に櫛歯状工具による刺突を充填する。最大径部分には櫛歯状工具による波状文が２列巡る。内面口縁部と、外面口縁部から体部最大径部分までは赤彩される。鉢９は口縁端部に突起が付加される。内外面共に赤彩される。10の片口は鉢の口縁部に片口を造り出したもので、内面刷毛目～篦磨き、外面刷毛目～ナデ調整が施される。打製石斧11は安山岩製である。完形品で刃部は剥離面に加工を加えずに使用しており、かなり摩滅している。



第54図　H95号住居址

挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
−1	台付甕	14.0 − −	内−篦磨き。 外−口唇部：縄文、頸部下：櫛描波状文。	
−2	台付甕	− 8.2 −	内−篦ナデ・篦磨き。 外−篦磨き。	
−3	甕	− − −	内−篦磨き。 外−口唇部：縄文、口縁部：縄文＋円形貼付文、頸部： 廉状文。	
−4	甕	− − −	内−篦磨き。 外−口唇部：縄文、口縁部：縄文・篦描波状文。	
−5	壺	14.6 − −	内−篦磨き。 外−口唇部：刻目、頸部：篦描平行沈線間に波状文と櫛 による刺突。	
−6	壺	15.4 − −	内−篦磨き。 外−口唇部：縄文原体による押捺。	
−7	壺	− − −	内−ナデ。 外−頸部：篦描平行沈線間に縄文。	
−8	壺	10.3 6.8 24.6	内−口縁部赤彩。 外−頸部：篦描平行沈線間に波状文、下部に「U」字区画・内部櫛による刺 突、体部最大径部分：櫛描波状文。赤彩。	
−9	鉢	16.8 − −	内−赤彩。 外−赤彩、口縁端部に突起。	
−10	片口	13.3 −	内−刷毛目〜篦磨き。 外−刷毛目〜ナデ。	
−11	打製石斧	11.2 5.5 2.4		160 g

第46表　H95号住居址出土遺物観察表

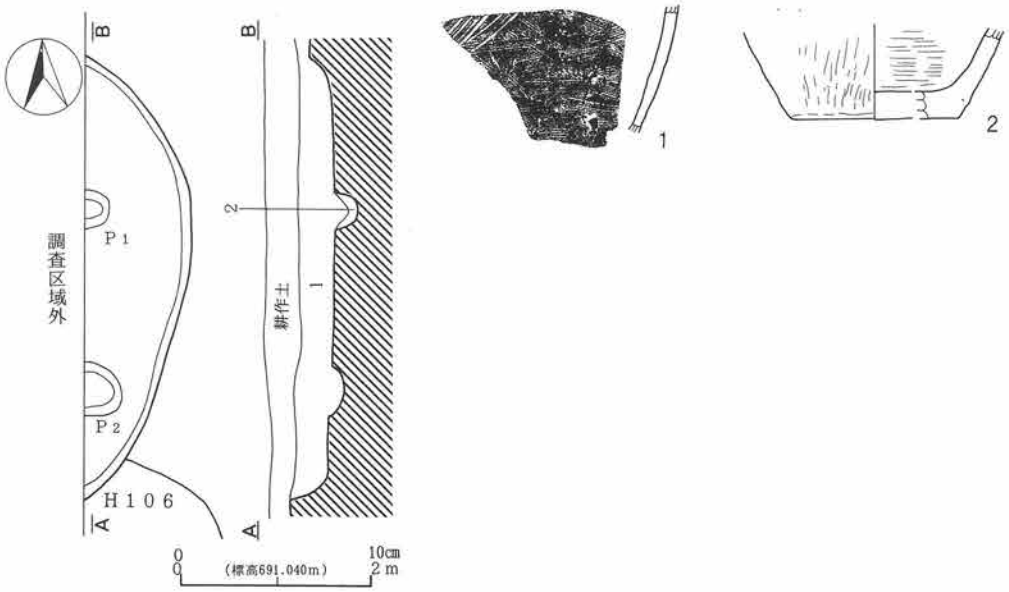
H97号住居址（第55図、図版百五十九）

遺構−Ⅴけ9グリットで検出された。H106号住居址に切られる。住居の大半は調査区域外に延びるため規模・形状等は判然としない。壁残高0.4mを測る。調査区域内に炉址は存在せず、2基検出されたPitも主柱穴とは思われない。覆土は自然堆積で、周溝は存在しない。

遺物−甕が2点出土している。1は斜走文が施されるもの、2は底部片で内外面に篦磨きが施される。

挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
−1	甕	− − −	内−篦磨き。 外−斜走文。	
−2	甕	− 8.8 −	内外−篦磨き。	

第47表　H97号住居址出土遺物観察表



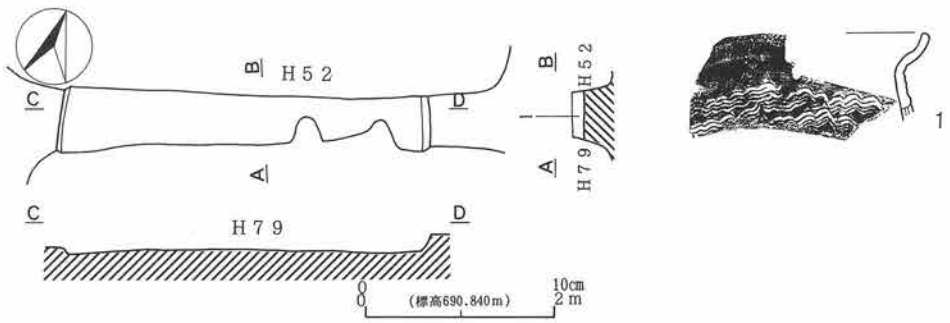
1　暗褐色土層（10YR3/3）。パミス、小石、10YR6/6粒子を含む。
2　黒褐色土層（10YR3/2）。

第55図　H97号住居址

H99号住居址（第56図、図版四十一・百六十）

遺構－Vう４グリットで検出された。H52号・H79号住居址に切られる。残存部分が僅かなため、形状、規模等は不明である。壁残高0.2ｍを測る。調査範囲内には炉址、Pitは存在しなかった。覆土は自然堆積である。

遺物－甕が１点出土している。受口口縁を呈する。口唇部に縄文を施し、頸部下には櫛歯状工具による波状文が施文されている。



1　灰黄褐色土層（10YR4/2）。φ５mm以下石粒、パミスを含む。

第56図　H99号住居址

挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
－1	甕	－ － －	内－篦磨き。 外－口唇部：縄文、体部櫛描波状文。	

第48表　H99号住居址出土遺物観察表

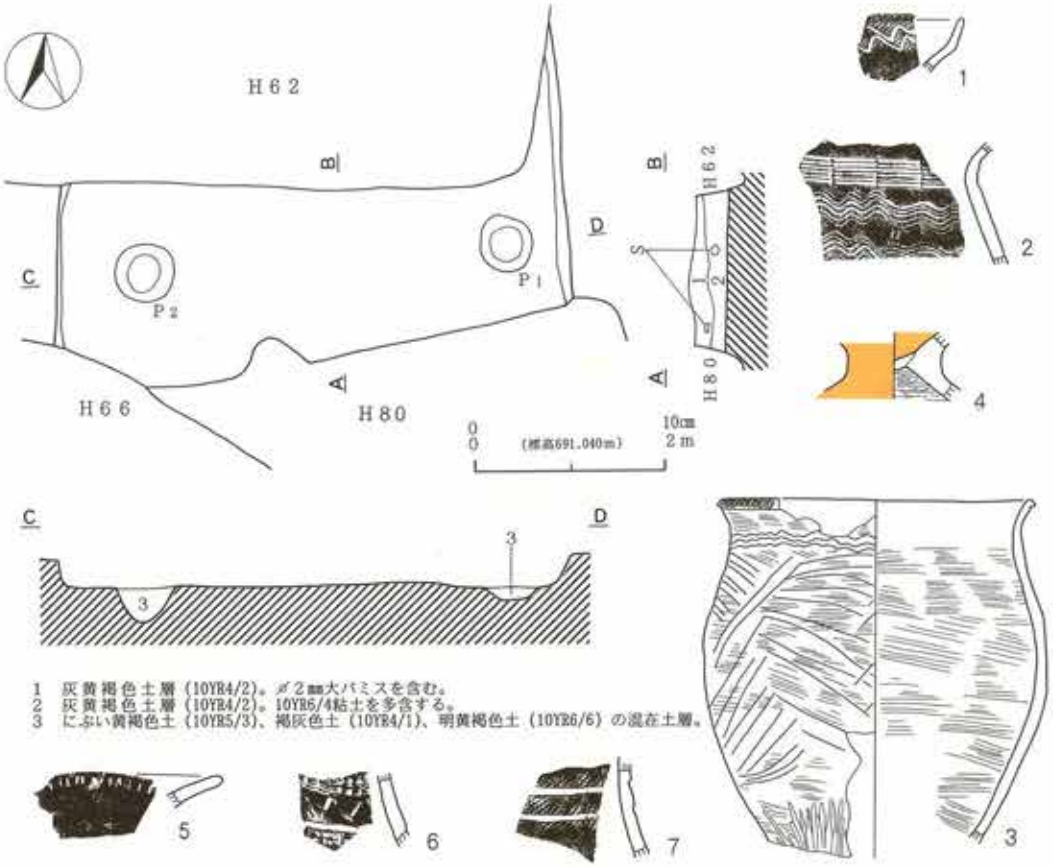
H100号住居址（第57図、図版四十一・百六十一）

遺構－Ⅶあ4グリットで検出された。H62号・H66号・H80号住居址、F22号掘立柱建物址に切られる。住居の大半が消滅しているため、規模、形状等判然としない。東西長5.4m、壁残高0.4mを測る。調査範囲には炉址は存在しない。Pitは2基検出されたが主柱穴か否かは判断できない。覆土は自然堆積で周溝は有さない。

遺物－甕（1～3）、壺（5～7）、高杯（4）が認められる。甕1は口唇部と口縁部に縄文を施し、口縁部には篦状工具による2本の波状文を巡らす。2は頸部に簾状文を施し、体部には櫛歯状工具による波状文が施文される。3は口唇部に縄文を施し、頸部に櫛歯状工具による波状文を1状巡らし、体部には斜走文を施す。壺5は口唇部に刻目が施される。6は頸部に櫛歯状工具による簾状文と、篦状工具による平行沈線・波状文が描かれる。7は頸部に篦状工具による平行沈線間に縄文が施される。高杯4は脚内に篦ナデが施される他は、赤彩される。

挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
－1	甕	－ － －	内－篦磨き。 外－口唇部：縄文、口縁部：篦描波状文・縄文。	
－2	甕	－ － －	内－篦磨き。 外－頸部：簾状文、体部：櫛描波状文。	
－3	甕	18.6 － －	内－篦磨き。 外－口唇部：縄文、頸部：櫛描波状文、体部：斜走文。	No.1
－4	高杯	－ － －	内－赤彩、脚内：篦ナデ。 外－赤彩。	
－5	壺	－ － －	内－ナデ。 外－口唇部：刻目。	
－6	壺	－ － －	内－ナデ。 外－頸部：簾状文・篦描平行沈線・波状文。	
－7	壺	－ － －	内－ナデ。 外－頸部：篦描平行沈線間に縄文。	

第49表　H100号住居址出土遺物観察表



第57図　H100号住居址

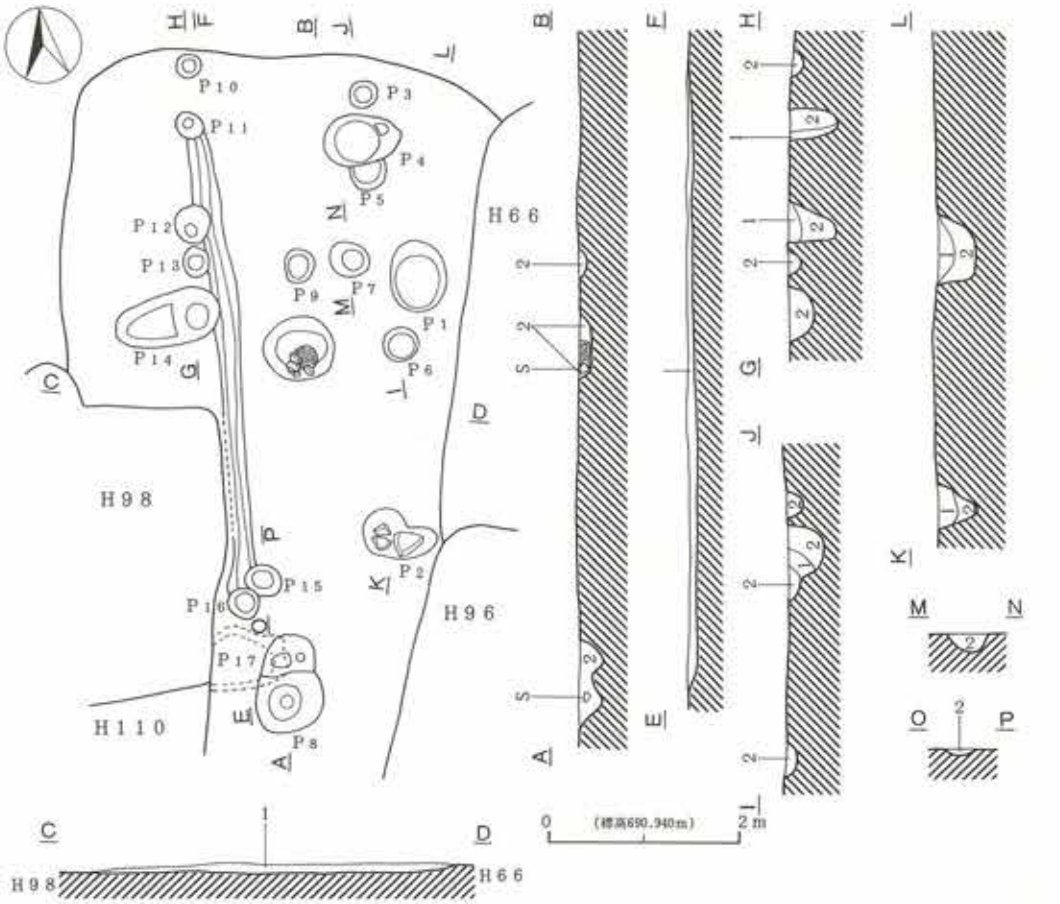
H102号住居址（第58・59図、図版四十二・百六十一）

遺構－Ⅶこ５グリットで検出された。H66号・H96号・H98号住居址に切られる。壁が残存していないため平面プランは判然とはしないが、隅丸長方形を呈する。Pitは17基検出されたが全てが本址に伴うものか否かは判断できなかった。炉址は地床炉で長径0.75ｍ×短径0.66ｍ×深度0.12の規模である。

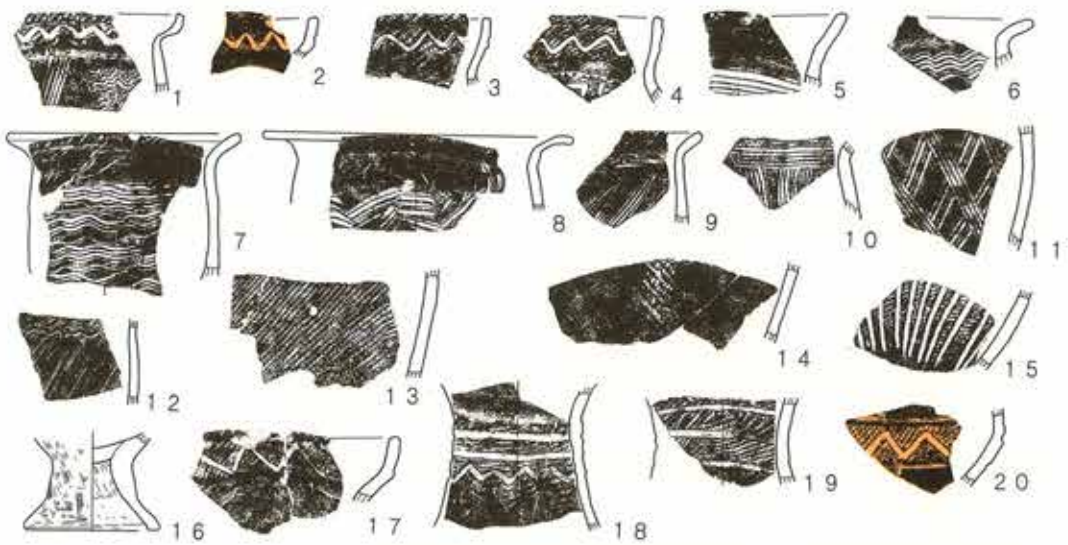
遺物－甕（１～15）、台付甕（16）、壺（17～23）、鉢（24）が出土している。甕１～４は受口ないしは受口気味の口縁を呈し、口唇部から口縁部に縄文を施し、篦状工具による波状文を１本口縁部に巡らす。２は外面が赤彩される。体部は櫛歯状工具による縦位の条線と波状文を施す１、連続「コ」字文を施す４などが認められる。５は口唇部に縄文を施し、頸部に条線を施す。６・７は頸部下に櫛歯状工具による波状文が施される。８・９は口唇部に縄文を施し、体部に斜走文を施す。10は櫛歯状工具による横位の条線を頸部に巡らし、この条線の下端から縦位の条線を垂

挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
−1	甕	− − −	内−篦磨き。 外−口唇部：縄文、口縁部：縄文＋篦描波状文、体部：縦位櫛描条線＋横位波状文。	
−2	甕	− − −	内−篦磨き。 外−赤彩。口唇部：縄文、口縁部：縄文＋篦描波状文。	
−3	甕	− − −	内−篦削り。 外−口唇部：１本の沈線、口縁端部：１列の櫛描波状文。	
−4	甕	− − −	内−篦磨き。 外−口唇部：縄文、口縁部：縄文・篦描波状文、体部：連続「コ」字文。	
−5	甕	− − −	内−篦磨き。 外−口唇部：縄文、頸部：櫛描条線。	
−6	甕	− − −	内−篦磨き。 外−頸部：櫛描波状文。	
−7	甕	12.4 − −	内−篦磨き。 外−口唇部：縄文、体部：櫛描波状文。	
−8	甕	16.0 − −	内−篦磨き。 外−口唇部：縄文、体部：斜走文。	
−9	甕	− − −	内−篦磨き。 外−口唇部：縄文、体部：斜走文。	
−10	甕	− − −	内−篦磨き。 外−頸部：櫛描条線、体部：縦位の条線。	
−11	甕	− − −	内−篦磨き。 外−櫛描斜走文。	
−12	甕	− − −	内−篦磨き。 外−頸部：波状文、体部：斜走文。	
−13	甕	− − −	内−篦磨き。 外−縄文。	
−14	甕	− − −	内−篦磨き。 外−縄文。	
−15	甕	− − −	内−篦磨き。 外−体部：連続「コ」字文＋縄文。	
−16	台付甕	− 7.2 −	内−篦ナデ。 外−刷毛目・篦磨き。	
−17	壺	− − −	内−篦磨き。 外−口唇部：縄文、口縁部：縄文＋篦描波状文。	
−18	壺	− − −	内−ナデ。 外−頸部：篦描平行沈線・波状文・縄文。	
−19	壺		内−ナデ。 外−頸部：篦描平行沈線間に縄文。	

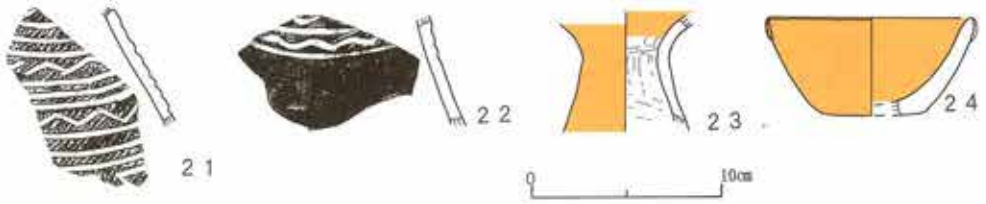
第50表　H102号住居址出土遺物観察表（１）



1　にぶい黄褐色土層（10YR4/3）。10YR6/6粒子、∅5㎜大パミス、炭化物少含。
2　にぶい黄橙色土層（10YR6/4）。10YR6/6粒子多含。



第58図　H102号住居址（1）



第59図　H102号住居址（2）

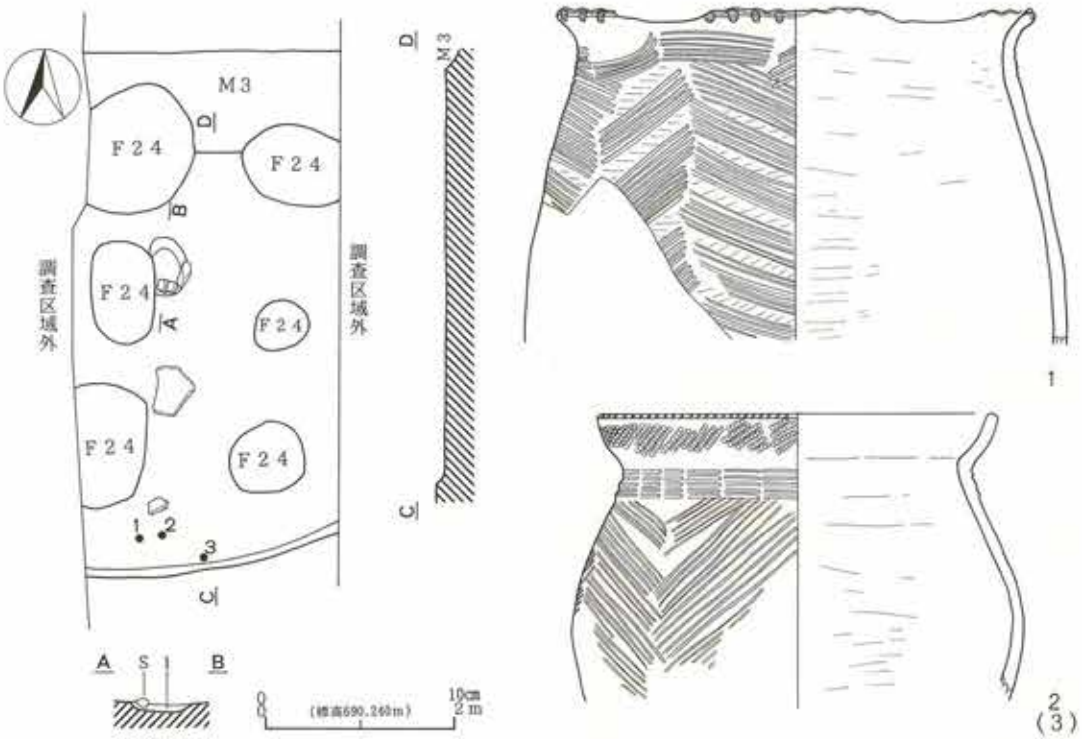
挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
−20	壺	− − −	内−ナデ。 外−体部：篦描平行沈線間に波状文・縄文。赤彩。	
−21	壺	− − −	内−ナデ。 外−体部：縄文・篦描平行沈線・波状文。	
−22	壺	− − −	内−ナデ。 外−体部：縄文・篦描平行沈線・波状文。	
−23	壺	− − −	内−口縁部赤彩、他は篦ナデ。 外−赤彩。	
−24	鉢	11.0 5.6 5.2	内−赤彩。 外−赤彩、口縁端部に突起。	

第51表　H102号住居址出土遺物観察表（2）

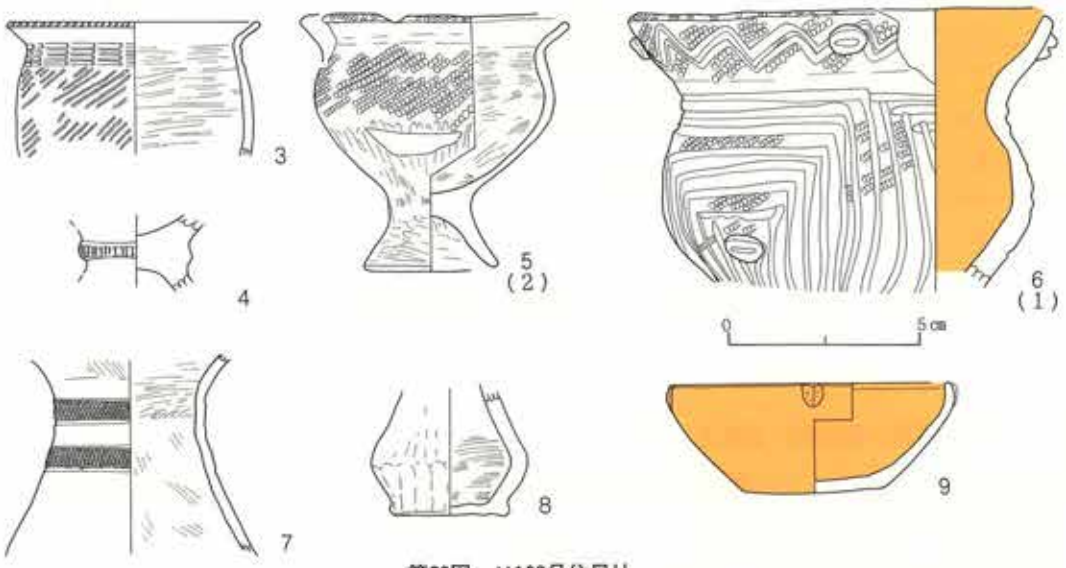
下させる。11は体部に菱形になる斜走文が施される。12は頸部に櫛歯状工具による波状文を施し、斜走文を垂下させる。13・14は体部に縄文が施される。15は体部に縄文と連続「コ」字文が施される。台付甕16は脚部の破片で、内面篦ナデ、外面刷毛目・篦磨き調整が施される。壺17は口唇部と口縁部に縄文を施し、口縁部には篦状工具による波状文が巡る。18・21・22は頸部に篦状工具による平行沈線と波状文・縄文が施される。19は頸部に施された篦状工具による平行沈線間に縄文を施す。20は赤彩され、体部最大径部分に巡らされた篦状工具による平行沈線間に波状文と縄文が施される。23は口縁部内側と外面が赤彩される。鉢24は口縁端部に突起が付され、赤彩される。

H103号住居址（第60図、図版百六十二）

遺構−Ⅲか10グリットで検出された。M3号溝址とF24号掘立柱建物址に切られる。M3と調査区域外に延びるため規模・形状は判然としない。壁残高0.08mを測る。PitはF24号掘立柱建物址により消滅したためか存在しない。炉址は地床炉で3ヶの礫からなる石組を有する。径0.62m、深度0.08mの規模である。周溝は存在せず、覆土は自然堆積である。



1　黒褐色土層（10YR3/2）。焼土そのものは存在しないが、底面は熱変化している。炉址覆土。



第60図　H103号住居址

遺物－甕（1～3）、台付甕（4～6）、壺（7・8）、鉢（9）が認められる。甕1は口唇部に縄文原体による押捺を巡らし、頸部下には櫛歯状工具による斜走文を施す。2は口唇部と口縁

部に縄文を施し、頸部には簾状文を巡らす、体部には櫛歯状工具による斜走文が施文される。3は2の体部文様が縄文に置き換えられたものである。台付甕4は脚部と台部の境に刻み目を施した隆帯を巡らす。5は口唇部と体部に縄文が施される。6は口唇部と口縁部に縄文が施され、口縁部には篦状工具による2本の波状文が巡る。体部には縄文と連続「コ」字文が施され、口縁部と体部には更に円形貼付文が付加される。壺7は頸部に巡らされた篦状工具による平行沈線間に縄文が施される。8は内面刷毛目、外面には篦削りが施される。鉢9は内外面が赤彩され、口縁端部には突起が付加される。

挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
－1	甕	25.3 － －	内－篦磨き。 外－口唇部：縄文原体による押捺、体部：斜走文。	
－2	甕	21.3 － －	内－篦磨き。 外－口唇部：縄文、口縁部：縄文、頸部：簾状文、体部：斜走文。	No.3
－3	甕	13.4 － －	内－篦削り。 外－口唇部：縄文、頸部：簾状文、体部：縄文。	
－4	台付甕	－ － －	内－篦磨き。 外－脚部刻目をほどこした隆帯が巡る。	
－5	台付甕	－ － －	内－篦磨き。 外－口唇部・体部：縄文。	No.2
－6	台付甕	－ － －	内－篦磨き。 外－口唇部：縄文、口縁部：縄文＋篦描波状文＋貼付文、体部：縄文＋連続「コ」字文＋貼付文。	No.1
－7	甕	－ － －	内－篦磨き、刷毛目。 外－頸部：篦描平行沈線間に縄文。	
－8	壺	－ 6.4 －	内－刷毛目。 外－篦削り。	
－9	鉢	14.8 7.3 5.9	内－赤彩。 外－赤彩、口縁端部に突起。	

第52表　H103号住居址出土遺物観察表

H106号住居址（第61図、図版百六十三）

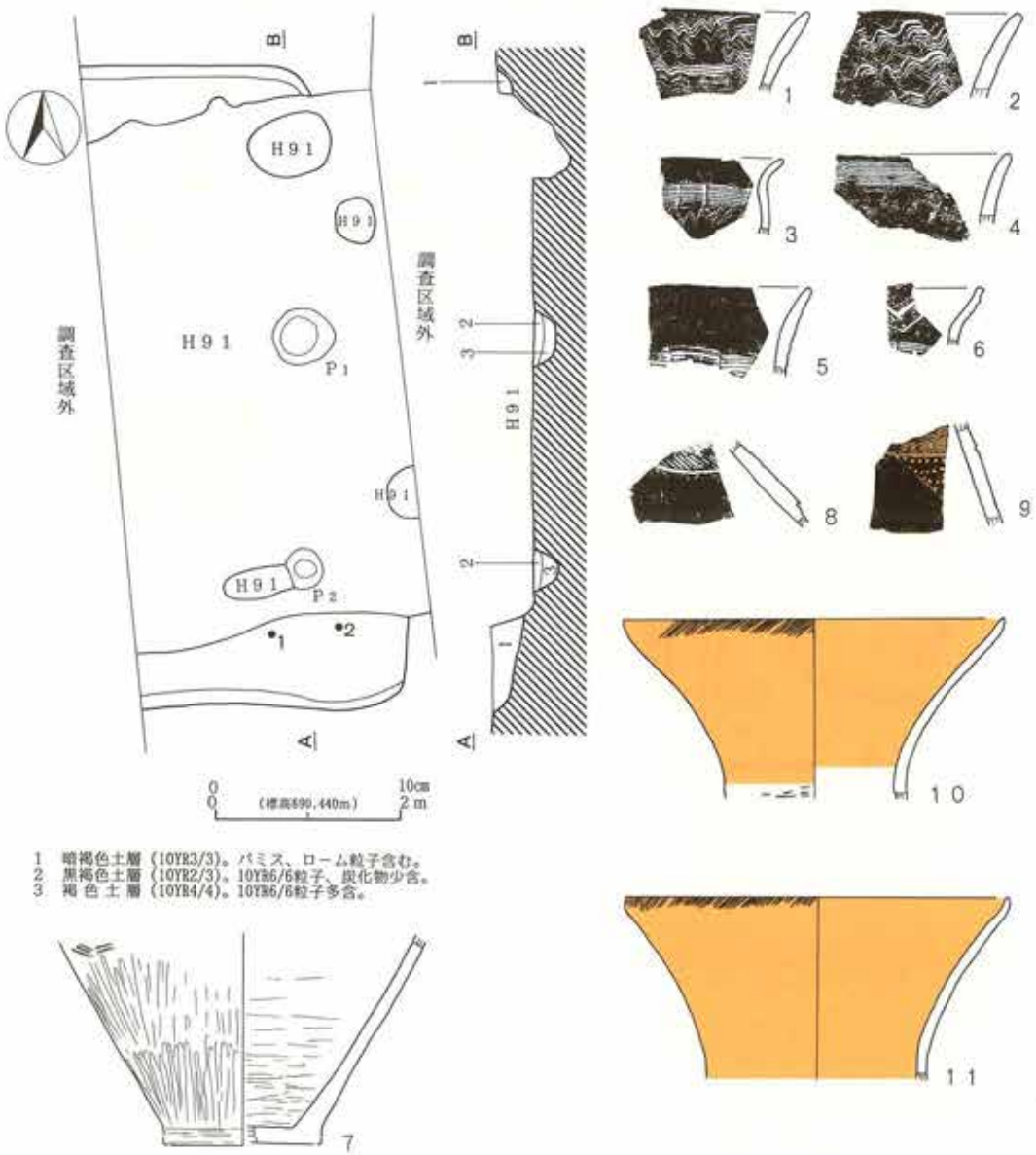
遺構－Vく9グリットで検出された。H97号住居址に切られる。住居の大半は調査区域外に延びるため、規模・形状等は判然としない。調査範囲内にはPit、炉址は存在しなかった。覆土は自然堆積で周溝は有さない。壁残高0.22mを測る。

遺物－甕が2点出土している。1は櫛歯状工具による斜走文が体部に施されるもの。2は口縁部に櫛歯状工具による波状文を巡らし、円形貼付文を付加する。体部には横位の櫛歯状工具による波状文を巡らし、円形貼付文を付加する。この円形貼付文から櫛歯状工具による条線を垂下さ

せている。

挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
－1	甕	－ － －	内－箆磨き。 外－体部：斜走文。	
－2	甕	18.6 － －	内－箆磨き。 外－口縁部：櫛描波状文＋円形貼付文、体部：櫛描波状文＋円形貼付文＋縦位条線。	

第53表　H106号住居址出土遺物観察表

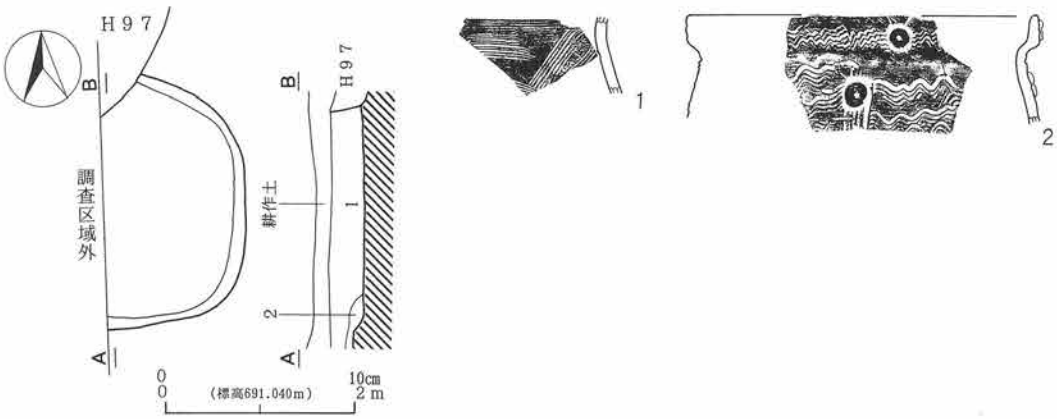


第61図　H106号住居址

H109号住居址（第62図、図版四十三・百六十四）

遺構－Ⅲう10グリットで検出された。H91号住居址に切られる。隅丸長方形の平面プランを呈するものと思われる。南北長6.96ｍ、壁残高0.33ｍの規模を有する。住居の中央がH91号住居址により消滅しているため炉址は存在しなかった。また、H91号住居址の掘方から検出された２基のPitの性格も不明である。周溝は有さず、覆土は自然堆積である。

遺物－甕（１～７）、壺（８～11）が出土している。甕１・２は口縁部に櫛歯状工具による波状文が施される。３は頸部に簾状文、体部に櫛歯状工具による波状文が施される。４は口縁端部に櫛歯状工具による１条の波状文が巡らされる。５は頸部に簾状文が施される。６は口唇部に縄文、口縁部には縄文と篦状工具による２本の波状文が施され、頸部には簾状文が巡る。７は体部に斜走文が施される甕の底部である。壺８は頸部に巡らされた篦状工具による平行沈線間に、斜位の条線が充填される。９は頸部に篦状工具による平行沈線を巡らし、その間に櫛歯状工具による波状文を充填する。更に、前記の文様帯下に刺突を充填した鋸歯文を巡らしている。赤彩されている。10・11は口縁端部に櫛歯状工具による斜位条線を巡らすものである。赤彩されている。



1　黒褐色土層（10YR2/3）。パミス、小石少含。
2　褐色土層（10YR4/4）。10YR6/6粒子多含。

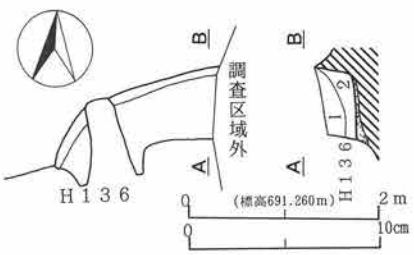
第62図　H109号住居址

H113号住居址（第63図、図版百六十四）

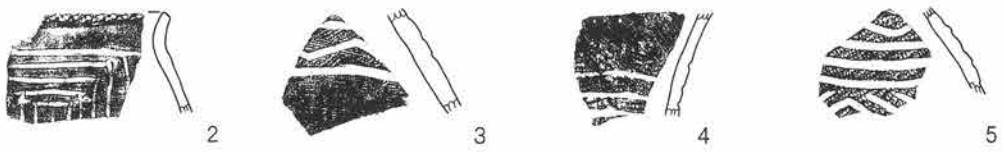
遺構－Ⅸき10グリットで検出された。H136号住居址に切られる。住居の大半がH136号住居址

挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
－1	甕	－ － －	内－篦磨き。 外－口縁部：櫛描波状文。	
－2	甕	－ － －	内－篦磨き。 外－口縁部：櫛描波状文。	
－3	甕	－ － －	内－篦削り。 外－頸部：簾状文、体部：櫛描波状文。	
－4	甕	－ － －	内－篦磨き。 外－口縁端部に１条の櫛描波状文。	
－5	甕	－ － －	内－篦磨き。 外－頸部：簾状文。	
－6	甕	－ － －	内－篦磨き。 外－口唇部：縄文、口縁部：縄文＋篦描波状文、頸部：簾状文。	
－7	甕	－ 8.5 －	内－篦磨き、刷毛目。 外－体部：斜走文。	
－8	壺	－ － －	内－刷毛目。 外－頸部：篦描平行沈線間に櫛描斜位条線。	
－9	壺	－ － －	内－ナデ。 外－赤彩、頸部：篦描平行沈線間に櫛描波状文、その下に刺突充填の鋸歯文。	
－10	壺	27.0 － －	内－赤彩。 外－赤彩、口縁端部に櫛描斜位条線。	
－11	壺	22.0 － －	内－赤彩。 外－赤彩、口縁端部に櫛描斜位条線。	

第54表　H109号住居址出土遺物観察表



1　にぶい黄橙色土層（10YR6/4）。10YR8/4ローム多含。
2　灰黄褐色土層（10YR4/2）。10YR8/4ローム少含。
3　掘方埋土。10YR8/4ローム、砂粒、10YR4/2の混在土層。



第63図　H113号住居址

により消滅し、調査区域外にも延びることから、規模・形状については不明である。壁残高0.38ｍを測る。炉址・Pit等の施設は調査範囲内には存在しなかった。覆土は自然堆積である。

遺物－甕（１・２）、壺（３～５）が出土している。甕１は受口口縁で、口唇部に縄文を施し、頸部から櫛歯状工具による縦位の条線を垂下させ、その間に横位の櫛歯状工具による波状文を充填する。２は口唇部に縄文を施し、体部に連続「コ」字文を施す。壺３は篦状工具による平行沈線間に波状文と縄文を施す。４は頸部に篦状工具による平行沈線間に縄文を施す。５は体部に篦状工具による平行沈線と弧文が描かれ、縄文が施文される。

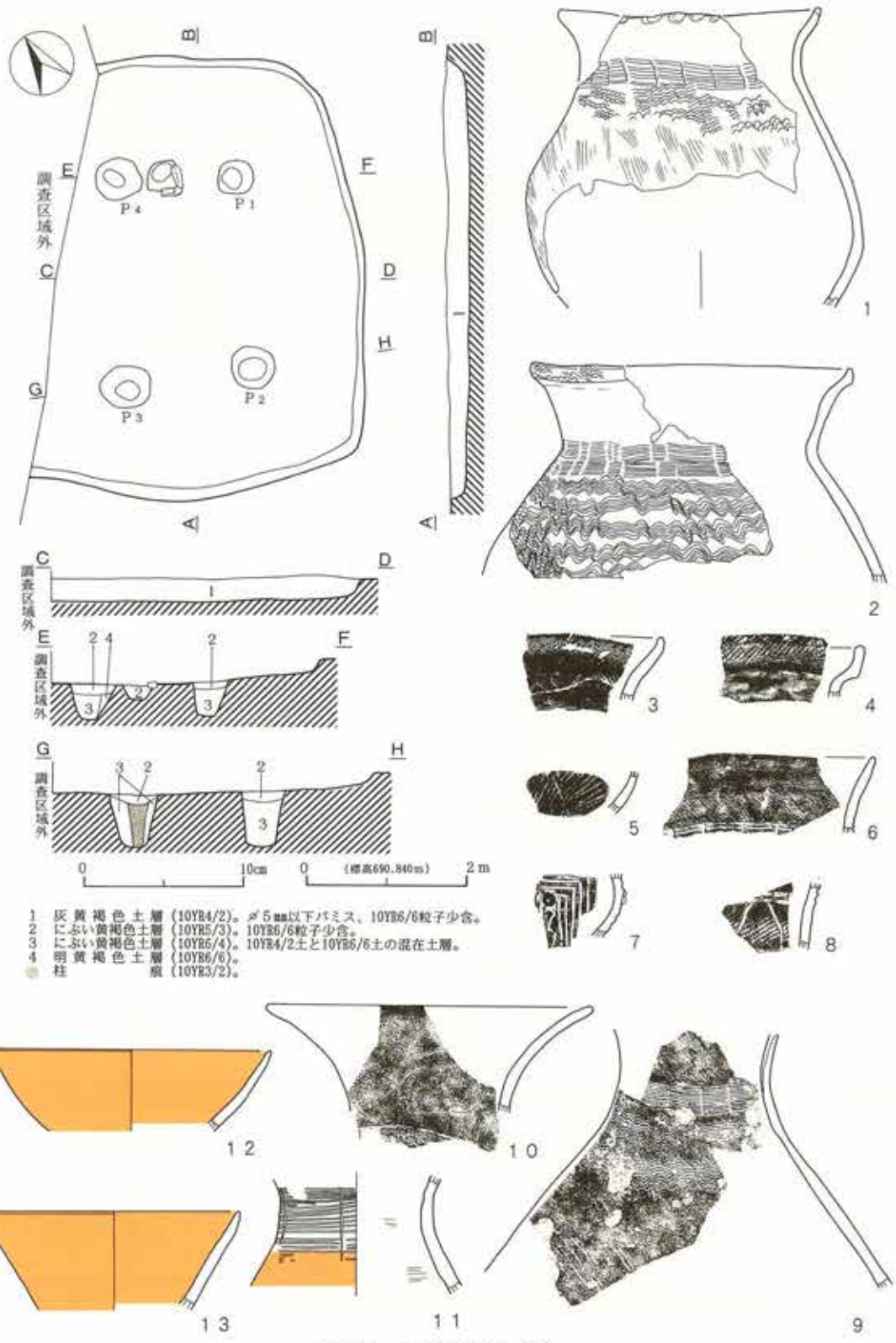
挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
－1	甕	21.1 － －	内－篦磨き。 外－口唇部：縄文、体部：櫛描縦位条線・波状文。	
－2	甕	－ － －	内－篦磨き。 外－口唇部：縄文、体部：連続「コ」字文。	
－3	壺	－ － －	内－刷毛目。 外－頸部：篦描平行沈線間に縄文・波状文。	
－4	壺	－ － －	内－刷毛目。 外－頸部：篦描平行沈線間に縄文。	
－5	壺	－ － －	内－刷毛目。 外－平行沈線・弧文・縄文。	

第55表　H113号住居址出土遺物観察表

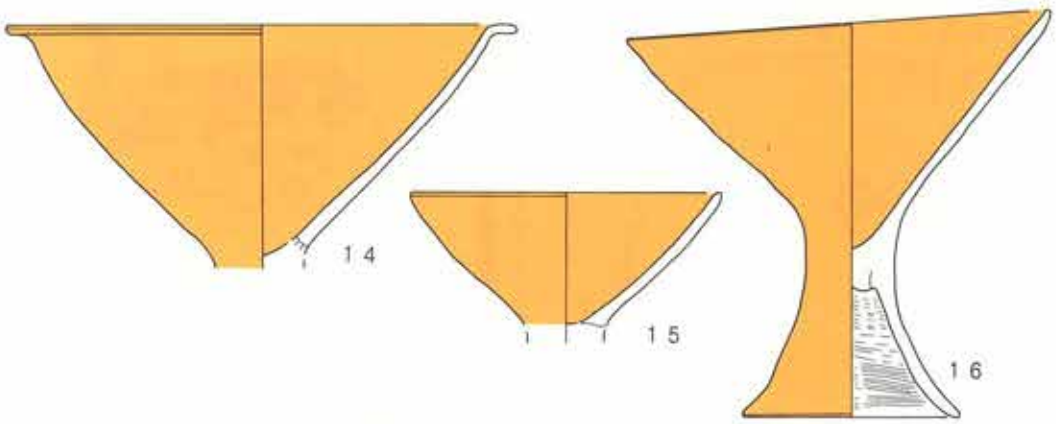
H116号住居址（第64・65図、図版四十五・百六十六）

遺構－Ⅲお２グリットで検出された。隅丸長方形の平面プランを呈する。長軸長5.62ｍ・壁残高0.38ｍの規模を呈する。Ｎ－30°－Ｅに長軸方位をとる。Pitは４基検出され、全てが主柱穴である。Ｐ３において直径15cmの柱が確認された。炉址は北壁よりのＰ１、Ｐ４間に構築されており、東南コーナー部分に逆「Ｌ」字状に礫を組んでいる、半石囲い炉である。一辺0.45ｍで深度0.17ｍの規模を有する。覆土は自然堆積で周溝はは有さない。

遺物－甕（１～７）、壺（８～11）、鉢（12・13）、高杯（14～16）が出土している。甕１は口唇部に篦状工具による押捺が加えられ、頸部には簾状文が巡る。頸部下には櫛歯状工具による３条の波状文が施される。２は口縁端部が折り返し状に肥厚し、櫛歯状工具による波状文が施される。頸部には２条の簾状文が巡り、体部には波状文が施されている。３は口縁端部に１条の櫛歯状工具による波状文が巡る。４は受口口縁で、口唇部と口縁部に縄文が施される。５は体部に斜走文が施される。６は口縁部が無文で、頸部に簾状文が巡る。７は連続「コ」字文と円形貼付文が施される。壺８は頸部に篦状工具による平行沈線と刺突列が巡り、その下に篦状工具による沈



第64図　H116号住居址（1）



第65図　H116号住居址（2）

線文と縄文が施される。9は、頸部に櫛歯状工具による簾状文と波状文が施される。10は頸部に篦状工具による平行沈線が巡り、この間に櫛歯状工具による波状文が施される。11は外面赤彩が施され、頸部には「T」字文が施される。12・13の鉢は内外面が赤彩される。高杯14は口縁端部が水平に開くもので内外面が赤彩される。15・16は口縁部が直線的に開くもので、内外面が赤彩される。16は脚内に刷毛目調整が認められる。

挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
−1	甕	− − −	内−篦磨き。 外−口唇部：押捺、頸部：簾状文、体部：櫛描波状文。	
−2	甕	− − −	内−篦磨き。 外−口縁部：波状文、頸部：簾状文、体部：櫛描波状文。	
−3	甕	− − −	内−篦磨き。 外−口縁端部に1条の櫛描波状文。	
−4	甕	− − −	内−篦磨き。 外−口唇・口縁部：縄文。	
−5	甕	− − −	内−篦磨き。 外−斜走文。	
−6	甕	− − −	内−篦磨き。 外−頸部：簾状文。	
−7	甕	− − −	内−篦磨き。 外−連続「コ」字文＋円形貼付文。	
−8	壺	− − −	内−ナデ。 外−篦描平行沈線・刺突列・沈線文・縄文。	

第56表　H116号住居址出土遺物観察表（1）

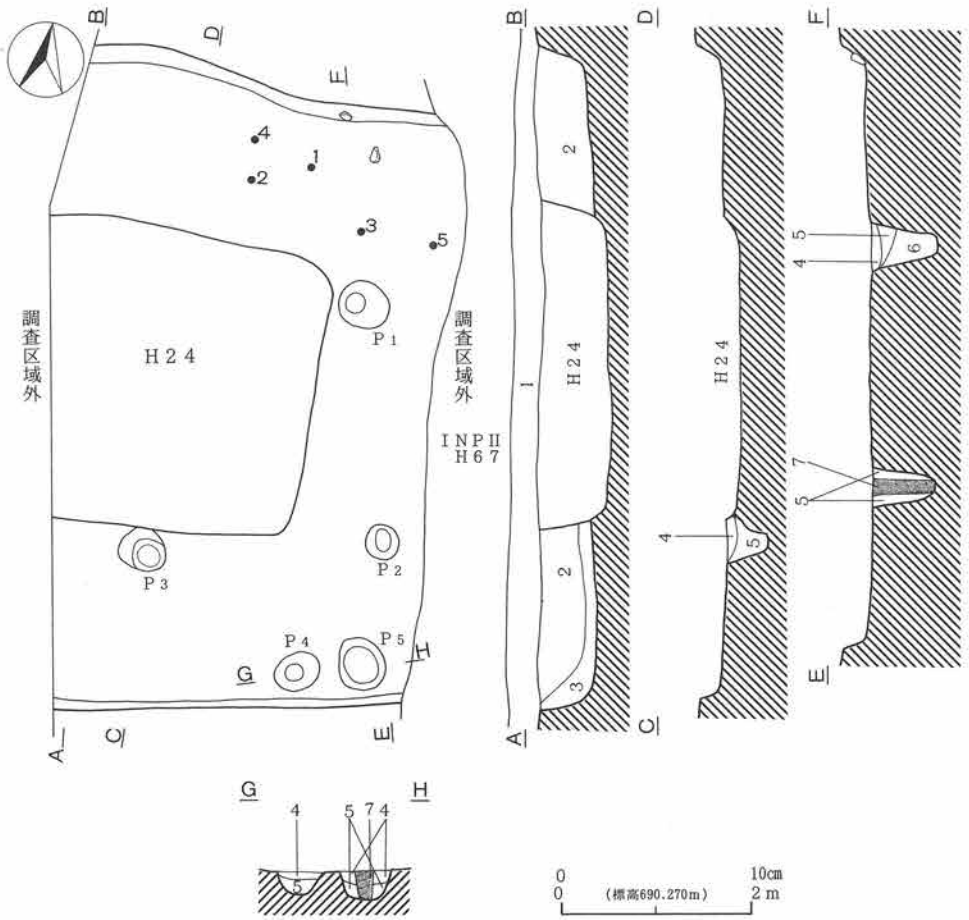
挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
－9	壺	－ － －	内－ナデ・刷毛目。 外－頸部：簾状文・波状文。	
－10	壺	20.7 － －	内－ナデ。 外－頸部：篦描平行沈線間に櫛描波状文。	
－11	壺	－ － －	内－刷毛目。 外－頸部：「T」字文、赤彩。	
－12	鉢	17.6 － －	内外－赤彩。	
－13	鉢	16.0 － －	内外－赤彩。	
－14	高杯	27.0 － －	内外－赤彩。	
－15	高杯	16.4 － －	内外－赤彩。	
－16	高杯	22.4 11.4 21.0	内外－赤彩、脚内：刷毛目。	

第57表　H116号住居址出土遺物観察表（2）

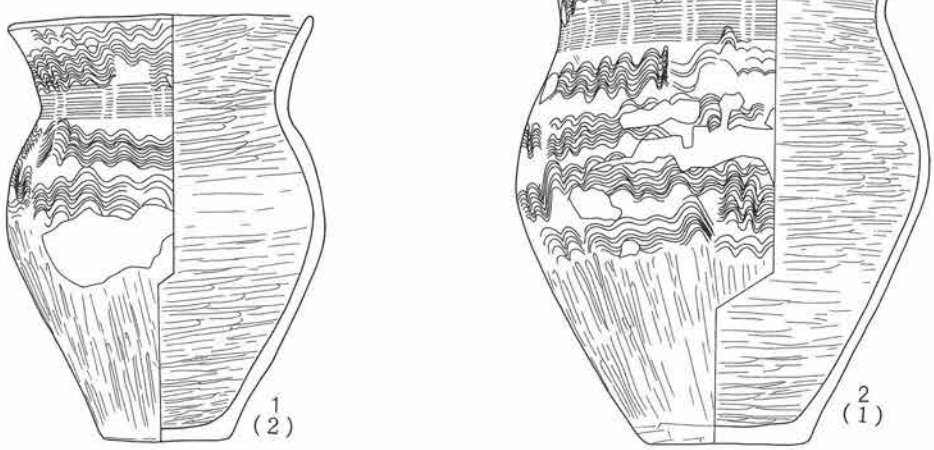
H117号住居址（第66・67図、図版四十六・百六十七・百六十八）

遺構－Ⅱい1グリットで検出された。H24号住居址に切られる。第2次調査におけるH67号住居址は本址と同一の住居址である。隅丸長方形の平面プランを呈し、南北長7.0m、壁残高0.6mの規模を有する。住居の中央部分をH24号により破壊されるため、炉址は存在しなかった。5基検出されたPitの内P1・P2は主柱穴と思われる。P2において直径16cmの柱が確認された。覆土は自然堆積であり、周溝は存在しなかった。

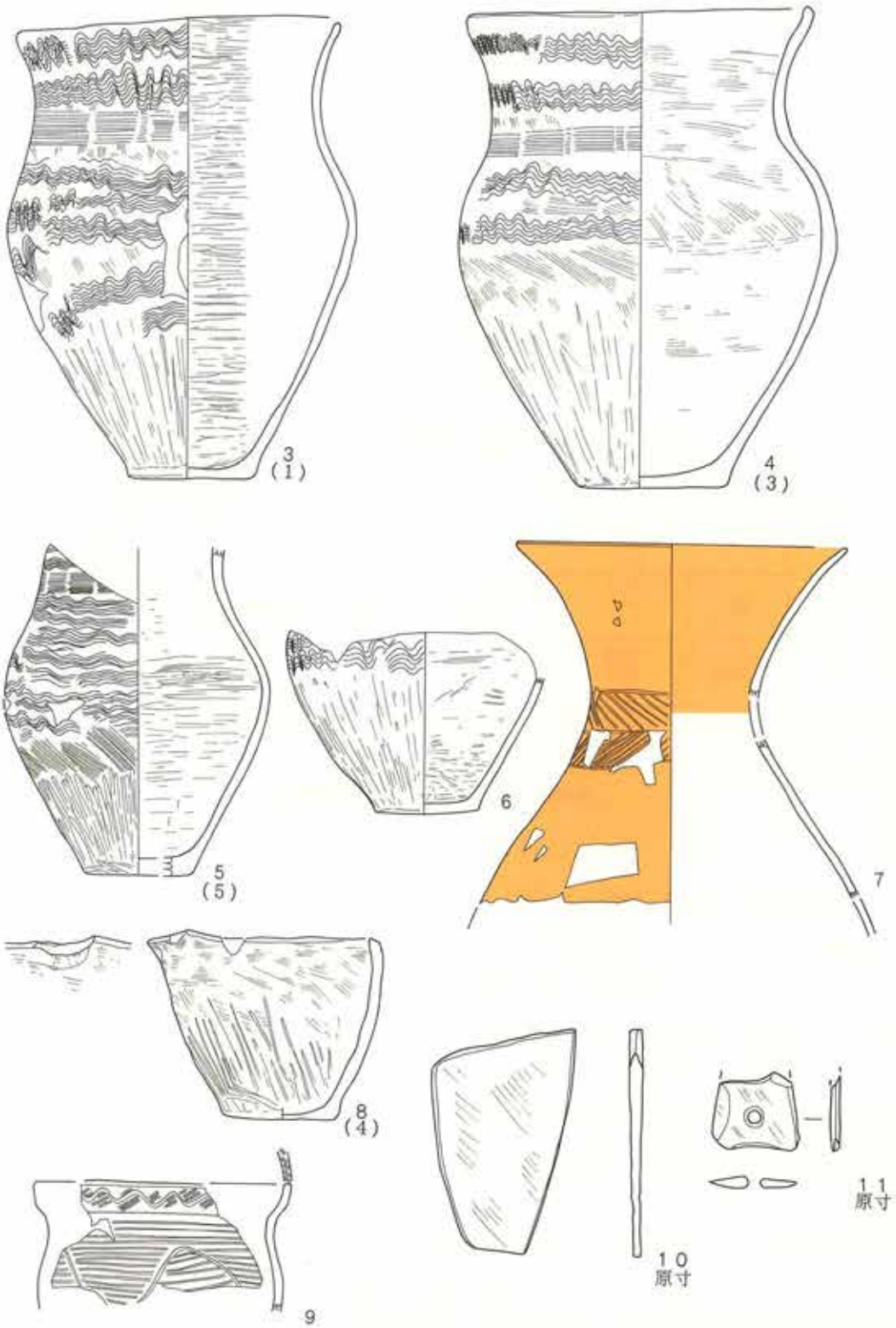
遺物－甕（1～6・9）、壺（7）、片口（8）、磨製石鏃（11）、石製品（10）が出土している。甕は5・9を除く全てのもが櫛歯状工具により、口縁部・体部に波状文、頸部には簾状文が施される。5がこれらと異なるのは、体部波状文下に斜走文が施される点である。9は受口口縁で口唇部と口縁部に縄文が施される。口縁部には篦状工具による波状文が1本巡る。体部には篦状工具による振り巾の大きな波状文を巡らし、平行沈線を充填している。壺7は内面口縁部と外面が赤彩される。頸部には篦状工具により3本の平行沈線を巡らし、この間に綾杉状に斜位の沈線を充填する。片口8は鉢の口縁部に片口を1ヶ所造り出したもので、内外面に刷毛目調整と篦磨き調整が施される。10については石製品と言うだけで性格は不明である。



1　耕　　作　　土。
2　灰黄褐色土層（10YR4/2）。φ1㎜以下石粒、パミスを含む。
3　灰黄褐色土層（10YR4/2）。10YR6/6粒子多含。
4　褐　色　土　層（10YR4/1）。石粒多含。
5　にぶい黄褐色土層（10YR4/3）。10YR6/6粒子多含。
6　明黄褐色土層（10YR6/6）。
7　柱　　痕（10YR3/2）。



第66図　H117号住居址（1）



第67図　H117号住居址（2）

挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
－1	甕	16.0 6.4 22.4	内－篦磨き。 外－口縁部：櫛描波状文、頸部：簾状文、体部：櫛描波状文。	No.2
－2	甕	21.2 8.4 29.2	内－篦磨き。 外－口縁部：波状文、頸部：簾状文、体部：櫛描波状文。	No.1
－3	甕	20.0 7.6 28.6	内－篦磨き。 外－口縁部：波状文、頸部：簾状文、体部：櫛描波状文。	No.1
－4	甕	21.4 9.0 29.8	内－篦磨き。 外－口縁部：波状文、頸部：簾状文、体部：櫛描波状文。	No.3
－5	甕	－ 6.4 －	内－篦磨き。 外－口縁部：櫛描波状文、頸部：簾状文、体部：櫛描波状文・斜走文。	
－6	甕	－ 6.4 －	内－篦磨き。 外－体部：櫛描波状文。	
－7	壺	20.6 － －	内－口縁部：赤彩。ナデ・刷毛目。 外－赤彩、頸部：篦描平行沈線間に綾杉状沈線。	
－8	片口	13.0 6.6 11.2	内外－刷毛目・篦磨き。	No.4
－9	甕	16.0 － －	内－篦磨き。 外－口唇部：縄文、口縁部：縄文＋篦描き波状文、体部篦描波状文・平行沈線。	
－10	石製品	3.40 2.15 0.15		3.0ｇ
－11	磨製石鏃	1.30 1.10 0.15		0.5ｇ

第58表　H117号住居址出土遺物観察表

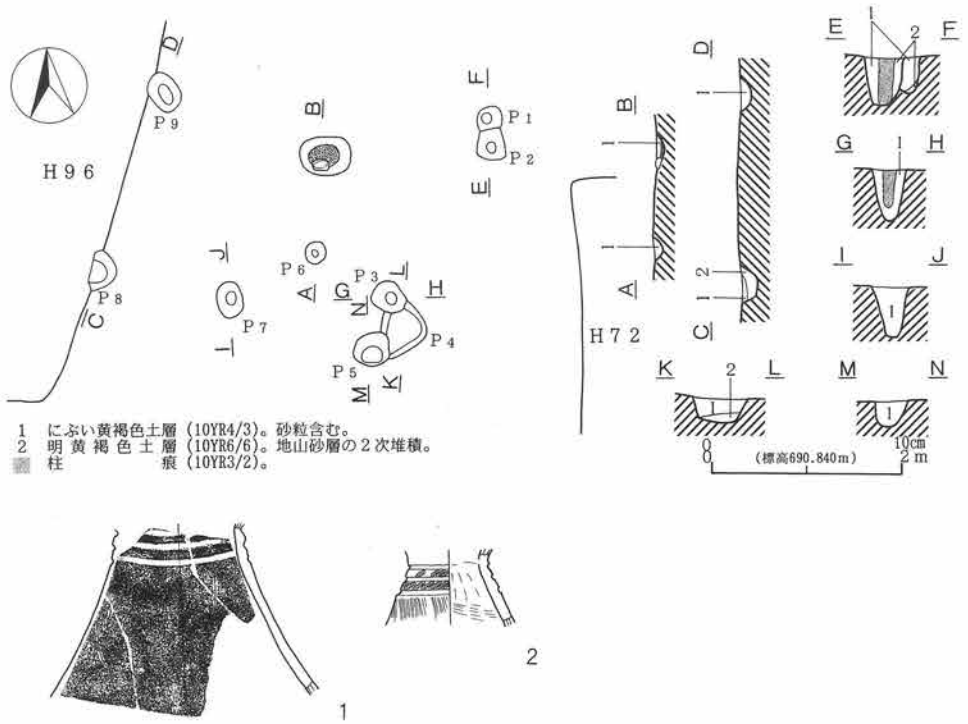
H118号住居址（第68図、図版百六十八）

遺構－Ⅶく３グリットで検出された。H72号・H96号住居址に切られる。耕作による削平により、壁が存在しない。床面とPit・炉址が確認されている。炉址は地床炉で礫１ヶを伴う。長径0.55ｍ×短径0.4ｍ×深度0.08ｍの規模である。９基検出されたPitの内、Ｐ２・Ｐ３において直径15cm・13cmの柱が確認されている。

挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
－1	壺	－ － －	内－ナデ・刷毛目。 外－頸部：篦描平行沈線。	
－2	壺	－ － －	内－ナデ・刷毛目。 外－頸部：篦描平行沈線間に縄文。	

第59図　H118号住居址

遺物－壺が２点出土している。１は頸部に篦状工具による平行沈線が巡るもの、２は頸部の平行沈線間に縄文を施している。



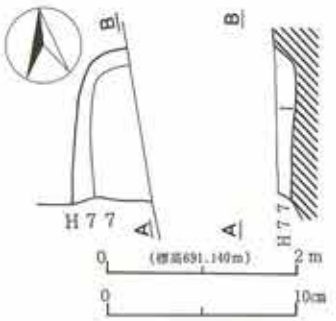
第68図　H118号住居址

H120号住居址（第69図、図版四十七・百六十八・百六十九）

遺構－Ⅶき１グリットで検出された。H77号住居址に切られる。H77号住居址による破壊と、調査区域外に延びるため形状・規模等は判然としない。壁残高0．22ｍを測る。調査範囲内にはPit・炉址等の施設は存在しなかった。覆土は自然堆積である。

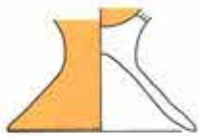
遺物－甕（１）、壺（３～５）、高杯（２）、石器（６・７）、鉄器（８）が出土している。甕１は頸部に簾状文を巡らしその直上に１条の櫛歯状工具による波状文を施し、体部にも波状文が施文される。壺３は口唇部に縄文を施し、頸部に巡らした４本の篦状工具による平行沈線間と下に縄文を施文する。５は頸部に巡らした３本の篦状工具による平行沈線下に縄文を施している。４は外面赤彩が施され、頸部から垂下させた刺突列により囲まれた縦位の文様帯内に櫛波状工具による条線を充填する。その直下には篦状工具による平行沈線により横位の文様帯が造られ、縄文が充填される。高杯２は脚内を除き赤彩される。石器は６の磨製石鏃と７の編物石が出土してい

る。８の鉄器は紡錘車の軸である。混入品である。



1　黒褐色土層（10YR3/2）。φ5mm以下パミス、10YR6/6粒子少含。

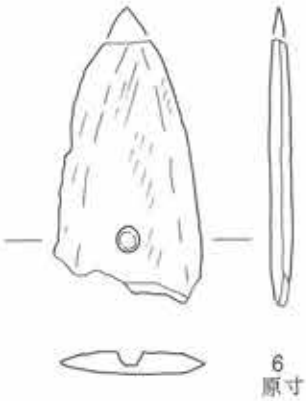
1


2

3

4

5


6
原寸

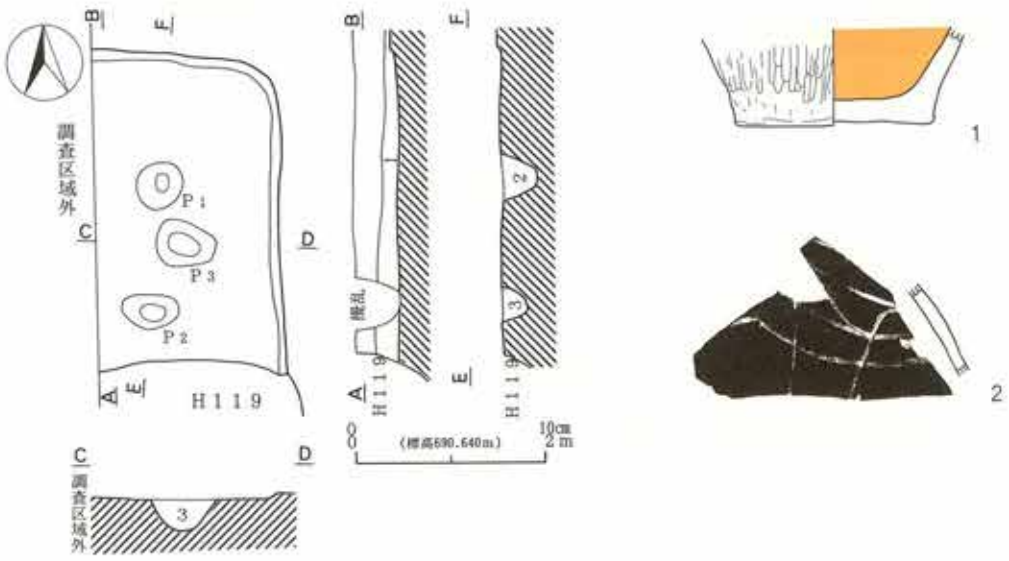
7

8

第69図　H120号住居址

挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
－1	甕	24.5 － －	内－篦磨き。 外－口縁部：櫛描波状文、頸部：扁状文、体部：櫛描波状文。	
－2	高杯	－ 10.0 －	内－赤彩、脚内：ナデ。 外－赤彩。	
－3	壺	13.2 9.4 37.2	内－刷毛目・ナデ。 外－口唇部：縄文、頸部：篦描平行沈線・縄文。	
－4	壺	－ － －	内－刷毛目。 外－赤彩。頸部：刺突列により区画された縦位文様帯内に櫛描条線、その下部に篦描平行沈線と縄文。	
－5	壺	14.0 9.6 36.0	内－刷毛目・ナデ。 外－頸部：篦描平行沈線・縄文。	
－6	磨製石鏃	3.3 1.9 0.3		2.5g
－7	編物石	11.1 4.2 2.1		200.0g
－8	紡錘車	2.5 0.4 0.5		1.6g

第60表　H120号住居址出土遺物観察表



1　にぶい黄橙色土層（10YR6/4）。φ5mm以下パミス、10YR6/6粒子多含。
2　にぶい黄褐色土層（10YR5/3）。φ5mm以下パミス、10YR6/6粒子を含む。
3　灰黄褐色土層（10YR4/2）。10YR6/6粒子多含。

第70図　H121号住居址

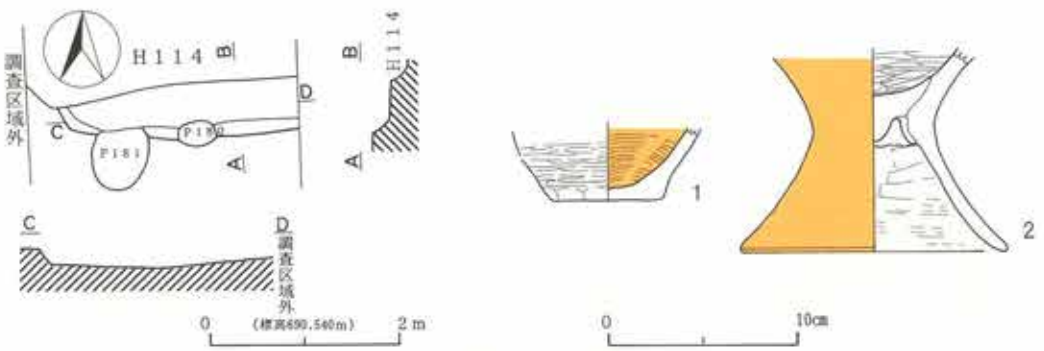
H121号住居址（第70図、図版四十七・百六十九）

遺構－Ⅴあ10グリットで検出された。H119号住居址に切られる。H119号住居址による破壊と、調査区域外に延びるために形状・規模は判然としない。壁残高0.1ｍを測る。調査範囲内には炉址は存在せず、３基検出されたPitも性格を判断しかねる。周溝は有さず、覆土は自然堆積である。

遺物－壺が２点出土している。１は内面が赤彩され、外面には篦磨き調整が施される底部片である。２は体部の破片で、篦状工具による弧線文が施されている。

挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
－1	壺	－ 10.0 －	内－赤彩。 外－篦磨き。	
－2	壺	－ － －	内－ナデ・刷毛目。 外－篦描弧線文。	

第61表　H121号住居址出土遺物観察表



第71図　H123号住居址

挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
－1	壺	－ 5.6 －	内－赤彩。 外－篦磨き。	
－2	台付壺	－ 14.2 －	内－脚内：ナデ・刷毛目。他は篦磨き。 外－赤彩。	

第62表　H121号住居址出土遺物観察表

H123号住居址（第71図、図版百六十九）

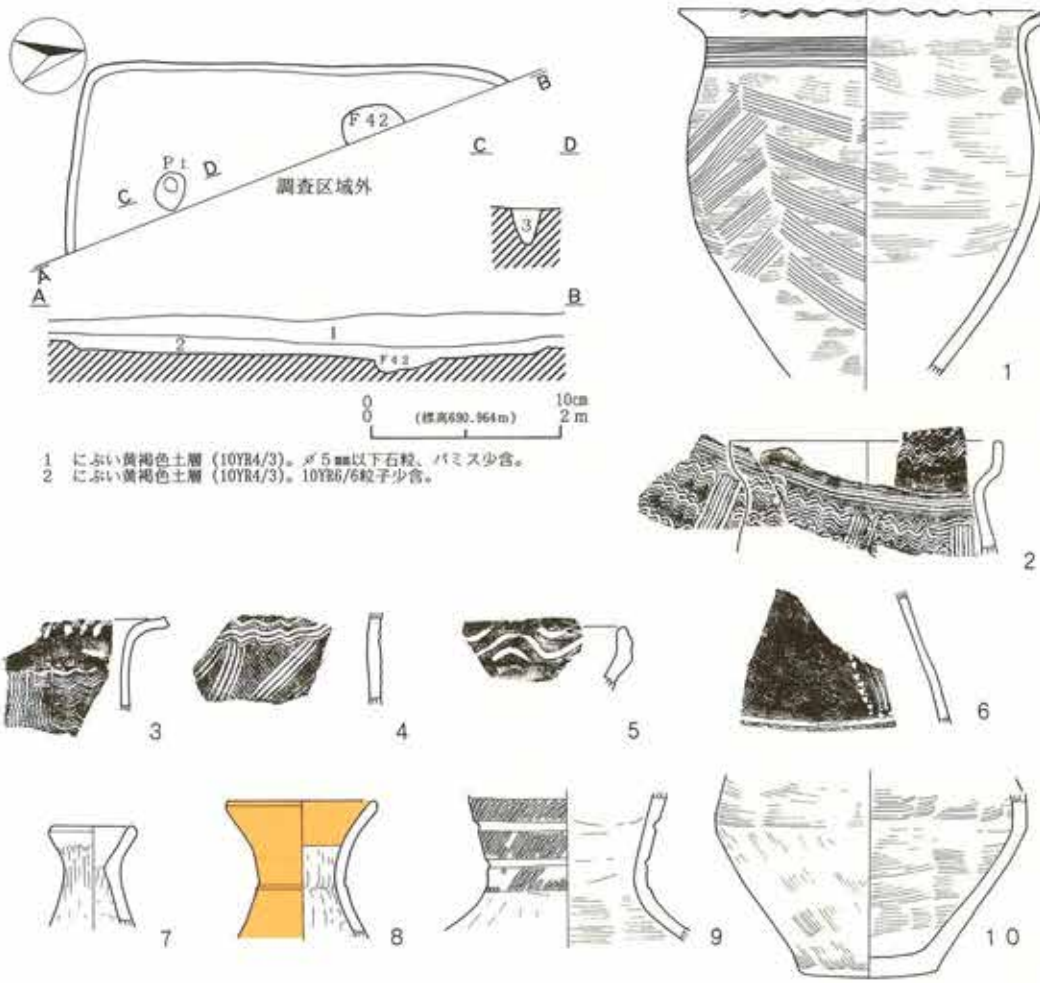
遺構－Ⅴけ10グリットで検出された。H114号住居址に切られ、住居の大半が消滅しているた

め、規模・形状等は判然としない。調査範囲内にはPit・炉址等の施設は存在しなかった。壁残高0.18ｍを測る。

遺物－壺（1）、台付壺（2）が出土している。壺は内面赤彩、外面篦削り～篦磨き調整が施される底部片である。台付壺は、外面赤彩、脚内ナデ・刷毛目、内面篦磨き調整が施される。

H139号住居址（第72図、図版百七十六）

遺構－Ⅸい9グリットで検出された。H153号住居址を切り、F42号掘立柱建物址に切られる。住居の大半が調査区域外に延びるため形状、規模等は判然としない。壁残高0.1ｍを測る。調査範囲内には炉址は存在しなかった。Pitは1基検出されたが性格は不明である。覆土は自然堆積で、周溝は有さない。



第72図　H139号住居址

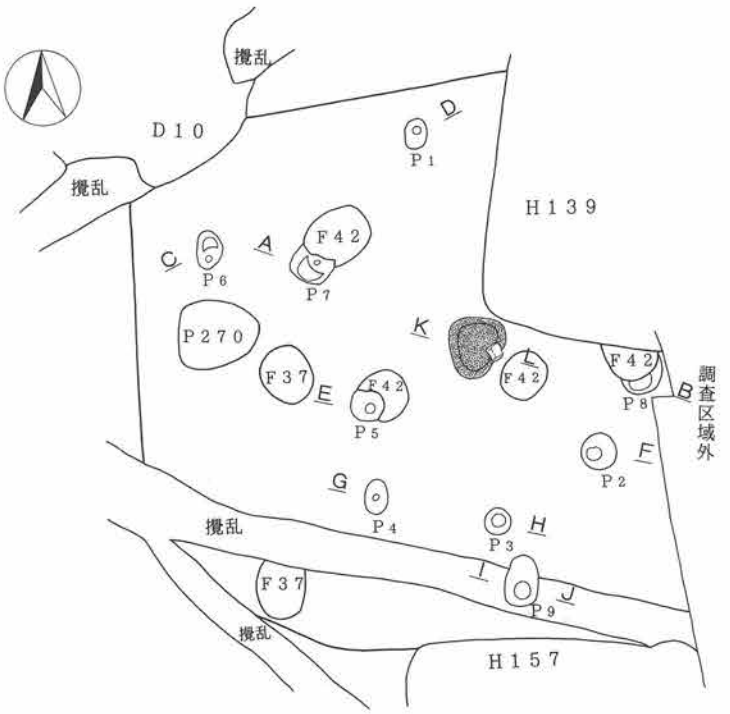
遺物－甕（1～5）、壺（6～10）が出土している。甕1は押捺による波状口縁の口唇部に縄文を施し、頸部には櫛歯状工具による条線を巡らす、体部には斜走文が施文されている。2は口唇部に縄文を施し、口縁部には櫛歯状工具による波状文を、頸部には条線を巡らし、頸部の条線下端から体部を縦位分割する縦の条線を垂下させる。そしてこの縦の条線間には櫛歯状工具による波状文を横位に充填している。3は2と同様な体部文様構成であるが、口縁部の文様帯を持たず、口唇部には刻目が施されている。4は頸部に1状の櫛歯状工具による波状文を巡らし、体部には斜走文が施される。5は口縁部に篦状工具による波状文が施される。壺6は・頸部から刺突列により区画される文様帯を垂下させ、文様体内部を条線で充填している。7は無文の口縁部片、8は頸部に1条の沈線を巡らし、外面と内面口縁部が赤彩される。9は頸部に篦状工具による平行沈線を巡らし、平行沈線間に縄文を施している。10は底部で、内外面に刷毛目調整が施されている。

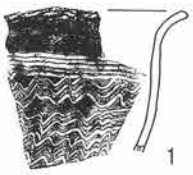
挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
－1	甕	19.9 － －	内－刷毛目。 外－口唇部：縄文、頸部：櫛描条線、体部：斜走文。	
－2	甕	－ － －	内－篦磨き。 外－口唇：縄文、頸部：櫛描条線、体部：縦位条線＋横位波状文。	
－3	甕	－ － －	内－篦磨き。 外－口唇部：刻目、体部：縦位条線＋横位波状文。	
－4	甕	－ － －	内－篦磨き。 外－頸部：櫛描波状文、体部：波状文。	
－5	甕	－ － －	内－篦磨き。 外－口縁部：篦描波状文。	
－6	壺	－ － －	内－刷毛目。 外－刺突列・条線。	
－7	壺	4.6 － －	内外－篦ナデ。	
－8	壺	8.1 － －	内－口縁部：赤彩。 外－赤彩、頸部：沈線。	
－9	壺	－ － －	内－刷毛目、ナデ。 外－頸部：篦状工具による平行沈線間に縄文。	
－10	壺	－ 7.1 －	内外－刷毛目。	

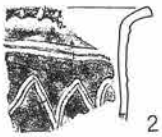
第63表　H120号住居址出土遺物観察表

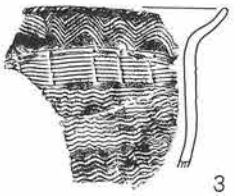
H153号住居址（第73・74図、図版百八十六）

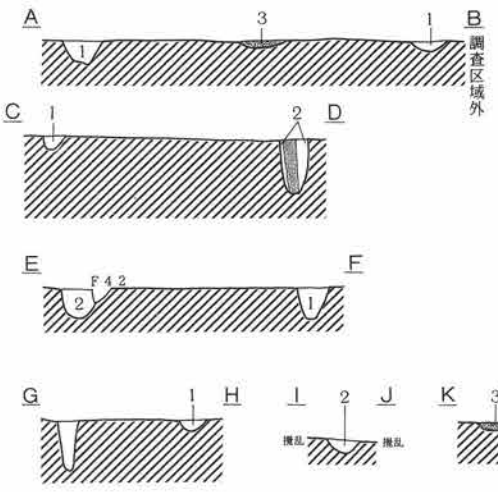
遺構－ⅩⅠあ10グリットで検出された。H139号・H157号住居址、F37号・F42号掘立柱建物

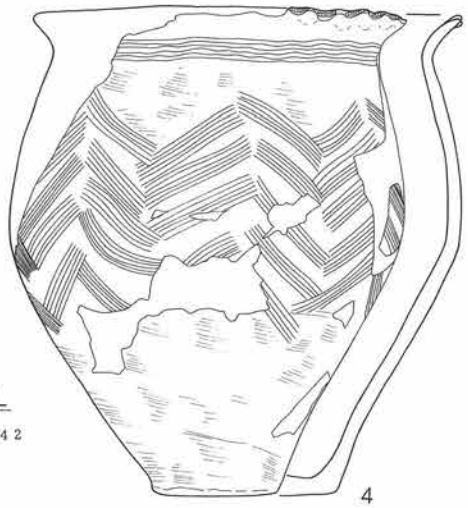



1

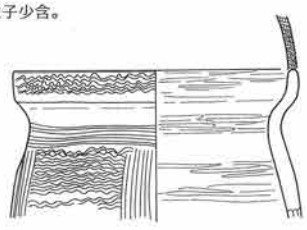

2

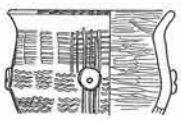

3




4

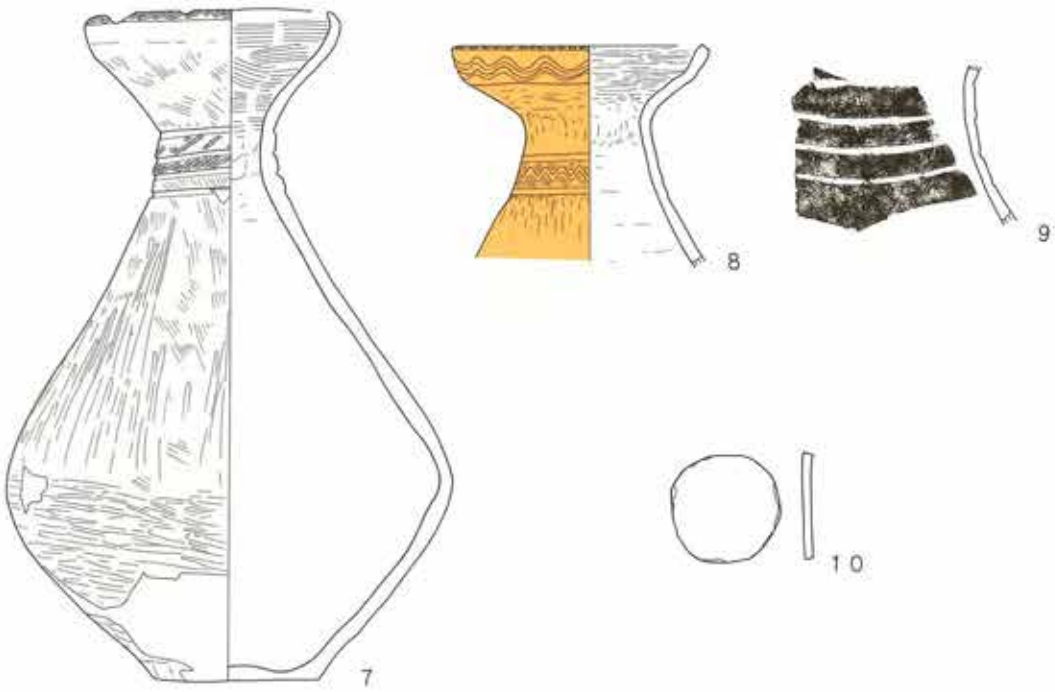
1　暗褐色土層（10YR3/3）。10YR6/6粒子少含。
2　黒褐色土層（10YR2/2）。10YR6/6粒子少含。
3　黒褐色土層（10YR2/2）。10YR6/6粒子、焼土粒子少含。
　灰黄褐色土層（10YR4/2）。柱痕。


5


6

0　10cm
0　（標高691.094m）　2 m

第73図　H153号住居址（1）



第74図　H153号住居址（2）

址、D10号土坑に切られる。本址は耕作等により壁が消滅しており、住居の範囲は床面の広がりで把握した。そのため形状・規模等については判然としない。炉址は地床炉で、住居の中央と思われる付近に構築されている。長径0.65ｍ×短径0.62ｍ×深度0.05ｍを測る。Pitは９基検出され、Ｐ１・Ｐ４の２基は主柱穴と思われる。Ｐ１では直径12㎝の柱が確認された。周溝は確認されなかった。

遺物―甕（１～５）、台付甕（６）、壺（７～９）、土器片円盤（10）が出土している。甕１は頭部に櫛歯状工具による条線を巡らし、体部に櫛歯状工具による波状文を施す。２は口唇部に刻目を施し、先端が２本の工具により頭部に条線、体部に波状文を巡らす。３は口唇部に縄文を施す。櫛歯状工具により頭部には廉状文を巡らし、口縁部と体部には波状文を施している。４は口唇部に押捺を加え波状とし、縄文を施す。櫛歯状工具により頭部には条線を、体部には斜走文を施文する。５は口唇部に縄文を施し、櫛歯状工具により、口縁部は波状文、頭部は条線、体部は器面を縦位に分割する条線と、横位の波状文が施文される。台付甕６は口唇部に縄文を施し、櫛歯状工具により頭部に廉状文、体部に波状文を施文する。これらを頭部から縦位に４分割する条線と貼付文が付加される。壺７は口唇部に縄文、頭部に篦状工具による４本の平行沈線を巡らし、この間に縄文を施している。８は口唇部に縄文を施し、口縁部に波状文を巡らす。頭部には篦状

工具による2本の平行沈線が巡り、この間に1本の波状文が施される。外面が赤彩される。9は頸部に篦状工具による平行沈線が巡る。

挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
－1	甕	－ － －	内－篦磨き。 外－口唇部：縄文、頸部：櫛描条線、体部：櫛描波状文。	
－2	甕	－ － －	内－篦磨き。 外－口唇：刻目、頸部：条線、体部：波状文。	
－3	甕	－ － －	内－篦磨き。 外－口唇部：縄文、頸部：簾状文、口縁部。体部：櫛描波状文。	
－4	甕	22.6 8.6 26.0	内－篦磨き。 外－口唇部：押捺・縄文、頸部：櫛描条線、体部：斜走文。	
－5	甕	15.1 － －	内－篦磨き。 外－口唇部：縄文、口縁部：櫛描波状文、頸部：櫛描条線、体部：縦位櫛描条線・波状文。	
－6	台付甕	8.8 － －	内－篦磨き。 外－口唇部：縄文、頸部：簾状文、体部：波状文・縦位条線・円形貼付文。	
－7	壺	12.4 8.8 35.4	内－刷毛目・ナデ。 外－口唇部：縄文、頸部：篦描平行沈線間に縄文。	
－8	壺	13.6 － －	内－刷毛目・ナデ。 外－赤彩、口唇部：縄文、口縁部：波状文、頸部：篦描平行沈線間に波状文。	
－9	壺	－ － －	内－刷毛目、ナデ。 外－頸部：篦状工具による平行沈線。	
－10	土器片円盤	5.7 5.5 0.5		22.4ｇ

第64表　H153号住居址出土遺物観察表

H168号住居址（第75図、図版百九十三）

遺構－Xい6グリットで検出された。調査範囲では重複関係は有さない。住居の大半は調査区域外に延びるため規模・形状は不明である。壁残高0.7ｍを測る。炉址は調査範囲内には存在しなかった。1基検出されたPitは性格不明である。覆土は自然堆積であり、周溝は有さない。

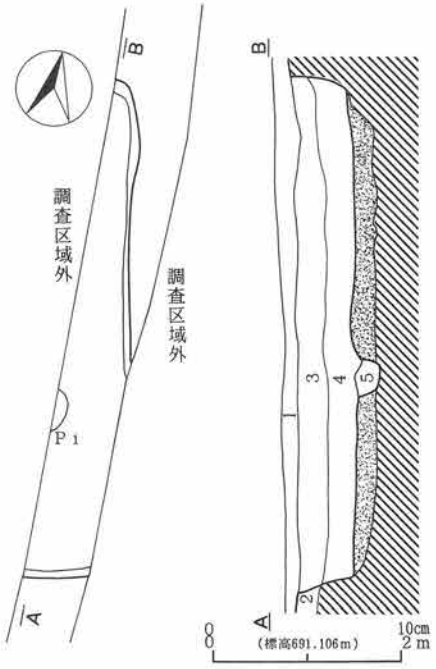
遺物－甕（1）、土器片円盤が出土している。甕は口唇部に刻目を施し、頸部に簾状文を巡らす。体部には櫛歯状工具による斜走文が施される。土器片円盤は、土器の破片の周囲を打ち欠いて円盤にしたものである。

挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
－1	甕	17.3 － －	内－篦磨き。 外－口唇部：刻目、頸部：簾状文、体部：櫛描斜走文。	

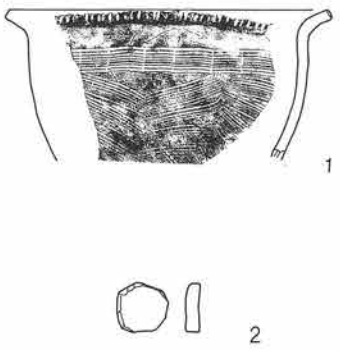
第65表　H168号住居址出土遺物観察表（1）

挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
－2	土器片円盤	2.7 2.6 0.7		6.5g

第66表　H168号住居址出土遺物観察表（2）



1　客　　土。
2　黒褐色土層（10YR3/2）。
3　暗褐色土層（10YR3/3）。砂粒、石粒多含。
4　黒褐色土層（10YR2/3）。砂粒、石粒多含。
5　黒褐色土層（10YR3/2）。砂粒、石粒多含。
6　黒褐色土層（10YR3/2）。ローム、砂粒多含。住居掘方埋土。



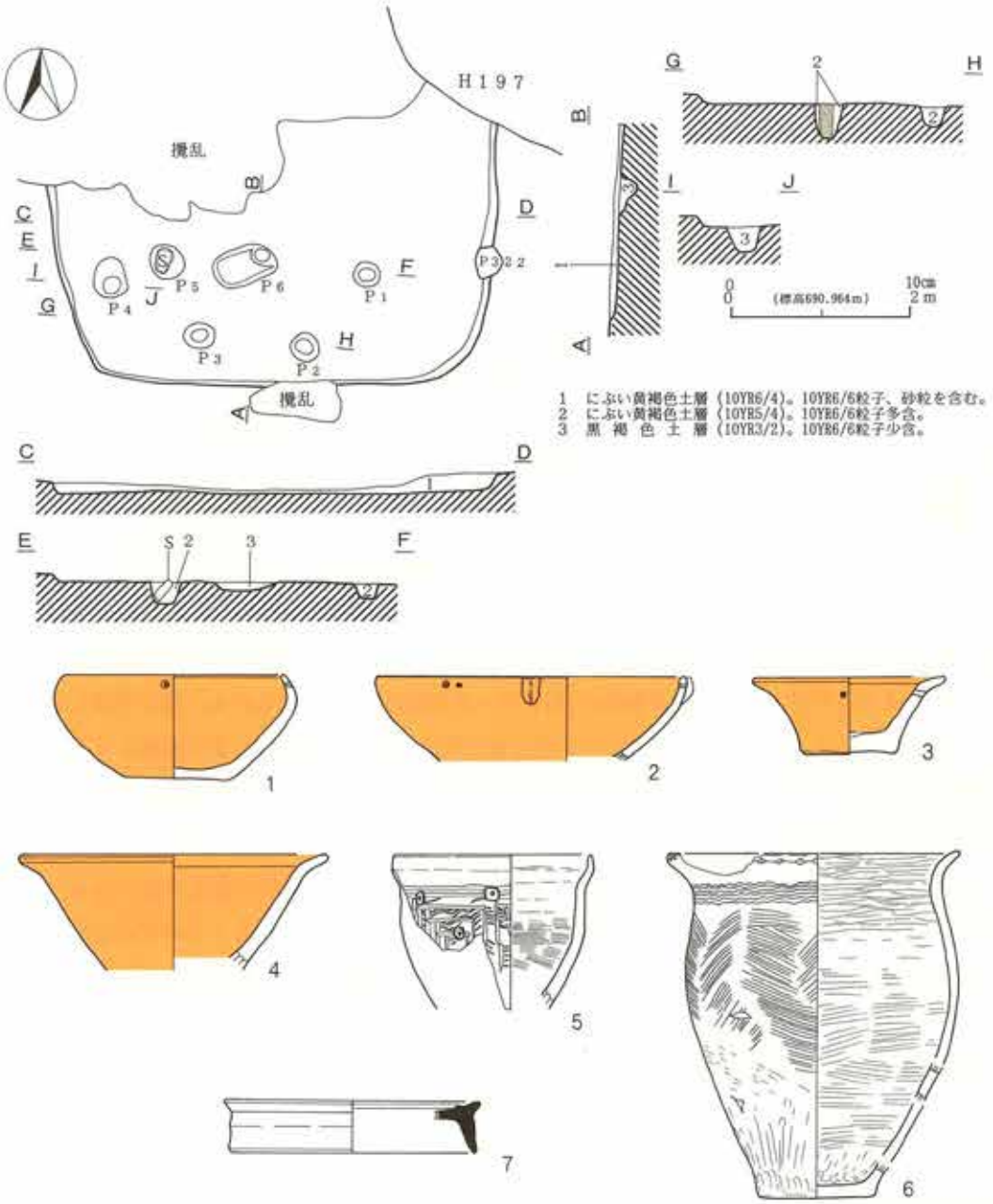
第75図　H168号住居址

H178号住居址

（第76図、図版七十一・百九十六　）

遺構－Xこ3グリットで検出された。H197号住居址と攪乱に切られる。住居の大半が攪乱とH197号住居址により消滅するため規模・形状は判然としない。調査範囲内には炉址は存在しなかった。6基検出されたPitの性格は直径15cmの柱が確認さ　れたＰ３が柱穴であることは明らかであるが、位置的に主柱穴とは考えにくく、しかし、規模的に他のPitは劣るため、その性格は特定できない。覆土は自然堆積で、周溝は有さない。

遺物－鉢（1～3）、高杯（4）、甕（5・6）、混入品の須恵器蓋（7）が出土している。鉢は全てが内外面ともに赤彩され、口縁端部に1～2ケの小孔が穿たれる。2は口縁端部に突起が付加される。高杯も内外面が赤彩され、口縁部が端部で大きく外反する。甕5は受口口縁を呈し、頸部に櫛歯状工具による条線が巡る。体部には波状文を施文した後、篦状工具により連続「コ」字文と円形貼付文が付加される。6は口唇部に刻目を施し、頸部に波状文、体部には斜走文が櫛歯状工具により施文される。内面には刷毛目・篦磨き調整が施される。須恵器蓋は短頸壺等の壺類の蓋と思われる。混入品である。



第76図　H178号住居址

挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
－1	鉢	12.5 5.5 5.9	内外－赤彩、口縁端部に小孔。	
－2	鉢	17.8 － －	内外－赤彩、口縁端部に小孔・突起。	
－3	鉢	10.9 5.0 4.3	9内外－赤彩、口縁端部に小孔。	
－4	高杯	17.4 － －	内外－赤彩。	
－5	甕	11.3 － －	内－刷毛目・ナデ。 外－頸部：櫛描条線、体部：櫛描波状文・篦描連続「コ」字文・円形貼付文。	
－6	甕	16.2 6.6 9.7	内－刷毛目・篦磨き。 外－口唇部：刻目、頸部：櫛描波状文、体部：斜走文。須恵器混入品。	
－7	蓋	13.6 － 3.0		混入品。

第66表　H178号住居址出土遺物観察表

H191号住居址（第77図、図版七十五・百九十九）

遺構－Xこ3グリットで検出された。H198号・H199号住居址に切られる。壁が存在しないため形状は判然としない。また、規模についてもH198号・H199号住居址により消滅してしまった部分が多く、不明である。調査範囲内には炉址は存在しなかった。Pitは4基検出されたが、その性格は不明である。

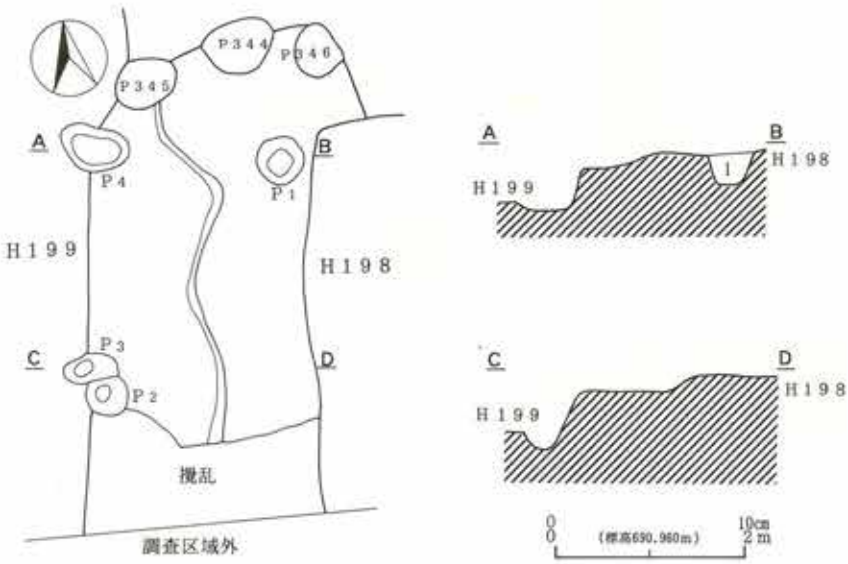
遺物－甕（1～5）、鉢（6）が出土している。甕は3を除き口唇部に縄文が施される。1は体部に櫛歯状工具による斜走文が施される。2は口縁部に篦状工具による1本の波状文が巡り、体部には櫛歯状工具による波状文が施される。3は体部に円形貼付文と櫛歯状工具による波状文が施される。4は口縁部にも縄文が施され、更に篦状工具による2本の波状文が巡り、円形貼付文が付加される。5は口縁部に縄文と篦状工具による1本の波状文が巡り、体部には縄文を地文として、円形貼付文を伴う連続「コ」字文が施される。鉢6は内外面が赤彩される。

挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
－1	甕	－ － －	内－篦磨き。 外－口唇部：縄文、体部：櫛描斜走文。	
－2	甕	－ － －	内－篦磨き。 外－口唇部：縄文、口縁部：篦描波状文、体部：櫛描波状文。	

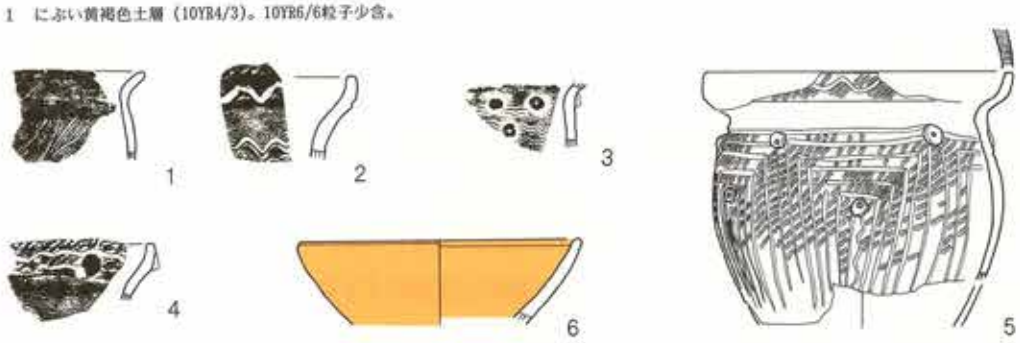
第67表　H191号住居址出土遺物観察表（1）

挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
－3	甕	－ － －	内－篦磨き。 外－体部：櫛描波状文＋円形貼付文。	
－4	甕	－ － －	内－篦磨き。 外－口唇部：縄文、口縁部：縄文＋篦描波状文＋円形貼付文。	
－5	甕	16.2 － －	内－篦磨き。 外－口唇部：縄文、口縁部：縄文＋篦描波状文、体部：縄文＋連続「コ」字文＋円形貼付文。	
－6	鉢	15.0 － －	内外－赤彩。	

第68表　H191号住居址出土遺物観察表（2）



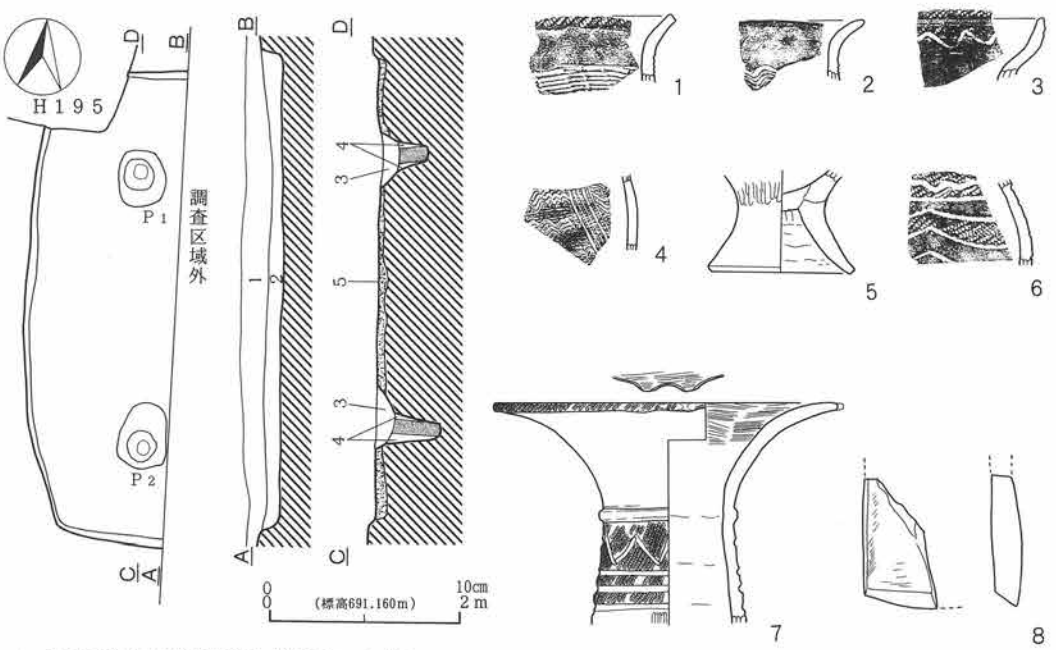
1　にぶい黄褐色土層（10YR4/3）。10YR6/6粒子少含。



第77図　H191号住居址

H196号住居址（第78図、図版七十八・二百六）

遺構－Ⅸけ10グリットで検出された。H195号住居址に切られる。住居の大半は調査区域外に延びるため、規模・形状等は判然としない部分が多い。壁残高0.26ｍを測る。調査範囲には炉址は存在しなかった。２基検出されたPitは共に主柱穴で直径14～16㎝の柱が確認された。覆土は自然堆積で、周溝は有さない。



1　にぶい黄褐色土層（10YR4/3）。10YR8/4ローム少含。
2　にぶい黄褐色土層（10YR4/3）。10YR8/4ローム多含。10YR2/2ブロック少含。
3　黒褐色土層（10YR3/2）。10YR8/4ローム少含。
5　にぶい黄褐色土（10YR4/3）、10YR8/4ロームの混在土層。住居掘方埋土。
■　黒褐色土層（10YR3/2）。柱痕。

第78図　H196号住居址

遺物－甕（１～４）、台付甕（５）、壺（６・７）、磨製石斧（８）が出土している。甕１は口唇部に縄文を施し、頸部には廉状文が巡る。２は頸部下に櫛歯状工具による波状文が巡る。３は口唇部～口縁部に縄文を施し、篦状工具による１本の波状文が口縁部に巡らされる。４は櫛歯状工具による縦位の条線が体部を分割し、横位の櫛歯状工具による波状文が充填される。台付甕は脚部のみの破片である。内面ナデ、外面篦磨き調整が施される。壺６は篦状工具による平行沈線や弧文間に縄文や波状文が施される。７は口縁部の突起が４ヶ所付き、口唇部に縄文が施される。頸部には隆帯と篦状工具による平行沈線が巡り、その間に鋸歯状の沈線や縄文が施される。磨製石斧８は片刃である。

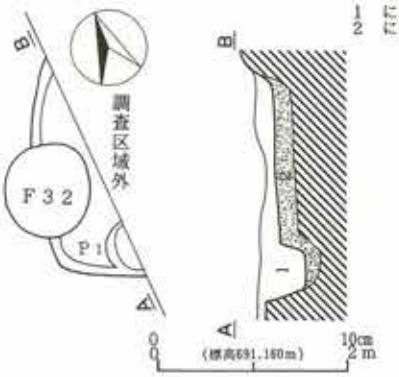
挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
－1	甕	－ － －	内－箆磨き。 外－口唇部：縄文、頸部：櫛描廉状文。	
－2	甕	－ － －	内－箆磨き。 外－櫛描波状文。	
－3	甕	－ － －	内－箆磨き。 外－口唇部：縄文、口縁部：縄文・箆描波状文。	
－4	甕	－ － －	内－箆磨き。 外－櫛描縦位条線・横位波状文。	
－5	台付甕	－ 7.8 －	内－ナデ。 外－箆磨き。	
－6	壺	－ － －	内－箆磨き。 外－箆描平行沈線・弧文間に縄文・波状文。	
－7	壺	18.6 － －	内－刷毛目・ナデ。 外－口唇部：縄文、口縁部：突起、頸部：隆帯・平行沈線間に縄文・箆描鋸歯状沈線。	
－8	磨製石斧	6.9 3.8 1.5		64.3g

第69表　H196号住居址出土遺物観察表

H200号住居址（第79図、図版二百八）

遺構－Ⅸく10グリットで検出された。住居の大半は調査区域外に延びるため、規模・形状等は判然としない。壁残高0．22mを測る。調査範囲内には炉址は存在しなかった。1基検出されたPitの性格は不明である。覆土は自然堆積で、周溝は有さない。

遺物－口唇部に縄文を施し、内外面赤彩される壺の口縁部片（1）と、土器片の周縁を打ち欠き円形にした、土器片円盤（2）が出土している。



1　にぶい黄褐色土層（10YR5/3）。10YR8/4ローム、炭化物を含む。
2　にぶい黄褐色土（10YR5/3）、灰黄褐色土（10YR4/2）、ロームの混在土層。住居掘方埋土。

第79図　H200号住居址

挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
－1	壺	－ － －	内－赤彩。 外－口唇部：縄文、赤彩。	
－2	土器片円盤	3.9 3.3 1.3		21.9ｇ

第70表　H200号住居址出土遺物観察表

2　古墳時代の住居址

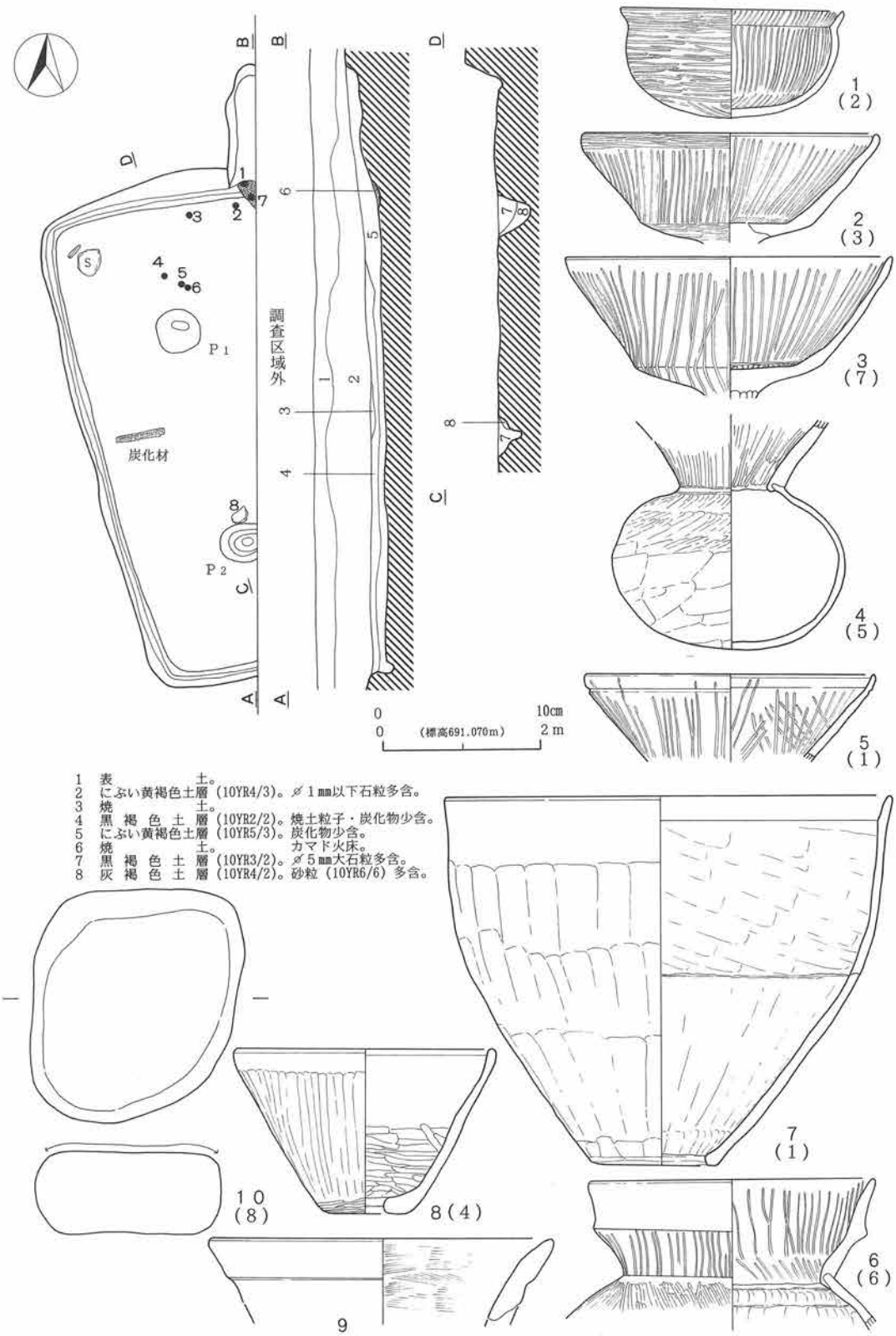
Ｈ５号住居址（第80図、図版三・百一）

遺構－Ｉか５グリットで検出された。Ｈ９号住居址を切っている。調査区域外東方向に延びるため全容は判然としない。カマドは北壁の調査区域外との境において検出され、壁外に延びる煙道と火床の一部分と思われる焼土が確認された。周溝が調査囲内の住居壁下に巡らされていた。２基検出されたPitはいずれも主柱穴と考えられる。覆土は自然堆積の状況を呈していたが、４・５層中及び床面上からは少なからぬ量の炭化物が出土した。

遺物－坏（１）、高杯（2.3）、壺（４・５・６・９）、甑（７・８）、磨石（10）が出土している。全て土師器である。坏は深い半球状を呈し、短い口縁部が外反するもので、内面は放射状の暗文のように、外面は横位に篦磨きが施されている。高杯は２点共に坏部のみが出土している。底部と体部の境に稜をもち、口縁端部が内湾気味に立ち上がる。２は外面底部と口縁部に横位の篦磨きが加えられる他は、放射状暗文のような篦磨きが施されている。３は内外面放射暗文状篦磨きが施される。壺も全容のわかるものは存在しないが、４のような小型で丸底の壺には、

挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
－1	土師器 坏	14.2 － 6.9	内－放射暗文状篦磨き。 外－横位篦磨き。	No.2
－2	土師器 高杯	18.9 － －	内－放射暗文状篦磨き。 外－口縁・底部：横位篦磨き、他は放射暗文状篦磨き。	No.3
－3	土師器 甕	20.8 － －	内外－放射暗文状篦磨き。	No.7
－4	土師器 壺	－ － －	内－篦磨き。 外－体部下半～底部：篦削り。他は篦磨き。	No.5
－5	壺	－ －	外－篦磨き。口縁に凹線。	No.1
－6	土師器 壺	18.2 － －	内－篦磨き。 外－篦磨き。	有段口縁。 No.6
－7	土師器 甑	28.4 7.4 23.3	内外－篦ナデ。	No.1
－8	土師器 甑	16.7 5.3 14.2	内外－篦ナデ。	No.4
－9	土師器 壺	22.0 － －	内－刷毛目。 外－ナデ。	有段口縁。
－10	磨石	15.0 13.3 5.3		2.02ｇ No.8

第71表　Ｈ５号住居址出土遺物観察表



1　表　　土。
2　にぶい黄褐色土層（10YR4/3）。φ1㎜以下石粒多含。
3　焼　　土。
4　黒　褐　色　土　層（10YR2/2）。焼土粒子・炭化物少含。
5　にぶい黄褐色土層（10YR5/3）。炭化物少含。
6　焼　　土。　　カマド火床。
7　黒　褐　色　土　層（10YR3/2）。φ5㎜大石粒多含。
8　灰　褐　色　土　層（10YR4/2）。砂粒（10YR6/6）多含。

第80図　Ｈ５号住居址

5のような口縁端部が内湾気味に立ち上がる口縁部が付くと思われる。また、9・10のような有段口縁の壺も存在する。甑は小型で単孔の8と大型で底部を有さない7が出土している。どちらも鉢形の形状を呈する。甕そのものは出土していないが、7の甑の大きさから類推すれば比較的大きなものが存在するのであろう。

H10号住居址（第81図、図版五・七・百三）

遺構－Ⅰけ9グリットで検出された。H22、27、38、39を切る。隅丸長方形の平面プランを呈し、N－12°－Eに長軸方位をとる。長軸長4.75m×短軸長4.5m×壁残高0.3m、面積18.65㎡の規模を有する。カマドは北壁中央西寄りに構築されており、所謂「石組粘土カマド」である。長径0.86m×短径0.85m×深度0.28mの規模である。Pitは8基検出され、内2基（P8、P9）
は掘方で検出された。主柱穴はP1～P4の4基と思われる。柱痕は確認できなかった。覆土は自然堆積によるものである。

遺物－土師器の坏（1）、甕（2～5）、壺（7・8）、鉢？（6）、磨石（9）、磨製石斧（10）、臼玉（11）が出土している。坏は有段口縁坏で内面ナデ、外面には篦削りが施されている。甕は2が内外面ナデ調整、3は内外面に刷毛目調整を施すもので、灰色で金雲母を多含する特徴的な胎土を有している。4は内面篦ナデ、外面刷毛目～篦削り調整が施されるもの、5は内面篦ナデ、外面篦削りが施されている。壺7は外面と内面頸部までが赤彩される。8は丸底で内外面篦磨きが施される。6は器種が判然としない。内面篦磨き、外面には篦ナデ調整が施される。9の磨石は、ほぼ全面が円滑である。10の片刃の磨製石斧は混入遺物、11は滑石製の臼玉である。

H13号住居址（第82・83図、図版七・百五）

遺構－Ⅰけ10グリットで検出された。H41を切る。西側半分が調査区域外に延びるが、ＩＮＰⅡの調査において、H60号住居址として調査済みである。壁残高0.38mを測る。北壁のほぼ中央部分にカマドが構築されている。カマドの規模は深度0.32m以外は不明である。3基検出されたPitの内P1、P2の2基が主柱穴である。P1覆土において直径12cmの柱が確認されている。覆土は自然堆積である。

遺物－土師器、石器、石製品が出土している。土師器には、坏（1）、高杯（2、3）、小型壺（4、5）、甕（6～8）、壺（9、10）が認められる。1の坏は口縁部が内湾するもので、内外面共に篦磨きが施される。高杯は2点共に放射状の篦磨きが施される。脚は欠損するため形状は不明である。小型壺は、広口で短い口縁部が緩く外反する球胴のもので、内外面に篦磨きが施される。甕は6、7のように刷毛目調整の後に篦削りを加えるものと、8のように篦削り調整のも

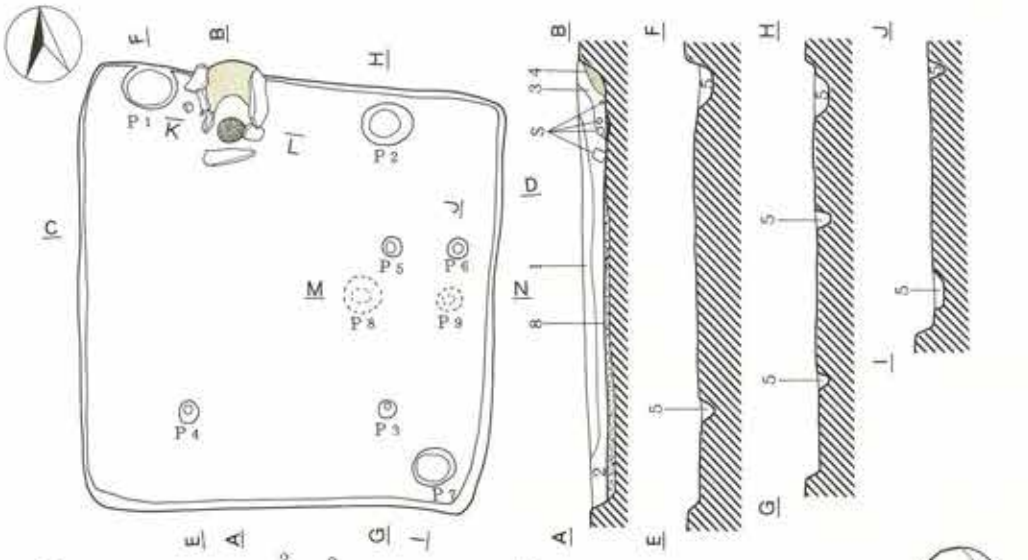
挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
－1	土師器 坏	13.4 11.9 4.4	内－ナデ。 外－篦削り。	有段口縁坏。
－2	土師器 甕	15.2 － －	内外－ナデ。	
－3	土師器 甕	14.1 － －	内外－刷毛目。 灰色金雲母多含の胎土。	
－4	土師器 甕	19.3 － －	内－篦ナデ。 外－刷毛目～篦削り。	
－5	土師器 甕	－ 7.1 －	内－篦ナデ。 外－篦削り、篦ナデ。	
－6	土師器 ？	11.1 － －	内－篦磨き。 外－篦ナデ。	
－7	土師器 壺	14.0 － －	内－頸部まで赤彩。以下は篦ナデ。 外－赤彩。	
－8	土師器 壺	－ 8.1 －	内外－篦磨き。	
－9	磨石	13.9 6.8 4.8		790ｇ
－10	磨製石斧	10.8 7.5 1.1		160ｇ 片刃。
－11	臼玉	0.9 0.9 0.5		0.7ｇ。 滑石製。

第72表　H10号住居址出土遺物観察表

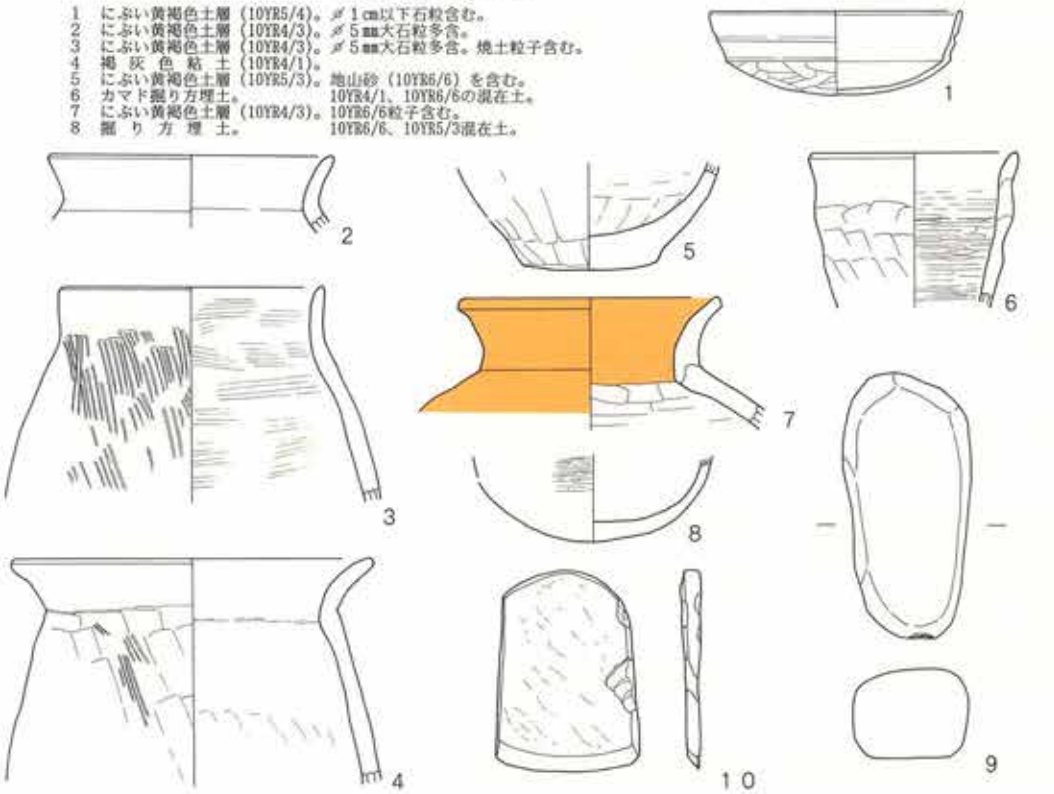
のが存在する。どちらも、口縁部は内面頸部に鋭い稜をもって「く」字状に外反する。壺９は体部中央を欠損するが、球胴を呈するものと思われる。口縁部は甕同様に、内面頸部に鋭い稜をもって「く」字状に外反する。内外面共に刷毛目調整の後、篦ナデや篦削りが加えられている。10は体部下半に箱清水式土器の壺のような稜線を有するもので、内面篦ナデ、外面には篦磨きが施されている。石器には磨製石鏃（14～16）と黒曜石製打製石斧（17）、片刃の磨製石斧（18）が認められるが、全て混入遺物と思われる。石製品は紡錘車（13）、臼玉（11、12）が出土している。本址に伴うものと思われる。

H17号住居址（第84図、図版九・百七）

遺構－Ⅱこ２グリットで検出された。住居の大部分は調査区域外に延びるため、全容は不明であったが、平成８年度に実施された西一本柳Ⅴの調査により、本址が古墳時代の住居址であることが判明した。壁下に周溝を巡らし、壁残高0.54ｍをはかる。



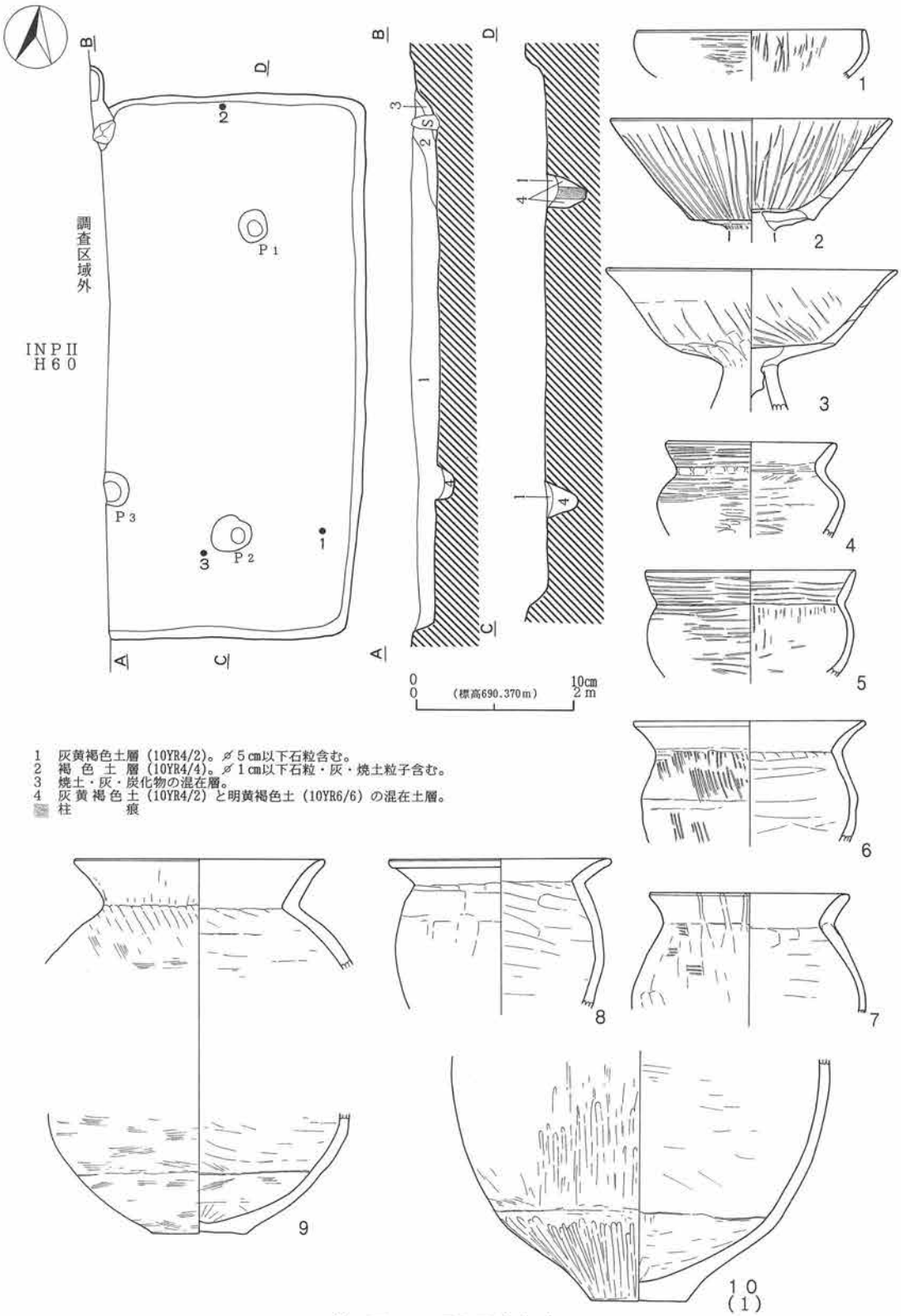
1　にぶい黄褐色土層（10YR5/4）。φ1cm以下石粒含む。
2　にぶい黄褐色土層（10YR4/3）。φ5mm大石粒多含。
3　にぶい黄褐色土層（10YR4/3）。φ5mm大石粒多含。焼土粒子含む。
4　褐灰色粘土（10YR4/1）。
5　にぶい黄褐色土層（10YR5/3）。地山砂（10YR6/6）を含む。
6　カマド掘り方埋土。　10YR4/1、10YR6/6の混在土。
7　にぶい黄褐色土層（10YR4/3）。10YR6/6粒子含む。
8　掘り方埋土。　10YR6/6、10YR5/3混在土。



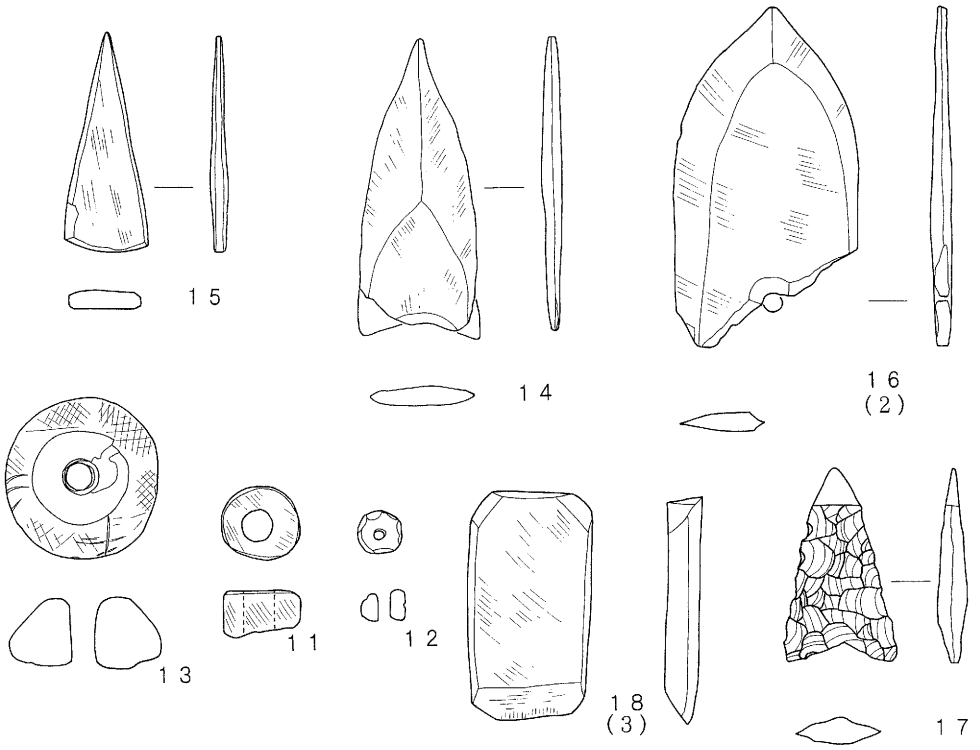
第81図　H10号住居址

挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
－1	土師器 坏	14.7 － －	内外－篦磨き。	
－2	土師器 高杯	18.0 － －	刷毛目～篦磨き。	
－3	土師器 高坏	18.7 － －	刷毛目～篦磨き。	
－4	土師器 甕	11.0 － －	内－刷毛目～篦磨き。 外－篦磨き。	
－5	土師器 甕	13.5 － －	内外－篦磨き。	
－6	土師器 甕	14.8 － －	内－篦削り・ヘラナデ。 外－刷毛目。	
－7	土師器 甕	12.8 － －	内－篦削り・ヘラナデ。 外－刷毛目～篦削り～篦磨き。	
－8	土師器 甕	14.7 － －	内外－ヘラナデ。	
－9	土師器 壺	16.0 6.1 －	内外－刷毛目、篦削り、ヘラナデ。	
－10	土師器 壺	－ 6.0 －	内－ナデ。 外－篦磨き。	
－11	滑石製 臼玉	1.2 1.2 0.8		1.5g
－12	滑石製 臼玉	1.1 0.9 0.6		0.8g
－13	紡錘車	4.3 4.0 0.9		47.1g
－14	磨製石鏃	3.9 1.6 0.25		1.9g 混入遺物。
－15	磨製石鏃	2.9 1.1 0.25		0.9g 混入遺物。
－16	磨製石鏃	－ 2.4 0.25		3.8g 混入遺物。 №2
－17	打製石鏃	2.1 1.5 0.4		1.1g 混入遺物。
－18	磨製石斧	3.0 1.6 0.45		6.7g 混入遺物、片刃。 №3

第73　表　H13号住居址出土遺物観察表



第82図　H13号住居址（1）



第83図　H13号住居址（2）

遺物－遺構の項で述べたが本址は古墳時代の住居であるが、土器は弥生土器の甕（1）、壺（2

挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
－1	甕	－ － －	内－篦磨き。 外－口縁部：波状文、頸部：簾状文。	
－2	壺	－ － －	内外－赤彩。	
－3	壺	－ － －	内－刷毛目。 外－赤彩。頸部：波状文、簾状文。	
－4	編物石	9.9 6.2 3.9		380 g
－5	編物石	10.8 5.0 3.3		310 g
－6	編物石	9.0 3.7 3.7		230 g

第74表　H17号住居址出土遺物観察表（1）

挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
－7	編物石	8.9 4.9 3.7		215ｇ
－8	編物石	9.6 5.0 3.5		250ｇ
－9	編物石	8.6 4.6 3.0		167.1ｇ
－10	編物石	10.5 4.7 4.4		390ｇ
－11	編物石	10.2 6.0 3.5		380ｇ

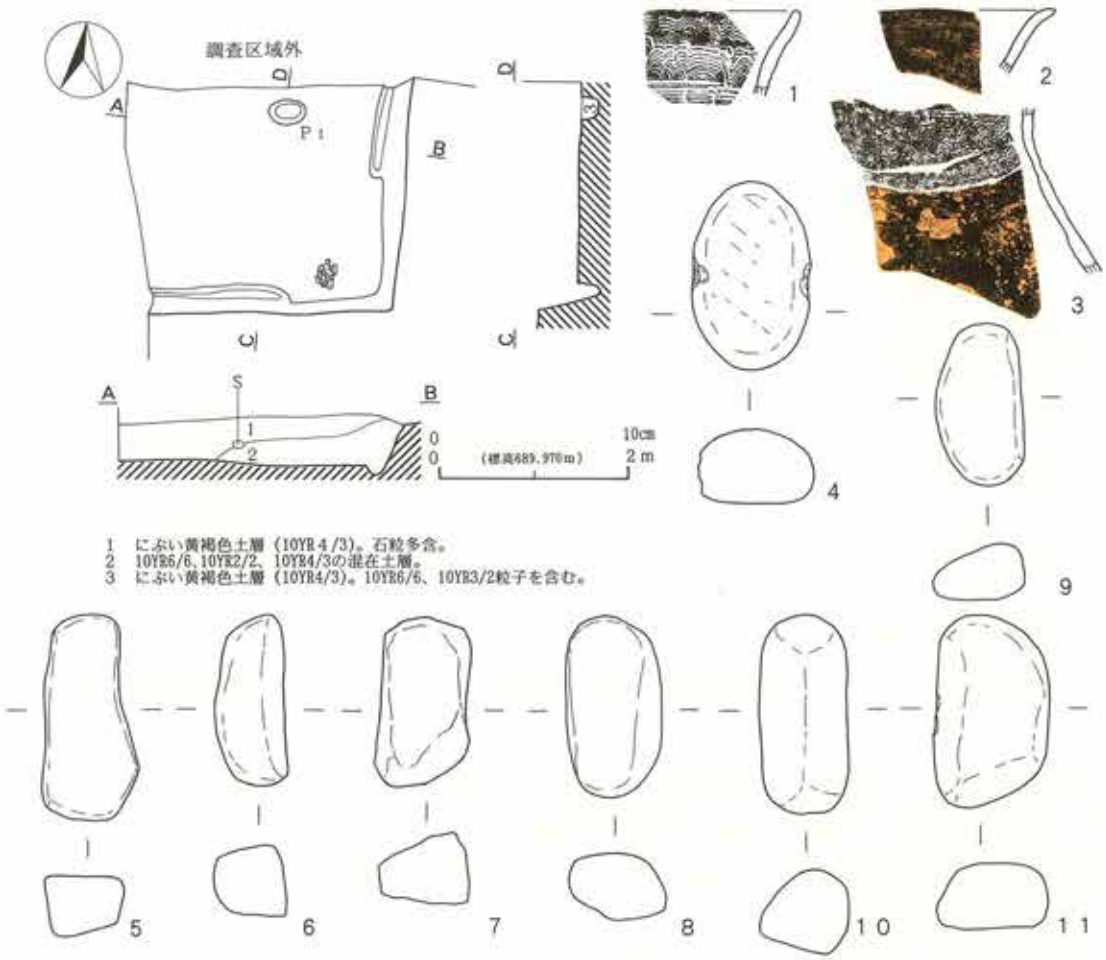
第75表　H17号住居址出土遺物観察表（２）

～３）が出土している。また、４～11の編物石は住居南東隅に一括して積み上げられていた。

H18号住居址（第85・86図、図版九・百七）

遺構－Ⅱけ２グリットで検出された。北東・南東コーナーを含む、住居の東辺が調査区域外に延びるため短軸長は不明であるが、長軸長4.0ｍ、壁残高0.45ｍの規模を有し、Ｎ－25°－Wに長軸方位をとる。他遺構との重複関係は有さない。５基検出されたPitの内Ｐ１からＰ４の４基が主柱穴である。Ｐ１覆土から直径12㎝の柱が確認された。カマドは北壁の中央部と思われる位置に構築されており、所謂「石組粘土カマド」である。覆土は自然堆積で、遺物は３層から床面にかけて包含されていた。

遺物－土器は全て土師器である。器種には坏（１～３）、甕（４～６・10・11）、小型甕（８）、台坏甕（９）、鉢（７）、甑（13）、鍋（12）が存在する。14の磨製石斧は混入遺物である。坏は全て須恵器坏蓋の模倣を原型とするものである。３は有段口縁坏と呼ばれるものである。甕は成形時の刷毛目調整を内面はそのまま残し、外面は篦削り調整が及ばない部分にだけ刷毛目をのこす長胴甕で、平底で体部の半ばで弱く張る器形を呈する。小型甕は、広口で頸部の括れが弱い短胴丸底の器形で、内面はヘラナデ、外面には長胴甕同様に、成形時の刷毛目を残す篦削り調整が施されている。台坏甕は台を欠損するため、台部分の形状は不明である。内面ナデ調整、外面篦削り調整が施され、やや内傾しながら端部で弱く外反する直立する口縁部を有する、球胴の器形を呈する。鉢は、「植木鉢」の器形を呈する小型のもので、内面ナデ、外面篦削り調整が施されている。甑は小型の多孔のもので、器形調整は鉢と同様であるが、頸部が明瞭に作出される点が異なっている。鍋は体部の最大径部分に一組の把手が付けられている。内面に刷毛目・篦磨き調整、外面に篦削り・篦磨き調整が施されている。平底である。機内で見受けられる同様な器形の



第84図　H17号住居址

挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
−1	土師器 坏	11.8 − −	内−ナデ。 外−篦削り。	
−2	土師器 坏	13.9 11.8 3.9	内−篦磨き。 外−篦削り。	
−3	土師器 坏	14.8 6.3 4.0	内−篦磨き。 外−篦削り。	有段口縁坏。
−4	土師器 甕	19.4 − −	内−刷毛目。 外−刷毛目〜篦削り。	
−5	土師器 甕	18.5 6.5 −	内−刷毛目。 外−刷毛目〜篦削り。	№5

第76表　H18号住居址出土遺物観察表（1）

挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
－6	土師器 甕	－ 6.5 －	内－ヘラナデ。 外－篦削り。	No.2
－7	土師器 鉢	14.9 6.9 10.8	内－ナデ。 外－篦削り。	No.11
－8	土師器 小型甕	14.2 － 13.1	内－ヘラナデ。 外－刷毛目～篦削り。	No.8
－9	土師器 台坏甕	13.4 － －	内－ナデ。 外－篦削り。	No.9
－10	土師器 甕	－ 5.7 －	内－刷毛目。 外－篦削り。	No.4
－11	土師器 甕	21.1 － －	内－刷毛目。 外－篦削り。	No.1
－12	土師器 鍋	25.3 8.1 28.9	内－刷毛目、篦磨き。 外－篦削り、篦磨き。	No.3、6、7
－13	土師器 甑	17.3 5.8 13.9	内－ナデ。 外－篦削り。	No.10
－14	磨製石斧	－ － －		19.0g 片刃。

第77表　H18号住居址出土遺物観察表（2）

土器と同じ器種名で呼称した。

H21号住居址（第87図、図版十一・百十）

遺構－Ⅱお1グリットで検出された。H35号住居址、F4号掘立柱建物址、P40、P42、P43に切られる。壁残高0.35mを測る。カマド、柱穴は検出されなかったが、重複する遺構により消滅した可能性が高い。覆土には炭化物や焼土粒子を含んでいたが、人為埋土ではなかった。

遺物－土師器の甑が1点出土している。底部全体が開口するもので、内面篦磨き、外面には刷

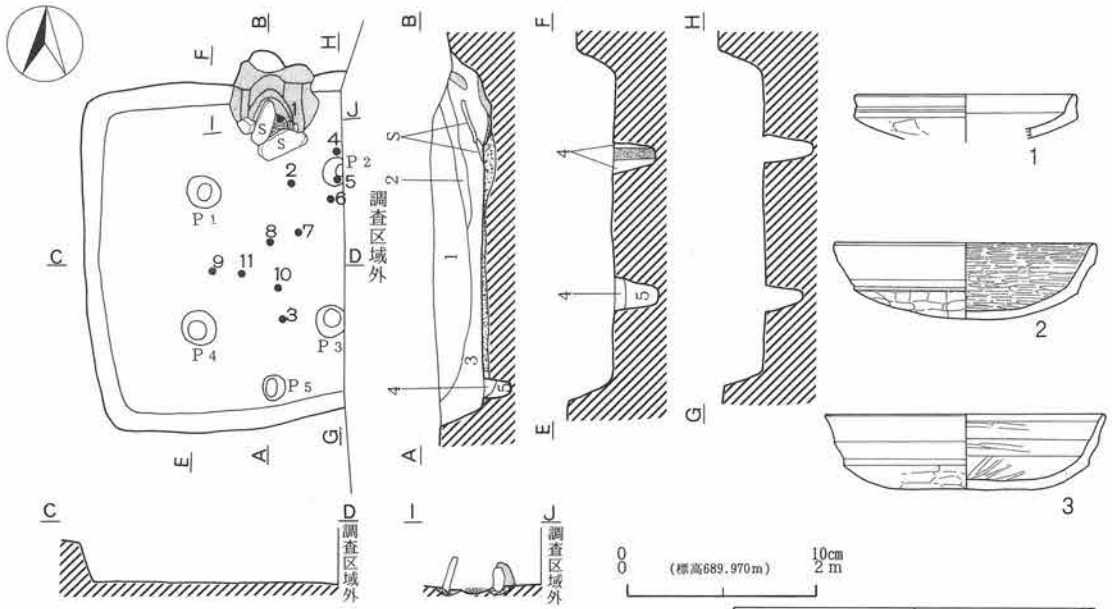
挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
－1	土師器 甑	21.2 8.5 23.5	内－篦磨き。 外－刷毛目～篦削り、ヘラナデ。	No.1

第78表　H21号住居址出土遺物観察表

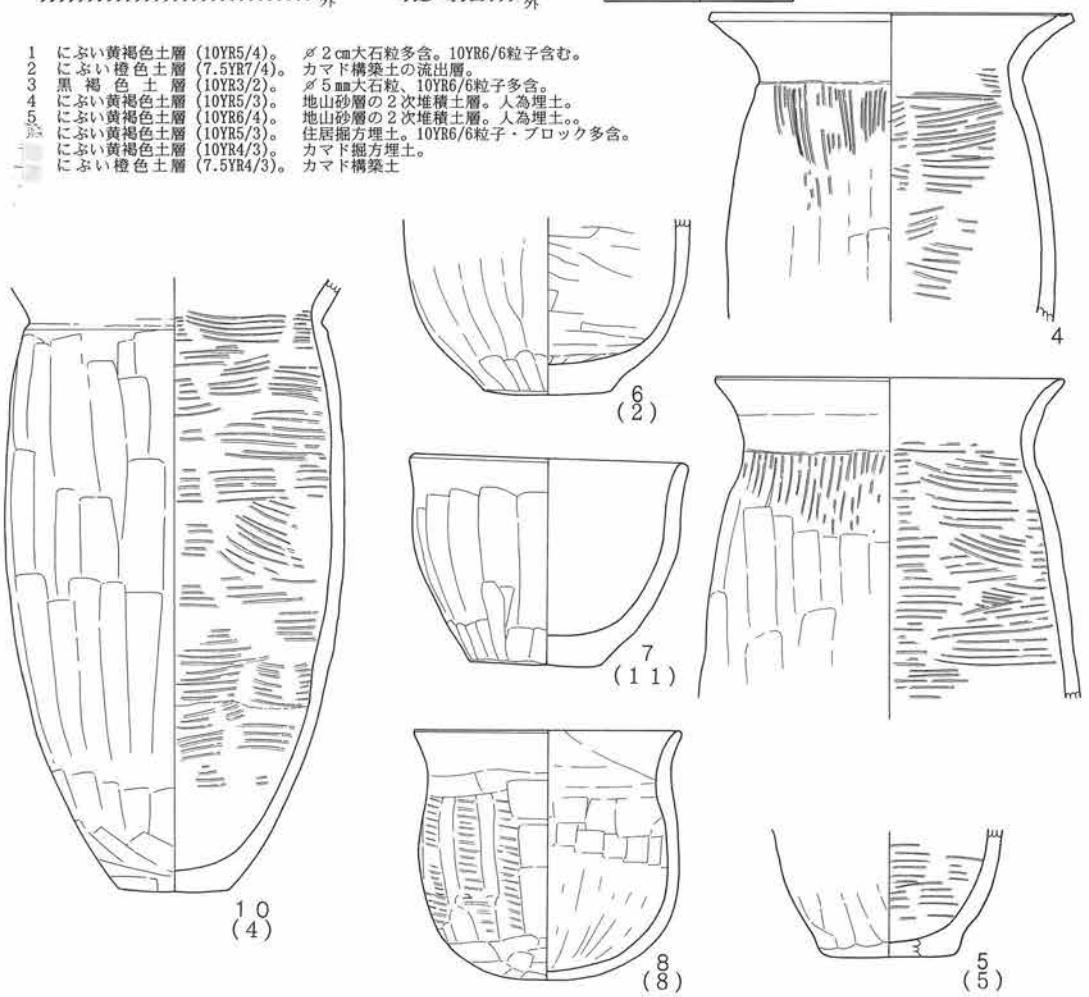
毛目～篦削り・ヘラナデ調整が加えられている。

H22号住居址（第88図、図版十一・百十）

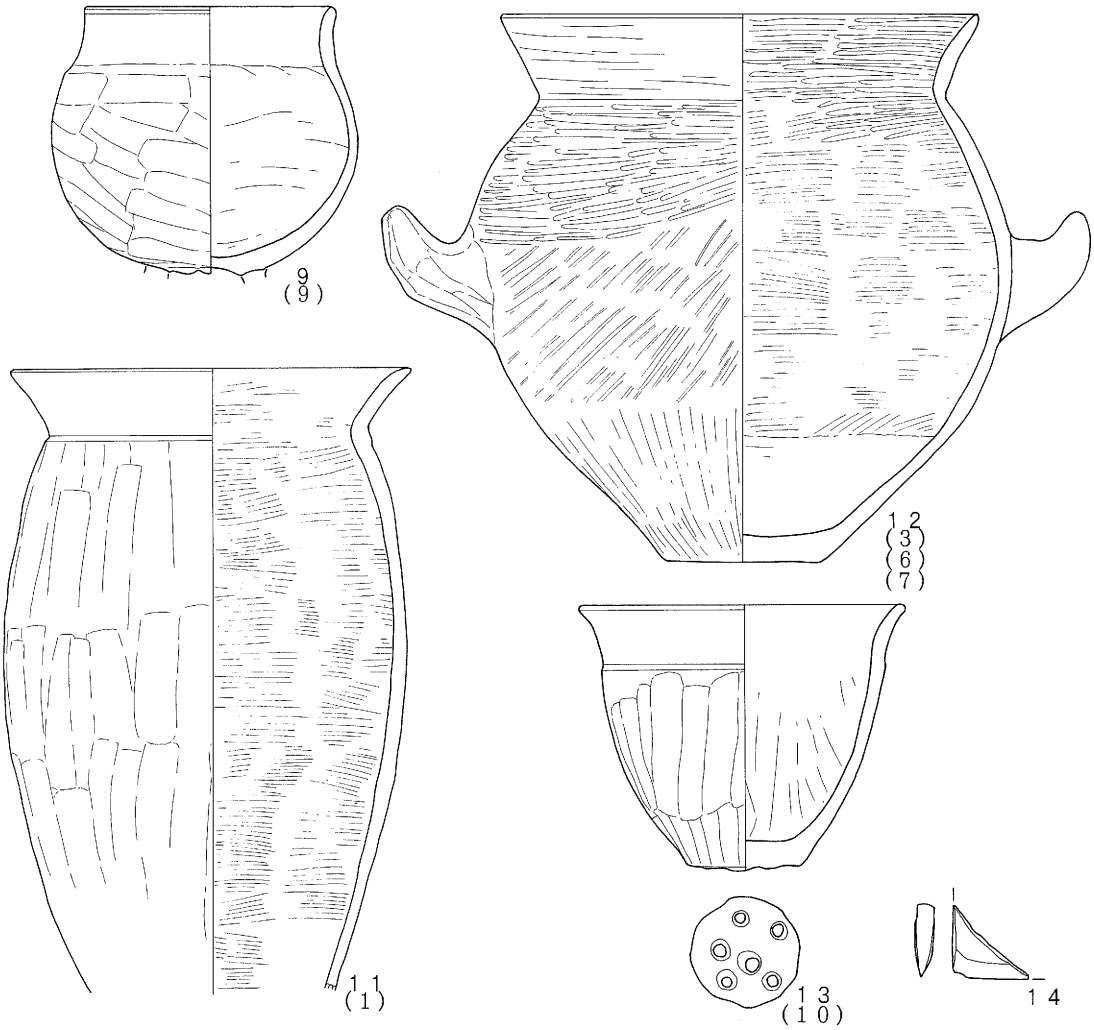
遺構－Ⅰく9グリットで検出された。H10号・H11号住居址に切られ、H38号住居址を切る。壁残高0.2mを測り、7基検出されたPitの内P1～P4の4基が主柱穴である。P3からは直径12cm、P4からは直径15cmの柱が確認された。カマドはH10号住居址に破壊されたものと思われ



1　にぶい黄褐色土層（10YR5/4）。　φ2㎝大石粒多含。10YR6/6粒子含む。
2　にぶい橙色土層（7.5YR7/4）。　カマド構築土の流出層。
3　黒褐色土層（10YR3/2）。　φ5㎜大石粒、10YR6/6粒子多含。
4　にぶい黄褐色土層（10YR5/3）。　地山砂層の2次堆積土層。人為埋土。
5　にぶい黄褐色土層（10YR6/4）。　地山砂層の2次堆積土層。人為埋土。。
6　にぶい黄褐色土層（10YR5/3）。　住居掘方埋土。10YR6/6粒子・ブロック多含。
7　にぶい黄褐色土層（10YR4/3）。　カマド掘方埋土。
8　にぶい橙色土層（7.5YR4/3）。　カマド構築土



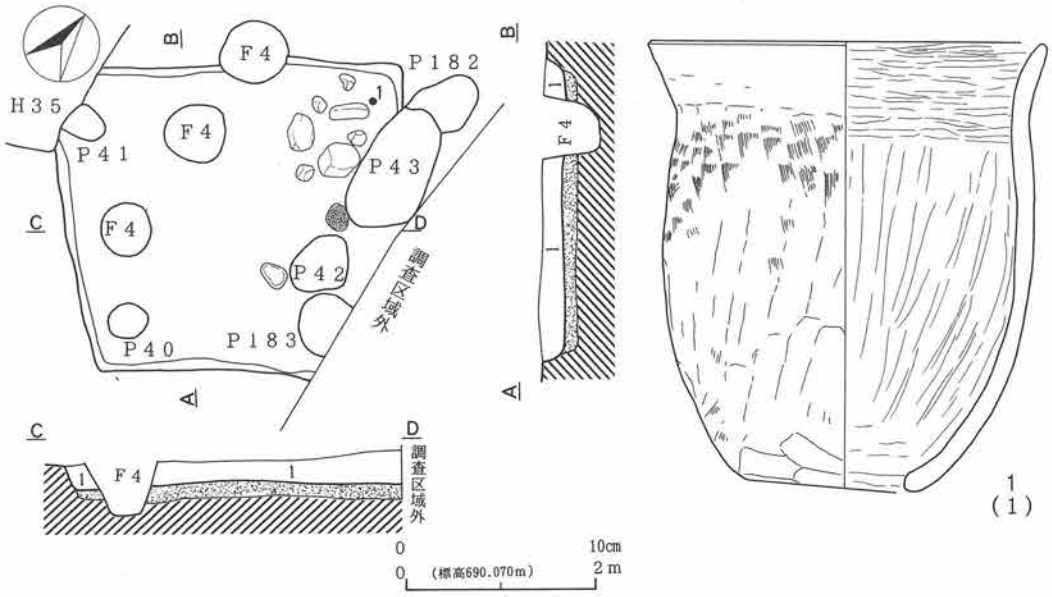
第85図　H18号住居址（1）



第86図　H18号住居址（2）

る。検出状態で所々に床面が露出しており、覆土が自然堆積なのか人為埋土なのかは不明である。

遺物－出土量は少ないものの、1の坏が、切り合うH11号住居址出土の破片と接合するほかは、遺物は床面に密着した状態で出土した。土師器、須恵器、磨石が出土している。土師器には坏（1・2）と甑（4）がみとめられる。1は丸底で、口縁部が底部との境付近から強く外反するもので、内面篦磨き、外面篦磨き、篦削り調整が施されている。2は丸底で半球状の器形を呈し、内外面共に篦磨き調整が施されている。甑は底部を欠損する。内外面共に篦磨き調整が施されている。須恵器は坏蓋が1点出土している。口縁部と天井部の境に1条の沈線が巡り、口縁端部は内傾する。天井部には篦削り調整が施される。田辺陶邑編年のⅡ期ＴＫ10号窯に比定されるものと



1　にぶい黄褐色土層（10YR4/3）。焼土粒子・炭化物含む。φ1cm以下石粒少含。
2　暗褐色土層（10YR3/3）。掘方埋土。

第87図　H21号住居址

挿図番号	器種	法量	成形・調整	備考
−1	土師器 坏	15.6 4.5 4.4−	内−篦磨き。 外−篦磨き、篦削り。	
−2	土師器 坏	13.9 11.8 3.9		内外−篦磨き。
−3	須恵器 坏蓋	14.6 − 5.1	口縁部と天井部の境に沈線。口縁端部内傾。 天井部篦削り。	TK10
−4	土師器 甑	19.4 − −	内外−篦磨き。	
−5	磨石	− 4.5 2.2		118.4g

第79表　H22号住居址出土遺物観察表

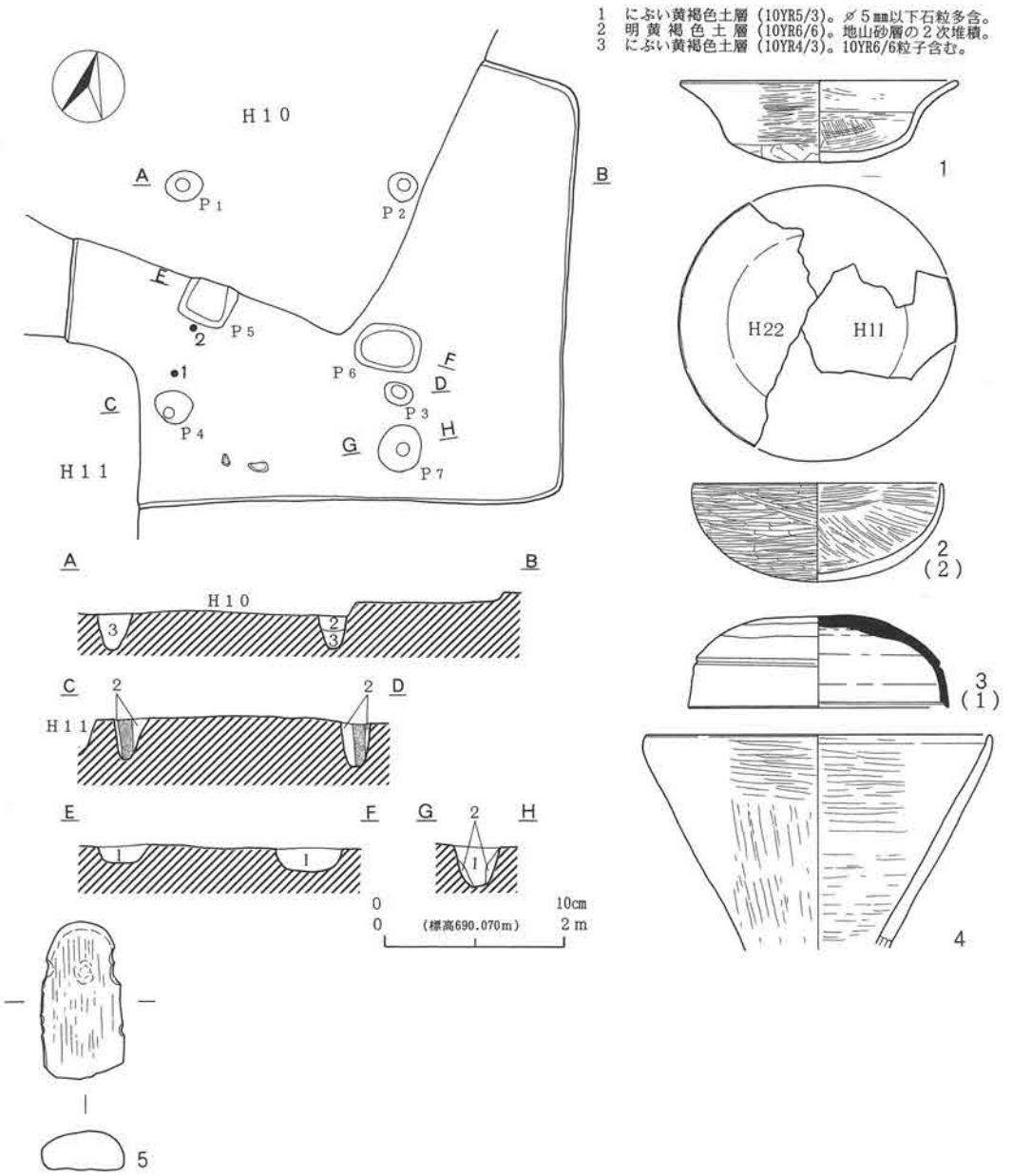
思われる。

H25号住居址（第89図、図版十三・百十一）

遺構−Ⅱき2グリットで検出された。H19号住居址に切られ、H33号住居址を切る。2次調査時のH63号住居址は、本址と同一の住居址である。壁残高0.4mを測る。3基検出されたPitの内

Ｐ１とＰ２が主柱穴である。柱痕は確認されなかった。カマドは、H19号住居址により破壊されたものと思われる。周溝は存在せず、覆土は自然堆積である。

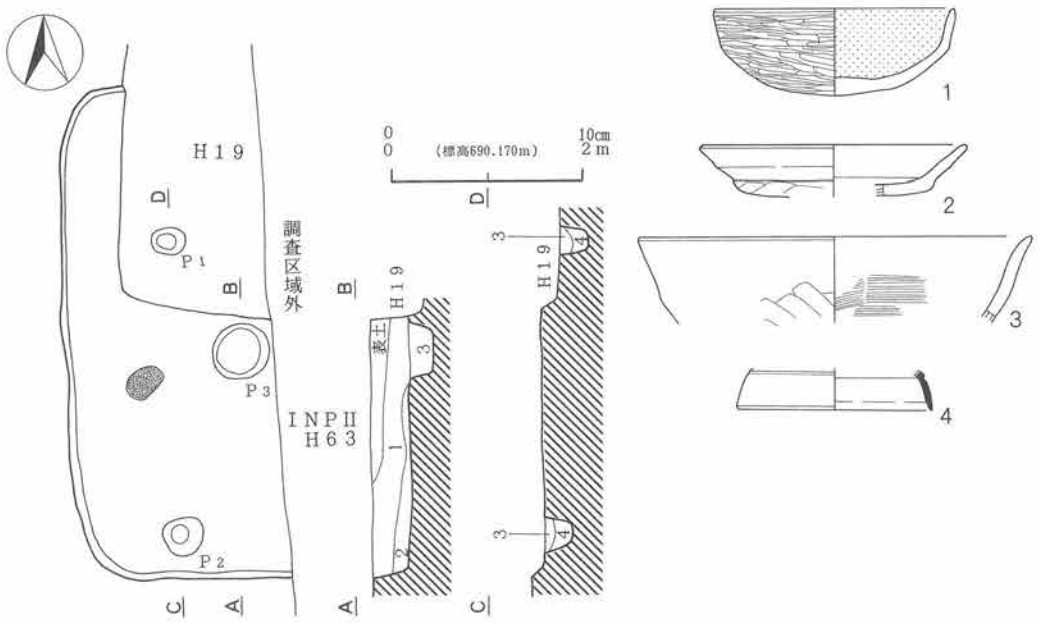
遺物－土師器、須恵器が出土している。土師器には坏（１・２）、鉢（３）が存在する。１の坏は丸底で半球状を呈するものであるが、口縁部が直線的に開く。内面黒色処理、外面篦削り調



第88図　H22号住居址

挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
−1	土師器 坏	12.4 7.0 4.6	内−篦磨き〜黒色処理。 外−篦磨き。	
−2	土師器 坏	13.9 10.3 −	内−ナデ。 外−底部篦削り。	口縁部半ばに稜。
−3	土師器 鉢	20.6 − −	内−刷毛目、ヘラナデ。 外−篦削り。	
−4	須恵器 坏蓋	10.3 − −	口縁部と天井部の境に沈線。	MT85〜TK43

第80表　H25号住居址出土遺物観察表



1　灰黄褐色土層（10YR2/2）。φ2cm以下パミスを含む。
2　にぶい黄褐色土層（10YR5/4）。φ5mm大石粒少含。
　　10YR6/6粒子を含む。
3　黒褐色土層（10YR3/2）。φ1cm以下石粒少含。
4　黒褐色土層（10YR3/2）。10YR6/6粒子多含。

第89図　H25号住居址

整が施される。２の坏は口縁部が底部との境から大きく外反するもので、器高は低い。内面ナデ調整、外面口縁部の半ばに稜を有し、底部には篦削り調整が施される。鉢は半球状の坏を大型化した器形を呈する。内面刷毛目、外面篦削り調整が加えられる。須恵器は坏蓋が認められる。田辺陶邑編年のⅡ期－ＭＴ85～ＴＫ43型式に該当するものと思われる。

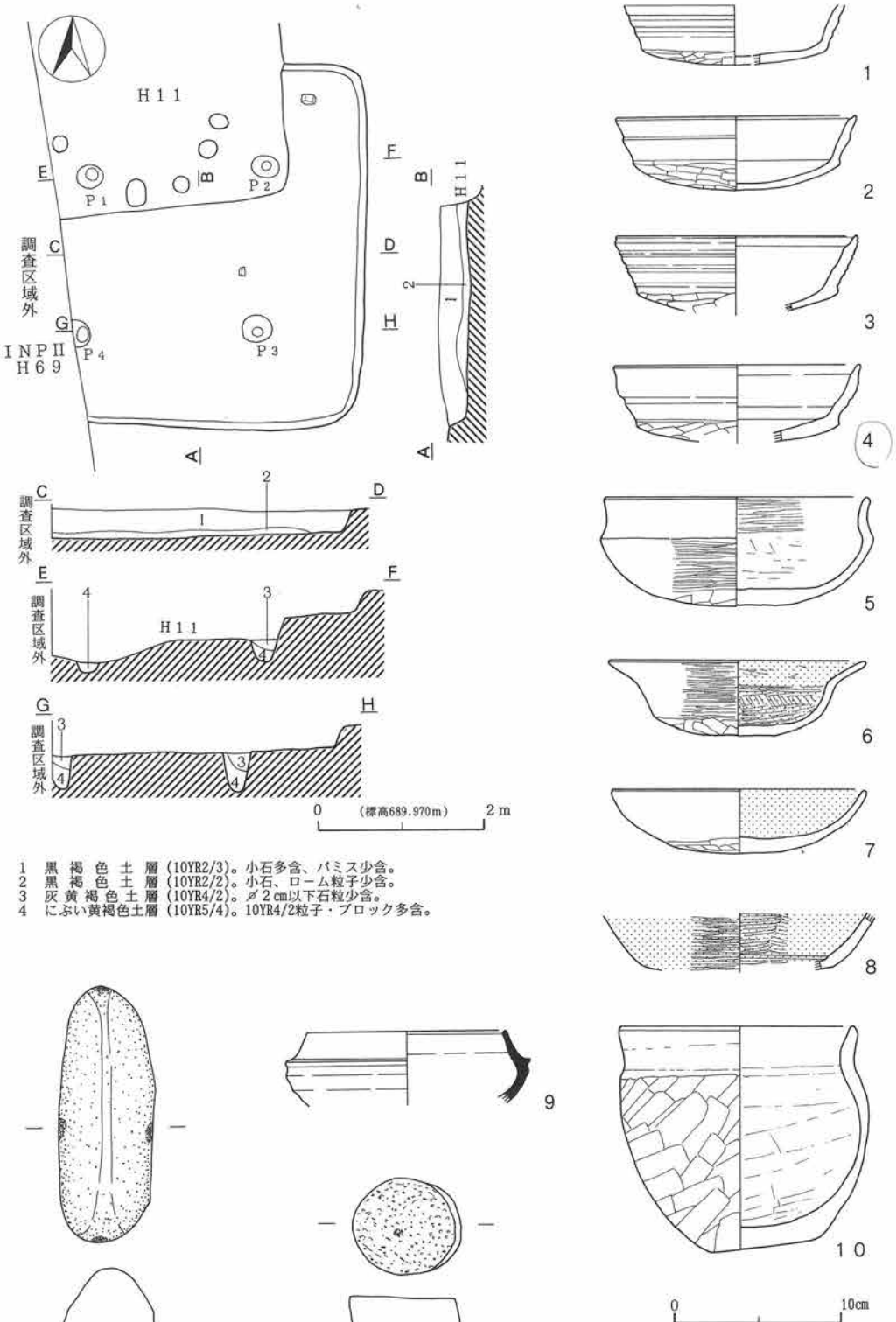
Ｈ31号住居址（第90図、図版百十四）

遺構－Ｉき９グリットで検出された。Ｈ11号住居址に切られ、Ｈ37号住居址を切る。第２次調査におけるＨ69は本址と同一の住居址である。南北長4.4ｍ、壁残高0.35ｍを測り、４基検出されたPitは全て主柱穴である。柱痕は確認されなかった。カマドは北壁に構築されていたものと思われるが、Ｈ11号住居址により破壊され存在しなかった。覆土は自然堆積で、周溝は有さない。

遺物－土師器、須恵器、石製品、石器が出土している。土師器には坏（１～８）と小型甕

挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
－1	土師器 坏	13.3 11.2 3.9	内－ナデ。 外－底部篦削り。	有段口縁坏。
－2	土師器 杯	14.6 12.6 4.4	内－ナデ。 外－底部篦削り。	有段口縁坏。
－3	土師器 坏	14.8 12.1 －	内－ナデ。 外－底部篦削り。	有段口縁坏。
－4	土師器 坏	15.0 12.2 －	内－ナデ。 外－底部篦削り。	有段口縁坏。
－5	土師器 坏	16.1 5.5 6.4	内－篦磨き。 外－篦磨き、篦削り。	
－6	土師器 坏	15.6 4.7 4.4	内－篦磨き～黒色処理。 外－篦磨き、篦削り。	
－7	土師器 坏	15.4 4.5 43.8	内－黒色処理。 外－底部篦削り。	
－8	土師器 坏	－ － －	内外－篦磨き～黒色処理。	
－9	須恵器 坏	12.0 － －		TK10。
－10	小型甕 土師器	14.4 6.0 13.4	内－ヘラナデ。 外－篦削り。	
－11	軽石製 円盤	6.7 5.9 2.4		53.7ｇ
－12	磨石	15.5 5.7 5.0		640.0ｇ

第81表　Ｈ31号住居址出土遺物観察表



1　黒褐色土層（10YR2/3）。小石多含、パミス少含。
2　黒褐色土層（10YR2/2）。小石、ローム粒子少含。
3　灰黄褐色土層（10YR4/2）。φ2cm以下石粒少含。
4　にぶい黄褐色土層（10YR5/4）。10YR4/2粒子・ブロック多含。

第90図　H31号住居址

(10) が認められる。1～4は所謂「有段口縁坏」である。内面ナデ調整、外面底部篦削り、口縁部には沈線状の凹を巡らすことにより1段あるいは多段の稜が表現される。5は内外面に篦磨き調整が施されるもので、須恵器坏蓋の模倣を原型とするもの、6は底部と口縁部の境から口縁部が外反して開くもので、内面黒色処理、外面は底部篦削り、口縁部は篦磨き調整が施される。7は丸底で浅い半球状を呈するもの。8は内外面篦磨き調整が施され、黒色処理されるものである。小型甕は平底で頸部の括れが弱く、口縁端部が直立気味に立ち上がるもので、内面ヘラナデ、外面篦削り調整が施される。須恵器坏9は、田辺陶邑編年のＴＫ10型式に該当するものと思われる。11は軽石製の円盤である。周縁部を磨って円形をつくり出している。12の磨石は3面全てが使用されている。

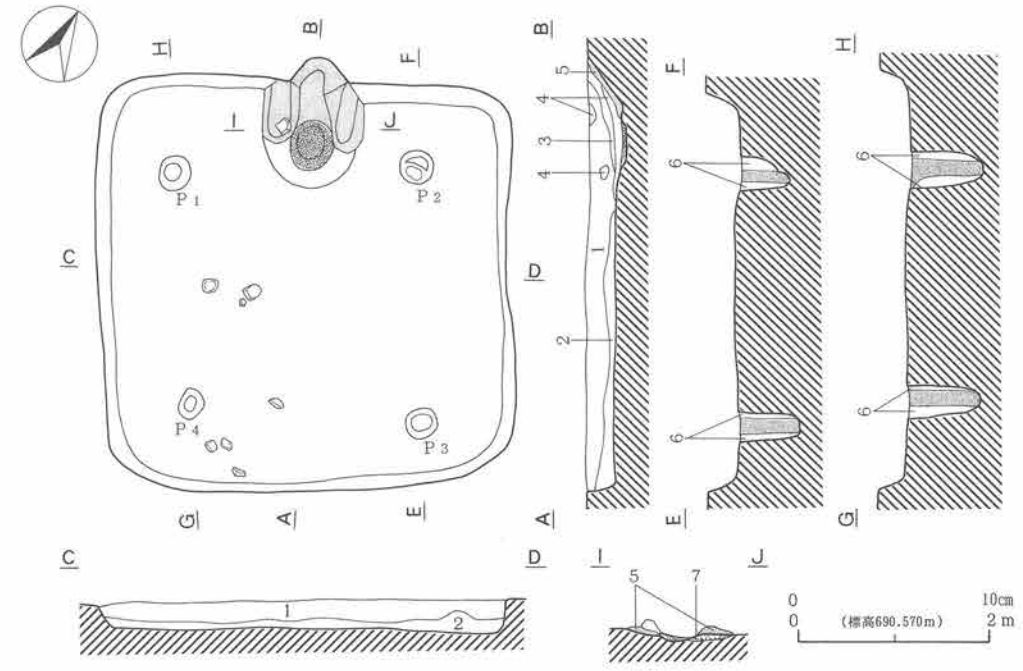
H43号住居址（第91図、図版百二十三）

遺構－Ⅲお7グリットで検出された。H61号住居址を切る。隅丸方形の平面プランを呈し、長軸長4.6ｍ×短軸長4.3ｍ×壁残高0.35ｍの規模を有する。長軸方位はＮ－30°－Wにとる。4基検出されたPitは全て主柱穴で、直径15～20㎝の柱が確認された。カマドは北壁の中央部に構築されており、長径1.35ｍ×短径1.1ｍ×深度0.4ｍの規模である。構築材は粘土と石であり、所謂「石組粘土カマド」である。覆土は自然堆積で、周溝は有さない。

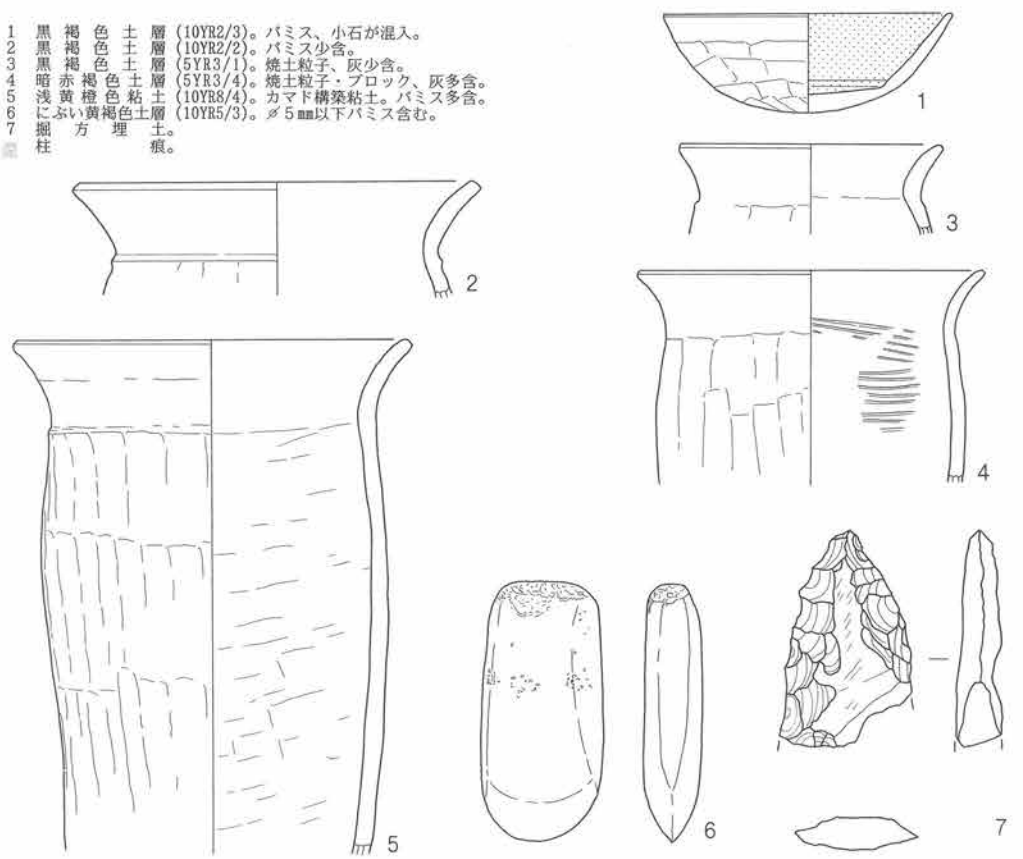
遺物－土器は全て土師器である。坏（1）、甕（2～5）が認められる。他に混入品の蛤刃の磨製石斧（6）、黒曜石製の石鏃（7）が出土している。坏は半球状を呈するもので、内面底部と体部との境に段を有し、黒色処理される。甕は長胴で、全てのものが外面は篦削り調整がされ

挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
－1	土師器 坏	15.0 － 5.3	内－黒色処理。 外－篦削り。	内面に段。
－2	土師器 甕	20.7 － －	内－ナデ。 外－篦削り。	
－3	土師器 甕	13.7 － －	内－ナデ。 外－篦削り。	
－4	土師器 甕	18.0 － －	内－刷毛目。 外－篦削り。	
－5	土師器 甕	20.5 － －	内－ナデ。 外－篦削り。	
－6	磨製石斧	13.8 6.4 3.0		575ｇ 蛤刃。
－7	打製石鏃	－ － －		3.1ｇ 黒曜石。

第82表　H43号住居址出土遺物観察表



1　黒　褐　色　土　層（10YR2/3）。パミス、小石が混入。
2　黒　褐　色　土　層（10YR2/2）。パミス少含。
3　黒　褐　色　土　層（5YR3/1）。焼土粒子、灰少含。
4　暗　赤　褐　色　土　層（5YR3/4）。焼土粒子・ブロック、灰多含。
5　浅　黄　橙　色　粘　土（10YR8/4）。カマド構築粘土。パミス多含。
6　にぶい黄褐色土層（10YR5/3）。∅5㎜以下パミス含む。
7　掘　方　埋　土。
　柱　　痕。



第91図　H43号住居址

ている。内面は4が刷毛目調整の他はナデ調整が施される。

H48号住居址（第92図、図版百二十八）

遺構－Ⅲい8グリットで検出された。第2次調査における、H44号住居址は本址と同一の住居である。今回の調査範囲では重複関係は存在しないが、第2次調査においては第2次調査分のH59号住居址を切り、H51号住居址に切られている。隅丸長方形の平面プランを呈し、長軸長5.8m・壁残高0.25mを測る。N－17°－Wに長軸方位をとる。カマドは北壁中央に構築されており、壁外に短く延びる煙道部と火床が検出されただけで、袖等は除去されていた。Pitは2基検出された。2基共に主柱穴と考えられる。覆土は自然堆積である。

遺物－土師器、須恵器、石器が出土している。土師器には坏（1）と甕（3）が認められる。坏は内面黒色処理、外面篦削り調整が施される。甕は長胴で、内外面ヘラナデ調整のものである。須恵器は坏（2）が1点出土している。底部ヘラ切りのものである。石器は長方形に磨り出され

挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
－1	土師器 坏	7.8 － 3.4	内－黒色処理。 外－篦削り。	
－2	須恵器 坏	14.5 9.8 4.1		底部篦切り。
－3	土師器 甕	15.6 － －	内外－ヘラナデ。	
－4	軽石製品	9.5 6.2 3.4		70g
－5	磨石	13.7 7.0 6.1		1010g

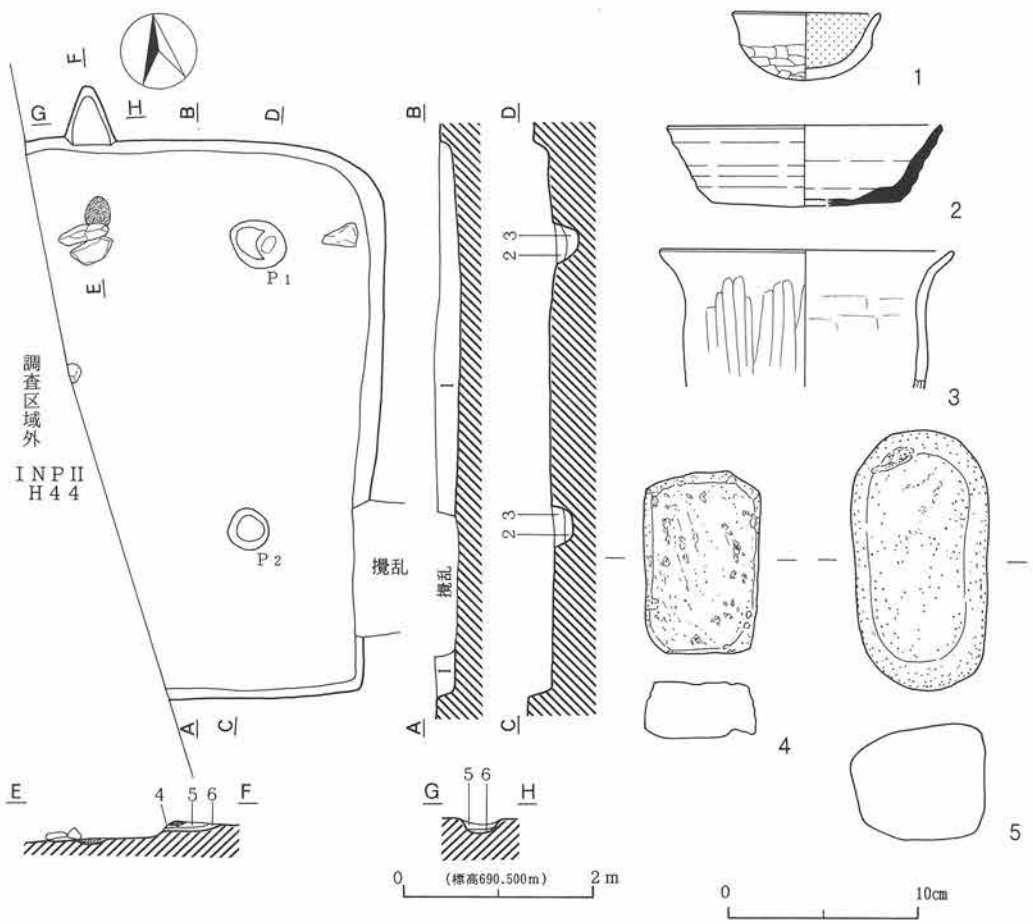
第83表　H48号住居址出土遺物観察表

た軽石（4）と、磨石（5）が認められる。

H49号住居址（第93図、図版百二十八）

遺構－Ⅲお8グリットで検出された。H51号住居址に切られる。本址は第2次調査のH58号住居址と同一の住居址であり、2次調査において2次調査のH49号住居址に切られている。壁残高0.1mを測る。5基検出されたPitはP4を除き浅い。2次調査時に検出されたPitも全て浅い為、今回の調査で検出されたPitが主柱穴を構成するのかも知れないが、判然としなかった。カマドは第2次調査においても、今回においても検出されていない。

遺物－土師器と石器が出土している。土師器には坏（1）、壺（2）、鉢（3）、甕（4～7）が存在する。坏は半球状を呈するもので、内面篦磨き、外面には篦削り調整が施される。2の壺



1　にぶい黄褐色土層（10YR5/3）。φ1cm大パミス、石粒、10YR6/6粒子多含。
2　黒　褐　色　土　層（10YR3/2）。φ1cm大石粒、パミスを含む。
3　にぶい黄褐色土層（10YR4/3）。
4　極暗赤褐色土層（10YR4/6）。焼土、灰を含む。
5　黒　褐　色　土　層（10YR3/2）。焼土を含む。
6　黒　褐　色　土　層（10YR2/2）。焼土、炭化物を含む。

第92図　H48号住居址

は口縁端部が外面に弱い稜を形成しながら立ち上がるもので、内外面に放射状の篦磨きが加えられる。3は内面に刷毛目、外面に篦削り・篦磨きが加えられる。甕は4・5のような刷毛目調整のものと、6・7のような篦削り調整のものが認められる。石器は8の砥石と9の磨石が出土している。

H50号住居址（第94図、図版二十三・百二十九）

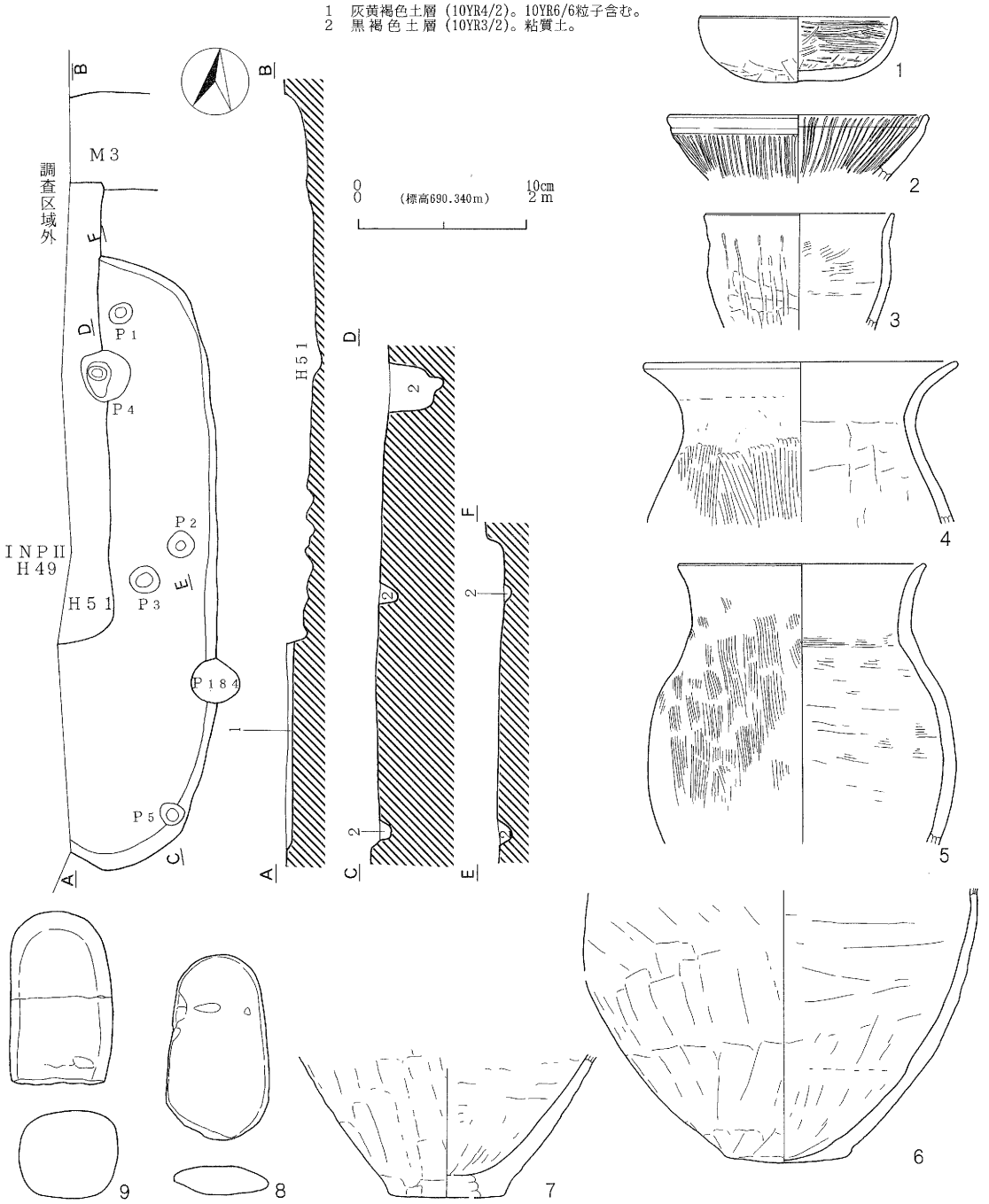
遺構－Ⅲう8グリットで検出された。重複関係は有さない。第2次調査のH48号住居址は本址と同一の住居址である。隅丸長方形の平面プランを呈し、長軸長5.72m・壁残高0.5mの規模を

挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
－1	土師器 坏	11.6 4.0 3.9	内－篦磨き。 外－篦削り。	
－2	土師器 壺	15.2 － －	内外－放射状篦磨き。	混入遺物。
－3	土師器 鉢	11.2 － －	内－刷毛目。 外－篦削り～篦磨き。	
－4	土師器 甕	18.4 － －	内－ナデ。 外－刷毛目。	
－5	土師器 甕	14.4 － －	内外－刷毛目。	
－6	土師器 甕	－ 7.2 －	内－ナデ。 外－篦削り。	
－7	土師器 甕	－ 6.9 －	内－ナデ。 外－篦削り。	
－8	砥石	11.1 6.2 1.8		165ｇ
－9	磨石	10.3 6.0 5.5		610ｇ

第84表　H49号住居址出土遺物観察表

有し、N－4°－Wに長軸方位をとる。カマドは北壁の中央部分に構築されており、袖は地山を削りだしている。4基検出されたPitの内Ｐ１とＰ２が主柱穴である。柱は確認できなかった。覆土は自然堆積で、周溝は有さない。

遺物－土師器、須恵器、石器、石製品、弥生土器が出土している。土師器には坏（１・２）、高杯（４）、甕（５・６）が認められる。１の坏は須恵器坏蓋を模倣した形態のもので、内面ナデ、外面には篦削り調整が施される。２は半球状を呈するもので、内面は黒色処理される。外面には篦削り調整が施される。高杯は脚部のみの出土である。内面篦削り、外面ナデ調整が施される。甕は２点共に内面ナデ、外面篦削り調整が施されるが、篦削りの方向が５は横位、６は縦位である。須恵器には坏（３）、広口壺（７）が認められる。坏は底部篦削りである。広口壺は底部付近に叩き痕が認められる。体部には篦削り調整が施される。石器は打製石斧（14）、磨石（15）、砥石（13）が認められる。打製石斧は混入品で、基部を欠損する。石製品としては11の臼玉と12の石製模造品が出土している。いずれも滑石製である。弥生土器（８～10）は混入品である。８は甕、９・10は壺である。８は口唇部に縄文、体部には櫛描波状文を施している。９は鋸歯文内に刺突を充填し、更に縄文が施される。10は内面に刷毛目調整が施され、外面は赤彩さ



第93図　H49号住居址

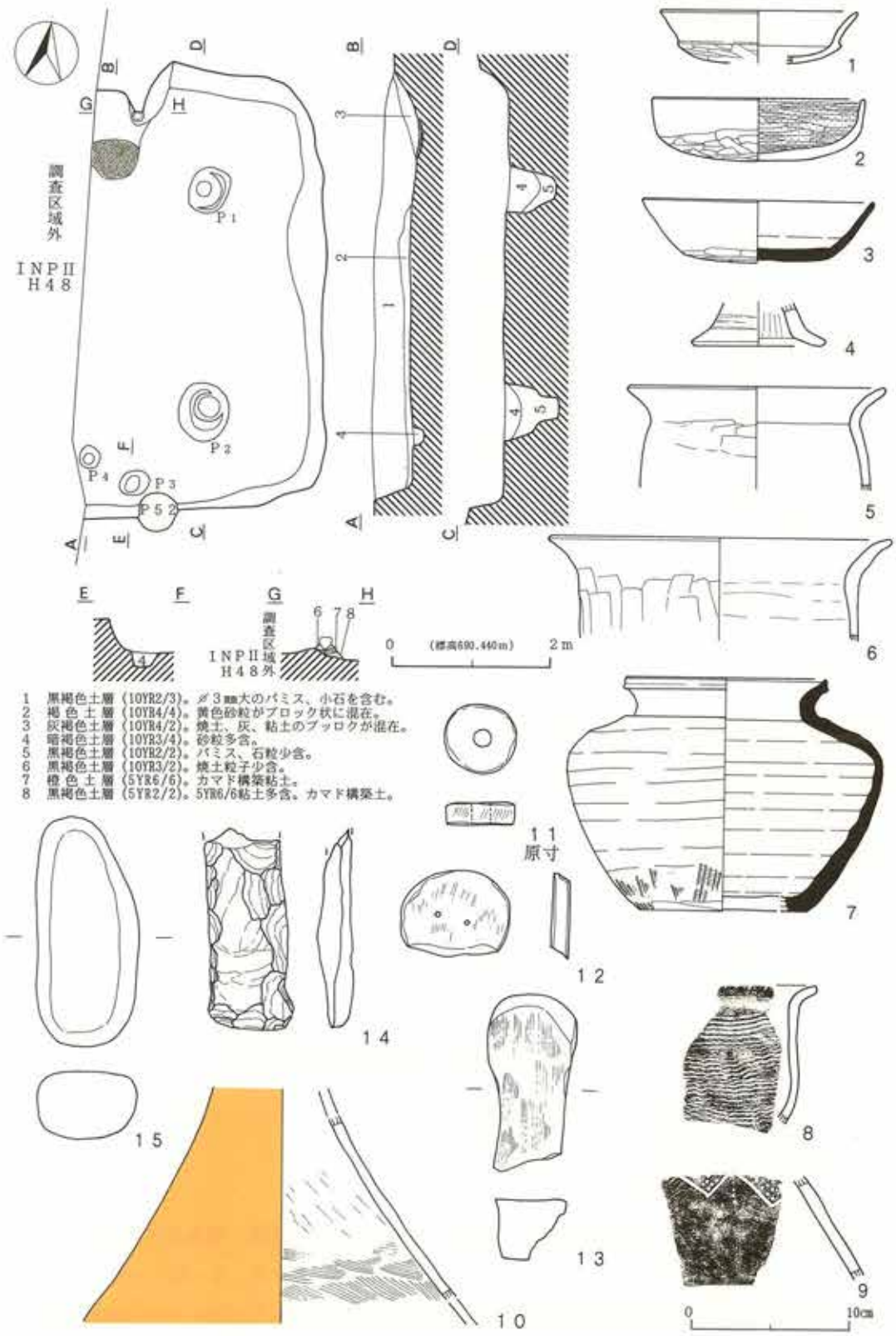
挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
－1	土師器 坏	12.4 － －	内－篦磨き。 外－篦削り。	
－2	土師器 坏	13.4 － 4.0	内外－放射状篦磨き。	混入遺物。
－3	須恵器 坏	14.6 9.0 3.9	内－刷毛目。 外－篦削り～篦磨き。	
－4	土師器 高杯	－ 8.0 －	内－ナデ。 外－刷毛目。	
－5	土師器 甕	16.0 － －	内外－刷毛目。	
－6	土師器 甕	21.6 － －	内－ナデ。 外－篦削り。	
－7	須恵器 広口壺	12.6 10.6 14.8	内－ナデ。 外－篦削り。	
－8	弥生 甕	－ － －		混入品。
－9	弥生 壺	－ － －		混入品。
－10	弥生 壺	－ － －		混入品。
－11	臼玉	5.75 5.75 0.35		0.9ｇ
－12	石製 模造品	3.5 2.7 0.6		9.0ｇ
－13	砥石	11.2 5.8 3.9		370ｇ
－14	打製石斧	22.8 5.5 2.2		155ｇ 混入品。
－15	磨石	14.7 6.4 4.6		680ｇ

第85表　H50号住居址出土遺物観察表

れている。

H52号住居址（第95図、図版二十三・百三十）

遺構－Ⅴえ5グリットで検出された。H70号・H99号住居址を切る。隅丸長方形の平面プランを呈し、長軸長6.45ｍ×短軸長5.30ｍ×壁残高0.4ｍの規模を有する。N－20°－Wに長軸方位をとる。カマドは北壁の中央部に構築され、長径1.5ｍ×短径0.9ｍ×深度0.45ｍの規模を有する。



第94図　H50号住居址

袖基部を僅かに削りだしており、残存部分は全て粘土により構築されていた。4基検出されたPitは全て主柱穴である。西南隅の床面上に炭化材の散乱が認められたが、本址は焼失家屋ではない。覆土は自然堆積である。

遺物－土師器と石器が出土している。土師器には坏（1・2）と甕（3・4）が認められる。1・2共に口縁部に小さな稜をもつ、1は内面ナデ調整、2は黒色処理がなされる。2は欠損するため不明であるが、1は底部に篦削りが施される。3の甕は内面刷毛目、外面篦削り調整が施され、4は内面刷毛目、外面には篦削り調整後に篦磨き調整が施される。石器としては5の磨製

挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
－1	土師器 坏	13.1 － 5.1	内－ナデ。 外－篦削り。	有段口縁坏。
－2	土師器 坏	16.5 － －	内－黒色処理。 外－ナデ	有段口縁坏。
－3	土師器 甕	19.0 － －	内－刷毛目。 外－篦削り。	
－4	土師器 甕	23.0 － －	内－刷毛目。 外－篦削り～篦磨き。	
－5	磨製石斧	10.3 6.0 3.5		520ｇ 混入遺物。

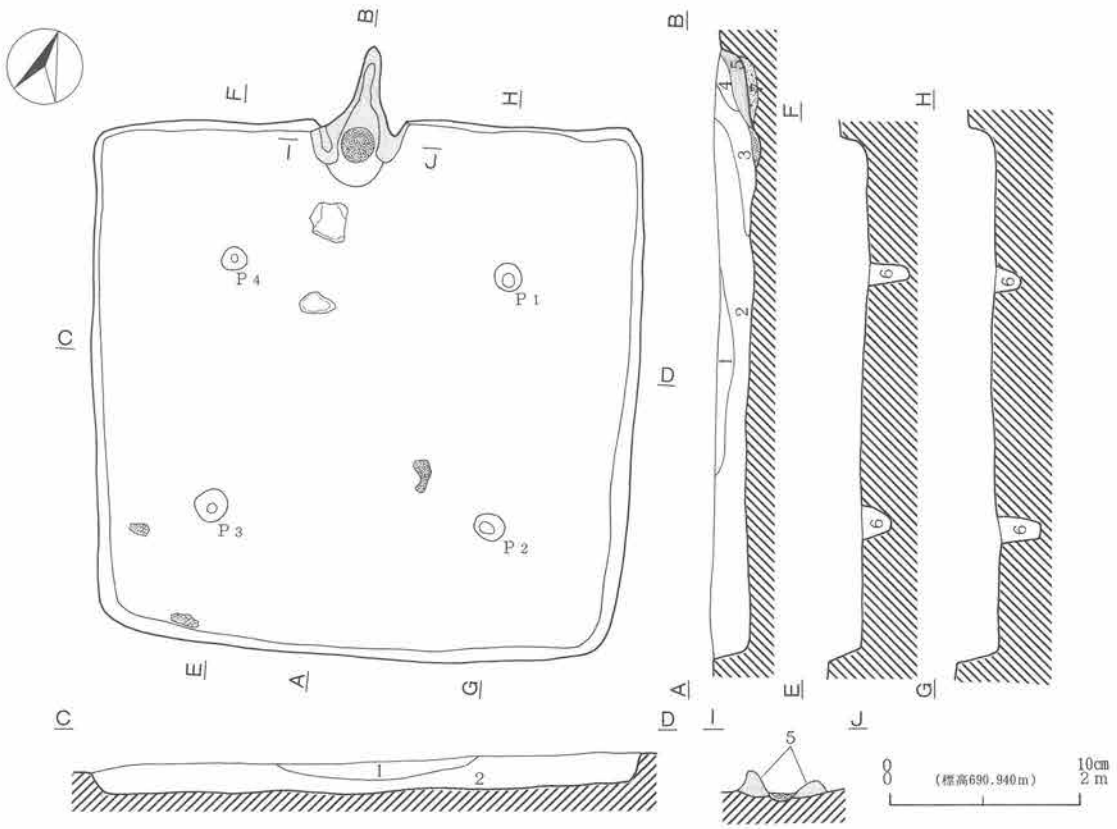
第86表　H52号住居址出土遺物観察表

石斧が出土しているが混入品である。

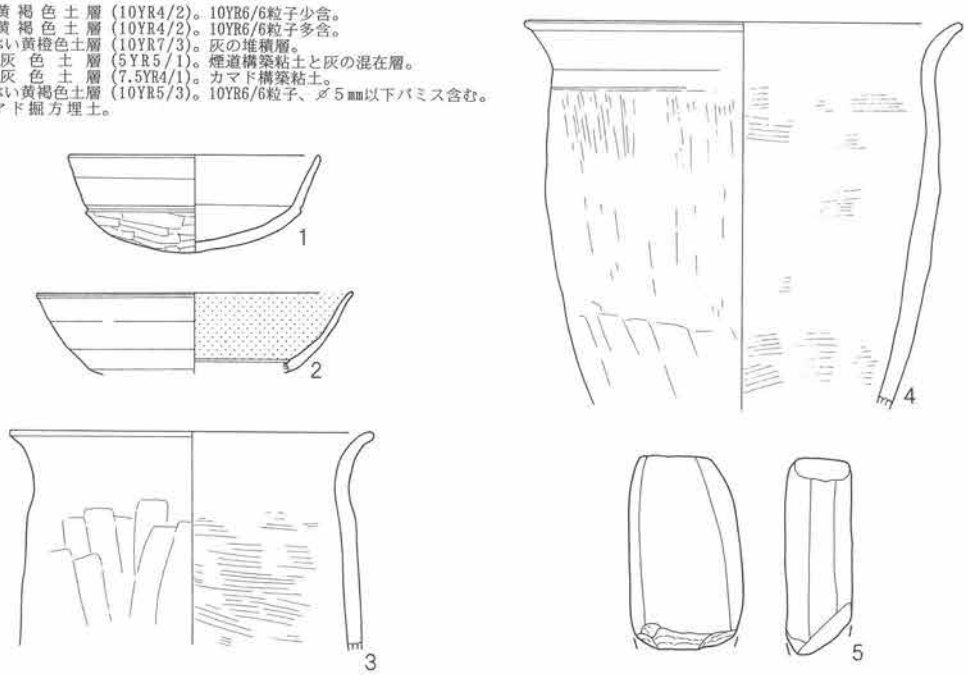
H53号住居址（第96・97図、図版二十四・百三十・百三十一）

遺構－Vき4グリットで検出された。M6号溝址に切られ、H75号住居址を切る。隅丸方形の平面プランを呈し、長軸長4.8ｍ×短軸長4.8ｍ×壁残高0.4ｍの規模を有する。N－10°－Wに長軸方位をとる。北壁中央部分に構築されていたであろうカマドは、M6号溝址により消滅していた。4基検出されたPitは全て主柱穴である。柱は確認されなかった。覆土は自然堆積で周溝は有さない。

遺物－土師器と石器が出土している。土師器には坏（1・2）、高杯（3）、小型甕（5・6）、甕（4・7・8・11）、壺（9・10・12）が認められる。1の坏は須恵器坏蓋の模倣を原型とするもので、内面ナデ、外面篦削り調整が施される。2は丸底気味の底部から口縁がやや外反して立ち上がるもので、内面黒色処理、外面篦磨き調整が施される。高杯3は内面黒色処理、脚内は篦削り調整、外面に刷毛目調整後篦削り調整を加えている。5・6の小型甕は頸部の括れが弱いもので、5は内外面刷毛目調整、6は内外面に篦磨き調整が施される。甕は長胴の4・7・8と



1　灰黄褐色土層（10YR4/2）。10YR6/6粒子少含。
2　灰黄褐色土層（10YR4/2）。10YR6/6粒子多含。
3　にぶい黄橙色土層（10YR7/3）。灰の堆積層。
4　褐灰色土層（5YR5/1）。煙道構築粘土と灰の混在層。
5　褐灰色土層（7.5YR4/1）。カマド構築粘土。
6　にぶい黄褐色土層（10YR5/3）。10YR6/6粒子、∅5㎜以下パミス含む。
7　カマド掘方埋土。



第95図　H52号住居址

胴張りの11が存在する。4・7は内面ナデ、外面篦削り調整が施される。8は内面刷毛目調整、外面篦削り調整が施されている。11は内面ナデ、外面篦削り調整後ナデ調整が施される。壺9は小型で内面ナデ、外面篦削り調整が施される。10は内外面に光沢のある黒色顔料が塗彩されている。顔料の成分は未分析である。12は口縁部に有段口縁坏の様な稜あるいは段を有する。内面刷毛目調整、外面刷毛目調整～篦削り調整が施されている。石器には13～19の編物石と20の砥石が

挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
－1	土師器 坏	12.6 － －	内－ナデ。 外－篦削り。	
－2	土師器 杯	12.3 － －	内－黒色処理。 外－篦磨き。	
－3	土師器 高坏	13.8 10.7 8.0	内－黒色処理。脚内：篦削り。 外－刷毛目～篦削り。	
－4	土師器 甕	18.4 － －	内－ナデ。 外－篦削り。	
－5	土師器 小型甕	9.8 － －	内外－刷毛目。	
－6	土師器 小型甕	12.8 － －	内外－篦磨き。	
－7	土師器 甕	21.6 － －	内－ナデ。 外－篦削り。	
－8	土師器 甕	23.0 － －	内－刷毛目。 外－篦削り。	
－9	土師器 壺	11.2 － －	内－ナデ。 外－篦削り。	
－10	土師器 壺	－ － －	内外－黒色顔料塗彩。	
－11	土師器 甕	－ － －	内－ナデ。 外－ナデ・篦削り。	
－12	土師器 壺	20.0 7.4 －	内－刷毛目。 外－刷毛目～篦削り。	
－13	編物石	9.3 5.1 2.2		210 g
－14	編物石	8.1 6.2 3.9		310 g
－15	編物石	9.9 5.2 3.1		230 g
－16	編物石	10.6 5.7 3.6		370 g

第87表　H53号住居址出土遺物観察表（1）

挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
−17	編物石	10.5 5.0 4.1		380 g
−18	編物石	14.1 6.0 5.1		650 g
−19	編物石	10.9 8.4 4.7		620 g
−20	砥石	14.7 7.6 2.8		560 g

第88表　H53号住居址出土遺物観察表（2）

認められる。

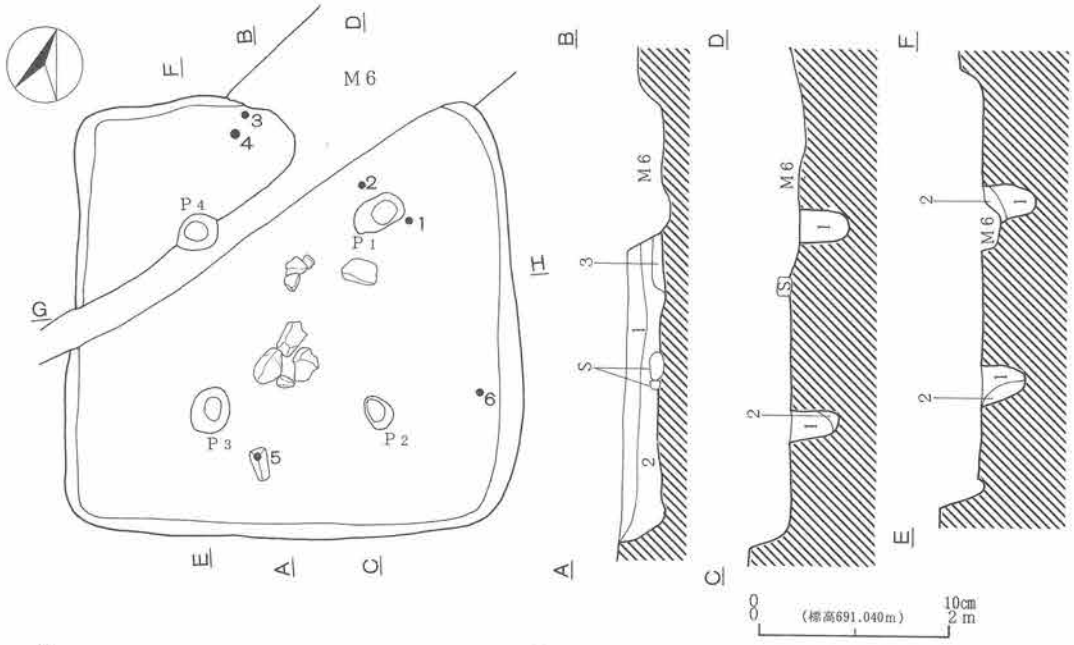
H55号住居址（第98図、図版二十五・百三十二・百三十三）

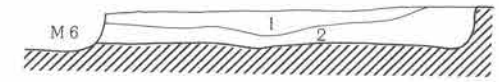
遺構－Ⅴき5グリットで検出された。M5号・M6号溝址に切られる。隅丸長方形の平面プランを呈し、南北4.6m×東西5.2m×壁残高0.25mの規模を有する。南北を主軸としてN－10°－Wの主軸方位をとる。カマドは北壁中央に構築されていたが、M5により破壊され、火床だけが確認された。5基検出されたPitの内P1～P4の4基が主柱穴である。柱は確認されなかった。覆土は自然堆積である。

遺物－土師器、須恵器が出土している。土師器には坏（1～3）、小型甕（6・7・9）、甕（8・10）が存在する。坏は須恵器坏蓋の模倣を原型とする1・3と、丸底で底部と口縁部の境から口縁部が大きく外反する2が認められる。1・2は内面黒処理が施され、3点共に外面は篦削り調整がなされる。小型甕6は内面刷毛目、外面篦削り調整が施される。7は内面ナデ、外面篦削り調整のもの、9は内外面共にヘラナデ・篦削り調整の後篦磨き調整を施している。甕は2点共に長胴甕で、8は内面刷毛目調整、10はナデ調整で、外面は双方共篦削り調整が施される。須恵器には坏（5）と坏蓋（4）が認められる。セットとして捉えて良い法量である。坏・坏蓋共に口縁部の端部は丸い。坏蓋の口縁部と天井部境の稜線も不明瞭な沈線により表現されていることから、田辺陶邑編年のTK43の範疇で捉えられるものと思われる。

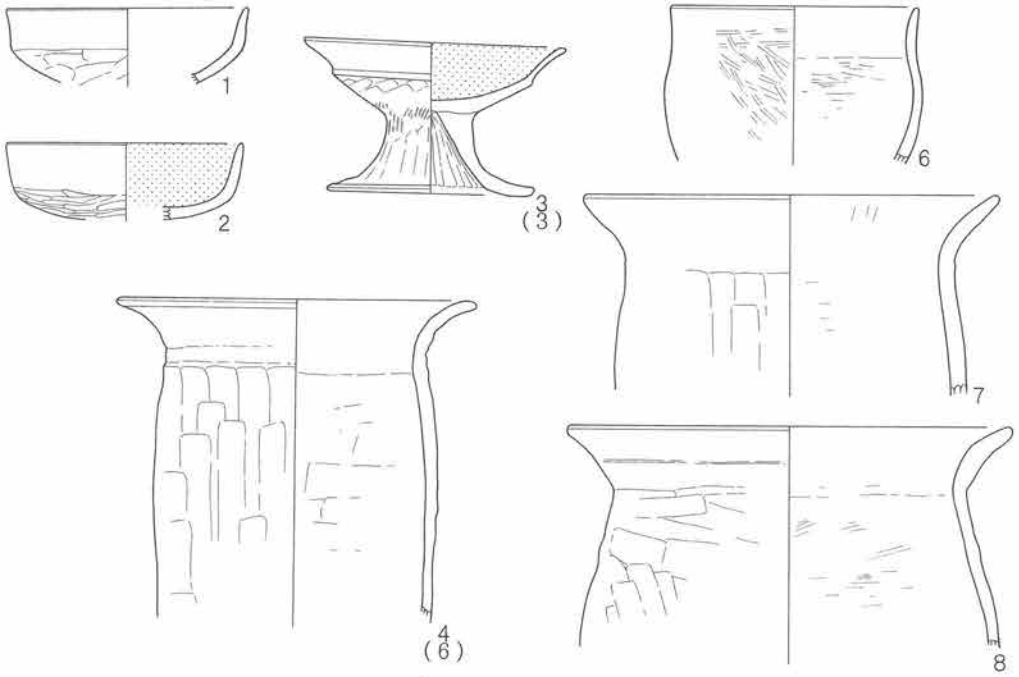
H56号住居址（第99図、図版二十五・百三十三）

遺構－Ⅴか8グリットで検出された。M5号・M6号溝址に切られる。本址は第2次調査分のH37号住居址と同一の住居址である。第2次調査分において第2次調査のH50号住居址を切っている。壁残高0.5mを測り、南北を主軸とする真北に主軸をとる。カマドは北壁の中央部分に構築されており長径1.3m、深度0.55mの規模である。石組みを粘土で被覆した所謂「石組粘土カ

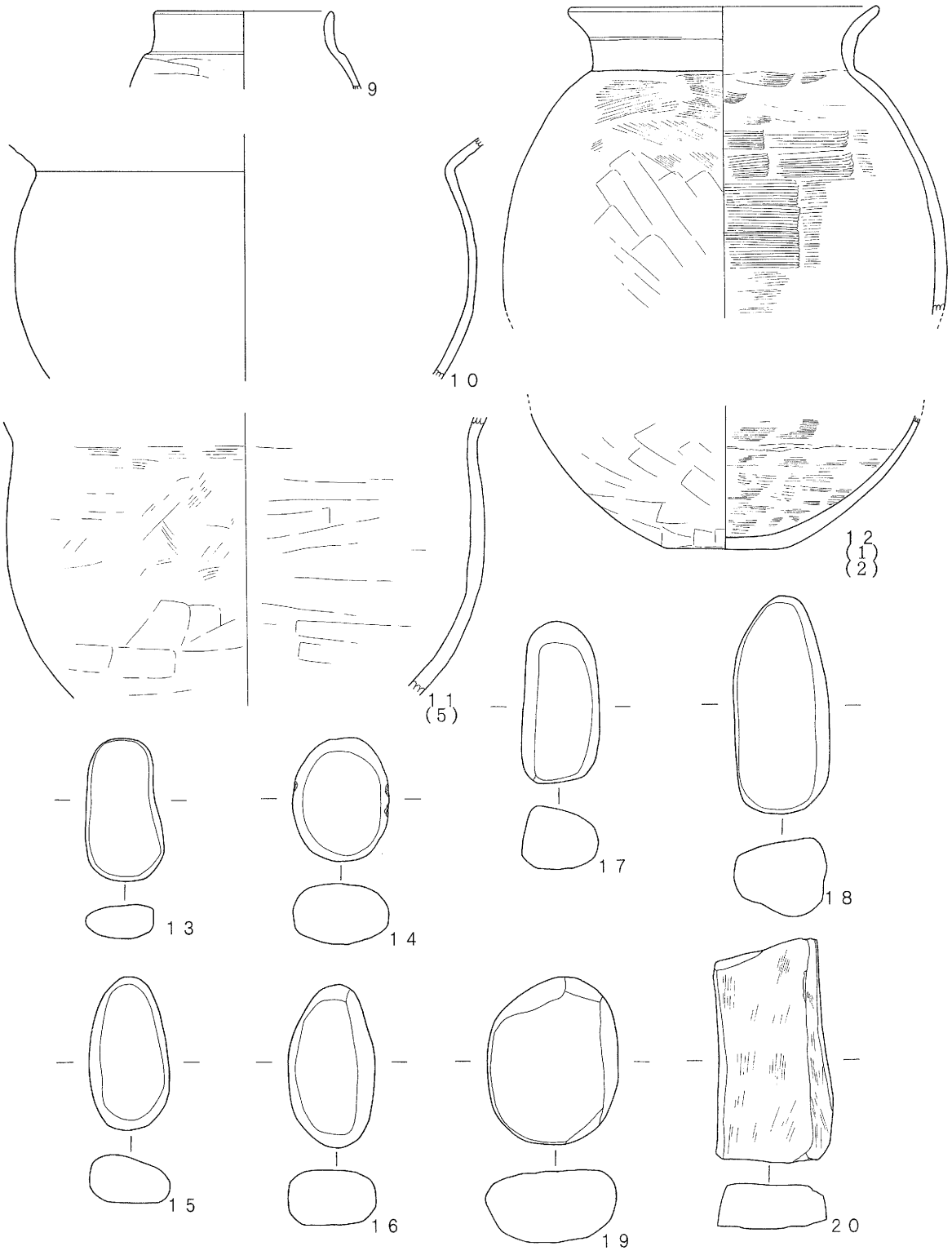




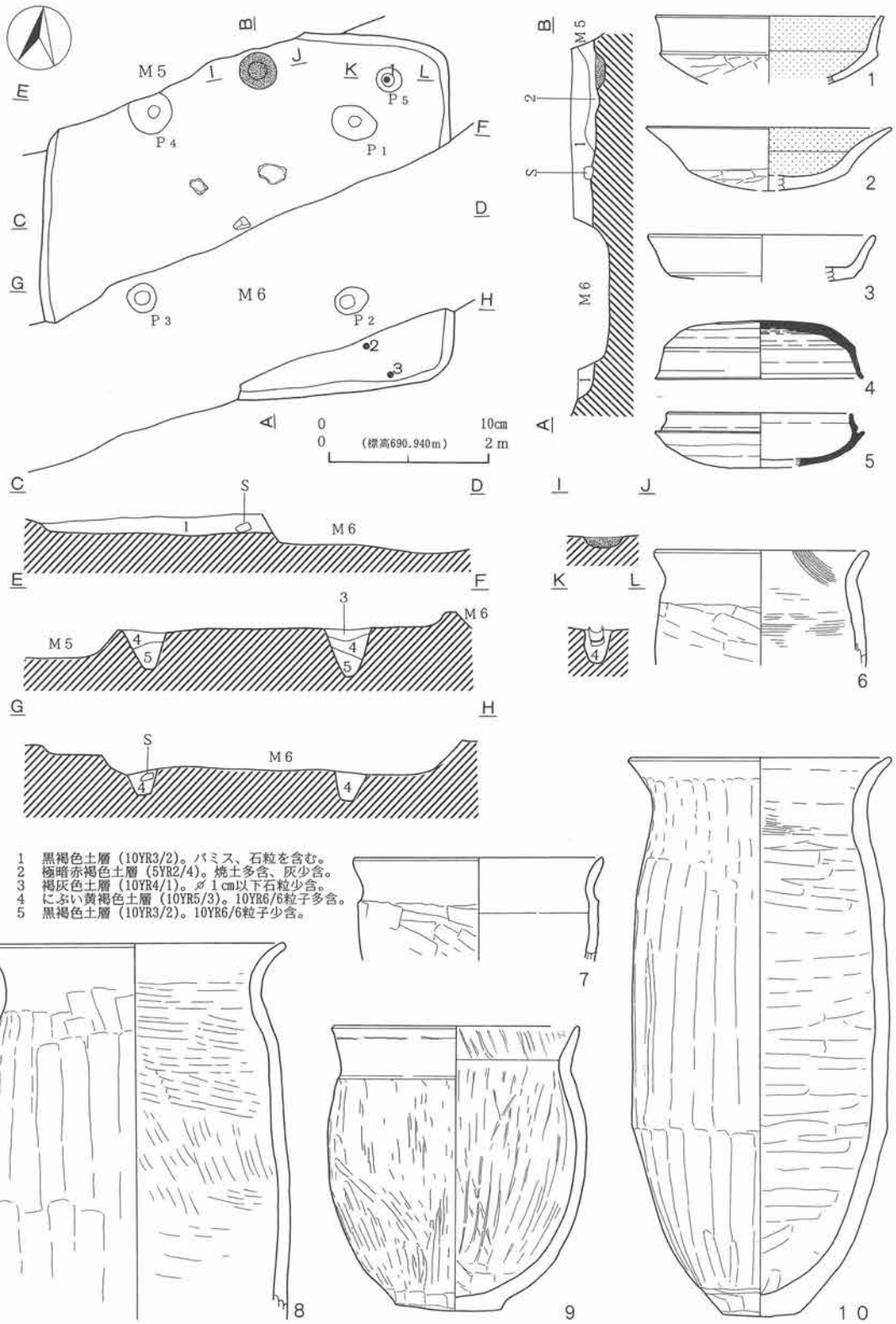
1　にぶい黄褐色土層（10YR6/4）。10YR6/6粒子、10YR4/2粒子の混在土。
　　φ5㎜大石粒、パミスを含む。
2　灰黄褐色土層（10YR4/2）。φ5㎜以下石粒、パミスを含む。
3　にぶい橙色土層（7.5YR7/3）。カマド構築土の流出層。



第96図　H53号住居址（1）



第97図　H53号住居址（2）



第98図　H55号住居址

挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
－1	土師器 坏	14.2 － －	内－黒色処理。 外－篦削り。	
－2	土師器 杯	15.2 － 4.0	内－黒色処理。 外－篦削り。	
－3	土師器 坏	14.2 － －	内－ナデ。 外－篦削り。	
－4	須恵器 坏蓋	12.9 － 3.7	内－ナデ。 外－篦削り。	TK43。
－5	須恵器 坏	11.4 － 3.5	内－ナデ。 外－篦削り。	TK43。
－6	土師器 小型甕	13.2 － －	内－刷毛目。 外－篦削り。	
－7	土師器 小型甕	15.5 － －	内－ナデ。 外－篦削り。	
－8	土師器 甕	18.7 － －	内－刷毛目。 外－篦削り。	
－9	土師器 小型壺	15.3 6.6 18.0	内－ナデ、篦磨き。 外－篦削り、篦磨き。	
－10	土師器 甕	16.2 5.0 35.2	内－ナデ。 外－篦削り。	

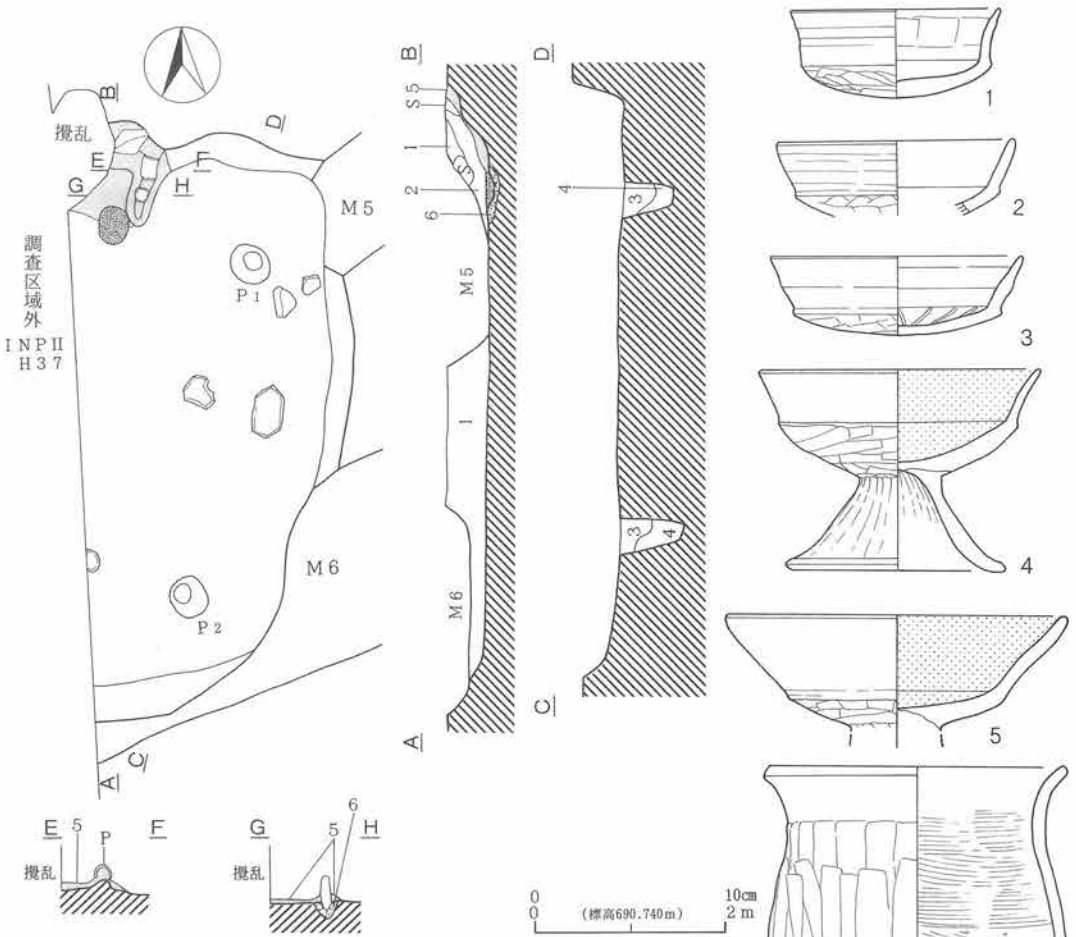
第89表　H55号住居址出土遺物観察表

マド」である。2基検出されたPitは、2次調査分の2基のPitと合わせ4基の主柱穴を構成する。柱は確認できなかった。覆土は自然堆積で周溝は存在しなかった。

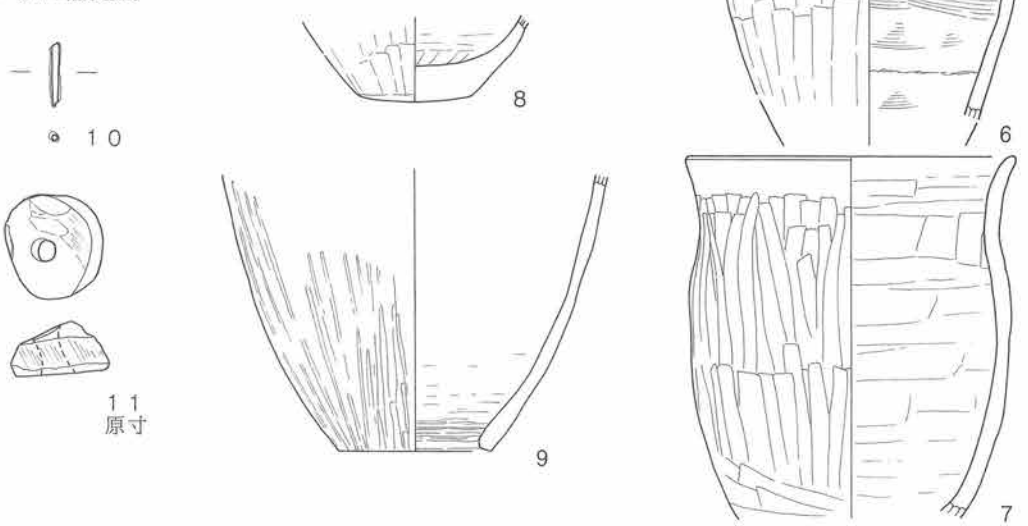
遺物－土師器、鉄器、石製品が出土している。土師器には坏（1～3）、高杯（4・5）、甕（6～8）、甑（9）が認められる。坏は3点共に所謂「有段口縁坏」である。1・2は内面ナデ調整、3は放射状の案文が付加される。外面は3点共に篦削り調整が加えられる。高杯は2点共に内面黒色処理され、外面と脚内には篦削り調整が施される。甕は全て長胴である。6は内面刷毛目調整、7・8はナデ調整が施される。外面は3点全て篦削り調整が施されている。9の甑は内外面篦磨き調整される大型のものである。鉄器は断面円形を呈する棒状のものが1点出土している。器種は不明である。石製品としては11の臼玉が出土している。滑石製である。

H57号住居址（第100図、図版二十六・百三十三）

遺構－Vえ3グリットで検出された。H67号・H86号住居址を切る。隅丸長方形の平面プランを呈し、南北2.8m×東西3.4m壁残高0.3mの規模を有する。主軸を南北とすると、N－20°－



1　灰黄褐色土層（10YR4/2）。∅5㎜以下パミス、石粒、10YR6/6粒子含む。
2　灰黄褐色土層（10YR4/2）。∅5㎜以下パミス、石粒、10YR6/6粒子、焼土、炭化物を含む。
3　黒褐色土層（10YR3/2）。10YR6/6粒子少含。
4　にぶい黄橙色土層（10YR6/4）。砂の２次堆積。
5　カマド構築粘土。
6　カマド掘方埋土。



第99図　H56号住居址

挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
－1	土師器 坏	11.0 － 4.7	内－ナデ・篦削り。 外－篦削り。	有段口縁坏。
－2	土師器 杯	12.4 － －	内－ナデ。 外－篦削り。	有段口縁坏。
－3	土師器 坏	13.4 － 4.3	内－ナデ・放射状暗文。 外－篦削り。	有段口縁坏。
－4	土師器 高坏	14.7 11.2 10.7	内－黒色処理。 外－篦削り・篦磨き。	
－5	土師器 高坏	17.8 － －	内－黒色処理。 外－篦削り・篦磨き。	
－6	土師器 甕	15.4 － －	内－刷毛目・ナデ。 外－篦削り。	
－7	土師器 甕	17.2 － －	内－ナデ。 外－篦削り。	
－8	土師器 甕	－ 6.0 －	内－ナデ。 外－篦削り。	
－9	土師器 甑	－ 8.0 －	内外－篦磨き。	
－10	鉄器？	3.4 0.4 0.4		1.3ｇ
－11	臼玉	1.4 1.3 0.7		1.6ｇ

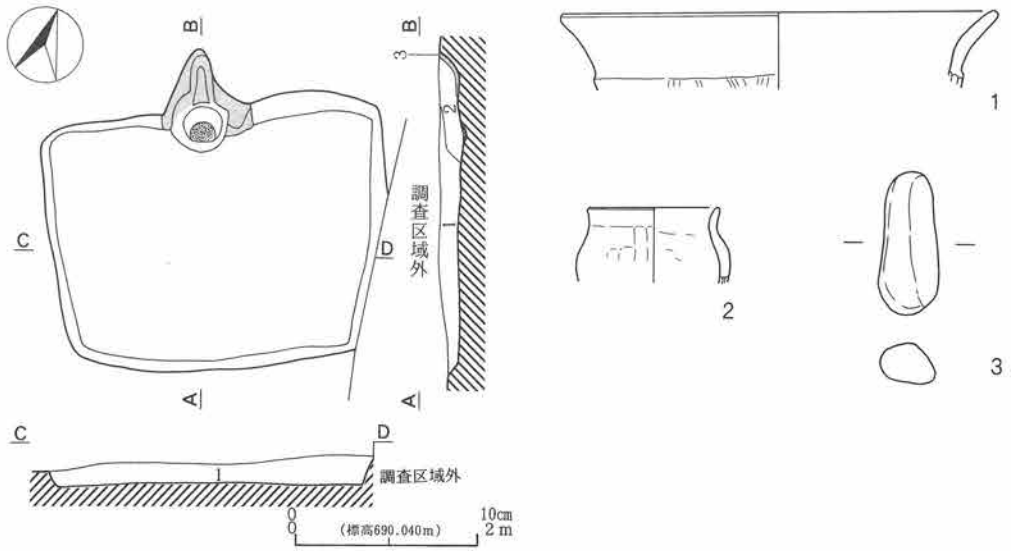
第90表　H56号住居址出土遺物観察表

Wの主軸方位をとる。カマドは北壁の中央部分に構築されており、残存部部には石は存在せず、粘土だけで構築されていた。長径1.07ｍ×短径0.95ｍ×深度0.3ｍの規模を有する。Pitは存在せず、覆土は自然堆積であった。

遺物－土師器と磨石が出土している。土師器には小型甕（2）、甕（1）が認められる。小型甕は広口で内面ナデ調整、外面篦削り調整が施される。甕は長胴で内面ナデ調整、外面刷毛目調

挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
－1	土師器 甕	22.8 － －	内－ナデ。 外－刷毛目。	
－2	土師器 小型甕	6.8 － －	内－ナデ。 外－篦削り。	
－3	磨石	7.5 3.2 2.2		64.6ｇ

第91表　H57号住居址出土遺物観察表



1　黒褐色土層（10YR5/2）。∅5㎜以下パミス、石粒を含む。
2　にぶい黄橙色土層（10YR7/2）。粘土粒子、焼土、炭化物を含む。
3　カマド構築粘土。

第100図　H57号住居址

整のものである。

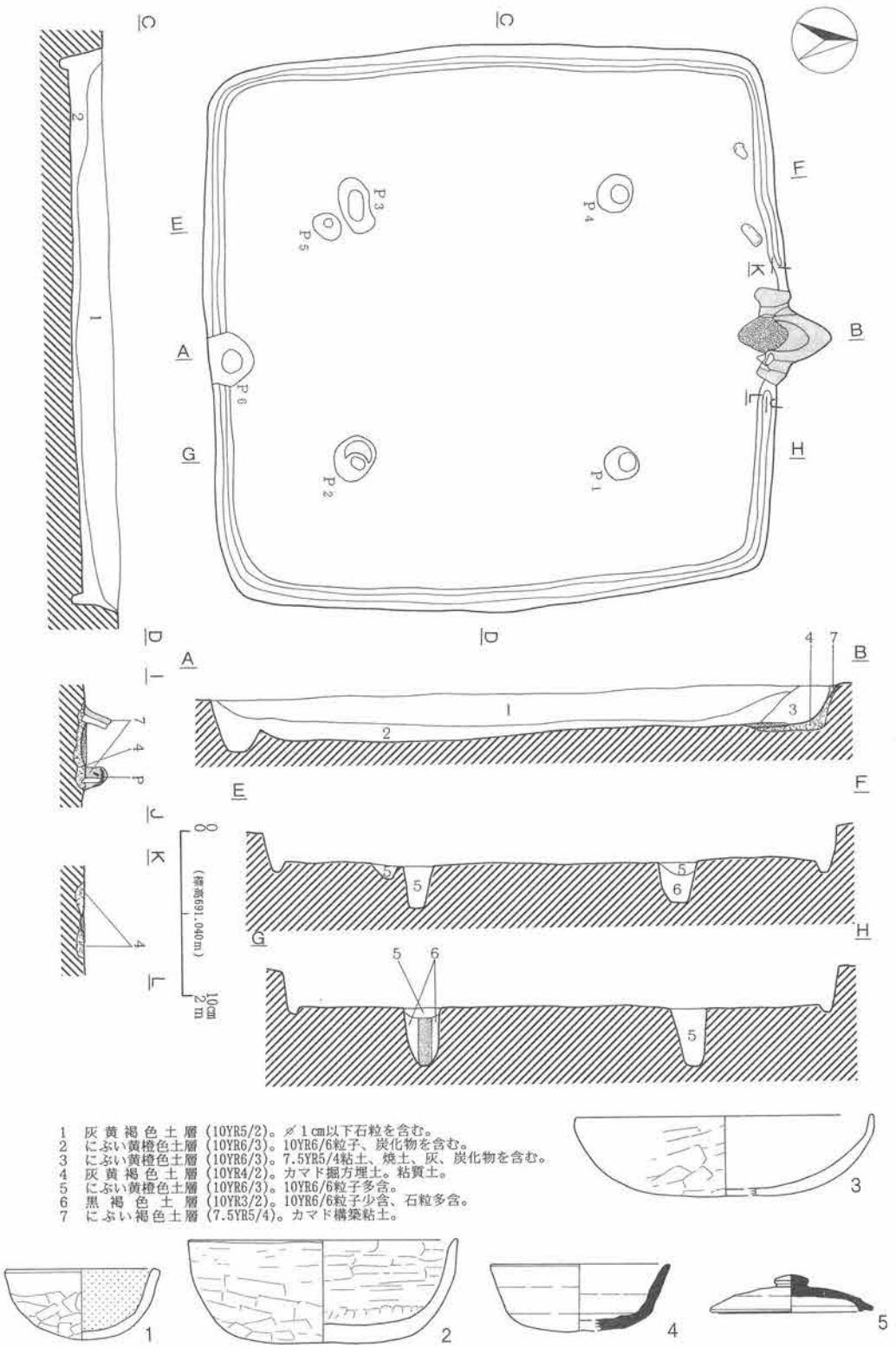
H62号住居址（第101～103図、図版二十八・百三十七～百三十九）

遺構－Vい4グリットで検出された。H79号・H100号住居址を切る。隅丸方形の平面プランを呈し、長軸長7.6ｍ×短軸長6.95ｍ×壁残高0.55ｍの規模を有し、N－2°－Wに長軸方位をとる。カマドは北壁の中央部分に構築され、長径1.15ｍ×短径1.1ｍ×深度0.5ｍの規模を有する。構造は石芯を粘土で被覆するものであるが、天井部分は崩壊しており残存していなかった。Pitは6基検出された内のＰ1～Ｐ4の4基が主柱穴である。Ｐ2では直径18㎝の柱が確認されている。Ｐ6はカマドと相対位置の南壁下に構築されており、出入り口に関係するものと思われる。カマドとＰ6部分を除く壁下には周溝が巡らされている。巾16㎝、床面からの深度16㎝を測る。覆土は自然堆積である。

遺物－土師器、須恵器、石器が出土している。土師器には坏（1～3）、高杯（6～8）、甕（9～19）、壺（20）が認められる。1・3の坏は半球状を呈し、外面に篦削り調整が加えられる。1は内面黒色処理がなされる。2は平坦な底部をもち、内湾気味に開いた口縁部が端部で外反する。内面ヘラナデ、外面篦削り調整が施される。高杯6・7は半球状の坏部を有し内面黒色処理される。8は脚部の破片で、裾が内面に稜をなして強く開いている。甕は器壁が薄く外面頸部下に斜位の篦削り調整が施される9・12・14・16のような「武蔵甕」系のものとそうでないものと

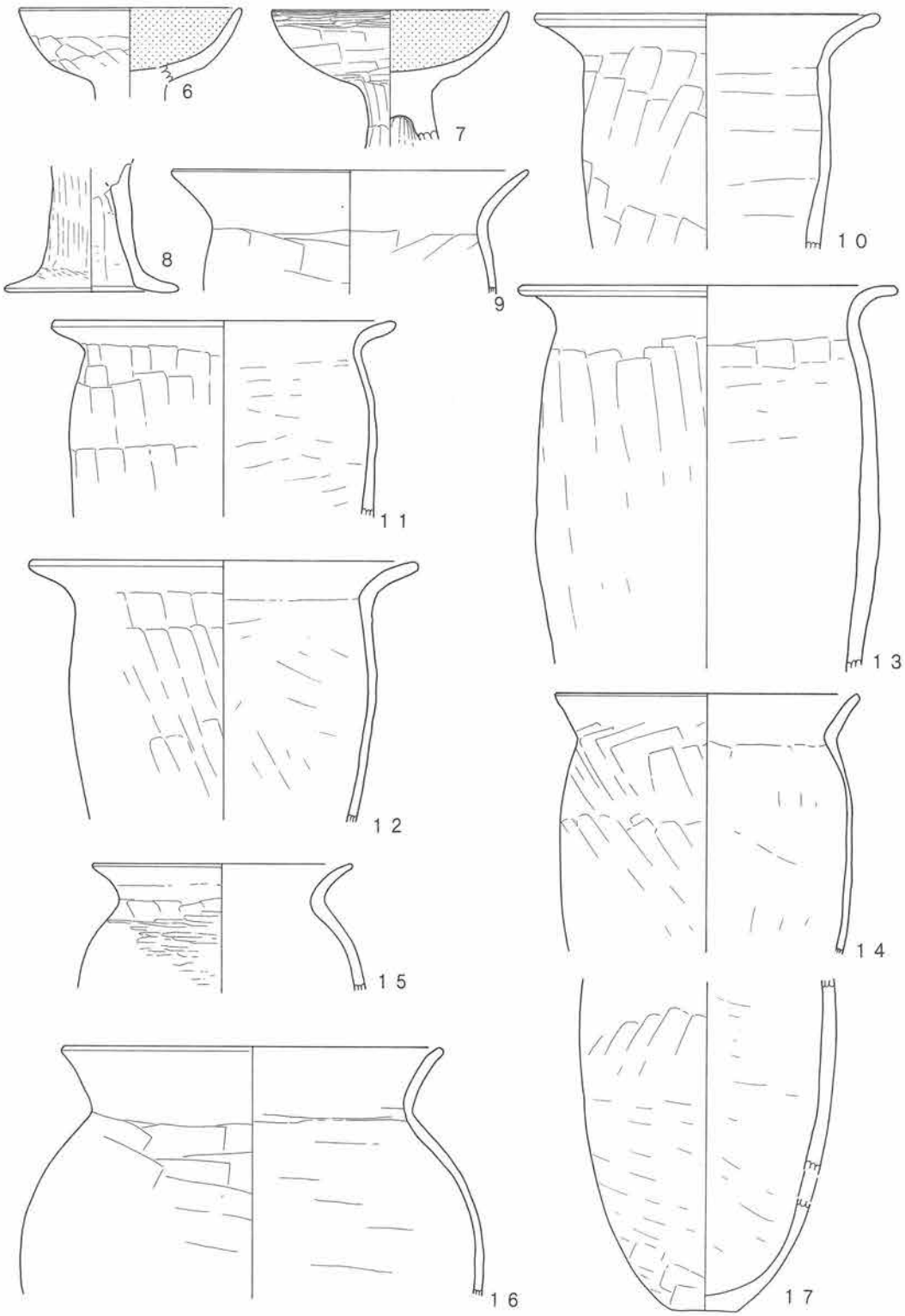
挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
－1	土師器 坏	9.5 － 4.3	内－黒色処理。 外－篦削り。	
－2	土師器 坏	16.4 6.0 6.3	内－ヘラナデ。 外－篦削り。	
－3	土師器 坏	18.4 － 4.9	内－ナデ。 外－篦削り。	
－4	須恵器 坏	11.0 8.4 4.1	底部篦切り篦削り。	
－5	須恵器 坏蓋	10.0 － 2.2		
－6	土師器 高坏	13.3 － －	内－黒色処理。 外－篦削り。	
－7	土師器 高坏	14.7 － －	内－黒色処理。 外－篦削り、篦磨き。	
－8	土師器 高杯	－ 10.7 －	内－ヘラナデ、篦削り。 外－篦削り。	
－9	土師器 甕	22.0 － －	内－ナデ。 外－篦削り。	武蔵甕。
－10	土師器 甕	21.3 － －	内－ナデ。 外－篦削り。	
－11	土師器 甕	21.2 － －	内－ナデ。 外－篦削り。	
－12	土師基 甕	24.0 － －	内－ナデ。 外－篦削り。	武蔵甕。
－13	土師器 甕	23.3 － －	内－ナデ。 外－篦削り。	
－14	土師器 甕	18.8 － －	内－ナデ。 外－篦削り。	武蔵甕。
－15	土師器 甕	16.0 － －	内－ナデ。 外－篦削り～篦磨き。	
－16	土師器 甕	23.3 － －	内－ナデ。 外－篦削り。	武蔵甕。
－17	土師器 甕	－ 4.0 －	内－ナデ。 外－篦削り。	
－18	土師器 甕	22.4 － 25.9	内－ナデ。 外－篦削り。	
－19	土師器 甕	26.1 － 34.5	内－ナデ。 外－篦削り。	

第92表　H62号住居址出土遺物観察表（1）

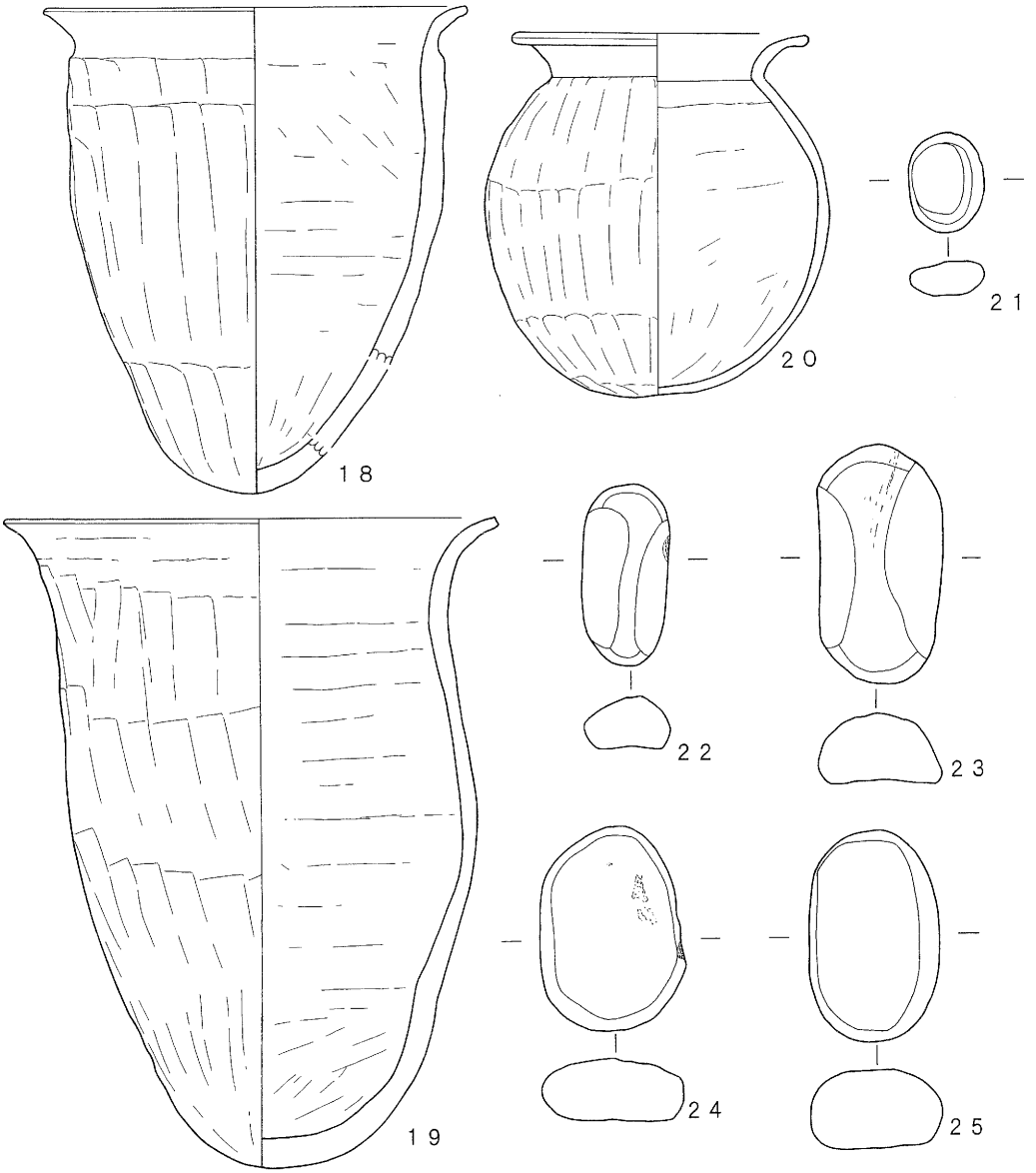


1　灰黄褐色土層（10YR5/2）。∅1cm以下石粒を含む。
2　にぶい黄橙色土層（10YR6/3）。10YR6/6粒子、炭化物を含む。
3　にぶい黄橙色土層（10YR6/3）。7.5YR5/4粘土、焼土、灰、炭化物を含む。
4　灰黄褐色土層（10YR4/2）。カマド掘方埋土。粘質土。
5　にぶい黄橙色土層（10YR6/3）。10YR6/6粒子多含。
6　黒褐色土層（10YR3/2）。10YR6/6粒子少含、石粒多含。
7　にぶい褐色土層（7.5YR5/4）。カマド構築粘土。

第101図　H62号住居址（1）



第102図　H62号住居址（2）



第103図　H62号住居址（3）

が混在する。器形てきには15・16のような胴張りのものと長胴のものが存在する。壺20は丸底で球形胴を呈し、口縁部が端部で大きく開く特徴的な器形を有している。内面ナデ、外面篦削り調整が施されている。須恵器には坏（4）と坏蓋（5）が認められる。坏は比較的小型でロクロから篦で切り離された後、篦削り調整が施されている。5の坏蓋はかえりを有し、扁平な擬宝珠つまみが付されている。坏同様小型である。かえりの端部、口縁部の端部共に断面が丸く仕上げら

挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
−20	土師器 壺	15.7 − 19.2	内−ナデ。 外−篦削り。	
−21	編物石	5.3 4.0 1.8		441 g
−22	編物石	9.6 4.6 2.6		220 g
−23	編物石	12.7 6.5 3.6		530 g
−24	編物石	10.9 7.6 3.2		410 g
−25	編物石	11.2 6.8 4.1		460 g

第93表　H62号住居址出土遺物観察表（2）

れている。石器（21～25）は全て編物石である。

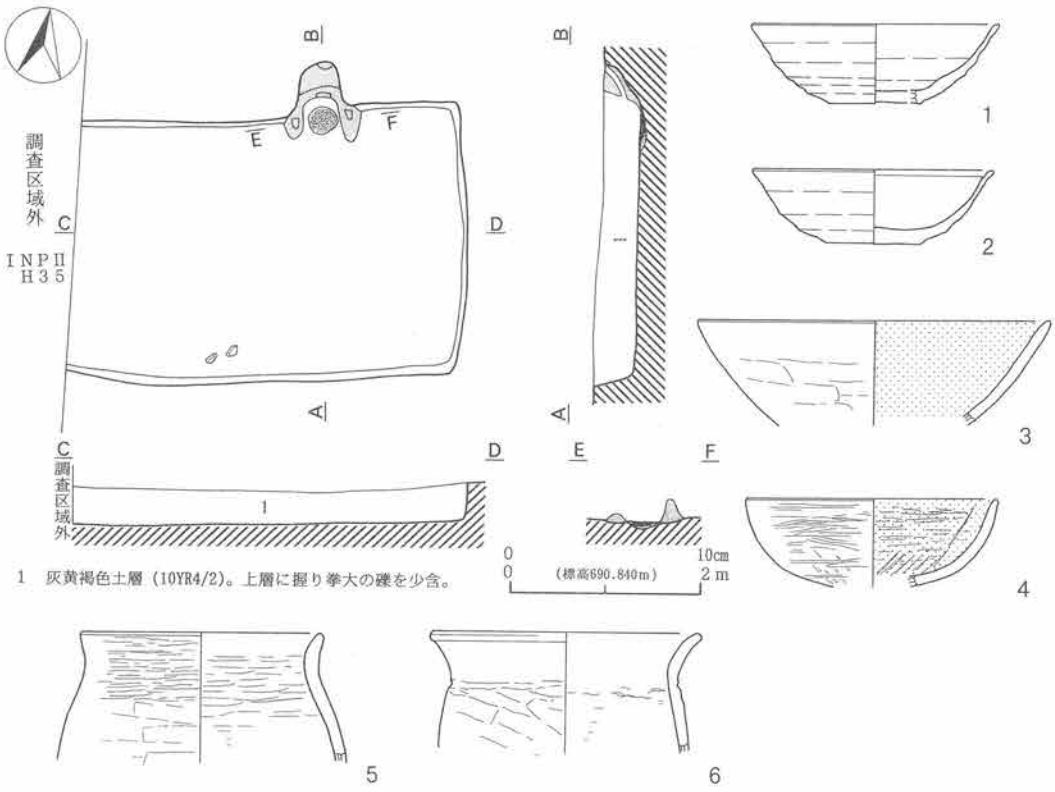
H63号住居址（第104図、図版二十九・百三十九）

遺構－Vい6グリットで検出された。H65号住居址を切る。長方形の平面プランを呈する。南北長3.4ｍ、壁残高0.4ｍの規模を呈する。第2次調査におけるH35号住居址は本址と同一の住居址である。カマドは北壁の中央と北東隅の中間に構築される。煙道部は残存していたが天井部分は流出しており存在しなかった。残存部分は粘土により構築されていた。南北径0.78ｍ×東西径0.8ｍ×深度0.44ｍを測る。Pit、周溝は存在せず、覆土は自然堆積であった。

遺物－土師器が出土している。坏（1・2・4）、鉢（3）、甕（5・6）の器種が認められる。1・2は混入品である。2点共に底部に回転糸切痕が認められる。4の坏は半球状を呈し、内面黒色処理、外面篦磨き調整が施される。3の鉢は内面黒色処理、外面には篦削り調整が施される。甕は長胴のもので、5は内面篦磨き、外面には篦削り調整後篦磨き調整が施される。6は内面ナデ調整、外面篦削り調整のものである。

H65号住居址（第105・106図、図版二十九・百四十・百四十一）

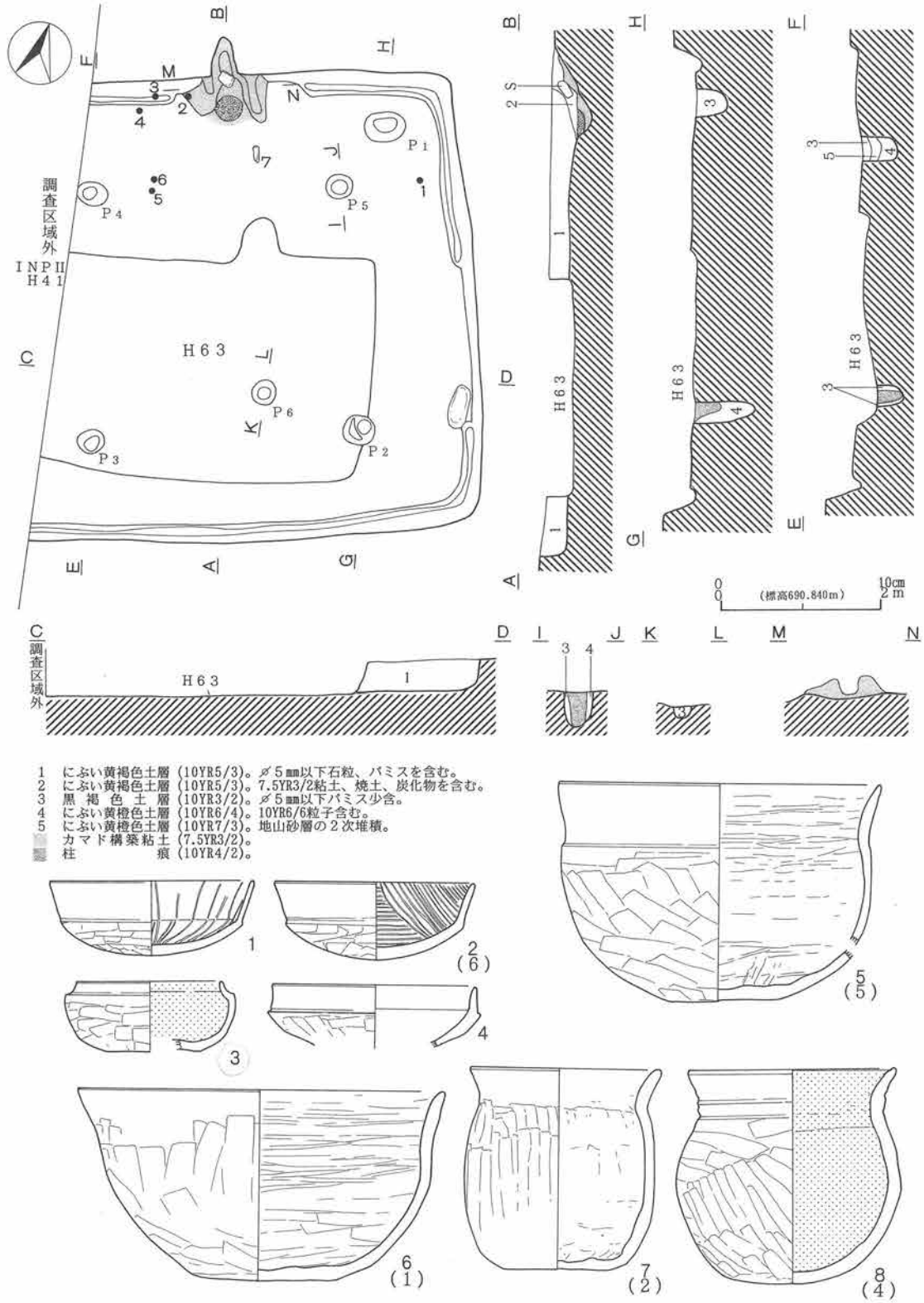
遺構－Vい6グリットで検出された。H63号住居址に切られ、H89号住居址を切る。第2次調査におけるH41号住居址は本址と同一の住居址である。隅丸方形の平面プランを呈し、N－30°－Wに長軸方位をとる。長軸長6.48ｍ、壁残高0.4ｍの規模を有する。カマドは北壁の中央部分に構築されており、長径1.07ｍ×短径1.05ｍ×深度0.5ｍの規模を有する。石芯を粘土で被覆した所謂「石組粘土カマド」である。Pitは6基検出され、その内のＰ2～Ｐ5の4基が主柱穴で



第104図　H63号住居址

挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
－1	土師器 坏	13.0 － 4.2	右回転糸切り。	混入品。
－2	土師器 杯	12.7 5.0 3.9	方向不明回転糸切り。	混入品。
－3	土師器 鉢	18.6 － －	内－黒色処理。 外－篦削り。	有段口縁坏。
－4	土師器 坏	13.3 － －	内－黒色処理。 外－篦削り・篦磨き。	
－5	土師器 甕	12.9 － －	内－篦磨き。 外－篦削り・篦磨き。	
－6	土師器 甕	14.4 － －	内－ナデ。 外－篦削り。	

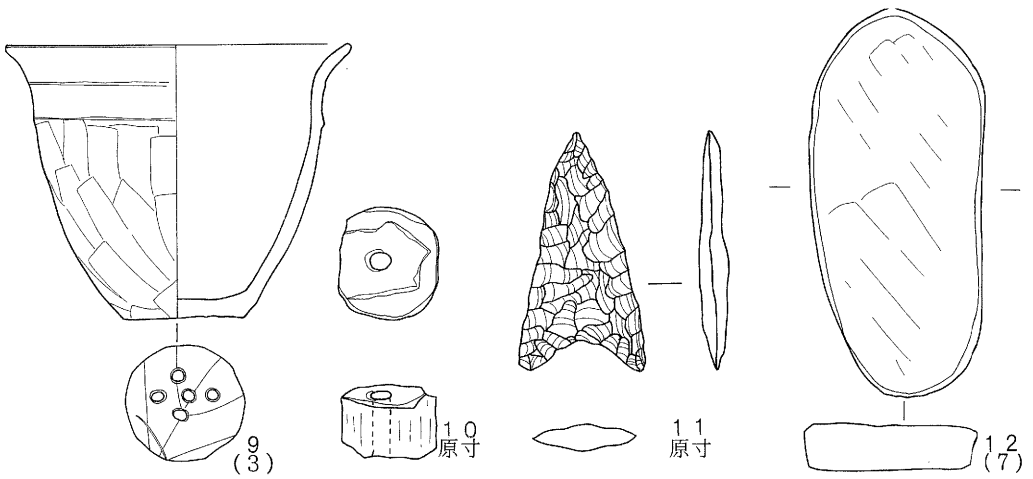
第94表　H63号住居址出土遺物観察表



第105図　H65号住居址（1）

ある。Ｐ２で20㎝、Ｐ３で15㎝、Ｐ５で22㎝の柱が確認されている。壁下には周溝が巡らされており、カマド部分と東壁下の中央部分は途切れている。覆土は自然堆積である。

遺物－土師器、石器、石製品が出土している。土師器には坏（１～４）、鉢（５・６）、小型甕（７・）、壺（８）、甑（９）が認められる。坏（１・２・４）は須恵器坏蓋の模倣を原形とするもので、１・２は内面には暗文状の篦磨き、４はナデ調整、外面は３点共に篦削り調整が施される。３は須恵器坏身の模倣を原形とするもので内面黒色処理、外面篦削り調整が施される。鉢５・６は坏を深く巨大化させた形状のもので、内面篦削り～篦磨き、外面には篦削り調整が施される。小型甕７は平坦な底部をもち、内面ナデ調整、外面篦削り調整が施される。壺８は内面黒処理が施される。外面は篦削り調整され、口縁部には有段口縁坏と同様な手法による段を有している。甑９は多孔のもので底部には木葉痕が認められ、内面ナデ調整、外面篦削り調整が施される。８の壺と同様に、口縁部には有段口縁坏と同様な手法による段を有している。石器としては11の打製石鏃と12の砥石が認められる。11は混入品である。石製品としては10の滑石製臼玉が出土し



第106図　H65号住居址（２）

ている。

H67号住居址（第107・108図、図版三十一・三十二・百四十二）

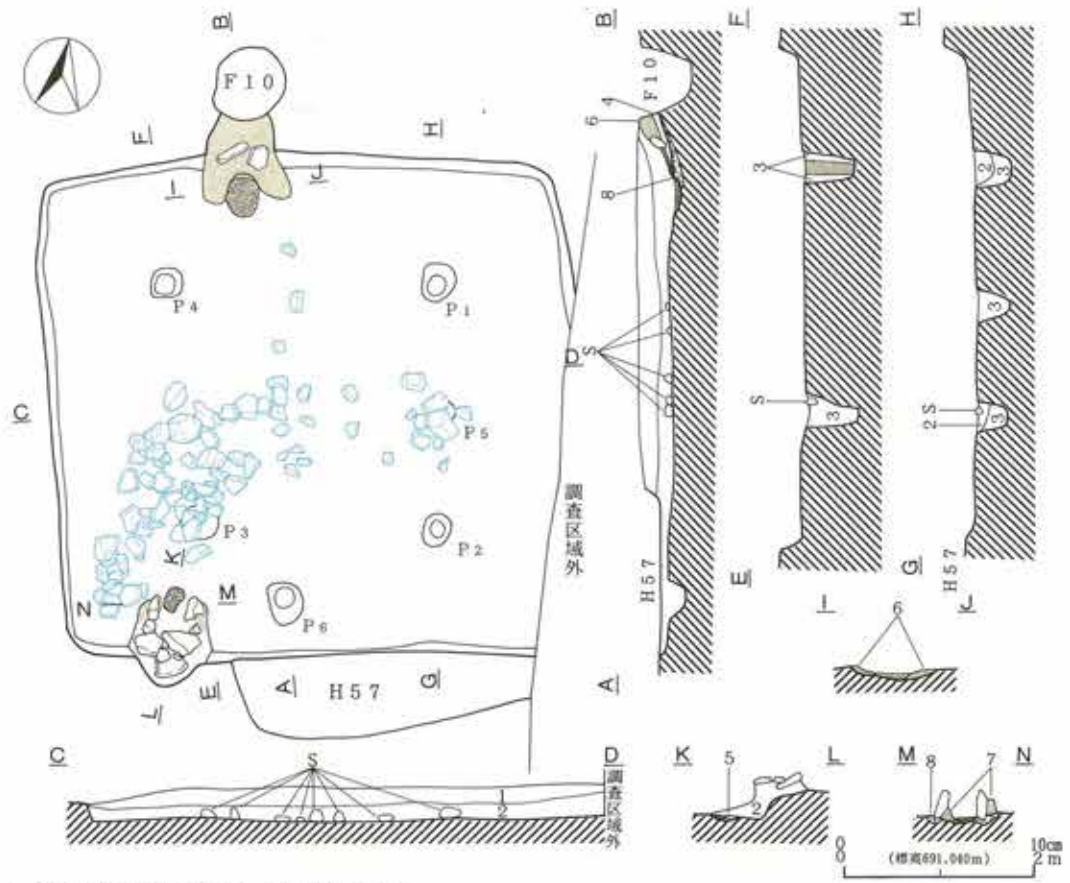
遺構－Ⅴお３グリットで検出された。H57号住居址・Ｆ10号掘立柱建物址に切られる。隅丸長方形の平面プランを呈し、Ｎ－15°－Wに長軸方位をとる。長軸長5.32ｍ、壁残高0.35ｍの規模を有する。カマドは２基検出された。北壁の中央やや西寄りに構築されたカマドは旧カマドであり、煙道部が閉塞されていた。南壁の西南隅近くに構築されていたカマドが住居廃絶時に使用さ

挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
−1	土師器 坏	13.1 — 4.8	内−暗文状篦磨き。 外−篦削り。	
−2	土師器 杯	12.7 — 5.0	内−暗文状篦磨き。 外−篦削り。	No.6
−3	土師器 坏	8.5 — 4.5	内−黒色処理。 外−篦削り。	
−4	土師器 坏	13.0 — —	内−ナデ。 外−篦削り。	
−5	土師器 鉢	20.5 14.0 6.7	内−篦削り〜篦磨き。 外−篦削り。	No.5
−6	土師器 鉢	23.4 12.3 9.3	内−篦削り〜篦磨き。 外−篦削り。	No.1
−7	土師器 小型甕	12.3 6.3 12.9	内−ナデ。 外−篦削り。	No.2
−8	土師器 壺	13.1 5.5 13.7	内−黒色処理。 外−篦削り。口縁部に段。	No.4
−9	土師器 甑	18.2 6.3 14.5	内−ナデ。 外−篦削り。口縁部に段。	No.3
−10	臼玉	1.4 — 0.8		2.6g
−11	打製石鏃	3.2 1.7 0.8		1.4g
−12	砥石	20.4 9.1 2.5		680g No.7

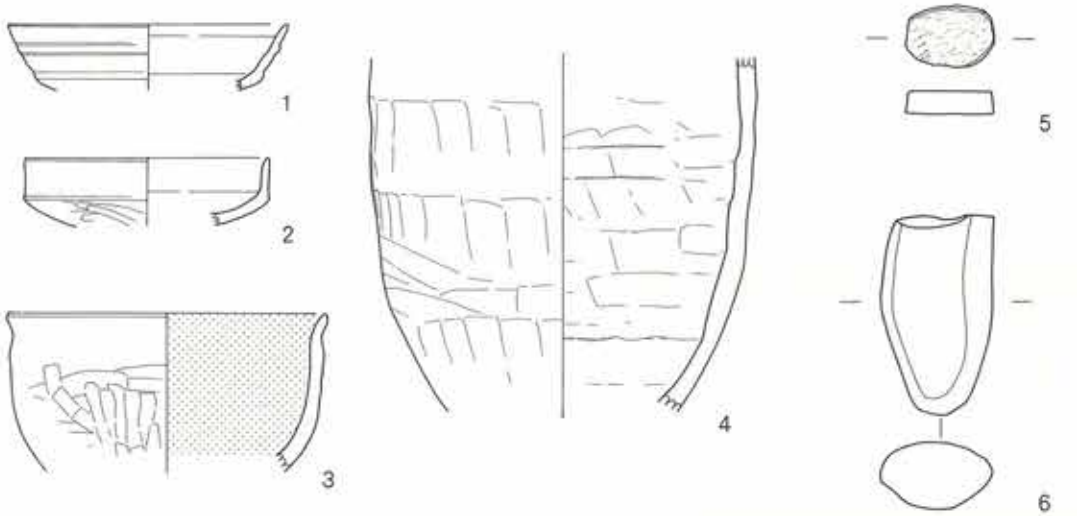
第95表　H65号住居址出土遺物観察表

れていたもので、長径1.05m×短径0.85m×深度0.4mの規模を有する。双方共に所謂「石組粘土カマド」である。Pitは6基検出され、その内のP1〜P4の4基が主柱穴であった。P4から直径15cmの柱が確認された。本址は、住居址廃絶時に多量の礫が床面上に廃棄あるいは配置されていた。その散布状態に規則性は見いだせなかった。覆土は自然堆積である。

遺物−土師器、石器、石製品が出土している。土師器には坏（1・2）、鉢（3）、甕（4）が認められる。坏1は有段口縁坏である。坏2は須恵器坏蓋の模倣を原形とするもので、内面ナデ調整、外面篦削り調整が施されている。鉢3は内面黒色処理、外面篦削り調整が施される。甕4は長胴を呈するもので、内面ナデ、外面篦削り調整が施される。石器としては6・10のような磨石と、7・9のような編物石、8・11のような凹石が認められる。石製品としは5の軽石製の円盤が出土している。



1　にぶい黄褐色土層（10YR5/3）。∅5㎜以下石粒少含。
2　にぶい黄褐色土層（10YR5/3）。∅5㎜以下石粒、パミス、10YR6/6粒子を含む。
3　にぶい黄褐色土層（10YR5/4）。∅5㎜以下石粒、パミス、10YR6/6粒子を多含。
4　にぶい黄褐色土層（10YR5/4）。
5　にぶい黄褐色土層（10YR4/3）。5YR8/1粘土の混在。
6　にぶい黄橙色土層（10YR7/3）。カマド構築粘土。
7　灰　白　色　土　層（5Y8/1）。カマド構築粘土。
8　にぶい黄褐色土層（10YR4/3）。カマド掘方埋土。



第107図　H67号住居址（1）

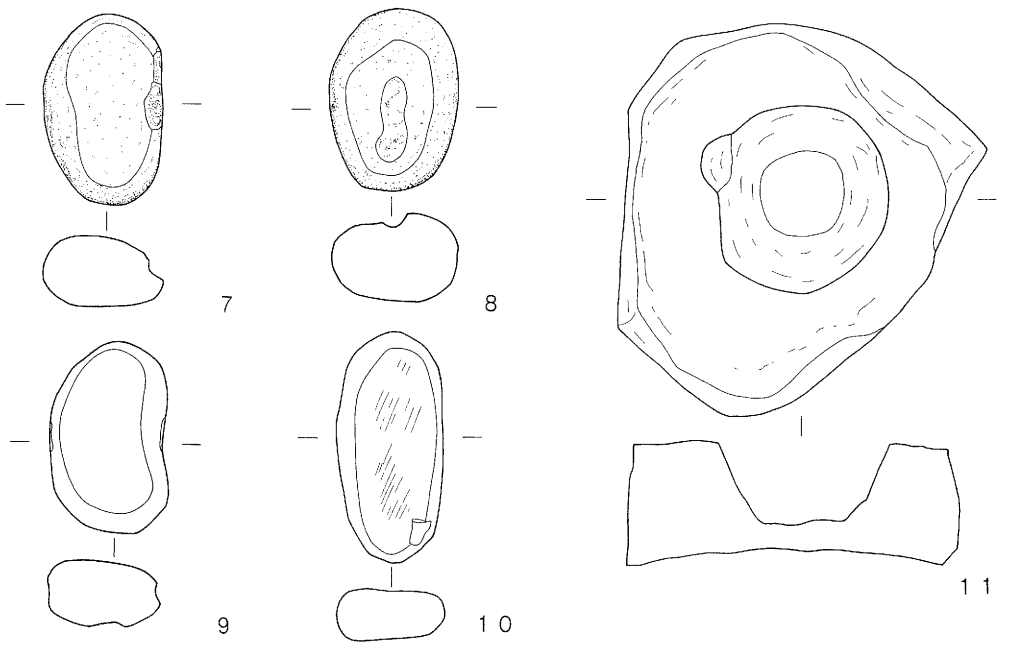
挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
－1	土師器 坏	14.8 － －	内－ナデ。 外－篦削り。	有段口縁坏。
－2	土師器 杯	13.0 － －	内－ナデ。 外－篦削り。	
－3	土師器 鉢	17.0 － －	内－黒色処理。 外－篦削り。	
－4	土師器 甕	－ － －	内－ナデ。 外－篦削り。	
－5	軽石製 円盤	4.6 3.2 1.2		10.5ｇ
－6	磨石	10.4 5.9 3.5		280ｇ
－7	編物石	10.0 6.2 3.7		300ｇ
－8	凹石	9.6 6.8 4.6		410ｇ
－9	編物石	10.0 6.0 3.3		340ｇ
－10	磨石	12.2 5.7 2.7		280ｇ
－11	打製石鏃	20.7 18.8 6.4		2380ｇ

第96表　H67号住居址出土遺物観察表

H69号住居址（第109・110図、図版三十・百四十三）

遺構－Ⅴこ６グリットで検出された。H45号・H46号・H47号・H76号・H105号住居址、F16号掘立柱建物址に切られる。隅丸方形の平面プランを呈し、南北長7.2ｍ×東西長7.32ｍ×壁残高0.3ｍの規模を有する。南北を主軸とした場合、N－3°－Wに主軸方位をとる。カマドはH45号住居址により破壊され存在しなかった。Pitは４基検出されすべてが主柱穴と考えられる。柱は確認できなかった。覆土は単層で人為埋土であった。周溝は有さない。

遺物－土師器、須恵器、石器が出土している。土師器には坏（１～４）、甕（６～９）が認められる。坏１・２は内面に段を有し黒色処理される。底部は平坦で篦削りが施されている。３は半球状を呈すもので内面ナデ、外面には篦削り調整が施される。４も内面に段を有する。内面篦磨き、外面には篦削り調整が施される。６の甕は底部片である。底部だけが突出した形態で、内

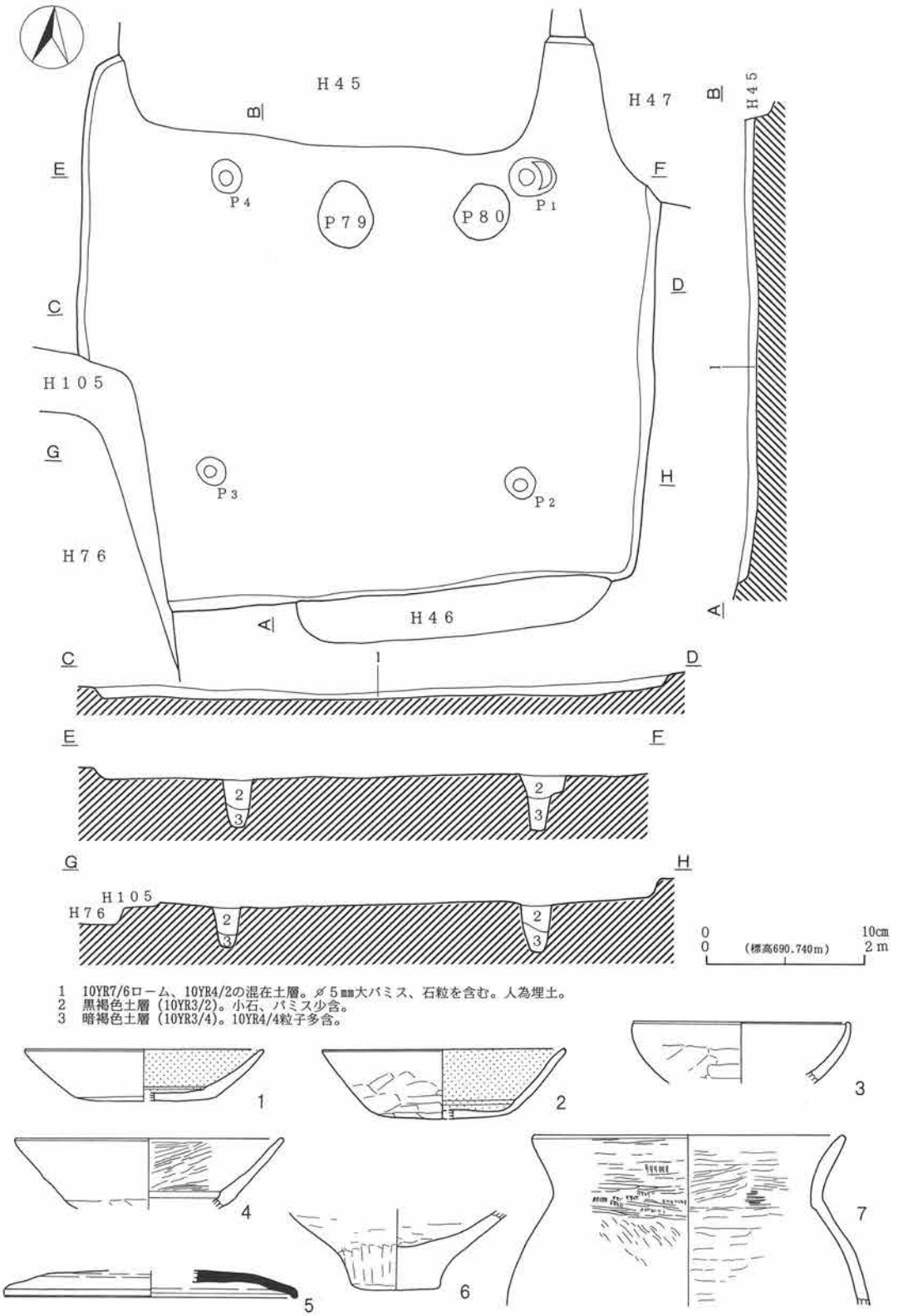


第108図　H67号住居址（2）

面ナデ、外面篦削り調整が施される。7は内外面共に刷毛目調整後篦磨きが施されている。8・9は内面ナデ調整、外面刷毛目調整が施される。須恵器は坏蓋（5）のみが出土している。扁平で、天井部分には篦削り調整が施される。石器は自然礫をそのまま使用した砥石（10）が出土している。

挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
－1	土師器 坏	15.3 － 3.3	内－黒色処理。 外－篦磨き。	
－2	土師器 坏	15.6 － 4.5	内－黒色処理。 外－篦削り。	
－3	土師器 坏	14.0 － －	内－ナデ。 外－篦削り。	
－4	土師器 坏	17.2 － －	内－篦磨き。 外－篦削り。	
－5	須恵器 坏蓋	－ 18.6 －	天井部篦削り。	
－6	土師器 甕	－ 5.7 －	内－ナデ。 外－篦削り。	

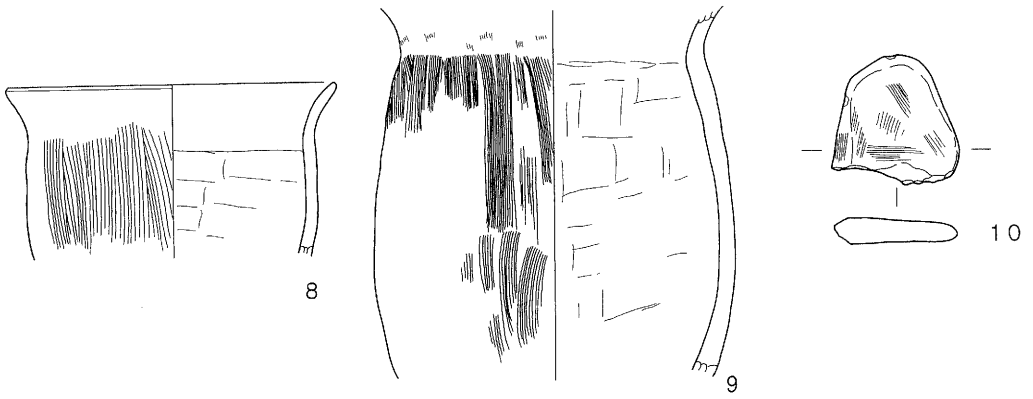
第97表　H69号住居址出土遺物観察表（1）



第109図　H69号住居址（1）

挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
－7	土師器甕	20.0 － －	内外－刷毛目～篦磨き。	
－8	土師器甕	17.5 － －	内－ナデ。外－刷毛目。	
－9	土師器甕	－ － －	内－ナデ。外－刷毛目。	
－10	砥石	7.0 6.8 1.2		77.6ｇ

第98表　H69号住居址出土遺物観察表（2）



第110図　H69号住居址（2）

H70号住居址（第111～113図、図版三十二・三十三・百四十三・百四十四）

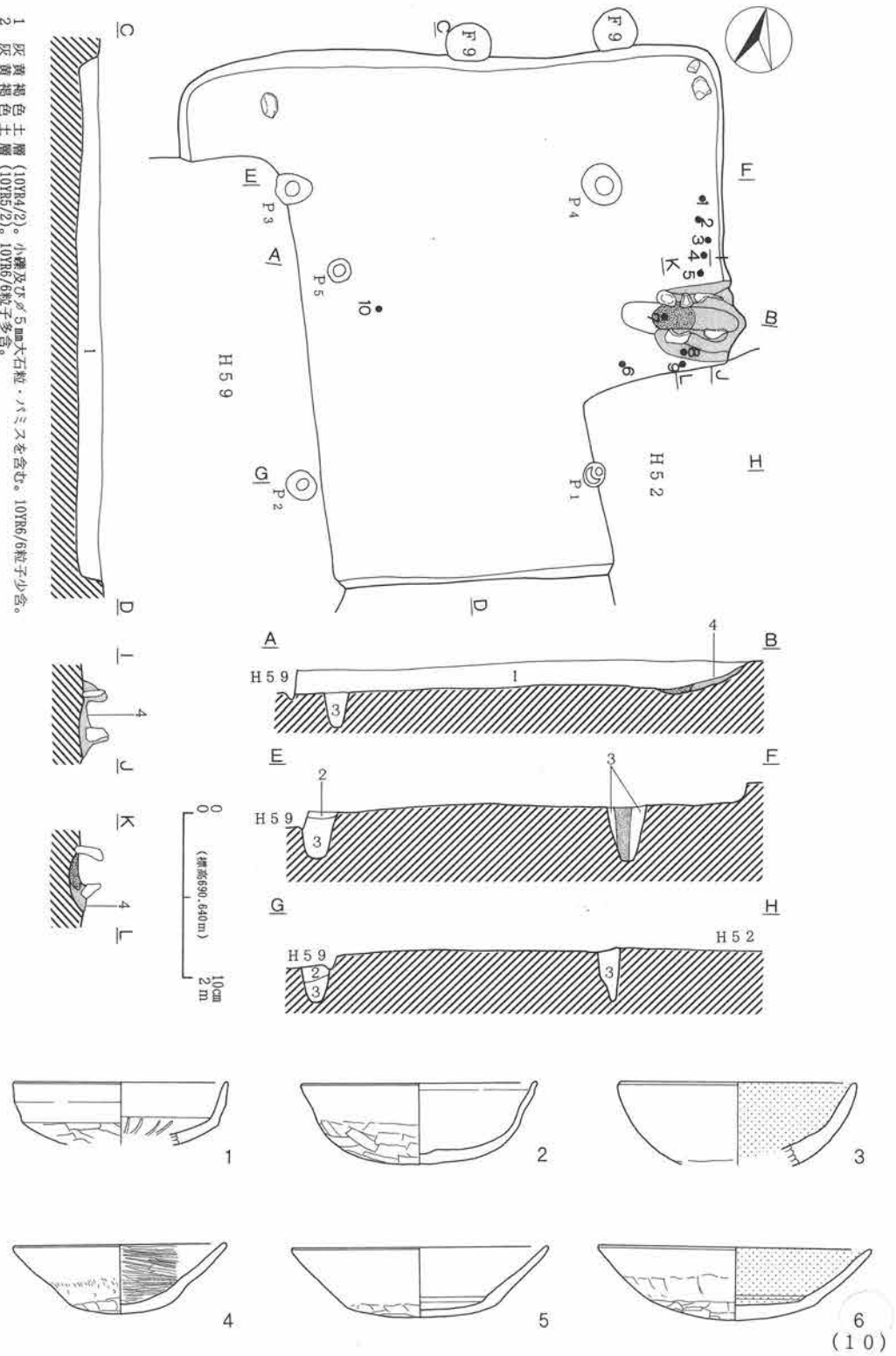
遺構－Vえ6グリットで検出された。H52号・H58号住居址に切られる。隅丸方形の平面プランを呈し、南北長6.56ｍ×東西長6.52ｍ×壁残高0.35ｍの規模を有する。東壁中央部にカマドを有するため、東西を主軸として捉えると主軸方位はＮ－81°－Ｅとなる。カマドの規模は長径1.45ｍ×短径1.05ｍ×深度0.42ｍである。石芯を粘土で被覆した所謂「石組粘土カマド」である。天井部分を流出するが、比較的残存状態は良好であった。Pitは5基検出された。その内のＰ1～Ｐ4の4基が主柱穴である。Ｐ4からは直径20㎝の柱が確認された。周溝は有さず、覆土は自然堆積であった。

遺物－土師器、鉄器、石製品が出土している。土師器には坏（1～6）、甕（7・8・10～12・14・16）、小型甕（9・13・15・）、台付甕（18）、甑（17）が存在する。坏1は内面に放射状の暗文を施し、外面には篦削りが施される。有段口縁坏であろう。2は内面ナデ、外面篦削り調整が施される。3は半球状を呈するもので、内面黒色処理、外面はナデ調整が加えられる。4～

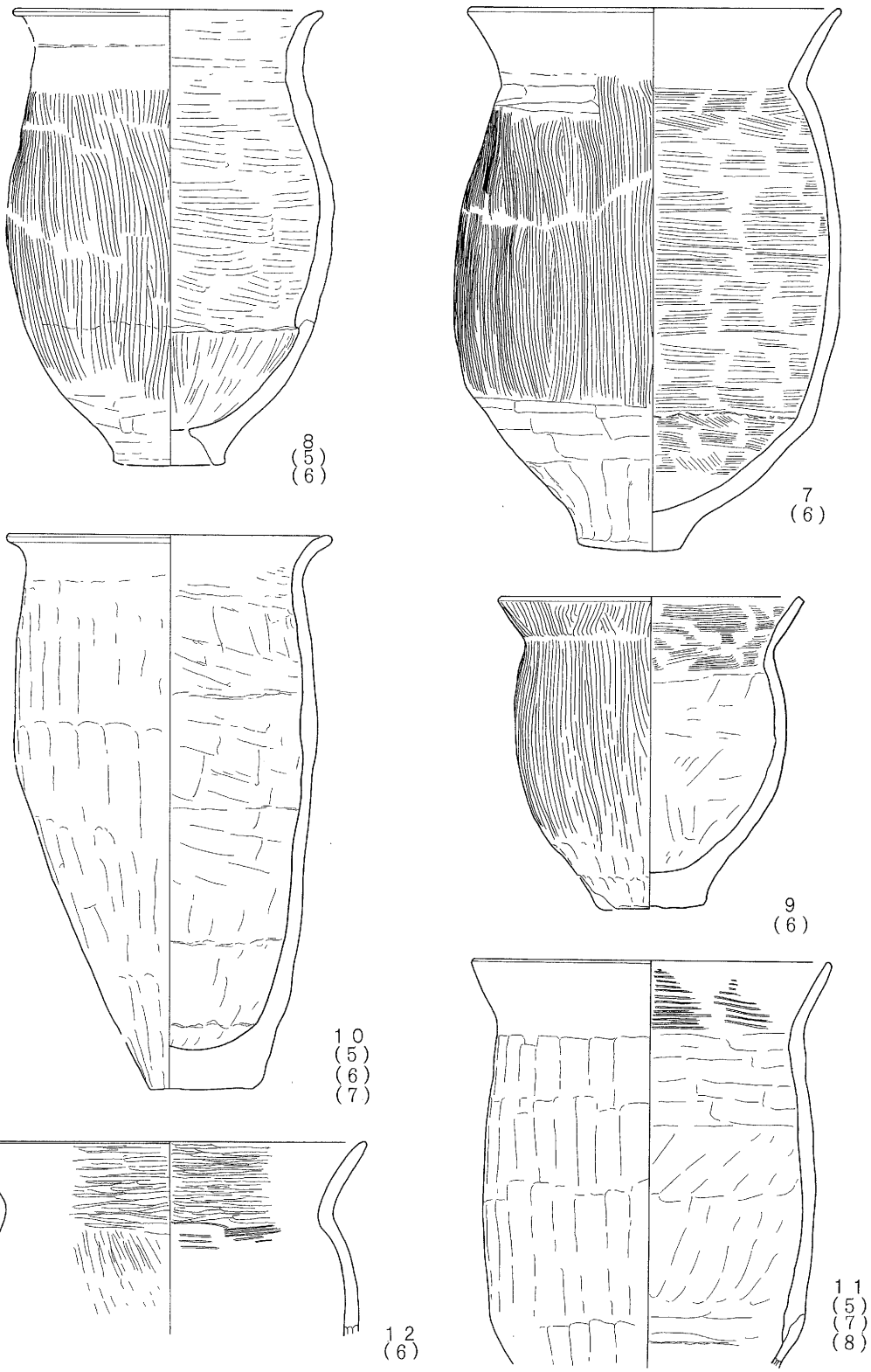
6は丸底の底部から口縁部が内湾気味に大きく開くもので、内面には段を形成する。4は内面篦磨き、5はナデ、6は黒色処理される。外面は3点共に篦削りが施される。甕は刷毛目調整を主体とする7・8と、篦削り調整を主体とする10・11、篦磨き調整を主体とする12・16に大きく分類できる。刷毛目調整を主体とする7・8・14と、篦磨き調整を主体とする12・16は胎土的には良く似ており、赤褐色を呈し砂粒を多含する。器形的にも底部が突出し、体部下半が箱清水式土器の壺のようにこそげた感じになる。篦磨き調整を主体とする12・16は壺と呼ぶ方がよいかも知れない。一方の篦削り調整を主体とする10・11は、長胴で弥生土器に連なる佐久地方の普通の胎土を有している。器形的には11の体部下半に7・8などの影響が認められる。小型甕9は7・8と同系列のものである。13は焼きの良い、器壁の薄い土器で刷毛目調整後篦磨きを加えている。15は内面ナデ、外面篦削り調整が施される。台付甕18は内画面に篦削り調整が施されている。甑17は単孔で内外面共に刷毛目調整後篦削り、ナデ調整を加えている。鉄器20は器種不明である。石製品としては19の紡錘車が出土した。表裏に線刻による鋸歯文が描かれている。

挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
−1	土師器 坏	13.0 − −	内−ナデ、放射状暗文。 外−篦削り。	有段口縁坏。
−2	土師器 坏	14.3 − 4.9	内−ナデ。 外−篦削り。	
−3	土師器 坏	14.5 − −	内−黒色処理。 外−ナデ。	
−4	土師器 坏	13.0 − 4.2	内−篦磨き。 外−篦削り。	
−5	土師器 坏	15.5 9.0 4.2	内−ナデ。 外−篦削り。	
−6	土師器 坏	16.7 − 4.4	内−黒色処理。 外−篦削り。	No.10
−7	土師器 甕	22.5 6.2 33.0	内−刷毛目。 外−刷毛目・篦削り。	No.6
−8	土師器 甕	18.8 6.8 27.7	内−刷毛目。 外−刷毛目・篦削り。	No.5・6
−9	土師器 小型甕	18.6 5.5 18.9	内−刷毛目。 外−刷毛目・篦削り。	No.6
−10	土師器 甕	19.6 6.0 33.8	内−ナデ。 外−篦削り。	No.5・6・7
−11	土師器 甕	21.8 − −	内−刷毛目・ナデ。 外−篦削り。	No.5・7・8

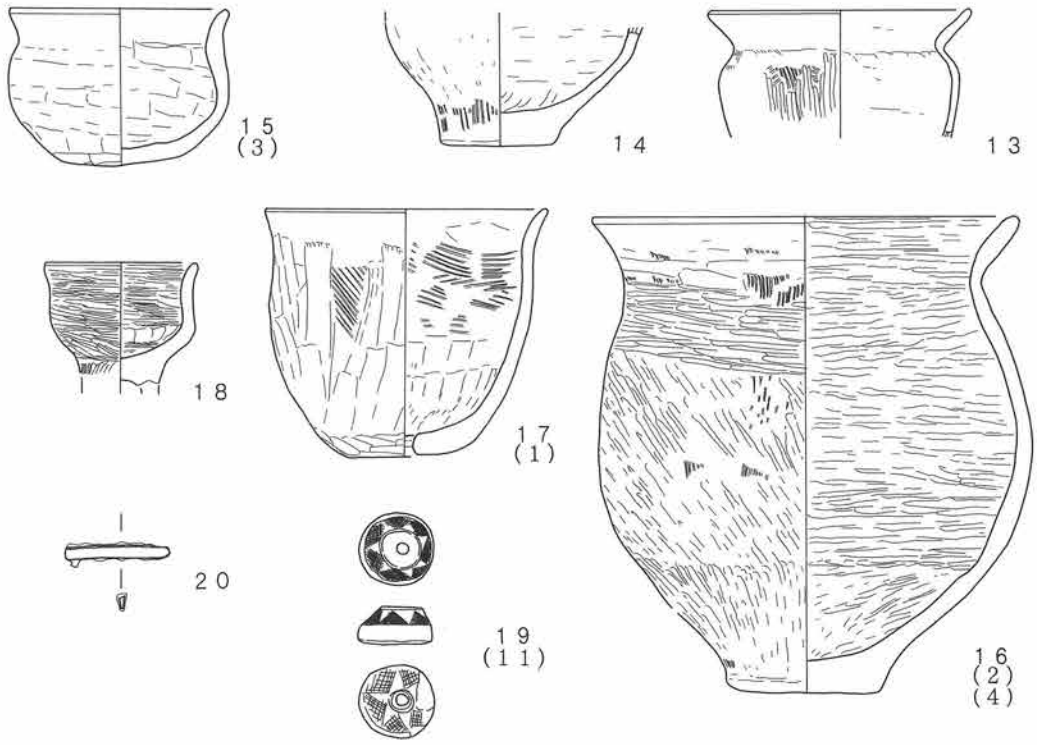
第99表　H70号住居址出土遺物観察表（1）



第111図　H70号住居址（1）



第112図　H70号住居址（2）



第113図　H70号住居址（3）

挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
−12	土師器 甕	23.9 − −	内−篦削り・刷毛目。 外−篦磨き。	No.6
−13	土師器 甕	13.9 − −	内−ナデ。 外−刷毛目・篦磨き。	
−14	土師器 甕	− − 5.8	内−ナデ。 外−刷毛目。	
−15	土師器 小型甕	11.7 5.0 8.4	内−ナデ。 外−篦削り。	No.3
−16	土師器 甕	22.3 7.5 25.2	内−篦磨き。 外−刷毛目・篦磨き。	No.2・4
−17	土師器 甑	15.0 − 13.1	内−刷毛目・篦削り。 外−刷毛目・篦削り。	No.1
−18	土師器 台付甕	8.2 − −	内外−篦磨き。	
−19	紡錘車	4.0 3.9 2.0	鋸歯文。	46.9g No.11
−20	鉄器	5.5 0.7 0.4		5.0g

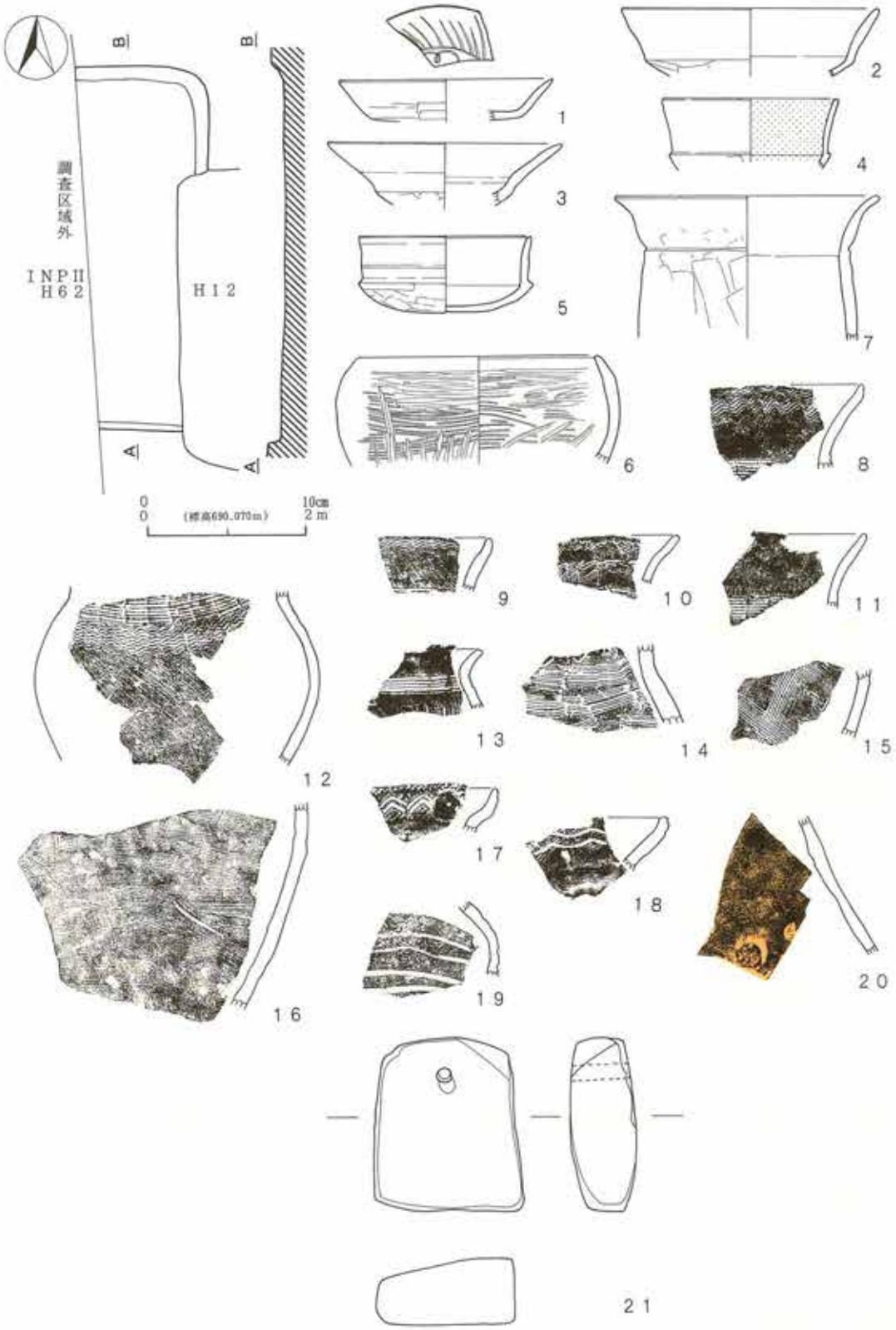
第100表　H70号住居址出土遺物観察表（2）

H71号住居址（第114図、図版百四十五）

遺構－Ⅰえ9グリットで検出された。H12号住居址に切られ、H112号住居址を切る。第2次調査におけるH62号住居址は本址と同一の住居址である。隅丸方形の平面プランを呈し、南北長4.7m、壁残高0.18mの規模を有する。カマドは第2次調査において北壁の中央部分に検出されており、Pitも主柱穴2基が検出されている。しかし今回の調査では検出されていない。覆土は自然堆積であった。

挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
－1	土師器 坏	13.6 － 3.6	内－螺旋十放射状暗文。 外－篦削り。	
－2	土師器 坏	16.4 － 4.4	内－ナデ。 外－底部篦削り。	
－3	土師器 坏	11.3 － 4.0	内－ナデ。 外－篦削り。	
－4	土師器 坏	11.2 － －	内－黒色処理。 外－篦削り。	
－5	土師器 坏	11.0 11.1 4.9	内－ナデ。 外－篦削り。	
－6	土師器 坏	15.1 － －	内外－刷毛目～篦磨き。	
－7	土師器 甕	16.8 － －	内－ナデ。 外－篦削り。	
－8	弥生 甕	－ － －	内－篦磨き。 外－口縁部：櫛描波状文、頸部：簾状文。	混入遺物。
－9	弥生 甕	－ － －	内－篦磨き。 外－口縁部：櫛描波状文、頸部：簾状文。	混入遺物。
－10	弥生 甕	－ － －	内－篦磨き。 外－口縁部：櫛描波状文、頸部：簾状文。	混入遺物。
－11	弥生 甕	－ － －	内－篦磨き。 外－頸部：簾状文。	混入遺物。
－12	弥生 甕	－ － －	内－篦磨き。 外－頸部：簾状文・波状文、体部：斜走文。	混入遺物。
－13	弥生 甕	－ － －	内－篦磨き。 外－頸部：簾状文。	混入遺物。
－14	弥生 甕	－ － －	内－篦磨き。 外－体部：斜走文。	混入遺物。
－15	弥生 甕	－ － －	内－篦磨き。 外－体部：斜走文。	混入遺物。
－16	弥生 甕	－ － －	内－篦磨き。 外－体部：斜走文。	混入遺物。

第101表　H71号住居址出土遺物観察表（1）



第114図　H71号住居址

挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
−17	弥生 甕	− − −	内−篦磨き。 外−口唇部：縄文、口縁部篦描波状文＋縄文＋円形貼付文。	混入遺物。
−18	弥生 壷	− − −	内−ナデ。 外−口縁部：縄文＋篦描波状文。	混入遺物。
−19	弥生 壷	− − −	内−ナデ。 外−篦描き弧文。	混入遺物。
−20	弥生 壷	− − −	内−ナデ。 外−円形貼付文、赤彩。	混入遺物。
−21	砥石	5.5 4.7 2.0		78.0ｇ

第102表　H71号住居址出土遺物観察表（２）

遺物−土師器、弥生土器、石器が出土している。土師器には坏（１～５）、甕（７）、鉢（６）が認められる。坏１は内面に螺旋と放射状の暗文が施され、外面には篦削り調整がなされる。３は丸底から口縁部が大きく外反するもので、内面ナデ、外面篦削り調整が施される。２・４・５は須恵器坏蓋の模倣を原形とするもので、２・５は内面ナデ、外面篦削り調整が施される。４は内面黒色処理がなされ、外面には篦削り調整が施される。甕７は長胴のもので尚面ナデ調整、外面には篦削りが施される。鉢６は内外面共に刷毛目調整後篦磨き調整が施される。弥生土器は全て混入品であり本来はH112号住居址に帰属するものである。甕（９～17）、壺（18～20）が認められる。石器は21の携帯用の砥石が出土している。

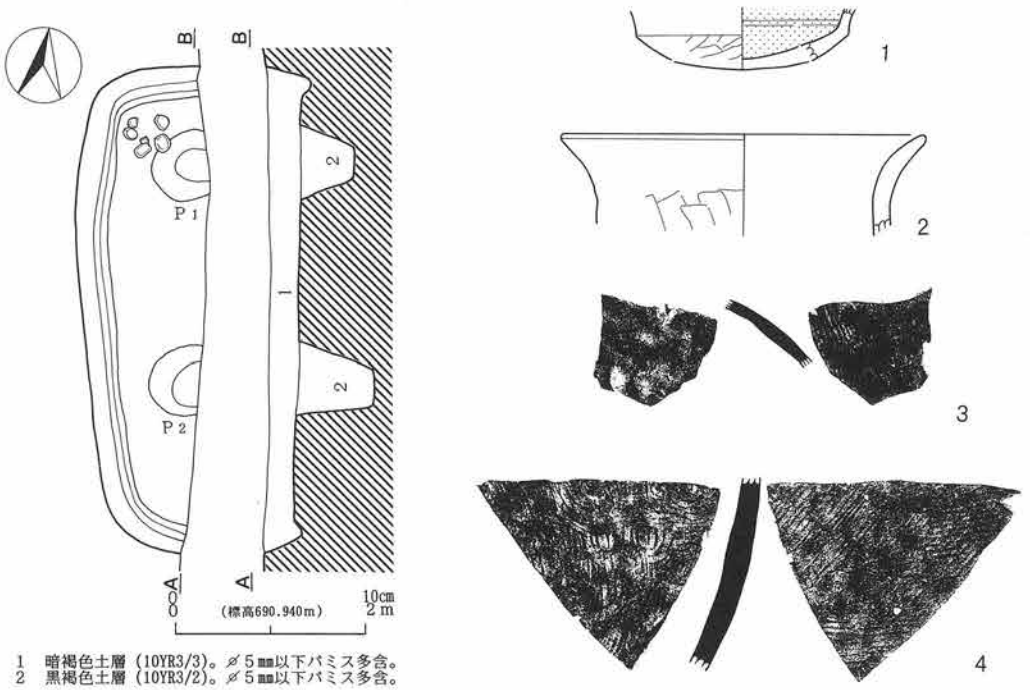
H73号住居址（第115図、図版百四十六）

遺構−Ⅴう２グリットで検出された。H87・H108号住居址を切る。住居の大部分は調査区域外に延びるため形状・規模等は判然としない。壁残高0.35ｍを測る。Pitは２基検出されており、主柱穴の可能性が強い。調査部分の壁下には幅20㎝、床面からの深さ12㎝の周溝が巡らされていた。

遺物−土師器と須恵器が出土している。土師器には坏（１）、甕（２）が認められる。坏は須恵器坏蓋の模倣を原形とするもので、内面黒色処理、外面篦削り調整が施される。甕は長胴で、内面ナデ、外面篦削り調整が施される。須恵器は甕片が２点出土している。叩き目と当て具痕が認められるものである。

挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
－1	土師器 坏	－ － －	内－黒色処理。 外－篦削り。	
－2	土師器 甕	19.4 － －	内－ナデ。 外－篦削り。	
－3	須恵器 甕	－ － －	内－当て具痕・ナデ。 外－叩き目。	
－4	須恵器 甕	－ － －	内－当て具痕。 外－叩き目。	

第103表　H73号住居址出土遺物観察表



1　暗褐色土層（10YR3/3）。φ5㎜以下パミス多含。
2　黒褐色土層（10YR3/2）。φ5㎜以下パミス多含。

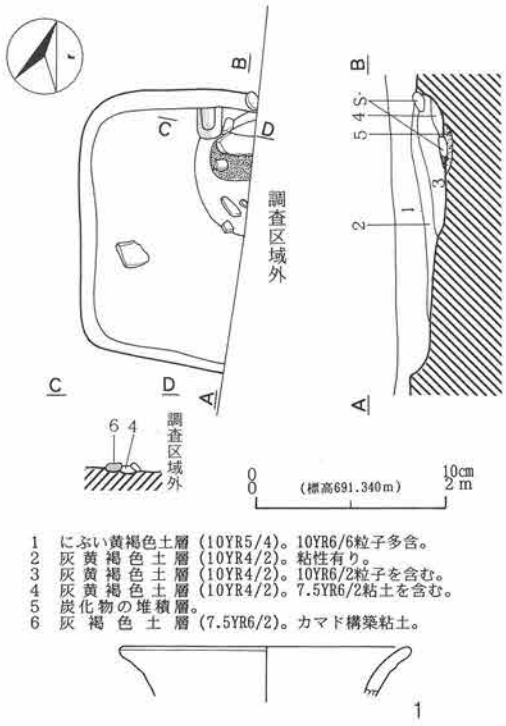
第115図　H73号住居址

H74号住居址（第116図、図版三十三・百四十六）

遺構－Ⅴく2グリットで検出された。H72号住居址を切る。調査区域外に延びるため平面プラ

挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
－1	土師器 甕	15.4 － －	内外－ナデ。	

第104表　H74号住居址出土遺物観察表



第116図　H74号住居址

ン、規模等は不明である。南北長3.0m、壁残高0.3mを測る。南北が主軸であると仮定するならば、N－16°－Wに主軸方位をとる。カマドは北壁に構築されており、長径1.5m、深度0.35mを測る所謂「石組粘土カマド」である。覆土は自然堆積で、Pit、周溝は調査範囲には存在しなかった。

遺物－図示出来るものは土師器甕1点である。長胴を呈するものと思われる。

H75号住居址（第117図、図版百四十六）

遺構－Vき3グリットで検出された。H53号住居址に切られる。住居の大半は調査区域外に延びるため規模、形状は判然としない。カマドは北壁に構築されており、長径0.8m、深度0.24mを測る。石芯を粘土で被覆した所謂「石組粘土カマド」である。3基検出されたPitは主柱穴とは思われない。覆土は自然堆積である。

遺物－土師器、弥生土器、鉄器が出土している。調査区域外で弥生時代の住居址と重複しているものと思われる。土師器には坏（1）と甕（2・3）が存在する。坏は須恵器坏蓋の模倣を原形とするもので、内外面の口縁部に横位の篦磨きを疎らに施し、他の内面にはナデ調整、外面には篦削り調整が施される。甕は長胴のもので、2は体部に最大径をもつ。内面ナデ、外面篦削り調整が施される。3は内面に刷毛目、外面に篦削りが施される。弥生土器は甕（4・5）が認められる。4は櫛歯状工具により口縁部と体部上半に波状文、頸部に簾状文、体部下半に斜走文が施される。5は口縁部～体部上半に刷毛目調整痕を残し、頸部に櫛歯状工具による簾状文と波状文を施している。鉄器は2点（6・7）出土したが何であるかは不明である。

H79号住居址（第118・119図、図版三十五・三十六・百四十八・百四十九）

遺構－Vう4グリットで検出された。H99号住居址を切り、H62号住居址に切られる。隅丸方形の平面プランを呈し、長軸長6.25m×短軸長6.05m×壁残高0.85mの規模を有する。長軸方位をN－15°－Eにとる。カマドは北壁中央部に構築されれるが、1度造り替えられており、西隣に煙道と火床が確認された。所謂「石組粘土カマド」であり、天井部が崩落していた他は状態は極めて良好であった。H62号住居址の掘方に残存していたものも含め、5基のPitが検出された。

この内のＰ１～Ｐ４が主柱穴で、Ｐ２で直径18㎝、Ｐ３で直径15㎝の柱が確認できた。覆土は自然堆積で、周溝は存在しない。

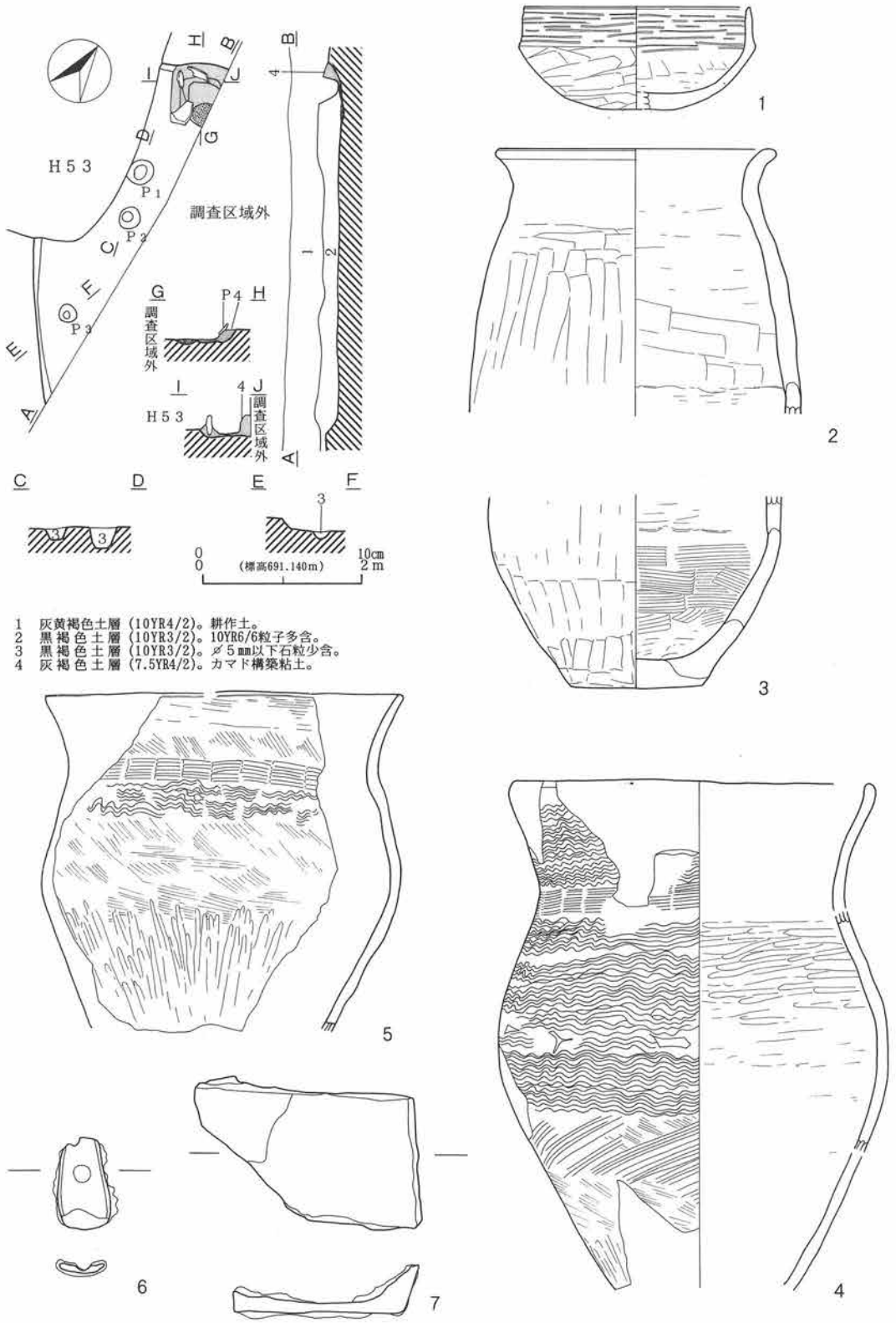
遺物－土師器、臼玉、土製品が出土している。土師器には坏（１～５）、甕（６・９・10）、壺（７・８・11）が認められる。坏は１～４が須恵器坏蓋の模倣を原形とするもので、４は内面黒色処理、他はナデ、外面は篦削り調整が施される。１・２・４は所謂「有段口縁坏」である。５は内面ナデ、外面篦削り調整がほどこされる。坏と言うよりは皿と呼ぶべきかも知れない。甕は９のような胴が弱く張り、内面刷毛目、外面篦削り調整が加えられるものと、10のような長胴の小型甕、６のように底部がやや突出するものなどが存在する。壺７は口縁部に有段口縁坏と同様な手法により段が形成される。内面刷毛目～篦磨き、外面篦削り調整が加えられている。８は内面刷毛目、外面篦削り調整のもの、11は恐らく須恵器を模倣したと思われる。内外面に丁寧な篦磨き調整が施されている。臼玉は２点共に滑石製である。14の土製品は何であるか不明である。

H80号住居址（第120・121図、図版三十五・三十六・百四十九・百五十）

遺構－Ⅶこ３グリットで検出された。H66号住居址に切られ、H96号・H100号・H102号住居

挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
－1	土師器 坏	14.4 － 6.5	内－ナデ・篦磨き。 外－篦削り・篦磨き。	
－2	土師器 甕	17.4 － －	内－ナデ。 外－篦削り。	
－3	土師器 甕弥生	－ － 8.3	内－刷毛目。 外－篦削り。	
－4	甕	23.0 － －	内－篦磨き。 外－口縁部・体部上半：櫛描波状文、頸部：簾状文、体部下半：斜走文	
－5	弥生 甕	22.6 － －	内－篦磨き。 外－頸部：簾状文・波状文。	
－6	鉄器	2.9 1.7 0.5		60.3ｇ
－7	鉄器	7.0 4.3 1.5		3.8ｇ

第105表　H75号住居址出土遺物観察表



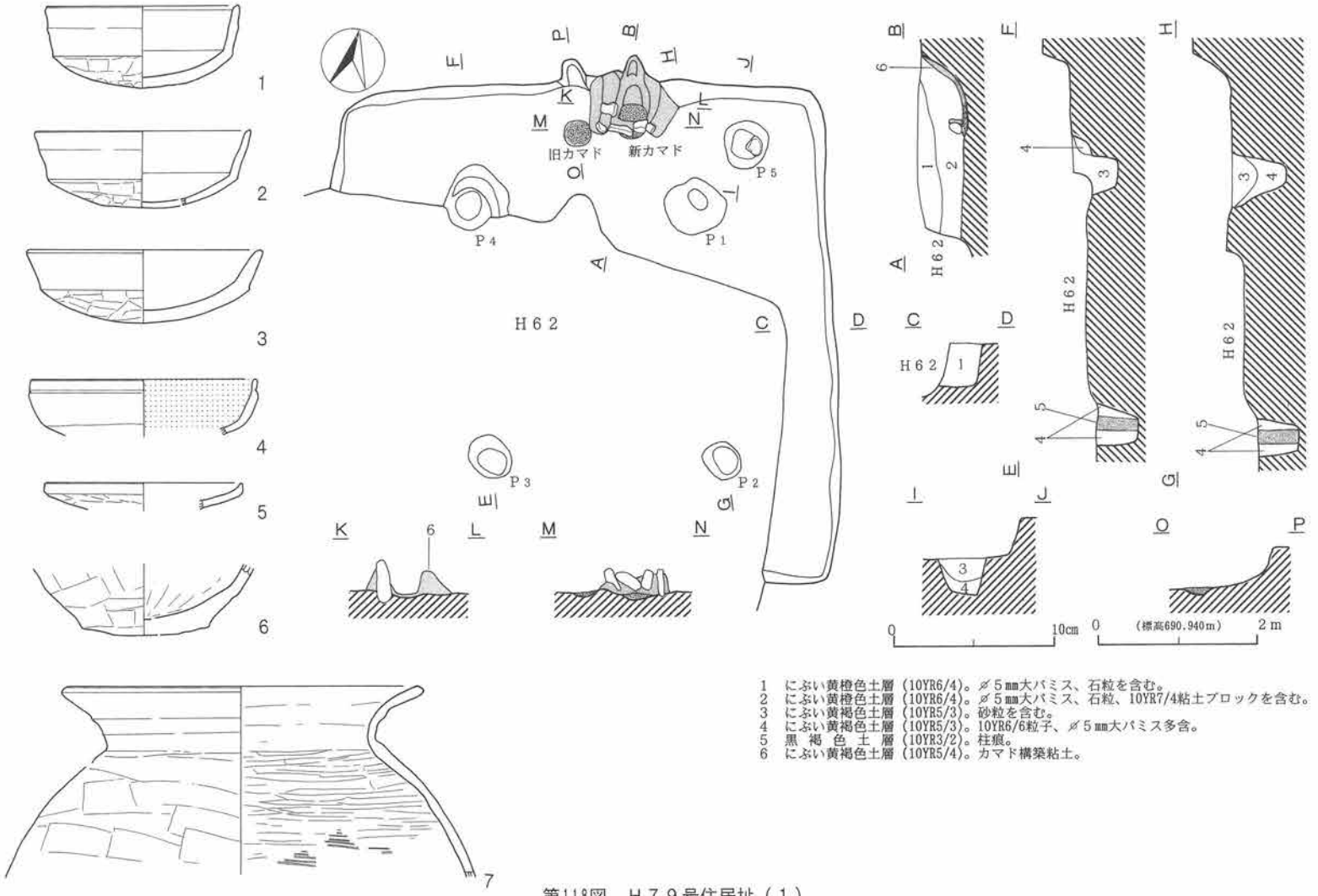
1　灰黄褐色土層（10YR4/2）。耕作土。
2　黒褐色土層（10YR3/2）。10YR6/6粒子多含。
3　黒褐色土層（10YR3/2）。φ5mm以下石粒少含。
4　灰褐色土層（7.5YR4/2）。カマド構築粘土。

第117図　H75号住居址

挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
－1	土師器 坏	12.2 － 5.2	内－ナデ。 外－篦削り。	有段口縁坏。
－2	土師器 坏	13.6 － －	内－ナデ。 外－篦削り。	有段口縁坏。
－3	土師器 坏	14.3 － 4.6	内－ナデ。 外－篦削り。	
－4	土師器 坏	14.2 － －	内－黒色処理。 外－篦削り。	有段口縁坏。
－5	土師器 坏	12.5 － －	内－ナデ。 外－篦削り。	
－6	土師器 甕	－ 7.9 －	内－ナデ。 外－篦削り。	
－7	土師器 壷	22.8 － －	内－刷毛目・篦磨き。 外－篦削り。口縁部に有段口縁坏と同様な手法による段。	
－8	土師器 壷	19.7 － －	内－刷毛目。 外－篦削り。	
－9	土師器 甕	24.0 7.0 35.2	内－刷毛目。 外－篦削り。	
－10	土師器 小型甕	16.9 － －	内－ナデ。 外－篦削り。	
－11	土師器 壷	17.9 － －	内外－篦磨き。	須恵器模倣。
－12	臼玉	1.4 1.1 0.5		1.1ｇ
－13	臼玉	1.3 1.3 0.6		1.4ｇ
－14	土製品	－ － －	内外－篦による沈線文。	

第106表　H79号住居址出土遺物観察表

址を切る。隅丸方形の平面プランを呈し、N－16°－Wに長軸方位をとる。南北長7.65ｍ×東西長7.2ｍ×壁残高0.45ｍの規模を有する。カマドは北壁の中央部分に構築され、長径1.25ｍ×短径1.0ｍ×深度0.6ｍの規模を有する。袖の先端部分とその天井部分に石組をする他は粘土で構築されており、ほぼ完全に近い状態で残存していた。Pitは６基検出された。この内主柱穴はＰ１～Ｐ４の４基である。柱は確認されなかった。カマド東脇のＰ６は貯蔵穴、カマドと相対する南壁下中央に存在するＰ５は、出入り口に関係するものであろう。覆土は自然堆積で、周溝は存在しない。



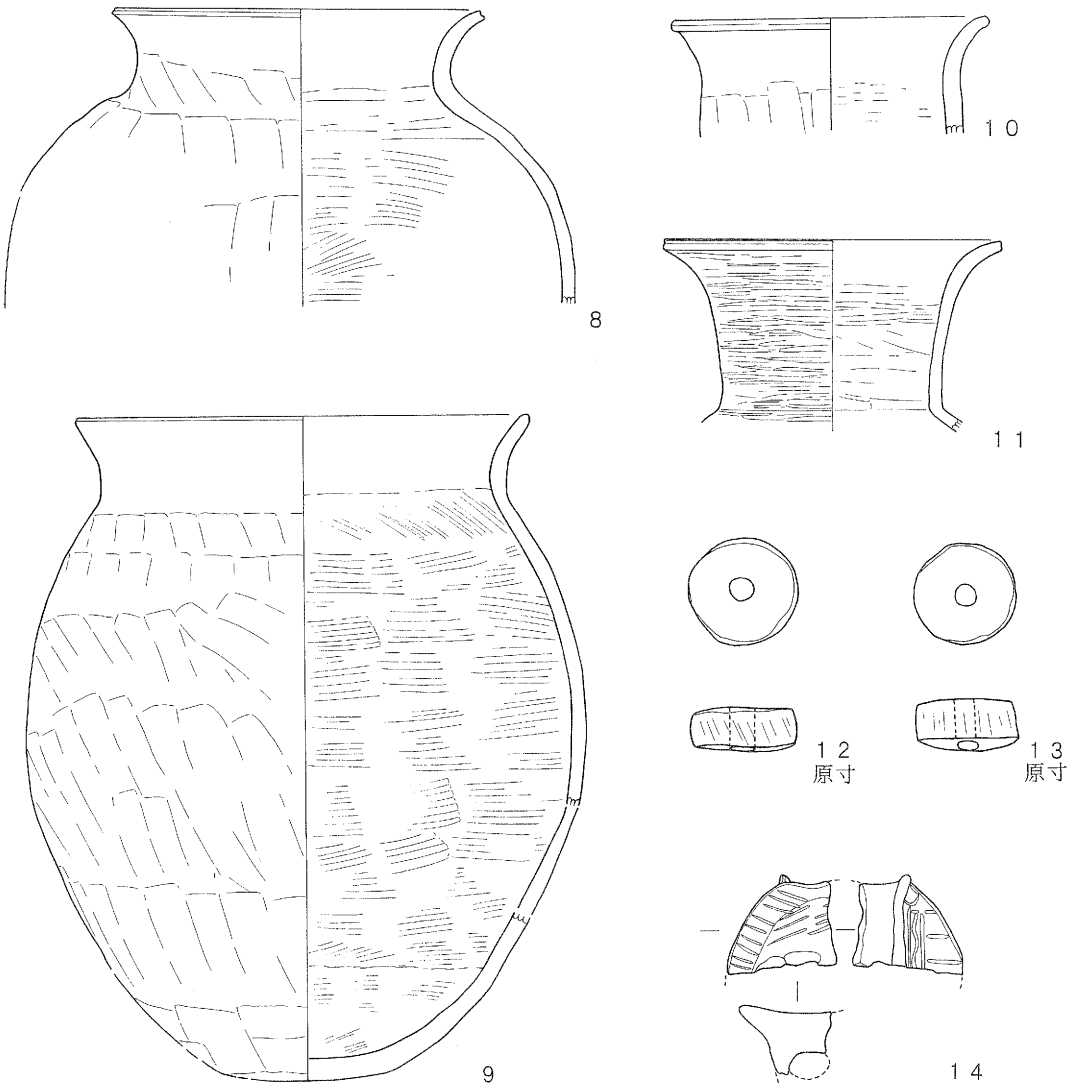
1　にぶい黄橙色土層（10YR6/4）。∅5㎜大パミス、石粒を含む。
2　にぶい黄橙色土層（10YR6/4）。∅5㎜大パミス、石粒、10YR7/4粘土ブロックを含む。
3　にぶい黄褐色土層（10YR5/3）。砂粒を含む。
4　にぶい黄褐色土層（10YR5/3）。10YR6/6粒子、∅5㎜大パミス多含。
5　黒褐色土層（10YR3/2）。柱痕。
6　にぶい黄褐色土層（10YR5/4）。カマド構築粘土。

第118図　Ｈ７９号住居址（１）

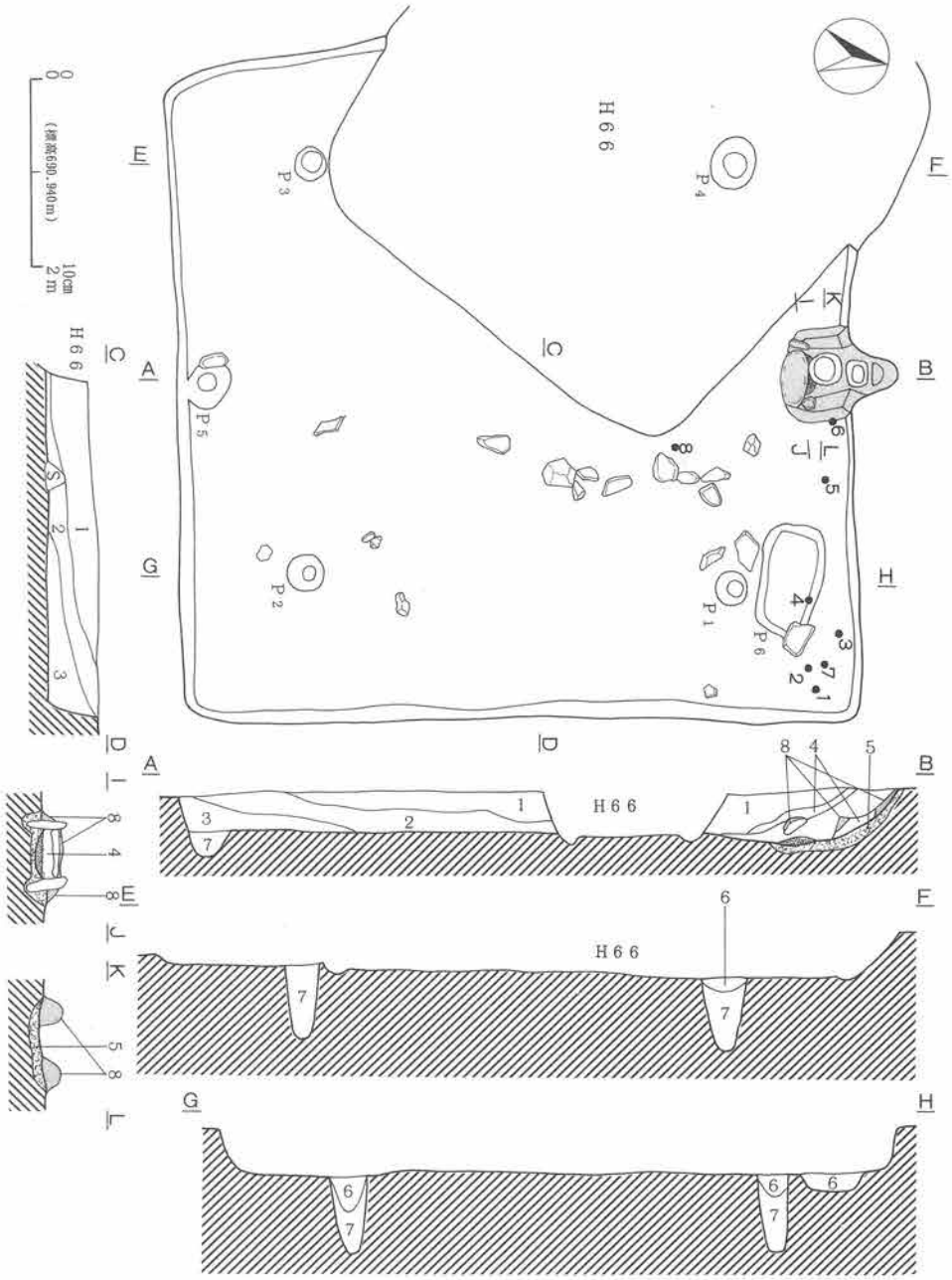
遺物－土師器、須恵器が出土している。土師器には、坏（1～7）、高杯（9）、鉢（10・11）、小型甕（12・15・17）、甕（13・14）、甑（18）、壺（16）が認められる。坏1～3・7は須恵器坏蓋の模倣を原形とするもので、1～3は内面ナデ、外面篦削り調整が施される。3は有段口縁坏である。7は内面黒色処理、外面篦磨き調整が施されている。4も須恵器坏蓋の模倣を原形とするが、口縁部が短く直立気味に立ち上がっている。内面ナデ、外面篦削り調整が施される。5は半球状を呈するもので、内面黒色処理、外面篦削り調整が施される。6は口縁部が大きく開き、内面底部と口縁部の境に段が付くもので、内面黒色処理、外面篦削り調整が施される。高杯は脚が長く、坏が浅いもので、坏内面の底部と口縁部の境に段を有し、黒色処理される。坏外面には有段口縁坏と同様な手法による段が認められる。鉢10は平底から口縁部が直立するもので、身が深い。内面黒色処理、外面には篦削り調整が施される。11は内面刷毛目調整、外面篦削り調整が施される。小型甕12は須恵器甕を模倣した口縁形態を呈し、内面ナデ、外面篦削り調整がなされる。15は口縁部外面に有段口縁坏と同様な手法による段が認められる。内面ナデ、外面篦削り調整が施される。17は内外面に篦磨き調整が施される。小型甕と言うよりは小型広口壺としたほうが良いかも知れない。甕は2点共に体部半ばが僅かに膨らむ長胴甕で、内面刷毛目、外面篦削り調整が施される。甑18は多孔で、内面ナデ、外面篦削り調整が施される。壺16は内面刷毛目調整、外面刷毛目・篦磨き調整が施される。口縁部外面には、有段口縁坏と同様な手法による段が形成されている。須恵器には坏蓋（8）と瓶（19）が認められる。坏蓋は天井部に篦削り調整が施される。田辺陶邑編年のＴＫ43号窯期に比定されようか、19は瓶類の口縁部である。頸部に2条の沈線を巡らす。

挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
－1	土師器 坏	13.5 － 4.2	内－ナデ。 外－篦削り。	
－2	土師器 坏	13.4 － －	内－ナデ。 外－篦削り。	
－3	土師器 坏	13.0 － －	内－ナデ。 外－篦削り。	有段口縁坏。
－4	土師器 坏	14.9 － －	内－ナデ。 外－篦削り。	
－5	土師器 坏	14.0 － 4.9	内－黒色処理。 外－篦削り。	
－6	土師器 坏	17.9 － －	内外－黒色処理。 外－篦削り。	
－7	土師器 坏	14.1 － －	内－黒色処理。 外－篦磨き。	

第107表　H80号住居址出土遺物観察表（1）

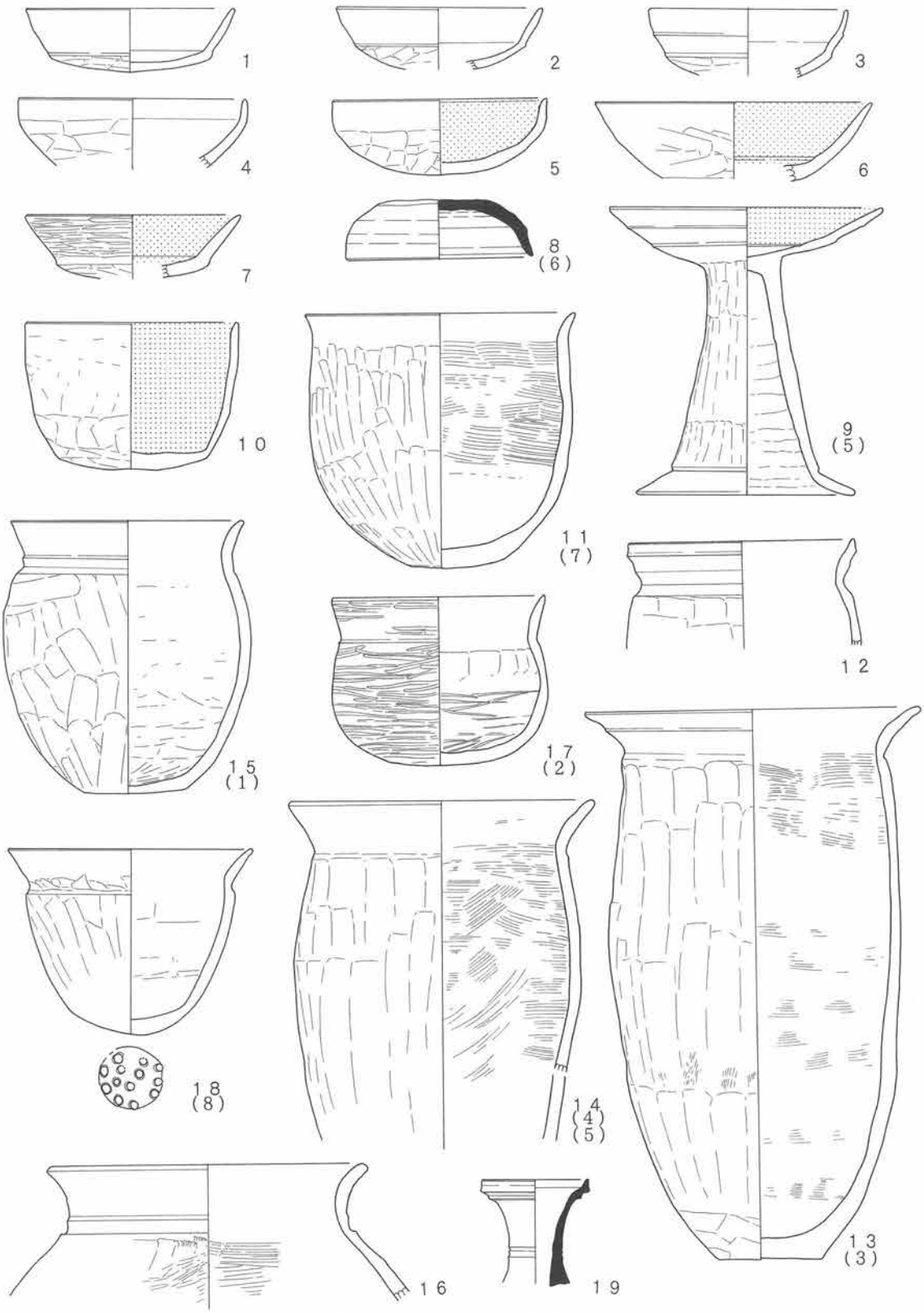


第119図　H79号住居址（2）



第120図　H80号住居址（1）

1　にぶい黄褐色土層（10YR4/3）。φ5㎜大パミス、石粒を含む。
2　にぶい黄褐色土層（10YR4/3）。φ5㎜大パミス、石粒、10YR6/6粒子多含む。
3　黒　褐　色　土　層（10YR3/2）。炭化物、10YR6/6粒子を含む。
4　にぶい黄褐色土層（10YR4/3）。φ5㎜大パミス、石粒、10YR7/3カマド構築土を含む。
5　にぶい黄褐色土層（10YR4/3）。10YR6/6粒子、φ5㎜以下パミスえお含む。カマド掘方埋土。
6　にぶい黄褐色土層（10YR4/3）。パミス、小石を含む。
7　褐　色　土　層（10YR4/6）。砂質土。
8　にぶい黄橙色土層（10YR7/3）。カマド構築粘土。



第121図　H80号住居址（2）

挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
－8	須恵器 坏蓋	12.1 － 3.8	天井部篦削り。	
－9	土師器 高坏	17.8 14.3 18.8	内－黒色処理、脚内ナデ。 外－篦削り。	有段口縁坏と同様な段。
－10	土師器 鉢	14.0 9.6 16.6	内－黒色処理。 外－篦削り。	
－11	土師器 鉢	15.6 － 16.1	内－刷毛目。 外－篦削り。	
－12	土師器 小型甕	14.7 － －	内－ナデ。 外－篦削り。	口縁須恵器模倣。
－13	土師器 甕	21.8 6.7 35.9	内－刷毛目。 外－篦削り。	有段口縁坏と同様な段。
－14	土師器 甕	19.9 － －	内－刷毛目。 外－篦削り。	
－15	土師器 小型甕	15.1 6.5 17.7	内－ナデ。 外－篦削り。	有段口縁坏と同様な段。
－16	土師器 壷	20.9 － －	内－刷毛目。 外－刷毛目・篦磨き。	有段口縁坏と同様な段。
－17	土師器 小型甕	14.0 － 11.0	内外－篦磨き。	
－18	土師器 甑	15.9 4.0 12.1	内－ナデ。 外－底部篦削り。	多孔。
－19	須恵器 瓶	7.0 － －	頸部に2条の沈線。	

第108表　H80号住居址出土遺物観察表（2）

H81号住居址（第122図、図版三十六・百五十・百五十一）

遺構－Ⅶき６グリットで検出された。H84号住居址、F14号掘立柱建物址に切られる。第２次調査におけるH34号住居址は同一の住居址である。壁残高0.38ｍ規模を有する。Pit、カマドは調査範囲内には存在しない。覆土は自然堆積である。

遺物－土師器、弥生土器、石器が出土している。土師器には甕（１）と高杯（２）が認められる。甕は長胴で内面ナデ、外面篦削り調整が施される。高杯２は内面ナデ、外面篦削り調整が施される。弥生土器は全て混入品である。５～９は甕である。５は口唇部に縄文を施し、口縁部に縄文と篦状工具による１条の波状文を巡らす、頸部下には櫛歯状工具による波状文が施される。６も口唇部に縄文を施す。頸部に簾状文が巡り、体部には櫛歯状工具による波状文が施文される。７は櫛歯状工具による簾状文が頸部に巡り、体部には斜走文が施される。８も櫛歯状工具による簾状文が頸部に巡り、体部には波状文が施される。９は体部に櫛歯状工具による波状文が施される。10・11は壺で、篦状工具により、平行沈線や鋸歯文、刺突列が施文され、縄文が充填される。石器は３の磨石と、４の砥石が出土している。

挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
－1	土師器 甕	22.5 － －	内－ヘラナデ。 外－篦磨き。	
－2	土師器 高坏	11.2 － －	内－ナデ。 外－篦削り。	
－3	磨石	6.9 6.2 1.4		100ｇ
－4	砥石	15.3 5.7 4.5		610ｇ
－5	弥生土器 甕	－ － －	内－篦磨き。 外－口唇部：縄文、口縁部：篦描波状文・縄文、体部： 櫛描波状文。	混入遺物。

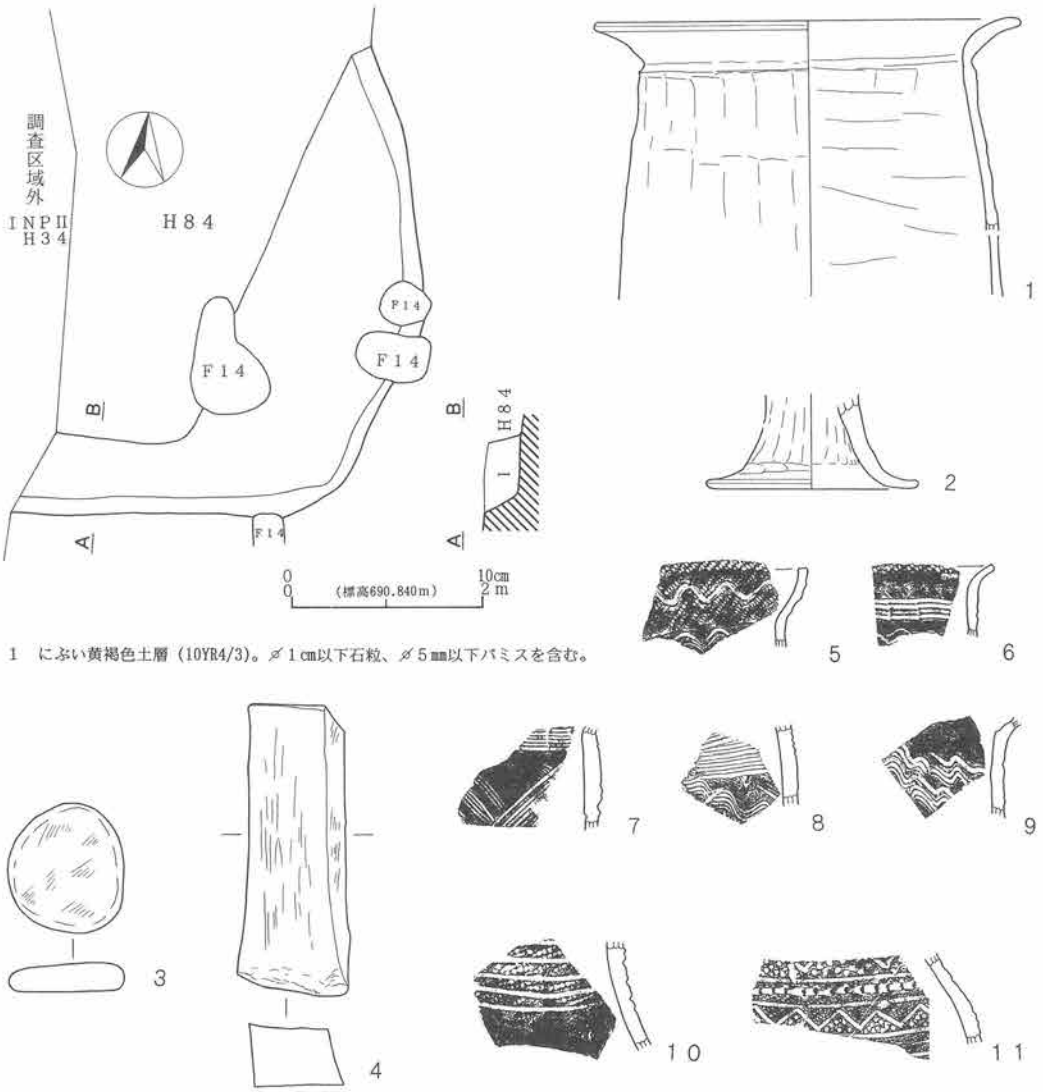
第109表　H81号住居址出土遺物観察表（１）

H88号住居址（第123図、図版百五十四）

遺構－Ⅴく７グリットで検出された。H75号住居址、Ｍ５号溝址に切られる。第２次調査におけるH45号住居址は本址と同一の住居址である。隅丸長方形の平面プランを呈し、壁残高0.53ｍを測る。調査範囲内にはカマドは存在せず、Pitも検出されなかった。覆土は人為埋土であった。

遺物－土師器、須恵器、弥生土器が出土している。土師器には坏（１）、甕（３）が認められる。坏は丸底の底部から口縁部が大きく開くもので、内面篦磨き、外面篦削り調整が施される。甕は成形時の粘土の重ね痕を明瞭に残すもので、内画面にナデ調整が施される。須恵器は坏蓋

（2）が出土している。「かえり」を有するものである。弥生土器には甕（4～6）、壺（7・



1　にぶい黄褐色土層（10YR4/3）。⌀1㎝以下石粒、⌀5㎜以下パミスを含む。

第122表　H81号住居址

挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
－6	弥生土器 甕	－ － －	内－篦磨き。 外－口唇部：縄文、頸部：簾状文、体部：櫛描波状文。	混入遺物。
－7	弥生土器 甕	－ － －	内－篦磨き。 外－頸部：簾状文、体部：斜走文。	混入遺物。
－8	弥生土器 甕	－ － －	内－篦磨き。 外－頸部：簾状文、体部：櫛描波状文。	混入遺物。
－9	弥生土器 甕	－ － －	内－篦磨き。 外－櫛描波状文。	混入遺物。
－10	弥生土器 壷	－ － －	内－刷毛目・ナデ。 外－篦描平行沈線・縄文。	混入遺物。
－11	弥生土器 壷	－ － －	内－刷毛目・ナデ。 外－篦描平行沈線・鋸歯文・刺突列・縄文。	混入遺物。

第110表　H81号住居址出土遺物観察表（2）

8）が認められる。甕4は口縁部～体部に櫛歯状工具による波状文が施され、体部においてこれを縦位に分割する条線を垂下させている。5は口縁部に櫛歯状工具による波状文が施され、頸部には簾状文が巡らされる。6は頸部に簾状文を巡らし、体部には斜走文が施され、円形貼付文が付加される。壷7は篦状工具による「U」・「X」字状の文様が描かれる。8は篦状工具による波状文が描かれている。

H91号住居址（第124・125図、図版三十九・百五十五・百五十六）

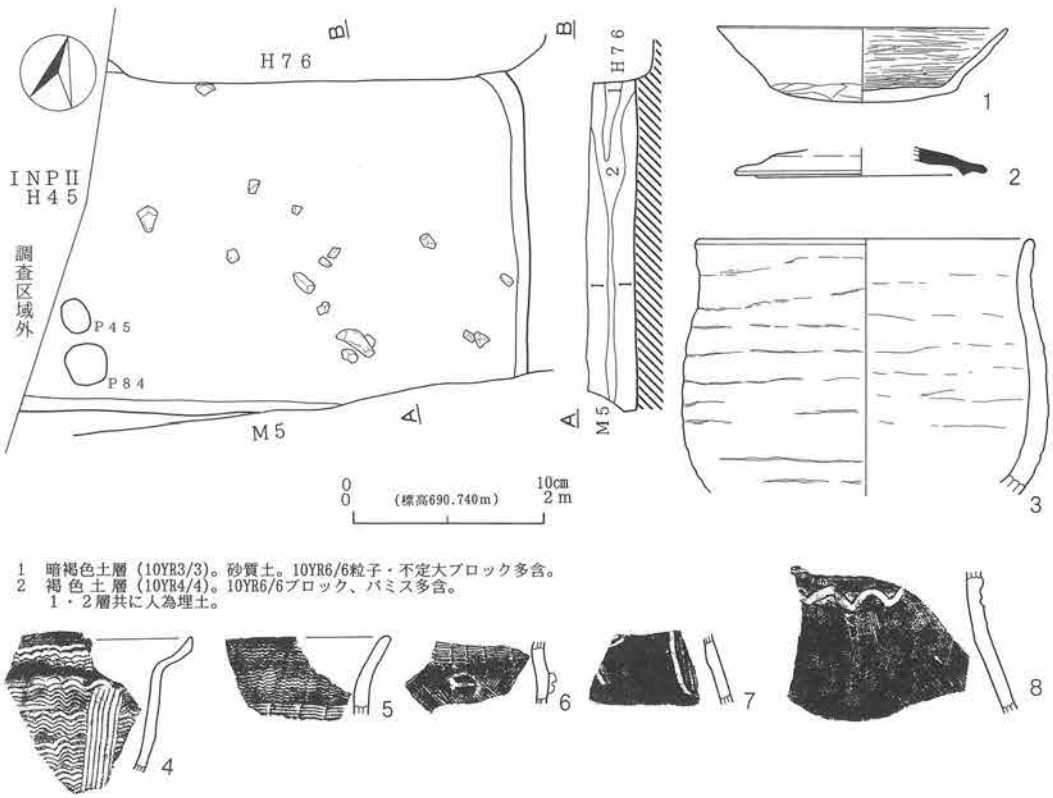
遺構－Ⅳう10グリットで検出された。H109号住居址を切る。第2次調査における、H54号住居址は本址と同一の住居址である。隅丸長方形の平面プランを呈し、長軸長5.6m、壁残高0.45

挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
－1	土師器 坏	15.4 10.0 4.0	内－篦磨き。 外－篦削り。	
－2	須恵器 坏蓋	13.4 － －		「かえり」を有する。
－3	土師器 甕	18.0 － －	内外－ナデ。	
－4	弥生 甕	－ － －	内－篦磨き。 外－櫛描波状文、体部に縦位条線。	
－5	弥生 甕	－ － －	内－篦磨き。 外－口縁部：櫛描波状文、頸部：簾状文。	

第111表　H88号住居址出土遺物観察表（1）

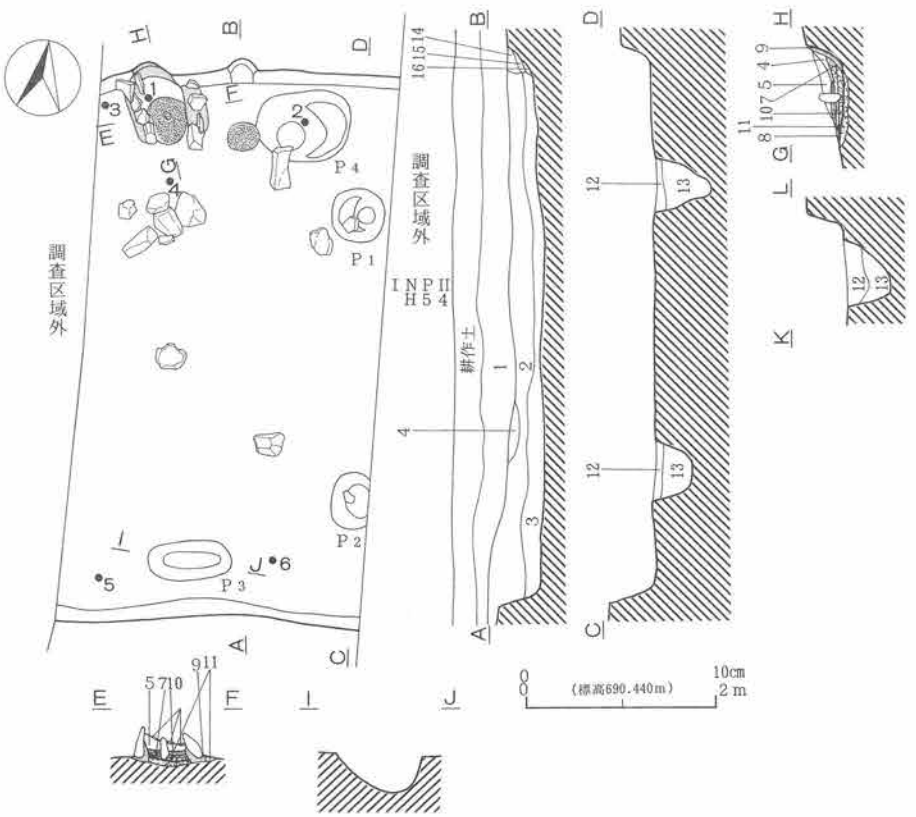
挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
－6	弥生 甕	－ － －	内－篦磨き。 外－頸部：雑状文、体部：斜走文＋円形貼付文。	
－7	弥生 壷	－ － －	内－ナデ。 外－篦描沈線文。	
－8	弥生 壷	－ － －	内－ナデ・刷毛目。 外－篦描波状文。	

第112表　H88号住居址出土遺物観察表（2）

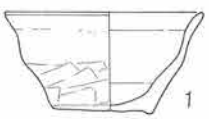


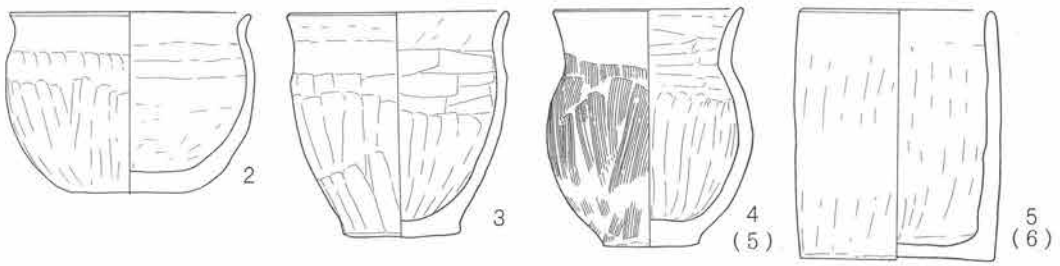
第123図　H88号住居址

mの規模を有する。カマドは北壁中央部分に2基検出された。1基は取り壊された旧カマドの煙道と火床部分で、長径1.0mを測る。もう1基が住居廃絶時に使用されていたカマドで、旧カマドの西隣に構築されていた。長径0.9m×短径0.85m×深度0.45mの規模で、石芯を粘土で被覆



1　黒　褐　色　土　層（10YR3/2）。パミス、小石少含。
2　黒　褐　色　土　層（10YR2/3）。パミス、小石少含、焼土粒子・ブロックを含む。
3　褐　　色　土　層（10YR4/4）。10YR6/6粒子含む。
4　灰黄褐色土層（10YR6/2）。炭化物少含。
5　にぶい赤褐色土層（5YR4/4）。焼土粒子、灰、炭化物を含む。
6　焼　　土
7　黒　褐　色　土　層（5YR2/1）。炭化物、焼土、粘土を含む。
8　にぶい赤褐色土層（5YR4/3）。炭化物、灰多含、焼土粒子少含。
9　黒　褐　色　土　層（5YR2/2）。粘土ブロック、焼土ブロック多含。
10　明　褐　色　土　層（7.5YR5/6）。炭化物少含。
11　暗　褐　色　土　層（10YR3/3）。炭化物少含。
12　黒　褐　色　土　層（10YR2/3）。小石、10YR6/6粒子少含。
13　暗　褐　色　土　層（10YR3/3）。パミス少含、10YR6/6粒子多含。
14　暗　赤　褐　色　土　層（5YR3/4）。焼土。
15　極暗赤褐色土層（5YR2/4）。
16　褐　　色　土　層（10YR4/6）。10YR6/6粒子多含。
7～11層はカマド掘方埋土。14～16は旧カマド煙道覆土。





第124図　H91号住居址（1）

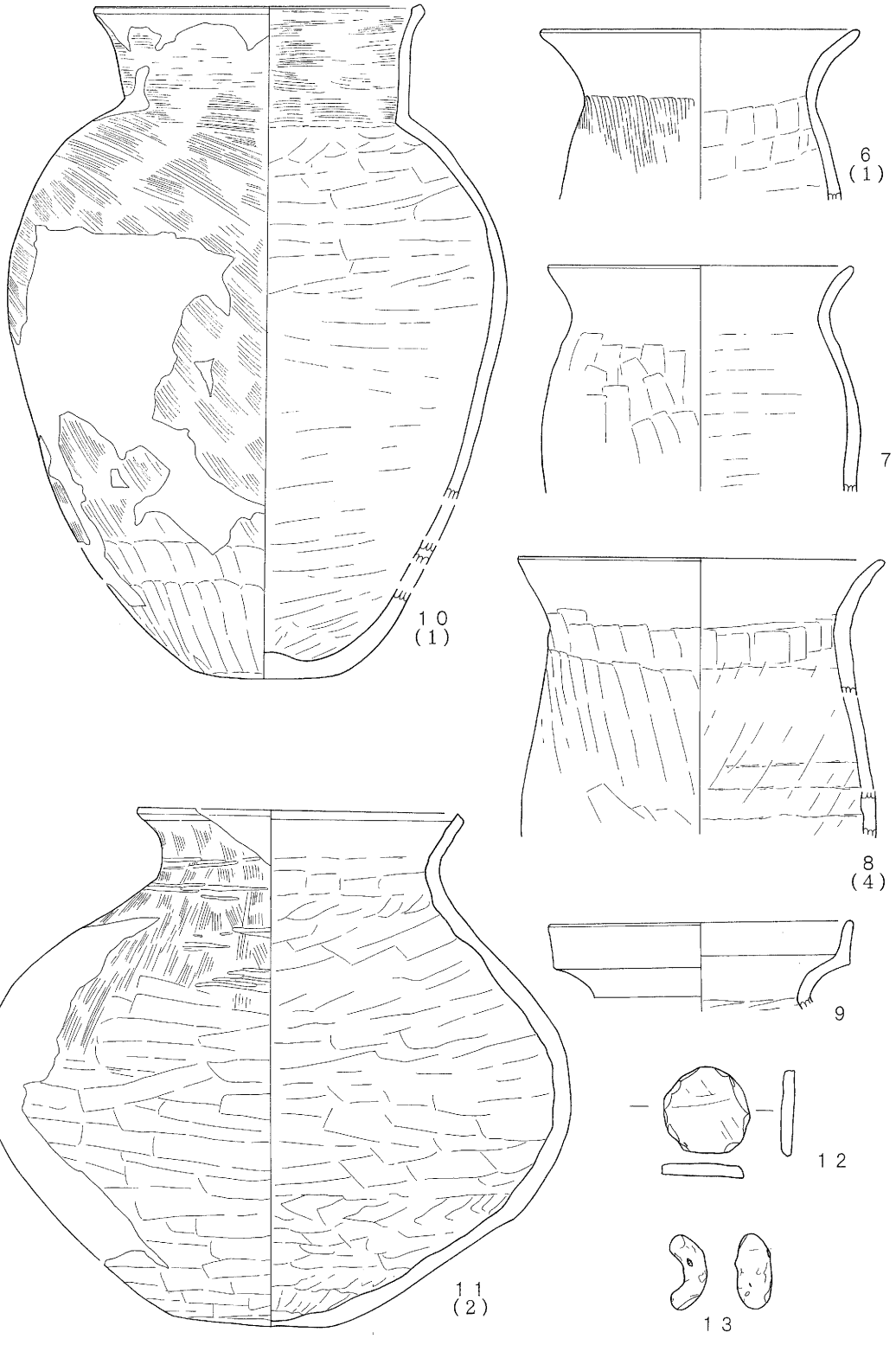
した所謂「石組粘土カマド」である。Pitは4基検出され、この内のＰ１・Ｐ２が主柱穴である。柱は確認されなかった。Ｐ４は貯蔵穴、Ｐ３は出入り口に関係する施設であろう。周溝は調査部分には存在せず、覆土は自然堆積である。

遺物－土師器、石製円盤、土製勾玉が出土している。土師器には鉢（１・５）、小型甕（２～４）、甕（６～８）、壺（９～11）が認められる。鉢１は平坦な底部を持ち、体部で外湾しながら口縁部で外反する。内面ナデ、外面篦削り調整が施される。５は円筒形を呈する。内外面ナデ調整が施されている。小型甕２は底部から外湾しながら体部が立ち上がり、口縁部で短く外反している。内面ナデ調整、外面篦削り調整が施される。３は２の体部の張りを弱くして、器高を若干高くした形態を呈し、内面ナデ、外面篦削り調整が施される。４は他の２点が鉢と呼んでも差し支えない形態を呈していたのに対し、甕をそのまま小型にした形態を呈す、内面ナデ、外面刷毛目調整が施される。甕は３点共に長胴で、頸部が括れ、体部が外湾する。６は内面ナデ、外面刷毛目調整が施される。７・８は内面ナデ、外面篦削り調整が施される。壺９は有段口縁で内外面にナデ調整が施される。10・11は２点共に須恵器甕の模倣と考えられる。10は内面ナデ・刷毛目、外面刷毛目・篦削り調整が施される。11は内面ナデ、外面刷毛目・篦削り調整が施されている。石製円盤12は薄く扁平な礫の周縁を打ち欠いて円盤にしたもの。13の土製勾玉はやや粗雑な造りで、中央やや上部に１孔が穿たれている。この２点の遺物を積極的に祭祀遺物として捉えると、石製円盤は鏡、土製勾玉は勾玉の代用品と考えられ、剣の代用品としての石製模造品が伴っていたのかも知れない。

H92号住居址（第126図、図版四十・百五十六）

遺構－Ⅳう10グリットで検出された。Ｍ８号溝址を切る。住居の大半は調査区域外に延びるため規模・形状については判然としない。壁残高0.55ｍを測る。調査範囲内にはカマドは存在しない。４基検出されたPitの内Ｐ２からは直径16㎝の柱が確認されている。主柱穴であろう。覆土は４層が人為埋土の可能性があるが、他は自然堆積である。

遺物－土師器、須恵器、磨製石斧が出土している。土師器には坏（１～５）、壺（６）、ミニチュア土器（７）が認められる。坏１・２は須恵器坏蓋の模倣を原形とするもので、内面ナデ、外面篦削り調整が施される。３～５は半球状を呈するもので、３点共に内面黒色処理が施される。３・５は外面篦削り調整、４は篦磨き調整が施される。壺６は須恵器甕を模倣したものと思われる。内面ナデ、外面篦磨き調整が施される。ミニチュア土器は器形的には壺型を呈し、手捏で成形される。内外面篦ナデ、篦削り調整が施される。須恵器は壺の肩部ないしは、提瓶と思われる破片が出土している。櫛歯状工具による刺突列が施されている。磨製石斧９は混入品である。蛤刃を呈する刃部が出土している。



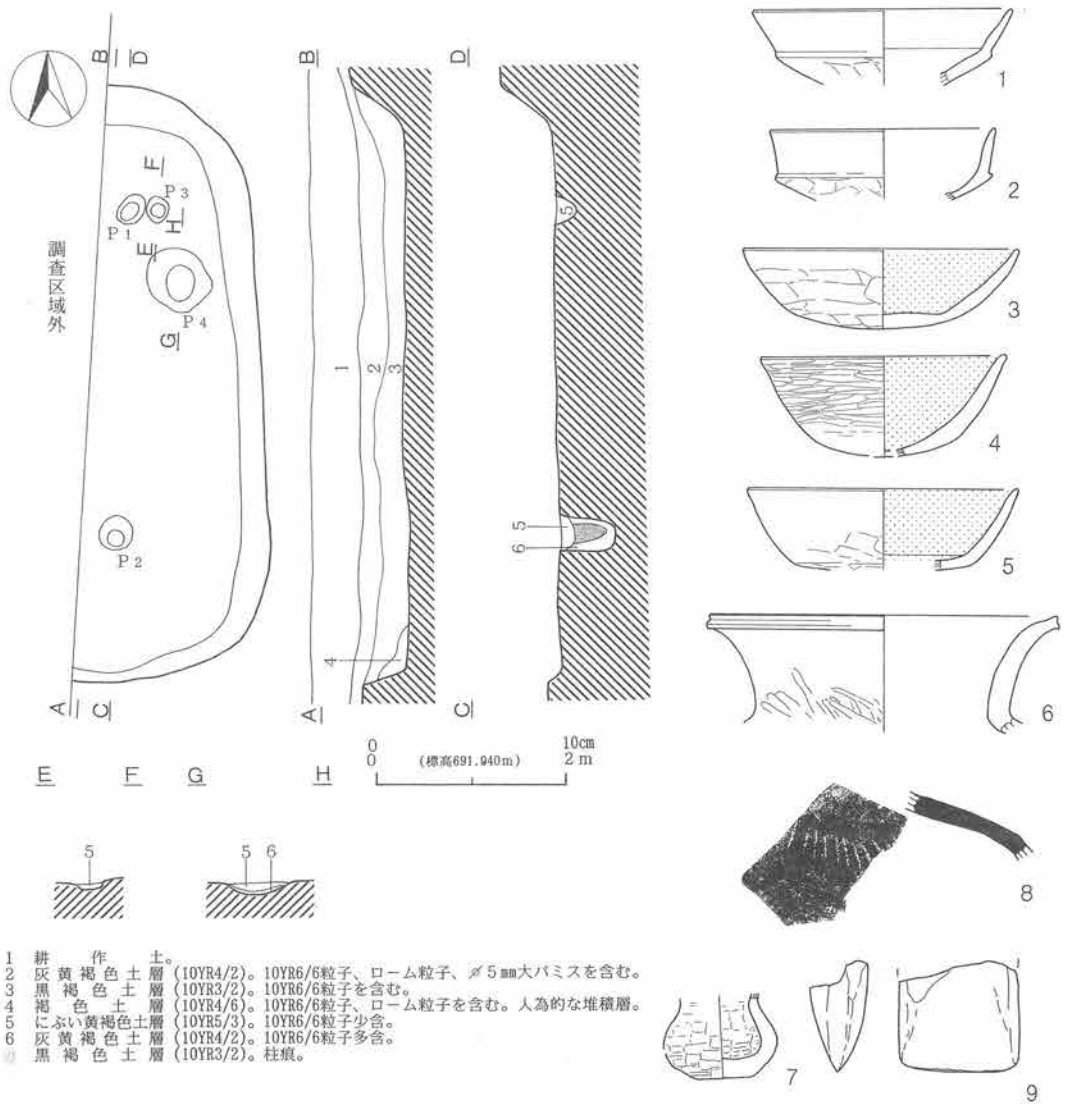
第125図　H91号住居址（2）

挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
－1	土師器 鉢	10.5 5.2 5.2	内－ナデ。 外－篦削り。	
－2	土師器 小型甕	12.8 5.7 9.5	内－ナデ。 外－篦削り。	
－3	土師器 小型甕	11.8 6.0 12.0	内－ナデ。 外－篦削り。	
－4	土師器 小型甕	10.0 5.0 12.6	内－ナデ。 外－刷毛目。	
－5	土師器 鉢	10.4 10.0 13.3	内外－ナデ。	
－6	土師器 甕	19.5 － －	内－ナデ。 外－刷毛目。	
－7	土師器 甕	18.7 － －	内－ナデ。 外－篦磨き。	
－8	土師器 甕	22.4 － －	内－ナデ。 外－篦削り。	
－9	土師器 壷	18.7 － －	内外－ナデ。	有段口縁。
－10	土師器 壷	20.0 8.6 41.2	内－ナデ・刷毛目。 外－刷毛目・篦削り。	須恵器模倣。
－11	土師器 壷	20.0 9.6 31.6	内－ナデ。 外－刷毛目・篦削り。	須恵器模倣。
－12	石製円盤	5.3 5.1 0.8		22.9ｇ
－13	土製勾玉	4.4 1.5 2.1		15.2ｇ

第113表　H91号住居址出土遺物観察表

挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
－1	土師器 坏	11.0 － －	内－ナデ。 外－篦削り。	
－2	土師器 坏	13.8 － －	内－ナデ。 外－篦削り。	
－3	土師器 坏	14.7 4.0 4.3	内－黒色処理。 外－篦削り。	
－4	土師器 坏	13.0 － 5,3	内－黒色処理。 外－篦磨き。	

第114表　H92号住居址出土遺物観察表（1）



1　耕　　作　　土。
2　灰 黄 褐 色 土 層（10YR4/2）。10YR6/6粒子、ローム粒子、∅５㎜大パミスを含む。
3　黒 褐 色 土 層（10YR3/2）。10YR6/6粒子を含む。
4　褐　色　土　層（10YR4/6）。10YR6/6粒子、ローム粒子を含む。人為的な堆積層。
5　にぶい黄褐色土層（10YR5/3）。10YR6/6粒子少含。
6　灰 黄 褐 色 土 層（10YR4/2）。10YR6/6粒子多含。
⑦　黒 褐 色 土 層（10YR3/2）。柱痕。

第126図　H92号住居址

H94号住居址（第127・128図、図版四十・百五十六・百五十七）

遺構－Ⅴう９グリットで検出された。重複関係はない。住居の大半は調査区域外に延びるため、規模・形状は判然としない。壁残高0.3ｍを測る。調査範囲にはカマドは存在せず、２基検出されたPitも性格が判断しかねる状況である。周溝は調査範囲には認められず、覆土は自然堆積であった。

遺物－土師器、鉄鏃が出土している。土師器には坏（１～３）、小型甕（４～６）、甕（７・

挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
－5	土師器 坏	14.3 － －	内－黒色処理。 外－篦削り。	
－6	土師器 壷	18.7 － －	内－ナデ。 外－篦磨き。	
－7	土師器 ミニチュア	－ 3.0 －	内外－篦ナデ・篦削り。	手捏。
－8	須恵器 ？	－ － －	櫛歯状工具による刺突列。	
－9	磨製石斧	5.8 6.4 3.0		198.9ｇ 混入遺物。

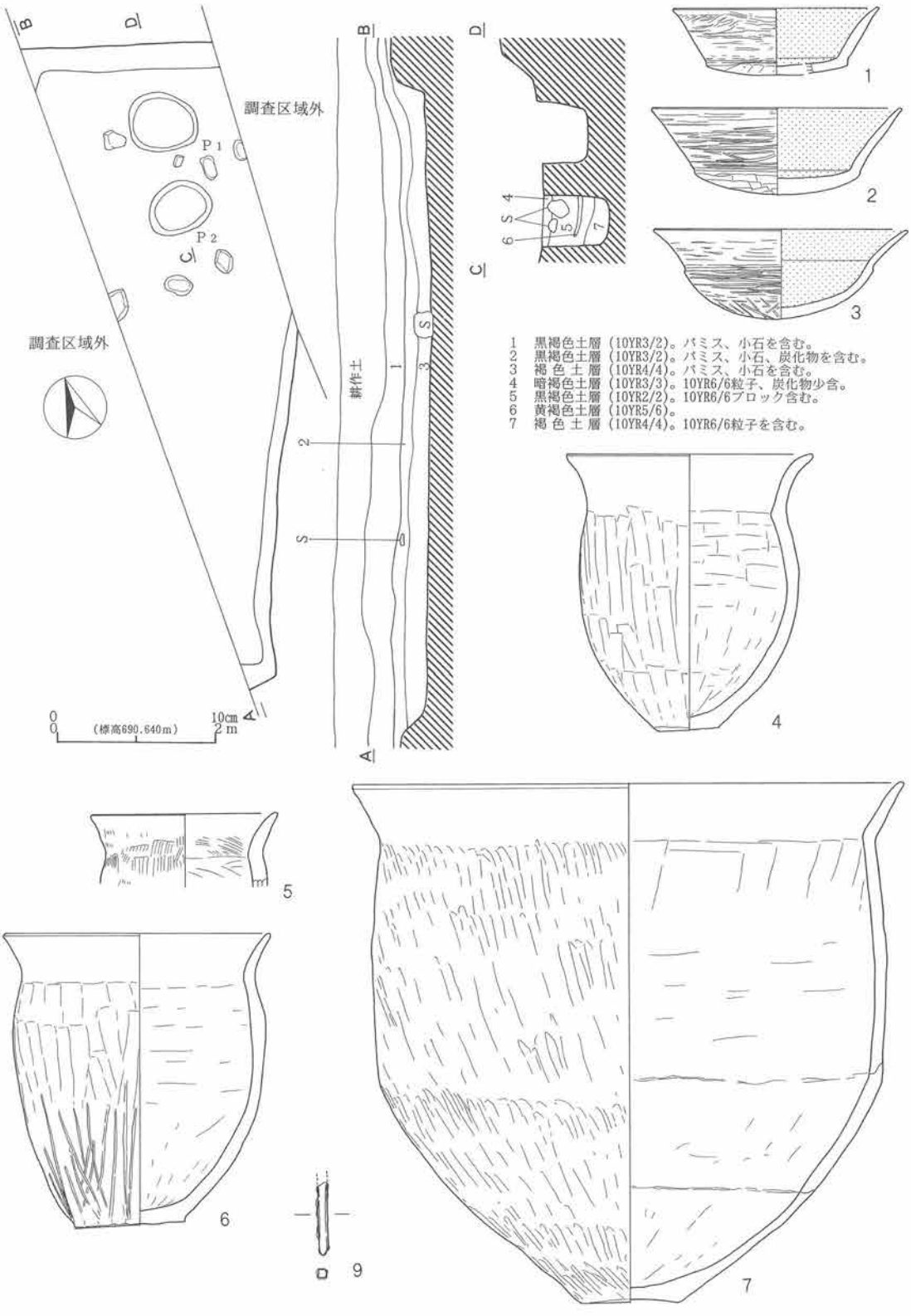
第115表　H92号住居址出土遺物観察表（2）

8）が認められる。坏は3点共に丸底から口縁部が大きく開くもので、内面黒色処理、外面には篦削り後篦磨き調整が施される。小型甕4は内面ナデ、外面篦削り調整が施される。5は内外面刷毛目調整、6は4よりも口縁部が短く、底部が広い器形で内面ナデ調整、外面は篦削り調整後体部下半から底部にかけて篦磨き調整が施されている。甕は7・8共に広口で口縁部は緩く外反する。体部は張りが弱く、底部に向かって強く収束する。口径に比して極端に小径な平底を呈している。内面ナデ、外面篦磨き調整がほどこされる。鉄器は9の鉄鏃の基部が出土している。

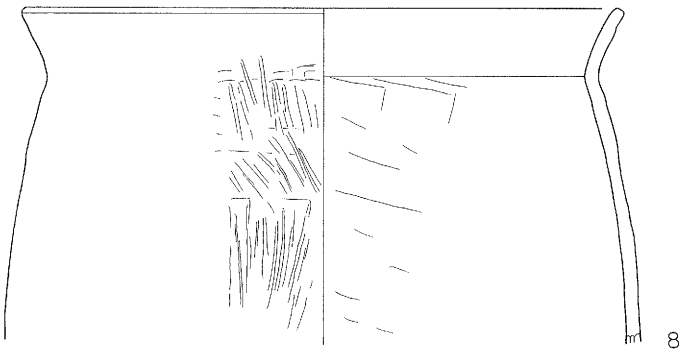
H96号住居址（第129・130図、図版四十・百五十九）

遺構－Ⅶく5グリットで検出された。H80号住居址に切られ、H102号住居址に切られる。隅丸方形の平面プランを呈し、南北長5.75ｍ×東西長5.25ｍ×壁残高0.2ｍの規模を呈する。N－15°－Eに長軸方位をとる。カマドが存在したであろう北壁中央部分は、H80号住居址により消滅しているためカマドは存在しなかった。4基存在したPitは全て主柱穴でＰ2・Ｐ3で直径15㎝、Ｐ4で18㎝の柱が確認された。覆土は人為埋土で、周溝は存在しない。

遺物－土師器、石製品が出土している。土師器には坏（1・2）、鉢（4・5）、小型甕（6・7）、台付甕（3）、甕（8・10・11）、壷（9）が認められる。坏1は半球状を呈するもので内面黒色処理、外面ナデ調整が施される。2は丸底から口縁部が大きく開くもので、内面黒色処理、外面篦削り調整が施される。鉢4・5は2点共に内面黒色処理で、外面には篦削り調整後篦磨きが施される。丸底である。小型甕は6・7共に内面ナデ、外面篦削り調整が施される。台付甕3は脚部片である。内面篦ナデ、外面篦削り調整が施される。甕8は広口で内面ナデ、外面篦磨き調整が施される。10・11は長胴で10は内外面刷毛目、11は内面刷毛目、外面篦削り調整が施される。壷9は内面ナデ、外面篦削り調整が施される。石製品は14～37の滑石製の臼玉、13のような



第127図　H94号住居址（1）



第128図　H94号住居址（2）

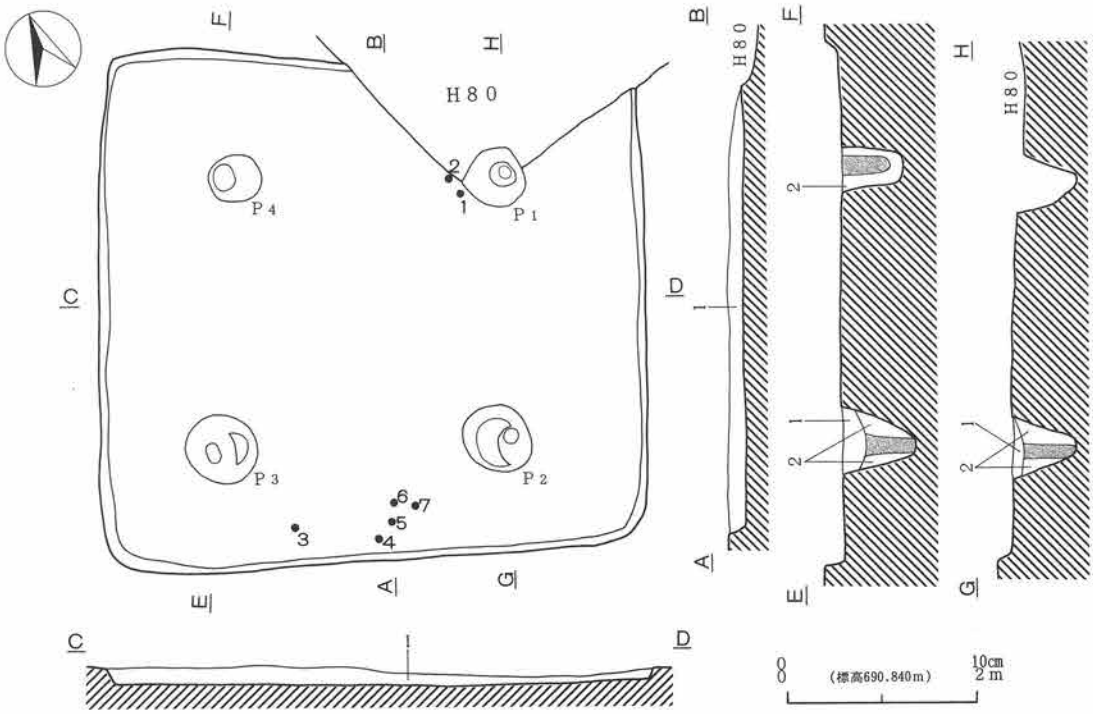
挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
－1	土師器 坏	13.2 9.0 4.3	内－黒色処理。 外－篦削り・篦磨き。	
－2	土師器 坏	16.5 5.5 10.5	内－黒色処理。 外－篦削り・篦磨き。	
－3	土師器 坏	16.2 － 5.8	内－黒色処理。 外－篦削り・篦磨き。	
－4	土師器 小型甕	15.8 3.7 17.7	内－ナデ。 外－篦削り。	
－5	土師器 小型甕	11.9 － －	内外－刷毛目。	
－6	土師器 小型甕	17.0 7.0 18.6	内－ナデ。 外－篦削り・篦磨き。	
－7	土師器 甕	35.1 6.3 33.2	内－ナデ。 外－篦磨き。	
－8	土師器 甕	31.8 － －	内－ナデ。 外－篦磨き。	
－9	鉄鏃	－ 0.5 0.6		4.0g

第116表　H94号住居址出土遺物観察表

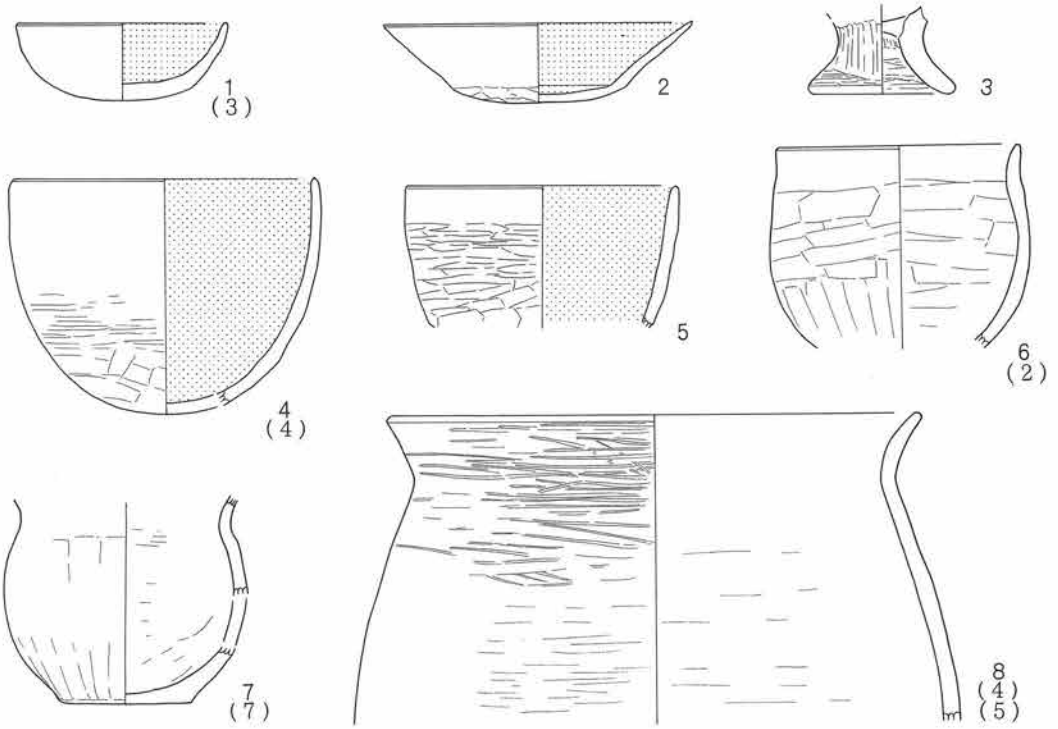
石製模造品、12のような石製模造品の未製品が出土している。

H101号住居址（第131図、図版四十八・百六十一）

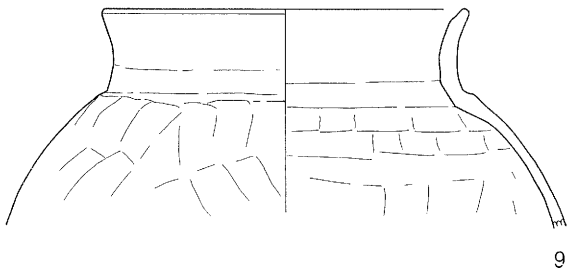
遺構－XⅡお2グリットで検出された。重複関係は有さない。隅丸方形の平面プランを呈し、



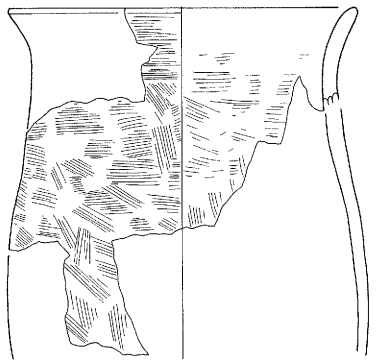
1　にぶい黄褐色土層（10YR5/3）。10YR6/6、10YR3/2土の混在土層。人為埋土。
　　φ1cm以下石粒、パミス多含。
2　灰褐色土層（10YR5/2）。10YR6/6粒子多含。
　　褐色土層（10YR4/3）。柱痕。



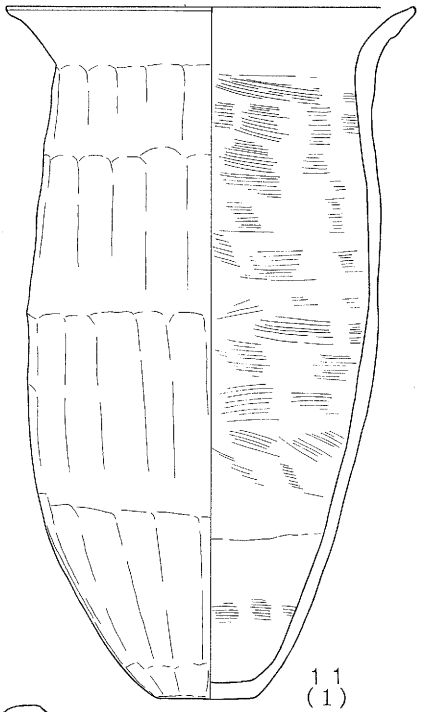
第129図　H96号住居址（1）



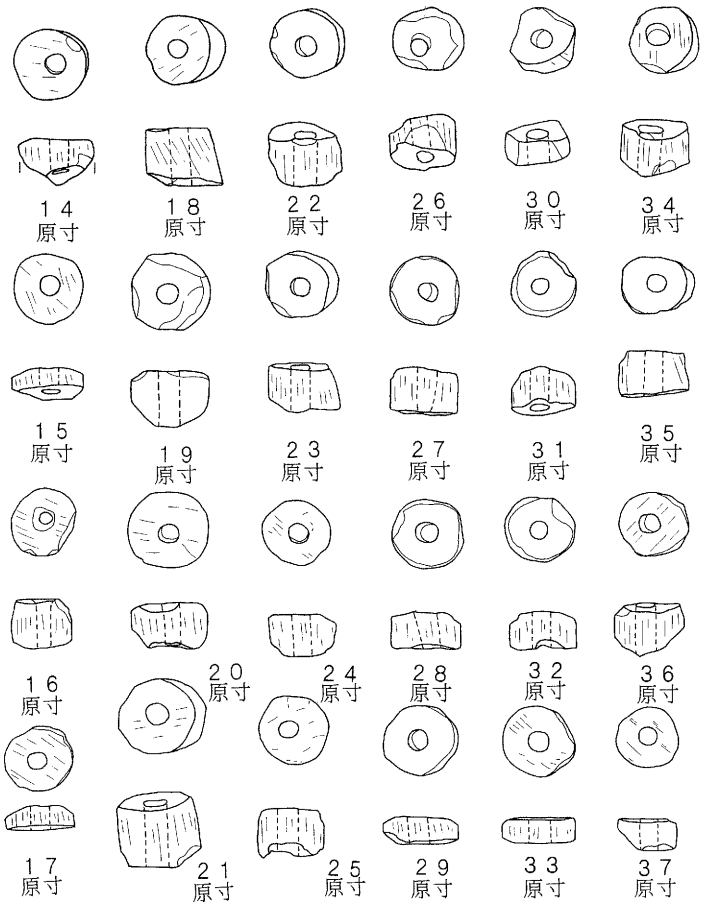
9
(6)



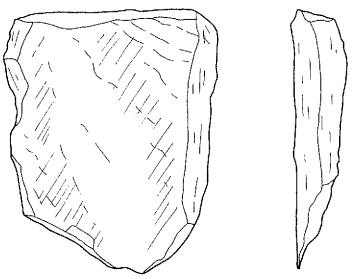
10



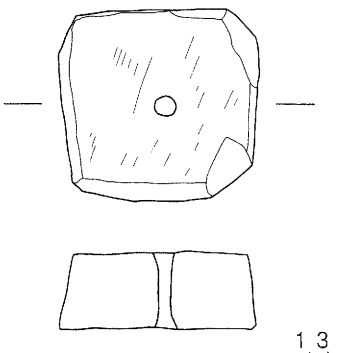
11
(1)



14 原寸　18 原寸　22 原寸　26 原寸　30 原寸　34 原寸
15 原寸　19 原寸　23 原寸　27 原寸　31 原寸　35 原寸
16 原寸　20 原寸　24 原寸　28 原寸　32 原寸　36 原寸
17 原寸　21 原寸　25 原寸　29 原寸　33 原寸　37 原寸



12
原寸



13
原寸

第130図　H96号住居址（2）

挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
－1	土師器 坏	11.2 － 4.1	内－黒色処理。 外－ナデ。	No.3
－2	土師器 坏	16.4 4.5 4.2	内－黒色処理。 外－篦削り。	
－3	土師器 台付甕	－ 7.8 －	内－ナデ。 外－篦磨き。	
－4	土師器 鉢	16.3 － －	内－黒色処理。 外－篦削り・篦磨き。	No.4
－5	土師器 鉢	14.5 － －	内－黒色処理。 外－篦削り・篦磨き。	
－6	土師器 小型甕	13.0 － －	内－ナデ。 外－篦削り。	No.2
－7	土師器 小型甕	－ 7.1 －	内－ナデ。 外－篦削り。	No.7
－8	土師器 甕	28.3 － －	内－ナデ。 外－篦磨き。	No.4・5
－9	土師器 壷	19.4 － －	内－ナデ。 外－篦削り。	
－10	土師器 甕	18.4 － －	内外－刷毛目。	
－11	土師器 甕	21.7 4.9 36.8	内－刷毛目。 外－篦削り。	No.1
－12	石製 模造品	3.4 2.8 0.7	未製品。	8.6g
－13	石製 模造品	2.6 2.5 1.0		15.2g
－14	臼玉	0.95 0.95 0.5		0.6g
－15	臼玉	0.95 0.85 0.25		0.4g
－16	臼玉	0.9 0.75 0.65		0.5g
－17	臼玉	0.85 0.9 0.25		0.3g
－18	臼玉	0.9 0.85 0.65		0.7g
－19	臼玉	1.05 1.05 0.75		1.2g

第117表　H96号住居址出土遺物観察表（1）

挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
－20	臼玉	1.05 1.0 0.6		0.9g
－21	臼玉	1.15 1.0 0.75		1.4g
－22	臼玉	1.0 0.9 0.6		1.1g
－23	臼玉	0.95 0.9 0.55		0.9g
－24	臼玉	0.9 0.85 0.55		0.7g
－25	臼玉	0.9 0.9 0.6		0.5g
－26	臼玉	0.95 0.85 0.7		0.6g
－27	臼玉	0.95 0.9 0.6		0.8g
－28	臼玉	0.95 0.9 0.45		0.6g
－29	臼玉	1.0 0.95 0.35		0.5g
－30	臼玉	0.9 0.9 0.3		0.5g
－31	臼玉	0.85 0.8 0.5		0.7g
－32	臼玉	0.95 0.85 0.5		0.5g
－33	臼玉	0.95 0.9 0.35		0.4g
－34	臼玉	0.9 0.85 0.5		0.5g
－35	臼玉	0.95 0.75 0.6		0.5g
－36	臼玉	0.95 0.85 0.55		0.5g
－37	臼玉	0.85 0.8 0.85		0.3g

第118表　H96号住居址出土遺物観察表（2）

長軸長5.18ｍ×短軸長4.95ｍ×壁残高0.25ｍの規模を有する。N－15°－Wに長軸方位をとる。北壁中央部に構築されていたカマドを東壁中央部に移築したらしく、北壁のカマドが構築されていたと思われる部分には粘土が認められた。また、東壁に構築された新しいカマドは完全に破壊され煙道部のみが残存していた。7基検出されたPitの内Ｐ１～Ｐ４の４基が主柱穴で、Ｐ１・Ｐ２で直径15cmの、Ｐ４で12cmの柱が確認された。覆土は自然堆積で、周溝は存在しなかった。

遺物－土師器の坏（１・２）、鉢（３）、甕（５・４）が出土している。坏は２点共に半球状を呈するもので、２点共に内面黒色処理される。１は外面刷毛目、２は篦削後篦磨き調整が施される。鉢は外湾する体部から短い口縁部が内傾気味に立ち上がるもので、内面ナデ、外面篦削り調整が施される。甕は２点共に内面ナデ、外面篦削り調整が施される。

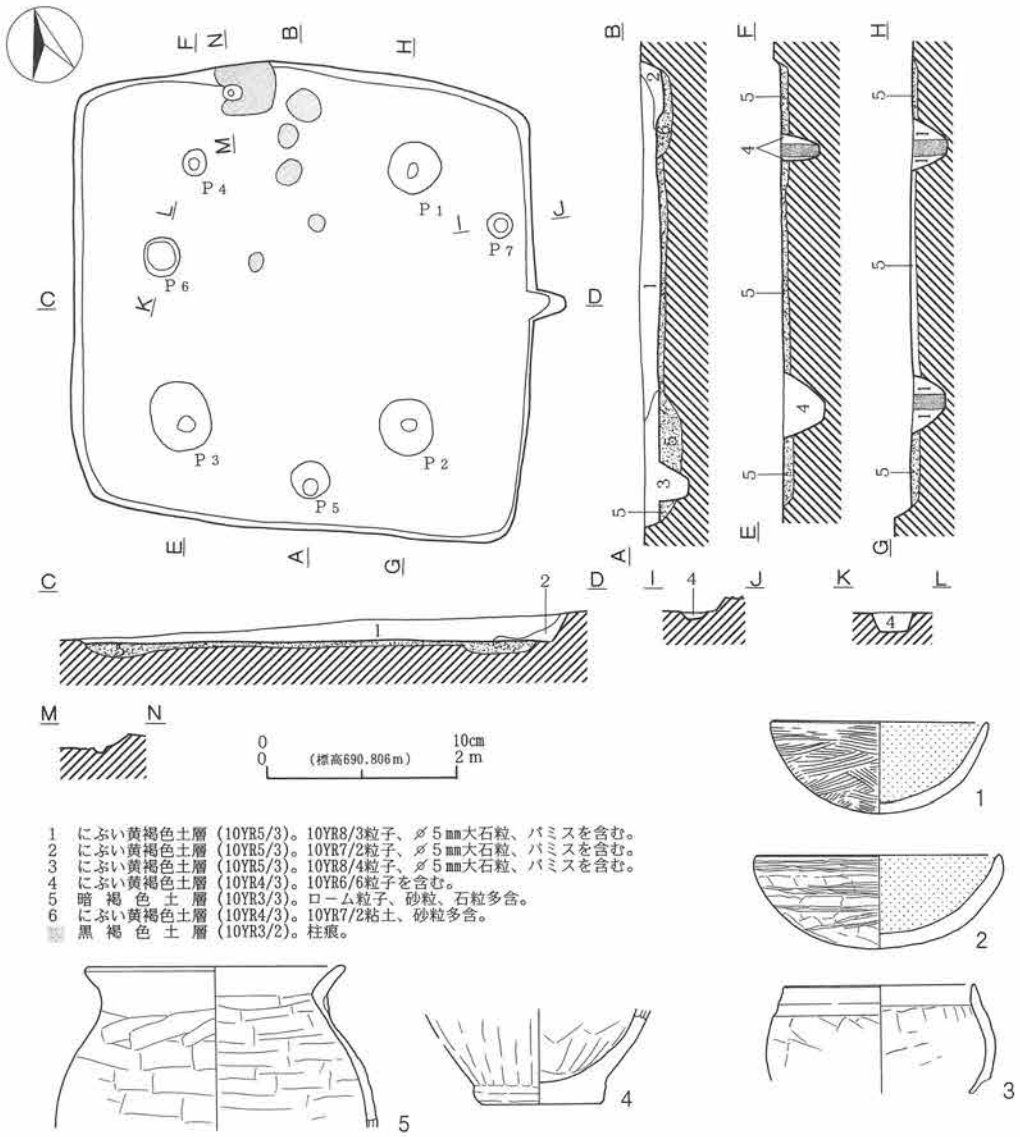
挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
－1	土師器 坏	11.5 － 4.8	内－黒色処理。 外－刷毛目。	
－2	土師器 坏	13.2 － 5.0	内－黒色処理。 外－篦削り・篦磨き。	
－3	土師器 鉢	10.2 － －	内－ナデ。 外－篦削り。	
－4	土師器 甕	－ 6.0 －	内－ナデ。 外－篦削り。	
－5	土師器 甕	13.7 － －	内－ナデ。 外－篦削り。	

第119表　H101号住居址出土遺物観察表

H107号住居址（第132・133図、図版四十三・百六十三）

遺構－Ⅶう５グリットで検出された。住居の大半は第２次調査後の工事範囲を越えた違法工事により消滅してしまった。東西長5.0ｍ、壁残高0.25ｍを測る。カマドは北壁中央部分に構築されており、袖は地山削りだしで被覆した粘土が残存していた。長径0.96ｍ×短径0.86ｍ×深度0.2ｍの規模を有する。調査範囲内にはPitは存在しなかった。覆土は自然堆積である。

遺物－土師器が出土している。坏（１・２）、小型甕（３・４）、甕（５～８）、壺（９・10）が認められる。坏は２点共に須恵器坏蓋の模倣を原形とするもので、１は内面ナデ、外面篦削り調整、２は内面に放射状暗文、外面には篦削り調整が施される。小型甕は２点共に内面ナデ、外面篦削り調整が施される。甕は４点全てが長胴で、口縁部に最大径を有する。内面ナデ、外面篦削り調整が施される。壺９は内面ナデ、外面篦削り調整が施される。10は内面ナデ～篦磨き調整、外面篦削り～篦磨き調整が施される。

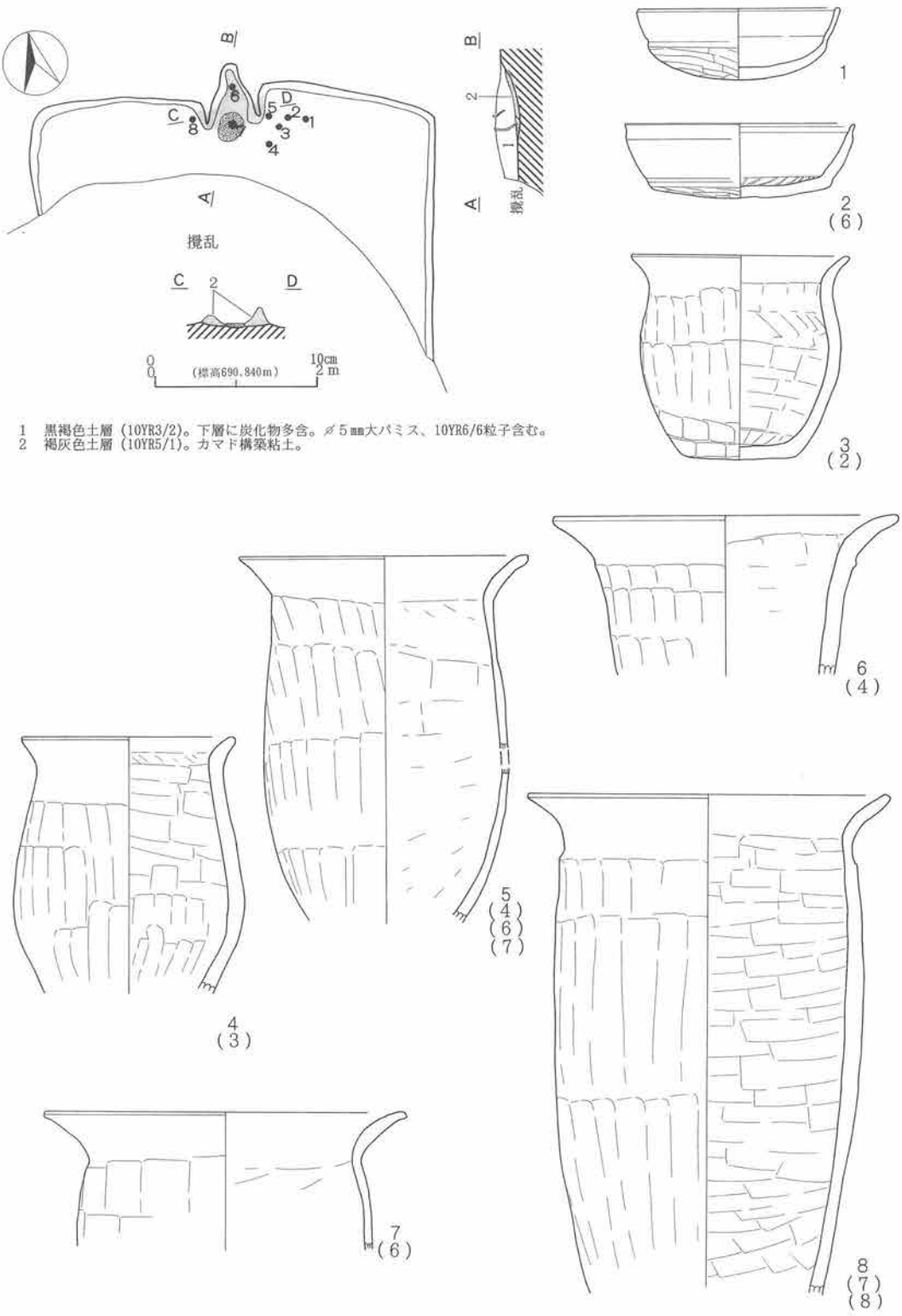


第131図　H101号住居址

挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
－1	土師器 坏	12.6 － 4.5	内－ナデ。 外－篦削り。	
－2	土師器 坏	14.3 11.2 4.6	内－放射状暗文。 外－篦削り。	No.6
－3	土師器 小型甕	13.6 6.8 12.7	内－ナデ。 外－篦削り。	No.2

第120表　H107号住居址出土遺物観察表（1）

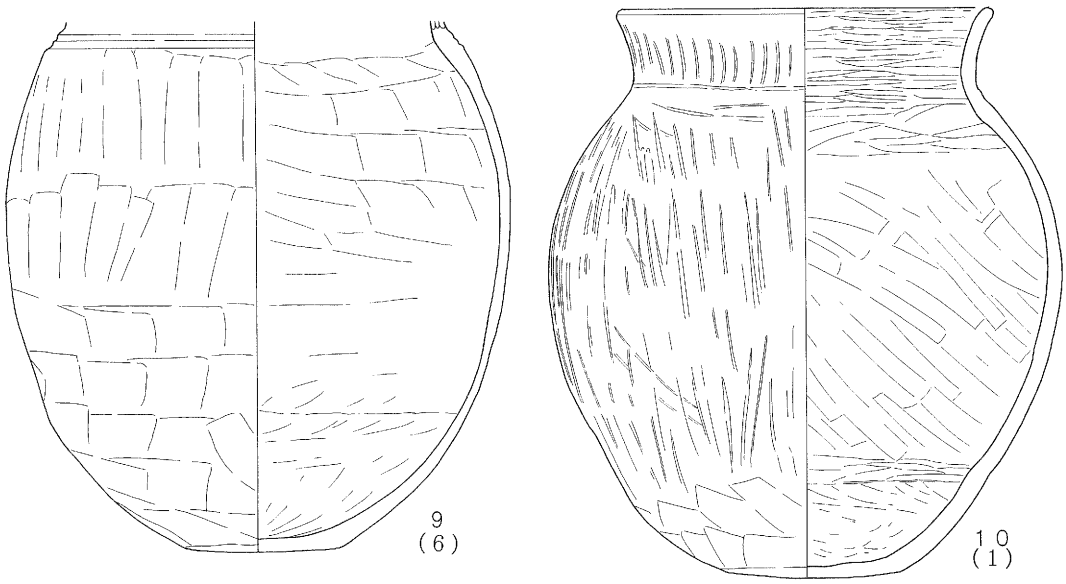
1　黒褐色土層（10YR3/2）。下層に炭化物多含。∅5㎜大パミス、10YR6/6粒子含む。
2　褐灰色土層（10YR5/1）。カマド構築粘土。



第132図　H107号住居址（1）

挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
－4	土師器 小型甕	13.4 － －	内－ナデ。 外－篦削り。	No.3
－5	土師器 甕	17.9 － －	内－ナデ。 外－篦削り。	No.4・6・7
－6	土師器 甕	21.4 － －	内－ナデ。 外－篦削り。	No.4
－7	土師器 甕	22.5 － －	内－ナデ。 外－篦削り。	No.6
－8	土師器 甕	22.5 － －	内－ナデ。 外－篦削り。	No.7・8
－9	土師器 壷	－ 8.0 －	内－ナデ。 外－篦削り。	No.6
－10	土師器 壷	19.9 9.9 30.1	内－ナデ～篦磨き。 外－篦削り～篦磨き。	No.1

第121表　H107号住居址出土遺物観察表（2）



第133図　H107号住居址（2）

H110号住居址（第134図、図版四十一・百六十四）

遺構－Ⅶく6グリットで検出された。H84号・H98号住居址に切られる。2次調査におけるH

33号住居址は本址と同一の住居址である。壁残高0.3ｍを測り、隅丸長方形の平面プランを呈するものと思われる。調査範囲内にはPit等の施設は存在しなかった。覆土は自然堆積である。

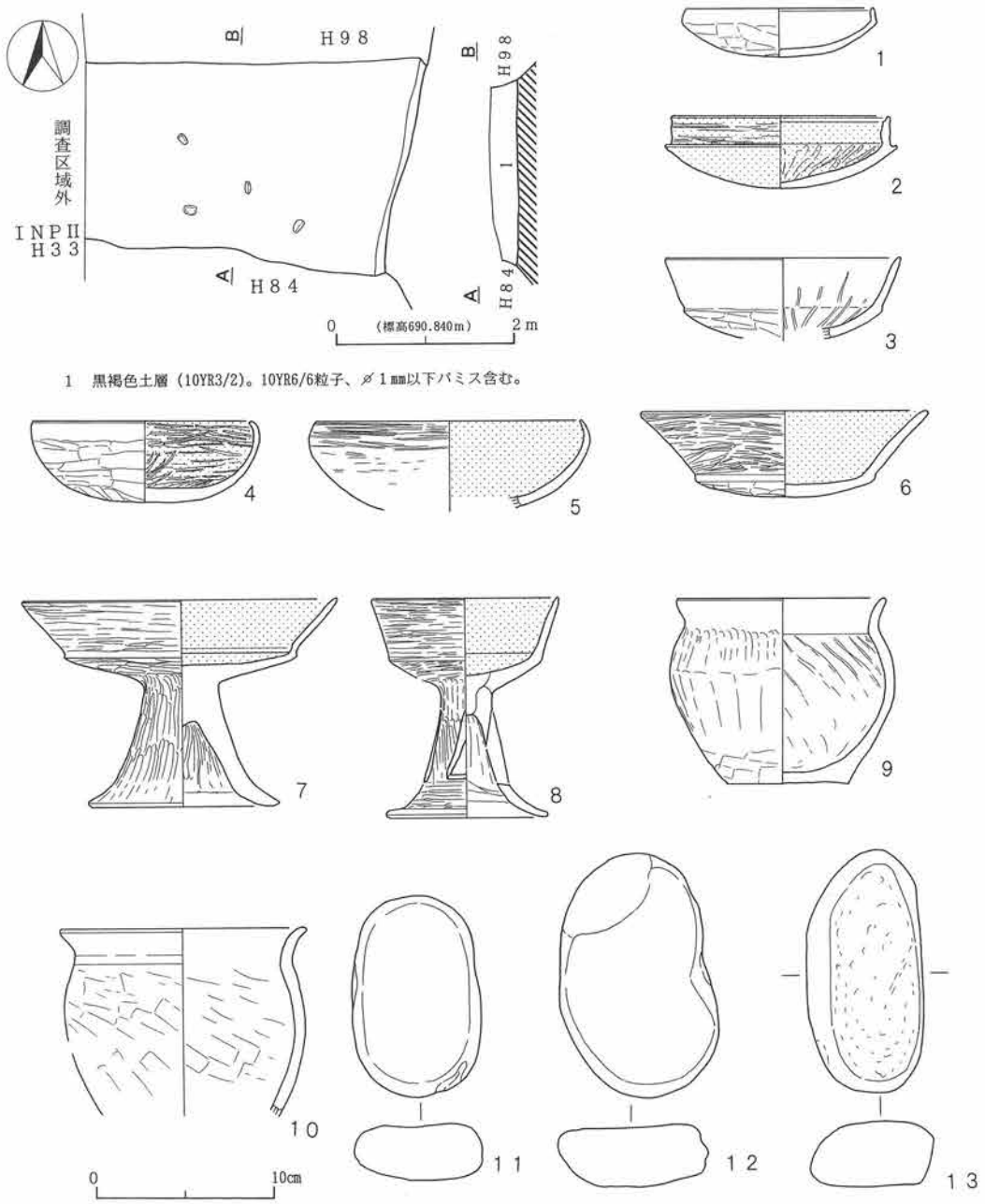
遺物－土師器、石器が出土している。土師器には坏（1～6）、高杯（7・8）、小型甕（9・10）が認められる。坏1・3は須恵器坏蓋の模倣を原形とするもので、1は内面ナデ、外面篦削り調整、3は内面放射状暗文、外面篦削り調整が施される。2は須恵器坏身の模倣である。内外面が黒色処理されている。4・5は半球状を呈するもので、4は内面篦磨き～黒色処理、外面は篦削り調整が施される。5は内面黒色処理、外面には篦磨き調整が施される。6は丸底から口縁部が大きく開くもので、内面黒色処理、外面には篦削り～篦磨き調整が施される。高杯は2点共

挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
－1	土師器 坏	10.7 － 2.8	内－ナデ。 外－篦削り。	
－2	土師器 坏	12.4 － 3.0	内外－黒色処理。	
－3	土師器 坏	13.3 － －	内－放射状暗文。 外－篦磨き。	
－4	土師器 坏	12.8 － 4.6	内－篦磨き～黒色処理。 外－篦削り。	No.5
－5	土師器 坏	15.0 － －	内－黒色処理。 外－篦磨き。	
－6	土師器 坏	16.2 10.0 4.9	内－黒色処理。 外－篦削り・篦磨き。	No.14
－7	土師器 高坏	17.2 10.9 11.2	内－黒色処理、脚内：篦ナデ。 外－篦磨き。	No.8
－8	土師器 高坏	10.5 9.2 12.4	内－黒色処理、脚内：篦ナデ。 外－篦磨き。三角透かし。	No.6
－9	土師器 小型甕	11.8 6.8 10.5	内－ナデ。 外－篦削り。	No.4・2
－10	土師器 小型甕	14.0 － －	内－ナデ。 外－篦削り。	
－11	編物石	11.5 7.3 3.5		420ｇ
－12	編物石	13.7 9.0 3.5		620ｇ
－13	磨石	13.2 6.5 3.6		570ｇ No.2

第122表　H110号住居址出土遺物観察表

に内面黒色処理、脚内篦ナデ、外面篦磨き調整が施される。8は脚に三角形の透かしが4ヶ所穿

たれている。小型甕は２点共に内面ナデ、外面篦削り調整が施される。石器は11・12が編物石、13が磨石である。



第134図　H110号住居址

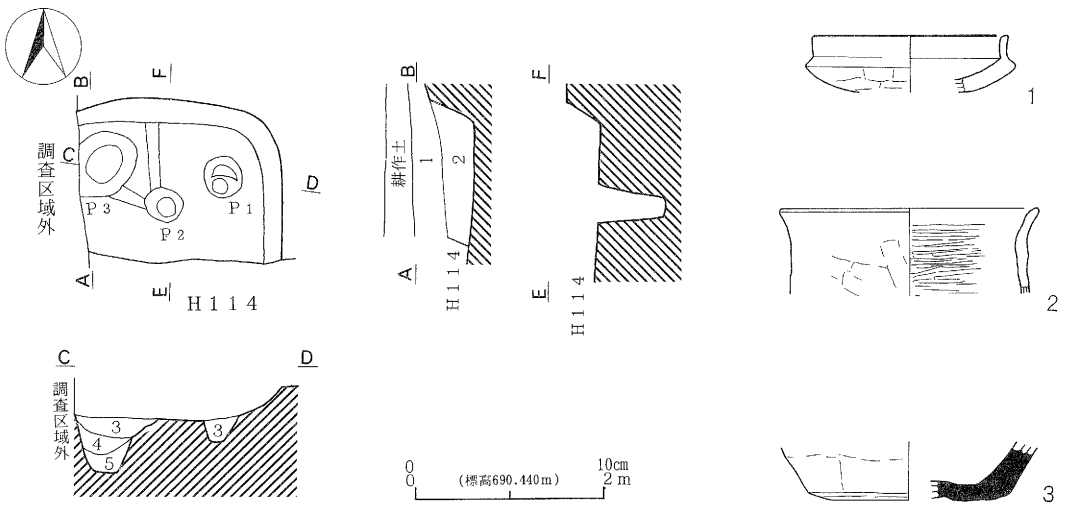
H119号住居址（第135図、図版四十六・百六十八）

遺構－Ⅴあ10グリットで検出された。H114号住居址に切られ、H121号住居址を切る。H114号住居址による破壊と、本址が調査区域外に延びるために形状・規模等は判然としない。壁残高は0.45ｍを測る。Pitは３基検出されているが主柱穴か否かは不明である。覆土は自然堆積で、周溝は存在しない。

遺物－土師器と須恵器が出土している。土師器には坏（１）と甕（２）が認められる。坏は須恵器坏身の模倣を原形とするもので、内面ナデ、外面篦削り調整が施される。甕は内面篦磨き、外面篦削り調整が施される。須恵器は甕の底部が出土している。外面に篦削り調整が施されている。

挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
－1	土師器 坏	10.4 － －	内－ナデ。 外－平行沈線。	
－2	土師器 甕	13.8 － －	内－篦磨き。 外－篦削り。	
－3	須恵器 甕	－ 8.0 －	外－篦削り。	

第123表　H119号住居址



1　灰黄褐色土層（10YR4/2）。
2　にぶい黄褐色土層（10YR5/3）。φ５mm以下パミス、10YR6/6粒子多含。
3　にぶい黄褐色土層（10YR4/3）。φ５mm以下パミス、10YR6/6粒子多含。
4　黒褐色土層（10YR2/3）。φ５mm以下パミス、10YR6/6粒子多含。
5　にぶい黄褐色土層（10YR4/3）。10YR6/6粒子、φ５mm以下パミス、石粒多含。

第135図　H119号住居址

H122号住居址（第136図、図版百六十九）

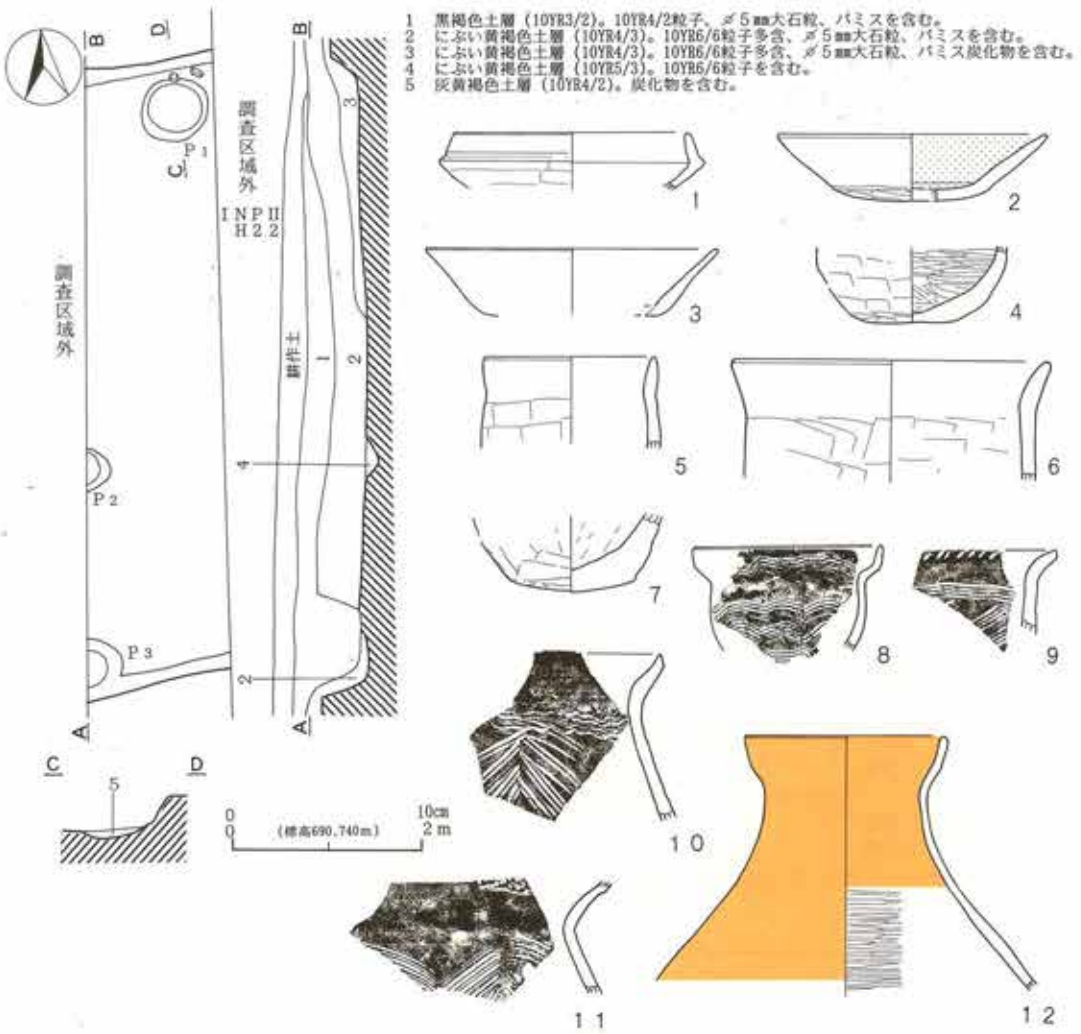
遺構－Ⅶい7グリットで検出された。第2次調査におけるH22号住居址は、本址と同一の住居址である。第2次調査分において第2次調査分のH26号住居址を切っている。また、本址は東壁の中央部分にカマドを有しており、第2次調査時に調査されている。Pitも主柱穴と思われるPit2基が第2次調査時に検出されている。今回の調査分には3基のPitが存在したが、主柱穴とは思われない。覆土は自然堆積である。

遺物－土師器、弥生土器が出土している。弥生土器は混入遺物である。土師器には、坏（1～3）、小型甕（4・5）、甕（6・7）が認められる。坏1は須恵器坏身の模倣を原形とするもので、内面ナデ、外面には篦削り調整が施される。2・3は丸底から口縁部が大きく開くもので、2は内面黒色処理、外面篦削り調整が施される。3は残存部分は内外面共になで調整が施される。小型甕4は内面ナデ、外面篦削り調整が施されている。5は内面ナデ、外面篦削り調整が施され

挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
－1	土師器 坏	12.6 － －	内－ナデ。 外－篦削り。	
－2	土師器 坏	14.1 8.1 3.6	内－黒色処理。 外－篦削り。	
－3	土師器 坏	15.6 － －	内外－ナデ。	
－4	土師器 小型甕	－ 4.0 －	内－篦磨き。 外－篦削り。	
－5	土師器 小型甕	9.3 － －	内－ナデ。 外－篦削り。	
－6	土師器 甕	17.0 － －	内－ナデ。 外－篦削り。	
－7	土師器 甕	－ 6.8 －	内－ナデ。 外－篦削り。	
－8	弥生土器 甕	10.1 － －	内－篦磨き。 外－櫛描波状文。	
－9	弥生土器 甕	－ － －	内－篦磨き。 外－口唇部：刻目、体部：櫛描斜走文。	
－10	弥生土器 甕	－ － －	内－篦磨き。 外－頸部：1条の櫛描波状文、体部：斜走文。	
－11	弥生土器 甕	－ － －	内－篦磨き。 外－口縁端部：縄文、体部：斜走文。	
－12	弥生土器 壷	10.7 － －	内－口縁部：赤彩、他は篦磨き。 外－赤彩。	

第124表　H122号住居址出土遺物観察表

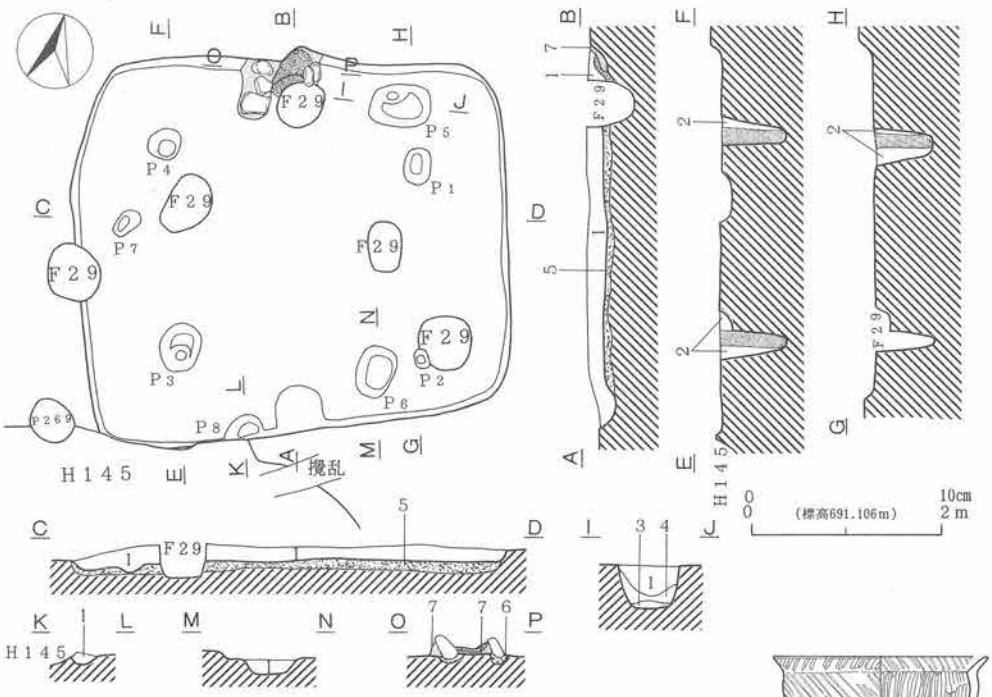
る。甕6・7は内面ナデ、外面篦削り調整が施される。弥生土器には甕（8～11）、壺（12）が認められる。



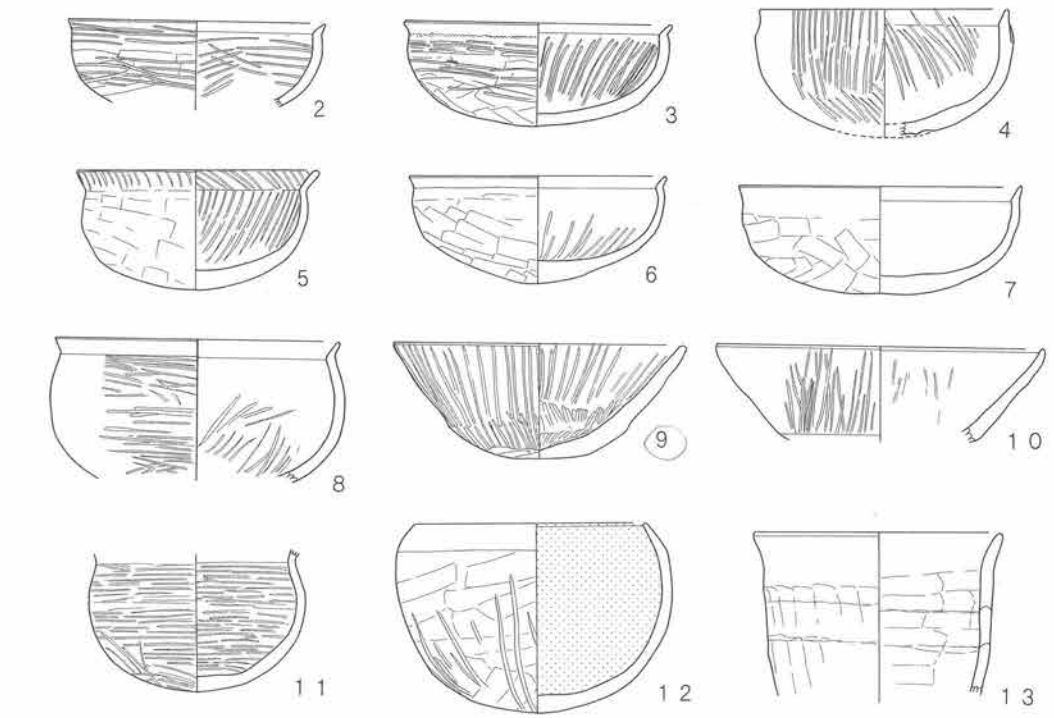
第136図　H122号住居址

H124号住居址（第137・138図、図版四十八・百六十九・百七十）

遺構－ＸＩか1グリットで検出された。H145号住居址・F29号掘立柱建物址に切られ、H155号住居址を切る。隅丸方形の平面プランを呈し、南北長4.6ｍ×東西長4.2ｍ×壁残高0.25ｍの規模を有する。N－75°－Wに長軸方位をとる。カマドは北壁中央部分に構築されており、F29号掘立柱建物址により東袖を破壊される。長径0.8ｍ×短径0.67ｍ×深度0.25ｍの規模である。構造的には石芯を粘土を被覆したもので、袖先端部分にのみ石を用いるものではない。Pitは8基検出されておりこの内のＰ1～Ｐ4の4基が主柱穴である。Ｐ2を除く3基から直径15㎝の柱が



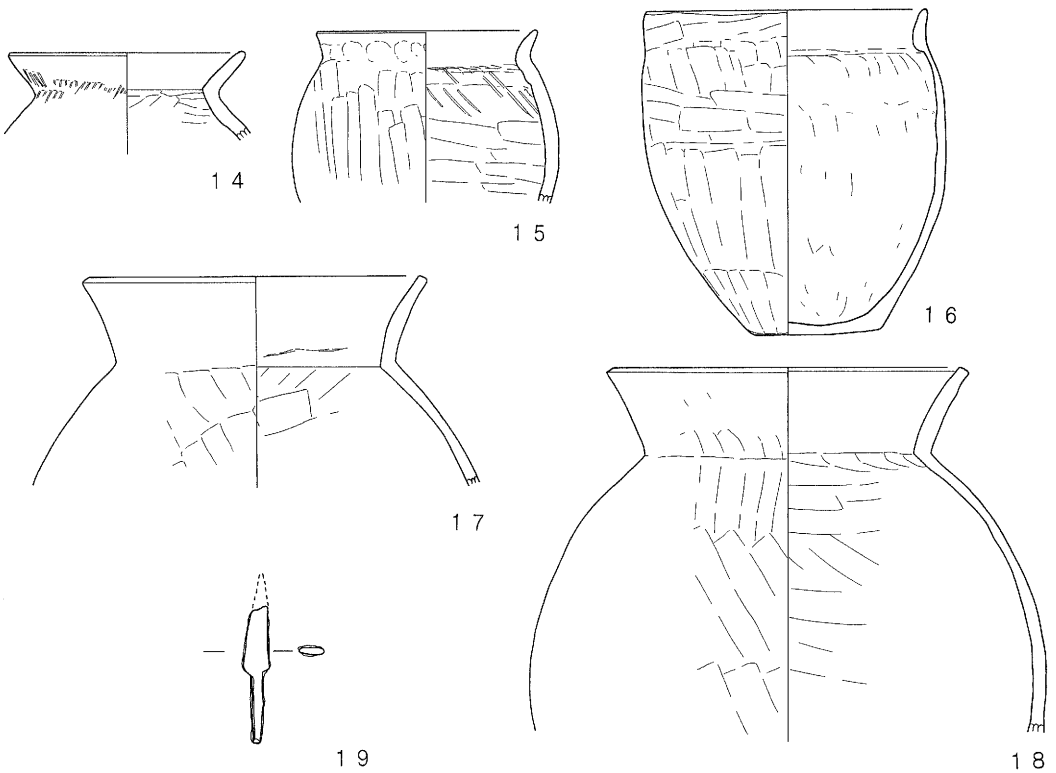
1　にぶい黄褐色土層（10YR4/3）。10YR6/6粒子、炭化物多含。焼失家屋を人為的に埋めた土。
2　にぶい黄褐色土層（10YR5/3）。φ5mm以下パミス、10YR6/6粒子、炭化物を含む。
3　黒褐色土層（10YR2/2）。砂粒多含。
4　暗褐色土層（10YR3/3）。砂粒多含。
5　暗褐色土層（10YR3/3）。ロームブロック、砂粒多含。
6　カマド掘方埋土。
7　カマド構築土。10YR6/6と10YR3/2粘質土の混在土。



第137図　H124号住居址（1）

確認された。本址は覆土、及び床面上に多量の炭化物が認められたことから、消失家屋と考えられる。覆土は人為埋土であった。

遺物－土師器と鉄器が出土している。土師器には坏（1～9・11）、高杯（10）、鉢（12）、小型甕（13～16）、甕（17・18）が認められる。坏は丸底半球状を呈する体部から短い口縁部が外反するもので、内面放射暗文状の篦磨き、外面篦削り～篦磨きを基本とするが7のように篦磨き調整を用いないもの、9のような高杯の坏部分とどうような形状ものも存在する。また、篦磨き調整の方向も一定はしていない。高杯10は口縁端部が立ち上がり気味になり、底部と口縁部の境に稜を有するものである。脚部は欠損する。鉢12は内面黒色処理が施される。外面には篦削り調整後篦磨きが加えられる。小型甕は13・16のような植木鉢に近い形状で内面ナデ、外面篦削り調整のものや、これらに近似するものの体部が張り出す15のようなもの、「く」字状の口縁部を有し外面に刷毛目調整が加えられる14などが存在する。甕は2点共に「く」字状の口縁部を有し、口唇部が面取りされ、最大径を有する体部が外湾するものである。鉄器19は先端部を欠損する鉄鏃と思われる。



第138図　H124号住居址（2）

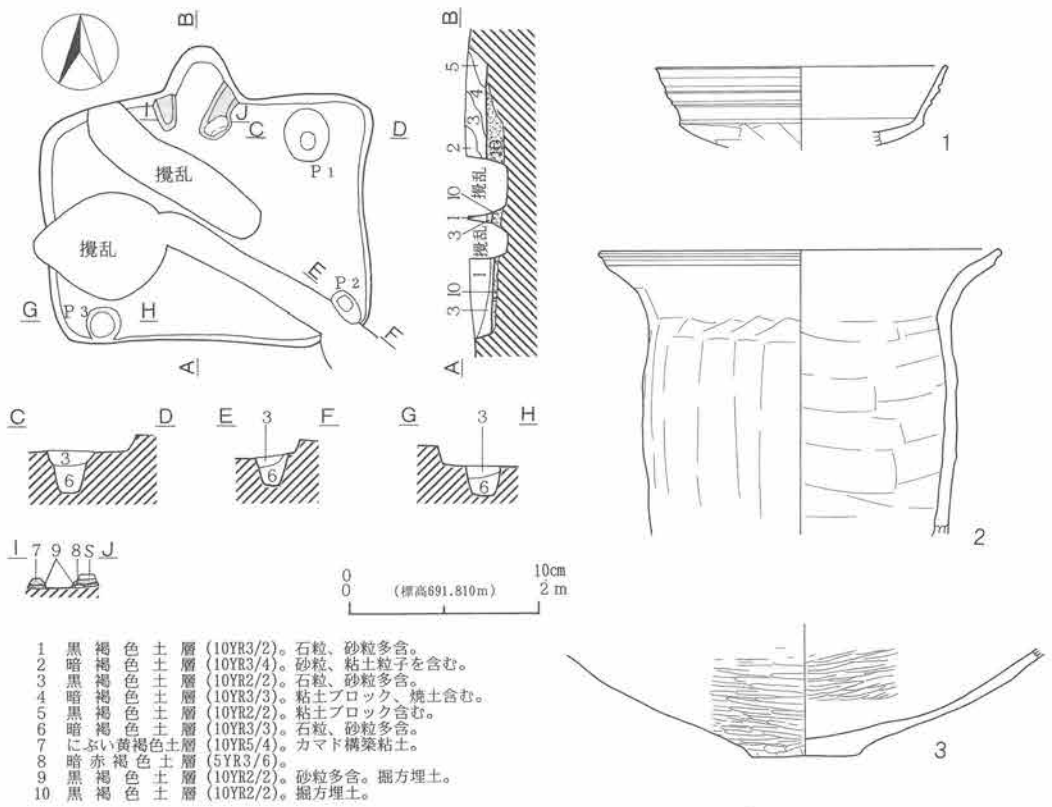
挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
－1	土師器 坏	11.3 － －	内－放射状篦磨き。 外－篦削り～篦磨き。	
－2	土師器 坏	13.3 － －	内－篦磨き。 外－篦削り～篦磨き。	
－3	土師器 坏	14.1 － 5.4	内－放射状篦磨き。 外－篦削り～篦磨き。	
－4	土師器 坏	13.1 － －	内－篦磨き。 外－篦削り。	
－5	土師器 坏	12.7 － 6.2	内－放射状篦磨き。 外－篦削り・篦磨き。	
－6	土師器 坏	13.6 － 5.7	内－放射状篦磨き。 外－篦削り。	
－7	土師器 坏	14.8 － 5.7	内－ナデ。 外－篦削り。	
－8	土師器 坏	15.0 － －	内外－篦磨き。	
－9	土師器 坏	15.5 － 6.1	内外－放射状篦磨き。	
－10	土師器 高坏	17.5 － －	内外－篦磨き。	
－11	土師器 坏	－ － －	内外－篦磨き。	
－12	土師器 鉢	12.3 － 10.0	内－黒色処理。 外－篦削り～篦磨き。	
－13	土師器 小型甕	13.3 － －	内－ナデ。 外－篦削り。	
－14	土師器 小型甕	12.3 － －	内－篦削り。 外－刷毛目。	
－15	土師器 小型甕	11.7 － －	内－ナデ。 外－篦削り。	
－16	土師器 小型甕	15.0 6.5 17.2	内－ナデ。 外－篦削り。	
－17	土師器 甕	18.2 － －	内－ナデ。 外－篦削り。	
－18	土師器 甕	19.2 － －	内－ナデ。 外－篦削り。	
－19	鉄鏃	7.3 1.3 0.6		10.3ｇ

第125表　H124号住居址出土遺物観察表

H128号住居址（第139図、図版五十一・百七十二）

遺構－ⅩⅢけ8グリットで検出された。撹乱に切られるものの、遺構との重複関係は有さない。南北長3.1ｍ×東西長3.4ｍ×壁残高0.25ｍ・面積7.98㎡の規模を有する。隅丸長方形の平面プランを呈し、南北を主軸とするならば、Ｎ－0°－Wに主軸方位をとる。カマドは北壁の中央に粘土主体で石を併用して構築される。長径0.97ｍ×短径0.9ｍ×深度0.2ｍの規模である。３基検出されたPitは全て主柱穴と思われる。北西コーナー付近に構築されていたであろうPitは、撹乱により消滅したものと思われる。覆土は自然堆積である。

遺物－土師器が出土している。坏（1）、甕（2）、壺（3）が存在する。坏は「有段口縁坏」である。内面ナデ、外面篦削り調整が施される。甕は口縁部に最大径を有する長胴甕で、内面ナデ、外面篦削り調整が施される。壺は底部片で、内外面に篦磨き調整が施される。

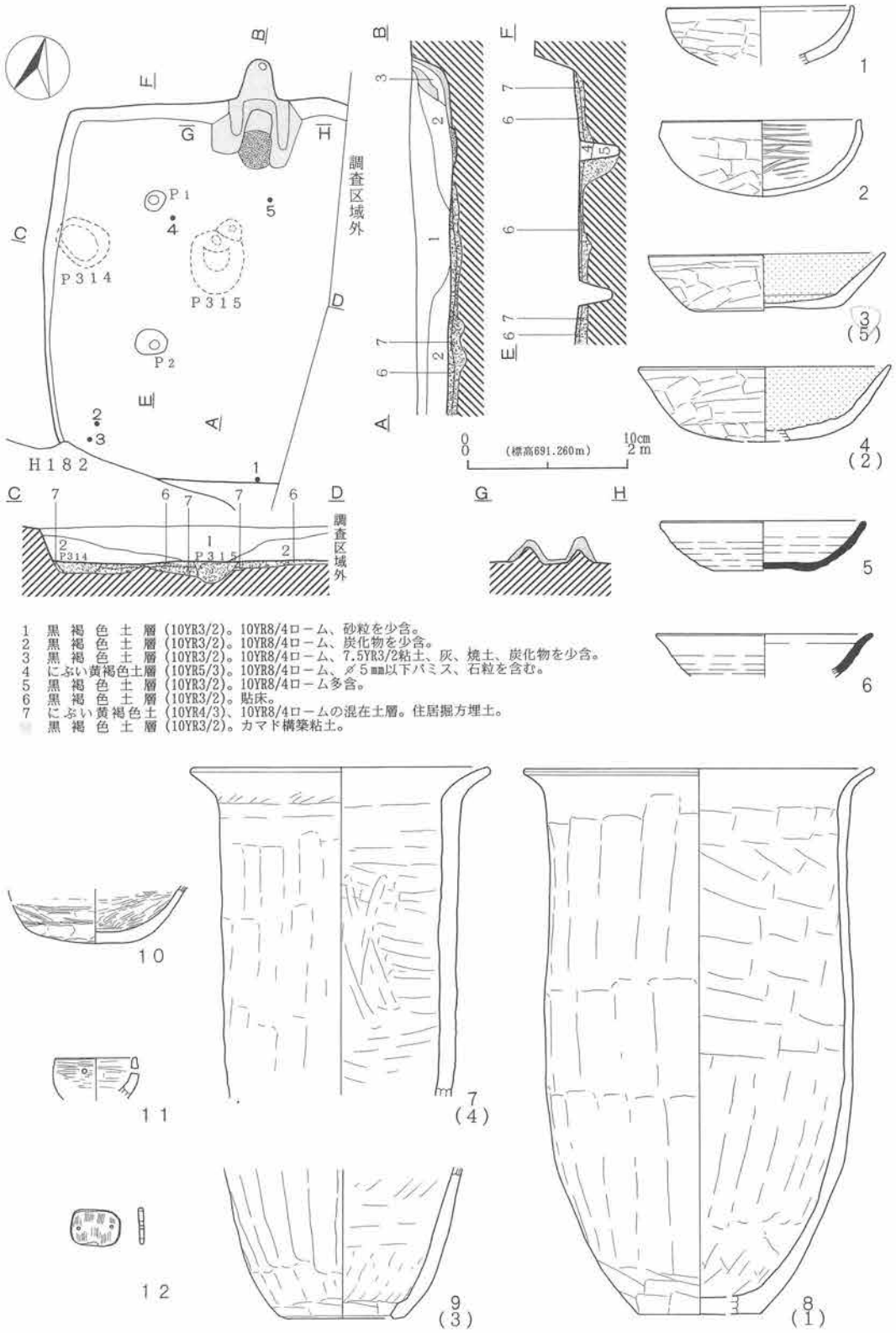


1　黒　褐　色　土　層（10YR3/2）。石粒、砂粒多含。
2　暗　褐　色　土　層（10YR3/4）。砂粒、粘土粒子を含む。
3　黒　褐　色　土　層（10YR2/2）。石粒、砂粒多含。
4　暗　褐　色　土　層（10YR3/3）。粘土ブロック、焼土含む。
5　黒　褐　色　土　層（10YR2/2）。粘土ブロック含む。
6　暗　褐　色　土　層（10YR3/3）。石粒、砂粒多含。
7　にぶい黄褐色土層（10YR5/4）。カマド構築粘土。
8　暗　赤　褐　色　土　層（5YR3/6）。
9　黒　褐　色　土　層（10YR2/2）。砂粒多含。掘方埋土。
10　黒　褐　色　土　層（10YR2/2）。掘方埋土。

第139図　H128号住居址

H136号住居址（第140・141図、図版五十五・百七十五・百七十六）

遺構－Ⅸか10グリットで検出された。調査区域外に延びるため規模・形状等は判然としない。



1　黒褐色土層（10YR3/2）。10YR8/4ローム、砂粒を少含。
2　黒褐色土層（10YR3/2）。10YR8/4ローム、炭化物を少含。
3　黒褐色土層（10YR3/2）。10YR8/4ローム、7.5YR3/2粘土、灰、焼土、炭化物を少含。
4　にぶい黄褐色土層（10YR5/3）。10YR8/4ローム、∅5㎜以下パミス、石粒を含む。
5　黒褐色土層（10YR3/2）。10YR8/4ローム多含。
6　黒褐色土層（10YR3/2）。貼床。
7　にぶい黄褐色土（10YR4/3）、10YR8/4ロームの混在土層。住居掘方埋土。
　黒褐色土層（10YR3/2）。カマド構築粘土。

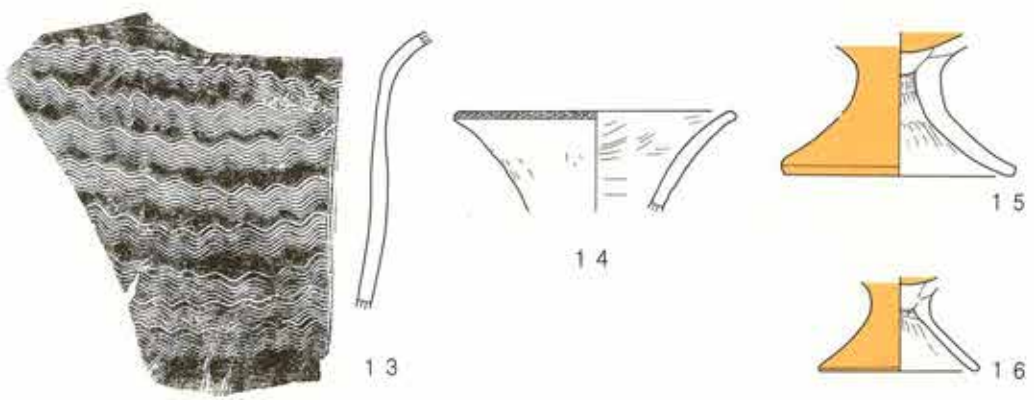
第140図　H136号住居址（1）

挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
−1	土師器 坏	15.3 − −	内−ナデ。 外−篦削り。	有段口縁坏
−2	土師器 甕	21.3 − −	内−ナデ。 外−篦削り。	
−3	土師器 壺	− 5.7 −	内外−篦磨き。	

第126表　H128号住居址出土遺物観察表

H190号・H202号住居址・P314・P315を切り、H182号住居址に切られる。南北長5.33m、壁残高0.45mの規模を有し、南北を主軸とするならばN−15°−Eに主軸方位をとる。カマドは北壁中央部分に構築されており、袖は地山を削りだして芯として、粘土を被覆している。長径1.37m×短径1.12m×深度0.55mの規模である。Pitは2基検出されており、2基共に主柱穴である。覆土は自然堆積で、周溝は有さない。

遺物−土師器、須恵器、弥生土器、石製品が出土している。土師器には坏（1～4）、小型甕（10）、甕（7・8）、甑（9）、ミニチュア土器（11）が認められる。坏1・2は半球状を呈するもので、1は内面ナデ、外面篦削り調整が施される。2は内面篦磨き、外面篦削り調整が施される。3・4は平坦な底部を有するもので、内面は黒色処理、外面には篦削り調整が施される。小型甕は底部片である。内面篦磨き、外面篦削り～篦磨き調整が施される。甕は2点共に口縁部に最大径を有する長胴のもので、内面ナデ、外面には篦削り調整が施される。甑は甕と同様な形状・調整が施されるものと思われるもので、底部全体が開口しているものである。ミニチュア土



第141図　H136号住居址（2）

器は内外面篦磨き調整が施され、口縁部に円孔が穿たれている。須恵器は混入品の坏が2点出土している。5は底部に右回転の糸切り痕を残す。弥生土器も全て混入品である。櫛歯状工具による波状文が施される甕（13）、口唇部に縄文が施される壺（14）、赤彩される高杯（15・16）が出土している。石製品は12のような石製模造品が出土している。

挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
－1	土師器 坏	11.9 － －	内－ナデ。 外－篦削り。	橙色陶質。
－2	土師器 坏	12.6 － 4.8	内－篦磨き。 外－篦削り。	
－3	土師器 坏	15.0 9.3 3.6	内－黒色処理。 外－篦削り。	
－4	土師器 坏	15.9 － 4.7	内－黒色処理。 外－篦削り。	
－5	須恵器 坏	13.0 6.2 3.2	右回転糸きり。	混入遺物。
－6	須恵器 坏	13.7 － －		混入遺物。
－7	土師器 甕	18.9 － －	内－ナデ。 外－篦削り。	
－8	土師器 甕	22.1 7.7 34.5	内－ナデ。 外－篦削り。	
－9	土師器 甑	－ 7.8 －	内－ナデ。 外－篦削り。	
－10	土師器 小型甕	－ － －	内－篦磨き。 外－篦削り～篦磨き。	
－11	土師器 ミニチュア 土器	5.1 － －	内外－篦磨き。	
－12	石製模造品	3.1 2.3 0.4		5.0ｇ
－13	弥生土器 甕	－ － －	内－篦磨き。 外－櫛描波状文。	混入品。
－14	弥生土器 壷	15.0 － －	内－篦磨き。 外－口唇部：縄文。	混入品。
－15	弥生土器 高坏	－ 12.9 －	内－赤彩、脚内：篦ナデ。 外－赤彩。	混入品。
－16	弥生土器 高坏	－ 8.5 －	内－赤彩、脚内：篦ナデ。 外－赤彩。	混入品。

第127表　H136号住居址出土遺物観察表

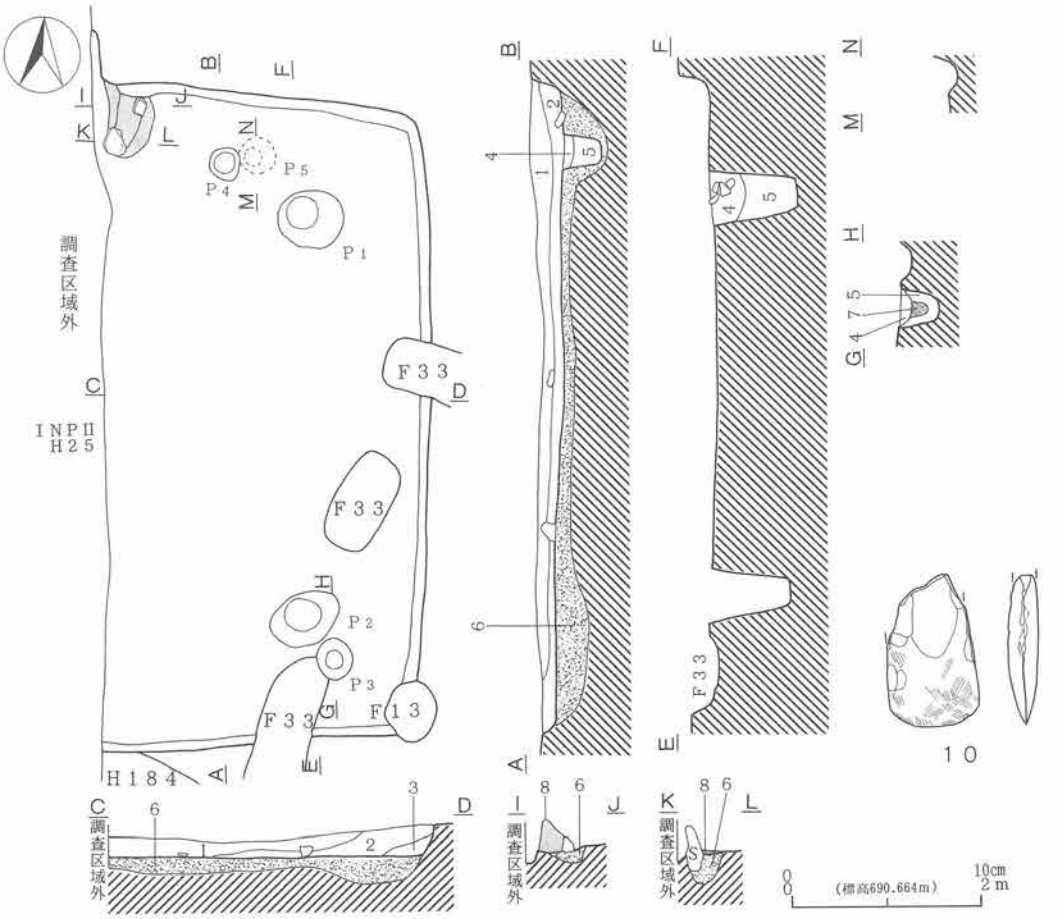
H138号住居址（第142図、図版百七十六）

遺構－Ｘき５グリットで検出された。Ｈ187号住居址、Ｆ33号掘立柱建物址に切られる。第２次調査におけるＨ25号住居址は本址と同一の住居址である。南北長7.65ｍ、壁残高0.3ｍの規模を有し、隅丸方形の平面プランを呈する。南北を主軸とするならばＮ－10°－Ｅに主軸方位をとる。カマドは北壁の中央部分に構築されているが、今回の調査範囲には東半分がかかっただけであった。長径1.35ｍ、深度0.6ｍを測る。石芯を粘土で被覆する「石組粘土カマド」である。Pitは５基検出され、この内のＰ１・Ｐ２が主柱穴である。覆土は自然堆積で周溝は有さない。

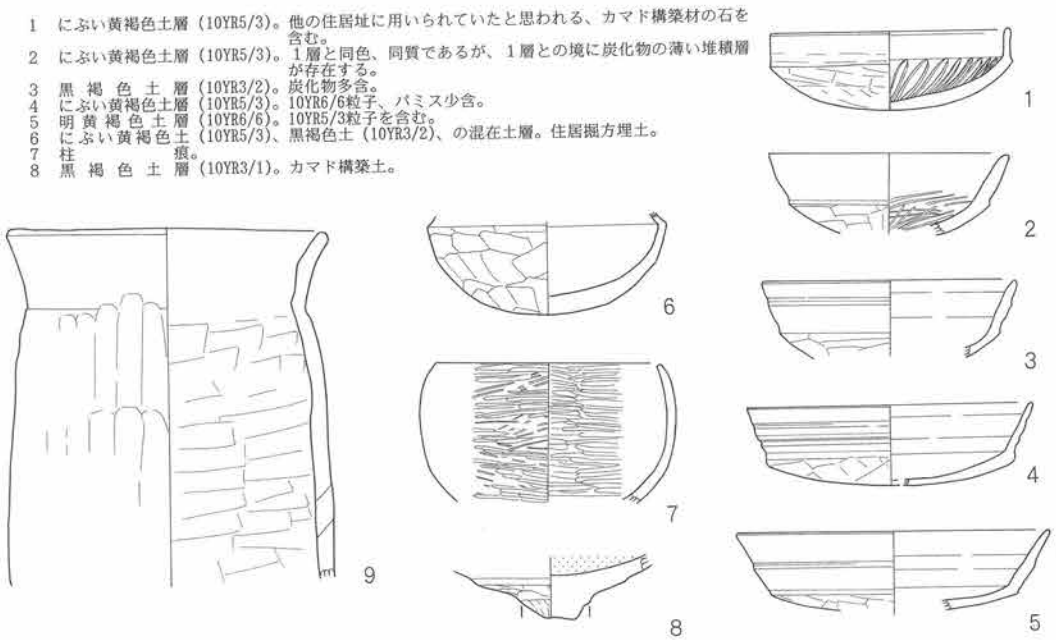
遺物－土師器、石器が出土している。石器は磨製石斧（10）で混入遺物である。土師器には坏（１～６）、鉢（７）、高杯（８）、甕（９）が認められる。坏１～５は須恵器坏蓋の模倣を原形とするもので、１は内面暗文、外面には篦削り調整が施される。２は内面篦磨き、外面篦削り調整がほどこされる。３～５は「有段口縁坏」で内面ナデ、外面篦削り調整が施される。６は須恵器坏身の模倣を原形とするもので、内面ナデ、外面篦削り調整が施される。鉢７は内外面が篦磨き調整され、口縁部が内湾する。高杯は坏身の底部分の破片である。内面黒色処理が施されている。甕９は長胴で体部が緩やかに外湾するらしく最大径は体部に存在する。内面ナデ、外面篦削り調整が施される。

挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
－1	土師器 坏	12.8 － 4.2	内－暗文。 外－篦削り。	
－2	土師器 坏	12.8 － －	内－篦磨き。 外－篦削り。	
－3	土師器 坏	13.5 － －	内－ナデ。 外－篦削り。	有段口縁坏。
－4	土師器 坏	15.2 4.0 4.2	内－ナデ。 外－篦削り。	有段口縁坏。
－5	土師器 坏	16.6 － －	内－ナデ。 外－篦削り。	有段口縁坏。
－6	土師器 坏	－ － －	内－ナデ。 外－篦削り。	
－7	土師器 鉢	11.8 － －	内外－篦磨き。	
－8	土師器 高坏	－ － －	内－黒色処理。 外－篦削り。	
－9	土師器 甕	17.0 － －	内－ナデ。 外－篦削り。	
－10	磨製石斧	7.8 4.8 1.5		100.4ｇ

第128表　Ｈ138号住居址出土遺物観察表



1　にぶい黄褐色土層（10YR5/3）。他の住居址に用いられていたと思われる、カマド構築材の石を含む。
2　にぶい黄褐色土層（10YR5/3）。1層と同色、同質であるが、1層との境に炭化物の薄い堆積層が存在する。
3　黒褐色土層（10YR3/2）。炭化物多含。
4　にぶい黄褐色土層（10YR5/3）。10YR6/6粒子、パミス少含。
5　明黄褐色土層（10YR6/6）。10YR5/3粒子を含む。
6　にぶい黄褐色土（10YR5/3）、黒褐色土（10YR3/2）、の混在土層。住居掘方埋土。
7　柱痕。
8　黒褐色土層（10YR3/1）。カマド構築土。



第142図　H138号住居址

H140号住居址（第143図、図版五十六・百七十七）

遺構－Ｘき５グリットで検出された。調査区域外に延びるため規模・形状は判然としない。壁残高0.22ｍを測る。カマドは調査範囲内には存在しなかった。掘方を含め３基検出されたPitの性格は不明である。掘方の調査により本址は拡張された住居である事が判明した。覆土は自然堆積で、周溝は有さない。

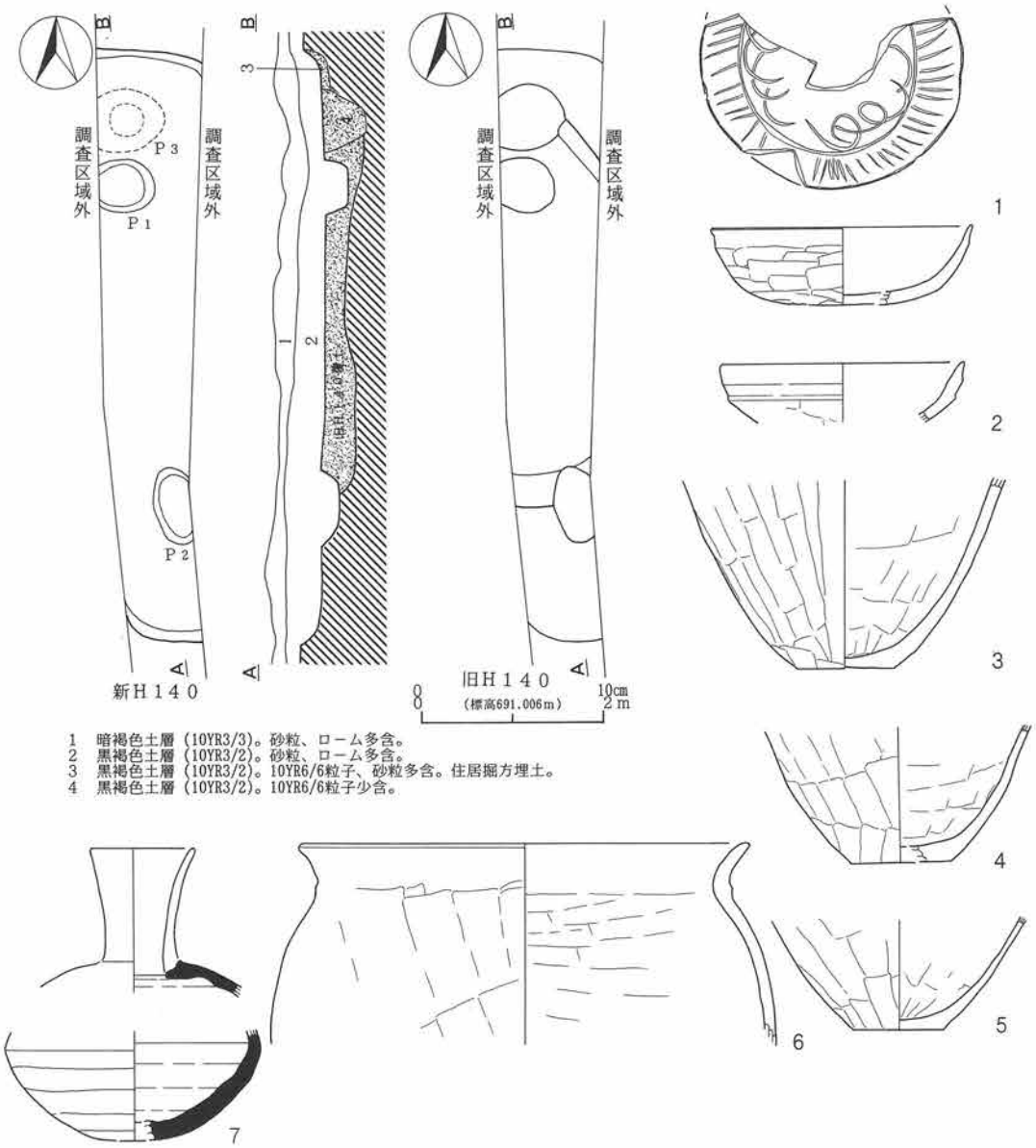
遺物－土師器・須恵器が出土している。土師器には坏（１・２）、甕（３～６）が認められる。坏１は内面に螺旋と放射状の暗文、外面に篦削り調整が施される。２は須恵器坏蓋の模倣を原形とするもので、内面ナデ、外面には篦削り調整が施される。甕３～５は「武蔵甕」の祖系であり、内面ナデ、外面篦削り調整が施される。６も調整は３～５と同様であるが、体部が大きく外湾する器形である。須恵器は７の平瓶が出土している。体部下半に篦削り調整が加えられる球胴のものである。

挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
－1	土師器 坏	14.3 6.0 4.3	内－螺旋・放射暗文。 外－篦削り。	
－2	土師器 坏	13.5 － －	内－ナデ。 外－篦削り。	
－3	土師器 甕	－ 5.3 －	内－ナデ。 外－篦削り。	
－4	土師器 甕	－ 5.4 －	内－ナデ。 外－篦削り	
－5	土師器 甕	－ 4.7 －	内－ナデ。 外－篦削り。	
－6	土師器 甕	24.9 － －	内－ナデ。 外－篦削り。	
－7	須恵器 平瓶	5.6 － －	外－底部から体部下半削り。	

第129表　H140号住居址出土遺物観察表

H141号住居址（第144～146図、図版五十六・百七十七～百七十九）

遺構－ＸⅡけ４グリットで検出された。Ｆ43号掘立柱建物址を切る。隅丸方形の平面プランを呈し、長軸長7.0ｍ×短軸長6.35ｍ×壁残高0.4ｍの規模を有する。Ｎ－５°－Ｗに長軸方位をとる。カマドは北壁の中央部分に構築されており、天井部が崩落している他は比較的良好な状態であった。構造的には石芯を粘土で被覆する「石組粘土カマド」である。Pitは５基検出され、この内のＰ１～Ｐ４の４基が主柱穴である。Ｐ１・Ｐ３・Ｐ４からは直径16㎝の柱が確認されている。



第143図　H140号住居址

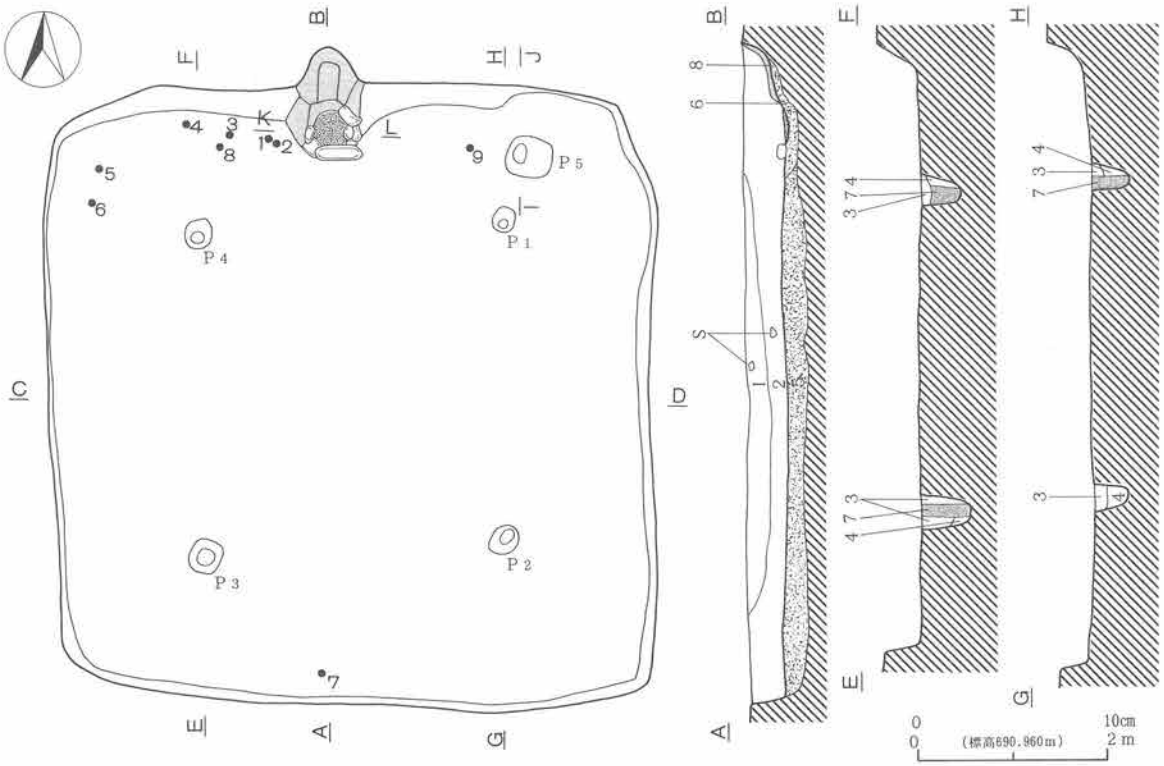
P５については性格は不明である。覆土は自然堆積で、周溝は存在しなかった。

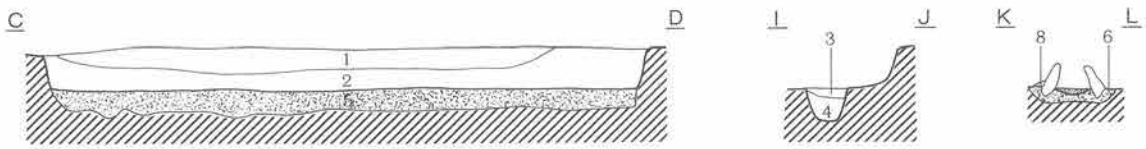
遺物－土師器、須恵器、石器が出土している。土師器には坏（１～12）、高杯（14・15）、甕（16～19）、小型甕（20～23）、壺（24）が認められる。坏１～５は須恵器坏蓋の模倣を原形とするものの中でも、比較的小振りで、橙色の色調を呈し、焼成も陶質で良好なものである。内面ナデ、外面篦削り調整が施される。坏６～12も須恵器坏蓋の模倣を原形とするもので、６・７・９・10

は内面ナデ、外面篦削り調整が施される。８は内面篦磨き、外面篦削り調整が施される。11は内面黒色処理が施され、放射暗文が描かれ、外面には篦削り調整が施される。12は内外面黒色処理で、内面篦磨き、外面篦削り調整が施される。高杯は２点共に内面黒色処理が施され、外面篦削り、脚内篦ナデ調整が施される。短脚である。甕は全て長胴で、体部が弱く外湾する。16は内面刷毛目、他のものはナデ調整が施され、外面は全てのもが篦削りされる。小型甕は20の内面に刷毛目調整が施されている他は内面ナデ、外面篦削り調整が施される。壺24は内外面共に篦削り調整後、篦磨きが施される。須恵器は13の坏の底部が１点出土している。外面底部に篦削り調整が施される。石器は25～30の編物石、31の砥石、32の打製鏃が出土している。

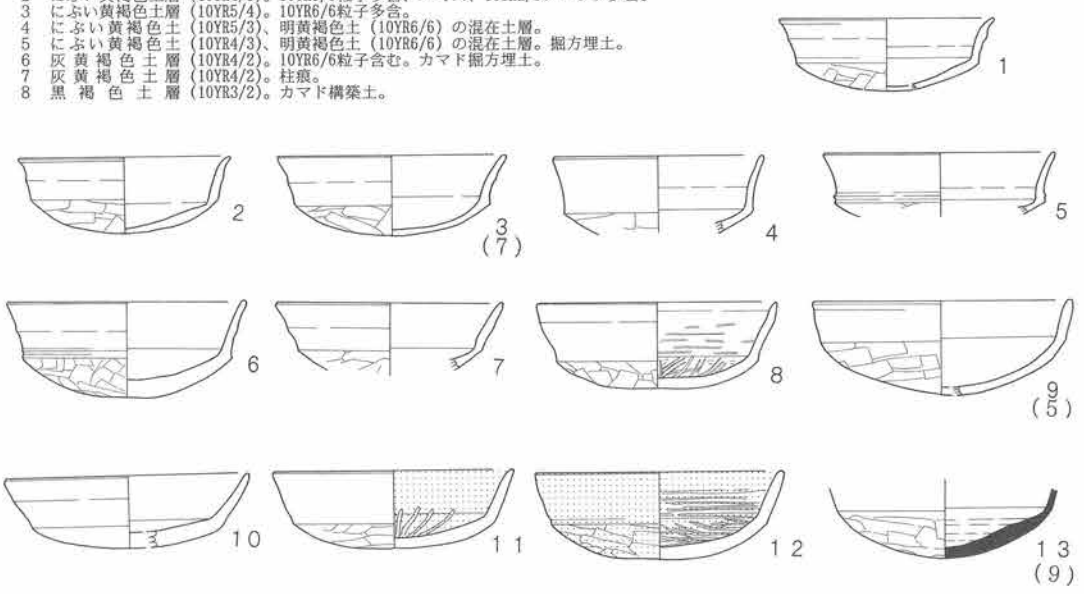
挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
－1	土師器 坏	11.4 － －	内－ナデ。 外－篦削り。	橙色胸質。
－2	土師器 坏	11.2 － 4.0	内－ナデ。 外－篦削り。	橙色胸質。
－3	土師器 坏	12.1 － 4.2	内－ナデ。 外－篦削り。	橙色胸質。 No.7
－4	土師器 坏	11.2 － －	内－ナデ。 外－篦削り。	橙色胸質。
－5	土師器 坏	12.4 － －	内－ナデ。 外－篦削り。	橙色胸質。
－6	土師器 坏	12.7 2.5 5.0	内－ナデ。 外－篦削り。	
－7	土師器 坏	11.9 － －	内－ナデ。 外－篦削り。	
－8	土師器 坏	12.7 3.0 4.6	内－暗文状篦磨き。 外－篦削り。	
－9	土師器 坏	13.7 － －	内－ナデ。 外－篦削り。	No.5
－10	土師器 坏	12.9 － －	内－ナデ。 外－篦削り。	
－11	土師器 坏	12.8 2.0 4.1	内－黒色処理、暗文。 外－篦削り。	
－12	土師器 坏	13.1 3.0 4.7	内－黒色処理、篦磨き。 外－黒色処理、篦削り。	
－13	須恵器 坏	－ － －	底部篦削り。	No.9
－14	土師器 高坏	14.0 8.4 7.5	内－黒色処理、脚内：ナデ。 外－篦削り。	No.2

第130表　H141号住居址出土遺物観察表（１）

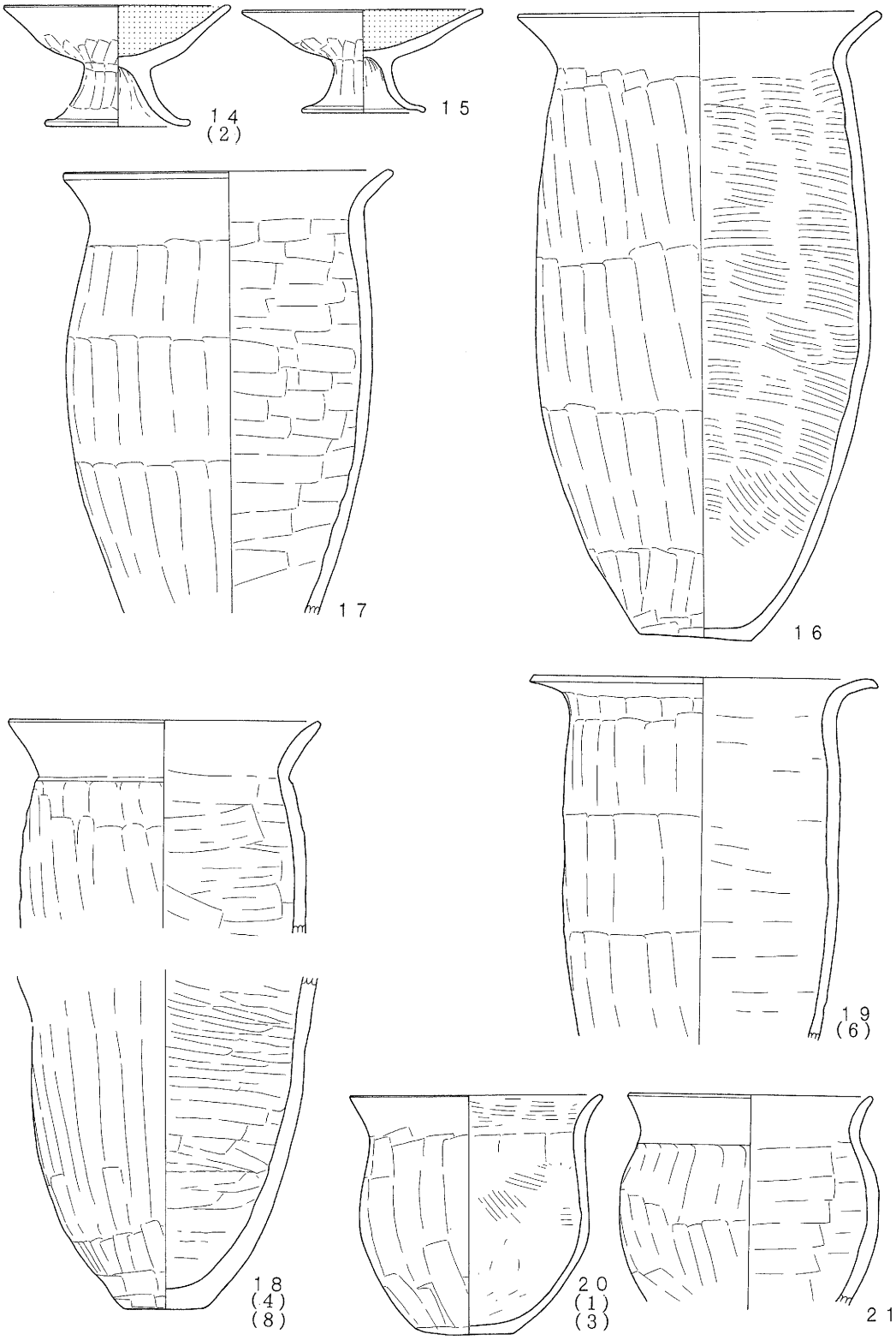




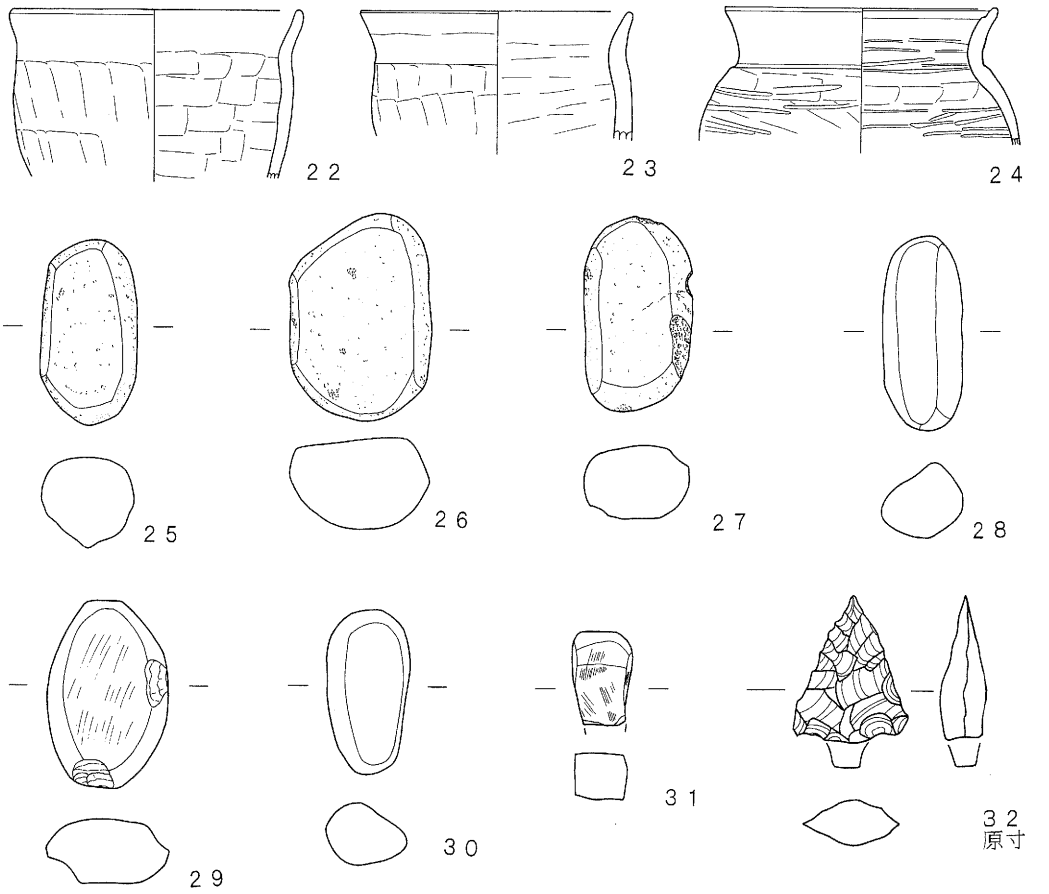
1　にぶい黄褐色土層（10YR4/3）。10YR6/6粒子、パミス少含。
2　にぶい黄褐色土層（10YR4/3）。10YR6/6粒子多含、パミス、10YR2/3ブロック少含。
3　にぶい黄褐色土層（10YR5/4）。10YR6/6粒子多含。
4　にぶい黄褐色土（10YR5/3）、明黄褐色土（10YR6/6）の混在土層。
5　にぶい黄褐色土（10YR4/3）、明黄褐色土（10YR6/6）の混在土層。掘方埋土。
6　灰黄褐色土層（10YR4/2）。10YR6/6粒子含む。カマド掘方埋土。
7　灰黄褐色土層（10YR4/2）。柱痕。
8　黒褐色土層（10YR3/2）。カマド構築土。



第144図　H141号住居址（1）



第145図　H141号住居址（2）



第146図　H141号住居址（3）

挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
−15	土師器 高坏	14.9 7.6 6.4	内−黒色処理、脚内：ナデ。 外−篦削り。	
−16	土師器 甕	22.5 6.7 38.8	内−刷毛目。 外−篦削り。	No.9・13
−17	土師器 甕	20.4 − −	内−ナデ。 外−篦削り。	No.10
−18	土師器 甕	− 4.5 −	内−ナデ。 外−篦削り。	No.4・8
−19	土師器 甕	21.6 − −	内−ナデ。 外−篦削り。	No.6
−20	土師器 小型甕	15.6 5.5 14.8	内−刷毛目。 外−篦削り。	No.1・3

第131表　H141号住居址出土遺物観察表（2）

挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
−21	土師器 小型甕	15.2 — —	内—刷毛目。 外—篦削り。	
−22	土師器 小型甕	15.4 — —	内—ナデ。 外—篦削り。	No.15
−23	土師器 小型甕	14.3 — —	内—ナデ。 外—篦削り。	
−24	土師器 壷	14.4 — —	内—篦削り～篦磨き。 外—篦削り～篦磨き。	
−25	編物石	9.8 5.1 3.8		330 g
−26	編物石	10.9 7.4 4.3		570 g
−27	編物石	10.3 5.6 3.9		320 g
−28	編物石	10.2 4.2 3.8		230 g
−29	編物石	9.8 6.3 3.3		280 g
−30	編物石	8.7 4.2 3.2		180 g
−31	砥石	3.9 3.0 2.4		70 g
−32	打製石鏃	22.5 14.5 0.6		1.3 g

表132表　H141号住居址出土遺物観察表（３）

H143号住居址（第147～149図、図版五十八・百七十九）

遺構—ＸⅠけ４グリットで検出された。H133号住居址に切られる。隅丸方形のプランを呈し、南北・東西長共に7.7ｍ、壁残高0.1ｍ・面積37.17㎡の規模を有する。南北を主軸と考えるならばＮ—25°—Wに主軸方位をとる。カマドは北壁の中央に石芯を粘土で被覆して構築されていた。長径1.3ｍ×短径1.0ｍ×深度0.25ｍの規模を有する。本址は焼失家屋であり、床面上には多くの炭化材が散乱していた。掘方まで含めると12基のPitが検出されており、この内Ｐ１～Ｐ４が主柱穴であり、Ｐ７は出入り口に関連した施設。Ｐ５・Ｐ６は補助的は柱のための柱穴と思われる。また、掘方で検出されたP11・P12は、カマドの側面空間が住居の中で区画されていた事を推測させる。周溝は存在しなかった。

遺物—土師器、須恵器が出土している。土師器には坏（１～３）、鉢（８・９）、小型甕（６・

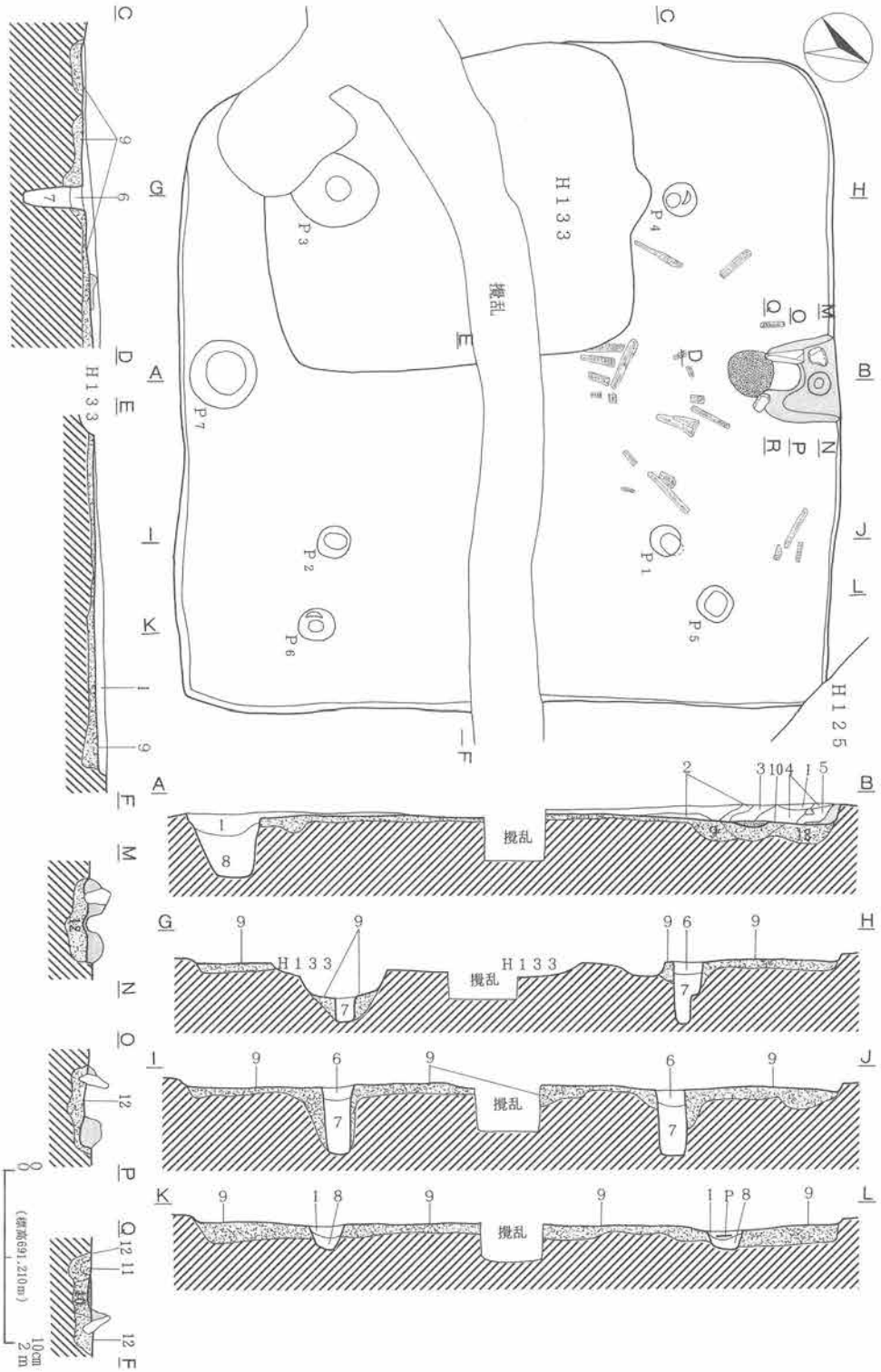
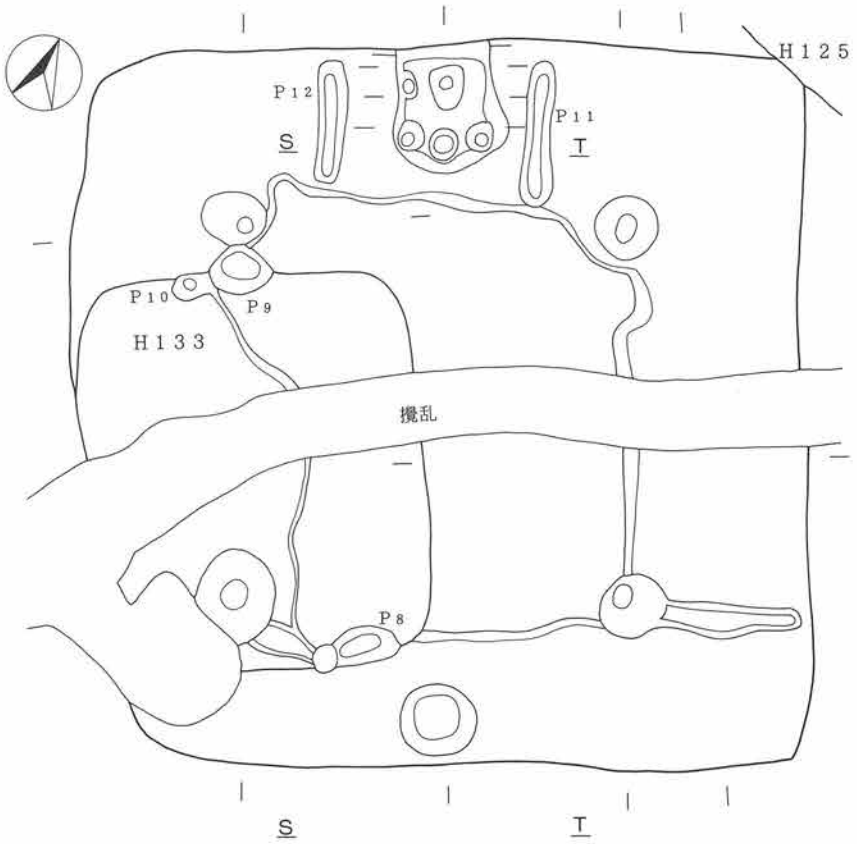
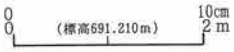
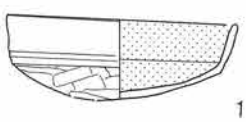


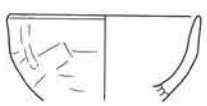
表147図　H143号住居址（1）

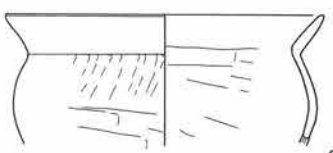


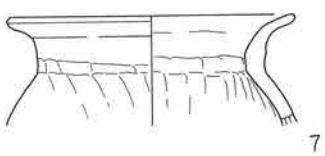


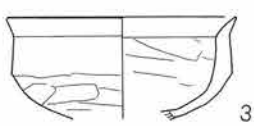
1　暗褐色土層（10YR3/3）。砂粒、白色粘土ブロック多含。
2　黒色土層（10YR2/1）。灰、炭化物を上面に多く含む。
3　にぶい黄褐色土層（10YR4/3）。
4　黒褐色土層（10YR3/2）。焼土、炭化物多含。
5　黒褐色土層（10YR3/2）。ローム、砂粒多含。
6　暗褐色土層（10YR3/3）。ローム、砂粒多含。
7　黒褐色土層（10YR2/2）。砂粒多含。
8　黒褐色土層（10YR3/2）。砂粒多含。
9　暗褐色土層（10YR3/3）。ローム、砂粒多含。住居掘方埋土。
10　暗褐色土層（10YR3/3）。焼土、灰を含む。カマド掘方埋土。
11　黒褐色土層（10YR2/2）。焼土、灰、炭化物多含。カマド掘方埋土。
12　暗褐色土層（10YR3/3）。砂粒多含。カマド掘方埋土。

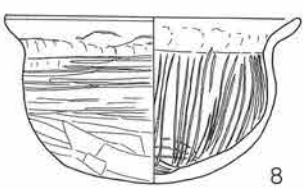


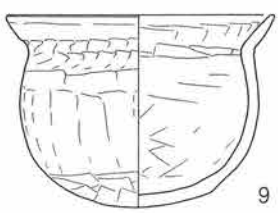












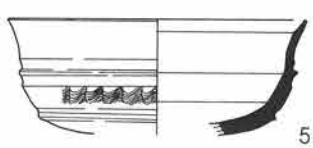


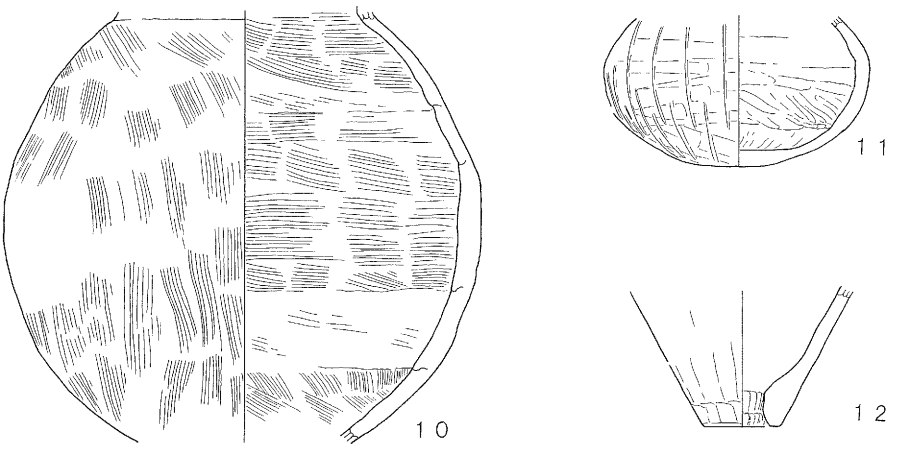
表148図　H143号住居址（2）

挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
－1	土師器 坏	12.2 － 4.3	内－篦磨き～黒色処理。 外－篦削り。	
－2	土師器 坏	10.3 － －	内－ナデ。 外－篦削り。	
－3	土師器 坏	12.2 － －	内－ナデ。 外－篦削り。	
－4	須恵器 坏	11.1 8.5 3.7	底部篦削り。	TK208
－5	須恵器 高坏	15.8 － －	体部：稜線間に櫛描波状文。	TK208
－6	土師器 小型甕	16.9 － －	内－ナデ。 外－篦削り。	
－7	土師器 小型甕	15.3 － －	内－ナデ。 外－篦削り。	
－8	土師器 鉢	15.7 － 8.9	内－篦磨き。 外－篦削り～篦磨き。	
－9	土師器 鉢	14.2 － 10.2	内－ナデ。 外－篦削り。	
－10	土師器 壷	－ － －	内外－刷毛目。	
－11	土師器 壷	－ 3.5 －	内－ナデ。 外－篦削り～篦磨き。	
－12	土師器 甑	－ 4.0 －	内－ナデ。 外－篦削り。	

第133表　H143号住居址出土遺物観察表

7）、壷（10・11）、甑（12）が認められる。坏1須恵器坏蓋の模倣器形で、内面黒色処理、外面には篦削り調整が施される。2は丸底から口縁部が弱く外反して立ち上がる。内面ナデ、外面篦削りが施される。3は半球状の体部から口縁部が短く強く外反する。内面ナデ、外面篦削り調整が施される。鉢は2点共に丸底で、身が深く、短い口縁部が受口気味に立ち上がるもので、8は内面篦磨き、外面篦削り～篦磨き調整、9は内面ナデ、外面篦削り調整が施される。小型甕6は「く」字状の口縁部で、比較的器壁が薄く、内面ナデ、外面篦削り調整が施される。7は「コ」字気味の口縁部で器壁が厚く、内面ナデ、外面篦削り調整が施される。壷10は球形胴で、内外面に刷毛目調整が施される。11は小型の壷で、やや扁平な球形胴を呈し、内面ナデ、外面は篦削り調整後篦磨き調整が施される。甑12は単孔で内面ナデ、外面には篦削り調整が施される。須恵器には坏（4）、高杯（5）が認められる。坏は、たちあがり、受部の端部は丸く、底部には篦削

り調整が施される。高杯は体部に上下を稜線で区画した櫛描波状文が施文される文様帯を持つ。口縁端部は平らに仕上げている。２点共に田辺陶邑編年のＴＫ208号窯式に比定されて良いように思われる。



第149図　Ｈ143号住居址（３）

Ｈ144号住居址（第150～152図、図版五十七・百八十・百八十一）

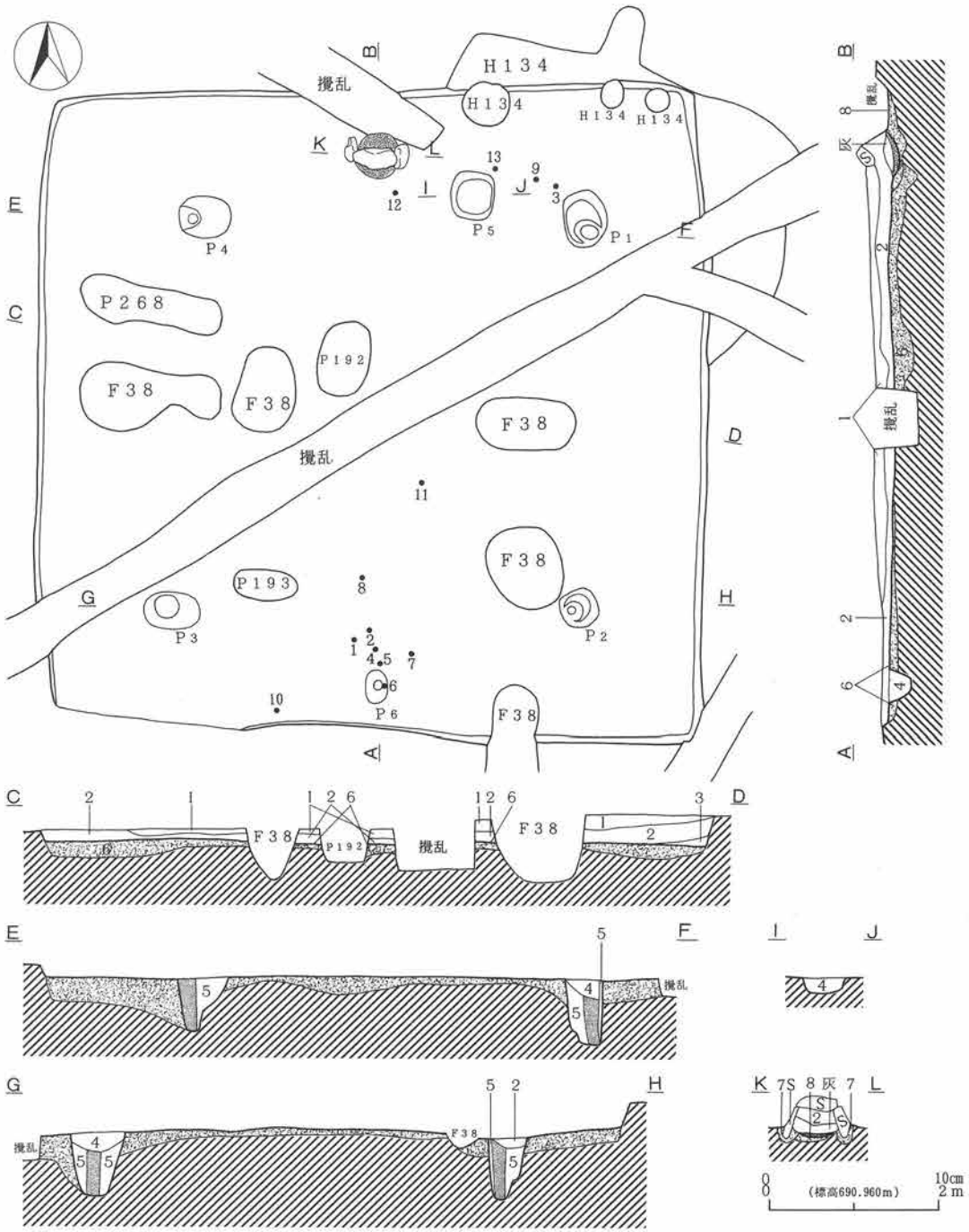
遺構－ＸⅡあ２グリットで検出された。Ｈ134号住居址、Ｆ38号掘立柱建物址に切られる。隅丸方形の平面プランを呈し、南北長7.9ｍ×東西長7.7ｍ×壁残高0.35ｍ・面積51.99㎡の規模を有する。カマドは北壁の中央部分に構築されるが、撹乱により焚き口部分を除き消滅していた。Pitは６基検出され、Ｐ１～Ｐ４の４基が主柱穴であった。４基全てで直径15～18㎝の柱が確認された。Ｐ６は出入り口に関連する施設の可能性が高いが、Ｐ５については不明である。覆土は自然堆積で周溝は有さない。

遺物－土師器、弥生土器、石器が出土している。土師器には坏（１～10）、鉢（11・12）、高杯（13・14）、甕（15～17）、甑（21）が認められる。坏１は須恵器坏身の模倣を原形とするもので、内面ナデ、外面篦削り調整が施される。２・３は須恵器坏蓋の模倣を原形とするもので、２は内面篦磨き、外面篦削り調整が施される。３は内外面篦磨き調整で、内面黒色処理が施される。４～８は丸底から口縁部が大きく開くもので、４が内面篦磨き、外面篦削りの他は、内面篦磨き～黒色処理、外面篦削り調整が施される。９・10は半球状を呈するもので、身が深く、内面篦磨き～黒色処理、外面篦削り～篦磨き調整が施される。鉢11は器面が剥落しており調整は識別不可能である。12は「有段口縁坏」を大型にしたもので内面篦磨き、外面篦削り調整が施される。高杯13は体部に稜を有し、口縁部が大きく開くもので、内面黒色処理、外面には篦削り調整が施され

る。14は脚部の破片で、内面篦ナデ、外面篦削り調整が施される。甕は全て長胴で、15は器壁が厚く、内面ナデ、外面篦削り調整が施される。16は頸部の括れが弱く、内面ナデ・篦磨き、外面篦削り調整が施される。甑の可能性を有する。17は底部が突出するもので、内面ナデ、外面篦削り調整が施される。甑は単孔の小型のもので、内面ナデ、外面篦削り調整が施される。弥生土器は全て混入品である。甕（18～20）、鉢（22）が出土している。18は口唇部～口縁部に縄文を施し、口縁部には篦状工具による１本の波状文を巡らし、頸部にも波状文が施される。19は口唇部に縄文、他は櫛歯状工具による波状文が施される。20は口唇部、体部に縄文が施される。22の鉢は内外面が赤彩される。石器は磨製石鏃の未製品（23）、編物石（24～27）が出土している。

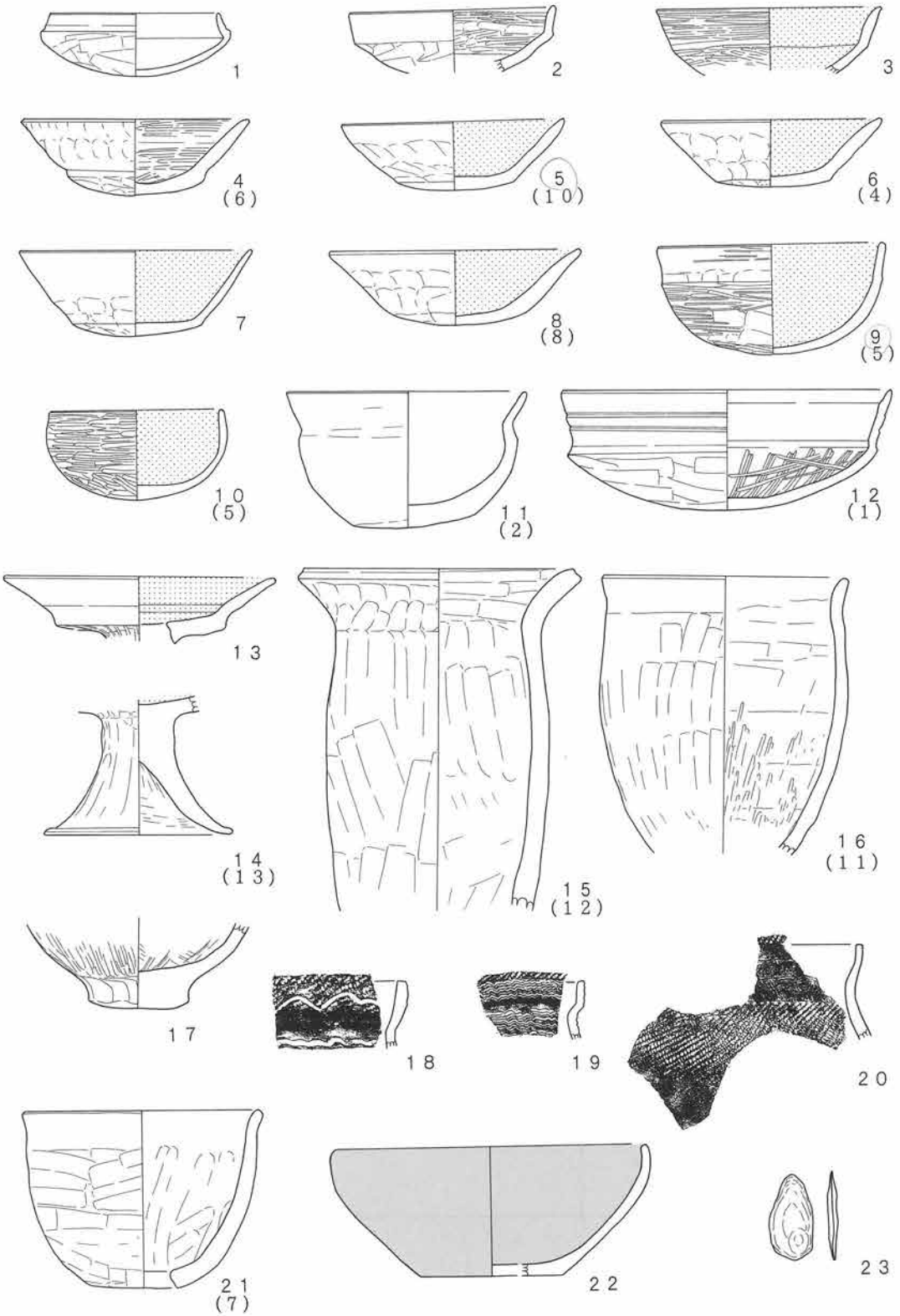
挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
－1	土師器 坏	10.6 2.0 4.0	内－ナデ。 外－篦削り。	
－2	土師器 坏	13.1 － －	内－篦磨き。 外－篦削り。	
－3	土師器 坏	14.3 － －	内－篦磨き～黒色処理。 外－篦削り。	
－4	土師器 坏	14.4 － 4.8	内－篦磨き。 外－篦削り。	No.6
－5	土師器 坏	14.1 － 4.9	内－篦磨き～黒色処理。 外－篦削り。	No.10
－6	土師器 坏	14.0 4.0 4.3	内－篦磨き～黒色処理。 外－篦削り。	No.4
－7	土師器 坏	14.7 － 5.5	内－篦磨き～黒色処理。 外－篦削り。	
－8	土師器 坏	15.9 2.0 4.8	内－篦磨き～黒色処理。 外－篦削り～篦磨き。	No.8
－9	土師器 坏	14.4 － 7.0	内－篦磨き～黒色処理。 外－篦削り～篦磨き。	No.5
－10	土師器 坏	11.0 － 5.7	内－篦磨き～黒色処理。 外－篦磨き。	No.5
－11	土師器 鉢	15.2 4.0 8.6	器面剥落。	No.2
－12	土師器 鉢	21.8 － 7.6	内－篦磨き。 外－篦削り。	No.1 有段口縁。
－13	土師器 高坏	17.2 － －	内－黒色処理。 外－篦削り。	
－14	土師器 高坏	－ 11.9 －	内－篦ナデ。 外－篦削り。	No.13

第134表　H144号住居址出土遺物観察表（１）

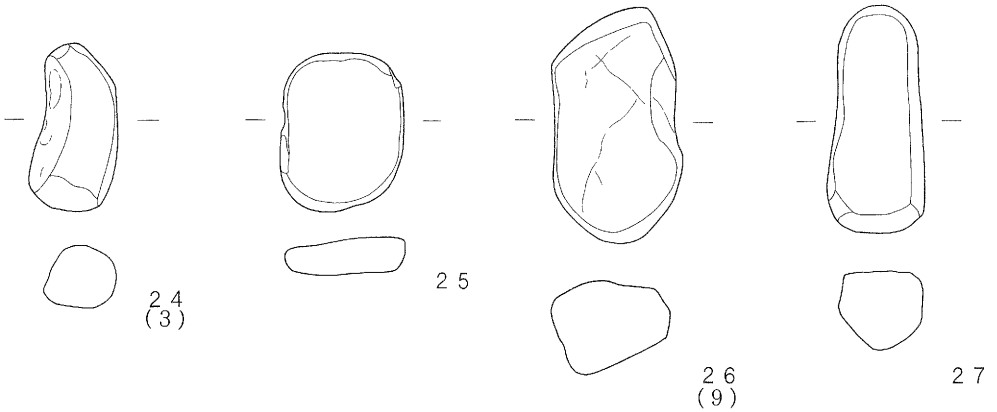


1　にぶい黄褐色土層（10YR4/3）。φ2cm以下パミス、石粒、10YR6/6粒子多含。
2　黒　褐　色　土　層（10YR3/2）。φ5mm大パミス、石粒少含。
3　灰 黄 褐 色 土 層（10YR4/2）。地山砂粒の2次堆積。
4　にぶい黄褐色土層（10YR4/3）。10YR6/6粒子少含。
5　黒　褐　色　土　層（10YR3/2）。φ2cm以下パミス、10YR6/6粒子多含。
6　黒　褐　色　土　層（10YR3/2）。10YR6/6粒子多含。住居掘方埋土。
7　にぶい黄褐色土層（10YR5/3）。10YR6/6粒子含む。カマド掘方埋土。
8　にぶい黄褐色土層（10YR5/3）。10YR6/6粒子多含。カマド掘方埋土。
　黒　褐　色　土　層（10YR3/2）。柱痕。

第150図　H144号住居址（1）



第151図　H144号住居址（2）



第152図　H144号住居址（3）

挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
−15	土師器 甕	17.9 − −	内−ナデ。 外−篦削り。	No.12
−16	土師器 甕	15.6 − −	内−ナデ。 外−篦削り。	No.11
−17	土師器 甕	− 6.3 −	内−ナデ。 外−篦削り。	
−18	弥生土器 甕	− − −	内−篦磨き。 外−口唇部：縄文、口縁部：縄文・篦描波状文、頸部：波状文。	
−19	弥生土器 甕	− − −	内−篦磨き。 外−口唇部：縄文、口縁部～体部：櫛描き波状文　。	
−20	弥生土器 甕	− − −	内−篦磨き。 外−口唇部・体部：縄文。	
−21	土師器 甑	15.2 − 11.2	内−ナデ。 外−篦削り。	No.7
−22	弥生土器 鉢	20.4 − −	内外−赤彩。	
−23	磨製石鏃	5.5 2.3 0.6		9.9 g 未製品。
−24	編物石	8.9 4.5 3.3		200.5 g No.3
−25	編物石	8.4 6.5 2.2		145.9 g
−26	編物石	12.4 6.8 4.8		530 g No.9
−27	編物石	12.0 5.1 4.1		452 g

第135表　H144号出土遺物観察表（2）

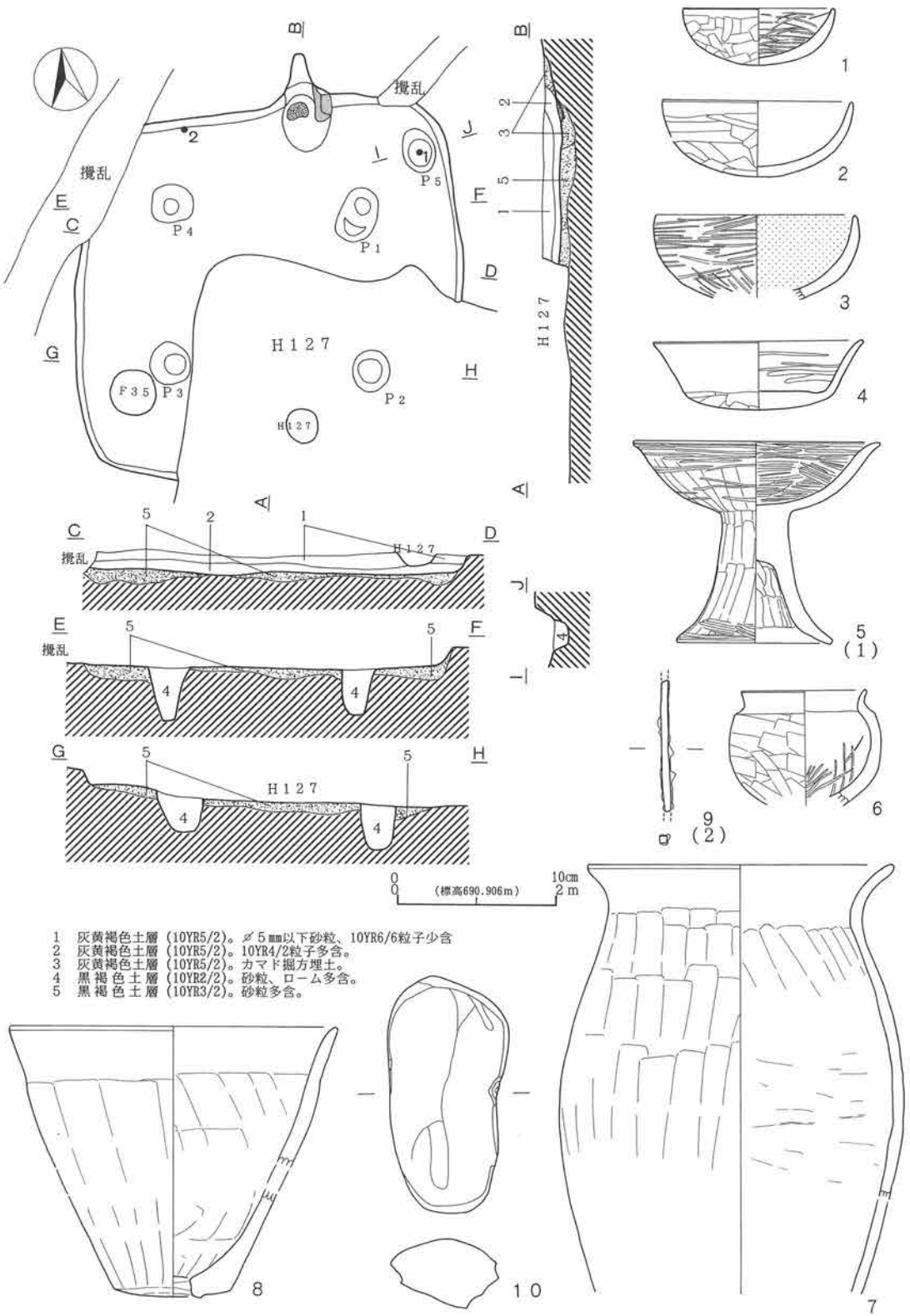
H148号住居址（第153図、図版五十九・百八十三）

遺構－ⅩⅡく2グリットで検出された。H127号住居址に切られ、H173号住居址を切る。隅丸方形の平面プランを呈する。南北長4.6ｍ×東西長4.5ｍ×壁残高0.22ｍの規模を呈する。N－5°－Eに長軸方位をとる。カマドは北壁の中央部分に構築されており、東袖の一部分の構築粘土と火床が残存していた。5基検出されたPitの内Ｐ1～Ｐ4の4基が主柱穴である。覆土は自然堆積で周溝は有さない。

遺物－土師器、鉄器、石器が出土している。土師器には坏（1～4）、高杯（5）、壺（6）、甕（7）、甑（8）が存在する。坏1～3は半球状を呈するもので、1は内面篦磨き、外面篦削り、2は内面ナデ、外面篦削り、3は内面黒色処理、外面刷毛目調整が施される。4は須恵器坏蓋の模倣を原形とするもので、内面篦磨き、外面篦削り調整が施される。高杯は長脚で、脚内篦削り、内面篦磨き、外面篦削り～篦磨き調整が施される。壺6は小型広口のもので、内面篦ナデ・篦磨き、外面篦削り調整が施される。甕7は最大径を体部半ばに有する長胴のもので、内面ナデ、外面篦削り調整が施される。甑8は単孔で内面ナデ、外面篦削り調整が施される。鉄器は紡錘車の軸が、石器は10の編物石が出土している。

挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
－1	土師器 坏	9.6 － 3.6	内－篦磨き。 外－篦削り。	
－2	土師器 坏	12.1 － 4.8	内－ナデ。 外－篦削り。	
－3	土師器 坏	12.9 － －	内－黒色処理。 外－刷毛目。	
－4	土師器 坏	13.3 － 4.4	内－篦磨き。 外－篦削り。	
－5	土師器 高坏	15.7 9.9 12.9	内－篦磨き～黒色処理。 外－篦削り。	No.1
－6	土師器 壷	8.0 － －	内－篦磨き、脚内：篦削り。 外－篦削り。	
－7	土師器 甕	19.4 － －	内－ナデ。 外－篦削り。	
－8	土師器 甑	20.9 7.3 17.2	内－ナデ。 外－篦削り。	
－9	紡錘車	8.4 0.6 0.5		No.2 8.4ｇ
－10	編物石	15.0 7.8 4.2		670ｇ

第136表　H148号住居址出土遺物観察表



第153図　H148号住居址

H150号住居址（第154・155図、図版六十一・百八十四・百八十五）

遺構－ⅩⅡく3グリットで検出された。H131号住居址、F30号・F31号掘立柱建物址に切られる。第2次調査におけるH15号住居は本址と同一の住居である。南北長6.6m、壁残高0.15mの規模を有する。カマドは東壁中央南よりに検出され、袖基部を地山削り出しで構築している。南袖と火床が残存していた。Pitは5基検出されこの内のP3とP5の2基は主柱穴である。覆土は自然堆積で周溝は存在しなかった。

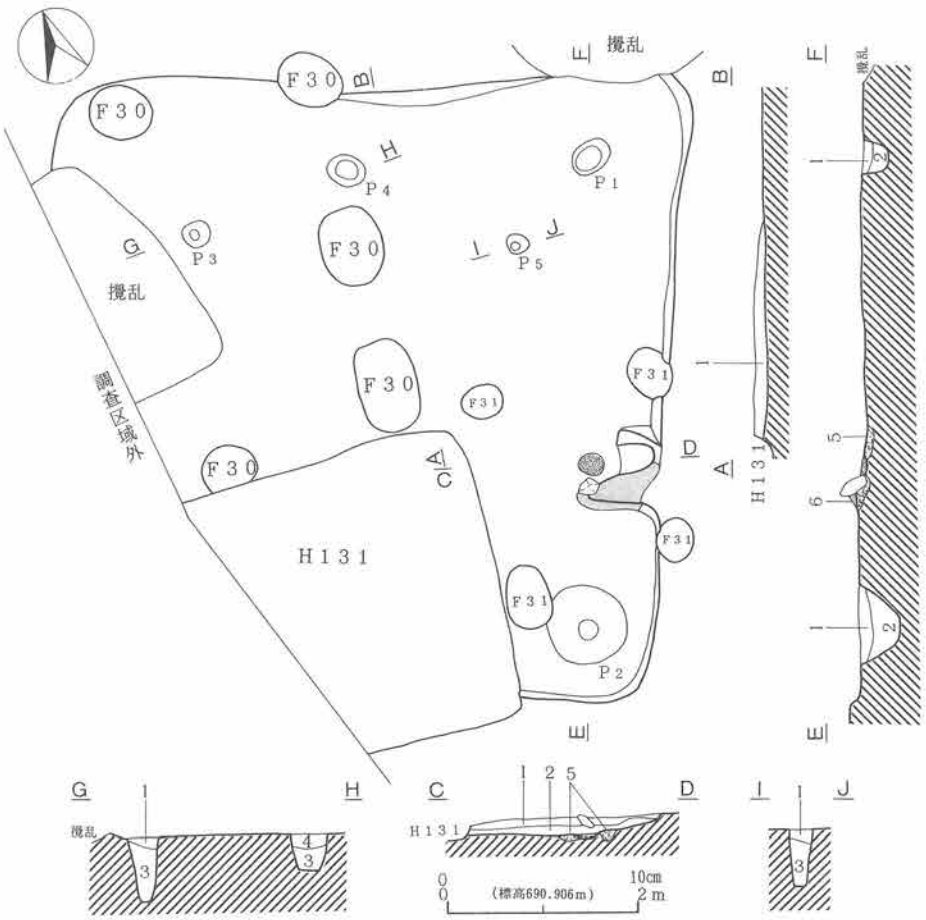
遺物－土師器坏（1～3）、鉢（4・5）、甑（6）、壺（7）、甕（8）が出土している。坏1は坏蓋の模倣を原形とするもので、内面黒色処理、外面篦削り調整が施される。2は半球状を呈するもので、内外面篦磨き調整が施される。3は須恵器坏身の模倣を原形とするもので、内面篦磨き、外面篦削り調整が施される。鉢4は丸底で口縁部が短く強く外反するもので、内面ナデ、外面篦削り調整が施される。5は内面黒色処理で、外面には篦削り調整が施される。甑は大型のもので、底部全体が開口する。内面ナデ、外面篦削り調整が施される。壺7は球形胴で口縁部は「く」字状に外反する。内面ナデ、外面篦削り調整が施される。甕8は体部半ばに最大径を有する長胴のもので、内面ナデ、外面篦削り調整が施される。

挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
－1	土師器 坏	10.3 － 4.3	内－篦磨き～黒色処理。 外－篦削り。	
－2	土師器 坏	14.0 － 4.5	内外－篦磨き。	
－3	土師器 坏	13.9 － －	内－篦磨き。 外－篦削り。	
－4	土師器 鉢	12.2 － －	内－ナデ。 外－篦削り。	
－5	土師器 鉢	16.7 － －	内－黒色処理。 外－篦削り。	
－6	土師器 甑	－ 7.4 －	内－ナデ。 外－篦削り。	
－7	土師器 壺	19.3 － －	内－ナデ。 外－篦削り。	
－8	土師器 甕	16.2 5.4 29.3	内－ナデ。 外－篦削り。	

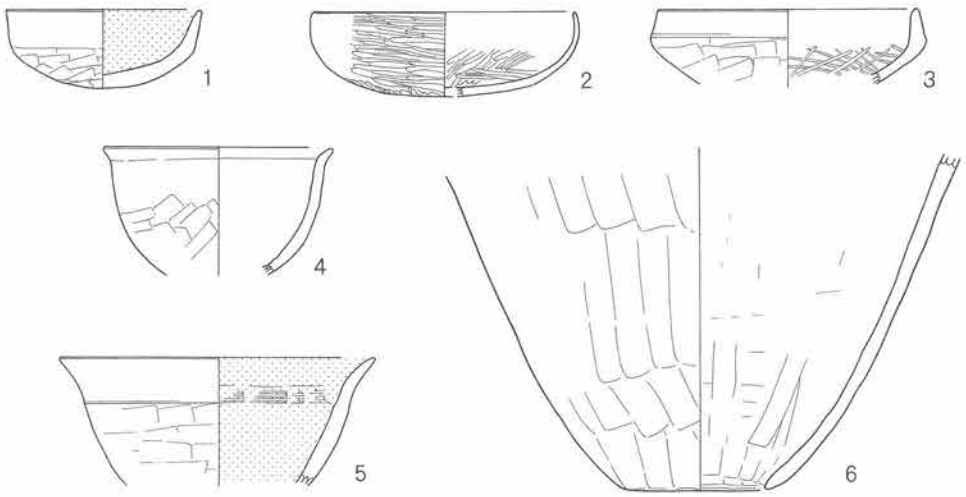
第137図　H150号住居址出土遺物観察表

H152号住居址（第156図、図版六十一・百八十五）

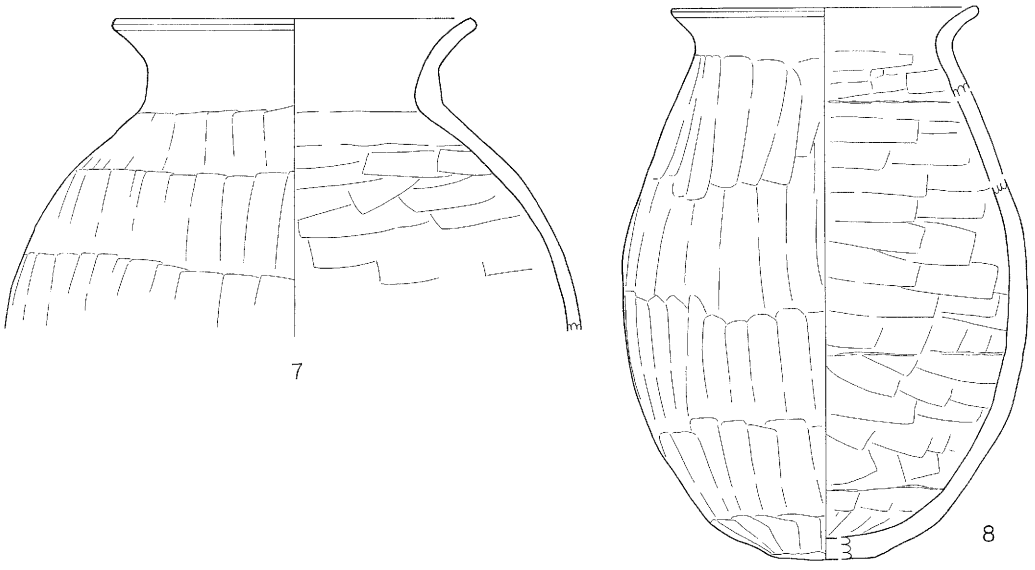
遺構－ⅩⅡけ4グリットで検出された。H185号住居址を切る。隅丸長方形の平面プランを呈



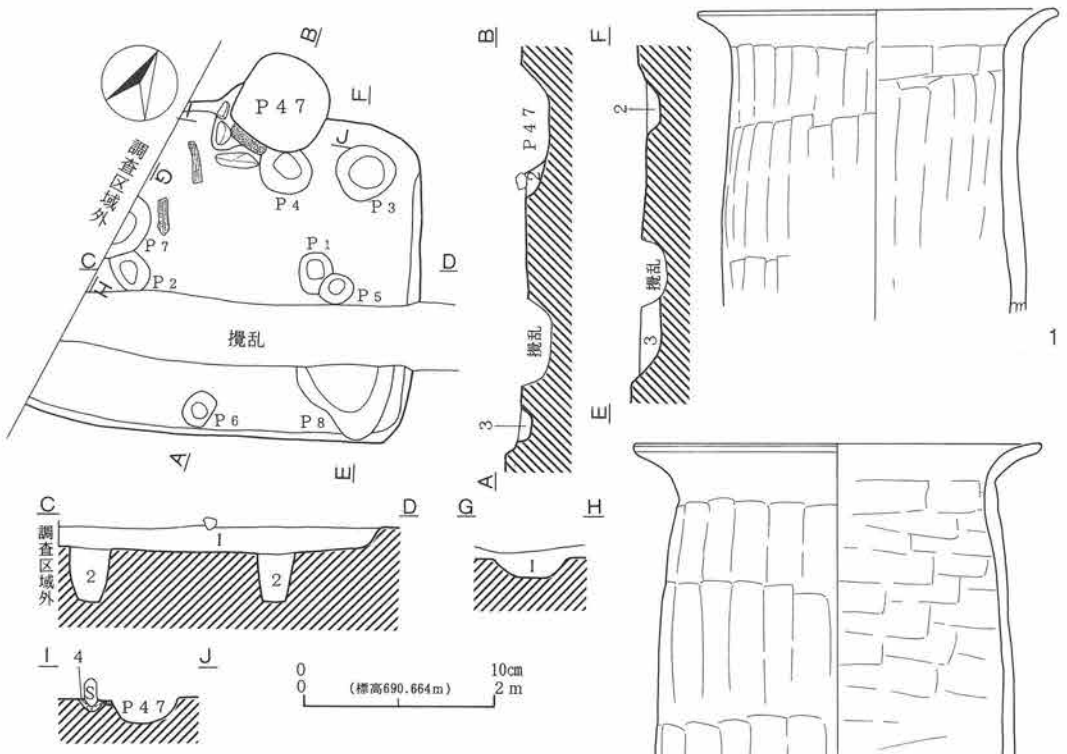
1　にぶい黄褐色土層（10YR4/3）。10YR6/6粒子、∅5㎜大パミス多含。
2　暗　褐　色　土　層（10YR3/3）。
3　褐　色　土　層（10YR4/4）。
4　黒　褐　色　土　層（10YR3/2）。灰を多含。
5　灰　黄　褐　色　土　層（10YR4/2）。石粒多含。カマド掘方埋土。
6　褐　色　土　層（10YR6/1）。カマド構築粘土。



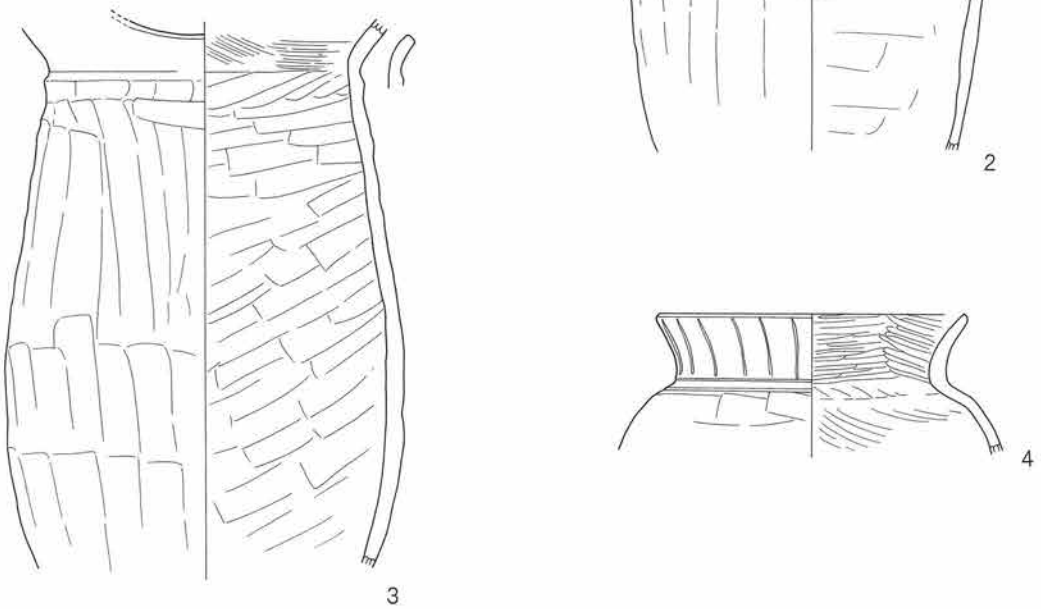
第154図　H150号住居址



第155図　H150号住居址（2）



1　にぶい黄褐色土層（10YR4/3）。10YR6/6粒子、石粒、パミス、炭化物を含む。
2　にぶい黄褐色土層（10YR4/3）。ローム多含。
3　にぶい黄褐色土層（10YR6/3）。10YR6/6粒子少含。
4　にぶい黄褐色土層（10YR5/3）。カマド掘方埋土。



第156図　H152号住居址

す。南北長3.42ｍ、壁残高0.3ｍの規模を有する。カマドは北壁の中央部分に構築されているが、P47により大半が破壊されている。構造的には石芯を粘土で被覆した「石組粘土カマド」である。8基検出されたPitの内、Ｐ１・Ｐ２の２基が主柱穴と考えられる。本址は床面及び覆土中に炭化物、炭化材が包含されており焼失家屋と考えられる。

遺物－土師器甕（１～３）、壺（４）が出土している。甕は全て長胴で１・２は内面ナデ、外面篦削り調整が加えられる。最大径は口縁部に有する。３は口縁部が平縁ではなく、波状を呈する。内面刷毛目・ナデ、外面篦削り調整が施される。最大径は体部に有する。壺４は内外面の口縁部に篦磨き、他の内面はナデ、外面には篦削り調整が施される。

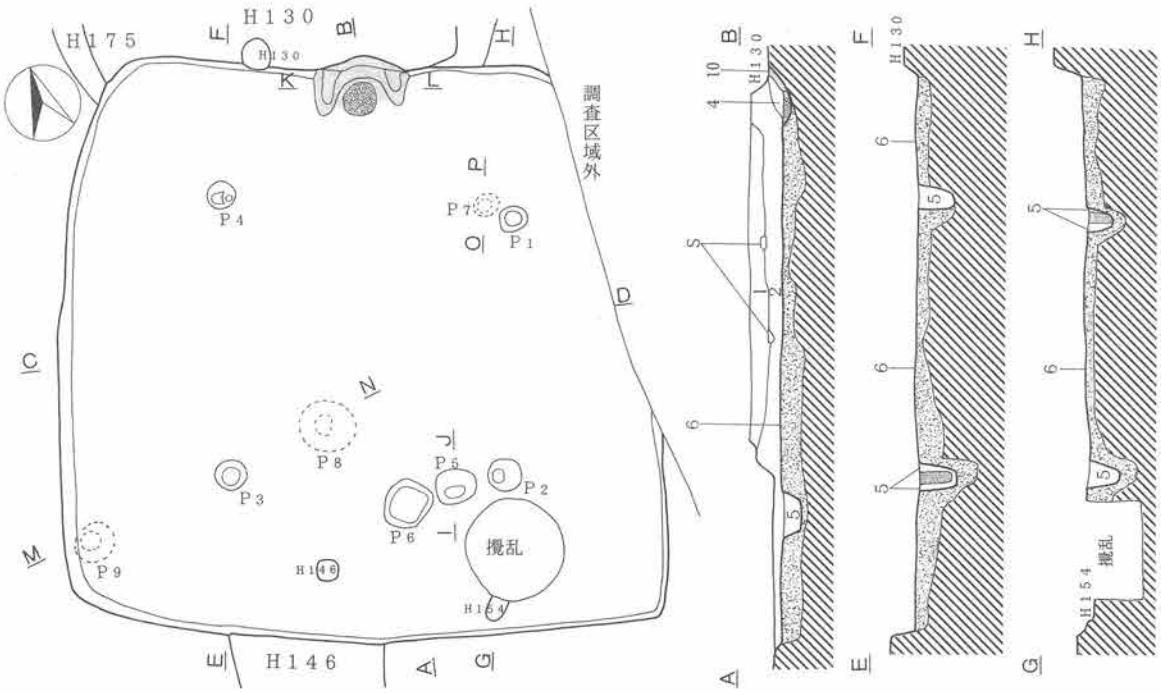
挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
－1	土師器 甕	19.0 － －	内－ナデ。 外－篦削り。	
－2	土師器 甕	21.5 － －	内－ナデ。 外－篦削り。	
－3	土師器 甕	－ － －	内－刷毛目・ナデ。 外－篦削り。	
－4	土師器 壷	16.5 － －	内－篦磨き・ナデ。 外－篦磨き・篦削り。	

第138表　H152号住居址出土遺物観察表

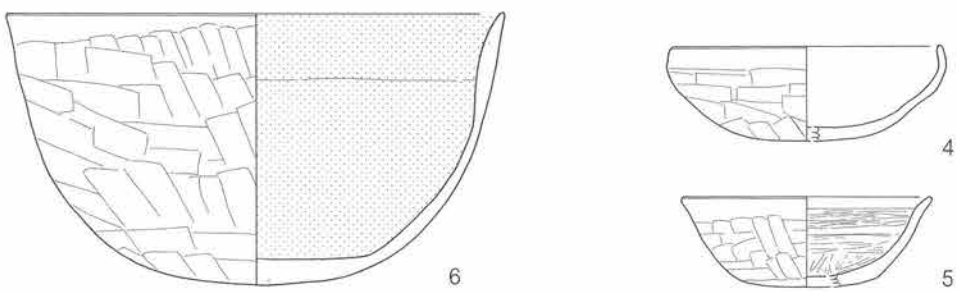
H158号住居址（第157・158図、図版六十四・百八十八）

遺構－ＸＩき９グリットで検出された。H130号・H146号・H154号・H175号住居址に切られ、H172号・H173号住居址を切る。隅丸方形の平面プランを呈し、南北長6.37ｍ×東西長6.2ｍ×壁残高.37ｍの規模を有する。Ｎ－17°－Ｅに長軸方位をとる。北壁中央部分にカマドは粘土で構築されている。９基検出されたPitの内、Ｐ１～Ｐ４の４基が主柱穴である。Ｐ１・Ｐ３において直径15㎝前後の柱が確認された。覆土は自然堆積で、周溝は有さない。

遺物－土師器と混入品の打製石鏃が出土している。土師器には坏（１～５）、鉢（６）、高杯（７）、台付鉢（８）、甕（９）が認められる。坏１・２は須恵器坏蓋の模倣を原形とするもので、内面ナデ、外面篦削り調整が施される。２は有段口縁坏である。３・５は半球状を呈し、口縁部が内傾する。５は内面篦磨き・ナデ、外面篦削り、４は内面ナデ、外面篦削り調整が施される。５は比較的平坦な底部から開いた口縁部が端部で外反するもので、内面篦磨き、外面篦削り調整が施される。鉢６は深い半球状で、口縁部が内側に肥厚する。内面黒色処理、外面には篦削り調整が施される。高杯７は脚部片で、内面篦ナデ・篦削り、外面篦削り～篦磨きで、内面黒色処理が施される。台付鉢８は脚内篦ナデ、内面篦磨き、外面篦削り調整が施される。甕９は内面刷毛



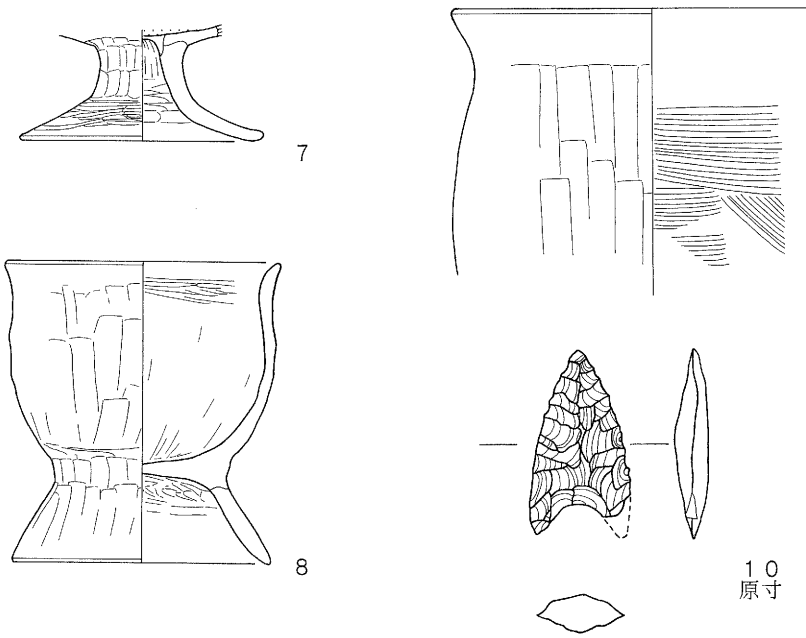
1　にぶい黄褐色土層（10YR6/4）。10YR6/6粒子、焼土、炭化物を含む。
2　黒　褐　色　土　層（10YR3/2）。砂粒、10YR6/6粒子少含。
3　黄　橙　色　土　層（10YR8/6）。ロームブロック。
4　黒　褐　色　土　層（10YR3/2）10YR6/6粒子、砂粒、焼土を含む。
5　にぶい黄褐色土（10YR5/3）、明黄褐色土（10YR6/6）の混在土層。
6　にぶい黄褐色土層（10YR5/3）。10YR6/6粒子、砂粒多含。住居掘方埋土。
7　にぶい黄褐色土層（10YR4/3）。10YR6/6粒子少含。
8　褐　色　土　層（10YR4/4）。
9　灰　黄　褐　色　土　層（10YR4/2）。カマド構築土。
10　灰　黄　褐　色　土　層（10YR4/2）。10YR8/3粒子を含む。カマド構築土。
　　灰　黄　褐　色　土　層（10YR4/2）。柱痕。



第157図　H158号住居址（1）

挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
－1	土師器 坏	11.8 － －	内－ナデ。 外－篦削り。	橙色陶質。
－2	土師器 坏	－ － －	内－ナデ。 外－篦削り。	有段口縁坏。
－3	土師器 坏	10.9 － 3.7	内－篦磨き・ナデ。 外－篦削り。	
－4	土師器 坏	14.5 － 5.1	内－ナデ。 外－篦削り。	橙色陶質。
－5	土師器 坏	13.2 － 4.8	内－篦磨き。 外－篦削り。	
－6	土師器 鉢	26.4 4.0 14.4	内－黒色処理。 外－篦削り。	
－7	土師器 高坏	－ 12.9 －	内－黒色処理、脚内：篦ナデ。 外－篦削り・篦磨き。	
－8	土師器 台付鉢	14.7 13.7 16.0	内－脚内：篦ナデ、篦磨き。 外－篦削り。	
－9	土師器 甕	21.2 － －	内－刷毛目。 外－篦削り。	
－10	打製石鏃	2.5 1.3 1.0		1.0ｇ

第139表　H158号住居址出土遺物観察表



第158図　H158号住居址（2）

目、外面篦削り調整が施される長胴のものである。

H159号住居址（第255図、図版六十四・百八十八）

遺構－ＸＩえ10グリットで検出された。H142号・H145号住居址に切られる。南北長5.5ｍ、壁残高0.25ｍの規模を有する。南北を主軸とするならば、Ｎ－5°－Wに主軸方位をとる。カマドは北壁の中央部と思われる位置に粘土で構築されていた。６基検出されたPitの内Ｐ１～Ｐ４の４基は主柱穴である。柱は確認されなかった。覆土は自然堆積で、周溝はは有さない。

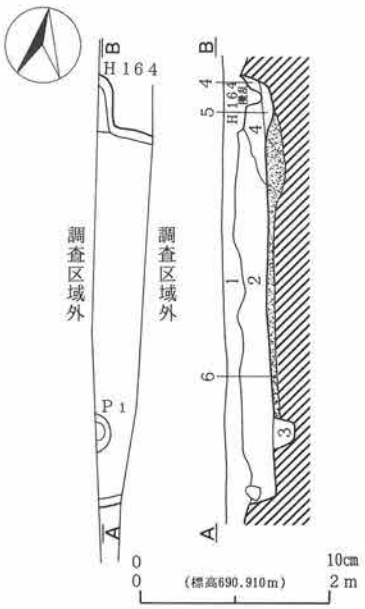
遺物－土師器坏（１～５）、鉢（６）、甕（７）が出土している。坏１は平坦な底部を有し、内外面に篦磨き調整が施される。２～５は須恵器坏蓋の模倣を原形とするもので、２は内面ナデ、外面篦削り、３・４は内面黒色処理、外面篦削り、５は内面篦磨き、外面篦削り調整が施される。４・５は有段口縁坏である。鉢は口縁部が内傾しながら端部で短く外反する。内面篦磨き、外面篦削り～篦磨き調整が施される。甕は長胴で最大径を口縁部に有する。内面ナデ、外面篦削り調整が施される。

挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
－1	土師器 坏	12.4 5.0 3.8	内外－篦磨き・赤彩。	
－2	土師器 坏	12.6 － 4.3	内－ナデ。 外－篦削り。	橙色陶質。
－3	土師器 坏	13.2 － 3.8	内－黒色処理。 外－篦削り。	No.1
－4	土師器 坏	12.2 － 4.2	内－ナデ。 外－篦削り。	有段口縁坏。
－5	土師器 坏	15.1 － －	内－篦磨き。 外－篦削り。	有段口縁坏。
－6	土師器 鉢	15.6 － －	内－篦磨き。 外－篦削り～篦磨き。	No.2
－7	土師器 甕	22.8 5.1 39.7	内－ナデ。 外－篦削り。	No.3

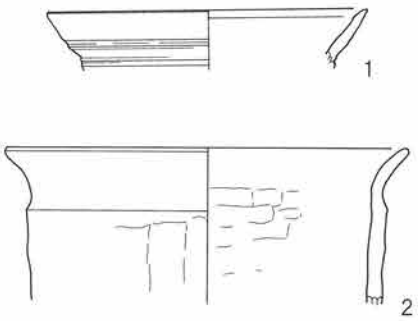
第140表　H159号住居址出土遺物観察表

挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
－1	土師器 坏	16.8 － －	内外－ナデ。	有段口縁坏。
－2	土師器 甕	21.3 － －	内－ナデ。 外－篦削り。	

第141表　H161号住居址出土遺物観察表



1　客　　土。
2　黒褐色土層（10YR3/2）。石粒、砂粒多含。
3　黒褐色土層（10YR2/2）。砂粒多含。
4　黒褐色土層（10YR3/1）。焼土ブロック多含。
5　褐灰色土層（10YR4/1）。炭化物多含。
6　暗褐色土層（10YR3/3）。砂粒多含。住居掘方埋土。



第159図　H161号住居址

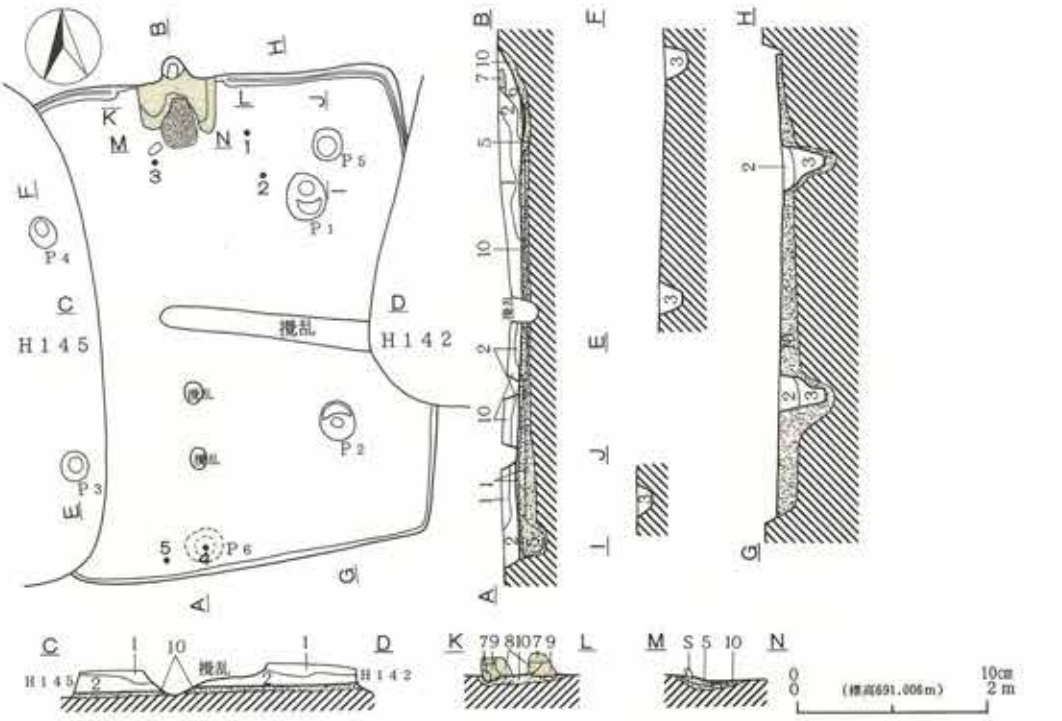
H161号住居址（第159図、図版百八十九）

遺構－ⅩⅡく6グリットで検出された。H164号住居址を切る。調査区域外に延びるため形状・規模等は不明である。壁残高0.35ｍを測る。調査範囲内にはカマドは存在しなかった。1基検出されたPitの性格は不明である。

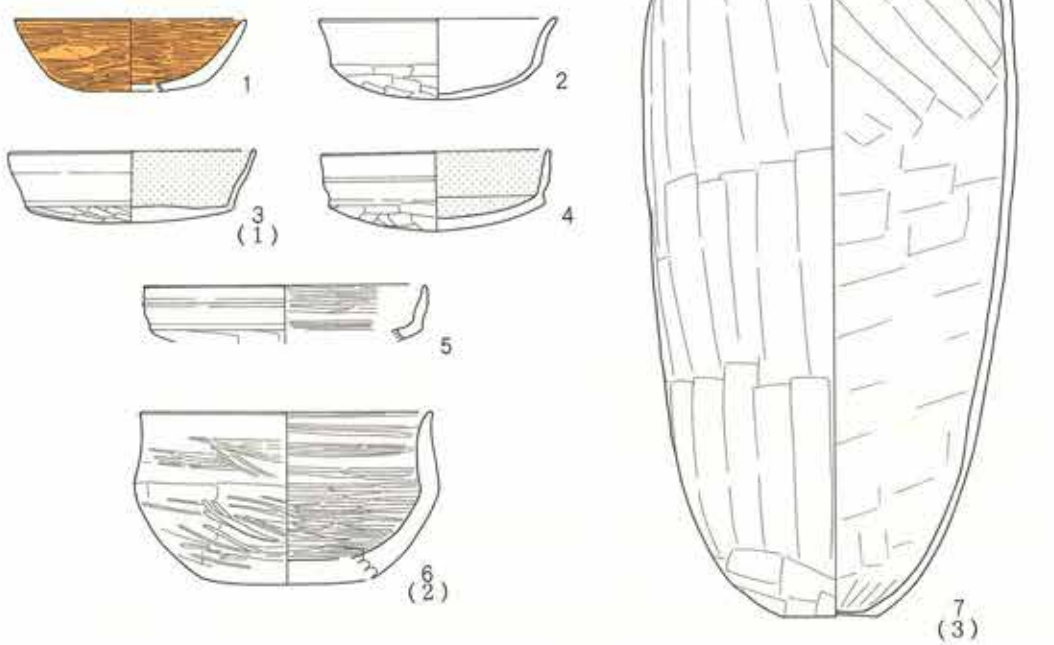
遺物－土師器有段口縁坏の口縁部片（1）、内面ナデ、外面篦削り調整の施される土師器長胴甕（2）が出土している。

H162号住居址（第161図、図版六十五・百八十九）

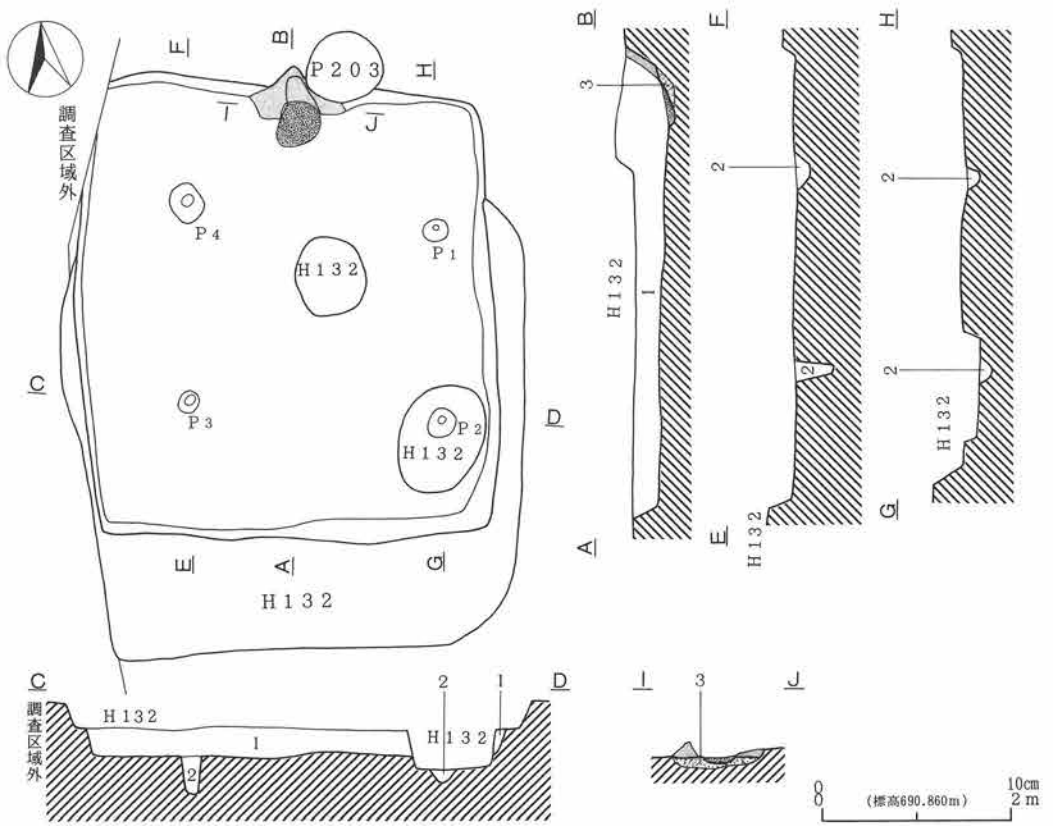
遺構－Ⅹあ5グリットで検出された。H167号住居址を切り、H132号住居址に切られる。隅丸長方形の平面プランを呈し、南北長5.0ｍ×東西長4.3ｍ×壁残高0.35ｍの規模を有する。N－5°－Eに長軸方位をとる。カマドは北壁中央に粘土で構築される。袖は残存していなかった。4基検出されたPitは全て主柱穴である。柱は確認されなかった。覆土は人為埋土で周溝は存在しな



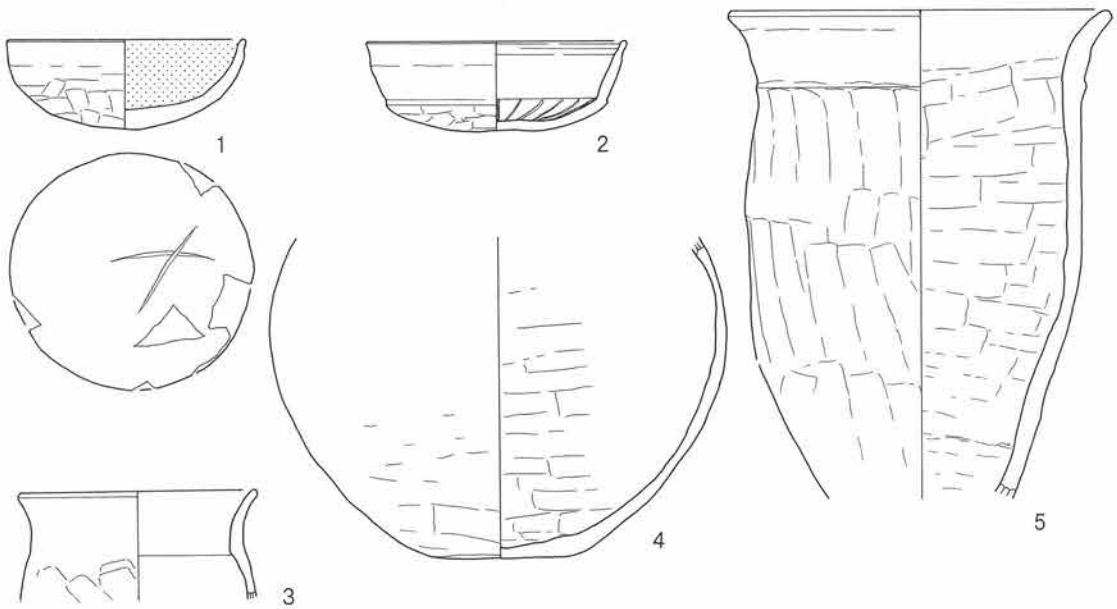
1　暗褐色土層（10YR3/3）。10YR6/6粒子、砂粒、石粒多含。
2　黒褐色土層（10YR3/2）。10YR6/6粒子、砂粒多含。
3　褐色土層（10YR4/4）。砂粒、石粒多含。
4　黒褐色土層（10YR2/2）。砂粒、石粒を含む。
5　灰黄褐色土層（10YR4/2）。砂粒、10YR6/6粒子多含。
6　灰黄褐色土層（10YR4/2）。2.5YR2/1シルトブロック、炭化物多含。
7　灰黄褐色土層（10YR4/2）。2.5YR2/1シルトブロック、砂粒多含。カマド構築土。
8　灰黄褐色土層（10YR4/2）。7層が熱変化したもの。カマド構築土。
9　赤黒色土層（2.5YR2/1）。カマド構築土。
10　暗赤褐色土層（10YR3/3）。10YR6/6粒子、砂粒多含。



第160図　H159号住居址



1　明黄褐色土（10YR6/6）、灰黄褐色土（10YR4/2）の混在土層。人為埋土。
2　にぶい黄褐色土層（10YR4/3）。砂粒多含。
3　明黄褐色土（10YR6/6）、灰黄褐色土（10YR4/2）、砂の混在土層。カマド掘方埋土。
　褐灰色土層（10YR4/1）。カマド構築粘土。



第161図　H162号住居址

い。

遺物－土師器坏（1・2）、小型甕（3）、壺（4）、甕（5）が出土している。坏1は半球状を呈し、内面黒色処理、外面篦削り調整が施される。底部に「×」の記号が刻まれている。2は須恵器坏蓋の模倣を原形とするもので、内面放射暗文、外面篦削り調整が施される。小型甕は長胴甕を小型にしたもので、内面ナデ、外面篦削り調整が施される。壺4は球胴で、内面ナデ、外面篦削り調整が施される。甕5は長胴で、口縁部に最大径を有する。内面ナデ、外面篦削り調整が施される。

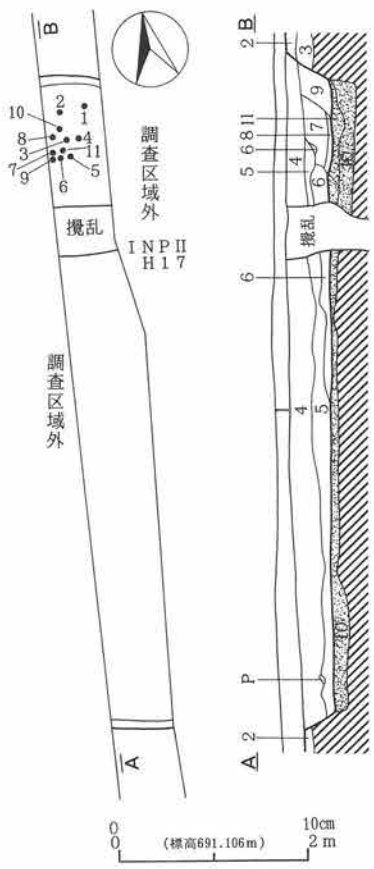
挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
－1	土師器 坏	12.6 － 4.7	内－黒色処理。 外－篦削り。	「×」の記号。
－2	土師器 坏	13.7 － 4.3	内－放射暗文。 外－篦削り。	
－3	土師器 小型甕	12.7 － －	内－ナデ。 外－篦削り。	
－4	土師器 壺	－ 8.0 －	内－ナデ。 外－篦削り。	
－5	土師器 甕	20.3 － －	内－ナデ。 外－篦削り。	

第142表　H162号住居址出土遺物観察表

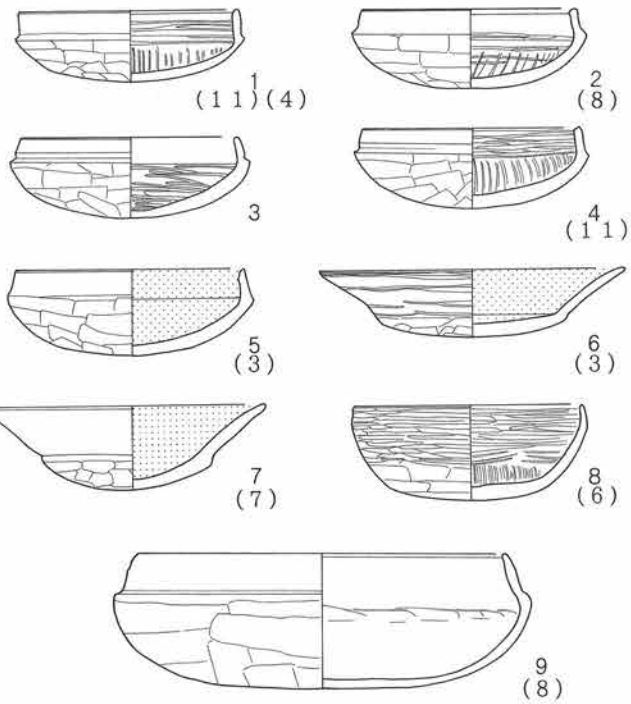
H163号住居址（第162・163図、図版百八十九・百九十）

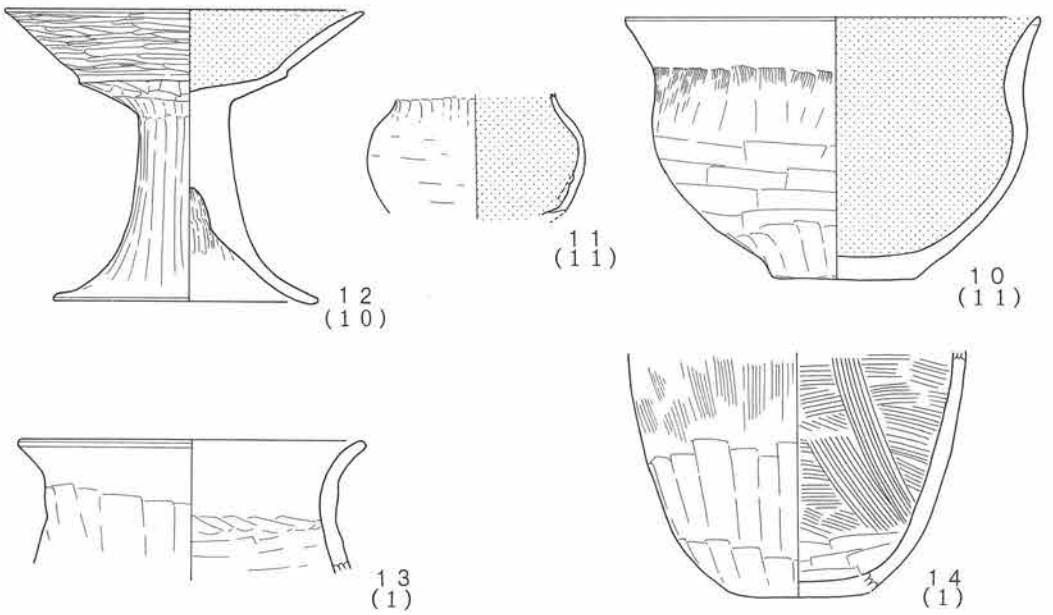
遺構－ⅩⅡこ6グリットで検出された。第2次調査におけるH17号住居址は本址と同一の住居である。今回の調査では他遺構との重複関係は存在しないが、第2次調査においてはH11号住居址に切られ、H19号住居址を切っている。壁残高0.48ｍを測り、カマド・Pit等の施設は調査範囲内には有さない。覆土は自然堆積である。

遺物－土師器坏（1～8）、鉢（9・10）、小型壺（11）、高杯（12）、甕（13～17）が出土している。坏1～5は須恵器坏身の模倣を原形とするもので、5が内面黒色処理される他は、内面は篦磨き、外面全てのものが篦削り調整される。6・7は丸底から口縁部が大きく開くもので、2点共に内面は黒色処理、外面は6が篦削り・篦磨き、7は篦削り調整が施される。8は半球状を呈するもので、底部は比較的平坦である、口縁端部は短く内傾する。内面篦磨き、外面篦削り～篦磨き調整が施される。鉢9は坏1～5を大型にしたもので、内面ナデ、外面篦削り調整が施される。10は平坦な底部から体部で外湾し、口縁部が内湾しながら外反する。内面黒色処理、外面は刷毛目・篦削り調整が施される。小型壺11は内面黒色処理、外面篦削り調整が施される。高杯



1　客　土。
2　黒　褐　色　土　層（10YR3/2）。
3　漸　移　層。浅間山第一軽石層の。
4　黒　褐　色　土　層（10YR3/2）。砂粒、石粒多含。
5　黒　褐　色　土　層（10YR2/3）。砂粒、石粒多含。
6　黒　褐　色　土　層（10YR3/1）。焼土ブロック多含。
7　にぶい黄褐色土層（10YR4/3）。焼土ブロック多含。
8　黒　色　土　層（10YR2/1）。炭化物、灰多含。
9　褐　灰　色　土　層（10YR4/1）。
10　黒　褐　色　土　層（10YR3/2）。砂粒、ロームブロック多含。住居掘方埋土。
11　黒　褐　色　土　層（10YR3/2）。ローム、砂粒多含。住居掘方埋土。



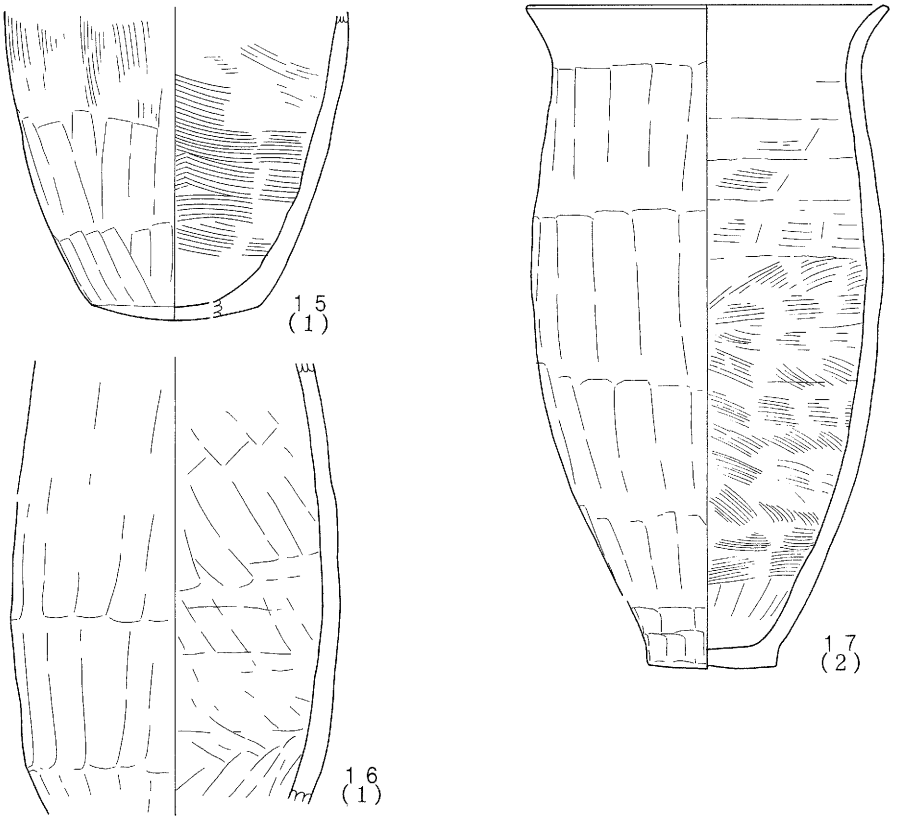


第162図　H163号住居址（1）

12は長脚で坏体部に稜を有する。脚は棒状のものをくりぬいて成形している。内面黒色処理、脚内篦削り、外面坏の稜を境に上部は篦磨き、下部は篦削り調整が施される。甕は全て長胴で、13は内面ナデ、外面篦削り調整、14・15は内面刷毛目、外面刷毛目・篦削り調整が施される。16は体部下半底部近くで底部に向かい体部が内湾する。内面ナデ、外面篦削り調整が施される。14は内面刷毛目・ナデ、外面篦削り調整が施される。

挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
－1	土師器 坏	12.4 5.0 3.8	内－篦磨き。 外－篦削り。	No.4・11
－2	土師器 坏	12.6 － 4.3	内－篦磨き。 外－篦削り。	No.8
－3	土師器 坏	13.2 － 3.8	内－篦磨き。 外－篦削り。	
－4	土師器 坏	12.2 － 4.2	内－篦磨き。 外－篦削り。	No.11
－5	土師器 坏	15.1 － －	内－黒色処理。 外－篦削り。	No.3
－6	土師器 坏	15.6 － －	内－黒色処理。 外－篦削り・篦磨き。	No.3
－7	土師器 坏	22.8 5.1 39.7	内－黒色処理。 外－篦削り。	No.7
－8	土師器 坏		内－篦磨き。 外－篦削り・篦磨き。	No.6
－9	土師器 鉢		内－ナデ。 外－篦削り。	No.8
－10	土師器 鉢		内－黒色処理。 外－刷毛目・篦削り。	No.11
－11	土師器 小型壷		内－黒色処理。 外－篦削り。	No.11
－12	土師器 高坏		内－黒色処理・脚内：篦削り。 外－篦削り・篦磨き。	No.10
－13	土師器 甕		内－ナデ。 外－篦削り。	No.1
－14	土師器 甕		内－ナデ・刷毛目。 外－刷毛目・篦削り。	No.1
－15	土師器 甕		内－ナデ・刷毛目。 外－刷毛目・篦削り。	No.1

第143表　H163号住居址出土遺物観察表（1）



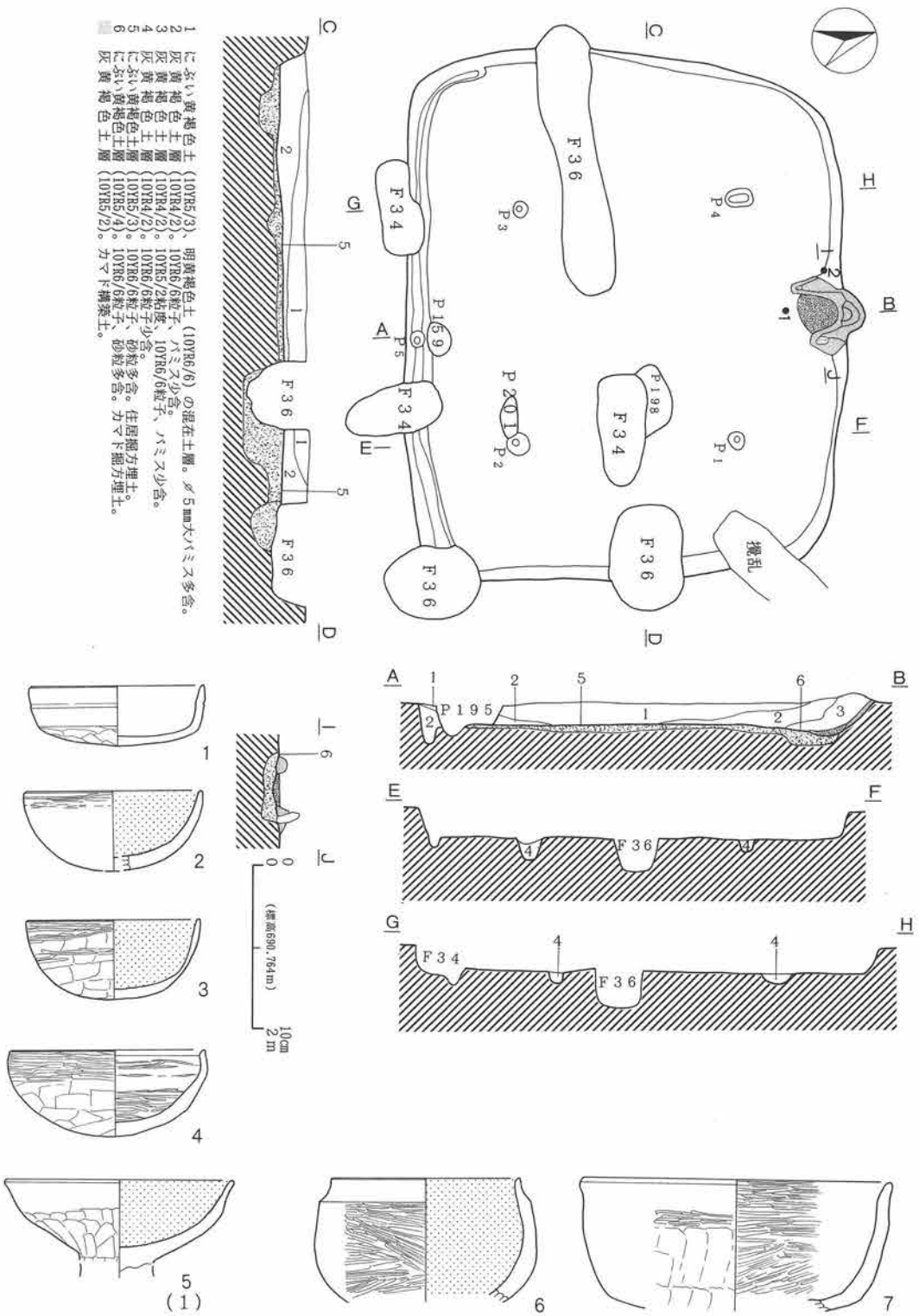
第163図　H163号住居址（2）

挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
−16	土師器 甕	− − −	内外一篦磨き。	No.1
−17	土師器 甕	19.1 35.2 6.7	内一刷毛目・ナデ。 外一篦削り。	No.2

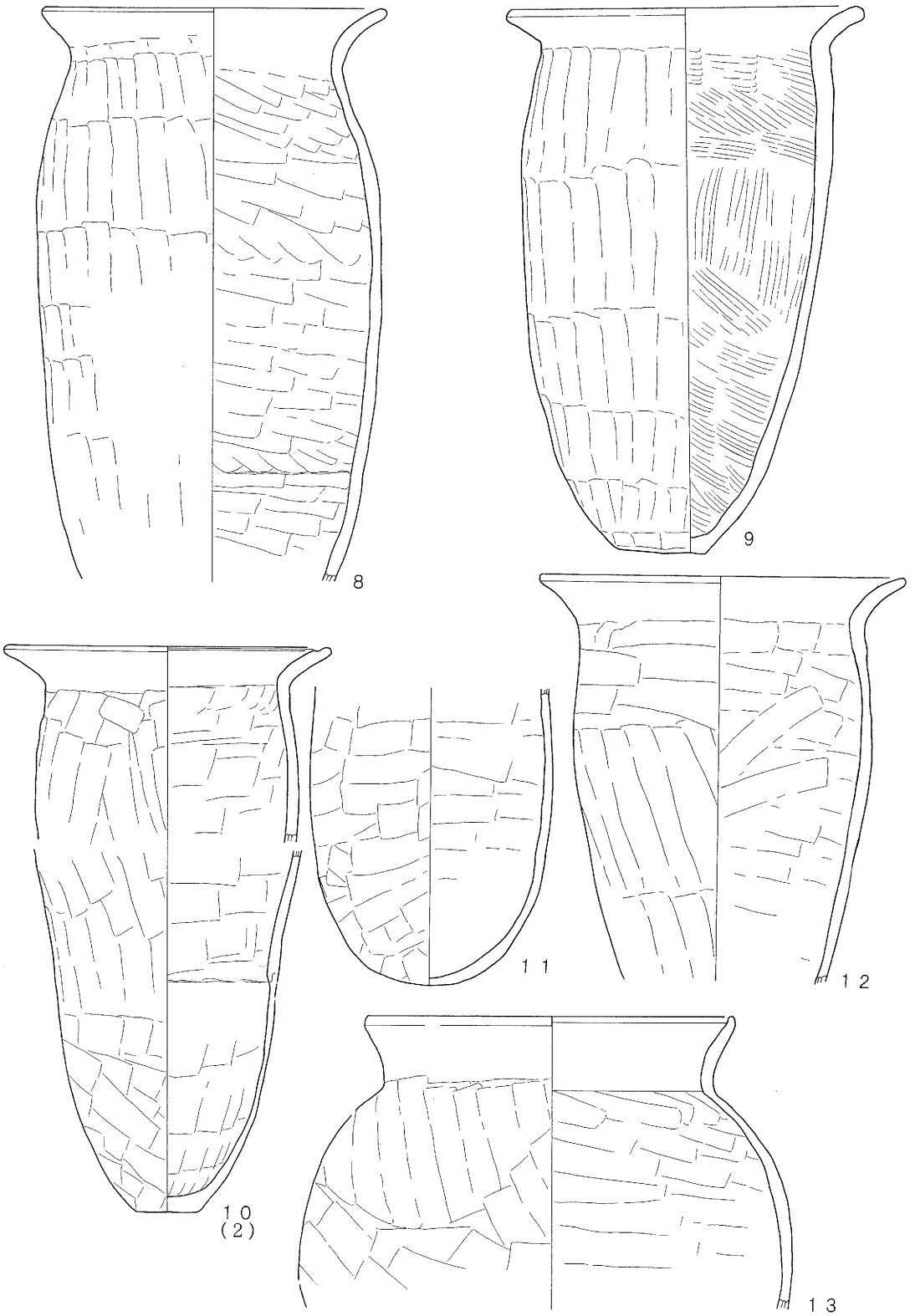
第144表　H163号住居址出土遺物観察表（2）

H166号住居址（第164・165図、図版六十六・百九十・百九十一）

遺構－Xお4グリットで検出された。F34号・F36号掘立柱建物址に切られ、H177号・H179号住居址を切る。隅丸長方形の平面プランを呈し、東西長6.5m×南北長5.6m×壁残高0.28mの規模を有する。N－77°－Wに長軸方位をとる。カマドは北壁の中央部分に石芯を粘土で被覆して構築されている。長径0.9m×短径0.85m×深度0.45mの規模である。Pitは5基検出され、P1～P4の4基が主柱穴である。柱は確認されなかった。覆土は自然堆積で、西南隅から東南隅



第164図　H166号住居址（1）



第165図　H166号住居址（2）

に及ぶ南壁下に幅16cm、深さ12cmの周溝が巡らされる。

遺物－土師器坏（1～4）、高杯（5）、鉢（6・7）、甕（8～12）、壺（13）が出土している。坏1は有段口縁坏で、内面ナデ、外面篦削り調整が施される。2～4は半球状を呈するもので、2・3は内面黒色処理、4は篦磨き調整が施される。外面は2が篦磨き、3・4は篦削り後に篦磨き調整が施される。高杯は内面黒色処理、外面には篦削り調整が施される。鉢6は口縁端部が内傾するもので、内面黒色処理、外面篦磨き調整が施される。7は内面篦磨き、外面は篦削り後篦磨き調整が施される。甕は全て長胴で、8・10・11・12は内面ナデ、外面篦削り調整が施される。9は内面刷毛目、外面には篦削り調整が施される。壺13は口縁端部が直立する。内面ナデ、外面篦削り調整が施される。

挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
－1	土師器 坏	10.7 9.3 3.6	内－ナデ。 外－篦削り。	有段口縁坏
－2	土師器 坏	10.9 － －	内－黒色処理。 外－篦磨き。	
－3	土師器 坏	10.7 － 4.9	内－黒色処理。 外－篦削り・篦磨き。	
－4	土師器 坏	12.0 － 5.3	内－篦磨き。 外－篦削り・篦磨き。	
－5	土師器 高坏	14.0 － －	内－黒色処理。 外－篦削り。	No.1
－6	土師器 鉢	11.7 － －	内－黒色処理。 外－篦磨き。	
－7	土師器 鉢	19.2 － －	内－篦磨き。 外－篦削り・篦削り。	
－8	土師器 甕	21.7 － －	内－ナデ。 外－篦削り。	
－9	土師器 甕	22.3 5.0 34.7	内－刷毛目。 外－篦削り。	
－10	土師器 甕	21.6 3.8 －	内－ナデ。 外－篦削り。	No.2
－11	土師器 甕	－ － －	内－ナデ。 外－篦削り。	
－12	土師器 甕	23.0 － －	内－ナデ。 外－篦削り。	
－13	土師器 壺	23.3 － －	内－ナデ。 外－篦削り。	

第145表　H166号住居址出土遺物観察表

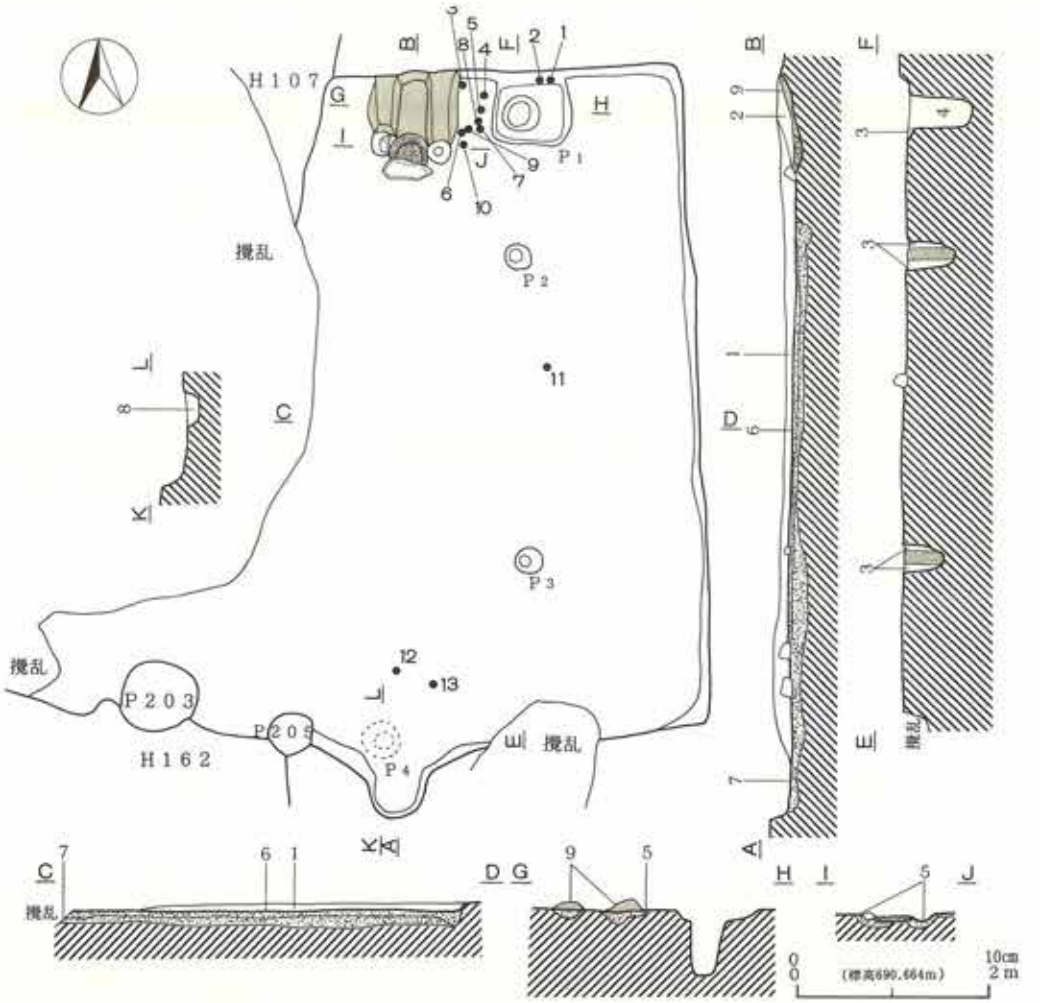
H167号住居址（第166～168図、図版六十七・百九十二・百九十三）

遺構－Ⅶい４グリットで検出された。南壁中央に張り出し部を有する隅丸長方形を呈する。H107号・162号住居址に切られる。南北長7.92ｍ、壁残高0.15ｍの規模を有する。Ｎ－２°－Ｗに長軸方位をとる。カマドは北壁の中央部分に構築されていた。カマド焚き口部分の袖石は抜き去られれていたが、他の部分は良好に残存して。７基検出されたPitの内主柱穴はＰ２・Ｐ３の２基である。直径13～15㎝の柱が確認された。カマド東脇のＰ１は貯蔵穴であろう。本址が拡張住居であることが、掘方の調査において判明した。北壁にカマドを有し、南北長5.36ｍの規模を有している。覆土は自然堆積であった。

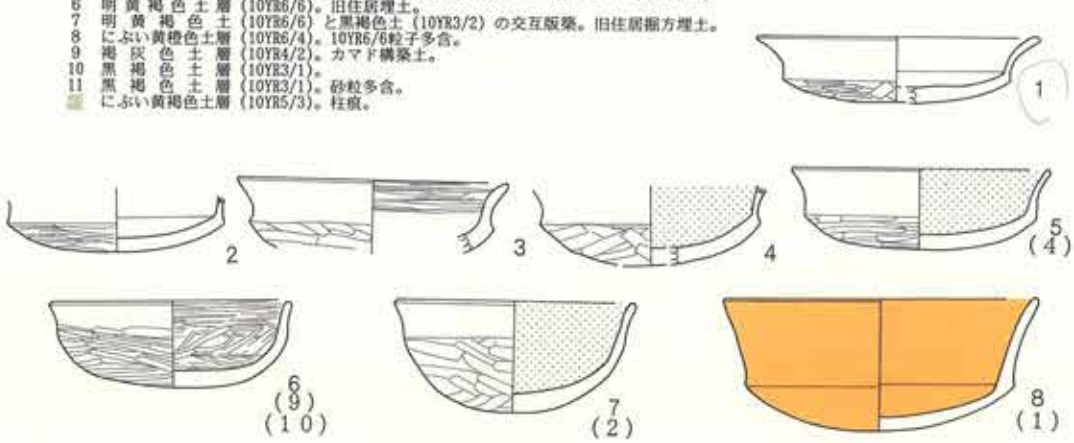
遺物－土師器、石器が出土している。土師器には坏（１～７）、鉢（８・13）、高杯（９～12）、壺（14・19）、小型甕（15）、甕（16・17）、甑（16）が存在する。坏１～５は須恵器坏蓋の模倣を原形とするもので、１・２は内面ナデ、外面は篦削り後、篦磨き調整が施される。３は内面篦磨き、外面篦削り調整が施される。４・５は内面黒色処理で、外面は４が篦削り、５は篦磨き調整が施される。６・７は半球状を呈するもので、６は内外面篦磨き、７は内面黒色処理、外面篦削り調整が施される。鉢８は坏を大型化したもので、内外面篦磨き調整後赤彩を施している。13は外湾した体部から口縁部が外反するもので、内外面にナデ調整が施される。高杯は９～11は内面黒色処理が施され、脚内には篦削り・ナデ調整、外面は篦削り・篦磨き調整が施される。坏部分は坏１～５と同様な形態である。11は脚に三角透かしを有する。12は須恵器を模倣して造られたもので、器面には灰黒色の顔料が塗布されている。体部に櫛描き波状文、脚には長方形透かしを有する。田辺陶邑編年のＭＴ15型式に比定されようか。壺14は口縁部が短く、広口のもので内面ナデ～篦磨き、外面篦削りから篦磨き調整が施される。19は丸底で、長頸のもので内面ナデ～篦磨き、外面篦削りから篦磨き調整が施される。小型甕15は平底で内面ナデ、外面篦削り調整が施される。甕は２点共に長胴で最大径を体部に有する。16は内面刷毛目～ナデ、外面篦削り、17は内面ナデ、外面篦削り調整が施される。甑18は大型で、底部全体が開口する。内面ナデ、外面には刷毛目～篦削り調整が施される。石器は20の混入品の磨製石斧が出土している。

挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
－1	土師器 坏	14.8 － －	内－ナデ。 外－篦削り～篦磨き。	
－2	土師器 坏	－ － －	内－ナデ。 外－篦削り～篦磨き。	
－3	土師器 坏	14.4 － －	内－篦磨き。 外－篦削り。	

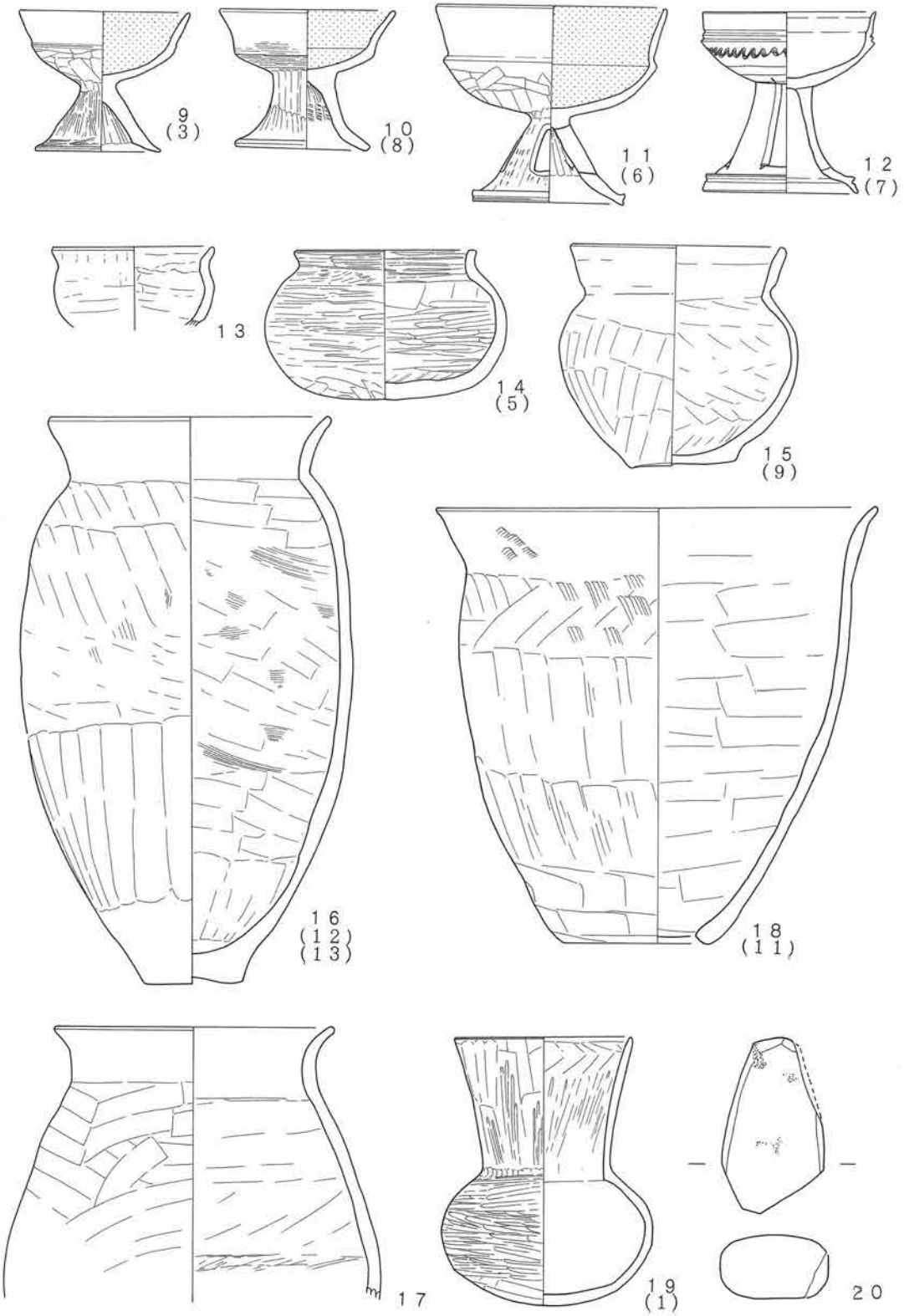
第146表　H167号住居址出土遺物観察表（１）



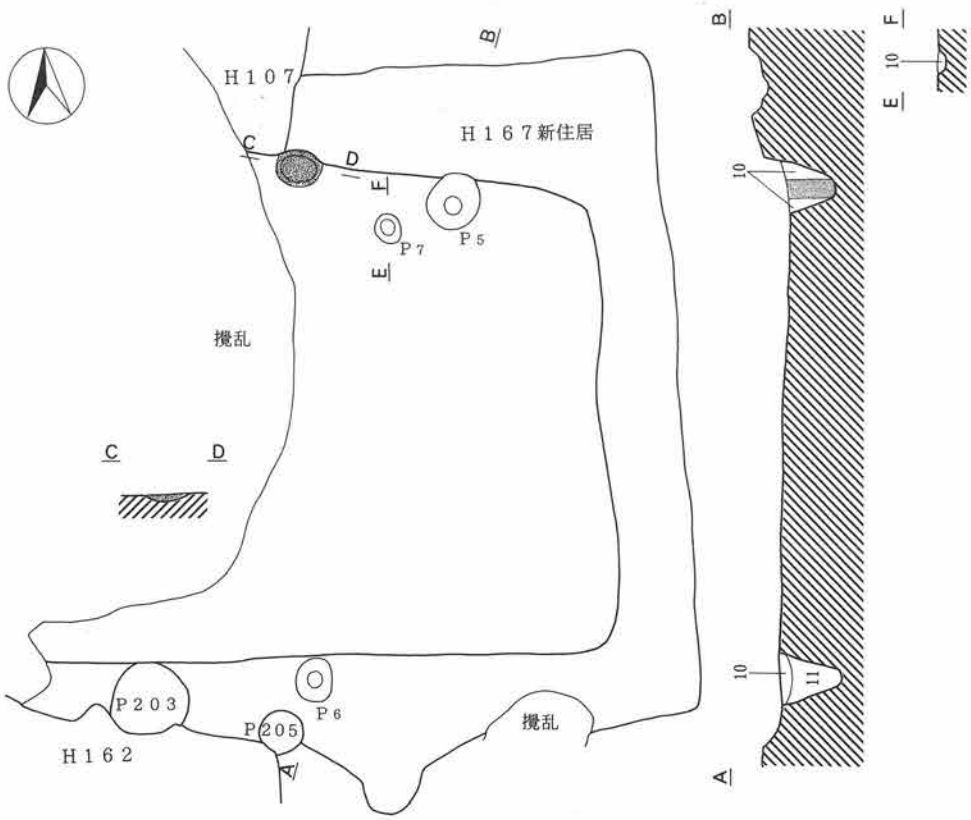
1　灰黄褐色土層（10YR4/2）。10YR3/2、10YR6/6粒子、砂粒を含む。
2　灰黄褐色土層（10YR4/2）。10YR6/6粒子を含む。
3　にぶい黄褐色土層（10YR4/3）。10YR6/6粒子少含。
4　黒褐色土層（10YR3/1）。砂粒少含。
5　明黄褐色土（10YR6/6）、黒褐色土（10YR3/2）の混在土層。カマド掘方埋土。
6　明黄褐色土層（10YR6/6）。旧住居埋土。
7　明黄褐色土（10YR6/6）と黒褐色土（10YR3/2）の交互版築。旧住居掘方埋土。
8　にぶい黄橙色土層（10YR6/4）。10YR6/6粒子多含。
9　褐灰色土層（10YR4/2）。カマド構築土。
10　黒褐色土層（10YR3/1）。
11　黒褐色土層（10YR3/1）。砂粒多含。
　　にぶい黄褐色土層（10YR5/3）。柱痕。



第166図　H167号住居址（1）



第167図　H167号住居址（2）



第168図　H167号住居址（３）

挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
－４	土師器 坏	－ － －	内－黒色処理。 外－篦削り。	
－５	土師器 坏	13.4 － 4.3	内－黒色処理。 外－篦磨き。	No.４
－６	土師器 坏	12.2 － 4.5	内外－篦磨き。	No.９・10
－７	土師器 坏	12.5 － 5.9	内－黒色処理。 外－篦削り。	No.２
－８	土師器 鉢	16.6 － 7.0	内外－赤彩。	No.１
－９	土師器 坏	10.8 7.9 8.9	内－黒色処理、脚内：篦削り・ナデ。 外－篦削り・篦磨き。	No.３
－10	土師器 高坏	11.0 8.5 8.8	内－黒色処理、脚内：篦削り・ナデ。 外－篦削り、篦磨き。	No.８

第147表　H167号住居址出土遺物観察表（２）

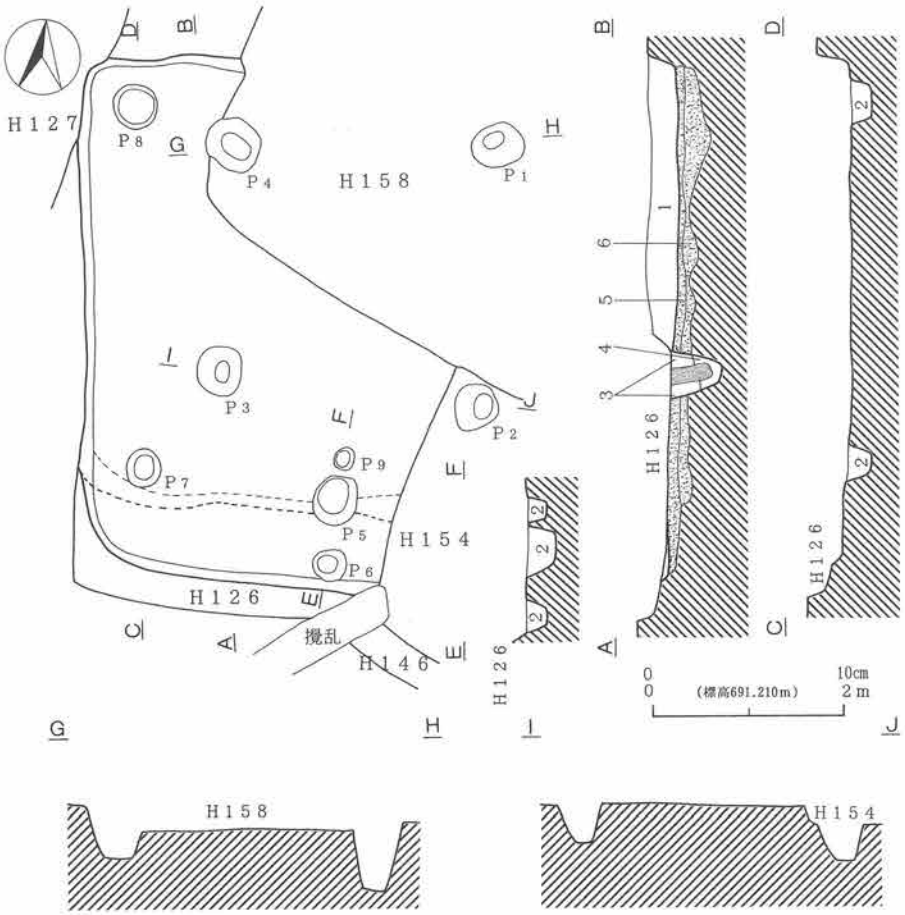
挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
－11	土師器 高坏	14.3 8.5 12.4	内－黒色処理、脚内：篦削り・ナデ。 外－篦削り、篦磨き。	三角透かし。 No.6
－12	土師器 高坏	18.6 9.6 11.5	内外－灰黒色顔料塗布。	須恵器模倣。 方形透かし。 No.7
－13	土師器 鉢	10.3 － －	内外－ナデ。	
－14	土師器 壷	11.3 － 9.4	内外－篦削り・篦磨き。	No.5
－15	土師器 小型甕	13.6 6.6 14.0	内－ナデ。 外－篦削り。	No.9
－16	土師器 甕	17.8 6.3 36.0	内－ナデ・刷毛目。 外－篦削り。	No.12・13
－17	土師器 甕	17.6 － －	内－ナデ。 外－篦削り。	
－18	土師器 甑	27.0 9.0 27.5	内－ナデ。 外－刷毛目・篦削り。	No.11
－19	土師器 壷	11.2 － 17.0	内－篦削り・篦磨き。 外－篦削り・篦磨き。	No.1
－20	磨製石斧	10.3 6.3 4.1		混入遺物。 480g

第148表　H167号住居址出土遺物観察表（3）

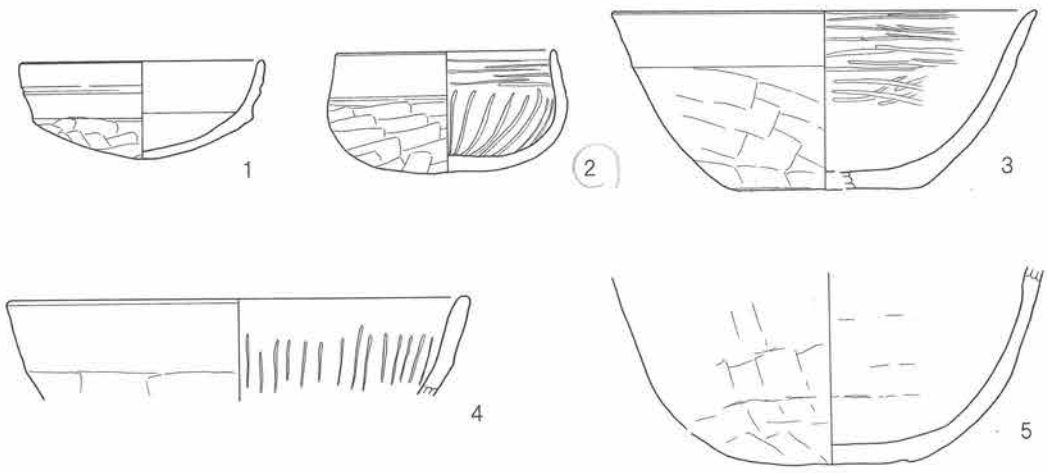
H172号住居址（第169・170図、図版六十八・百九十三・百九十四）

遺構－ＸＩか10グリットで検出された。H126号・H127号・H146号・H158号住居址に切られる。住居の半分以上が重複関係により消滅しているため、形状・規模等については不明な部分が多い。南北長5.56ｍ、壁残高0.32ｍの規模を有する。調査範囲内にはカマドは存在しなかった。９基検出されたPitの内Ｐ１～Ｐ４の４基が主柱穴である。Ｐ３では直径17㎝の柱が確認された。覆土は人為埋土で、周溝は有さない。尚、掘方の調査において本址が拡張住居であることが判明した。南壁の内側0.8ｍ前後に旧住居の壁が確認されている。

遺物－土師器坏（１・２）、鉢（３・４）、甕（５～７）、甑（８）が出土している。坏１は須恵器坏蓋の模倣を原形とするもので、所謂「有段口縁坏」である。内面ナデ、外面篦削り調整が施されている。２は深い半球状を呈する底部から口縁部が内傾しながら立ち上がるもので、内面放射状篦磨き、外面篦削り調整が施される。鉢３は平坦な底部を有し、口縁部に向かい緩やかに内湾しながら開くもので、内面篦磨き、外面篦削り調整が施される。４は口縁部と体部の境に稜を有する。内面放射状篦磨き、外面篦削り調整が施される。甕は３点共に内面ナデ、外面篦削り

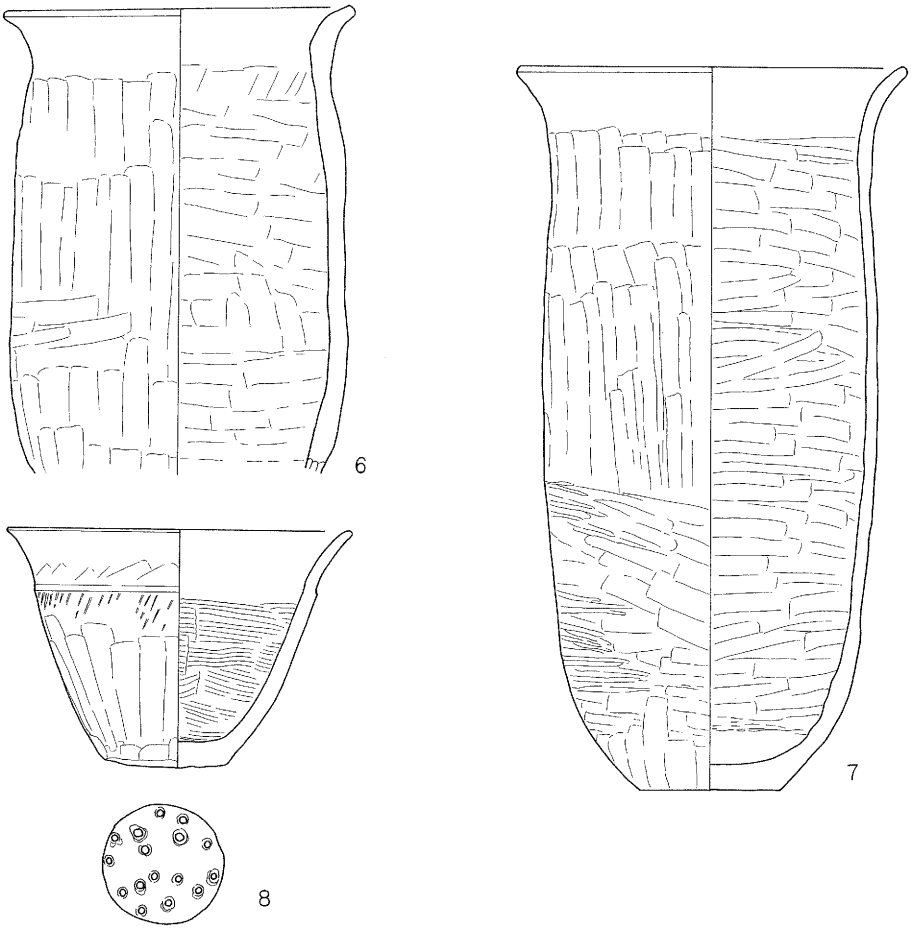


1　にぶい黄褐色土（10YR5/3）、灰黄褐色土（10YR4/2）、明黄褐色土（10YR6/6）の混在土層。人為埋土。
2　にぶい黄褐色土層（10YR5/3）。砂粒、10YR6/6粒子を含む。
3　にぶい黄褐色土層（10YR5/4）。10YR6/6粒子多含。
4　明黄褐色土層（10YR6/6）。地山砂の２次堆積。
5　明黄褐色土（10YR6/6）、褐灰色土（10YR4/1）の混在土層。貼床。
6　明黄褐色土（10YR6/6）、黒褐色土（10YR3/2）、砂粒の混在土層。住居掘方埋土。



第169図　H172号住居址（１）

調整が施される。口縁部が残存する６・７は口縁部に最大径を有する。甑８は多孔のもので、内面刷毛目、外面刷毛目・篦削り調整が施される。



第170図　H172号住居址（２）

挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
－1	土師器 坏	13.0 － 5.2	内－ナデ。 外－篦削り。	有段口縁坏。
－2	土師器 坏	11.7 4.0 6.5	内－篦磨き。 外－篦削り。	
－3	土師器 鉢	22.4 9.8 9.5	内－篦磨き。 外－篦削り	
－4	土師器 鉢	24.6 － －	内－篦磨き。 外－篦削り。	

第149表　H172号住居址出土遺物観察表（１）

挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
－5	土師器 甕	－ 6.0 －	内－ナデ。 外－篦削り。	
－6	土師器 甕	18.6 － －	内－ナデ。 外－篦削り。	
－7	土師器 甕	20.6 7.4 38.3	内－ナデ。 外－篦削り。	
－8	土師器 甑	18.2 6.3 12.6	内－刷毛目。 外－刷毛目・篦削り。	多孔

第150表　H172号住居址出土遺物観察表（2）

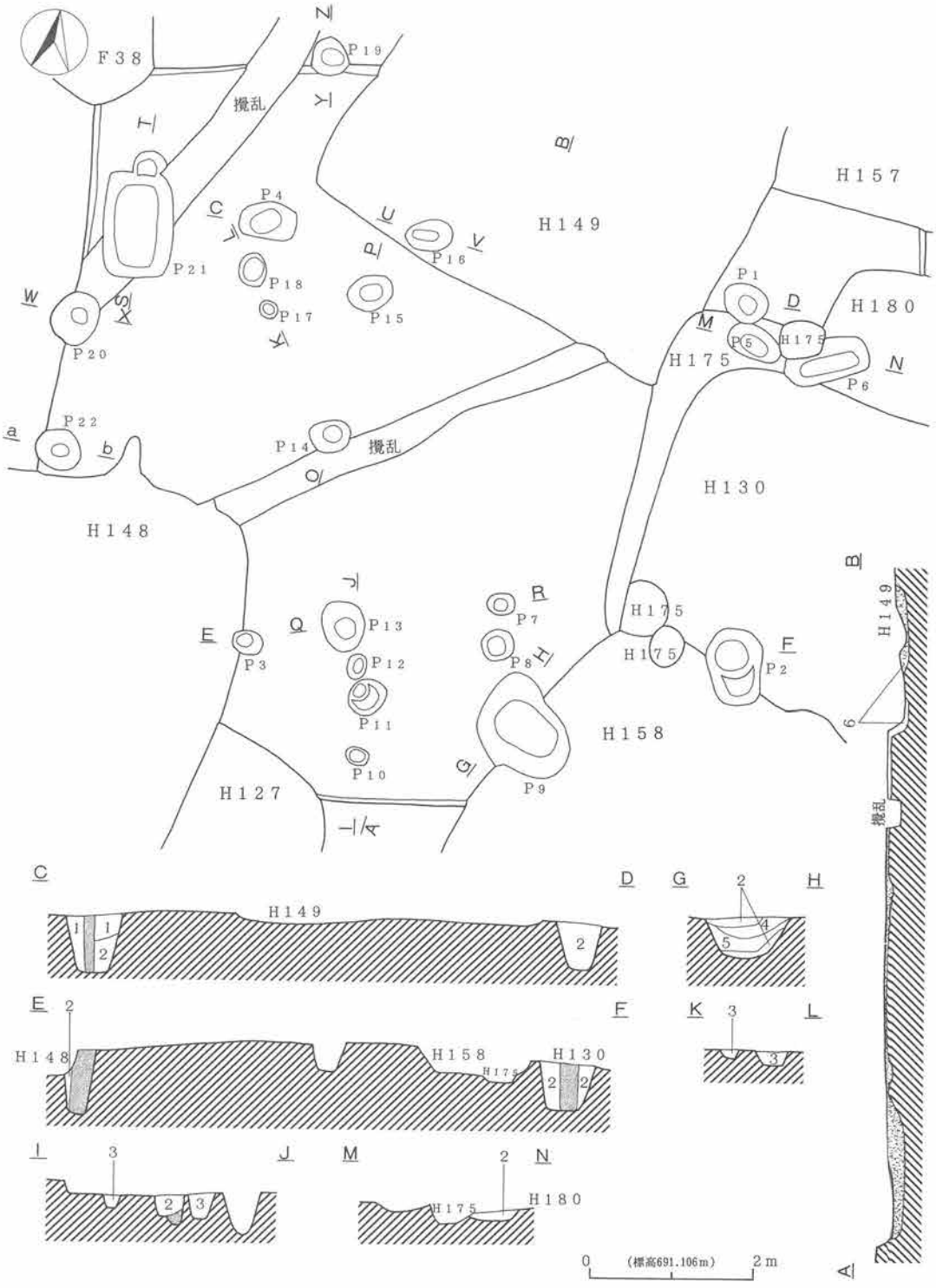
H173号住居址（第171・172図、図版百九十四）

遺構－ＸⅠけ10グリットで検出された。H127号・H130号・H148号・H149号・H157号・H158号・H175号・H180号住居址に切られる。南北長9.0ｍ×東西長10.15ｍ×壁残高0.15ｍの規模を有し、長軸方位をＮ－80°－Ｅにとる。カマドは調査範囲内には存在しなかった。Pitは22基検出されたが、全てが本址に伴うのではない。つまり、本址の覆土はすでに存在しない部分も多く、その場合床面を切り込んでいるPitは、本址に付随させて処理しているからである。そのため、Ｐ１～Ｐ４の４基が主柱穴である他はその性格は判然としない。Ｐ２～Ｐ４の３基において15～25cmの柱が確認されている。周溝は有さない。

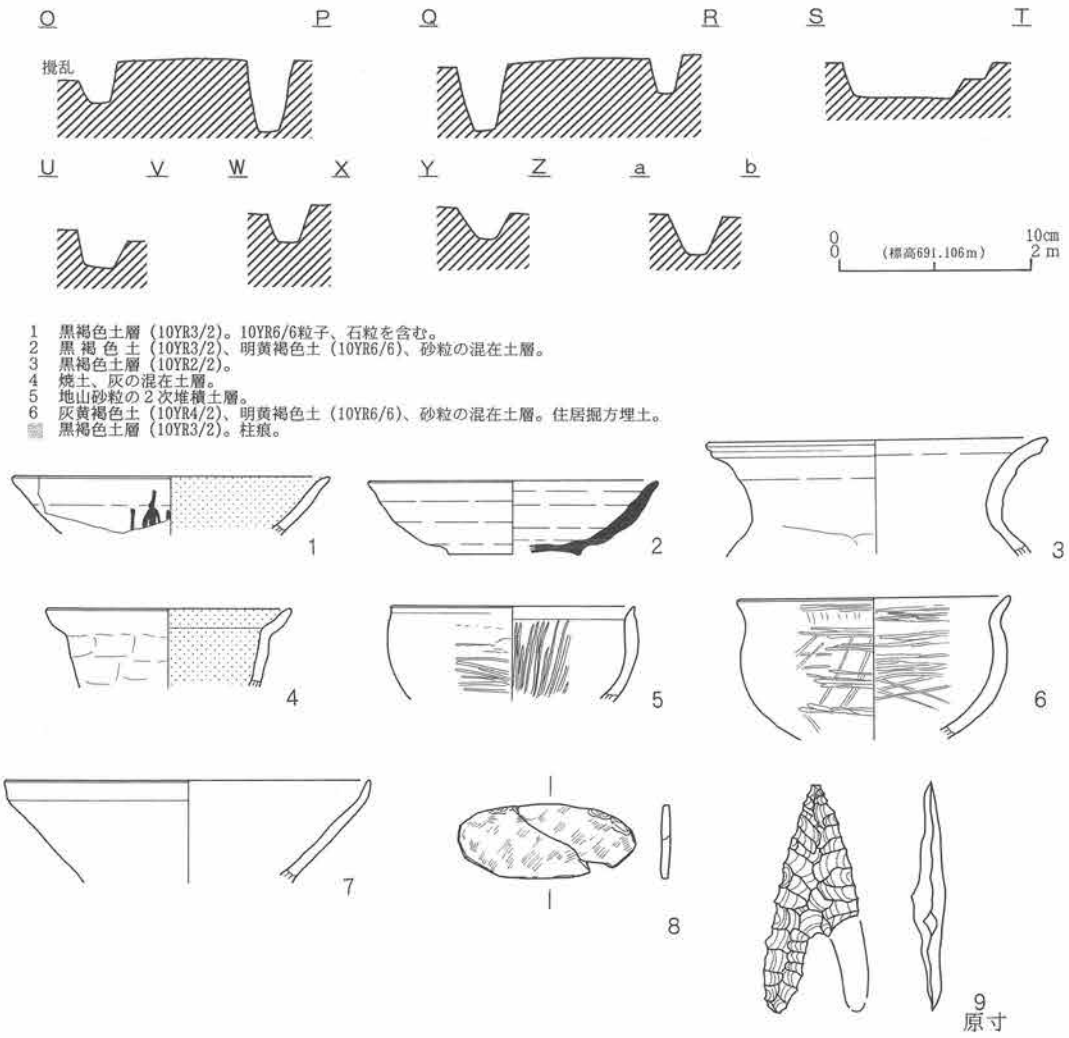
遺物－土師器、須恵器、石器が出土している。土師器には坏（１・４～６）、甕（３）、鉢（７）が認められる。１の内面黒色処理の坏は墨書が認められる。混入遺物である。４は口縁部が受口状に内湾する。内面黒色処理、外面篦削り調整が施される。５・６は丸底で口縁部が短く外反するもので、内外面に篦磨き調整が施される。鉢７は異なる器種かもしれない。内外面にナデ調整が施される。須恵器は２の坏が出土している。底部には糸切り痕が認められる。混入遺物である。石器は８の石包丁の未製品と９の打製石鏃が出土している。何れも混入品である。

挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
－1	土師器 坏	16.8 － －	内面黒色処理。	墨書。 混入品。
－2	須恵器 坏	15.3 6.8 3.9	回転糸きり。	混入品。
－3	土師器 甕	17.9 － －	内－ナデ。 外－篦削り。	須恵器模倣。
－4	土師器 坏	13.0 － －	内－黒色処理。 外－篦削り。	

第151表　H172号住居址出土遺物観察表（1）



第171図　H173号住居址（1）



第172図　H173号住居址（２）

挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
－5	土師器 坏	12.8 － －	内外一篦磨き。	
－6	土師器 坏	14.4 － －	内外一篦磨き。	
－7	土師器 鉢	19.4 － －	内外一ナデ。	
－8	石包丁	9.3 3.9 0.5		未製品・混入遺物。 30.3ｇ

第152表　H172号住居址出土遺物観察表（２）

挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
－9	打製石鏃	3.05 1.1 0.45		混入遺物。 0.9ｇ

第153表　H172号住居址出土遺物観察表（3）

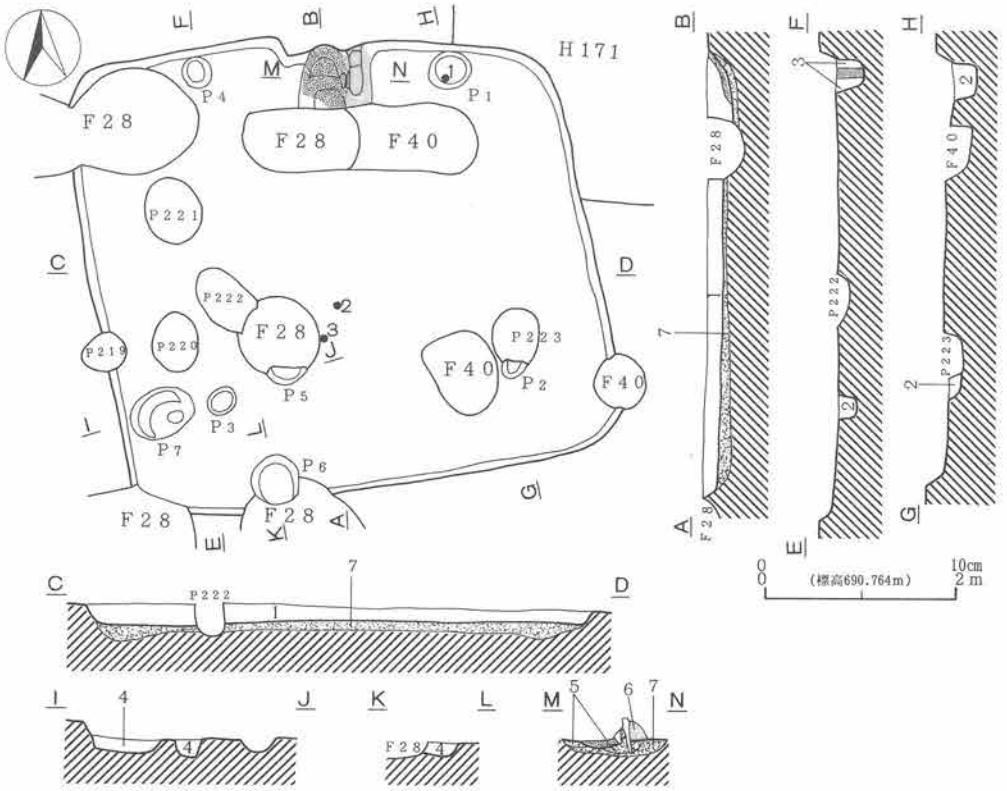
H176号住居址（第173・174図、図版七十・百九十五）

遺構－Ⅸえ1グリットで検出された。H171号住居址・F28号・F40号掘立柱建物址に切られ、H182号住居址を切る。隅丸方形の平面プランを呈し、南北長4.9ｍ×東西長5.25ｍ×壁残高0.25ｍの規模を呈する。N－80°－Eに長軸方位をとる。カマドは北壁の中央部分に石芯を粘土で被覆して構築されている。7基検出されたPitの内P1～P4の4基が主柱穴と考えられる。P4から直径12㎝の柱が確認されている。覆土は自然堆積で周溝は有さない。

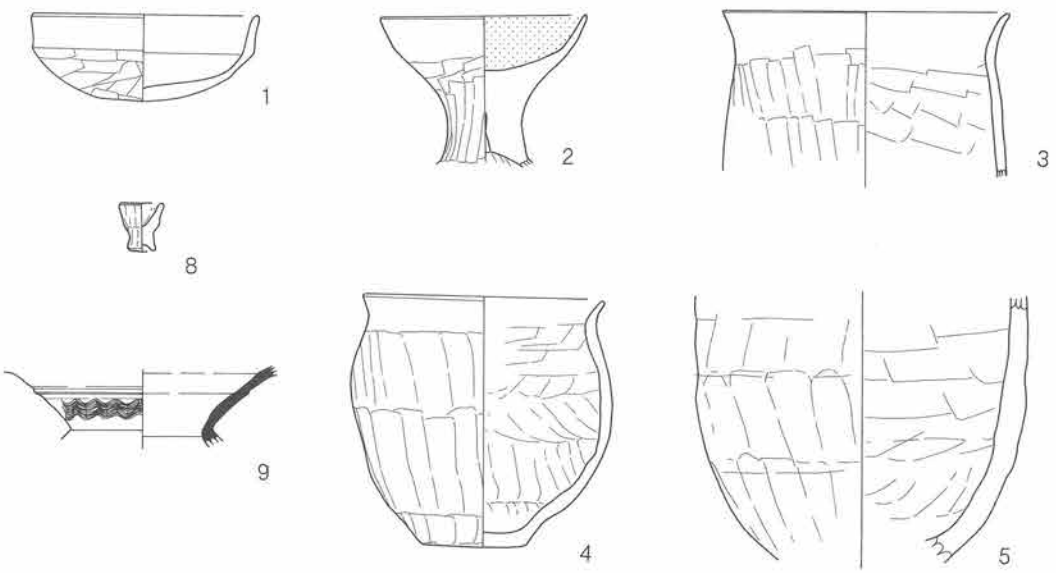
遺物－土師器、須恵器が出土している。土師器には坏（1）、高杯（2）、甕（3・5・7）、小型甕（4）、甑（6）、ミニチュア土器（8）が出土している。坏は須恵器坏蓋の模倣を原形とするもので、内面ナデ、外面篦削り調整が施される。高杯は半球状の坏部を有し、内面黒色処理、外面篦削り調整が施される。甕は3・5が内面ナデ、外面篦削り調整が施され、7は内面刷毛目、外面刷毛目・篦削り調整が施される。小型甕は平坦な底部を有し、口縁部が短く広口のもので、内面ナデ、外面には篦削り調整が施される。甑6は大型で、底部全体が開口するものである。内面ナデ、外面篦削り調整が施される。ミニチュア土器は高杯を模倣したもので、手捏である。須恵器はハソウの頸部片（9）が1点出土している。

挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
－1	土師器 坏	12.0 － 4.6	内－ナデ。 外－篦削り。	
－2	土師器 高坏	10.9 － －	内－黒色処理。 外－篦削り。	
－3	土師器 甕	15.2 － －	内－ナデ。 外－篦削り。	
－4	土師器 小型甕	12.8 5.3 13.3	内－ナデ。 外－篦削り。	
－5	土師器 甕	－ － －	内－ナデ。	
－6	土師器 甑	23.8 8.5 25.8	内－ナデ。 外－篦削り。	
－7	土師器 甕	18.8 6.2 31.0	内－刷毛目。 外－刷毛目・篦削り。	

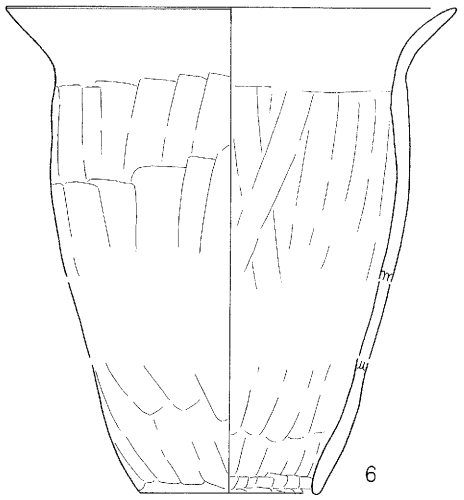
第154表　H172号住居址出土遺物観察表（1）

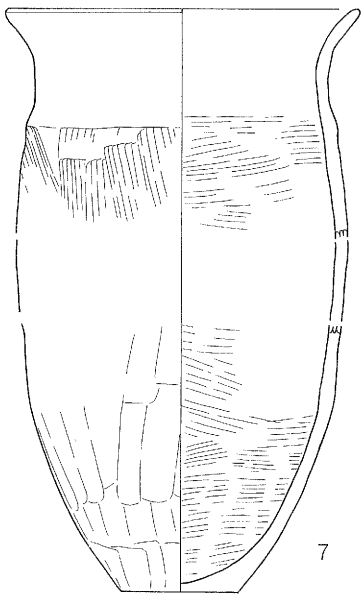


1　にぶい黄褐色土層（10YR5/3）。10YR6/6粒子、ローム、砂粒多含。
2　にぶい黄褐色土層（10YR5/3）。砂粒多含。
3　明黄褐色土層（10YR6/6）。
4　褐灰色土層（10YR4/1）。砂粒多含。
5　明黄褐色土層（10YR6/6）。ローム、砂粒、10YR4/2粒子多含。
6　黒褐色土層（10YR3/1）。カマド構築土。
7　明黄褐色土層（10YR6/6）。ローム、砂粒、10YR4/2粒子少含。住居掘方埋土。



第173図　H176号住居址（1）





第174図　H176号住居址（2）

挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
－8	土師器 ミニチュア	2.4 1.5 2.5		手捏。
－9	須恵器 ハソウ	－ － －	櫛描波状文。	

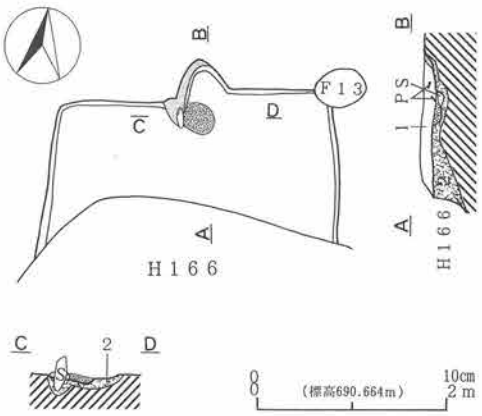
第155表　H172号住居址出土遺物観察表（２）

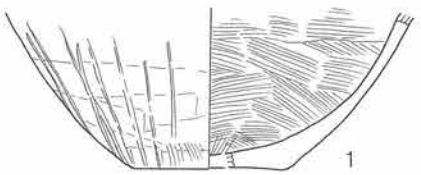
H177号住居址

（第175図、図版七十・百九十六　）

遺構－Ｘお４グリットで検出された。H166号住居址・Ｆ13号掘立柱建物址に切られ、H179号住居址を切る。H166号住居址により住居の半分が消滅するため、形状・規模等は判然としない。東西長3.12ｍ、壁残高0.12ｍの規模を呈する。カマドは北壁の中央部に構築されており、西袖と火床が残存していた。構造的には石芯を粘土で被覆した「石組粘土カマド」である。調査範囲内にはPitは存在しなかった。覆土は自然堆積で、周溝は有しない。

遺物－土師器壺の底部が１点出土している。平底で内面刷毛目調整、外面篦削り～篦磨き調整が施される。





第175図　H177号住居址

挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
－1	土師器 壺	－ 8.0 －	内－刷毛目。 外－刷毛目～篦削り。	

第156表　H177号住居址出土遺物観察表

H179号住居址（第176・177図、図版七十二・百九十六・百九十七）

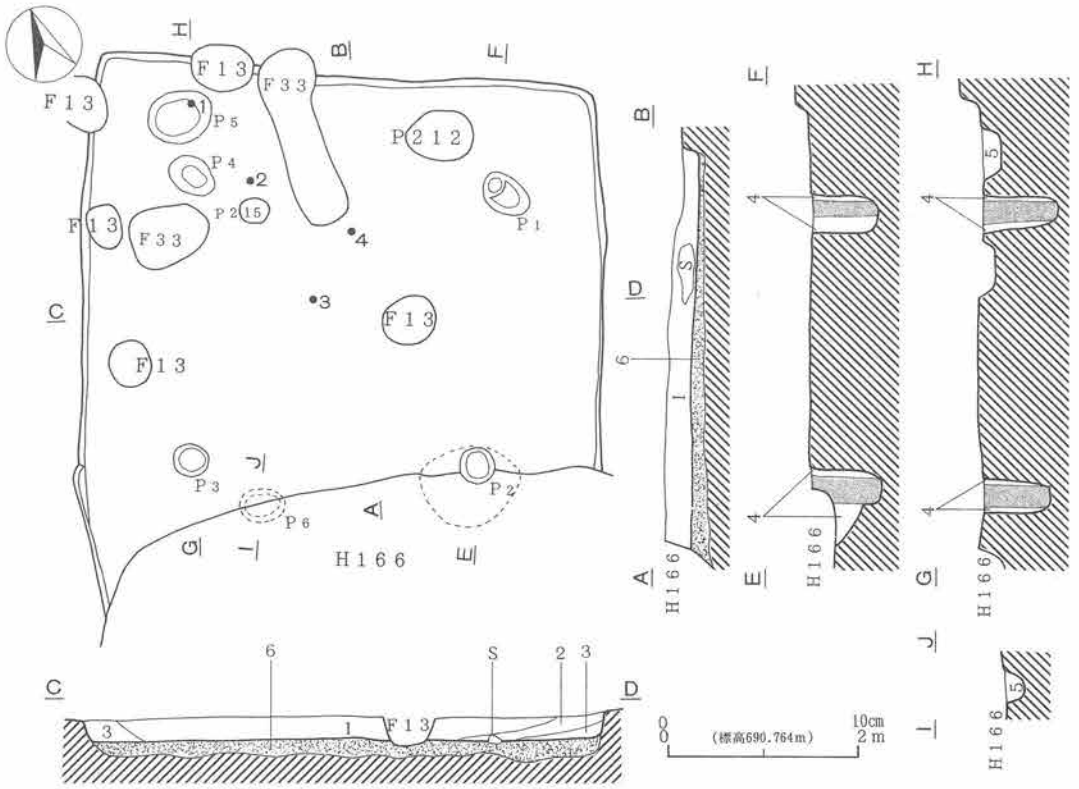
遺構－Ｘか３グリットで検出された。H166号・H177号住居址、Ｆ13号・Ｆ33号掘立柱建物址に切られ、H181号住居址を切る。隅丸長方形の平面プランを呈し、東西長5.5ｍ、壁残高0.3ｍの規模を有し、Ｎ－18°－Ｅに長軸方位をとる。調査範囲内にはカマドは存在しなかった。Pit

は6基検出され、この内のＰ1～Ｐ4の4基が主柱穴である。4基全てにおいて柱が確認された。規模的には直径16～28㎝である。覆土は単層で、人為埋土ないしは人為的な攪拌をうけた土の2次堆積である。周溝は有さない。

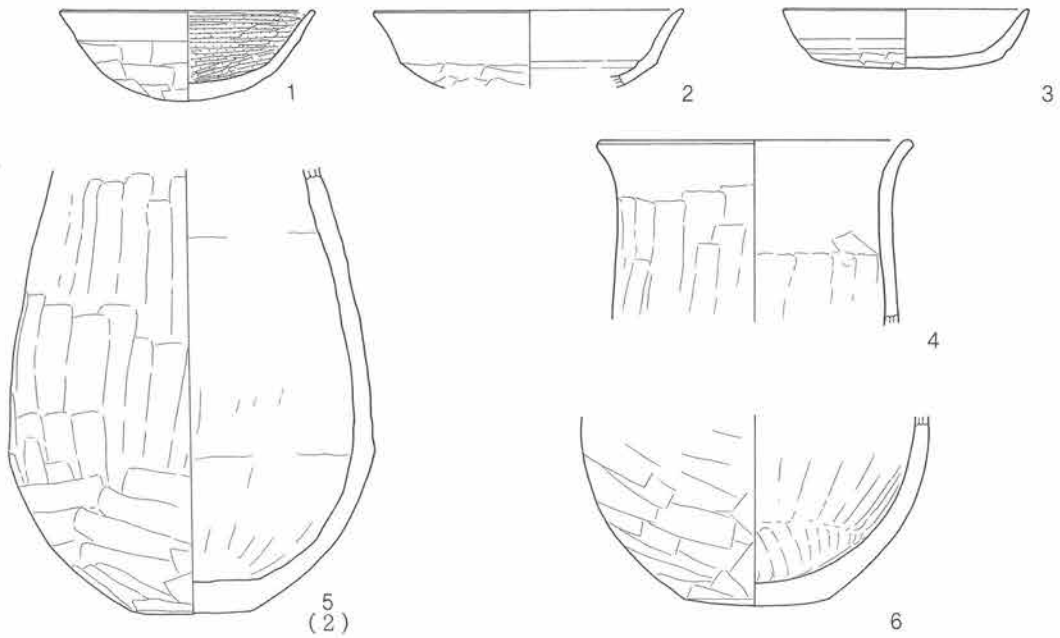
遺物－土師器坏（1～3）、甕（4～6）、壺（7～11）、甑（12・13）が出土している。坏1は半球状を呈するもので、内面篦磨き～黒色処理、外面篦削り調整が施される。2・3は須恵器坏蓋の模倣を原形とするもので、内面ナデ、外面篦削り調整が施される。甕は3点共に内面ナデ、外面篦削り調整が施されるもので、長胴である。5・6は下脹れの底部に最大径を有している。壺は7・9のような大型のものと、8・10・11のような小型のものが存在する。7な内面ナデ・篦磨き、外面篦削り～篦磨き調整が施される。9は内面刷毛目～篦磨き、外面篦磨き調整が施される。体部下半が弥生後期の壺のように若干こそげた状態を呈する。8は内面篦磨き・ナデ、外面篦削り～篦磨き調整が施される。10・11は内面ナデ、外面篦削り調整が施される。甑は小型で単孔の12と大型で底部全体が開口する13が存在する。12は内面ナデ、外面篦削り、13は内面篦磨き、外面篦削り・刷毛目～篦磨き調整が施される。

挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
－1	土師器 坏	13.6 － 4.8	内－篦磨き・黒色処理。 外－篦削り。	
－2	土師器 坏	16.4 － －	内－ナデ。 外－篦削り。	
－3	土師器 坏	13.0 6.0 3.2	内－ナデ。 外－篦削り。	
－4	土師器 甕	16.7 － －	内－ナデ。 外－篦削り。	
－5	土師器 甕	－ 5.0 －	内－ナデ。 外－篦削り。	No.2
－6	土師器 甕	－ 4.0 －	内－ナデ。 外－篦削り。	
－7	土師器 壺	19.9 － －	内－ナデ・篦磨き。 外－篦削り・篦磨き。	
－8	土師器 壺	11.6 5.7 16.6	内－ナデ・篦磨き。 外－篦削り・篦磨き。	No.1
－9	土師器 壺	－ 6.0 －	内－ナデ・刷毛目・篦磨き。 外－篦磨き。	No.3
－10	土師器 壺	11.9 － 12.2	内－ナデ。 外－篦削り。	
－11	土師器 壺	12.7 － －	内－ナデ。 外－篦削り。	

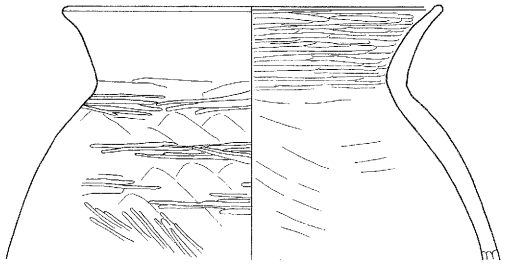
第157表　H179号住居址出土遺物観察表（1）

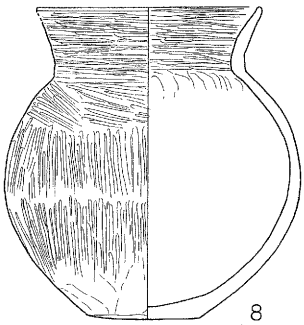


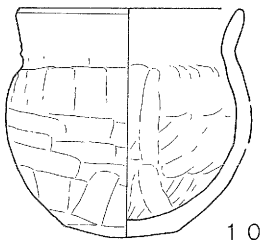
1　灰黄褐色土層（10YR4/2）。10YR6/6粒子多含。人為埋土又は人為埋土の２次堆積土層。
2　にぶい黄褐色土層（10YR5/3）。砂粒多含。
3　黒褐色土層（10YR3/2）。
4　にぶい黄褐色土層（10YR4/3）。10YR6/6粒子、砂粒多含。
5　にぶい黄褐色土層（10YR6/3）。地山砂層の２次堆積。
6　黒褐色土層（10YR3/2）。10YR6/6粒子多含。
　灰黄褐色土層（10YR4/2）。柱痕。

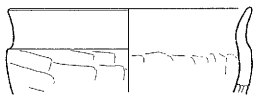


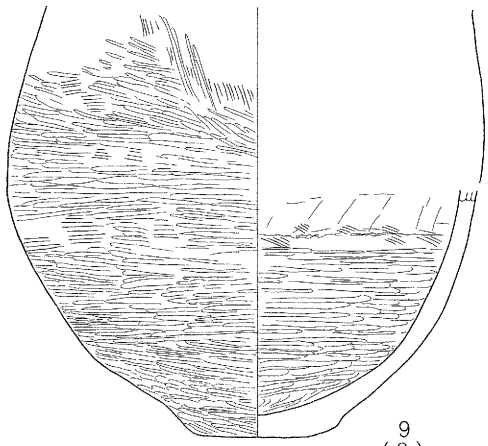
第176図　H179号住居址（１）

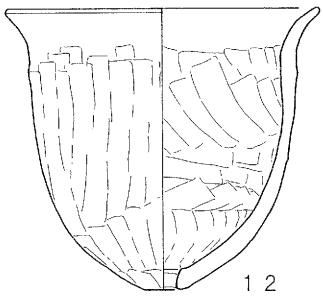

7

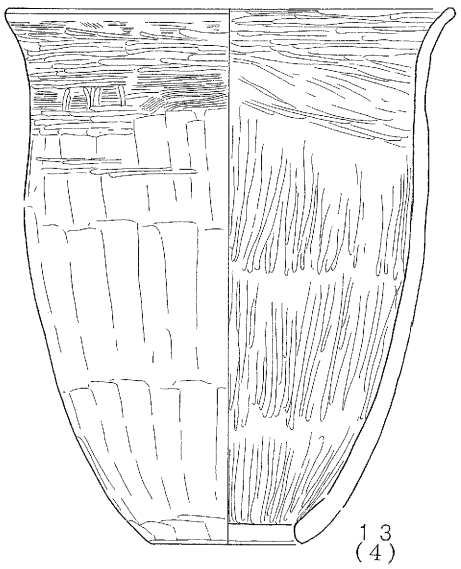

8
（1）


10


11


9
（3）


12


13
（4）

第177図　H179号住居址（2）

挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
−12	土師器 甑	16.6 2.0 15.0	内−ナデ。 外−篦削り。	
−13	土師器 甑	23.6 8.0 28.5	内−篦磨き。 外−篦削り・刷毛目・篦磨き。	No.4

第158表　H179号住居址出土遺物観察表（2）

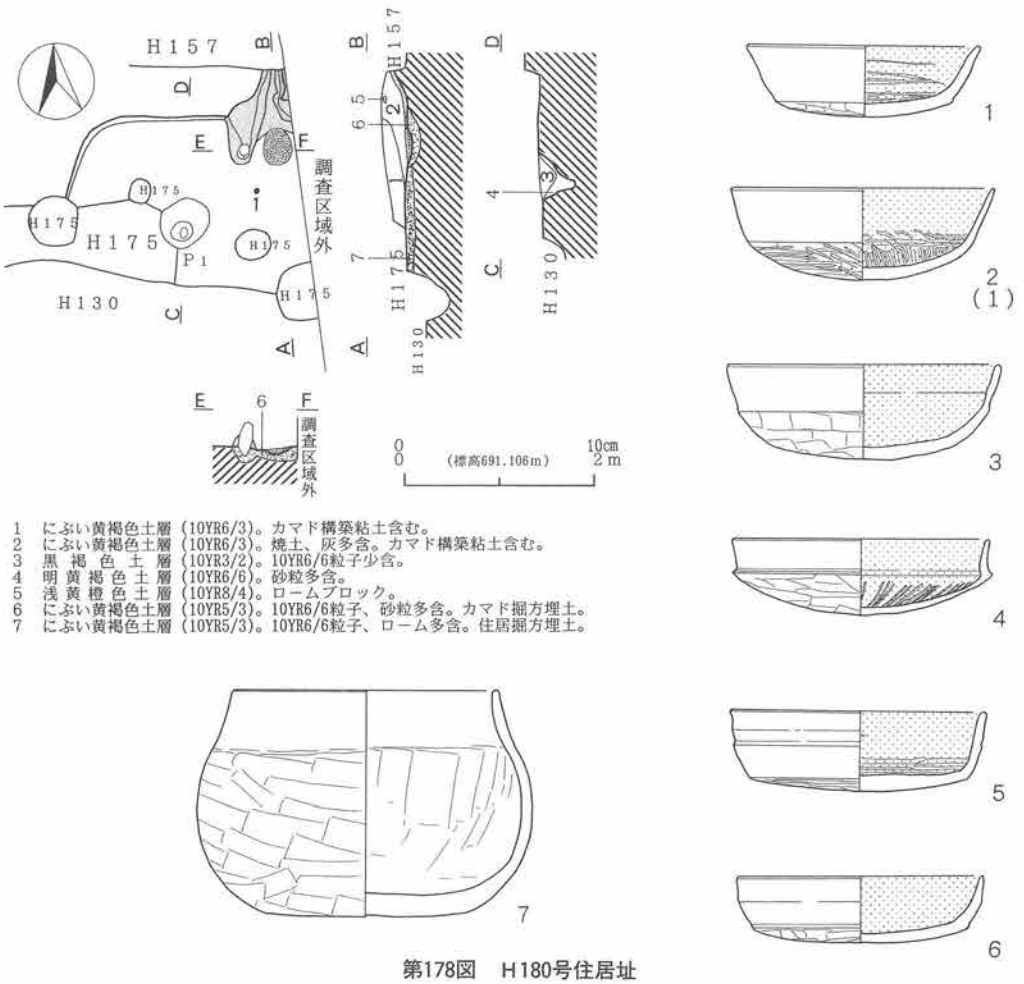
H180号住居址（第178図、図版七十二・百九十七）

遺構−ⅩⅠけ9グリットで検出された。H130号・H157号・H175号住居址に切られ、H173号住居址を切る。住居の大半が他住居との重複関係による消滅や、調査区域外に延びるために調査できなかったため、規模・形状等は判然としない。壁残高は0.25ｍを測る。カマドは北壁の中央部分と思われる位置に存在するが、調査区域外に延びるため完掘はできなかった。構造的には石芯を粘土で被覆したものである。Pitは1基検出されたが、住居全体での配置が不明であるため主柱穴とは断定しかねる。覆土は自然堆積で、周子は有さない。

遺物−土師器坏（1～6）、鉢（7）が出土している。坏は全て須恵器坏蓋の模倣ないし模倣を原形とするもので、全て内面黒色処理が施される。1・2・5は内面に篦磨き、4は放射暗文が認められる。外面は2が篦削り調整後に篦磨きを施す他は、篦削り調整が施される。5・6は「有段口縁坏」である。鉢7は外湾する体部から口縁部が内傾しながら端部で立ち上がるもので、最大径を体部に有する。内面ナデ、外面篦削り調整が施される。

挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
−1	土師器 坏	12.3 − 3.8	内−篦磨き・黒色処理。 外−篦削り。	
−2	土師器 坏	13.8 − 4.8	内−篦磨き・黒色処理。 外−篦削り・篦磨き。	No.1
−3	土師器 坏	14.4 − 5.1	内−黒色処理。 外−篦削り。	
−4	土師器 坏	13.5 − 4.0	内−放射暗文・黒色処理。 外−篦削り。	
−5	土師器 坏	13.4 − 4.2	内−篦磨き・黒色処理。 外−篦削り。	
−6	土師器 坏	13.0 4.0 3.5	内−黒色処理。 外−篦削り。	
−7	土師器 鉢	13.9 9.0 12.0	内−ナデ。 外−篦削り。	

第159表　H180号住居址出土遺物観察表



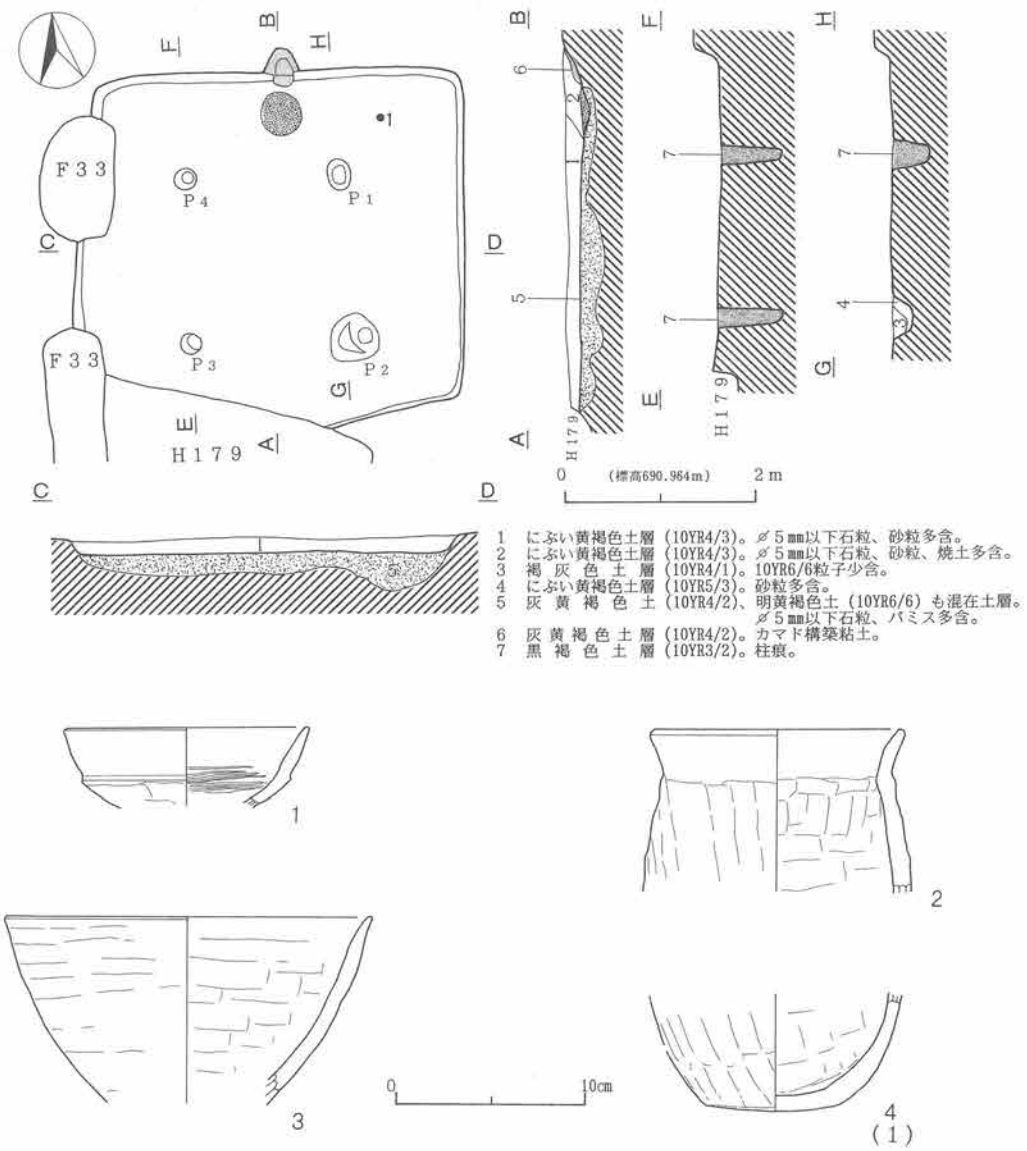
1　にぶい黄褐色土層（10YR6/3）。カマド構築粘土含む。
2　にぶい黄褐色土層（10YR6/3）。焼土、灰多含。カマド構築粘土含む。
3　黒褐色土層（10YR3/2）。10YR6/6粒子少含。
4　明黄褐色土層（10YR6/6）。砂粒多含。
5　浅黄橙色土層（10YR8/4）。ロームブロック。
6　にぶい黄褐色土層（10YR5/3）。10YR6/6粒子、砂粒多含。カマド掘方埋土。
7　にぶい黄褐色土層（10YR5/3）。10YR6/6粒子、ローム多含。住居掘方埋土。

第178図　H180号住居址

H181号住居址（第179図、図版七十三・百九十七）

遺構－Xか3グリットで検出された。H179号住居址・F33号掘立柱建物址に切られ、H186号住居址を切る。隅丸長方形の平面プランを呈し、東西長4.05m、壁残高0.2mの規模を有し、N－5°－Eに長軸方位をとる。カマドは北壁の中央に構築されているが、煙道部分と火床が残存していただけである。4基検出されたPitは全て主柱穴で直径16～24cmの柱がP2を除く3基で確認された。覆土は自然堆積で、周溝は存在しなかった。

遺物－土師器坏（1）、甕（2・4）、甑（3）が出土している。坏は須恵器坏蓋の模倣を原形とするもので、内面篦磨き、外面篦削り調整が施される。甕は2点共に内面ナデ、外面篦削り調整が施される。甑は内外面にナデ調整が施されている。この甑は底部が存在しないため厳密には甑とは断定出来ない。



第179図　H181号住居址

H182号住居址（第180図、図版七十三・百九十八）

遺構－Ⅸお10グリットで検出された。H171号・H176号住居址に切られ、H136号・H190号住居址を切る。隅丸方形の平面プランを呈し、南北長5.15ｍ×東西長4.95ｍ×壁残高0.25の規模を有し、N－4°－Wに長軸方位をとる。カマドは北壁中央に粘土で構築され、長径1.2ｍ×短径0.8ｍ×深度0.37ｍの規模を有する。床面上で5基、掘方で6基検出されたPitの内、Ｐ1～Ｐ4

挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
－1	土師器 坏	13.0 － －	内－篦磨き。 外－篦削り。	
－2	土師器 甕	13.3 － －	内－ナデ。 外－篦削り。	No.1
－3	土師器 甑	19.3 － －	内外－ナデ。	
－4	土師器 甕	－ － －	内－ナデ。 外－篦削り。	

第160表　H181号住居址出土遺物観察表

の4基が主柱穴である。柱は確認されなかった。覆土は自然堆積で、周溝は有さない。

遺物－土師器、須恵器が出土している。須恵器坏蓋（3）は混入品である。土師器には坏（1・2）と甕（4）が認められる。坏1は半球状を呈するもので、内面黒色処理、外面篦削り調整が施される。2は須恵器坏蓋の模倣を原形とするもので、内面篦磨き、外面篦削り調整が施される。甕4は底部片である。内面ナデ、外面篦削り調整が施される。

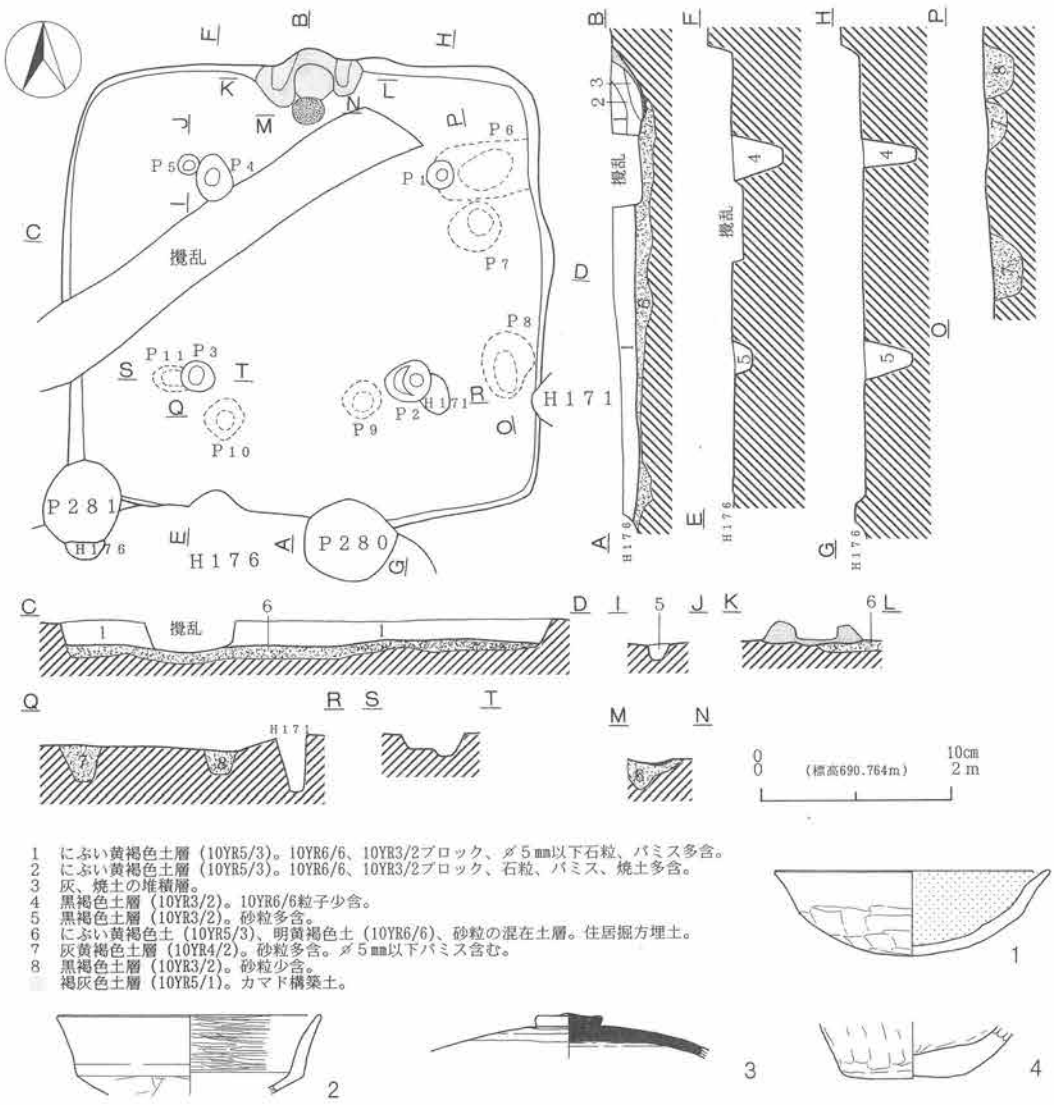
挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
－1	土師器 坏	13.0 － －	内－黒色処理。 外－篦削り。	
－2	土師器 坏	13.3 － －	内－篦磨き。 外－篦削り。	
－3	須恵器 坏蓋	19.3 － －	天井部篦削り。	混入遺物。
－4	土師器 甕	－ － －	内－ナデ。 外－篦削り。	

第161表　H182号住居址出土遺物観察表

H183号住居址（第181図、図版七十四・百九十八）

遺構－ⅩⅡけ3グリットで検出された。カマドと思われる焼土と礫を内包する落ち込みと、Pit、床面が確認された。そのため形状・規模等は不明である。6基検出されたPitの性格も判然とはしなかった。

遺物－土師器坏（1～3）、須恵器壺（4）、白磁（5・6）、打製石斧（7）が出土している。土師器坏1は須恵器坏身の模倣である。内面ナデ、外面篦削り調整が施される。2は丸底から口縁部が大きく開くもので、内面篦磨き、外面篦削り調整が施される。3は須恵器坏蓋の模倣を原形とするもので、内面篦磨き、外面篦削り～篦磨き調整が施される。須恵器壺は口縁部～体部上



第180図　H182号住居址

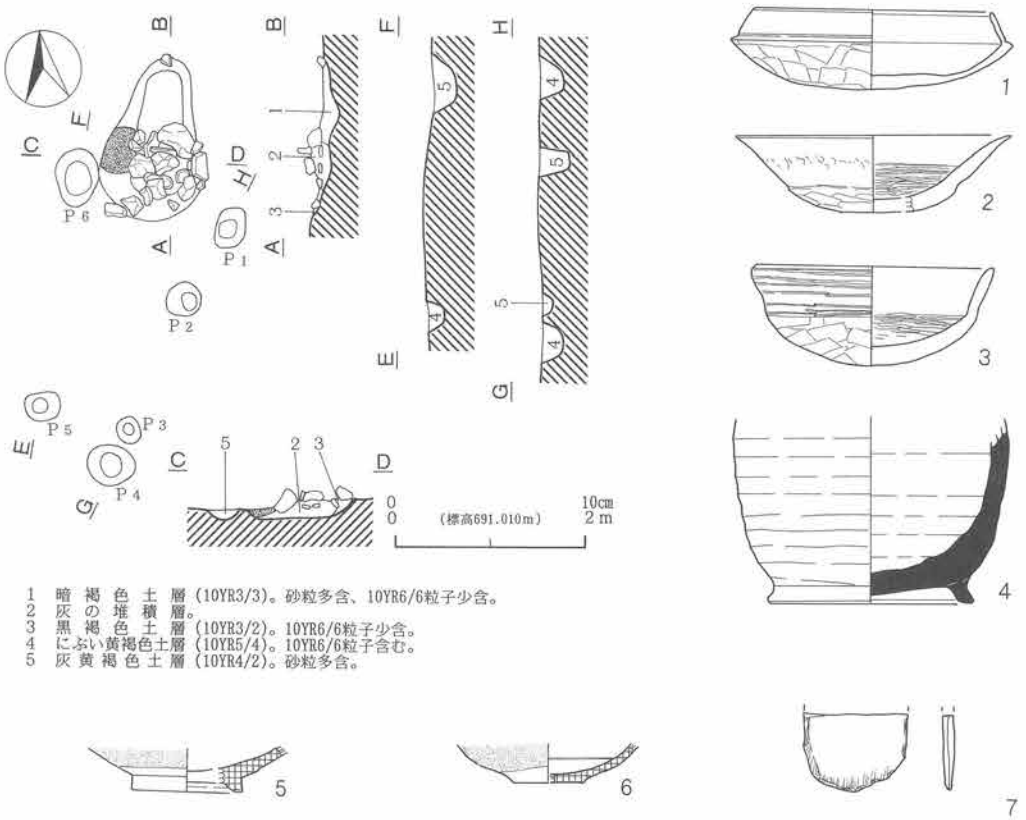
半が存在しないため器種を特定できない。外面に篦削り調整が施される。混入品である。白磁は2点共に碗と思われる。5は高台を有する。混入品である。打製石斧7も混入品である。

H184号住居址（第182図、図版百九十八）

遺構－Xか5グリットで検出された。H138号住居址を切る。本址は第2次調査のH13号住居址と同一の住居址である。住居の大半は第2次調査の際に調査されており、今回の調査ではPit

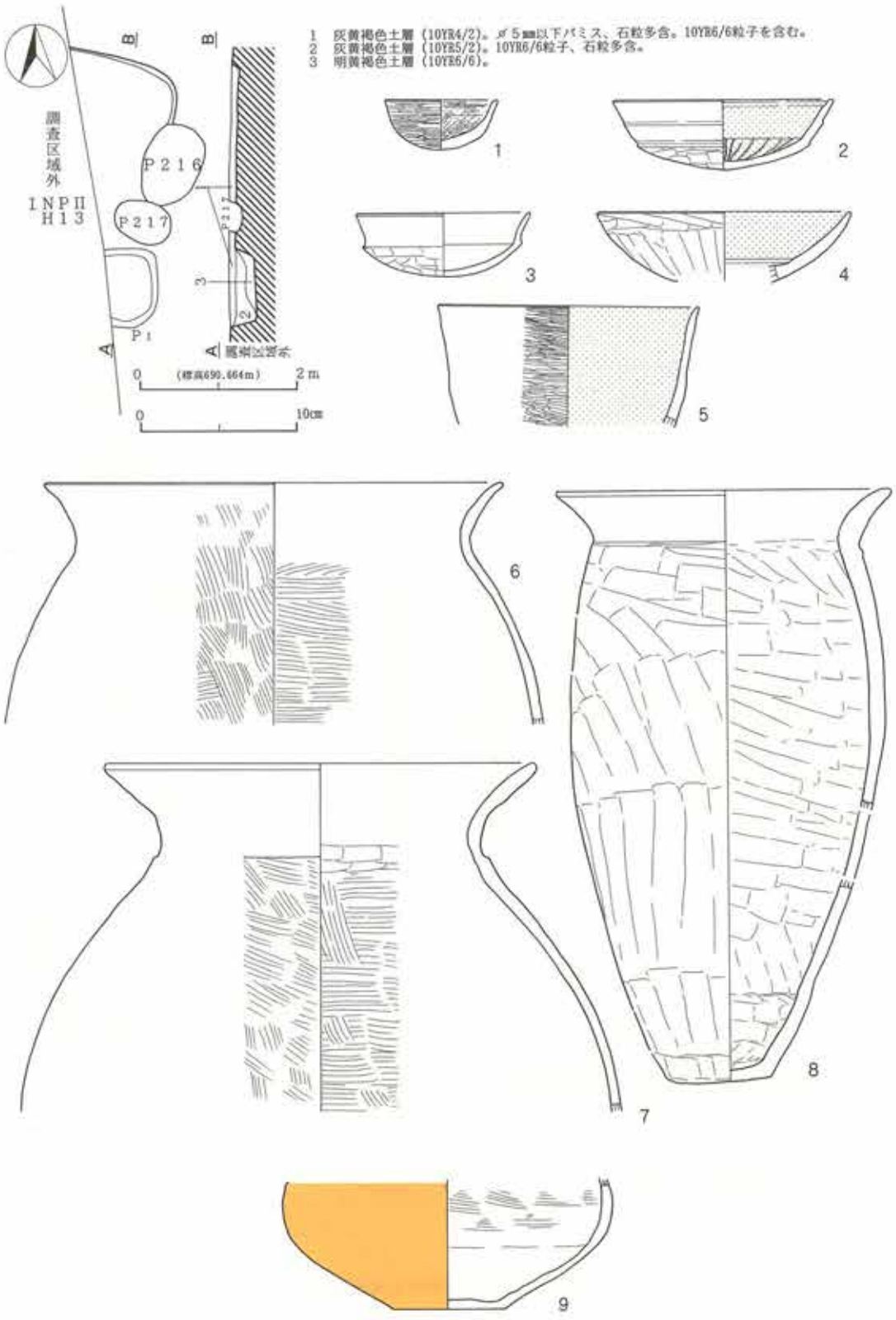
挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
－1	土師器 坏	12.8 2.5 4.2	内－ナデ。 外－篦削り。	
－2	土師器 坏	14.5 － －	内－篦磨き。 外－篦削り。	
－3	土師器 坏	12.8 － 5.2	内－篦磨き。 外－篦削り。	
－4	須恵器 壷	－ 10.9 －	内－ナデ。 外－篦削り。	混入遺物。
－5	白磁 碗	－ 5.8 －		混入遺物。
－6	白磁 碗	－ 3.6 －		混入遺物。
－7	打製石斧	5.4 4.0 6.0		19.0ｇ 混入遺物。

第162表　H183号住居址出土遺物観察表



1　暗褐色土層（10YR3/3）。砂粒多含、10YR6/6粒子少含。
2　灰の堆積層。
3　黒褐色土層（10YR3/2）。10YR6/6粒子少含。
4　にぶい黄褐色土層（10YR5/4）。10YR6/6粒子含む。
5　灰黄褐色土層（10YR4/2）。砂粒多含。

第181図　H183号住居址



第182図　H184号住居址

1基が検出されたにすぎない。2次調査において、カマドが北壁の中央部に構築される「石組粘土カマド」であること、主柱穴2基が確認されている。覆土は自然堆積で周溝は有さない。

遺物－土師器と混入品の弥生土器の赤彩される壺の底部が出土している。土師器には坏（1～3）、高杯（4）、鉢（5）、壺（6・7）、甕（8）が認められる。坏1は小型で半球状を呈する。内面篦磨き調整～黒色処理、外面篦磨きが施される。2・3は須恵器坏蓋の模倣を原形とするもので、2は内面放射暗文～黒色処理、顔面篦削り調整が施される。「有段口縁坏」である。3は橙色で陶質の焼成がなされる。内面ナデ、外面篦削り調整が施される。高杯は内面黒色処理、外面篦削り調整が施される。内面の底部と体部の境に段を有する。鉢5は内面黒色処理、外面篦磨き調整が施される。壺6・7は2点共に内外面に刷毛目調整が施される。甕8は内面ナデ、外面篦削り調整が施される。「武蔵甕」の祖形である。

挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
－1	土師器 坏	7.2 － 3.3	内－篦磨き～黒色処理。 外－篦磨き。	
－2	土師器 坏	14.2 － 4.5	内－放射暗文～黒色処理。 外－篦削り。	有段口縁坏。
－3	土師器 坏	11.3 － 4.0	内－ナデ。 外－篦削り。	橙色・陶質。
－4	土師器 高坏	16.3 － －	内－篦磨き～黒色処理。 外－篦削り。	
－5	土師器 鉢	16.8 － －	内－黒色処理。 外－篦磨き。	
－6	土師器 壷	29.5 － －	内外－刷毛目。	
－7	土師器 壷	27.9 － －	内外－刷毛目。	
－8	土師器 甕	21.5 6.5 38.0	内－ナデ。 外－篦削り。	
－9	弥生土器 壷	－ 7.0 －	内－刷毛目。 外－赤彩。	混入遺物。

第163表　H184号住居址出土遺物観察表

H185号住居址（第183図、図版百九十九）

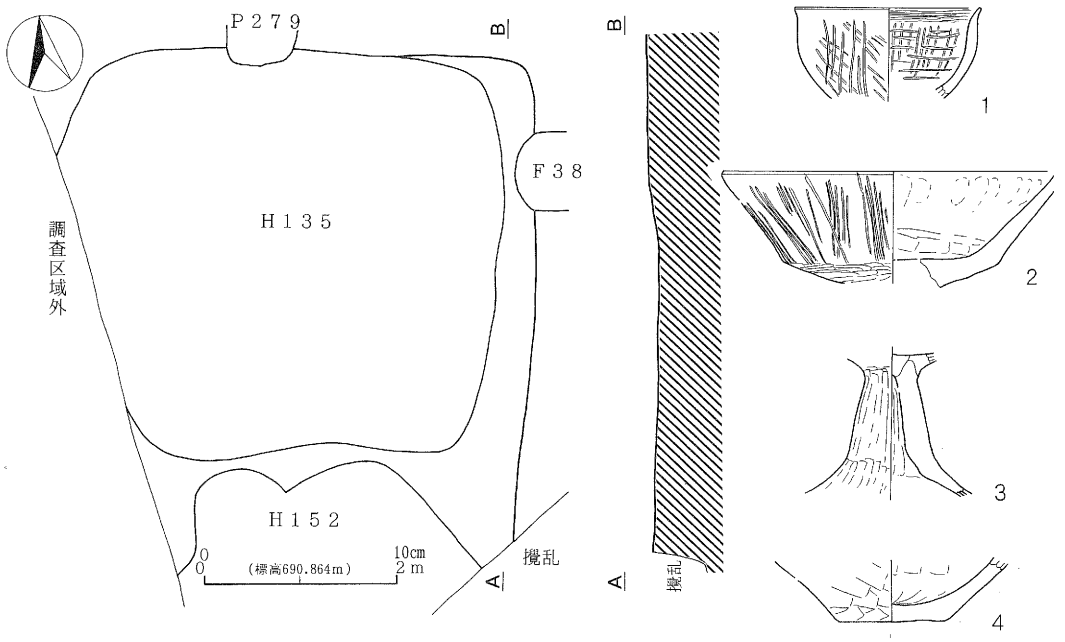
遺構－ⅩⅡこ3グリットで検出された。H135号・H152号住居址、F38号掘立柱建物址に切られる。住居の大半は他遺構との重複により消滅しており、カマド、Pit等は検出されなかった。壁も耕作等により削平されており存在しなかった。床面は地山の砂層との識別が容易であった。

遺物－土師器坏（1）、高杯（2・3）、甕（4）が出土している。坏は半球状を呈し、口縁端

部が短く外反するもので、内外面共に篦磨き調整が施される。高杯２は内面ナデ、外面篦磨き調整が施される。底部と体部の境に稜を有する。３は脚部の破片で、内面篦削り・篦ナデ、外面篦削り調整が施される。甕４は底部片で、内面ナデ、外面篦削り調整が施される。

挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
－1	土師器 坏	9.7 － －	内外－篦磨き。	
－2	土師器 高坏	17.8 － －	内－ナデ。 外－篦磨き。	
－3	土師器 高坏	－ － －	内－篦削り・篦ナデ。 外－篦削り。	
－4	土師器 甕	－ 5.4 －	内－ナデ。 外－篦削り。	

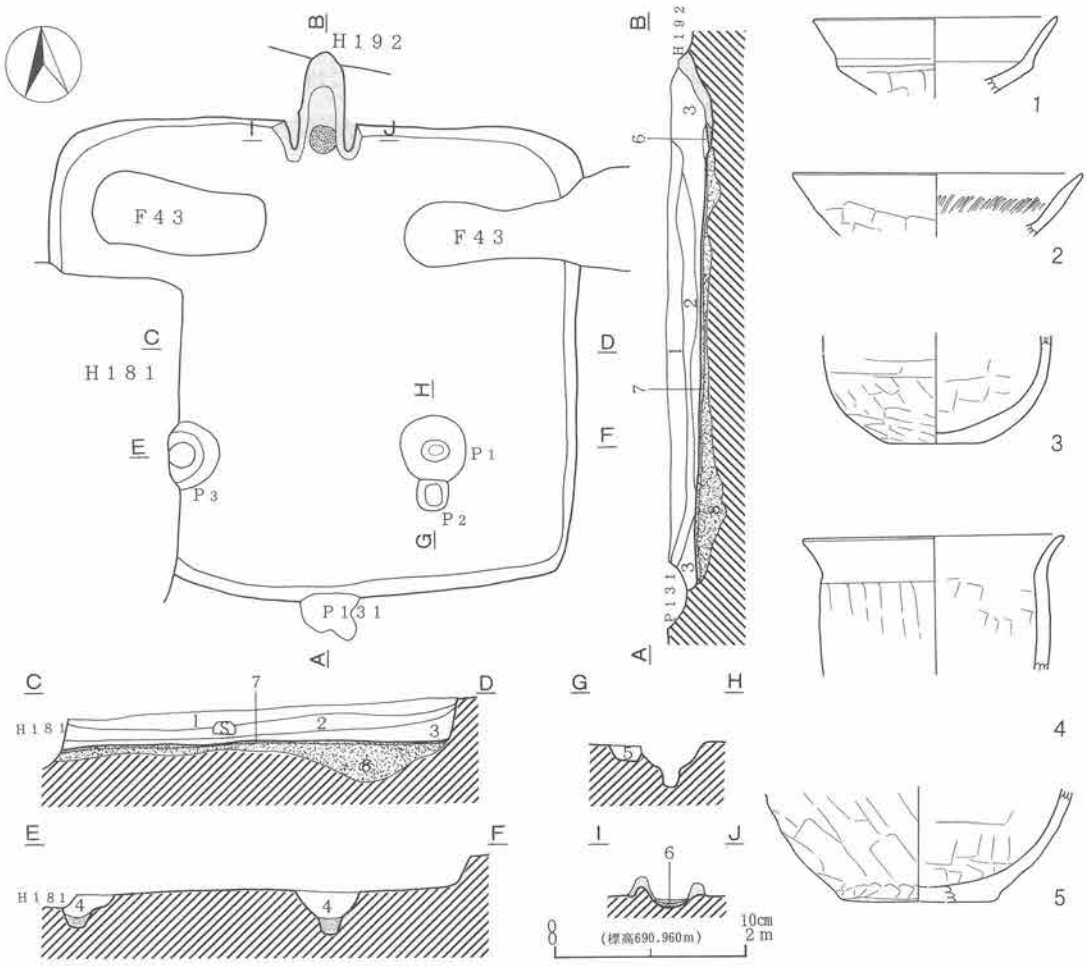
第164表　H185号住居址出土遺物観察表



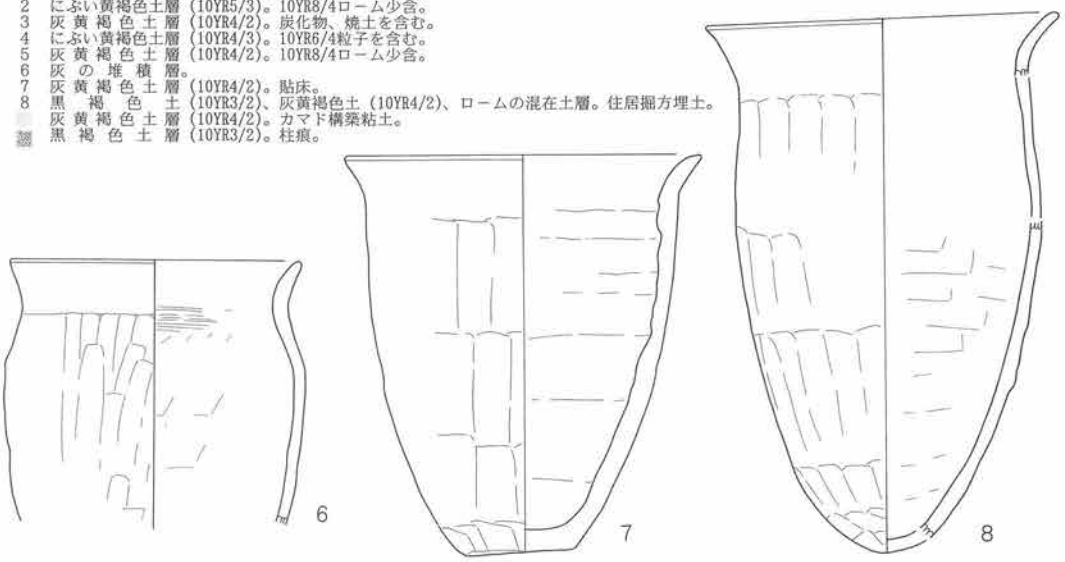
第183図　H185号住居址

H186号住居址（第184・185図、図版百九十九）

遺構－Ⅸき２グリットで検出された。H181号・H192号住居址、F43号掘立柱建物址に切られ、H193号住居址を切る。隅丸方形の平面プランを呈し、南北長5.75ｍ×東西長5.6ｍ×壁残高0.4



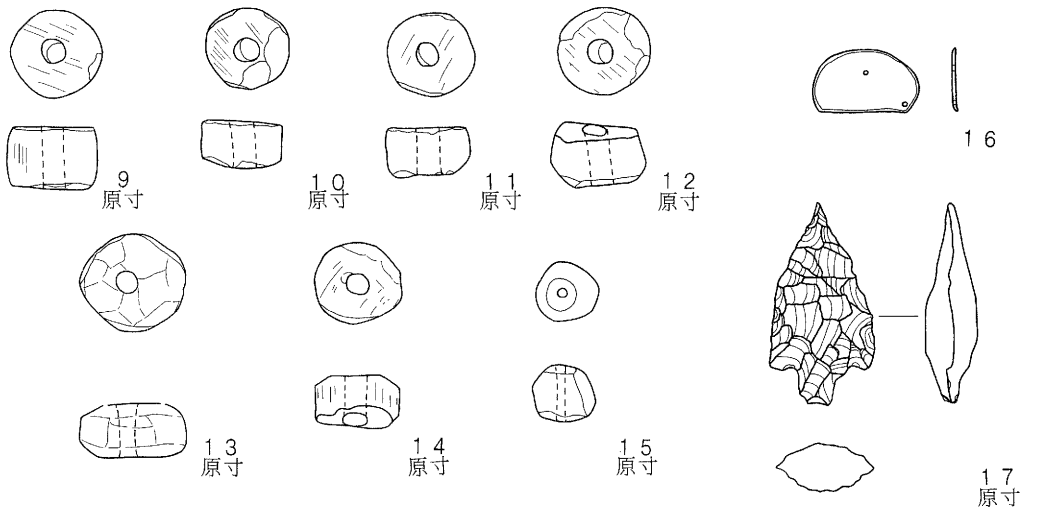
1　にぶい黄褐色土層（10YR5/3）。10YR8/4ローム多含。
2　にぶい黄褐色土層（10YR5/3）。10YR8/4ローム少含。
3　灰黄褐色土層（10YR4/2）。炭化物、焼土を含む。
4　にぶい黄褐色土層（10YR4/3）。10YR6/4粒子を含む。
5　灰黄褐色土層（10YR4/2）。10YR8/4ローム少含。
6　灰の堆積層。
7　灰黄褐色土層（10YR4/2）。貼床。
8　黒褐色土（10YR3/2）、灰黄褐色土（10YR4/2）、ロームの混在土層。住居掘方埋土。
　灰黄褐色土層（10YR4/2）。カマド構築粘土。
　黒褐色土層（10YR3/2）。柱痕。



第184図　H186号住居址（1）

mの規模を有し、N－0°－Eに長軸方位をとる。カマドは北壁の中央部に粘土で構築され、長径1.1m×短径0.56m×深度0.4mの規模である。3基検出されたPitの内P1・P2の2基が主柱穴である。直径25cmの柱が2基共に確認された。本来は4基の主柱穴で構成されるのであろうが、2基はF43号掘立柱建物址により破壊されたものと思われる。覆土は自然堆積で、周溝は存在しなかった。

遺物－土師器、石製品、石器、銅製品が出土している。土師器には坏（1・2）、小型甕（3・4）、甕（5～8）が認められる。坏1は須恵器坏蓋の模倣を原形とするもので、内面ナデ、外面篦削り調整が施される。2は口縁部片であり、形状は不明である。内面篦磨き、外面篦削り調整が施される。小型甕は2点共に内面ナデ、外面篦削り調整が施される。甕は全て長胴で、7・8は口縁部に最大径を有する。内面ナデ、外面篦削り調整が施される。6は体部上半の肩に最大径を有し、内面刷毛目・ナデ、外面篦削り調整が施される。石製品は9～15の滑石製の臼玉が出土している。石器は17の打製石鏃が出土しているが、混入品である。銅製品は16の帯金具の丸鞆の裏止め金具が出土している。



第185図　H186号住居址（2）

H193号住居址（第186図、図版七十六・二百一）

遺構－Xく1グリットで検出された。H191号・H192号住居址、F43号掘立柱建物址に切られる。住居の大半が他遺構との重複関係により消滅しているため、規模・形状等は判然としない。壁残高0.15mを測る。調査区域内にはカマドは存在せず、覆土は自然堆積であった。周溝は有さ

挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
－1	土師器 坏	12.9 － －	内－ナデ。 外－篦削り。	
－2	土師器 坏	15.4 － －	内－篦磨き。 外－篦削り。	
－3	土師器 小型甕	－ 4.8 －	内－ナデ。 外－篦削り。	
－4	土師器 小型甕	13.8 － －	内－ナデ。 外－篦削り。	
－5	土師器 甕	－ 8.4 －	内－ナデ。 外－篦削り。	
－6	土師器 甕	15.5 － －	内－ナデ・刷毛目。 外－篦削り。	
－7	土師器 甕	18.9 5.6 21.1	内－ナデ。 外－篦削り。	
－8	土師器 甕	18.7 － 28.3	内－ナデ。 外－篦削り。	
－9	臼玉	1.2 1.2 0.8		1.8g
－10	臼玉	1.1 1.05 0.6		1.2g
－11	臼玉	1.1 1.1 0.6		1.3g
－12	臼玉	1.25 1.1 0.85		1.9g
－13	臼玉	1.4 1.3 0.7		2.0g
－14	臼玉	1.1 1.05 0.4		1.1g
－15	臼玉	0.8 0.8 0.8		0.5g
－16	銅製品 丸鞆 裏止金具	2.7 1.7 0.1		2.3g
－17	打製石鏃	2.7 1.4 0.6		1.7g

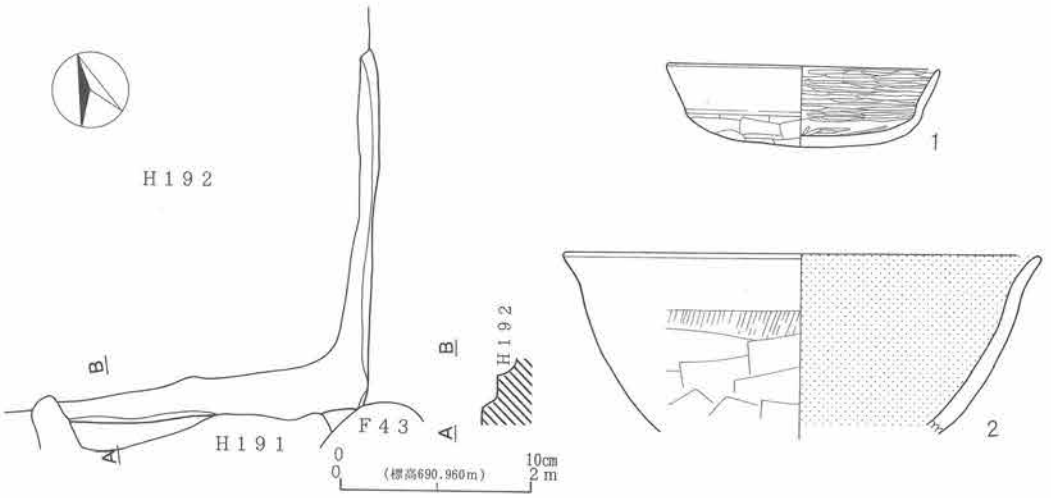
第165表　H184号住居址出土遺物観察表

ない。

遺物－土師器坏（1）、鉢（2）が出土している。坏は須恵器坏蓋の模倣を原形とするもので、内面篦磨き、外面篦削り調整が施される。鉢は深い半球状を呈するもので、内面黒色処理、外面

挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
－1	土師器 坏	14.5 2.0 4.3	内－篦磨き。 外－篦削り。	
－2	土師器 鉢	25.3 － －	内－刷毛目→篦磨き→黒色処理。 外－刷毛目→篦削り。	

第166表　H193号住居址出土遺物観察表



第186図　H193号住居址

には刷毛目調整後篦削り調整が施される。

H194号住居址（第187・188図、図版七十六・二百一・二百二）

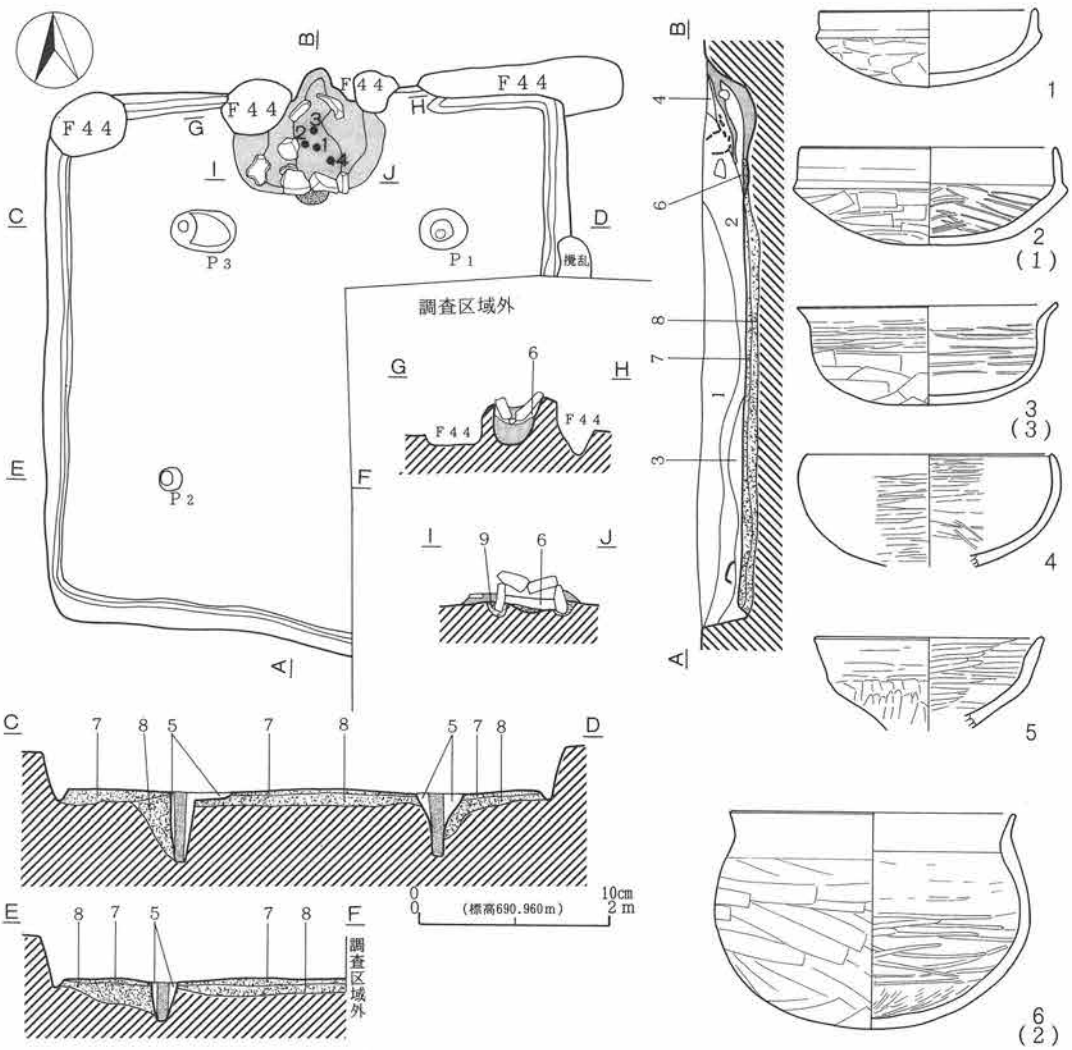
遺構－Ⅶう10グリットで検出された。F44号掘立柱建物址に切られる。隅丸長方形の平面プランを呈し、南北長6.2ｍ×東西長5.55ｍ×壁残高0.5ｍの規模を有し、N－0°－Eに長軸方位をとる。カマドは北壁の中央部分に構築される。石芯を粘土で被覆した、「石組粘土カマド」である。3基検出されたPitは全て主柱穴で、直径10～16cmの柱が全てのPitにおいて確認された。覆土は自然堆積で、カマド部分を除き壁下に幅12cm、床面からの深度12cmの周溝がめぐる。

遺物－土師器坏（1～4）、壺？（5）、鉢（6）、小型甕（8・9）、甕（7・10～13）、壺（14・15）が出土している。坏1・2は須恵器坏蓋の模倣を原形とするもので、1は内面ナデ、外面篦削り調整、2は内面篦磨き、外面篦削り調整が施される。3は半球状を呈し、口縁部が短く外反するもの、内面篦磨き、外面篦削り～篦磨き調整が施される。4は半球状を呈し、内外面に篦磨き調整が施される。壺5は小型で、内面篦磨き、外面篦削り～篦磨き調整が施される。鉢6は

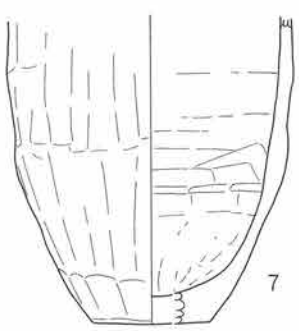
丸底で、外湾する体部から口縁部が短く外反する。内面篦磨き、外面篦削り調整が施される。小型甕8は内面ナデ、外面篦削り調整が施される。9は内面ナデ、外面刷毛目調整が施される。8と異なり、底部が突出する。甕は10・12のように、体部が下脹れに張り、底部が突出するものと、7・11・13のように長胴で、最大径を口縁部に有するものが存在する。調整は、7・10・13が内面ナデ、外面篦削り、11が内面ナデ・刷毛目、外面刷毛目・篦削り調整、12が内面ナデ、外面刷毛目・篦削り調整が施される。壺は2点共に内面ナデ・篦磨き、外面篦削り・篦磨き調整が施さ

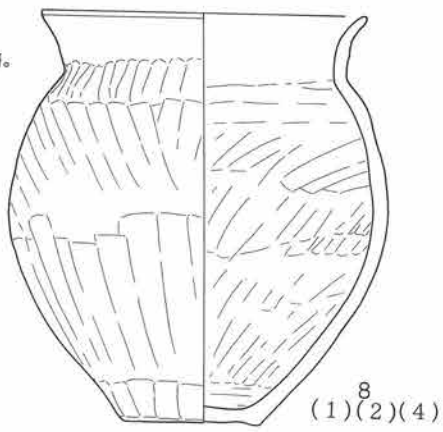
挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
－1	土師器 坏	11.5 － 4.1	内－ナデ。 外－篦削り。	
－2	土師器 坏	13.6 4.0 5.2	内－篦磨き。 外－篦削り。	
－3	土師器 坏	13.8 5.0 5.3	内－篦磨き。 外－篦削り・篦磨き。	No.1
－4	土師器 坏	13.1 － －	内外－篦磨き。	No.3
－5	土師器 壷	12.2 － －	内－篦磨き。 外－篦削り・篦磨き。	須恵器ハソウの模倣？
－6	土師器 鉢	15.2 － 11.5	内－篦磨き。 外－篦削り。	No.2
－7	土師器 甕	－ 6.2 －	内－ナデ。 外－篦削り。	
－8	土師器 小型甕	17.3 7.3 21.8	内－ナデ。 外－篦削り。	No.1・2・4
－9	土師器 小型甕	15.0 6.6 21.2	内－ナデ。 外－刷毛目・篦削り。	
－10	土師器 甕	17.6 7.2 32.1	内－ナデ。 外－篦削り。	
－11	土師器 甕	18.7 6.3 33.8	内－刷毛目・ナデ。 外－刷毛目・篦削り。	No.1
－12	土師器 甕	16.8 7.2 32.5	内－ナデ。 外－刷毛目・篦削り。	
－13	土師器 甕	21.0 － －	内－ナデ。 外－篦削り。	No.2
－14	土師器 壷	－ － －	内－ナデ・篦磨き。 外－篦削り・篦磨き。	
－15	土師器 壷	14.9 － －	内－ナデ。・篦磨き。 外－篦削り・篦磨き。	No.1

第167表　H194号住居址出土遺物観察表

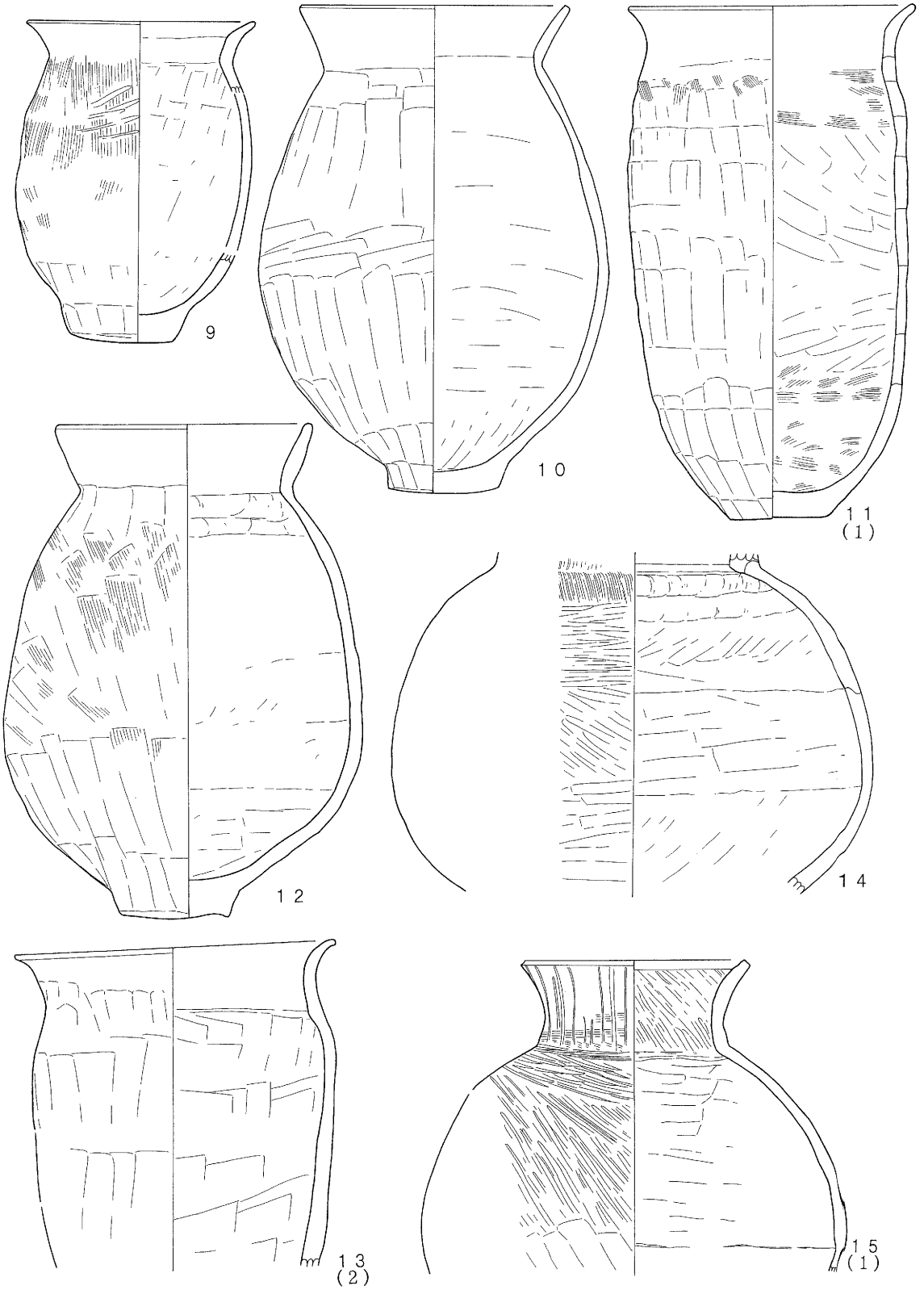


1　暗　褐　色　土　層（10YR3/3）。10YR5/8粒子、φ5㎜大パミスを含む。
2　暗　褐　色　土　層（10YR3/3）。10YR5/8粒子多含。
3　黒　褐　色　土　層（10YR3/2）。10YR5/8粒子、パミスを含む。
4　褐　色　土　層（7.5YR4/6）。5YR5/2粘土粒子、焼土粒子を含む。
5　褐　色　土　層（10YR4/4）。10YR2/1不定大ブロック、砂粒を含む。
6　にぶい黄褐色土層（10YR5/3）。粘土粒子多含。
7　黒　褐　色　土　層（10YR3/1）。貼床。
8　にぶい黄褐色土（10YR5/3）、黒褐色土（10YR2/2）、10YR8/4ロームの混在土層。住居掘方埋土。
9　カマド掘方埋土。
　カマド構築土。10YR7/4、7.5YR5/3の2種類の土が使用されている。





第187図　H194号住居址（1）



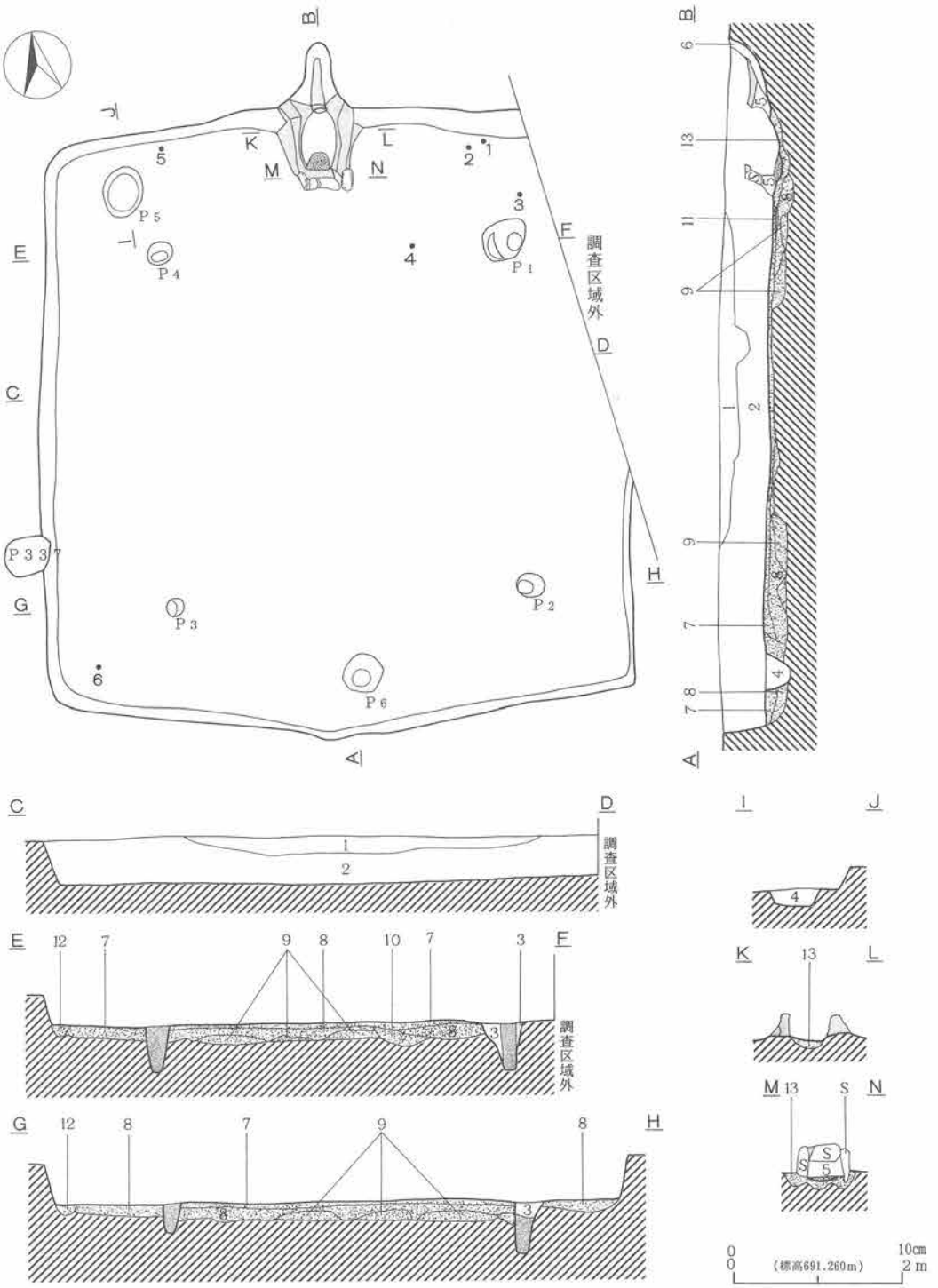
第188図　H194号住居址（2）

れる。

H195号住居址（第189～197図、図版七十七・二百三～二百六）

遺構－Xあ1グリットで検出された。H196号住居址、M8号溝址を切る。隅丸長方形の平面プランを呈し、南北長8.3m×東西長7.5m×壁残高0.6mの規模を有し、N－10°－Eに長軸方位をとる。北壁の中央部分に構築されたカマドは、焚き口先端部分に石組を用いる他は粘土で構築され、長径1.75m×短径1.0m×深度0.4mの規模である。6基検出されたPitの内P1～P4の4基が主柱穴で、直径20～25cmの柱が全てのPitで確認された。覆土は自然堆積で、周溝は有さない。

遺物－土師器、須恵器、弥生土器、石器、鉄器が出土している。土師器には坏（1～11）、小型壺（15・16・24）、鉢（14・21～23）、小型甕（17～19）、甕（20・25～29・32）、壺（30）、高杯（31）、甑（33）が出土している。坏1～9・11は須恵器坏蓋の模倣を原形とするもので、1～8は内面ナデ、外面篦削り調整が施される。2は有段口縁坏である。9・11は内面篦磨き、外面篦削り調整が施される。10は半球状を呈し、内面篦磨き、外面篦削り調整が施される。小型壺15は内面ナデ・篦磨き、外面篦磨き調整が施される。16は内面篦磨き、外面篦削り調整が施される。口縁部には有段口縁坏と同様な手法による段を有する。24は内面ナデ、外面篦削り調整が施される。3点共に篦状工具により口縁部と頸部の境が削り込まれ、段をなす特徴を持つ。鉢14は内面黒色処理され、外面には篦削り調整を施す。21～23は平底から体部が外湾して開き、口縁部が外反する。21は器面が剥落して調整が不明。22は内面篦磨き、外面篦削り調整、23は内面刷毛目、外面篦削り調整が施される。小型甕17は内面ナデ、外面篦削り調整、18は内外面刷毛目調整、19は内面ナデ、外面刷毛目調整が施される。甕は32を除き長胴で口縁部に最大径を有する。調整は20・27が内面ナデ、外面篦削り、25・28・29が内面ナデ・刷毛目、外面刷毛目・篦削り、26が内面刷毛目・ナデ、外面篦削り調整が施される。32は短胴で口縁部に最大径を有する。内面ナデ、外面篦削り調整が施される。壺30も口縁部に有段口縁坏と同様な手法による段を有する。内面ナデ・篦磨き、外面篦磨き調整が施される。高杯は脚部の破片である。比較的長脚で内面篦削り・篦ナデ、外面篦削り調整が施される。甑は小型で多孔のもので、内面ナデ、外面篦削り調整が施される。須恵器には坏（12）と坏蓋（13）が認められる。坏は受部上面に凹線が巡る。坏蓋は端部が丸い。田辺陶邑編年のTK209型式に比定されるように思われる。弥生土器は全て混入品である。34～40は甕、41は壺である。石器は42・43のような編物石、44の砥石、45の磨石、46の紡錘車、47の磨製石斧、48の凹石、49の打製石鏃が出土している。47・49は混入品である。鉄器は50の鉄鏃の基部と思われるものが出土している。

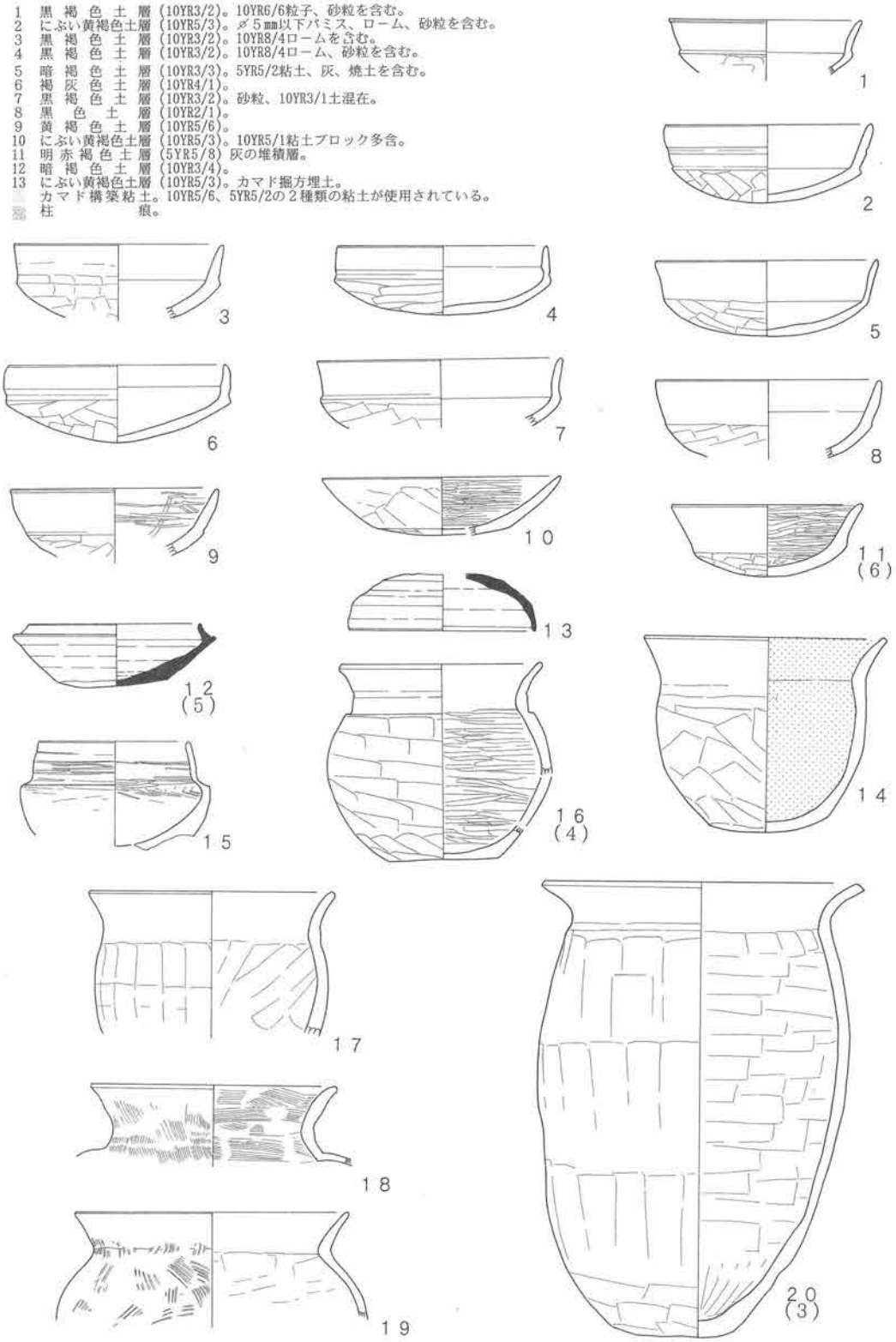


第189図　H195号住居址（1）

挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
−1	土師器 坏	11.9 − −	内−ナデ。 外−篦削り。	
−2	土師器 坏	12.5 − 4.8	内−ナデ。 外−篦削り。	有段口縁坏。
−3	土師器 坏	12.9 − −	内−ナデ。 外−篦削り。	
−4	土師器 坏	12.7 − 4.3	内−ナデ。 外−篦削り。	
−5	土師器 坏	13.5 − 4.7	内−ナデ。 外−篦削り。	
−6	土師器 坏	13.3 − 4.8	内−ナデ。 外−篦削り。	
−7	土師器 坏	15.0 − −	内−ナデ。 外−篦削り。	
−8	土師器 坏	14.0 − −	内−ナデ。 外−篦削り。	
−9	土師器 坏	12.8 − −	内−篦磨き。 外−篦削り。	
−10	土師器 坏	14.8 − −	内−篦磨き。 外−篦削り。	
−11	土師器 坏	11.8 − 4.4	内−篦磨き。 外−篦削り。	No.6
−12	須恵器 坏	10.7 2.5 3.9		No.5 TK−209
−13	須恵器 坏蓋	11.5 − −		TK−209
−14	土師器 鉢	14.4 − 12.0	内−黒色処理。 外−篦削り。	
−15	土師器 小型壺	9.4 − −	内−篦磨き。 外−篦削り・篦磨き。	
−16	土師器 小型壺	12.5 6.8 12.0	内−篦磨き。 外−篦削り。	No.4
−17	土師器 小型甕	15.2 − −	内−ナデ。 外−篦削り。	
−18	土師器 小型甕	15.2 − −	内外−刷毛目。	
−19	土師器 小型甕	16.9 − −	内−ナデ。 外−刷毛目。	

第168表　H195号住居址出土遺物観察表（1）

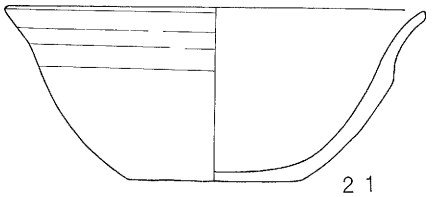
1　黒褐色土層（10YR3/2）。10YR6/6粒子、砂粒を含む。
2　にぶい黄褐色土層（10YR5/3）。φ5㎜以下パミス、ローム、砂粒を含む。
3　黒褐色土層（10YR3/2）。10YR8/4ロームを含む。
4　黒褐色土層（10YR3/2）。10YR8/4ローム、砂粒を含む。
5　暗褐色土層（10YR3/3）。5YR5/2粘土、灰、焼土を含む。
6　褐灰色土層（10YR4/1）。
7　黒褐色土層（10YR3/2）。砂粒、10YR3/1土混在。
8　黒色土層（10YR2/1）。
9　黄褐色土層（10YR5/6）。
10　にぶい黄褐色土層（10YR5/3）。10YR5/1粘土ブロック多含。
11　明赤褐色土層（5YR5/8）灰の堆積層。
12　暗褐色土層（10YR3/4）。
13　にぶい黄褐色土層（10YR5/3）。カマド掘方埋土。
　　カマド構築粘土。10YR5/6、5YR5/2の2種類の粘土が使用されている。
　　柱痕。

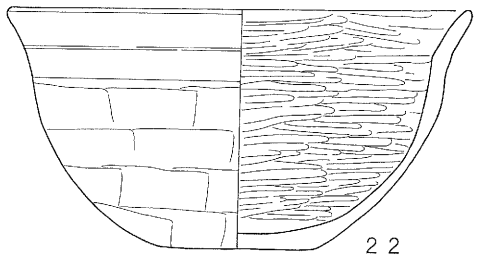


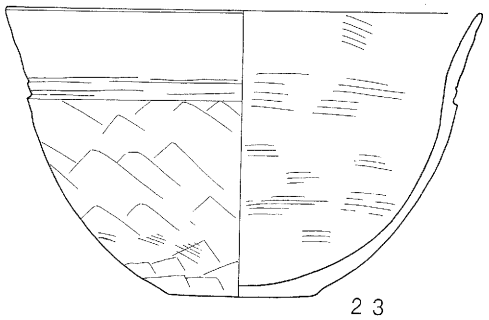
第190図　H195号住居址（2）

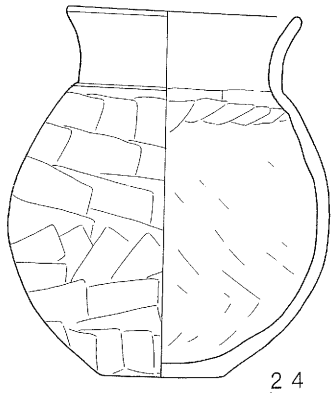
挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
−20	土師器 甕	19.8 5.7 28.1	内−ナデ。 外−篦削り。	No.3
−21	土師器 鉢	22.0 8.8 9.2		
−22	土師器 鉢	24.3 8.0 12.7	内−篦磨き。 外−篦削り。	
−23	土師器 鉢	25.0 7.4 15.2	内−刷毛目。 外−篦削り。	
−24	土師器 壷	12.3 6.3 19.4	内−ナデ。 外−篦削り。	No.4
−25	土師器 甕	21.7 6.9 35.7	内−刷毛目。 外−刷毛目・篦削り。	No.4
−26	土師器 甕	17.3 5.6 32.6	内−ナデ。 外−篦削り。	
−27	土師器 甕	23.3 − −	内−ナデ。 外−篦削り。	
−28	土師器 甕	22.5 − −	内−刷毛目・ナデ。 外−刷毛目・篦削り。	
−29	土師器 甕	19.1 − 36.5	内−刷毛目。ナデ。 外−刷毛目・篦削り。	No.2
−30	土師器 壷	23.4 − −	内−ナデ・篦磨き。 外−篦磨き。	No.1
−31	土師器 高坏	− − −	内−篦ナデ・篦削り。 外−篦削り。	
−32	土師器 甕	26.5 − −	内−ナデ。 外−篦削り。	
−33	土師器 甑	18.6 6.0 13.4	内−ナデ。 外−篦削り。	
−34	弥生土器 甕	− − −	内−篦磨き。 外−口唇部：縄文、口縁部：縄文・篦描波状文、体部：櫛描簾状文。	
−35	弥生土器 甕	− − −	内−篦磨き。 外−口唇部・口縁部：縄文。	
−36	弥生土器 甕	− − −	内−篦磨き。 外−口唇部：刻目、頸部：櫛描条　線、体部：斜走文。	
−37	弥生土器 甕	− − −	内−篦磨き。 外−口唇部：縄文。体部：斜走文。	
−38	弥生土器 甕	− − −	内−篦磨き。 外−斜走文。	

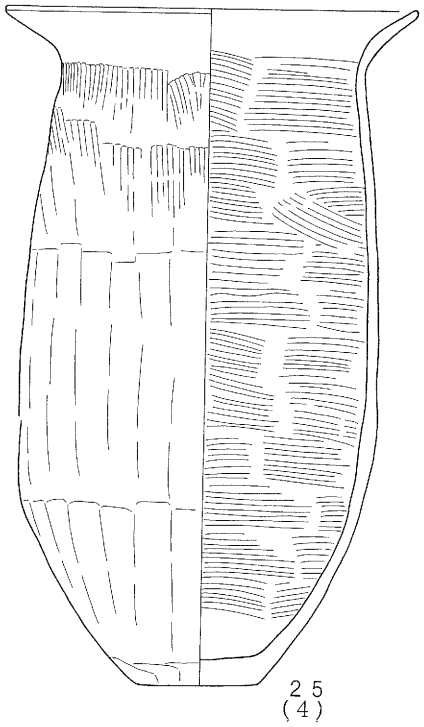
第169表　H195号住居址出土遺物観察表（2）

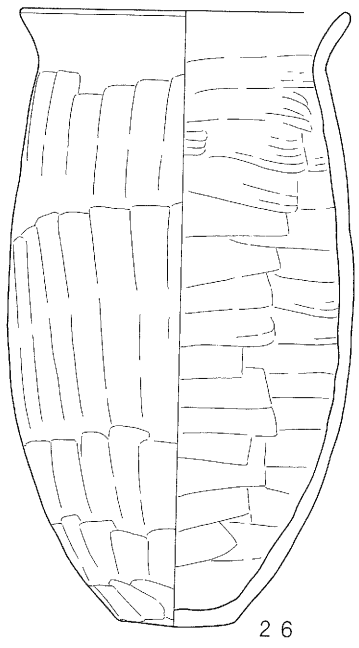




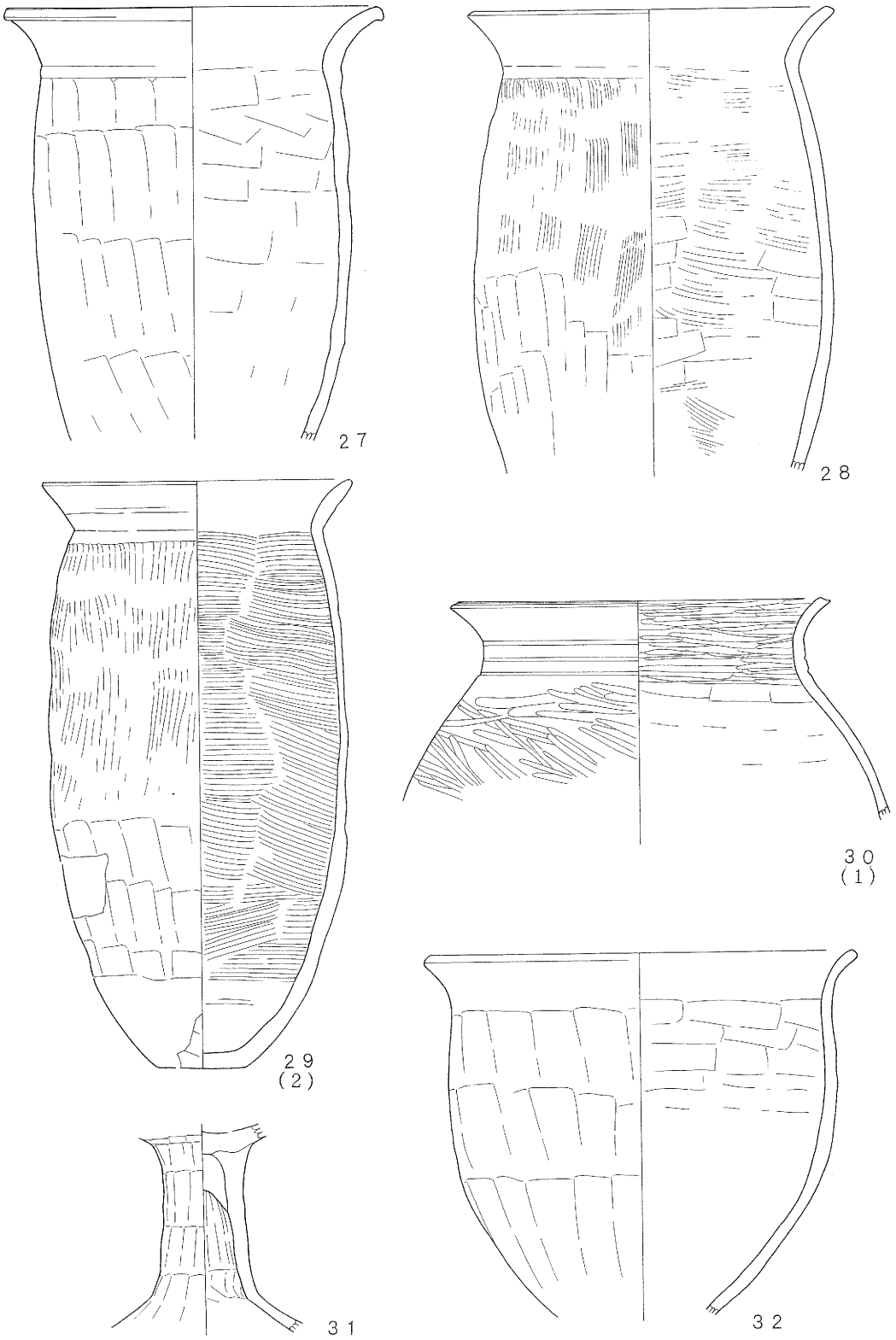




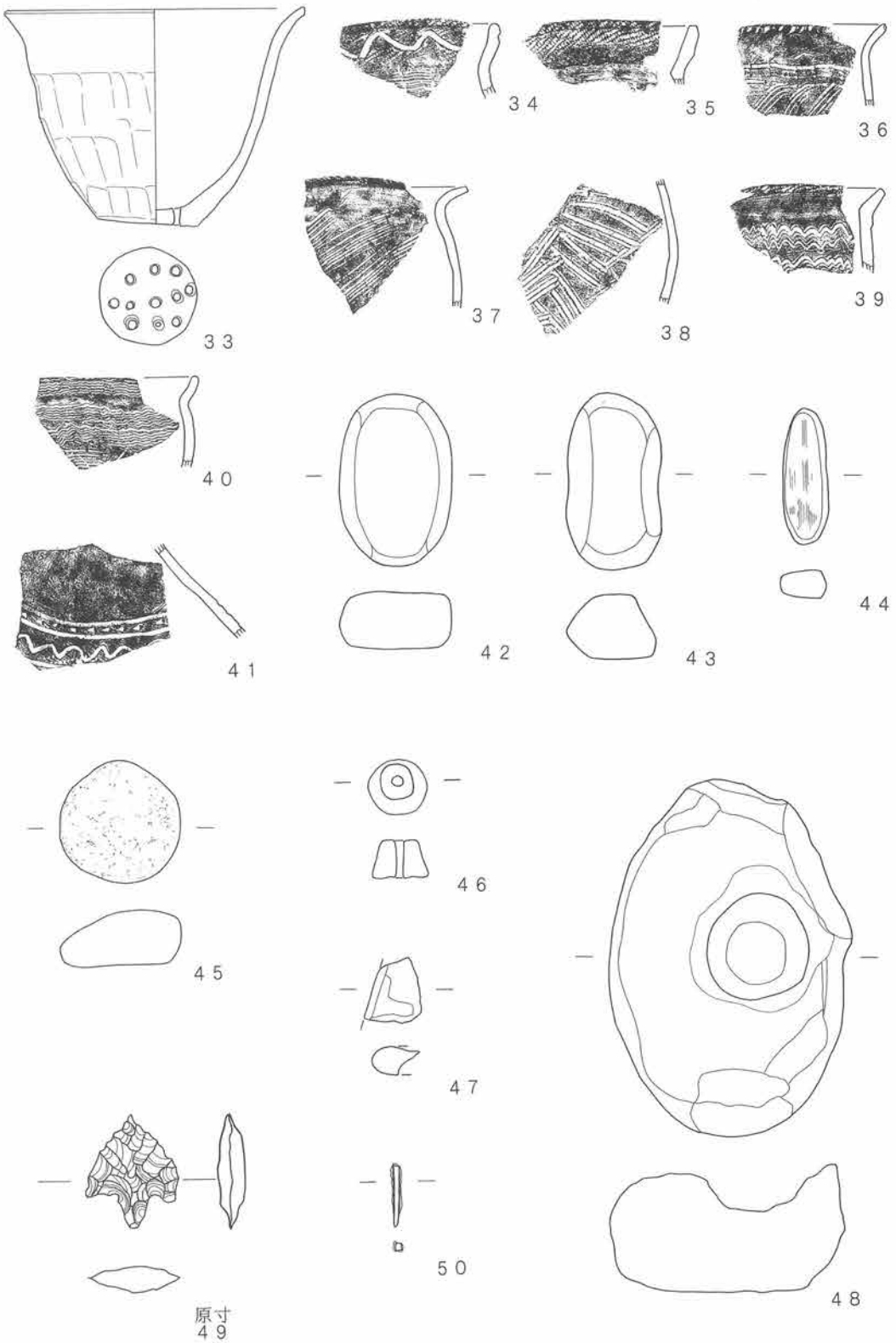




第191図　H195号住居址（3）



第192図　H195号住居址（4）



第193図　H195号住居址（5）

挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
−39	弥生土器 甕	− − −	内−篦磨き。 外−口唇部：縄文、体部：櫛描波状文。	
−40	弥生土器 甕	− − −	内−篦磨き。 外−櫛描波状文。	
−41	弥生土器 壷	− − −	内−ナデ。 外−篦描平行沈線間に刺突列・波状文・縄文。	
−42	編物石	10.6 7.0 3.7		450 g
−43	編物石	11.0 5.8 4.0		460 g
−44	砥石	8.5 2.9 1.6		60 g
−45	磨石	7.6 7.4 3.4		120 g
−46	紡錘車	3.6 3.3 3.5		40 g
−47	磨製石斧	4.0 3.0 1.7		30 g
−48	凹石	22.0 15.0 7.4		2000 g
−49	打製石鏃	1.8 1.4 0.4		0.7 g
−50	鉄鏃	3.9 0.5 0.5		2.8 g

第170表　H195号住居址出土遺物観察表（3）

3　奈良・平安時代の住居址

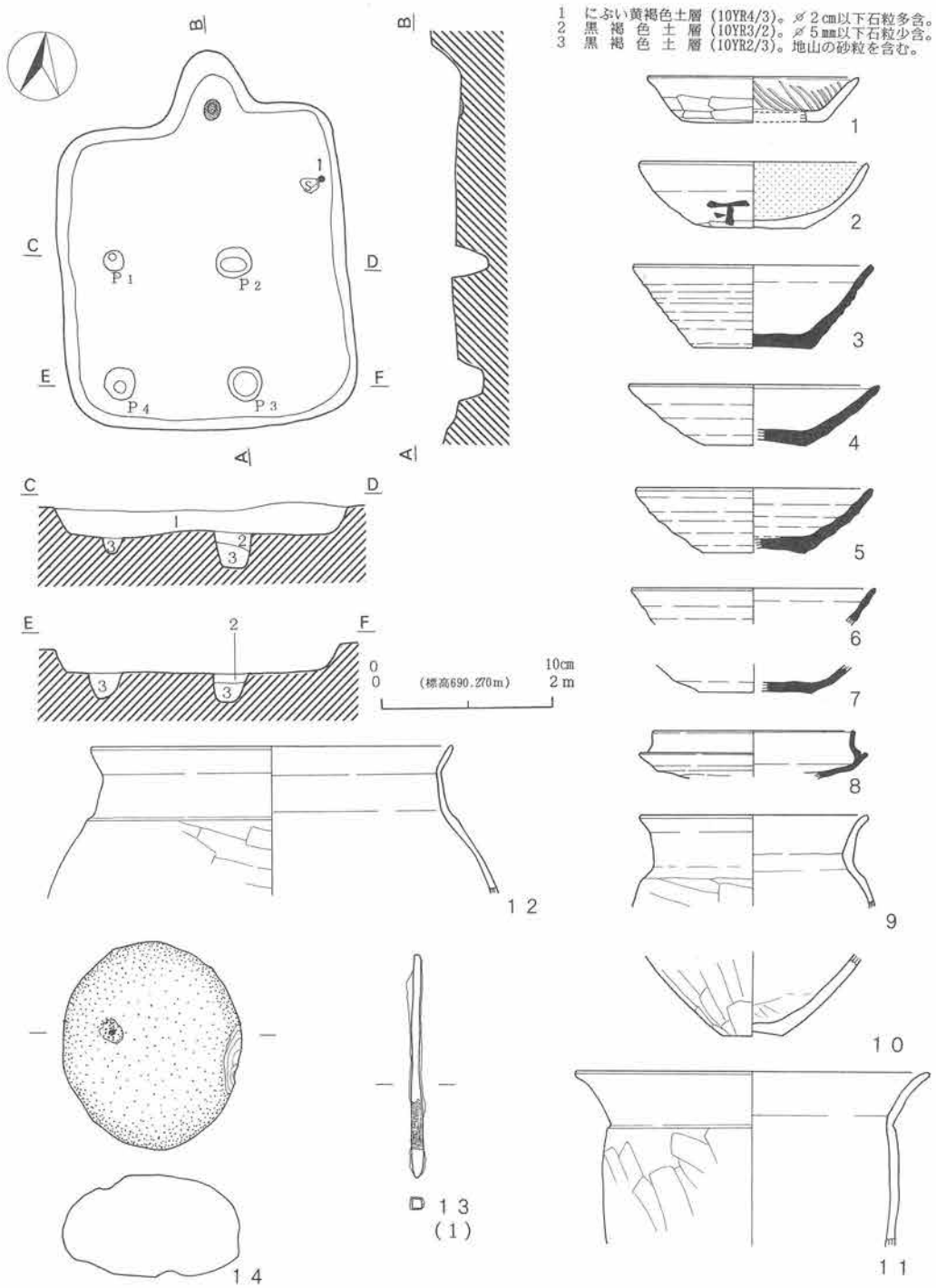
H８号住居址（第194図、図版五・百三）

遺構－Ⅰえ７グリットで検出された。H15号住居址、Ｍ１号溝址を切っている。隅丸長方形の平面プランを呈し、長軸をＮ－10°－Wにとる。長軸長4.45ｍ×短軸長3.38ｍ×壁残高0.38ｍの規模を有する。カマドは北壁の中央部に構築されており、長径1.04ｍ×短径0.94ｍ×深度0.5ｍの規模を有するが構築材は残存していなかった。主柱穴と考えられるＰ１～Ｐ４の４基のPitは南西コーナーに片寄って構築されており、柱痕は確認できなかった。

挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
－1	土師器 坏	12.3 8.1 2.6	内－放射状暗文。 外－篦削り。	No.1 混入遺物。
－2	土師器 坏	13.4 6.4 3.6	内－黒色処理。 外－底部篦削り。	「上」・「下」の墨書。
－3	須恵器 坏	13.9 6.8 4.7	底部回転糸切り。	
－4	須恵器 坏	13.8 6.0 3.7	底部回転糸切り。	
－5	須恵器 坏	14.6 6.0 3.4	底部回転糸切り。	
－6	須恵器 坏	14.2 － －	底部回転糸切り。	
－7	須恵器 坏	－ 6.6 －	底部回転糸切り。	
－8	須恵器 坏	11.7 － －	受部、たちあがりを有する。	混入遺物。
－9	土師器 甕	13.4 － －	内－ナデ。 外－篦削り。	コ字口縁。 武蔵甕。
－10	土師器 甕	－ 3.4 －	内－ナデ。 外－篦削り。	武蔵甕。
－11	土師器 甕	20.8 － －	内－ナデ。 外－篦削り。	混入遺物。 武蔵甕。
－12	土師器 甕	21.7 － －	内－ナデ。 外－篦削り。	コ字口縁。 武蔵甕。
－13	鉄鏃	13.1 0.7 0.5		15.1ｇ 木質残存。 825.0ｇ
－14	凹石	12.2 10.2 6.0		両面に１ヶ所の凹。

第171表　Ｈ８号住居址出土遺物観察表（３）

遺物－土師器、須恵器、鉄器、石器が出土している。土師器には坏（1～2）、甕（9～12）の器種が認められる。1の坏は混入遺物と考えられる。非ロクロ成形で内面には放射状暗文が、外面には篦削りが施されている。2は内面黒色処理、底部篦削り調整が施されるロクロ成形の坏

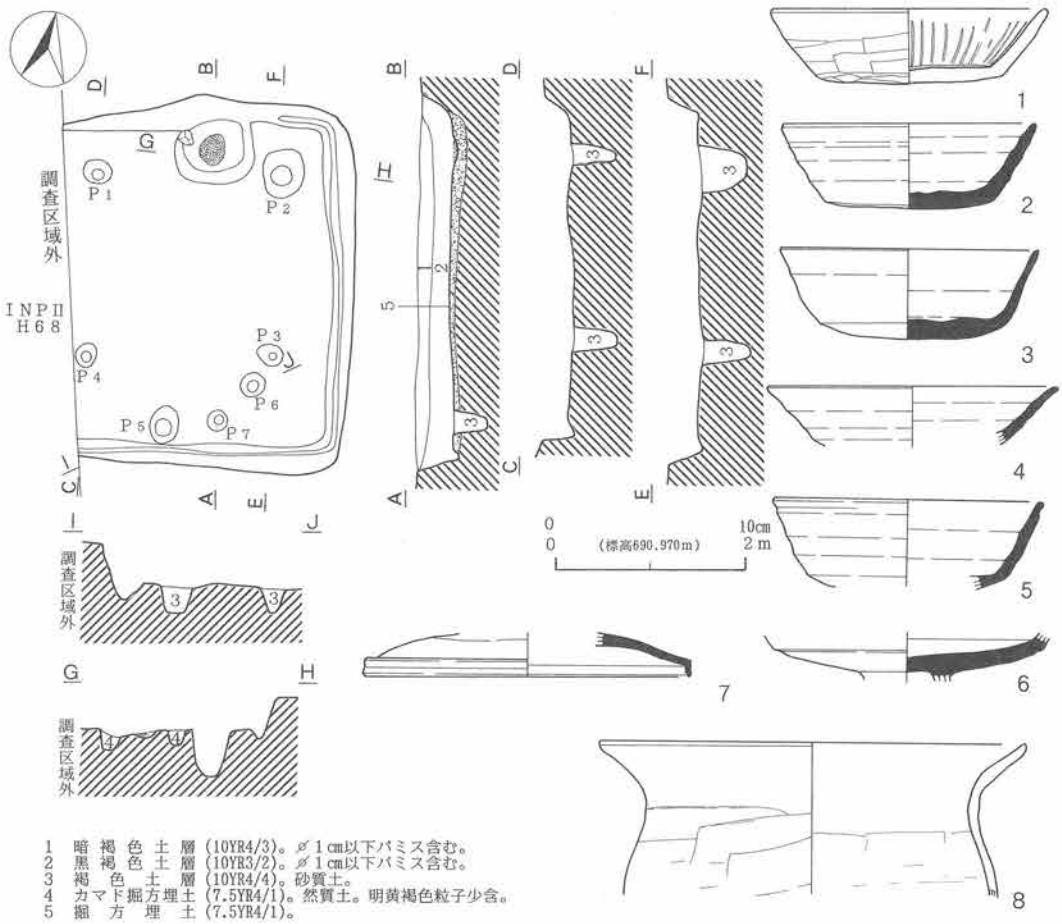


第194図　Ｈ８号住居址

で、「上」ないし「下」の墨書が認められる。甕は全て「武蔵甕」で、9、12は「コ」字口縁を呈する。11は混入遺物と考えられる。須恵器は坏（3～8）のみの出土である。8が混入遺物である他は本址に伴うものと思われる。全て回転糸切りによりロクロから切り離されている。13の鉄器は鉄鏃と思われる。基部周辺には木質が残存している。先端部分は欠損しており形状は不明である。14の石器は凹石で、両面に1ヶ所づつ凹が認められる。

H11号住居址（第195図、図版六・百三）

遺構－Ⅰく10グリットで検出された。H22、H31号住居址を切る。北西、南西コーナーを含む住居の西壁部分は調査区域外に延びるが、ＩＮＰⅡの調査（H68）において調査済みである。隅丸長方形の平面プランを呈し、長軸方位をＮ－10°－Wにとる。長軸長3.92ｍ、壁残高0.35ｍの規模を有する。カマドは北壁の中央に構築されており、長径0.96ｍ×短径0.75ｍ×深度0.35ｍの規模であるが、構築材はほとんど残存していなかった。Pitは7基検出され、この内のＰ1～Ｐ4の4基が主柱穴である。柱痕は確認できなかった。カマド以西の北壁部分を除き周溝が壁下を



1　暗褐色土層（10YR4/3）。φ1cm以下パミス含む。
2　黒褐色土層（10YR3/2）。φ1cm以下パミス含む。
3　褐色土層（10YR4/4）。砂質土。
4　カマド掘方埋土（7.5YR4/1）。粘質土。明黄褐色粒子少含。
5　掘方埋土（7.5YR4/1）。

第195図　H11号住居址

巡っている。覆土は自然堆積である。

遺物－土師器、須恵器が出土している。土師器には坏（1）と甕（8）が認められる。1の坏は、内面に放射状暗文、外面に篦削り調整が施される非ロクロ成形のものである。8の甕は内面ナデ調整、外面篦削りの「武蔵甕」である。須恵器には坏（2～5）、高杯ないし高盤（6）、坏蓋（7）が認められる。坏は底部が残存するものは全て篦切りである。また、5は有台坏と思われる。6は底部部分の破片であるが、体部の立ち上がりの角度から考えると高盤の可能性が強い。7の坏蓋は外面天井部に篦削り調整が認められる。

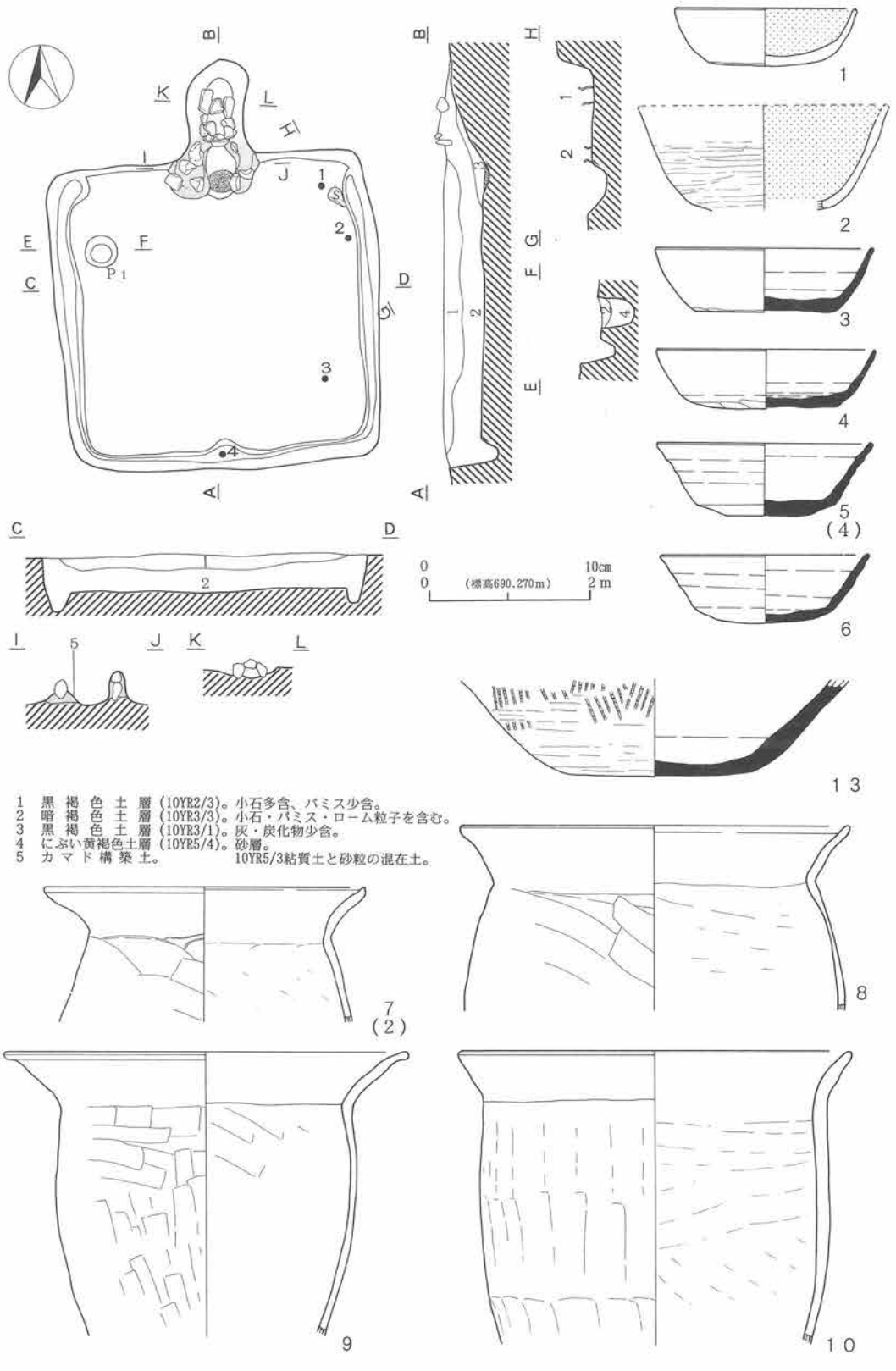
挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
－1	土師器 坏	14.6 9.8 3.8	内－放射状暗文。 外－篦削り。	非ロクロ成形。
－2	須恵器 坏	13.4 8.7 4.4	底部篦切り。	
－3	須恵器 坏	13.6 9.6 4.7	底部篦切り。	
－4	須恵器 坏	15.3 － －	ロクロナデ。	
－5	須恵器 坏	14.2 － －	ロクロナデ。	有台。
－6	須恵器 高盤？	－ － －	ロクロナデ。	
－7	須恵器 坏蓋	－ 17.0 －	外面天井部篦削り。	
－8	土師器 甕	22.7 － －	内－ナデ。 外－篦削り。	武蔵甕。

第172表　H11号住居址出土遺物観察表

H12号住居址（第196・197図、図版六・七・百四）

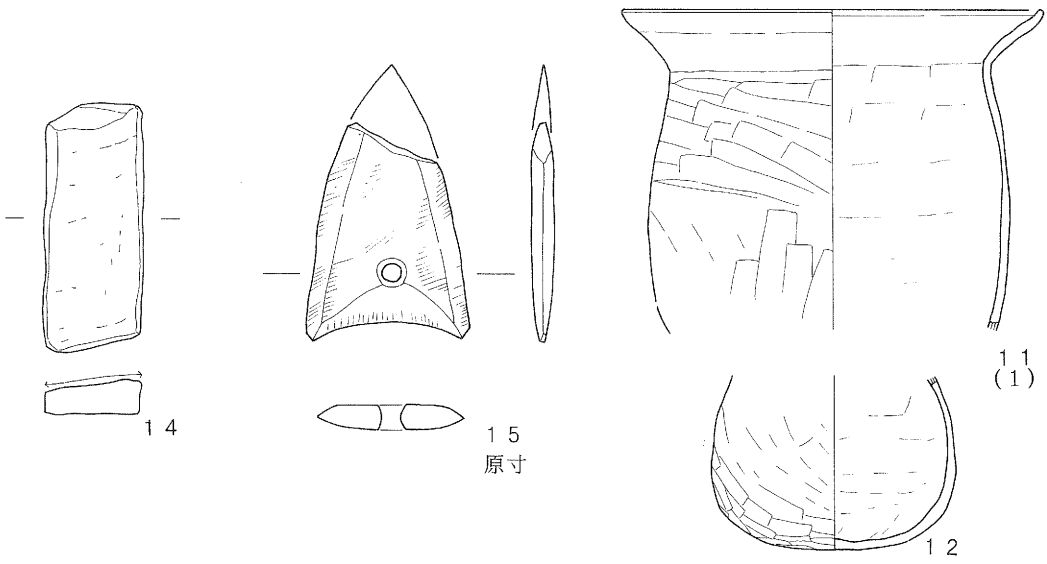
遺構－Ⅰお9グリットで検出された。H71、H112号住居址を切る。隅丸長方形の平面プランを呈し、N－5°－Wに長軸方位をとる長軸長5.1ｍ×短軸長4.05ｍ×壁残高0.4ｍの規模を有する。北壁中央に構築されたカマドは長径1.7ｍ×短径1.01ｍ×深度0.7ｍの規模で、所謂「石組粘土カマド」である。Pitは1基しか存在せず、掘方の状態でも他に確認されなかった。北壁部分を除く壁下に周溝が巡らされていた。また、№1、2の甕は底部を抜いた状態で床面に正位で埋設されていた。覆土は自然堆積である。

遺物－土師器、須恵器、磨石、磨製石鏃が出土している。土師器には坏（1、2）と甕（7～12）が認められる。坏は内面黒色処理され、底部には篦削り調整が施されるロクロ成形のもので、2は外面に篦磨き調整が認められる。甕は全て内面ナデ調整、外面篦削り調整が施されており、



1　黒褐色土層（10YR2/3）。小石多含、パミス少含。
2　暗褐色土層（10YR3/3）。小石・パミス・ローム粒子を含む。
3　黒褐色土層（10YR3/1）。灰・炭化物少含。
4　にぶい黄褐色土層（10YR5/4）。砂層。
5　カマド構築土。　10YR5/3粘質土と砂粒の混在土。

第196図　H12号住居址（1）



第197図　H12号住居址（２）

10、12を除き「武蔵甕」である。10は、外面の篦削りの方向が縦位であること、口縁部がやや短く外反も弱い点が「武蔵甕」とは異なっている。12は下膨れの丸底を呈する底部が「武蔵甕」とは異なっている。須恵器も坏（３～６）と甕（13）が認められる。３、４は回転糸切りの後、外底周縁に篦削り調整を加えるもの、５、６は回転篦切りによりロクロから切り離されている。13の甕は底部のみの出土であり、外面に叩き痕が認められる。14の磨石は１面のみ使用されている。15の磨製石鏃は混入品である。

H19号住居址（第198図、図版十・百九）

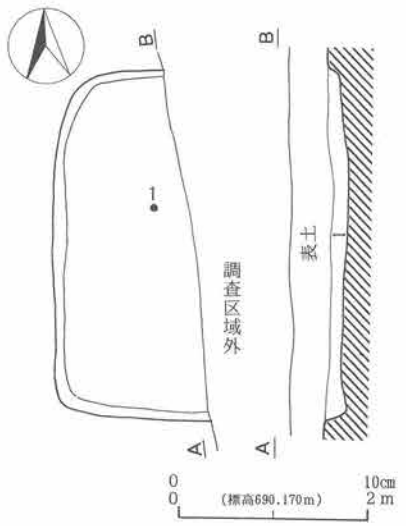
遺構－Ⅱき１グリットで検出された。H25号住居址を切っている。住居の半分以上が、東方向の調査区域外に延びるため全容は不明である。この部分は２次調査（ＩＮＰⅡ）の際に調査が実施されているが、開発側から示される工事範囲と、実際の工事範囲が異なるため、今回の調査区域との間に未調査部分が生じており、本址と２次調査のH66号住居址との重複関係の存在、存在する場合の新旧関係については確認できなかった。壁残高0.2ｍを測り、覆土は自然堆積であった。カマド、柱穴、周溝等は調査部分には存在しなかった。

遺物－土師器、須恵器、鉄器が出土している。土師器には坏（１～９）、有台坏（10・11）、甕（14・15）が存在する。坏は９を除き内面黒色処理が施される。ロクロからの切り離し、及び底部の調整は１・４・５・７が回転糸切り、２・３・６が手持ち篦削り、他は不明である。有台坏は回転糸切り→回転篦削→付高台の成形、調整がなされ、11は黒色処理される。甕は２点共に

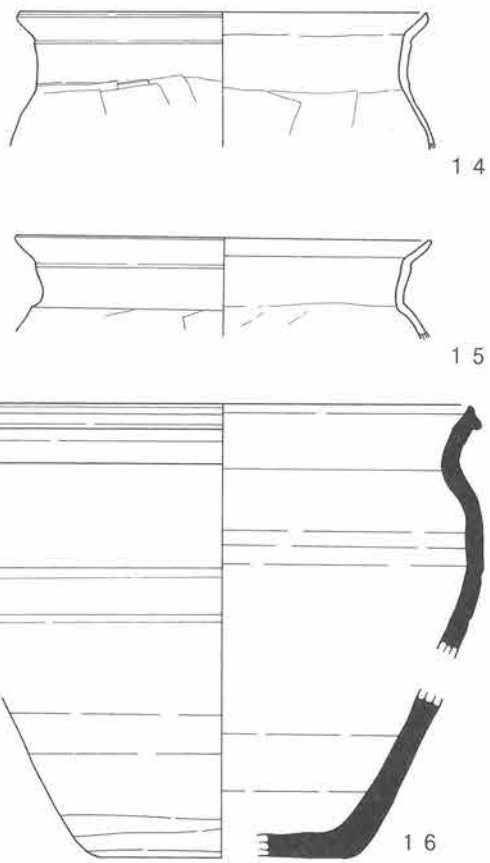
「コ」字口縁の武蔵甕であり、内面ナデ調整、外面篦削り調整が施されている。須恵器には坏(12・13)、甕（16）が存在する。底部を欠損するためロクロからの切り離し方法等は不明である。甕は叩痕がロクロナデにより完全に消去されている。広口で短い口縁部が弱く外反しながら立ち上がり、肩部に最大径を有している。東信地方の該期には普遍的な器形の甕である。刀子は中央部で折れているがほぼ完形である。

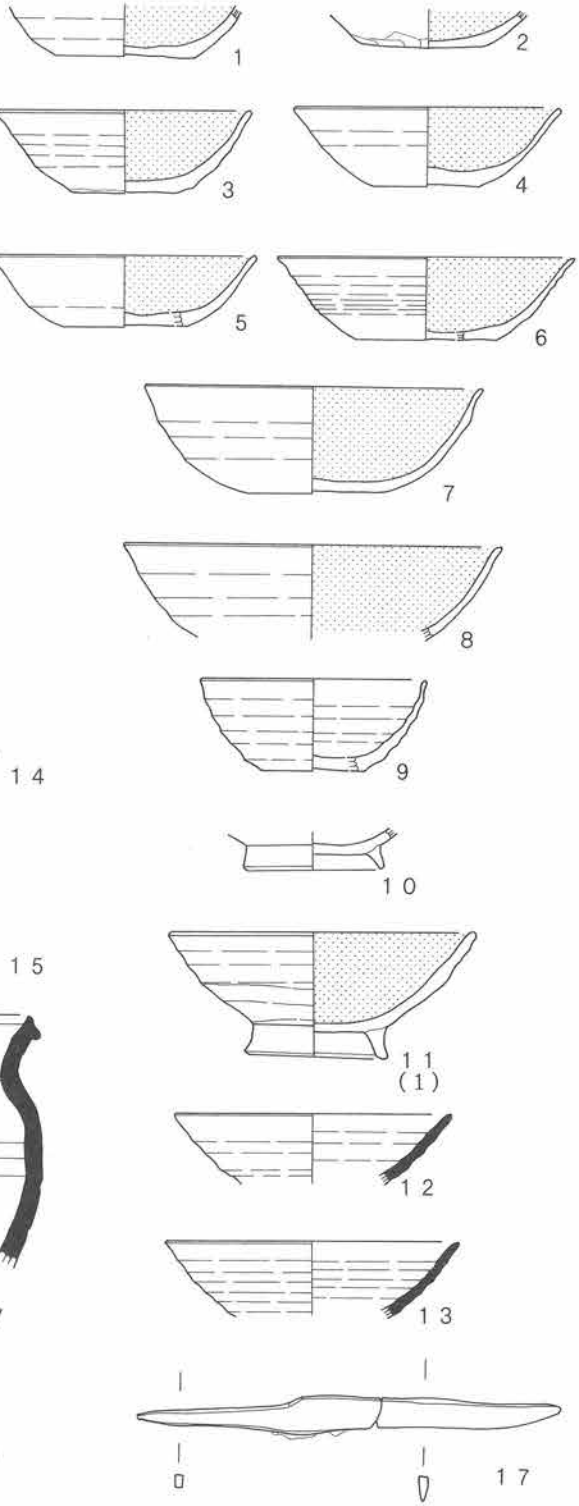
挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
－1	土師器 坏	11.3 6.4 3.5	内－黒色処理。 外－底部篦削り。	ロクロ成形。
－2	土師器 坏	－ － －	内－黒色処理。 外－底部篦削り、篦磨き。	ロクロ成形。
－3	須恵器 坏	13.6 8.4 3.9	底部回転切り～外底周縁篦削り。	
－4	須恵器 坏	13.6 9.2 3.7	底部回転切り～外部周縁篦削り。	
－5	須恵器 坏	13.6 5.5 4.4	回転ヘラ切り。	
－6	須恵器 坏	13.2 8.9 4.2	回転ヘラ切り。	
－7	土師器 甕	22.0 － －	内－ナデ。 外－篦削り。	武蔵甕。
－8	土師器 甕	24.6 － －	内－ナデ。 外－篦削り。	武蔵甕。
－9	土師器 甕	25.6 － －	内－ナデ。 外－篦削り。	武蔵甕。
－10	土師器 甕	24.8 － －	内－ナデ。 外－篦削り。	
－11	土師器 甕	22.5 － －	内－ナデ。 外－篦削り。	武蔵甕。
－12	土師器 甕	－ 6.5 －	底部篦切り。	
－13	土須恵器 甕	－ 12.0 －	内－ナデ。 外－篦削り。	
－14	磨石	12.9 5.1 1.9		一面使用。
－15	磨製石鏃	－ 2.1 0.35	ロクロナデ。	混入遺物。

第173表　H12号住居址出土遺物観察表（1）



1　黒褐色土層（10YR3/2）。10YR6/6粒子、∅5㎜大石粒少含。





第198図　H19号住居址

挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
－1	土師器 坏	－ 6.8 －	内－黒色処理。 外－右回糸切り。	
－2	土師器 坏	－ 7.4 －	内－黒色処理。 外－底部篦削り。	
－3	土師器 坏	13.1 6.0 4.3	内－黒色処理。 外－底部篦削り。	
－4	土師器 坏	14.1 5.7 4.1	内－黒色処理。 外－右回糸切り。	
－5	土師器 坏	14.1 6.6 3.7	内－黒色処理。 外－右回糸切り。	
－6	土師器 坏	15.8 7.5 4.3	内－黒色処理。 外－底部篦削り。	
－7	土師器 坏	17.9 7.0 5.6	内－黒色処理。 外－右回糸切り。	
－8	土師器 坏	20.0 － －	内－黒色処理。	
－9	土師器 坏	12.0 5.4 4.8	外－右回糸切り。	
－10	土師器 有台坏	－ 7.3 －	内－黒色処理。 外－回転糸切り→回転ヘラ削り→付高台。	
－11	土師器 有台坏	21.7 － －	内－黒色処理。 外－回転糸切り→回転ヘラ削り→付高台。	No.1
－12	須恵器 坏	14.7 － －		
－13	須恵器 坏	15.6 － －		
－14	土師器 甕	21.7 － －	内－ナデ。 外－篦削り。	「コ」字口縁。 武蔵甕。
－15	土師器 甕	22.0 － －	内－ロクロナデ。	「コ」字口縁。 武蔵甕。
－16	須恵器 甕	26.3 13.5 －	叩き痕をロクロナデにより消去。 外面底部周縁篦削り。	
－17	刀子	22.5 2.1 0.6		46.8ｇ

第174表　H19号住居址出土遺物観察表

H24号住居址（第199図、図版十二・百十一）

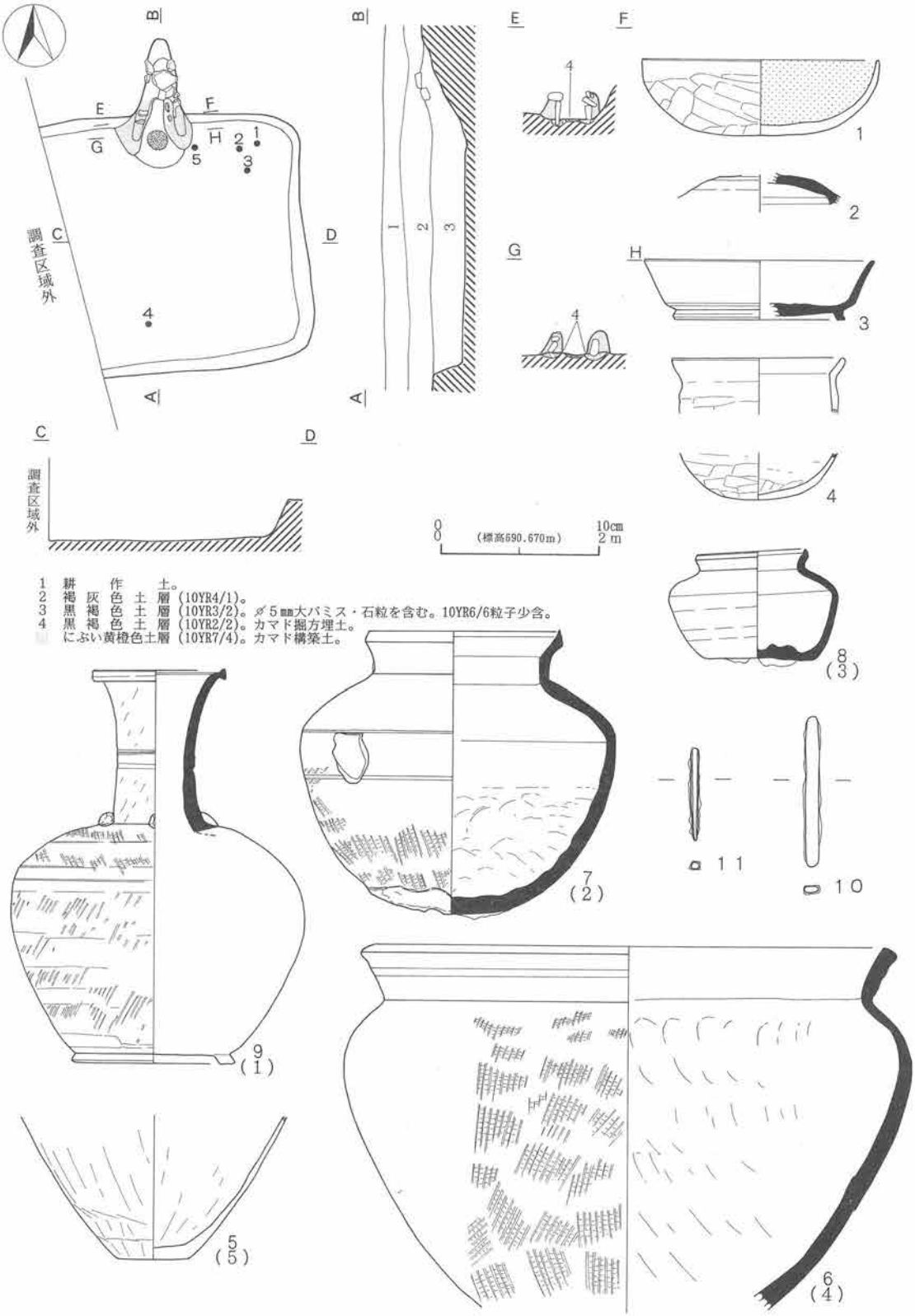
遺構－Ⅱい1グリットで検出された。H117号住居址を切る。長軸長4.3ｍ、壁残高0.45ｍの規

模を有し、長軸方位をN－0°－Wにとる。カマドは北壁の中央部と思われる位置に構築されており、長径1.65m×短径0.95m×深度0.68mを測る。所謂「石組粘土カマド」である。Pitは掘方状態でも検出されなかった。周溝も存在せず、覆土は自然堆積であった。

遺物－土師器、須恵器、鉄器が出土している。土師器には坏（1）、小型甕（4）、甕（5）が認められる。坏は非ロクロ成形の丸底半球状を呈するもので、内面黒色処理、外面篦削り調整が施される。小型甕は体部部分を欠損する。丸底で受口状の口縁部を有する。内面ナデ調整、外面篦削り調整が施される。甕は底部のみの出土であるが、内面ナデ調整、外面篦削り調整が施される「武蔵甕」である。須恵器には坏蓋（2）、有台坏（3）、小型広口壺（8）、短頸壺（7）、長頸壺（9）、甕（6）が認められる。蓋はかえりを有するもので、口縁とつまみ部分を欠損する。有台坏は篦切り、付高台である。小型広口壺と短頸壺は、共に窯体や、破損あるいは窯内部に敷設されていたと思われる他個体の一部分が、自然釉により接着している。短頸壺は肩と体部に2本の沈線が巡らされている。長頸壺は体部に叩き痕を残し、頸部半ばに3本の沈線が巡り、頸部の付け根には4ヶの玉が貼付されている。甕は広口で、短い口縁部が弱く外反しながら立ち上が

挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
－1	土師器 坏	15.2 3.8 4.8	内－黒色処理。 外－篦削り。	非ロクロ成形。
－2	須恵器 坏蓋	－ － －		かえりを有する。
－3	須恵器 有台坏	14.8 11.1 3.7	底部回転篦削り、付高台。	
－4	土師器 小型甕	11.1 － －	内－ナデ。 外－篦削り。	受口状口縁。
－5	土師器 甕	－ 4.6 －	内－ナデ。 外－篦削り。	武蔵甕。
－6	須恵器 甕	34.2 － －	内－ナデ。 外－叩き。	
－7	須恵器 短頸壺	12.2 － 18.1	肩部と体部に2本の沈線。 叩痕。	窯体付着。
－8	須恵器 小型 広口壺	6.3 6.4 6.8		窯体付着。
－9	須恵器 長頸壺	8.4 10.2 25.3	頸部に3本の沈線。 頸部付け根に4ヶの玉貼付。 叩痕。	
－10	?	9.7 1.0 0.3		15.5g
－11	鉄鏃	6.1 0.3 0.4		4.8g

第175表　H24号住居址出土遺物観察表



第199図　H24号住居址

り、最大径を肩部に有するものである。11の鉄器は鉄族の基部、10は不明である。7～9の3個体は床面上で一括して出土した。

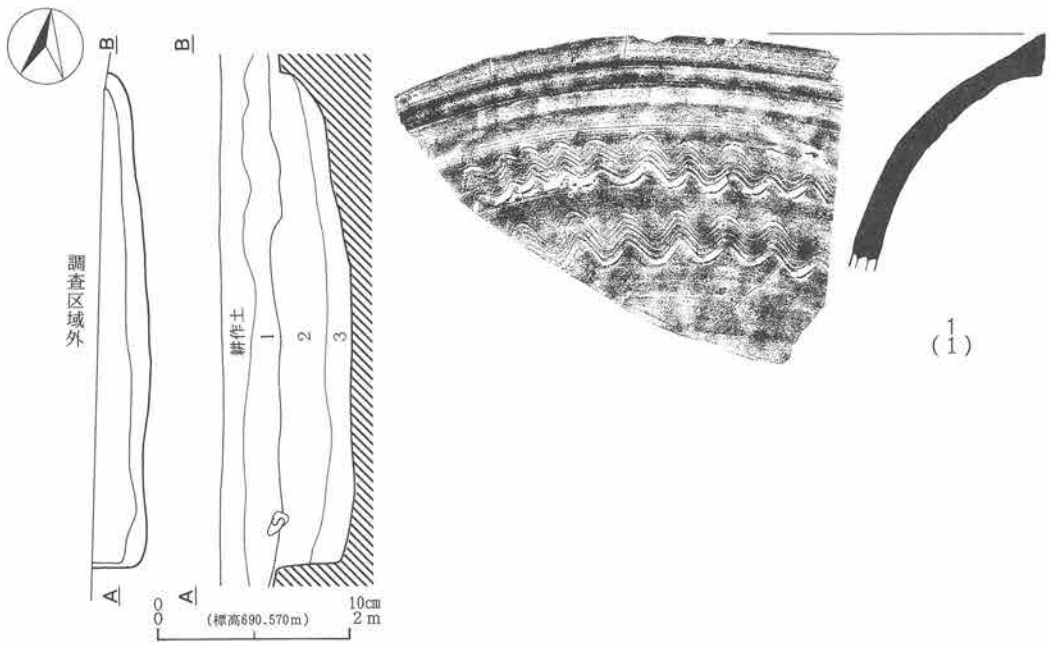
H35号住居址（第200図、図版百十五）

遺構－Ⅱか2グリットで検出された。H21号住居址を切る。住居の大半が調査区域外に延びるため、0.85mを測る壁残高以外の規模、施設は不明である。

遺物－須恵器の大甕が1点出土している。口縁部の破片で、2列の櫛描波状文が巡らされている。

挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
－1	須恵器 甕	－ － －	2列の櫛描波状文。	

第176表　H35号住居址出土遺物観察表



1　灰黄褐色土層（10YR4/2）。
2　にぶい黄褐色土層（10YR5/3）。径2cm以下石粒、10YR6/6粒子多含。
3　黒褐色土層（10YR3/2）。10YR6/6粒子多含。

第200図　H35号住居址

H45号住居址（第201・202図、図版二十一・百二十六・百二十七）

遺構－Ⅲあ6グリットで検出された。H69号住居址を切り、攪乱に切られる。隅丸方形の平面

プランを呈し、長軸長5.95ｍ×短軸長5.75ｍ×壁残高0.35ｍの規模を有する。Ｎ－5°－Ｗに長軸方位をとる。カマドは北壁の中央に構築されていたが、火床がが残存しているだけであった。Pitは床面で５基、掘方から６基検出された。住居廃絶時の主柱穴はＰ１～Ｐ３・Ｐ５である。掘方から検出されたＰ６～Ｐ11の６基のPitは、本址の建て替え以前の主柱穴である。住居の床面積の拡大、あるいは縮小の痕跡は認められないことから、上屋だけが建て替えられたものと推測される。覆土は自然堆積であった。

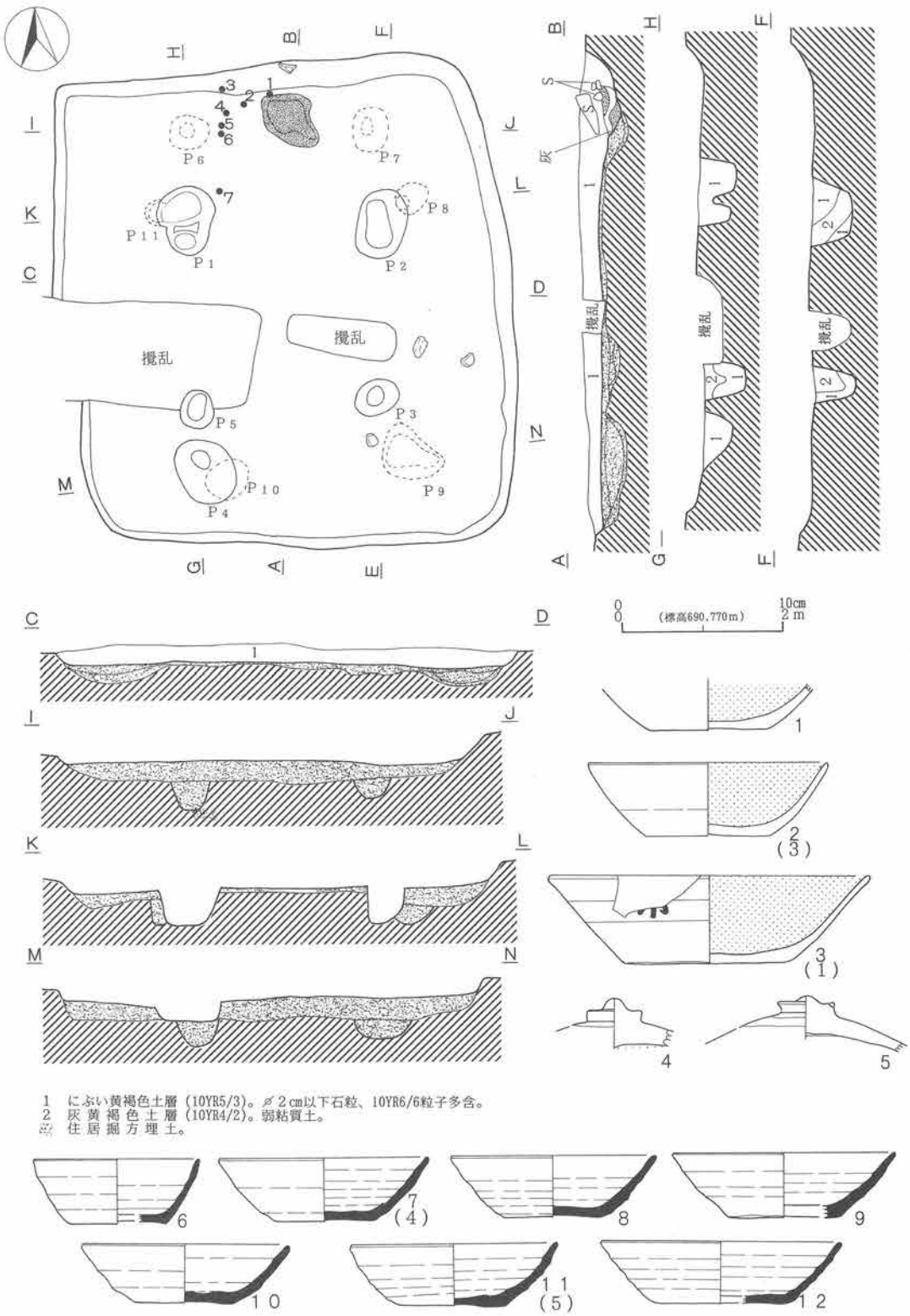
遺物－土師器、須恵器、土製品、鉄器、石器が出土している。土師器には坏（１・２）、鉢（３）、坏蓋（４・５）、甕（15～20）が認められる。坏は内面黒色処理がなされ、底部は篦削りが施される。鉢は坏の法量を大きくしたものであり、調整等は坏と同様である。墨書が認められる。坏蓋は須恵器を模倣した形態で、４は内面黒色処理が施されている。甕は20を除き全て「武蔵甕」である。20は掘方より出土したもので本址に伴うものではない。須恵器には坏（６～12）、坏蓋（13）、甕（14・21）、短頸壺（22）が認められる。坏は全てが底部回転糸切りである。坏蓋は扁平な擬宝珠つまみの付くもので天井部に篦削りが施されている。14は甕ないしは壺の底部であるが、外面が円滑になっており転用硯と思われる。土製品としては23の紡錘車が出土している。鉄器は27・28のような鉄族と、用途不明な26のようなリング状のものが出土している。石器は24の砥石と、本址に伴うものではないが、25の片刃の磨製石斧が出土している。

挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
－1	土師器 坏	－ 7.4 －	内－黒色処理。 外－底部篦削り。	
－2	土師器 坏	14.8 7.5 4.6	内－黒色処理。 外－底部篦削り。	
－3	土師器 鉢	19.8 10.0 5.6	内－黒色処理。 外－底部篦削り。	墨書。
－4	土師器 坏蓋	－ － －	内－ナデ。 外－篦削り。	
－5	土師器 坏蓋	－ － －	内－ナデ。 外－篦削り。	
－6	須恵器 坏	10.3 6.0 4.0	底部右回転糸切り。	
－7	須恵器 坏	13.0 6.0 4.0	底部右回転糸切り。	
－8	須恵器 坏	12.6 6.0 3.9	底部右回転糸切り。	
－9	須恵器 坏	13.7 6.0 4.1	底部右回転糸切り。	

第177表　Ｈ45号住居址出土遺物観察表（１）

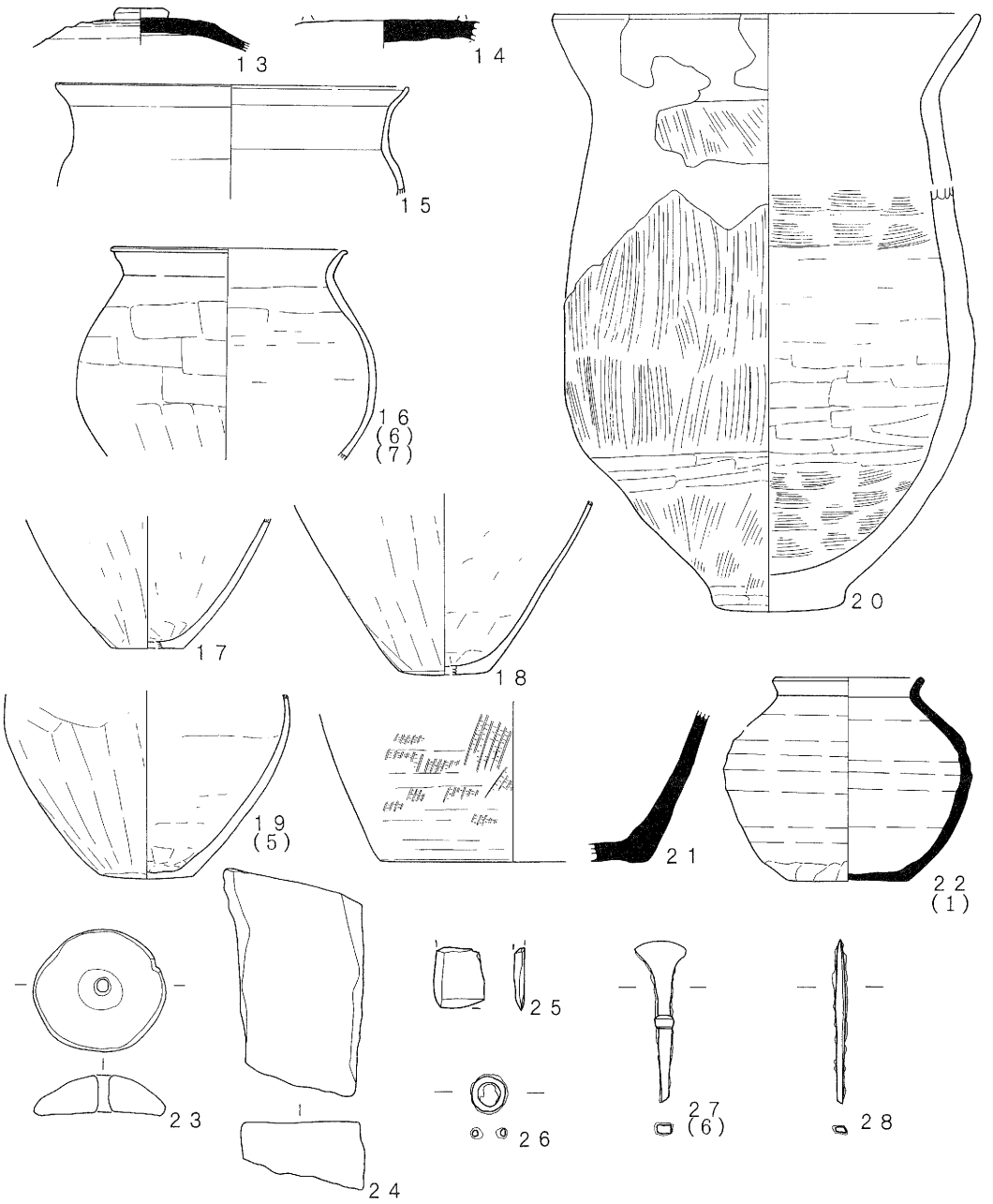
挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
−10	須恵器 坏	12.8 6.0 3.7	底部右回転糸切り。	
−11	須恵器 坏	12.7 6.0 4.0	底部右回転糸切り。	
−12	須恵器 坏	15.0 8.0 3.9	底部右回転糸切り。	
−13	須恵器 坏蓋	− − −	天井部篦削り。	
−14	須恵器 甕	− − −		転用硯。
−15	土師器 甕	19.8 − −	内−ナデ。 外−篦削り。	武蔵甕。
−16	土師器 甕	13.0 − −	内−ナデ。 外−篦削り。	武蔵甕。
−17	土師器 甕	− 4.0 −	内−ナデ。 外−篦削り。	武蔵甕。
−18	土師器 甕	− 5.1 −	内−ナデ。 外−篦削り。	武蔵甕。
−19	土師器 甕	− 5.2 −	内−ナデ。 外−篦削り。	武蔵甕。
−20	土師器 甕	23.7 7.5 33.9	内−ナデ・刷毛目。 外−ナデ・刷毛目。	混入品。
−21	須恵器 甕	− 15.2 −	叩き痕。	
−22	短頸壺	8.0 6.8 11.6	底部回転糸切り・篦削り。	
−23	紡錘車	7.4 − 2.3		100 g
−24	砥石	12.8 7.8 3.9		520 g
−25	磨製石斧	− − −		11.4 g
−26	鉄器？	2.0 − 0.3		3.7 g
−27	鉄鏃	9.0 2.9 0.6		16.4 g
−28	鉄鏃	9.3 0.7 0.3		6.8 g

第178表　H45号住居址出土遺物観察表（2）



1　にぶい黄褐色土層（10YR5/3）。φ2cm以下石粒、10YR6/6粒子多含。
2　灰黄褐色土層（10YR4/2）。弱粘質土。
※　住居掘方埋土。

第201図　H45号住居址（1）



第202図　H45号住居址（2）

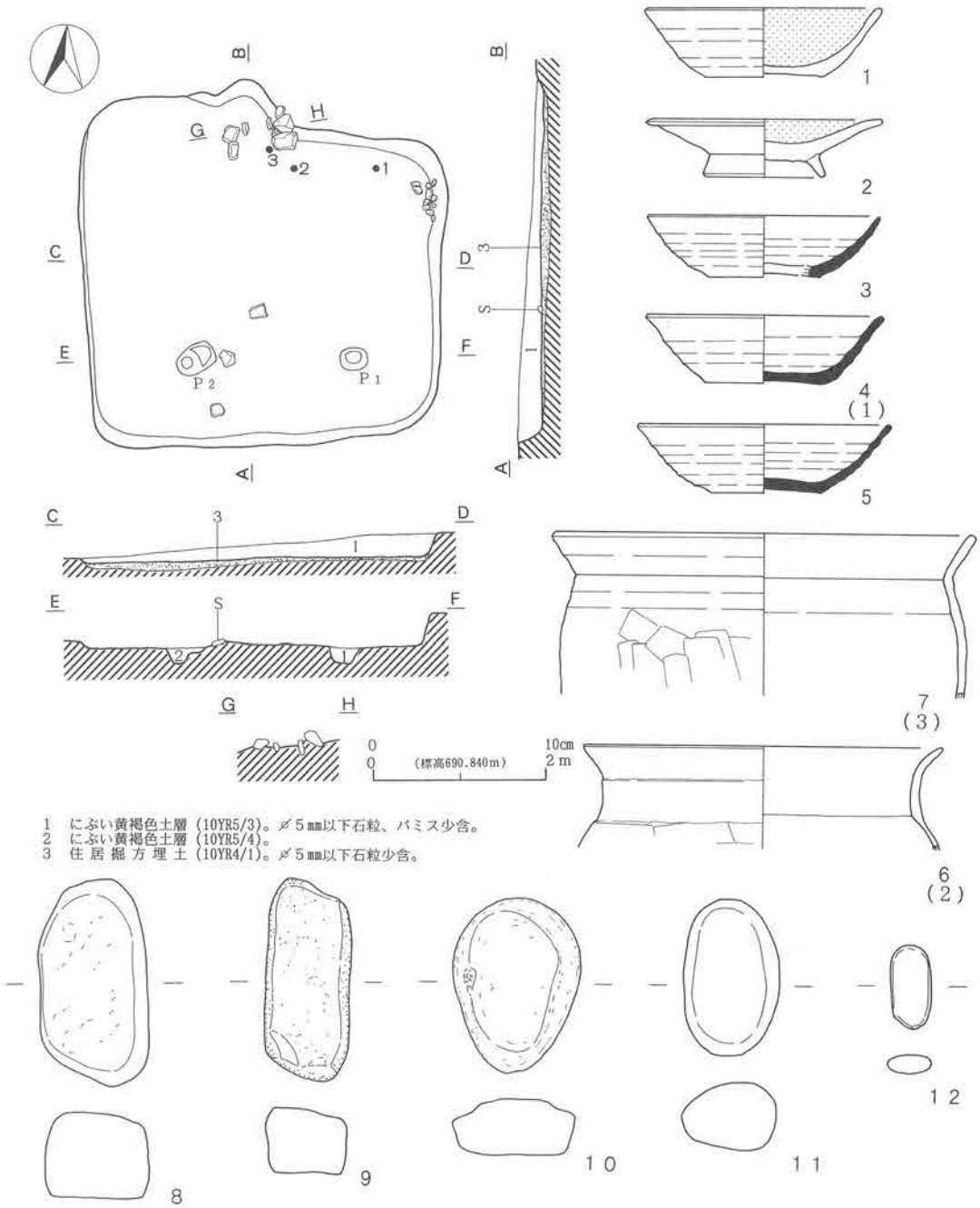
H46号住居址（第203図、図版二十二・百二十七）

遺構－Ⅴけ6グリットで検出された。H69号住居址・F16号掘立柱建物址を切る。隅丸方形の平面プランを呈し、長軸長4.3m×短軸長4.25m×壁残高0.28mの規模を有する。N－4°－Wに長軸方位をとる。カマドは北壁中央やや西よりに構築されており、長径0.95m×短頸0.9m×深度0.2mの規模である。袖石の一部と支脚石が残存しており、粘土は確認されなかった。Pitは2基確認されたが主柱穴か否かは不明である。覆土は自然堆積であった。

遺物－土師器、須恵器、石器が出土している。土師器には坏（1）、皿（2）、甕（6・7）が認められる。坏は糸切り底で内面黒色処理される。皿は有台で内面黒色処理が施されている。台は、糸切り後回転篦削りを施し接合されている。甕は6の武蔵甕と7のロクロ甕が共伴している。須恵器には坏（3～5）が認められる。全てが回転糸切り底である。石器は、編物石（8～11）と磨石（12）が出土している。

挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
－1	土師器 坏	13.8 6.9 3.9	内－黒色処理。 底部右回転糸切り。	
－2	土師器 有台皿	13.9 7.1 3.2	内－黒色処理。 底部回転糸切り→回転篦削り→付け高台。	
－3	須恵器 坏	13.6 6.6 3.5	底部右回転糸切り。	
－4	須恵器 坏	13.9 7.0 3.8	底部右回転糸切り。	No.1
－5	須恵器 坏	14.8 6.5 3.8	底部右回転糸切り。	
－6	土師器 甕	21.0 － －	内－ナデ。 外－篦削り。	No.2 武蔵甕。
－7	土師器 甕	24.8 － －	内－ナデ。 外－口縁～体部上半ロクロナデ、下半篦削り。	No.3
－8	編物石	12.1 6.3 4.9		640g
－9	編物石	11.6 5.0 3.81		390g
－10	編物石	10.2 7.2 3.3		320g
－11	編物石	9.1 5.5 4.0		310g
－12	磨石	－ 2.4 1.1		19.0g

第179表　H46号住居址出土遺物観察表



第203図　H46号住居址

H47号住居址（第204図、図版二十二・百二十八）

遺構－Ⅲあ5グリットで検出された。H69号・H64号・H82号住居址を切る。隅丸方形のプランを呈し、長軸長5.58ｍ×短軸長5.4ｍ×壁残高0.65ｍの規模を有する。カマドは北壁の中央に構築され、長径1.2ｍ×短径1.2ｍ×深度0.65ｍの規模を有する。粘土と石で構築された所謂「石組粘土カマド」である。5基検出されたPitの内Ｐ１～Ｐ４の４基が主柱穴である。柱は確認できなかった。Ｐ５は出入り口に関係するのかも知れない。周溝は有さず、覆土は自然堆積である。

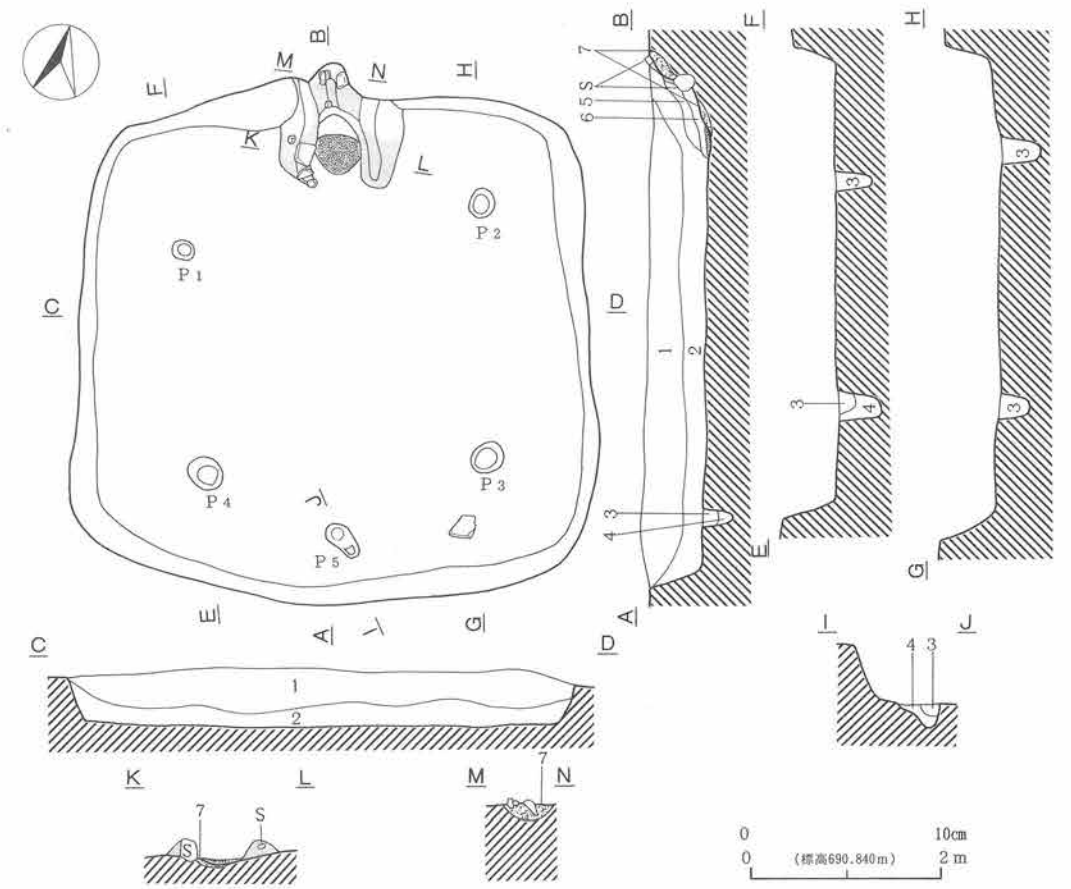
遺物－土師器、鉄器、石器が出土している。土師器は全て甕（１～４）である。口縁部に最大径をもつ「く」字口縁の武蔵甕（１～３）と胴張の武蔵甕底部（４）が認められる。鉄器（５）は刀子が出土している。先端部分を欠損している。石器は６の黒曜石製のスクレイパーと７の編物石が認められる。６は混入品である。

挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
－1	土師器 甕	26.3 － －	内－ナデ。 外－篦削り。	武蔵甕。
－2	土師器 甕	23.4 － －	内－ナデ。 外－篦削り。	武蔵甕。
－3	土師器 甕	21.5 － －	内－ナデ。 外－篦削り。	武蔵甕。
－4	土師器 甕	－ － －	内－ナデ。 外－篦削り。	武蔵甕。
－5	刀子	8.7 1.2 0.3		9.7ｇ
－6	スクレイパー	1.3 1.3 0.4		0.8ｇ 黒曜石。
－7	編物石	13.3 5.1 3.9		440ｇ

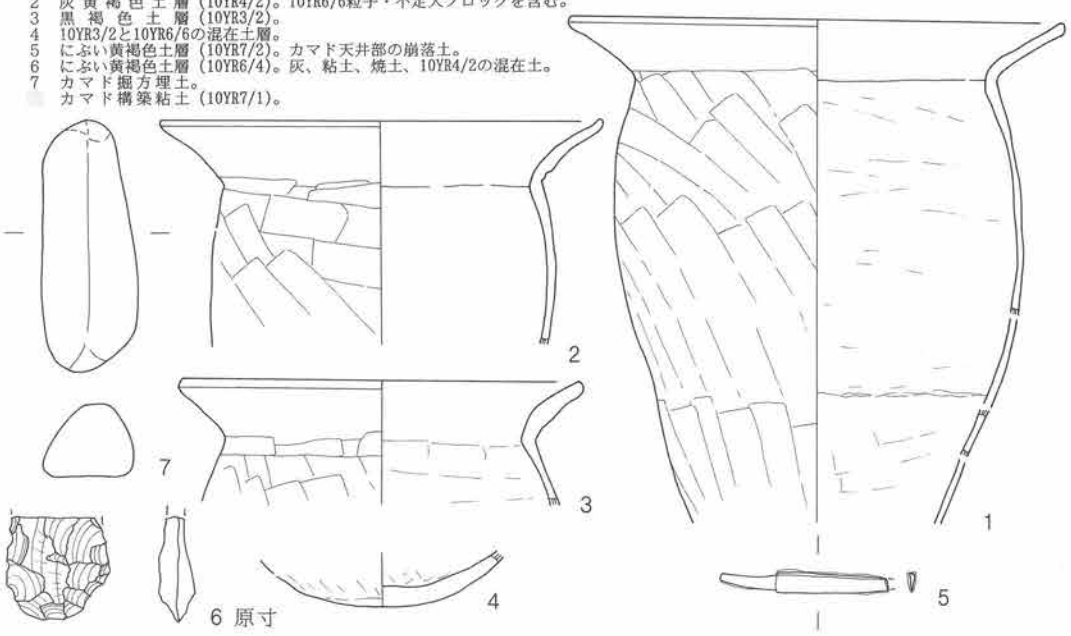
第180表　H47号住居址出土遺物観察表

H54号住居址（第205・206図、図版二十四・百三十二）

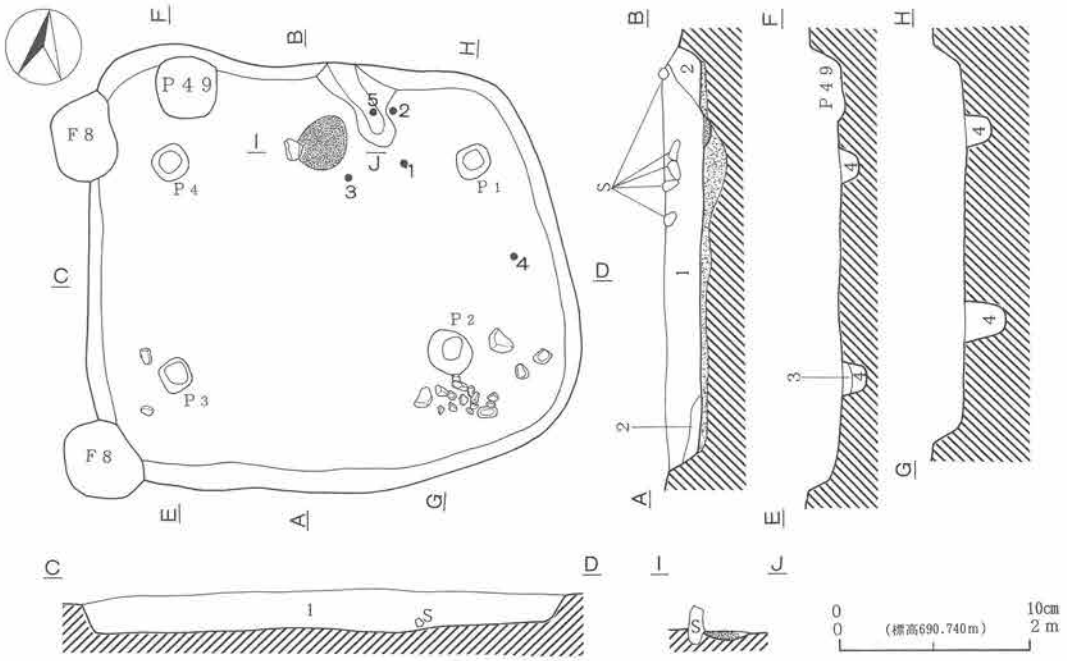
遺構－Ⅲう5グリットで検出された。H80号・H60号住居址を切り、Ｆ８号掘立柱建物址に切られる。南北4.55ｍ×東西5.0ｍ×壁残高0.45ｍの規模を有する。南北軸を主軸としてＮ－15°－Wに主軸方位をとる。カマドは北壁の中央に構築されており、長径1.1ｍ、深度0.45ｍの規模を有する。カマドは向かって右の袖しか残存していなかった。４基検出されたPitは全て主柱穴である。柱は確認できなかった。覆土は自然堆積である。検出面において本址埋没後に廃棄された礫が数個検出された。



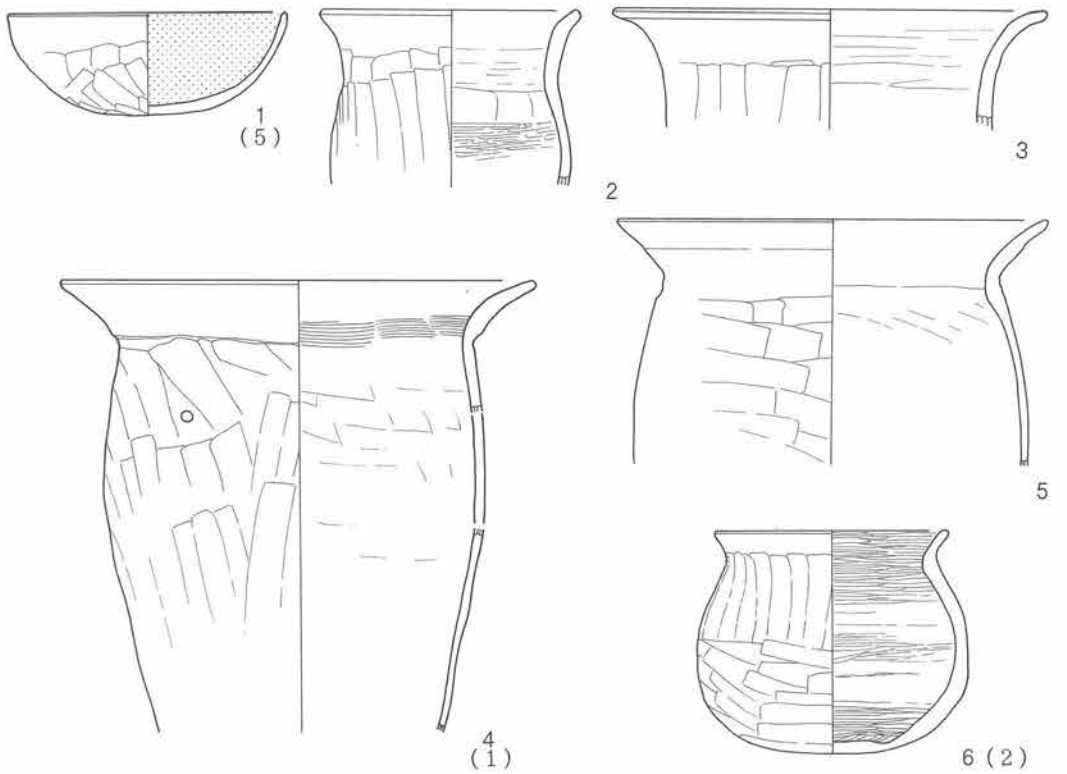
1　にぶい黄褐色土層（10YR5/3）。φ1cm以下パミス、石粒を含む。
2　灰黄褐色土層（10YR4/2）。10YR6/6粒子・不定大ブロックを含む。
3　黒褐色土層（10YR3/2）。
4　10YR3/2と10YR6/6の混在土層。
5　にぶい黄褐色土層（10YR7/2）。カマド天井部の崩落土。
6　にぶい黄褐色土層（10YR6/4）。灰、粘土、焼土、10YR4/2の混在土。
7　カマド掘方埋土。
　カマド構築粘土（10YR7/1）。



第204図　H47号住居址



1　黒褐色土層（10YR3/2）。φ5㎜～1㎝大パミスを含む。
2　黒褐色土層（10YR3/1）。φ1～3㎝大パミス、砂粒を少含。
3　にぶい黄褐色土層（10YR5/4）。砂粒多含。
4　黒褐色土層（10YR3/2）。φ1㎝大パミス少含。
　住居掘方埋土。

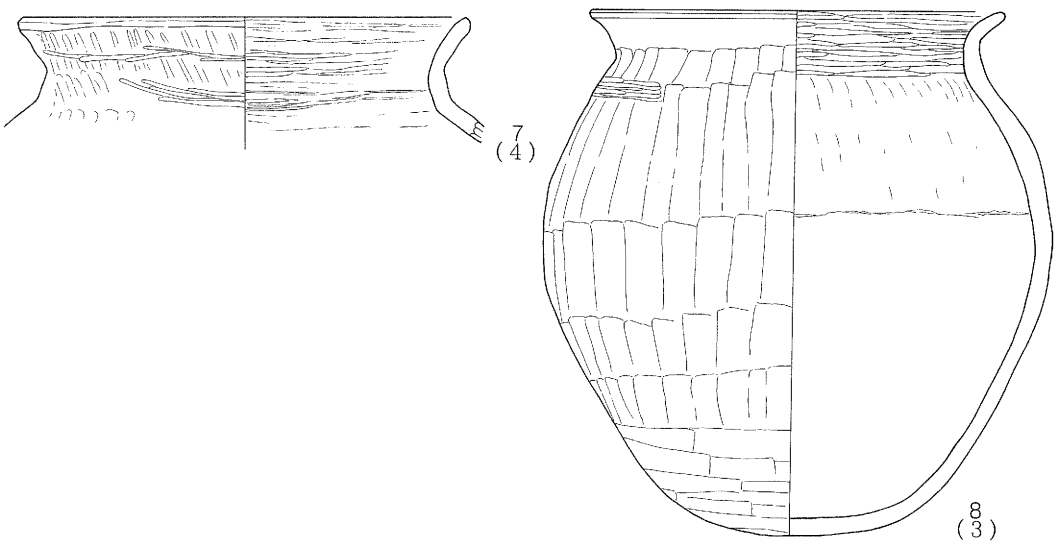


第205図　H54号住居址（1）

遺物－土師器が出土している。坏（1）、小型甕（2・6）、甕（3～5・7～8）が認められる。坏は半球状を呈し、内面黒色処理、外面篦削り調整が施される。小型甕は2のような長胴のものと、6のような下脹れの球形胴のものが存在する。どちらも内面ナデ・篦磨き調整、外面篦削り調整が施される。甕も長胴の3～5と胴張りの7・8が存在する。長胴のものには更に器壁が厚く外面に縦位の篦削りを施す3と器壁が薄く外面に斜位の篦削りを施す4・5が存在する。胴張りのものも、7が篦磨きを多様するのに対し8は篦削りを多用する。

挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
－1	土師器 坏	14.5 － 5.4	内－黒色処理。 外－篦削り。	No.5
－2	土師器 小型甕	13.2 － －	内－篦ナデ・篦磨き。 外－篦削り。	
－3	土師器 甕	22.4 － －	内－ナデ。 外－篦削り。	
－4	土師器 甕	24.8 － －	内－ナデ。 外－篦削り。	No.1 武蔵甕。
－5	土師器 甕	22.5 － －	内－ナデ。 外－篦削り。	武蔵甕。
－6	土師器 小型甕	12.1 4.0 11.8	内－篦ナデ、篦磨き。 外－篦削り。	No.2
－7	土師器 甕	23.4 － －	内外－篦磨き。	No.4
－8	土師器 甕	21.6 － 27.7	内－ナデ、篦磨き。 外－篦削り、篦磨き。	No.3

第181表　H54号住居址出土遺物観察表



第206図　H54号住居址（2）

H58号住居址（第207図、図版二十六・百三十四）

遺構－Ⅴう７グリットで検出された。H59号住居址を切る。第２次調査におけるH38号住居址は本址と同一の住居址である。壁残高0.15ｍを測る。カマドは第２次調査において北壁の中央部に検出されている。柱穴は４本柱構成の内２基が検出されているが、今回の調査範囲には存在しなかった。２次調査の結果から本址の平面プランは隅丸方形で、Ｎ－８°－Ｗに長軸方位をとることが判明している。覆土は自然堆積である。

遺物－土師器、須恵器、石器が出土している。土師器には坏（１）、有台坏（２）、甕（10～12）、高杯（13）が存在する。この内、12の甕と13の高杯は、本来はH59号住居址に帰属する混入品であろう。１の坏は内面黒処理される。２の有台坏は右回転糸切後回転篦削りを施し、台を付けている。内面黒色処理される。甕10・11は内面ナデ、外面篦削り調整が施される「武蔵甕」である。須恵器には坏（３～８）と有台坏（９）が存在する。底部の残存するものは全て回転糸切り痕が認められる。９の台は回転糸切り後回転篦削りを加え付けられている。石器は14の凹石と、15の磨石が出土している。

挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
－1	土師器 坏	14.7 － －	内面黒色処理。	
－2	土師器 有台坏	－ 8.8 －	内面黒色処理。 底部回転糸切り→回転篦削り→付け高台。	
－3	須恵器 坏	12.8 6.0 4.3	底部右回転糸切り。	
－4	須恵器 坏	13.7 － －		
－5	須恵器 坏	15.0 － －		
－6	須恵器 坏	14.0 5.3 3.5	底部右回転糸切り。	
－7	須恵器 坏	14.1 7.1 3.8	底部回転方向不明糸切り。	
－8	須恵器 坏	－ 6.0 －	底部右回転糸切り。	
－9	須恵器 有台坏	13.8 8.8 5.1	底部回転糸切り→回転篦削り→付け高台。	
－10	土師器 甕	－ 4.6 －	内－ナデ。 外－篦削り。	武蔵甕。
－11	土師器 甕	21.2 － －	内－ナデ。 外－篦削り。	武蔵甕。

第182表　H58号住居址出土遺物観察表（１）

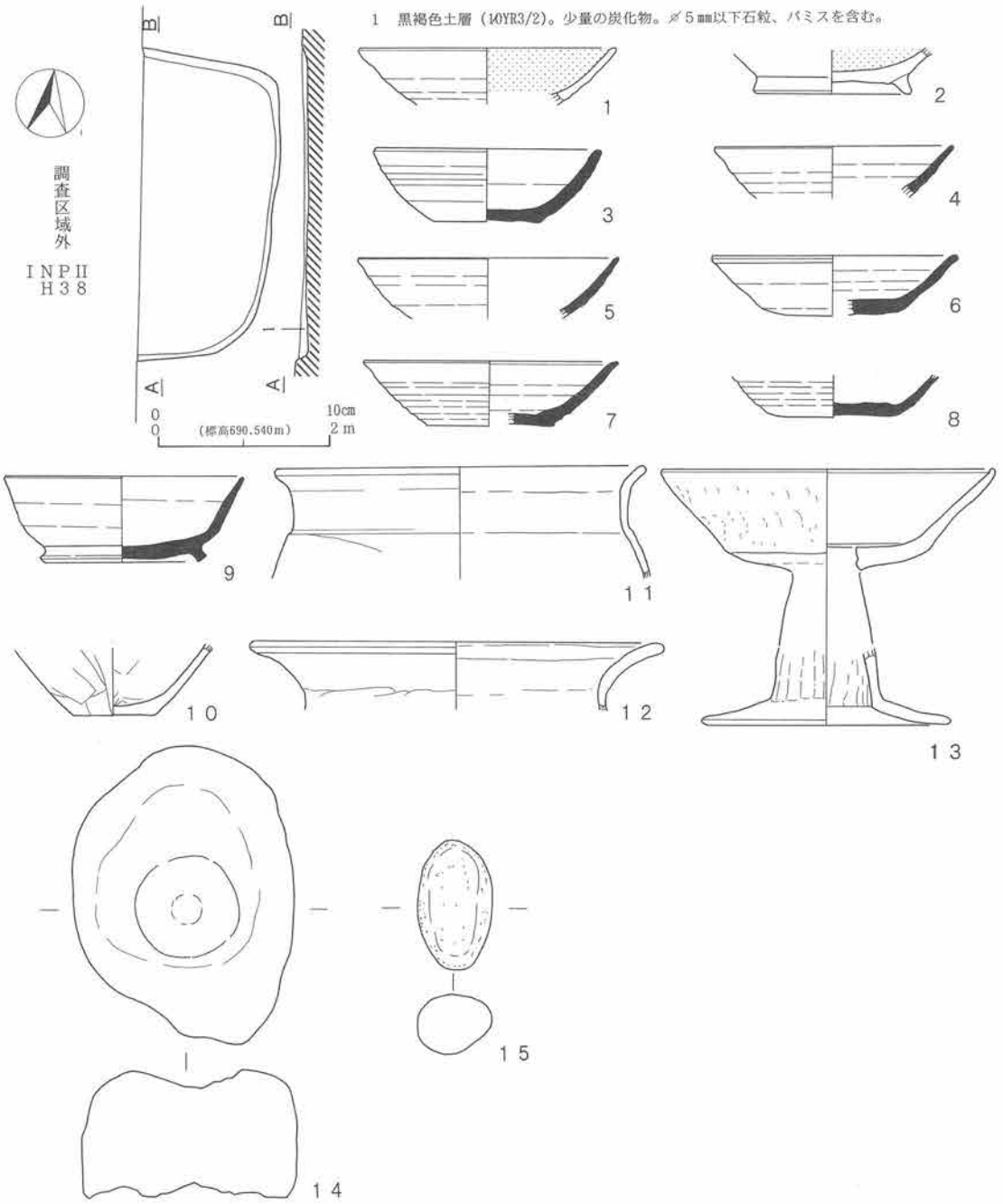
挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
−12	土師器 甕	23.4 − −	内−ナデ。 外−篦削り。	混入品。
−13	土師器 高坏	19.0 14.0 −	内外−篦削〜ナデ。	混入品。
−14	凹石	17.6 12.8 7.5		2125 g
−15	磨石	7.6 4.3 3.5		125 g

第183表　H58号住居址出土遺物観察表（2）

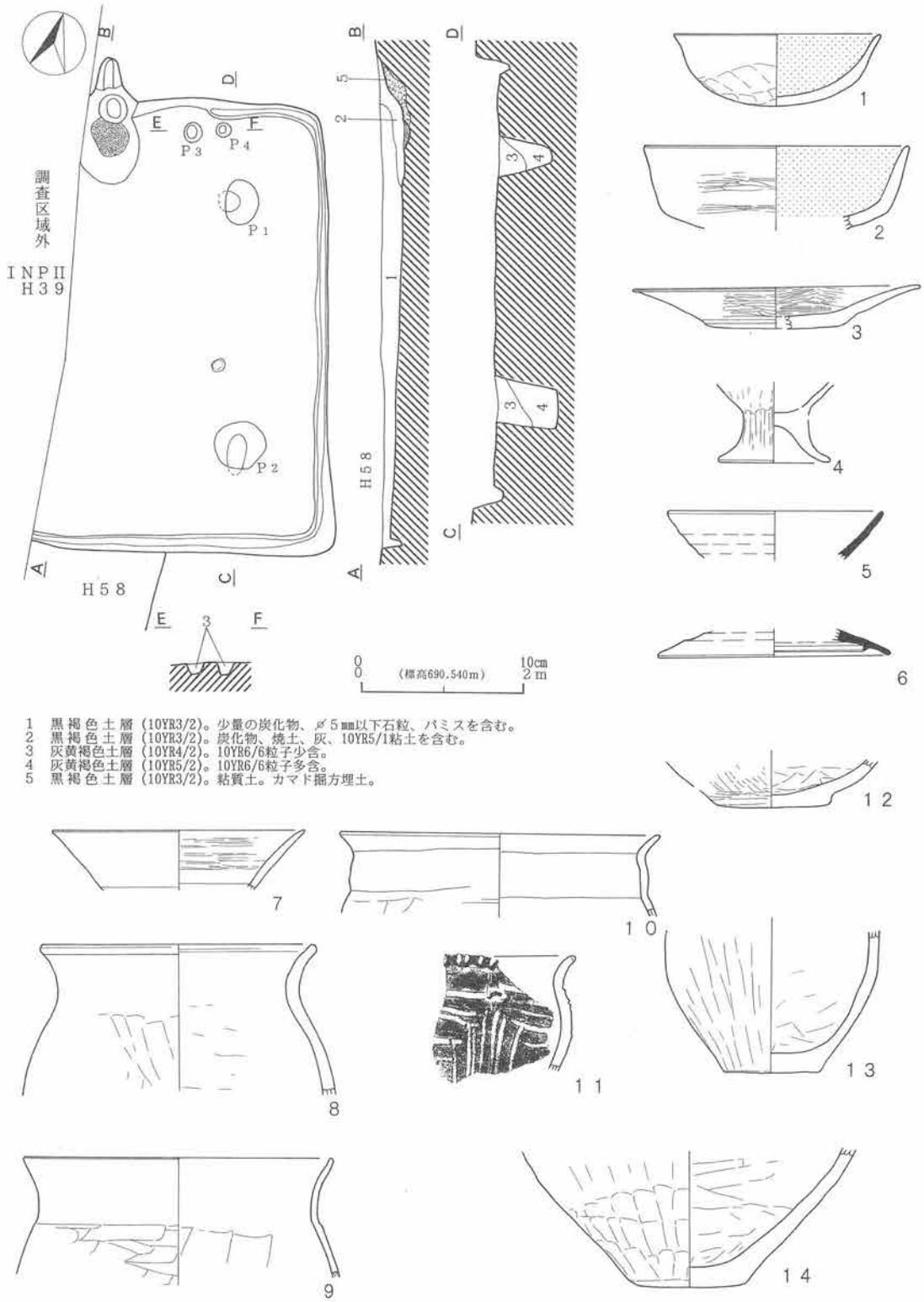
H59号住居址（第208・209図、図版百三十五）

遺構−Vえ7グリットで検出された。H58号住居址に切られ、H70号住居址を切る。第2次調査におけるH39号住居址は本址と同一の住居址である。隅丸長方形の平面プランを呈し、長軸長6.23m、壁残高0.25mの規模を有し、N−15°−Wに長軸方位をとる。カマドは北壁の中央部分に構築され、長径1.6m、深度0.36mの規模を有する。構築材は残存しておらず、本址内には存在しなかった事から、再利用のため持ち出されたものと思われる。Pitは2基検出されており、主柱穴である。第2次調査の際も2基検出されており、4基の主柱穴を有していたことが判明している。柱は確認できなかった。覆土は自然堆積で、カマド部分を除き壁下に周溝が巡らされる。

遺物−土師器、須恵器、弥生土器、石器、鉄器が出土している。土師器には坏（1〜3）、台付甕（4）、高杯（7）、甕（8〜10・12〜15）が認められる。坏1は半球状を呈し、口縁端部が弱く外反する。内面黒色処理、外面篦削り調整が施される。2は丸底気味の底部と口縁部の境から口縁部が外傾して開くもので、内面黒色処理、外面篦磨き調整が施される。3は扁平な底部から口縁部が大きく外反して開くもので、内外面に篦磨き調整が施される。4は台付甕の脚部で内面篦磨き、脚内は篦削り・ヘラナデ、外面篦削り調整が施される。7は高杯と思われるもので内外面に篦磨き調整が施される。甕の内、9・10・15は「武蔵甕」であり、本来はH58号住居址に帰属するものである。「コ」字あるいは「コ」字気味の口縁部形状を呈する。他の甕は内面ナデ、外面篦削り調整が施される器壁の厚いものである。全器形の知れるものはないが、体部が直線的なものはなく、張るもの、あるいは球形状を呈するようである。須恵器には坏（5）と坏蓋（6）が認められる。口縁部の形状から5は、本来H58号住居址に帰属するものであろう。6の坏蓋は内面に「かえり」を有する比較的口径の大きなものである。弥生土器11は、体部に連続「コ」字文と貼付文、口唇部に刻目が施されるもので混入品である。石器16は磨石、鉄器17は鉄鏃である。

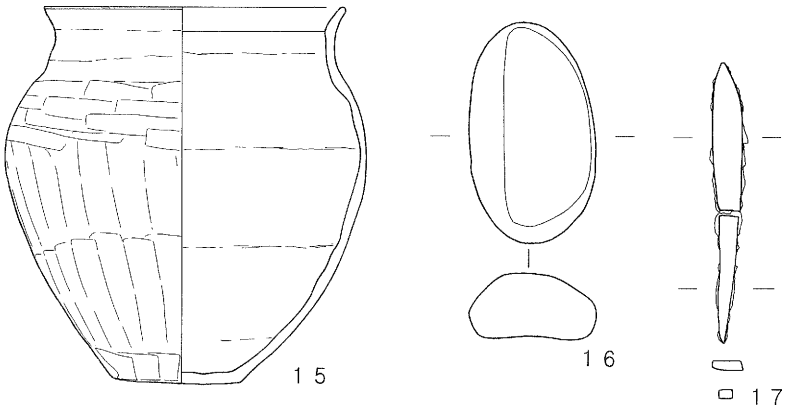


第207図　H58号住居址



1　黒褐色土層（10YR3/2）。少量の炭化物、径5mm以下石粒、パミスを含む。
2　黒褐色土層（10YR3/2）。炭化物、焼土、灰、10YR5/1粘土を含む。
3　灰黄褐色土層（10YR4/2）。10YR6/6粒子少含。
4　灰黄褐色土層（10YR5/2）。10YR6/6粒子多含。
5　黒褐色土層（10YR3/2）。粘質土。カマド掘方埋土。

第208図　H59号住居址（1）



第209図　H59号住居址（2）

挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
－1	土師器 坏	12.8 － 4.5	内－黒色処理。 外－篦削り。	
－2	土師器 坏	16.2 － －	内面黒色処理。 外－篦磨き。	
－3	土師器 坏	17.6 9.0 2.6	内外－篦磨き。	
－4	土師器 台付甕	－ 6.7 －	内－篦磨き。 外－篦削り。	
－5	須恵器 坏	13.2 － －		混入品。
－6	須恵器 坏蓋	14.3 － －		
－7	土師器 高坏	15.7 － －	内外－篦磨き。	
－8	土師器 甕	16.8 － －	内外－ヘラナデ。	混入品。 武蔵甕。
－9	土師器 甕	19.2 － －	内－ナデ。 外－篦削り。	混入品。 武蔵甕。
－10	土師器 甕	19.8 － －	内－ナデ。 外－篦削り。	混入品。 武蔵甕。
－11	弥生 台付甕	－ － －	内－篦磨き。 外－口唇部：刻目、体部：連続「コ」字文＋貼付文	混入品。
－12	土師基 甕	－ 7.3 －	内－篦削り～ナデ。 外－篦磨き。	

第184表　H59号住居址出土遺物観察表（1）

挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
−13	土師器 甕	− 6.0 −	内−ナデ。 外−篦削り。	
−14	土師器 甕	− 6.2 −	内−ナデ。 外−篦削り。	
−15	土師器 甕	15.7 6.7 19.9	内−ナデ。 外−篦削り。	混入品。 武蔵甕。
−16	磨石	11.7 6.6 3.5		370 g
−17	鉄鏃	14.8 1.7 6.0		33.7 g

第185表　H59号住居址出土遺物観察表（2）

H66号住居址（第210図、図版三十・百四十一）

遺構−Ⅶこ4グリットで検出された。H80号・H100号・H102号住居址を切る。隅丸長方形の平面プランを呈し、N−15°−Eに長軸方位をとる。長軸長5.75m×短軸長5.3m×壁残高0.55mの規模を有する。カマドは北壁の中央部分に構築されており、袖の基部は地山を削りだして造られていた。残存部分には石は使用されていなかった。長径1.48m×短径1.15m×深度0.4mの規模である。Pitは4基検出され、全てが主柱穴である。4基全てにおいて柱が確認されており、

挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
−1	土師器 坏	14.6 − 5.0	内−黒色処理。 外−篦磨き。	
−2	土師器 坏	14.3 8.2 4.6	内−黒色処理。 外−篦削り。	
−3	土師器 坏	15.4 8.0 5.4	内−黒色処理。 外−篦削り。	
−4	須恵器 坏	14.0 8.0 4.4	底部篦切り篦削り。	
−5	土師器 甕	− 4.8 −	内−ナデ。 外−篦削り。	武蔵甕。
−6	土師器 甕	15.5 − −	内−ナデ。 外−篦削り。	武蔵甕。
−7	土師器 甕	22.6 − −	内−ナデ。 外−篦削り。	武蔵甕。
−8	磨製石斧	− 6.3 1.4		140 g
−9	敲石	13.2 7.0 4.7		690 g

第186表　H65号住居址出土遺物観察表

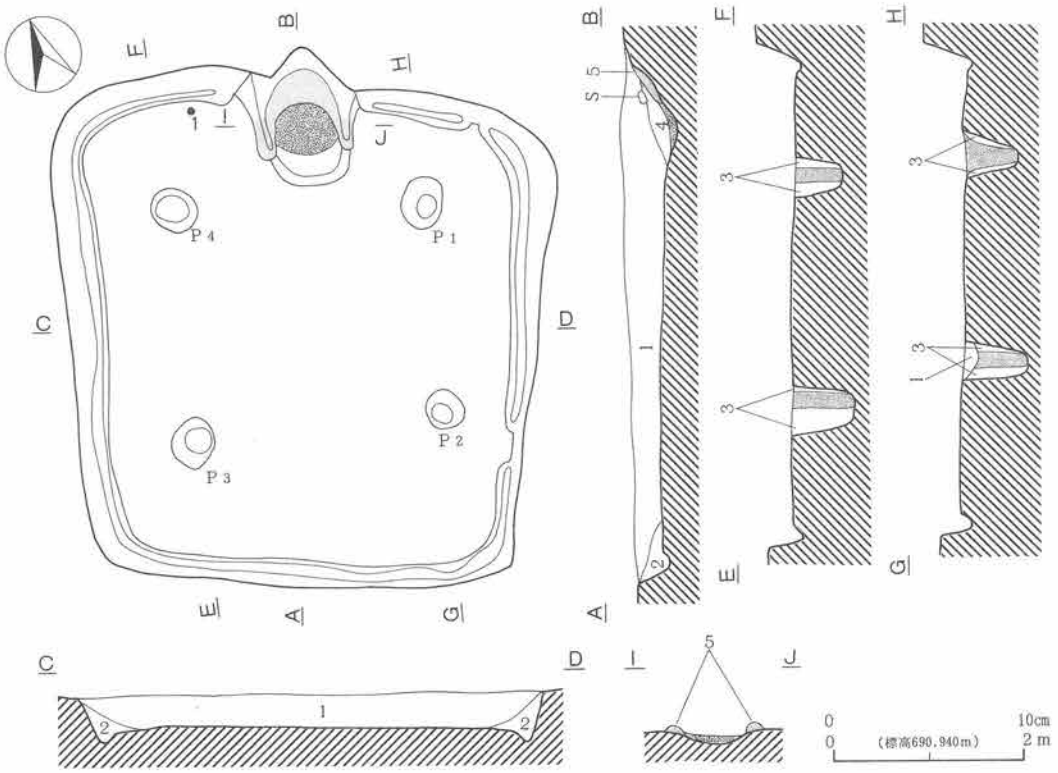
直径15cm～20cmの規模であった。カマドと東壁下の一部分を除き巾20cm前後、床面からの深度12cm前後の周溝が巡らされていた。覆土は自然堆積であった。

遺物－土師器、須恵器、石器が出土している。土師器には坏（1～3）、甕（5～7）が認められる。坏は全て内面黒色処理され、2・3は底部に篦削り処理が施されている。1は丸底で外面には篦磨き調整が施されている。甕は3点共に武蔵甕で、内面ナデ、外面篦削り調整が施されている。須恵器は坏（4）が1点認められる。底部篦切り、篦削りのものである。石器は混入品の磨製石斧（8）の基部と敲石（9）が出土している。

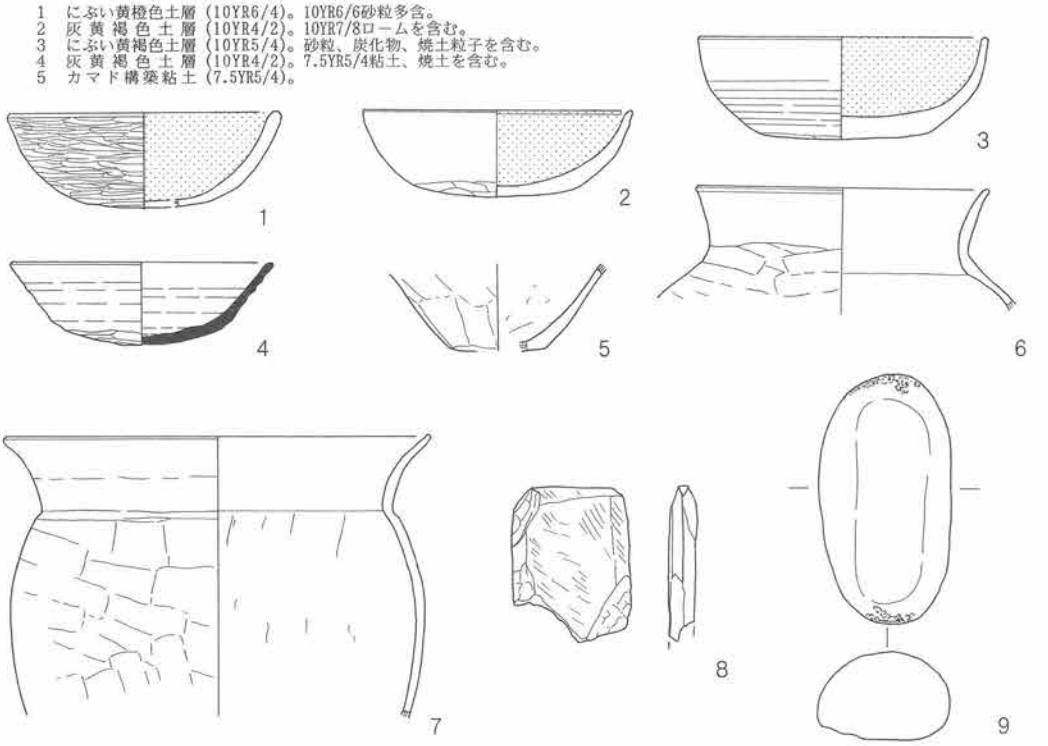
H76号住居址（第211図、図版百四十七）

遺構－Vけ7グリットで検出された。H88号・H105号住居址を切る。第2次調査におけるH45号住居址と同一の住居である。隅丸長方形の平面プランを呈し、南北長6.55m、壁残高0.55mの規模を有する。南北を主軸と仮定するならばN－23°－Wに主軸方位をとる。カマドは火床のみ残存していた。Pitは床面上で4基、掘方から13基検出された。床面上の4基は主柱穴で、P1・P2において直径24と28cmの柱が確認されている。覆土は自然堆積であった。

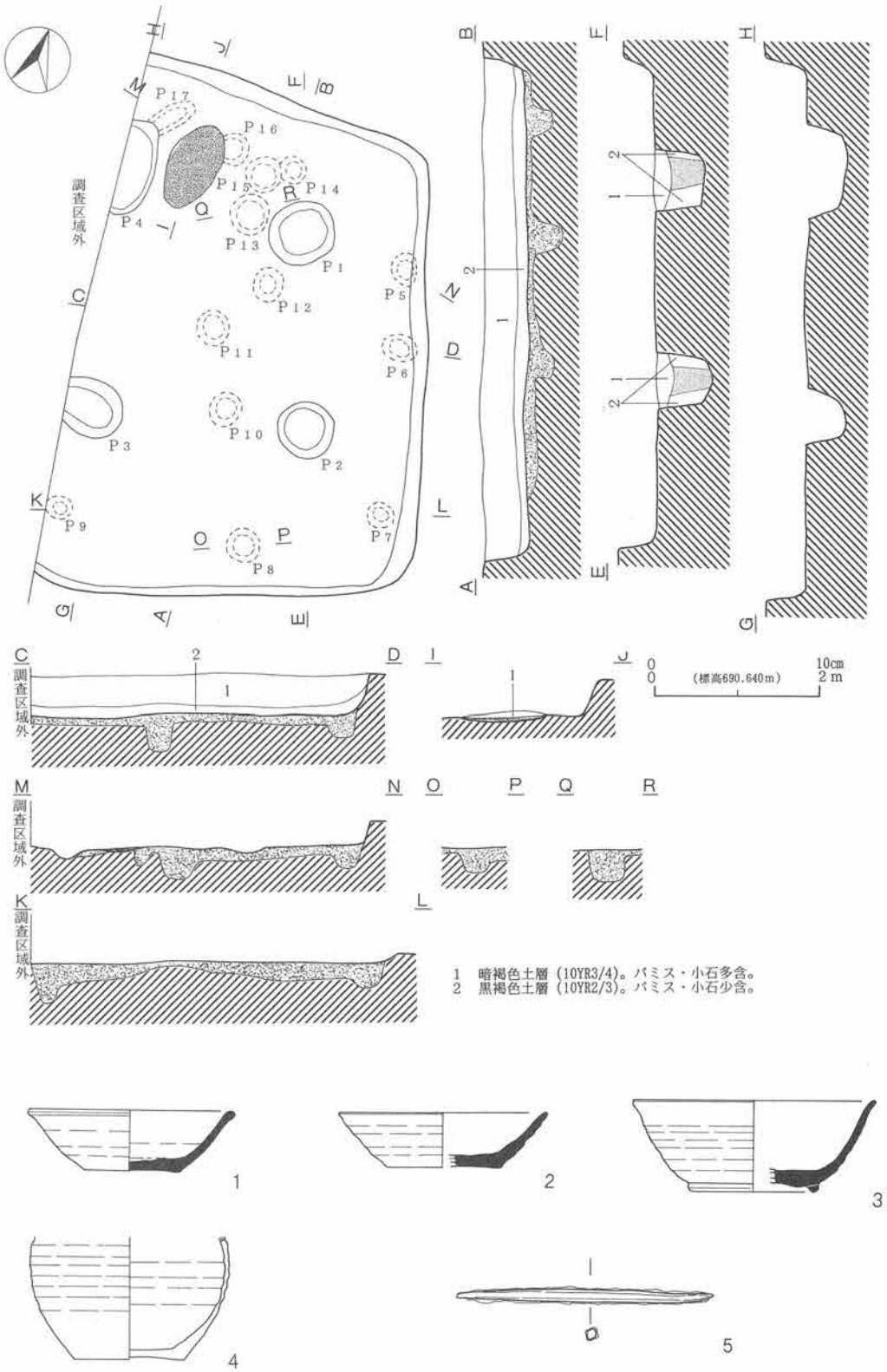
遺物－須恵器、土師器、鉄器が出土している。須恵器は全て坏である。有台（3）のものと無台（1・2）のものがある。3点共に底部に糸切り痕が認められる。土師器は甕（4）が出土している。ロクロ成形の小型甕である。鉄器は鉄鏃（5）が出土している。断面四角形の棒状で、先端部分で三角形に尖るものである。



1　にぶい黄橙色土層（10YR6/4）。10YR6/6砂粒多含。
2　灰黄褐色土層（10YR4/2）。10YR7/8ロームを含む。
3　にぶい黄褐色土層（10YR5/4）。砂粒、炭化物、焼土粒子を含む。
4　灰黄褐色土層（10YR4/2）。7.5YR5/4粘土、焼土を含む。
5　カマド構築粘土（7.5YR5/4）。



第210図　H66号住居址



第211図　H76号住居址

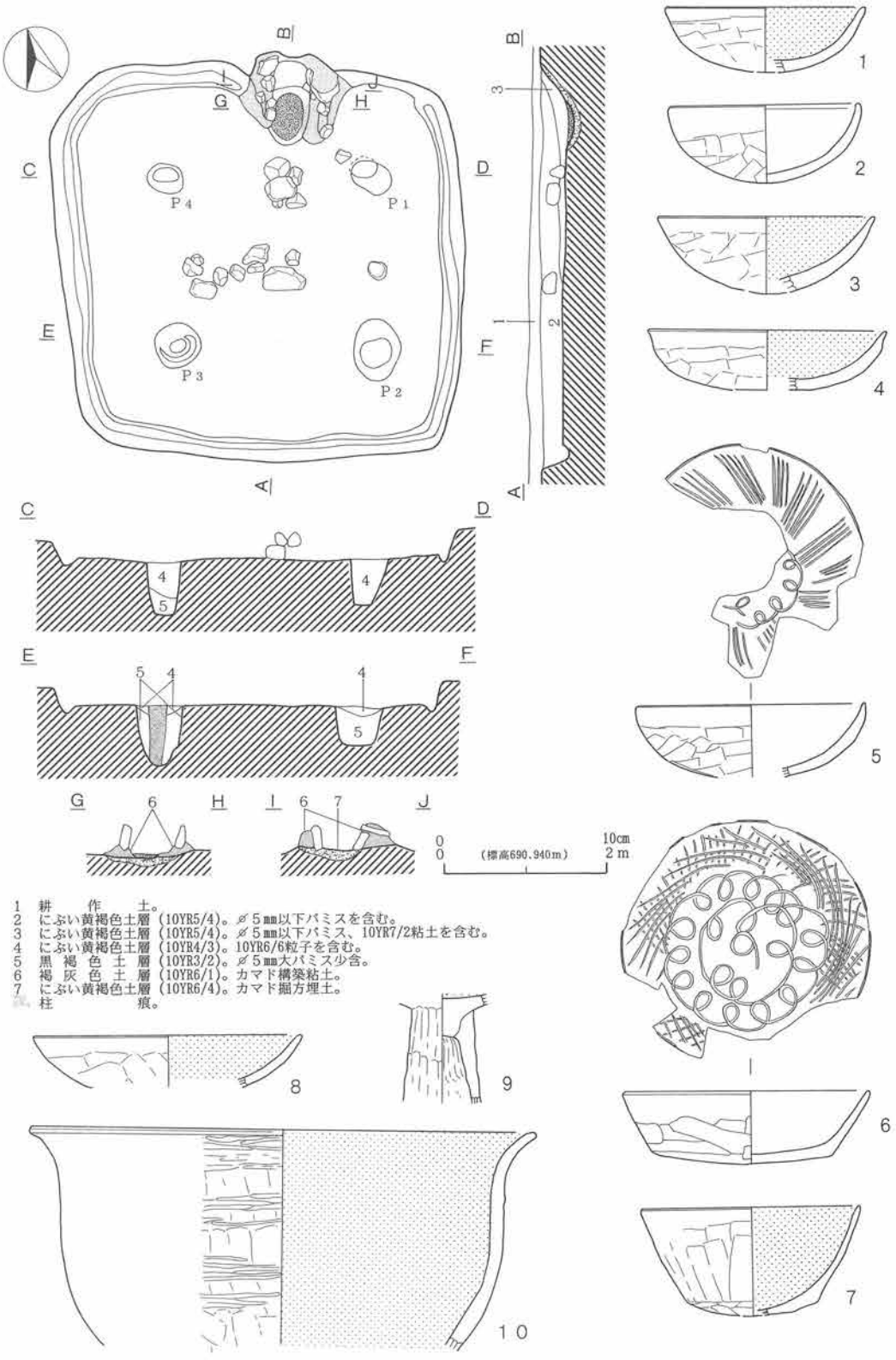
挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
－1	須恵器 坏	12.6 5.9 3.7	底部右回転糸切り。	
－2	須恵器 坏	12.8 6.8 3.3	底部右回転糸切り。	
－3	須恵器 有台坏	14.9 7.2 5.6	底部右回転糸切り→回転篦削り→付け高台。	
－4	土師器 甕	－ 6.7 －	内外－ロクロナデ。	ロクロ甕。
－5	鉄鏃	15.9 0.9 0.6		

第187表　H76号住居址出土遺物観察表

H78号住居址（第212・213図、図版三十四・百四十七）

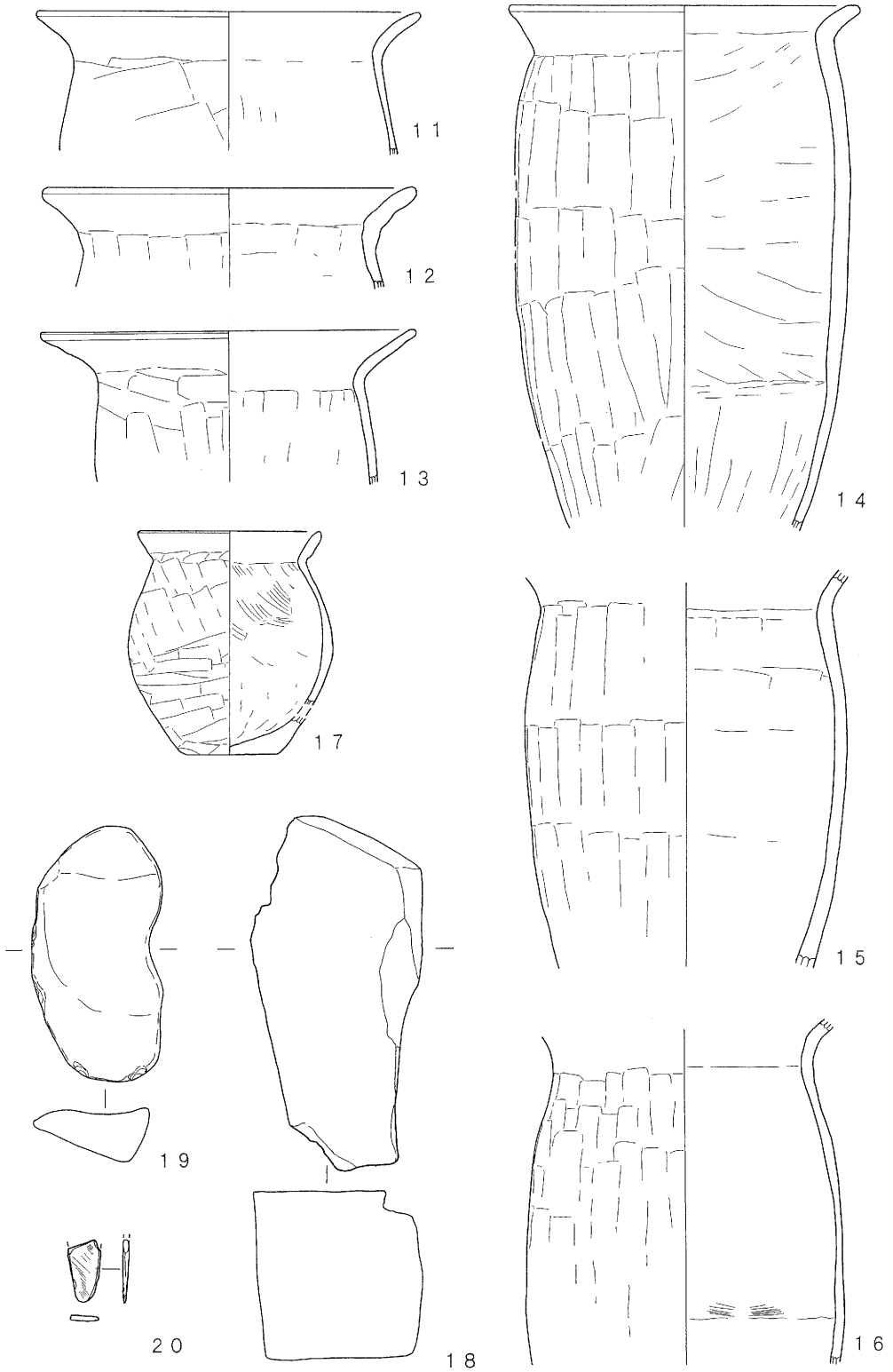
遺構－Ⅶえ2グリットで検出された。隅丸方形の平面プランを呈する。長軸長5.18ｍ×短軸長4.95ｍ×壁残高0.3ｍの規模を有する。Ｎ－10°－Ｅに長軸方位をとる。北壁の中央部分にカマドが構築されていた。石芯を粘土で被覆する所謂「石組粘土カマド」である。天井部が流失していた他は残存状態は良好であった。4基検出されたPitは全て主柱穴で、Ｐ3において直径20cmの柱が確認された。カマドと、カマドの東側の北壁下を除き壁下には周溝が巡らされている。巾20cm、床面からの深度12cmの規模である。周溝が途切れる部分に出入りが存在した可能性もある。住居址内に残存する礫は、覆土の堆積状況から明らかなように、本址廃絶時のものではなく埋没過程のものである。覆土は自然堆積であった。

遺物－土師器と石器が出土している。土師器には坏（1～7）、高杯（8・9）、鉢（10）、甕（11～16）、小型甕（17）が認められる。坏1～4は半球状を呈するもので、1・3・4は内面黒色処理がなされる。4点共に外面には篦削り調整が施される。坏5・6は内面に螺旋・放射暗文が描かれる。外面には篦削り調整が施されている。7は鉢としても良いのかも知れない。内面黒色処理、外面にな篦削り調整が施されている。坏は全て非ロクロ成形である。高杯8は半球状を呈する坏部分で坏1・3・4と同様である。9は脚部分で、内面篦削り・篦ナデ、外面篦削り調整が施されている。鉢はヘルメット状のもので内面黒色処理、外面には篦削り調整後、篦磨き調整が加えられている。甕は11・13のような武蔵甕系のもと、他の古墳時代的な長胴甕が出土している。どちらも内面ナデ、外面篦削り調整を基本とする。小型甕17は内面刷毛目・ナデ、外面篦削り調整が施される。石器は18の砥石と19の編物石が出土している。20は判然としないが石製模造品かも知れない。



1　耕　　作　　土。
2　にぶい黄褐色土層（10YR5/4）。φ5㎜以下パミスを含む。
3　にぶい黄褐色土層（10YR5/4）。φ5㎜以下パミス、10YR7/2粘土を含む。
4　にぶい黄褐色土層（10YR4/3）。10YR6/6粒子を含む。
5　黒　褐　色　土　層（10YR3/2）。φ5㎜大パミス少含。
6　褐　灰　色　土　層（10YR6/1）。カマド構築粘土。
7　にぶい黄褐色土層（10YR6/4）。カマド掘方埋土。
　　柱　　痕。

第212図　H78号住居址（1）



第213図　H78号住居址

挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
－1	土師器 坏	12.3 － －	内－黒色処理。 外－篦削り。	
－2	土師器 坏	12.0 － －	内－ナデ。 外－篦削り。	
－3	土師器 坏	13.4 － －	内－黒色処理。 外－篦削り。	
－4	土師器 坏	14.7 － －	内－黒色処理。 外－篦削り。	
－5	土師器 坏	14.2 － －	内－螺旋＋放射暗文。 外－篦削り。	
－6	土師器 坏	15.2 11.0 4.3	内－螺旋＋放射暗文。 外－篦削り。	
－7	土師器 坏	13.3 8.0 －	内－黒色処理。 外－篦削り。	
－8	土師器 高坏	16.4 － －	内－黒色処理。 外－篦削り。	
－9	土師器 高坏	－ － －	内－ナデ・篦削り。 外－篦削り。	
－10	土師器 鉢	31.2 － －	内－黒色処理。 外－篦削り～篦磨き。	
－11	土師器 甕	21.0 － －	内－ナデ。 外－篦削り。	武蔵甕。
－12	土師基 甕	22.2 － －	内－ナデ。 外－篦削り。	
－13	土師器 甕	22.3 － －	内－ナデ。 外－篦削り。	武蔵甕。
－14	土師器 甕	22.9 － －	内－ナデ。 外－篦削り。	
－15	土師器 甕	12.2 － －	内－ナデ。 外－篦削り。	
－16	土師器 甕	22.4 － －	内－刷毛目・ナデ。 外－篦削り。	
－17	土師器 小型甕	11.0 5.2 13.3	内－刷毛目・ナデ。 外－篦削り。	
－18	砥石	25.0 12.0 9.9		3620 g
－19	編物石	15.4 7.5 2.9		500 g

第188表　H78号住居址出土遺物観察表（1）

挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
−20	石製 模造品？	3.5 1.9 0.3		0.35ｇ

第189表　H78号住居址出土遺物観察表（２）

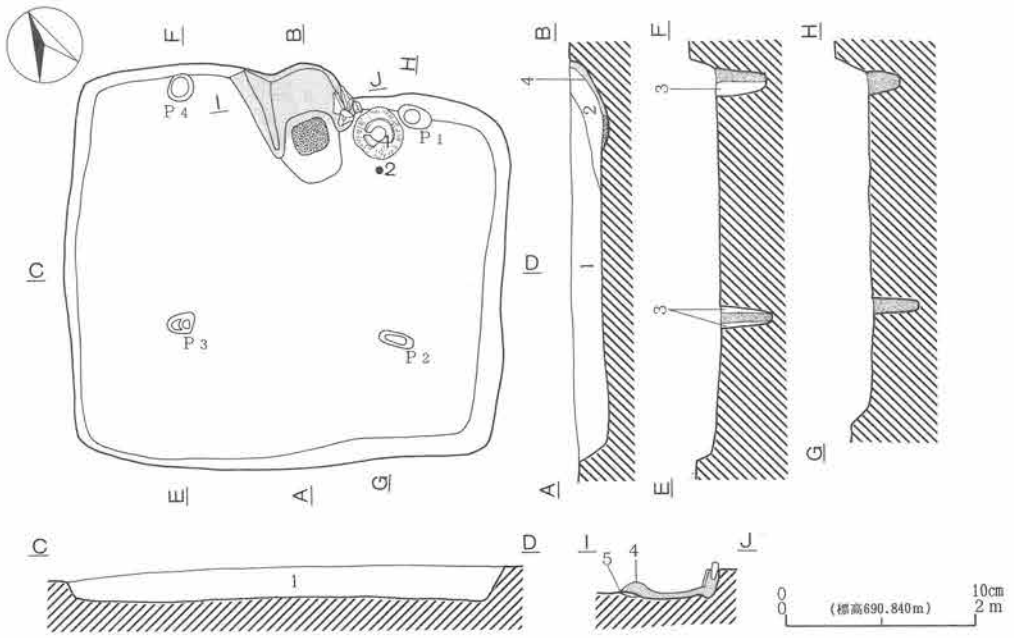
H83号住居址（第214図、図版三十七・百五十一）

遺構－Ⅶお４グリットで検出された。隅丸方形の平面プランを呈し、南北長4.65ｍ×東西長4.26ｍ×壁残高0.35ｍの規模を有する。Ｎ－70°－Ｗに長軸方位をとる。カマドは北壁中央部に構築されており、石芯を粘土で被覆する所謂「石組粘土カマド」である。長径1.26ｍ×短径1.15ｍ×深度0.4ｍの規模である。４基検出されたPitは全て主柱穴で、直径12～25cmの柱が確認された。Ｐ２の柱は板状の可能性が強い。カマドの東脇に設置された須恵器の大甕（６）は長胴甕の置台である。周溝は有さず、覆土は自然堆積である。

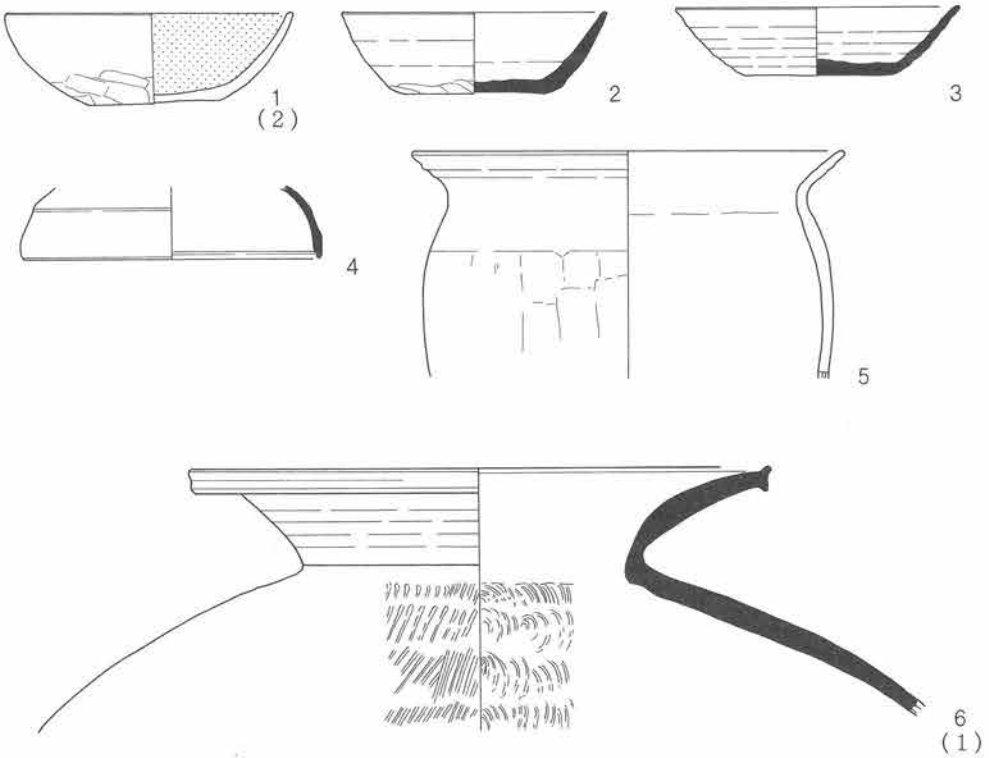
遺物－土師器と須恵器が出土している。土師器には坏（１）と甕（５）が認められる。坏は内面黒処理で、底部には篦削り調整が施される。甕５は長胴で内面ナデ、外面篦削り調整が施されている。須恵器には坏（２・３）、坏蓋（４）、甕（６）が認められる。遺構の項で述べたように６の甕は土師器長胴甕の置台である。坏２は右回転糸切りの後外底周縁に手持ち篦削りが施される。３は底部全面に手持ち篦削りが施される。坏蓋４は混入品である。田辺陶邑編年のＴＫ10号窯期に比定されるものと思われる。

挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
−１	土師器 坏	15.3 7.0 4.7	内－黒色処理。 外－篦削り。	No.２
−２	須恵器 坏	14.0 4.3 4.7	底部右回転糸切り→外部周縁篦削り。	
−３	須恵器 坏	15.0 7.7 3.6	底部篦削り。	
−４	須恵器 坏蓋	− 15.8 −		混入遺物。 田辺陶邑編年TK10。
−５	土師器 甕	22.8 − −	内－ナデ。 外－篦削り。	
−６	須恵器 甕	30.8 − −	内－青海波紋の当具痕。 外－平行叩目。	No.１ 長胴甕置台。

第190表　H83号住居址出土遺物観察表



1　にぶい黄褐色土層（10YR5/3）。∅5㎜以下パミスを含む。
2　にぶい黄褐色土層（10YR5/3）。10YR5/1粘土を多含。
3　にぶい黄褐色土層（10YR4/3）。10YR6/6粒子多含。
4　褐灰色土層（10YR5/1）。カマド構築粘土。
5　にぶい黄褐色土層（10YR5/4）。カマド掘方埋土。
　柱痕。



第214図　H83号住居址

H84号住居址（第215図、図版三十六・百五十二）

遺構－Ⅶく６グリットで検出された。H81号・H110号住居址を切り、F14号掘立柱建物址に切られる。隅丸長方形の平面プランを呈すると思われ、南北長6.25ｍ、壁残高0.57ｍの規模を呈する。南北を主軸とするとN－0°－Wに主軸方位をとる。第２次調査におけるH32号住居址は本址と同一の住居址である。カマドは北壁のほぼ中央部と思われる部分に構築されており、長径0.85ｍ、深度0.6ｍの規模である。Pitは１基検出されただけであるが、F14号掘立柱建物址のPitにより消滅したPitが１基存在したものと思われる。柱は確認できなかった。周溝は存在せず、覆土は自然堆積であった。

遺物－須恵器、石器、鉄器が出土している。須恵器は坏が２点出土している。２点共に右回転糸切り痕を底部に残す。２は更に「↓」の刻書が成される。石器（３・６）は編物石、鉄器４は刀子、５は鉄鏃である。

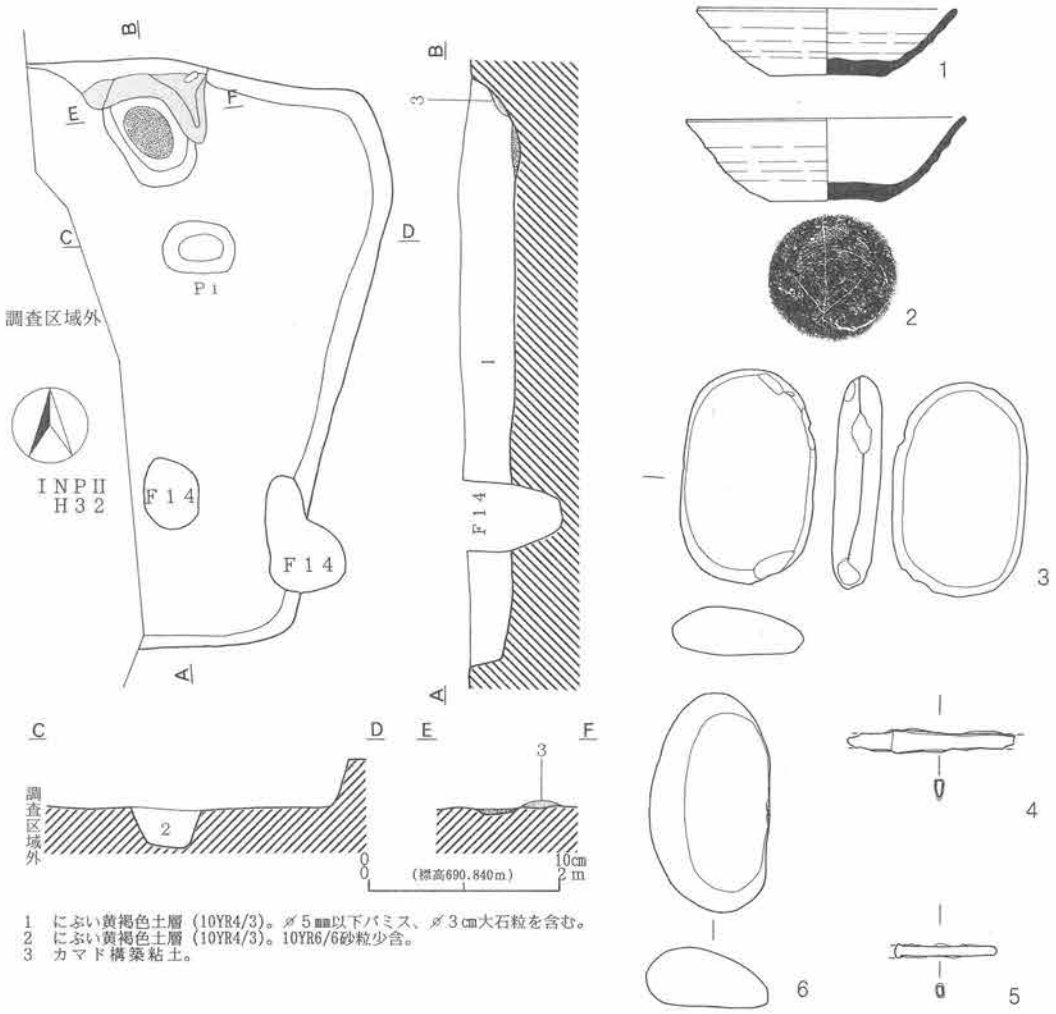
挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
－1	須恵器 坏	14.8 6.0 4.4	右回転糸切り。	
－2	須恵器 坏	13.7 6.0 3.6	右回転糸切り。	「↓」の刻書。
－3	編物石	11.3 7.0 2.4		240ｇ
－4	刀子	8.7 1.2 0.5		8.3ｇ
－5	鉄鏃	5.4 0.6 0.3		4.1ｇ
－6	編物石	11.5 6.3 3.0		350ｇ

第191表　H84号住居址出土遺物観察表

H85号住居址（第215・216図、図版三十八・百五十二・百五十三）

遺構－Ⅶお５グリットで検出された。H83号住居址に切られ、M９号溝址を切る。隅丸方形の平面プランを呈し、長軸長5.6ｍ×短軸長5.55ｍ×壁残高0.35ｍの規模を呈する。長軸方位をN－25°－Wにとる。カマドは北壁の中央部分に構築されており、長径1.3ｍ×短径0.95ｍ×深度0.45ｍの規模を有する。石芯を粘土で被覆した所謂「石組粘土カマド」である。Pitは床面上で４基、掘方において２基検出され、床面上で検出された４基は主柱穴である。Ｐ２・Ｐ３からは直径16cmの柱が検出されている。周溝は有さず、覆土は自然堆積である。

遺物－土師器、須恵器、鉄器が出土している。土師器には、坏（１～５）、高杯（６～８）、甕



1　にぶい黄褐色土層（10YR4/3）。φ5㎜以下パミス、φ3㎝大石粒を含む。
2　にぶい黄褐色土層（10YR4/3）。10YR6/6砂粒少含。
3　カマド構築粘土。

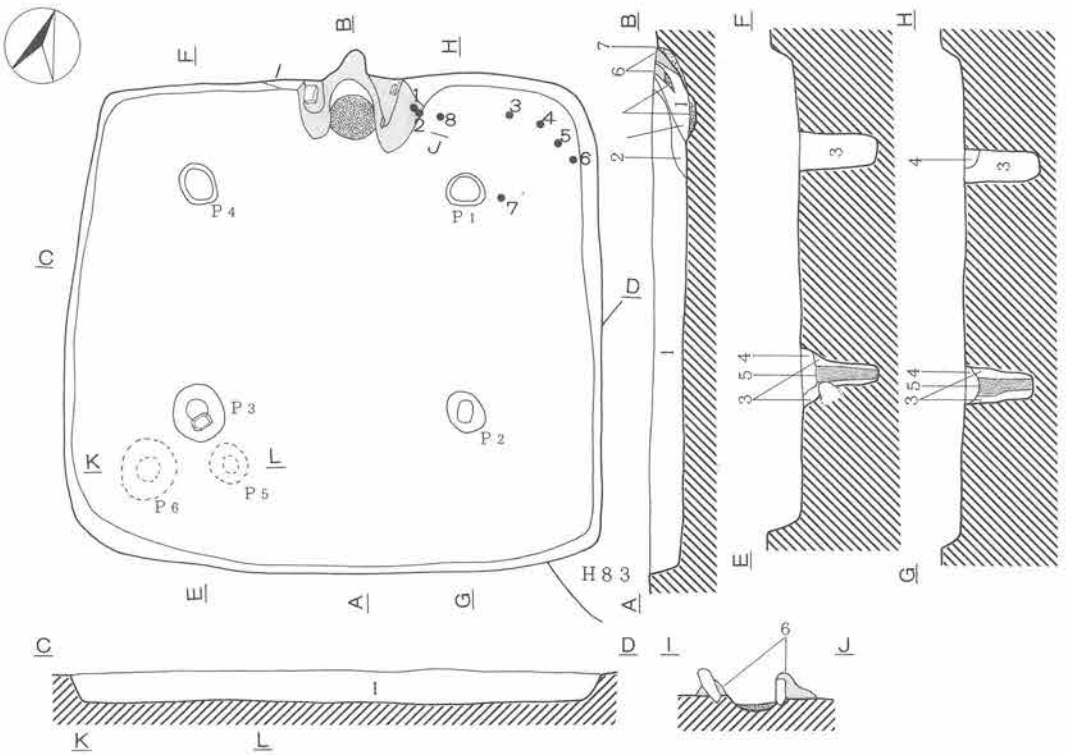
第215図　H84号住居址

（10・12・14）、小型甕（11・13）が認められる。坏1は須恵器坏蓋の模倣を原形とするもので、内面ナデ、外面篦削り調整が施される。2～5は半球状を呈するもので、2・3は内面ナデ、外面篦削り調整が施される。4は内面黒色処理、外面篦磨き調整が施される。5は内面黒色処理、外面刷毛目調整後篦削り、篦磨き調整が施されている。高杯は3点共に短脚で坏身も比較的小さい。内面黒色処理が施され、外面には篦削り、篦磨き調整が施される。甕10は丸底で内面ナデ、外面篦削り調整が施される。12は平底で内面ナデ、外面篦削り調整が施されている。14は肩部に最大径を有する。調整は11・12と同様である。台が付くのかも知れない。小型甕11は口縁部に最

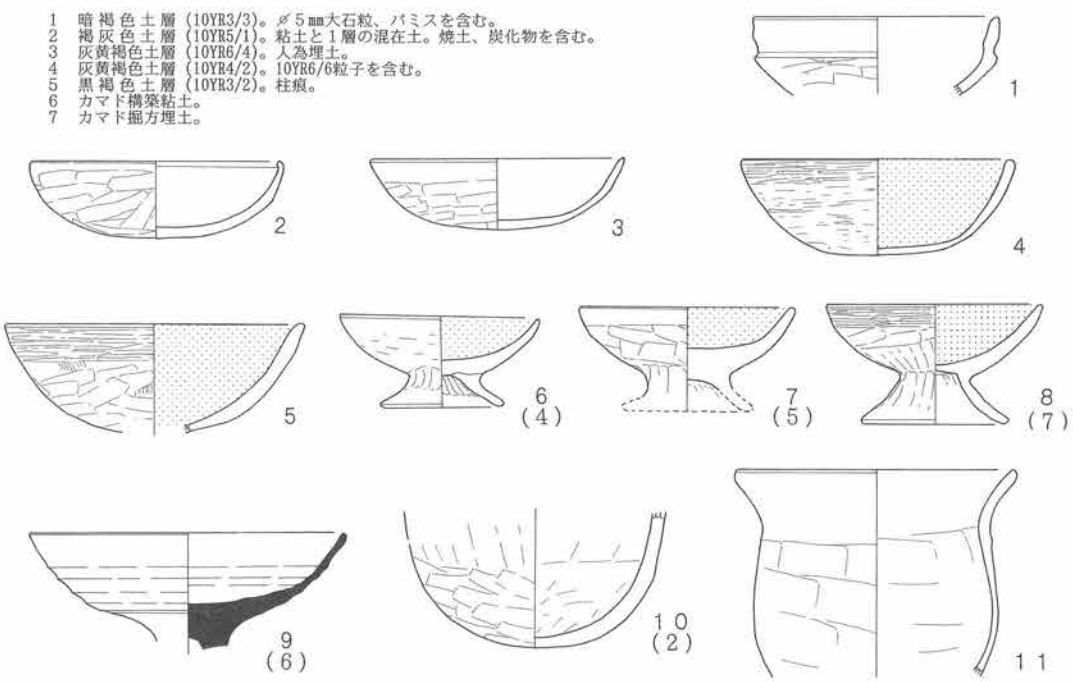
大径を有し、内面ナデ、外面篦削り調整が施される。13も11と同様な調整が施されるが、体部中央に最大径を有している。須恵器は高杯（9）が出土している。脚部を欠損した、半球状の坏身部分だけが残存している。鉄器は15の鉄鏃と、16の刀子が出土している。

挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
−1	土師器 坏	13.0 − −	内−ナデ。 外−篦削り。	
−2	土師器 坏	12.9 4.0 4.0	内−ナデ。 外−篦削り。	
−3	土師器 坏	13.5 − 3.8	内−ナデ。 外−篦削り。	
−4	土師器 坏	14.4 5.0 5.1	内−黒色処理。 外−篦磨き。	
−5	土師器 坏	15.8 − 5.8	内−黒色処理。 外−刷毛目→篦削り→篦磨き。	
−6	土師器 高坏	10.6 6.5 4.8	内−黒色処理。 外−篦削り。	No.4
−7	土師器 高坏	11.4 − −	内−黒色処理。 外−篦削り。	No.5
−8	土師器 高坏	11.5 7.3 6.4	内−黒色処理。 外−篦削り・篦磨き。	No.7
−9	須恵器 高坏	16.8 − −		No.6
−10	土師器 甕	− − −	内−ナデ。 外−篦削り。	No.2
−11	土師器 小型甕	15.0 − −	内−ナデ。 外−篦削り。	
−12	土師器 甕	− 5.7 −	内−ナデ。 外−篦削り。	
−13	土師器 小型甕	15.2 − −	内−ナデ。 外−篦削り。	No.1
−14	土師器 甕	14.6 − −	内−ナデ。 外−篦削り。	No.3
−15	鉄鏃	14.1 0.6 0.5		19.1g
−16	刀子	12.5 1.2 0.9		No.8 5.1g

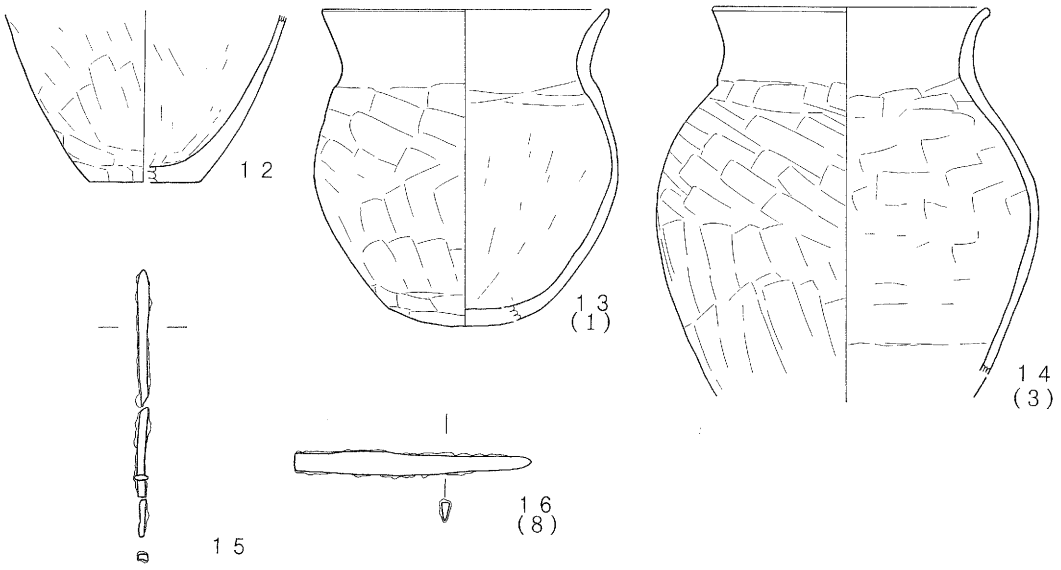
第192表　H85号住居址出土遺物観察表（2）



1　暗褐色土層（10YR3/3）。φ5㎜大石粒、パミスを含む。
2　褐灰色土層（10YR5/1）。粘土と1層の混在土。焼土、炭化物を含む。
3　灰黄褐色土層（10YR6/4）。人為埋土。
4　灰黄褐色土層（10YR4/2）。10YR6/6粒子を含む。
5　黒褐色土層（10YR3/2）。柱痕。
6　カマド構築粘土。
7　カマド掘方埋土。



第216図　H85号住居址（1）



第217図　H85号住居址（2）

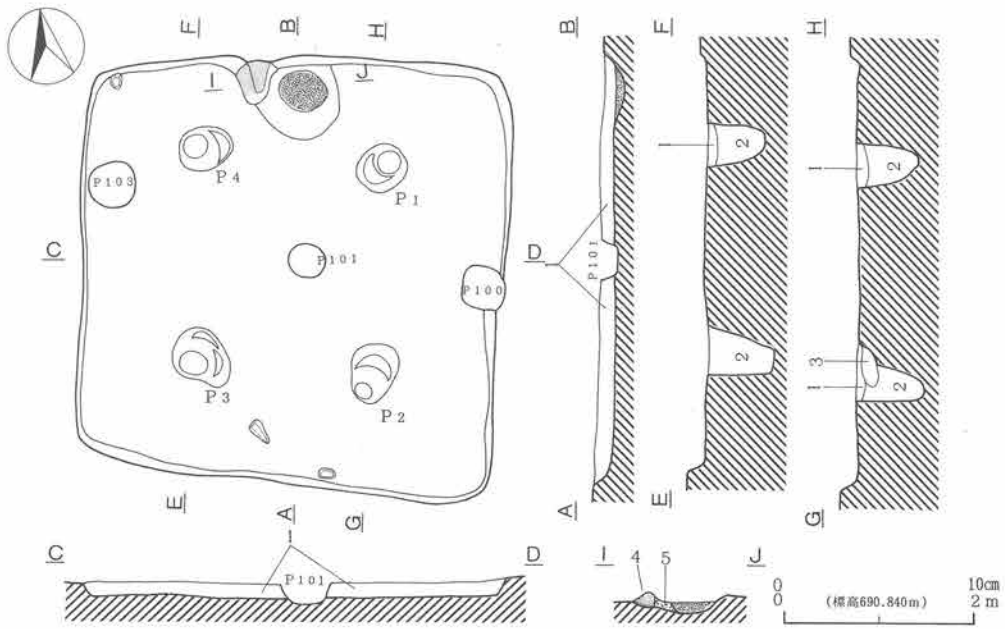
H90号住居址（第218図、図版三十九・百五十四）

遺構－Ⅶき3グリットで検出された。隅丸方形の平面プランを呈する。南北長4.55m×東西長4.5m×壁残高0.2mの規模を有し、N－6°－Eに長軸方位をとる。カマドは北壁の中央部分に構築されており、長径1.05m、深度0.9mを測る。西袖しか残存していないが、残存部分は粘土で構築されている。Pitは4基検出され、全てが主柱穴である。柱は確認されなかった。覆土は自然堆積である。

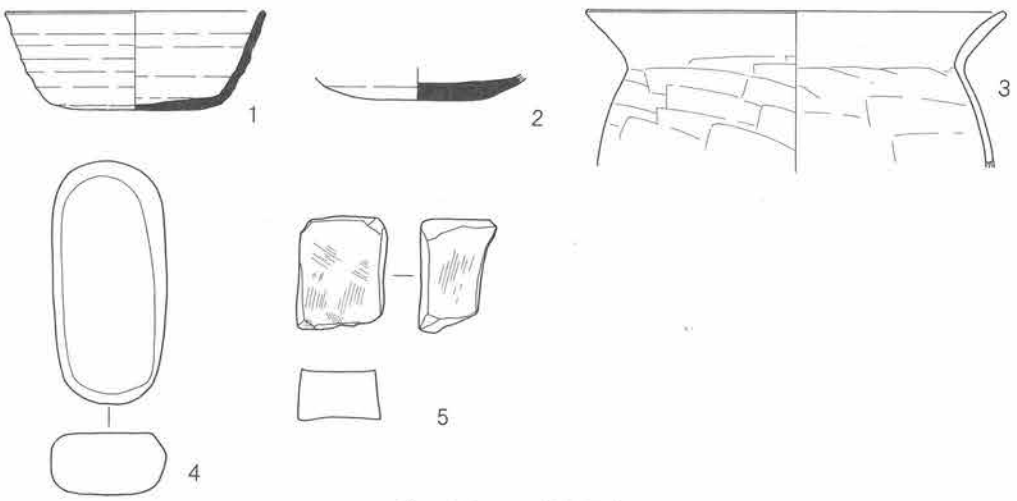
遺物－須恵器、土師器、石器が出土している。須恵器は坏（1・2）が認められる。2点共に底部篦切り後篦削り調整が施される。土師器は甕（3）が出土している。内面ナデ、外面篦削り調整の施される、「武蔵甕」である。石器は4の磨石と5の砥石が認められる。

H93号住居址（第219図、図版百五十六）

遺構－Ⅶこ9グリットで検出された。H95号住居址を切る。住居の大半は調査区域外に延びるため、規模、形状等は判然としない。壁残高0.35mを測る。調査範囲にはカマドは存在しなかった。東壁の東北・東南コーナー部分を除いた壁下には周溝が巡り、壁柱穴と思われるPitが2基構築されている。柱は確認できなかった。周溝は幅20cm、床面からの深さ12cmを測る。覆土は自



1　灰黄褐色土層（10YR4/2）。10YR6/6粒子、φ5㎜以下パミス、石粒含む。
2　黒褐色土層（10YR3/2）。10YR7/3砂粒多含。
3　にぶい黄褐色土層（10YR7/3）。砂層。
4　にぶい黄褐色土層（10YR6/4）。カマド構築粘土。
5　にぶい黄褐色土層（10YR5/3）。カマド掘方埋土。



第218図　H90号住居址

然堆積であった。

遺物－土師器、須恵器、石器が出土している。土師器には坏（1）、有台坏（2）、鉢（3）が認められる。坏1は内面黒色処理され、底部に手持ち篦削り調整が施される。有台坏2は内面黒

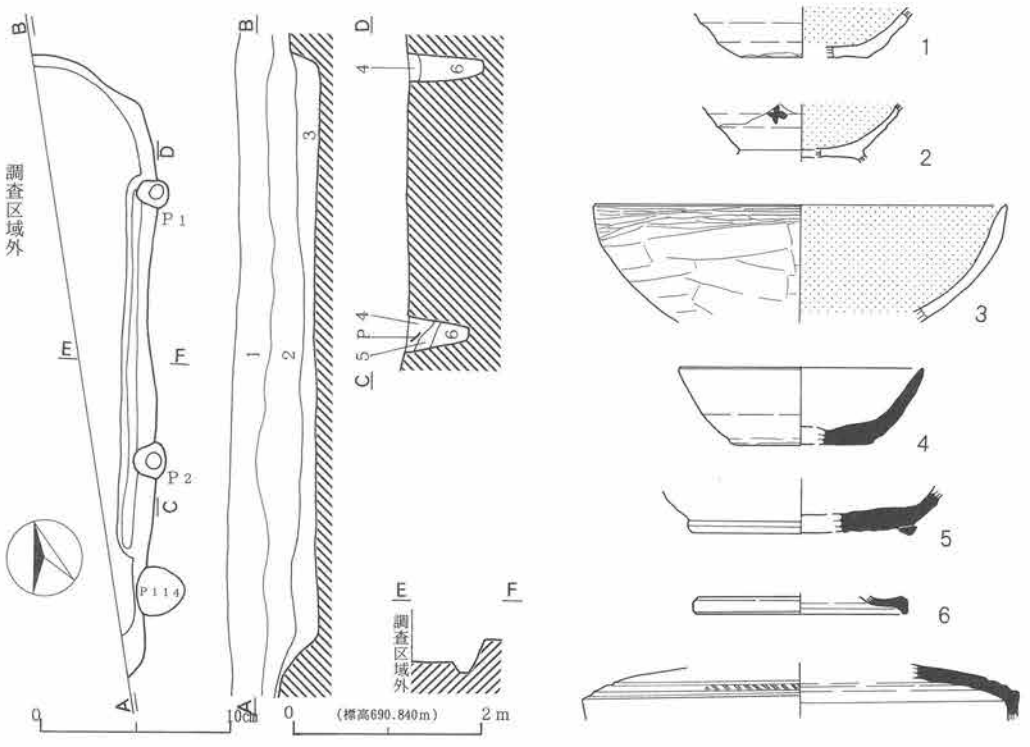
挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
－1	須恵器 坏	13.8 7.0 5.2	底部篦切り、篦削り。	
－2	須恵器 坏	－ 6.0 －	底部篦切り、篦削り。	
－3	土師器 甕	22.3 － －	内－ナデ。 外－篦削り。	武蔵甕。
－4	磨石	12.9 6.0 3.3		470 g
－5	砥石	－ 4.6 2.7		156 g

第193表　H90号住居址出土遺物観察表

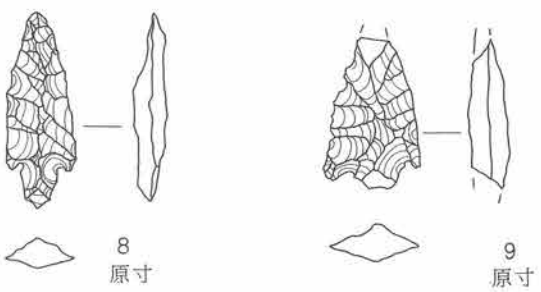
色処理が施され、底部篦削り調整の後高台が付けられている。欠損のため判読不可能な墨書が認められる。鉢３も黒色処理される。外面には篦削り・篦磨き調整が施される。須恵器には坏（４）、有台坏（５）、坏蓋（６）、超頸壺（７）が認められる。坏４は底部篦削り、有台坏５も底部篦削り後高台を付けている。坏蓋６は扁平で小振りである。超頸壺７は肩部の破片で、櫛歯状工具による刺突列が巡らされる。石鏃８・９は混入遺物である。

挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
－1	土師器 坏	－ 6.4 －	内－黒色処理。 外－底部篦削り。	
－2	土師器 有台坏	－ － －	内－ナデ。 外－底部篦削り→付高台。	墨書。
－3	土師器 鉢	21.9 － －	内－黒色処理。 外－篦削り・篦磨き。	
－4	須恵器 坏	12.9 7.2 4.0	底部篦削り。	
－5	須恵器 有台坏	－ 11.6 －	底部篦削り→付高台。	
－6	須恵器 坏蓋	10.8 － －		
－7	須恵器 長頸壺	－ － －	櫛歯状工具による刺突列。	
－8	石鏃	2.6 0.45 0.4		0.7 g
－9	石鏃	－ 0.5 0.5		1.3 g

第194表　H93号住居址出土遺物観察表



1　耕　　作　　土。
2　にぶい黄褐色土層（10YR5/3）。10YR6/6粒子少含。
3　暗　褐　色　土　層（10YR3/3）。10YR4/2、10YR6/6粒子多含。炭化物、焼土粒子少含。
4　黒　褐　色　土　層（10YR2/3）。パミス少含。
5　褐　　色　　土　　層（10YR4/4）。10YR6/6粒子多含。
6　暗　褐　色　土　層（10YR3/3）。パミス少含。



第219図　H93号住居址

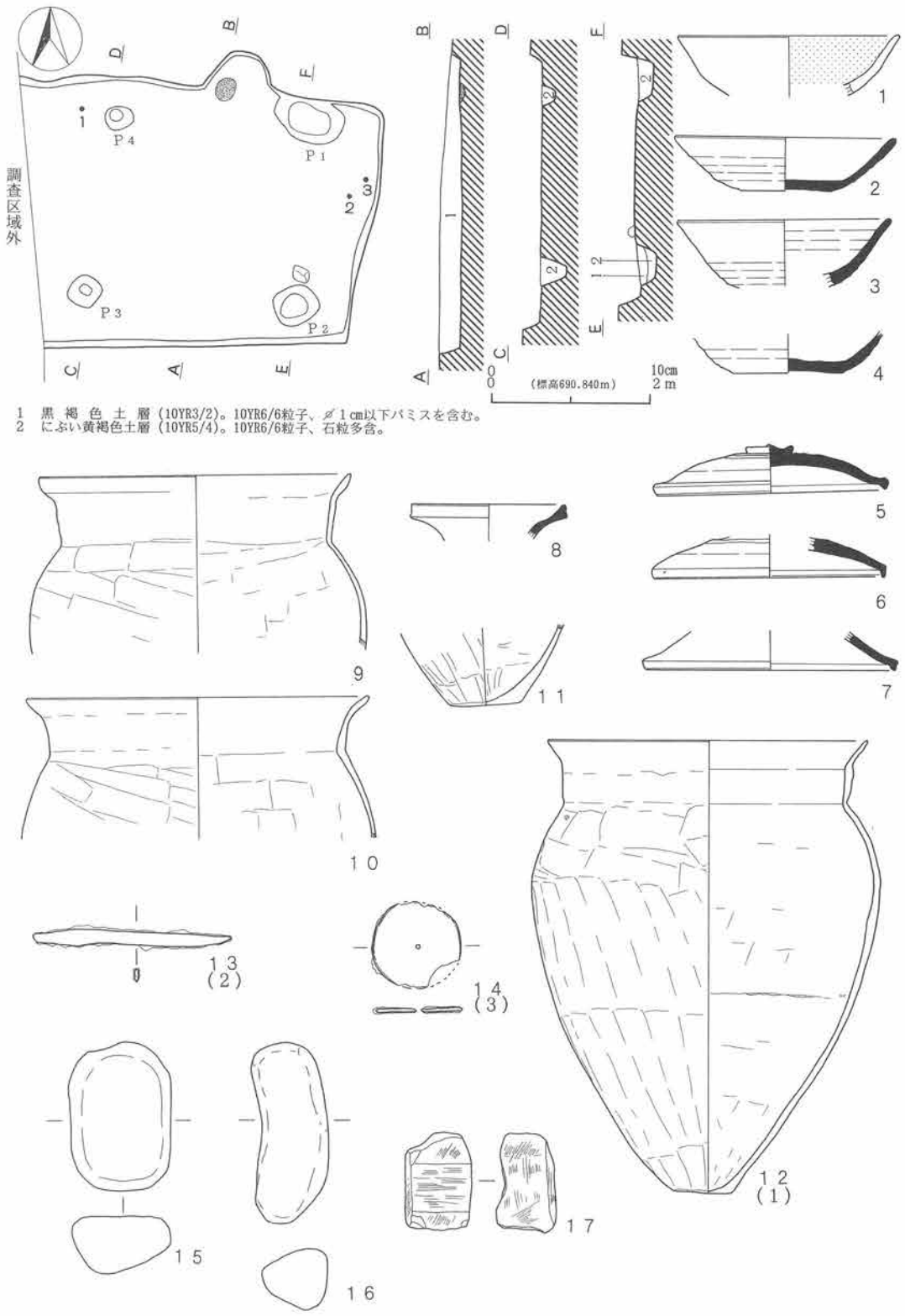
H98号住居址（第220図、図版四十一・百六十）

遺構－Ⅶけ6グリットで検出された。H102号・H110号住居址を切る。隅丸長方形の平面プランを呈し、南北長3.7m、壁残高0.28mの規模を呈する。カマドは北壁の中央東よりに構築されている。袖等は残存せず、火床と煙道部が残存していた。Pitは4基検出され、全てが主柱穴である。柱は確認されなかった。覆土は自然堆積で、周溝は存在しない。

遺物－土師器、須恵器、鉄器、石器が出土している。土師器には坏（1）、甕（9～12）が認められる。坏は内面黒色処理される。甕は全て「武蔵甕」で、「コ」字ないし「コ」字気味の口縁部を呈する。内面ナデ、外面篦削り調整が施される。須恵器には坏（2～4）、坏蓋（5～7）、

挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
－1	土師器 坏	13.9 — —	内－黒色処理。	
－2	須恵器 坏	14.0 5.5 3.4	底部右回転糸切り。	
－3	須恵器 坏	13.5 — —		
－4	須恵器 坏	— 6.9 —	底部右回転糸切り。	
－5	須恵器 坏蓋	— 14.6 2.9	天井部篦削り。	
－6	須恵器 坏蓋	— 14.7 —	天井部篦削り。	
－7	須恵器 坏蓋	— 15.8 —		
－8	須恵器 長頸壷	9.8 — —		
－9	土師器 甕	19.6 — —	内－ナデ。 外－篦削り。	武蔵甕。
－10	土師器 甕	21.5 — —	内－ナデ。 外－篦削り。	武蔵甕。
－11	土師器 甕	— 4.3 —	内－ナデ。 外－篦削り。	武蔵甕。
－12	土師器 甕	21.0 3.7 28.6	内－ナデ。 外－篦削り。	武蔵甕。
－13	刀子	5.6 5.4 0.3		13.7ｇ
－14	紡錘車	12.5 0.9 0.4		18.8ｇ
－15	編物石	9.4 6.2 3.6		350ｇ
－16	編物石	11.5 4.1 3.8		270ｇ
－17	砥石	6.2 4.2 3.8		140ｇ

第195表　H98号住居址出土遺物観察表



1　黒褐色土層（10YR3/2）。10YR6/6粒子、φ1cm以下パミスを含む。
2　にぶい黄褐色土層（10YR5/4）。10YR6/6粒子、石粒多含。

第220図　H98号住居址

超頸壺（８）が認められる。坏は底部に右回転の糸切痕を残す。坏蓋は扁平な擬宝珠つまみで天井部に篦削り調整が施されている。鉄器には13の刀子と、14の紡錘車が認められる。石器は15・16の編物と、17の砥石が存在する。

H104号住居址（第221図、図版四十二・百六十二）**遺構－Ⅶお２グリット**で検出された。住居中央部分に攪乱が入るが、遺構間の重複関係は有さない。調査区域に延びるため規模・形状等については判然としない。南北長6.12ｍ・壁残高0.2ｍの規模を有する。調査範囲内にはカマドは存在せず、５基検出されたPitの内Ｐ１・Ｐ２・Ｐ４の３基が主柱穴と考えられる。Ｐ１から直径16cm、Ｐ２から直径12cmの柱が確認された。覆土は自然堆積で、周溝は有さない。

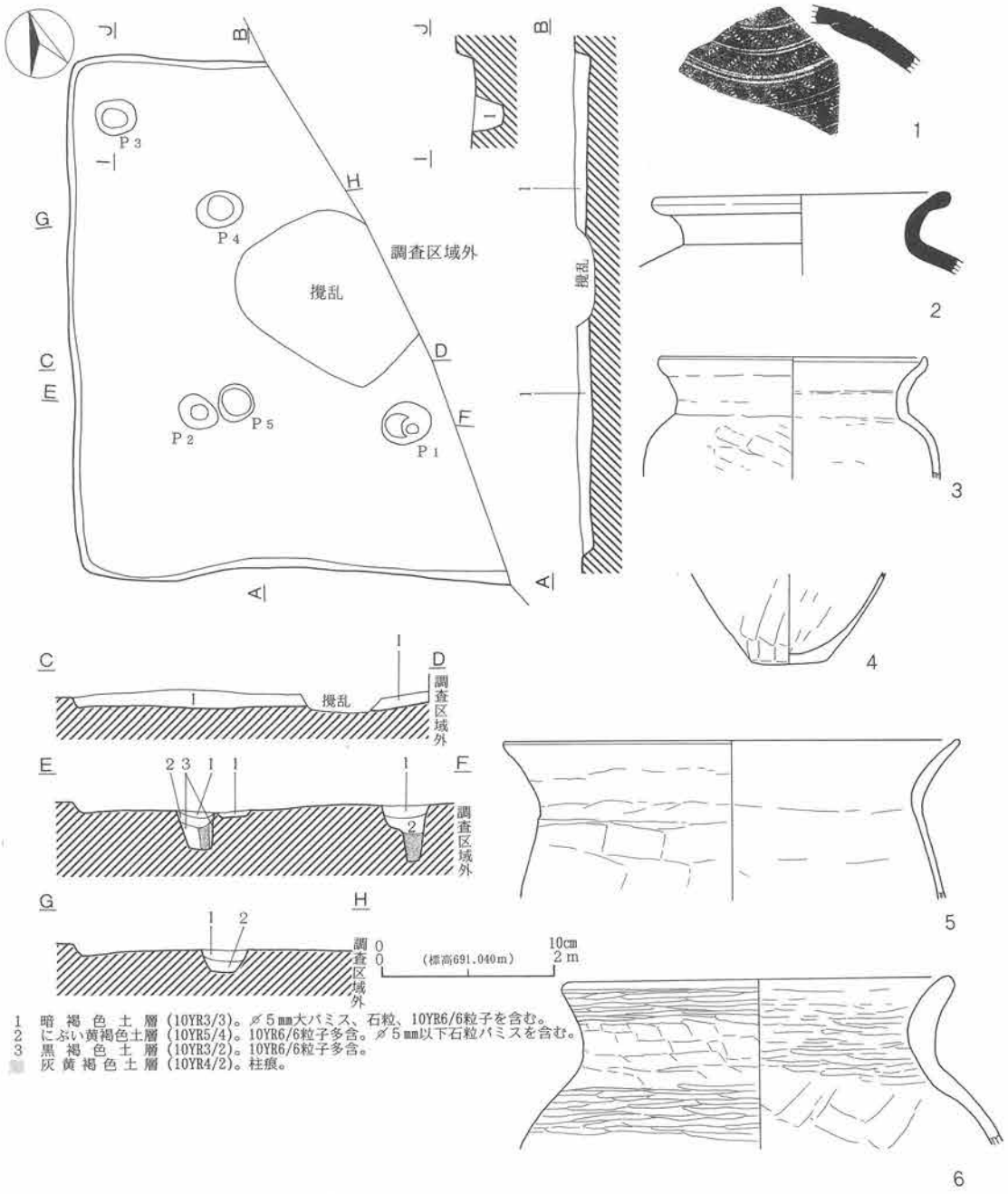
遺物－土師器、須恵器が出土している。土師器には甕（３～６）が認められる。３～５は「武蔵甕」で内面ナデ、外面篦削り調整が施される。６は胴張りの甕で内面ナデ調整～篦磨き、外面篦削り～篦磨き調整が施される。須恵器は提瓶（１）、甕（２）が認められる。１は同心円状の沈線間に櫛歯状工具による刺突列が綾杉状に施される。２は口縁端部断面を丸く仕上げるものである。

挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
－1	須恵器 提瓶	－ － －	同心円状沈線間に櫛歯による刺突を稜杉に施文。	
－2	須恵器 甕	17.5 － －		
－3	土師器 甕	15.7 － －	内－ナデ。 外－篦削り。	武蔵甕。
－4	土師器 甕	－ 4.2 －	内－ナデ。 外－篦削り。	武蔵甕。
－5	土師器 甕	26.6 － －	内－ナデ。 外－篦削り。	武蔵甕。
－6	土師器 甕	22.9 － －	内－ナデ～篦磨き。 外－篦削り～篦磨き。	

第196表　H104号住居址出土遺物観察表

H105号住居址（第222図、図版四十三・百六十二）

遺構－Ⅴけ７グリットで検出された。H76号住居址に切られる。第２次調査におけるH42号住居址は、本址と同一の住居址である。住居の大半がH76号住居址により消滅しているため、規模・形状等については判然としない。壁残高0.15ｍを測る。カマドは北壁の中央部分に構築されて



第221図　H104号住居址

おり、袖先端部分の石芯が残存していた。長径0.55ｍ×短径0.5ｍ×深度0.2ｍの規模であった。

PitはH76号住居址の掘方から２基検出された。２基共に主柱穴と考えられる。覆土は自然堆積

で、調査範囲内には周溝は存在しなかった。

遺物－土師器、須恵器が出土している。土師器には坏（1）と甕（7）が認められる。坏は内面黒色処理が施され、底部には篦削り調整が施される。甕は「武蔵甕」で内面ナデ、外面篦削り調整が施される。須恵器には坏（2・3）、有台坏（4）、坏蓋（5・6）、甕（8）が認められる。坏は2点共に底部に右回転糸切り痕を残す。有台坏は糸切り後回転篦削りを施し、台を付けている。坏蓋は皿状つまみの5と扁平な擬宝珠つまみの6が存在する。2点共に天井部には篦削り調整が施される。甕は内面に当具痕、外面には平行叩き目が認められる。

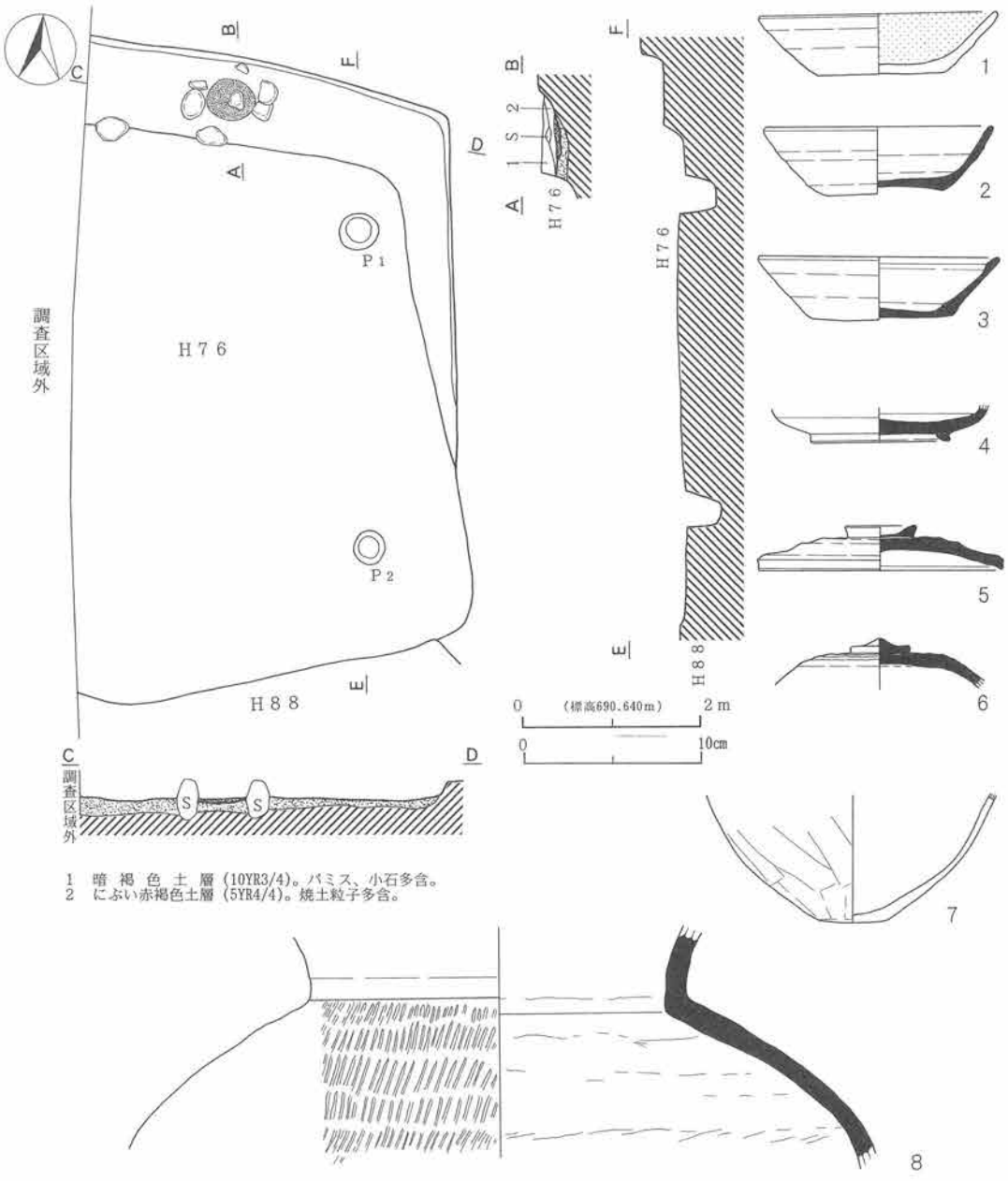
挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
－1	須恵器 坏	13.6 7.1 3.5	内面黒色処理。 底部篦削り。	
－2	須恵器 坏	13.0 6.5 3.8	底部右回転糸切り。	
－3	須恵器 坏	13.6 8.0 3.6	底部右回転糸切り。	
－4	須恵器 有台坏	－ 7.8 －	回転糸切り→回転篦削り→付高台。	
－5	須恵器 坏蓋	13.8 4.0 2.5	皿状つまみ。 天井部篦削り。	内面円滑転用硯の可能性有り。
－6	須恵器 坏蓋	－ 3.9 －	扁平な擬宝珠つまみ。 天井部篦削り。	
－7	土師器 甕	－ 2.8 －	内－ナデ。 外－篦削り	武蔵甕。
－8	須恵器 甕	－ － －	内－当具痕、ナデ。 外－平行叩き目。	

第197表　H105号住居址出土遺物観察表

H114号住居址（第223・224図、図版四十四・百六十四・百六十五）

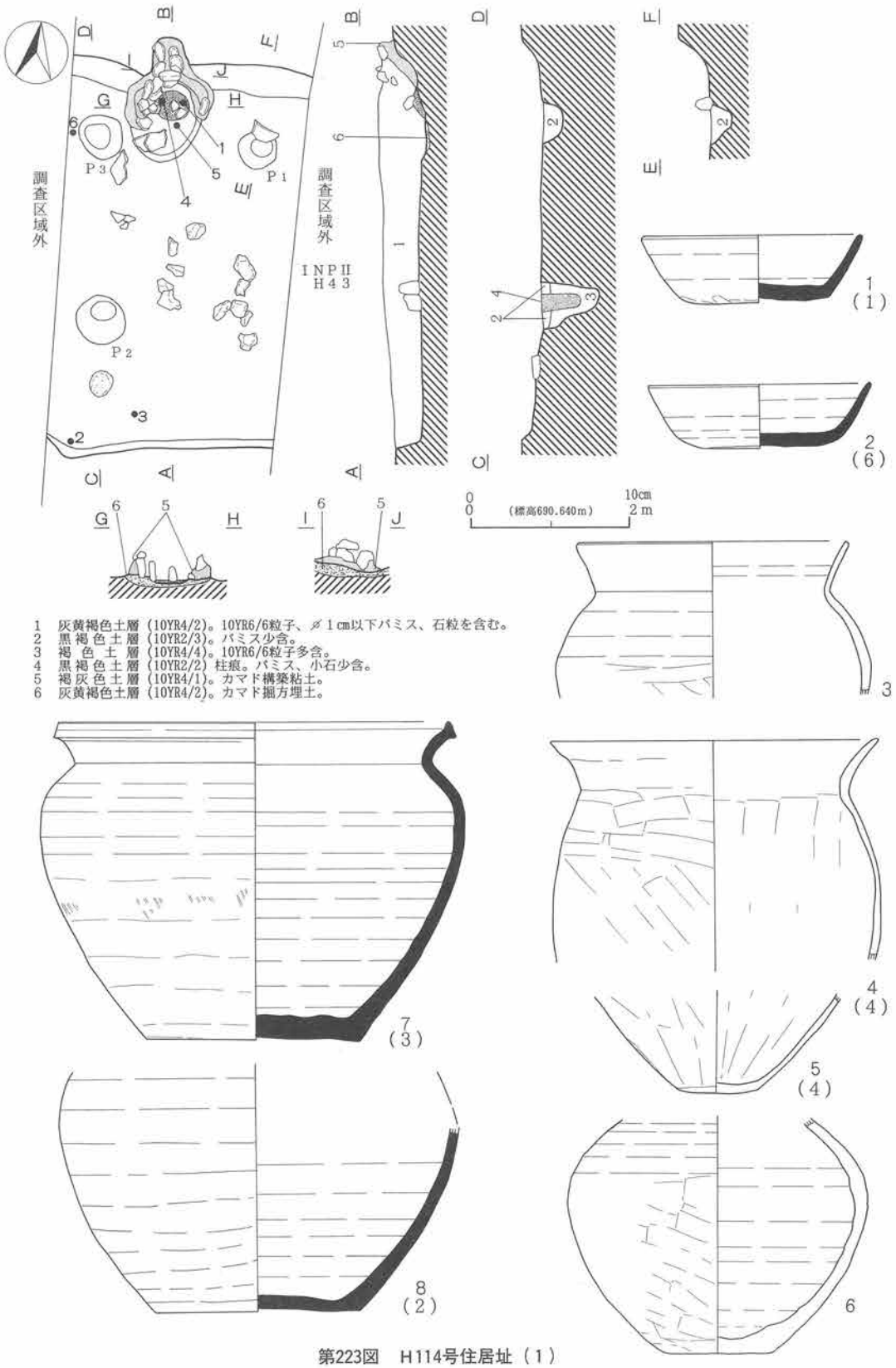
遺構－Vこ9グリットで検出された。H119号・H123号住居址を切る。第2次調査におけるH43号住居址は本址と同一の住居址である。隅丸長方形の平面プランを呈し、南北長4.88m・壁残高0.5mの規模を有する。カマドは北壁中央部分に構築されており、石芯を粘土で被覆した「石組粘土カマド」である。Pitは3基検出され、全てが主柱穴と考えられる。P2で直径20cmの柱が確認されている。覆土は自然堆積で周溝は有さない。

遺物－土師器、須恵器、鉄器、石器が出土している。土師器には甕が認められる。3・6はロクロ甕で体部の最大径部分を境に、上はロクロナデ、下は篦削り調整が施されている。4・5は「武蔵甕」で内面ナデ、外面篦削り調整が施される。須恵器には坏（1・2）、甕（7・8）が



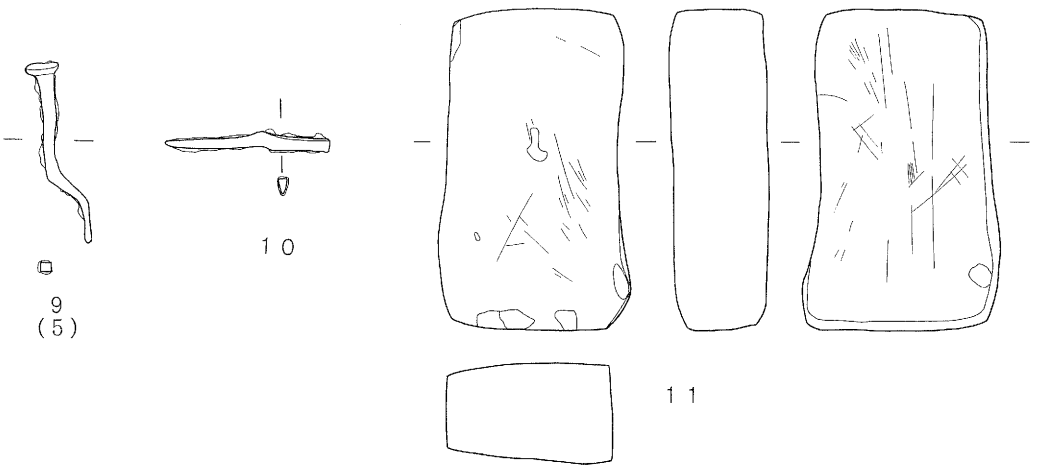
第222図　H105号住居址

認められる。坏は２点共に右回転糸切後、外底周縁部分に篦削り調整を加えている。甕は口縁部が短く広口のもので、叩き痕をロクロナデと篦削りにより消去している。鉄器は９の角釘と10の刀子が認められる。石器は11の砥石が出土している。



1　灰黄褐色土層（10YR4/2）。10YR6/6粒子、径1cm以下パミス、石粒を含む。
2　黒褐色土層（10YR2/3）。パミス少含。
3　褐色土層（10YR4/4）。10YR6/6粒子多含。
4　黒褐色土層（10YR2/2）柱痕。パミス、小石少含。
5　褐灰色土層（10YR4/1）。カマド構築粘土。
6　灰黄褐色土層（10YR4/2）。カマド掘方埋土。

第223図　H114号住居址（1）



第224図　H114号住居址（2）

挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
－1	須恵器 坏	14.1 9.0 4.3	右回転糸切り→外底周縁篦削り。	No.1
－2	須恵器 坏	14.2 8.0 4.1	右回転糸切り→外底周縁篦削り。	No.6
－3	土師器 甕	17.3 － －	内－ナデ。 外－上半：ロクロナデ、下半：篦削り。	ロクロ甕。
－4	土師器 甕	20.9 － －	内－ナデ。 外－篦削り。	武蔵甕。 No.4
－5	土師器 甕	－ 5.0 －	内－ナデ。 外－篦削り。	武蔵甕。 No.4と同一個体。
－6	土師器 甕	－ 6.8 －	内－ナデ。 外－上半：ロクロナデ、下半：篦削り。	ロクロ甕。
－7	須恵器 甕	25.5 13.6 20.3	内－ナデ。 外－平行叩目→篦削り・ナデ。	武蔵甕。 No.3
－8	須恵器 甕	－ 12.9 －	内－ナデ。 外－叩目→篦削り・ナデ。	No.2
－9	釘	8.8 0.8 0.8		15.9g No.5
－10	刀子	8.5 5.0 2.5		1.54g
－11	砥石	8.7 0.8 0.5		63g

第198表　H114号住居址出土遺物観察表

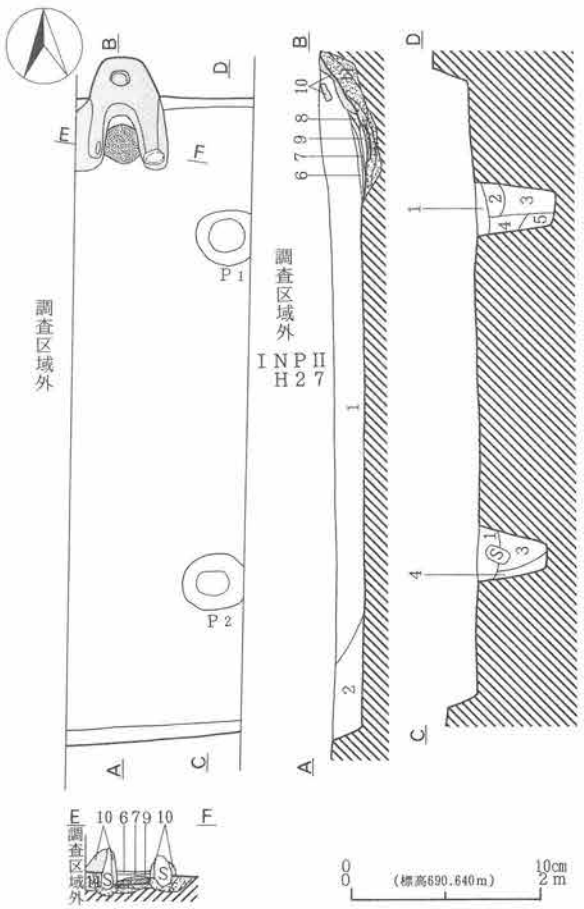
H115号住居址（第225図、図版四十五・百六十五・百六十六）

遺構－Ⅶお８グリットで検出された。今回の調査範囲では重複関係を有さないが、第２次調査時に本址はH27号住居址であり、第２次調査のH30号住居址と第２次調査のM17号溝址（今回の調査ではM８号溝址）を切っている。隅丸長方形の平面プランを呈し、南北長6.8ｍ・壁残高0.35ｍの規模を呈する。カマドは北壁中央部に構築されており、石芯を粘土で被覆した「石組粘土カマド」である。長径1.15ｍ・深度0.52ｍをはかる。２基検出されたPitは主柱穴で、覆土は自然堆積である。周溝は有さない。

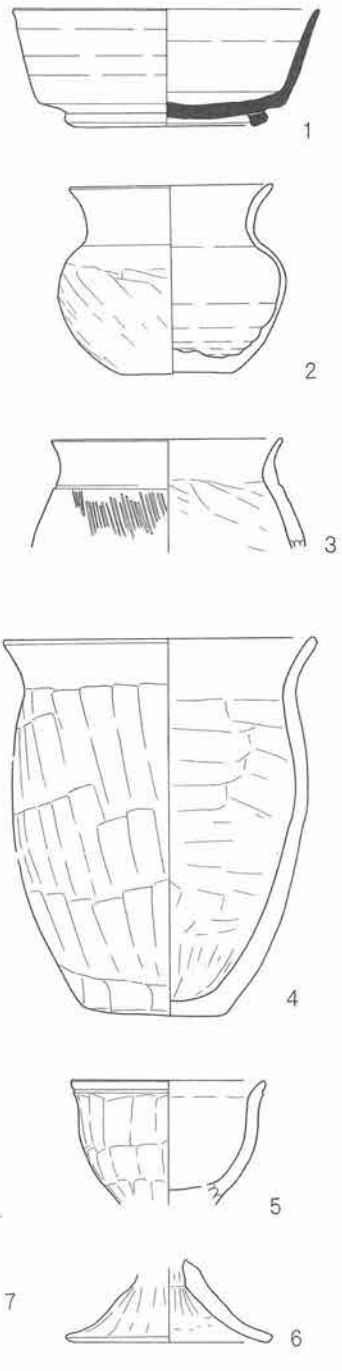
遺物－土師器、須恵器、石器、石製品、鉄器が出土している。土師器には小型甕（２）、甕（３・４）、台付鉢（５・６）が認められる。小型甕は内面にロクロナデを施し、外面には篦削り調整がなされる。甕３は内面ナデ、外面には刷毛目調整が施される。４は内面ナデ、外面篦削り調整が施される。台付鉢とした５・６は同一個体と思われるが、接合点がない。内面ナデ、外面篦削り調整が施される。須恵器は有台坏が１点出土している。底部糸切り後、回転篦削り調整を施し、台を付けている。石製品としては、10の砥石と８・９のような滑石製の臼玉が出土している。鉄器としては７のようなものが出土しているが、性格は不明である。

挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
－1	須恵器 有台坏	16.2 10.7 6.2	回転糸切り→回転篦削り→付高台。	
－2	土師器 小型甕	10.7 5.6 10.0	内－ナデ。 外－篦削り。	
－3	土師器 甕	12.2 － －	内－ナデ。 外－刷毛目。	
－4	土師器 甕	16.5 7.4 20.0	内－ナデ。 外－篦削り。	
－5	土師器 台付鉢	10.4 － －	内－ナデ。 外－篦削り。	6と同一個体。
－6	土師器 台付鉢	－ 10.9 －	内－ナデ。 外－篦削り。	
－7	鉄器	4.9 1.0 0.2		4.7ｇ
－8	臼玉	1.15 1.1 0.4		0.4ｇ
－9	臼玉	1.2 1.1 0.6		1.5ｇ
－10	砥石	7.6 5.0 2.5		190ｇ

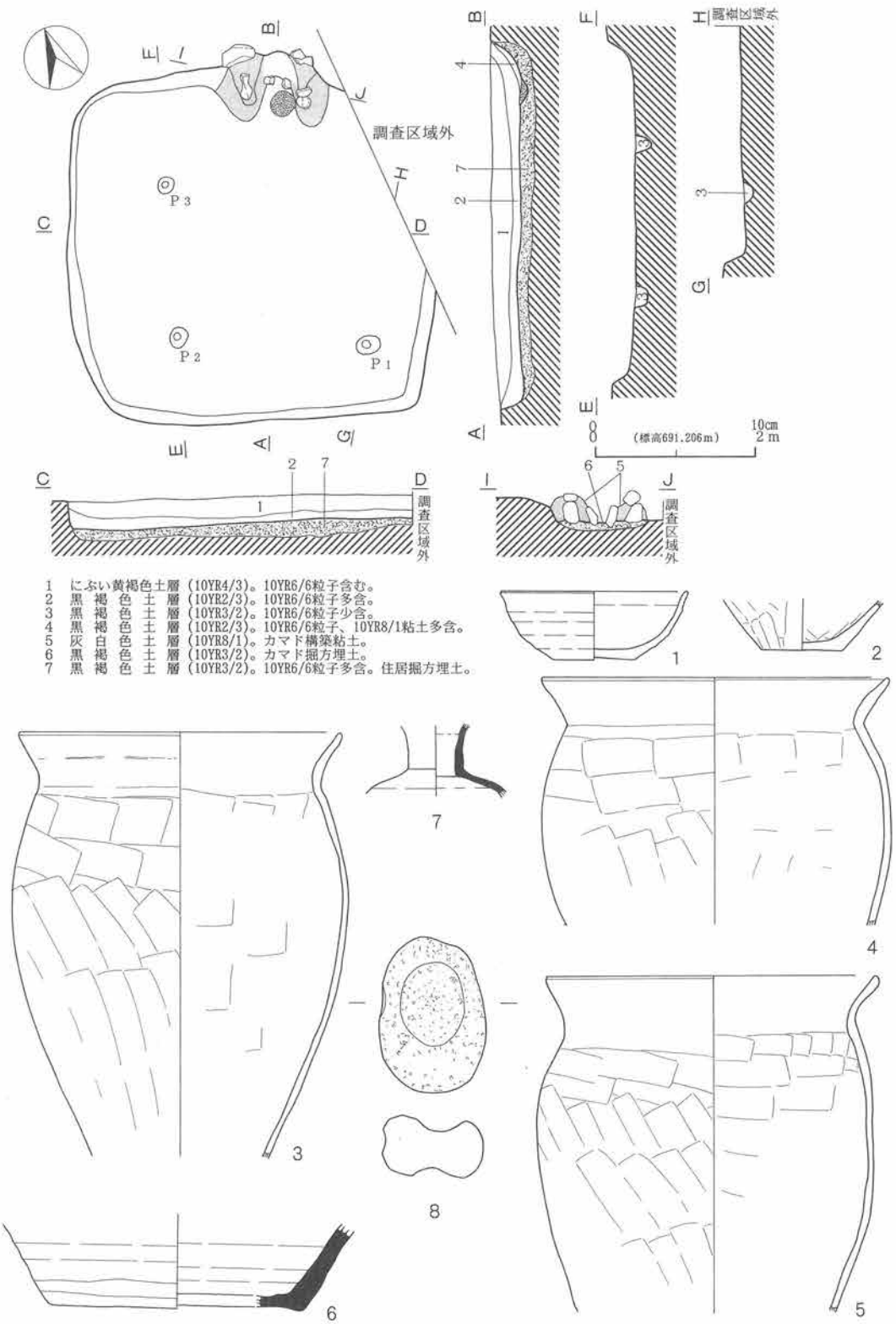
第199表　H115号住居址出土遺物観察表



1　黒　褐　色　土　層（10YR2/3）。炭化物少含。
2　黒　　色　土　層（10YR2/1）。パミス少含。
3　黒　褐　色　土　層（10YR3/2）。パミス、10YR6/6粒子少含。
4　暗　褐　色　土　層（10YR3/4）。パミス、炭化物少含。
5　黄　褐　色　土　層（10YR5/6）。10YR6/6粒子多含。
6　黒　褐　色　土　層（5YR6/4）。灰、焼土、粘土多含。
7　暗　赤　褐　色　土　層（5YR3/6）。黒色粘土ブロック、炭化物、焼土粒子多含。
8　にぶい赤褐色土層（5YR6/4）。灰、焼土、粘土多含。
9　灰　黄　褐　色　土　層（5YR6/2）。灰の堆積層。焼土、炭化物少含。
10　暗　赤　褐　色　土　層（5YR3/3）。カマド構築粘土。
11　カマド掘方埋土。



第225図　H115号住居址



第226図　H125号住居址

H125号住居址（第226図、図版四十九・百七十一）

遺構－ＸⅠえ4グリットで検出された。H142号住居址をきる。隅丸方形の平面プランを呈する。南北長4.75ｍ・壁残高0.35ｍの規模を有し、Ｎ－15°－Ｅに長軸方位をとる。カマドは北壁の中央に構築されており、長径1.4ｍ×短径0.85ｍ×深度0.45ｍの規模で、石芯を粘土を被覆した「石組粘土カマド」である。３基検出されたPitはいずれも浅いが、掘方状態においても他にPitが存在しないことから考えて、主柱穴とおもわれる。覆土は自然堆積で、周溝は有さない。

遺物－土師器、須恵器、石器が出土している。土師器には坏（１）、甕（２～５）が認められる。坏は底部に右回糸切痕を残す。甕は４点共に「武蔵甕」で、内面ナデ、外面篦削り調整が施され，最大径を体部に有する。須恵器には超頸壺（７）、甕（６）が認められる。超頸壺は小型で器壁が薄い。甕は底部片で外面には篦削り調整が施される。石器は８の凹石が出土している。

挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
－1	土師器 坏	11.8 5.0 4.3	右回転糸切り。	
－2	土師器 甕	－ 5.0 －	内－ナデ。 外－篦削り。	武蔵甕。
－3	土師器 甕	20.2 － －	内－ナデ。 外－篦削り。	武蔵甕。
－4	土師器 甕	21.8 － －	内－ナデ。 外－篦削り。	武蔵甕。
－5	土師器 甕	20.9 － －	内－ナデ。 外－篦削り。	武蔵甕。
－6	須恵器 甕	－ 15.9 －	内－ナデ。 外－篦削り。	
－7	須恵器 長頸壺	－ － －		
－8	凹石	9.8 6.7 3.7		130ｇ

第200表　H125号住居址

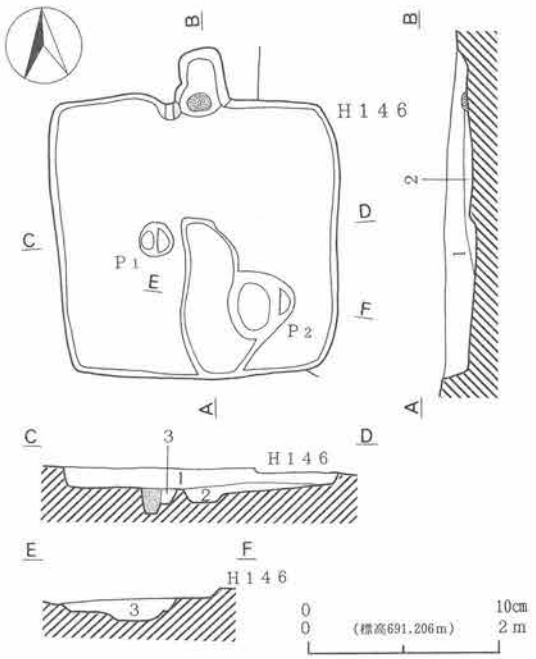
H126号住居址（第227図、図版五十・百七十一）

遺構－ＸⅠか10グリットで検出された。H146号住居址に切られ、H172号住居址を切る。隅丸長方形の平面プランを呈し、長軸長3.5ｍ×短軸長3.05ｍ×壁残高0.35ｍ、面積8.15㎡の規模を有する。カマドは北壁の中央部分に構築されるが、火床と煙道以外は残存していない。Pitは２基検出されたが主柱穴とは考えにくいが、Ｐ１で直径22㎝の柱が確認された。覆土は自然堆積である。

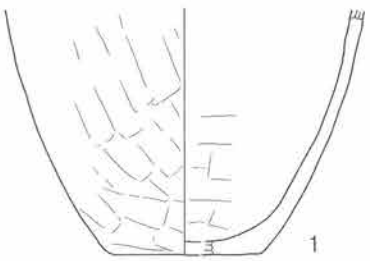
遺物－土師器甕が１点出土している。内面ナデ、外面篦削り調整が施される。

挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
－1	土師器 甕	－ 7.8 －	内－ナデ。 外－篦削り。	

第201表　H126号住居址出土遺物観察表



1　にぶい黄褐色土層（10YR4/3）。
2　にぶい黄褐色土層（10YR4/3）。10YR8/4ローム粒子を含む。
3　にぶい黄褐色土層（10YR5/3）。10YR8/4ローム粒子多含。
　灰黄褐色土層（10YR4/2）。柱痕。



第227図　H126号住居址

H127号住居址（第228～230図、図版五十・百七十一・百七十二）

遺構－ⅩⅡき１グリットで検出された。H147号・H148号・H155号・H172号・H173号住居址を切る。隅丸長方形の平面プランを呈し、長軸長5.53ｍ×短軸長5.0ｍ×壁残高0.3ｍ、面積22.75㎡の規模を有し、N－15°－Eに長軸方位をとる。カマドは北壁の中央に粘土で構築されている。長径1.25ｍ×短径1.0ｍ×深度0.45ｍの規模を呈する。Pitは８基検出され、この内のＰ２・Ｐ３・Ｐ６・Ｐ７の４基が主柱穴と考えられ、他の４基は補助的な柱と思われる。周溝は有さず、覆土は自然堆積である。

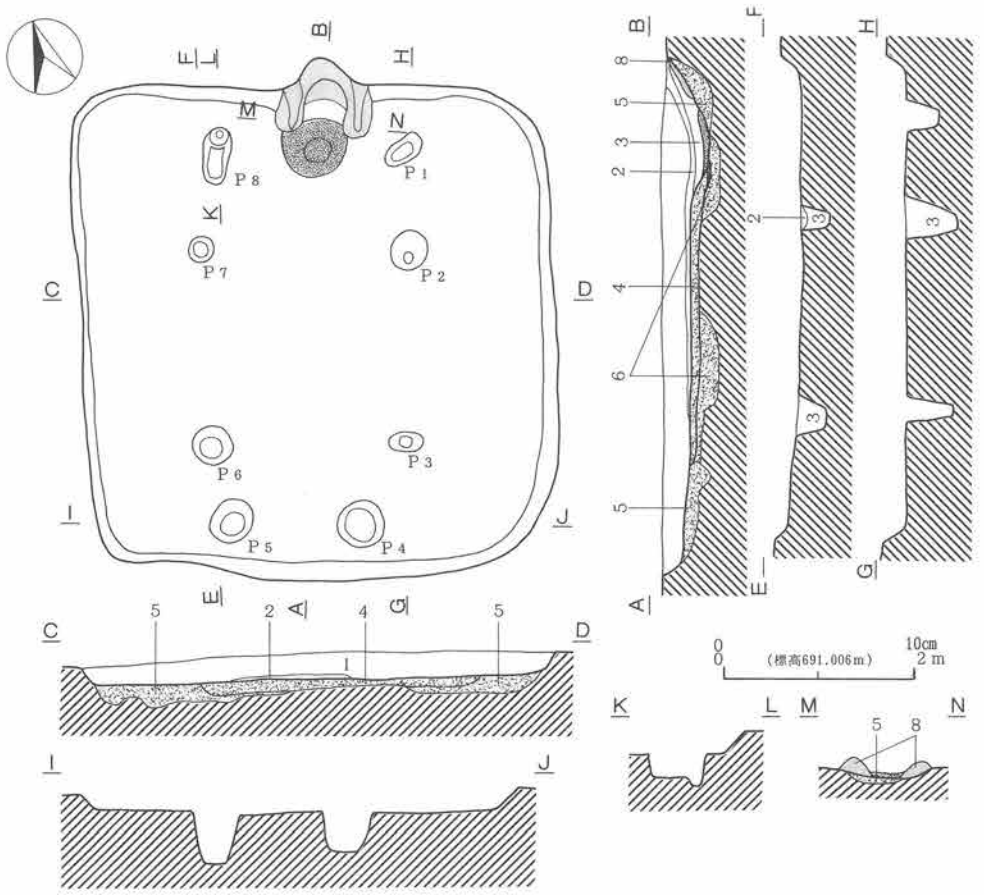
尚、本址が拡張された住居であることが掘方の調査で判明した。旧住居は北壁のカマド以西と西壁の北から70%が新住居と共有された位置にあり、北西コーナーと南東コーナーを結ぶ対角線を延長して、住居を拡張したものと思われる。

遺物－土師器、須恵器、灰釉陶器、鉄器が出土している。土師器には、坏（１～12）、有台坏（14）、有台坏Ⅲ（13）、甕（22）が認められる。坏は１・２のように、内面黒色処理で底部に篦削り調整が施されるものと、３～８のように内面

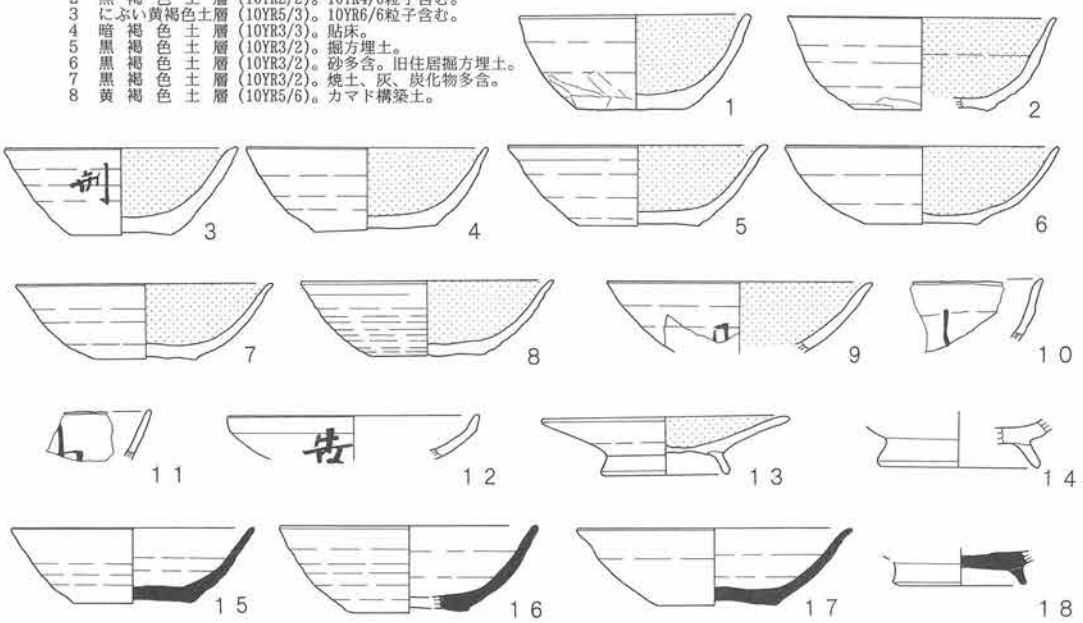
黒色処理で底部に右回転の糸切り痕を残すもの、13のように黒色処理が施されないものが存在する。また、3・9～12のように墨書が認められるものも多い。有台坏14は底部片で、回転糸切り後、高台を付加する部分に篦削り調整を施している。有台皿13は内面黒色処理で、底部中央に方向不明の糸切り痕を残す。甕22は混入遺物である。H148号かH173号住居址に帰属するものであろう。須恵器には坏（15～17）、有台坏（18）が認められる。全てが底部に右回転の糸切り痕を残す。灰釉陶器は碗（19～21）が出土している。釉薬はつけがけで、口縁端部は外反し、高台は三日月高台である。大原2号窯期に比定されようか？鉄器23は鉄板を円錐状に丸めたものである。性格は不明である。

挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
－1	土師器 坏	12.3 5.8 5.0	内面黒色処理。 底部篦削り。	
－2	土師器 坏	14.2 7.0 4.9	内面黒色処理。 底部篦削り。	
－3	土師器 坏	12.4 5.2 4.6	内面黒色処理。 底部右回転糸切り。	「刑」の墨書。
－4	土師器 坏	12.9 6.5 4.4	内面黒色処理。 底部右回転糸切り。	
－5	土師器 坏	13.7 6.4 4.3	内面黒色処理。 底部右回転糸切り。	
－6	土師器 坏	14.5 6.1 4.1	内面黒色処理。 底部右回転糸切り。	
－7	土師器 坏	13.7 5.3 4.0	内面黒色処理。 底部右回転糸切り。	
－8	土師器 坏	13.4 6.0 4.0	内面黒色処理。 底部右回転糸切り。	
－9	土師器 坏	14.1 ― ―	内面黒色処理。 底部右回転糸切り。	墨書。
－10	土師器 坏	― ― ―		墨書。
－11	土師器 坏	― ― ―		墨書。
－12	土師器 坏	13.4 ― ―		「告」の墨書。
－13	土師器 有台皿	13.2 6.8 3.1	内面黒色処理。 回転糸切り・付高台。	

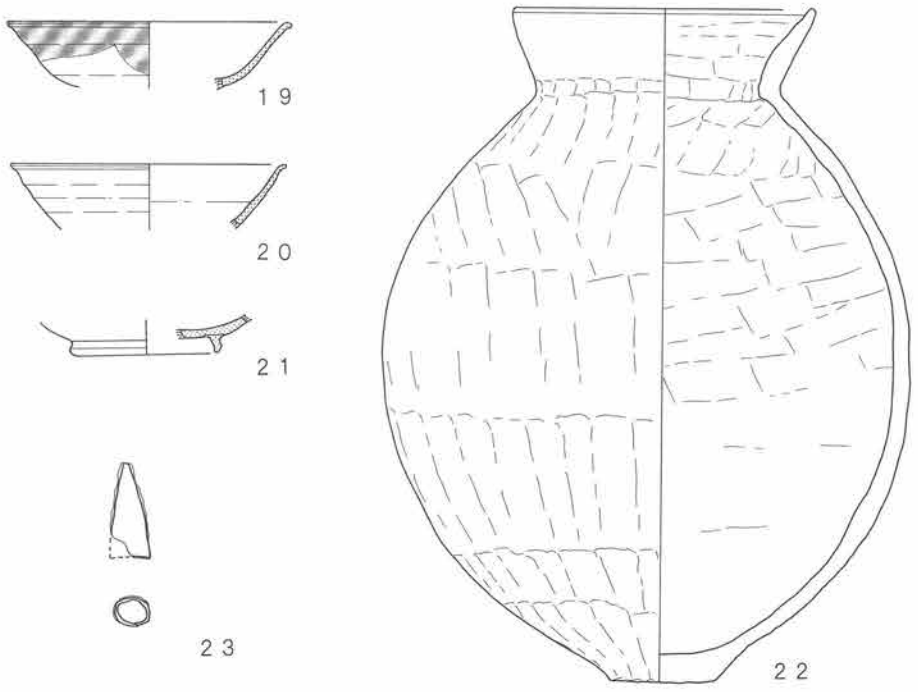
第202表　H127号住居址出土遺物観察表（1）



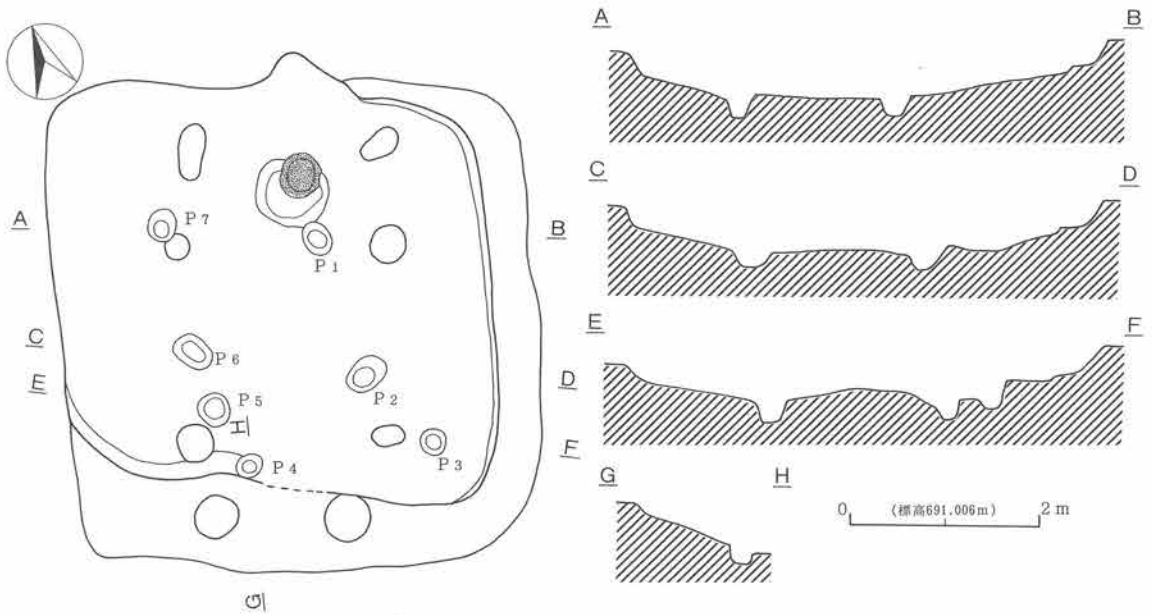
1　にぶい黄褐色土層（10YR4/3）。φ1㎝以下石粒多含、10YR8/4砂粒少含。
2　黒　褐　色　土　層（10YR2/2）。10YR4/6粒子含む。
3　にぶい黄褐色土層（10YR5/3）。10YR6/6粒子含む。
4　暗　褐　色　土　層（10YR3/3）。貼床。
5　黒　褐　色　土　層（10YR3/2）。掘方埋土。
6　黒　褐　色　土　層（10YR3/2）。砂多含。旧住居掘方埋土。
7　黒　褐　色　土　層（10YR3/2）。焼土、灰、炭化物多含。
8　黄　褐　色　土　層（10YR5/6）。カマド構築土。



第228図　H127号住居址（1）



第229図　H127号住居址（2）



第230図　H127号住居址

挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
−14	土師器 有台坏	− 8.7 −	回転糸切・付高台。	
−15	須恵器 坏	12.9 6.4 4.6	右回転糸切り。	
−16	須恵器 坏	13.8 6.4 4.6	右回転糸切り。	
−17	須恵器 坏	14.6 6.1 4.1	右回転糸切り。	
−18	須恵器 有台坏	− 7.1 −	回転糸切・付高台。	
−19	灰釉陶器 碗	15.0 − −	釉薬つけがけ。	
−20	灰釉陶器 碗	14.6 − −		
−21	灰釉陶器 碗	− 8.1 −	三日月高台。	
−22	土師器 甕	16.0 5.5 35.8	内ーナデ。 外ー篦削り。	混入遺物。
−23	鉄器	5.0 1.9 1.6		13.1ｇ

第203表　H127号住居址出土遺物観察表（２）

H130号住居址（第231・232図、図版五十一・五十二・百七十二・百七十三）

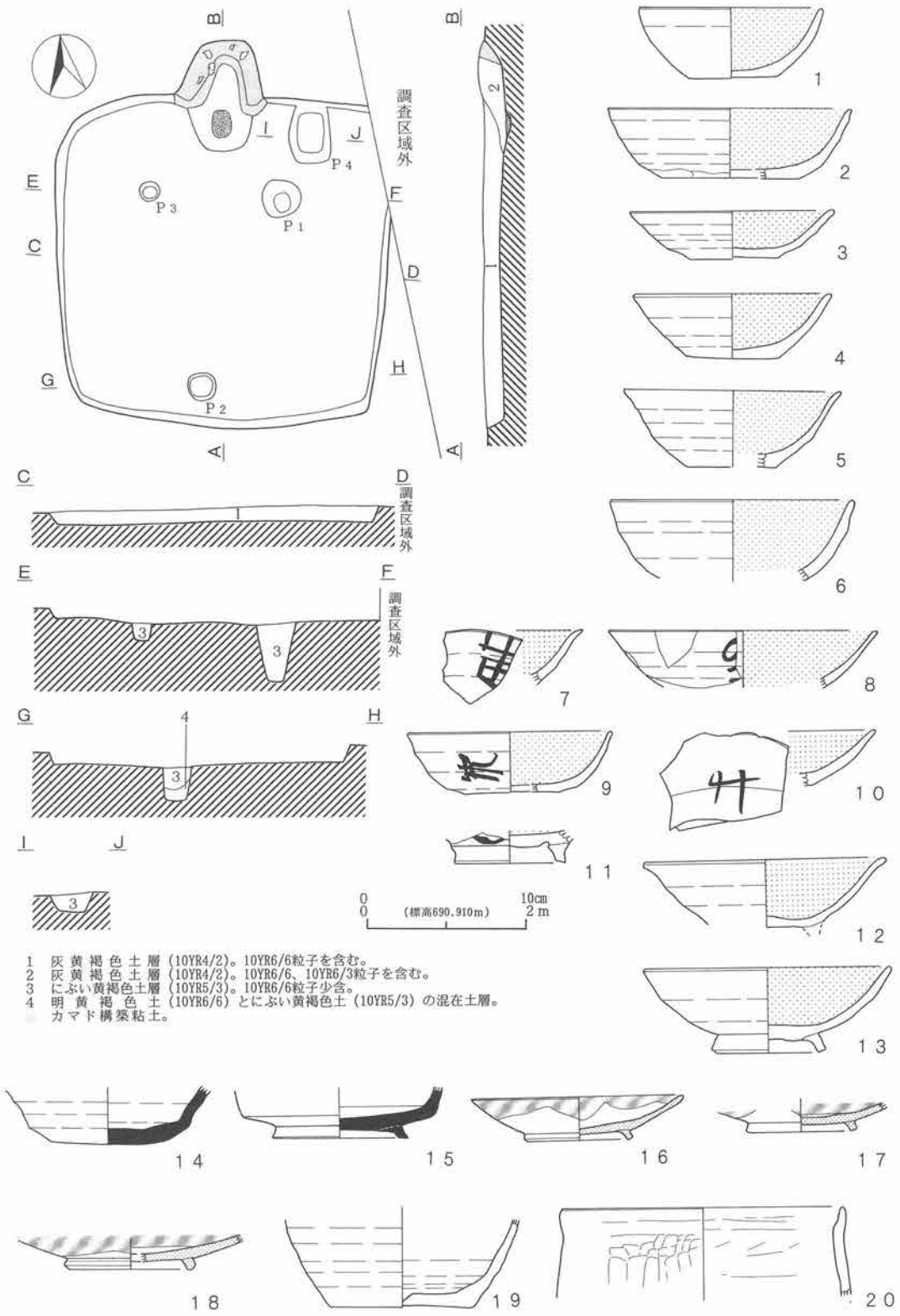
遺構－ＸＩく９グリットで検出された。H158号・H175号住居址を切る。隅丸長方形の平面プランを呈する。長軸長4.9ｍ×短軸長4.2ｍ×壁残高0.3ｍの規模を有し、Ｎ－５°－Ｅに長軸方位をとる。カマドは北壁中央部分に構築されており、袖は残存せず、粘土で造られた煙道部分だけが残っていた。Pitは４基検出されているが、その配置に規則性は認められない。Ｐ４は貯蔵穴の可能性が高い。覆土は自然堆積である。

遺物－土師器、須恵器、灰釉陶器、石器が出土している。土師器には坏（１～10）、有台坏（11～13）、甕（19～23）、羽釜（24）が認められる。坏は全てのものが内面黒色処理され、底部が残存するものの内１・２は手持ち篦削り、他は右回転の糸切り痕を残す。有台坏も全て内面黒色処理され、底部は回転糸切り→回転ヘラ削り→付け高台の成形・調整が施される。７～11には墨書が認められる。甕は19・21・23のようなロクロ甕と20・22のような内面ナデ・外面篦削りが施されるものが存在する。羽釜24はロクロ痕を残す。須恵器は坏（14）、有台坏が存在する。坏は底部篦切りで、有台坏は回転糸切り→回転ヘラ削り→付け高台の成形・調整が施される。灰釉陶器

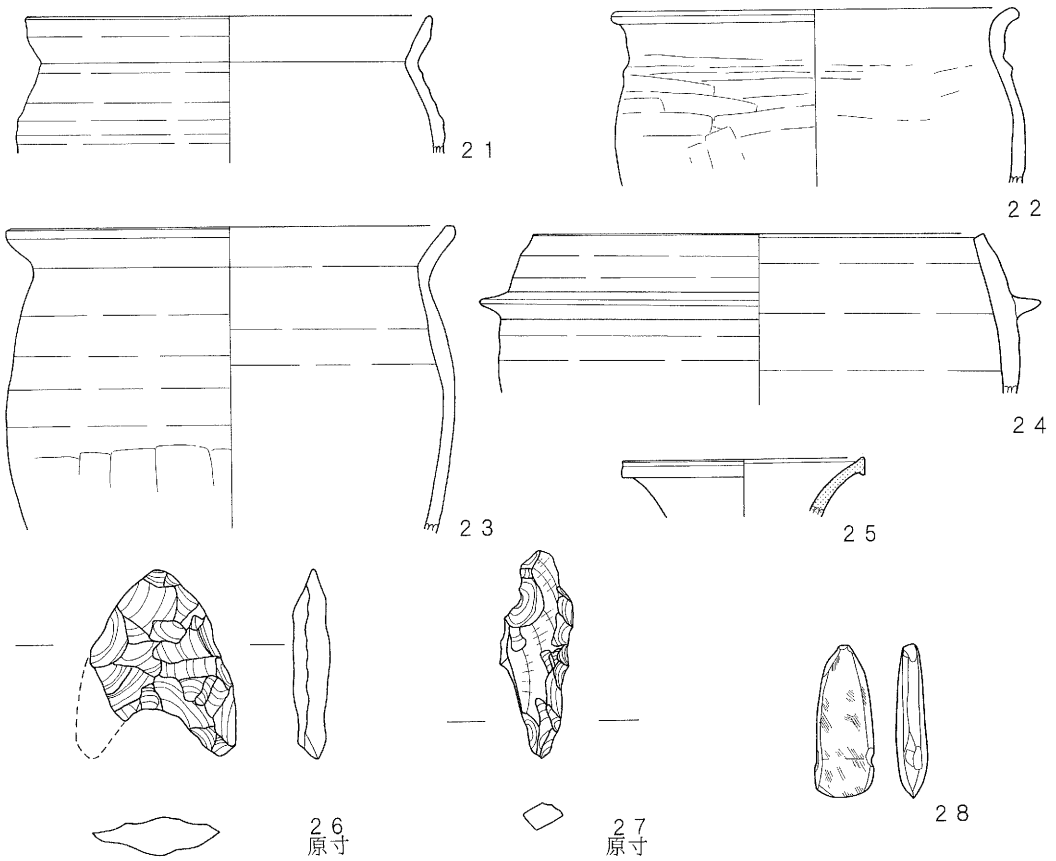
には皿（16～18）、長径瓶（25）が認められる。皿は3点共につけがけ施釉で、三日月高台である。大原2号窯式に比定されようか？長径瓶は口縁部片である。石器は打製石鏃（26）・石錐（27）、磨製石斧（28）が出土している。全て混入遺物である。

挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
－1	土師器 坏	11.6 5.6 4.4	内面黒色処理。 底部篦削り。	
－2	土師器 坏	15.4 8.5 4.4	内面黒色処理。 底部篦削り。	
－3	土師器 坏	13.0 5.5 3.1	内面黒色処理。 底部右回転糸切り。	「刑」の墨書。
－4	土師器 坏	12.5 5.8 4.1	内面黒色処理。 底部右回転糸切り。	
－5	土師器 坏	13.8 5.6 4.9	内面黒色処理。 底部右回転糸切り。	
－6	土師器 坏	15.5 － －	内面黒色処理。	
－7	土師器 坏	－ － －	内面黒色処理。	墨書。
－8	土師器 坏	17.0 － －	内面黒色処理。	墨書。
－9	土師器 坏	13.8 3.9 6.0	内面黒色処理。 底部右回転糸切り。	墨書。
－10	土師器 坏	－ － －	内面黒色処理。	墨書。
－11	土師器 有台坏	－ 7.1 －	内面黒色処理。 回転糸切り→回転篦削り→付高台。	墨書。
－12	土師器 有台坏	15.3 7.1 4.3	内面黒色処理。 回転糸切り→回転篦削り→付高台。	
－13	土師器 有台坏	15.7 7.3 5.4	内面黒色処理。 回転糸切り→回転篦削り→付高台。	
－14	須恵器 坏	－ 6.5 －	底部篦削り。	
－15	須恵器 有台坏	－ 8.6 －	回転糸切り→回転篦削り→付高台。	
－16	灰釉陶器 皿	13.4 6.8 2.8	つけがけ施釉。 三日月高台。	
－17	灰釉陶器 皿	－ 7.0 －	つけがけ施釉。 三日月高台。	

第204表　H130号住居址出土遺物観察表（1）



第231図　H130号住居址（1）



第232図　H130号住居址（2）

挿図番号	器種	法量	成形・調整	備考
−18	灰釉陶器 皿	− 8.2 −	つけがけ施釉。 三日月高台。	
−19	土師器 甕	− 8.9 −	内外ーロクロナデ。	
−20	土師器 甕	18.0 − −	内ーナデ。 外ー篦削り。	
−21	土師器 甕	21.5 − −	内外ーロクロナデ。	
−22	土師器 甕	21.6 − −	内ーナデ。 外ー篦削り。	
−23	土師器 甕	21.6 − −	内ーロクロナデ。 外ー口縁〜体部上半：ロクロナデ、体部下半：篦削り。	
−24	土師器 羽釜	23.6 − −	内外ーロクロナデ。	

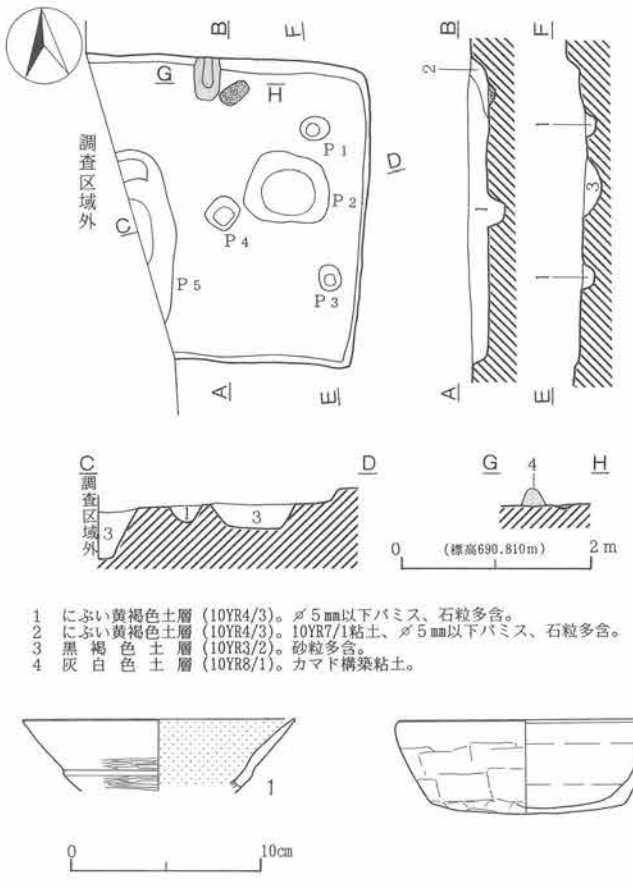
第205表　H130号住居址出土遺物観察表（2）

挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
−25	灰釉陶器 長径瓶	12.9 − −		
−26	打製石鏃	5.0 3.4 1.0		1.9g
−27	石錐	5.5 1.8 0.7		1.1g
−28	磨製石斧	8.0 3.0 1.5		53.2g

第206表　H130号住居址出土遺物観察表（3）

H131号住居址（第233図、図版五十二・百七十三）

遺構－XⅡく4グリットで検出された。H150号住居址を切る。南北長3.2m×壁残高0.2mの規模を有する。カマドは北壁の中央部分に構築されるが、東袖は残存しなかった。残存部分は粘土で構築されていた。Pitは5基構築されているが、性格は判断しかねる。覆土は自然堆積である。



1　にぶい黄褐色土層（10YR4/3）。φ5mm以下パミス、石粒多含。
2　にぶい黄褐色土層（10YR4/3）。10YR7/1粘土、φ5mm以下パミス、石粒多含。
3　黒褐色土層（10YR3/2）。砂粒多含。
4　灰白色土層（10YR8/1）。カマド構築粘土。

第233図　H131号住居址

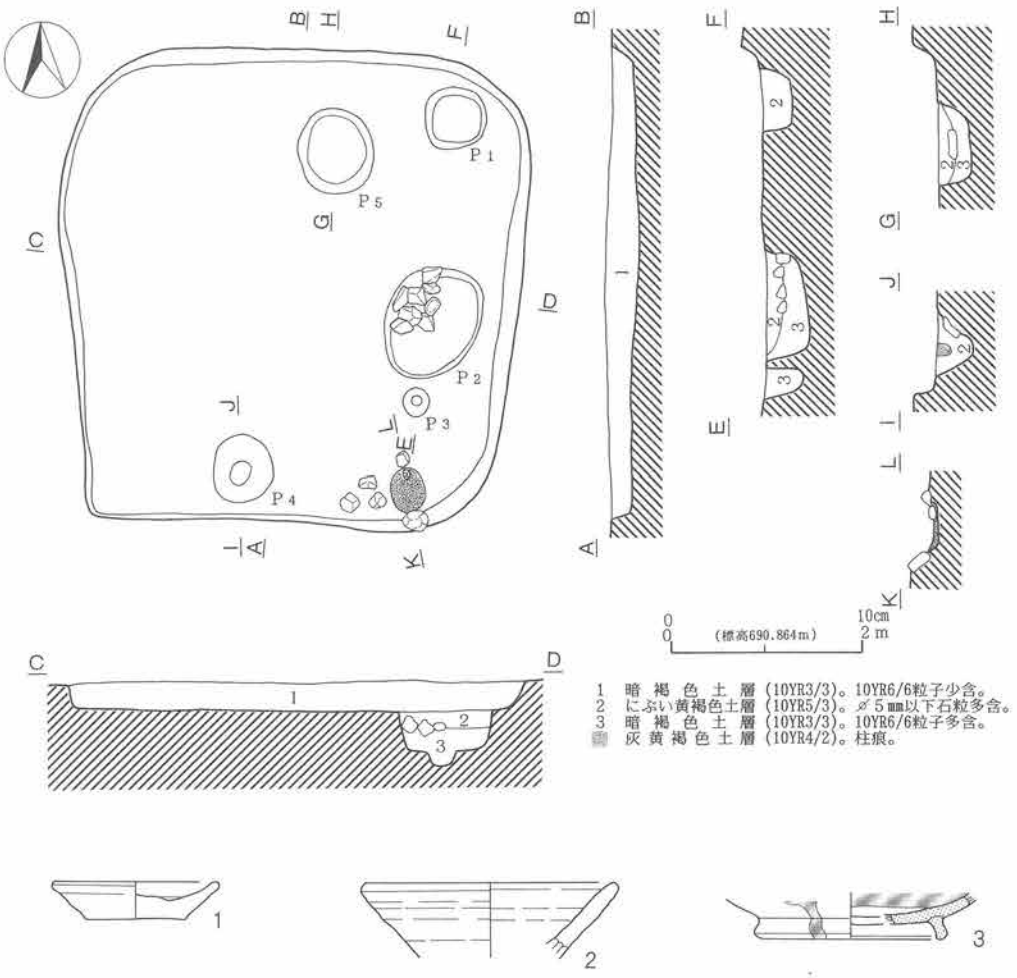
遺物－土師器坏が2点出土している。1は丸底から口縁部が開くもので、内面黒色処理で、外面篦削り調整が施される。2は内面にロクロナデが認められる。外面には篦削り調整が施される。

H132号住居址（第234図、図版五十三・百七十三）

遺構－Xあ5グリットで検出された。H162号住居址を切る。隅丸方形の平面プランを呈し、南北長5.0m×東西長4.95m×壁残高0.45m・面積20.78㎡の規模を有する。長軸方位はN－0°－Wである。カマドは東南コーナーに構築されている。火床と構築材と思

挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
－1	土師器 坏	14.4 － －	内－黒色処理。 外－篦磨き。	
－2	土師器 坏	13.8 10.1 5.0	内－ロクロナデ。 外－篦削り。	

第207表　H131号住居址出土遺物



第234図　H132号住居址

われる礫が散乱した状態であり、袖等は残存していなかった。Pitは5基検出されたが、配置に規則性は認められなかった。P4において直径12㎝の柱が確認されている。覆土は自然堆積で周

溝は有さない。

遺物－土師器、灰釉陶器が出土している。土師器には皿（1）、坏（2）が存在する。皿は底部に右回転の糸切り痕が認められる。灰釉陶器は碗（3）が出土している。つけがけ施釉、三日月高台のものである。

挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
－1	土師器 皿	8.8 5.2 2.0	右回転糸切り。	
－2	土師器 坏	13.7 － －		
－3	灰釉陶器 碗	－ 10.2 －	つけがけ施釉。	

第208表　H132号住居址出土遺物観察表

H133号住居址（第235図、図版五十三・百七十三）

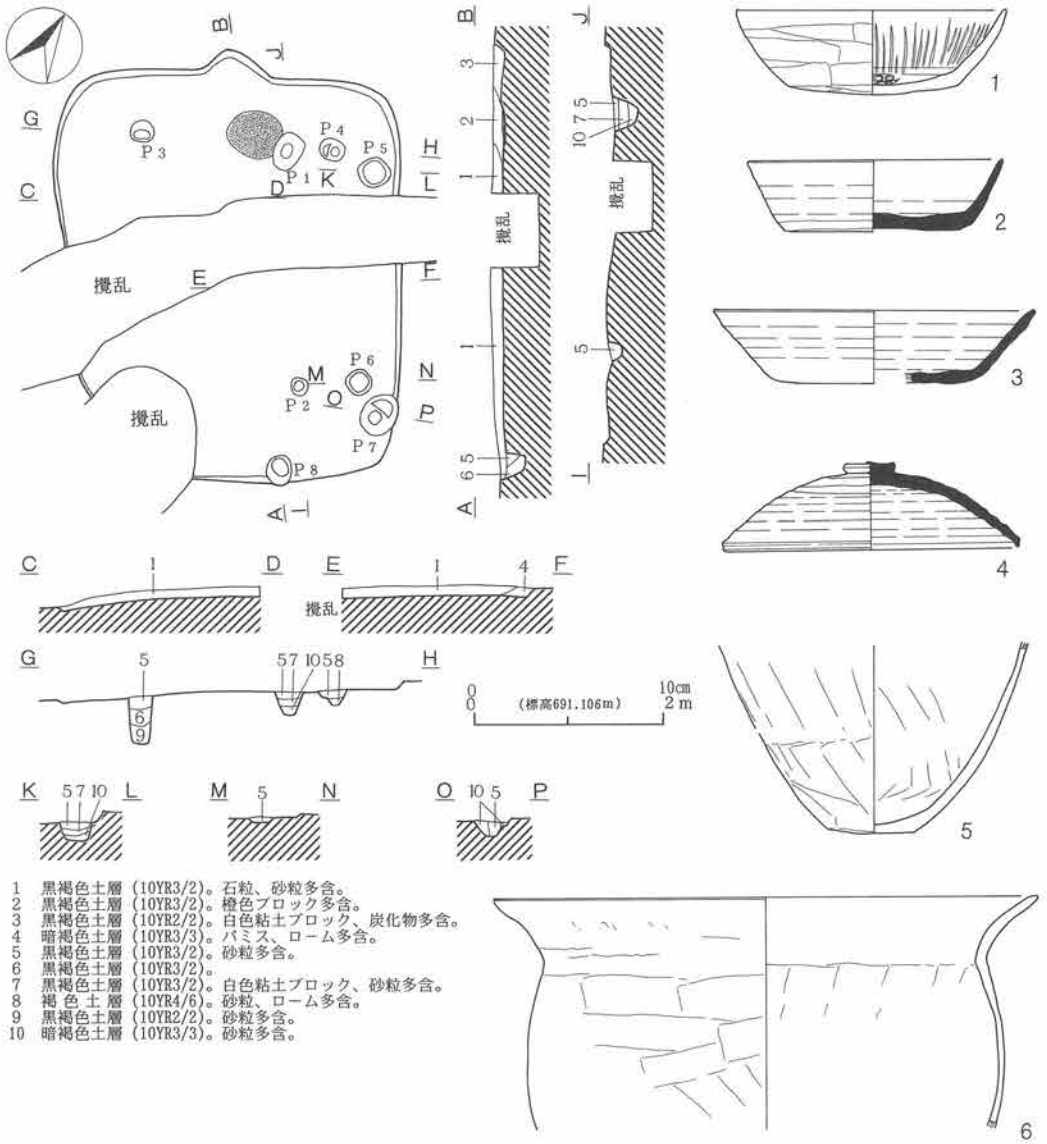
遺構－ⅩⅠう9グリットで検出された。D9号土坑に切られ、H143号住居址を切る。隅丸長方形の平面プランを呈し、南北長4.6m×東西長3.67m×壁残高0.1m・面積9.9㎡の規模を有する。N－35°－Wに長軸方位をとる。カマドは北壁の中央部分に構築されていたが、火床が残存していたのみである。Pitは8基検出されたが、その配置に規則性はなく、性格は判然としない。覆土は自然堆積である。

遺物－土師器、須恵器が出土している。土師器には坏（1）と甕（5・6）が存在する。坏は

挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
－1	土師器 坏	14.2 2.0 4.5	内－螺旋＋放射暗文。 外－篦削り。	
－2	須恵器 坏	13.5 9.2 3.3	底部篦切り・篦削り。	
－3	須恵器 坏	17.0 － －	底部篦切り・篦削り。	
－4	須恵器 坏蓋	15.7 － 3.3	天井部篦削り。	
－5	土師器 甕	－ 4.5 －	内－ナデ。 外－篦削り。	武蔵甕。
－6	土師器 甕	28.2 － －	内－ナデ。 外－篦削り。	武蔵甕。

第209表　H133号住居址出土遺物観察表

内面に螺旋＋放射暗文が施され、外面篦削り調整が施される。甕は２点共に「武蔵甕」で内面ナデ、外面篦削り調整が施される。須恵器には坏（２・３）と坏蓋（４）が認められる。坏は底部篦切り・篦削りのものである。坏蓋は天井が高く、扁平な擬宝珠つまみが付されている。



第235図　H133号住居址

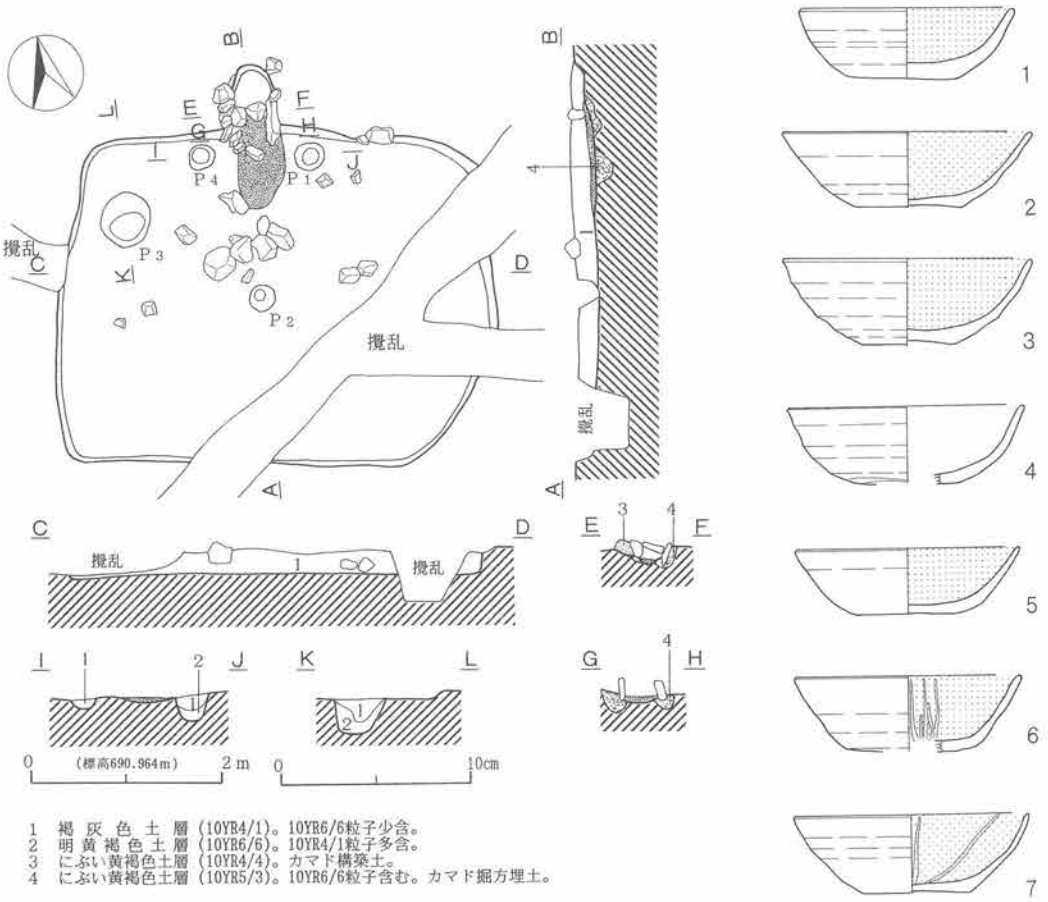
H134号住居址（第236・237図、図版五十四・百七十四・百七十五）

遺構－ＸＩこ１グリットで検出された。H144号住居址を切る。平面隅丸長方形の住居址で、南北長3.48ｍ×東西長4.68ｍ×壁残高0.28ｍ・面積11.64㎡の規模を有する。南北を主軸と考えるならＮ－12°－Ｅに主軸をとる。カマドは北壁の中央西寄りに検出された。大半が石で構築されており、極めて少量の粘土が隙間を充填する程度に使用されていた。Pitは４基検出されているが、配置に規則性は認められない。覆土は自然堆積で、周溝は有さない。

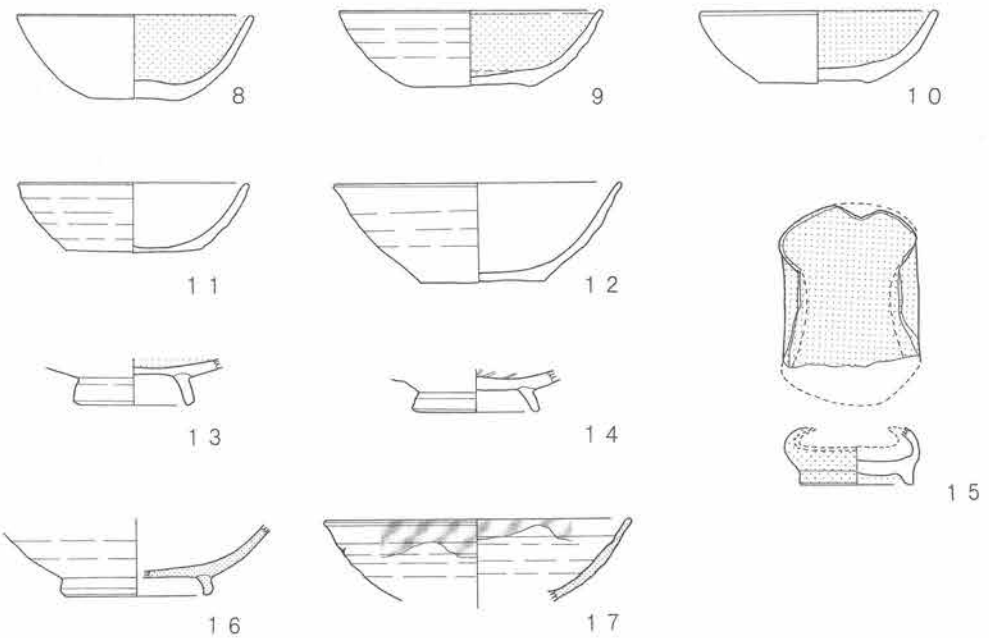
遺物－土師器、須恵器、灰釉陶器、弥生土器が出土している。土師器には坏（１～12）、有台坏（13・14）、耳皿（15）、甕（18・19・21・22）、小型甕（20・23）が認められる。坏１・２・４は底部篦削り、３は回転糸切り後周縁部に篦削り、他の底部が残存するものは右回転の糸切り痕が認められる。内面は黒色処理されるものと、されないものが存在し、暗文が認められるものも多い。有台坏は回転糸切り後回転篦削りを施し、高台を付けるもので、内面は13が黒色処理、14は暗文が認められる。耳皿は内外面が黒色処理される。回転糸切り後回転篦削りを施し、高台を付けている。甕は、18・19のように内面ナデ、外面篦削り調整のものと、21・22のようなロクロ甕が存在する。小型甕も甕同様に、内面ナデ、外面篦削り調整の20と、23のようなロクロ甕が存在する。須恵器は壺の底部（24）と短頸壺（25）が出土している。灰釉陶器陶器は三日月高台が付される碗の底部片16と、つけがけ施釉される碗の口縁部片17の２点が認められる。混入遺物である弥生土器は、26の甕と27の壺の２点が出土している。

挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
－1	土師器 坏	11.4 5.8 3.7	内面黒色処理。 底部篦削り。	
－2	土師器 坏	13.3 5.5 4.0	内面黒色処理。 底部篦削り。	
－3	土師器 坏	13.2 4.9 4.5	内面黒色処理。 底部回転糸切り→周縁篦削り。	
－4	土師器 坏	12.4 － 4.1	底部篦削り。	
－5	土師器 坏	12.0 5.3 3.5	内面黒色処理。 右回転糸切り。	
－6	土師器 坏	12.0 － 4.1	内面黒色処理。 右回転糸切り。	
－7	土師器 坏	12.5 5.4 4.1	内面黒色処理。 右回転糸切り。	
－8	土師器 坏	12.5 4.9 4.5	内面黒色処理。 右回転糸切り。	

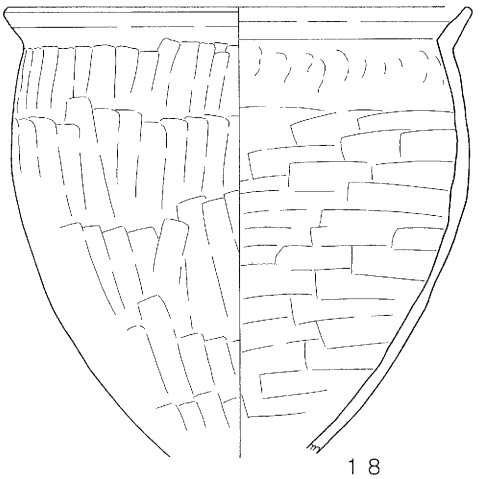
第210表　H134号住居址出土遺物観察表（１）

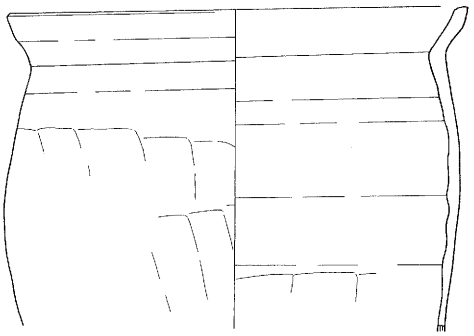


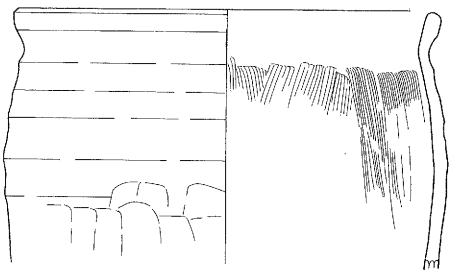
1　褐灰色土層（10YR4/1）。10YR6/6粒子少含。
2　明黄褐色土層（10YR6/6）。10YR4/1粒子多含。
3　にぶい黄褐色土層（10YR4/4）。カマド構築土。
4　にぶい黄褐色土層（10YR5/3）。10YR6/6粒子含む。カマド掘方埋土。

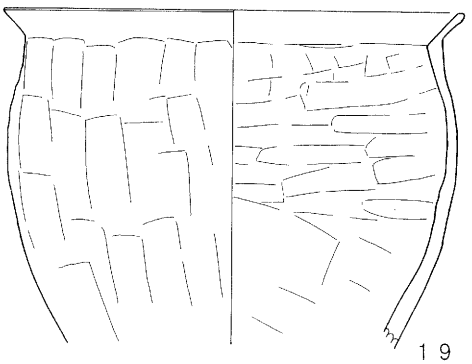


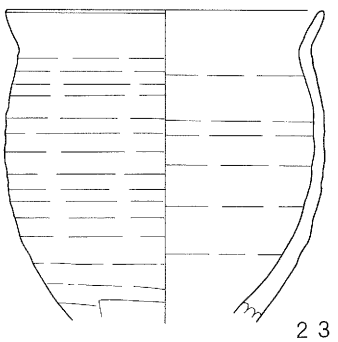
第236図　H134号住居址（2）

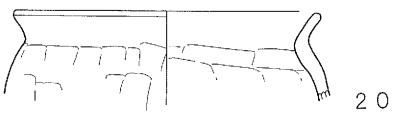


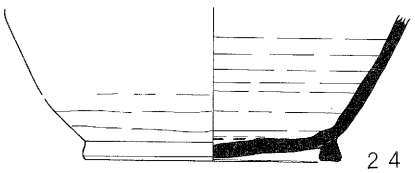


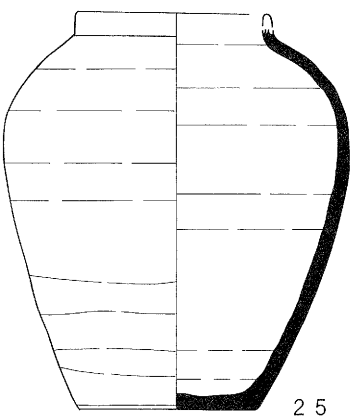


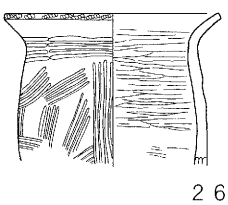


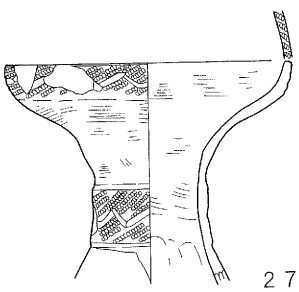








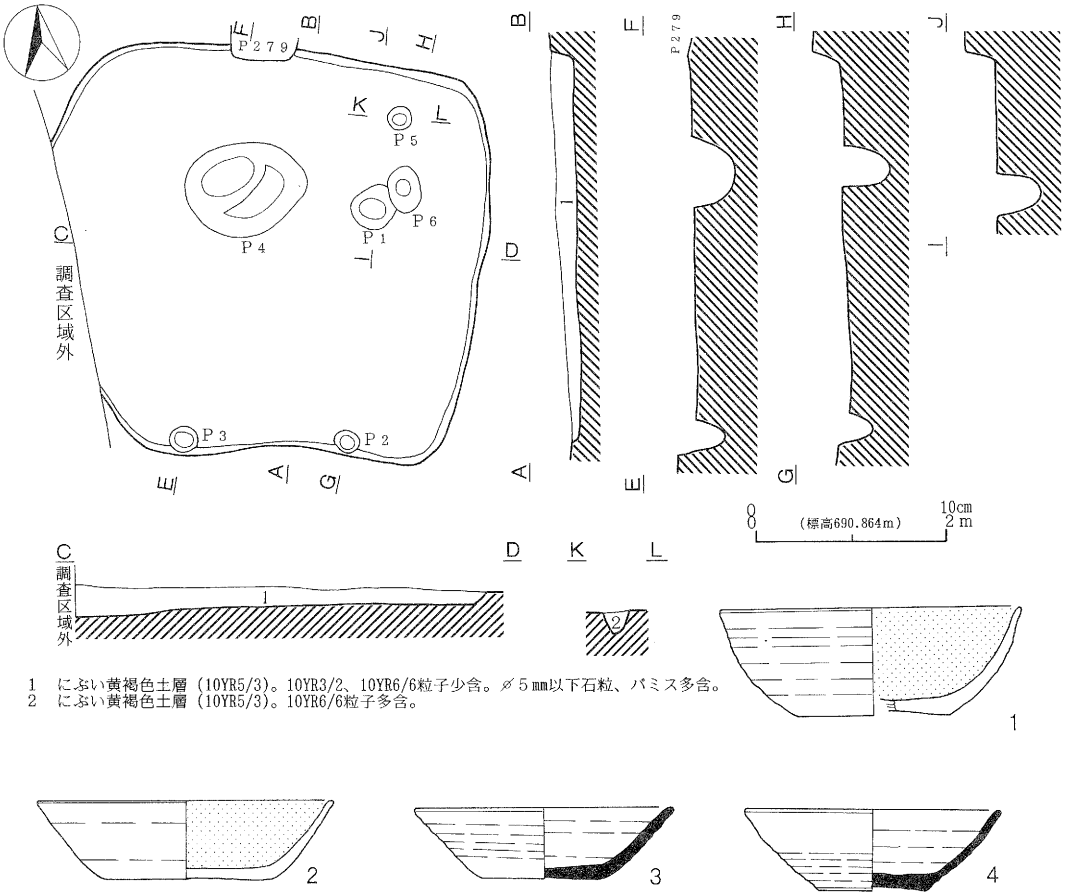




第237図　H134号住居址（2）

挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
－9	土師器 坏	13.9 6.4 4.0	内面黒色処理。 右回転糸切り。	
－10	土師器 坏	12.7 5.8 3.8	内面黒色処理。 右回転糸切り。	
－11	土師器 坏	12.2 6.8 3.7	右回転糸切り。	
－12	土師器 坏	15.2 6.6 5.3	右回転糸切り。	
－13	土師器 有台坏	－ 6.4 －	内面黒色処理。 回転糸切り→回転ヘラ削り→付け高台。	
－14	土師器 有台坏	－ 6.7 －	暗文。 回転糸切り→回転ヘラ削り→付け高台。	
－15	土師器 耳皿	－ 6.0 3.0	内面黒色処理。 回転糸切り→回転ヘラ削り→付け高台。	
－16	灰釉陶器 碗	－ 4.0 －	三日月高台。	
－17	灰釉陶器 碗	8.1 － －	つけがけ施釉。	
－18	土師器 甕	25.7 － －	内－ナデ。 外－篦削り。	
－19	土師器 甕	24.3 － －	内－ナデ。 外－篦削り。	
－20	土師器 小型甕	16.2 － －	内－ナデ。 外－篦削り。	
－21	土師器 甕	24.3 － －	内－ナデ。 外－口縁～体部上半：ロクロナデ、下半：篦削り。	ロクロ甕。
－22	土師器 甕	22.6 － －	内－刷毛目。 外－口縁～体部上半：ロクロナデ、下半：篦削り。	ロクロ甕。
－23	土師器 小型甕	16.8 － －		ロクロ甕。
－24	須恵器 壷	－ 13.7 －	底部周縁篦削り。 付け高台。	
－25	須恵器 短頸壷	10.5 9.3 21.0	体部下半篦削り。	
－26	弥生土器 甕	11.6 － －	内－篦磨き。 外－口唇部：縄文、頸部：簾状文、体部：斜走文。	
－27	弥生土器 壷	15.2 － －	内－刷毛目。 外－口唇部：縄文、口縁部：縄文＋篦描波状文、頸部： 篦描平行沈線間に縄文＋波状文。	

第211表　H134号住居址出土遺物観察表（2）



1　にぶい黄褐色土層（10YR5/3）。10YR3/2、10YR6/6粒子少含。∅５㎜以下石粒、パミス多含。
2　にぶい黄褐色土層（10YR5/3）。10YR6/6粒子多含。

第238図　H135号住居址

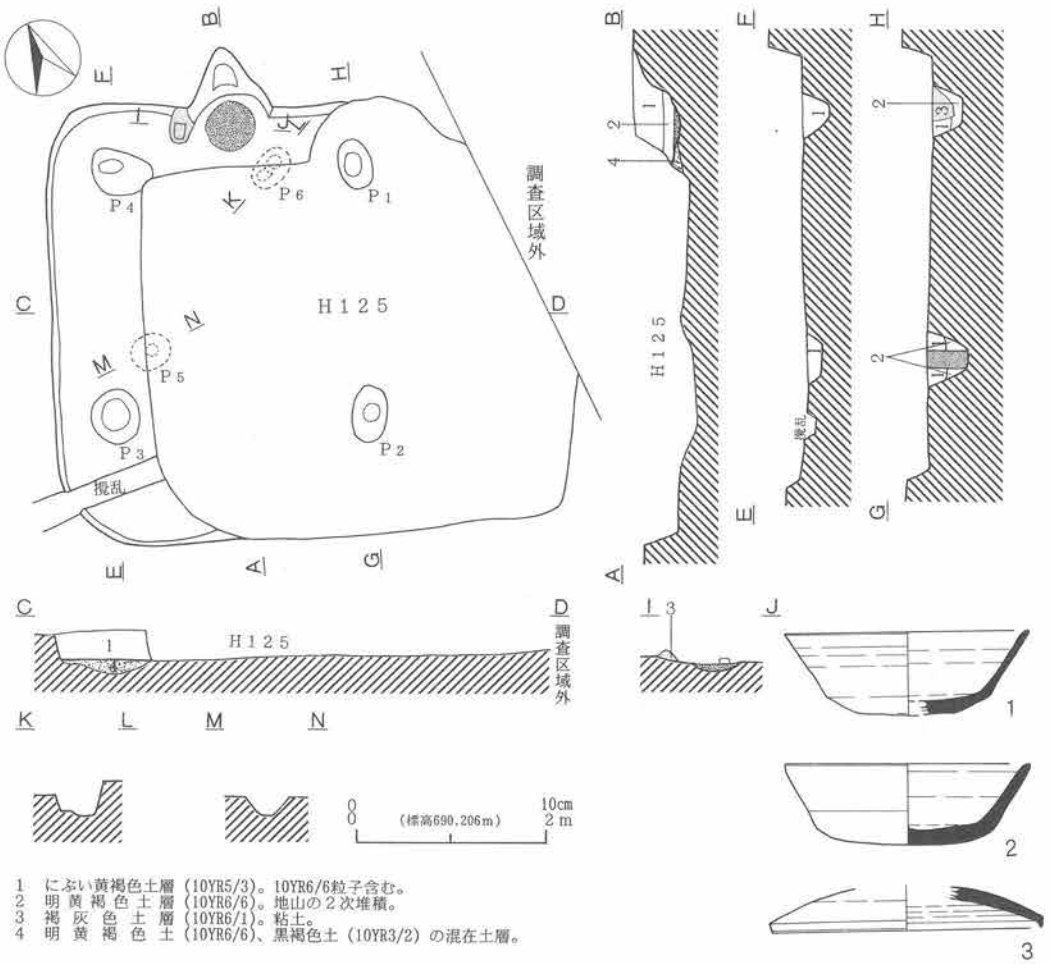
挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
－1	土師器 坏	16.0 8.0 5.7	内面黒色処理。 回転糸切り～周縁篦削り。	掘方出土。
－2	土師器 坏	15.7 8.5 4.1	内面黒色処理。 右回転糸切り。	
－3	須恵器 坏	13.8 6.2 3.8	右回転糸切り。	
－4	須恵器 坏	13.6 5.9 4.3	右回転糸切り。	

第212表　H135号住居址出土遺物観察表

H135号住居址（第238図、図版五十五・百七十五）

遺構－ⅩⅡあ4グリットで検出された。H185を切り、P279に切られる。南北長4.3m、壁残高0.4mの規模を有する。隅丸台形の平面形状を呈している。調査範囲内にはカマドは存在しなかった。Pitは6基検出され、この内のP1～P4が主柱穴である。周溝は有さず、覆土は自然堆積であった。

遺物－土師器、須恵器の坏が出土している。土師器坏は2点共に内面黒色処理が施され、1は回転糸切りから周縁に手持ち篦削り調整が施される。2は右回転の糸切り痕を残している。須恵器坏は2点共に右回転糸切り痕を残している。尚、1は掘方から出土している。



第239図　H142号住居址

H142号住居址（第239図、図版百七十九）

遺構－ＸＩあ４グリットで検出された。H125号住居址に切られ、H159号住居址を切る。南北長5.2ｍ、壁残高0.3ｍの規模を有する。南北を主軸とするならばＮ－17°－Ｅに主軸方位をとる。カマドは北壁の中央部分に構築されており、粘土で構築された西袖と火床が残存していた。６基検出されたPitの内Ｐ１～Ｐ４の４基が主柱穴である。Ｐ２からは直径16cmの柱が確認された。覆土は自然堆積で、周溝は存在しない。

遺物－須恵器が出土している。坏（１・２）、坏蓋（３）が認められる。坏は２点共に底部篦切り、篦削りである。坏蓋はつまみ部分を欠損する。天井部分には篦削り調整が施される。

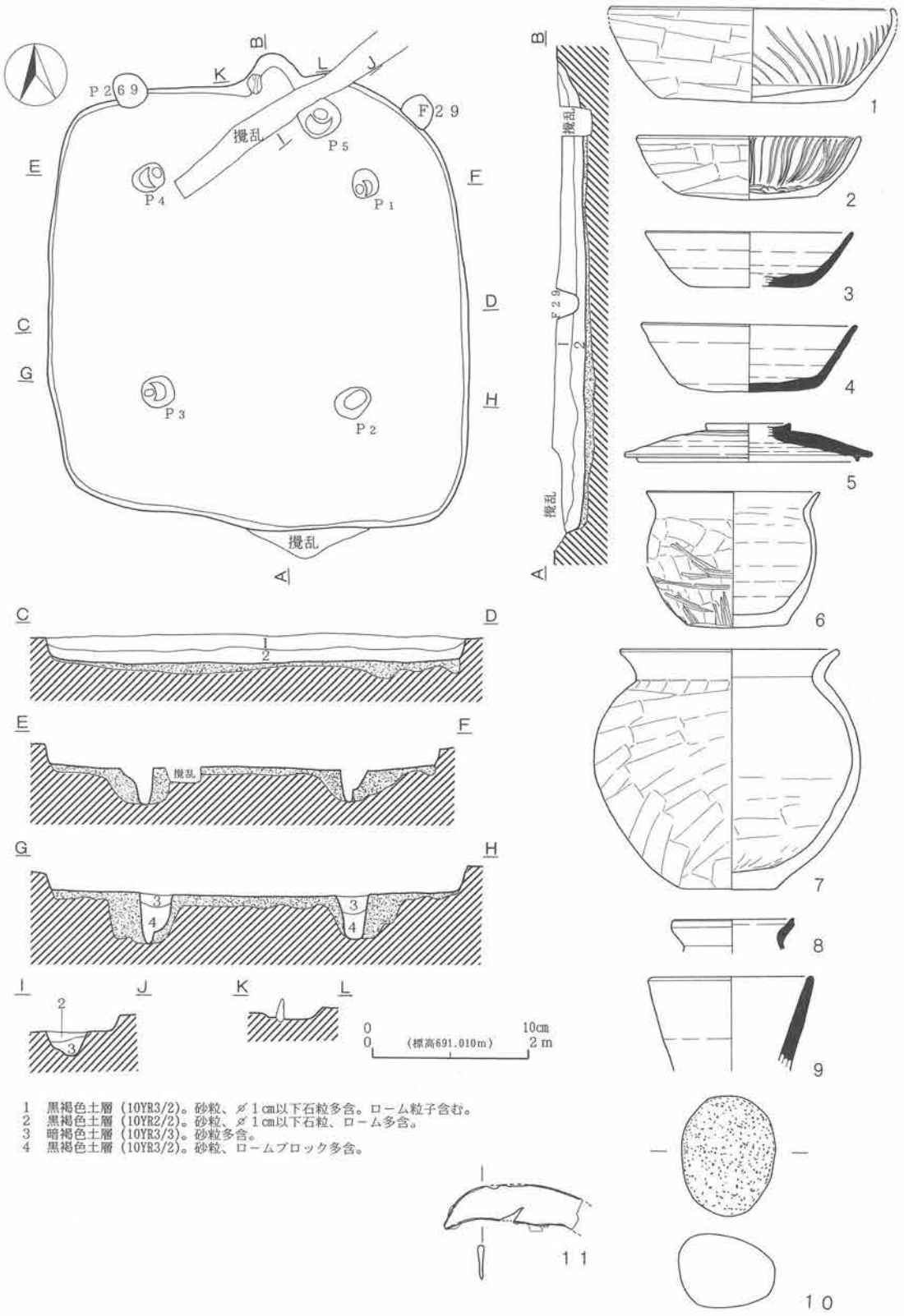
挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
－1	須恵器 坏	12.9 5.3 4.4	篦切り、篦削り。	
－2	須恵器 坏	13.0 8.0 4.3	篦切り、篦削り。	
－3	須恵器 坏蓋	－ 14.3 －	天井部篦削り。	

第213表　H142号住居址出土遺物観察表

H145号住居址（第240図、図版五十七・百八十一）

遺構－ＸⅡえ１グリットで検出された。H159号住居址を切り、Ｆ29号掘立柱建物址に切られる。隅丸長方形の平面プランを呈し、長軸長6.15ｍ×短軸長5.4ｍ×壁残高0.35ｍ・面積26.91㎡の規模を有する。カマドは北壁の中央に構築されているが、ほとんど残存していないのに加え、攪乱が更に破壊してしまい、煙道部の石芯が１ヶ存在するだけである。５基検出されたPitの内Ｐ１～Ｐ４の４基が主柱穴である。覆土は自然堆積で、周溝はは存在しない。

遺物－土師器、須恵器、鉄器、石器が出土している。土師器には坏（１・２）、小型甕（６・７）が存在する。坏１は内面に放射暗文、２は放射と螺旋暗文が施され、外面は篦削り調整が施される。小型甕は２点共に、平底で、内面ナデ、外面には篦削り調整が施される。６は更に篦磨きが体部下半に施される。須恵器には坏（３・４）、坏蓋（５）、壺（８）、平瓶（９）が存在する。坏は２点共に底部篦削り調整が施される。坏蓋は皿状のつまみでかえりを有するもので、器壁が厚いものである。壺８は小型の広口壺の口縁部片である。口縁端部がつまみ上げられたように短く直立する。平瓶９は口縁部の破片である。体部は存在しないが、把手を有さないものと思われる。鉄器は11の鎌が出土している。基部を欠損している。石器は10の軽石製の磨石が出土している。



1　黒褐色土層（10YR3/2）。砂粒、φ1cm以下石粒多含。ローム粒子含む。
2　黒褐色土層（10YR2/2）。砂粒、φ1cm以下石粒、ローム多含。
3　暗褐色土層（10YR3/3）。砂粒多含。
4　黒褐色土層（10YR3/2）。砂粒、ロームブロック多含。

第240図　H145号住居址

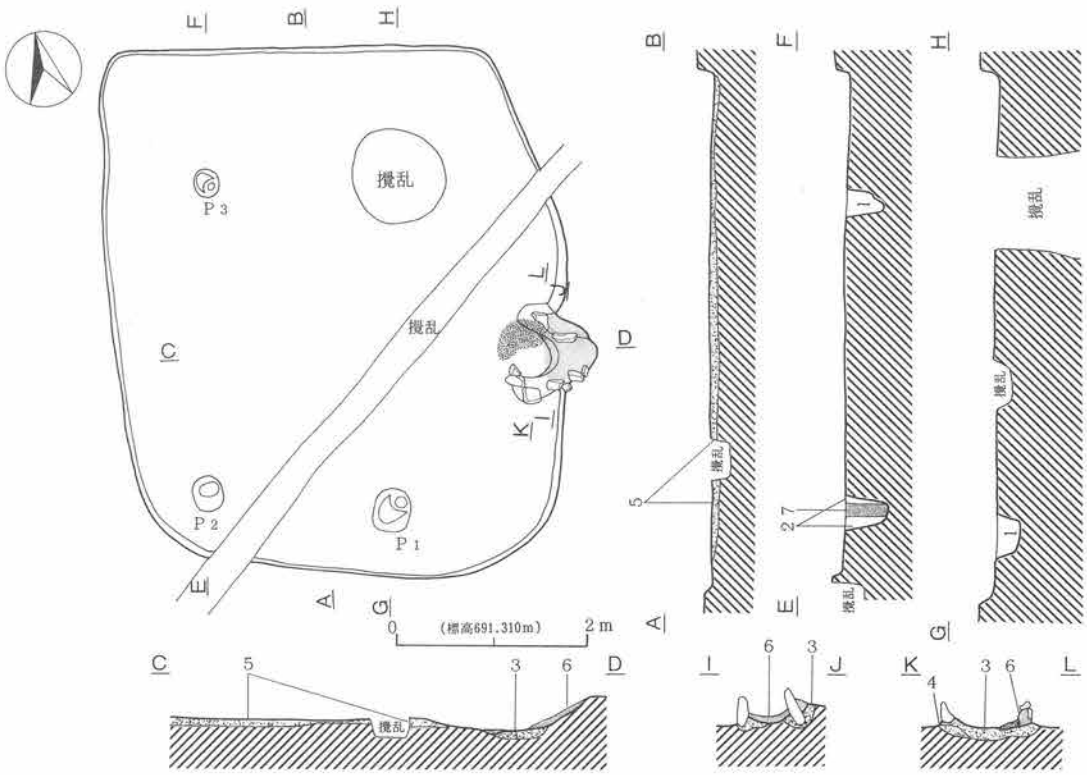
挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
－1	土師器 坏	18.5 11.8 6.1	内－放射暗文。 底部篦削り。	
－2	土師器 坏	14.5 9.0 4.1	内－放射・螺旋暗文。 底部篦削り。	
－3	須恵器 坏	13.4 7.6 3.6	底部篦切り→篦削り。	
－4	須恵器 坏	13.6 8.8 4.9	底部篦削り。	
－5	須恵器 坏蓋	16.0 5.5 2.5	皿状つまみ。	
－6	土師器 小型甕	11.1 6.3 8.8	内－ナデ。 外－篦削り・篦磨き。	
－7	土師器 小型甕	14.2 6.1 15.5	内－ナデ。 外－篦削り。	
－8	須恵器 小型広口壺	7.8 － －		
－9	須恵器 平瓶	10.8 － －		
－10	軽石製 磨石	3.9 3.0 2.3		17.5ｇ
－11	鎌	4.2 1.0 0.2		17.5ｇ

第214表　H145号住居址出土遺物観察表

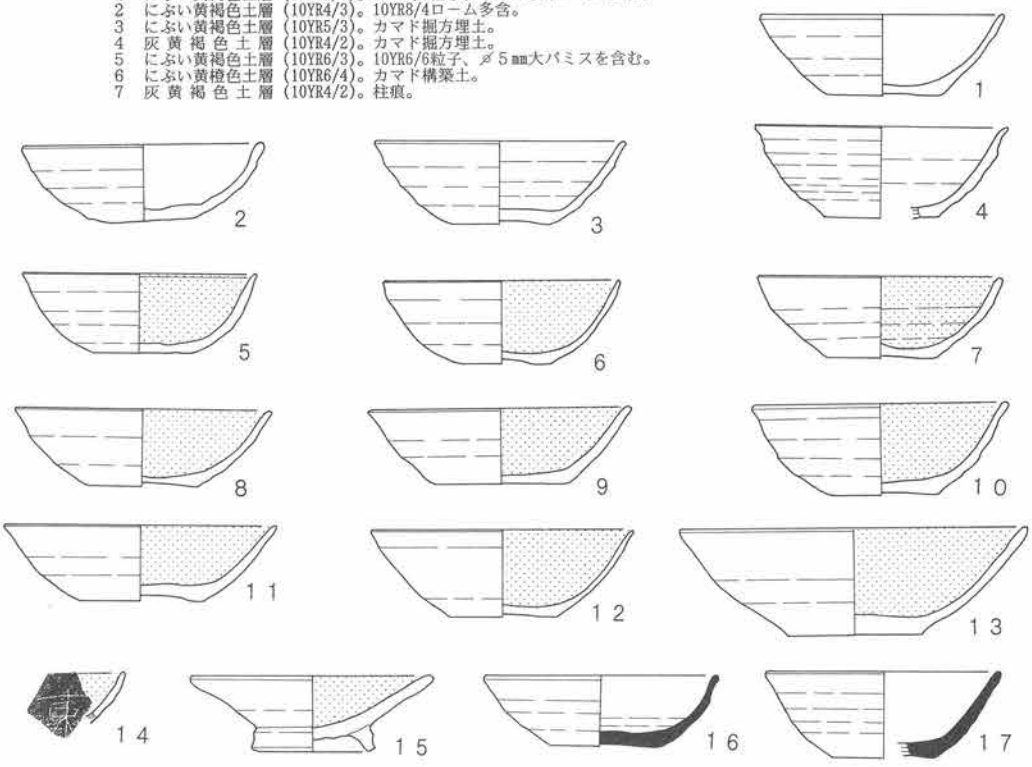
H146号住居址（第241・242図、図版五十八・百八十一・百八十二）

遺構－ＸＩか９グリットで検出された。H126号・H154号・H158号・H172号住居址を切る。隅丸長方形の平面プランを呈し、南北長5.55ｍ×東西長5.0ｍ×壁残高0.2ｍ・面積22.43㎡の規模を有する。長軸方位をＮ－10°－Ｅにとる。カマドは東壁の中央やや南に構築されている。石芯を粘土で被覆した「石組粘土カマド」である。Pitは３基検出され、その全てが主柱穴である。本来は４本で構成されるものが、攪乱により１基が消滅したものと思われる。Ｐ２において直径16㎝の柱が確認されている。周溝は存在しない。

遺物－土師器、須恵器、灰釉陶器が出土している。土師器には坏（１～12・14）、鉢（13）、有台皿（15）、甕（28～30）が出土している。坏は全て底部に回転糸切り痕を残し、内面黒色処理を施すものと（５～12・14）、施さないもの（１～４）が存在する。14は「東」の刻書が認められる。有台皿は内面黒色処理が施され、回転糸切→回転篦削り→付高台の成形が成されている。

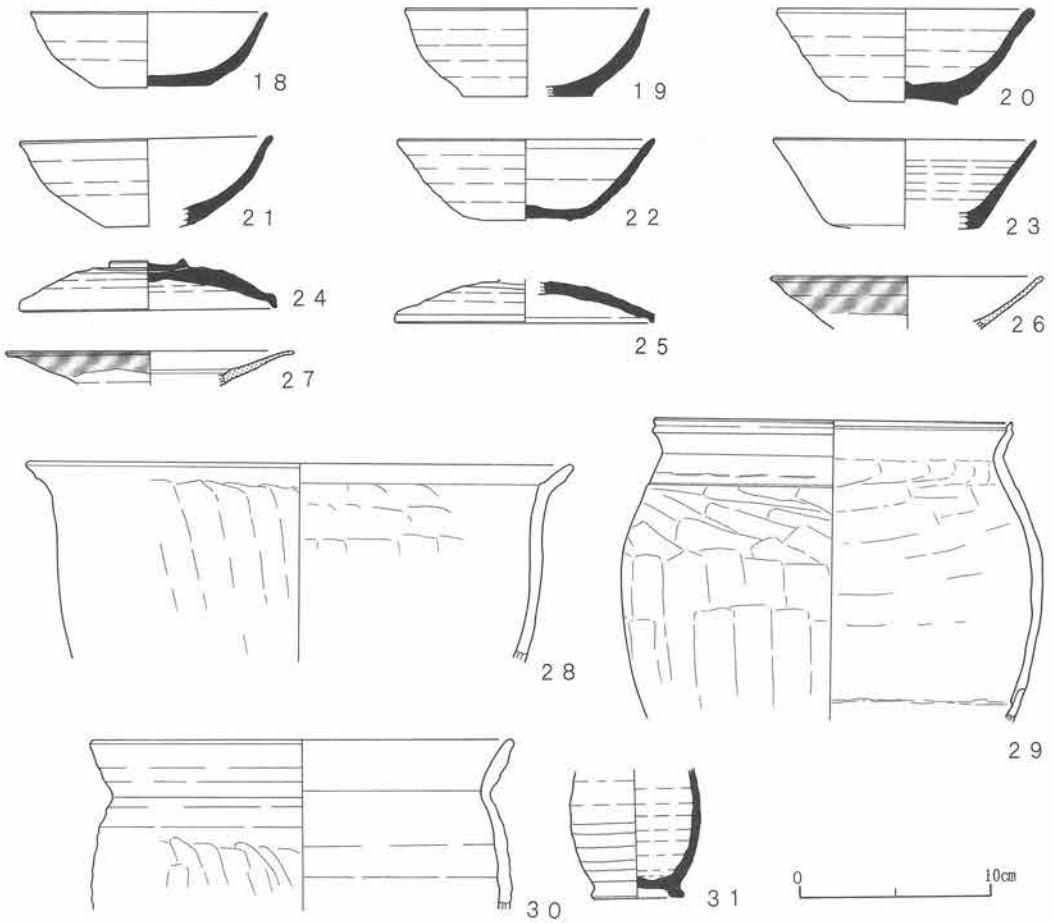


1　にぶい黄褐色土層（10YR4/3）。10YR5/8粒子、φ5㎜以下パミス少含。
2　にぶい黄褐色土層（10YR4/3）。10YR8/4ローム多含。
3　にぶい黄褐色土層（10YR5/3）。カマド掘方埋土。
4　灰黄褐色土層（10YR4/2）。カマド掘方埋土。
5　にぶい黄褐色土層（10YR6/3）。10YR6/6粒子、φ5㎜大パミスを含む。
6　にぶい黄橙色土層（10YR6/4）。カマド構築土。
7　灰黄褐色土層（10YR4/2）。柱痕。



第241図　H146号住居址（1）

鉢は坏をそのまま大型にしたもので、内面黒色処理が施される。甕は28のような短い口縁部が大きく開き、内面ナデ、外面篦削り調整が施されるものと、29・30のようなロクロ甕が存在する。内面ナデ、外面口縁部から体部の最大径までがロクロナデ、他は篦削り調整が施される。須恵器は坏（16～22）、有台坏（23）、坏蓋（24～25）、長頸壺（31）が認められる。坏は全て底部に右回転糸切り痕を残す。23は台部分を欠損する。坏蓋は２点共に天井部に篦削り調整が施される。31の長頸壺は口縁部～頸部を欠損する。底部には回転糸切り痕が認められる。灰釉陶器は皿が２点出土している。27は段皿、26は通常の皿である。



第242図　H146号住居址（２）

挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
－1	土師器 坏	12.8 5.8 4.2	右回転糸切り。	
－2	土師器 坏	12.8 3.0 4.0	右回転糸切り。	
－3	土師器 坏	13.3 5.0 4.3	右回転糸切り。	
－4	土師器 坏	13.3 － －	右回転糸切り。	
－5	土師器 坏	12.3 5.0 4.2	右回転糸切り。 内面黒色処理。	
－6	土師器 坏	12.6 4.2 4.4	右回転糸切り。 内面黒色処理。	
－7	土師器 坏	12.9 5.5 4.3	右回転糸切り。 内面黒色処理。	
－8	土師器 坏	14.3 6.5 4.0	右回転糸切り。 内面黒色処理。	
－9	土師器 坏	13.9 7.0 4.0	右回転糸切り。 内面黒色処理。	
－10	土師器 坏	13.9 5.4 4.9	右回転糸切り。 内面黒色処理。	
－11	土師製 坏	13.5 5.7 4.0	右回転糸切り。 内面黒色処理。	
－12	土師器 坏	14.0 5.5 4.6	右回転糸切り。 内面黒色処理。	
－13	土師器 鉢	18.4 6.8 5.7	右回転糸切り。 内面黒色処理。	
－14	土師器 坏	－ － －	内面黒色処理。	「東」の刻書。
－15	土師器 有台皿	12.3 6.5 4.0	回転糸切り→回転篦削り→付高台。 内面黒色処理。	
－16	須恵器 坏	12.5 5.4 3.2	右回転糸切り。	
－17	須恵器 坏	12.5 － －	右回転糸切り。	
－18	須恵器 坏	12.5 5.5 4.0	右回転糸切り。	
－19	須恵器 坏	13.0 － －	右回転糸切り。	

第215表　H146号住居址出土遺物観察表（1）

挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
−20	須恵器 坏	13.7 5.7 5.0	右回転糸切り。	
−21	須恵器 坏	13.3 − −	右回転糸切り。	
−22	須恵器 坏	13.7 4.5 4.3	右回転糸切り。	
−23	須恵器 有台坏	14.0 − −		
−24	須恵器 坏蓋	13.5 − 2.6	天井部篦削り。	
−25	須恵器 坏蓋	13.2 − −	天井部篦削り。	
−26	灰釉陶器 段Ⅲ	15.2 − −		
−27	灰釉陶器 Ⅲ	14.3 − −		
−28	土師器 甕	28.9 − −	内−ナデ。 外−篦削り。	
−29	土師器 甕	18.9 − −	内−ナデ。 外−口縁〜体部最大径：ロクロナデ、他は篦削り。	ロクロ甕。
−30	土師器 甕	22.4 − −	内−ナデ。 外−口縁〜体部最大径：ロクロナデ、他は篦削り。	ロクロ甕。
−31	須恵器 長頸壷	− 4.8 −	回転糸切り。→回転篦削り→付高台。	

第216表　H146号住居址出土遺物観察表（2）

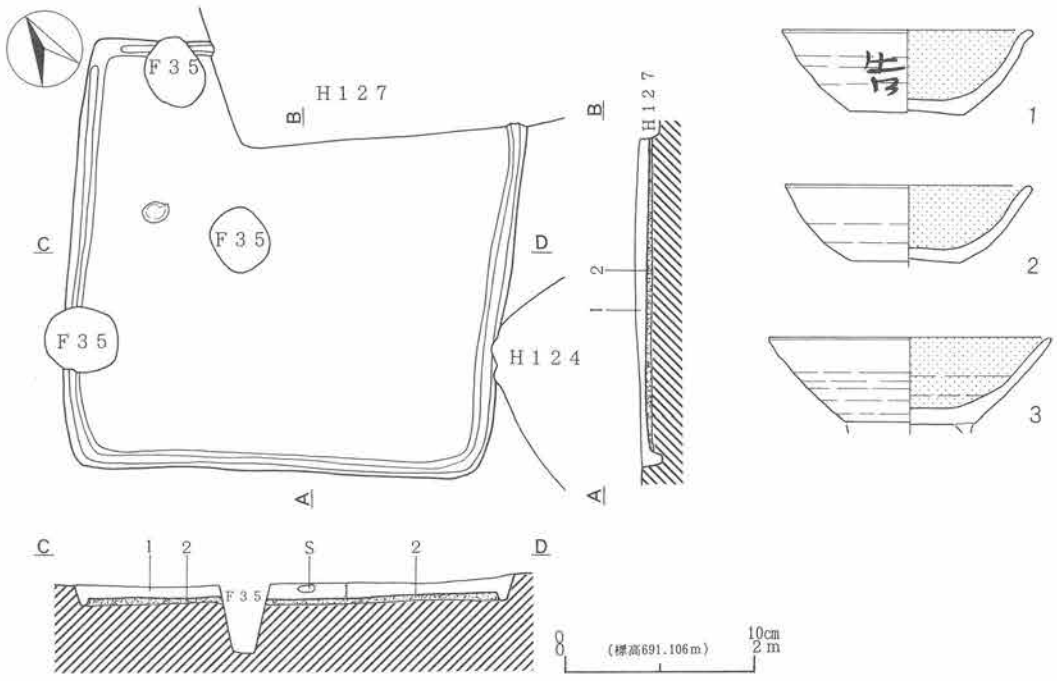
H147号住居址（第243図、図版五十九・百八十三）

遺構−ⅩⅡか2グリットで検出された。H124号・H127号住居址・F35号掘立柱建物址に切られ、H155号住居址を切る。隅丸方形の平面プランを呈し、南北長4.52m×東西長4.65m×壁残高0.2mの規模を呈する。南北を主軸とするならば、N−30°−Eに主軸方位をとる。北壁中央に構築されていたであろうカマドは、H127号住居址により消滅したものと思われる。Pitは1基も存在せず、壁下には幅12cm、床面からの深度8cm前後の周溝が巡る。覆土は自然堆積である。

遺物−土師器坏（1・2）、有台坏（3）が出土している。坏は2点共に内面黒色処理、底部右回転糸切りである。1は「告」の墨書が認められる。有台坏3は台部分を欠損する。内面黒色処理で、底部回転糸切り後回転篦削りを施し、台を付けている。

挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
－1	土師器 坏	13.2 5.8 4.4	右回転糸切り。 内面黒色処理。	
－2	土師器 坏	13.1 5.8 4.1	右回転糸切り。 内面黒色処理。	
－3	土師器 有台坏	15.0 － －	右回転糸切り。 内面黒色処理。 付高台。	

第217表　H147号住居址出土遺物観察表

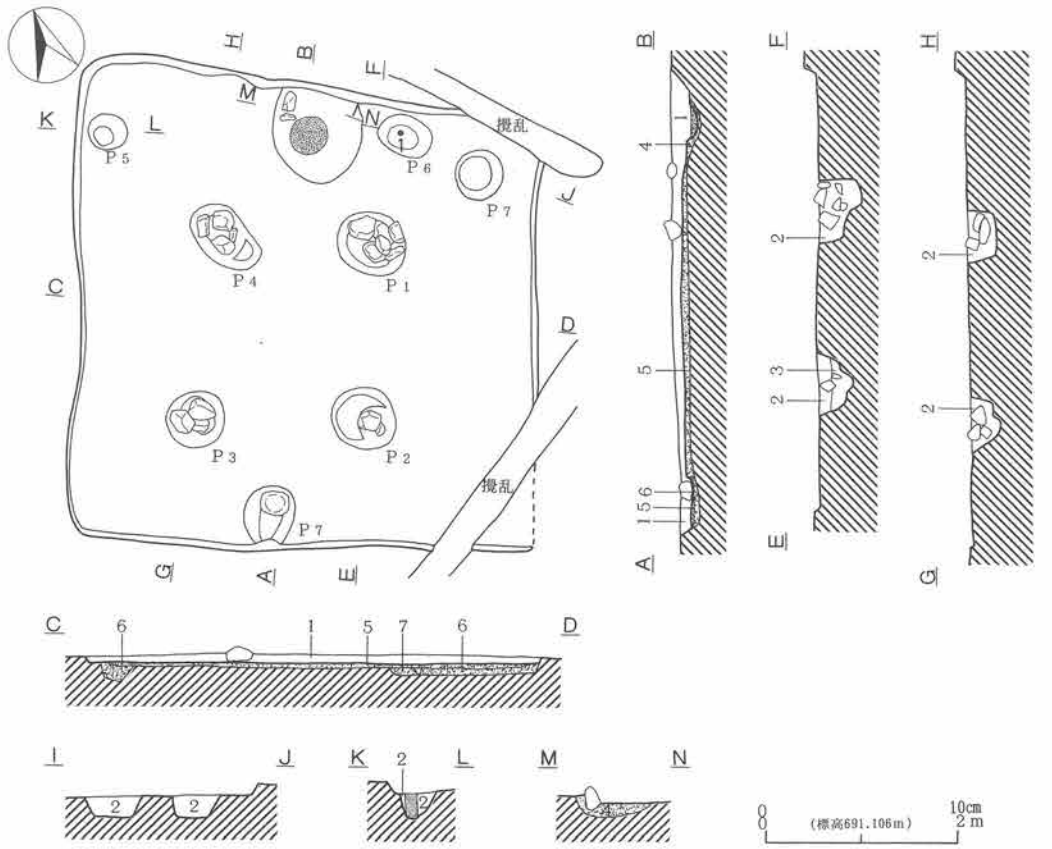


1　にぶい黄褐色土層（10YR5/3）。10YR6/6粒子、∅2㎝以下パミス多含。
2　黒褐色土層（10YR3/2）。ローム多含。貼床。

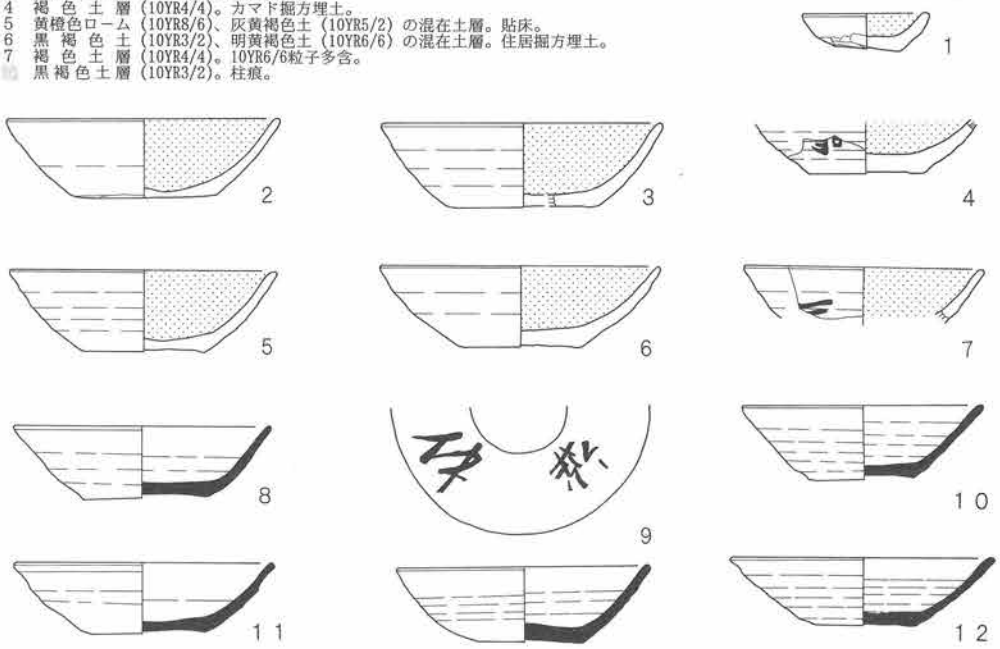
第243図　H147号住居址

H149号住居址（第244・245図、図版六十・百八十三・百八十四）

遺構－ＸＩこ10グリットで検出された。H157号・H173号住居址を切る。隅丸方形の平面プランを呈し、南北長5.15ｍ×東西長4.9ｍ×壁残高0.15ｍの規模を有し、Ｎ－14°－Ｅに長軸方位をとる。カマドは北壁の中央に構築されているが、西袖の心材と思われる礫が２ヶと火床が残存するだけであった。Pitは８基検出され、この内のＰ１～Ｐ４の４基が主柱穴である。内部に礫



1　灰黄褐色土層（10YR4/2）。10YR6/6粒子、砂粒少含。
2　灰黄褐色土層（10YR4/2）。10YR6/6粒子少含。
3　灰黄褐色土層（10YR4/2）。砂粒多含。
4　褐色土層（10YR4/4）。カマド掘方埋土。
5　黄橙色ローム（10YR8/6）、灰黄褐色土（10YR5/2）の混在土層。貼床。
6　黒褐色土（10YR3/2）、明黄褐色土（10YR6/6）の混在土層。住居掘方埋土。
7　褐色土層（10YR4/4）。10YR6/6粒子多含。
8　黒褐色土層（10YR3/2）。柱痕。



第244図　H149号住居址（1）

を内包しており、この上に礎石を置いたか、このまま状態で礎石にして柱を建てたものと思われる。また、Ｐ５・Ｐ７の２基のPitも、Ｐ７内で確認された柱の存在から柱穴であることが明らかになった。柱は直径15cmの規模であった。Ｐ６はカマドに付随する施設、Ｐ７は出入り口に関係する施設であろう。Ｐ７も礎石を内包してた。覆土は自然堆積で周溝は存在しなかった。

遺物－土師器、須恵器、石器が出土している。土師器には皿（１）、坏（２～７）、甕（15～19）、鉢（20）が出土している。皿は小型で内面黒色処理で底部には篦削り調整が施される。坏は全て内面黒色処理で、2.3は回転糸切り後外底の周縁部に篦削り調整を施している。他のものは全て右回転糸切り痕を残している。また、４・７には墨書が認められる。甕は全て「武蔵甕」で内面ナデ、外面篦削り調整が施される。口縁部が存在するもは「コ」字ないし「コ」字気味の形状である。20の鉢は混入品で内面刷毛目～ナデ、外面には篦削り調整が施されている。須恵器には坏（８～13）、盤（14）、壺（21）、円面硯（22）が認められる。坏は全て底部に右回転糸切り痕を残す。９には墨書が認められる。盤14は混入品と思われる。21の壺の底部片は外底の周縁に篦削り調整を施す。円面硯22は脚部に方形の透かしを有する。本遺跡で唯一出土した円面硯である。石器は23の軽石製の石器と、混入品の打製石斧が出土している。尚、図示不可能な緑釉陶

挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
－1	土師器 坏	6.7 3.5 1.9	篦削り。 内面黒色処理。	
－2	土師器 坏	14.5 7.5 4.2	右回転糸切り。 内面黒色処理。	
－3	土師器 坏	14.9 8.0 4.5	右回転糸切り。 内面黒色処理。	
－4	土師器 坏	－ 6.0 －	右回転糸切り。 内面黒色処理。	墨書。
－5	土師器 坏	14.1 6.4 4.3	右回転糸切り。 内面黒色処理。	
－6	土師器 坏	14.9 6.3 4.3	右回転糸切り。 内面黒色処理。	
－7	土師器 坏	12.7 － －	右回転糸切り。 内面黒色処理。	墨書。
－8	須恵器 坏	13.6 6.1 3.8	右回転糸切り。	
－9	須恵器 坏	13.5 5.5 4.0	右回転糸切り。	墨書。
－10	須恵器 坏	12.7 5.0 4.0	右回転糸切り。	

第218表　H149号出土遺物観察表（１）

挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
−11	須恵器 坏	13.8 6.4 3.7	右回転糸切り。	
−12	須恵器 坏	14.0 5.2 3.6	右回転糸切り。	
−13	須恵器 坏	14.2 7.5 4.3	右回転糸切り。	
−14	須恵器 盤	18.7 − −		混入遺物。
−15	土師器 甕	− 3.5 −	内−ナデ。 外−篦削り。	
−16	土師器 甕	21.7 − −	内−ナデ。 外−篦削り。	
−17	土師器 甕	21.7 − −	内−ナデ。 外−篦削り。	
−18	土師器 甕	22.0 − −	内−ナデ。 外−篦削り。	
−19	土師器 甕	− 6.1 −	内−ナデ。 外−篦削り。	
−20	土師器 鉢	14.7 − −	内−刷毛目→ナデ。 外−篦削り。	混入遺物。
−21	須恵器 壷	− 7.7 −	外底周縁篦削り。	
−22	須恵器 円面硯	14.6 − −	方形透かし。	
−23	軽石	5.6 4.7 2.6		20.9ｇ
−24	打製石斧	12.8 5.2 1.9		150.0ｇ 混入遺物。

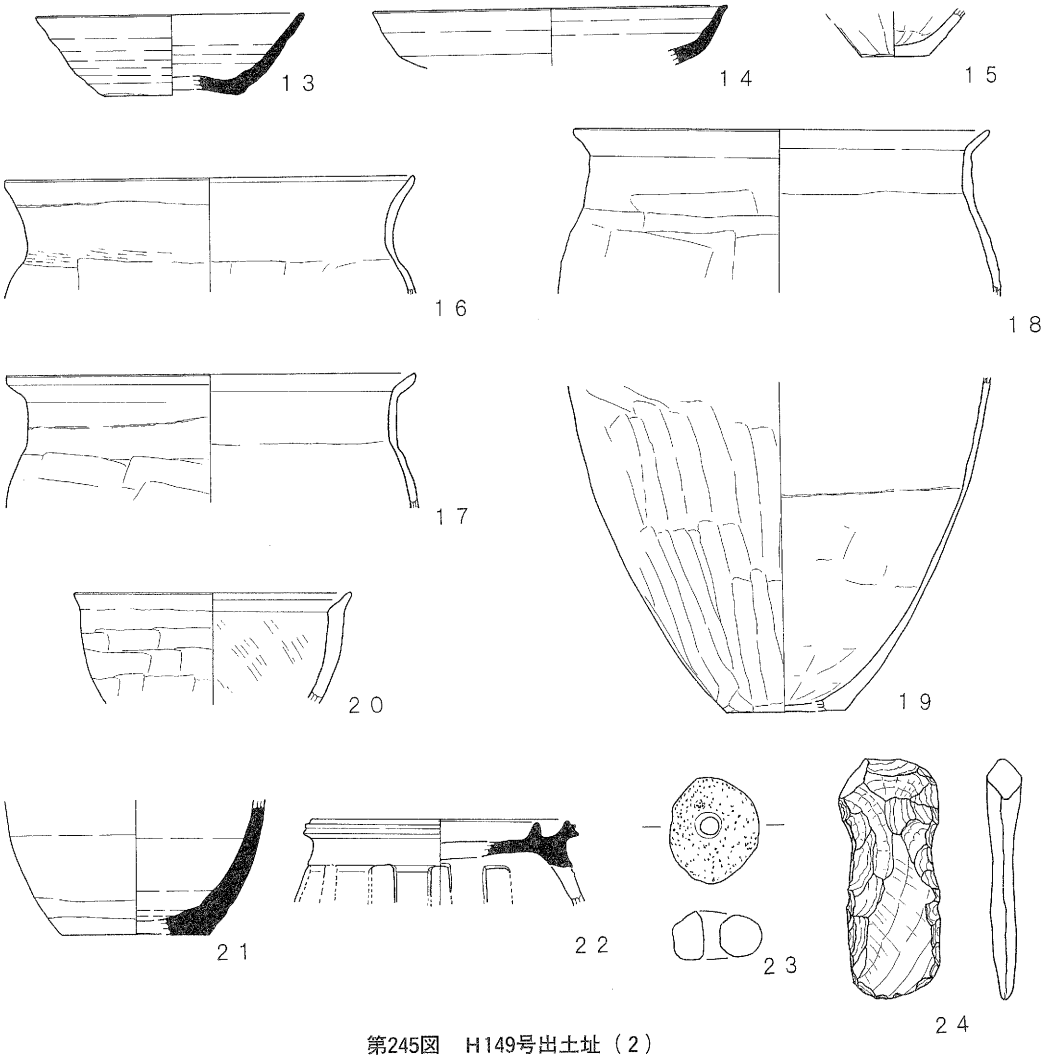
第219表　H149号出土遺物観察表（２）

器碗の口縁部片が１点出土している。

H154号住居址（第246図、図版六十二・百八十六）

遺構−ＸＩか９グリットで検出された。H146号住居址に切られ、H158号住居址を切る。南北長5.32ｍ、壁残高0.4ｍの規模を有し、北壁の中央と思われる位置にカマドが構築される。カマドは火床が残存するだけであった。Pitは６基検出されたが、主柱穴は判断しかねる。覆土は自然堆積で、周溝は存在しなかった。

遺物−土師器、須恵器が出土している。土師器には坏（１・２）、と甕（３）が認められる。

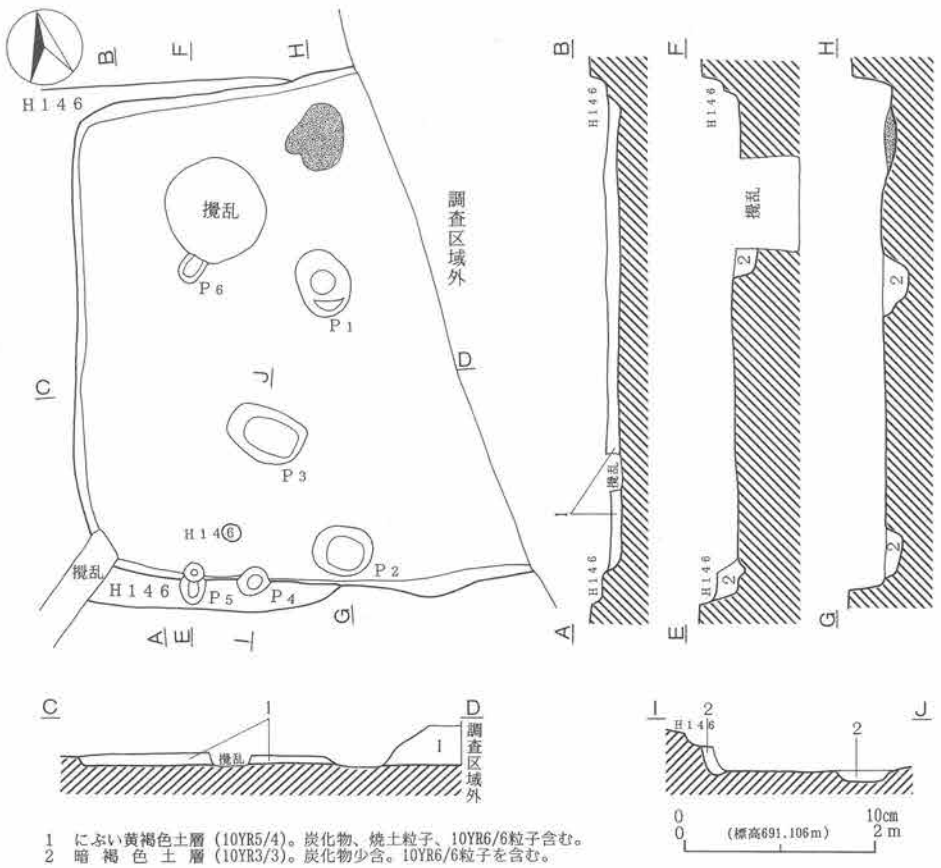


第245図　H149号出土址（2）

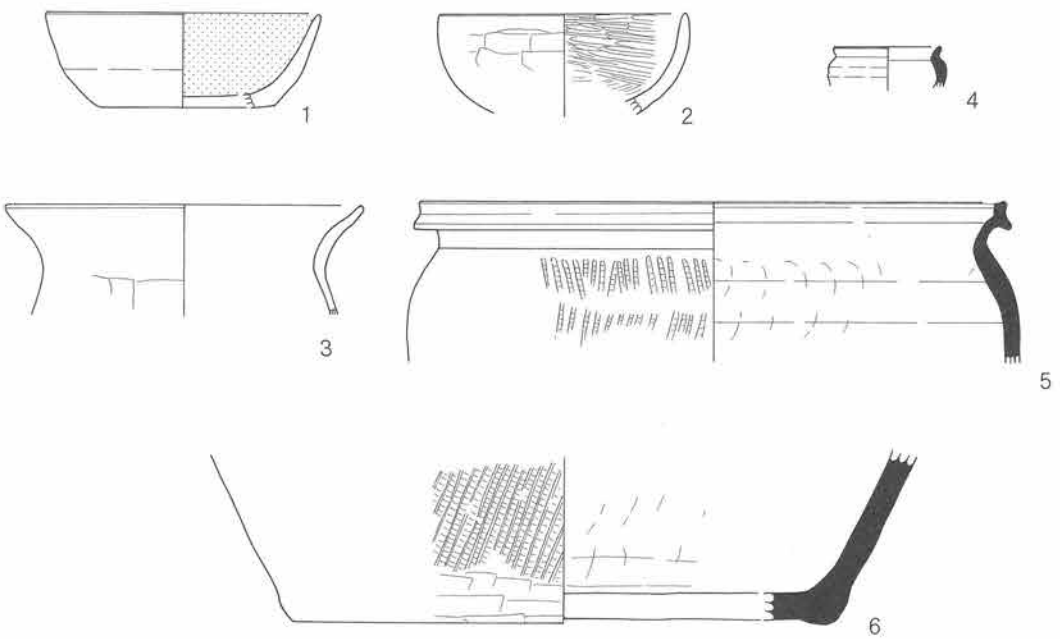
坏1は平底で内面黒色処理が施される。2は半球状を呈し、内面篦磨き、外面篦削り調整が施される。甕は「武蔵甕」で口縁部に最大径を有する。内面ナデ、外面篦削り調整が施される。須恵器は小型広口壺（4）と甕が2点（5・6）出土している。広口壺はロクロ成形である。甕は2点共に内面に当具痕、外面に平行叩目が認められる。

H156号住居址（第247・248図、図版六十三・百八十七）

遺構－Xう2グリットで検出された。M13号溝址を切り、F28号掘立柱建物址に切られる。隅丸方形の平面プランを呈し、南北長5.1m×東西長4.85m×壁残高0.3mの規模を有する。N－2°－Eに長軸方位をとる。カマドは北壁の中央部分に構築されるが、火床と煙道の一部分が残存し



1　にぶい黄褐色土層（10YR5/4）。炭化物、焼土粒子、10YR6/6粒子含む。
2　暗褐色土層（10YR3/3）。炭化物少含。10YR6/6粒子を含む。



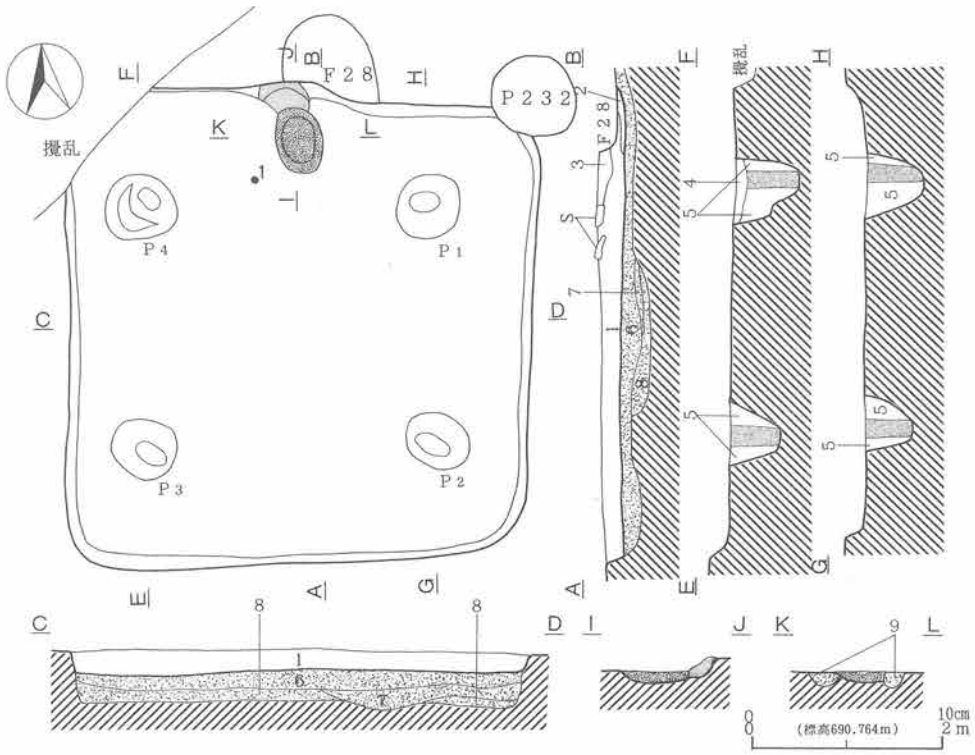
第246図　H154号出土址

挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
－1	土師器 坏	14.6 8.8 5.0	内面黒色処理。	
－2	土師器 坏	13.2 — —	内－篦磨き。 外－篦削り。	
－3	土師器 甕	19.0 — —	内－ナデ。 外－篦削り。	武蔵甕。
－4	須恵器 小型広口壷	5.6 — —		
－5	須恵器 甕	31.0 — —	内－当具痕。ナデ。 外－叩目。篦削り。	
－6	須恵器 甕	— 28.3 —	内－当具痕、ナデ。 外－叩目、篦削り。	

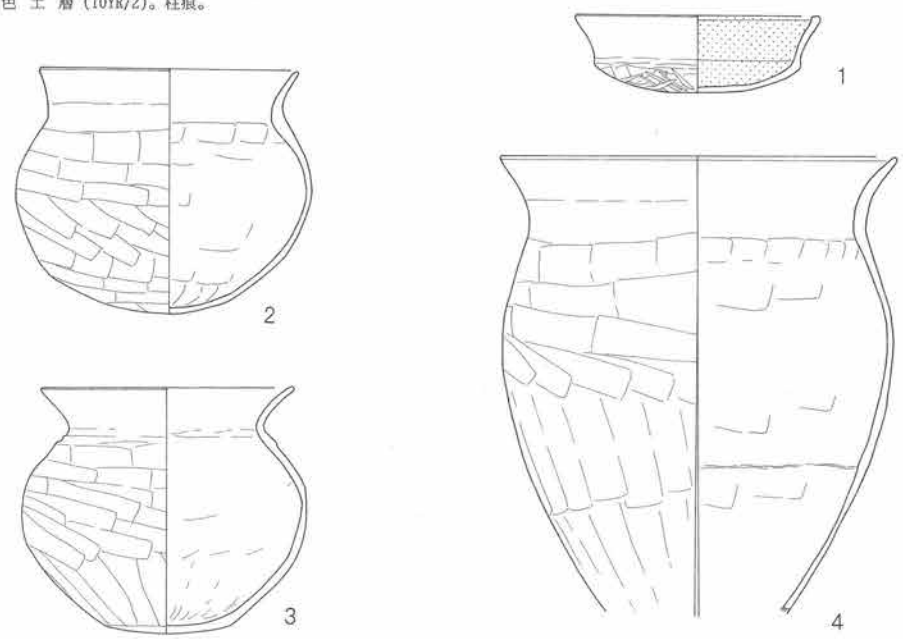
第220表　H154号住居址出土遺物観察表

挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
－1	土師器 坏	12.9 3.5 4.1	内－黒色処理。 外－篦削り→篦磨き。	
－2	土師器 小型甕	13.7 — 13.0	内－ナデ。 外－篦削り。	武蔵甕。
－3	土師器 小型甕	13.3 6.4 13.1	内－ナデ。 外－篦削り。	武蔵甕。
－4	土師器 甕	19.9 — —	内－ナデ。 外－篦削り。	武蔵甕。
－5	土師器 甕	21.5 — —	内－ナデ。 外－篦削り。	武蔵甕。 No.1
－6	土師器 甕	21.4 — —	内－ナデ。 外－篦削り。	武蔵甕。
－7	須恵器 壷	— 12.1 —	付高台。 外面篦削り。	
－8	紡錘車	3.7 3.5 1.5		30.0 g
－9	凹石	10.6 8.2 4.7		380 g

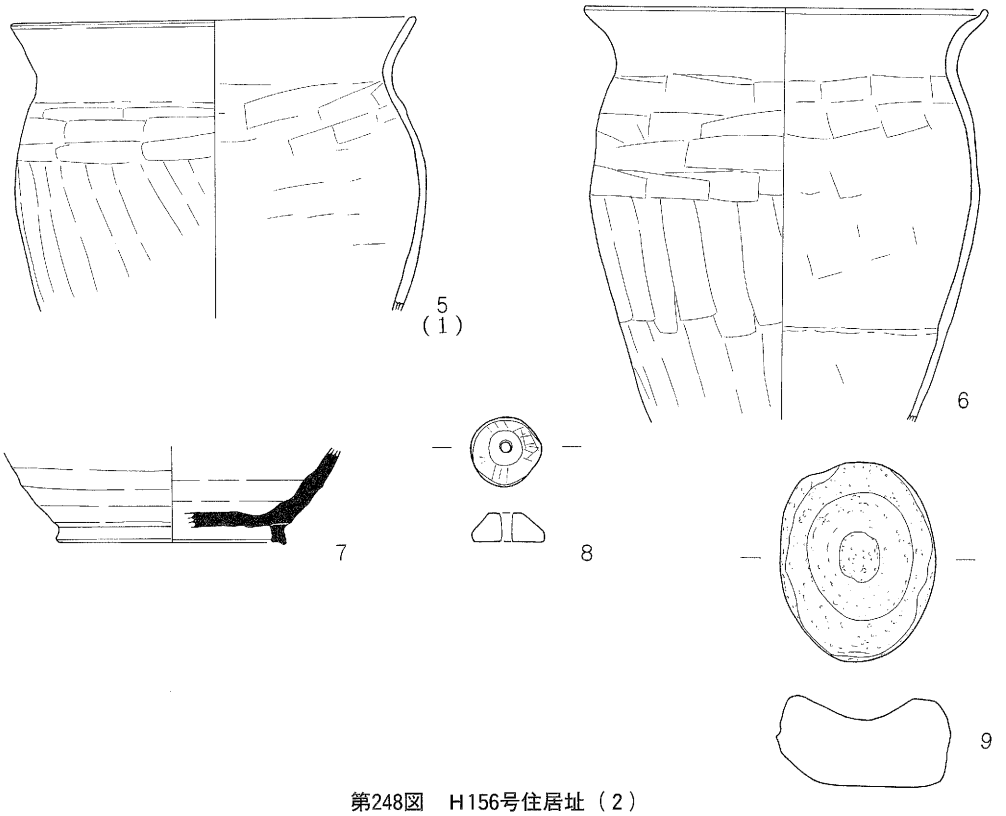
第221表　H156号住居址出土遺物観察表



1　にぶい黄褐色土層（10YR4/3）。10YR6/6粒子、∅5㎜以下パミス少含。
2　灰　の　堆　積　層。
3　にぶい黄褐色土（10YR4/3）、黒褐色土（10YR2/2）、明黄褐色土（10YR6/6）の混在土層。
4　にぶい黄褐色土層（10YR5/3）。10YR6/6粒子を含む。
5　黒　褐　色　土　層（10YR3/2）。砂粒少含。
6　褐　灰　色　土　層（10YR4/1）。10YR6/6粒子多含。住居掘方埋土。
7　明　黄　褐　色　土　層（10YR6/6）。住居掘方埋土。
8　にぶい黄橙色土層（10YR6/3）。住居掘方埋土。
9　黒　　褐　　色　　土（10YR3/2）、明黄褐色土（10YR6/6）の混在層。カマド掘方埋土。
　灰　黄　褐　色　土　層（10YR5/2）。カマド構築土。
　黒　褐　色　土　層（10YR/2）。柱痕。



第247図　H156号住居址（1）



第248図　H156号住居址（2）

ていたに過ぎない。4基検出されたPitは全て主柱穴で、全てから直径18cm前後の柱が確認された。覆土は自然堆積で、周溝は存在しなかった。

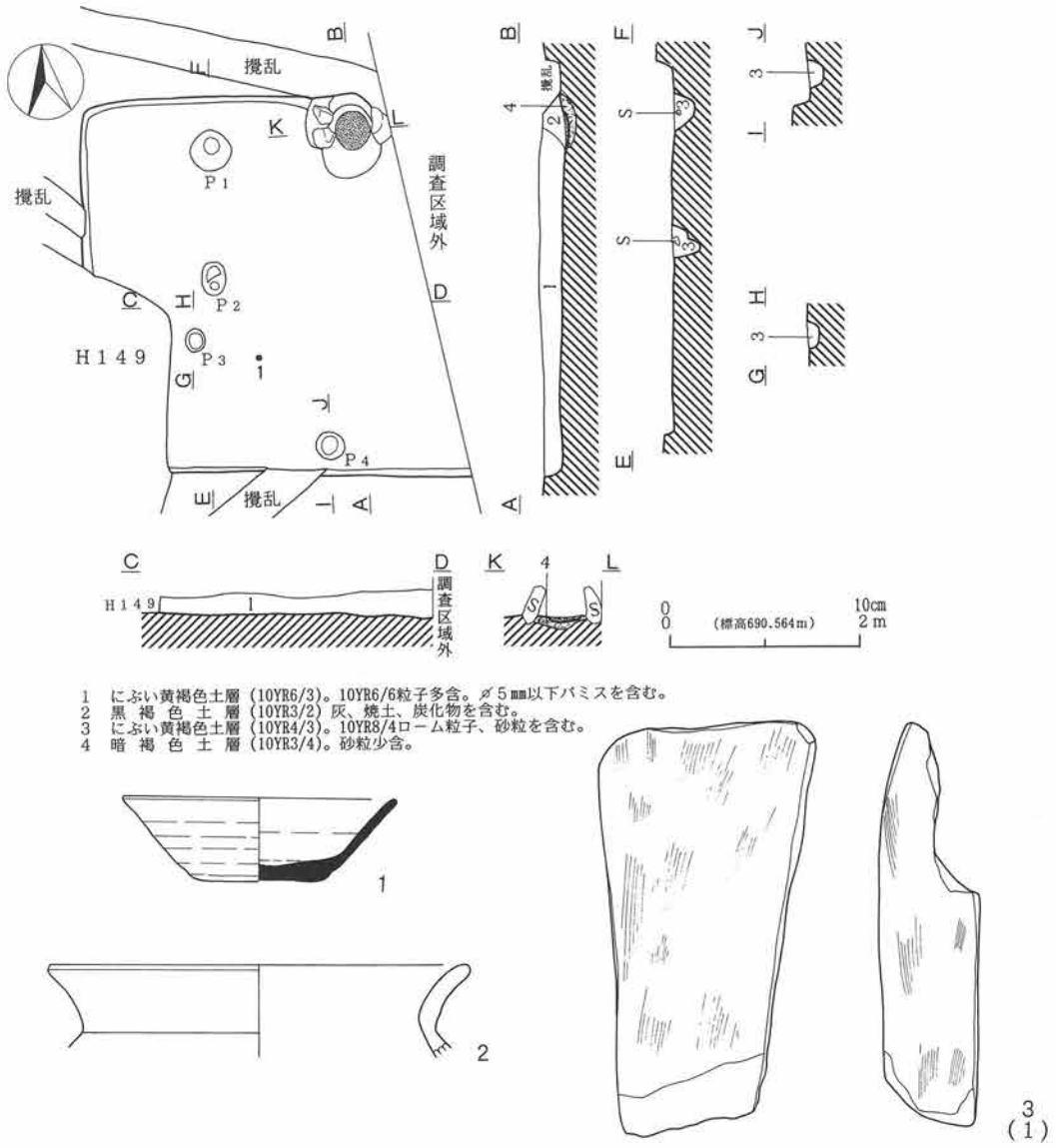
遺物－土師器、須恵器、石器が出土した。土師器には坏（1）、小型甕（2・3）、甕（4～6）が認められる。坏は須恵器坏蓋の模倣を原形とするもので、内面黒色処理、外面篦削り調整後篦磨きが施される。混入品である。小型甕、甕は全て「武蔵甕」である。小型甕は球胴を呈し、最大径を体部に有する。甕は最大径を口縁部と体部に有する。口縁部は「く」字を呈し、内面ナデ、外面篦削り調整が施される。須恵器は壺の底部が1点（7）出土している。石器は8の紡錘車と9の凹石が出土している。

H157号住居址（第249図、図版六十三・百八十七）

遺構－ⅩⅠこ9グリットで検出された。H149号住居址に切られ、H153号・H173号・H180号住居址を切る。南北長4.0m、壁残高0.35mの規模を有する。カマドは北壁の中央と思われる位置に構築されている。粘土は使用されない石組カマドである。Pitは4基検出されたが、主柱穴

ではない。掘方においても柱穴と思われるPitは存在しなかった。覆土は自然堆積で周溝は有さない。

遺物－底部篦切りの須恵器坏（1）、土師器甕の口縁部片（2）、砥石（3）が出土している。



第249図　H157号住居址

H160号住居址（第250図、図版六十五・百八十九）

遺構－Xえ3グリットで検出された。F28号・F36号掘立柱建物址に切られる。南北長3.6m

挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
－1	須恵器 坏	14.6 6.2 4.3	底部篦削り。	
－2	土師器 甕	13.7 － 13.0	内外－ナデ。	
－3	砥石	21.5 11.2 5.4		No.1 2.1g

第222表　H157号住居址出土遺物観察表

×東西長3.0m×壁残高0.2mの規模を有する。長軸方位をN－2°－Eにとる。カマドは東壁の北東隅よりに位置し、焚口部分にだけ石組を施し、他は粘土で構築される。長径0.92m×短径0.75m×深度0.2mの規模である。Pitは6基検出され、この内のP1・P2は主柱穴と思われる。覆土は自然堆積で周溝は有さない。

遺物－内面ナデ、外面篦磨き調整が施される土師器甕（1）、有台の須恵器壺（2）底部が出土している。

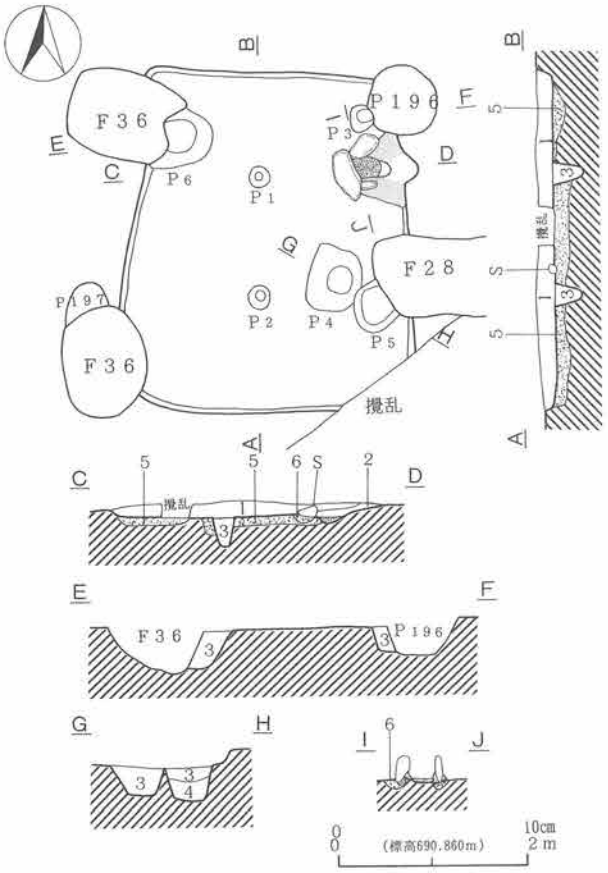
挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
－1	土師器 甕	24.2 － －	内－ナデ。 外－篦磨き。	
－2	須恵器 壺	－ 10.0 －	外面篦削り。	

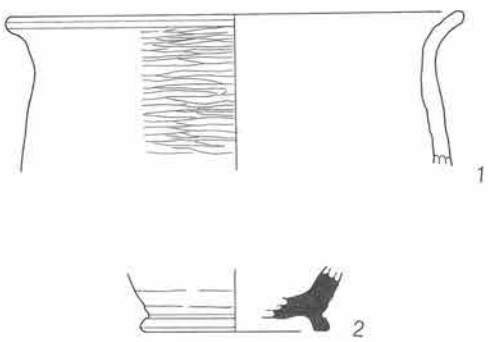
第223表　H160号住居址出土遺物観察表

H165号住居址（第251図、図版六十六・百九十）

遺構－Xう4グリットで検出された。F34号・F36号・F39号掘立柱建物址に切られ、M13号溝址を切る。隅丸長方形の平面プランを呈し、東西長5.25m×南北長4.3m×壁残高0.2mの規模を有する。N－90°－Wに長軸方位をとる。カマドは北壁の中央東よりに構築されている。火床が残存しているだけであった。4基検出されたPitは全て主柱穴である。P3以外の3基からは直径15～18cmの柱が確認された。覆土は自然堆積である。

遺物－土師器、須恵器、弥生土器が出土している。土師器には坏（1）、鉢（3）が認められる。坏は内面に放射暗文が、外面には篦削り調整が施されている。鉢は外湾した体部から口縁部が内湾する。内面ナデ、外面篦削り調整が施される。須恵器は坏（2）が出土している。底部は篦切りである。弥生土器には甕（4～7）、壺（8）が認められる。甕4は口唇部と口縁部に縄





第250図　H160号住居址

文を施し、口縁部には2本の篦描波状文を巡らす。5は櫛歯状工具により頸部に条線を巡らし、この条線から縦位の条線を垂下させ器面を縦位に分割し、横位の波状文を充填する。6・7は体部に櫛歯状工具による斜走文を施す。8の壺は、頸部に篦状工具による平行沈線を巡らし、その間に刺突列・波状文を施文する。弥生土器は全て混入品である。

H169号住居址（第252図）

遺構－Xう6グリットで検出された。H170号住居址を切る。本址は第2次調査におけるH16号住居址と同一の住居であり、第2次調査分のH23号住居址を切っている。壁残高0.6mを測るが、規模・形状については調査区域外に延びるため判然としない。調査区域外との境において検出された焼土が本址のカマドと関連するか否かについてもいても不明である。Pitは掘方において1基検出されたが性格は不明である。覆土は自然堆積で、周溝は有さない。

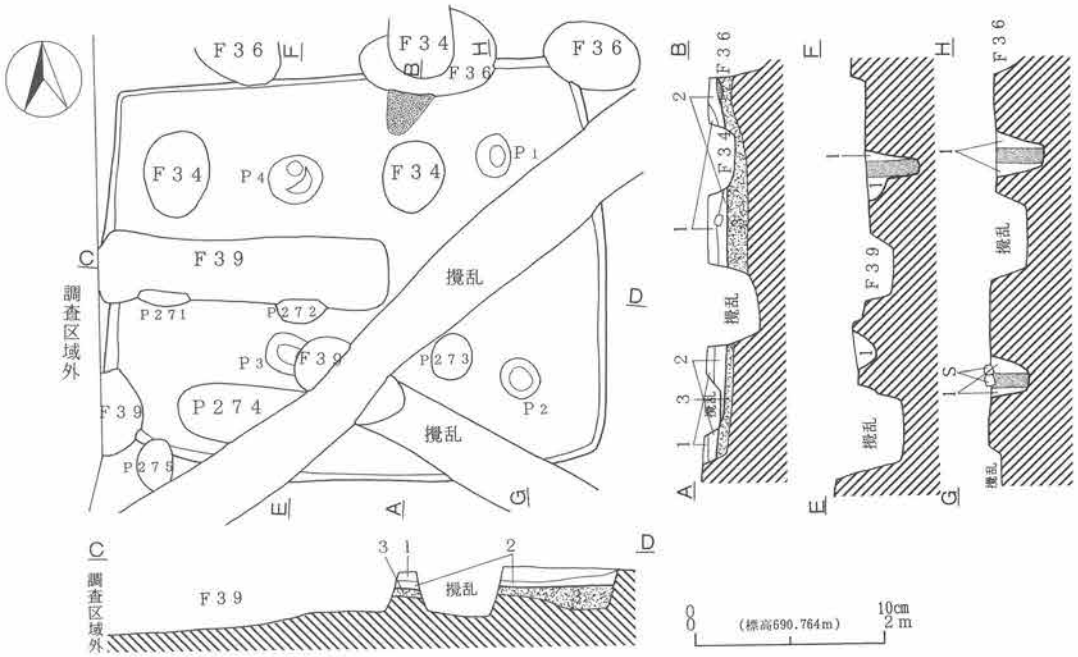
遺物－土師器甕の底部が1点出土している。「武蔵甕」の底部片で内面ナデ、外面篦削り調整が施される。

H171号住居址（第253図、図版六十八・百九十三）

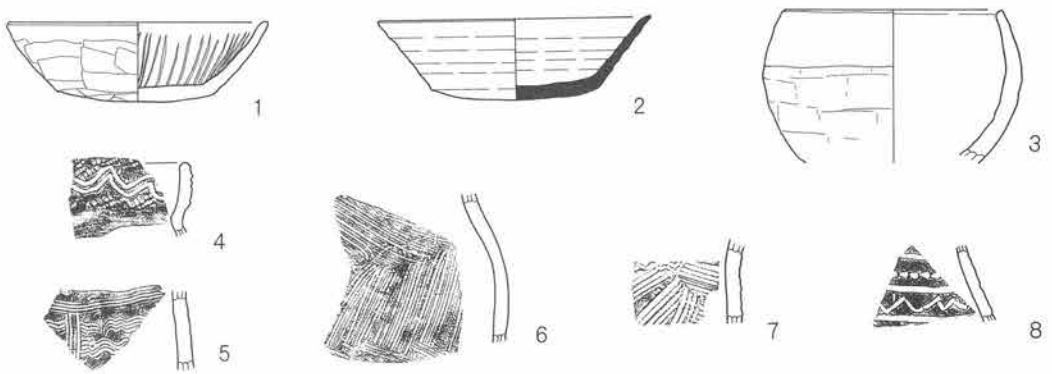
遺構－Ⅸえ10グリットで検出された。H176号・H182号住居址を切る。住居の約半分が調査区

域外に延びる。隅丸方形のプランを呈するものと思われる。南北長4.3m、壁残高0.1mの規模を有する。南北を主軸とするならば、N－5°－Eに主軸方位をとる。カマドは北壁の中央と思われる位置に検出されたが、約半分が調査区域外に延びている。西袖の石芯と火床が認められれた。Pitは6基検出されたが主柱穴は不明である。覆土は自然堆積で、周溝は有さない。

遺物－土師器、須恵器、石器が出土している。土師器には坏（1～3）、皿（4）、甕（7・8）が認められる。坏は3点共に底部右回転糸切りで、内面黒色処理が施される。皿は有台と思われる。内面黒色処理が施される。甕は2点共に「武蔵甕」である。内面ナデ、外面篦削り調整が施される。7は「コ」字口縁を呈する。須恵器は坏（5・6）が2点出土している。いずれも底部回転糸切りである。石器は9の凹石が1点出土している。



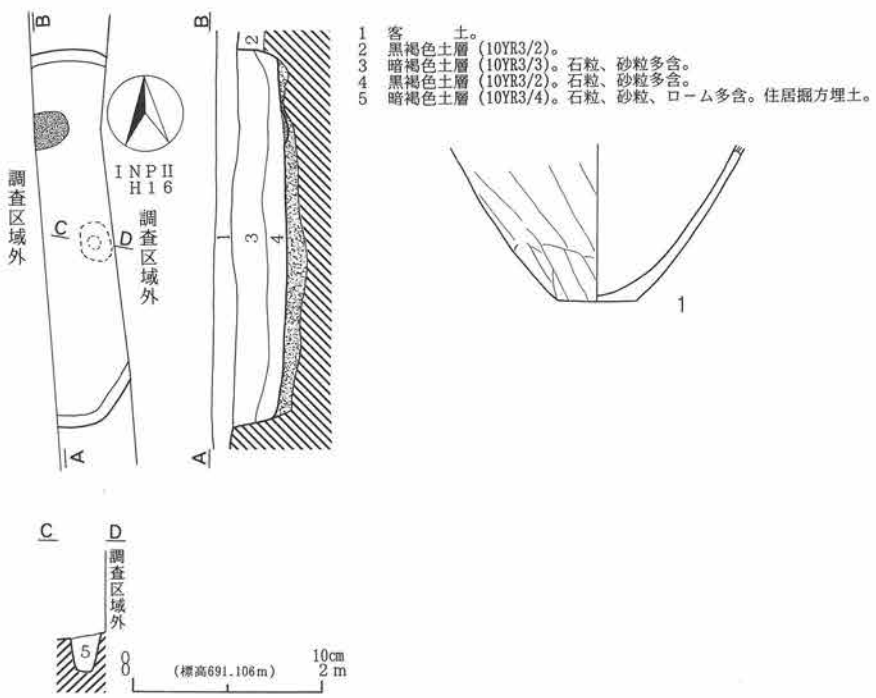
1　にぶい黄褐色土層（10YR5/3）。10YR6/6粒子、炭化物を含む。
2　黒褐色土層（10YR3/2）。10YR6/6粒子、砂粒少含。
3　黒褐色土層（10YR2/2）。住居掘方埋土。



第251図　H165号住居址

挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
－1	土師器 坏	13.8 － 4.2	内－放射暗文。 外－篦削り。	
－2	須恵器 坏	14.4 5.0 4.3	底部篦切り。	
－3	土師器 鉢	11.8 － －	内－ナデ。 外－篦削り。	
－4	弥生土器 甕	－ － －	内－篦磨き。 外－口唇：縄文、口縁部：縄文・篦描波状文。	
－5	弥生土器 甕	－ － －	内－篦磨き。 外－頸部：櫛描条線、体部：縦位櫛描条線・横位波状文。	
－6	弥生土器 甕	－ － －	内－篦磨き。 外－斜走文。	
－7	弥生土器 甕	－ － －	内－篦磨き。 外－斜走文	
－8	弥生土器 壷	－ － －	内－ナデ。 外－頸部：篦描平行沈線間に刺突列・波状文。	

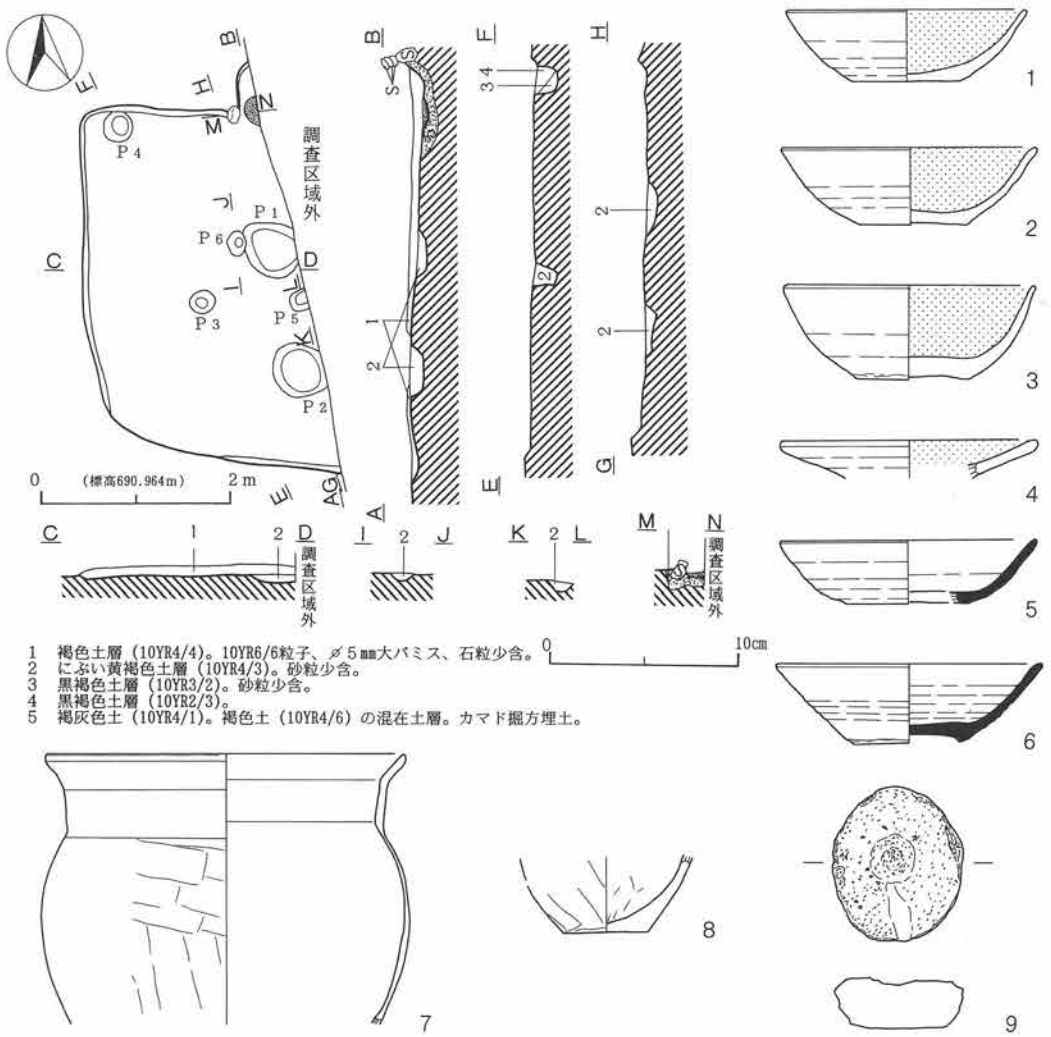
第224表　H165号住居址出土遺物観察表（2）



第252図　H169号住居址

挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
－1	土師器 甕	－ 4.1 －	内－ナデ。 外－篦削り。	武蔵甕。

第225表　H169号住居址出土遺物観察表



1　褐色土層（10YR4/4）。10YR6/6粒子、φ5㎜大パミス、石粒少含。
2　にぶい黄褐色土層（10YR4/3）。砂粒少含。
3　黒褐色土層（10YR3/2）。砂粒少含。
4　黒褐色土層（10YR2/3）。
5　褐灰色土（10YR4/1）。褐色土（10YR4/6）の混在土層。カマド掘方埋土。

第253図　H171号住居址

挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
－1	土師器 坏	12.7 5.5 3.8	内－黒色処理。 右回転糸切り。	
－2	土師器 坏	13.6 5.6 3.9	内－黒色処理。 右回転糸切り。	
－3	土師器 坏	13.4 6.1 5.0	内－黒色処理。 右回転糸切り。	
－4	土師器 皿	13.6 － －	内－黒色処理。	有台？。
－5	須恵器 坏	13.5 6.3 3.3	回転糸切り。	
－6	須恵器 坏	14.2 5.6 4.0	右回転糸切り。	
－7	土師器 甕	19.1 － －	内－ナデ。 外－篦削り。	武蔵甕。 「コ」字口縁。
－8	土師器 甕	－ 3.4 －	内－ナデ。 外－篦削り。	武蔵甕。
－9	凹石	8.1 6.9 2.1		163.9ｇ

第226表　H171号住居址出土遺物観察表

H174号住居址（第254図、図版六十九・百九十四・百九十五）

遺構－Ⅸい１グリットで検出された。本址は床面が部分的に残存し、床面に接する状態で遺物の出土が確認できたため住居址として調査を行ったものである。当然の事ながら、住居の形状・規模等は不明である。また、検出されたPitも、本址の床面を切り込むもの全てを本址に帰属させている。ただし、床面下から検出された、Ｐ７・Ｐ８の２基については本址に先行する可能性を有している。いずれのPitからも柱は確認されていない。

遺物－土師器、弥生土器が出土している。土師器には坏（１～６・８・９）、有台坏（７）、甕（10）、小型甕（11）が認められる。底部が残存する坏・有台坏は全て底部回転糸切りで、方向が特定できるものは、全て右回転である。また、６・９を除き内面黒色処理が施される。８には墨書、９には「尖」？の刻書が認められる。甕10は「武蔵甕」である。内面ナデ、外面篦削り調整が施される。11の小型甕は「ロクロ甕」である。内外面にロクロナデが施される。弥生土器は赤彩される高杯の口縁部（12）と脚部（13）が認められる。混入遺物である。

H175号住居址（第255図、図版六十九・百九十五）

遺構－ＸⅠけ９グリットで検出された。H130号住居址に切られ、H158号・H173号・H180号

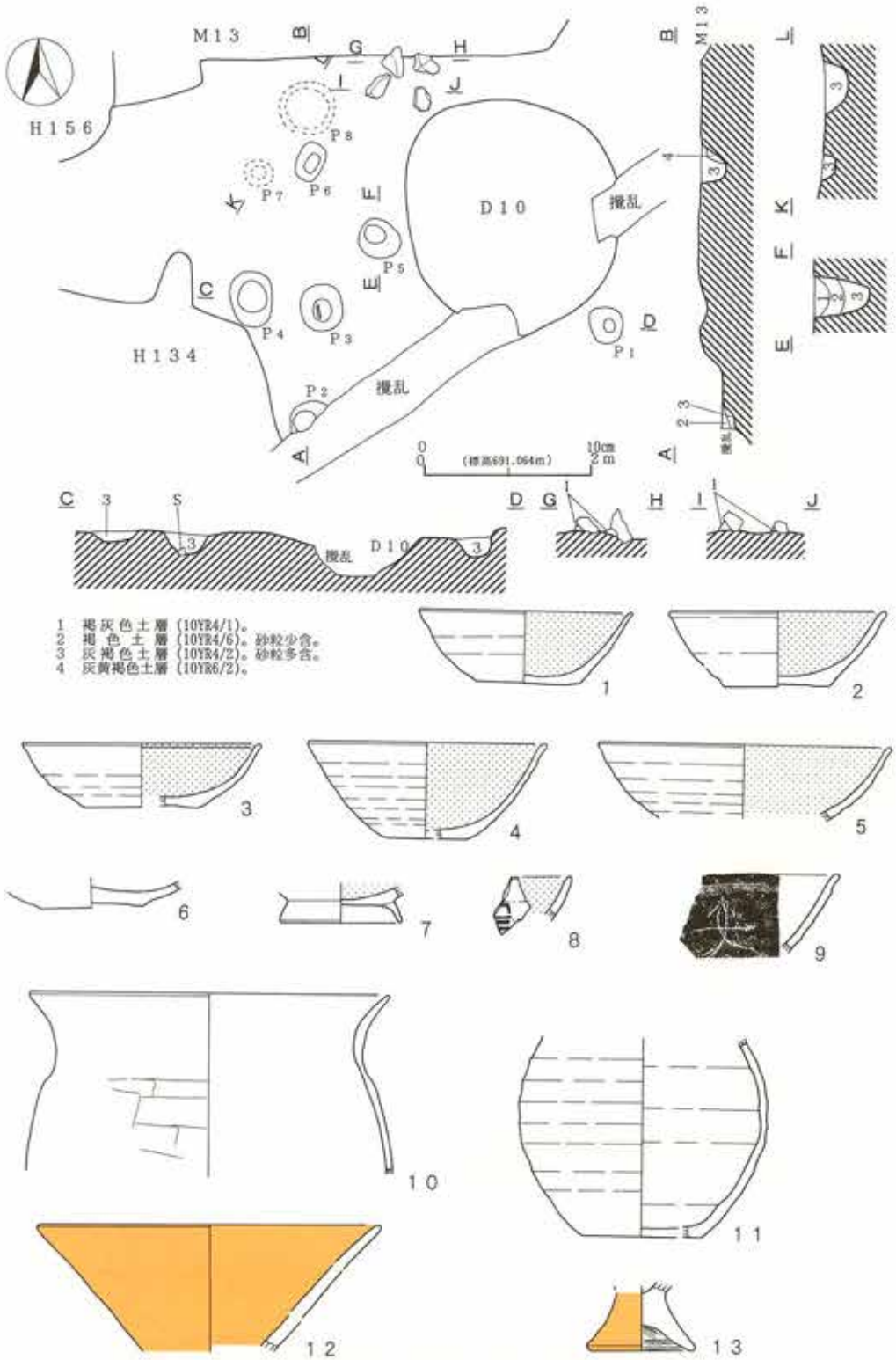
住居址を切る。調査区域外に延びるため規模・形状は判然としない。壁残高0.2ｍを測る。カマ

挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
－1	土師器 坏	13.0 6.3 4.4	右回転糸切り。 内面黒色処理。	
－2	土師器 坏	13.2 6.4 4.0	右回転糸切り。 内面黒色処理。	
－3	土師器 坏	14.3 － －	右回転糸切り。 内面黒色処理。	
－4	土師器 坏	14.5 － －	右回転糸切り。 内面黒色処理。	
－5	土師器 坏	17.7 － －	右回転糸切り。 内面黒色処理。	
－6	土師器 坏	－ － －	右回転糸切り。	
－7	土師器 有台坏	－ 7.4 －	回転糸切り→回転ヘラ削り→付高台。 内面黒色処理。	
－8	土師器 坏	－ － －	内面黒色処理。	墨書。
－9	土師器 坏	－ － －		刻書「尖」？。
－10	土師器 甕	21.7 － －	内－ナデ。 外－篦削り。	武蔵甕。
－11	土師器 小型甕	－ 7.2 －	内外－ロクロナデ。	ロクロ甕。
－12	弥生土器 高坏	22.0 － －	内外－赤彩。	混入遺物。
－13	弥生土器 高坏	－ 6.5 －	内－ナデ。 外－赤彩。	混入遺物。

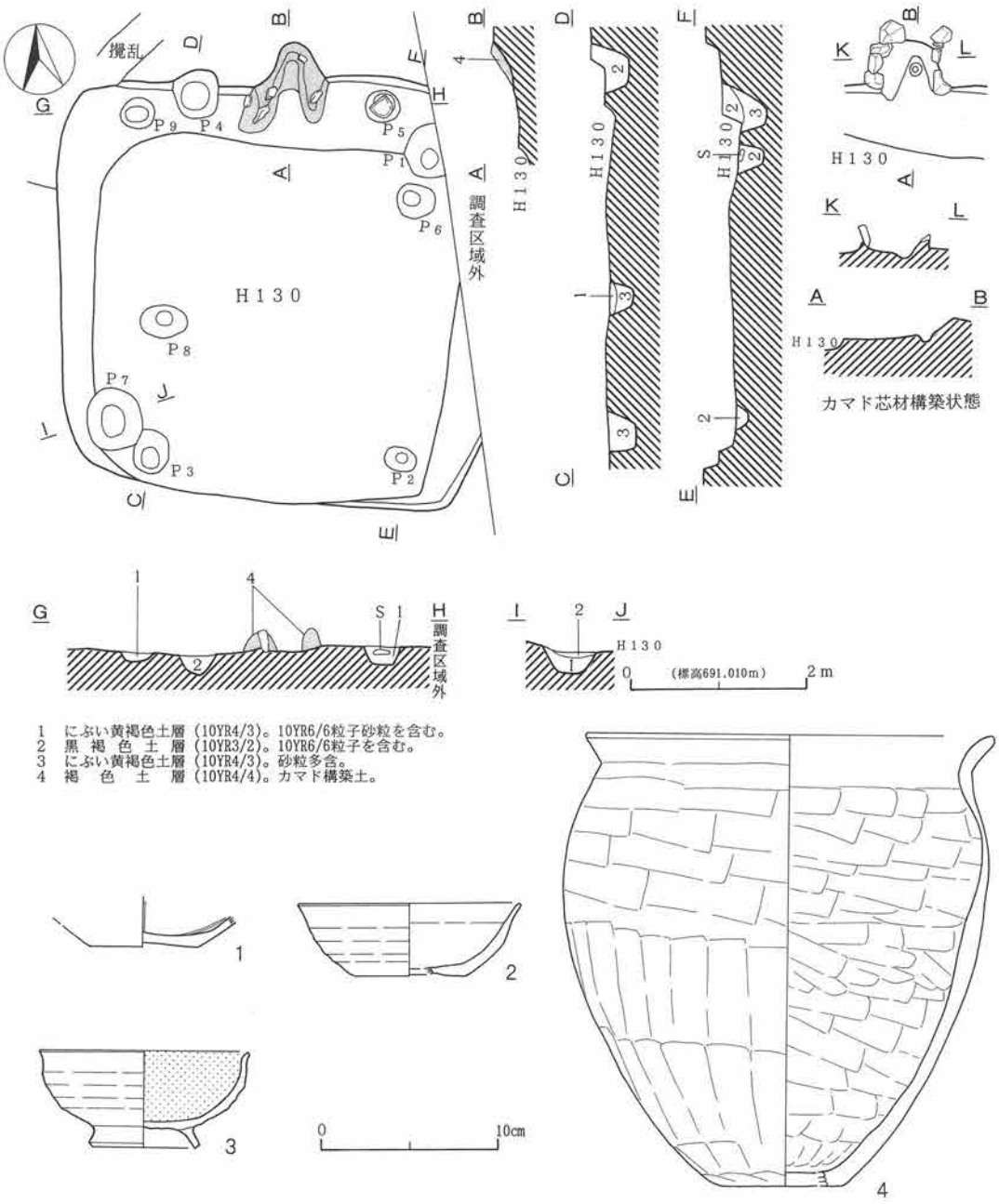
第227表　H174号出土遺物観察表

挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
－1	土師器 坏	－ 6.2 －	右回転糸切り。 内－暗文。	
－2	土師器 坏	12.7 － －	方向不明糸切り。	
－3	土師器 有台坏	12.0 6.3 5.5	右回転糸切り→回転篦削り→付け高台。 内面黒色処理。	
－4	土師器 甕	23.2 － －	内－ナデ。 外－篦削り。	No.1

第228表　H175号住居址出土遺物観察表



第254図　H174号住居址



第255図　H175号住居址

ドは北壁の中央と思われる位置に石芯を粘土で被覆して構築されている。Pitは9基検出されたが主柱穴は判断しかねる。柱は確認されなかった。周溝は有さない。

遺物－土師器坏（1・2）、有台坏（3）、甕（4）が出土している。坏1は内面に暗文が施され、底部には右回転の糸切り痕を残す。2は方向不明の糸切り痕が認められる。有台坏は内面黒色処理で方向不明の糸切り後、回転篦削り調整を施し、高台を付けている。甕は内面ナデ、外面篦削り調整が施される「武蔵甕」風のものである。篦削りの方向は「武蔵甕」に特有なものであるが、器壁の厚さや、器形が異なっている。

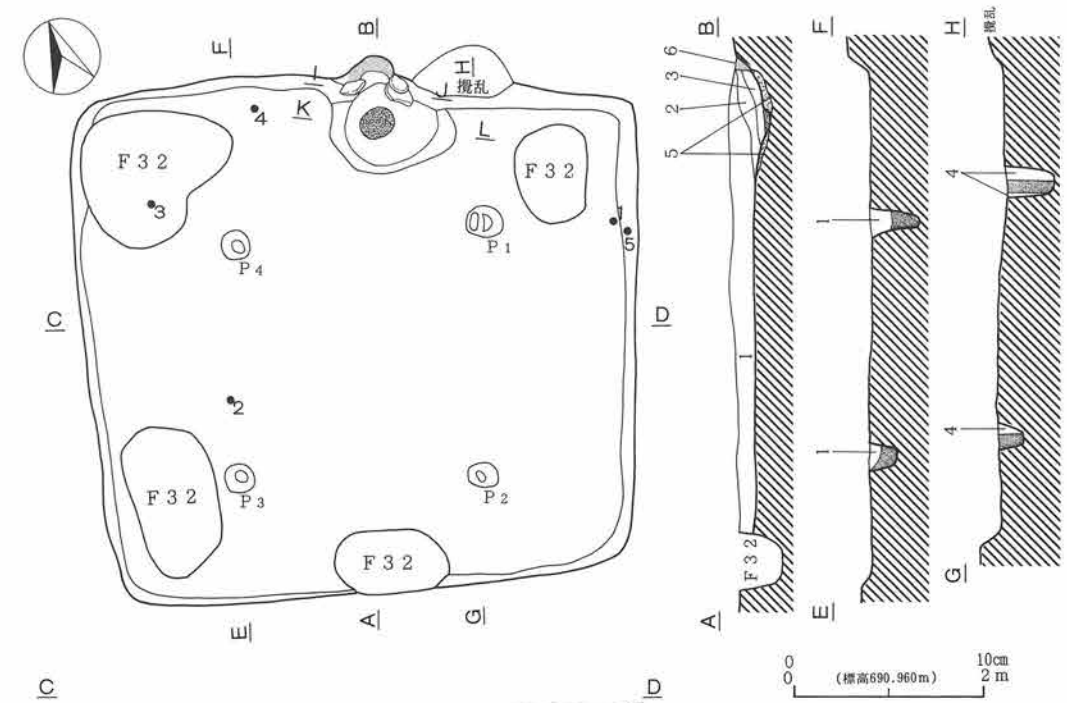
H192号住居址（第256・257図、図版七十五・二百）

遺構－Xく2グリットで検出された。F32号掘立柱建物址に切られ、H186号住居址を切る。隅丸方形の平面プランを呈し、東西長5.75m×南北長5.65m×壁残高0.25m、面積28.48㎡の規模を有し、N－71°－Wに長軸方位をとる。カマドは北壁の中央部分に石芯を粘土で被覆して構築されていたが、袖は存在しなかった。4基検出されたPitは全て主柱穴で、直径15～21cmの柱が全てのPitで確認された。覆土は自然堆積で、周溝は有さない。

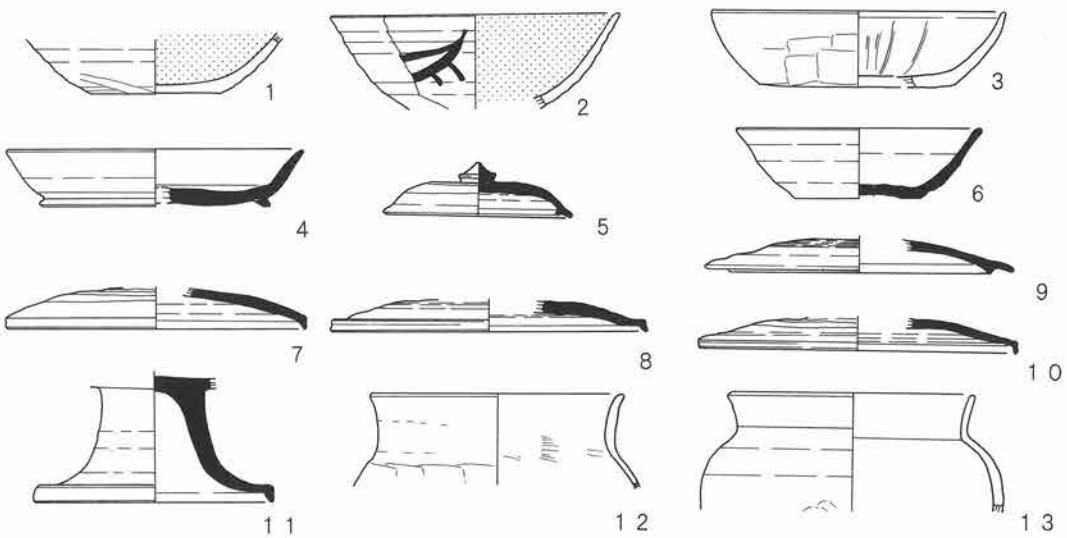
遺物－土師器、須恵器、石器、金属器が出土している。土師器には坏（1～3）、小型甕（12～14）、甕（15～16）が存在する。坏1は内面黒色処理で底部に篦削りが施される。2は内面黒色処理で墨書が認められる。3は内面放射暗文、外面篦削り調整が施される。小型甕は12のような「武蔵甕」と13・14のような「ロクロ甕」が存在する。甕は2点共に「武蔵甕」で、15は「コ」字口縁を呈する。須恵器には坏（6）、有台坏（4）、坏蓋（5・7～10）、高盤（11）、甕（17・18）が認められる。坏は底部右回転糸切りである。有台坏は底部篦切り後回転篦削りを加え高台を付けている。坏蓋5・9はかえりを有する。7・8・10は天井部に篦削り調整が施される。高盤は脚部の破片である。甕17・18は口縁部に櫛描波状文が施される。石器は19・20の砥石、21の凹石、22の磨石が出土している。金属器は24の鉄製の刀子、23のような銅製の毛抜が出土している。尚、23の毛抜本体は銅製であるが、上部のリング状の部分は鉄製である。

挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
－1	土師器 坏	－ 6.2 －	底部篦削り。 内面黒色処理。	
－2	土師器 坏	15.3 － －	内面黒色処理。	墨書。
－3	土師器 坏	15.6 － －	内－放射暗文。 外－篦削り。	
－4	須恵器 有台坏	15.7 － －	篦切り→回転篦削り→付け高台。	
－5	須恵器 坏蓋	10.9 － 2.9	天井部篦削り。	かえりを有する。
－6	須恵器 坏	13.0 6.5 3.7	右回転糸切り。	
－7	須恵器 坏蓋	15.9 － －	天井部篦削り。	
－8	須恵器 坏蓋	16.3 － －	天井部篦削り。	
－9	須恵器 坏蓋	16.2 － －	天井部篦削り。	

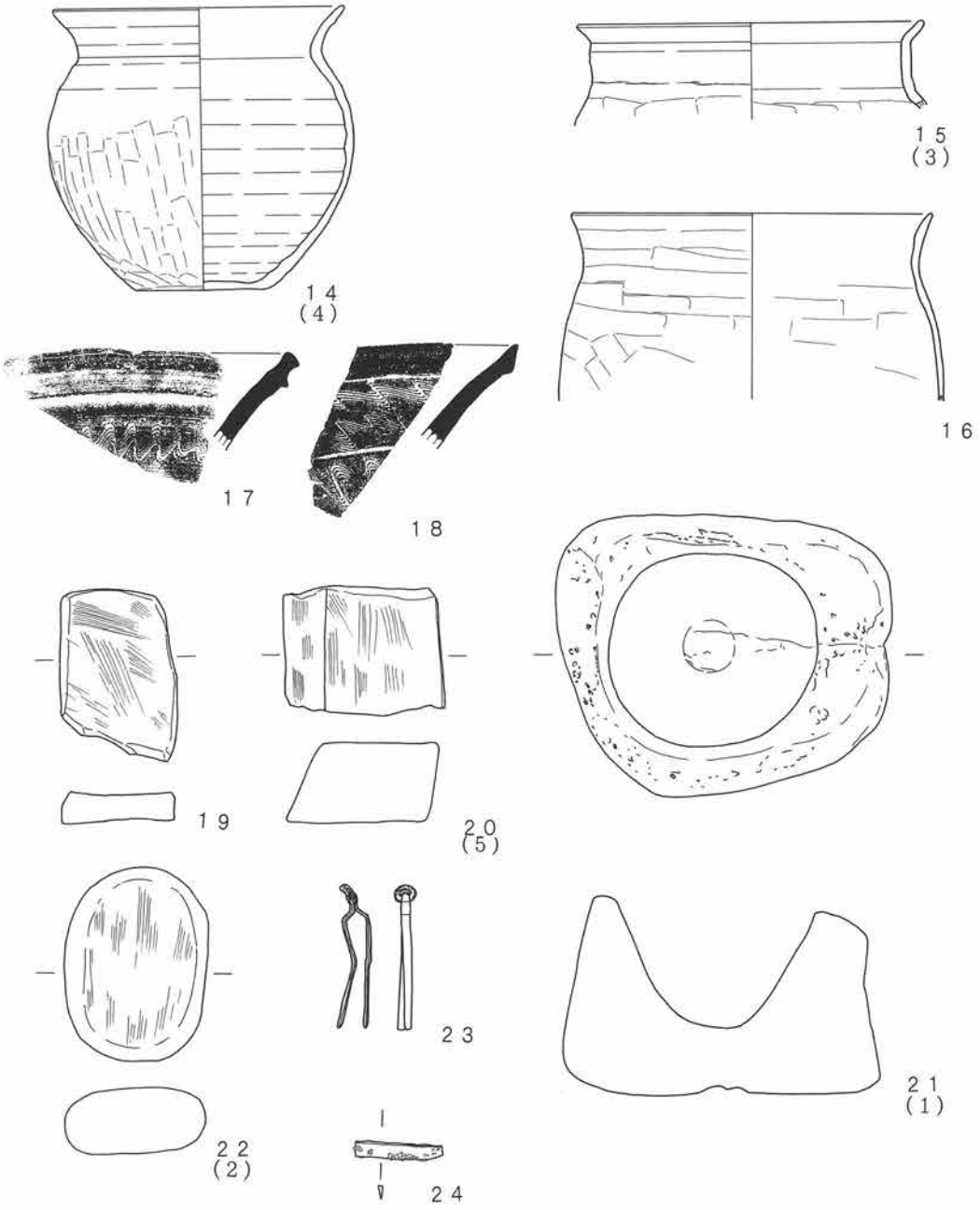
第229表　H192号出土遺物観察表（1）



1　にぶい黄褐色土層（10YR5/3）。10YR8/4ローム粒子、砂粒を含む。
2　にぶい黄褐色土層（10YR5/3）。10YR8/4ローム粒子、砂粒、焼土を含む。
3　カマド構築褐色土（10YR4/3）、灰、焼土の混在土層。
4　黒褐色土（10YR3/2）、にぶい黄褐色土（10YR5/3）、10YR8/4ロームの混在土層。
5　にぶい黄褐色土層（10YR4/3）。カマド掘方埋土。
6　褐色土層（10YR4/3）。カマド構築粘土。
7　黒褐色土層（10YR3/2）。柱痕。



第256図　H192号住居址（1）



第257図　H192号住居址（2）

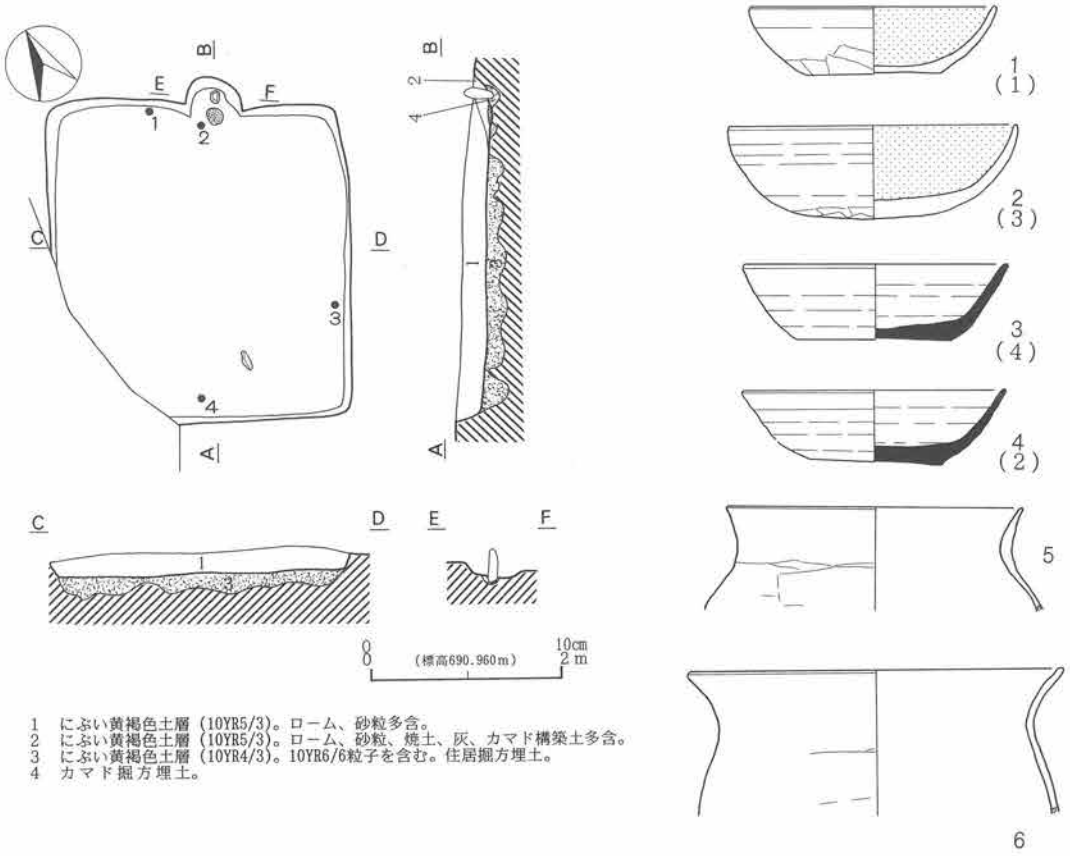
挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
−10	須恵器 坏蓋	16.9 — —	天井部篦削り。	
−11	須恵器 高盤	— 12.7 —		
−12	土師器 小型甕	13.4 — —	内—ナデ。 外—篦削り。	武蔵甕。
−13	土師器 小型甕	13.1 — —	内外—ロクロナデ。	ロクロ甕。
−14	土師器 小型甕	16.5 7.3 16.0	内—ロクロナデ。 外—口縁〜体部上半：ロクロナデ、体部下半：篦削り。	ロクロ甕。 No.4
−15	土師器 甕	19.7 — —	内—ナデ。 外—篦削り。	武蔵甕。 No.3
−16	土師器 甕	20.6 — —	内—ナデ。 外—篦削り。	武蔵甕。
−17	須恵器 甕	— — —	口縁部に櫛描き波状文。	
−18	須恵器 甕	— — —	口縁部に櫛描き波状文。	
−19	砥石	9.2 6.7 1.7		200 g
−20	砥石	8.9 7.2 4.5		650 g No.5
−21	凹石	9.3 8.0 5.2		4000 g No.1
−22	磨石	11.0 8.0 3.2		550 g No.2
−23	胴製品 毛抜	8.3 0.5 0.1		5.9 g
−24	刀子	5.0 0.9 0.2		4.3 g

第230表　H192号出土遺物観察表（2）

H197号住居址（第258図、図版七十八・二百七）

遺構—Xあ3グリットで検出された。H178号住居址を切る。隅丸長方形の平面プランを呈し、南北長3.65m×東西長3.22m×壁残高0.28mの規模を有し、N—30°—Eに長軸方位をとる。カマドは北壁の中央部に構築されるが、火床以外は残存していなかった。Pitは存在せず、覆土は自然堆積で、周溝は有さない。

遺物—土師器、須恵器が出土している。土師器には坏（1・2）、甕（5・6）が認められる。

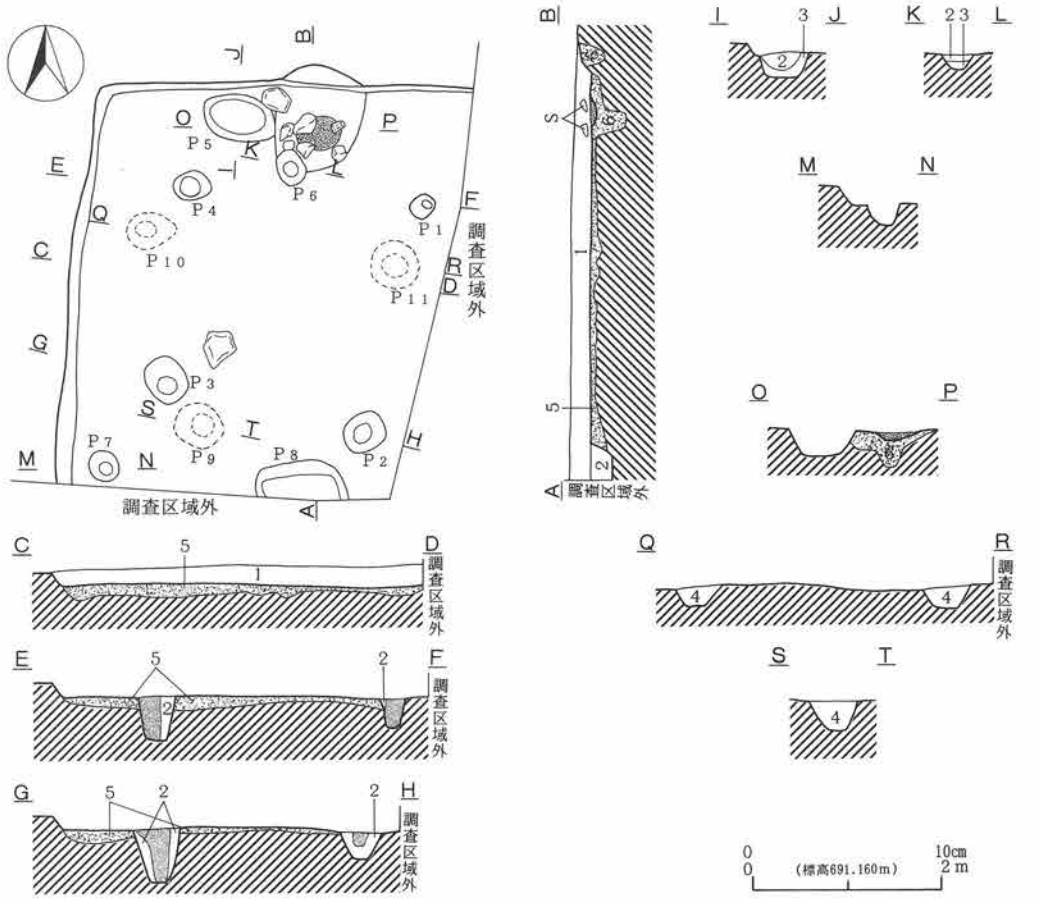


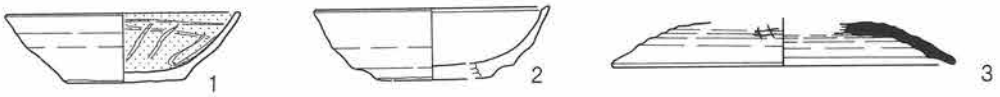
第258図　H197号住居址

挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
－1	土師器 坏	13.1 7.0 3.5	底部篦削り。 内面黒色処理。	
－2	土師器 坏	15.4 － 5.0	底部篦削り。 内面黒色処理。	
－3	須恵器 坏	14.0 7.9 4.0	右回転糸切り。	
－4	須恵器 坏	14.0 6.9 3.8	右回転糸切り。	
－5	土師器 甕	15.8 － －	内－ナデ。 外－篦削り。	武蔵甕。
－6	土師器 甕	20.0 － －	内－ナデ。 外－篦削り。	武蔵甕。

第231表　H197号住居址出土遺物観察表

坏は２点共に内面黒色処理、底部手持ち篦削りである。甕は２点共に「武蔵甕」で、内面ナデ、外面篦削り調整が施される。須恵器は坏（３・４）が出土している。２点共に底部に右回転の糸切り痕が認められる。





第259図　H198号住居址

H198号住居址（第259図、図版七十八・二百七）

遺構－Ⅶう７グリットで検出された。H191号住居址を切る。調査区域外に延びるため規模・

形状等は判然としない。壁残高0.24ｍを測る。カマドは北壁の中央と思われる部分に存在する。しかし、火床と構築材と思われる礫が認められるだけであった。Pitは11基検出され、この内のＰ１～Ｐ４の４基が主柱穴である。４基全てで、直径18～20cmの柱が確認された。覆土は自然堆積で、周溝は存在しない。

遺物－土師器坏２点（１・２）と須恵器盤１点（３）が出土している。土師器坏は２点共に底部に回転糸切り痕が認められ、１は内面に暗文と黒色処理が施される。須恵器坏蓋は混入遺物であろう。天井部には篦削りが施され、「井」の刻書が認められる。このような「井」の刻書は中野市清水山窯跡で数多く出土しており、胎土分析も実施していない段階で言及すべき問題ではないかも知れないが、刻書の書体等も近似しており清水山窯跡産の可能性も皆無ではない。清水山窯跡１号灰原から出土した「佐玖郡」と刻書された無頸壺の存在も含め、新たな視点から考慮する必要があろうかと思われる。

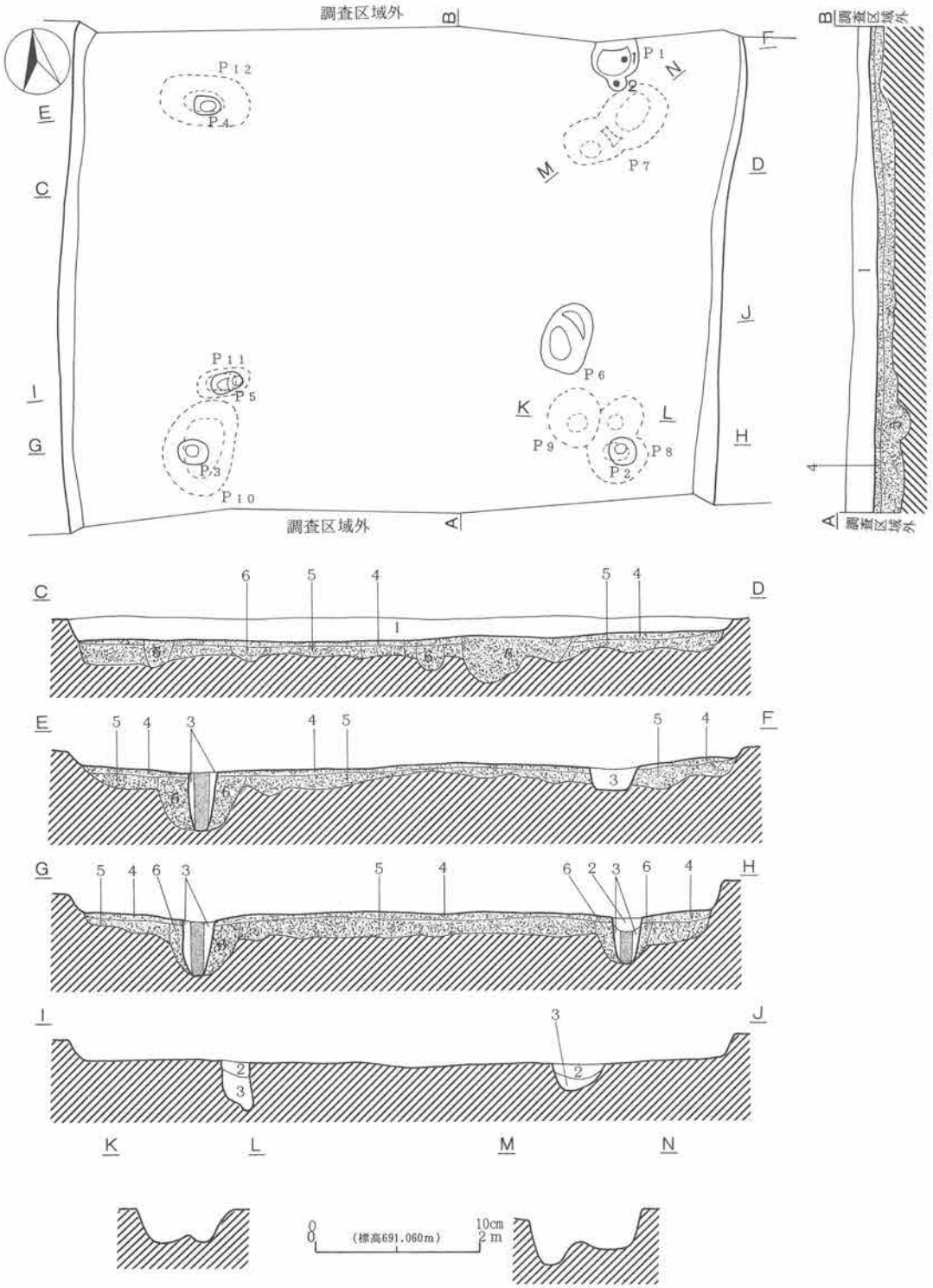
挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
－1	土師器 坏	12.4 6.0 3.7	内面黒色処理・暗文。 右回転糸切り痕。	
－2	土師器 坏	12.5 － 3.8	回転方向不明糸切り。	
－3	須恵器 坏蓋	－ 18.5 －	篦削り。	「井」の刻書。

第232表　H198号住居址出土遺物観察表

H199号住居址（第260～262図、図版二百七・二百八）

遺構－Ⅶう９グリットで検出された。H191号住居址を切る。調査区域外に延びるため形状・規模等は判然としない。東西長8.12ｍ、壁残高0.3ｍを測る。調査範囲内にはカマドは存在しなかった。掘方も含め21基検出されたPitの内Ｐ２～Ｐ４・Ｐ７の４基が主柱穴と思われる。Ｐ２～Ｐ４の３基からは直径14から16cmの柱が確認された。また、本址の掘方からは旧住居址の火床と壁の一部が確認され、本址が拡張された住居であることが判明した。覆土は自然堆積で、周溝は有さない。

遺物－土師器、須恵器、灰釉陶器、弥生土器、石器、鉄器が出土している。土師器には坏（１・６・７）、小型甕（９）、甕（10・12）、甑（11）が認められる。坏１は内面黒色処理で底部篦削り調整、６・７は内面黒色処理で墨書が認められる。６は底部に右回転の糸切り痕を残す。６・７は混入遺物である。小型甕は内面ナデ、外面篦削り調整が施される胴張りで広口のものである。甕10は丸底で内面ナデ、外面篦削り調整が施される。12は「武蔵甕」で内面ナデ、外面篦削り調整が施される。甑11は小型で単孔のもので、内面黒色処理が施される。須恵器には坏（２・

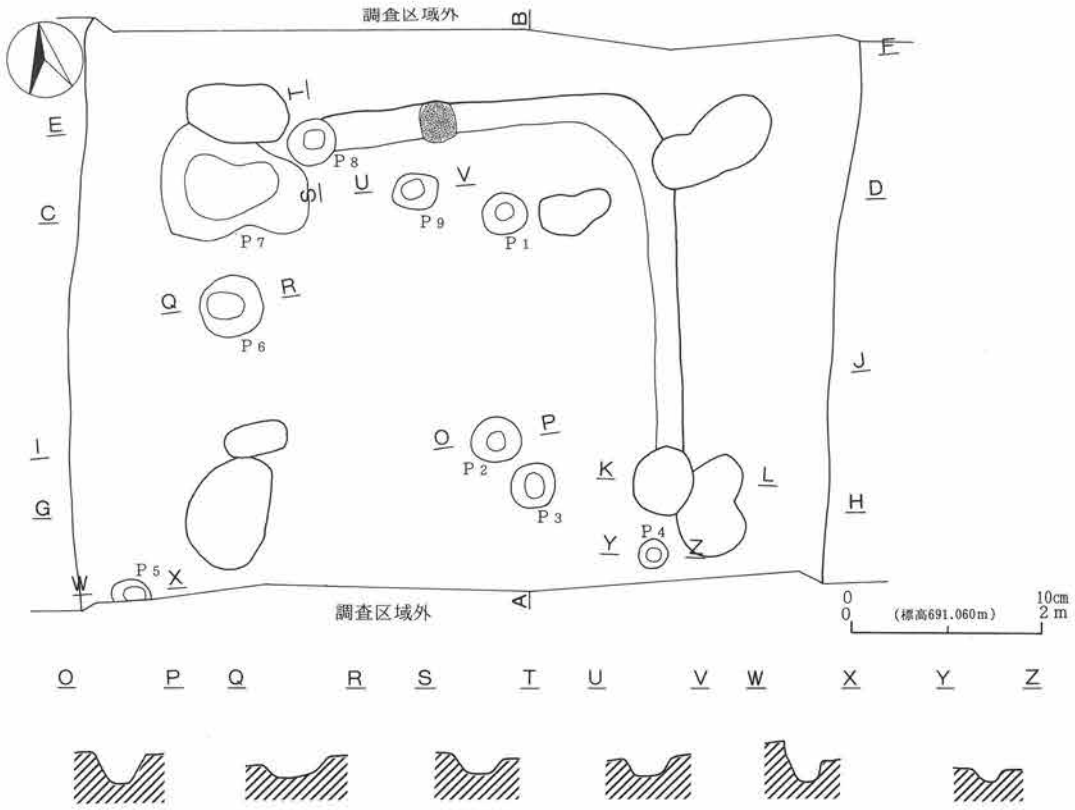


第260図　H199号住居址（1）

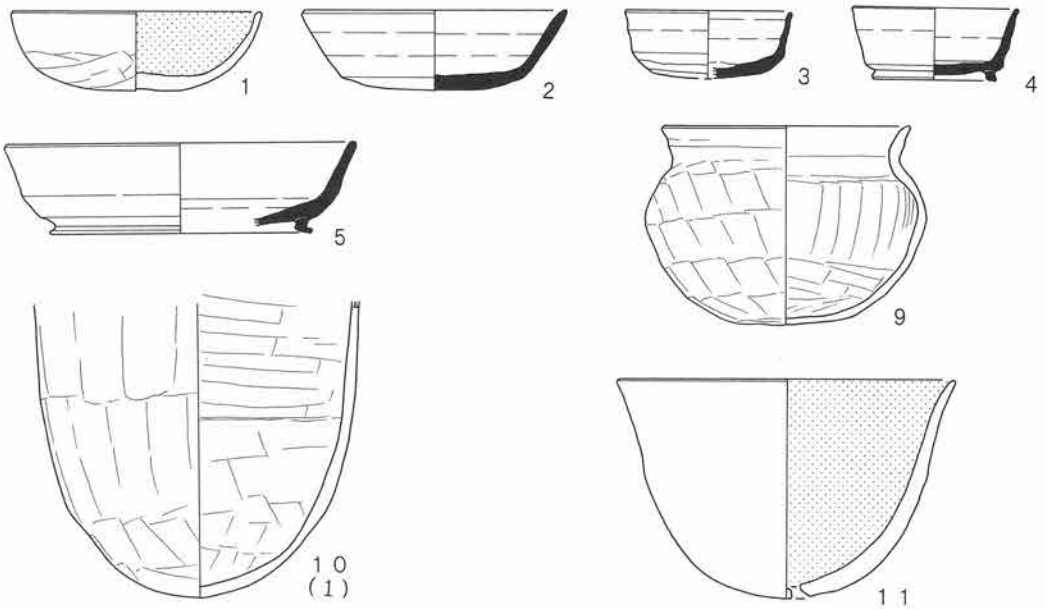
3）と有台坏（4・5）が認められる。坏は2点共に底部に手持ちの篦削り調整が施される。有台坏は2点共にはロクロから篦で切り離され、回転篦削り調整を施した後高台が付けられている。灰釉陶器は8の皿が1点出土している。釉はつけがけで三日月高台である。大原2号窯式に比定されるように思われる。混入遺物である。弥生土器は全て混入遺物である。13～18・21は甕、19・20・22・23は壺である。石器は24の敲石が1点出土した。鉄器は25～28は不明、29は刀子である。

挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
－1	土師器 坏	13.2 3.5 4.2	底部篦削り。 内面黒色処理。	
－2	須恵器 坏	14.1 3.0 4.7	底部篦削り。	
－3	須恵器 坏	8.8 － －	底部篦削り。	
－4	須恵器 有台坏	8.7 6.5 3.8	底部：篦削り→回転篦削り→付け高台。	
－5	須恵器 有台坏	18.6 － 4.8	底部：篦削り→回転篦削り→付け高台。	
－6	土師器 坏	12.7 6.5 3.7	内面黒色処理。 右回転糸切り。	墨書。 混入遺物。
－7	土師器 坏	12.5 － －	内面黒色処理。	墨書。 混入遺物。
－8	灰釉陶器 皿	－ 7.0 －	つけがけ。 三日月高台。	混入遺物。
－9	土師器 小型甕	13.1 － 10.5	内－ナデ。 外－篦削り。	
－10	土師器 甕	－ － －	内－ナデ。 外－篦削り。	
－11	土師器 甑	17.9 － 11.6	内－黒色処理。 外－ナデ。	
－12	土師器 甕	－ 5.3 －	内－ナデ。 外－篦削り。	武蔵甕。
－13	弥生土器 甕	－ － －	内－篦磨き。 外－口唇部：縄文、頸部：廉状文。	混入遺物。
－14	弥生土器	－ － －	内－篦磨き。 外－口唇部：縄文・刻目、頸部：廉状文。	混入遺物。
－15	弥生土器	－ － －	内－篦磨き。 外－口唇部：縄文、体部：斜走文。	混入遺物。

第233表　H199号住居址出土遺物観察表（1）



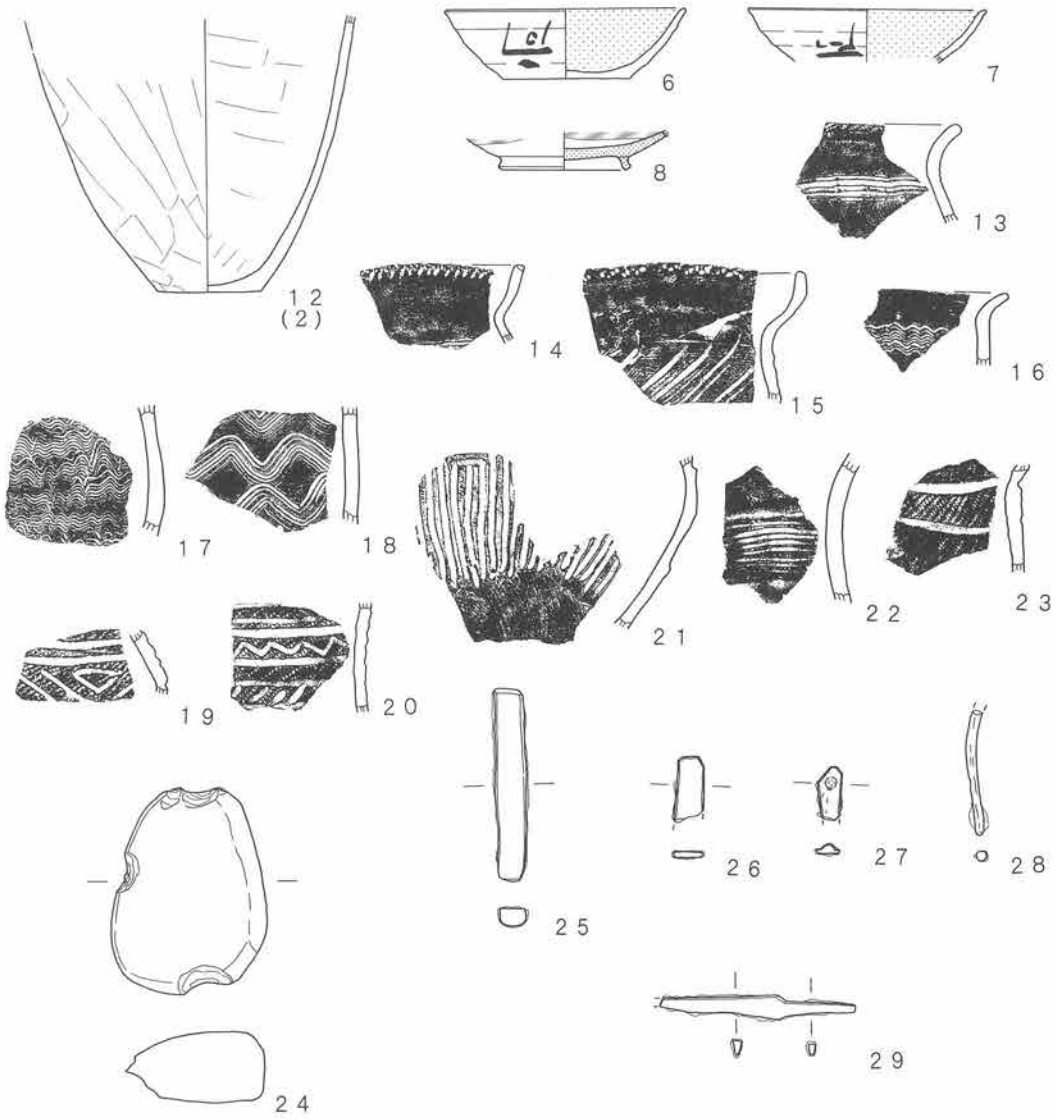
1　黒褐色土層（10YR3/2）。10YR8/4ローム、炭化物、φ5㎜以下パミス、砂粒少含。
2　にぶい黄褐色土層（10YR6/4）。
3　灰黄褐色土層（10YR4/2）。10YR8/4ローム、砂粒を含む。
4　黒褐色土層（10YR3/2）。貼床。
5　黒褐色土（10YR3/2）、明黄褐色土（10YR6/6）、10YR8/4ロームの混在土層。住居掘方埋土。
6　黒褐色土層（10YR2/2）。10YR5/3粒子、10YR8/4ローム粒子を含む。



第261図　H199号住居址（2）

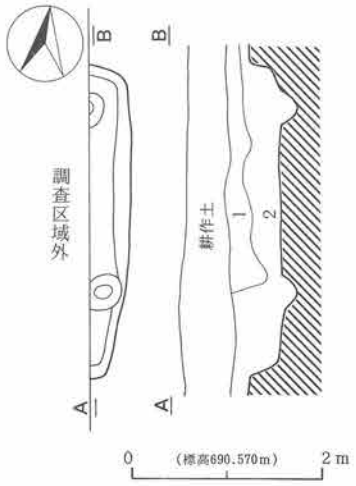
挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
－16	弥生土器	－ － －	内－篦磨き。 外－櫛描波状文。	混入遺物。
－17	弥生土器	－ － －	内－篦磨き。 外－櫛描波状文。	混入遺物。
－18	弥生土器	－ － －	内－篦磨き。 外－櫛描波状文。	混入遺物。
－19	弥生土器	－ － －	内－刷毛目。 外－篦描き平行沈線・鋸歯文・縄文。	混入遺物。
－20	弥生土器	－ － －	内－刷毛目。 外－篦描き平行沈線・波状文・斜位短沈線・縄文。	混入遺物。
－21	弥生土器	－ － －	内－篦磨き。 外－連続「コ」字文。	混入遺物。
－22	弥生土器	－ － －	内－ナデ。 外－平行沈線。	混入遺物。
－23	弥生土器	－ － －	内－ナデ。 外－平行沈線間に縄文。	混入遺物。
－24	敲石	10.8 8.0 3.7		500 g
－25	鉄器	10.1 1.6 0.9		41.8 g
－26	鉄器	3.4 1.5 0.3		4.1 g
－27	鉄器	2.8 1.3 0.5		2.9 g
－28	鉄器	6.6 0.5 0.5		11.6 g
－29	刀子	10.3 1.3 1.0		5.4 g

第234表　H199号住居址出土遺物観察表（２）



第262図　H199号住居址（3）

4　時期不明の住居址



1　灰黄褐色土層（10YR4/2）。φ1cm以下石粒少含。
2　にぶい黄褐色土層（10YR5/3）。φ1cm以下石粒少含。

第263図　H29号住居址

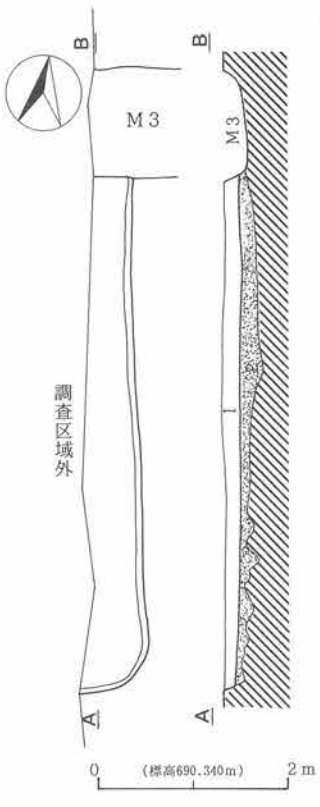
H29号住居址（第263図、図版十三）

遺構－Ⅰえ10グリットで検出された。住居址の大半調査区域外に延びている。規模は壁残高0.3mの他不明である。東壁下に検出された2基のPitの性格は不明である。覆土は自然堆積であった。

遺物－出土しなかった。

H51号住居址（第264図）

遺構－Ⅲか8グリットで検出された。M3号溝址に切ら、H49号住居址を切る。このような重複関係から本址の構築された上限の年代はH49号住居址の廃絶時に置くことができ、下限はM3号溝址の構築時に置くことが出来る。



1　黒褐色土層（10YR3/1）。φ1cm以下石粒を含む。
2　住居掘方埋土（10YR4/1）。10YR6/6粒子多含。

第264図　H51号住居址

第2次調査の際には本址が確認されていないためプランは不明である。壁残高0.4mの他は規模も不明である。

遺物－出土しなかった。

H77号住居址（第265図、図版三十四・百四十七）

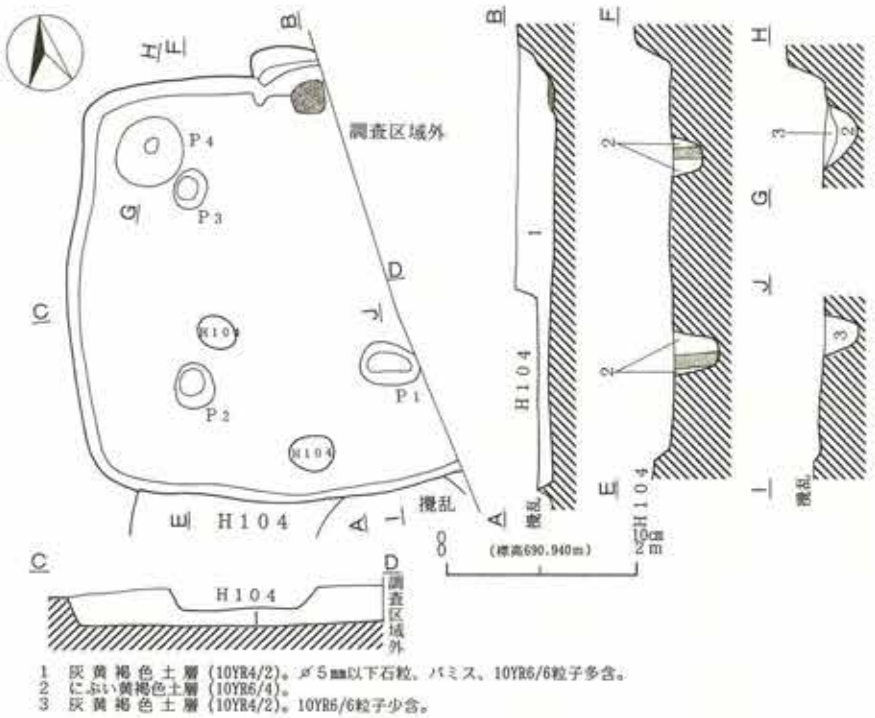
遺構－Ⅶか2グリットで検出された。H120号住居址を切り、H104号住居址に切られる。隅丸方形の平面プランを呈するものと思われる。南北長4.8m、壁残高0.42mの規模を有する。南北を主軸と仮定するならば、N－8°－Eに主軸方位をとる。北壁の中央部分と思われるところにカマドが構築されている。地山削り出しの袖基部と火床が残存していた。4基検出されたPitの内P1～P3が主柱穴である。P2において直径15cm、P3において直径12cmの柱が確認された。覆土は自然堆積であった。重複関係、カマドを有する事から考えると本址は、古墳時代～奈良時代の所産と思われる。

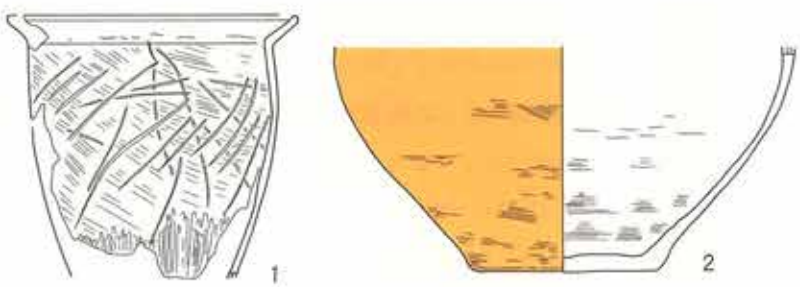
遺物－本来は、H120号住居址に帰属するであろう弥生土器

が2点出土している。1は甕で、頸部下に箆状工具による斜走文が施されている。2は壺の底部で、内面は刷毛目調整、外面は刷毛目調整後箆磨きを加え、赤彩している。

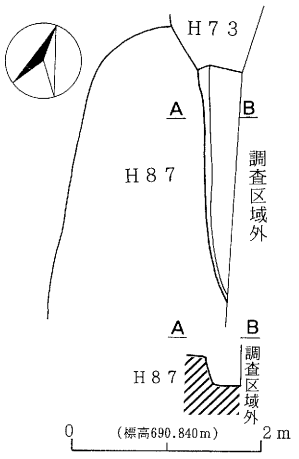
挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
−1	甕	15.5 − −	内−箆磨き。 外−体部：箆状工具による斜走文。	
−2	壺	− − 9.8	内−刷毛目。 外−赤彩。	

第235表　H77号住居址出土遺物観察表





第265図　H77号住居址



第266図　H108号住居址

H108号住居址（第266図）

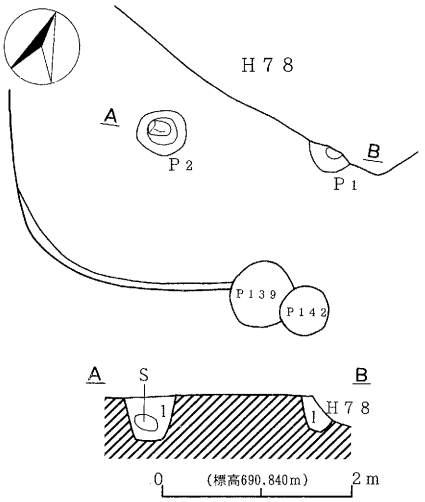
遺構－Ⅴい2グリットで検出された。H73号住居址に切られ、H87号住居址を切る。H73号住居址と、調査区域外に本址が延びるため規模・形状等は判然としない。壁残高0.3mを測る。調査範囲内にはPit等の施設は存在しなかった。また、遺物も出土していない。

H111号住居址（第267図、図版四十三）

遺構－Ⅶう2グリットで検出された。H78号住居址に切られる。

西南コーナー部分が残存していただけなので規模・形状は不明である。Pitは2基検出されており、2基共に主柱穴と思われる。

カマド・炉址等の施設は調査範囲内には存在しなかった。遺物も出土していないため時期は確定できないが、弥生時代の住居址の可能性が高い。



1　にぶい黄褐色土層（10YR5/3）。10YR6/6粒子含む。∅5㎜大パミス少含。

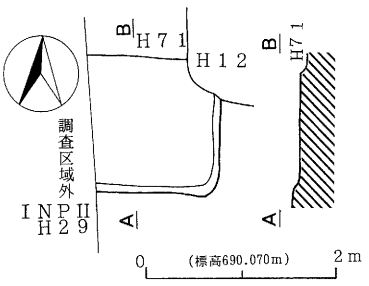
第267図　H111号住居址

H112号住居址（第268図）

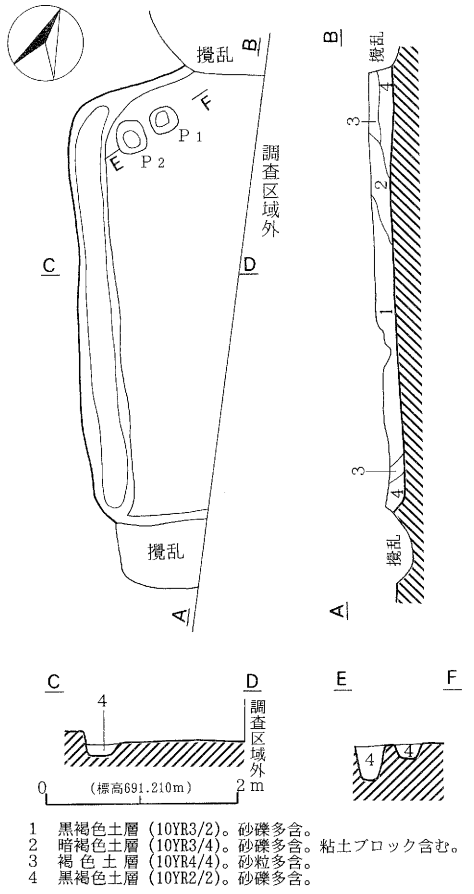
遺構－Ⅰえ9グリットで検出された。H12号・H71号住居址に切られる。第2次調査におけるH29号住居址は本址と同一の住居である。第2次調査分を含め、Pit等の施設は調査範囲内には存在しない。H71号住居址覆土から出土した弥生土器が、本来は本址に帰属するものと思はれるが、本址から遺物が出土していないため断定は出来ない。

H129号住居址（第296図、図版五十一）

遺構－ⅩⅢこ8グリットで検出された。H137号住居址を切る。調査区域外に延びるため形状・規模等は判然としない。



第268図　H112号住居址



第269図　H129号住居址

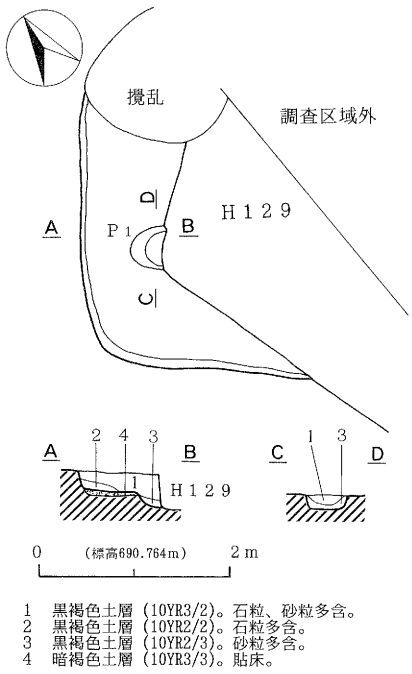
H151号住居址（第271図、図版百八十五）　**遺構**－ＸＩあ10グリットで検出された。H124号・H145号住居址に切られる。形状・規模等は一切不明で、カマド・炉址、Pit等の施設は存在しない。壁残高0.1ｍを測る。

遺物－土師器甕が１点出土している。「く」字状の口縁を呈し、内面ナデ、外面篦削り調整が施される。本址覆土から出土遺物ではあるが、出土状況等から必ずしも本址に伴うものとは言えない。

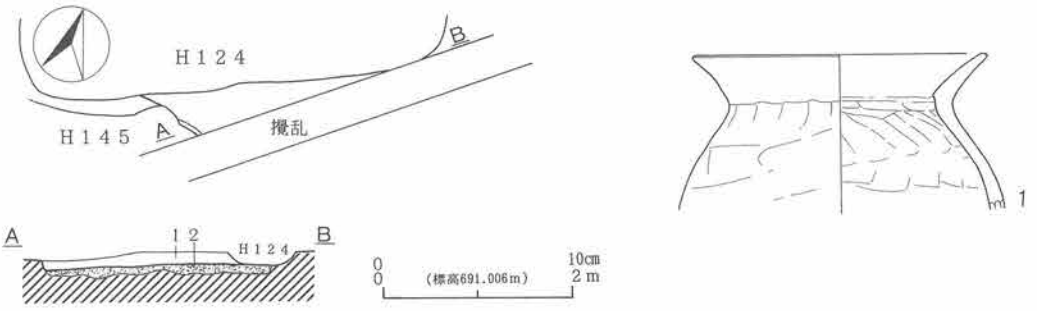
壁残高0.15ｍを測り、西壁下に周溝を有する。２基検出されたPitの性格は不明である。調査範囲にはカマド、あるいは炉址は存在しなかった。覆土は自然堆積で、遺物は出土しなかった。

H137号住居址（第270図）

遺構－ＸⅢこ８グリットで検出された。H129号住居址に切られる。住居の大半がH129号住居址と撹乱により消滅しているため、形状・規模等は不明である。壁残高0.2ｍを測る。カマド・炉址等は調査範囲内には存在しない。１基検出されたPitの性格も不明である。覆土は自然堆積で周溝は有さない。遺物は出土していない。



第270図　H137号住居址



1　黒褐色土層（10YR3/2）。砂粒多含。
2　暗褐色土層（10YR3/3）。ローム多含。住居掘方埋土。

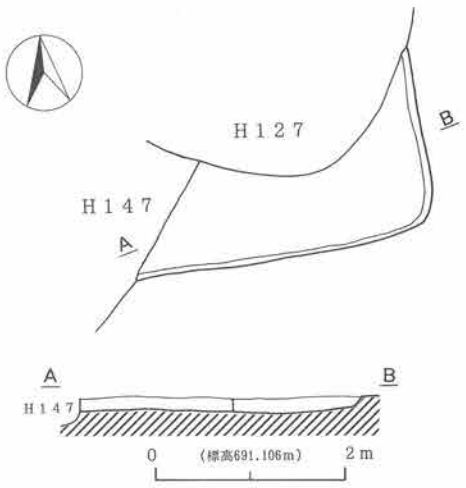
第271図　H151号住居址

挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
－1	甕	15.1 － －	内－ナデ。 外－箆削り。	

第236表　H151号住居址出土遺物観察表

H155号住居址（第272図、図版六十二）

遺構－ⅩⅡか1グリットで検出された。H127号・H147号住居址に切られる。住居の大半が消滅しているため、規模・形状・施設等は不明である。壁残高0.15ｍを測る。出土遺物は皆無であった。



1　黒褐色土層（10YR3/2）。砂粒多含。

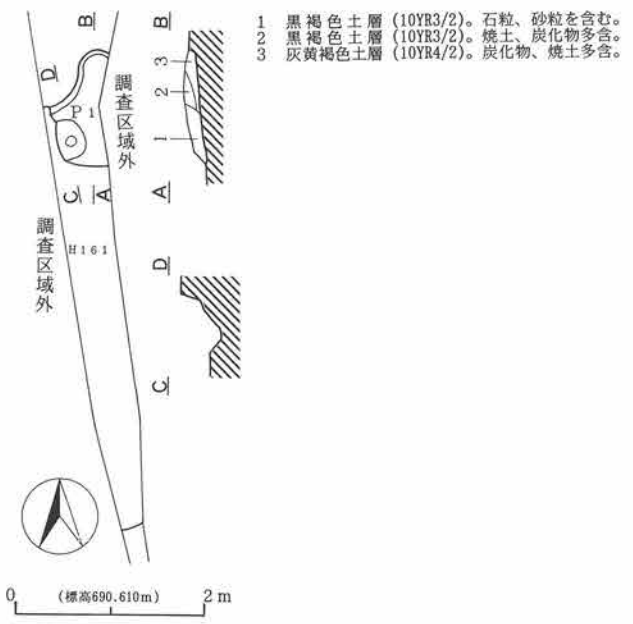
第272図　H155号住居址

H164号住居址（第273図）

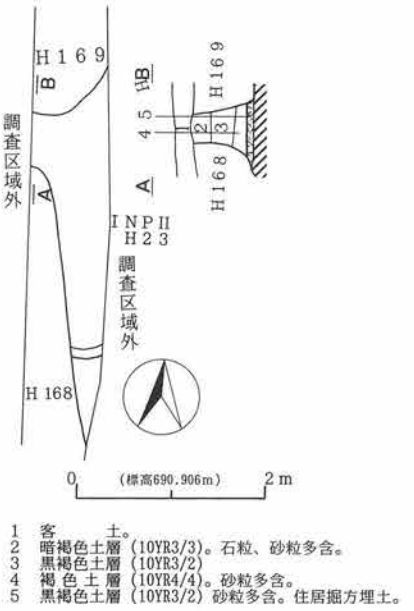
遺構－ⅩⅡう4グリットで検出された。H161号住居址に切られる。形状・規模等は不明である。壁残高0.18ｍを測る。1基検出されたPitの性格も判然とはしない。本址の年代については下限をH161号住により押さえることは可能であるが、それ以外は不明である。出土遺物は皆無である。

H170号住居址（第274図）

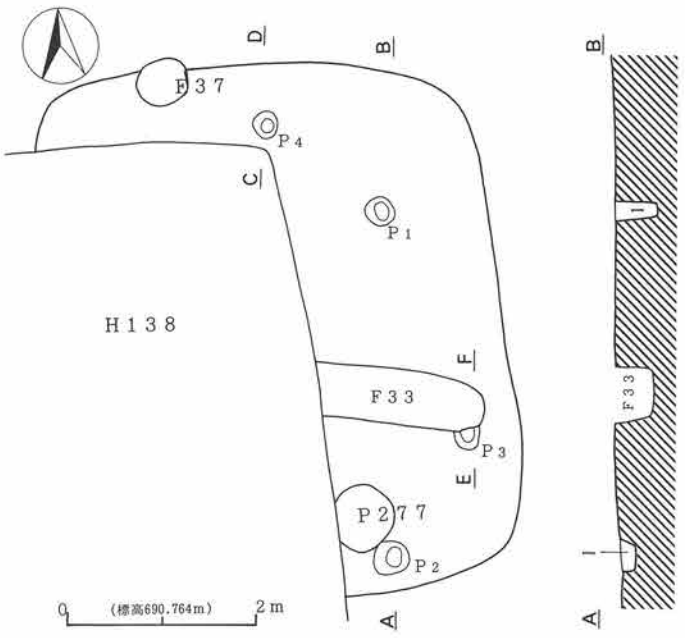
遺構－Ⅹう6グリットで検出された。H168号・H169号住居址に切られる。第2次調査に



第273図　H164号住居址



第274図　H170号住居址



第275図　H187号住居址

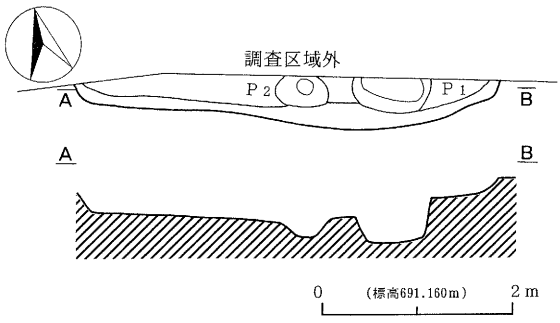
おけるH23号住居址と本址との関係、規模・形状については判然としない。壁残高0.6mを測る。覆土は自然堆積で周溝は有さない。遺物は出土してない。

H187号住居址

（第275図、図版百九十九）

遺構－Xく4グリットで検出された。H138号住居址、F33号掘立柱建物址に切られる。隅丸長方形の平面プラ

ンを呈し、南北長5.7ｍ×東西長4.55ｍに規模を有し、Ｎ－6°－Ｗに長軸方位をとる。壁は耕作等により消滅し存在しない。４基検出されたPitの内Ｐ１は主柱穴と思われる。炉址・カマド等は調査範囲内には存在しなかった。遺物が出土しないため時期は不明であるが、弥生時代の所産の可能性が高い。



第276図　H188号住居址

H188号住居址

（第276図、図版七十八・　）

遺構－Ⅸう７グリットで検出された。他遺構との重複関係は有さない。住居の大半は調査区域外に延びるため形状・規模は不明である。壁残高0.42ｍを測る。炉址・カマド等は調査範囲内には存在しなかった。２基検出されたPitの性格も不明である。遺物は出土しなかった。

H189号住居址（第277図、図版百九十九）

遺構－ⅩⅡけ３グリットで検出された。床面とこれを切り込むPitの存在から住居址とした。H152号住居址、Ｆ30号・Ｆ38号住居址と重複関係を有するが、新旧関係は不明である。また、８基検出されたPitの性格も判然としない。炉址・カマド・焼土等も確認されなかった。

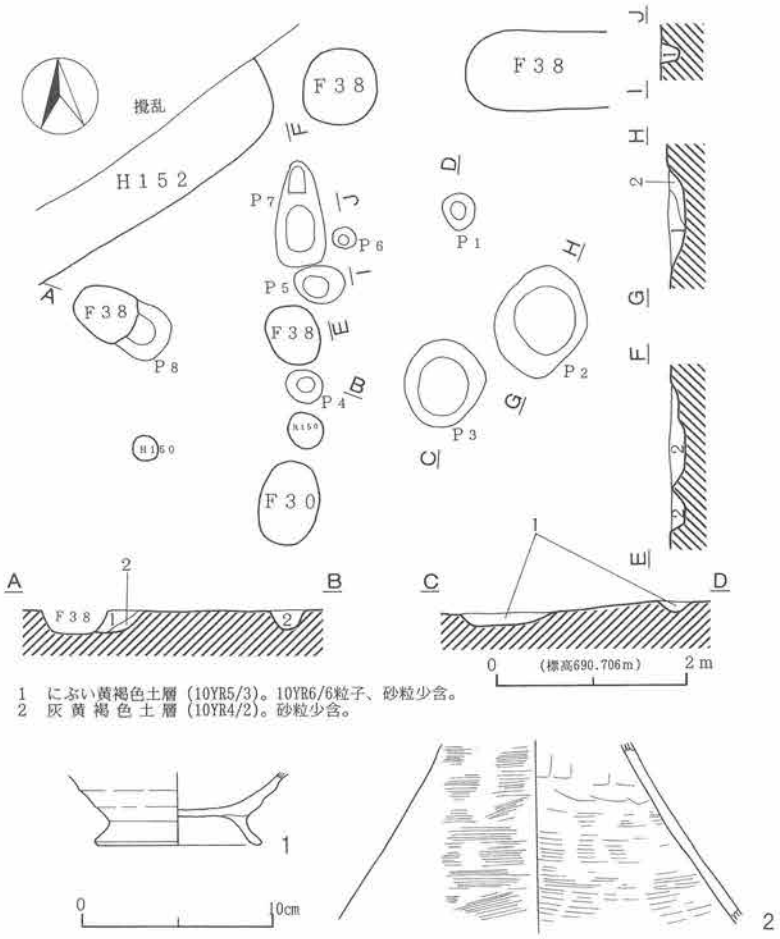
遺物－土師器有台坏（１）、弥生土器壺（２）が出土した。有台坏は底部に方向不明回転糸切痕を有する。弥生土器壺は内外面に刷毛目調整が施される。

挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
－1	土師器 有台坏	－ 8.8 －	回転糸切り→回転篦削り→付け高台。	
－2	弥生土器 壷	－ － －	内外－刷毛目。	

第237表　H189号住居址出土遺物観察表

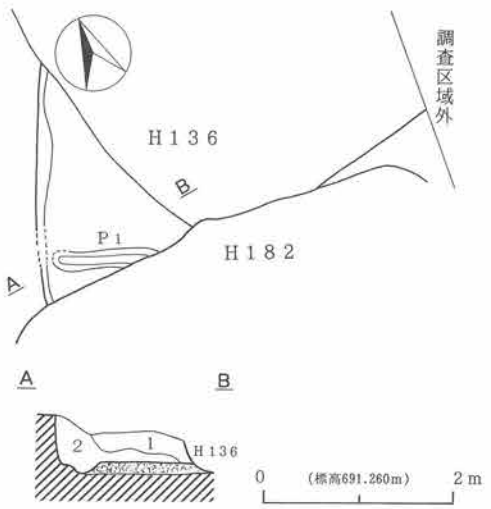
H190号住居址（第278図、図版七十四）

遺構－Ｘか１グリットで検出された。H136号・H182号住居址に切られる。住居の大半が消滅しているため、規模・形状等は不明である。壁残高は0.5を測る。調査範囲には炉址・カマド等は存在しなかった。Ｐ１とした落ち込みは、間仕切り溝と呼称される類のものである。遺物の出土は認められなかった。



1　にぶい黄褐色土層（10YR5/3）。10YR6/6粒子、砂粒少含。
2　灰黄褐色土層（10YR4/2）。砂粒少含。

第277図　H189号住居址



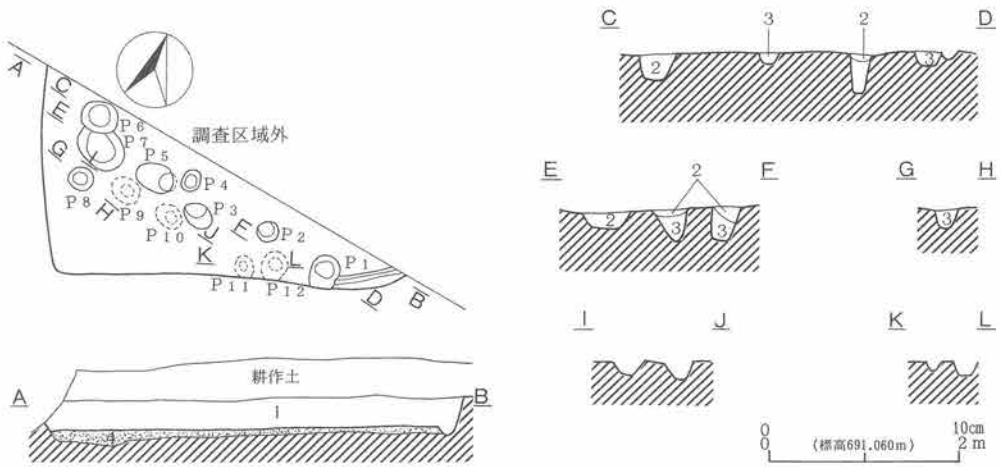
1　にぶい黄褐色土層（10YR6/3）。∅5㎜以下パミス、10YR6/6粒子多含。
2　黒褐色土層（10YR3/2）。∅5㎜以下パミスを含む。
3　明黄褐色土層（10YR6/6）。10YR4/2粒子少含。

第278図　H190号住居址

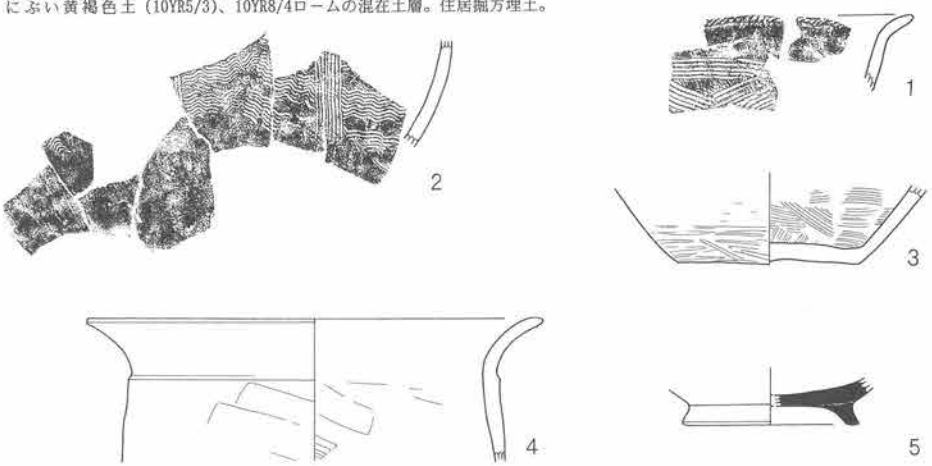
H201号住居址（第279図、図版七十九）

遺構－Ⅶえ10グリットで検出された。調査区域外に延びるため、規模・形状は不明である。壁残高0．35ｍを測る。調査範囲に炉址・カマド等は存在しなかった。掘方を含め12基検出されたPitの性格も判然とはしない。部分的に周溝が認められ、覆土は自然堆積であった。

遺物－弥生土器、土師器、須恵器が出土している。弥生土器は甕（１・２）、壺（３）が認められる。甕１は口唇部に縄文が施され、頸部には櫛歯状工具による条線が巡り、その下部には斜走文が施文される。２は櫛歯状工具による縦位の条線が体部を縦に分割し、波状文が充填される。壺３は底部片で内面刷毛目、外面篦磨き調整が施される。土師器は内面ナデ、外面篦削り調整が施される「武蔵甕」（４）が出土している。須恵器は有台坏の壺（５）の底部片が出土している。



1　にぶい黄褐色土層（10YR5/3）。10YR8/4ローム、砂粒を少含。
2　黒褐色土層（10YR3/2）。10YR8/4ロームを含む。
3　にぶい黄褐色土層（10YR5/3）。10YR6/6粒子を含む。
4　にぶい黄褐色土（10YR5/3）、10YR8/4ロームの混在土層。住居掘方埋土。



第279図　H201号住居址出土遺物

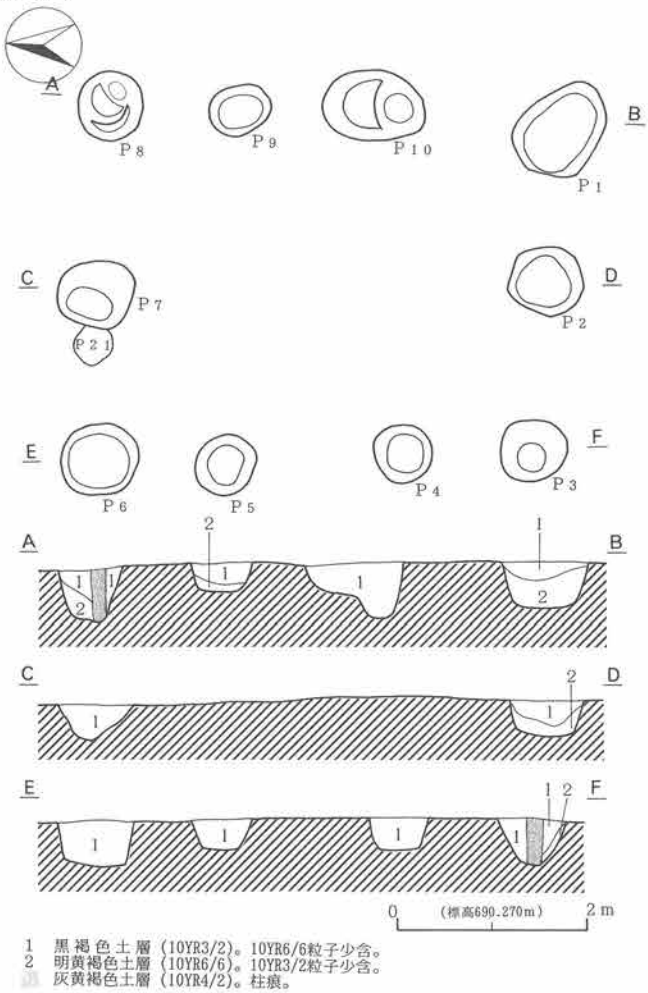
挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
－1	弥生土器 甕	－ － －	内－篦磨き。 外－口唇部：縄文、体部：斜走文。	
－2	弥生土器 甕	－ － －	内－篦磨き。 外－縦位条線・横位波状文。	
－3	弥生土器 壷	－ 9.6 －	内－刷毛目。 外－篦磨き。	
－4	土師器 甕	24.1 － －	内－ナデ。 外－篦磨き。	
－5	須恵器 壷	－ 9.3 －		

第238表　H201号住居址出土遺物観察表

第２節　掘立柱建物址

Ｆ１号掘立柱建物址（第280図、図版八十）

遺構－Ⅰき６グリットで検出された。Ｍ１号溝址を切る。南北３間、東西２間の10本柱の側柱式の掘立柱建物址である。桁行4.5ｍ、梁間3.55ｍを測り、長軸方位をＮ－10°－Ｗにとる。柱間は一定しない。Ｐ3とＰ8で確認された柱は直径15～18㎝であった。出土遺物はなく時代は不明である。



第280図　Ｆ１号掘立柱建物址

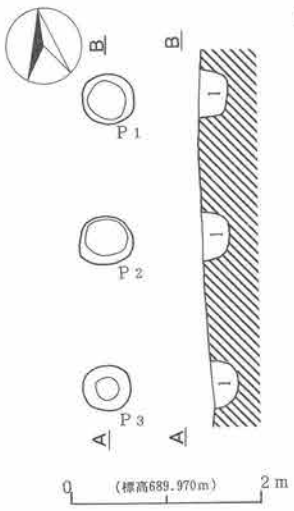
Ｆ２号掘立柱建物址

（第281図、図版八十）

遺構－Ⅱく２グリットで検出された。調査区域外に延びるものと思われる。２間１列の３基のPitが検出されている。Pit掘方の長径は58～52㎝、短径は52～50㎝、深度は30～28㎝とほぼ均等な規模を有している。柱間は1.5ｍであり均等である。柱は確認されかった。出土遺物は皆無である。

Ｆ３号掘立柱建物址（第282図、図版二百九）

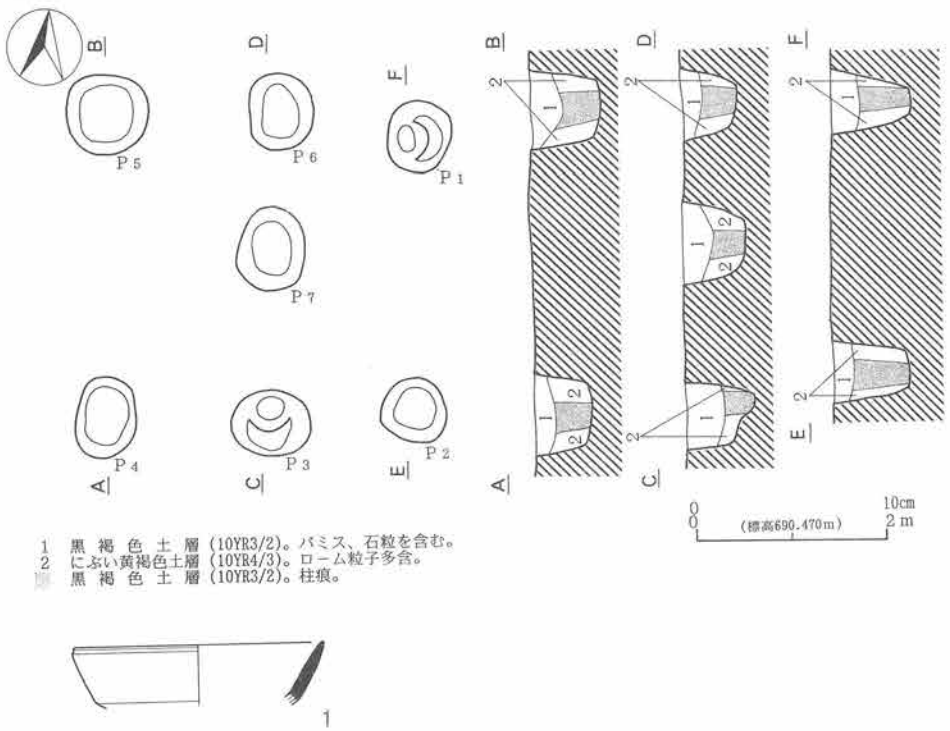
遺構－Ⅲく７グリットで検出された。Ｆ５号掘立柱建物址を切る。南北１間、東西２間の側柱式の掘立柱建物址の中央に１本の柱を有する変則的な掘立柱建物址である。柱は７本である。桁行3.25ｍ×梁間2.95ｍを測り、Ｎ－80°－Ｅに長軸方位をとる。梁間は東に向かって狭くなっている。桁行方向の柱間は西から２ｍ、1.4ｍで安定している。全てのPitで柱が確認され、直径28



cm～36cmの規模であった。

遺物－須恵器の坏片が1点出土している。口縁部の破片であり、口径13.2cmを測る。口縁端部外面には、浅い凹線が1本巡る。推測ではあるが有台坏であろうと思われる。

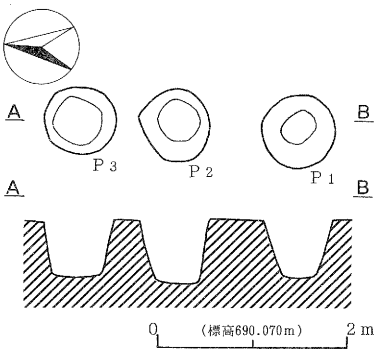
第281図　F２号掘立柱建物址



第282図　F３号掘立柱建物址

F４号掘立柱建物址（第283図）

遺構－Ⅲお２グリットで検出された。H21号住居址を切る。２間１列の３基のPitが検出され

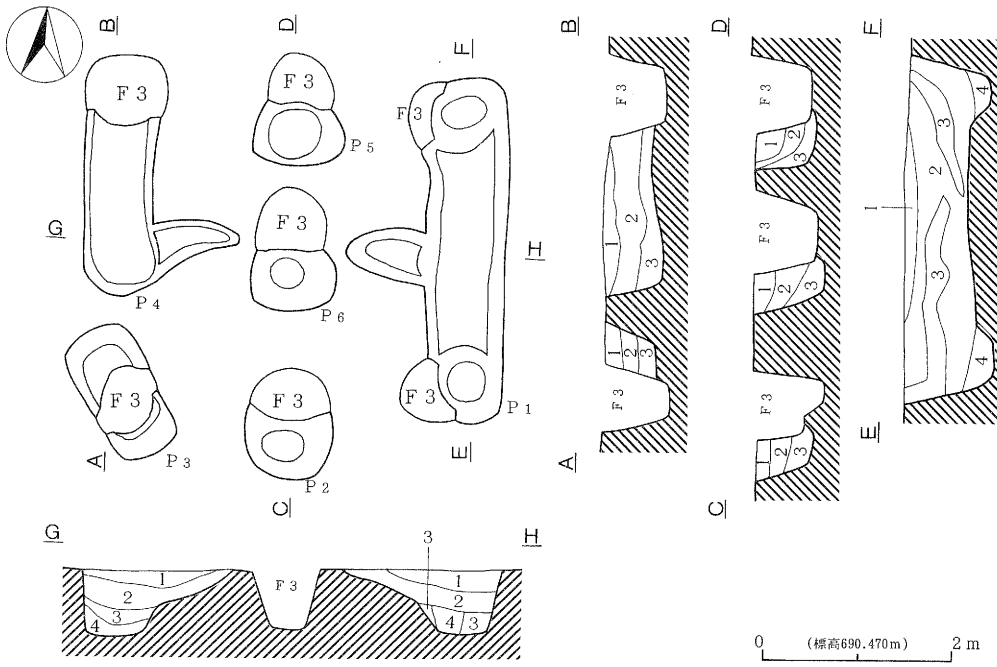


第283図　Ｆ４号掘立柱建物址

ている。Pitの掘方規模は長径76～80cm、短径70～78cm、深度60～70cmとほぼ均等である。柱は確認されなかった。出土遺物は皆無である。

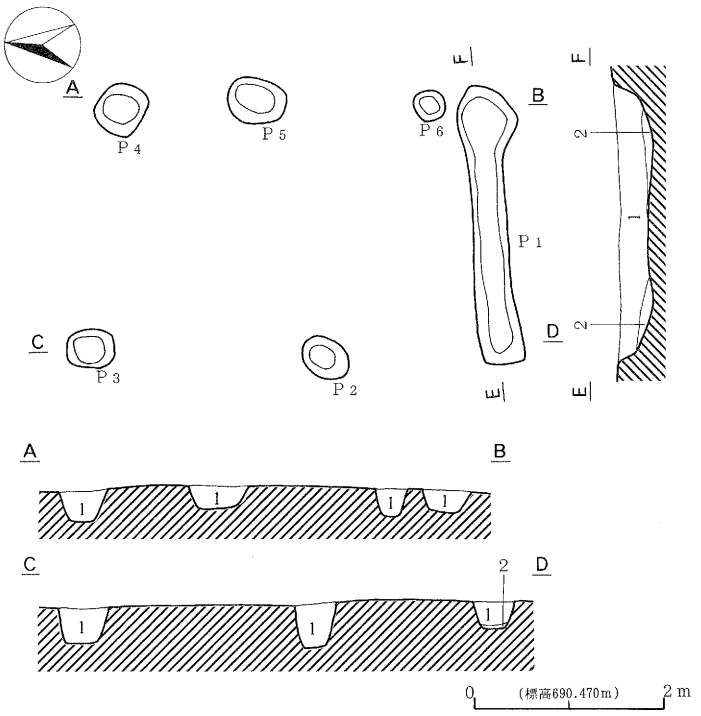
Ｆ５号掘立柱建物址（第284図、図版八十一）

遺構－Ⅲく７グリットで検出された。Ｆ３号掘立柱建物址に切られる。南北２間、東西２間の９本の柱で構成される総柱の掘立柱建物址である。部分的に溝掘のPitで構成されており、Ｆ３号掘立柱建物址と完全に重複する事から、本址はＦ３号掘立柱建物址の建て替え前の掘立柱建物址の可能性が強い。柱が確認されなかった事と、Pitの一部が溝掘りされるため柱間は判然としない。東西3.68ｍ×南北2.75ｍ、面積10.12㎡の長方形の平面プランを呈し、Ｎ－95°－Wに長軸方位をとる。出土遺物は皆無であった。



1　黒褐色土層（10YR3/2）。パミス、石粒、ローム粒子を含む。
2　黄褐色土層（10YR5/6）。パミス、石粒含む、ローム粒子多含。
3　黒褐色土層（10YR2/2）。ローム粒子少含。
4　黒色土層（10YR2/1）。石粒、ローム粒子少含。

第284図　Ｆ５号掘立柱建物址



第285図　Ｆ６号掘立柱建物址

Ｆ６号掘立柱建物址（第285図、図版八十一）

遺構－Ⅲく８グリットで検出された。H42号住居址を切る。南北4.15ｍ×東西2.55ｍの長方形の平面プランを呈し、10.58㎡の面積を有する。Ｎ－５°－Ｗに長軸方位をとる。梁間は１間で安定しているが、桁行は東が３間、西が２間の変則的な構成である。また、南の梁間だけが、溝掘されている。柱は確認されず、遺物も出土しなかった。

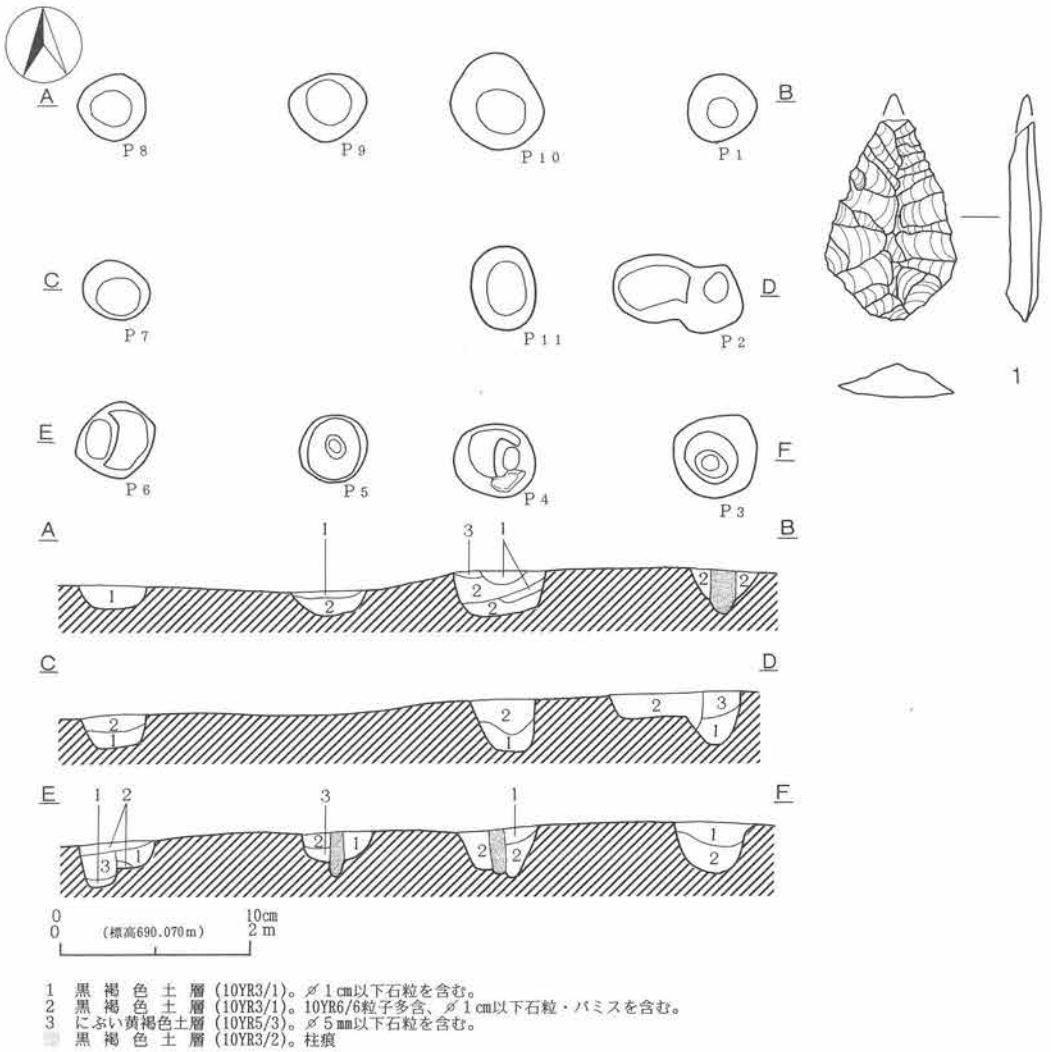
Ｆ７号掘立柱建物址（第286図、図版八十二・二百九）

遺構－Ⅲえ６グリットで検出された。H60号・H61号住居址を切る。南北２間、東西３間で11基の柱で構成される。桁行6.55ｍ×梁間3.7ｍ、面積24.23㎡の規模を有し、Ｎ－90°－Ｅに長軸方位をとる。西から２列目の梁間だけが１間の構成をとり、Ｐ１・Ｐ４・Ｐ５で検出された柱は、直径15～27cmの規模であった。柱間は桁行方向が西から2.5ｍ、1.8ｍ、2.1ｍ、梁間が1.8ｍで安定している。Pitの掘方は長径が1.4ｍ～0.73ｍ、短径が0.96ｍ～0.6ｍ、深度は0.55ｍ～0.25ｍの規模である。

遺物－黒曜石製の石鏃が１点出土している。

挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
－1	打製石鏃	2.6 1.7 0.4		1.7ｇ

第239表　Ｆ７号掘立柱建物址



第286図　F７号掘立柱建物址

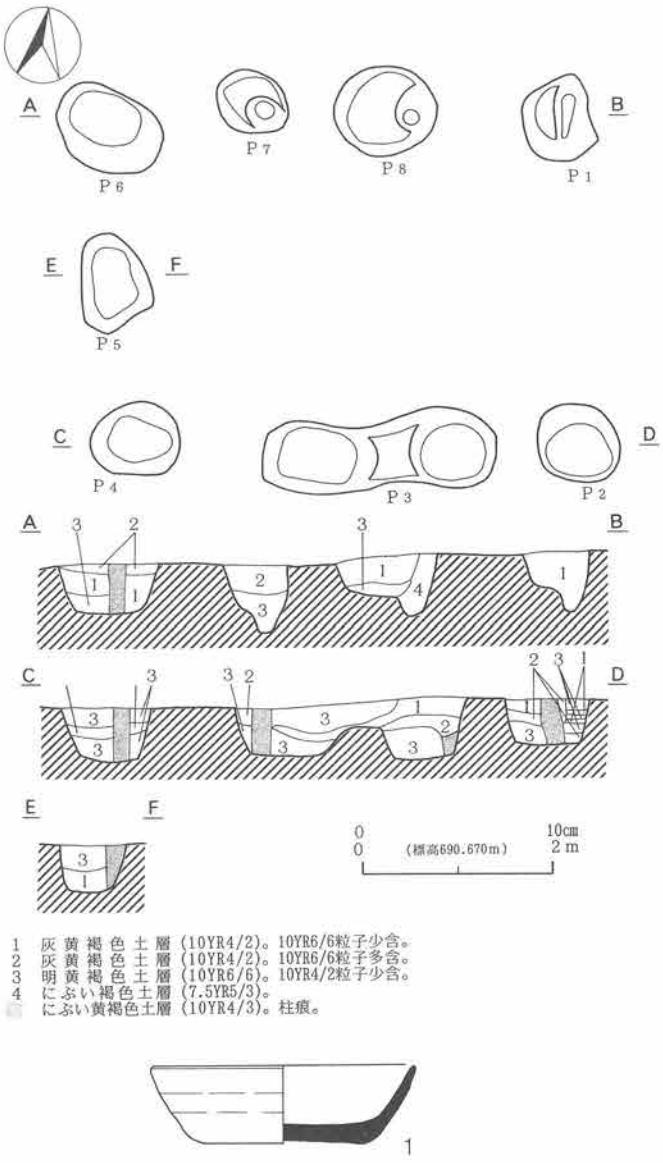
F８号掘立柱建物址（第287図、図版八十二・二百九）

遺構－Ⅲい７グリットで検出された。H54号・H60号住居址を切る。南北3.5ｍ×東西4.92ｍの長方形の平面プランを呈し、17.22㎡の面積を有す。N－70°－Eに長軸方位をとる。桁行３間、梁間２及び１間で、９本の柱により構成される。柱間は梁間が1.7ｍ、桁行が西から1.5ｍ、2.0ｍ、1.2ｍと一定しない。Pitの掘方はＰ３が溝掘りされる他は単独である。５本確認された柱は直径15～21cmの規模であった。

遺物－底部回転篦削りの坏が１点出土している。

挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
－1	須恵器 坏	14.0 8.4 4.1	底部回転篦削り。	

第240表　Ｆ８号掘立柱建物址



第287図　Ｆ８号掘立柱建物址

Ｆ９号掘立柱建物址

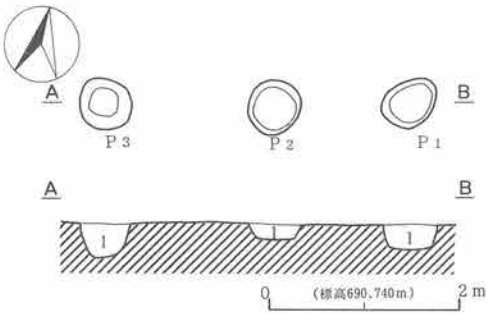
（第288図）

遺構－Ⅴお６グリットで検出された。２間１列の３基のPitが検出されている。Ｍ６号溝址により他の部分は消滅したものと考えられる。柱間は1.6ｍで、Pitの掘方は長径56～60cm、短径45～55cm、深度16～35cmの規模である。遺物の出土は皆無であった。

Ｆ10号掘立柱建物址

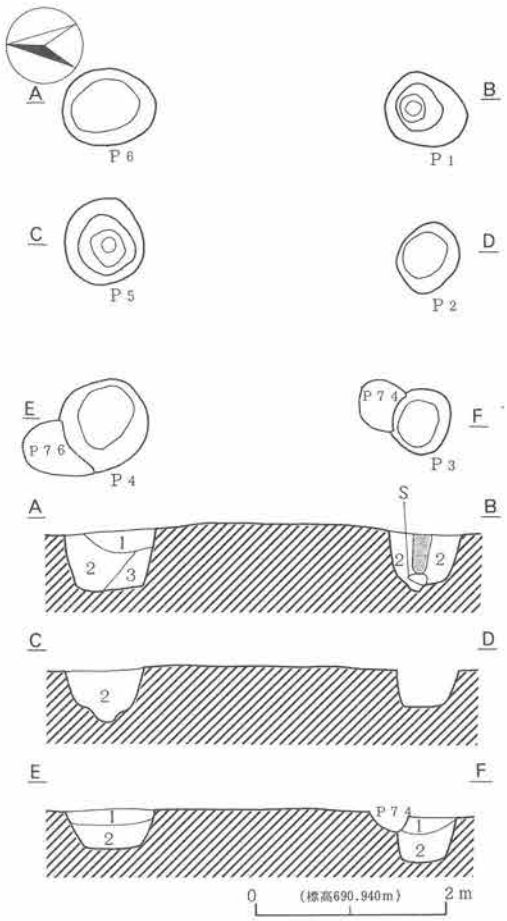
（第289図、図版八十三）

遺構－Ⅴか４グリットで検出された。Ｍ７号溝址を切る。南北長3.45ｍ×東西長3.4ｍの方形プランを呈し、11.73㎡の平面積を有する。Ｎ－10°－Ｗに長軸方位をとる。桁行２間、梁間１間の６本の柱により構成される側柱式の掘立柱建物址である。柱間は桁行が東から1.5ｍ、1.8ｍ、梁間が3.3ｍである。Pit掘方は長径が70～100cm、短径が65～95cm、深度37～62cmの規模である。柱はＰ１で確認され、直径18cmであった。遺物は出土していない。



1　黒褐色土層（10YR3/2)。∅5㎜以下パミス、石粒少含。

第288図　F 9 号掘立柱建物址



1　にぶい黄橙色土層（10YR6/4)。∅5㎜大パミス、石粒を含む。
2　にぶい黄褐色土層（10YR4/3)。10YR8/4ロームブロック・粒子を含む。
3　にぶい黄橙色土層（10YR7/4)。10YR8/4ローム粒子多含。

第289図　F10号掘立柱建物址

F11号掘立柱建物址

（第290図、図版八十三）

遺構－Ⅲい4グリットで検出された。H64号・H82号住居址を切り、H47号住居址に切られる。南北長3.75m×東西長3.6m、面積13.5㎡の規模を有する方形の掘立柱建物址で、桁行、梁間共に2間の側柱式である。柱間は桁行1.8m、梁間が東から1.5m、2.0mである。

柱は確認されなかった。Pitの掘方は長径45～65cm、短径52～60cm、深度45～57cmである。

遺物の出土は認められなかった。

F12号掘立柱建物址

（第291図、図版八十四）

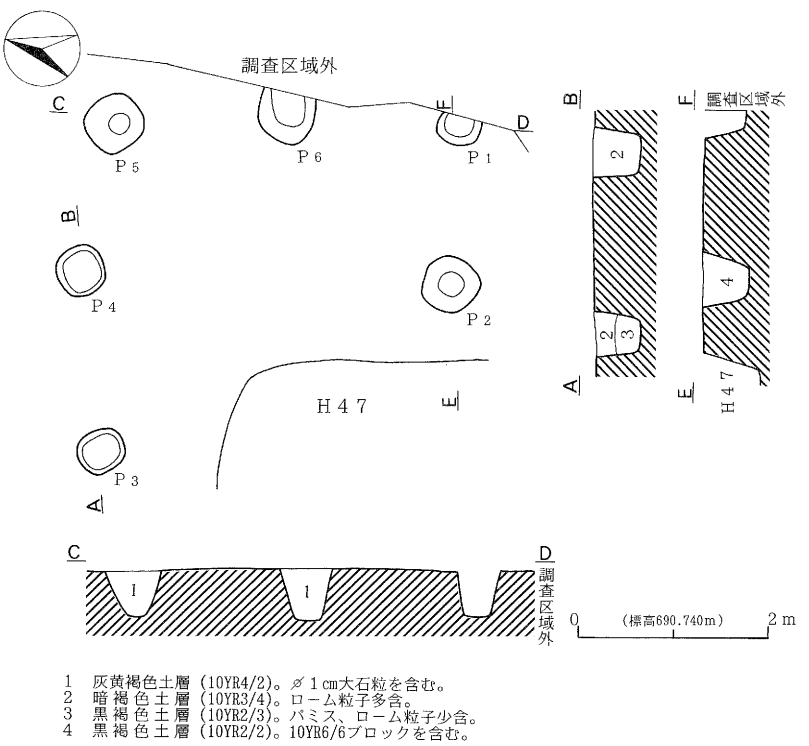
遺構－Vく6グリットで検出された。M5号溝址に切られる。東西長4.16m×南北長3.26mの長方形の平面プランを呈する。N－60°－Wに長軸方位をとる。桁行2間、梁間2間の8本の柱で構成される側柱式の掘立柱建物址と思われるが、M5号溝址により破壊され、7基のPitが残存していた。柱間は桁行が西から2.3m、1.5m、梁間が北から1.8m、1.3mである。Pitの掘方は長径が60～90cm、短径が57～80cm、深度45～60cmである。柱は確認されなかった。出土遺物は皆無である。

F13号掘立柱建物址

（第293図、図版209）

遺構－Ⅸか4グリットで検出された。H179号・H181号住居址を切る。南北長

・東西長共に3.0ｍで9.0㎡の面積を　第289図　F10号掘立柱建物址　有する。南北を主軸とするならば、N－10°－Eにとる。桁行２間、梁間２間の側柱式の掘立柱建物址である。Pitの掘方は長径50～70cm、短径37～52cm、深度25～42である。Ｐ７で唯一確認された柱は直径20cmであった。柱間は桁行・梁間共に1.5ｍで均等である。



1　灰黄褐色土層（10YR4/2）。φ１cm大石粒を含む。
2　暗褐色土層（10YR3/4）。ローム粒子多含。
3　黒褐色土層（10YR2/3）。パミス、ローム粒子少含。
4　黒褐色土層（10YR2/2）。10YR6/6ブロックを含む。

第290図　F11号掘立柱建物址

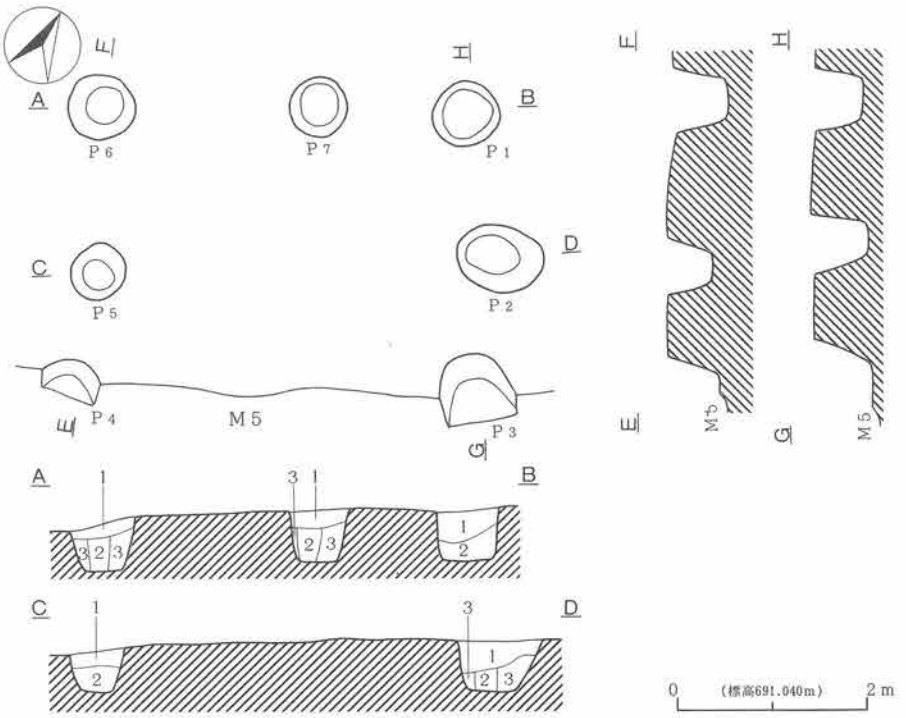
遺物－土師器の甑が出土してる。１は底部を欠損するため推測ではあるが器形から甑と考えて間違いはないものと思われる。内面ナデ、外面篦削り調整が施される。２は小型で単孔のものである。内面ナデ、外面篦削り調整が施される。以上２点共に本址を構成するPit内から出土してはいるものの、本址が住居址との重複関係を有することから、本址に確実に伴う遺物であるとは断言できない。

挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
－1	土師器 甑？	23.4 － －	内－ナデ。 外－篦削り。	
－2	土師器 甑	17.7 6.8 16.0	内－ナデ。 外－篦削り。	

第241表　F13号掘立柱建物址

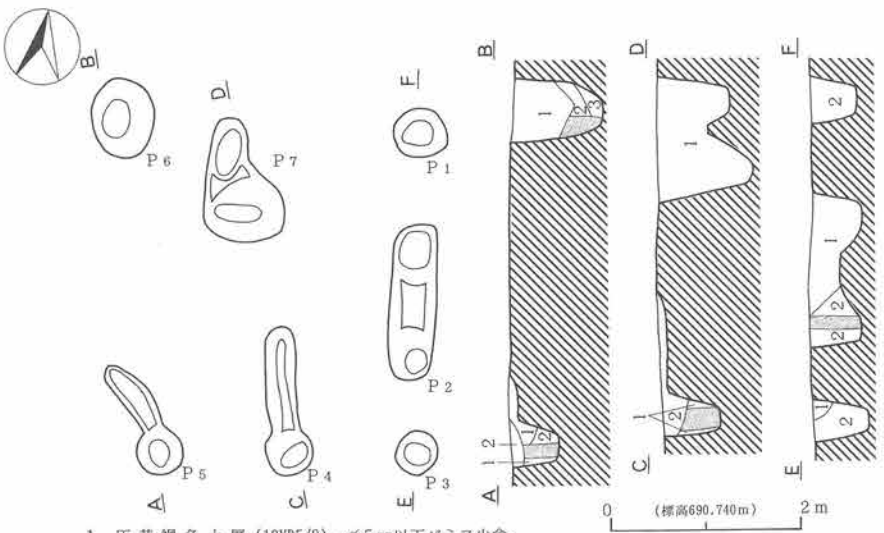
F14号掘立柱建物址（第292図、図版八十四）

遺構－Ⅶき６グリットで検出された。H81号・H84号住居址を切る。南北長3.5ｍ×東西長2.85ｍ、平面積9.97㎡の規模を有する。N－20°－Wに長軸方位をとる。桁行の東辺が４間、西辺が



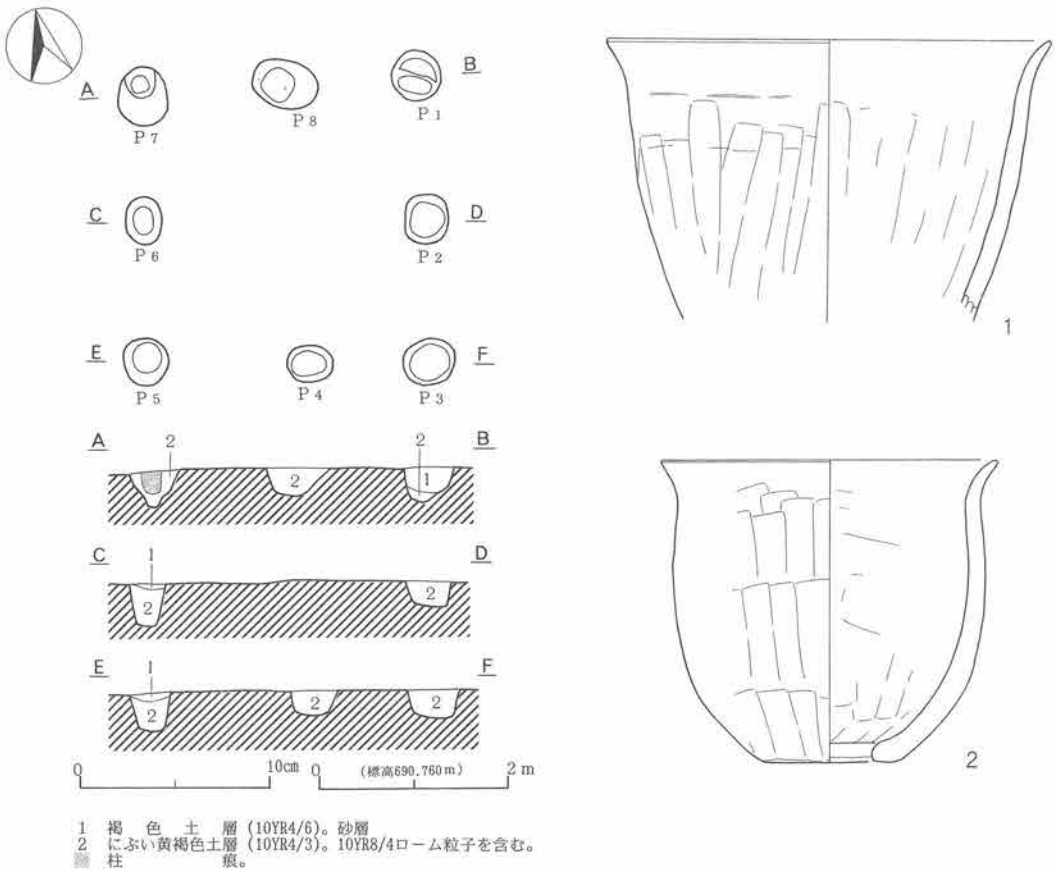
1　黒褐色土層（10YR3/2）。パミス・小石を含む。
2　黒褐色土層（10YR2/3）。パミス少含。
3　褐色土層（10YR4/4）。ローム粒子多含。

第291図　F12号掘立柱建物址



1　灰黄褐色土層（10YR5/2）。径5mm以下パミス少含。
2　にぶい黄褐色土層（10YR4/3）。ローム粒子多含。
3　明黄褐色土層（10YR6/6）。10YR5/2粒子含む。
※　灰黄褐色土層（10YR4/2）。柱痕。

第292図　F14号掘立柱建物址



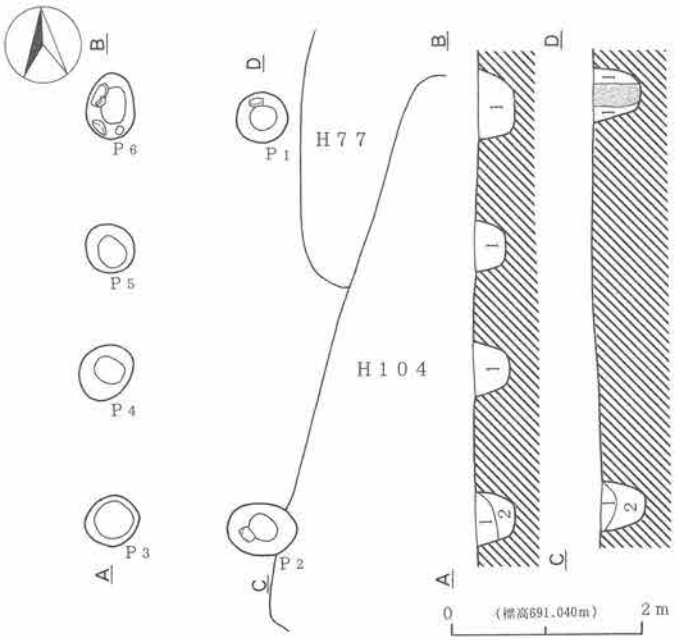
1　褐　色　土　層（10YR4/6）。砂層
2　にぶい黄褐色土層（10YR4/3）。10YR8/4ローム粒子を含む。
▨　柱　　痕。

第293図　Ｆ13号掘立柱建物址

１間、梁間が２間の変則的な側柱の掘立柱建物址である。Ｐ２・Ｐ４・Ｐ５・Ｐ６・Ｐ７は溝掘りされる。４基のPitにおいて検出された柱は直径12～21㎝の規模であった。出土遺物は皆無である。

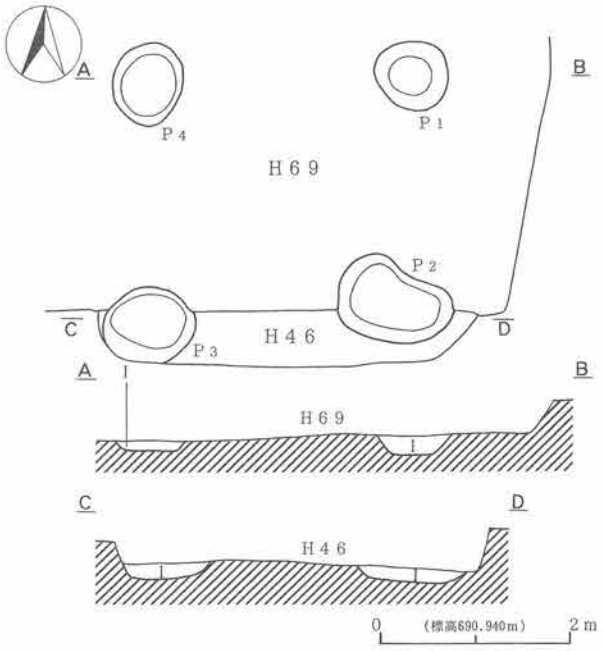
Ｆ15号掘立柱建物址（第294図、図版八十五）

遺構－Ⅶお３グリットで検出された。H77号・H104号住居址に切られる。南北３間、東西２間の側柱式の掘立柱建物址と思われるが、他遺構との重複により半分近くが消滅しているため判然とはしない。前記のような掘立柱建物址を想定すると、南北が桁行であり4.4ｍの長さを測る。長軸方位はＮ－０°－Ｗである。桁行きの柱間1.5ｍ、1.3ｍ、1.5ｍ、梁間の柱間1.5ｍである。Pitの掘方は、長径が52～72㎝、短径が50～54㎝、深度32～50㎝でＰ１において検出された柱は直径24㎝であった。出土遺物は皆無である。



1　黒褐色土層（10YR3/2）。10YR7/6粒子、不定大ロームブロックを含む。
2　灰黄褐色土層（10YR4/2）。
　にぶい黄褐色土層（10YR4/3）。柱痕。

第294図　F15号掘立柱建物址



1　にぶい黄褐色土層（10YR5/3）。砂粒、10YR6/6粒子多含。

第295図　F16号掘立柱建物址

F16号掘立柱建物址

（第295図、図版八十五）

遺構－Vけ6グリットで検出された。H46号・H69号住居址に切られる。東西2.8m×南北2.6m、面積7.28㎡の方形の平面プランを呈す。N－82°－Wに長軸方位をとる。桁行、梁間共に1間で、Pitの掘方は長径80～120cm、短径72～85cm、深度13～20cmの規模である。柱は確認されず、出土遺物も皆無であった。

F17号掘立柱建物址

（第296図、図版八十五）

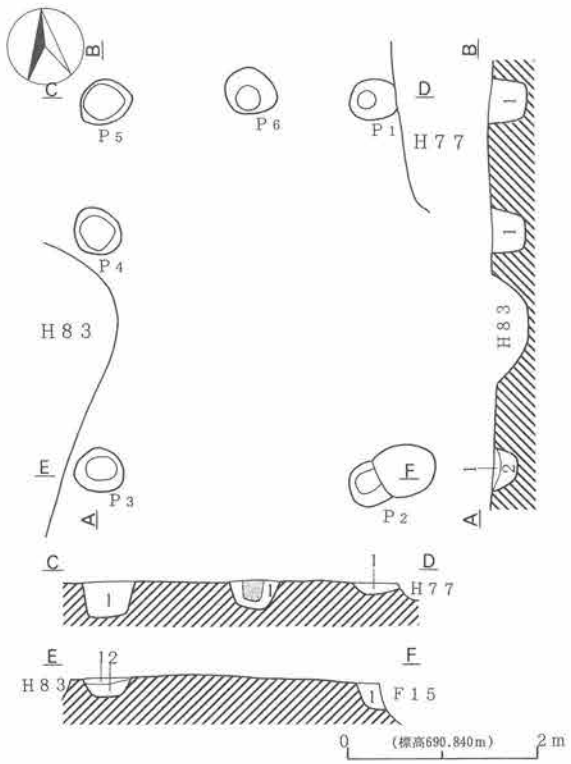
遺構－Ⅶお3グリットで検出された。H77号・H83号住居址、F15号掘立柱建物址に切られる。南北長3.9mで東西長は他遺構との重複により不明である。南北を長軸（桁行）とするならば、N－10°－Eに長軸方位をとる。柱間は1.4～1.5mで安定している。Pitの掘方は長径52～55cm、短径45～48cm、深度20～41cmで、P6で確認された柱は直径21cmであった。

出土遺物は皆無である。

F18号掘立柱建物址

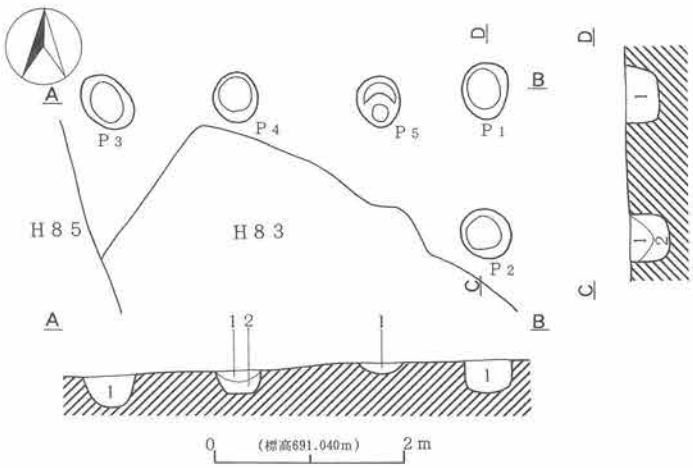
（第297図、図版八十五）

遺構－Ⅶお4グリットで検出された。H83号・H85号に切られる。他遺構と



1　灰黄褐色土層（10YR4/2）。φ5㎜大パミス少含。
2　黒褐色土層（10YR3/2）。φ5㎜大パミス、10YR6/6粒子を含む。
　にぶい黄褐色土層（10YR6/4）。柱痕。

第296図　F17号掘立柱建物址



1　にぶい黄褐色土層（10YR4/3）。10YR6/6粒子、φ5㎜以下パミス、石粒を含む。
2　にぶい黄褐色土層（10YR4/3）。10YR6/6粒子、φ5㎜以下パミス、石粒多含。

第297図　F18号掘立柱建物址

の重複により規模等は不明である。Pit掘方の規模は長径55～67㎝、短径45～50㎝、深度22～41㎝である。柱は確認されなかった。柱間は1.2～1.5ｍと安定しない。出土遺物は皆無である。

F19号掘立柱建物址

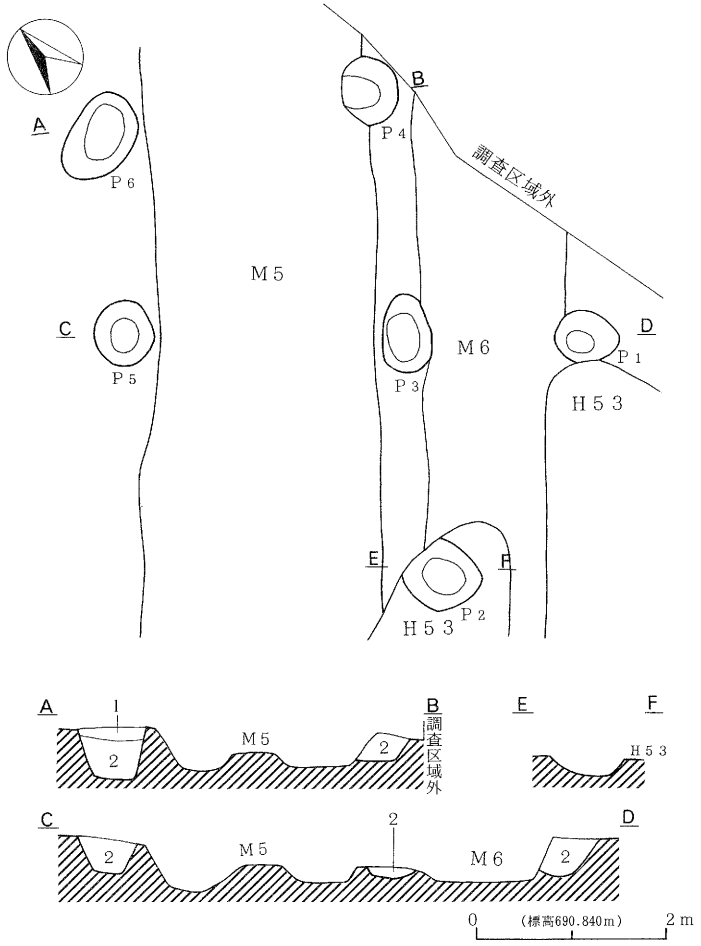
（第298図）

遺構－Ⅴけ4グリットで検出された。H53号住居址、M5号・M6号溝址に切られる。2間×2間の総柱の掘立柱建物址と思われる。南北5.2ｍ、東西4.8ｍの規模を有する。Pit掘方は長径67～100㎝、短径52～75㎝、深度12～57㎝である。柱は確認されず、出土遺物は皆無である。

F20号掘立柱建物址

（第299図）

遺構－Ⅶこ8グリットで検出された。H95号住居址を切り、H93号住居址に切られる。2間1列を構成する3基のPitが検出された。Pit掘方の規模は長径36～53㎝、短径25～36㎝、深度23～30㎝である。柱は確認されなかった。柱間は1.4ｍで均等である。出土遺物は皆無であった。



1　にぶい黄褐色土層（10YR4/3）。10YR6/6ブロック多含。
2　黒褐色土層（10YR2/3）。パミス、石粒少含。ローム ブロックを含む。

第298図　F19号掘立柱建物址

F21号掘立柱建物址

（第301図）

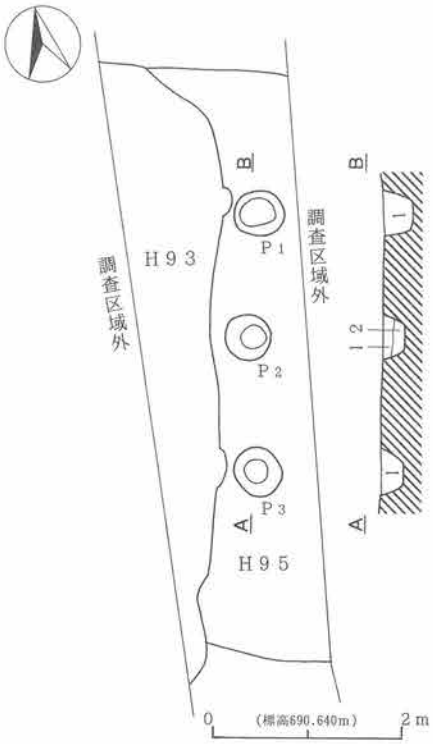
遺構－Vく9グリットで検出された。H97号・H106号住居址に切られる。4基のPitで構成される3間1列の柱列が検出された。柱間は北から2.5m、1.3m、1.7mと安定しない。Pitの掘方は長径47～72cm、短径45～65cm、深度30～50cmの規模である。柱は確認されず、出土遺物もかいむであった。

F22号掘立柱建物址（第300図、図版八十六）

遺構－Vく9グリットで検出された。H62号・H79号・H80号・H100号住居址に切られる。他遺構との重複により全容が　判然としないが、2間×2間の側柱の掘立柱建物址と思われる。南北長、東西長共に3.8mの方形の平面プランである。南北を長軸（桁行）と考えるなら、N－10°－Eに長軸方位をとる。柱間は桁行・梁間共に1.8mである。Pitの掘方は長径50～70cm、短径48～60cm、深度20～60cmの規模である。P6において確認された柱は直径20cmであった。出土遺物は皆無である。

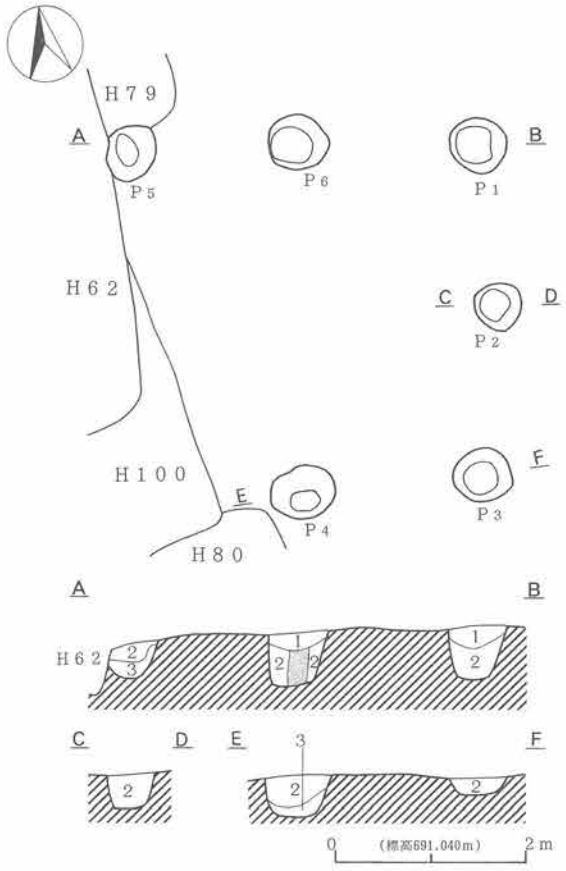
F23号掘立柱建物址（第303図、図版八十六）

遺構－Ⅶけ2グリットで検出された。H72号・H80号住居址に切られる。南北長4.2m、東西長3.3mの長方形の平面プランを有し、N－4°－Eに長軸方位をとる。桁行1間×梁間3間の側柱の掘立柱建物址と思われる。柱間は桁行が4.2m、梁間が東から0.9m、1.1m、1.4であり、



1　暗褐色土層（10YR3/4）。パミス少含。
2　褐色土層（10YR4/4）。10YR6/6粒子を含む。

第299図　F20号掘立柱建物址



1　黒褐色土層（10YR2/3）。10YR6/6粒子を含む。
2　黒褐色土層（10YR2/3）。φ1cm大石粒少含。
3　明黄褐色土層（10YR6/6）。
　にぶい黄褐色土層（10YR4/3）。柱痕。

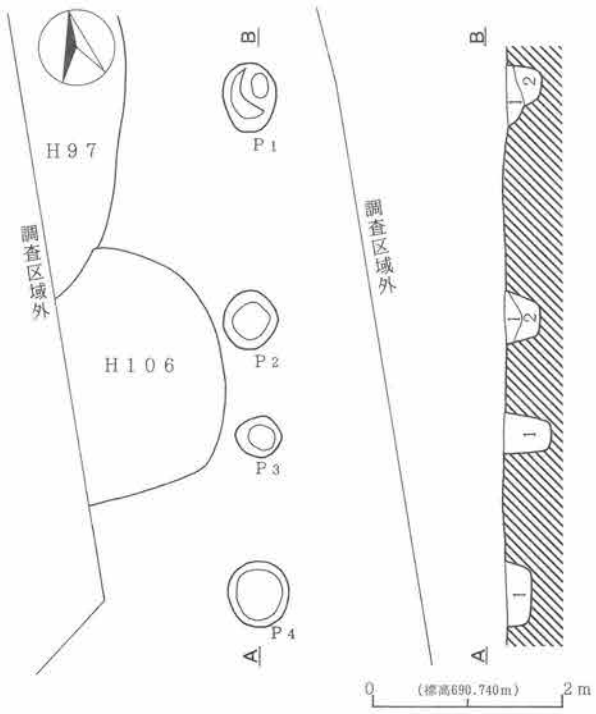
第300図　F22号掘立柱建物址

一定していない。Pitの掘方は長径36～45cm、短径30～42cm、深度15～40cmである。柱は確認されなかった。出土遺物は皆無である。

F24号掘立柱建物址（第302図）

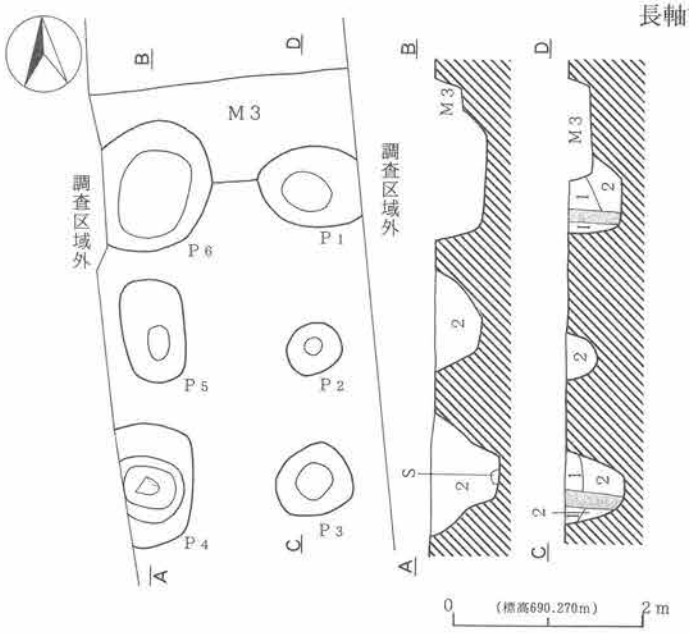
遺構－Ⅲか10グリットで検出された。M3号溝址に切られ、H103号住居址を切る。調査区域外に延びるため、規模・形状等は判然としないが、総柱の構成をとるようである。南北2間、東西1間の2列の柱列が検出され、柱間は南北が1.5m、東西が1.7mである。柱はP1で直径13cm、P3で直径16cmのものが確認された。Pitの掘方は長径が60～136cm、短径が50～85cm、深度が33～70cmである。総じて北端と南端のPitは大きく深く、中央は小型で浅い傾向が看取される。出土遺物は皆無であった。

F25号掘立柱建物址（第304図）



1　暗褐色土層（10YR3/3）。パミス、石粒を含む。
2　褐色土層（10YR4/4）。ローム粒子、石粒を含む。

第301図　F21号掘立柱建物址



1　褐灰色土層（10YR4/1）。砂粒多含。
2　褐灰色土層（10YR4/1）。10YR6/6粒子多含、径5㎜大パミスを含む。
3　黒褐色土層（10YR3/2）。柱痕。

第302図　F24号掘立柱建物址

遺構－Ⅶか8グリットで検出された。調査区域外に延びるため、規模・形状は判然としない。4基のPitで構成される3間1列の南北方向の柱列が検出された。全長3.2mである。柱間は1.0mで均等である。Pitの掘方は長径50～62cm、短径45～52cm、深度40～45cmである。柱は確認されず、出土遺物は皆無であった。

F26号掘立柱建物址

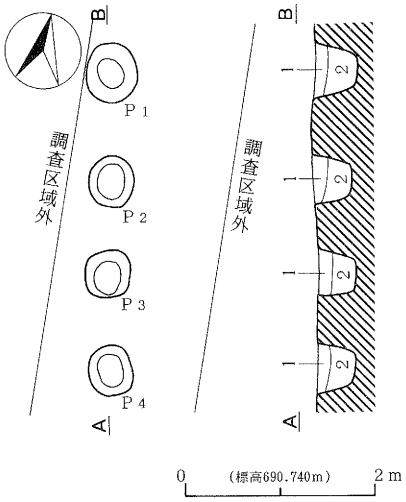
（第305図、図版八十七）

遺構－Ⅶく5グリットで検出された。H96号住居址に切られる。南北1間（梁間）、東西4間（桁行）の長方形の平面プランを呈する側柱の掘立柱建物址で、梁間3.8m、桁行5.3の規模である。長軸方位をN－5°－Wにとる。桁行の柱間は西から1.5m、1m、1m、1.5mであり、一定している。Pit掘方の規模は長径が46～140m、短径が45～70m、深度21～44cmである。柱は確認されず、出土遺物は皆無であった。

F27号掘立柱建物址

（第306図、図版八十七）

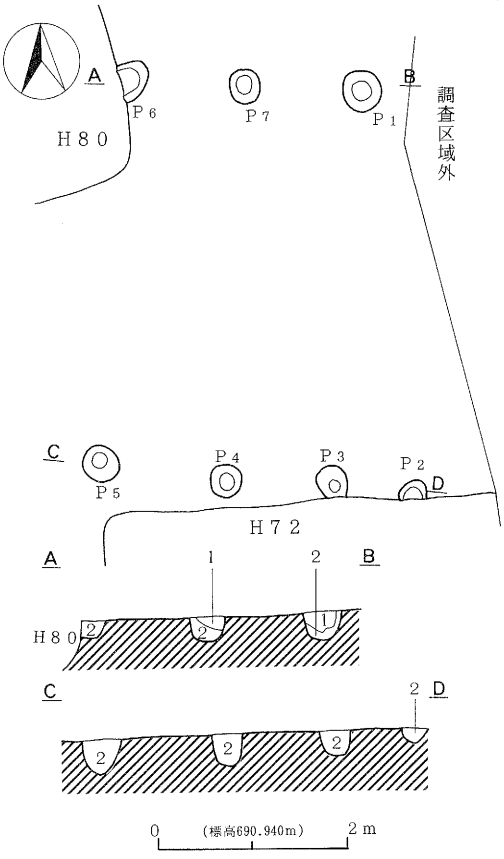
遺構－Ⅶく5グリットで検出された。H89号住居址に切られる。遺構間の重複関係により規模・形状は不明である。南北1間、



1　黒褐色土層（10YR2/3）。パミス少含、ロームブロックを含む。
2　暗褐色土層（10YR3/3）。パミス少含、ロームブロックを含む。

第303図　F23号掘立柱建物址

東西２間を構成する４基のPitが検出された。東西長3.8ｍを測る。柱間は南北1.9ｍ、東西が西から2.1ｍ、1.8ｍである。Pitの掘方は長径が37～50cm、短径32～50cm、深度15～41cmである。柱はＰ３において検出され、直径17cmであった。出土遺物は皆無である。



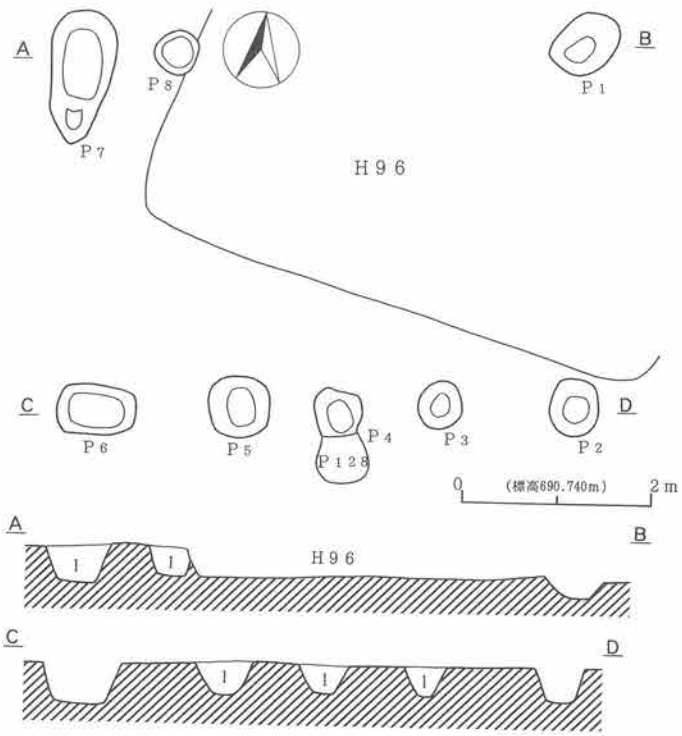
1　灰黄褐色土層（10YR4/2）。10YR6/6粒子含む。
2　黒褐色土層（10YR3/2）。砂粒を含む。

第304図　F25号掘立柱建物址

F28号掘立柱建物址（第307図、図版八十九）

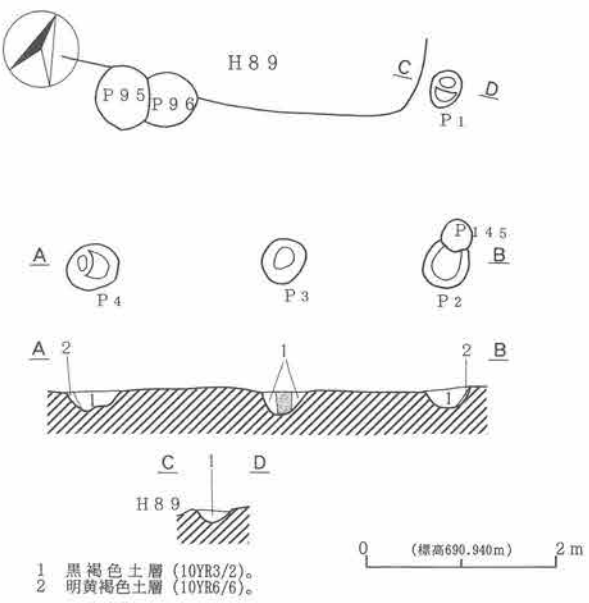
遺構－Ｘう２グリットで検出された。H156号・H160号・H176号住居址、M13号溝址を切る。東西長5.5ｍ、南北長4.3ｍ、面積23.65㎡の規模を有し。Ｎ－90°－ｗに長軸方位をとる。桁行の中央部分のみPit掘方が溝掘される。桁行３間、梁間２間の長方形の平面プランを有する、側柱の掘立柱建物址である。柱間は桁行が西から２ｍ、1.8ｍ、1.5ｍ、梁間が２ｍである。Ｐ１・Ｐ２で確認された柱は直径15cm～16cmであった。Pitの掘方は長径が90～272cm、短径が75～125cm、深度24～55cmであった。出土遺物は皆無であった。

F29号掘立柱建物址（第308図、図版八十八）



1　にぶい黄褐色土層（10YR6/4）。10YR4/2、10YR6/6ブロック（不定大）・粒子を含む。

第305図　F26号掘立柱建物址



1　黒褐色土層（10YR3/2）。
2　明黄褐色土層（10YR6/6）。

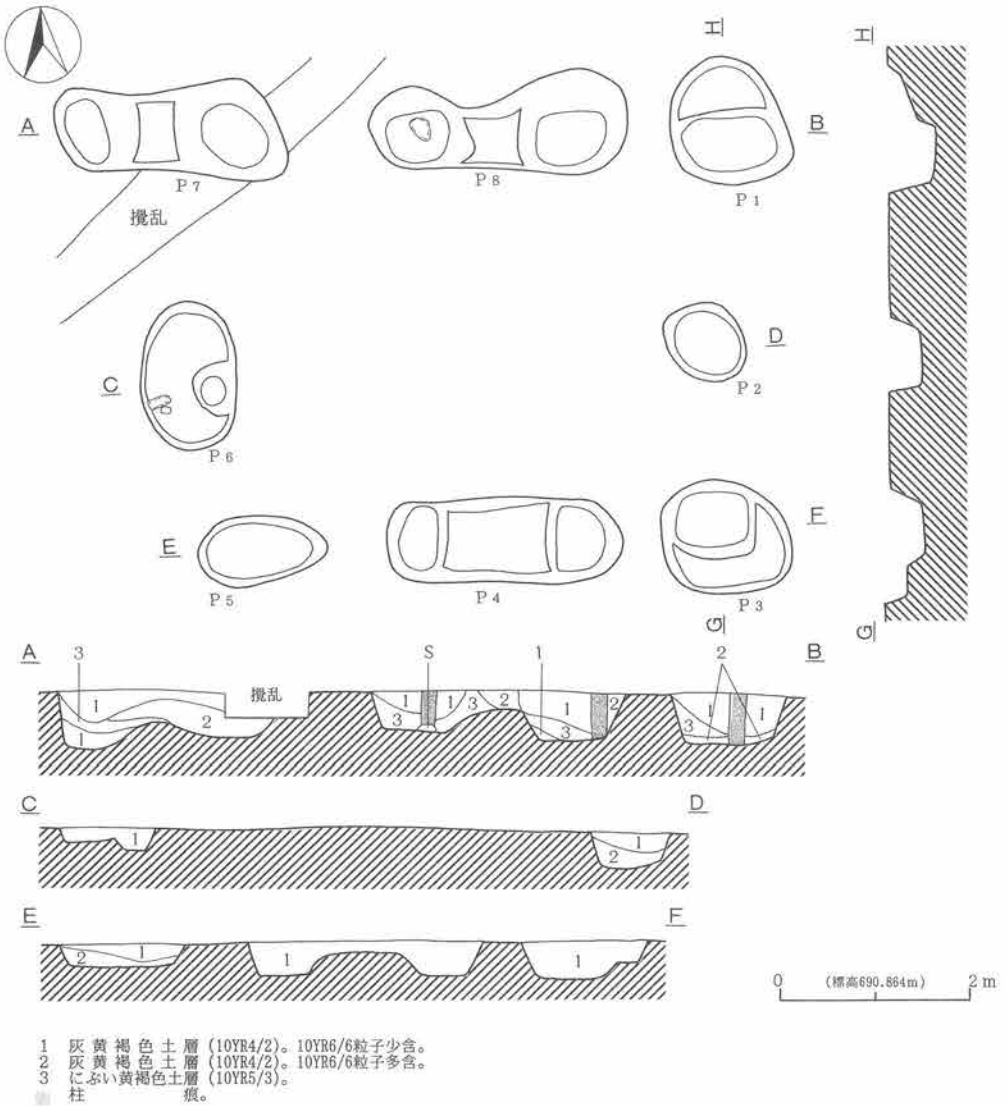
第306図　F27号掘立柱建物址

遺構－ⅩⅡお1グリットで検出された。H101号・H124号・H145号住居址を切る。南北長4.65m、東西長4.35m、面積20.22㎡の方形の平面プランを呈する。N－42°－Wに長軸方位をとる。桁行3間、梁間3間の側柱の掘立柱建物址である。P1において確認された柱は直径20であった。柱間は桁行の西列が1.5mで均等なのに対し、東列は南から1.8m、1.2m、1.5mと一定ではない。梁間は1.2m～2.0の間で南北列共に一定しない。Pitの掘方は長径44～73cm、短径が35～65cm、深度20～45cmである。出土遺物は皆無であった。

F30号掘立柱建物址

（第309図）

遺構－ⅩⅡく4グリットで検出された。H131号・H150号住居址を切る。攪乱に切られるため全容は不明である。5基のPitによる南北2間3.5mの東列と東西1間の北・南列が確認された。P4において確認された柱は直径15cmであった。柱間は南北が1.8m、東西が2.0mであった。Pit掘方は長径63～102cm、短径57～

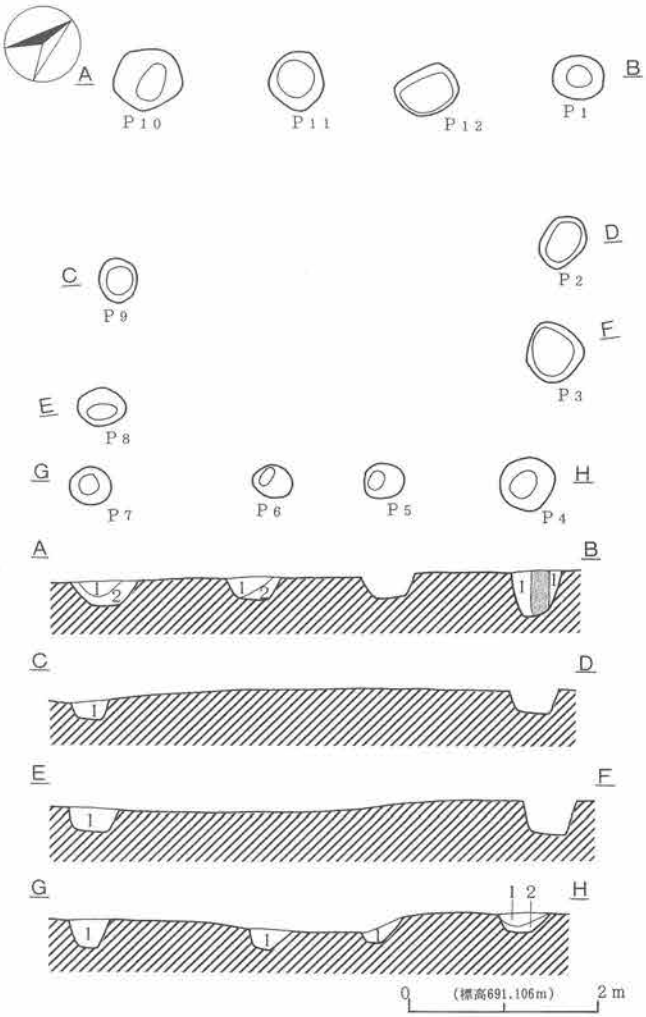


第307図　F28号掘立柱建物址

65cm、深度18～40cmであった。出土遺物は皆無である。

F31号掘立柱建物址（第310図、図版八十九）

遺構－XⅢく3グリットで検出された。H150号住居址を切り、F35号掘立柱建物址に切られる。南北長、東西長共に1.8mの1間×1間の掘立柱建物址である。P1において確認された柱は直径14cmであった。Pit掘方は長径52～55cm、短径45～50cm、深度17～27cmであった。出土遺



第308図　F29号掘立柱建物址

物は皆無である。

F32号掘立柱建物址

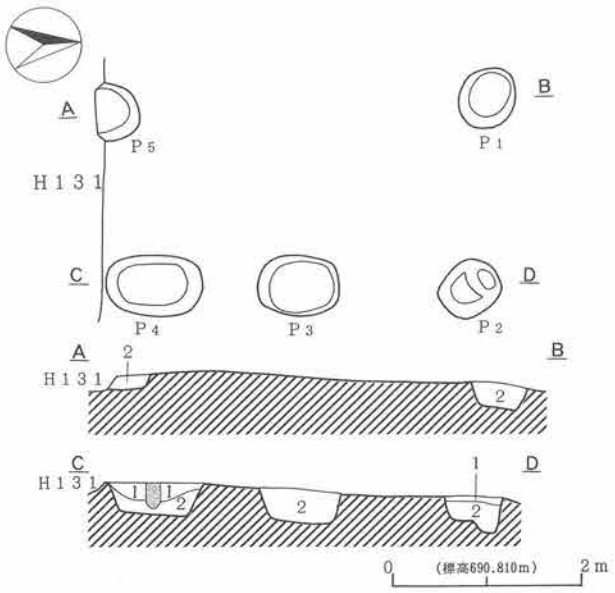
（第311図、図版二百九）

遺構－XⅢく1グリットで検出された。H192を切る。東西長8.25m、南北長4.0m、面積33.0㎡の長方形の平面プランを呈し、N－70°－Wに長軸方位をとる。桁行2間、梁間1～2間の変則的な構成の側柱の掘立柱建物址である。柱間は桁行きの北列が4.2m、南列が西から2.2m・5.6m、梁間の東列が2.1mである。P2で確認された柱は直径20cmであった。Pitの掘方は長径75～160cm、短径75～110cm、深度35～68cmであった。

遺物－土師器、須恵器が出土している。土師器には坏（1）・甕（3）が認められ、坏は内面に螺旋及び放射暗文が施される。混入遺物と思われる。甕は「武蔵甕」で「コ」字状の口縁部を呈する。須恵器は坏（2）が出土している。底部に右回転の糸切り痕が認められる。

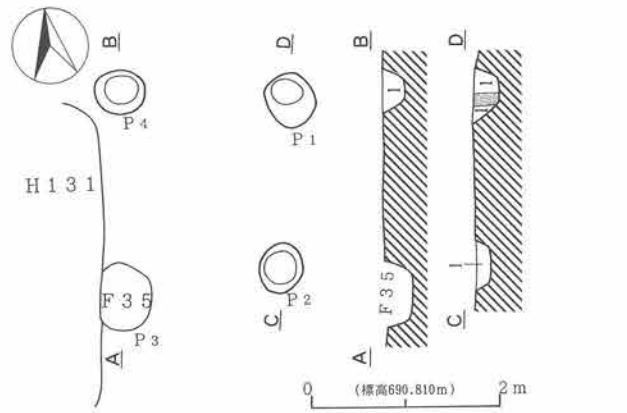
F33号掘立柱建物址（第312図、図版九十・二百九）

遺構－Xか4グリットで検出された。H138号・H179号・H181号・H187号住居址を切る。南北長4.95m、東西長3.4m、面積16.85㎡の長方形の平面プランを呈す。N－11°－Eに長軸方位をとる。桁行3間、梁間2間の側柱の掘立柱建物址である。柱間は桁行が南から1.4m、2.2m、



1　にぶい黄褐色土層（10YR4/3）。径1cm以下石粒を含む。
2　にぶい黄褐色土層（10YR4/3）。10YR6/6粒子多含、径1cm以下石粒を含む。
　灰黄褐色土層（10YR4/2）。柱痕。

第309図　F30号掘立柱建物址



1　黒褐色土層（10YR3/2）。径5mm以下パミス、石粒、10YR6/6粒子少含。
　にぶい黄褐色土層（10YR4/3）。柱痕。

第310図　F31号掘立柱建物址

1.4m、梁間が1.7mである。P4～P7において確認された柱は直径13～20cmであった。Pitの掘方は部分的に溝掘りされ、長径82～222cm、短径55～115cm、深度40～70cmであった。

遺物－土師器の坏が1点出土している。内外面に篦磨き調整が施される。本址に伴うものか否かは不明である。

F34号掘立柱建物址

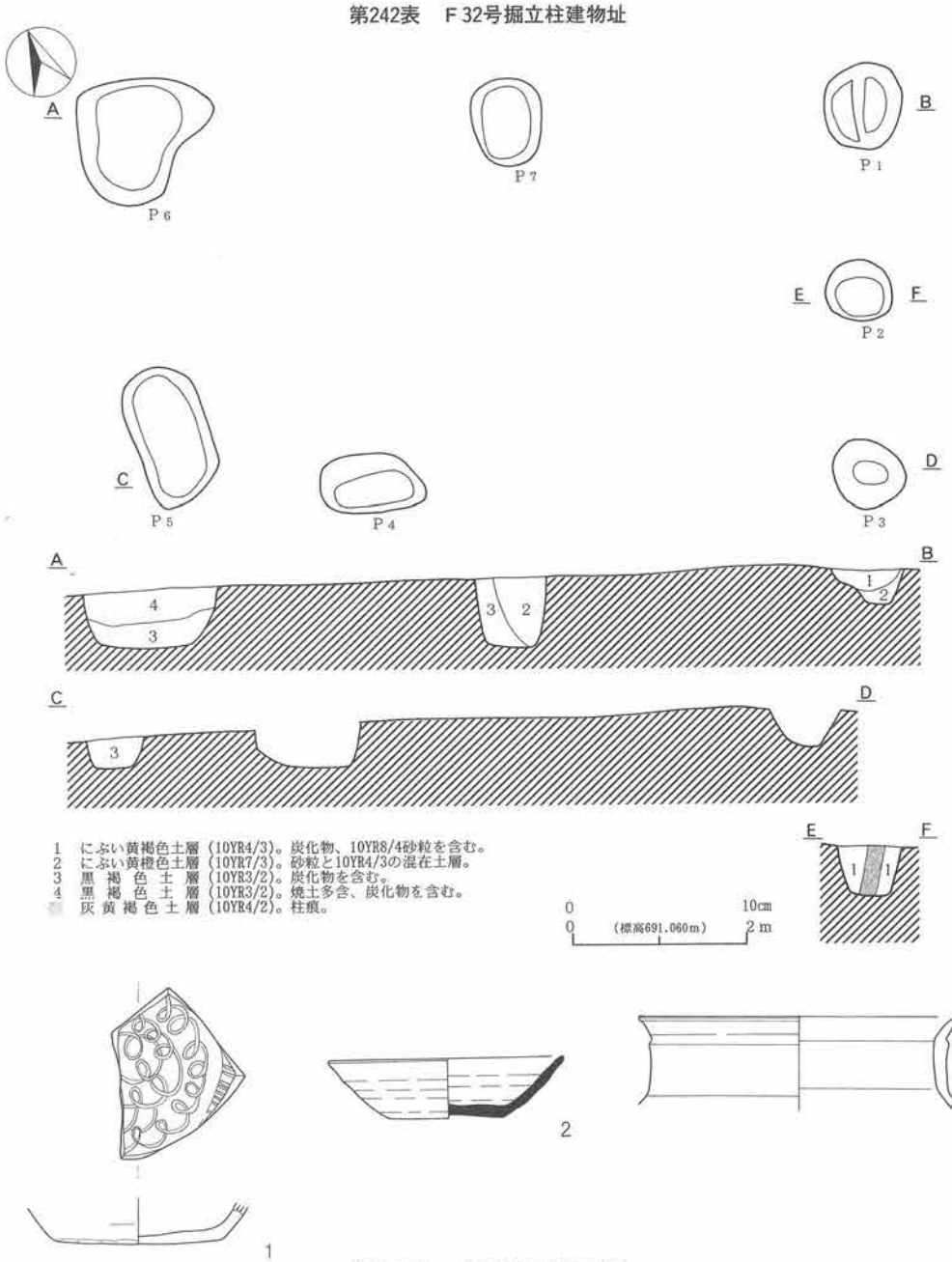
（第313図、図版九十・二百九）

遺構－Xえ4グリットで検出された。H165号・H166号住居址を切る。南北長4.0m、東西長2.4m、面積9.6㎡の長方形の平面プランを呈する。N－5°－Eに長軸方位をとる。桁行2間、梁間1間の側柱の掘立柱建物址である。柱間は桁行が南から1.5m、2.2m、梁間が2.4mである。柱は確認されず、Pitの掘方は長径75～140cm、短径55～70cm、深度15～72cmであった。

遺物－弥生土器の台付甕（1）、壺（2）が出土している。台付甕は台部分の破片で内面刷毛目、外面篦削り調整が施される。壺も底部片で、内面刷毛目、外面篦削り調整が施される。混入遺物である。

挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
−1	土師器 坏	− 9.6 −	内−螺旋・放射暗文。 外−篦削り。	混入遺物。
−2	須恵器 坏	13.5 6.2 3.5	底部右回転糸切り。	
−3	土師器 甕	18.4 − −		武蔵甕。

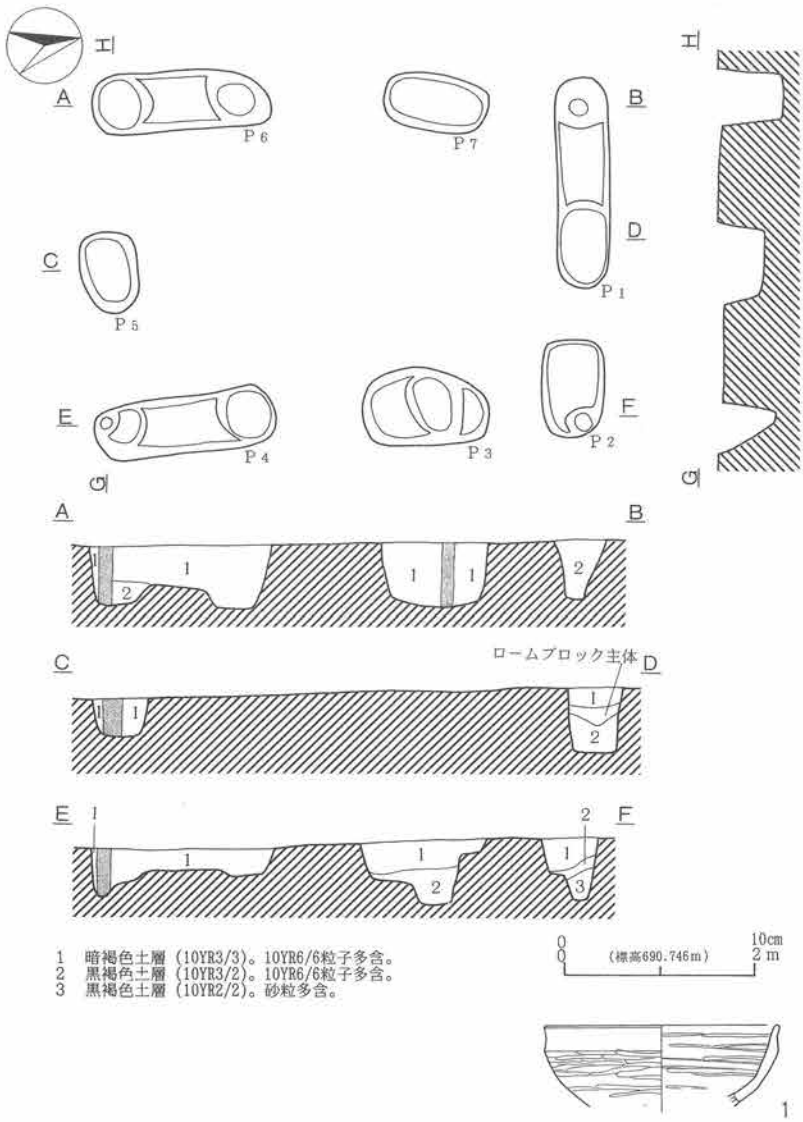
第242表　F32号掘立柱建物址



第311図　F32号掘立柱建物址

挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
－1	土師器 坏	12.4 － －	内外－篦磨き。	

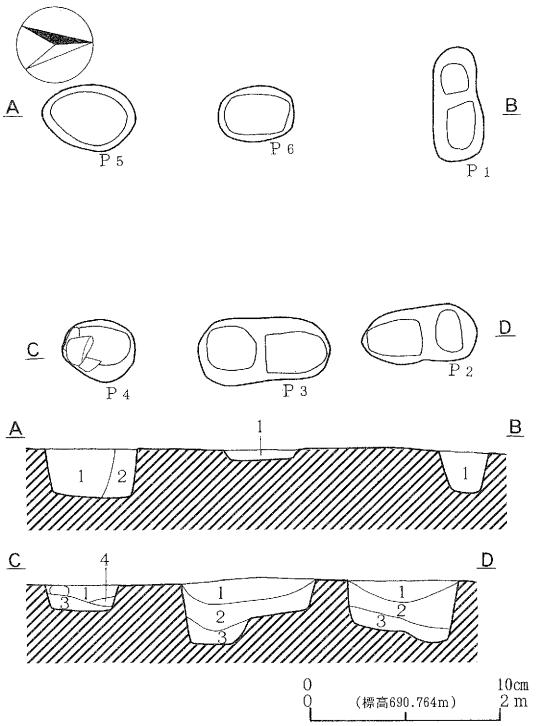
第243表　F33号掘立柱建物址



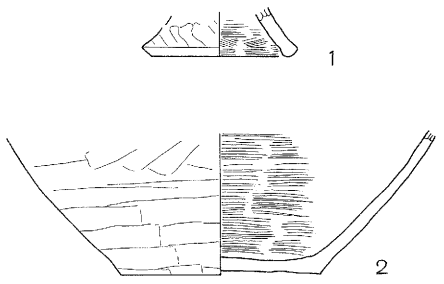
第312図　F33号掘立柱建物址

挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
－1	弥生土器 台付甕	－ 8.3 －	内－刷毛目。 外－篦削り。	混入遺物。
－2	弥生土器 壺	－ 10.5 －	内－刷毛目。 外－篦削り。	混入遺物。

第244表　Ｆ34号掘立柱建物址



1　にぶい黄褐色土層（10YR5/3）。10YR6/6粒子多含。
2　灰黄褐色土層（10YR4/2）。砂粒少含。
3　にぶい黄褐色土層（10YR5/3）。地山砂層の２次堆積。
4　黄褐色土層（10YR5/6）。10YR6/6粒子多含。



第313図　Ｆ34号掘立柱建物址

Ｆ35号掘立柱建物址

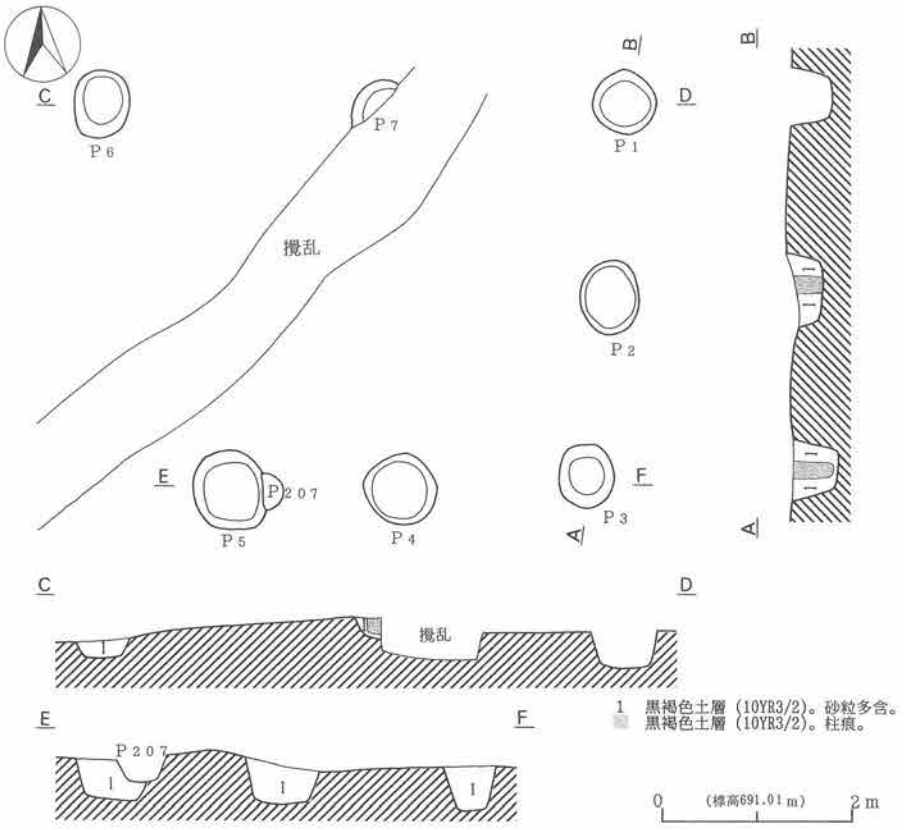
（第314図、図版九十一）

遺構－ⅩⅡき２グリットで検出された。H131号・H150号・H147号・H148号住居址を切り、攪乱に切られる。南北長3.95ｍ、東西長5.3ｍの長方形プランを呈し、Ｎ－85°－Ｗに長軸方位をとる。桁行２～３間、梁間１～２間の変則的な構成の側柱式の掘立柱建物址である。柱間は桁行の北列が西から３ｍ、2.5ｍ、南列が２ｍ、梁間が２ｍである。Ｐ２・Ｐ３・Ｐ７で確認された柱は直径15～17cmであった。Pitの掘方は長径67～90cm、短径が57～80cm、深度20から50cmであった。出土遺物は皆無であった。

Ｆ36号掘立柱建物址

（第315図、図版九十一・二百九）

遺構－Ⅹえ42グリットで検出された。H160号・H165号・H166号住居址を切り、Ｆ34号掘立柱建物址に切られる。東西長6.0ｍ、南北長5.0ｍの長方形の平面プランを呈する。Ｎ－90°－Ｗに長軸方位をとる。桁行３間、梁間２間の側柱の掘立柱建物址である。柱間は桁行の北列が西から1.5ｍ・2.0ｍ・



第314図　F35号掘立柱建物址

1.2m、南列が2m、梁間が2.5mである。柱はP4を除く6基で確認され、直径15～22cmであった。Pit掘方は一部分が溝掘りされ、長径80～330cm、短径60～100cm、深度50～90cmである。

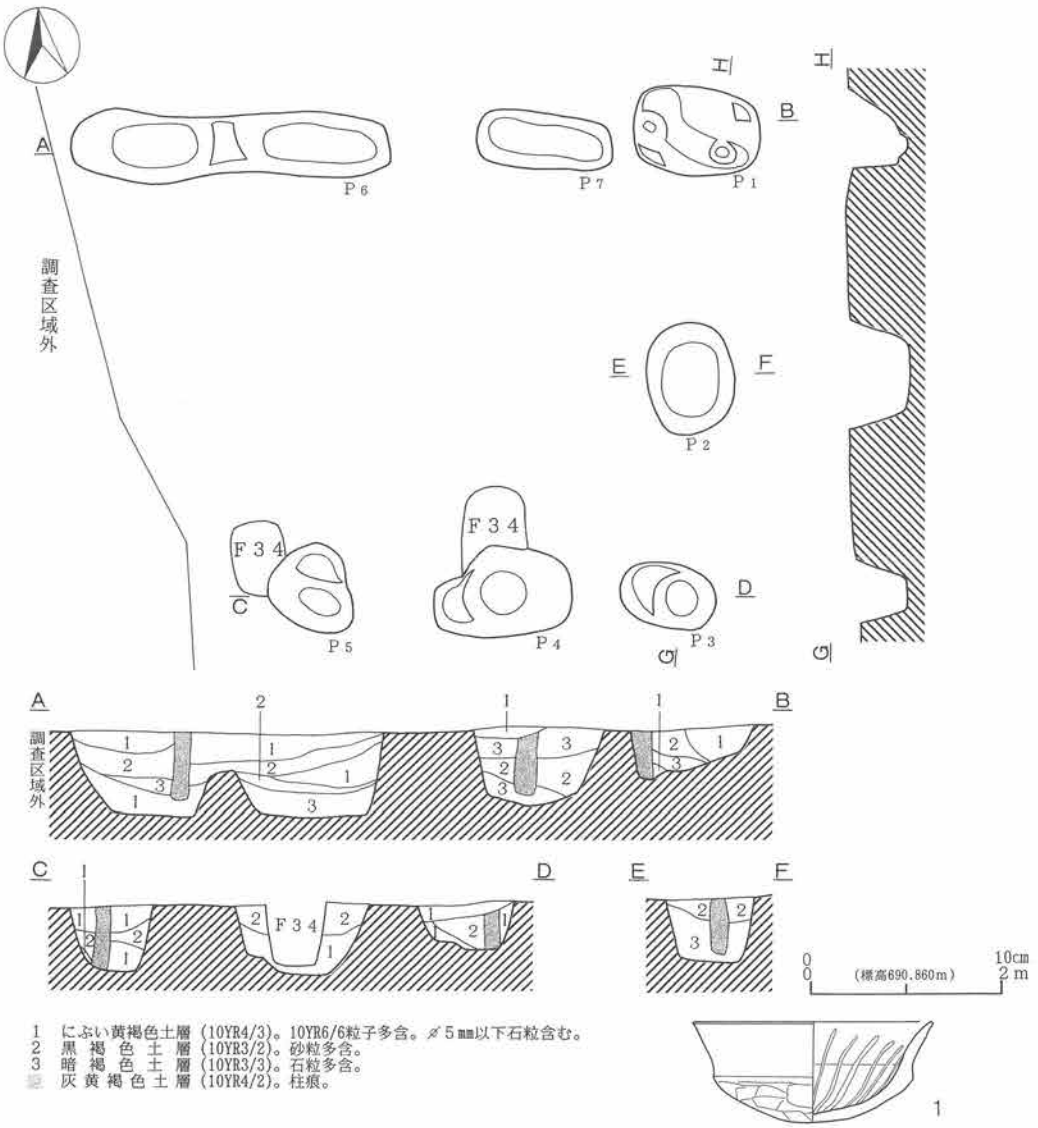
遺物－土師器の坏が1点出土している。内面放射暗文、外面篦削り調整が施される。

挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
－1	土師器 坏	12.6 － 5.3	内－放射暗文。 外－篦磨き。	

第245表　F36号掘立柱建物址出土遺物観察表

F37号掘立柱建物址（第316図、図版九十二）

遺構－XIあ10グリットで検出された。H153号住居址を切る。東西長、南北長共に2.5mの方形の平面プランを呈し、6.12㎡の平面積を有する。南北を主軸とするならば、N－5°－Eに主軸方位をとる。P3を除き確認されたPitは3本全てが直径20cmであった。Pit掘方は長径56～80

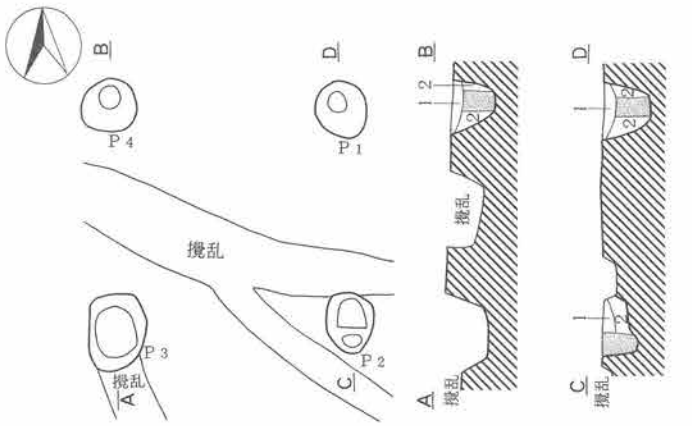


第315図　F36号掘立柱建物址

cm、短径50～60cm、深度38～50cmであった。出土遺物は皆無である。

F38号掘立柱建物址（第317図、図版九十二・二百九）

遺構－XⅡこ2グリットで検出された。H144号・H185号住居址を切る。東西長7.1m、南北長5.1m、面積36.21㎡の長方形の平面プランを呈し、N－90°－Wに長軸方位をとる。桁行4間、梁間3間の側柱の掘立柱建物址である。柱間は桁行の北列が1.7m、南列が西から2.0m・1.4m



第316図　F37号掘立柱建物址

・1.7m、1.7m、梁間が1.7mである。4本が確認された柱の直径は15～21cmであった。Pitの掘方は部分的に溝掘りされ、長径80～670cm、短径60～105cm、深度50～95cmであった。

遺物－土師器の坏（1）、甕（2）、凹石（3）が出土している。坏は「有　段口縁坏」で、内面篦磨き、外面篦削り調整が施　される。甕は口縁部に最大径を有する長胴のもので、内面ナデ、外面篦削り調整が施される。凹石は片面に2ケの凹がつけられている。

挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
－1	土師器 坏	12.0 － －	内－篦磨き。 外－篦削り。	有段口縁坏。
－2	土師器 小型甕	14.4 － －	内－ナデ。 外－篦削り。	
－3	凹石	6.1 3.2 2.1		390g

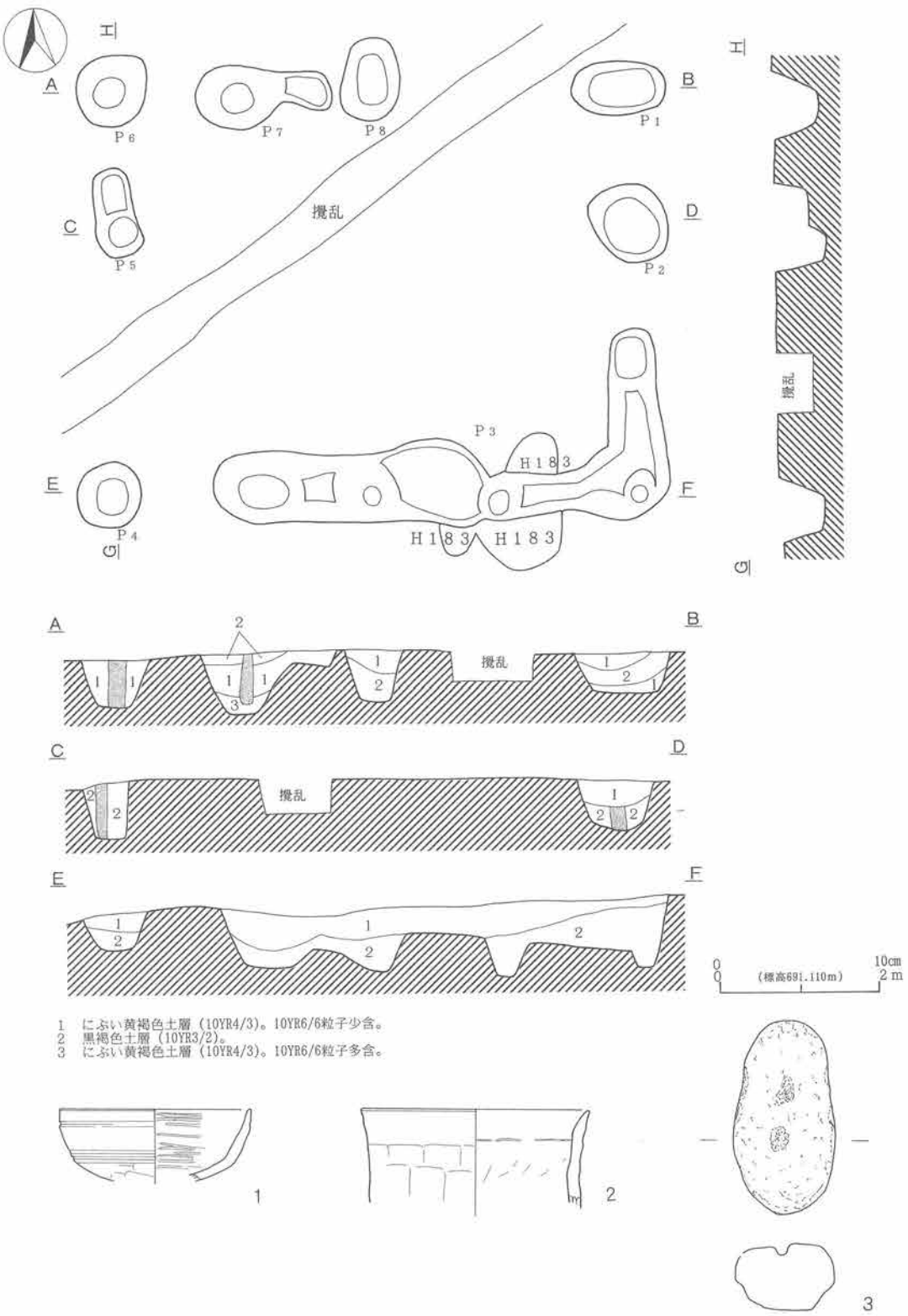
第246表　F38号掘立柱建物址出土遺物観察表

F39号掘立柱建物址（第318図、図版九十三）

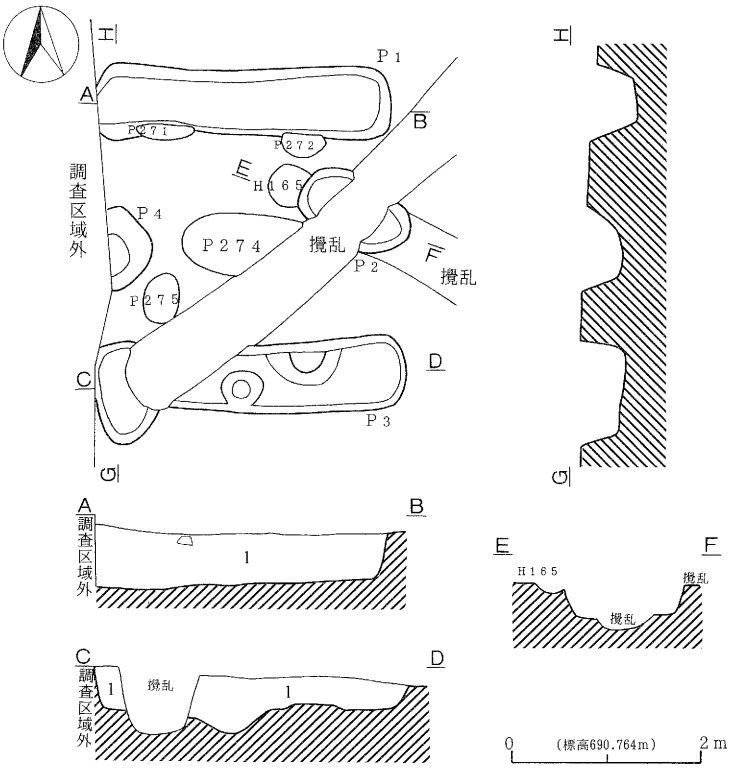
遺構－Xう4グリットで検出された。H165号住居址を切る。南北長3.0m、東西長2.8m、面積8.4㎡の方形の平面プランを呈し、N－25°－Eに長軸方位をとる。桁行2間、梁間2間の側柱の掘立柱建物址である。柱間は桁行が1.5m、梁間が1.3mである。柱は確認されず、Pitの掘方は梁間が溝掘りされる。規模的には長径120～327cm、短径70～107cm、深度32～66cmである。出土遺物は皆無であった。

F40号掘立柱建物址（第319図、図版九十三）

遺構－Ⅸえ10グリットで検出された。H176号住居址を切り、F18号掘立柱建物址に切られる。



第317図　F38号掘立柱建物址



1　にぶい黄褐色土層（10YR4/3）。10YR6/6粒子少含、φ5mm以下パミスを含む。

第318図　Ｆ39号掘立柱建物址

調査区域外に延びるため規模形状は不明である。Ｐ５において確認された柱は直径17cmであった。Pit掘方の規模も判然としないが、深度は35～46cmを測る。

遺物－須恵器の坏蓋が１点出土している。扁平な擬宝珠つまみが付けられている。

Ｆ41号掘立柱建物址

（第320図、図版九十四）

遺構－Ｘこ７グリットで検出された。調査区域内での他遺構との重複関係はない。調査　区域外に延びるため規模・形状等は不明である。Ｐ２・Ｐ３おいて確認された柱は直径15cmであった。Pit掘方は部分的に溝掘りされ、規模的には長径80～150cm、短径54～55cm、深度35～48cmであった。出土遺物は皆無であった。

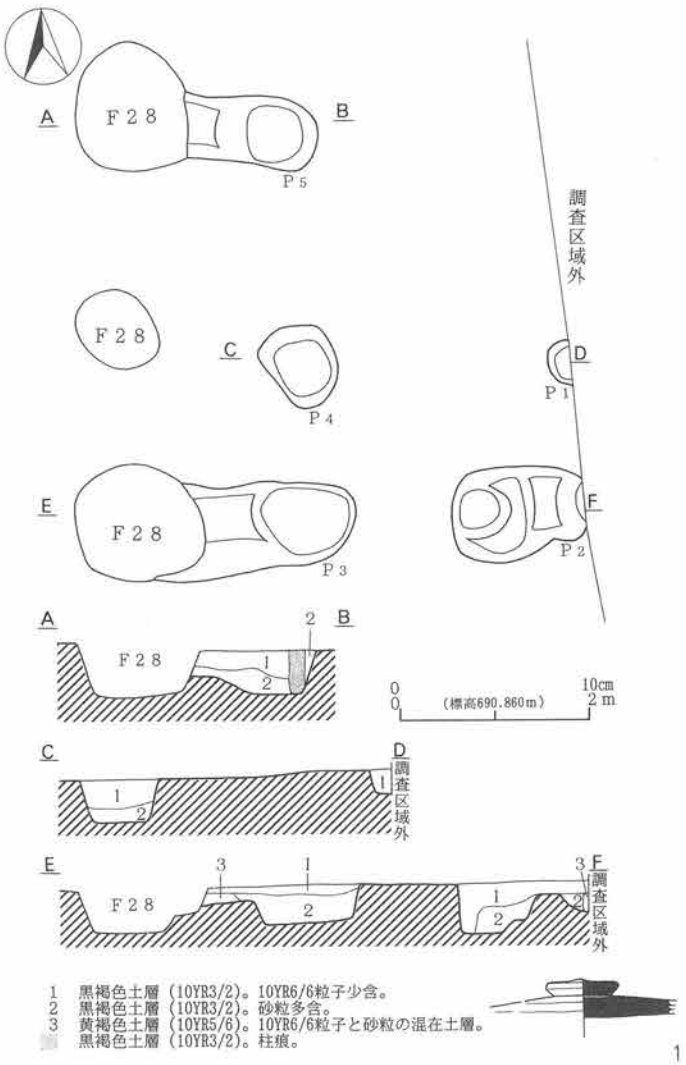
挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
－1	恵器 坏蓋	－ －		

第247表　Ｆ40号掘立柱建物址出土遺物観察表

Ｆ42号掘立柱建物址（第321図、図版九十四）

遺構－ＸＩあ10グリットで検出された。H153号住居址を切り、H139号住居址に切られる。H139号住居址との重複、及び調査区域外に延びるため規模・形状等は判然としない。７基のPitに

より構成される南北２間、東西２間の部分が調査区域内において検出された。東西長は不明であるが、南北長は3.5ｍである。側柱式の掘立柱建物址で、柱間は南北1.75ｍ、東西は西から1.5ｍ、1.2ｍで安定している。柱は確認されなかった。Pitの掘方は長径55～72㎝、短径45～60㎝、深度13～18㎝であった。出土遺物は皆無である。

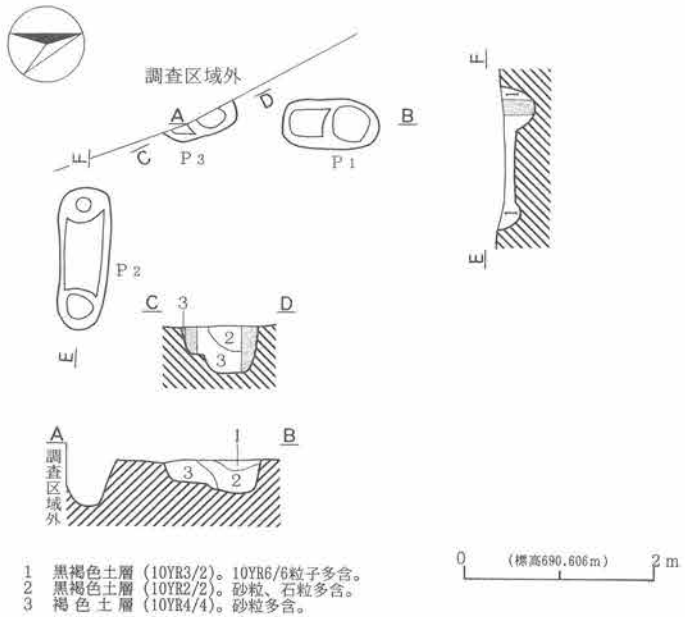


第319図　Ｆ40号掘立柱建物址

Ｆ43号掘立柱建物址（第322図、図版二百九）

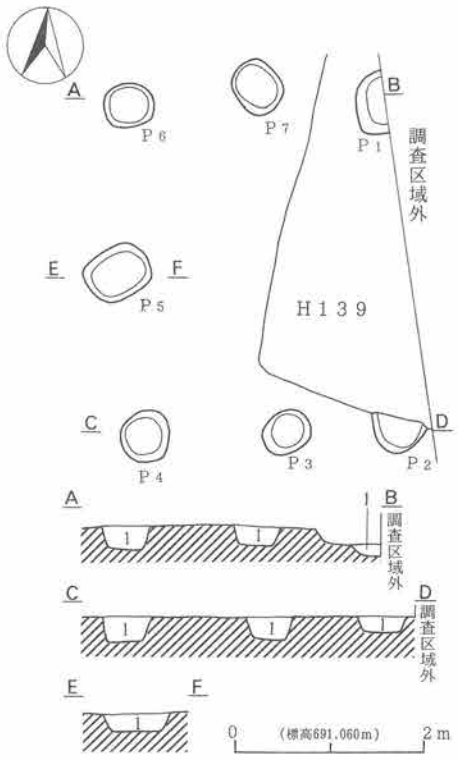
遺構－Ｘき３グリットで検出された。H141号・H192号住居址に切られる。H186号住居址を切る。東西長6.9ｍ、南北長5.0ｍ、面積34.5㎡の長方形の平面プランを呈する、側柱式の掘立柱建物址である。長軸方位をＮ－85°－Ｗにとる。桁行４間、梁間３間の構成で、桁行きの柱間が東から2.3ｍ・1.8ｍ・1.4ｍ・2.0ｍ、梁間が1.5ｍである。確認された柱の直径は15～30㎝であった。Pit掘方は溝掘りされる部分が多く、規模的には、長径90～280㎝、短径70～140㎝、深度25～107㎝である。

遺物－土師器の坏（１）、甕（２）が出土している。坏は半球状を呈するもので、内面ナデ、外面篦削り調整が施される。甕は口縁部が「く」字に強く外反するもので、内外面にナデ調整が施される。



1　黒褐色土層（10YR3/2）。10YR6/6粒子多含。
2　黒褐色土層（10YR2/2）。砂粒、石粒多含。
3　褐色土層（10YR4/4）。砂粒多含。

第320図　F41号掘立柱建物址



1　にぶい黄褐色土層（10YR4/3）。10YR6/6粒子、砂粒を含む。

第321図　F42号掘立柱建物址

F44号掘立柱建物址

（第323図、図版九十五・二百九）

遺構－Ⅶう10グリットで検出された。H194号住居址を切る。1間1間の掘立柱建物址と1間3間の掘立柱建物址がP9を接点に接続したような変則的な形態を呈するが、Pit覆土の観察等から別遺構として分離できなかったため1棟の掘立柱建物址として取り扱う。南北長4.6m、東西長5.92mで長軸方位をN－85°－Wにとる。柱間は東西が1.5m、南北が2.0mを基本とするようである。P2・P3・P5・P9において確認された柱は直径13～17cmであった。Pitの掘方は1カ所だけが溝掘りされる。規模的には、長径40～220cm、短径35～67cm、深度15～57cmであった。

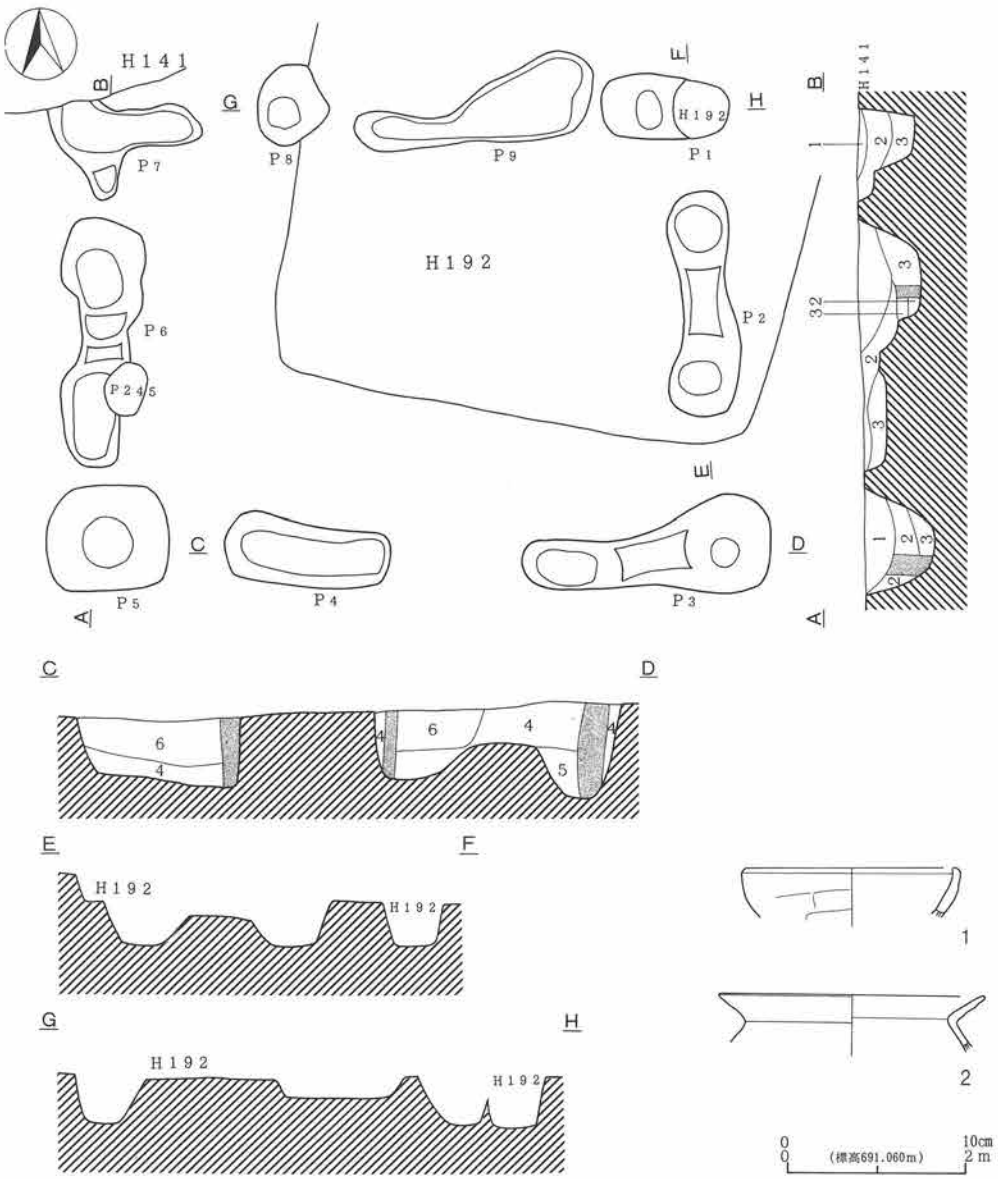
遺物－土師器甕の口縁部が1点出土している。内外面にナデ調整が施される。

F45号掘立柱建物址（第324図）

遺構－Xく5グリットで検出された。H187号住居址を切り、H138号住居址に切られる。東西長・南北長共に1.5mの方形の平面プランを呈する。P2・P3において確認された柱は直径12～15cmであった。Pit掘方の規模は長径48～60cm、短径45～55cm、深度40～53cmであった。出土遺物は皆無である。

挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
−1	土師器 坏	12.3 − −	内−ナデ。 外−篦削り。	
−2	土師器 甕	14.9 − −	内外−ナデ。	

第248表　F43号掘立柱建物址出土遺物観察表

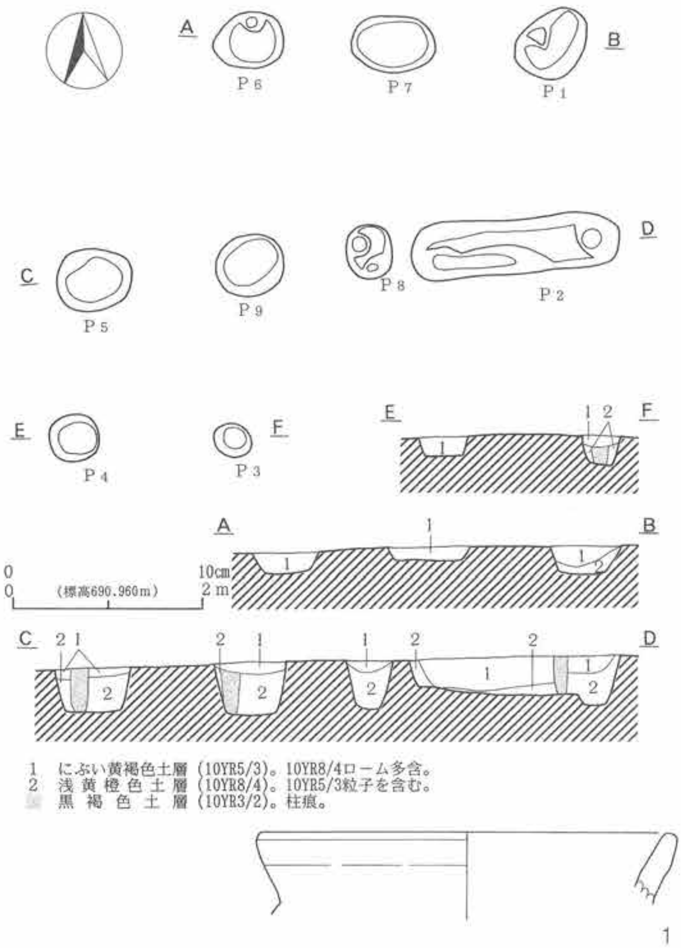


1　にぶい黄褐色土層（10YR5/4）。10YR6/6・10YR4/2粒子、径5mm以下石粒・パミス多含。
2　灰黄褐色土層（10YR4/2）。砂粒多含、10YR6/6粒子少含。
3　明黄褐色土層（10YR6/6）。10YR4/2不定大ブロック多含、径2cm以下石粒を含む。
4　にぶい黄褐色土層（10YR4/3）。炭化物、10YR8/4砂粒を含む。
5　にぶい黄橙色土層（10YR7/3）。
6　黒褐色土層（10YR3/2）。炭化物を含む。
　黒褐色土層（10YR3/2）。柱痕。

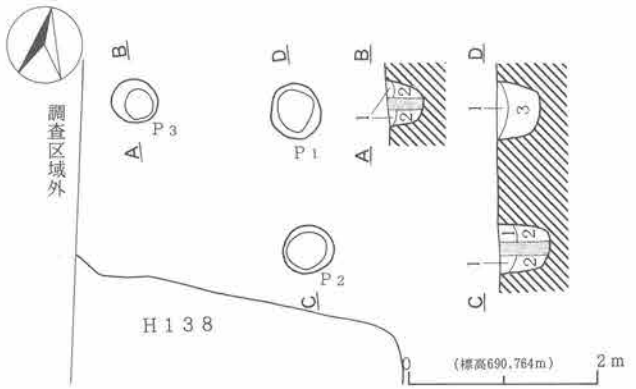
第322図　F43号掘立柱建物址

挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
－1	土師器 甕	22.2 － －	内外－ナデ。	

第249表　F44号掘立柱建物址出土遺物観察表



第323図　F44号掘立柱建物址



第324図　F45号掘立柱建物址

第3節　土　　坑

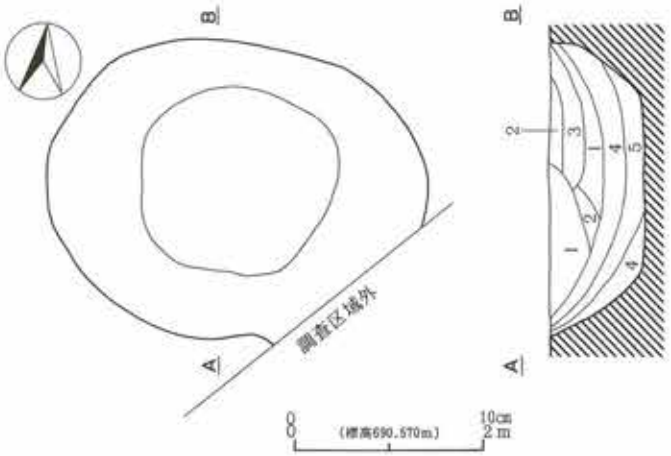
D1号土坑（第325・326図、図版二百十）

遺構－Ⅰけ5グリットで検出された。H4号住居址を切る。東西4.03m×南北3.16mの楕円形の平面プランを呈し、N－82°－Wに長軸方位をとる。深度は1.05mを測り、逆台形の断面形状である。覆土は人為埋土であり、比較的多量に出土した土器の多くは底面から出土している。

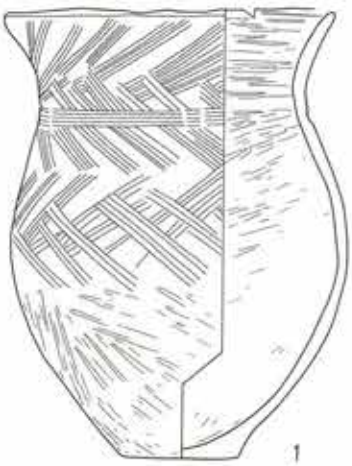
遺物－弥生土器と縄文土器が出土している。弥生土器には甕（1・2・4）、台付甕（3）、高杯（6・7）、壺（5・8～11）が認められる。甕は3点共に斜走文が施文され、体部片の2は不明であるが、1は頸部に簾状文が、4は櫛歯状工具による条線が施される。斜走文は1が横位の羽状、2・4が縦位の羽状である。台付甕3は口唇部に縄文、受口を呈する口縁部には櫛は状工具による波状文が巡らされ、体部には篦状工具による連続「コ」字文が施されている。高杯6は内面が赤彩され、7は外面に赤彩が施される。壺には赤彩される9～11と赤彩されない5・8が存在する。8は頸部に縄文、9・11は頸部に簾状文、10は受口口縁の端部に1条の櫛描波状文が施される。縄文土器12・13は後期の所産である。8と共に混入遺物である。

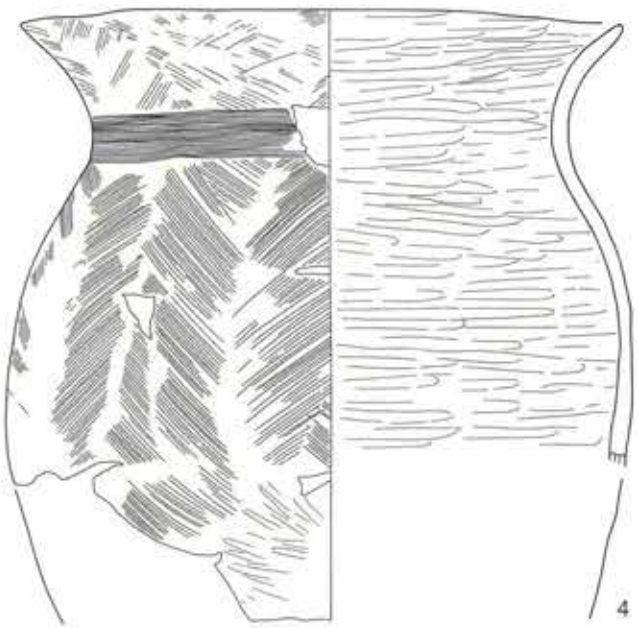
挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
－1	甕	17.6 6.0 23.6	内－篦磨き。 外－頸部：簾状文、他は斜走文。	
－2	甕	14.4 － －	内－篦磨き。 外－斜走文。	

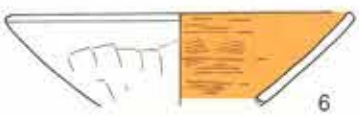
第250表　D1号土坑出土遺物観察表（1）

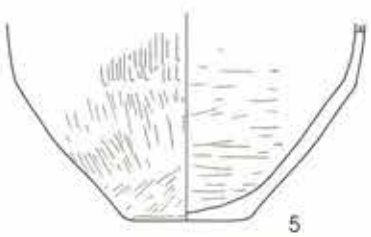


1　灰黄褐色土層（10YR4/2）。φ5㎜大パミス多含。
2　灰黄褐色土層（10YR4/2）。φ5㎜大パミス多含、10YR6/6粒子少含。
3　にぶい黄褐色土層（10YR7/4）。
4　黒褐色土層（10YR2/3）。φ10cm大10YR7/4ブロック・粒子を含む。
5　黒褐色土層（10YR2/3）。φ10cm大10YR7/4ブロック多含、粒子を含む。

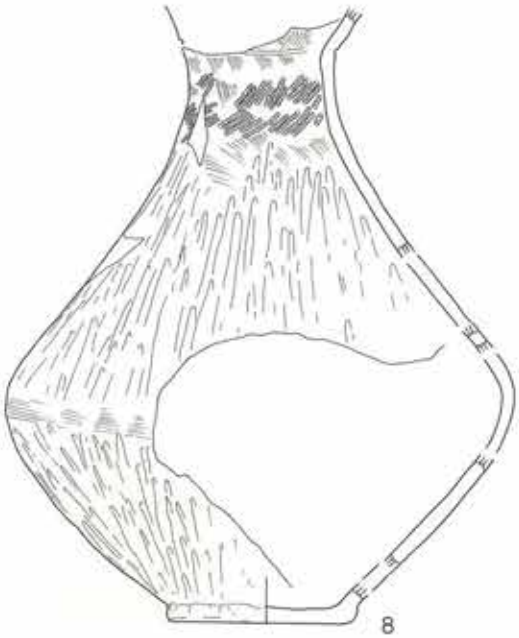




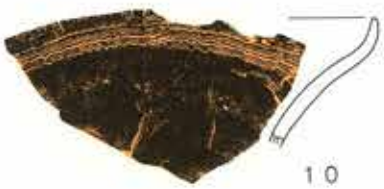


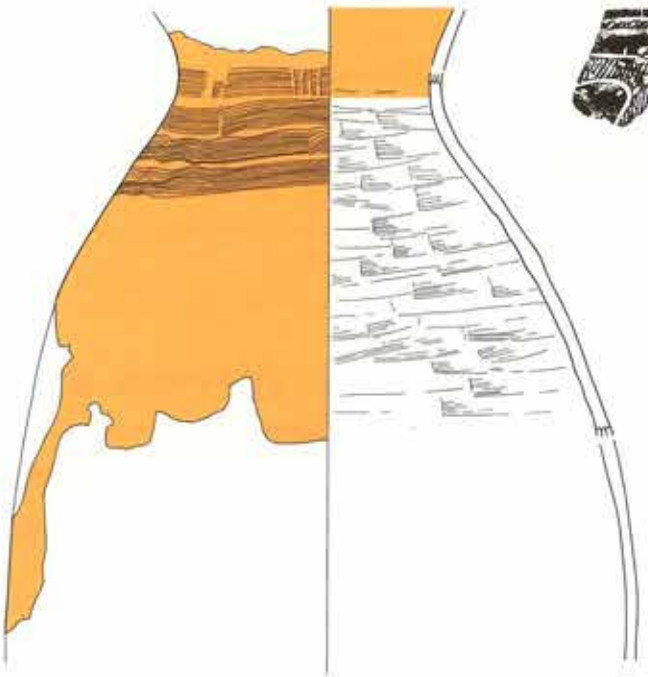


第325図　Ｄ１号土坑（１）


8

9


10


11

12

13

第326図　D１号土坑（２）

挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
－3	台付甕	11.4 － －	内－篦磨き。 外－口唇部：縄文、口縁部：櫛描波状文、体部：連続「コ」字文。	
－4	甕	31.8 － －	内－ナデ。 外－頸部：廉状文、他は斜走文。	
－5	壷	－ 6.5 －	内外－篦磨き。	
－6	高坏	18.5 － －	内－赤彩。 外－篦削り。	
－7	高坏	－ 15.7 －	内－篦ナデ、篦削り。 外－赤彩。	
－8	壷	－ 9.6 －	内－ナデ・刷毛目。 外－頸部：縄文。	
－9	壷	30.2 － －	内－赤彩。 外－赤彩。頸部：廉状文。	
－10	壷	－ － －	内－篦磨き。 外－赤彩。口縁端部に１条の櫛描波状文。	
－11	壷	－ － －	内－ナデ・刷毛目。 外－赤彩。頸部：廉状文。	
－12	縄文土器 深鉢	－ － －	内－ナデ。 外－口縁部：刻目が施される隆帯、体部：磨消縄文。	
－13	縄文土器 深鉢	－ － －	内－ナデ。 外－口縁部：刻目が施される隆帯。	

第251表　Ｄ１号土坑出土遺物観察表（２）

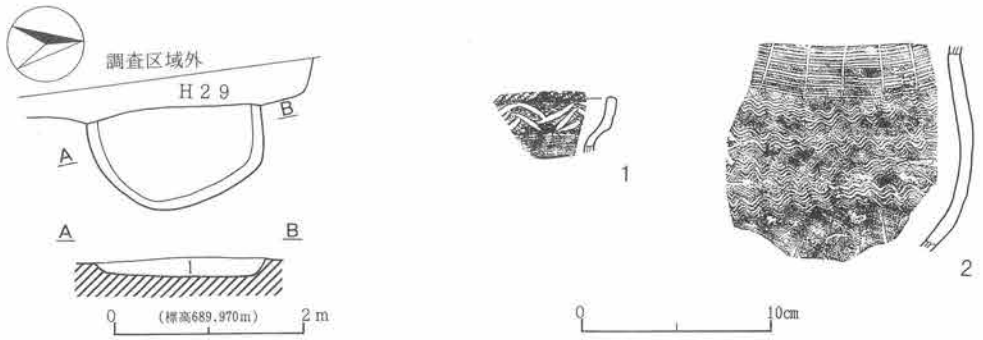
Ｄ２号土坑（第327図）

遺構－Ⅱけ２グリットで検出された。H29号住居址に切られる。全容が不明な為、規模・形状等は判然とはしない。深度は0.17ｍを測る。覆土は単層で自然堆積であった。

遺物－弥生土器の甕が２点出土している。１は受口口縁を呈し、口唇部に縄文、口縁部に篦状工具による波状文が施される。２は頸部に櫛歯状工具による「Ｔ」字文が巡り、体部には櫛歯状工具による波状文が施される。

挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
－1	甕	－ － －	内－篦磨き。 外－口唇部：縄文、口縁部：櫛描波状文。	
－2	甕	－ － －	内－篦磨き。 外－頸部：「Ｔ」字文、体部：櫛描波状文。	

第252表　Ｄ２号土坑出土遺物観察表

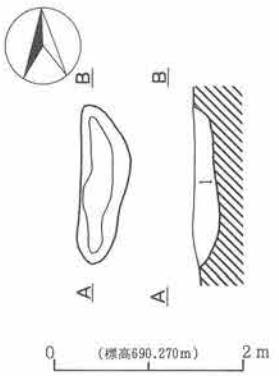


1　黒褐色土層（10YR3/2）。10YR6/6粒子、ブロック少含。

第327図　D2号土坑

D3号土坑（第328図）

遺構－Ⅱう1グリットで検出された。他遺構との重複関係は有さない。楕円形の平面プランを呈し、南北1.68m×東西0.54m×深度0.3mの規模を有する。N－0°－Eに長軸方位をとる。覆土は単層で自然堆積である。出土遺物は皆無であった。

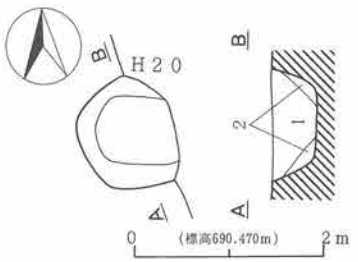


1　灰黄褐色土層（10YR4/2）。10YR6/6粒子多含、石粒・パミス少含。

第328図　D3号土坑

D4号土坑（第329図）

遺構－Ⅲく6グリットで検出された。H34号住居址に切られる。楕円形の平面プランを呈するものと思われる。H34号住居址との重複により規模は不明である。0.47mの深度を有する。2層から成る覆土は自然堆積である。出土遺物は皆無であった。



1　黒褐色土層（10YR3/2）。パミス・石粒少含。
2　黒褐色土層（10YR2/3）。10YR4/4粒子多含。

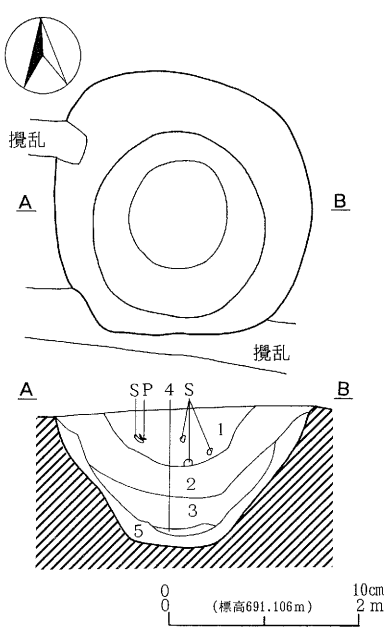
第329図　D4号土坑

D5号土坑（第330図、図版九十七・二百十一）

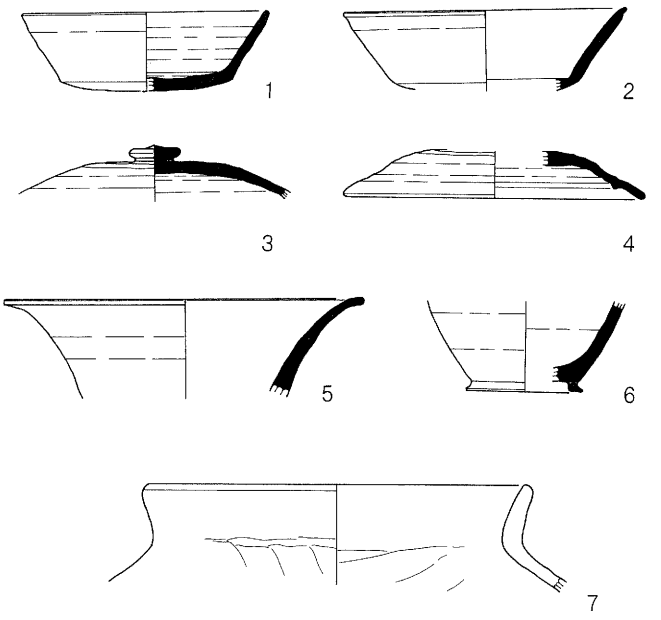
遺構－XⅢあ9グリットで検出された。攪乱に切られる。円形の平面プランを呈し、南北長3.07m×東西長2.8m×深度1.5mの規模を有する。N－40°－Wに

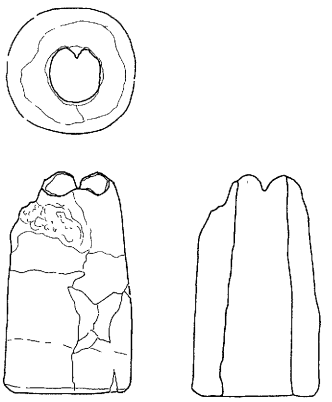
長軸方位をとる。断面は逆台形を呈し、５層から成る覆土は人為埋土の可能性が高い。

遺物－須恵器、土師器、鞴の羽口が出土した。須恵器には坏（１・２）、坏蓋（３・４）、壺（５・６）が認められる。坏は２点共に底部篦切りである。坏蓋４は「かえり」を有する。壺は破片であるため形状は不明である。土師器甕は広口・短頸で内面ナデ、外面には篦削り調整が施される。鞴の羽口は土製で小振りである。



1　黒褐色土層（10YR3/2）。砂利、礫、炭化物多含
2　黒褐色土層（10YR3/2）。礫多含。
3　黒褐色土層（10YR2/2）。礫、砂粒多含。
4　暗褐色土層（10YR3/3）。礫、砂粒多含。
5　暗褐色土層（10YR3/4）。砂粒、礫多含。





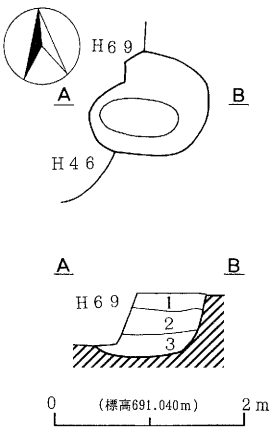
第330図　Ｄ５号土坑

挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
－1	須恵器 坏	13.1 6.0 4.2	篦切り。	
－2	須恵器 坏	15.0 3.8 －	篦切り。	
－3	須恵器 坏蓋	－ － －	内外－篦磨き。	
－4	須恵器 坏蓋	16.0 － －	外－天井部篦削り。	
－5	須恵器 壷	19.1 － －	外－天井部篦削り。	
－6	須恵器 壷	－ 6.1 －		
－7	土師器 甕	20.7 － －	内－ナデ。 外－篦削り。	
－8	土製 鞴の羽口	11.7 6.8 1.8		210ｇ

第253表　Ｄ５号土坑出土遺物観察表

Ｄ６号土坑（第331図）

遺構－Ⅴけ５グリットで検出された。H46・H69号住居址に切られる。楕円形の平面プランを呈し、南北長1.08ｍ、深度0.67ｍの規模を有し、Ｎ－90°－Ｅに長軸方位をとる。３層から成る覆土は自然堆積で出土遺物は皆無であった。

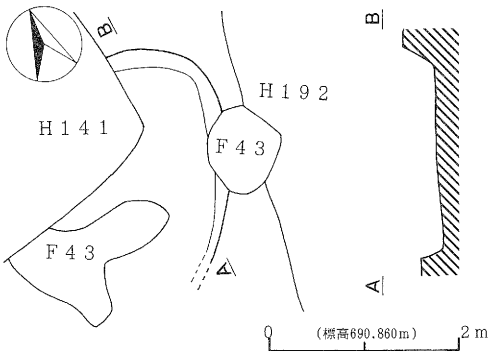


1　暗褐色土層（10YR3/4）。パミス・石粒含む。
2　褐色土層（10YR4/6）。パミス・石粒含む。
3　にぶい黄褐色土層（10YR4/3）。

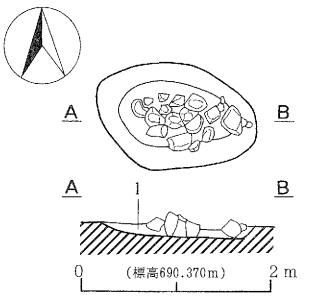
第331図　Ｄ６号土坑

Ｄ７号土坑（第332図）

遺構－Ⅹく３グリットで検出された。H141号住居址、Ｆ32号掘立柱建物址に切られる。深度0.3ｍ以外は規模・形状共に不明である。覆土は自然堆積で、出土遺物は皆無であった。



第332図　D７号土坑



1　灰黄褐色土層（10YR4/2）。パミス少含。

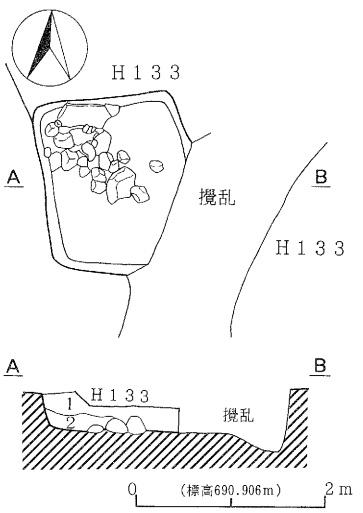
第333図　D８号土坑

D８号土坑（第333図）

遺構－Ⅲく８グリットで検出された。楕円形の平面プランを呈し、南北長1.1ｍ×東西長1.75ｍ×深度0.25ｍの規模を有する。Ｎ－75°－Wに長軸方位をとる。内部には礫を多含しており、覆土は人為埋土であった。焼土は存在せず、礫に熱変化は認められないことから炉址とは考えられない。出土遺物は皆無であった。

D９号土坑（第334図）

遺構－ⅩⅠい10グリットで検出された。H133号・H143号住居址に切られる。南北長1.85ｍ×東西長1.6ｍ×深度0.14ｍの長方形の平面プランを呈する。Ｎ－10°－Ｅに長軸方位をとる。底面の北西コーナー～中央部分にかけて礫が散乱していたが、骨等は確認されなかった。２層から成る覆土は自然堆積で、出土遺物も皆無であった。



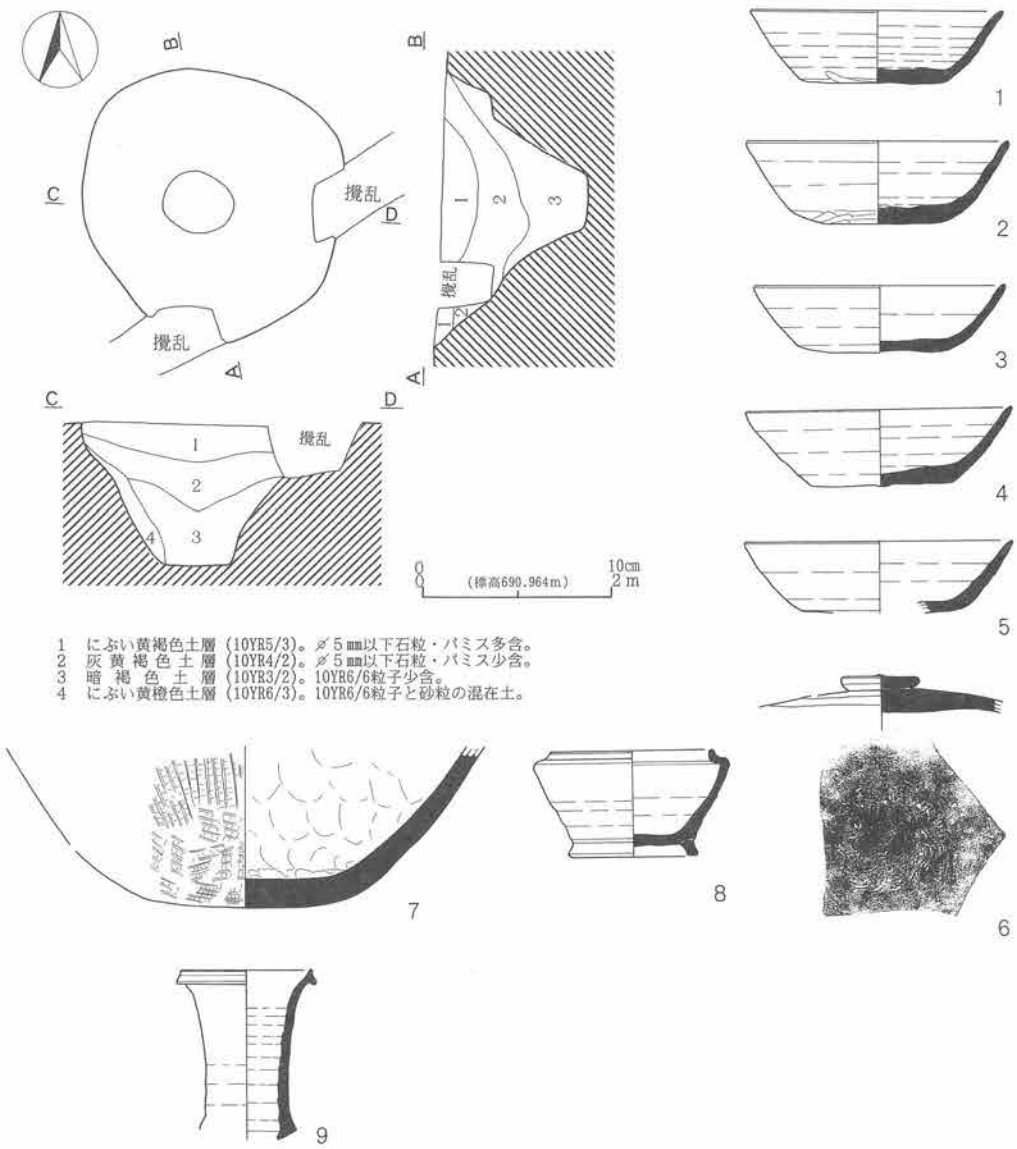
1　黒褐色土層（10YR3/2）。10YR6/6粒子・砂粒・石粒多含。
2　黒褐色土層（10YR2/2）。礫・砂粒多含。

第334図　D９号土坑

D10号土坑（第335図、図版九十七・二百十一）

遺構－Ⅸい10グリットで検出された。H153号・H174号住居址を切る。南北長3.7ｍ×東西長3.4ｍ×深度1.95ｍを測る円形の平面プランを呈する。Ｎ－40°－Wに長軸方位をとる。断面は２段落ちの形状を呈し、底面は平坦である。４層からなる覆土は人為埋土の可能性が高い。

遺物－比較的多量の須恵器が出土している。器種としては、坏（1～5）、坏蓋（6）、甕（7）、壺（8・9）が認められる。坏のロクロからの切り離し方法及びその後の調整は、1・2が底部篦切り～手持篦削り、3・4が回転ヘラ切り、5が篦切りである。6の坏蓋は内面に叩き成形時の当具痕が認められる。甕7は叩き成形時の叩痕と、当具痕が看取される。壺8は有台の広口壺で、回転篦削りの後高台が付けられている。9は超頸壺の口縁部である。



第335図　D10号土坑

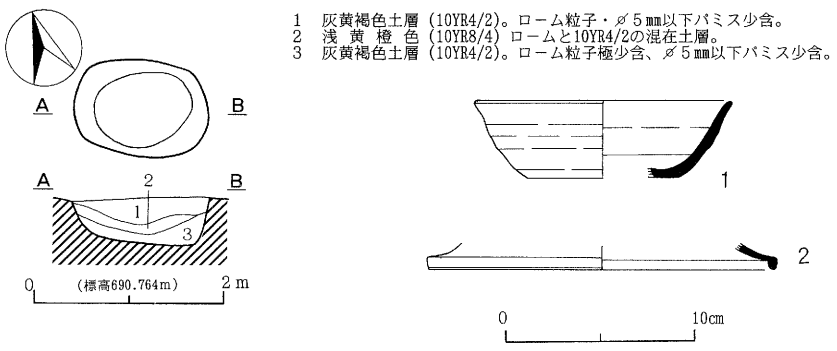
挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
－1	須恵器 坏	13.4 7.2 3.9	篦切り→手持篦削。	
－2	須恵器 坏	13.9 5.8 4.4	篦切り→手持篦削。	
－3	須恵器 坏	13.3 5.5 3.6	回転篦切り。	
－4	須恵器 坏	14.1 7.2 4.1	回転篦切り。	
－5	須恵器 坏	14.2 8.0 3.8	篦切り。	
－6	須恵器 坏蓋	－ － 2.0	内面に叩目。	
－7	須恵器 甕	－ 6.0 －	内－当具痕。 外－叩目。	
－8	須恵器 壷	10.4 6.8 5.6	回転篦削→付高台。	
－9	須恵器 壷	7.4 － －	ロクロナデ。	

第254表　D10号土坑出土遺物観察表

D11号土坑（第336図）

遺構－Xえ2グリットで検出された。D12号土坑を切る。楕円形の平面形状を呈し、東西長1.8m×南北長1.3m×深度0.5mの規模を有する。N－70°－Wに長軸方位をとる。覆土は3層からなるが、その堆積が人為的なものか否かは不明である。

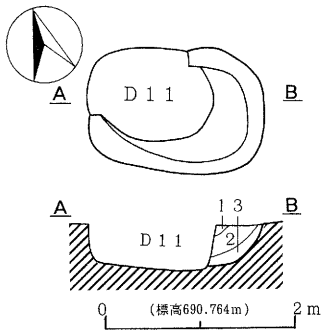
遺物－須恵器の坏（1）と坏蓋（2）が出土している。坏は底部に方向不明の糸切痕が認められる。



第336図　D11号土坑

挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
－1	須恵器 坏	13.5 7.8 4.1	方向不明回転糸切り。	
－2	須恵器 坏蓋	18.5 － －		

第255表　D11号土坑出土遺物観察表



1　灰黄褐色土層（10YR4/2）。10YR6/6粒子を含む。
2　明黄褐色土層（10YR6/6）。10YR4/2粒子少含。
3　黒褐色土層（10YR3/2）。10YR4/2・10YR6/6粒子少含。

第337図　D12号土坑

D12号土坑（第337図）

遺構－Xえ2グリットで検出された。D11号土坑に切れる。楕円形の平面形状を呈し、東西長1.85m×南北長1.35m×深度0.4mの規模を有する。3層からなる覆土の堆積が確認されたが、人為的なものか否かは不明である。また、本址とD11号土坑については住居址の建替のような関係も想起されるが、判然とはしない。

出土遺物は皆無であった。

第4節　溝　　址

M1号溝址（第338～341図、図版九十五・二百十二～二百十五）

遺構－Iこ7グリットからⅢい2グリットにかけて検出された。Iか7グリット付近で「く」字状に緩やかに屈折する。この屈折部分で重複関係を有するM2号溝址が人為的に埋設され、この部分以北のM1号溝址が新たに掘削されている。弥生時代の住居址は全て本址により切られており、且つ平安時代の住居址であるH8号住居址には本址が切られる。出土遺物の大半が古墳時代中期の土器であることから本址は古墳時代中期の所産である可能性が強い。規模的には幅は3m～3.5mでほぼ一定している。深度は北端で1m、南端では1.7mと南に向かい漸次深くなっている。底面は流水による浸食を受け、砂が堆積していたが、恒常的に水が流れていた様子は認められなかった。断面は逆「梯形」を呈している。自然流路ではなく人工の溝址である。

遺物－土師器、須恵器、弥生土器、石器、鉄器が出土している。土師器には有台皿（1）、坏（5～7）、高杯（8～21）、壺（22～24）、甕（25）、ミニチュア土器（26）が認められる。1の有台皿は内面黒色処理され、回転糸切りの後高台が付されている。坏は3点共に半球状の体部か

ら口縁部が短く外反するもので、内面には放射暗文状の篦磨き、外面は篦削り調整後ナデや篦磨き調整が施される。高杯は坏部に稜を有し、脚が外屈して広がるもので、口縁端部が直立気味に立ち上がるものも多い。また脚部に円孔が穿たれるもの（17）も存在する。内画面共に放射状の篦磨き調整が施されている。壺22は小型で丸底を有するものと思われる。内外面に篦磨き調整が施されている。23は有段口縁の壺で、砂粒を多含する胎土で、内外面共にナデ調整が施されている。24は「く」字状に強く外反する口縁部を有している。甕25は疎らな篦磨き調整が施されている。ミニチュア土器26は高杯を模倣したもので、手捏である。

須恵器は３点の坏が出土している。２は丸底を呈するもので、外面には篦削り調整が施されている。３は有台で、回転篦削り調整後に高台が付されている。４は内画面共にロクロナデが施される。

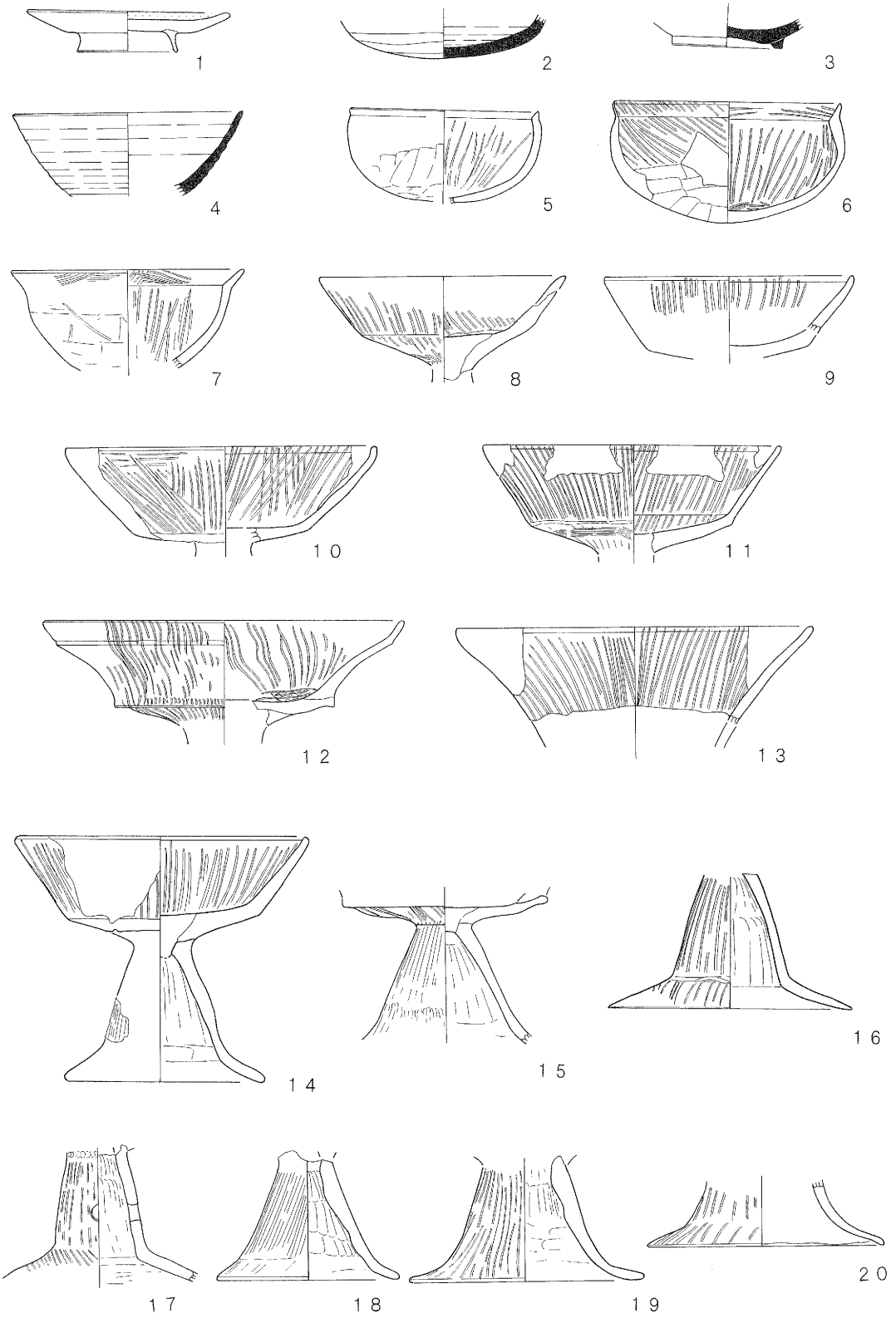
弥生土器には高杯（27～29）、甕（30～38）、壺（39～49）が認められる。高杯は全て赤彩される。甕は頸部に廉状文、口縁部と体部上半には櫛歯状工具による波状文が施される35～38のようなものと、受口口縁で口縁部に篦や櫛歯状工具による波状が施される30・31や、口唇部に縄文が施され、口縁部の文様帯を有さない32・33、連続「コ」字文が施される34などが存在する。壺は39・40・42のような受口口縁のものや、口縁端部や口唇部に施文される45～48のようなもの、また、頸部文様帯に施文が集約され、赤彩が施される49などが存在する。

石器は51・52のような磨製石鏃や、53の石包丁、54の打製石斧、55の打製石鏃、56のスクレイパー、57の磨石が出土している。

鉄器は50の角釘が出土している。

挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
－1	土師器 有台皿	12.9 6.4 2.5	内面黒色処理。 回転糸切り→付高台。	
－2	須恵器 坏	－ － －	底部回転篦削り。	
－3	須恵器 坏	－ 7.0 －	右回転糸切り→付高台。	
－3	須恵器 坏	14.6 － －		
－5	土師器 坏	16.0 － 6.0	内－放射状篦磨き。 外－篦削り。	
－6	土師器 坏	14.6 － 7.7	内－放射状篦磨き。 外－篦削り→放射状篦磨き。	
－7	土師器 坏	14.7 － －	内－放射状篦磨き。 外－篦削り→放射状篦磨き。	

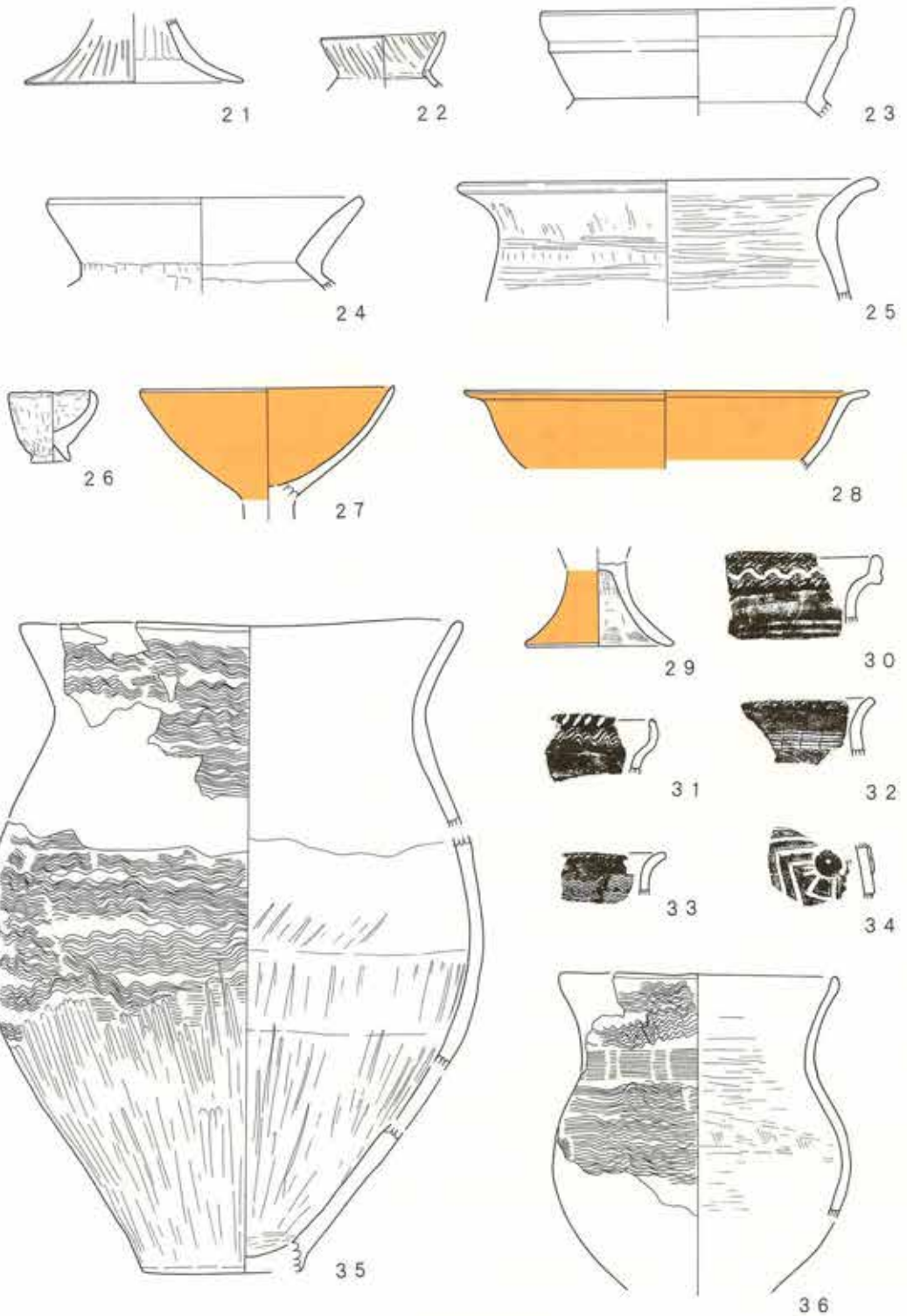
第256表　Ｍ１号溝址出土遺物観察表（１）



第338図　M１号溝址出土遺物（１）

挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
－8	土師器 高坏	15.7 － －	内外－放射状篦磨き。	
－9	土師器 高坏	15.8 － －	内外－放射状篦磨き。	
－10	土師器 高坏	19.9 － －	内外－放射状篦磨き。	
－11	土師器 高坏	19.0 － －	内外－放射状篦磨き。	
－12	土師器 高坏	23.0 － －	内外－放射状篦磨き。	
－13	土師器 高坏	22.7 － －	内外－放射状篦磨き。	
－14	土師器 高坏	18.7 12.7 15.7	内－放射状篦磨き、脚：篦ナデ・篦削り。 外－放射状篦磨き、脚：篦削り・篦磨き。	
－15	土師器 高坏	－ － －	内－篦ナデ。 外－篦磨き。	
－16	土師器 坏	－ 15.6 －	内－篦ナデ。 外－篦磨き。	
－17	土師器 高坏	－ － －	内－篦ナデ。 外－篦磨き。	脚に円孔。
－18	土師器 高坏	－ 11.6 －	内－篦ナデ。 外－篦磨き。	
－19	土師器 高坏	－ 14.9 －	内－篦ナデ。 外－篦磨き。	
－20	土師器 高坏	－ 15.0 －	内－篦ナデ。 外－篦磨き。	
－21	土師器 高坏	－ 13.3 －	内－篦ナデ。 外－篦磨き。	
－22	土師器 壷	7.6 － －	内外－篦磨き。	
－23	土師器 壷	19.0 － －	内外－ナデ。	有段口縁。
－24	土師器 壷	19.1 － －	内－ナデ。 外－篦削り。	
－25	土師器 甕	25.4 － －	内－篦磨き。 外－篦ナデ・篦磨き。	
－26	土師器 ミニチュア	－ 2.4 －	手捏。	

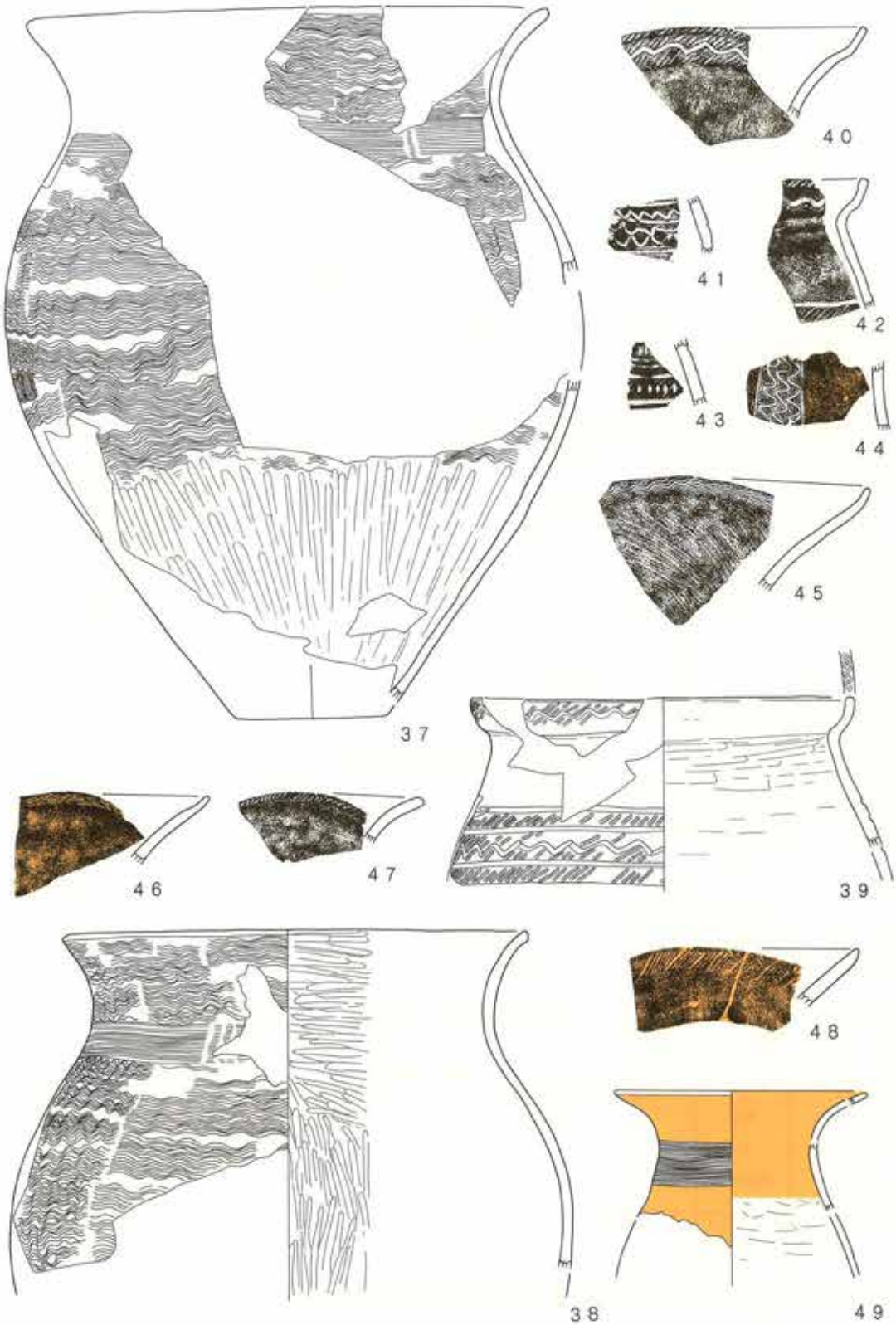
第257表　Ｍ１号溝址出土遺物観察表（２）



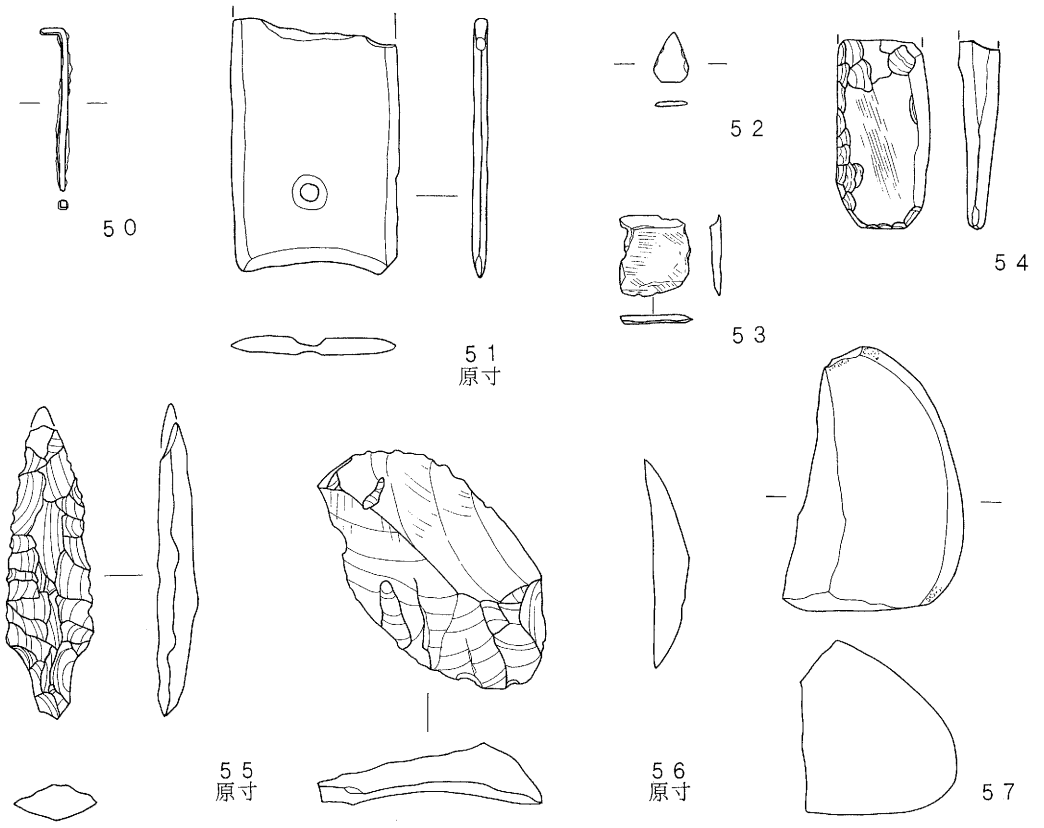
第339図　M１号溝址出土遺物（２）

挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
−27	弥生土器 高坏	15.4 − −	内外赤彩。	
−28	弥生土器 高坏	24.5 − −	内外赤彩。	
−29	弥生土器 高坏	− 9.0 −	内−刷毛目。 外−赤彩。	
−30	弥生土器 甕	− − −	内−篦磨き。 外−口唇：縄文、口縁：縄文＋篦描波状文。	
−31	弥生土器 甕	− − −	内−篦磨き。 外−口唇：刻目、口縁：櫛描波状文。	
−32	弥生土器 甕	− − −	内−篦磨き。 外−口唇：縄文、頸部：廉状文。	
−33	弥生土器 甕	− − −	内−篦磨き。 外−口唇：縄文、体部：櫛描波状文。	
−34	弥生土器 甕	− − −	内−篦磨き。 外−連続「コ」字文＋円形貼付文。	
−35	弥生土器 甕	26.8 9.6 39.4	内−篦磨き。 外−櫛描波状文。	
−36	弥生土器 甕	17.0 − −	内−篦磨き。 外−頸部廉状文、他は櫛描き波状文。	
−37	弥生土器 甕	33.2 9.6 45.4	内−篦磨き。 外−頸部廉状文、他は櫛描き波状文。	
−38	弥生土器 甕	29.6 − −	内−篦磨き。 外−頸部廉状文、他は櫛描き波状文。	
−39	弥生土器 壷	24.6 − −	内−篦磨き。 外−口唇：縄文、口縁：縄文＋篦描波状文、体部：縄文＋篦描平行沈線・波状文。	
−40	弥生土器 壷	− − −	内−ナデ。 外−口唇：縄文、口縁：縄文＋篦描波状文。	
−41	弥生土器 壷	− − −	内−ナデ。 外−篦描平行沈線・波状文。	
−42	弥生土器 壷	− − −	内−ナデ。 外−口唇：縄文、口縁：縄文＋篦描波状文、体部：縄文＋篦描平行沈線。	
−43	弥生土器 壷	− − −	内−ナデ。 外−篦描平行沈線＋刺突列。	
−44	弥生土器 壷	− − −	内−ナデ・刷毛目。 外−赤彩、体部：縦位波状文。	
−45	弥生土器 壷	− − −	内−ナデ。 外−口縁部櫛描波状文。	

第258表　M１号溝址出土遺物観察表（３）



第340図　M１号溝址出土遺物（３）



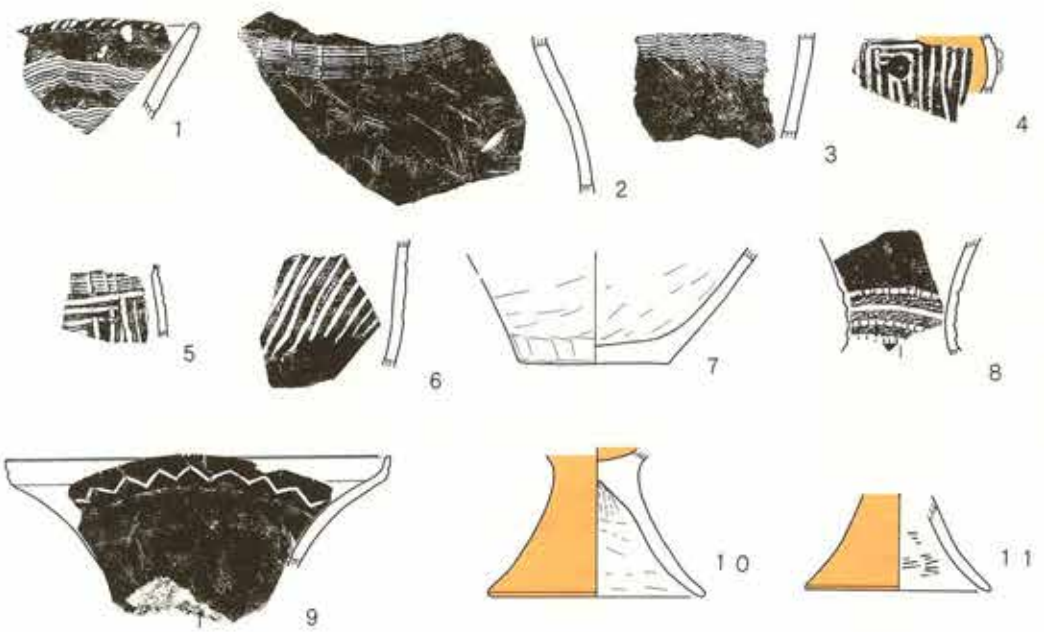
第341図　M１号溝址出土遺物（４）

挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
−46	弥生土器 壷	− − −	内−ナデ。 外−赤彩＋口縁部波状文。	
−47	弥生土器 壷	− − −	内−ナデ。 外−口唇：縄文。	
−48	弥生土器 壷	− − −	内−ナデ。 外−赤彩、口唇：櫛歯状工具による斜位条線。	
−49	弥生土器 壷	16.0 − −	内−口縁部：赤彩、他はナデ。 外−赤彩、頸部：櫛描横位条線。	
−50	角釘	8.7 1.3 0.4		6.4ｇ
−51	磨製石鏃	3.5 2.2 0.2		3.0ｇ
−52	磨製石鏃	2.7 1.9 0.2		1.4ｇ

第259表　M１号溝址出土遺物観察表（４）

挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
−53	石包丁	4.1 3.7 0.5		9.9g
−54	打製石斧	10.0 4.5 2.2		砥石として再利用。 160g
−55	打製石鏃	4.1 1.1 0.5		2.0g
−56	スクレイパー	3.0 2.8 0.7		4.8g
−57	磨石	14.0 8.7 9.0		1440g

第260表　M１号溝址出土遺物観察表（５）



第342図　M２号溝址出土遺物

M２号溝址（第342図、図版二百十五）

遺構－Ｉこ８グリットからＭ１号溝址に切られるＩか７グリットにかけて検出された。人為的に埋め戻されている。規模的には幅1.5ｍ～３ｍ、深度２ｍである。断面は逆「梯形」を呈し、北から南に向かって傾斜している。人工の溝址と思われる。

遺物－弥生土器が出土している。甕（１～７）、壺（８・９）、高杯（10・11）が出土している。

甕は1～3のような櫛歯状工具による波状文が施されるものと、4～6のような連続「コ」字文が施されるものが存在する。1は口唇部に刻目が、2・5は頸部に簾状文が、4は円形貼付文が付加されている。7は底部片である。壺8は頸部に横走する刺突列や沈線を巡らし、これらにより区画された横位文様帯内に縄文が施文される。9は受口口縁で口唇部に縄文、口縁部に1本の篦状工具による波状文が巡らされる。高杯は2点共に脚部片である。外面赤彩、内面にはナデや刷毛目調整が施されている。

挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
－1	弥生土器 甕	－ － －	内－篦磨。 外－口唇：刻目、口縁：櫛描波状文。	
－2	弥生土器 甕	－ － －	内－篦磨。 外－頸部：簾状文、体：櫛描波状文。	
－3	弥生土器 甕	－ － －	内－篦磨。 外－体部：櫛描波状文。	
－4	弥生土器 甕	－ － －	内－赤彩。 外－連続「コ」字文＋円形貼付文。	
－5	弥生土器 甕	－ － －	内－篦磨き。 外－頸部：簾状文、体部：連続「コ」字文。	
－6	弥生土器 甕	－ － －	内－篦磨き。 外－連続「コ」字文。	
－7	弥生土器 甕	－ 7.8 －	内－ナデ。 外－篦磨き。	
－8	弥生土器 壺	－ － －	内－ナデ。 外－刺突列・篦描平行沈線・縄文。	
－9	弥生土器 壺	20.3 － －	内－ナデ。 外－口唇部：縄文、口縁部：篦描波状文。	
－10	弥生土器 高坏	－ 9.8 －	内－赤彩、脚内：篦ナデ。 外－赤彩。	
－11	弥生土器 高坏	－ 11.5 －	内－刷毛目。 外－赤彩。	

第261表　M2号溝址出土遺物観察表

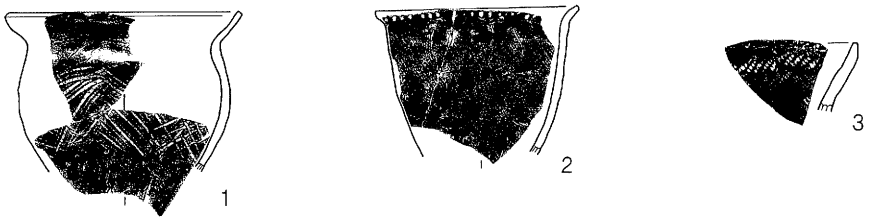
M3号溝址（第343図、図版二百十五）

遺構－Ⅲえ4グリットから北西にのび，Ⅲか6グリットに至り約30°屈折して西方向に進路を変えⅢお10グリットにおいて調査区域に入る。検出面下10cmほどで貼床状の平坦で堅固な面が存在し、更に10cmほど掘り下げると地山に達する。重複する全ての遺構を切る。現代の地図上の農道・馬入れ等と重なることから、本址は道の痕と思われるが時期は不明である。

遺物－弥生の甕片が3点出土している。混入遺物である。

挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
－1	弥生土器 甕	10.8 － －	内－篦磨。 外－口唇：縄文、体部：斜走文。	
－2	弥生土器 甕	12.5 － －	内－篦磨。 外－口唇部：押捺。	
－3	弥生土器 甕	－ － －	内－ナデ。 外－縄文。	

第262表　Ｍ３号溝址出土遺物観察表



第343図　Ｍ３号溝址出土遺物

Ｍ４号溝址

遺構－Ⅲく６グリットからⅢき８グリットにかけて検出された。幅0.3ｍ～0.4ｍ、深度８㎝～30㎝の溝址である。Ｆ３・５・６の掘立柱建物址に伴うものかもしれないが性格・時期共に不明である。人工の溝址である。出土遺物は皆無である。

Ｍ５・６号溝址（第344・345図、図版二百十五・二百十六）

遺構－Ⅲえ１グリットからⅥえ１グリットにかけて検出された。最初１条であったものが途中で２条の溝に分かれている。本址もＭ３号溝址と同様に検出面下約10㎝に貼床状の堅固な面が存在し更に40～50㎝掘り下げると地山に達する。断面は丸みを帯びた「Ｗ」字状を呈しているが、貼床状の堅固な面を使用面とするならば逆「梯形」を呈している。幅は２条を一組と考えるならば３ｍ～６ｍであるが、別固に捉えると、Ｍ５が1.7ｍ～３ｍ、Ｍ６が２ｍ前後となる。Ｍ３同様に本址も重複する全ての遺構を切り、現代の地図上の農道・馬入れ等と重なることから、道の痕と思われるが時期は不明である。

遺物－Ｍ５からは土師器、須恵器、弥生土器、土製品、石製品、石器が出土している。土師器には坏（１～４）、甑（５）が、須恵器は壺の肩部片（６）が、弥生土器は甕（７）・壺（８～10）が、土製品は11の土錘、石製品は12の紡錘車、石器は13の打製石斧と14の磨製石斧が認められる。

Ｍ６からは土師器坏（１）と、銅製の帯の飾金具である銙尾が１点出土している。

挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
－1	土師器 坏	－ 6.0 －	内－黒色処理。 外－右回転糸切り。	
－2	土師器 坏	16.3 － －	内－黒色処理。	
－3	土師器 坏	15.7 5.8 5.0	内－黒色処理。 外－篦磨き。	
－4	土師器 坏	11.8 － 7.7	内外－篦磨き。	
－5	土師器 甑	16.3 － －	内外－ナデ。	
－6	須恵器 甕	－ － －	篦描沈線文。	
－7	弥生土器 甕	12.8 － －	篦磨き。 外－口唇部：縄文、体部：櫛描波状文。	
－8	弥生土器 壷	－ － －	内－赤彩。 外－赤彩、口縁端部に櫛描斜位条線。	
－9	弥生土器 壷	－ － －	内－刷毛目。 外－刺突によるU字区画内に櫛描条線。	
－10	弥生土器 高坏	－ － －	内－刷毛目。 外－篦描平行沈線間に縄文。	
－11	土錘	5.1 1.9 1.8		163ｇ
－12	石製紡錘車	3.8 2.1 0.6		7.3ｇ
－13	打製石斧	7.5 5.7 1.2		82.4ｇ
－14	磨製石斧	3.2 1.6 0.5		7.2ｇ

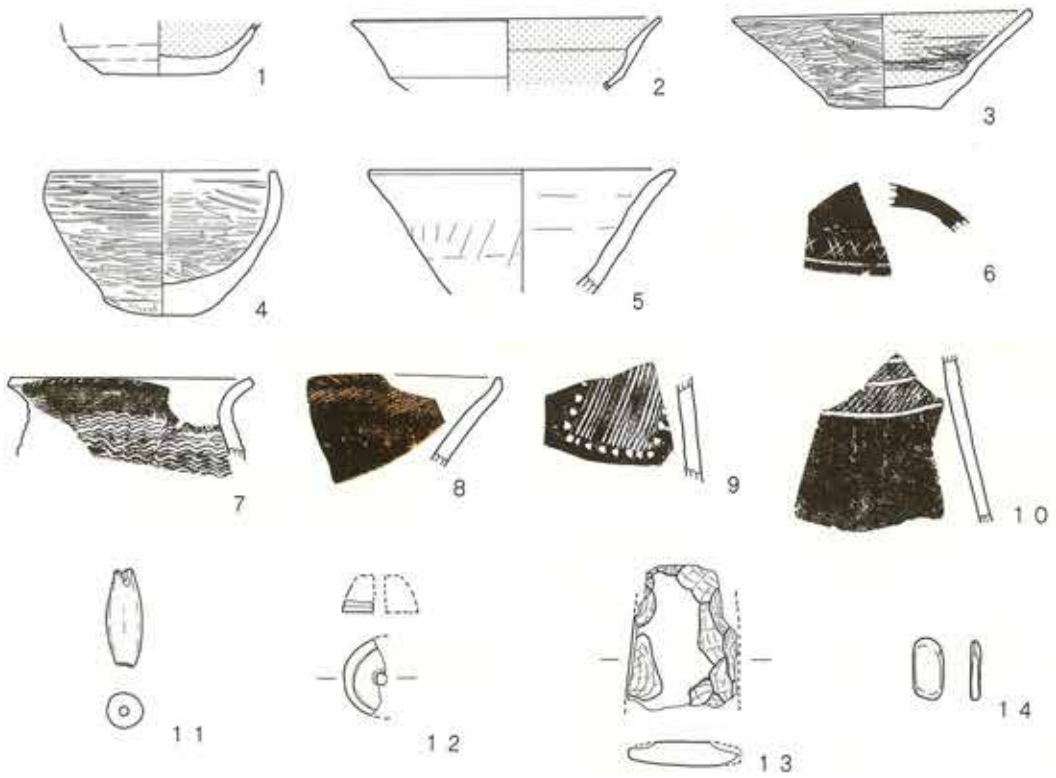
第263表　Ｍ５号溝址出土遺物観察表

挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
－1	土師器 坏	18.9 9.6 4.6	内－黒色処理。 外－篦削り。	
－2	巡方	2.9 2.6 0.6		15.0ｇ

第264表　Ｍ６号溝址出土遺物観察表

Ｍ７号溝址（第346図、図版二百十六）

遺構－Ⅴお５グリットを中心に検出された。Ｈ70号住居址、Ｆ10号掘立柱建物址、Ｍ６号溝址



第344図　M５号溝址出土遺物

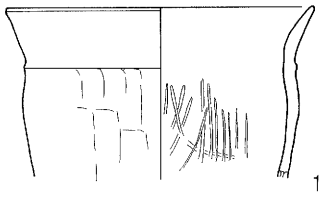
第345図　M６号溝址出土遺物

に切られる。幅0.5ｍ～0.8ｍ、深度10㎝～20㎝の溝が直径7.6ｍの円形に掘り込まれていた。溝の内側には施設は存在しない。また、溝の掘り込み方もかなり粗雑であった。本址と形態に近いものとしては円形周溝墓、平地式住居と呼ばれる遺構等が存在するが、本址はこれらとは性格の異なる遺構と思われる。

遺物－内面篦磨き、外面篦削り調整が施される土師器の甕が１点出土している。

挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
－1	土師器 甕	16.3 － －	内－篦磨き。 外－篦削り。	

第265表　M７号溝址出土遺物観察表



第346図　M７号溝址出土遺物

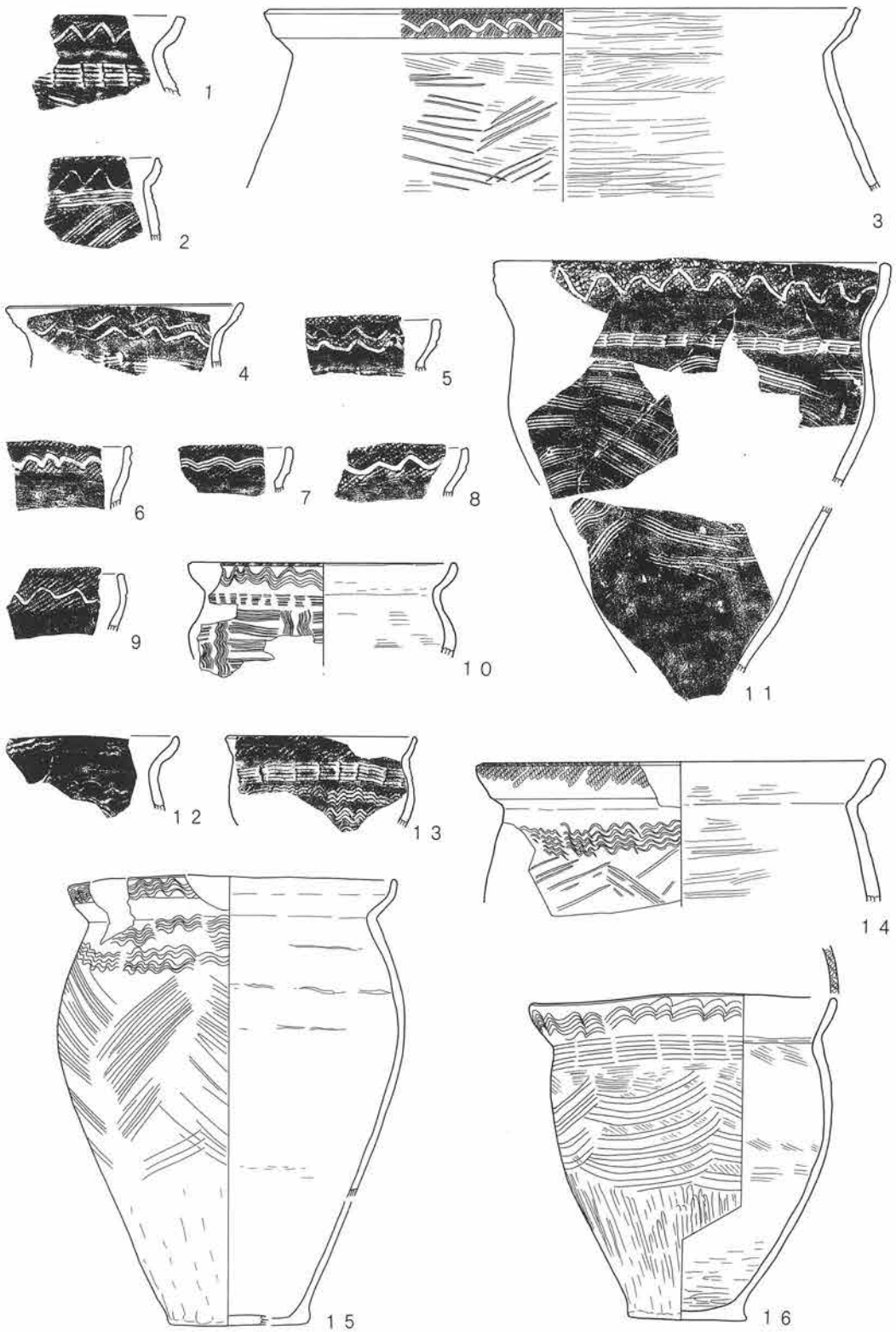
M８号溝址(第347～353図、図版九十六・二百十七～二百二十三)

遺構－Xあ１グリットからⅦき８グリットにかけて検出された。幅１ｍ前後、深度0.9ｍ前後の断面「V」字型を呈する人工の溝址である。弥生時代の遺物しか出土しないことから該期の所産と考えられる。水が流れた痕跡はないが、底面は東南から北西に僅かではあるが傾斜している。極めて多量の土器が出土した。

遺物－土器は弥生土器であった。器種的には甕(1～48・50・51)、台坏甕(49・53～60)、壺(61～105)、鉢(52・106～111・114・116・118)、高杯(112・113)、甑(115・117)、蓋(119)、剣型石製品(120)、軽石製石製品（121）などが認められる。

挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
－1	甕	－ － －	内－篦磨。 外－口唇：縄文、口縁：縄文＋篦描波状文、頸部：簾状文、体部：斜走文。	
－2	甕	－ － －	内－篦磨。 外－口唇：刻目、口縁部：篦描波状文、体部：斜走文。	
－3	甕	36.9 － －	内－篦磨。 外－口唇部：縄文、口縁部：縄文＋篦描波状文、体部：斜走文。	
－4	甕	14.8 － －	内－篦磨。 外－口唇部：縄文、口縁部：縄文＋篦描波状文、頸部：簾状文。	
－5	甕	－ － －	内－篦磨。 外－口唇部：縄文、口縁部：縄文＋篦描波状文。	
－6	甕	－ － －	内－篦磨。 外－口唇部：縄文、口縁部：縄文＋篦描波状文。	
－7	甕	－ － －	内－篦磨。 外－口唇部：縄文、口縁部：縄文＋篦描波状文。	
－8	甕	－ － －	内－篦磨。 外－口唇部：縄文、口縁部：縄文＋篦描波状文。	
－9	甕	－ － －	内－篦磨。 外－口唇部：縄文、口縁部：縄文＋篦描波状文。	
－10	甕	16.8 － －	内－篦磨。 外－口唇部：縄文、口縁部：櫛描波状文、頸部：簾状文、体部：縦位波状文・横位条線。	
－11	甕	25.6 － －	内－篦磨。 外－口唇部：縄文、口縁部：縄文＋篦描波状文、頸部：簾状文、体部：斜走文。	
－12	甕	－ － －	内－篦磨。 外－櫛描波状文。	
－13	甕	－ － －	内－篦磨 外－口唇・口縁部：縄文、頸部：簾状文、体部：櫛描波状文。	

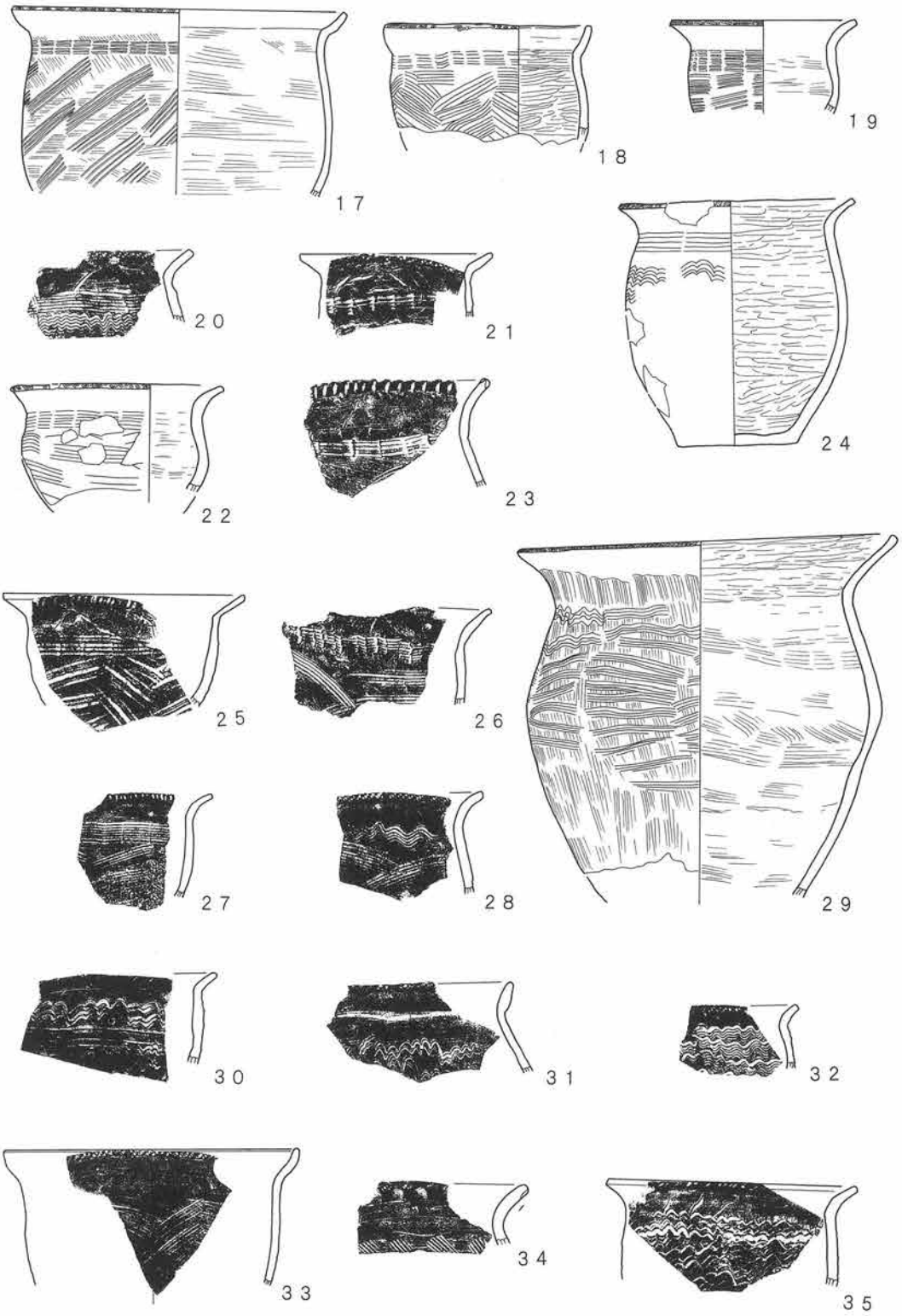
第266表　M８号溝址出土遺物観察表（１）



第347図　M８号溝址出土遺物（１）

挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
−14	甕	25.4 − −	内−篦磨。 外−口唇・口縁：縄文、体部：1条の櫛描波状文・斜走文。	
−15	甕	20.4 8.8 28.0	内−篦磨。 外−口縁部：櫛描波状文、頸部下：櫛描波状文2条、体部：斜走文。	
−16	甕	19.0 7.4 20.2	内−篦磨。 外−口唇部：縄文、口縁部：櫛描波状文、頸部：簾状文、体部：斜走文。	
−17	甕	20.8 − −	内−篦磨。 外−口唇部：縄文、口縁部：櫛描波状文、頸部：簾状文、体部：斜走文。	
−18	甕	13.0 − −	内−篦磨。 外−口唇部：縄文、口縁部：櫛描波状文、頸部：簾状文、体部：斜走文。	
−19	甕	11.5 − −	内−篦磨。 外−口唇部：縄文、口縁部：櫛描波状文、頸部：簾状文、体部：斜走文。	
−20	甕	− − −	内−篦磨。 外−口唇部：縄文、頸部：簾状文、体部：櫛描波状文。	
−21	甕	12.0 − −	内−篦磨。 外−口唇部：縄文、頸部：簾状文、体部：櫛描波状文。	
−22	甕	13.2 − −	内−篦磨。 外−口唇部：縄文、頸部：簾状文、体部：斜走文。	
−23	甕	− − −	内−篦磨。 外−口唇部：刻目、頸部：簾状文、体部：斜走文。	
−24	甕	14.6 7.4 14.4	内−篦磨。 外−口唇部：縄文、頸部：簾状文、体部：櫛描波状文。	
−25	甕	15.0 − −	内−篦磨。 外−口唇部：刻目、頸部：簾状文、体部：斜走文。	
−26	甕	− − −	内−篦磨。 外−頸部：簾状文、体部：斜走文。	
−27	甕	− − −	内−篦磨。 外−口唇部：刻目、頸部：簾状文、体部：斜走文。	
−28	甕	− − −	内−篦磨。 外−口唇部：縄文、頸部：櫛描波状文、体部：斜走文。	
−29	甕	23.6 − −	内−篦磨。 外−口唇部：縄文、頸部：櫛描波状文、体部：斜走文。	
−30	甕	− − −	内−篦磨。 外−口唇部：縄文、体部：櫛描波状文。	
−31	甕	− − −	内−篦磨。 外−口唇部：縄文、体部：櫛描波状文。	
−32	甕	− − −	内−篦磨。 外−口唇部：縄文、体部：櫛描波状文。	

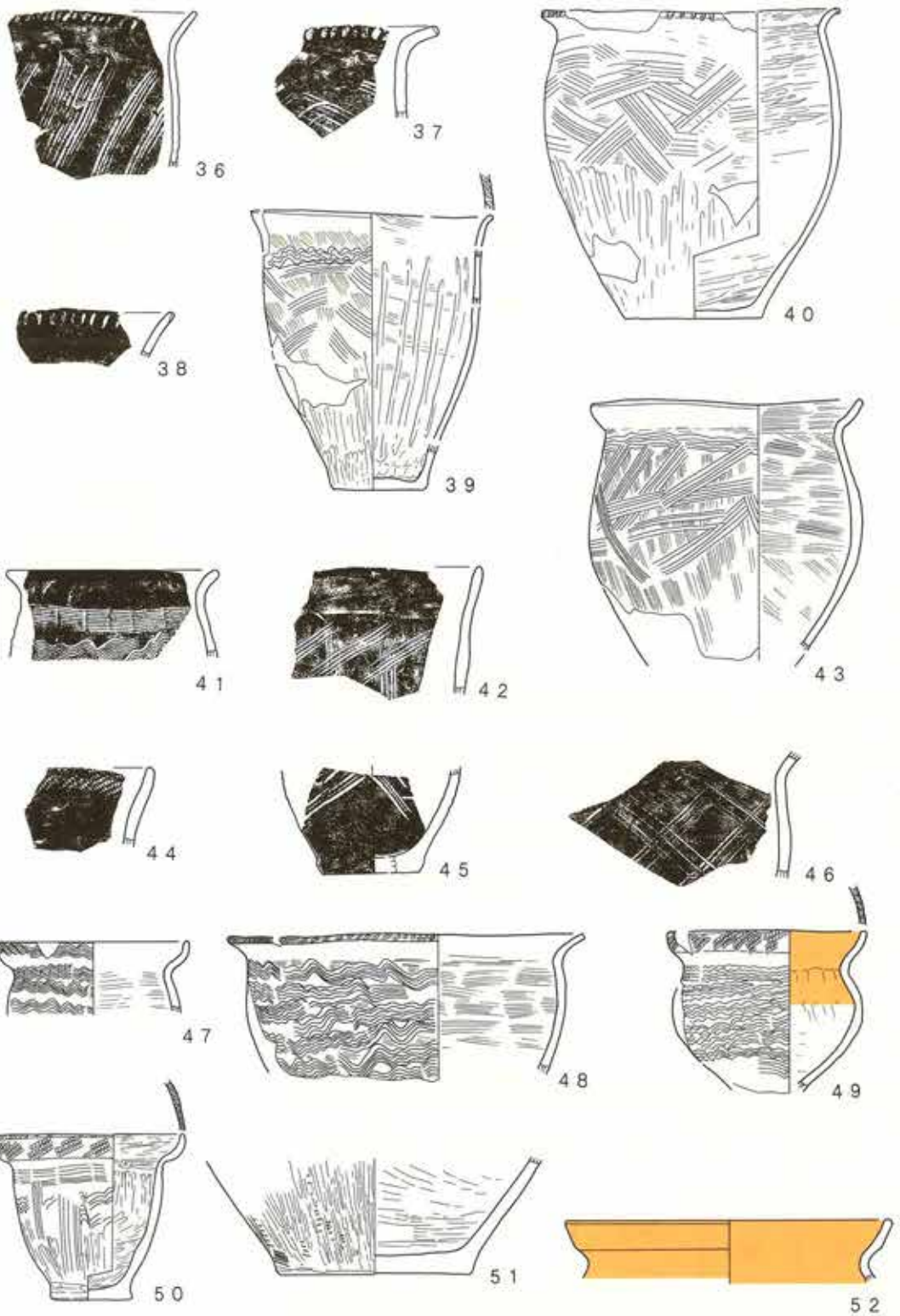
第267表　M8号溝址出土遺物観察表（2）



第348図　M８号溝址出土遺物（２）

挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
−33	甕	18.3 — —	内—篦磨。 外—口唇部：縄文、体部：斜走文。	
−34	甕	— — —	内—篦磨。 外—口唇部：縄文、口縁端部：押捺、体部：斜走文。	
−35	甕	15.7 — —	内—篦磨。 外—口唇部：縄文、体部：櫛描波状文。	
−36	甕	— — —	内—篦磨。 外—口唇部：刻目、体部：斜走文。	
−37	甕	— — —	内—篦磨き。 外—口唇部：刻目、体部：斜走文。	
−38	甕	— — —	内—刷毛目。 外—口唇部：刻目。	
−39	甕	15.2 6.0 17.2	内—刷毛目・篦磨。 外—口唇部：縄文、頸部：1条の櫛描波状文、体部：斜走文。	
−40	甕	18.6 8.4 19.2	内—篦磨。 外—口唇部：刻目、体部：斜走文。	
−41	甕	13.2 — —	内—篦磨。 外—頸部：簾状文、体部：櫛描波状文。	
−42	甕	— — —	内—篦磨。 外—斜走文。	
−43	甕	16.8 — —	内—刷毛目。 外—頸部：1条の櫛描波状文、体部：斜走文。	
−44	甕	— — —	内—篦磨。 外—口唇部・口縁端部：縄文。	
−45	甕	— 6.0 —	内—篦磨。 外—斜走文。	
−46	甕	— — —	内—篦磨。 外—斜走文。	
−47	甕	11.9 — —	内—刷毛目・篦磨。 外—櫛描波状文。	
−48	甕	22.2 — —	内—刷毛目。 外—口唇部：縄文、体部：櫛描波状文。	
−49	台付甕	12.4 — —	内—体部上半赤彩。 外—口唇・口縁部：縄文、体部：櫛描波状文。	
−50	甕	12.2 5.0 10.0	内—篦磨。 外—口唇・口縁部：縄文、頸部：簾状文、体部：縦位条線・櫛描波状文。	
−51	甕	— 12.2 —	内外—篦磨。	

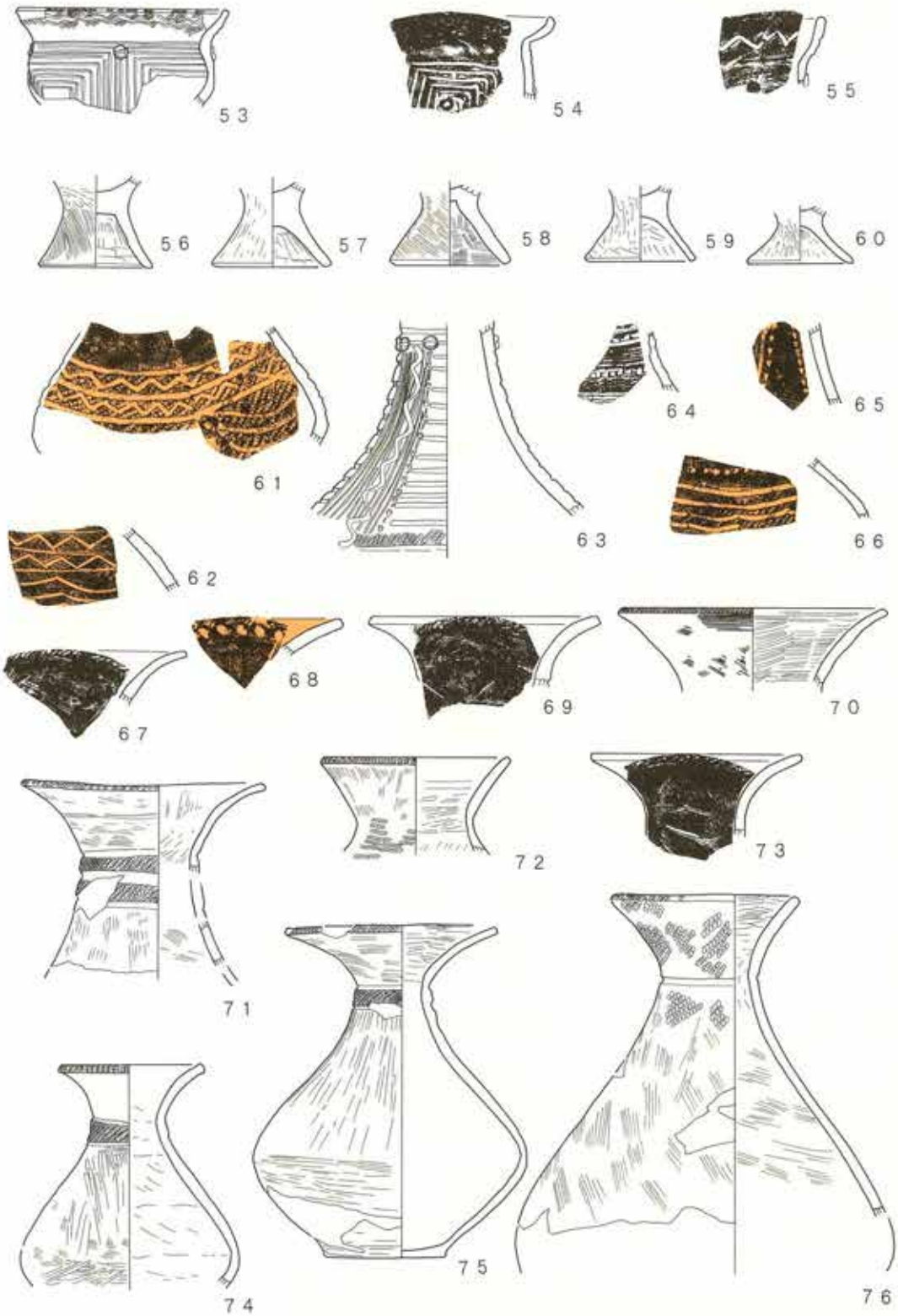
第268表　M8号溝址出土遺物観察表（3）



第349図　M８号溝址出土遺物（３）

挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
−52	鉢	20.3 − −	内外−赤彩。	
−53	台付甕	13.4 − −	内−篦磨。 外−口唇：縄文、口縁部：縄文＋２条の篦描波状文、体部：連続「コ」字文＋円形貼付文。	
−54	台付甕	− − −	内−篦磨。 外−口唇・口縁部：縄文体部：連続「コ」字文＋円形貼付文。	
−55	台付甕	− − −	内−篦磨き。 外−口唇部：縄文、口縁部：篦描波状文、体部：円形貼付文。	
−56	台付甕	− 7.1 −	内−篦ナデ。 外−刷毛目・篦磨き。	
−57	台付甕	− 7.5 −	内外−ナデ。	
−58	台付甕	− 7.5 −	内外−刷毛目。	
−59	台付甕	− 7.0 −	内外−ナデ。	
−60	台付甕	− 6.7 −	内外−ナデ。	
−61	壷	− − −	内−刷毛目。 外−篦描平行沈線・波状文・弧文・縄文・赤彩。	
−62	壷	− − −	内−ナデ。 外−赤彩、篦描平行沈線・鋸歯文。	
−63	壷	− − −	内−ナデ。 外−篦描平行沈線・縦位垂下刺突列・波状文・条線・縄文。	
−64	壷	− − −	内−刷毛目。 外−平行沈線・条線・刺突列。	
−65	壷	− − −	内−刷毛目。 外−赤彩・刺突列。	
−66	壷	− − −	内−刷毛目。 外−平行沈線・刺突列・弧文・縄文。	
−67	壷	− − −	内−ナデ。 外−口唇部：縄文。	
−68	壷	− − −	内−赤彩。 外−赤彩、口唇部：縄文、口縁端部：押捺。	
−69	壷	14.5 − −	内−ナデ。 外−口唇部：縄文。	
−70	壷	16.9 − −	内−ナデ。 外−口唇部：縄文。	

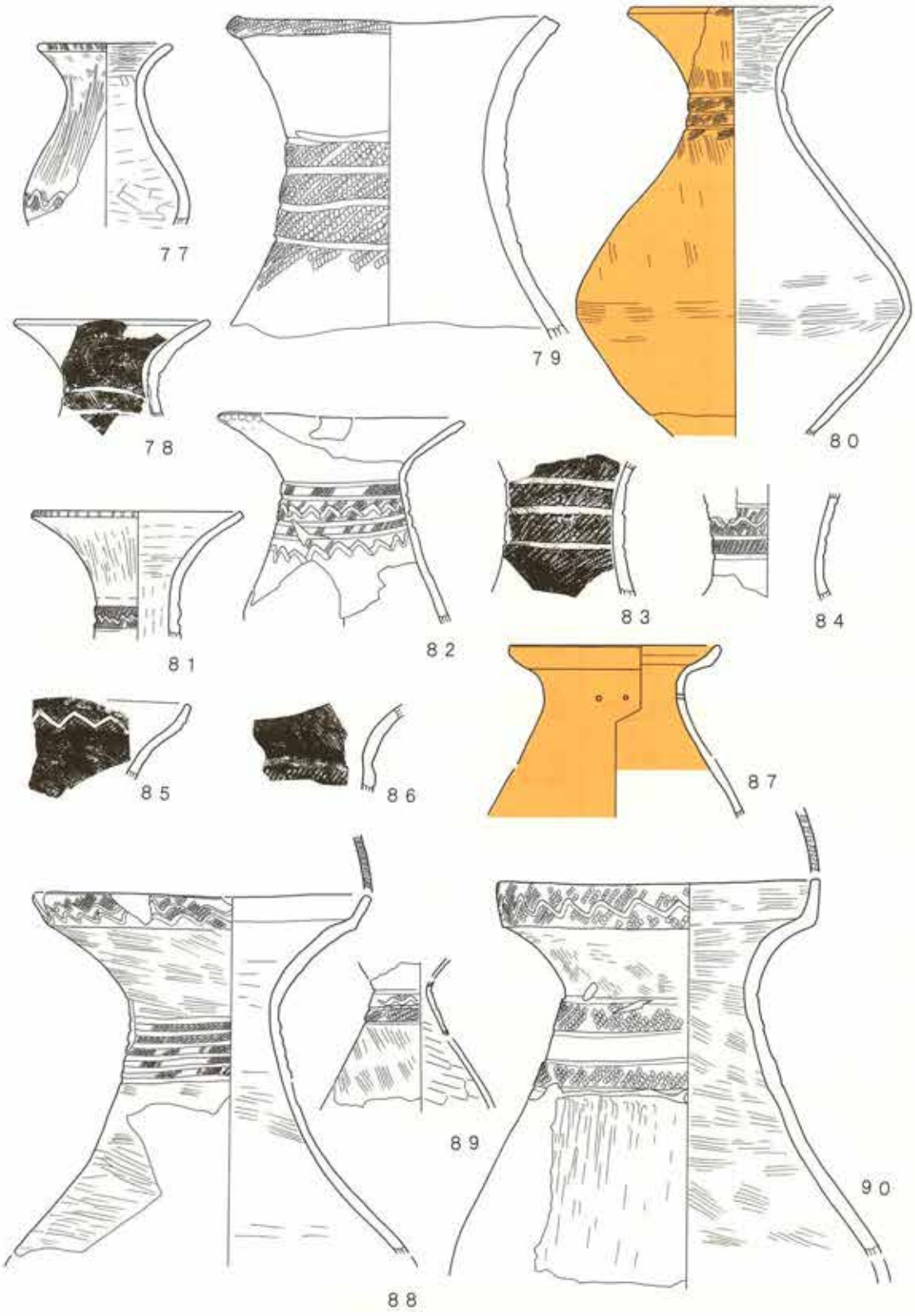
第269表　Ｍ８号溝址出土遺物観察表（４）



第350図　M８号溝址出土遺物（４）

挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
−71	壷	15.2 − −	内−刷毛目・ナデ。 外−口唇部：縄文、頸部：篦描平行沈線間に縄文。	
−72	壷	11.9 − −	内−刷毛目・篦磨。 外−口唇部・頸部：縄文。	
−73	壷	13.2 − −	内−ナデ・刷毛目。 外−口唇部：縄文。	
−74	壷	9.1 − −	内−刷毛目・ナデ。 外−口唇部：縄文、頸部：篦描平行沈線間に縄文。	
−75	壷	13.2 7.4 −	内−刷毛目・ナデ。 外−口唇部：縄文、頸部：篦描平行沈線間に縄文。	
−76	壷	11.8 − −	内−刷毛目・ナデ・篦磨き。 外−頸部：篦描平行沈線、口縁部〜頸部：縄文。	
−77	壷	8.6 − −	内−ナデ・篦磨き。 外−口唇部：縄文、体部：篦描波状文・縄文。	
−78	壷	12.5 − −	内−ナデ。 外−頸部：篦描平行沈線。	
−79	壷	10.6 − −	内−刷毛目・ナデ。 外−口唇部：縄文、頸部：篦描平行沈線間に縄文。	
−80	壷	13.2 − −	内−刷毛目・ナデ。 外−口唇部：縄文、頸部：篦描平行沈線間に縄文。	
−81	壷	13.5 − −	内−ナデ。 外−口唇部：刻目、頸部：篦描平行沈線間に波状文・縄文。	
−82	壷	15.8 − −	内−刷毛目・ナデ。 外−頸部：篦描平行沈線・波状文・縄文。	
−83	壷	− − −	内−ナデ。 外−頸部：篦描平行沈線間に縄文。	
−84	壷	− − −	内−ナデ。 外−頸部：篦描平行沈線間に縄文・波状文。	
−85	壷	− − −	内−ナデ。 外−口縁部：縄文＋篦描波状文。	
−86	壷	− − −	内−ナデ。 外−頸部微隆起帯に縄文。	
−87	壷	13.6 − −	内外−赤彩、頸部に2孔。	
−88	壷	21.6 − −	内−ナデ・刷毛目。 外−口唇部：縄文、口縁部：縄文＋篦描波状文、頸部：平行沈線間に縄文。	
−89	壷	− − −	内−ナデ。 外−頸部：平行沈線間に波状文・縄文。	

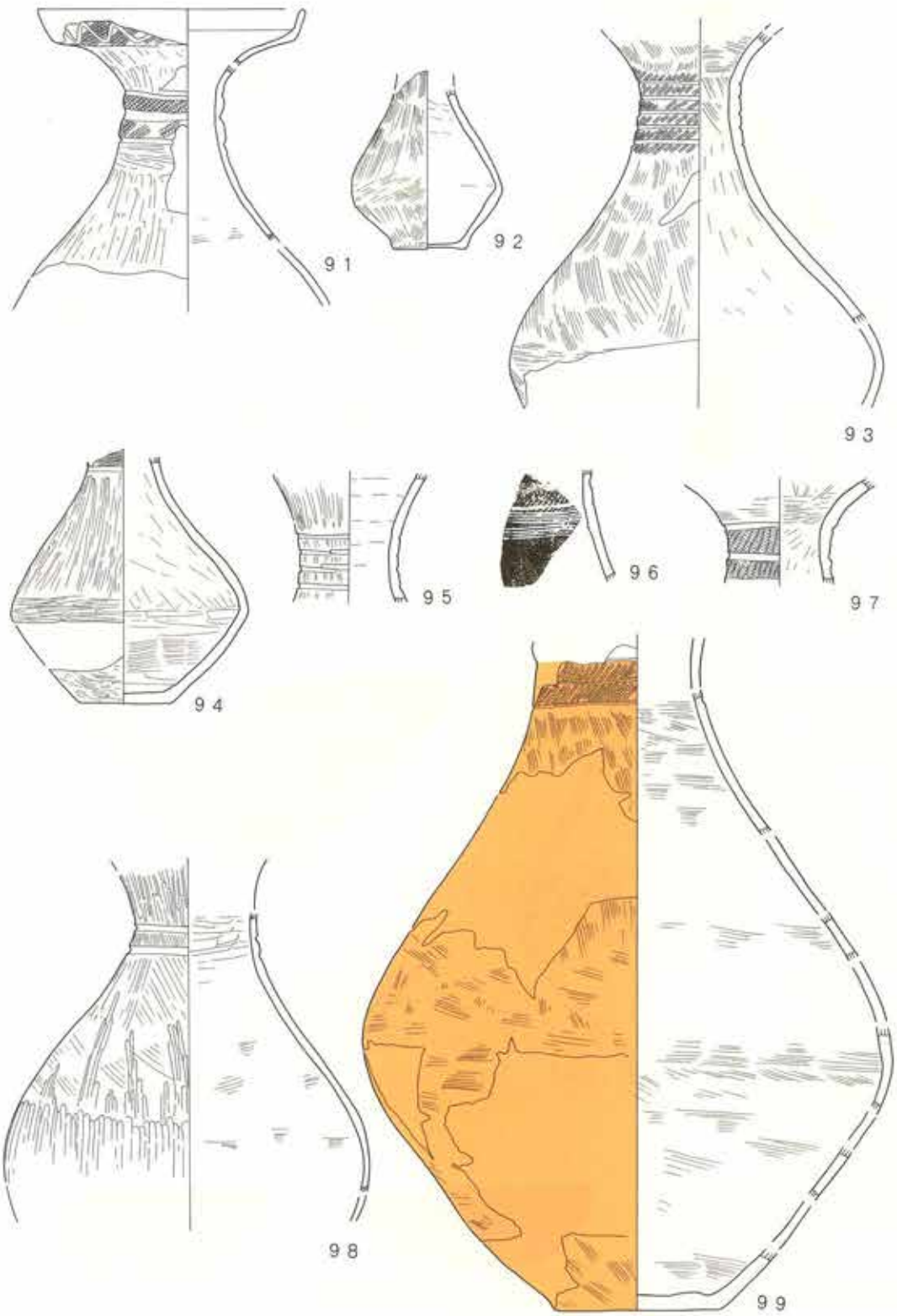
第270表　M8号溝址出土遺物観察表（5）



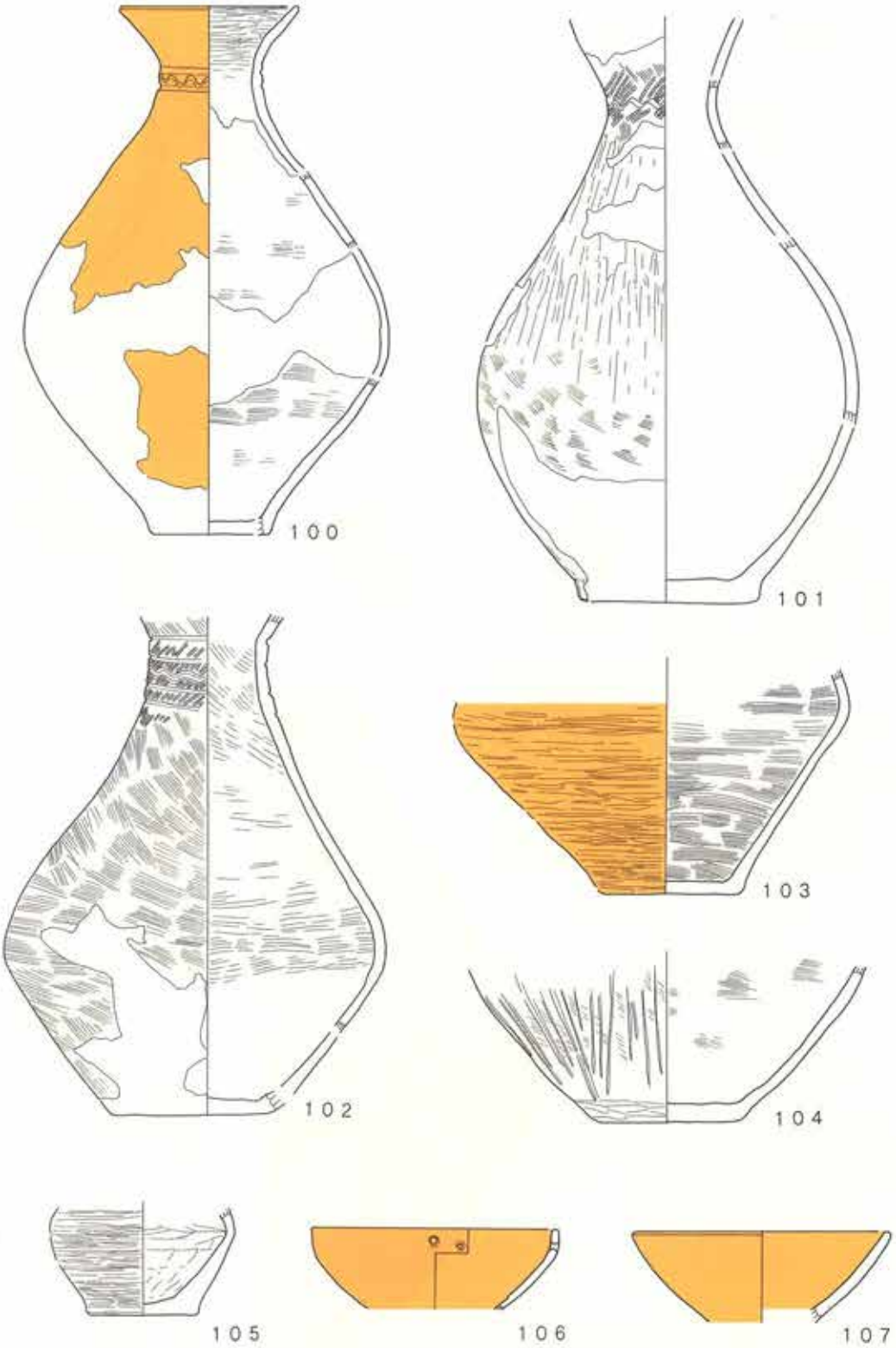
第351図　M８号溝址出土遺物（５）

挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
−90	壷	20.6 − −	内−ナデ・刷毛目。 外−口唇部：縄文、口縁部：縄文＋篦描波状文、頸部：平行沈線間に縄文。	
−91	壷	16.8 − −	内−ナデ・刷毛目。 外−口唇部：縄文、口縁部：縄文＋篦描波状文、頸部：平行沈線間に縄文。	
−92	壷	− 4.5 −	内−ナデ。 外−刷毛目。	
−93	壷	− − −	内−ナデ・刷毛目。 外−頸部：平行沈線間に縄文。	
−94	壷	− 5.6 −	内−ナデ・刷毛目。 外−頸部：平行沈線間に縄文。	
−95	壷	− − −	内−篦磨き。 外−頸部：平行沈線。	
−96	壷	− − −	内−ナデ。 外−平行条線、縄文。	
−97	壷	− − −	内−ナデ・刷毛目。 外−頸部：平行沈線間に縄文。	
−98	壷	− − −	内−篦磨き。 外−頸部：平行沈線。	
−99	壷	− 8.4 −	内−ナデ・刷毛目。 外−頸部：平行沈線間に縄文。	
−100	壷	11.0 7.4 32.4	内−刷毛目・篦磨。 外−赤彩、頸部：平行沈線間に波状文。	
−101	壷	− 11.0 −	内−ナデ・刷毛目。 外−頸部：縄文。	
−102	壷	− 9.4 −	内−刷毛目。 外−頸部：平行沈線間に波状文・縄文。	
−103	壷	− 8.4 −	内−刷毛目。 外−篦磨。	
−104	壷	− 8.5 −	内−刷毛目。 外−刷毛目→篦磨。	
−105	壷	− 6.5 −	内−ナデ。 外−篦磨。	
−106	鉢	15.2 − −	内外−赤彩、口縁に2孔。	
−107	鉢	15.9 − −	内外−赤彩。	
−108	鉢	21.0 − −	内外−赤彩。	

第271表　M8号溝址出土遺物観察表（6）



第352図　M８号溝址出土遺物（６）



第353図　M８号溝址出土遺物（７）

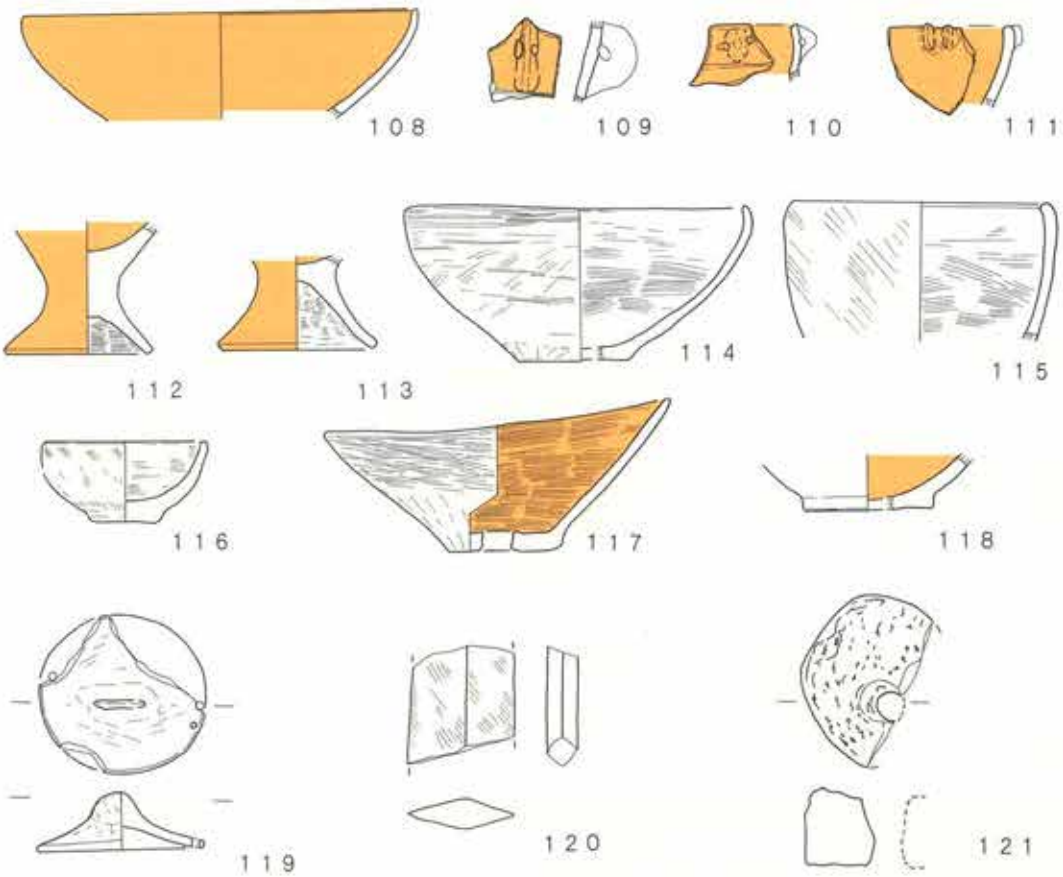
挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
−109	鉢	− − −	内外−赤彩、把手。	
−110	鉢	− − −	内外−赤彩、把手。	
−111	鉢	− − −	内外−赤彩、突起。	
−112	高坏	− 7.8 −	脚内−刷毛目、他は赤彩。	
−113	高坏	− 8.4 −	脚内−刷毛目、他は赤彩。	
−114	鉢	18.3 5.8 8.0	内−刷毛目。 外−刷毛目・篦磨。	
−115	甑	13.5 − −	内外−刷毛目。	
−116	鉢	8.8 3.5 4.3	内外−刷毛目。	
−117	甑	18.5 5.5 6.7	内−刷毛目。 外−篦削→刷毛目。	単孔。
−118	鉢	− 6.8 −	内外−赤彩。	
−119	蓋	− 8.8 −	内外−ナデ。	縁に対となる４ヶの円孔。
−120	剣型石製品	5.7 5.5 1.6		82.0ｇ
−121	軽石製石製品	18.4 12.0 7.2		630ｇ

第272表　Ｍ８号溝址出土遺物観察表（７）

Ｍ９号溝址（第355図、図版九十六・二百二十三）

遺構−Ⅶう４グリットを中心に検出された。Ｈ83号・Ｈ85号住居址に切られる。幅0.3ｍ〜0.4ｍ、深度10cm〜20cmの溝が直径５ｍの円形に掘り込まれていた。溝の内側には施設は存在しない。また、溝の掘り込み方もかなり粗雑であった。本址と形態に近いものとしては円形周溝墓、平地式住居と呼ばれる遺構等が存在するが、Ｍ７号溝址同様に本址はこれらとは異なる性格の遺構と思われる。

遺物−土師器の甕片が２点（１・２）、弥生土器の甕片が１点（３）出土している。土師器の甕は２点共に内外面にナデ調整が施されている。弥生土器の甕は肥厚した口唇部に刻目を施し、体部には櫛歯状工具による斜走文が施文される。



第354図　M８号溝址出土遺物（８）

挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
－1	土師器 甕	17.7 － －	内外－ナデ。	
－2	土師器 甕	20.0 － －	内外－ナデ。	
－3	弥生土器 甕	36.9 － －	内－篦磨。 外－口縁部：刻目，体部：斜走文。	

第273表　M９号溝址出土遺物観察表

第355図　M９号溝址出土遺物

M10号溝址

遺構－ⅩⅢお７グリットを中心に検出された。幅1.1ｍ～1.6ｍ、深度13cm～30cmの規模を有する。出土遺物は皆無であった。

M11号溝址

遺構－Ⅸい10グリットからⅩう７グリットにかけて検出された。幅1.8ｍ～2.9ｍ、深度30cm～50cmの規模を有し、鍋底状の断面形状を呈する。H156号・H165号・H176号住居址等の重複する全ての遺構に切られている。人工の溝址と考えられる。出土遺物は皆無であった。

第５節　Pit

いくつかのピットにより構成される遺構、例えば掘立柱建物址のような遺構を構成するであろうが調査範囲の制約等により判断しかねるPitや、単独で機能を有したであろうPitも含め、今回の調査において346基のPitが検出された。本来ならばその個々についての記述が成されるべきあろうが、本報告書においては割愛する。Pitから出土した図示可能な遺物については以下に図と表を掲載する。

挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
－1	鉄製 金具	6.1 4.3 1.7		馬具本鎧の頭部に接続する逆「U」字状金具。30.0ｇ

第274表　Pit42出土遺物観察表

挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
－1	磨製石鏃	6.6 3.2 0.5		1.8ｇ 未製品。

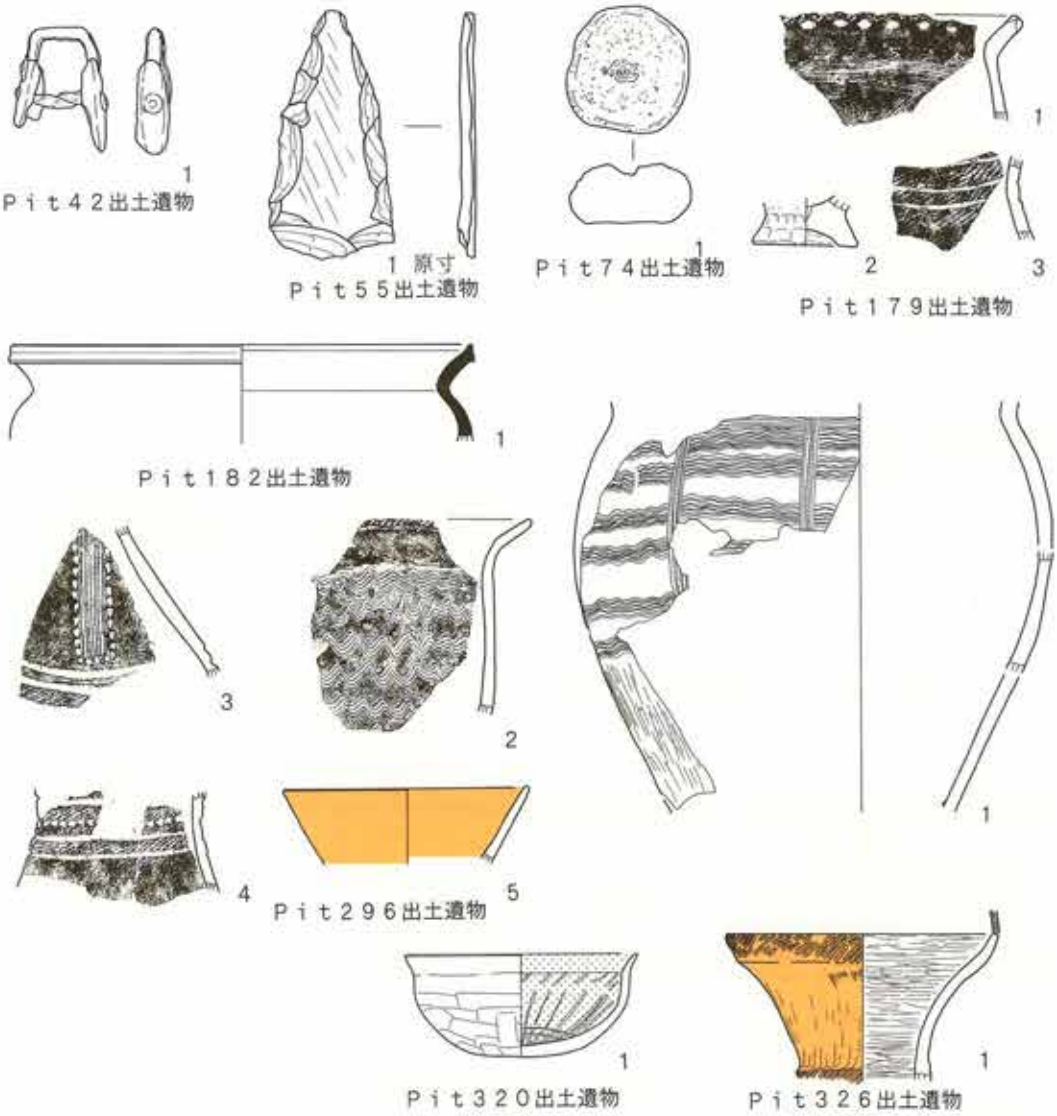
第275表　Pit55出土遺物観察表

挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
－1	凹石	6.7 6.4 3.0		150ｇ

第276表　Pit74出土遺物観察表

挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
－1	弥生土器 甕	－ － －	内－篦磨。 外－口唇：押捺・縄文、体部：斜走文。	
－2	土師器 高杯	－ 5.5 －	内外－ヘラナデ。	
－3	弥生土器 壷	－ － －	内－ナデ。 外－篦描平行沈線間に縄文。	

第277表　Pit179出土遺物観察表



第356図　Pit出土遺物

挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
−1	須恵器 甕	24.3 − −		

第278表　Pit182出土遺物観察表

挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
−1	土師器 坏	12.3 − 5.5	内−篦磨→黒色処理。 外−篦削。	

第279表　Pit320出土遺物観察表

挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
－1	弥生土器 壷	14.4 － －	内－篦磨。 外－口唇・口縁部・頸部：縄文。	

第280表　Pit326出土遺物観察表

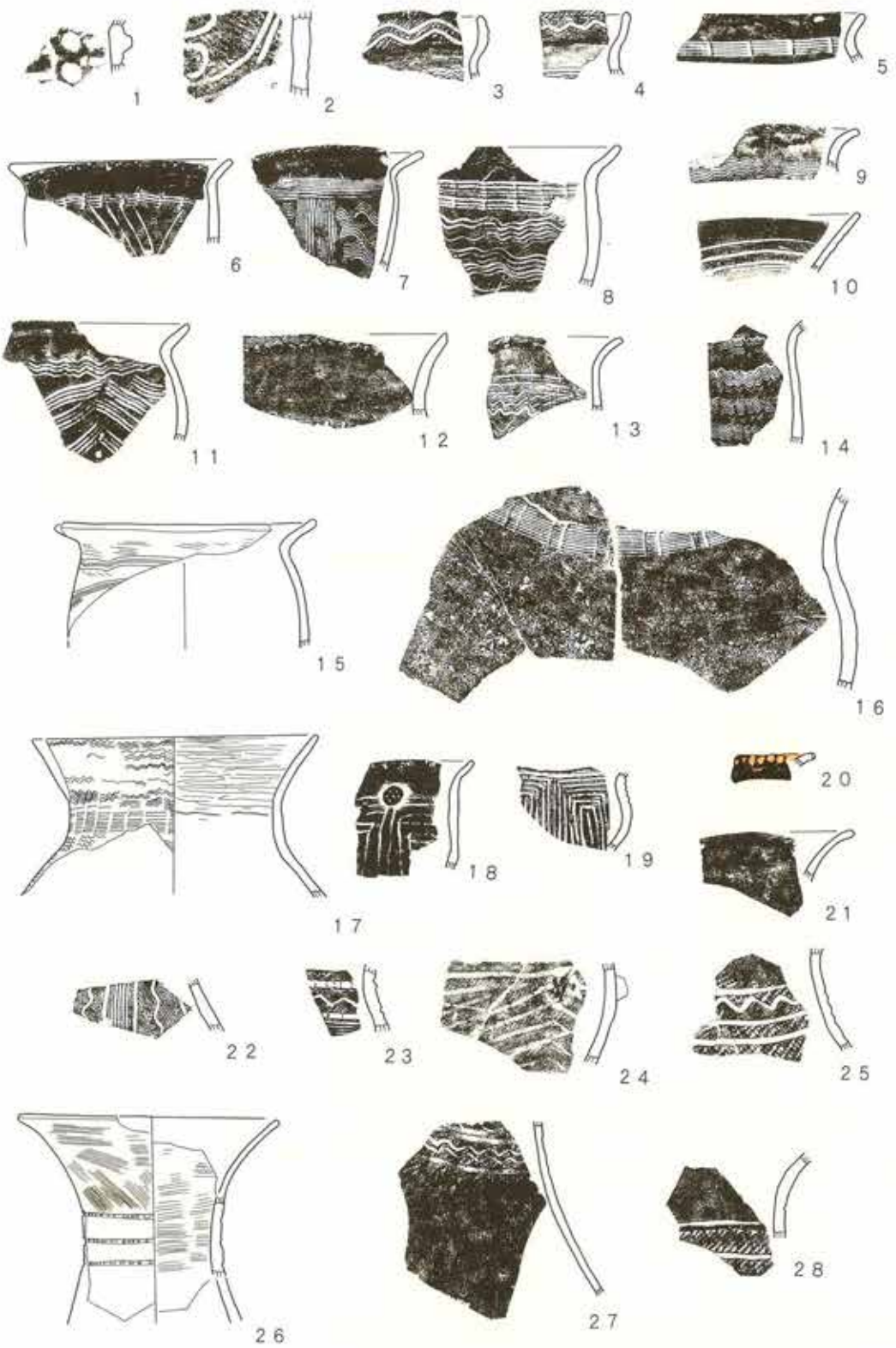
挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
－1	弥生土器 甕	－ － －	内－篦磨。 外－体部：横位櫛描波状文を縦位条線で区画。	
－2	弥生土器 甕	－ － －	内－篦磨。 外－口唇：縄文、頸部下：櫛描波状文。	
－3	弥生土器 壷	－ － －	内－ナデ。 外－刺突列による区画内に縦位条線、平行篦描沈線間に縄文。	
－4	弥生土器 壷	－ － －	内－ナデ。 外－篦描平行沈線間に縄文・刺突列。	
－5	弥生土器 鉢	13.0 － －	内外－赤彩。	

第281表　Pit296出土遺物観察表

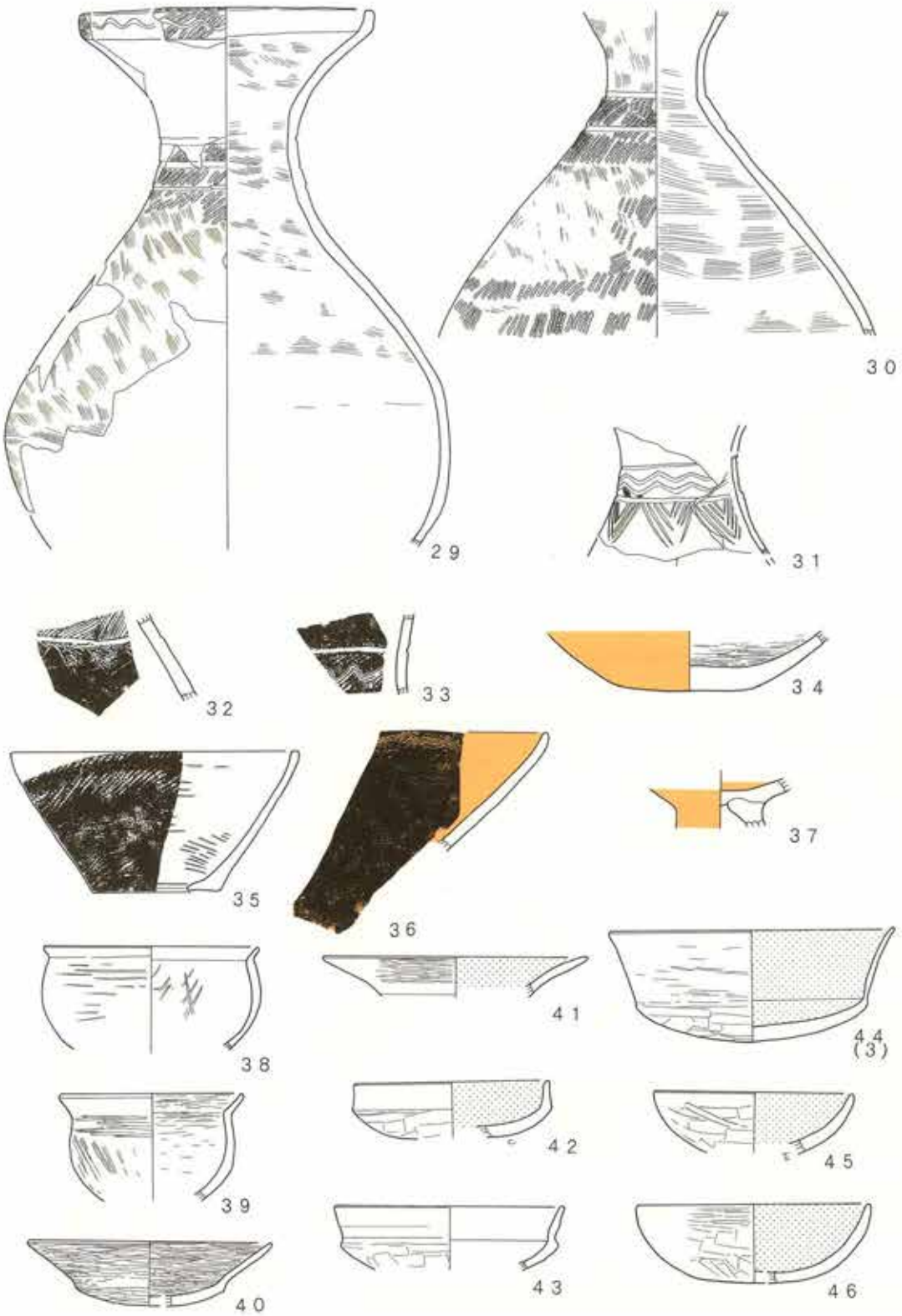
第6節　遺構外出土の遺物

挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
－1	縄文土器 鉢	－ － －		後期前半。
－2	縄文土器 鉢	－ － －		後期前半。
－3	弥生土器 甕	－ － －	内－篦磨。 外－口唇：縄文、口縁部：縄文＋篦描波状文、頸部：波状文。	
－4	弥生土器 甕	－ － －	内－篦磨。 外－口唇部：縄文、口縁部：縄文＋篦描波状文、頸部：簾状文。	
－5	弥生土器 甕	－ － －	内－篦磨。 外－口唇部：縄文、頸部：簾状文。	
－6	弥生土器 甕	13.7 － －	内－篦磨。 外－口唇部：縄文、頸部：簾状文、体部：篦描斜走文。	
－7	弥生土器 甕	－ － －	内－篦磨。 外－口唇部：縄文、頸部：条線、体部：縦位条線＋櫛描波状文。	
－8	弥生土器 甕	－ － －	内－篦磨。 外－口縁・体部：篦描波状、頸部：簾状文。	
－9	弥生土器 甕	－ － －	内－篦磨。 外－口唇部：縄文、頸部：簾状文。	

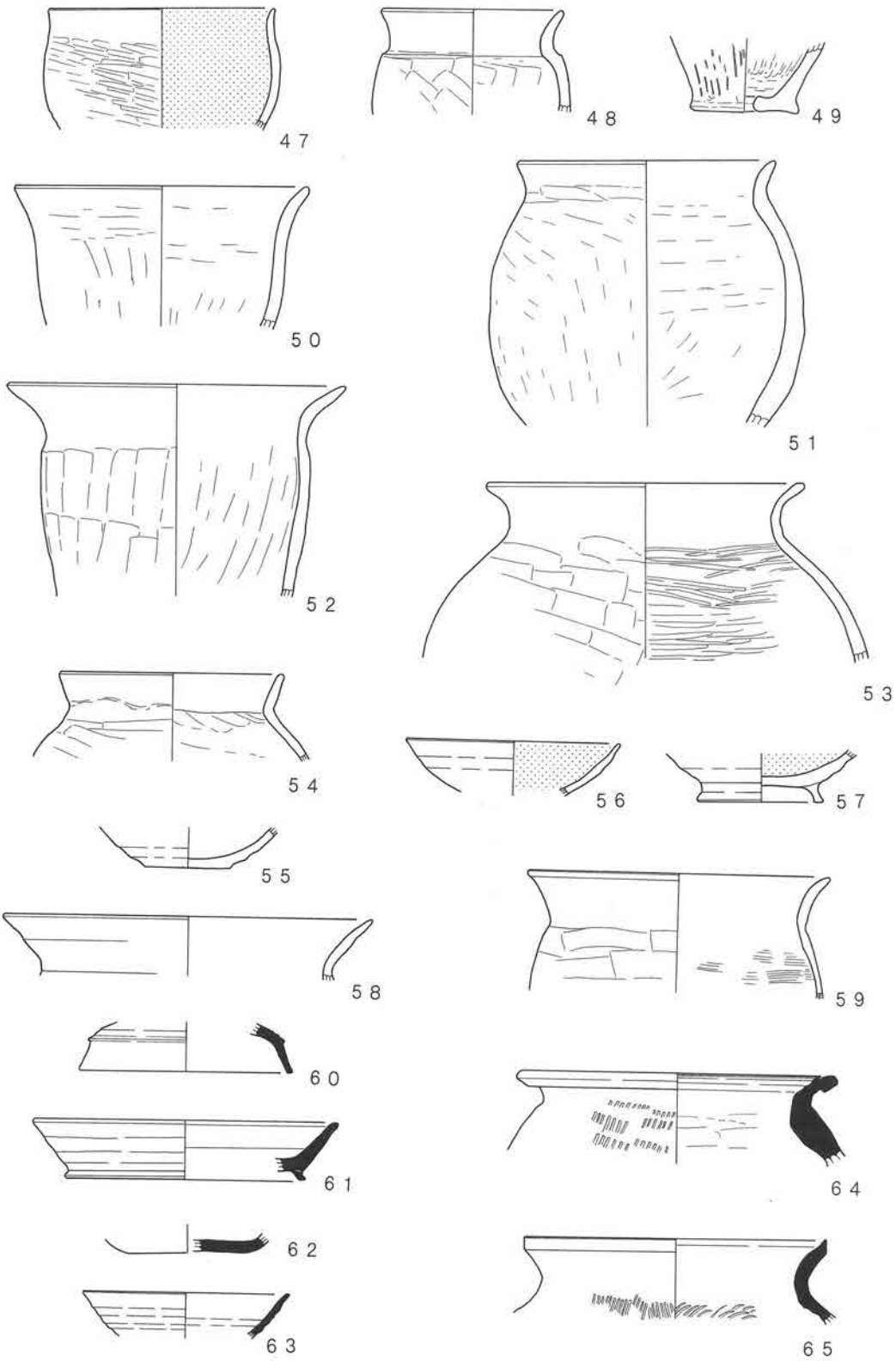
第282表　遺構外出土遺物観察表（1）



第357図　遺構外出土遺物（1）



第358図　遺構外出土遺物（2）



第359図　遺構外出土遺物（3）

挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
−10	弥生土器 甕	− − −	篦磨。 外−篦描平行沈線。	
−11	弥生土器 甕	− − −	内−篦磨。 外−口唇：縄文、頸部：櫛描波状文、体部：斜走文。	
−12	弥生土器 甕	− − −	内−篦磨。 外−口縁端部：１条の櫛描波状、頸部：簾状文。	
−13	弥生土器 甕	− − −	内−篦磨。 外−口縁端部：櫛描波状文、頸部：簾状文、体部：斜走文。	
−14	弥生土器 甕	− − −	内−篦磨。 外−櫛描波状文。	
−15	弥生土器 甕	16.0 − −	内−篦磨。 外−櫛描波状文。	
−16	弥生土器 甕	− − −	内−篦磨。 外−口縁部：櫛描波状文、頸部：簾状文。	
−17	弥生土器 甕	17.6 − −	内−篦磨。 外−口縁・体部：櫛描波状文、頸部：簾状文。	
−18	弥生土器 甕	− − −	内−篦磨。 外−口唇部：縄文、体部：連続「コ」字文＋円形貼付文。	
−19	弥生土器 台付甕	− − −	内−篦磨。 外−連続「コ」字文。	
−20	弥生土器 壷	− − −	内外−赤彩、口唇部に刺突。	
−21	弥生土器 壷	− − −	内−篦磨。 外−口唇：縄文。	
−22	弥生土器 壷	− − −	内−刷毛目。 外−縦位篦描波状文・沈線・条線。	
−23	弥生土器 壷	− − −	内−ナデ。 外−刺突列・波状文・条線。	
−24	弥生土器 壷	− − −	内−刷毛目。 外−弧文・縄文。	
−25	弥生土器 壷	− − −	内−刷毛目。 外−篦描平行沈線間に縄文。	
−26	弥生土器 壷	18.6 − −	内−刷毛目。 外−刺突列。	
−27	弥生土器 壷	− − −	内−刷毛目。 外−篦描平行沈線間に波状文・縄文。	
−28	弥生土器 壷	− − −	内−ナデ。 外−篦描平行沈線間に縄文。	
−29	弥生土器	18.6 − −	内−刷毛目。 外−口唇部：縄文、口縁部：縄文＋篦描波状文、頸部：篦描平行沈線間に縄文。	

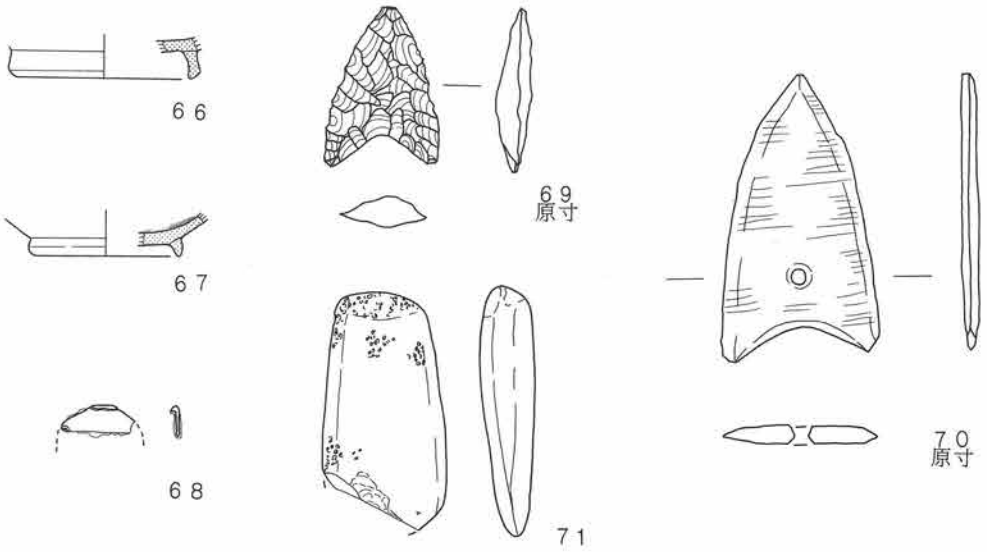
第283表　遺構外出土遺物観察表（２）

挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
−30	弥生土器 壷	− − −	内−刷毛目。 外−篦描平行沈線間に縄文。	
−31	弥生土器 壷	− − −	内−ナデ。 外−篦描平行沈線間に縄文、その下に鋸歯文。	
−32	弥生土器 壷	− − −	内−刷毛目。 外−篦描平行沈線間に条線、その下に鋸歯文。	
−33	弥生土器 壷	− − −	内−ナデ。 外−篦描平行沈線間に縄文＋波状文。	
−34	弥生土器 壷	− 5.0 −	内−篦磨。 外−赤彩。	
−35	弥生土器 甕	18.2 8.0 8.9	内−刷毛目・篦磨。 外−口縁部：縄文。	
−36	弥生土器 鉢	− − −	内外−赤彩、口縁端部に１条の波状文。	
−37	弥生土器 高杯	− − −	内外−赤彩、脚内ナデ。	
−38	土師器 杯	13.6 − −	内外−篦磨。	
−39	土師器 杯	13.5 − −	内外−篦磨。	
−40	土師器 杯	15.4 4.0 −	内外−篦磨。	
−41	土師器 杯	22.7 − −	内−黒色処理。 外−篦磨。	
−42	土師器 杯	14.5 − −	内−黒色処理。 外−篦磨。	
−43	土師器 杯	14.5 − −	内−ナデ。 外−篦削。	
−44	土師器 杯	18.0 − 7.1	内−黒色処理。 外−篦削。	
−45	土師器 杯	12.5 − −	内−黒色処理。 外−篦削。	
−46	土師器 杯	14.7 − −	内−黒色処理。 外−篦削。	
−47	土師器 鉢	13.8 − −	内−黒色処理。 外−篦磨。	
−48	土師器 小型甕	25.8 − −	内−ナデ。 外−篦削。	
−49	土師器 甑	− 6.2 −	内外−篦削。	

第284表　遺構外出土遺物観察表（３）

挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
−50	土師器 甕	18.2 − −	内外ーナデ。	
−51	土師器 甕	16.0 − −	内外ーナデ。	
−52	土師器 甕	20.8 − −	内ーナデ。 外ー篦削。	
−53	土師器 壷	19.6 − −	内外ー篦磨。	
−54	土師器 壷	13.8 − −	内ーナデ。 外ー篦削。	
−55	土師器 坏	− 7.8 −	右回転糸切り。	
−56	土師器 坏	13.2 − −	黒色処理。	
−57	土師器 有台坏	− 7.7 −	内ー黒色処理。 外ー方向不明回転糸切り→回転篦削り→付け高台。	
−58	土師器 甕	22.8 − −	内外ーナデ。	
−59	土師器 甕	18.6 − −	内ー刷毛目・ナデ。 外ー篦削。	
−60	須恵器 杯蓋	− 13.2 −		田辺陶邑編年 TK43号窯式。
−61	須恵器 有台杯	18.8 − −		
−62	須恵器 杯	− − −	方向不明回転糸切り。	
−63	須恵器 杯	12.7 − −		
−64	須恵器 甕	19.8 − −		
−65	須恵器 甕	18.5 − −		
−66	杯釉陶器 碗	− 10.0 −		光ヶ丘1号窯式。
−67	杯釉陶器 碗	− 8.0 −		大原2号窯式。
−68	鉄製紡錘車	3.7 1.5 0.2		3.0g
−69	打製石鏃	4.1 3.0 0.9		0.9g 黒曜石製。

第285表　遺構外出土遺物観察表（4）



第360図　遺構外出土遺物（4）

挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
−70	打製石鏃	7.3 4.1 0.4		1.8g
−71	磨製石斧	11.7 6.5 2.8		440g

第286表　遺構外出土遺物観察表（5）

第7節　Ⅱ次調査における出土遺物

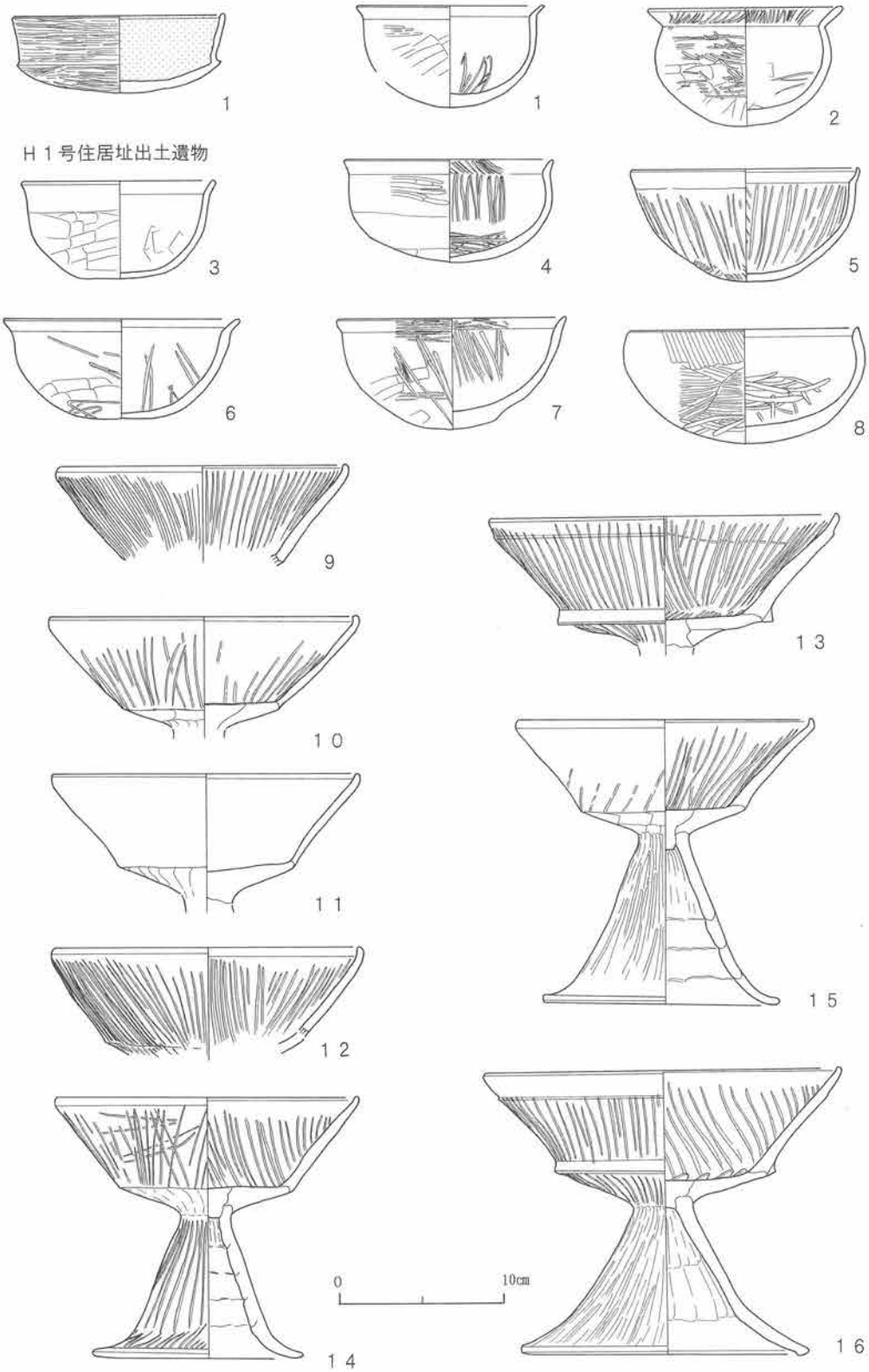
下水道工事に伴い実施されたⅡ次調査の調査範囲は、今回の道路建設工事が予定さていた道路敷内に設定されていたため、Ⅱ次調査の範囲を完全に包括するかたちで今回の調査がなされた。その結果、2次調査において検出された遺構・遺物と今回の調査において出土した遺構・遺物の多くが接合関係を有する結果となった。また、1995年に刊行された「西一本柳遺跡Ⅱ・中西ノ久保遺跡Ⅰ」報告書においては、出土遺物が掲載されていないため、接合関係にある遺構の遺物はⅡ次調査分も含め本書に掲載した。しかし、接合関係を有さない遺構もⅡ次調査分に存在するため、本節でこれらの遺物を取り上げる。

挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
－1	土師器 坏	13.0 － 4.5	内－黒色処理。 外－篦磨。	

第287表　Ⅱ次調査Ｈ1号住居址出土遺物観察表

挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
－1	土師器 坏	11.5 － 6.2	内－篦磨。 外－篦削→篦磨。	
－2	土師器 坏	11.8 － 7.3	内－ナデ→篦磨。 外－篦削→篦磨。	
－3	土師器 坏	11.8 3.0 6.0	内－ナデ。 外－篦削。	
－4	土師器 坏	12.8 － 6.3	内－篦磨。 外－篦削→篦磨。	
－5	土師器 坏	14.0 － 6.9	内－篦磨。 外－篦磨。	
－6	土師器 坏	14.3 4.3 6.0	内－篦磨。 外－篦削→篦磨。	
－7	土師器 坏	14.0 2.0 6.8	内－篦磨。 外－篦削→篦磨。	

第288表　Ⅱ次調査Ｈ3号住居址出土遺物観察表（1）



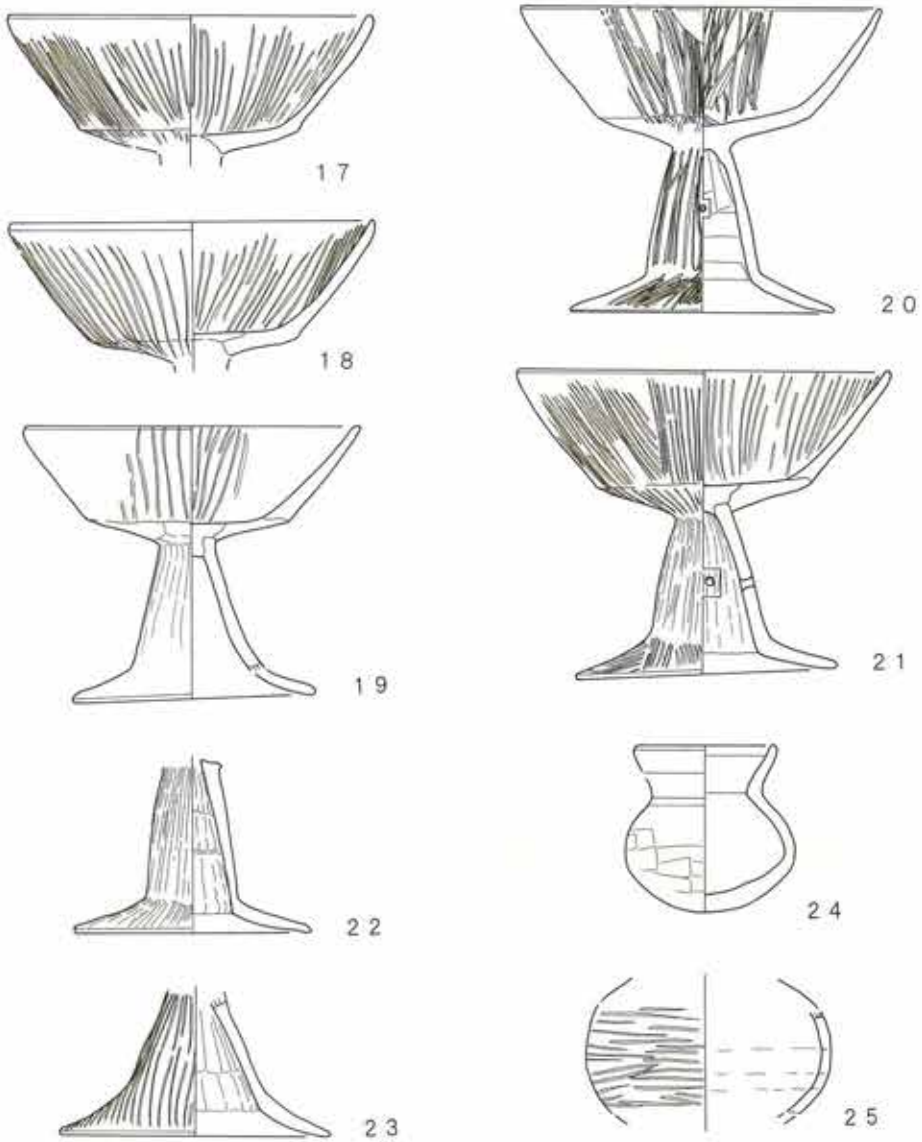
第361図　第Ⅱ次調査Ｈ１・３号住居址出土遺物

挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
－8	土師器 坏	14.0 － 7.0	内外－篦磨。	
－9	土師器 高杯	17.9 － －	内外－篦磨。	
－10	土師器 高杯	19.0 － －	内－篦磨。 外－篦削→篦磨。	
－11	土師器 高杯	18.9 － －	内－ナデ。 外－篦削→ナデ。	
－12	土師器 高杯	19.1 － －	内外－篦磨。	
－13	土師器 高杯	21.4 － －	内外－篦磨。	
－14	土師器 高坏	18.5 13.0 16.0	内－篦磨、脚内：ヘラナデ・篦削。 外－篦削→篦磨。	
－15	土師器 高杯	18.2 14.5 17.4	内－篦磨、脚内：ヘラナデ・篦削。 外－篦削→篦磨。	
－16	土師器 高杯	21.8 17.5 17.5	内－篦磨、脚内：ヘラナデ・篦削。 外－篦削→篦磨。	
－17	土師器 高杯	19.3 － －	内外－篦磨。	
－18	土師器 高杯	19.4 － －	内外－篦磨。	
－19	土師器 高杯	17.8 12.8 14.5	内－篦磨、脚内：ヘラナデ・篦削。 外－篦削→篦磨。	
－20	土師器 高杯	19.0 14.0 16.1	内－篦磨、脚内：ヘラナデ・篦削。 外－篦磨。	脚に円孔。
－21	土師器 高杯	19.8 13.9 16.0	内－篦磨、脚内：ヘラナデ・篦削。 外－篦磨。	脚に円孔。
－22	土師器 高杯	－ 12.5 －	内－ヘラナデ・篦削。 外－篦磨。	
－23	土師器 高杯	－ 14.4 －	内－ヘラナデ・篦磨。 外－篦磨。	
－24	土師器 壺	7.5 － 8.9	内－ナデ。 外－篦削。	
－25	土師器 壺	－ － －	内－ナデ。 外－篦磨。	

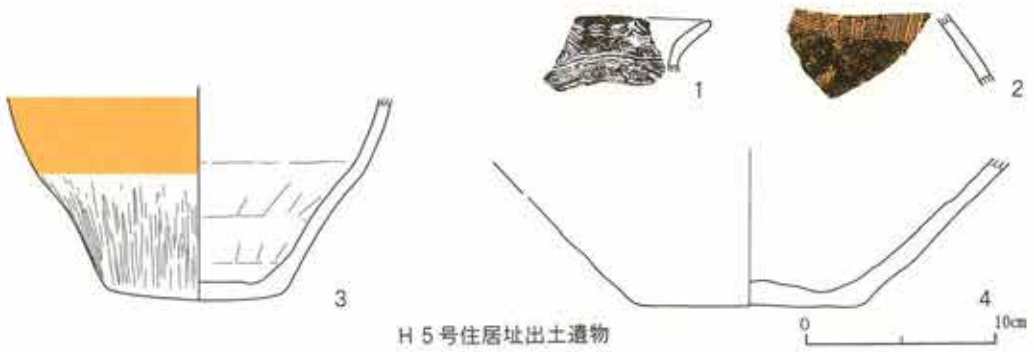
第289表　Ⅱ次調査Ｈ３号住居址出土遺物観察表（２）

挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
－1	弥生土器 甕	－ － －	内－篦磨。 外－口縁部：櫛描波状文、頸部簾状文。	

第290表　Ⅱ次調査Ｈ５号住居址出土遺物観察表（１）



H３号住居址出土遺物



H５号住居址出土遺物

第362図　第Ⅱ次調査H３・５号住居址出土遺物

挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
－2	弥生土器 壷	－ － －	内－ナデ・刷毛目。 外－赤彩、「T」字文。	
－3	弥生土器 壷	－ 9.5 －	内－ナデ。 外－体部：赤彩、他は篦磨。	
－4	弥生土器 壷	－ 11.0 －	内外－ナデ。	

第291表　Ⅱ次調査Ｈ５号住居址出土遺物観察表（２）

挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
－1	土師器 坏	－ 7.0 －	内面黒色処理。 底部篦削。	
－2	須恵器 坏	14.0 7.5 3.5	回転糸切。	

第292表　Ⅱ次調査Ｈ７号住居址出土遺物観察表

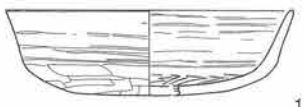
挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
－1	土師器 坏	15.0 － 4.5	内－篦磨。 外－篦削→篦磨。	
－2	土師器 甕	22.0 － －	内－ナデ。 外－篦削。	
－3	軽石製円盤	6.3 5.0 1.2		15.2ｇ

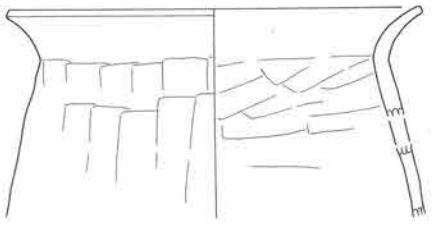
第293表　Ⅱ次調査Ｈ８号住居址出土遺物観察表

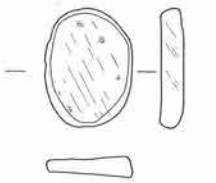
挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
－1	土師器 坏	13.8 5.0 4.5	内－黒色処理。 外－ナデ。	
－2	土師器 坏	14.4 － －	内－ナデ。 外－篦削。	
－3	土師器 坏	12.3 － －	内－ナデ。 外－篦削。	
－4	須恵器 坏蓋	11.5 － －	外－天井部篦削。	
－5	土師器 鉢	18.4 11.5 －	内－黒色処理。 外－篦削。	
－6	土師器 鉢	17.1 － －	内－黒色処理。 外－篦磨。	
－7	土師器 鉢	－ 5.5 －	内－黒色処理。 外－篦削。	
－8	土師器 甕	18.5 － －	内－ナデ。 外－篦削。	

第294表　Ⅱ次調査Ｈ９号住居址出土遺物観察表（１）

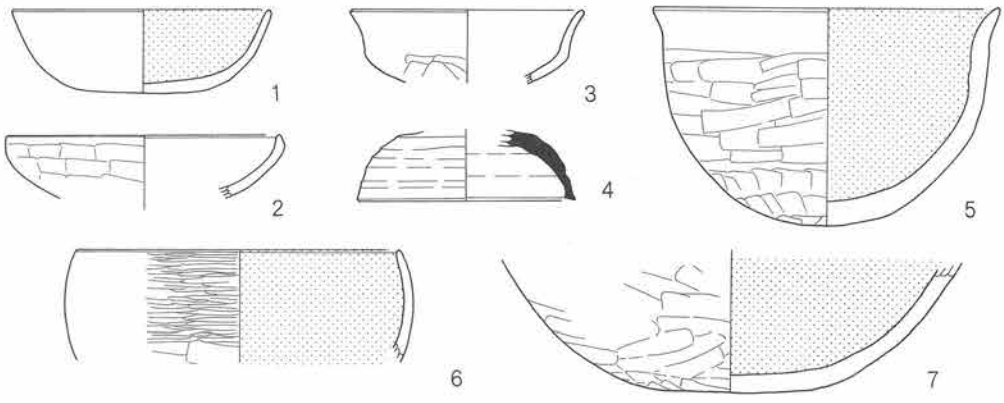
Ｈ７号住居址出土遺物

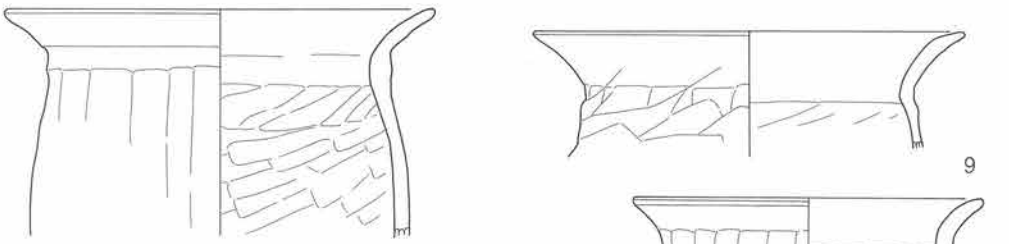






Ｈ８号住居址出土遺物





Ｈ９号住居址出土遺物

Ｈ１０号住居址出土遺物

第363図　第Ⅱ次調査Ｈ７・８・９・10号住居址出土遺物

挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
－9	土師器 甕	22.8 — —	内—ナデ。 外—篦削。	武蔵甕。
－10	土師器 甕	22.8 — —	内—ナデ。 外—篦削。	

第295表　Ⅱ次調査Ｈ９号住居址出土遺物観察表（２）

挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
－1	土師器 坏	15.7 6.0 4.4	内—黒色処理。 外—篦削。	有段口縁坏。
－2	土師器 坏	12.8 — 4.0	内—ナデ。 外—篦削。	
－3	須恵器 坏	13.9 7.2 4.0	右回転糸切。	
－4	土師器 壷	10.3 — —	内—ナデ。 外—篦削。	
－5	土師器 甕	10.4 — —	内—ナデ。 外—篦削。	
－6	土師器 甕	— 5.4 —	内—ナデ。 外—篦削。	

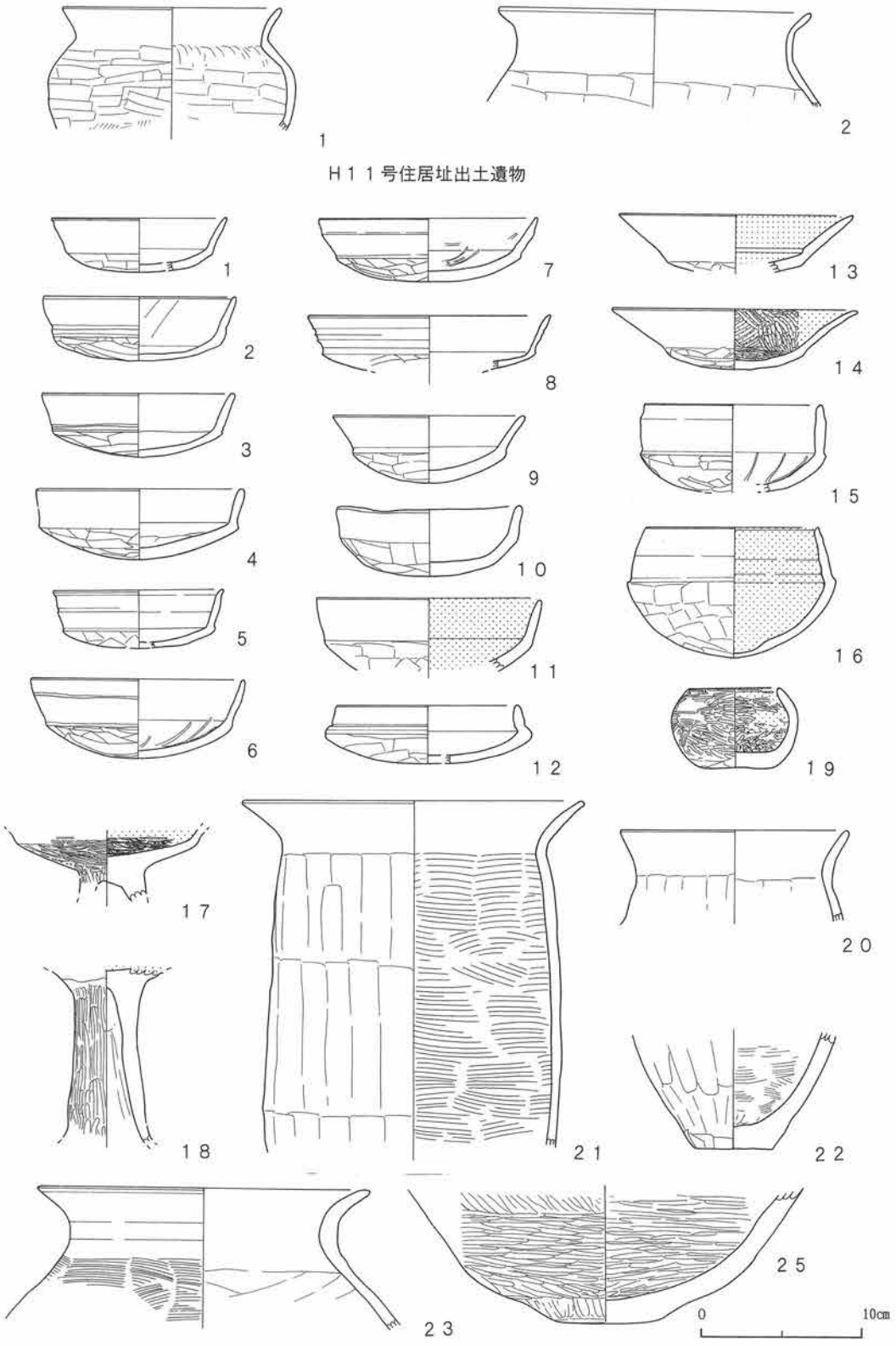
第296表　Ⅱ次調査Ｈ10号住居址出土遺物観察表

挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
－1	土師器 甕	13.5 — —	内—ナデ。 外—篦削。	武蔵甕。
－2	土師器 甕	19.5 — —	内—ナデ。 外—篦削。	武蔵甕。

第297表　Ⅱ次調査Ｈ11号住居址出土遺物観察表

挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
－1	土師器 坏	11.0 — 3.4	内—ナデ。 外—篦削。	橙色陶質。
－2	土師器 坏	12.0 — 5.0	内—ナデ。 外—篦削。	
－3	土師器 坏	12.0 — 5.0	内—ナデ。 外—篦削。	
－4	土師器 坏	13.0 — 4.4	内—ナデ。 外—篦削。	
－5	土師器 坏	10.6 — 3.6	内—ナデ。 外—篦削。	橙色陶質。
－6	土師器 坏	13.3 — 4.9	内—ナデ、放射暗文。 外—篦削。	有段口縁坏。

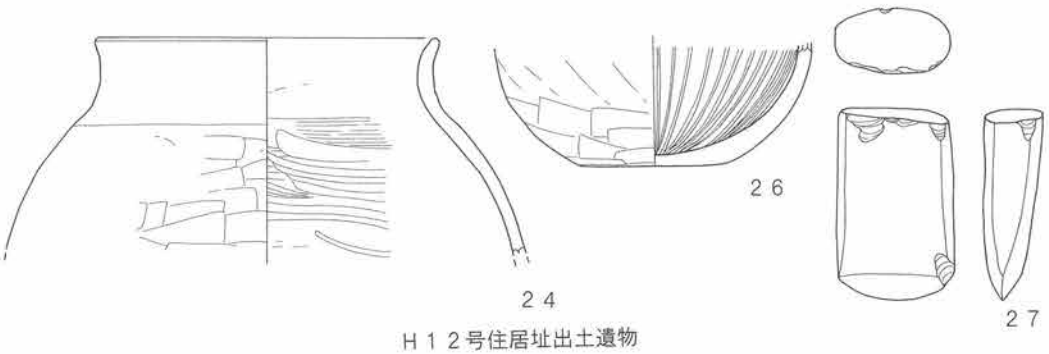
第298表　Ⅱ次調査Ｈ12号住居址出土遺物観察表（１）



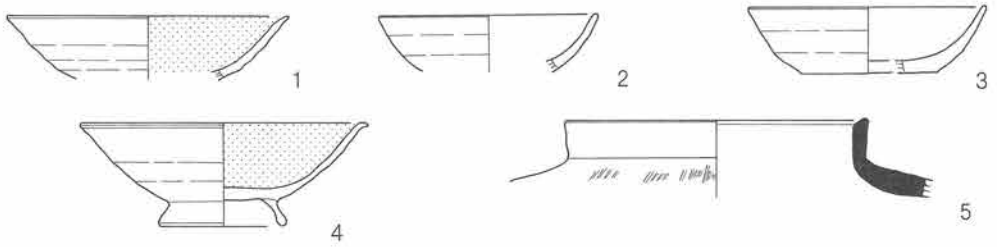
第364図　第Ⅱ次調査H11・12号住居址出土遺物

挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
－7	土師器 坏	13.6 － 4.0	内－ナデ。 外－篦削。	有段口縁坏。
－8	土師器 坏	15.6 － －	内－ナデ。 外－篦削。	有段口縁坏。
－9	土師器 杯	12.0 － 4.2	内－ナデ。 外－篦削。	
－10	土師器 杯	11.6 － 4.2	内－ナデ。 外－篦削。	
－11	土師器 杯	14.0 － －	内－黒色処理。 外－篦削。	
－12	土師器 杯	11.6 － 3.6	内－ナデ。 外－篦削。	
－13	土師器 杯	14.5 － －	内－黒色処理。 外－篦削。	
－14	土師器 坏	15.3 － 3.8	内－黒色処理。 外－篦削。	
－15	土師器 杯	11.0 － 5.5	内－ナデ、放射暗文。 外－篦削。	
－16	土師器 杯	10.7 － 8.1	内－黒色処理。 外－篦削。	
－17	土師器 高杯	－ － －	内－黒色処理。 外－篦削。	
－18	土師器 高杯	－ － －	内－ヘラナデ・篦削。 外－篦磨。	
－19	土師器 無頸壷	6.5 5.0 5.1	内－黒色処理。 外－篦削。	
－20	土師器 甕	14.2 － －	内－ナデ。 外－篦削。	
－21	土師器 甕	21.4 － －	内－刷毛目。 外－篦削。	
－22	土師器 甕	－ 4.9 －	内－刷毛目。 外－篦削。	
－23	土師器 壷	21.6 － －	内－ヘラナデ。 外－刷毛目。	
－24	土師器 壷	18.2 － －	内－ナデ・篦磨。 外－篦削。	
－25	土師器 壷	－ 5.5 －	内外－篦削。	
－26	土師器 壷	－ 7.7 －	内－篦磨。 外－篦削。	

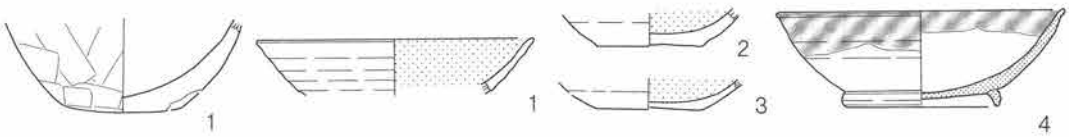
第299表　Ⅱ次調査H12号住居址出土遺物観察表（2）



H１２号住居址出土遺物

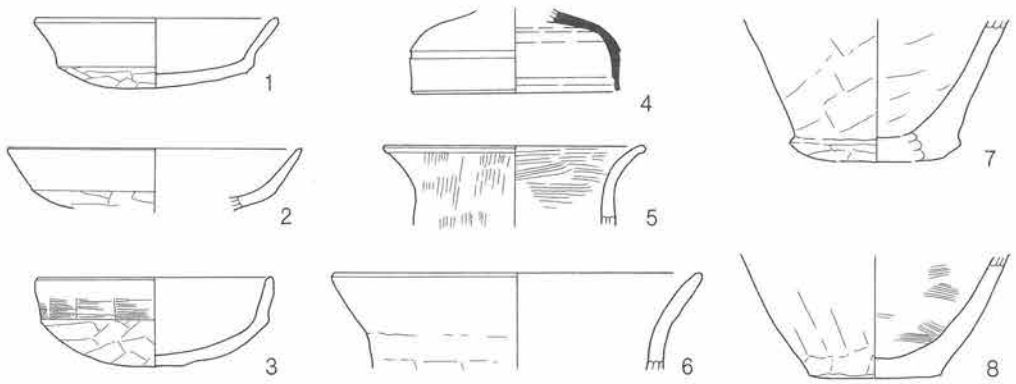


H１８号住居址出土遺物

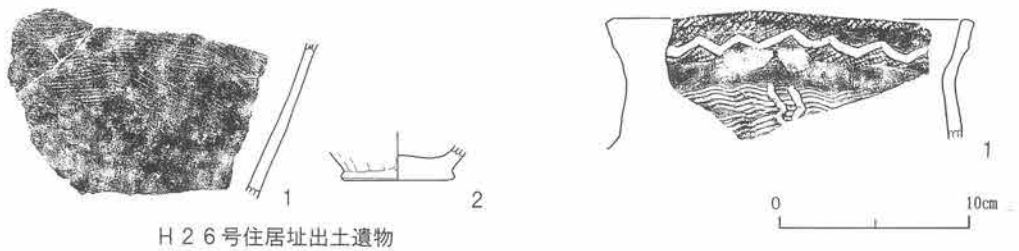


H１９号住居址出土遺物

H２１号住居址出土遺物



H２３号住居址出土遺物



H２６号住居址出土遺物

第365図　第Ⅱ次調査H12・18・19・21・23・26号住居址出土遺物

挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
−27	磨製石斧	10.2 6.1 3.4		440 g

第300表　Ⅱ次調査H12号住居址出土遺物観察表（3）

挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
−1	土師器 坏	14.8 − −	内面黒色処理。	
−2	土師器 坏	11.5 − −		
−3	土師器 坏	12.6 7.0 3.5	方向不明回転糸切。	
−4	土師器 有台坏	15.2 6.3 5.5	内面黒色処理。 方向不明回転糸切→付高台。	
−5	須恵器 甕	16.0 − −	外−叩目。	

第301表　Ⅱ次調査H18号住居址出土遺物観察表

挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
−1	土師器 甕	− 6.3 −	内−ナデ。 外−篦削。	

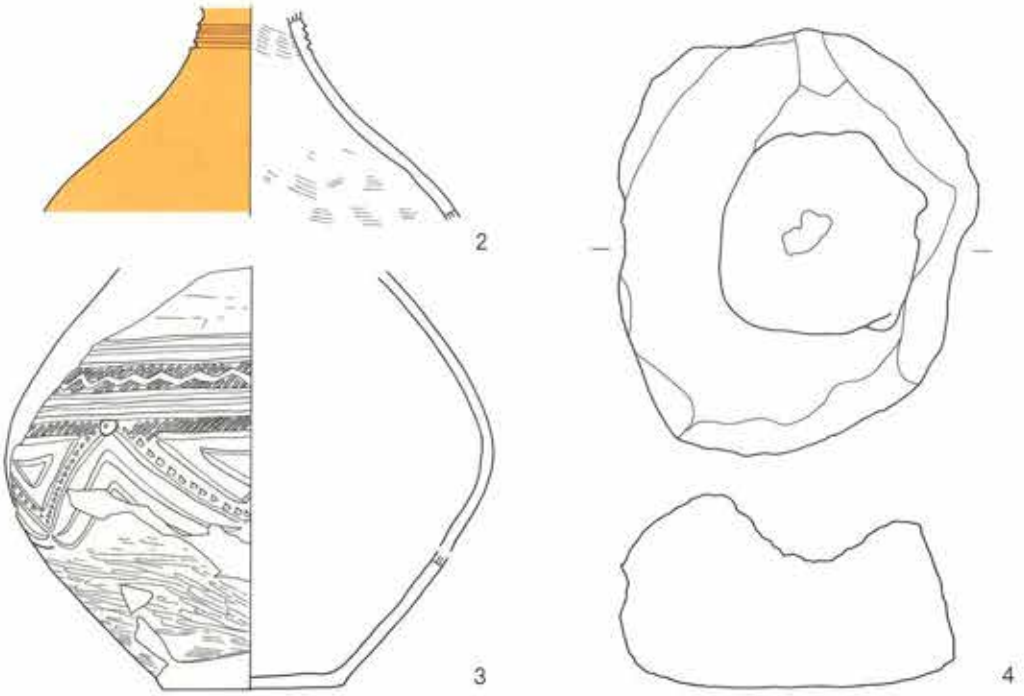
第302表　Ⅱ次調査H19号住居址出土遺物観察表

挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
−1	土師器 坏	14.7 − −	内面黒色処理。	
−2	土師器 坏	− 5.6 −	内面黒色処理。 方向不明回転糸切。	
−3	土師器 坏	− 5.6 −	内面黒色処理。 右回転糸切。	
−4	灰釉陶器 碗	15.2 8.0 5.1	つけがけ施釉。 重焼痕。	大原2号窯式。

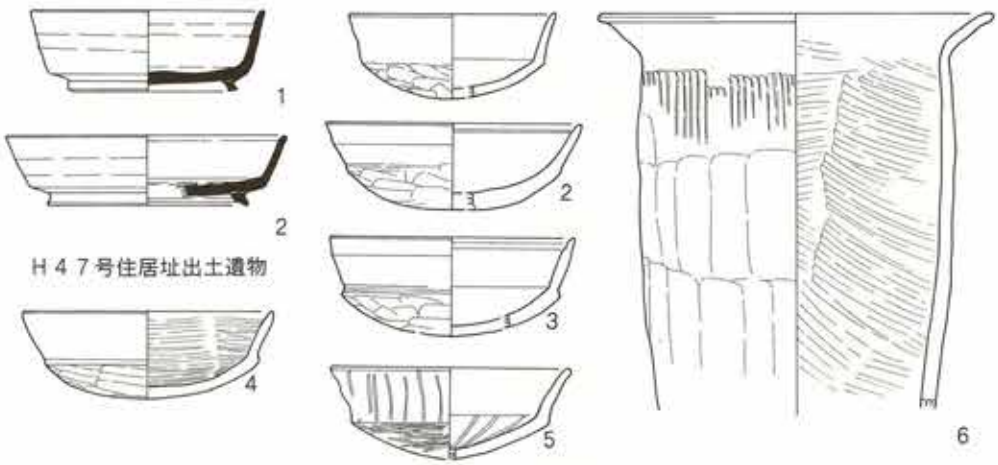
第303表　Ⅱ次調査H21号住居址出土遺物観察表

挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
−1	土師器 坏	12.8 − 3.7	内−ナデ。 外−篦削。	
−2	土師器 坏	15.6 − −	内−ナデ。 外−篦削。	
−3	土師器 坏	12.6 − 4.8	−ナデ。 外−篦削・刷毛目。	
−4	須恵器 坏蓋	11.0 − −		田辺陶邑編年 TK10号窯式？

第304表　Ⅱ次調査H23号住居址出土遺物観察表（1）

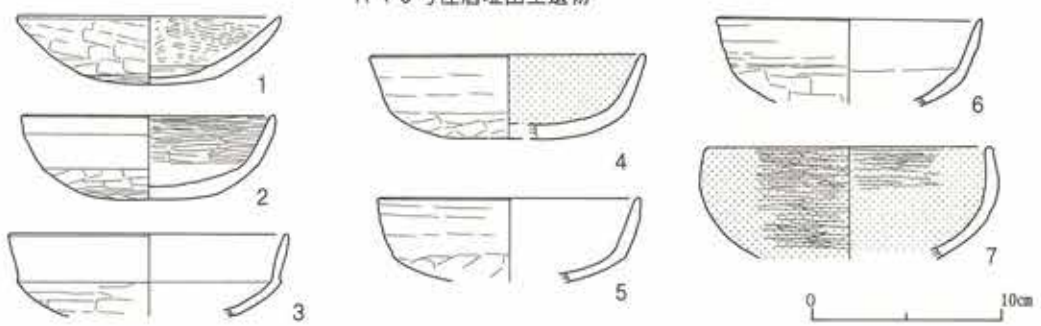


H３０号住居址出土遺物



H４７号住居址出土遺物

H４９号住居址出土遺物



第366図　第Ⅱ次調査H30・47・49・50号住居址出土遺物

挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
－5	土師器 甕	13.9 － －	内外－刷毛目。	
－6	土師器 甕	19.6 － －	内－ナデ。 外－篦削。	
－7	土師器 甕	－ 9.2 －	内－ナデ。 外－篦削。	
－8	土師器 甕	－ 7.0 －	内－刷毛目。 外－篦削。	

第305表　Ⅱ次調査Ｈ23号住居址出土遺物観察表（２）

挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
－1	弥生土器 甕	－ － －	内－篦磨。 外－斜走文。	
－2	弥生土器 甕	－ 6.2 －	内－ナデ。 外－篦削。	

第306表　Ⅱ次調査H26号住居址出土遺物観察表

挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
－1	弥生土器 甕	19.9 － －	内－篦磨。 外－口唇部：縄文、口縁部：縄文＋篦描波状文、体部：横位櫛描波状文を２本の縦位篦描波状文で区画する。	
－2	弥生土器 甕	－ － －	内－刷毛目。 外－頸部：篦描平行沈線。	
－3	弥生土器 壺	－ 8.4 －	内－ナデ。 外－篦描平行沈線・波状文・鋸歯文・刺突列・縄文円形貼付文。	
－4	凹石	22.0 17.6 10.1		3.4kg

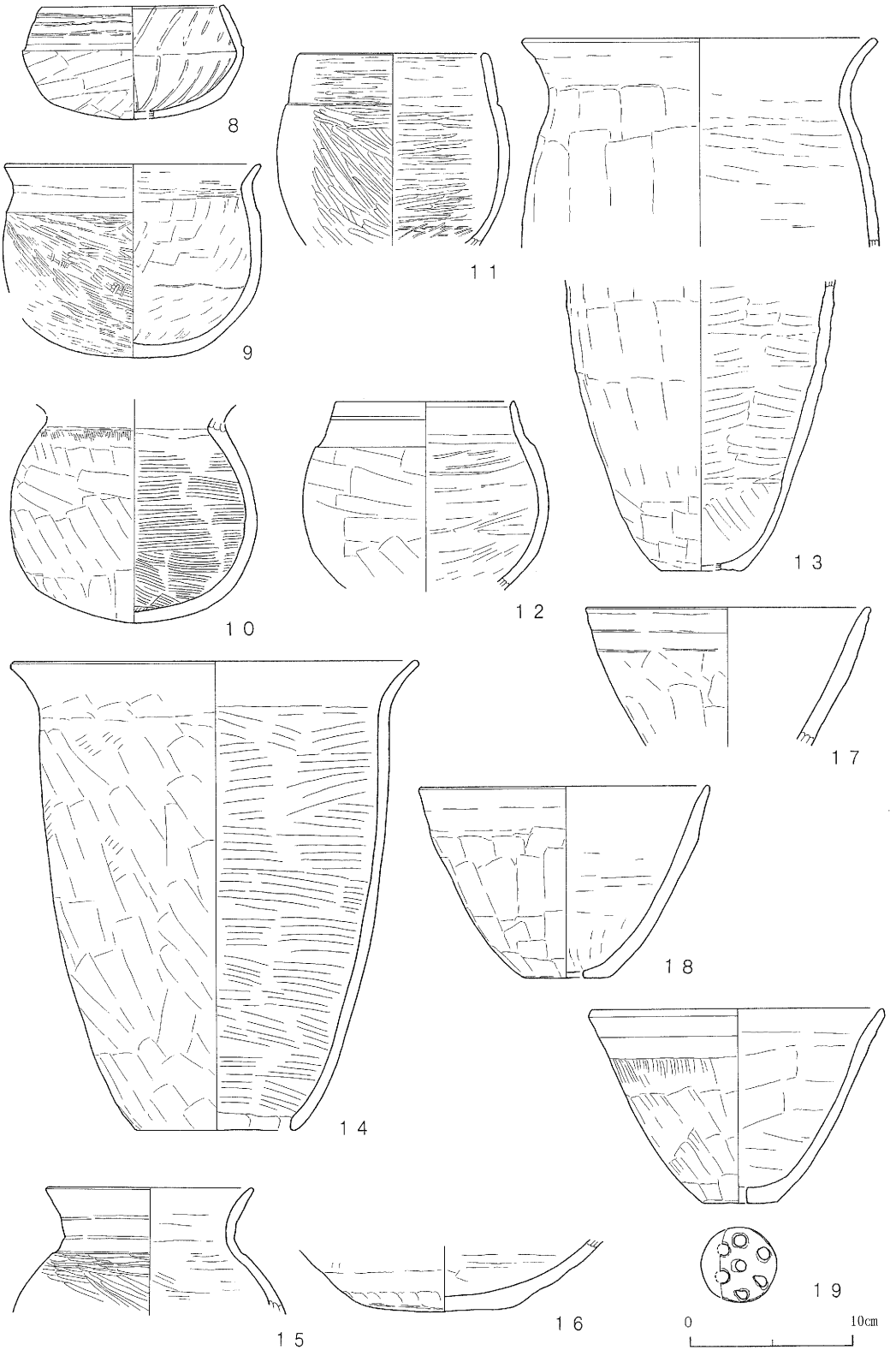
第307表　Ⅱ次調査Ｈ30号住居址出土遺物観察表

挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
－1	須恵器 有台坏	14.8 10.5 3.7	回転糸切→回転篦削→付高台。	
－2	須恵器 有台坏	12.3 8.9 4.3	回転篦削→付高台。	

第308表　Ⅱ次調査Ｈ47号住居址出土遺物観察表

挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
－1	土師器 坏	10.7 － 4.5	内－ナデ。 外－篦削。	
－2	土師器 坏	13.3 － 4.6	内－ナデ、口縁部に凹線。 外－篦削。	
－3	土師器 坏	12.8 － 5.3	内－ナデ、口縁部に凹線。 外－篦削。	

第309表　Ⅱ次調査Ｈ49号住居址出土遺物観察表（１）



第367図　第Ⅱ次調査Ｈ50号住居址出土遺物

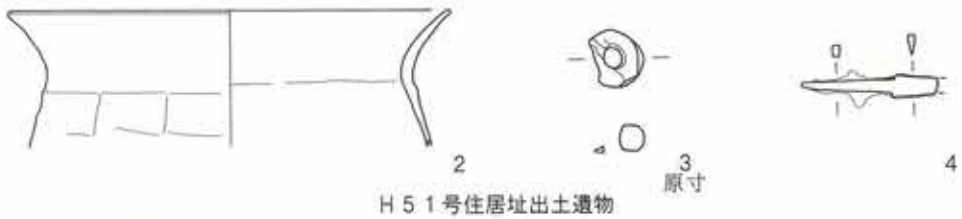
挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
－4	土師器 坏	13.1 — 4.7	内－篦磨。 外－篦削。	
－5	土師器 坏	12.4 — —	内－放射暗文。 外－篦磨。	
－6	土師器 甕	20.4 — —	内－刷毛目。 外－刷毛目・篦削。	

第310表　Ⅱ次調査Ｈ49号住居址出土遺物観察表（２）

挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
－1	土師器 坏	14.1 — 3.6	内－篦磨。 外－篦削。	
－2	土師器 坏	14.4 — 4.5	内－篦磨。 外－篦削。	
－3	土師器 杯	14.9 — —	内－ナデ。 外－篦削。	
－4	土師器 杯	14.4 — —	内－黒色処理。 外－篦削。	
－5	土師器 杯	14.0 — —	内－ナデ。 外－篦削。	
－6	土師器 杯	14.0 — —	内－ナデ。 外－篦削。	
－7	土師器 杯	15.3 — —	内外－篦磨→黒色処理。	
－8	土師器 坏	11.3 — 7.0	内－放射暗文。 外－篦削。	
－9	土師器 鉢	14.8 — 12.0	内－ナデ。 外－篦磨。	
－10	土師器 鉢	— — —	内－刷毛目。 外－刷毛目・篦削。	
－11	土師器 鉢	11.8 — —	内外－篦磨。	
－12	土師器 鉢	11.0 — —	内－ナデ。 外－篦削。	
－13	土師器 甕	22.0 5.1 —	内－ナデ。 外－篦削。	
－14	土師器 甑	25.2 9.7 29.0	内－刷毛目。 外－刷毛目・篦削。	底部全面開口。
－15	土師器 壷	12.8 — —	内－ナデ。 外－篦磨。	
－16	土師器 壷	— 9.0 —	内－ナデ。 外－篦削。	

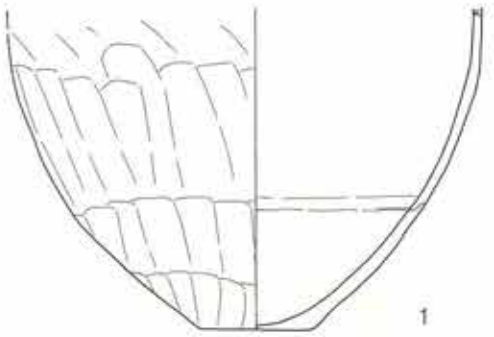
第311表　Ⅱ次調査Ｈ50号住居址出土遺物観察表（１）

H５０号住居址出土遺物

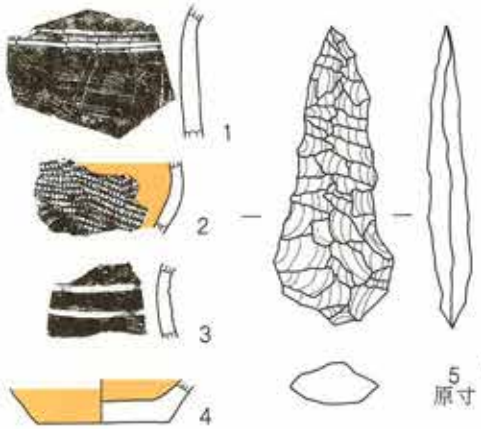


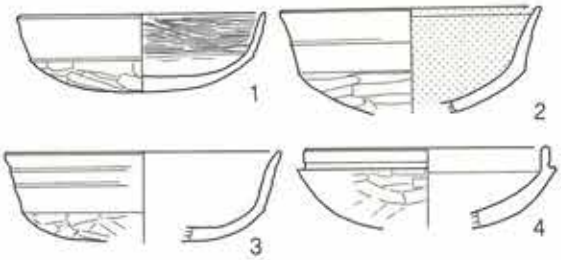
H５１号住居址出土遺物

H５７号住居址出土遺物

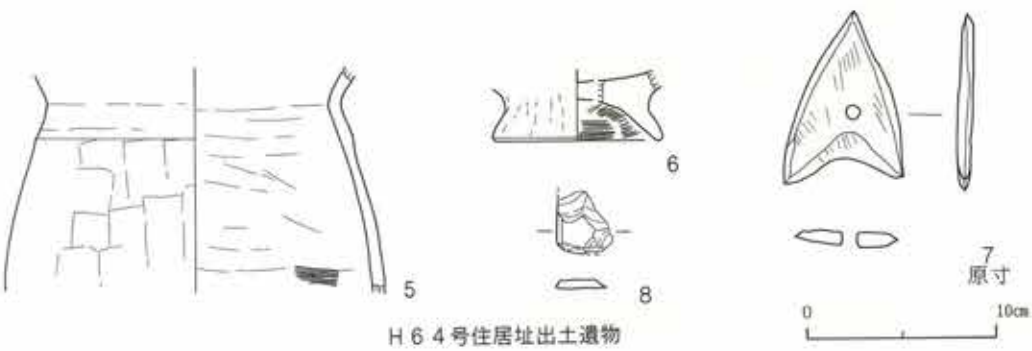


H５８号住居址出土遺物





H５９号住居址出土遺物



H６４号住居址出土遺物

第368図　第Ⅱ次調査H50・51・57・58・59・64号住居址出土遺物

挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
−17	土師器 甑	17.7 − −	内−ナデ。 外−篦削。	
−18	土師器 甑	18.0 5.3 17.9	内−ナデ。 外−篦削。	単孔。
−19	土師器 甑	18.5 4.6 12.0	内−ナデ。 外−篦削・刷毛目。	多孔。
−20	滑石製 臼玉	1.4 1.0 0.5		1.2g
−21	滑石製 臼玉	1.4 1.3 0.6		1.8g
−22	滑石製 臼玉	1.4 1.4 0.7		2.1g

第312表　Ⅱ次調査H50号住居址出土遺物観察表（2）

挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
−1	須恵器 坏	12.8 8.7 3.7	底部篦削。	
−2	土師器 甕	23.3 − −	内−ナデ。 外−篦削。	武蔵甕。
−3	滑石製 臼玉	0.8 0.7 0.3		0.2g
−4	刀子	7.3 1.3 0.4		6.3g

第313表　Ⅱ次調査H51号住居址出土遺物観察表

挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
−1	弥生土器 高杯？	20.4 − −	内−篦磨、口唇部：縄文、口縁部：2ヶの円孔。 外−篦削。	

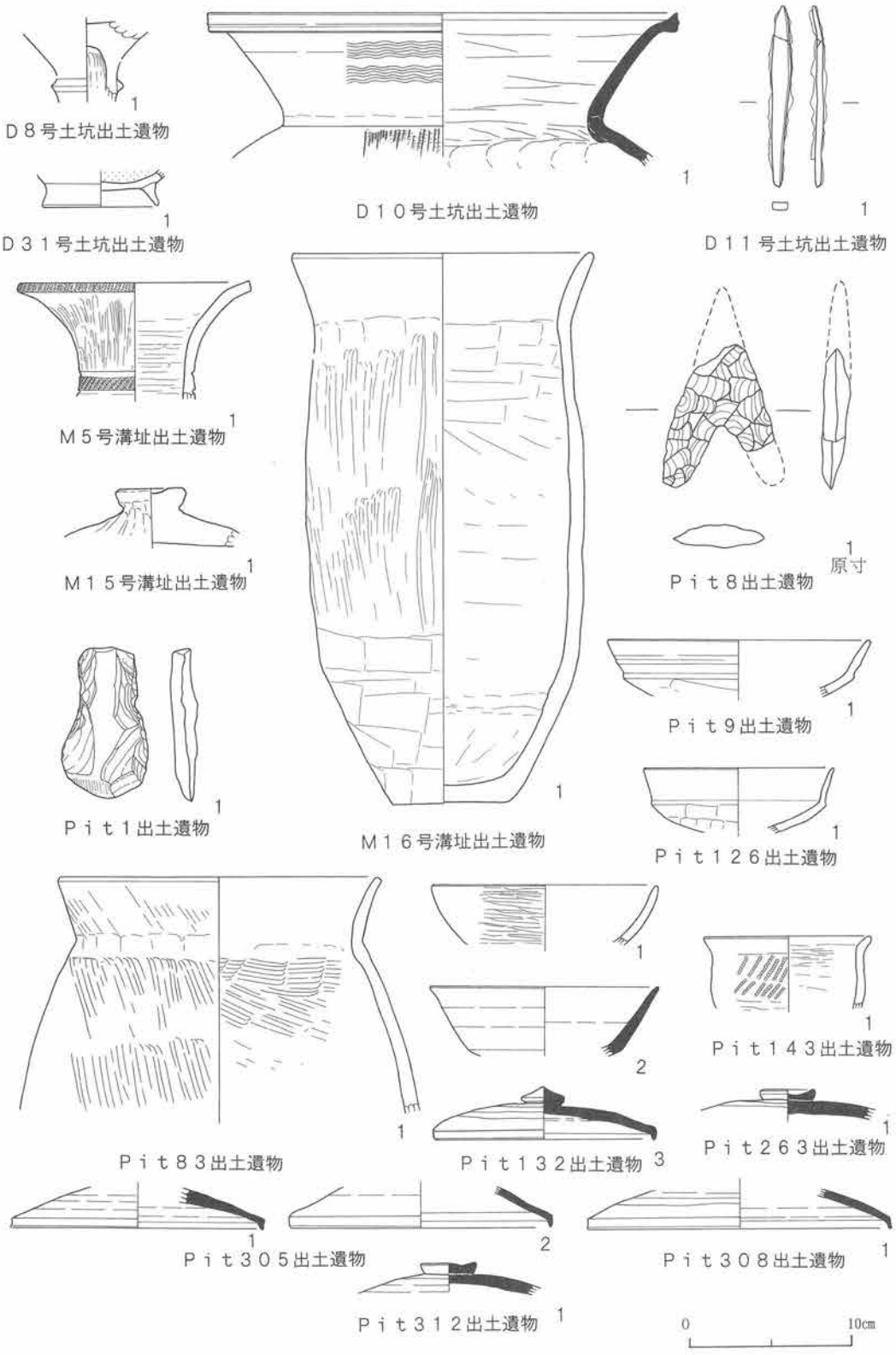
第314表　Ⅱ次調査H57号住居址出土遺物観察表

挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
−1	土師器 甕	− 5.7 −	内−ナデ。 外−篦削。	武蔵甕。

第315表　Ⅱ次調査H58号住居址出土遺物観察表

挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
−1	弥生土器 甕	− − −	内−篦磨。 外−頸部：簾状文、体部：斜走文。	
−2	弥生土器 甕	− − −	内−篦磨。 外−縄文。	
−3	弥生土器 壷	− − −	内−ナデ。 外−篦描平行沈線。	
−4	弥生土器 甕	− 6.8 −	内外−ナデ。	

第316表　Ⅱ次調査H59号住居址出土遺物観察表（1）



第369図　第Ⅱ次調査土坑・溝址・Pit出土遺物

挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
－1	打製石鏃	4.0 1.2 0.5		1.8g 黒曜石製。

第317表　Ⅱ次調査H59号住居址出土遺物観察表（2）

挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
－1	土師器 坏	13.3 — 4.1	内－篦磨。 外－篦削。	
－2	土師器 坏	13.9 — —	内－黒色処理。 外－篦削。	有段口縁坏。
－3	土師器 杯	14.7 — —	内－ナデ。 外－篦削。	有段口縁坏。
－4	土師器 杯	13.0 — —	内－ナデ。 外－篦削。	
－5	土師器 甕	— — —	内－ナデ・刷毛目。 外－篦削。	
－6	土師器 台付甕	— 9.0 —	内－ナデ・刷毛目。 外－篦削。	
－7	磨製石鏃	4.7 3.1 0.4		0.8g
－8	磨製石斧	3.3 3.0 0.4		7.3g

第318表　Ⅱ次調査H64号住居址出土遺物観察表

挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
－1	弥生土器 高杯	— — —	内－ナデ。 外－脚と坏の境に隆帯。	

第319表　Ⅱ次調査D8号土坑出土遺物観察表

挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
－1	須恵器 甕	29.1 — —	内－当具痕、篦削、ナデ。 外－口縁部：2条の櫛描波状文、叩目。	

第320表　Ⅱ次調査D10号土坑出土遺物観察表

挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
－1	鉄鏃	11.2 1.1 0.4		14.9g

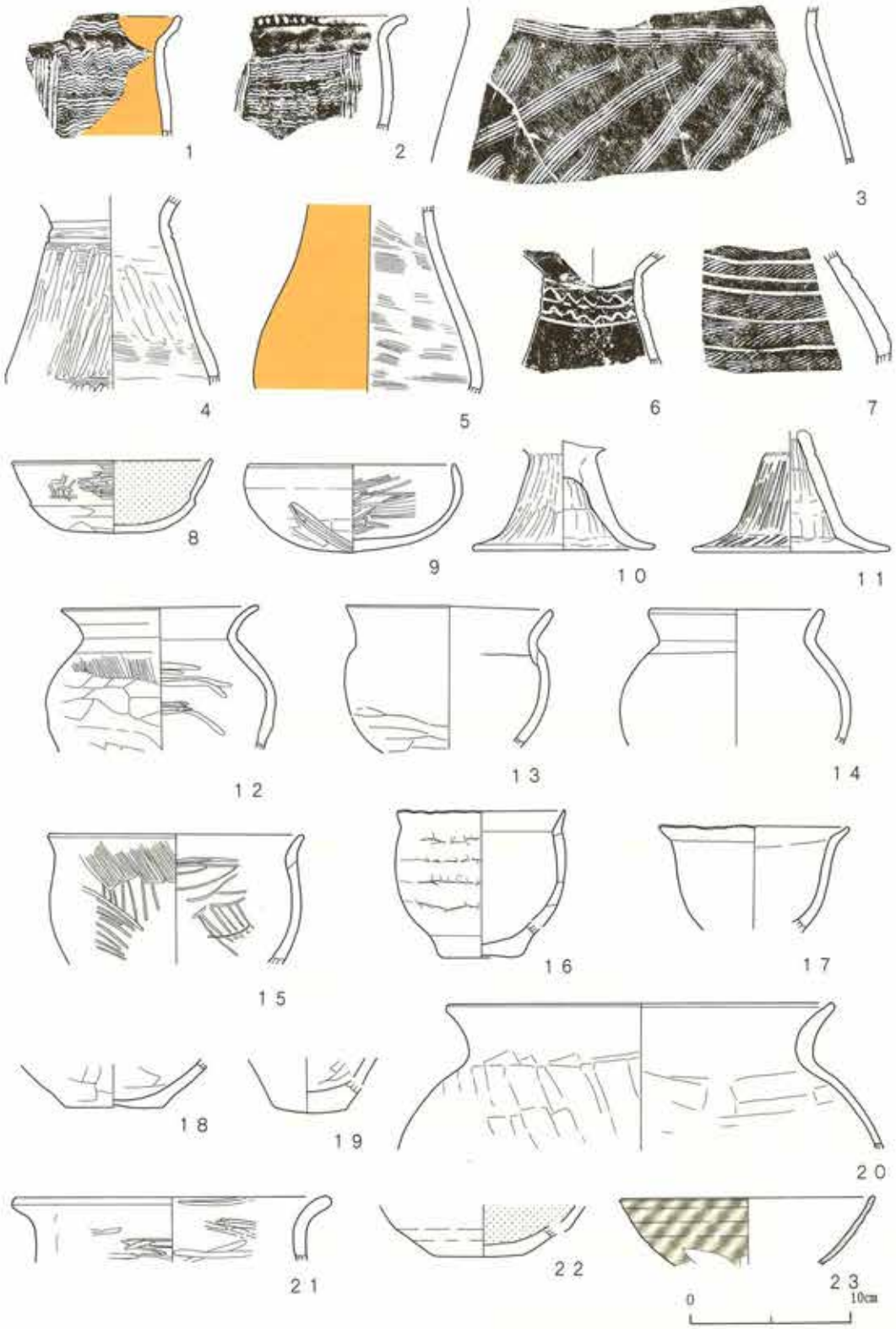
第321表　Ⅱ次調査D11号土坑出土遺物観察表

挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
－1	土師器 有台坏	— 7.8 —	内－黒色処理。 外－方向不明糸切→付高台。	

第322表　Ⅱ次調査D31号土坑出土遺物観察表

挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
－1	弥生土器 壺	14.3 — —	内－篦磨。 外－口唇部：縄文、頸部：篦描平行沈線間に縄文。	

第323表　Ⅱ次調査M5号溝址出土遺物観察表



第370図　第Ⅱ次調査遺構外出土遺物

挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
－1	土師器 蓋	－ 4.3 －	内－ナデ。 外－篦削。	

第324表　Ⅱ次調査M15号溝址出土遺物観察表

挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
－1	土師器 甕	18.8 7.5 34.0	内－ナデ。 外－篦削。	

第325表　Ⅱ次調査M16号溝址出土遺物観察表

挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
－1	打製石斧	9.4 5.3 1.5		81.2ｇ

第326表　Ⅱ次調査Pit 1 出土遺物観察表

挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
－1	打製石鏃	2.2 1.65 0.6		0.8ｇ

第327表　Ⅱ次調査Ｐｉｔ８出土遺物観察表

挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
－1	土師器 坏	16.5 － －	内－ナデ。 外－篦削。	有段口縁坏。

第328表　Ⅱ次調査Ｐｉｔ９出土遺物観察表

挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
－1	土師器 甕	20.0 － －	内－刷毛目。 外－刷毛目・篦削。	

第329表　Ⅱ次調査Ｐｉｔ83出土遺物観察表

挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
－1	土師器 坏	20.0 － －	内－ナデ。 外－篦削。	橙色陶質。

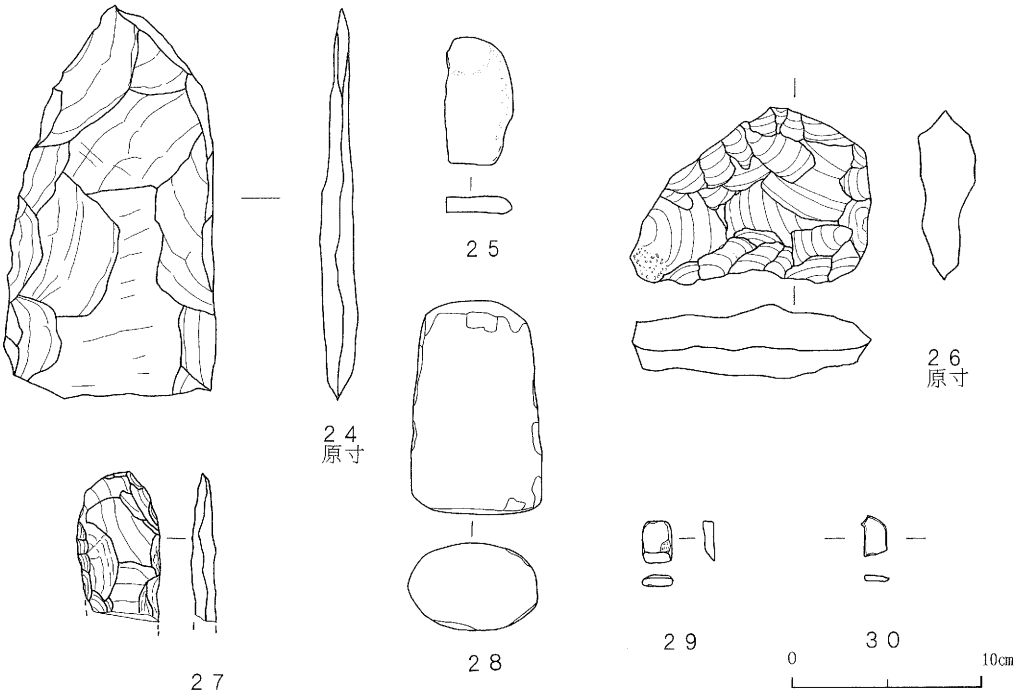
第330表　Ⅱ次調査Pit126出土遺物観察表

挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
－1	土師器 坏	14.0 － －	内－ナデ。 外－篦磨。	
－2	須恵器 坏	14.2 － －		
－3	須恵器 坏蓋	13.8 － 3.3	天井部篦削。	

第331表　Ⅱ次調査Pit132出土遺物観察表

挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
－1	弥生土器 甕	10.5 － －	内－篦磨。 外－縄文。	

第332表　Ⅱ次調査Pit143出土遺物観察表



第371図　第Ⅱ次調査遺構外出土遺物（２）

挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
－1	須恵器 坏蓋	－ － －	天井部篦削。	

第333表　Ⅱ次調査Pit263出土遺物観察表

挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
－1	須恵器 坏蓋	16.2 － －	天井部篦削。	
－2	須恵器 坏蓋	18.8 － －	天井部篦削。	

第334表　Ⅱ次調査Pit305出土遺物観察表

挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
－1	須恵器 坏蓋	15.5 － －	天井部篦削。	

第335表　Ⅱ次調査Pit308出土遺物観察表

挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
－1	須恵器 坏蓋	－ － －	天井部篦削。	

第336表　Ⅱ次調査Pit312出土遺物観察表

挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
－1	弥生土器 甕	－ － －	内－赤彩。 外－口縁・体部：櫛描波状文、体部：縦位櫛描条線。	
－2	弥生土器 甕	－ － －	内－篦磨。 外－口唇部：刻目、口縁・体部：櫛描波状文、体部：縦位櫛描条線	
－3	弥生土器 甕	－ － －	内－篦磨き。 外－頸部：櫛描平行条線、体部：斜走文。	
－4	弥生土器 壷	－ － －	内－ナデ・刷毛目。 外－頸部：平行沈線、篦磨。	
－5	弥生土器 壷	－ － －	内－刷毛目。 外－赤彩	
－6	弥生土器 壷	－ － －	内－ナデ。刷毛目。 外－頸部：篦描平行沈線間に波状文。	
－7	弥生土器 壷	－ － －	内－ナデ。 外－篦描平行沈線間の縄文。	
－8	土師器 坏	12.5 － 4.5	内－黒色処理。 外－篦削、篦磨。	
－9	土師器 坏	13.3 － 5.5	内－篦磨。 外－篦削、篦磨。	
－10	土師器 高杯	－ 11.4 －	内－ヘラナデ・篦削。 外－篦磨。	
－11	土師器 高杯	－ 12.4 －	内－ヘラナデ・篦削。 外－篦磨。	

第337表　Ⅱ次調査遺構外出土遺物観察表（1）

挿図番号	器　種	法　量	成　形・調　整	備　考
−12	土師器 壷	12.4 − −	内−篦磨。 外−篦削・篦磨。	
−13	土師器 小型甕	13.0 − −	内−ナデ。 外−篦削。	
−14	土師器 壷	11.0 − −	内外−ナデ。	
−15	土師器 鉢	16.0 − −	内外−篦磨。	
−16	土師器 小型甕	10.5 − −	内外−ナデ。	
−17	土師器 小型甕	12.0 − −	内外−ナデ。	
−18	土師器 甕	− 6.0 −	内−ナデ。 外−篦削。	
−19	土師器 甕	− 4.2 −	内−ナデ。 外−篦削。	
−20	土師器 壷	24.3 − −	内−ナデ。 外−篦削。	
−21	土師器 甕	20.0 − −	内外−篦磨。	
−22	土師器 杯	− 5.4 −	内−黒色処理。 外−右回転糸切。	
−23	灰釉陶器 碗	15.9 − −		
−24	磨製石鏃	6.1 2.8 0.4		9.7g 未製品。
−25	砥石	6.7 4.1 0.9		32.1g
−26	スクレイパー	3.0 2.2 0.7		6.5g
−27	打製石鏃	7.8 4.5 1.1		56.5g
−28	磨製石斧	11.4 6.9 4.6		670g 磨石に転用。
−29	磨製石斧	2.2 1.6 0.6		3.9g
−30	鉄器	2.1 1.2 0.3		1.6g 器種不明。

第338表　Ⅱ次調査遺構外出土遺物観察表（2）

第Ⅲ章　総　　括

第1節　弥生時代

1　土器様相

今回の調査で検出された弥生時代の土器について、下記の項目による分類を行い、その後当遺跡における遺構間の重複関係と、今日までの該期土器の研究成果をもとに編年的位置付けを試みたい。

土器分類の基準項目

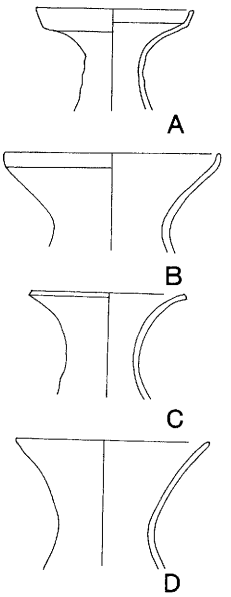
1．器種。

2．口縁部の形態。

3．文様帯の有無、組み合わせ。

4．文様帯に施される文様の組み合わせ。

器種は壺、甕、台付甕、鉢、高坏が認められる。以下壺・甕について分類を行う。



第372図　壺口縁部の分類

○壺－口縁部の形態は以下に大別する。（第372図）

Ａ－受口口縁

Ｂ－受口気味の口縁

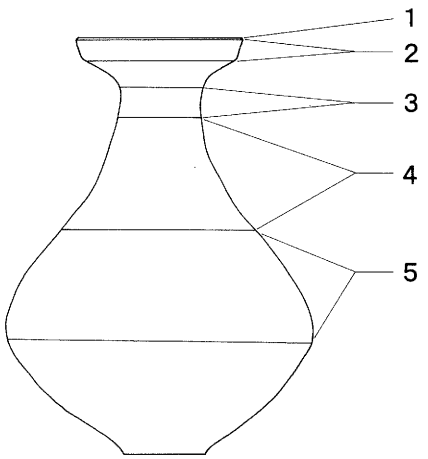
Ｃ－端部が面取りされる単純口縁

Ｄ－端部が丸みを帯びる単純口縁

文様帯は第373図のように分類する。

文様帯に施される文様は第374図の要素の単独あるいは組み合わせを第339表に示した。

以上により、今回の調査で検出された住居址出土の壺形土器を分類した。その結果、口縁部Ａの土器は文様帯１にａ、２にはａ＋ｄ横が施文されることが明らかになった。また、直接に組み合わせが確認できる個体は少ないものの、Ａ口縁の土器が出土している住居址の、文様帯３・４・５が確認できる個



第373図　壺の文様帯

		甕																
		a 縄文	b 刻目	c 沈線 横	c 沈線 縦	c 沈線 斜	d 波状・山形文 横	d 波状・山形文 縦	「U」字文 e	「X」字文 f	g 刺突列 横	g 刺突列 縦	g 刺突列 斜	円形刺突 h	鎖状文 i	弧文 j	山形文 k
文様帯	1	○	○														
	2	○					○										
	3	○		○		○	○				○				○	○	
	4			○	○			○	○	○	○	○	○				
	5	○		○			○				○		○	○		○	○

		壺														
		l 条線 横	l 条線 縦	l 条線 斜	斜走文 m	n 羽状文 横	n 羽状文 縦	波状文 o	「T」字文 p	刺突列 q	円孔 r	貼付文 s	微隆帯 t	突起 u	押擦 x
文様帯	1													○	○
	2			○				○			○	○			
	3	○			○	○		○	○	○		○	○		
	4		○				○								
	5							○				○	○		

第374図　文様帯と文様

体では、文様帯３にはａ・ｃ横・ｄ横が顕著であり、文様帯４・５を有するものも他に比べ多い。Ｂ口縁のものは文様帯４・５は有さず、文様帯２にｏ、文様帯３にはｎ＋ｏの組み合わせが施文される。Ｃ口縁のものは、Ａ口縁と同一住居内で共伴する割合が極めて高く、文様帯１にはａ、文様帯２は有さず、文様帯３にはａ・ｃ横・ｄ横が施される。４・５文様帯については判然としないが、Ｃ口縁しか存在しない住居址から４・５文様帯を有する破片が出土していることから、伴う個体も存在するものと推測される。Ｄ口縁は他の全ての口縁部と共伴する。また、Ｄ口縁だけが認められる住居址も存在し、文様帯１は有するものと有さないものが存在し、有する場合はｂが施文される。文様帯２も文様帯１同様に、有するものと有さないものが存在し、有する場合、ａ・ｌ斜・ｏが施文されるが、ｌ斜が施文される個体が多い。文様帯３にはａ・ｃ横・ｃ斜・ｎ・ｏ・ｐ・ｔなどが施文される。４・５文様帯は有さない。赤彩については全てにおいて確認できるが、Ｄ口縁の個体が最も多い。

○甕－口縁部の形態は以下に大別する。(第375図)

Ａ－受口口縁

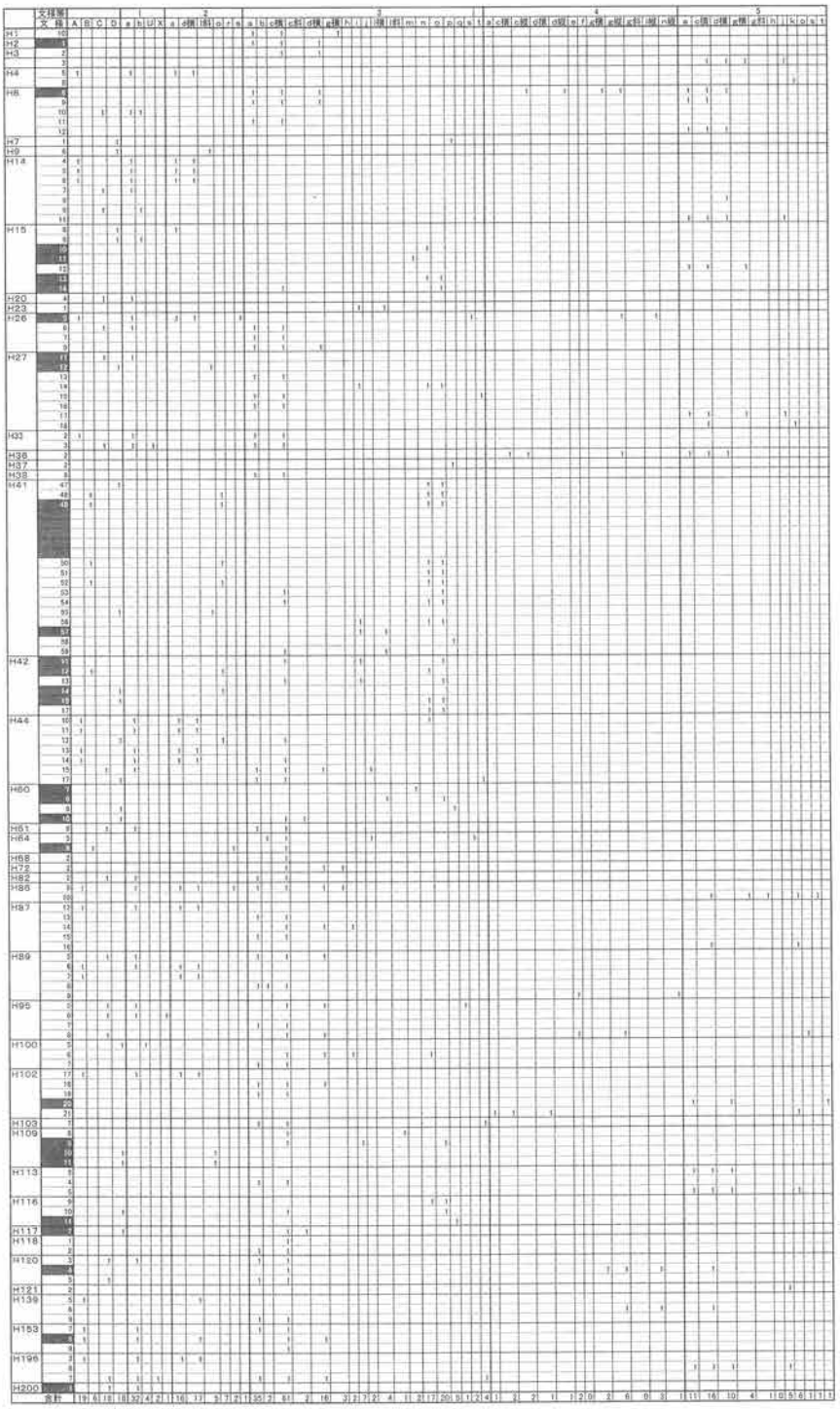
Ｂ－短い単純口縁が「く」字に外反するもの

Ｃ－口縁端部が受口気味立ち上がるもの

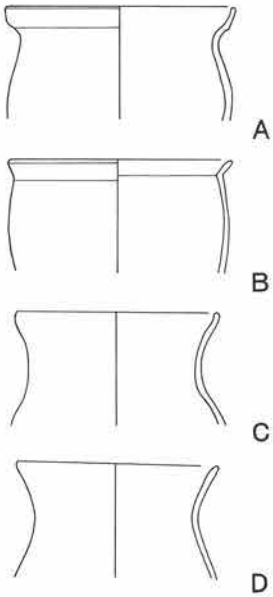
Ｄ－外反する単純口縁

文様帯は第376図のように分類する。

文様帯に施される文様は第377図の要素の単独あるいは組み合わせを第340表に示した。



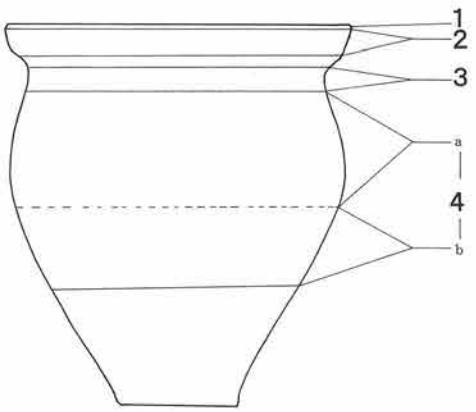
第339表　弥生時代住居址出土壺の文様帯と施文



第375図　甕口縁部の分類

以上により、今回の調査で検出された住居址出土の甕形土器を分類した。その結果、口縁部Aの土器は、文様帯1にa、2にはa＋d、3にi、4にはf、g縦＋j多、h縦、j多が施文される。文様帯4がa・bに分割されるものは存在しない。B口縁のものは文様帯1にaが施文される比率が高い、しかし、bやlもB口縁に集中的に施文されている。基本的に文様帯2は有さないが、縄文が施文される事が希にある。文様帯3にはg横、i、j1などが施文される。口縁部A同様に、文様帯4が分割されることはなく、a、f＋k、g縦＋j多、h縦・斜・菱などが施文されるが、頻度的にはh縦が高い。C口縁は文様帯1は基本的に有さないが、希に、a、b、lが施文される。文様帯2にはi多が施文される頻度が極めて高く、h横・h斜、j1なども施文される。文様帯4は分割される場合とされない場合が認められる。されない場合が多く、ほとんどの場合j多が施文されるが、h斜、j1、kなども認められる。分割される場合はaにj多・1、bにh横・菱・斜が施される。D口縁のものは基本的には文様帯1を有さないが、bが施文されるものが存在する。文様帯2にはj多が施文されるものがほとんどであるが、h横・斜やj1が施文される場合もある。文様帯3にはiだけが施文される。文様帯4は分割されるものも存在するが、多くは分割されずj多が施文されるが、h横・斜が施文される場合もある。また分割される場合にはaにはj多、bにはh斜が施文される。

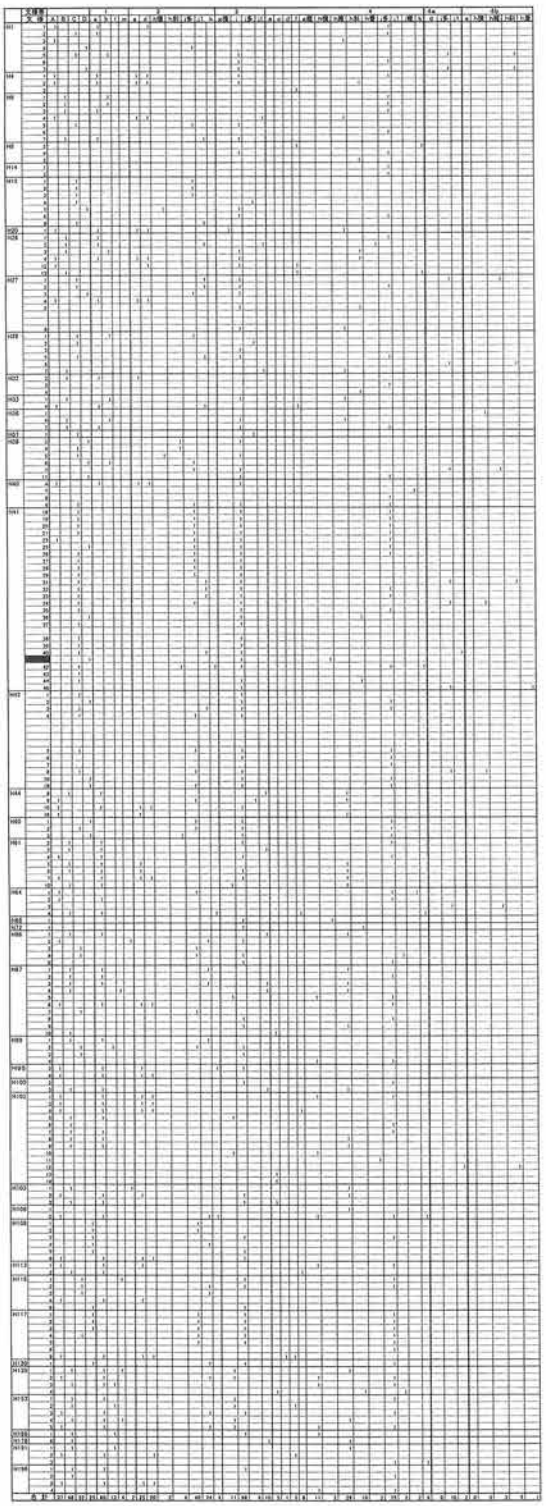
赤彩は基本的に施されない。



第376図　甕の文様帯

		甕						櫛												
		縄文 a	刻目 b	c沈線 横	波状文 d 横	斜走文 e 縦	f 連続 ｌコ字文	g 条線 横	g 条線 縦	h 斜走文 横	h 斜走文 縦	h 斜走文 斜	h 斜走文 菱形	廉状文 j 横	j 波状文 横多段	j 波状文 横1段	j 波状文 縦	貼付文 k	押捺 l 菱・棒	押捺 縄文原体 m
文様帯	1	○	○																○	○
	2	○			○					○		○			○	○		○		
	3							○						○	○					
	4	○		○	○		○		○	○	○	○	○		○	○	○	○		
	a				○										○					
	b					○				○	○	○	○							

第377図　甕の文様帯と文様



第340表　弥生時代住居址出土甕の文様帯と施文

○住居址の重複関係－今回の調査において弥生時代の住居址間で重複関係が確認された事例は以下のとおりである。

Ｈ１→Ｈ３

Ｄ１→Ｈ４→Ｈ14

Ｈ６→Ｈ30

Ｈ39←Ｈ38→Ｈ23

Ｈ27→Ｈ28

Ｈ41→Ｈ44

Ｈ60→Ｈ61

Ｈ64→Ｈ82

Ｈ97→Ｈ106

これらの内、土器の出土量が双方ともに比較対象として十分な住居址同士の重複関係はＤ１→Ｈ４→Ｈ14、Ｈ41→Ｈ44、Ｈ60→Ｈ61である。これらの住居址から出土した壺と甕の変遷を捉えるために個々に前項の分類により記号化し、各重複関係毎に表としたのが第341表～343表である。

壺は口縁部Ａ・Ｃが古い形態でＢを介在してＤに至る変化が推測される。必然的に文様帯１や２は口縁部形態の変化に伴い消失へ向かう。文様帯４は、ここで取り扱ったＨ14・44・61出土の資料には認められないことからこれらよりも古い要素と推測される。文様帯５についてはＨ４・14で認められるだけであることから古い要素と推測される。反面文様帯３は普遍的に存在し、文様帯が３に収束していく変化が推測される。文様は縄文・篦状工具による施文から、櫛歯状工具へ

の変化が推測される。赤彩については新しくなるほど盛興する。甕の口縁部形態はA・B～C・Dへの変遷が推測され、更にCよりはDの方が新しい形態と推測される。壺同様に口縁部形態の

	壺	甕
D1	B－1b・2o D－□・□・3n横 ？－？・？・l横＋n横	D－□・2h横・3i・4h横 D－□・2h縦・3g横・4h縦
H4	A－1a・2a+d横 ？－？・？・3a+c横 ？－？・？・？・？・5k	A－1a・2a+d・3i・j多 A－1a・2a+d・3i・h縦 ？－？・？・？・4f
H14	A－1a・2a+d横 C－1a・□・？ C－1b・□・？ ？－？・？・？・□・5a+c横＋d横＋i	

第341表D1・H4・H14出土壺・甕の比較

	壺	甕
H41	B－□・2o・3n横＋o・□・□ B－□・2l斜・？ D－□・□・3n横＋o ？－？・？・3c横＋n横＋o・□・□ ？－？・？・3c横＋o・□・□ ？－？・？・3o.□・□ ？－？・？・3n横＋o+i・？ ？－？・？・3l横＋i＋□・□ ？－？・？・3p	A－□・2j1・3i・4j多 C－□・2j1・3i・4aj多・4bh斜 C－□・2j1・3i・4j多 C－□・□・3i・4j多 C－□・2j多・3i・4j多 D－□・2j多・3i・4j多 C－□・□・3i・4h斜 C－□・2j1・3i・4aj1・4bh斜 C－□・□・3i・4h斜 C－□・2h斜＋k・3i・4j多＋k ？－？・？・3i・4aj多・4bh菱
H44	A－1a・2a+d横・？ A－1a・2a+d横・3c横＋？ D－□・2o・3c横＋？ C－1a・□・3a+c横＋d横＋j・？ D－□・□・3a+c横＋□＋□	A－□・2j1・□・4aj多・4bh斜 A－□・2a・□・4h縦 B－1a・□・3i1・4h縦

第342表　H41・44出土壺・甕の比較

	壺	甕
H60	D－□・□・3p・□・□ D－□・□・3c横＋c斜・□・□ ？－？・？・3m・□ ？－？・？・3o+l横	D－□・2h斜・3i・4j多 D－□・2j多・3i・4j多 C－□・2j多・3i・4j多
H61	C－1a・□・3a+c横・□	A－1a・2a+d・3i・4h縦 B－1a・2a・□・4h縦 B－1a・2a・3i・4h縦 B－1a・□・3j1・？ B－1a・□・3i・4j多 B－1a・□・3g横・4h縦

第343表　H60・61出土壺・甕の比較

変化に伴い文様帯1は消失に向かう、文様帯2は古い口縁部形態であるBの場合有さないことが多いがC・Dに変化すると有するものが大勢を占める。文様帯3もA・Bの場合有さない場合があるが、C・Dにおいては有することが普遍化する。文様帯4については全てにおいて有することが基本である。希に上下に分割されることがあるが、Dには認められない。文様は壺同様に縄文・篦状工具によるものから、櫛歯状工具によるものに変化する。

○編年的位置付け－現時点における唯一の佐久地方の弥生土器編年である小山岳夫の土器編年の中核となっている北西の久保遺跡は、当遺跡と地続きの台地上に存在する遺跡である。当然ながら今回の調査において出土した該期の土器群と比較するにはこれ以上にない対象である。

出土した土器の分類から、A・Cの口縁部形態の壺とA・Bの口縁部形態の甕を主体に構成されるであろう土器セットが、今回の調査で検出された土器の中で古いものであることが明らかとなった。これを小山編年に比定すると北西の久保Ⅱ期＝中期後半新相にあたるものと思われる。

しかし、小山編年における基本的な時期区分は了解できるのであるが、各時期の該当資料においては疑問を感じる部分が存在する。その大きな原因のひとつは、壺における文様帯4の文様帯の方向と消長の軽視、太頸壺の消長の重視にあるように思われる。

文様帯4は横位展開と縦位展開の2系統が存在する。横位展開の土器は基本的に中期後半古相の特徴であり、中期後半中相には残存しない要素と考える。縦位展開の土器との時間的な関係は不明であるが、横位展開の土器の区画のひとつが拡大し、本来波状文か山形文、鋸歯文であったものが縦に伸長し変化したと推測するならば、横位展開の土器の方が先に存在したことになる。現時点では中期後半古相には両者共に存在し、横位展開の土器は中期後半中相には残存しないが縦位展開の土器は中期後半新相まで残存し、消滅すると考える。また、小山編年では太頸壺と細口壺の2系統の壺のうち、弥生時代後期に向かい漸次太頸壺が主体になり、細口壺が消滅すると考えているが、筆者は細口壺のプロポーションが漸次変化して後期的な壺が誕生すると考える。無論、太頸壺は存在するプロポーションではあるし、中期後半のある相において量的に増加するかも知れないが、主体とはなっていない。また、これらの壺と共伴する甕において文様帯4に認められる縦位の区画条線と、篦状工具や櫛歯状工具による刻目や刺突列は新相にも残存するが、古相や中相に主体的な古い施文と認識する。

以上から、下記の住居址出土資料については（　）内に記した理由により位置付けを変更した方が良いように思う。

中期後半古相－北西の久保Y13号住居址を中期後半中相から引き上げる。

（壺の文様帯5に認められる工字文）

北西の久保Y71号住居址を北西の久保Ⅰ期＝中期後半中相から引き上げる。

（壺の文様帯4の横位展開と工字文）

北西の久保Y78号住居址を中期後半新相から引き上げる。

（壺の文様帯4の横位展開、太頸壺の認識変化）

中期後半中相－北西の久保Y69号住居址を中期後半新相から引き上げる。

（壺の文様帯4・5の存在と量、太頸壺の認識変化）

北西の久保Y126号住居址を中期後半新相から引き上げる。

（甕8の文様帯4の縦位区画条線、甕9の文様帯4の刻目）

次に、口縁部B・D形態の壺と口縁部C・D形態の甕により構成されるであろう土器セットは後期前半古相に、D形態の壺とC・D形態の甕に構成されるであろう土器セットは後期前半中相

に比定されるものと思われる。

後期前半古相の資料は小山編年（＝1990年７月刊行「赤い土器を追う」第３章　土器の移り変わり（編年））においては良好な資料が乏しく、その内容が不明瞭であった部分であると解釈する。今回の調査では良好な資料が出土している。

具体的には、口縁部Ｂ形態の壺は文様帯１・４・５は有さず、文様帯２にはｏ、文様帯３にｎ横とｏは施文される。共伴するＤ口縁のものは、文様帯２にｌ斜が施文されるものが存在し、文様帯３にはｃ横・ｉ・ｌ横・ｍ・ｎ横・ｏ・ｐが単独あるいは組み合わされて施文され、文様帯１・４・５は基本的に有さない。赤彩の頻度は中期後半新相に比べ高くなる。甕は口縁部形態Ｃ・Ｄで、文様帯１にａ・ｂ・ｌが施文されるものも存在する。文様帯２は有さないものも存在するが、多くはｊ多・ｊ１が施文される。ｈ横・斜も少数ながら存在する。文様帯３はｉが基本である。文様帯４が分割されるのも特徴のひとつである。この場合４ａにはｊ多やｊ１が４ｂにはｈ縦やｈ斜が施文される。しかし多くは分割されず、ｊ多が施文される。ｈ縦・ｈ斜も認められるが少数である。

後期前半中相の資料では、壺の口縁部形態はＤであり、文様帯１・２・４・５は有さない。文様帯は３に集約され、ｃ横・ｃ斜・ｉ・ｌ横・ｐが単独あるいは組み合わされて施文される。プロポーション的には最大径を有する体部が腰高に位置する。赤彩は更に頻度が高くなる。甕はＣ・Ｄの口縁部形態で文様帯１は有さない。文様帯２にはｊ多が施されるが、ｈ斜も認められる。文様帯３はｉが施文され、文様帯４は分割されることはなく、ｊ多が施文される。

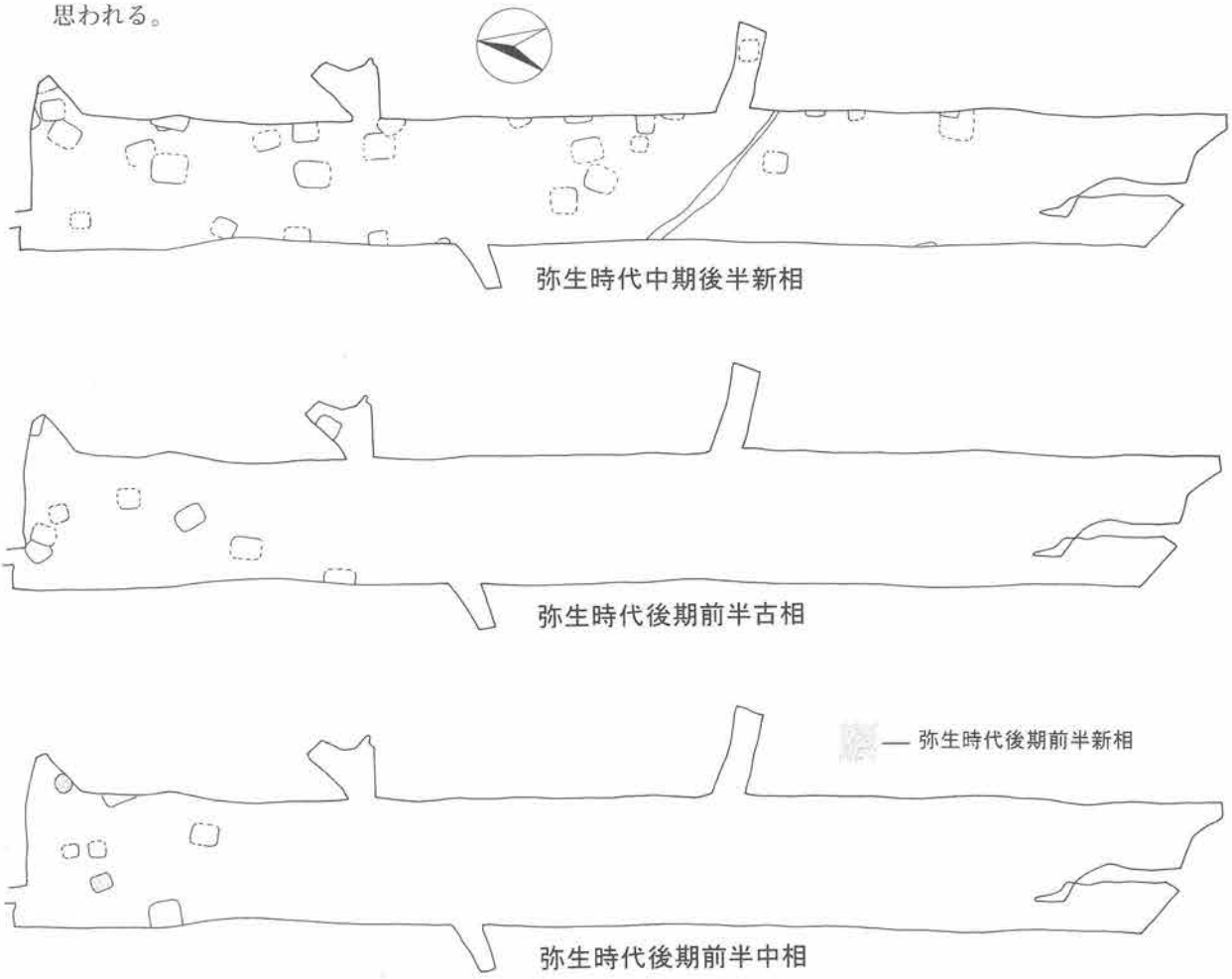
今回調査においては１軒だけであるが、後期前半新相に比定される住居が存在する。甕は不明であるが、壺の最大の変化は体部下半が屈折するプロポーションの出現である。

以上の各相に、今回の調査で検出された住居址を該当させたものが第345表である。

中期後半新相	後期前半古相	後期前半中相	後期後半新相	不　明
H 2　H 3 H 4　H 6 H 14　H 20 H 26　H 30 H 33　H 36 H 44　H 61 H 64　H 68 H 72　H 82 H 86　H 87 H 89　H 95 H100　H102 H103　H106 H113　H118 H120　H121 H139　H153 H168　H191 H196	H 1　H 15 H 27　H 28 H 38　H 41 H 42　H109 H116	H 7 H 9 H 23 H 40 H117	H 37	H 16 H 32 H 34 H 39 H 97 H123 H200

第345表　西一本柳遺跡出土住居址の時期別分類

住居址以外ではＭ８号溝址が中期後半新相に、Ｄ１号土坑が後期前半新相にに該当するものと思われる。



第378図　各相における弥生時代住居址の分布

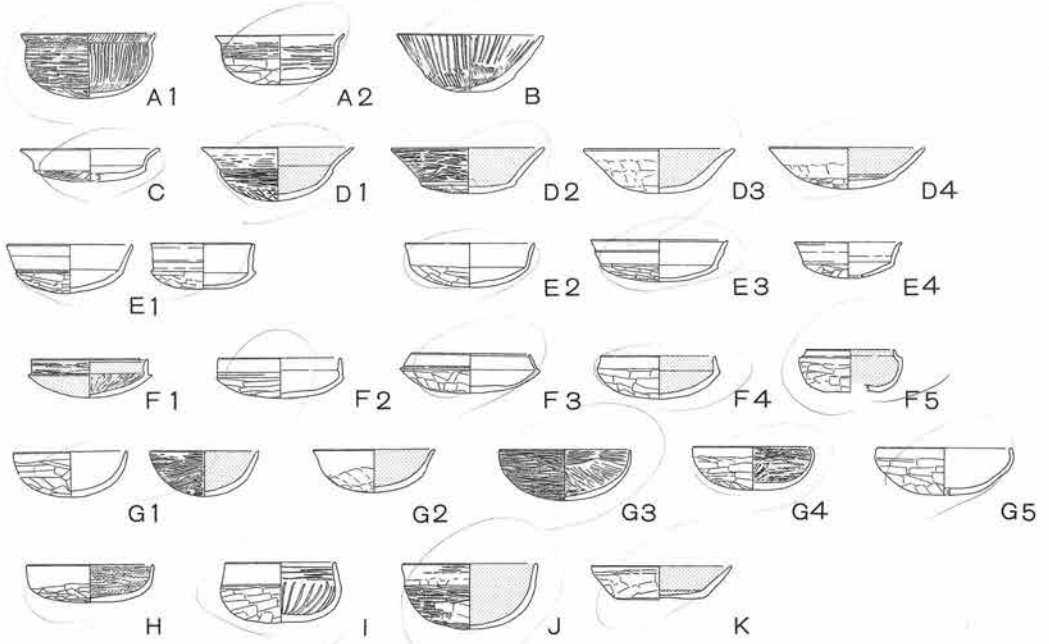
第２節　古墳時代

１　土器様相

土師器坏を以下の26形態に分類し、住居の切合い関係、伴出する須恵器の年代、今日までの古墳時代土器の研究成果を援用して編年的位置付けを試みる。

○土師器坏の分類

Ａ１－丸底の底部から体部が内湾しながら立ち上がり、短い口縁部が強く外反する。



第379図　古墳時代土師器坏の分類

Ａ２－Ａ１の口縁部がやや長く、緩やかに外反する。

Ｂ　－Ａ１に共伴する高杯の脚部が省略された形態。

Ｃ　－Ａ２の口縁部が更に長くなり、口縁部と体部の境に稜を形成して外反するもの。

Ｄ１－Ｃの底部が半球状に丸く、深くなったもの。口縁部と体部の境の稜は調整による段や、凹に変化する。

Ｄ２－Ｄ１の体部下が浅いもの。

Ｄ３－Ｄ２の口縁部と体部の境の、段や凹が省略されたもの。Ｄ１・Ｄ２に施されていた篦磨き調整も省略化される。

Ｄ４－Ｄ３において僅かに名残を止めていた、口縁部と体部の屈曲がなくなり、浅い半球状を呈するもの。内面の底部と体部の境に段を有する。

Ｅ１－須恵器坏蓋の模倣、あるいは模倣を原形とするものの内、体部と口縁部の境の段を有するもの。

Ｅ２－須恵器坏蓋の模倣を原形とするものの内、体部と口縁部の境の段を有さず、稜を有するもの。

Ｅ３－所謂有段口縁坏。

Ｅ４－Ｅ１同様の形態を呈し、橙色で陶質と表現できるような焼成が施されたもの。概して、小型で、器壁が薄い特徴を有する。

Ｆ１－須恵器坏身の模倣、あるいは坏身の模倣を原形とするもので口縁部と体部の境に段を有するもので、口縁部が直立するもの。

Ｆ２－須恵器坏身の模倣を原形とするものの内、体部と口縁部との境に段を有さず、稜を有するもので、口縁部が直立するもの。

Ｆ３－Ｆ１の口縁部が内傾するもの。

Ｆ４－Ｆ２の口縁部が内傾するもの。

Ｆ５－Ｆ１の体部が平底から内湾する形態のもの。

Ｇ１－半球状で、口縁部が素直に開くもの。

Ｇ２－半球状で、口縁部が外反するもの。

Ｇ３－半球状で、口縁部が直立するもの。

Ｇ４－半球状で、口縁部が内湾するもの。

Ｇ５－半球状で、口縁部が弱く内傾するもので、口縁部と体部の境が明瞭なもの。Ｅ４と同質な橙色陶質なものを含む。

Ｈ　－丸みを帯びた平底から口縁部が直立するもの。

Ｉ　－平底から体部が内湾して立ち上がり、口縁部に至るもの。

Ｊ　－深い丸底の底部から、内湾気味に立ち上がった体部から、口縁部が緩やかに外反するもの。体部と口縁部の境に稜を有する。

Ｋ　－平底から口縁部が外傾して開くもの。

○坏形態の推移

Ａ１・２形態の土器が、Ｃ形態からＤ１・Ｄ２に、更にＤ３・Ｄ４に変化したと推測できる。Ｅ・Ｆ系統の土器は須恵器の坏身・坏蓋の模倣形態であるから須恵器の形態変化をある程度反映していると推測される。Ｇ形態の系統の土器はＡ形態と同様に古墳時代中期に出現する形態であり、以降も連綿と受け継がれるため、形態の変化をたどるには適さない。

以上から、坏Ａ→Ｃ→Ｄの変化を前提に、これらの坏を出土した住居の坏形態の構成をみると次のようになる。

坏Ａ１・Ａ２を出土する住居址の内、Ｈ143はＥ１を、Ｈ194はＦ２を共伴することから他の住居址よりは新しい様相を呈する。

坏ＣはＧ系の坏との共伴関係が顕著である。

坏Ｄ１とＤ２は共伴する場合と、しない場合が認められる。いずれの場合もＤ１が出土する場合のみ、坏Ｅ１は出土し、Ｄ２だけが出土する場合はＥ２しか共伴しない。さらに、Ｄ３とＤ２の共伴関係はＨ144に存在するが、Ｄ１とＤ３の共伴関係は認められない。

坏Aを出土した住居址

H 5	A 1				
H124	A 1	B			
H143	A 1		E 1		G 1
H173	A 1				
H185	A 1				
H194	A 2			F 2	G 4

坏Cを出土した住居址

H 22	C			G 3
H 31	C	E 3	F 2	G 1
H167	C			G 2

坏D 1 ・D 2を出土した住居址

H 71	D 1		E 1	E 2				K
H 94	D 1 D 2							
H 96	D 2						G 1	
H110	D 2			E 2	F 1	F 4	G 4	
H144	D 2	D 3		E 2		F 4	G 3	
H148	D 2						G 1	
H163	D 1 D 2				F 1	F 2	G 4	

坏D 3を出土した住居址

H 55	D 3		E 2			
H 70	D 3	D 4	E 2		G 1	G 2
H122	D 3			F 4		
H183	D 3		E 2	F 3		

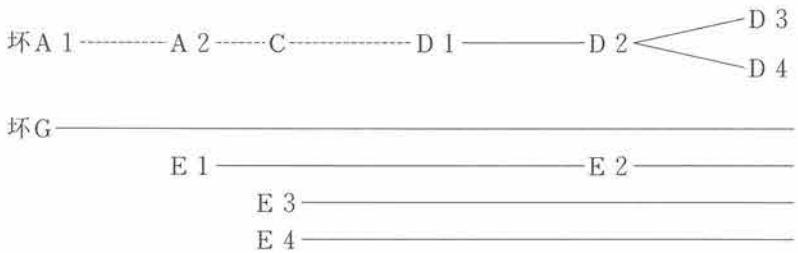
坏D 4を出土した住居址

H 43	D 4					
H 80	D 4	E 1	E 2	E 3		G 5
H184	D 4			E 3	E 4	G 1
H195	D 4	E 1	E 2	E 3		

坏D 3は坏E 2とは共伴するが、E 1とは共伴しない。また、D 4との共伴はD 3だけに認められ（H70）、D 1 ・D 2には認められない。

坏D 4はE系の坏との共伴が顕著である。

以上を整理すると下記のような関係が捉えられる。



次に共伴する須恵器との関係を見ていく。須恵器を出土した住居址はH22・H25・H31・H55・H80・H140・H143・H167・H195である。厳密にはH167出土の高杯は須恵器ではなく模倣品であるが、忠実に模倣されていることから、資料的には問題ないものと判断した。これらを田辺陶邑編年や猿投窯編年に対比させると以下のようになる。

住居址	坏　身	坏　蓋	高　坏	その他	年　代
H 22		TK10			6C第2四半期
H 25		MT85～TK43			6C後半
H 31	TK10				6C第2四半期
H 55	TK43	TK43			6C後半
H 80		TK43			6C後半
H140				I17（平瓶）	7C後半
H143	TK208		TK208		5C後半
H167			MT15		6C第1四半期
H195	TK209	TK209			6C末～7C初頭

H143が最も古く5世紀後半に上限が位置付けられる。H167・H22・H31が6世紀前半代に、H25・H55・H80が6世紀後半代、H195が6世紀末～7世紀初頭、H140が7世紀後半に上限が設定できることとなる。これはH143が土師器坏A1を、H167・H22・H31が土師器坏Cを、H25・H55・H80が土師器坏D3・D4・E1・E2・E3・G5を、H195が土師器坏D4・E1・E2・E3を伴出することから、類推した土師器の変遷過程とも矛盾しない結果となる。

また、これらの住居址間の重複関係を古墳時代に限って見てみると、H22はH10に切られており、H10は土師器坏E3・G3を出土している。H22は土師器坏Cを出土することから、矛盾は認められない。同じく土師器坏Cを出土するH167は土師器坏E1を出土するH107に切られるが、この関係にも矛盾は認められない。土師器坏D4・E1・E2・E3を出土するH80は土師器坏E1・G1・Hを出土するH96に切られるが、この関係にも矛盾は認められない。

以上のように土師器坏の変遷は、「A1・2形態の坏が、C形態からD1・D2に、更にD3・D4に変化した。」という当初の過程が適切であることが土師器坏の共伴関係、伴出須恵器の編年、住居の重複関係から検証された。これに、A・C・D系の坏が出土しない住居においては坏EがE1～E2に変化することが、A・C・D系の坏の形態変化を検証する過程で確認されていることから、これらと前述した伴出須恵器の年代、遺構間の重複関係等を基準に古墳時代の住居址を分類すると第346表のようになる。各期は更に細分が可能である。偶然に各期毎に3区分される結果となったが、時間幅が均等なわけではない。実年代を想定するならばⅠ期が5世紀後半～6世紀初頭、Ⅱ期が6世紀前葉～中葉、Ⅲ期が6世紀中葉～7世紀初頭、Ⅳ期が7世紀代に比定されよう。また、各期の土器様相は以下のように捉えられる。

Ⅰ期－坏A1・B・G系、有段口縁壺、小型の丸底壺、坏の底部と体部の境に稜を有する高杯な

どで構成される中期の土器様相から、ＴＫ208号窯式期の須恵器や、須恵器の坏身模倣のＦ形態、坏蓋模倣のＥ形態の土師器坏が組成に加わり、坏Ａ１がＡ２に変化、甕の長胴化など後期的な土器様相への変化が認められる。カマドは全ての住居址に存在している。

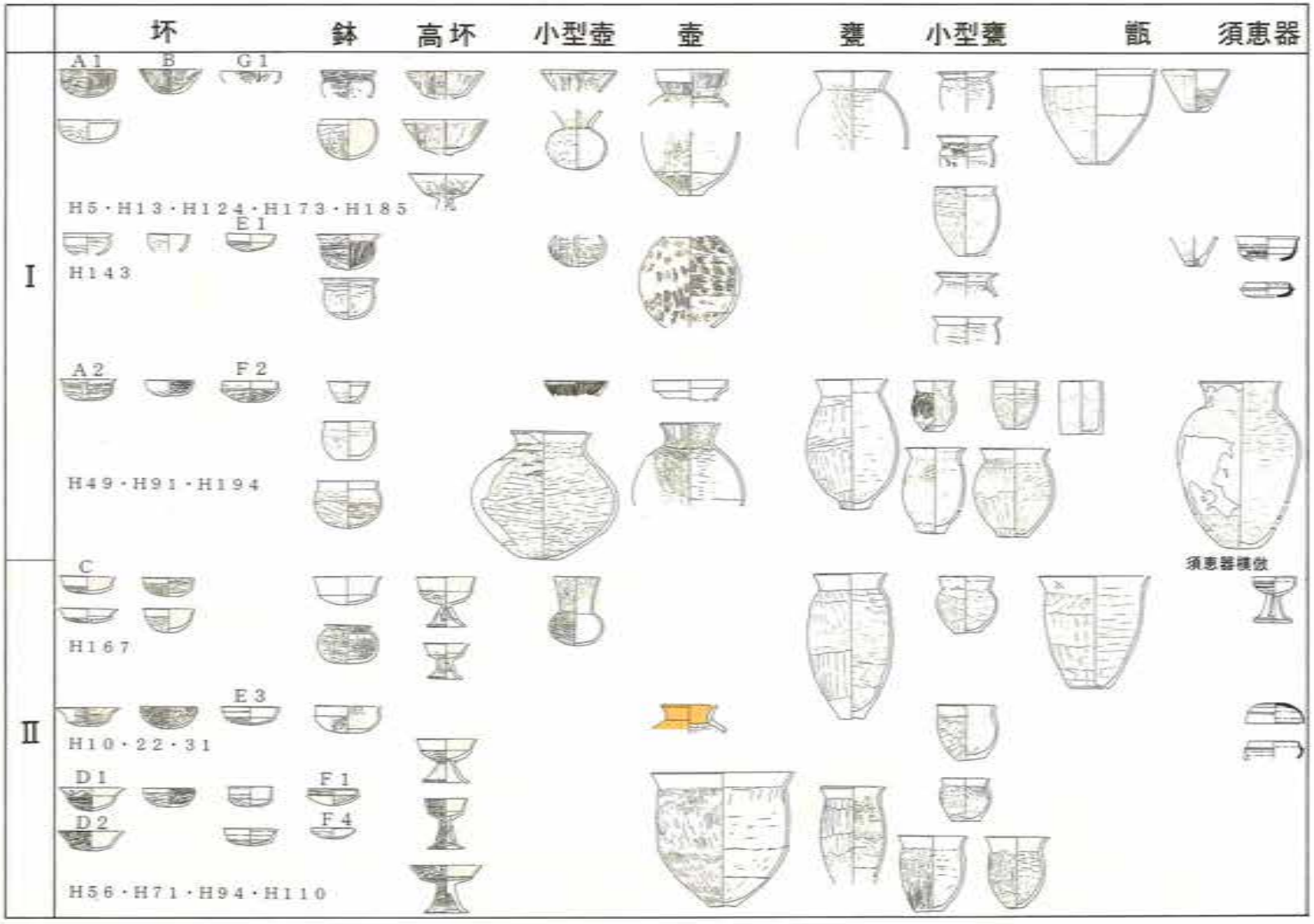
Ⅱ期－坏Ａ２がＣ→Ｄ１→Ｄ２に変化、有段口縁坏Ｅ３が組成にに加わり、有段口縁壺は存在しない。甕は長胴化が進み、体部の中央付近に最大径を有する。ＭＴ15やＴＫ10号窯式期の須恵器が伴出する。小型の丸底壺は本期で消滅するようである。

Ⅲ期－坏Ｄ系はＤ３・Ｄ４に変化し、Ｅ・Ｆ系の坏が増加する。橙色陶質のＥ４やＧ５も組成に加わる。高杯は長脚化の後短脚に転じる。坏部は稜を有するものと半球状のものが存在する。甕は本期の当初において顕著な刷毛目調整、弥生後期の壺のように体部下半で内屈するものが存在する。胎土を含め異質な土器群である。これら以外の甕は最大径を口縁部に有するようになる。甑は多孔のものが出現する。共伴する須恵器はＭＴ85・ＴＫ43・ＴＫ209号窯式期のものである。

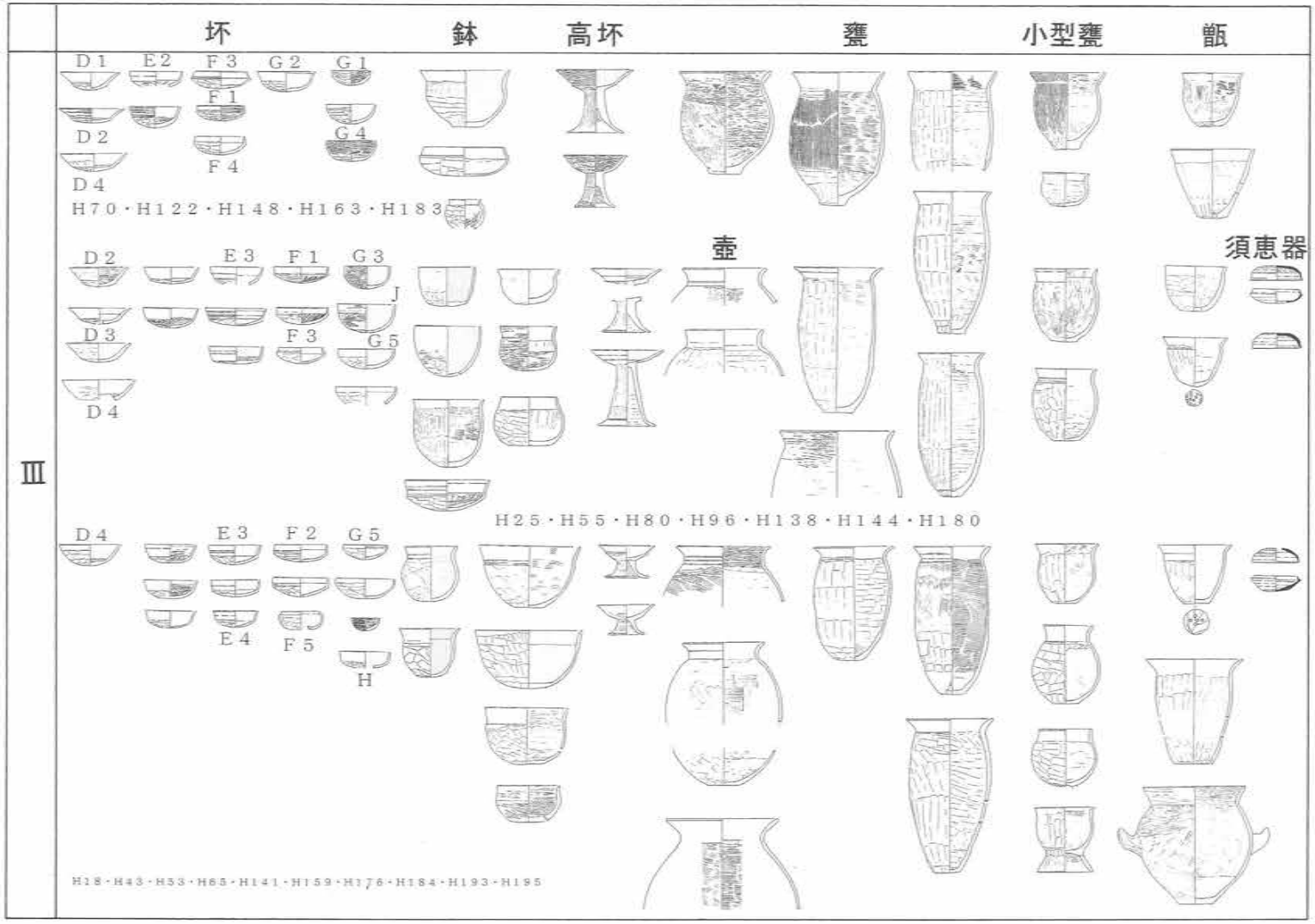
Ⅳ期－Ｄ系の坏は姿を消しＥ系やＧ系の坏が主体となる。新たにＫ形態が認められる。高杯は短脚で半球状の坏部を有し、小型化するようである。甕は卵形の体部を呈するものが一時期認められ、また武蔵甕の祖形が出現する。

Ⅰ期	Ｈ５・13・124・173・185 Ｈ143 Ｈ49・91・194
Ⅱ期	Ｈ167 Ｈ10・22・31 Ｈ56・71・94・110
Ⅲ期	Ｈ70・75・122・148・163・183 Ｈ25・55・80・96・138・144・180・181・182 Ｈ18・43・53・65・67・141・159・176・184・193・195
Ⅳ期	Ｈ52・69・79・92・107・152・162・186 Ｈ81・128・136・150・161・166・172・179 Ｈ48・50・62・63・140
不明	Ｈ17・21・57・73・74・88・101・119・177

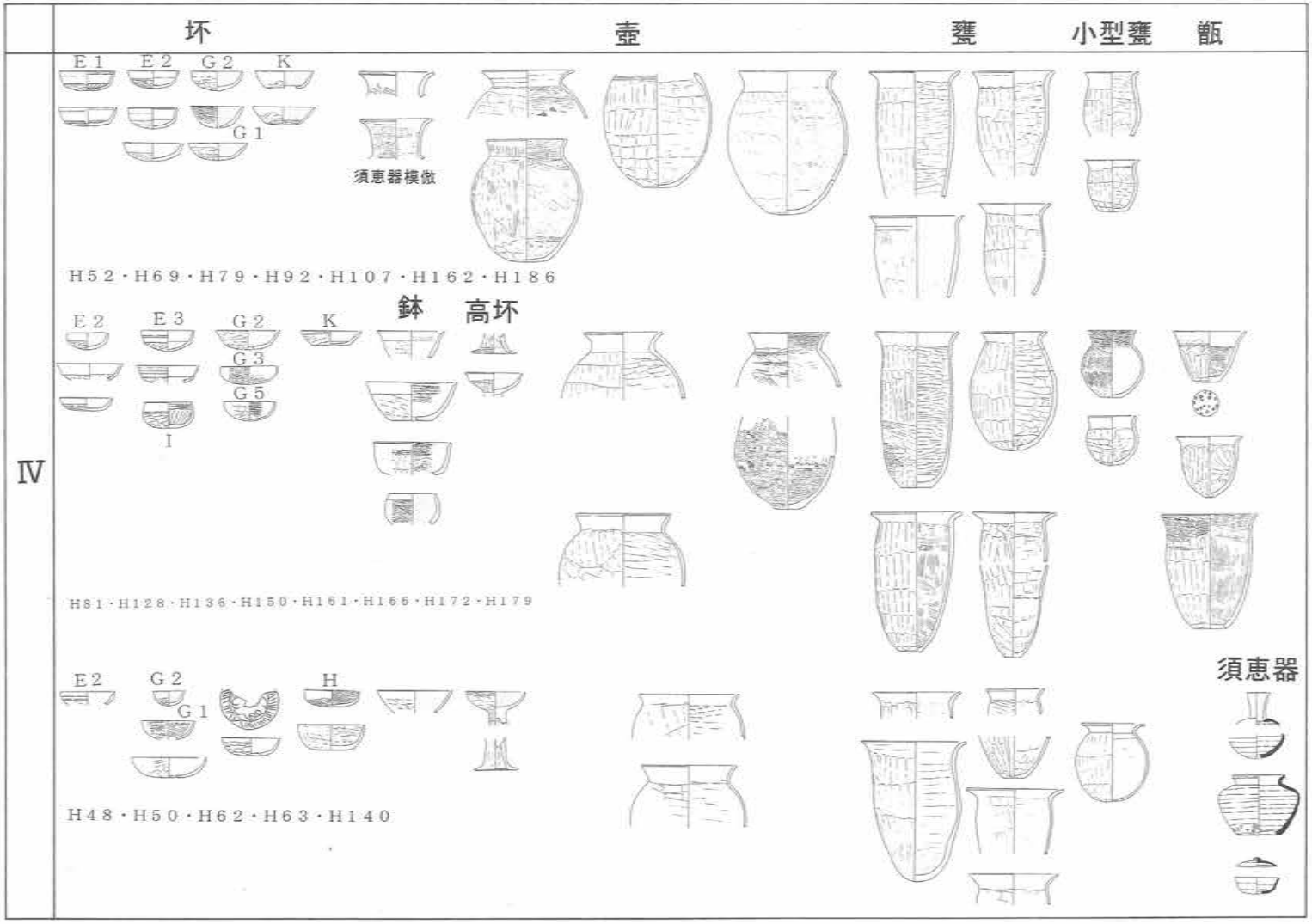
第346表　古墳時代住居址の時期区分



第380図　古墳時代編年表（1）



第381図　古墳時代編年表（2）



第382図　古墳時代編年表（3）

第3節　奈良・平安時代

1　土器様相

奈良・平安時代の土器様相については、堤　隆の鋳師屋遺跡群での編年を踏襲している。その理由は、同一遺跡群内の豊富な資料をもとにしていること、方法論が明確であること、問題点が現在までのところ認められないことによる。また、共通の土器編年を基に遺跡単位で土器様相を把握していくことが、地域編年確立の基本と考えるからである。なお、平安時代については、高村博文の薊沢遺跡報告書の佐久地方の平安時代土器編年試論も援用している。

今回の調査で検出された奈良・平安時代の住居址はⅠ～Ⅷの8期に区分される。これらは堤編年に準拠しており、当遺跡のⅠ～Ⅴ期は堤のⅠ～Ⅴ期に該当する。Ⅵ期は堤のⅥ・Ⅶ期が、Ⅶ期はⅧ期が該当するものと思われる。当遺跡のⅧ期についてはⅦ期との間に時間差が存在する。具体的に各期に該当する住居址は以下のようである。

Ⅰ期－H24・78・85・145・147・165・199

Ⅱ期－H11・12・66・133・142・154

Ⅲ期－H83・93・105・114・156・157

Ⅳ期－H45・104・115・125・135・197

Ⅴ期－H 8 ・58・59・76・84・98・149・171・192

Ⅵ期－H19・46・127・146・147・174・175・198

Ⅶ期－H130・134

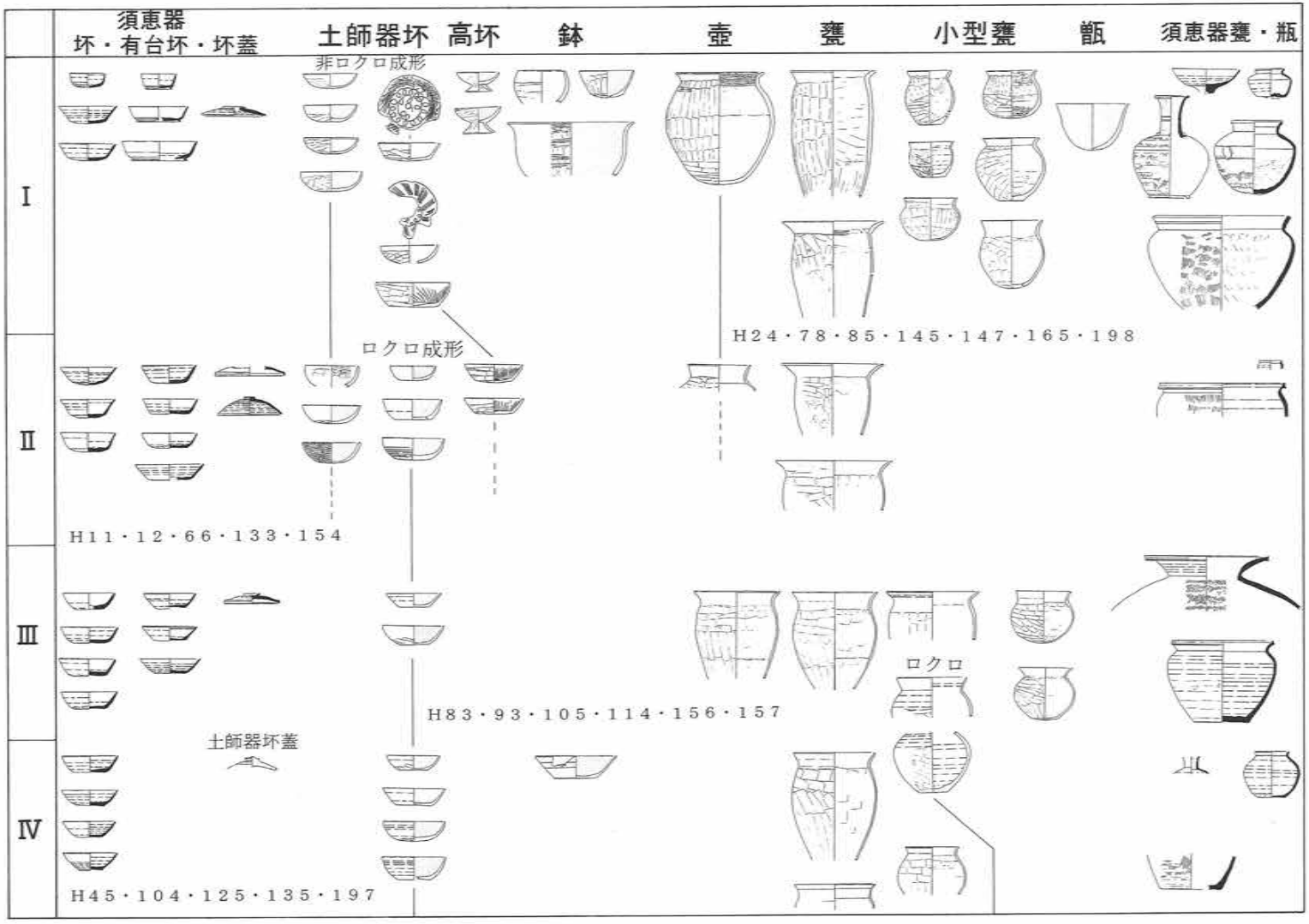
Ⅷ期－H132

不明－H35・126・131・160・169

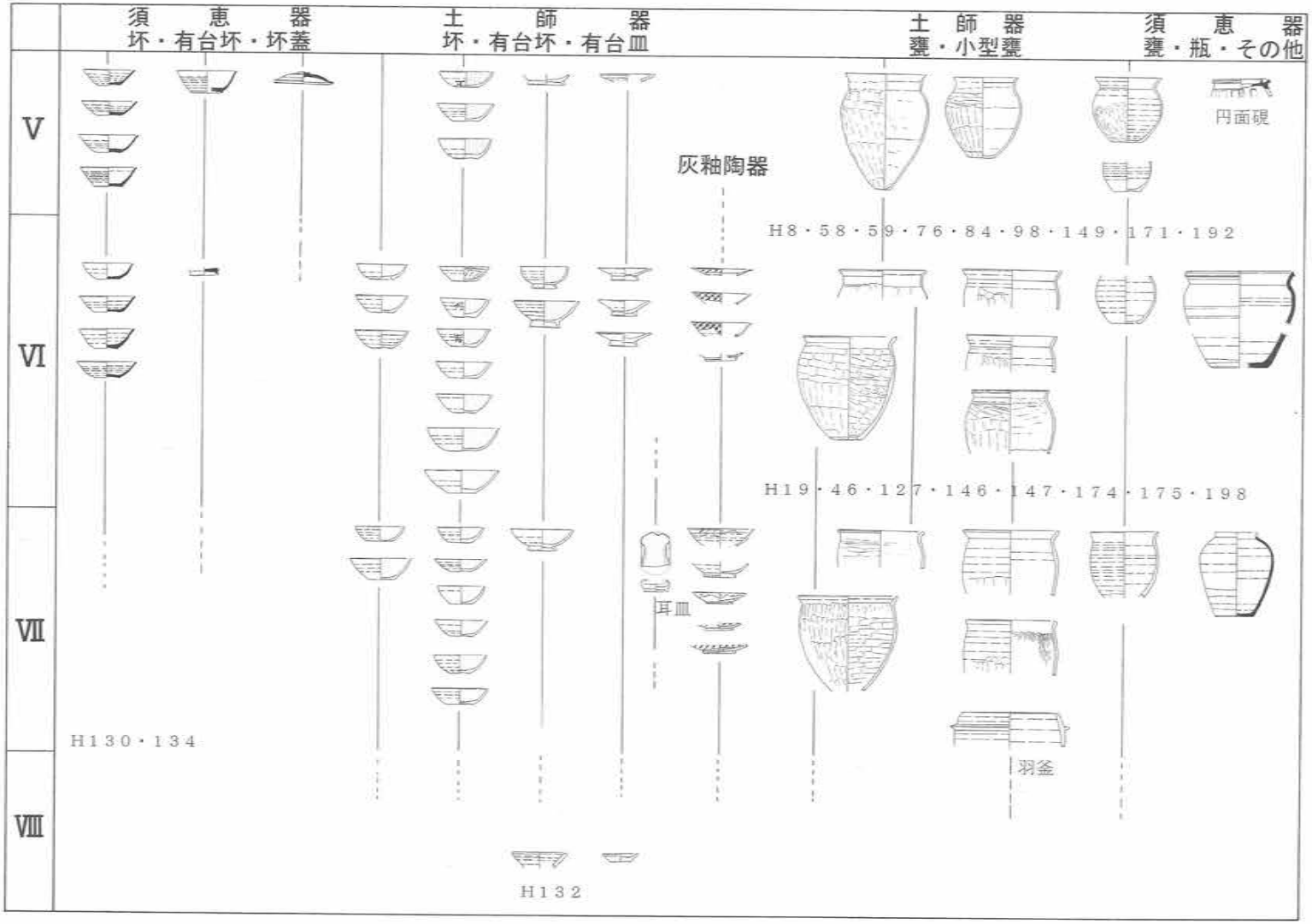
また、その年代はⅠ期－8世紀第Ⅰ四半期、Ⅱ期－8世紀第Ⅱ四半期、Ⅲ期－8世紀第Ⅲ四半期、Ⅳ期－8世紀第Ⅳ四半期～9世紀初頭、Ⅴ期－9世紀前半、Ⅵ期－9世紀後半、Ⅶ期－10世紀前半、Ⅷ期－11世紀後半が比定される。

2　墨書・刻書土器

Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ次の調査により出土した墨書・刻書土器は24点である。これらの文字が記される土器は内黒の土師器坏がそのほとんどを占めている。時期的にはⅠ期－H199、Ⅲ期－H93、Ⅳ期－H45、Ⅴ期－H8.149・192、Ⅵ期－H127・146・147・174・198、Ⅶ期－H130となり、Ⅵ期（9世紀後半）に集中する傾向が窺える。具体的に記された文字で判読可能なものは、1の「上」、2・3の「告」、6の「刑」？、7の「帝」、10の「東」、12の「井」などである。この内

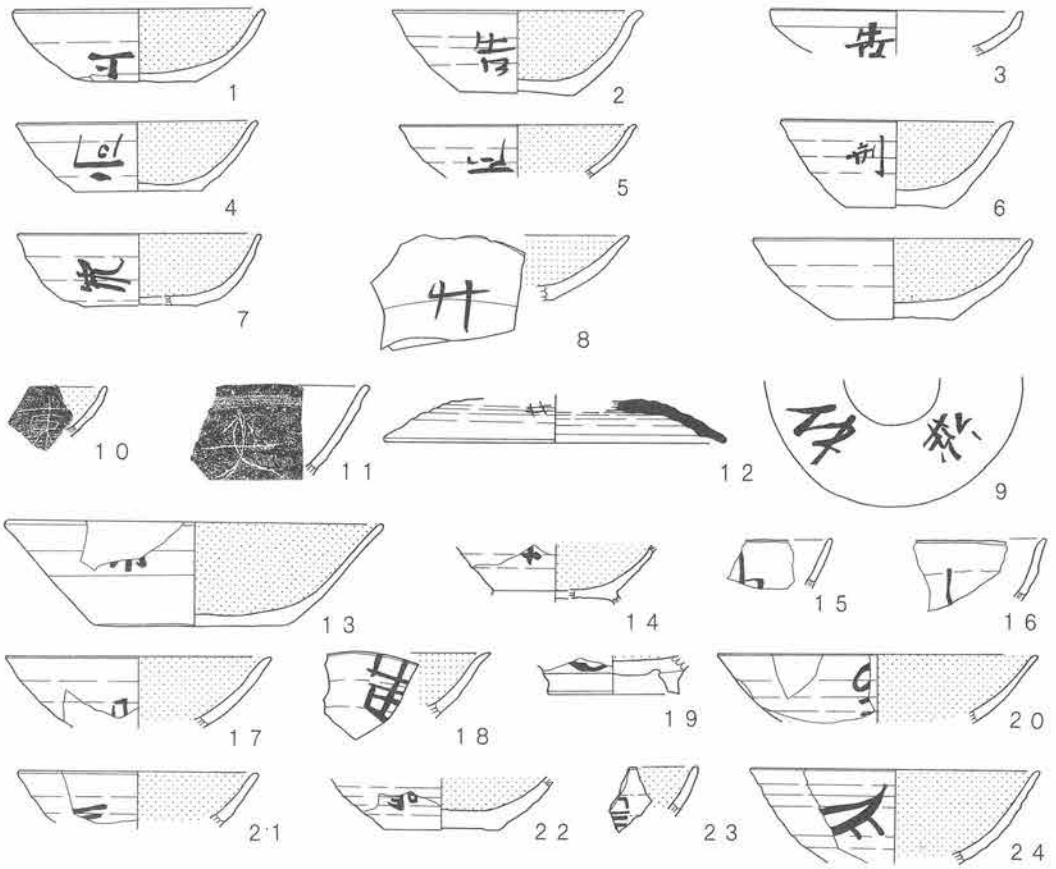


第383図　奈良時代編年表



第384図　平安時代編年表

注目すべきものとして12の「井」がある。中野市清水山窯跡ＳＷ01（灰原）から出土した「佐玖郡」の刻書が記された須恵器無頸壺と伴に、「井」と刻書された製品が窯跡・灰原から多量に出土している。当遺跡のＨ198号住居址出土の須恵器坏蓋と同形態のものが清水山窯跡には存在しない点、胎土分析を実施していない点などの問題も存在するが、「佐玖郡」の刻書無頸壺の存在とともに、律令下の千曲川流域さらには信濃国における須恵器生産と供給の体制を考える重要な資料となる可能性を秘めている。



第385図　墨書・刻書土器

付　　編

西一本柳遺跡出土の獣骨

群馬県立大間々高等学校
教諭　　宮崎　重雄

本遺跡は佐久市岩村田に所在し、弥生時代の日本鹿を多出する。

1．H14号住居址（弥生時代）

歯冠部の完存したウシの右下顎第３後臼歯で、近遠心径40.5㎜、頬舌径16.0㎜、歯冠高36.0㎜である。発掘資料としての弥生時代のウシはきわめて数少なく貴重である。

2．H41号住居址（弥生時代）

（１）ニホンジカ

この住居址からは４個体以上のニホンジカが出土する。右顎骨が４個検出されていることでそれが分かる。このうち３個体は成獣で、うち検出面で出土した１個体は咬耗が著しく老獣である。残り１個体は乳臼歯の生えている幼獣である。この幼獣のものと思われる骨端部の離脱した大腿骨や椎骨も存在する。

本住居址でのニホンジカの出土部位は頭蓋・椎骨・助骨・前肢・後肢など体の各部に及び全身が住居内に持ち込まれていたことがわかる。幼獣のものは別として、各部位がどの個体のものであるかはわからない。

出土骨のなかにはごく僅かながら焼骨片も含まれている。シカ肉を焼いて食べたのであろう。鹿角は３本検出されている。№47標本は第２枝付きの角幹で、近位面は切断面となっている。角幹表面は人工的に平滑に削られている。№65標本は左の落角で、野外で拾ったものを持ち込んでいる。角座・角座直上の角幹それぞれの径は50.0×44.1㎜・41.1×30.7㎜で、第１分岐部の高さは49.0㎜である。第１枝は切断されている。

（２）イノシシ

イノシシの犬歯を素材にした骨鏃が出土している。骨鏃の幅は10.5㎜、長さは31.5㎜である。

（３）巻き貝

同じ種類の巻き貝が７個出土している。種の鑑定はなされていない。

3．H50号住居址（古墳時代）

Ⅲ区からイノシシの左下顎第３後臼歯が検出されている。歯冠部が完存し、近遠心径37.9㎜、頬舌径17.8㎜、歯冠高14.3㎜である。

4．H78号住居址（奈良時代）

覆土からウマの上顎臼歯片が出土している。舌側歯冠高は23.0㎜で、壮年期後期から老年期の個体である。

5．H79号住居址（古墳時代）

カマドからニホンジカの左上腕骨遠位部が出土している。遠位端幅は41.8㎜を計測する。

6．H130号住居址（平安時代）

床面からウシと思われる歯片が出土している。

7．H143号住居址（古墳時代）

検出面からニホンジカの左下顎第２前臼歯が出土している。

8．H158号住居址（古墳時代）

Ⅲ区掘方からニホンジカの左踵骨が出土している。

引用・参考文献

1966　陶邑古窯址群Ⅰ　平安学園考古学クラブ
1978　陶邑Ⅲ　（財）大阪文化財センター
1983　弥生土器Ⅰ・Ⅱ　ニューサイエンス社
1984　北西の久保　－1次調査－　佐久市教育委員会
1986　弥生文化の研究3　雄山閣
1987　弥生文化の研究4　雄山閣
1987　北西の久保　－2次調査－　佐久埋蔵文化財調査センター
1987　前田遺跡　御代田町教育委員会
1987　長野吉田高校グランド遺跡　長野市教育委員会　長野市遺跡調査会
1987　長野県考古学会誌　55・56号　長野県考古学会
1988　十二遺跡　御代田町教育委員会
1988　薊沢・蔦石　佐久埋蔵文化財調査センター
1988　長野県史　考古資料編　遺構・遺物　長野県史刊行会
1988　長野県埋蔵文化財センター　紀要2　（財）長野県埋蔵文化財センター
1989　前田遺跡　佐久市教育委員会
1989　中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書3　塩尻市内その2　吉田川西遺跡　日本道路公団名古屋建設局　長野県教育委員会　（財）長野県埋蔵文化財センター
1989　根岸遺跡　御代田町教育委員会
1989　宮の上Ⅱ　佐久埋蔵文化財調査センター
1990　松本市県町遺跡　松本市教育委員会
1990　研究入門　須恵器　柏書房
1990　佐久考古6号　赤い土器を追う　佐久考古学会
1990　中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書4　松本市内その1　総論編　日本道路公団名古屋建設局　長野県教育委員会　（財）長野県埋蔵文化財センター
1991　長野県考古学会誌63　長野県考古学会
1991　石附窯址群Ⅲ　佐久市教育委員会
1991　松原遺跡　長野市教育委員会
1992　国道141号線関係遺跡　佐久市教育委員会
1993　松原遺跡Ⅲ　長野市教育委員会
1993　本村東沖遺跡　長野市教育委員会
1994　東下原・大下原・竹花・舟窪・大塚原　小諸市教育委員会
1994　西一本柳Ⅰ　佐久市教育委員会
1994　出川南遺跡Ⅳ・平田里古墳群　松本市教育委員会
1995　西一本柳遺跡Ⅱ・中西ノ久保遺跡Ⅰ　佐久市教育委員会
1995　曽根新城遺跡Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅵ　上久保田向遺跡Ⅰ・Ⅱ・Ⅴ・Ⅵ・Ⅶ　西曽根遺跡Ⅱ・Ⅲ　佐久市教育委員会
1995　東国土器研究4号　東国土器研究会
1995　長野県考古学会誌75　長野県考古学会
1996　長野県考古学会誌79　長野県考古学会
1996　寺添遺跡　佐久市教育委員会
1997　出土した古代の土器　群馬県埋蔵文化財調査センター
1997　長野県埋蔵文化財センター　紀要3　（財）長野県埋蔵文化財センター
1997　円正坊Ⅱ　佐久市教育委員会
1997　上信越自動車道埋蔵文化財調査報告書13　小布施町・中野市内その1・その2　日本道路公団名古屋建設局　長野県教育委員会　（財）長野県埋蔵文化財センター
1998　根々井芝宮遺跡　佐久市教育委員会
1998　御代田町誌　歴史編上　御代田町誌刊行会

図　版

図版目次

一　H１号住居址、H２号住居址
二　H３号住居址、H４号住居址
三　H５・９号住居址、H６号住居址
四　H７号住居址
五　H８号住居址、H10号住居址
六　H11号住居址、H12号住居址
七　H10号住居址カマド、H12号住居址カマド、H13号住居址
八　H８・15号住居址、H14号住居址、H16号住居址
九　H17号住居址、H18号住居址カマド
十　H19号住居址、H34号住居址炉、H20・34号住居址
十一　H21号住居址、H22号住居址、H23・38号住居址
十二　H24号住居址
十三　H25号住居址、H26号住居址、H29号住居址
十四　H30号住居址、H31号住居址、H32号住居址
十五　H25・33号住居址、H34号住居址、H36号住居址
十六　H37号住居址、H39号住居址
十七　H10号住居址、H40号住居址
十八　H36号住居址、H40号住居址、H44号住居址
十九　H41号住居址
二十　H34号住居址、H42号住居址
二十一　H44号住居址、H45号住居址
二十二　H46号住居址、H47号住居址
二十三　H50号住居址、H52号住居址
二十四　H53号住居址、H54号住居址
二十五　H55号住居址、H56号住居址
二十六　H57号住居址、H58号住居址
二十七　H60号住居址、H61号住居址
二十八　H62号住居址、H64号住居址
二十九　H63号住居址、H65号住居址
三十　H66号住居址、H69号住居址
三十一　H67号住居址
三十二　H67号住居址カマド、H70号住居址カマド
三十三　H70号住居址、H74号住居址
三十四　H77号住居址、H78号住居址
三十五　H79号住居址、H80号住居址
三十六　H79号住居址カマド、H80号住居址カマド、H81・84号住居址
三十七　H82号住居址、H83号住居址
三十八　H85号住居址、H87号住居址、H89号住居址
三十九　H90号住居址、H91号住居址
四十　H92号住居址、H94号住居址、H96号住居址
四十一　H98・110号住居址、H99号住居址、H100号住居址
四十二　H102号住居址、H104号住居址
四十三　H105号住居址、H107号住居址、H109号住居址、H111号住居址
四十四　H114号住居址
四十五　H115号住居址、H116号住居址
四十六　H117号住居址、H119号住居址

四十七　H120号住居址、H121号住居址
四十八　H101号住居址、H124号住居址
四十九　H125号住居址
五十　H126号住居址、H127号住居址
五十一　H128号住居址、H129号住居址、H130号住居址カマド
五十二　H130号住居址、H131号住居址
五十三　H132号住居址、H133号住居址
五十四　H134号住居址
五十五　H135号住居址、H136号住居址
五十六　H140号住居址、H141号住居址
五十七　H144号住居址、H145号住居址
五十八　H143号住居址、H146号住居址
五十九　H147号住居址、H148号住居址
六十　H149号住居址
六十一　H150号住居址、H152号住居址
六十二　H154号住居址、H155号住居址
六十三　H156号住居址、H157号住居址
六十四　H158号住居址、H159号住居址
六十五　H160号住居址、H162号住居址
六十六　H165号住居址、H166号住居址
六十七　H167号住居址
六十八　H171号住居址、H172号住居址
六十九　H174号住居址、H175号住居址
七十　H176号住居址、H177号住居址
七十一　H178号住居址
七十二　H179号住居址、H180号住居址
七十三　H181号住居址、H182号住居址
七十四　H183号住居址、H190号住居址
七十五　H191号住居址、H192号住居址
七十六　H193号住居址、H194号住居址
七十七　H195号住居址
七十八　H196号住居址、H197号住居址、H188・198号住居址
七十九　H197号住居址、H201号住居址
八十　F１号掘立柱建物址、F２号掘立柱建物址
八十一　F５号掘立柱建物址、F６号掘立柱建物址
八十二　F７号掘立柱建物址、F８号掘立柱建物址
八十三　F10号掘立柱建物址、F11号掘立柱建物址
八十四　F12号掘立柱建物址、F14号掘立柱建物址
八十五　F15号掘立柱建物址、F16号掘立柱建物址、
F17号掘立柱建物址、F18号掘立柱建物址
八十六　F22号掘立柱建物址、F23号掘立柱建物址
八十七　F26号掘立柱建物址、F27号掘立柱建物址
八十八　F13号掘立柱建物址、F27号掘立柱建物址、F29号掘立柱建物址
八十九　F28号掘立柱建物址、F31号掘立柱建物址
九十　F33号掘立柱建物址、F34号掘立柱建物址
九十一　F35号掘立柱建物址、F36号掘立柱建物址
九十二　F37号掘立柱建物址、F38号掘立柱建物址
九十三　F39号掘立柱建物址、F40号掘立柱建物址

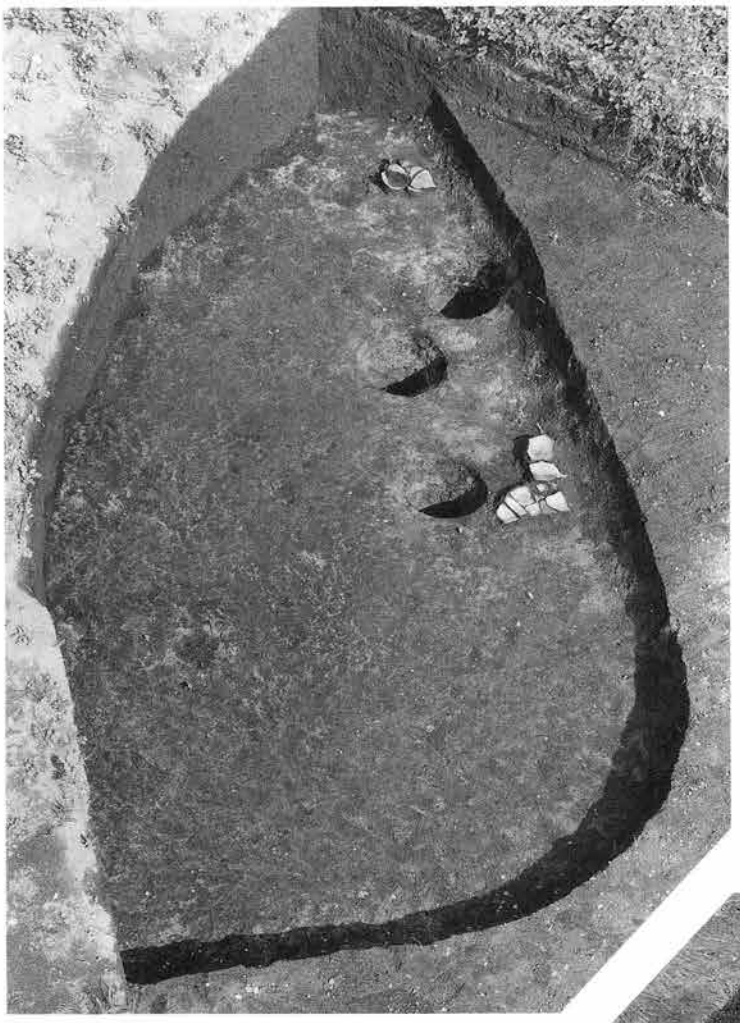
九十四	Ｆ41号掘立柱建物址、Ｆ42号掘立柱建物址
九十五	Ｆ44号掘立柱建物址、Ｍ１号溝址
九十六	Ｍ８号溝址、Ｍ９号溝址
九十七	Ｄ５号土坑、Ｄ10号土坑
九十八	Ｄ５号土坑
九十九	Ｈ１号・Ｈ２号・Ｈ３号住居址出土遺物
百	Ｈ４号住居址出土遺物
百一	Ｈ５号・Ｈ６号住居址出土遺物
百二	Ｈ６号・Ｈ７号・Ｈ８号住居址出土遺物
百三	Ｈ８・Ｈ９・Ｈ10・Ｈ11号住居址
百四	Ｈ12号住居址出土遺物
百五	Ｈ13号・Ｈ14号出土遺物
百六	Ｈ15号・Ｈ16号出土遺物
百七	Ｈ17号・Ｈ18号住居址出土遺物
百八	Ｈ18号住居址出土遺物
百九	Ｈ19号・Ｈ20号住居址出土遺物
百十	Ｈ20号・21号・Ｈ22号・Ｈ23号住居址出土遺物
百十一	Ｈ24号・Ｈ25号・Ｈ26号住居址出土遺物
百十二	Ｈ26号住居址出土遺物
百十三	Ｈ26号・Ｈ27号・Ｈ28号出土遺物
百十四	Ｈ30号・Ｈ31号・Ｈ32号・Ｈ33号住居址出土遺物
百十五	Ｈ35号・Ｈ36号・Ｈ37号住居址出土遺物
百十六	Ｈ38号・Ｈ40号住居址出土遺物
百十七	Ｈ41号住居址出土遺物
百十八	Ｈ41号住居址出土遺物
百十九	Ｈ41号住居址出土遺物
百二十	Ｈ41号住居址出土遺物
百二十一	Ｈ41号住居址出土遺物
百二十二	Ｈ41号・Ｈ42号住居址出土遺物
百二十三	Ｈ42号・Ｈ43号住居址出土遺物
百二十四	Ｈ43号住居址出土遺物
百二十五	Ｈ44号住居址出土遺物
百二十六	Ｈ45号住居址出土遺物
百二十七	Ｈ45号・Ｈ46号住居址出土遺物
百二十八	Ｈ47号・Ｈ48号・Ｈ49号住居址出土遺物
百二十九	Ｈ49号・Ｈ50号住居址出土遺物
百三十	Ｈ52号・Ｈ53号住居址出土遺物
百三十一	Ｈ53号住居址出土遺物
百三十二	Ｈ54号・Ｈ55号住居址出土遺物
百三十三	Ｈ55号・Ｈ56号・Ｈ57号出土遺物
百三十四	Ｈ58号・Ｈ59号住居址出土遺物
百三十五	Ｈ59号・Ｈ60号住居址出土遺物
百三十六	Ｈ60号・Ｈ61号住居址出土遺物
百三十七	Ｈ61号・Ｈ62号住居址出土遺物
百三十八	Ｈ62号住居址出土遺物
百三十九	Ｈ62号・Ｈ63号・Ｈ64号住居址出土遺物
百四十	Ｈ64号・Ｈ65号住居址出土遺物
百四十一	Ｈ65号・Ｈ66号住居址出土遺物

百四十二　H67号・H68号住居址出土遺物
百四十三　H69号・H70号住居址出土遺物
百四十四　H70号住居址出土遺物
百四十五　H70号・H71号住居址出土遺物
百四十六　H72号・H73号・H74号・H75号住居址出土遺物
百四十七　H76号・H77号・H78号住居址出土遺物
百四十八　H78号・H79号住居址出土遺物
百四十九　H79号・H80号住居址出土遺物
百五十　H80号・H81号住居址出土遺物
百五十一　H81号・H82号・H83号住居址出土遺物
百五十二　H84号・H85号住居址出土遺物
百五十三　H85号・H86号・H87号住居址出土遺物
百五十四　H87号・H88号・H89号・H90号住居址出土遺物
百五十五　H91号住居址出土遺物
百五十六　H91・H92・H93・H94号住居址出土遺物
百五十七　H94号・H95号住居址出土遺物
百五十八　H95号住居址出土遺物
百五十九　H96号・H97号住居址出土遺物
百六十　H98号・H99号住居址出土遺物
百六十一　H100号・H101号・H102号住居址出土遺物
百六十二　H103号・H104号・H105号住居址出土遺物
百六十三　H106号・H107号住居址出土遺物
百六十四　H109号・H110号・H113号・H114号住居址出土遺物
百六十五　H114号・H115号住居址出土遺物
百六十六　H115号・H116号住居址出土遺物
百六十七　H117号住居址出土遺物
百六十八　H117号・H118号・H119号・H120号住居址出土遺物
百六十九　H120号・H121号・H122号・H123号・H124号住居址出土遺物
百七十　H124号出土遺物
百七十一　H125号・H126号・H127号住居址出土遺物
百七十二　H127号・H128号・H130号住居址出土遺物
百七十三　H130号・H131号・H132号・H133号住居址出土遺物
百七十四　H134号出土遺物
百七十五　H134号・H135号・H136号出土遺物
百七十六　H136号・H138号・H139号出土遺物
百七十七　H140号・H141号出土遺物
百七十八　H141号住居址出土遺物
百七十九　H141号・H142号・H143号住居址出土遺物
百八十　144号住居址出土遺物
百八十一　H144号・H145号・H146号住居址出土遺物
百八十二　H146号住居址出土遺物
百八十三　H147号・H148号・H149号住居址出土遺物
百八十四　H149号・H150号住居址出土遺物
百八十五　H150号・H151号・H152号住居址出土遺物
百八十六　H153号・H154号住居址出土遺物
百八十七　H156号・H157号住居址出土遺物
百八十八　H158号・H159号住居址出土遺物
百八十九　H160号・H161号・H162号・H163号住居址出土遺物

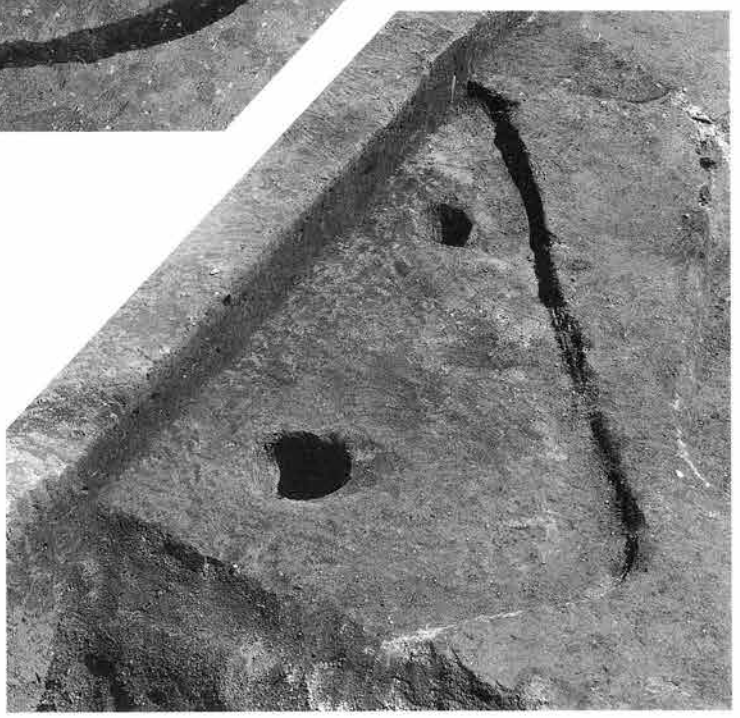
百九十　H163号・H165号・H166号住居址出土遺物
百九十一　H166号住居址出土遺物
百九十二　H167号住居址出土遺物
百九十三　H167号・H168号・H171号・H172号住居址出土遺物
百九十四　H172号・H173号・H174号住居址出土遺物
百九十五　H174号・H175号・H176号住居址出土遺物
百九十六　H177号・H178号・H179号住居址出土遺物
百九十七　H179号・H180号・H181号住居址出土遺物
百九十八　H182号・H183号・H184号住居址出土遺物
百九十九　H185号・H186号・H187号・H189号・H191号住居址出土遺物
二百　H192号住居址出土遺物
二百一　H193号・H194号住居址出土遺物
二百二　H194号住居址出土遺物
二百三　H195号住居址出土遺物
二百四　H195号住居址出土遺物
二百五　H195号住居址出土遺物
二百六　H195号・H196号住居址出土遺物
二百七　H197号・H198号・H199号住居址出土遺物
二百八　H199号・H200号・H201号住居址出土遺物
二百九　F３・７・８・13・32・33・34・36・38・43・44号掘立柱建物址出土遺物
二百十　D１号土坑出土遺物
二百十一　D５号・10号土坑出土遺物
二百十二　M１号溝址出土遺物
二百十三　M１号溝址出土遺物
二百十四　M１号溝址出土遺物
二百十五　M１号・M２号・M３号・M５号溝址出土遺物
二百十六　M５号・M６号・M７号・M８号溝址出土遺物
二百十七　M８号溝址出土遺物
二百十八　M８号溝址出土遺物
二百十九　M８号溝址出土遺物
二百二十　M８号溝址出土遺物
二百二十一　M８号溝址出土遺物
二百二十二　M８号溝址出土遺物
二百二十三　M８号・M９号溝址出土遺物
二百二十四　P42・55・74・179・182・296・320・326出土遺物
二百二十五　遺構外出土遺物
二百二十六　遺構外出土遺物
二百二十七　遺構外出土遺物
二百二十八　遺構外出土遺物
二百二十九　第Ⅱ次調査分H１号・H３号住居址出土遺物
二百三十　第Ⅱ次調査分H３号・H５号・H７号住居址出土遺物
二百三十一　第Ⅱ次調査分H８号・H９号・H10号・H11号住居址出土遺物
二百三十二　第Ⅱ次調査分H12号住居址出土遺物
二百三十三　第Ⅱ次調査分H18号・H19号・H21号・H23号・H26号・H30号住居址出土遺物
二百三十四　第Ⅱ次調査分H41号・H47号・H49号・H50号住居址出土遺物
二百三十五　第Ⅱ次調査分H50号・H51号・H57号・H58号住居址出土遺物
二百三十六　第Ⅱ次調査分H59号・H64号住居址、D８・10・11・31号土坑、M５・15・16号溝址、P８・９・26出土遺物

二百三十七　第Ⅱ次調査分Ｐ１・83・132・143・263・305・308・312、遺構外出土遺物
二百三十八　第Ⅱ次調査分遺構外出土遺物
二百三十九　第Ⅱ次調査分遺構外出土遺物

図版一

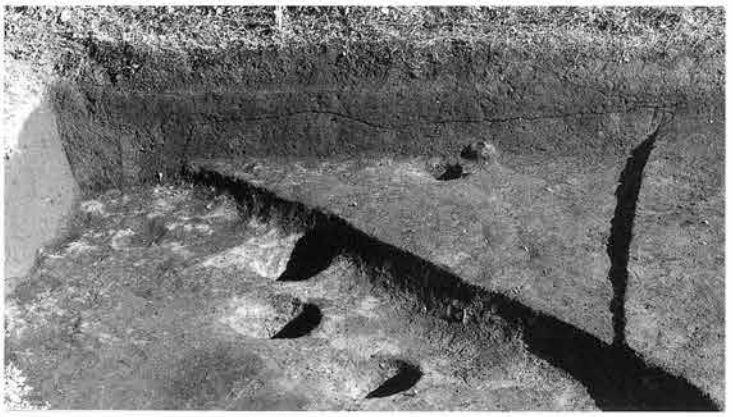


←H１号住居址
（西から）



H２号住居址→
（西から）
手前はM１号溝址

図版二



←H３号住居址（北から）
手前はH１号住居址

↓H４号住居址（北から）

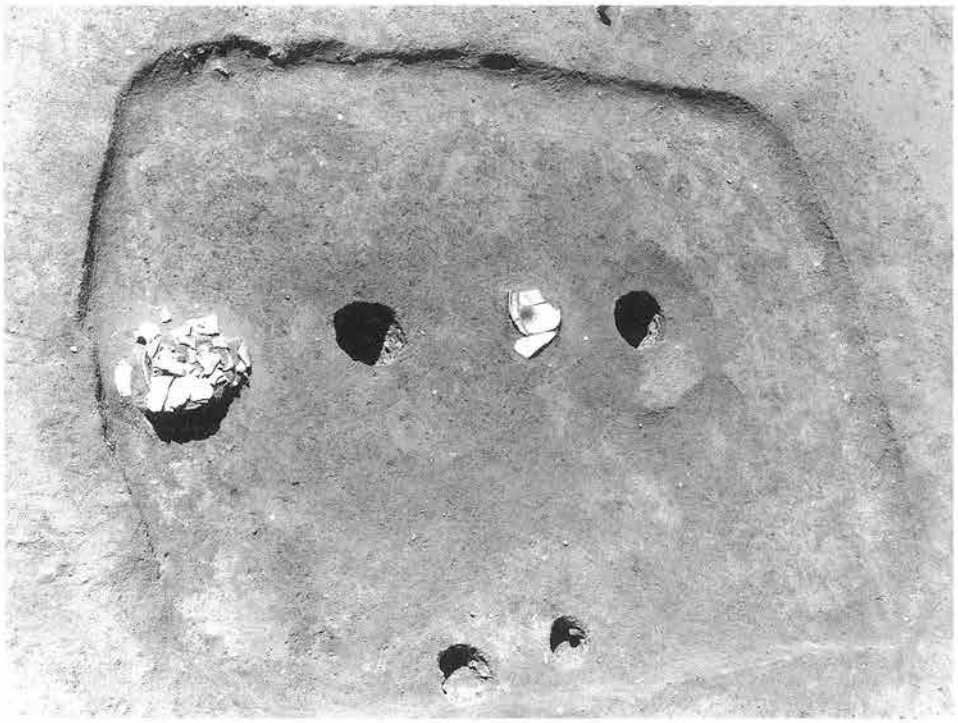
H４号住居址→
炉址
（東から）

図版 三

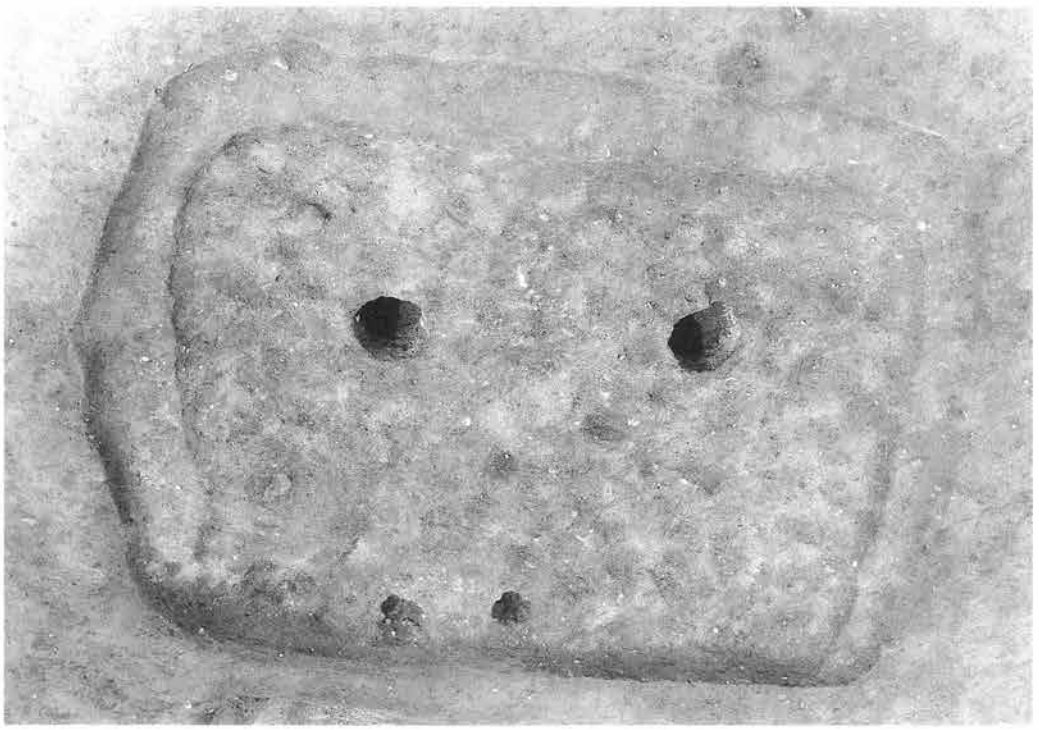
←Ｈ５・９号住居址
（北から）
西壁の張り出した部分がＨ９号住居址、中央部分がＨ５号住居址。

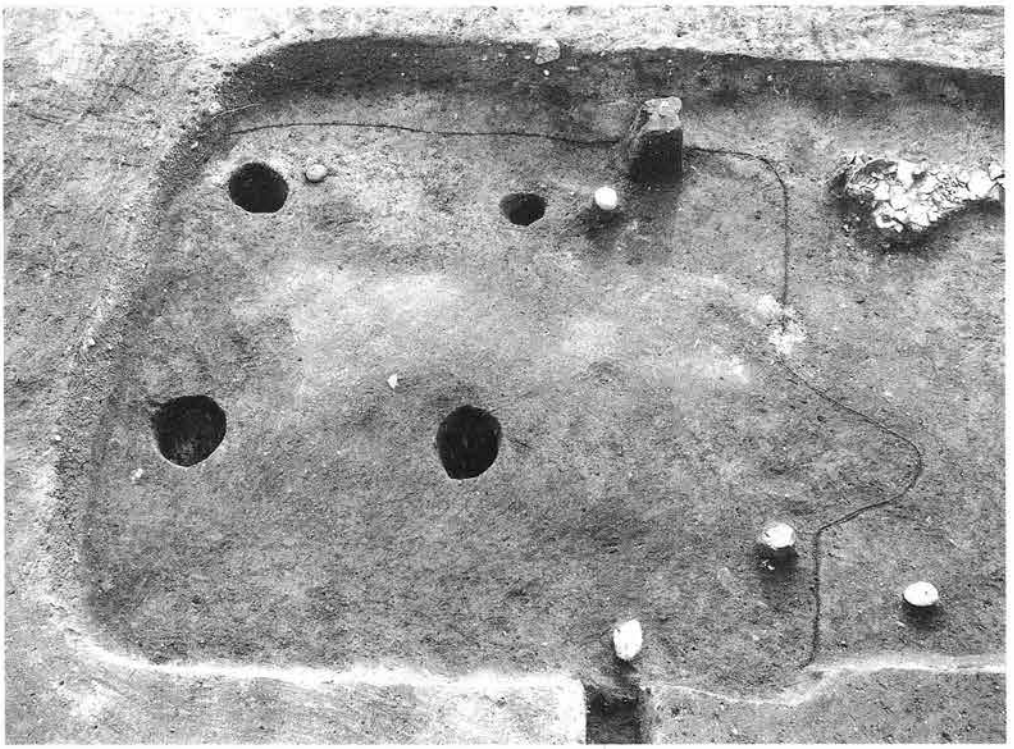
↓Ｈ６号住居址
（西から）

図版 四



H７号住居址は、一回り広い家に拡張されていた事が床下の調査から判明した。
下段の写真内側のラインが旧住居、上段の写真が新住居である。





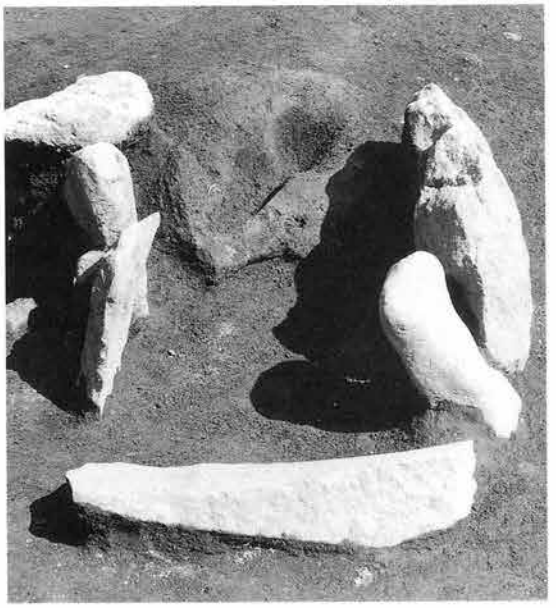
Ｈ８号住居址（東から）線引きされているのが本址、線の外側はＨ15号住居址。

Ｈ10号住居址（北から）

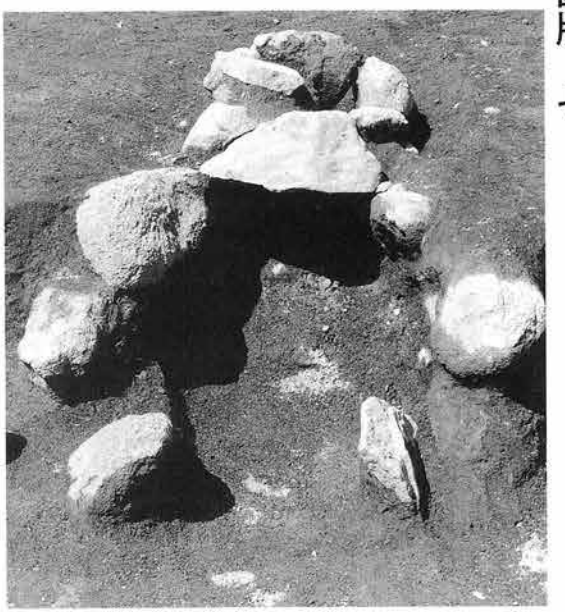
図版 六

←H11号住居址
（南から）

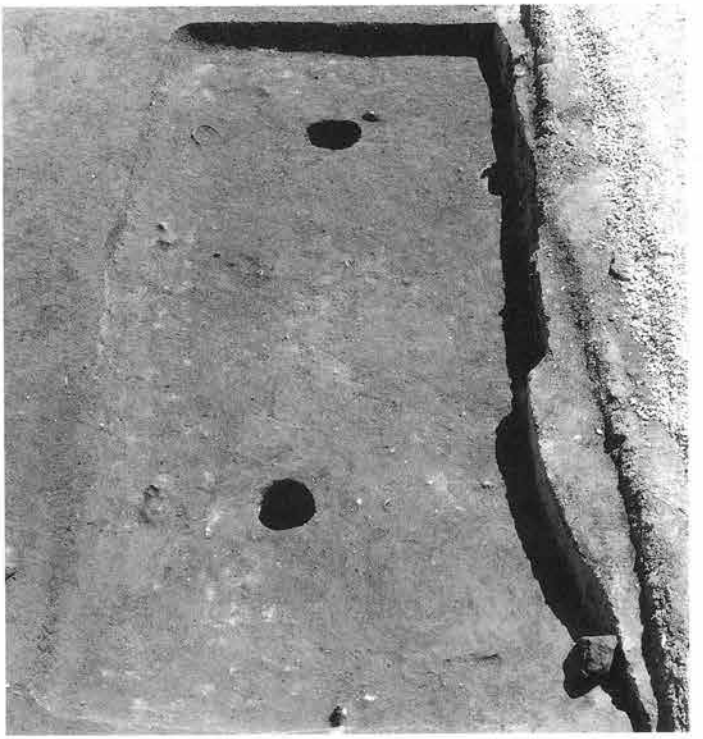
H12号住居址→
（北から）



H10号住居址カマド



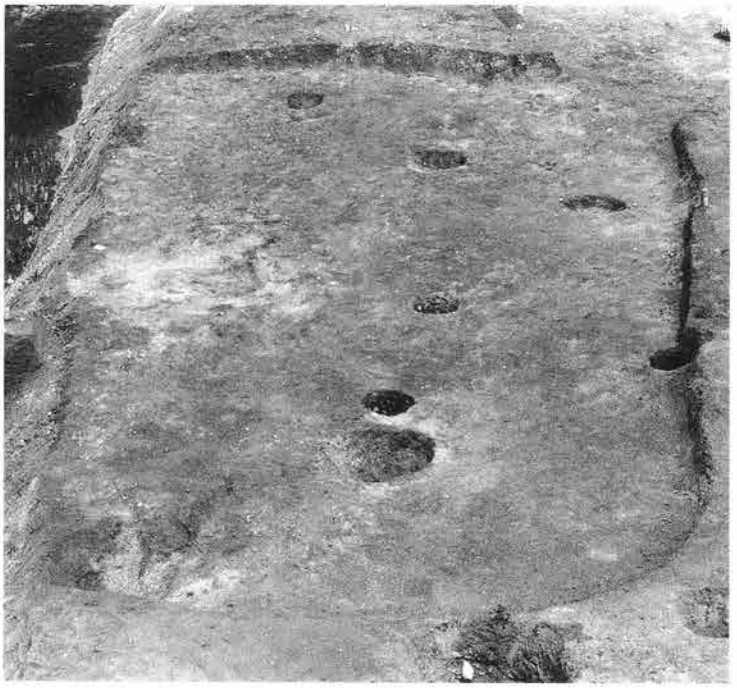
H12号住居址カマド



H13号住居址（北から）

図版 八

↑Ｈ８・15号住居址（東から）
向かって右から後方にかけてがＨ15号住居址。



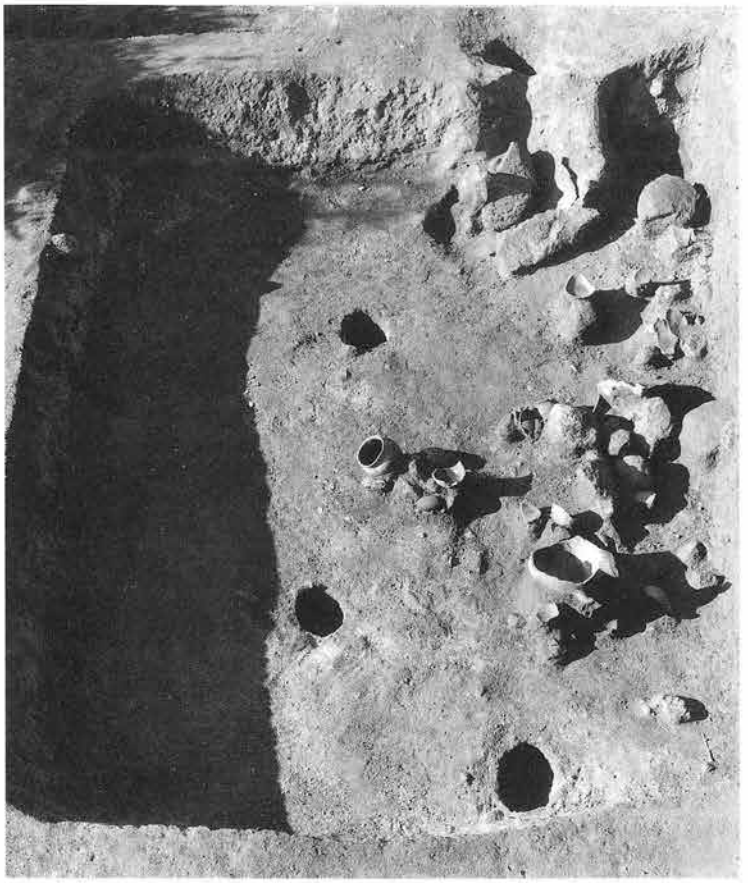
←Ｈ14号住居址（南から）
向かって左がＭ１号溝址。

Ｈ16号住居址（南から）→
向かって右はＭ１号溝址。

図版 九

↑H17号住居址（南から）

H18号住居址カマド→



←H17号住居址（南から）
遺物の出土状況

図版十

↑H19号住居址（西から）

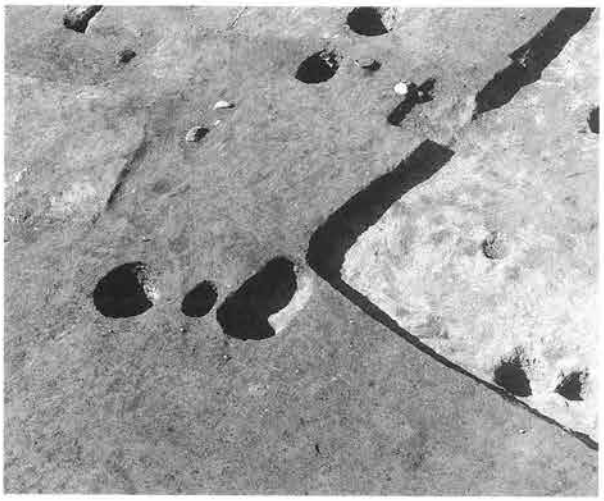
H34号住居址炉址→

←H20・34号住居址（南から）

図版 十一

H21号住居址→
（北から）
住居址内のPitは
F 4 号掘立柱建物址。

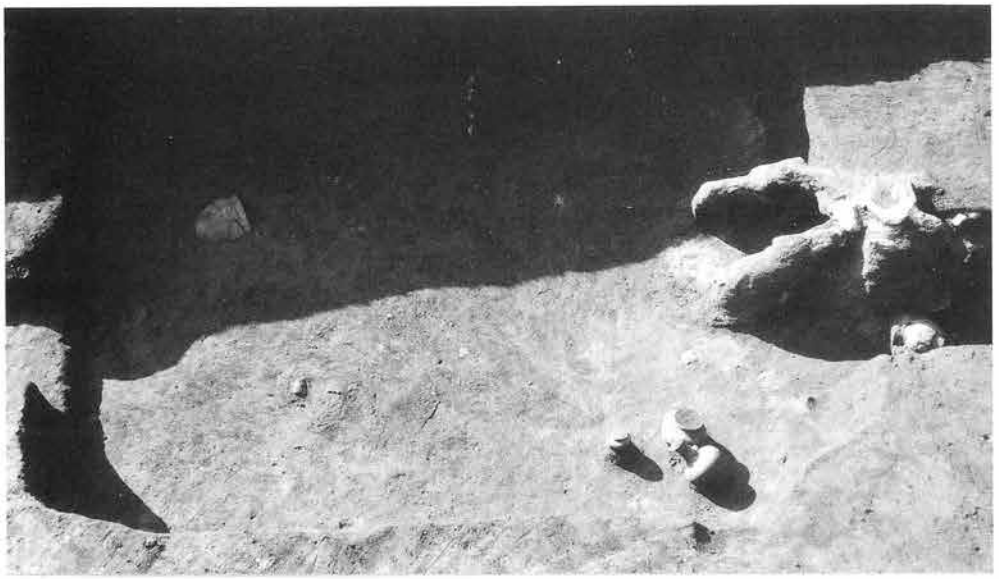
↑
H35号住居址



←H22号住居址
向かって右はH10号住居址。

↓ H23・38号住居址

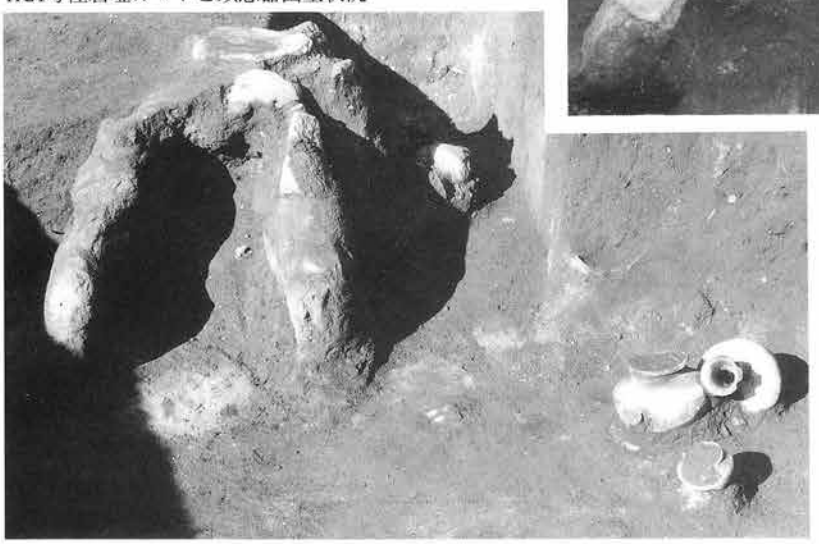
図版 十二



↑H24号住居址（東から）

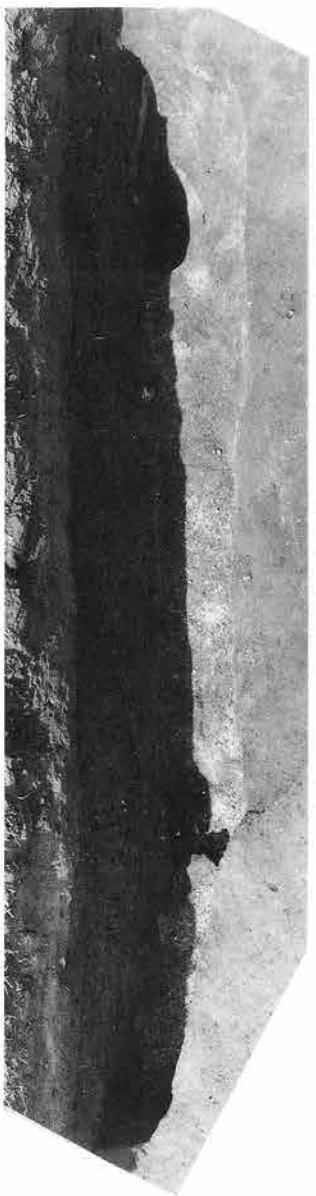
H24号住居址カマド→
芯材構築状況

H24号住居址カマドと須恵器出土状況



図版　十三

←H25号住居址
（北から）
向かって下がH19
号住居址。



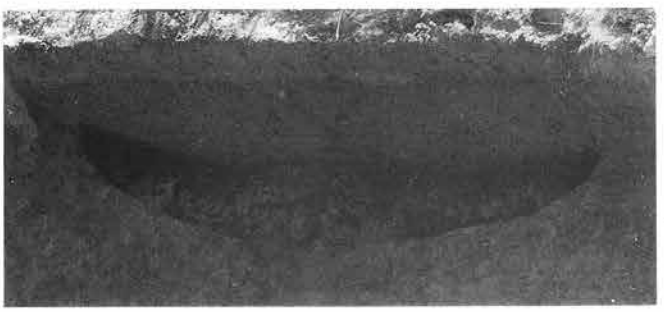
↑H29号住居址
（南から）

←H26号住居址（南から）
向かって右はM１号溝址
左がM３号溝址。

図版 十四

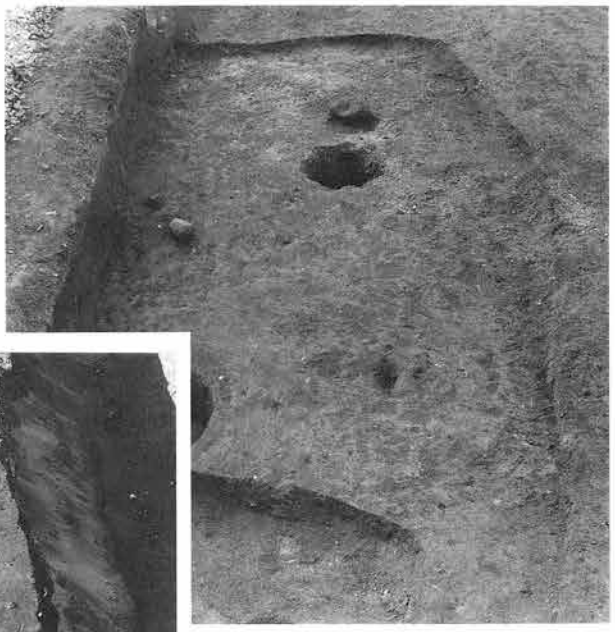
←H30号住居址（北から）
向かって左はH６号住居址。

H31号住居址（南東から）
向かって上はH11号住居址
↓



←H32号住居址（東から）

H25・33号住居址（北から）→
向かって上がH33号
手前がH25号住居址。



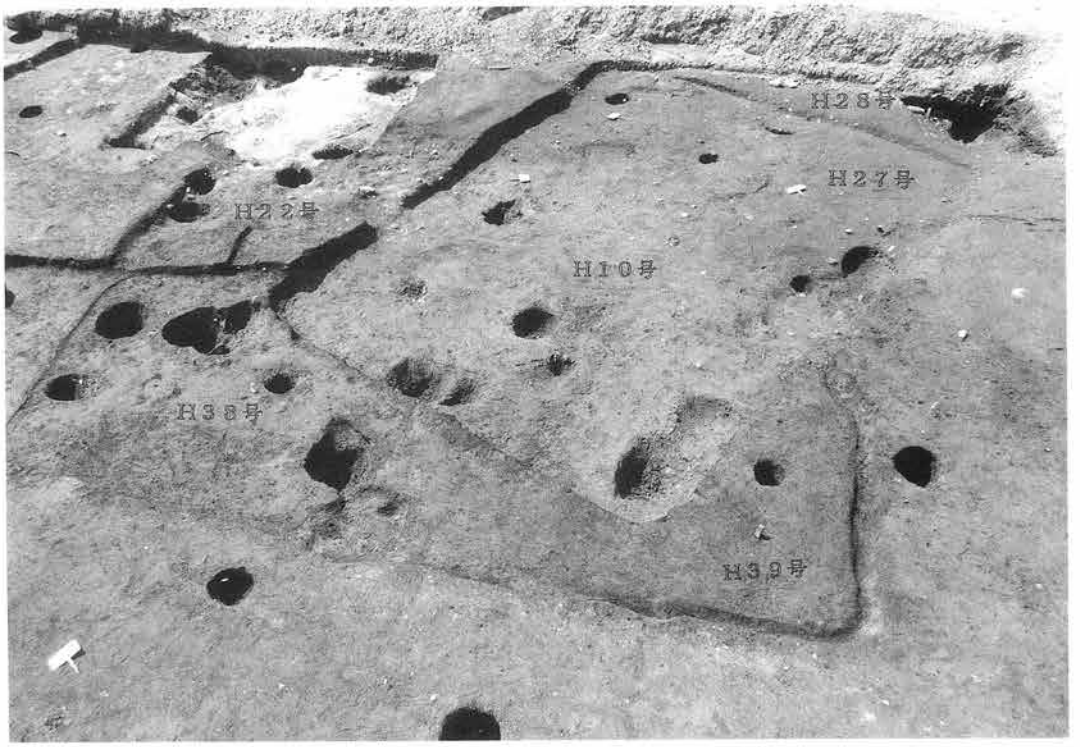
←34号住居址（南から）
向かって右はM１号溝址。

H36号住居址（南から）→

図版　十六

↑
H37号住居址
（西から）

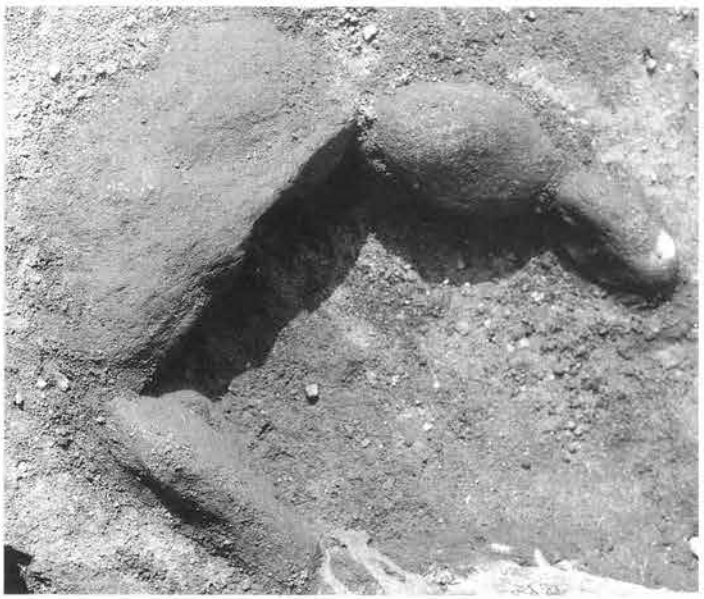
←H39号住居址



H10号住居址とその周辺（東から）

H40号住居址（南西から）

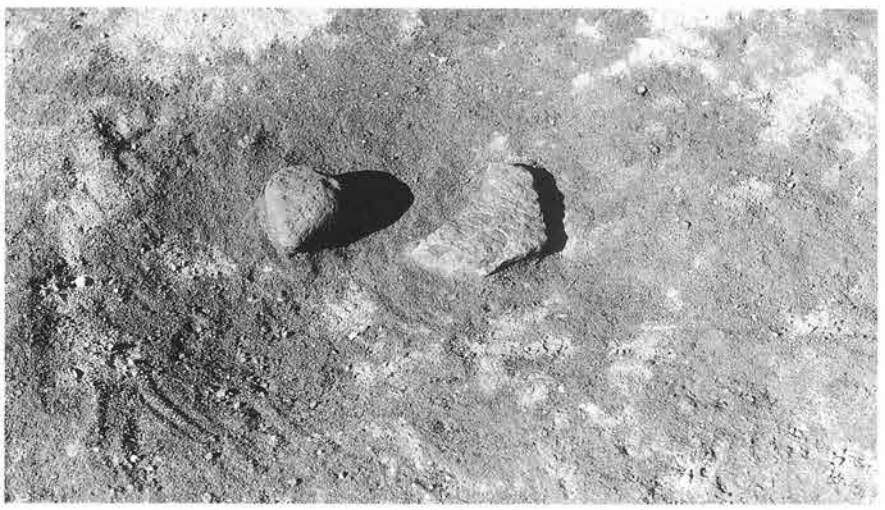
図版 十八



←H36号住居址　炉

H40号住居址　炉→

H44号住居址　炉↓



↑H41号住居址遺物出土状況（サブトレンチに認められる堆積層は灰である）

H41号住居址完掘（南から）

図版 二十

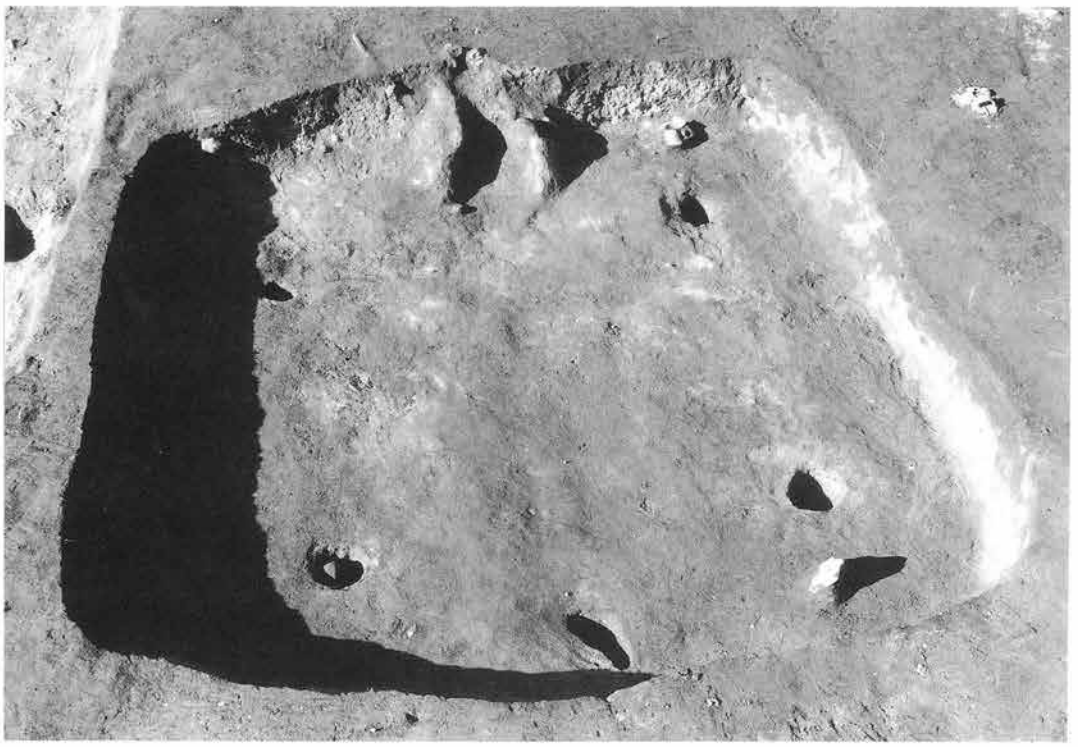
↑H43号住居址（北から）

←H42号住居址（北から）

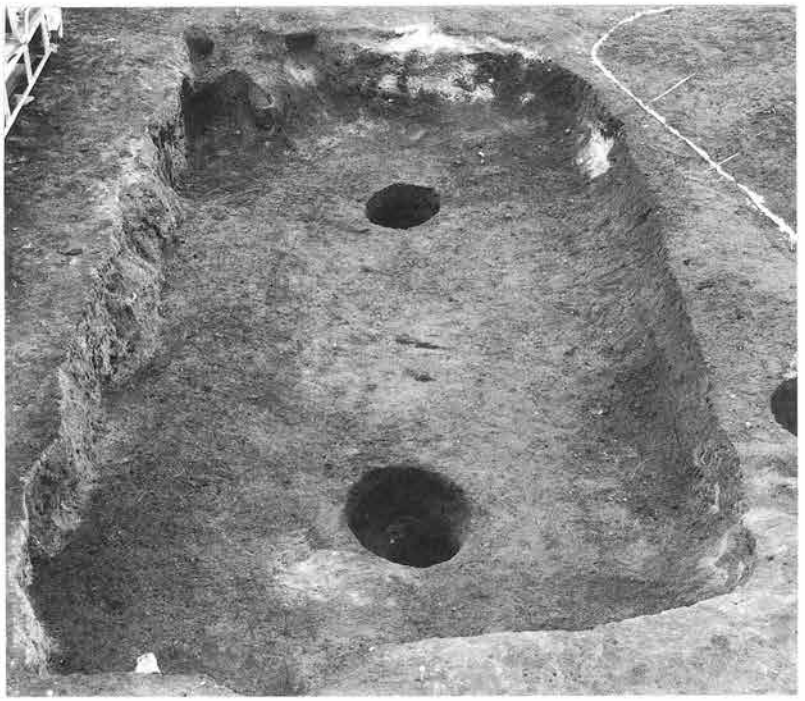
H44号住居址（向かって手前はH41号、奥はM１号溝址）

H45号住居址（南西から）

H46号住居址（西から）



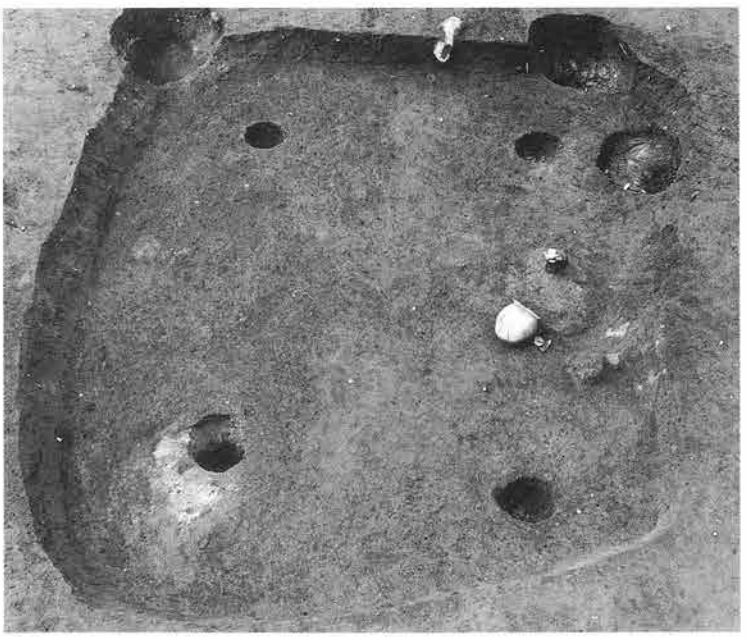
H47号住居址（南から）



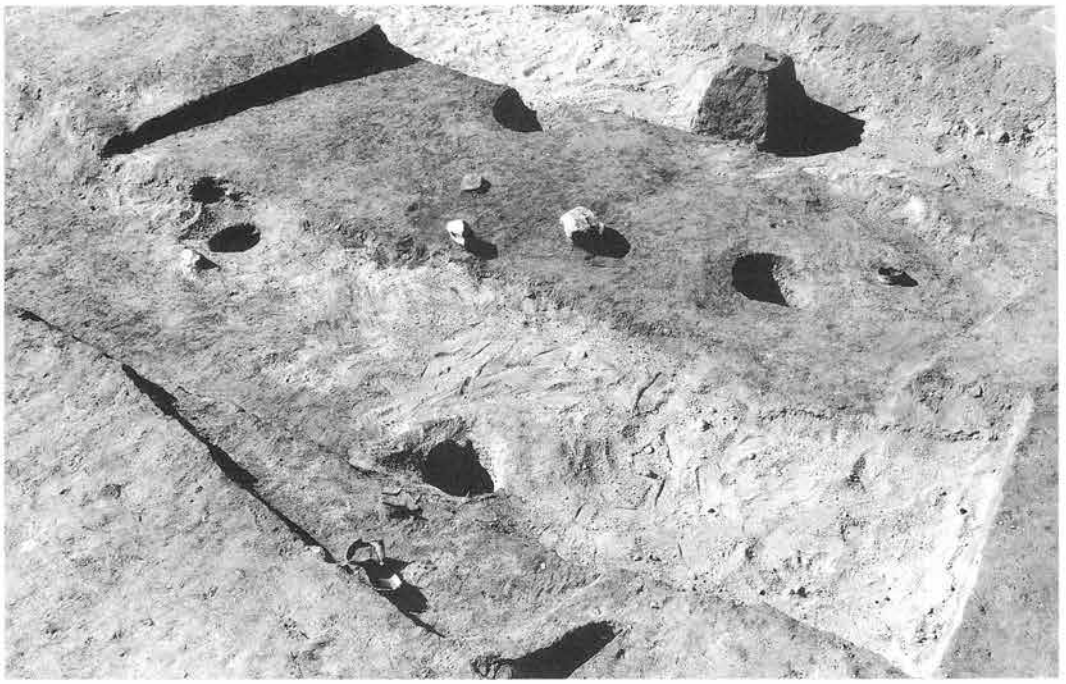
H50号住居址（南から）

H52号住居址（南東から）

H53号住居址（南から）

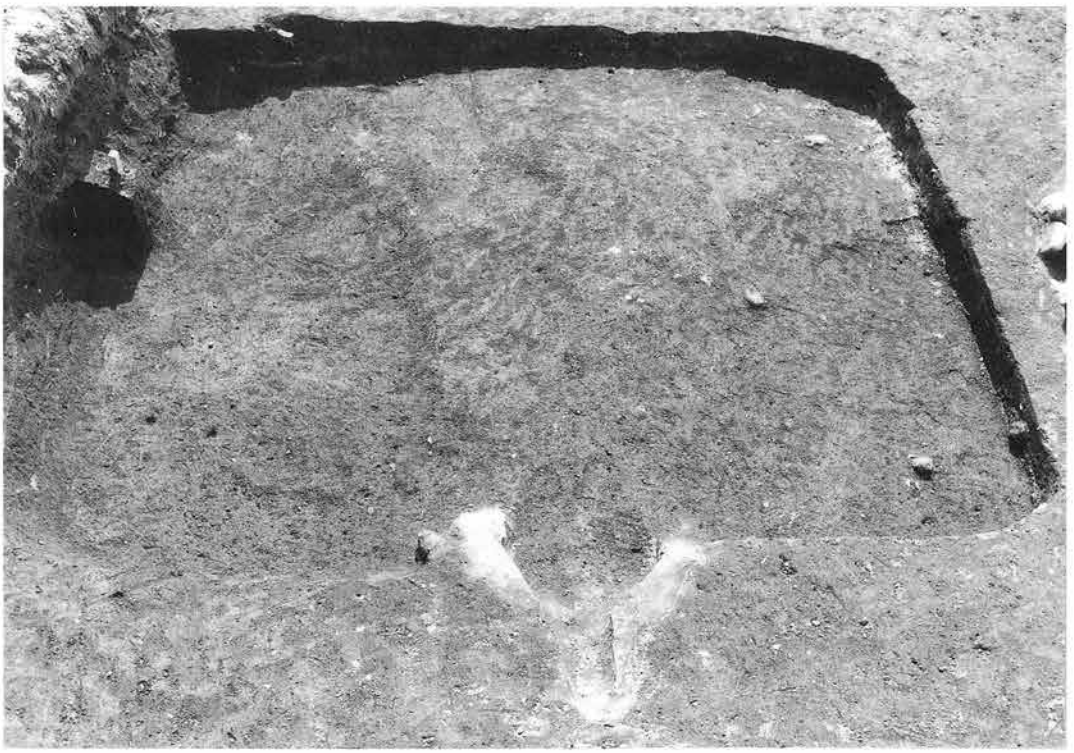


H54号住居址（東から）

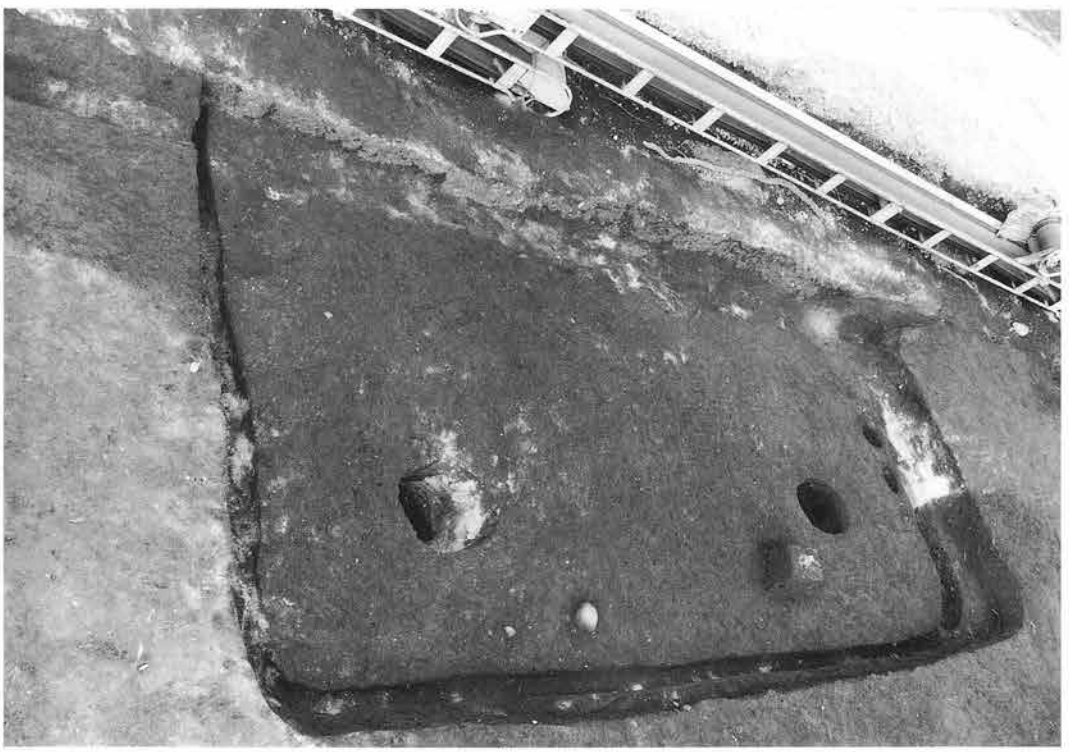


H55号住居址（南東から）
本址を切る溝址は手前がM６号、奥がM５号。

H56号住居址



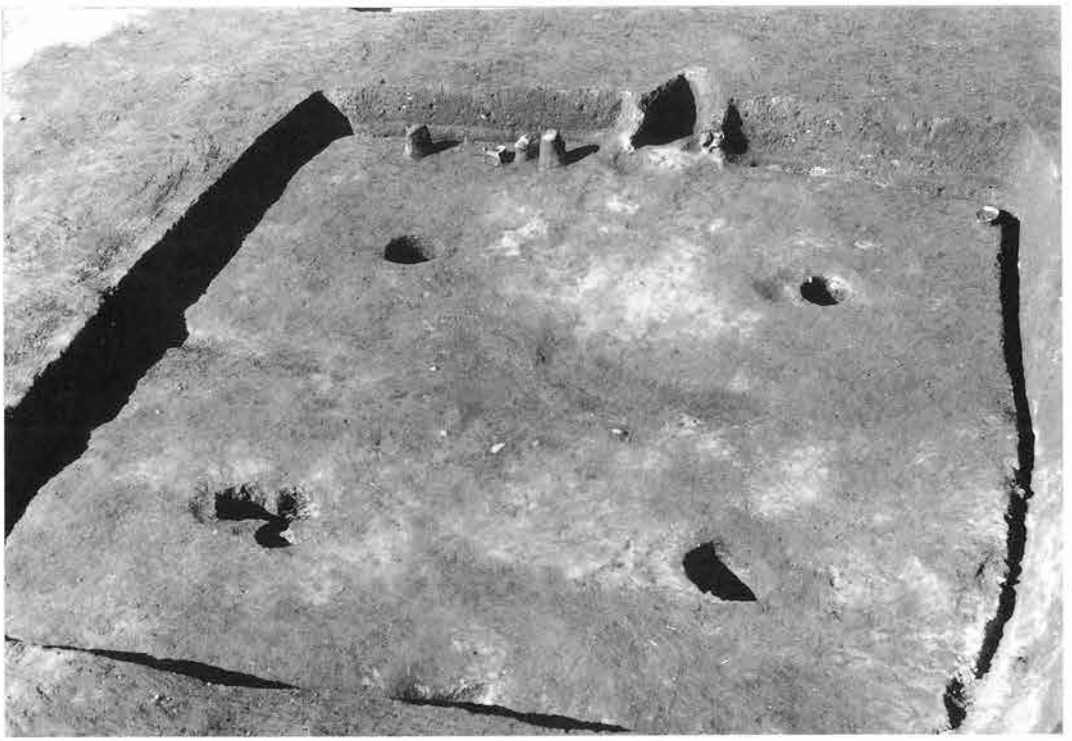
H57号住居址（北から）



H58号住居址（東から）

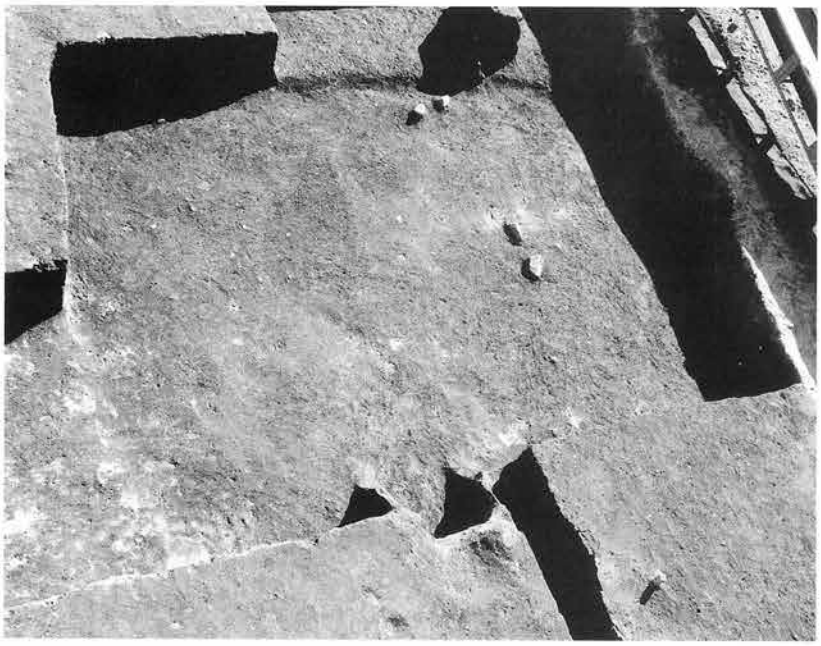
H60号住居址（東から）

H61号住居址（東から）中央をH43号に、向かって左側をH60号に切られている。



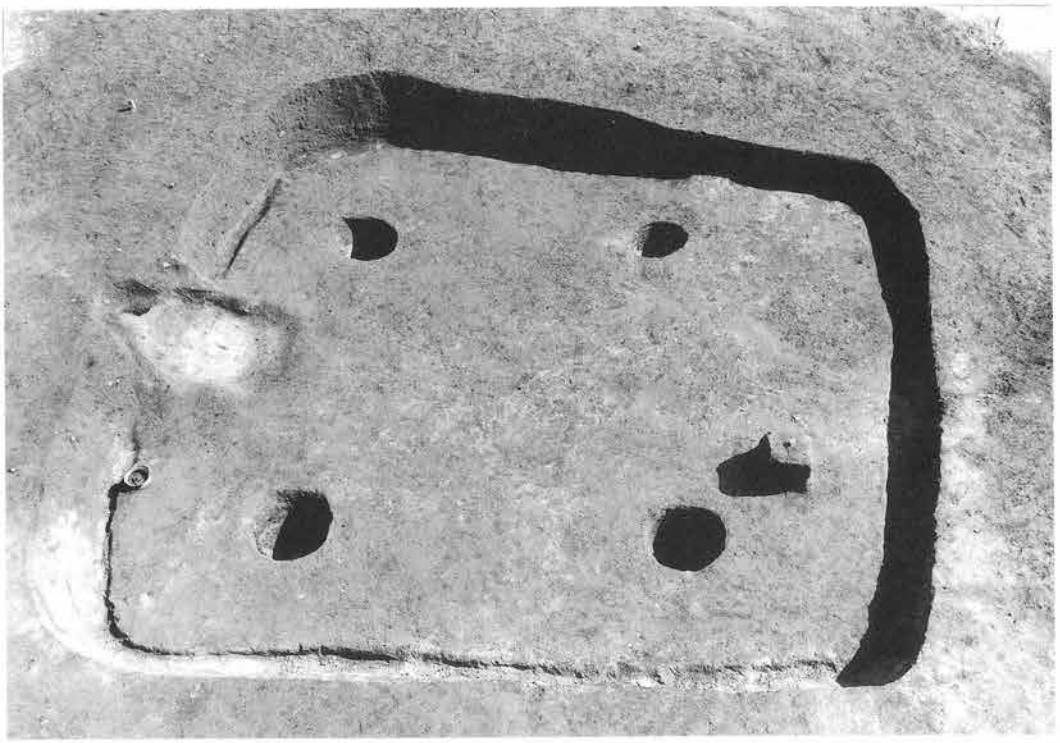
H62号住居址（南から）

H64号住居址（北から）
向かって右側で本址を
切っているのはH47
号住居址
（南から）

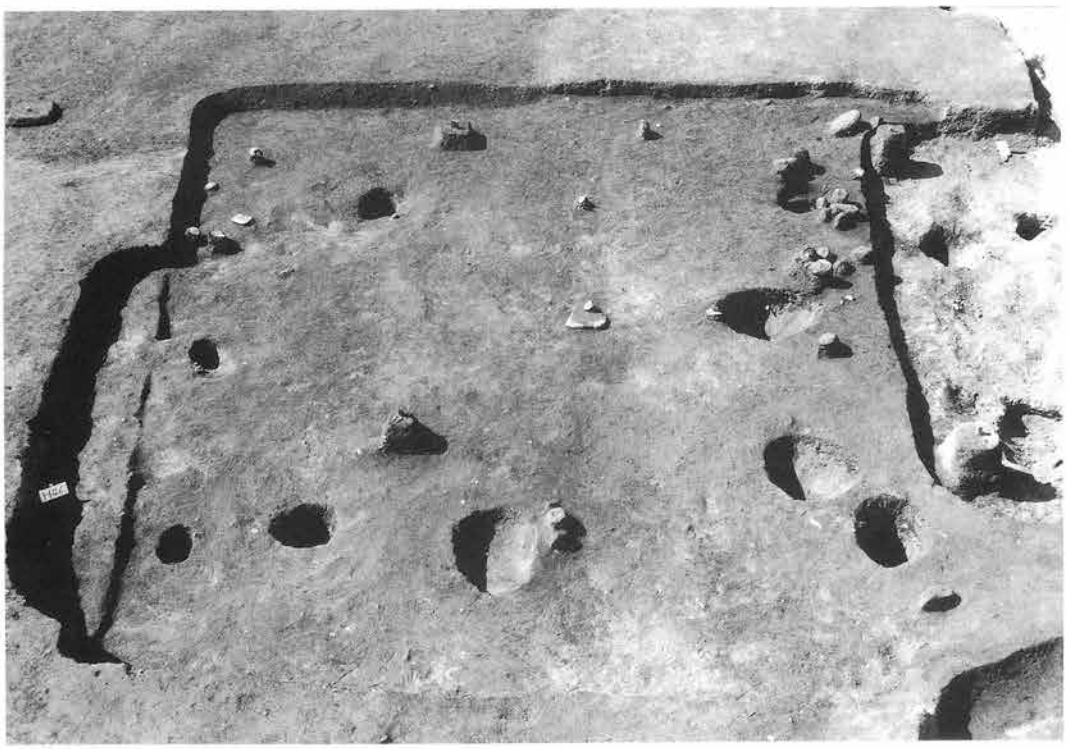


←H63号住居址
（北から）
本址はH65号住居址の中央やや南よりで重複し、H65号を切っている

H65号住居址は北壁中央に設けられたカマド→の西脇の壁下に甕などの土器が当時の位置を保ったまま放置されていた。

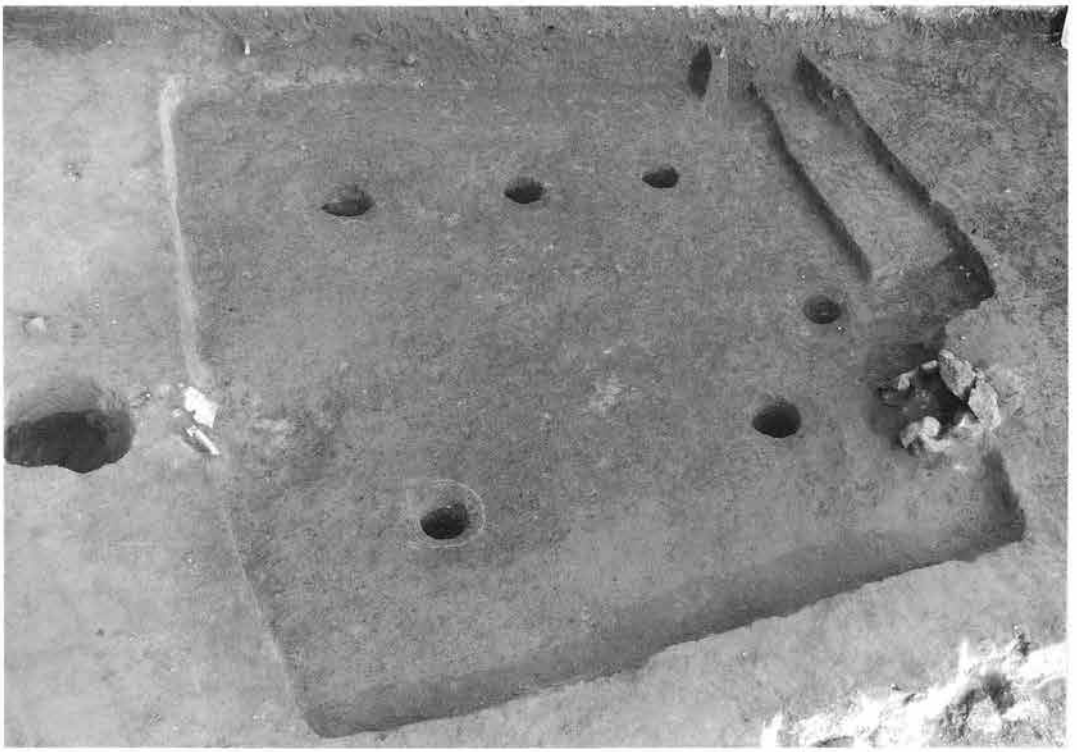


H66号住居址（西から）



H69号住居址（東から）

H67号住居址礫出土状況（南から）



H67号住居址完掘（西から）北壁中央に旧カマド、南壁中央西よりに新カマドが検出された。

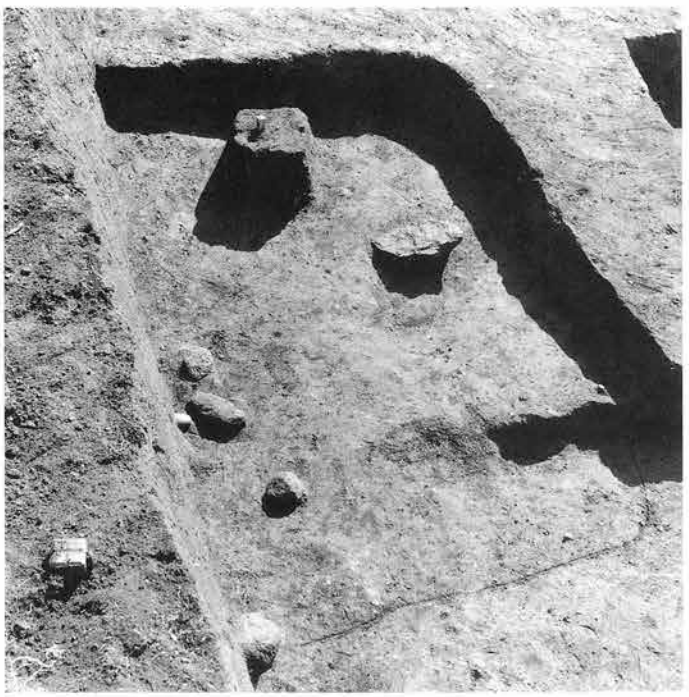
図版 三十二

H67号住居址新カマド→

←H70号住居址カマド脇の土器

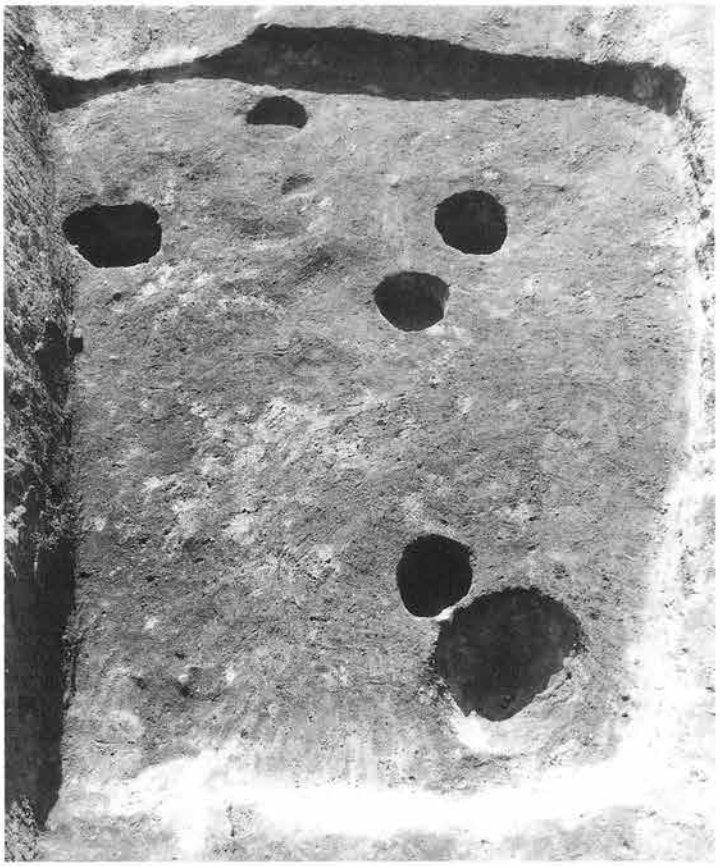
↓H70号住居址カマド

↑H70号住居址（北東から）



←H74号住居址（北から）

H77号住居址（北から）→

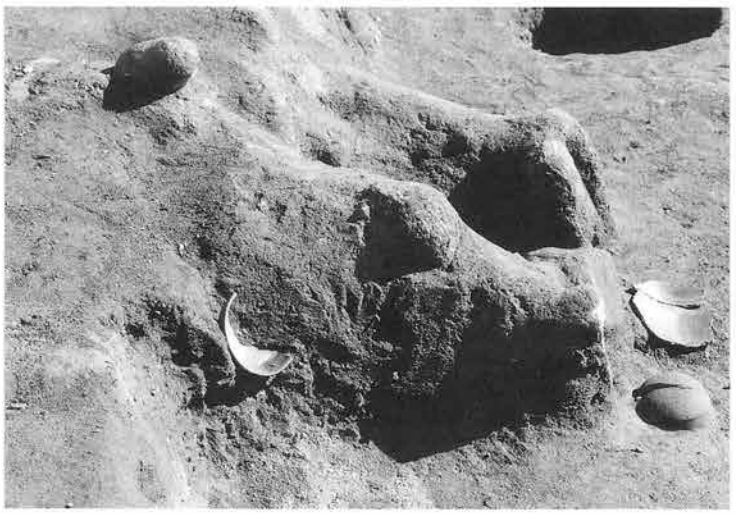


H78号住居址→

H78号住居址カマド→

H79号住居址（南西から）手前の本址を切る住居址はH62号。

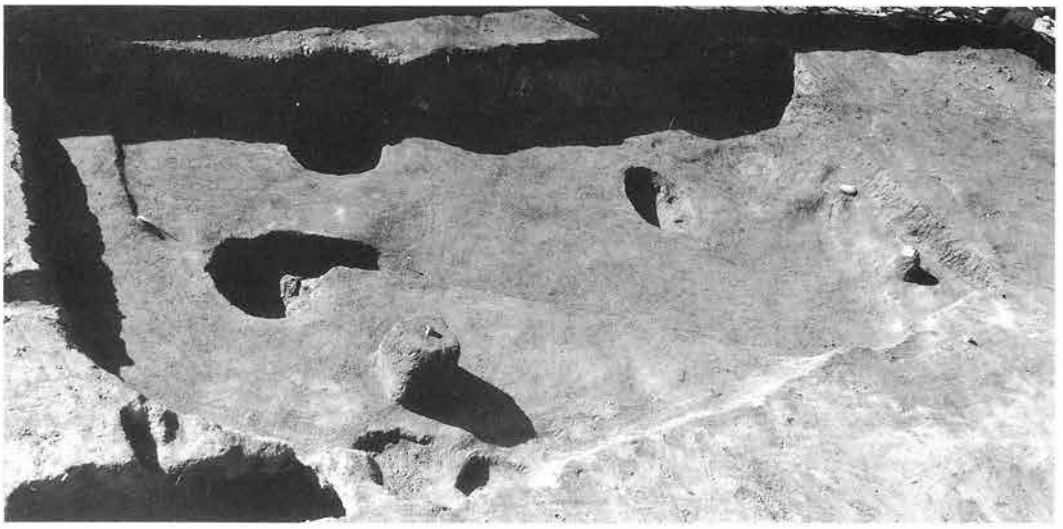
H80号住居址（西から）手前はH66号住居址。



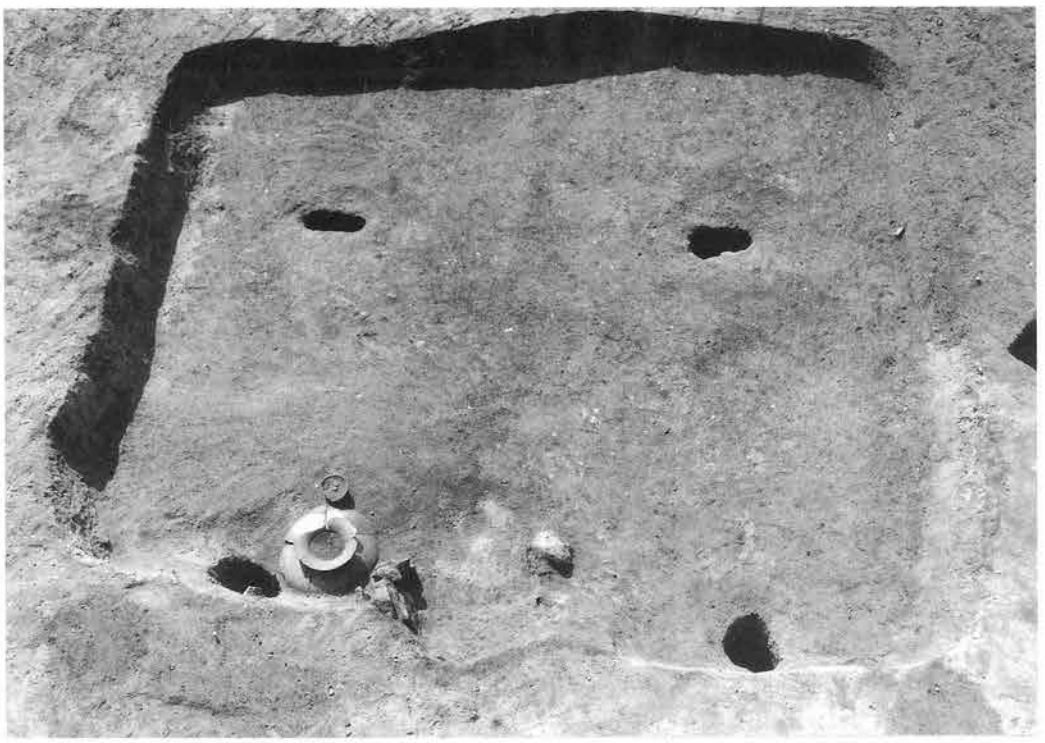
H79号住居址カマド

H80号住居址カマド

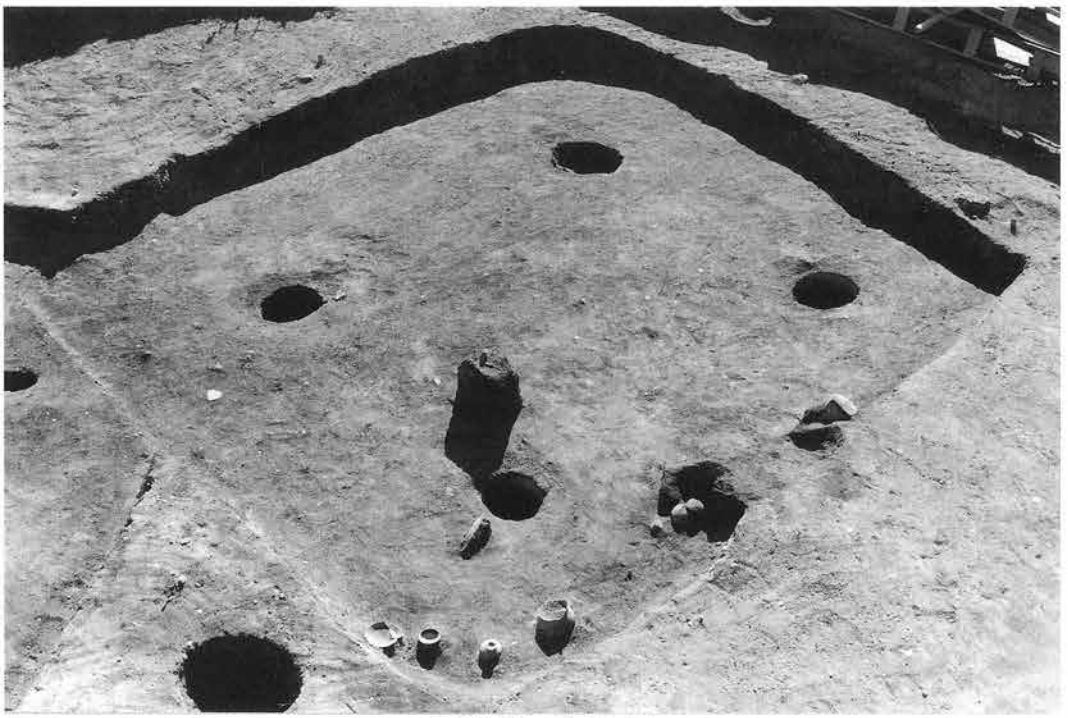
↓H81号住居址（手前）、H84号住居址（奥）



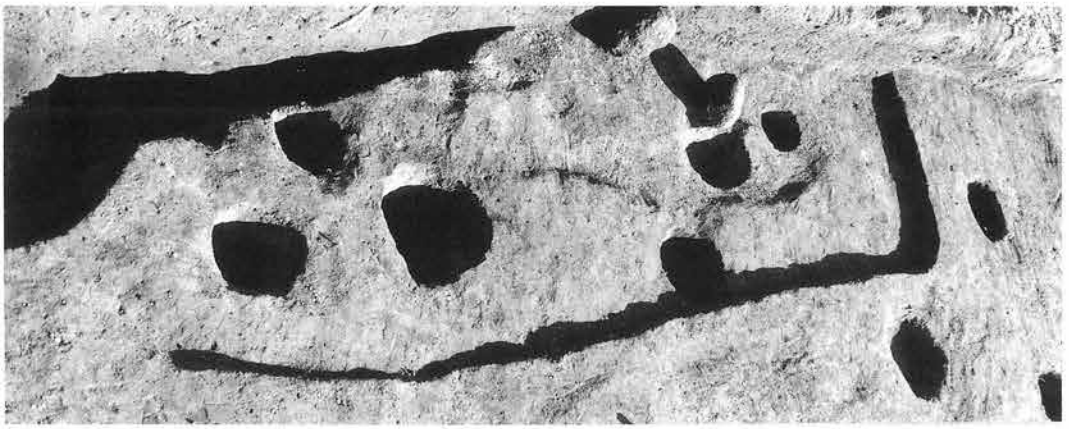
H82号住居址（南から）本址を切る手前の住居址はH47号、奥がH54号。



H83号住居址（北から）

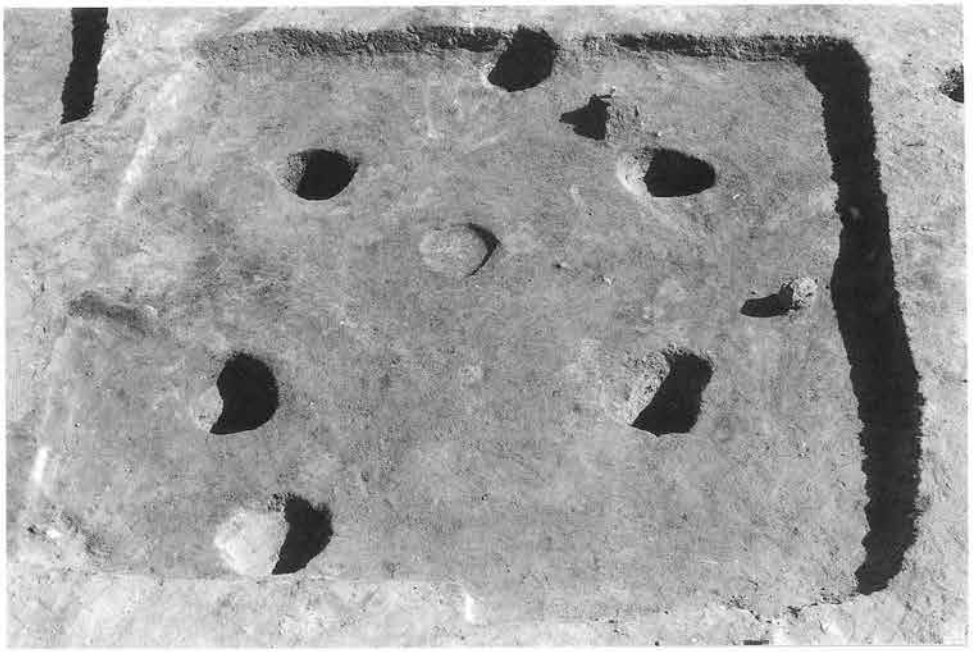


H85号住居址（北東から）



H87号住居址（西から）

H89号住居址（南から）



↑H90号住居址（西から）

↑
H91号住居址カマド

←H91号住居址（南から）

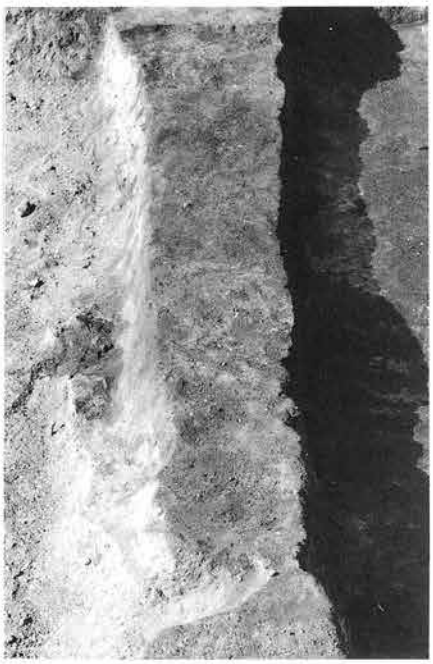
図版　四十

←H92号住居址

H94号住居址→

↓H96号住居址

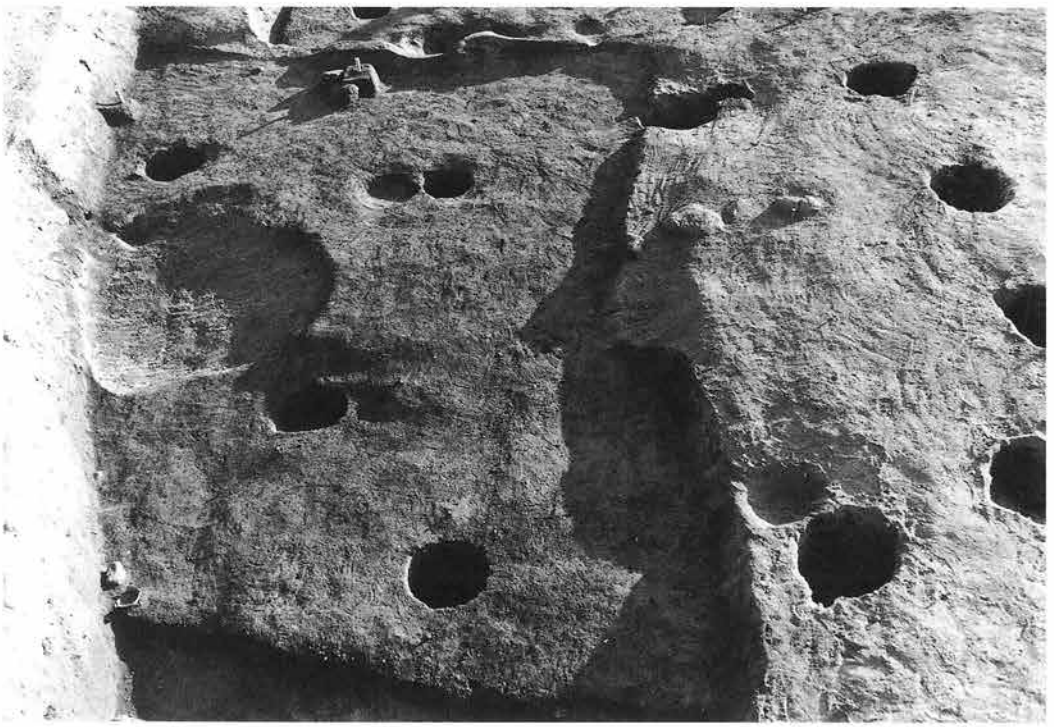
↑H98号（手前）住居址
H110号（奥の遺物が集中している部分）住居址



←H99号住居址（向かって右をH52号に
左をH79号住居址に切られている）

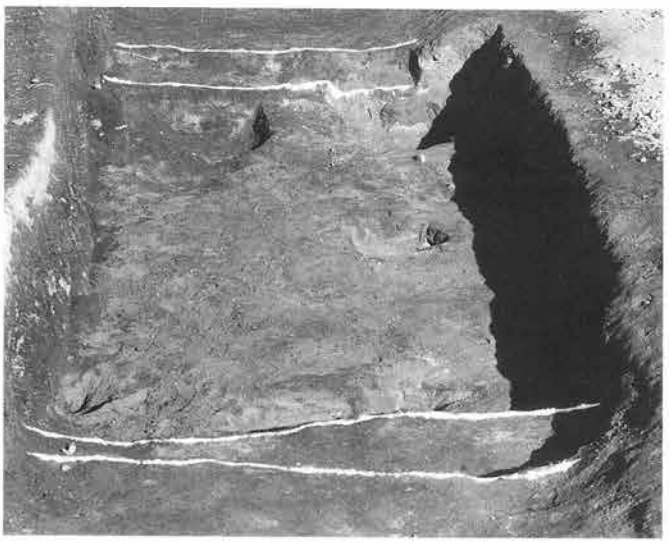
↓H100号住居址（向かって手前をH66号・H
80号に、奥をH62号に切られている。

H102号住居址。耕作等による破壊により、壁は存在しなかった。



H104号住居址。向かって右側に展開しているのはF15号掘立柱建物址。

←H105号住居址
白線の範囲が本址のプランである。
大半の部分はH76号住居址により
破壊されている。



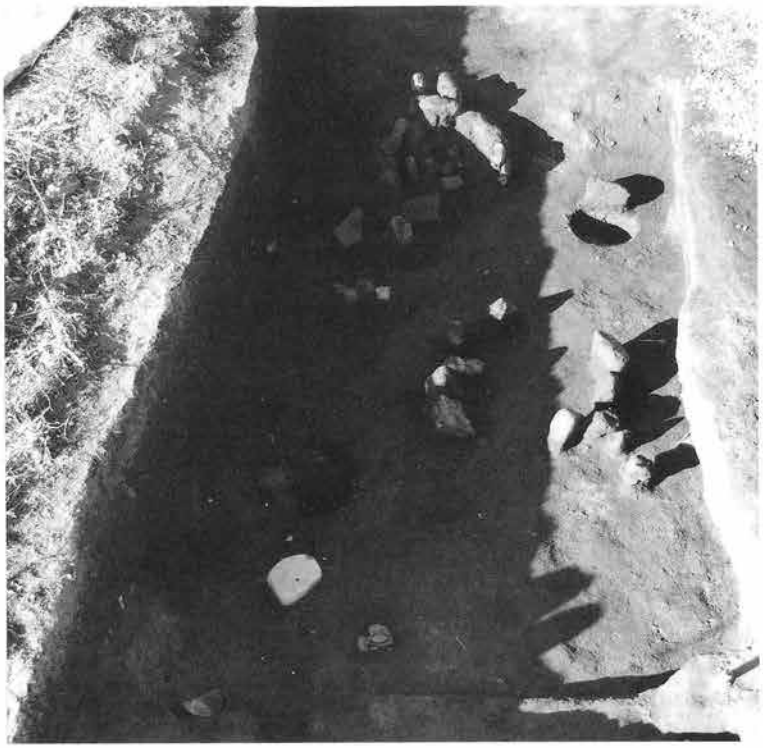
↑H107号住居址
ＩＮＰⅡ調査後の下水道
工事の際、工事範囲外に
及んだ違法な掘削による
撹乱により大半は消滅し
ていた。

←H109号住居址
中央をH91号住居址によ
り切られている。

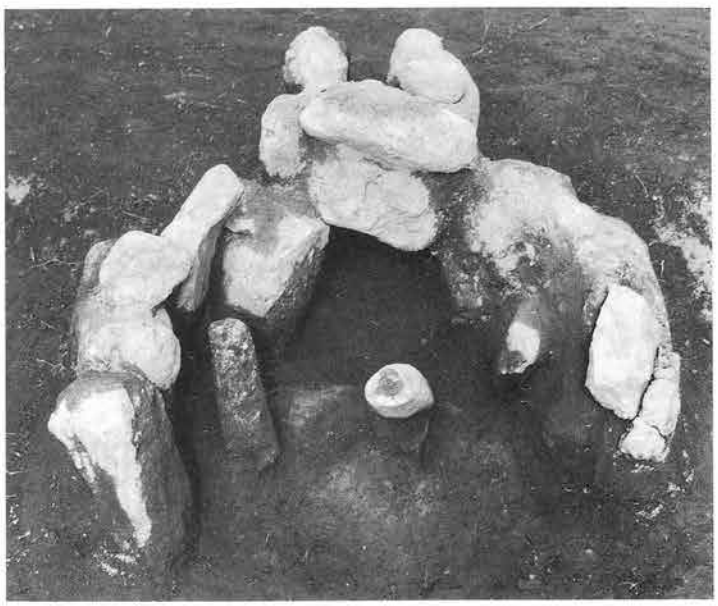
H111号住居址
かすかに残存した壁と床→
Pit検出された。

図版　四十四

H114号住居址→
（南から）



H114号住居址カマド→

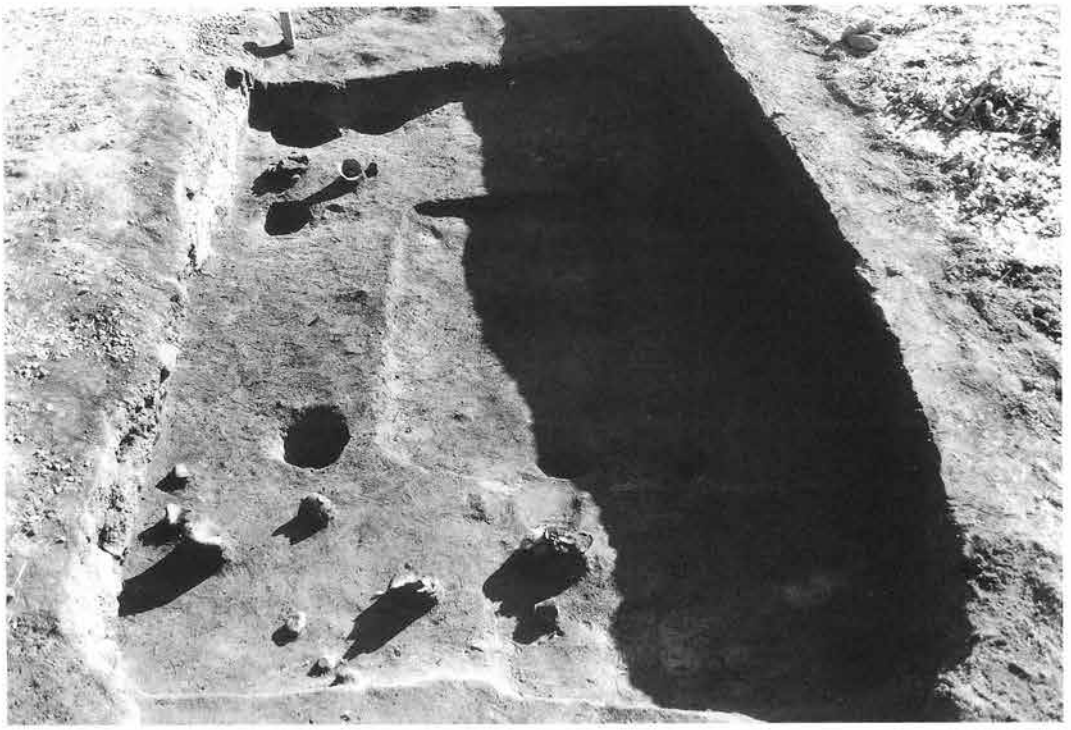


↑H115号住居址（南から）

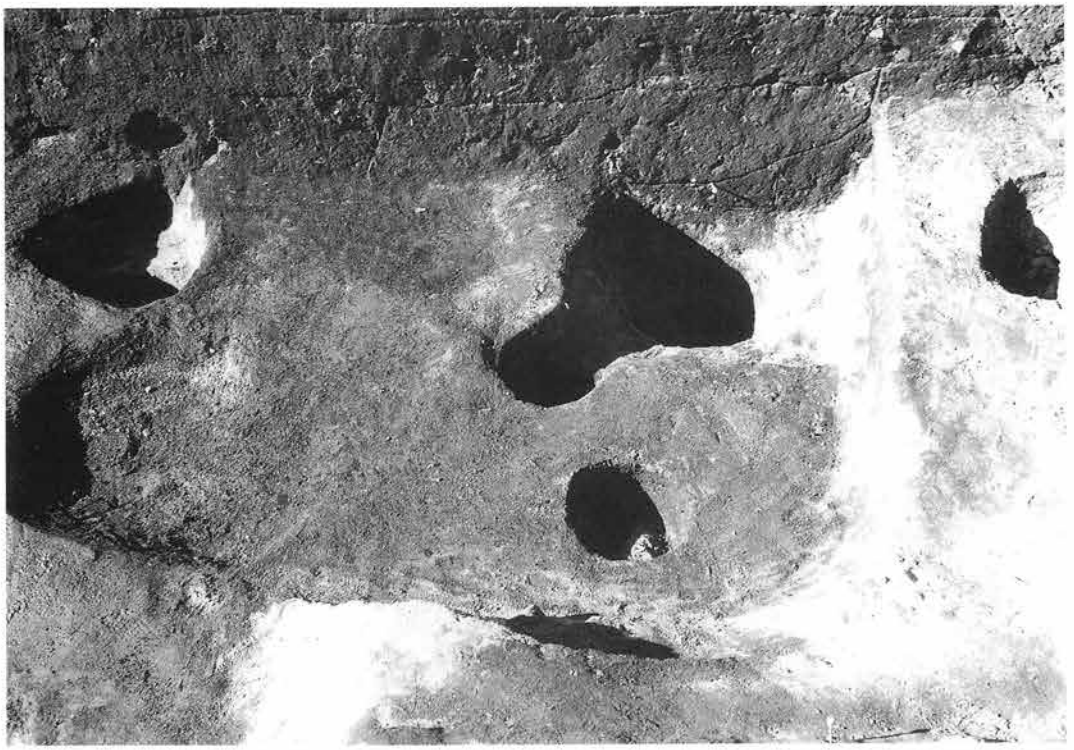
↑H115号住居址カマド

H116号住居址　炉→

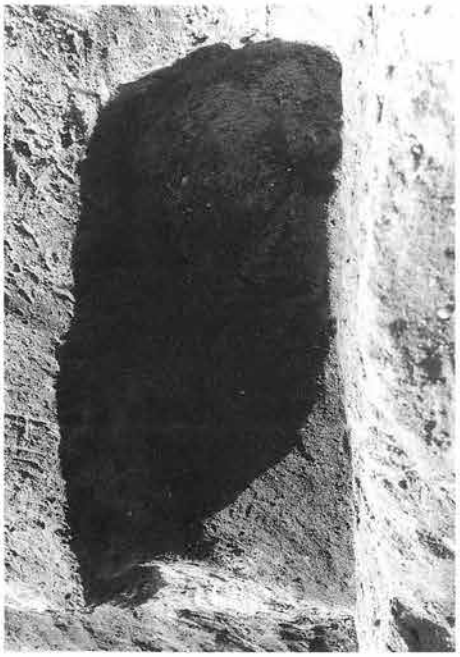
←H116号住居址（北東から）



↑H117号住居址（北から）中央の落ち込みはH24号住居址。

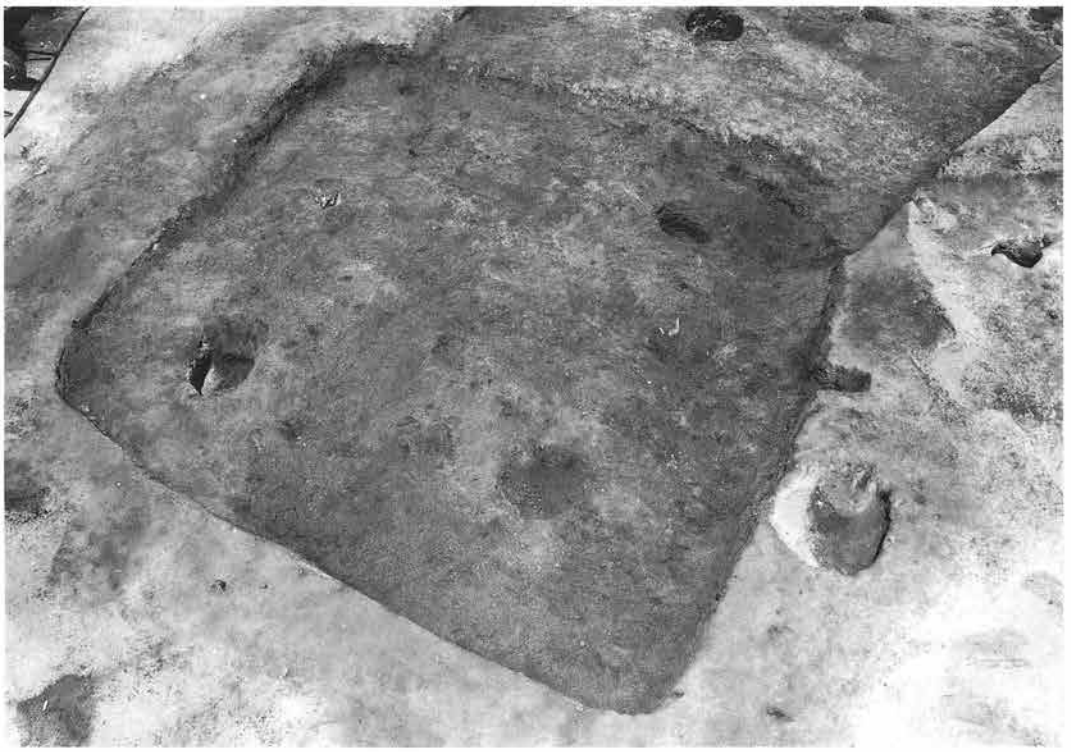


H119号住居址（東から）

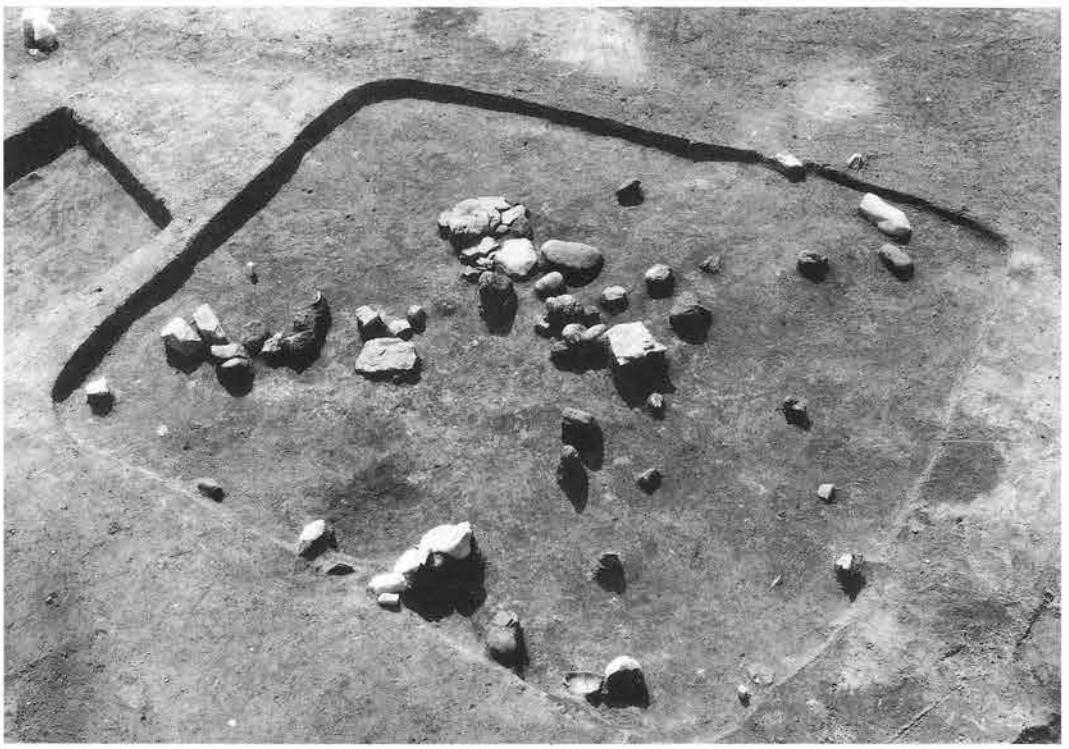


↑H120号住居址
（南から）

↓H121号住居址（東から）



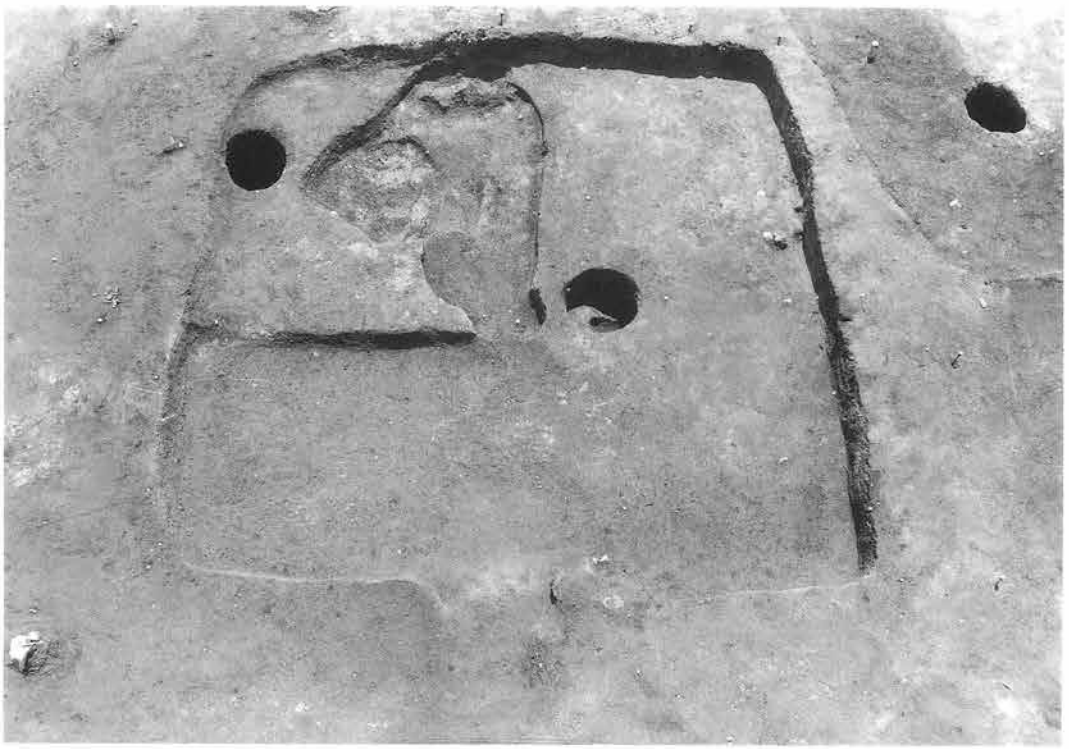
↑H101号住居址（南東から）



H124号住居址（北西から）

↑H125号住居址（南西から）

↓H125号住居址カマド（支脚石を２本有する）

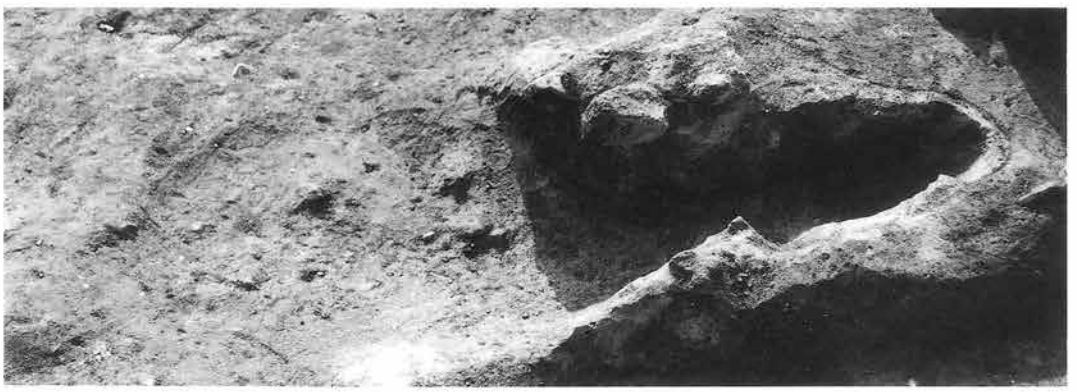


↑H126号住居址（北から）

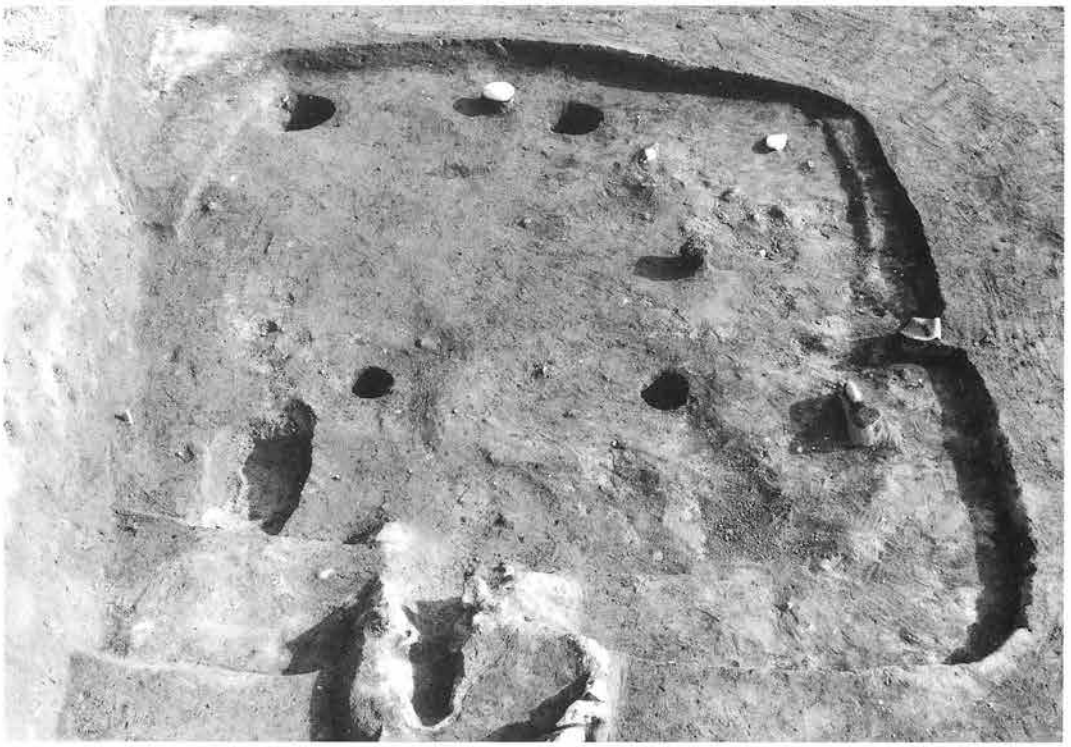
↑H127号住居址（北から）

↑H128号住居址（南から）住居内の円形土坑状の落ち込みは撹乱。

↑H129号住居址（西から）

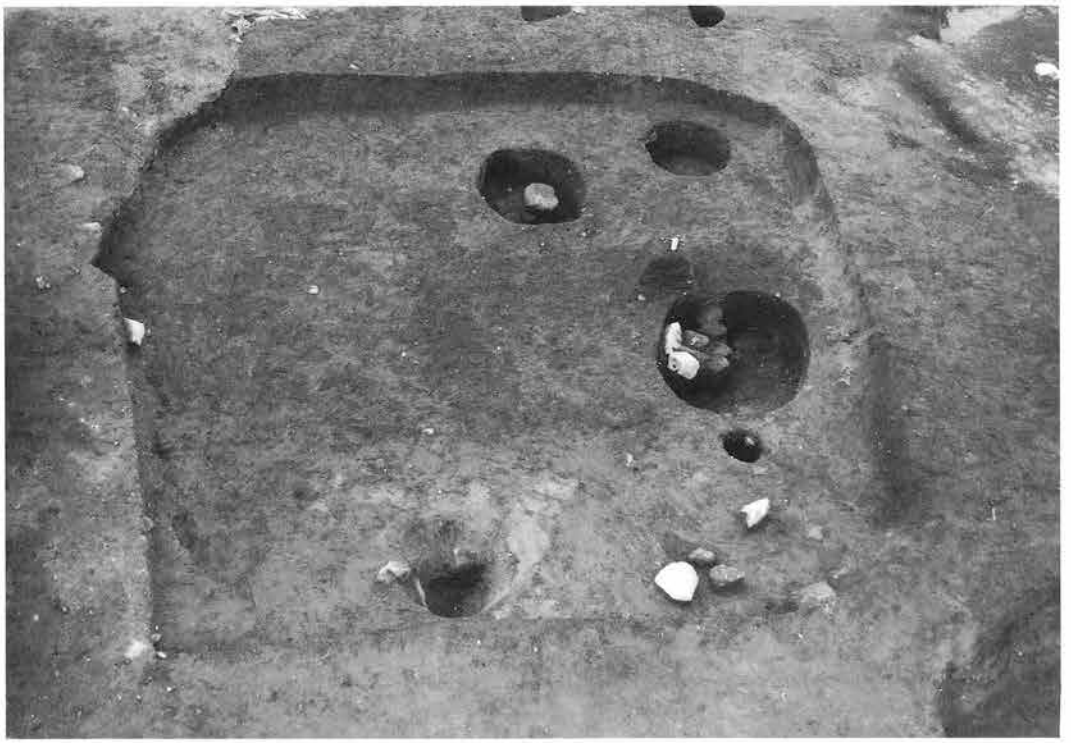


H130号住居址カマド



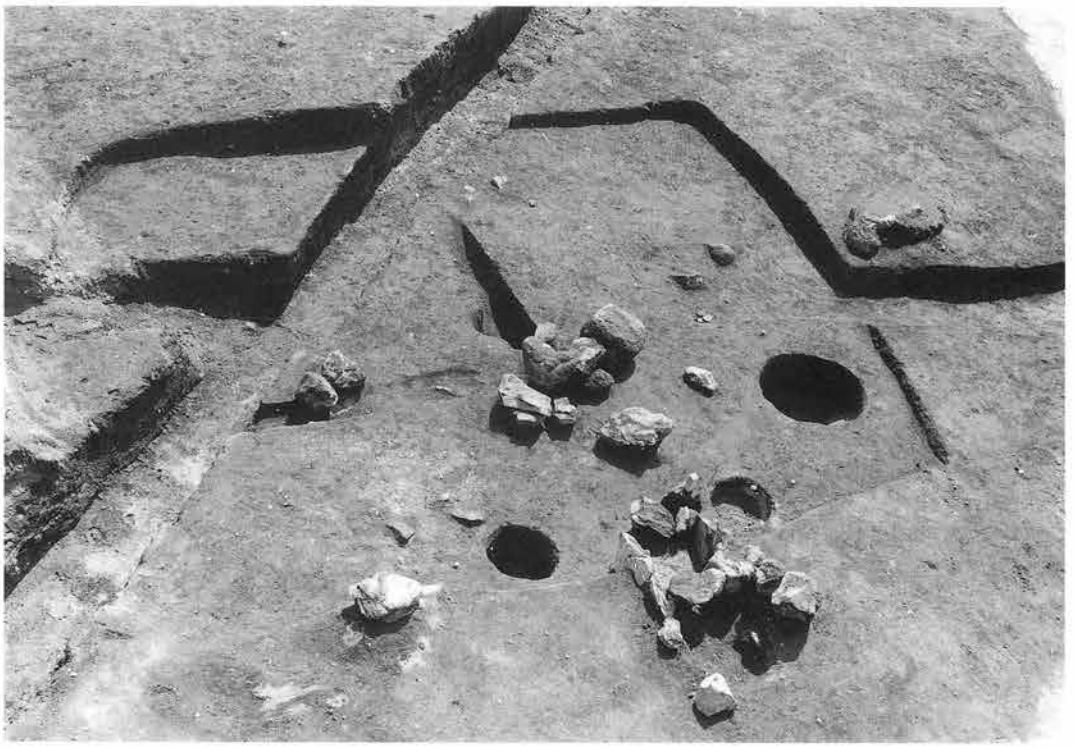
↑H130号住居址（北から）本址を包括する外側のプランはH175号。

H131号住居址（南から）

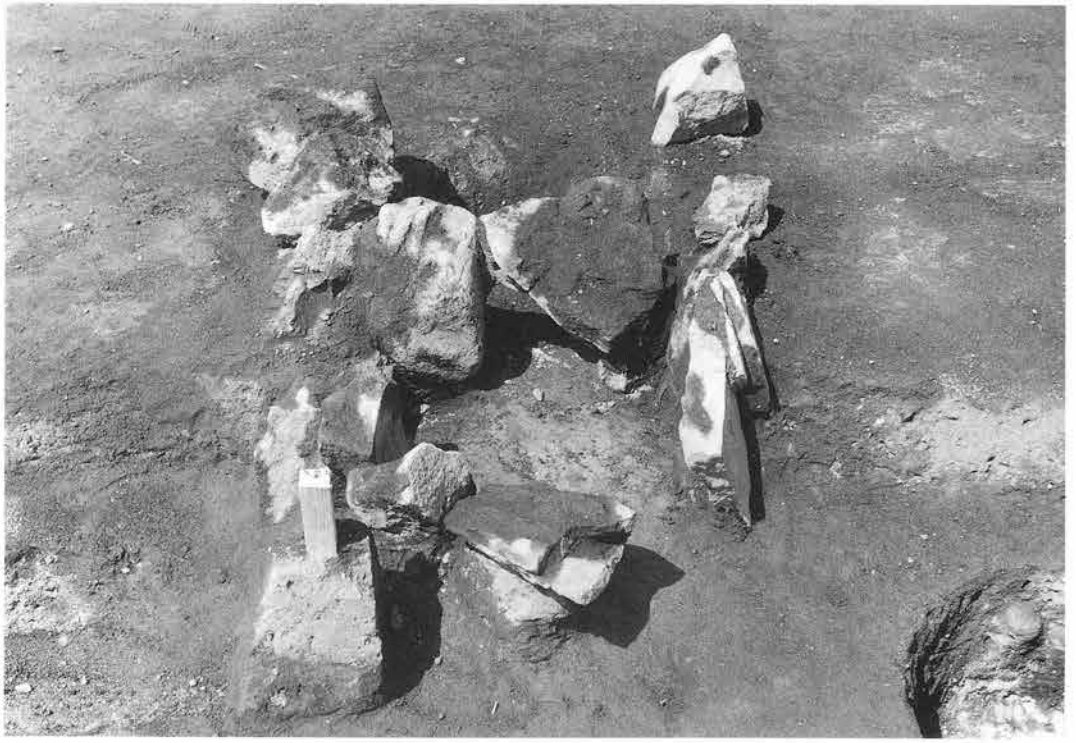


↑H132号住居址（南から）東南隅にカマドを有する。H133号住居址（南から）

H133号住居址（南から）



↑H134号住居址（北から）

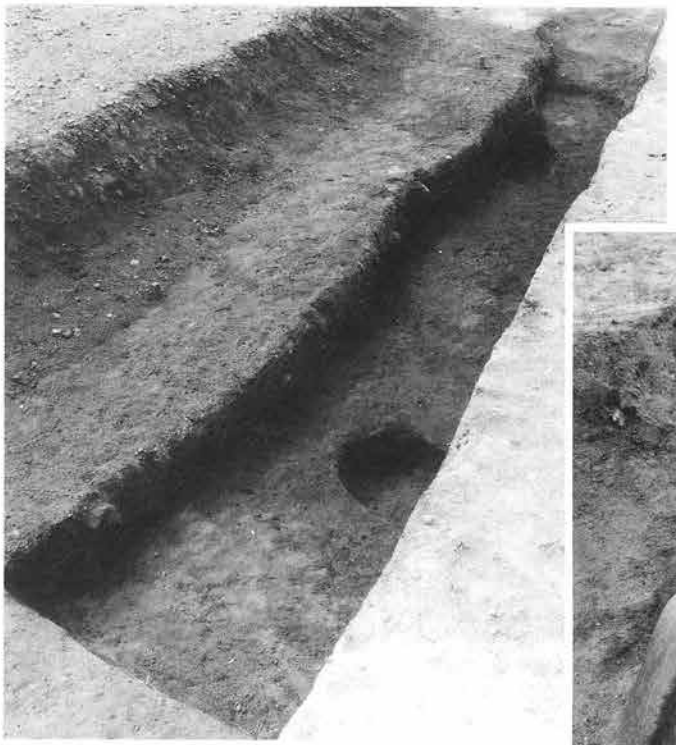


H134号住居址カマド

↑H135号住居址（東南から）

H136号住居址（北から）
島状に取り残された未買収地端部に、何故か工事が及んだため住居の南側が未調査のまま消滅してしまった。何の為に協議をするのか？

図版　五十六

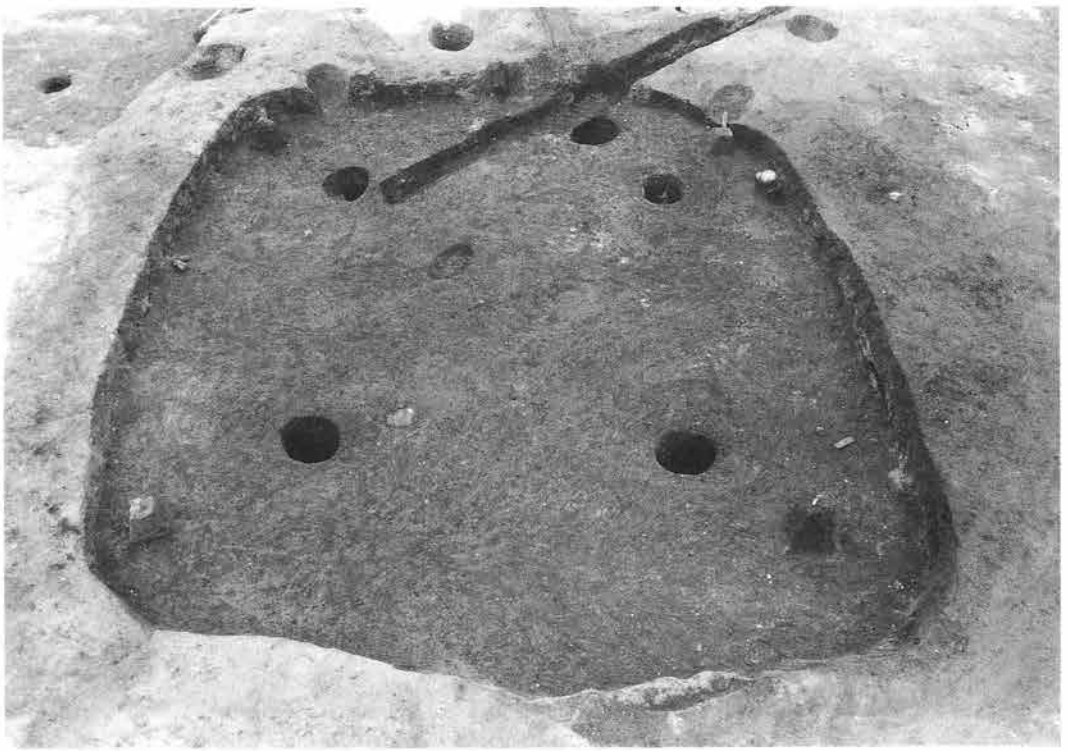


←H140号住居址（北西から）

H141号住居址カマド→

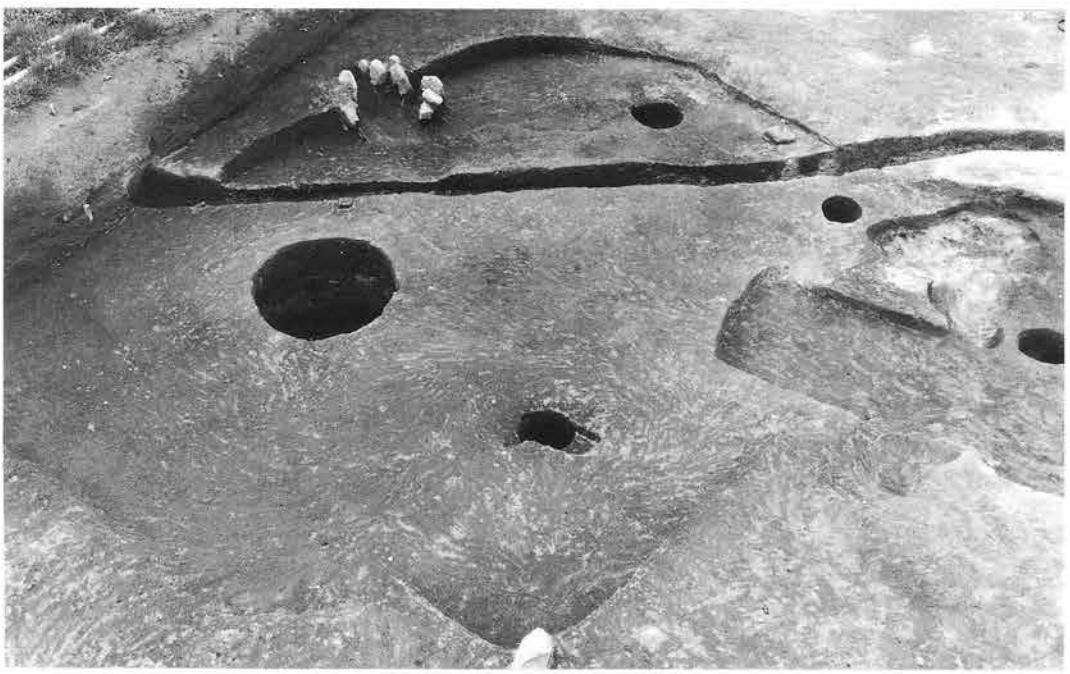
H141号住居址（西から）↓

↑H144号住居址（西から）重複する掘立柱建物址はF38号



H145号住居址（南から）

↑H143号住居址（西から）

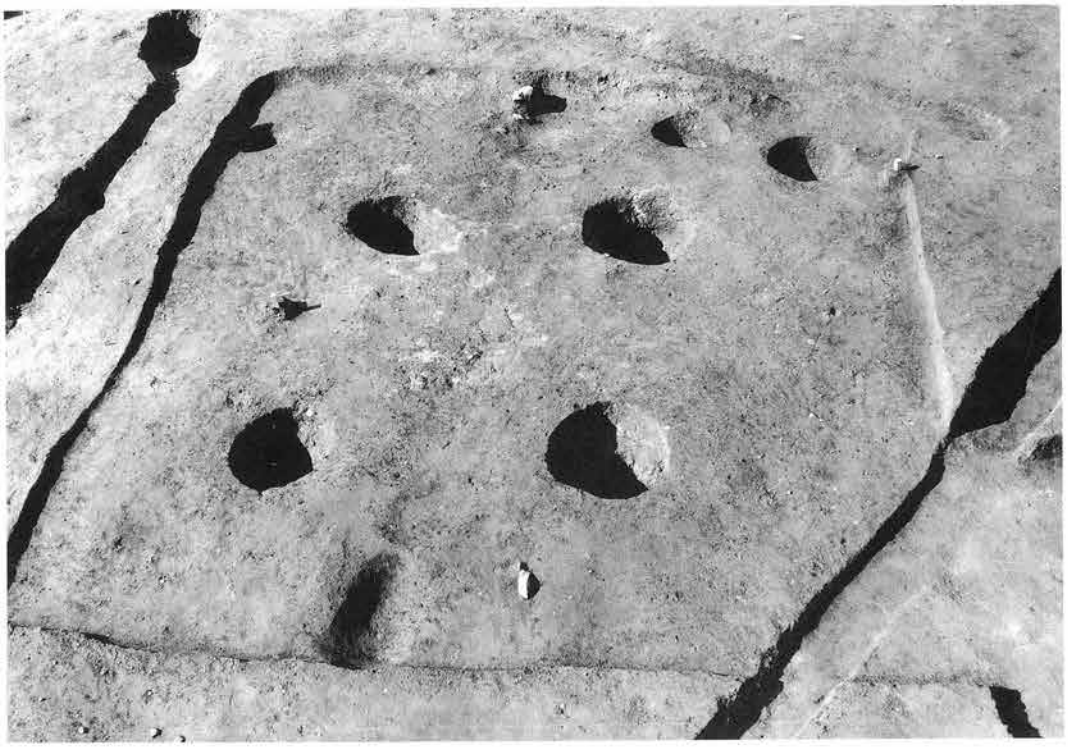


H146号住居址（向かって左側の円形の落ち込みは撹乱）

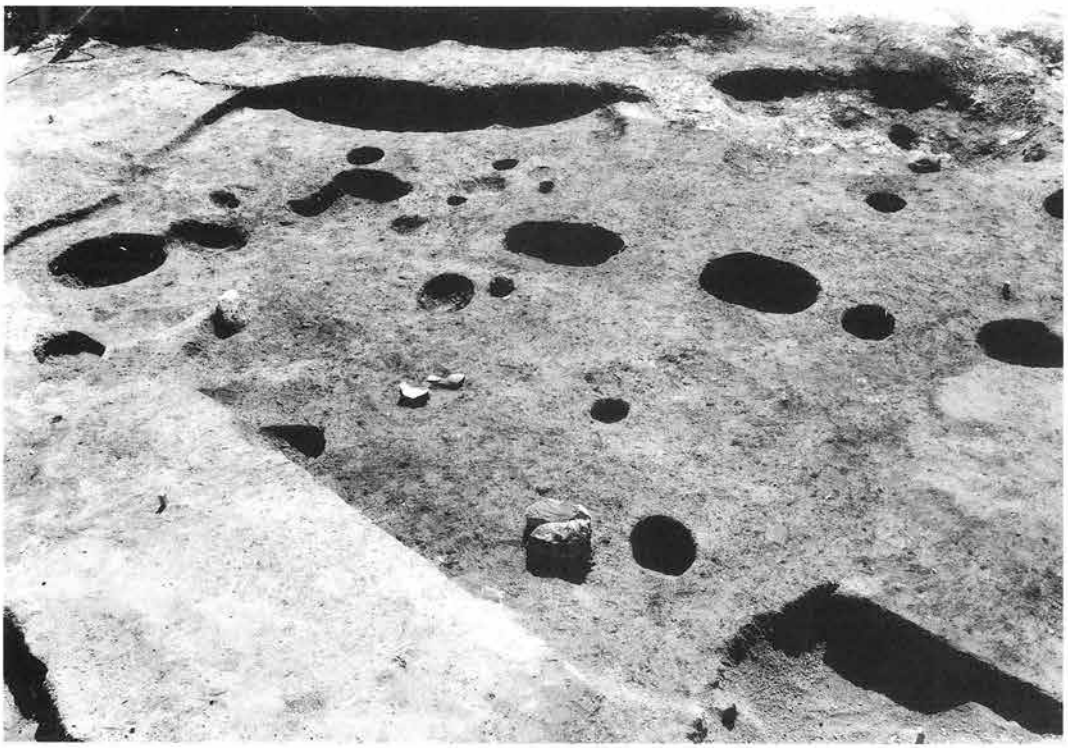
↑H147号住居址（北から）

H148号住居址（重複しているのはH127号住居址）

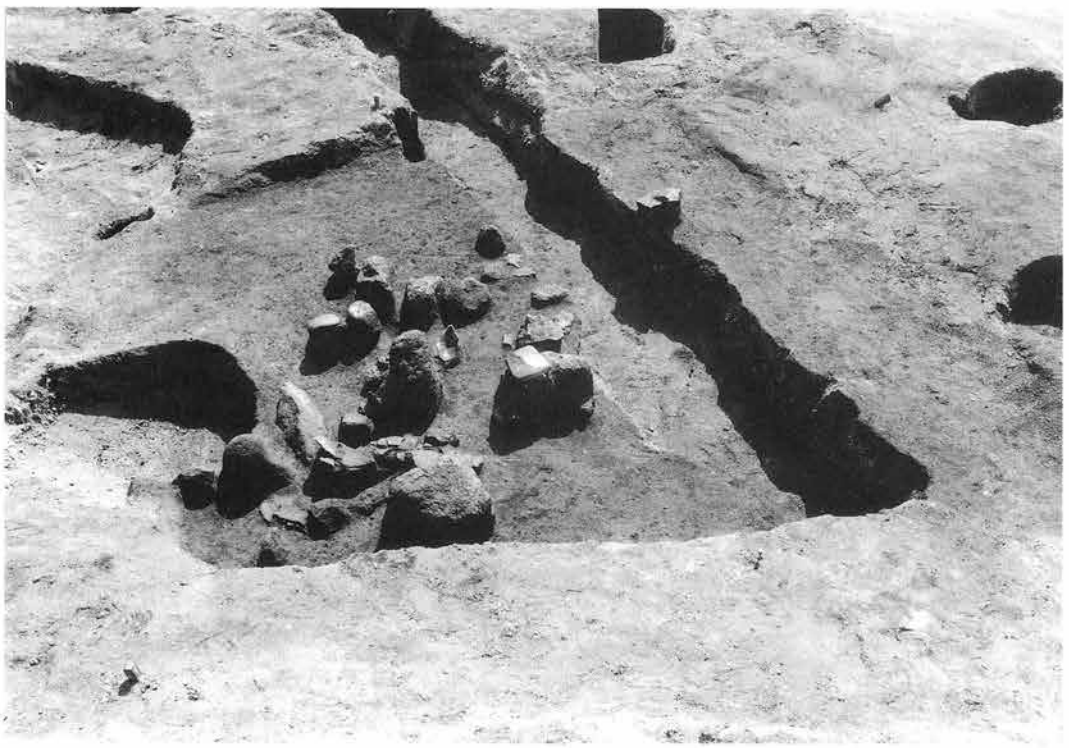
↑H149号住居址は、柱穴内に礫が詰まった状態で検出された。



H149号住居址完掘（南から）



H150号住居址（東から）



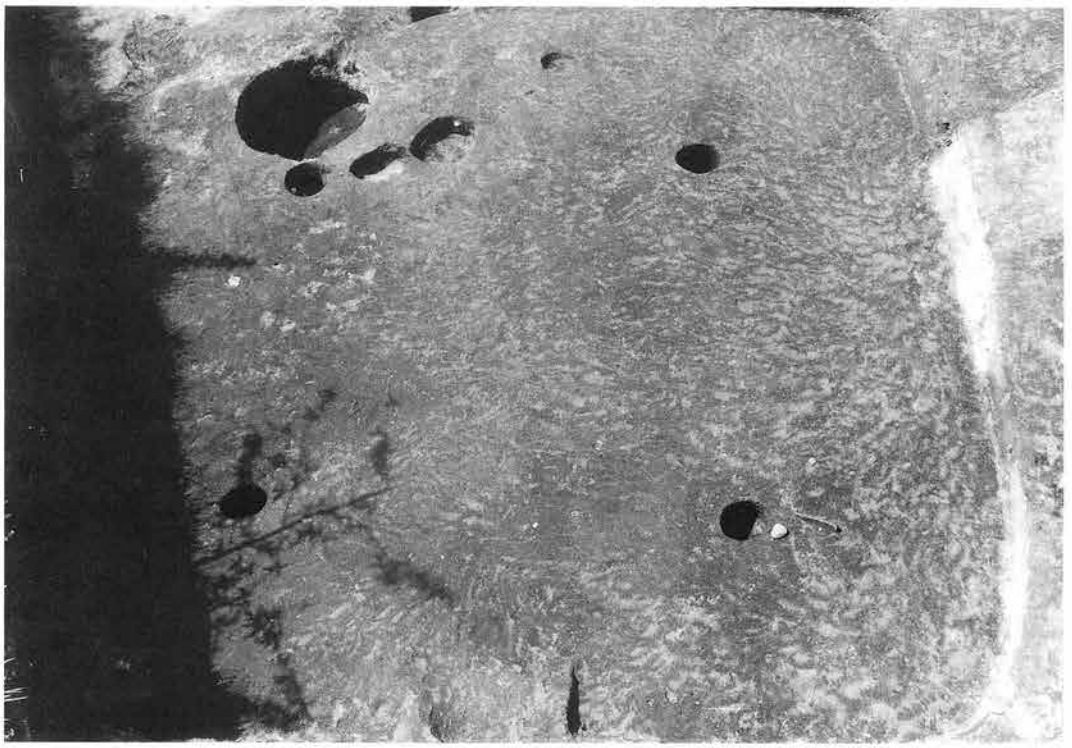
H152号住居址（西から）

↑H154号住居址（南から）

↓H155号住居址（西から）

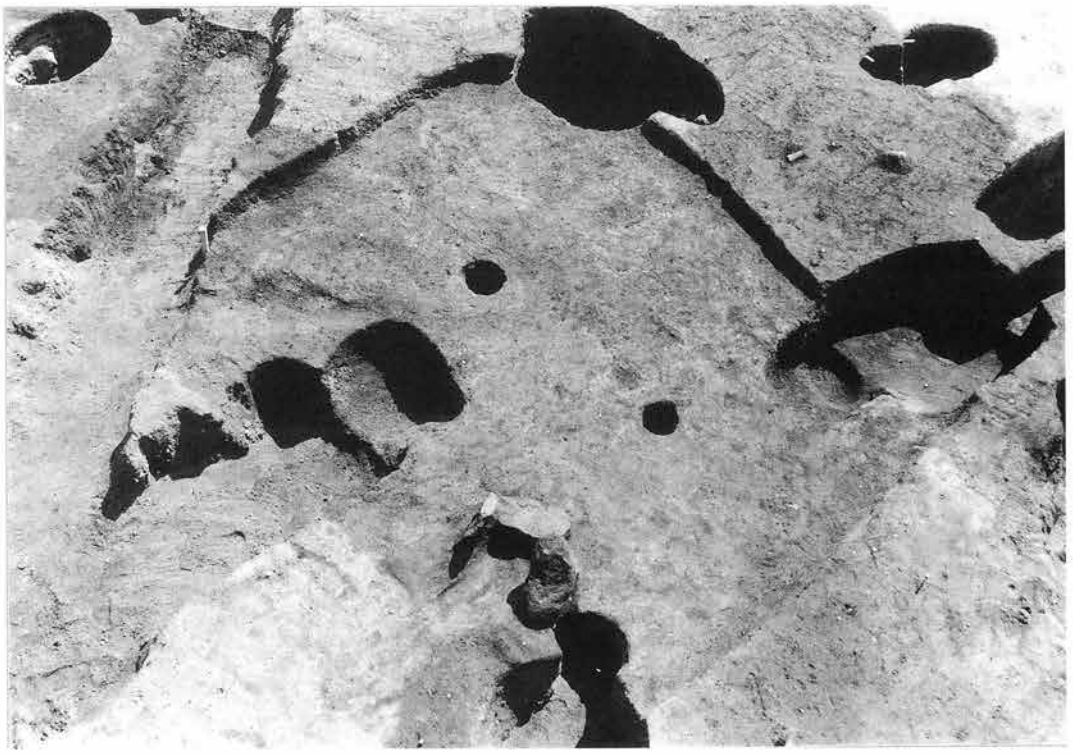
↑H156号住居址（北から）

H157号住居址（南から）

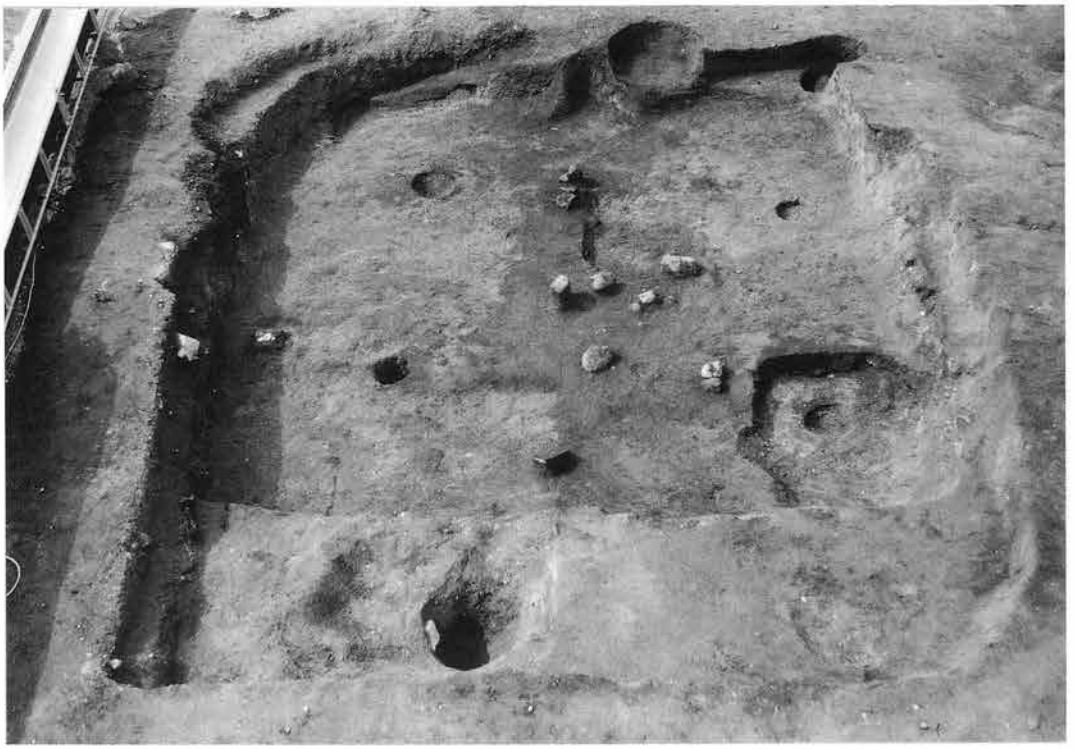


↑H158号住居址（北から）

H159号住居址（南から）



↑H160号住居址（北東から）



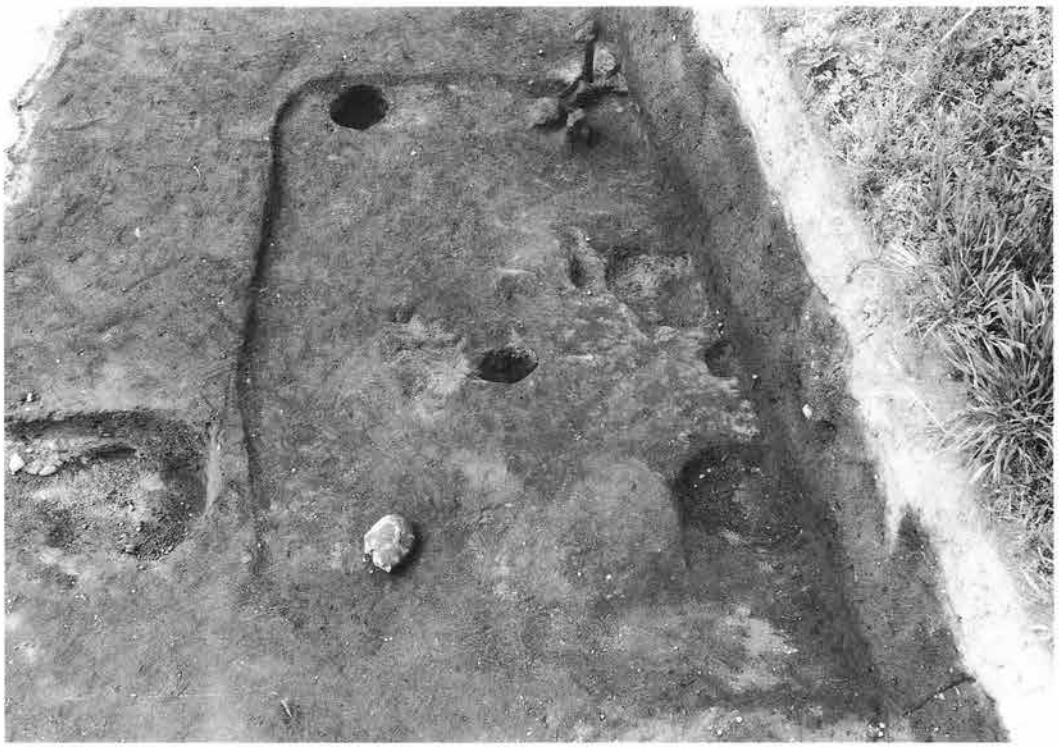
H162号住居址（南から）一段高い部分はH132号住居址。

↑H165号住居址（西から）F34・36・39と重複している。

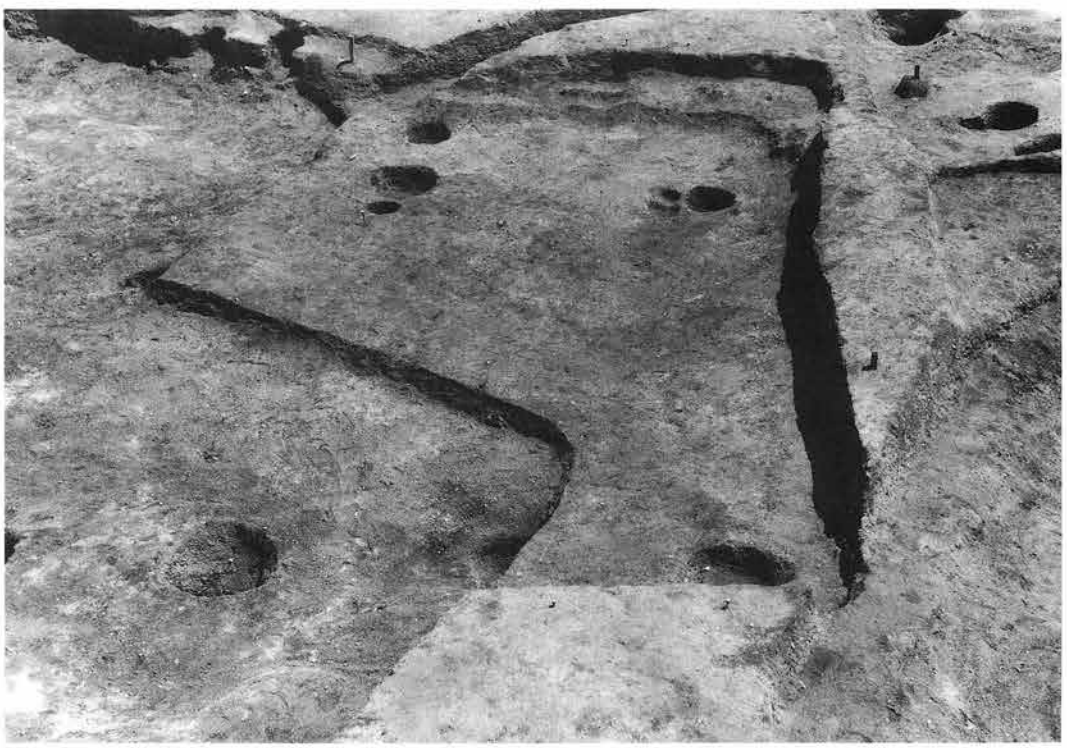
H166号住居址（北から）重複するＰｉｔ群はF36号掘立柱建物址。

↑H167号住居址（東から）

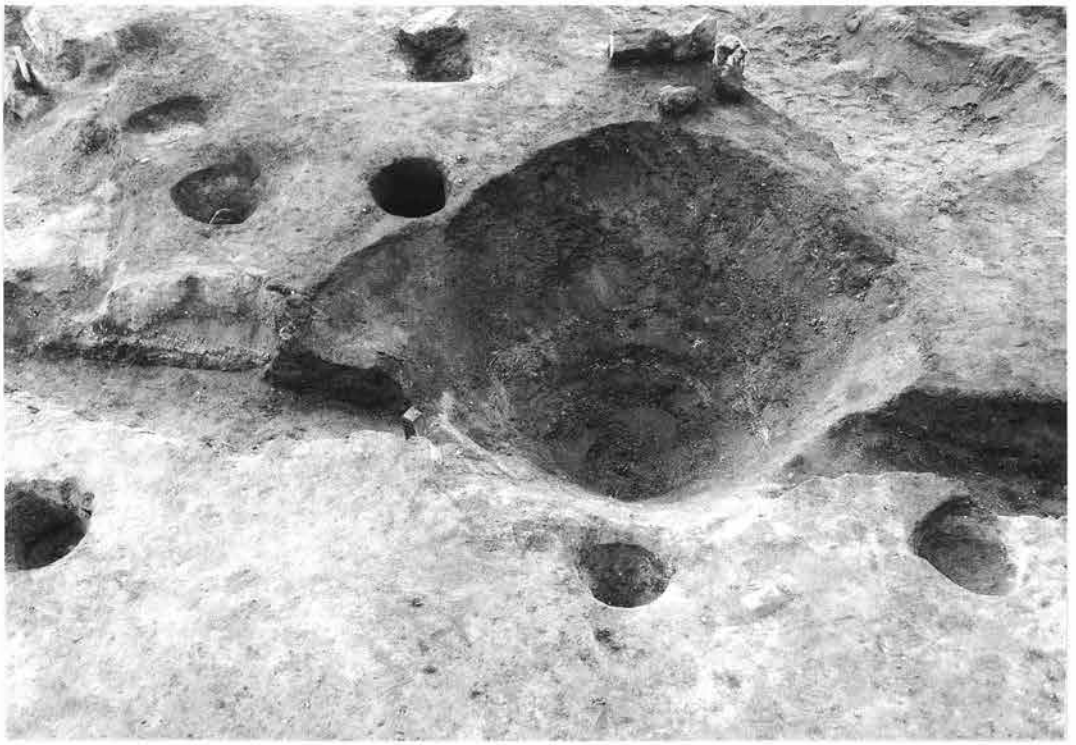
H167号住居址カマド東脇の遺物出土状況。



↑H171号住居址（南から）

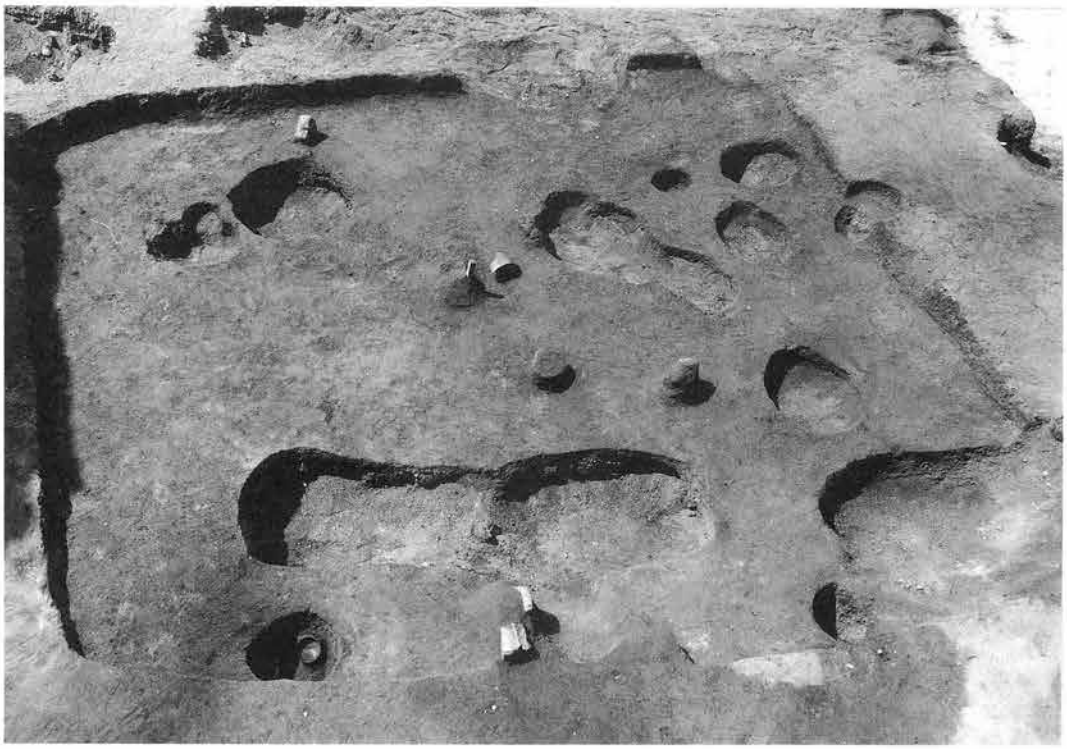


H172号住居址（北から）



↑H174号住居址（床面と柱穴、カマド構築材と思われる石が検出された）

H175号住居址（H130号と重複する）



↑H176号住居址（北から）

H177号住居址（H166号と重複している）

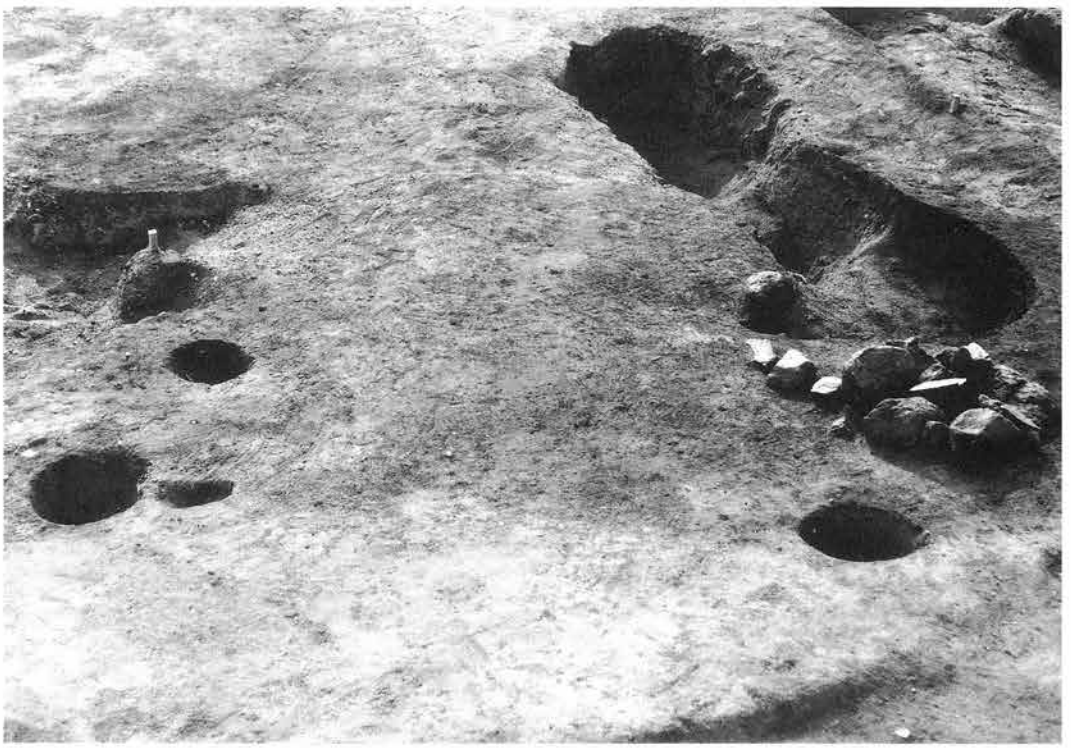
H178号住居址の調査は２度に分けて行った。
　第１回目の調査（写真上）では住居東側が未買収地にのびるため調査が不可能であったため、残部は翌年調査を実施(写真下)した。

↑H179号住居址（西から）

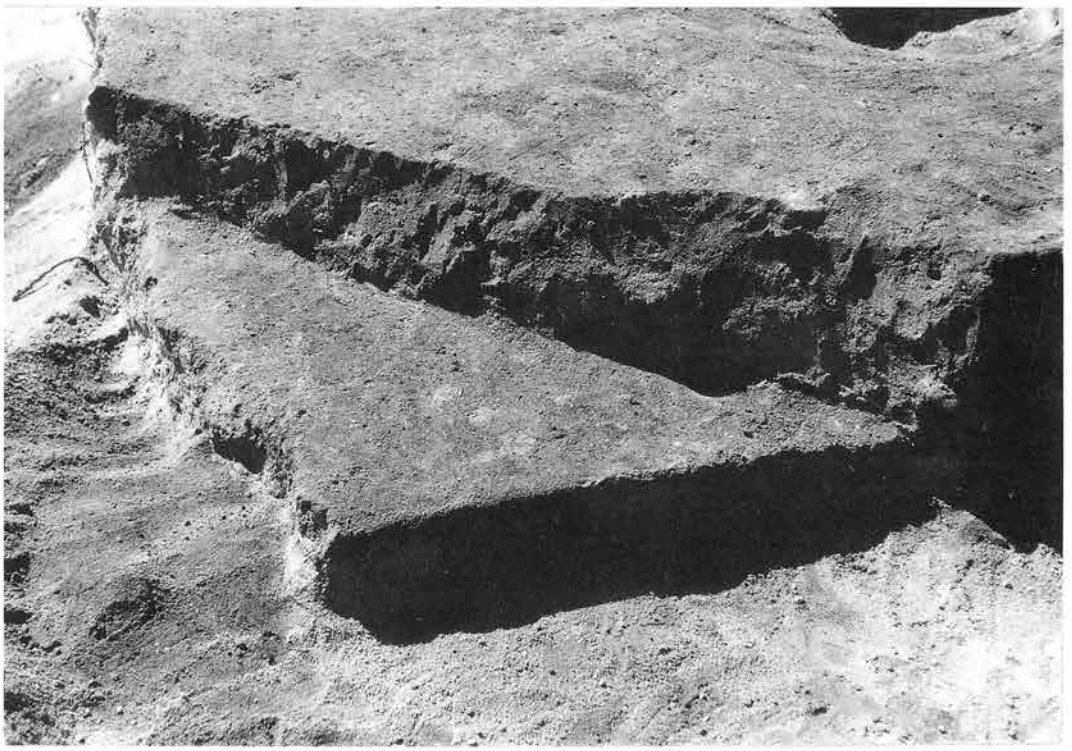
H180号住居址（南から）

↑H181号住居址（北西から）

H182号住居址（西から）



↑H183号住居址（床面とカマドが検出された）

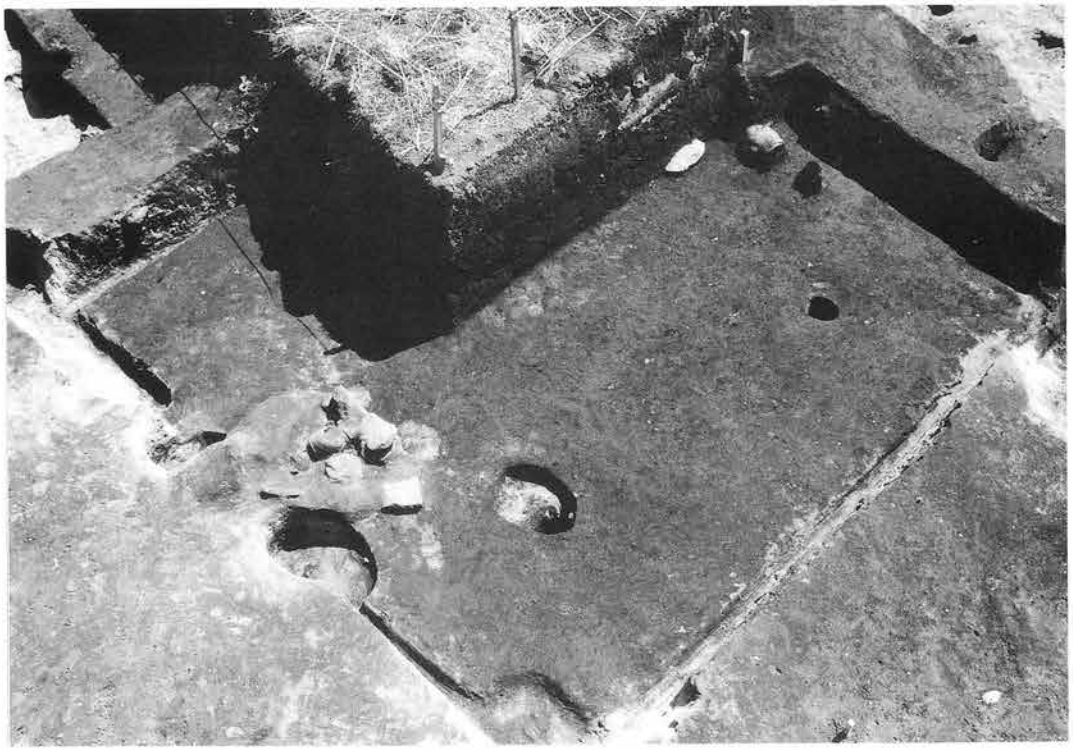


H190号住居址（H182号、H136号に切られ一部分が残存していた）

↑H191号住居址（北東から）

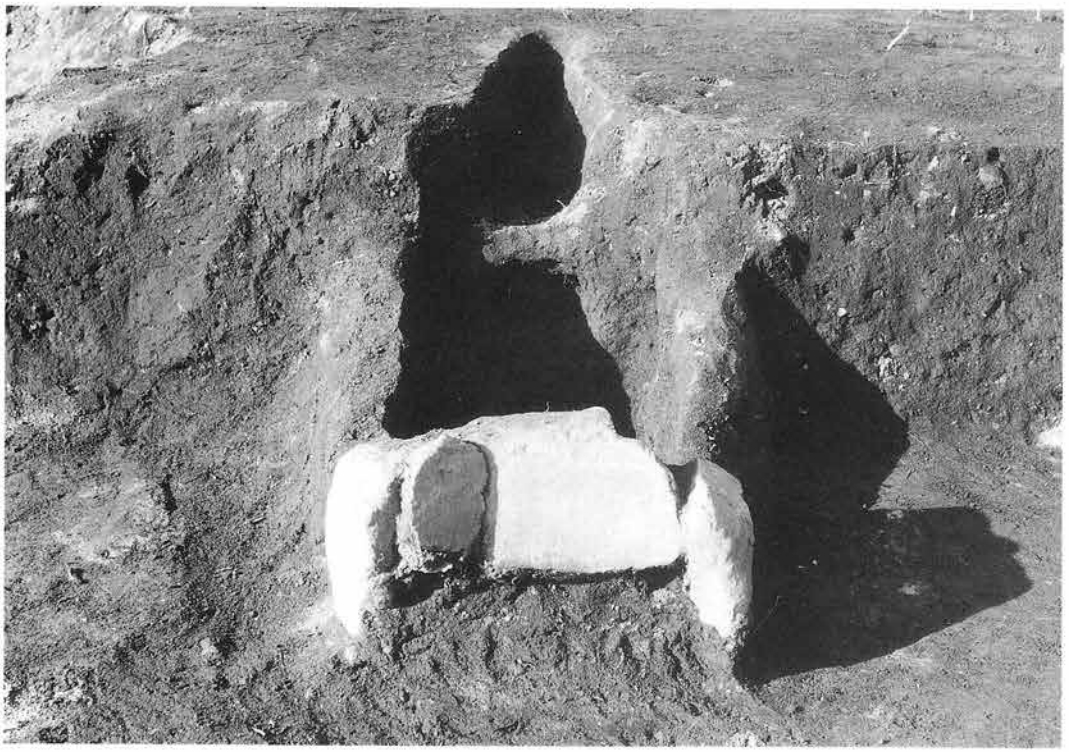
H192号住居址（東から）

↑H193号住居址（H191号、H192号に切られ一部分が残存していた）



H194号住居址（北西から）

↑H195号住居址（北から）

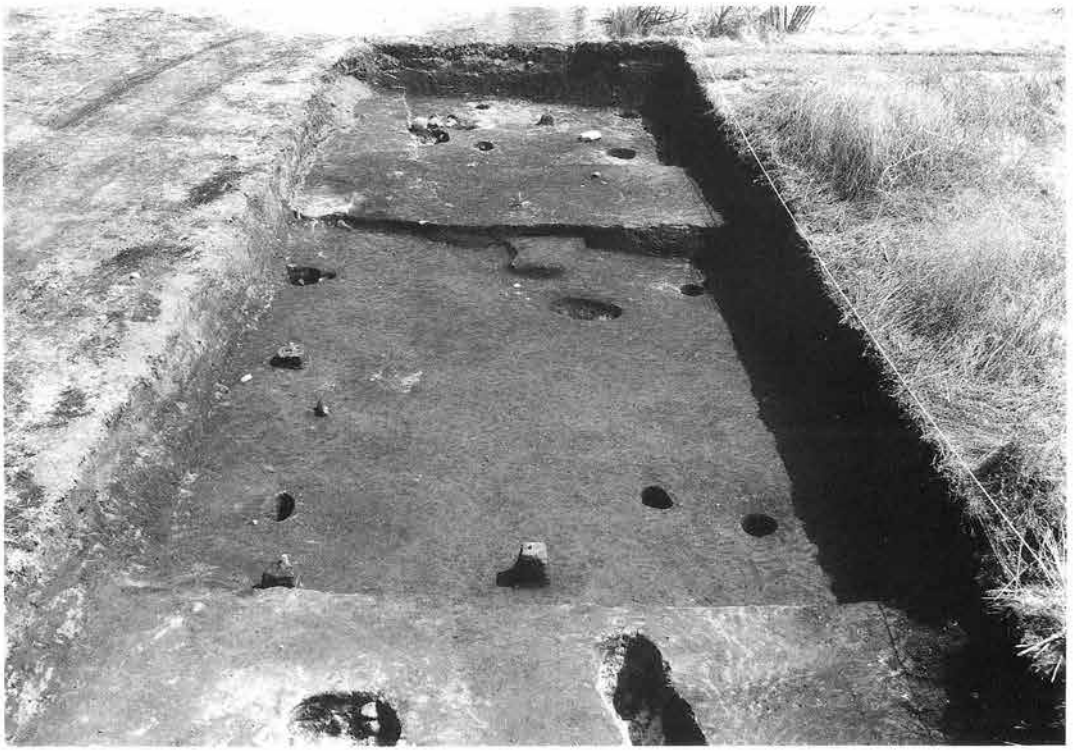


H195号住居址カマド

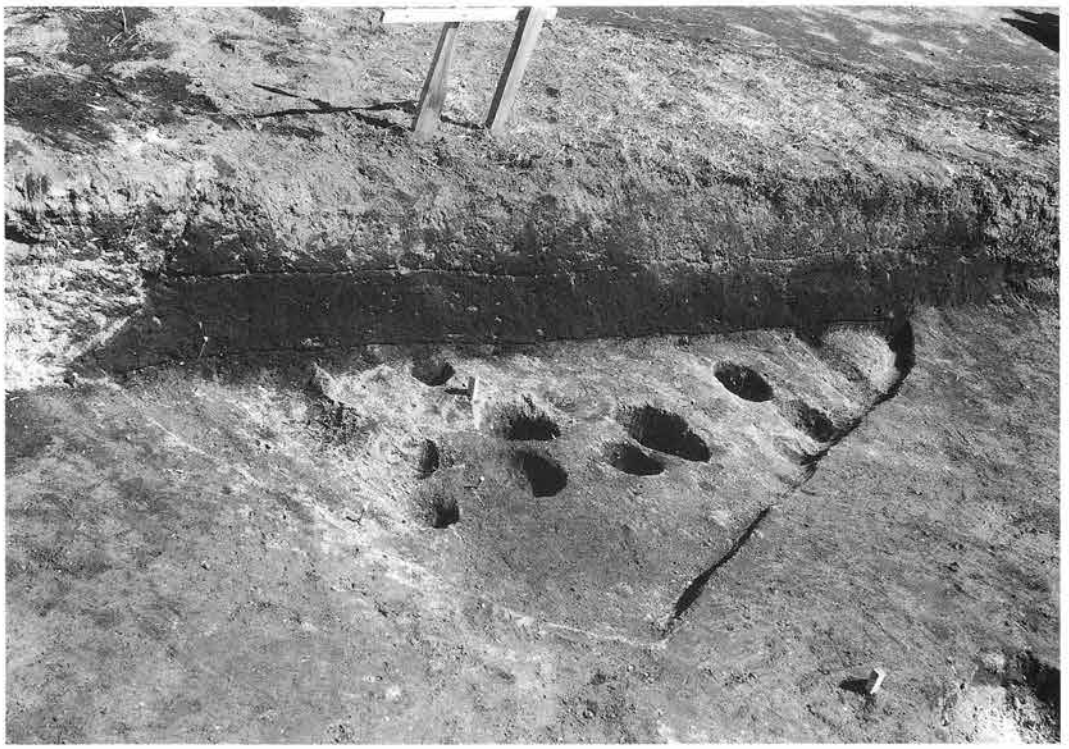
↑H196号住居址（西から）

↑H197号住居址（北から）

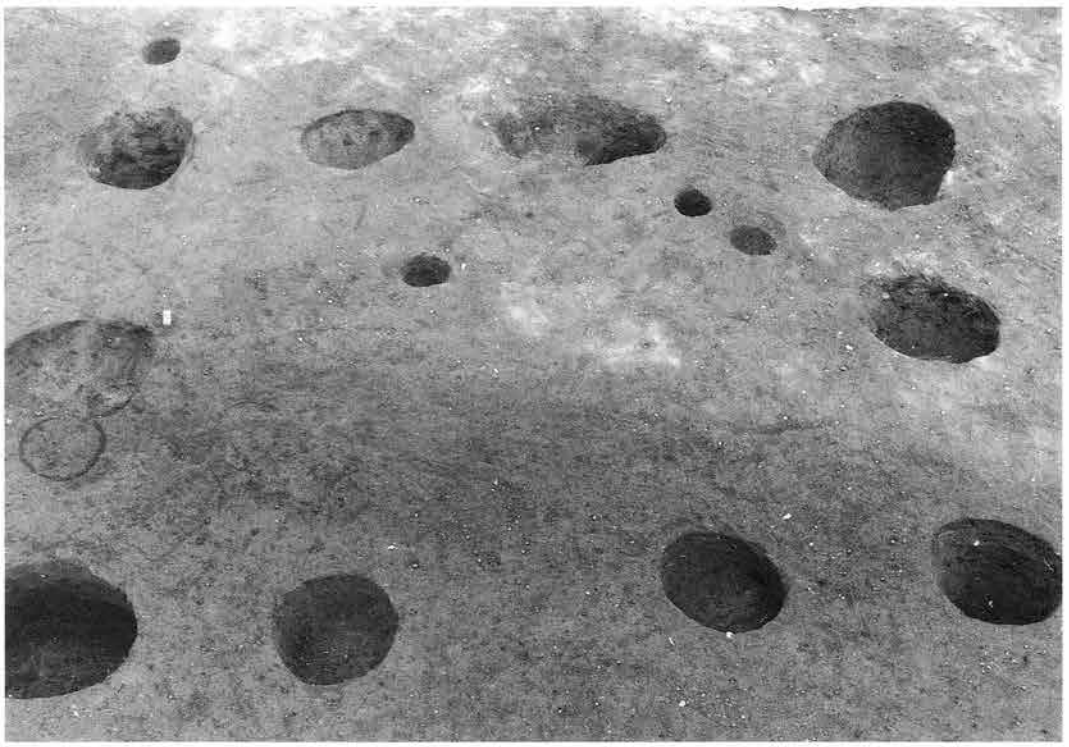
H188号、H198号住居址（西から）



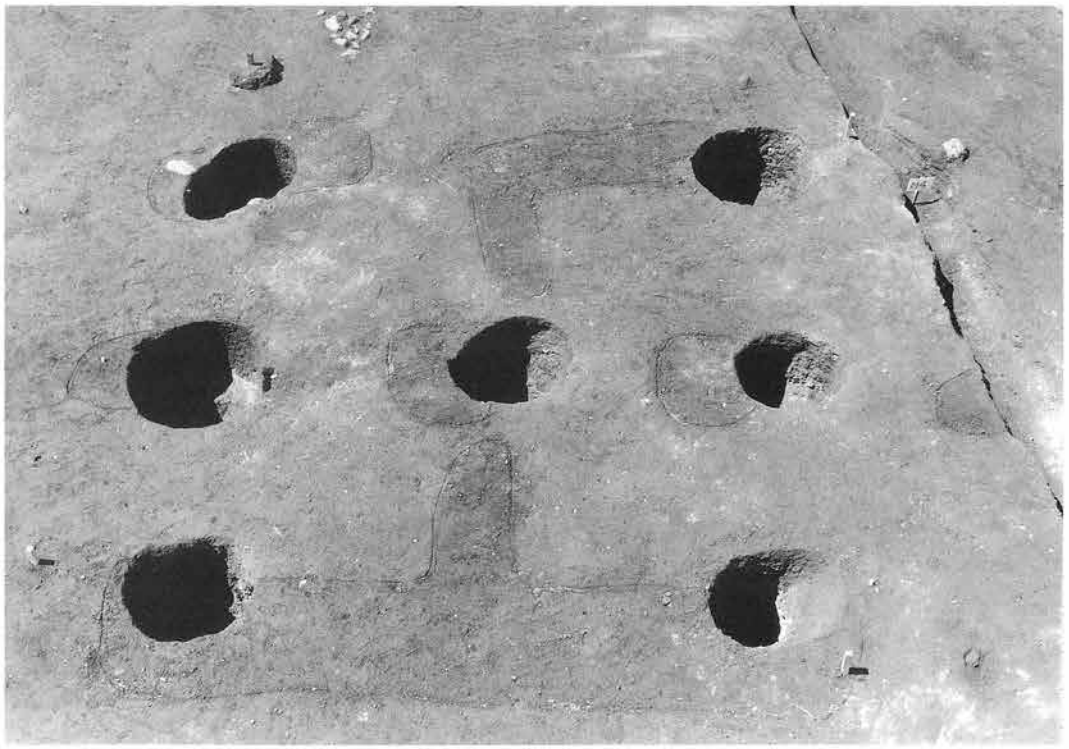
↑H197号住居址（西から）



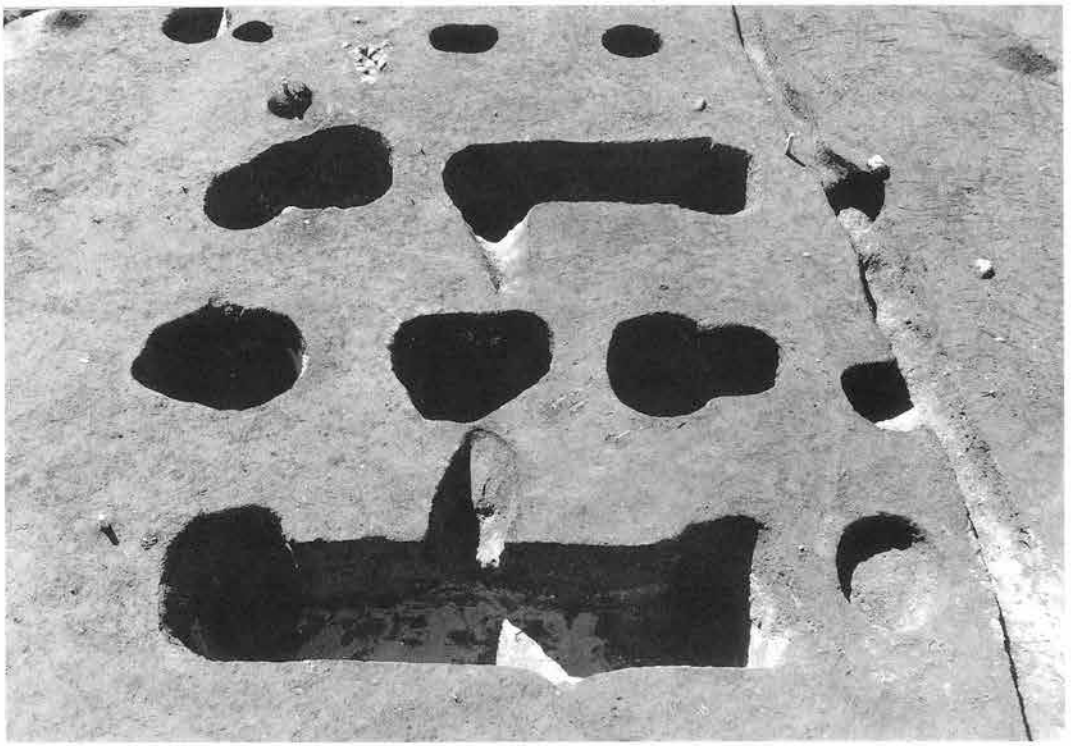
H201号住居址（南西から）



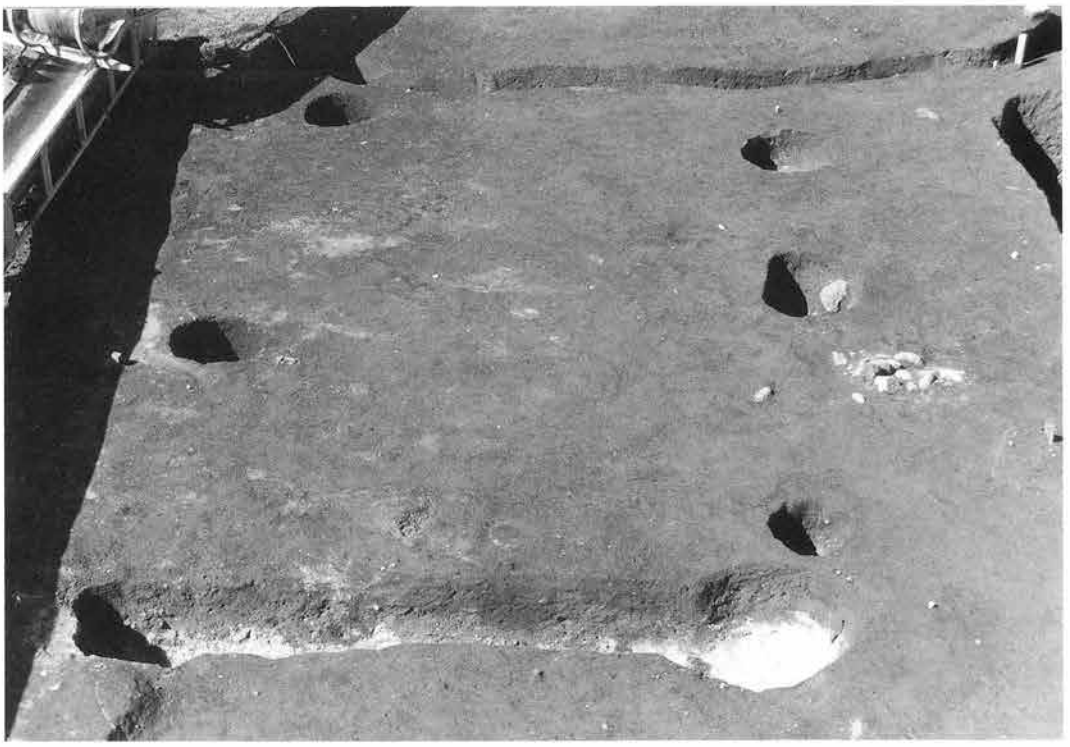
↑Ｆ１号掘立柱建物址（西から）



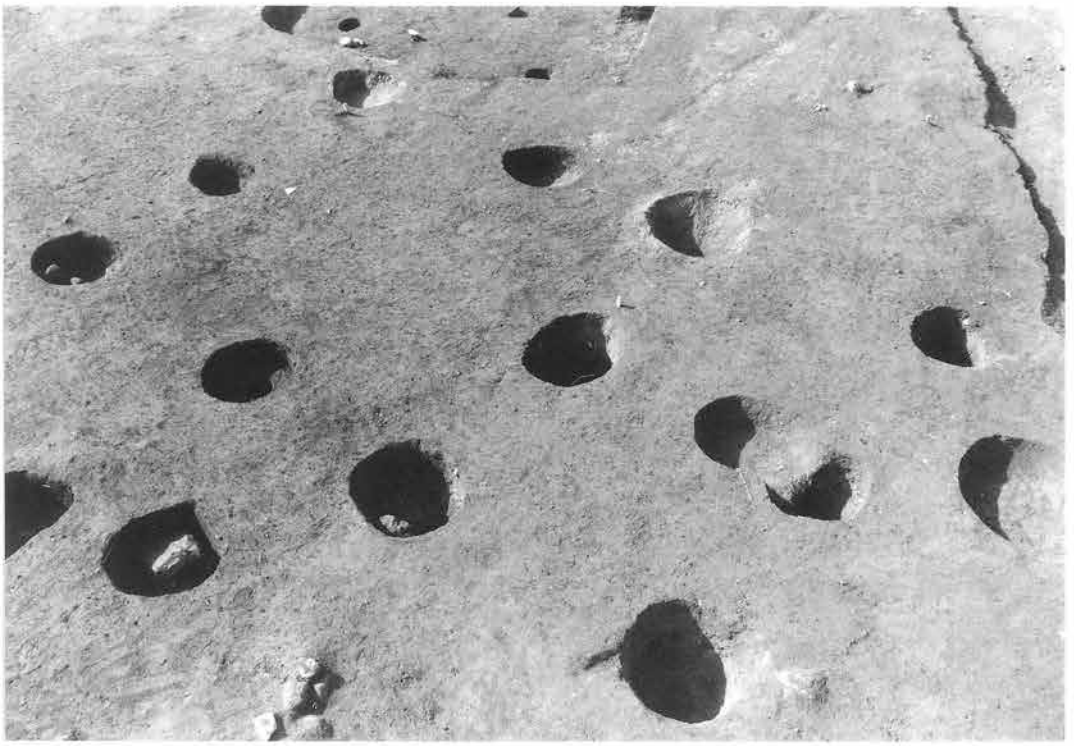
Ｆ２号掘立柱建物址（東から）



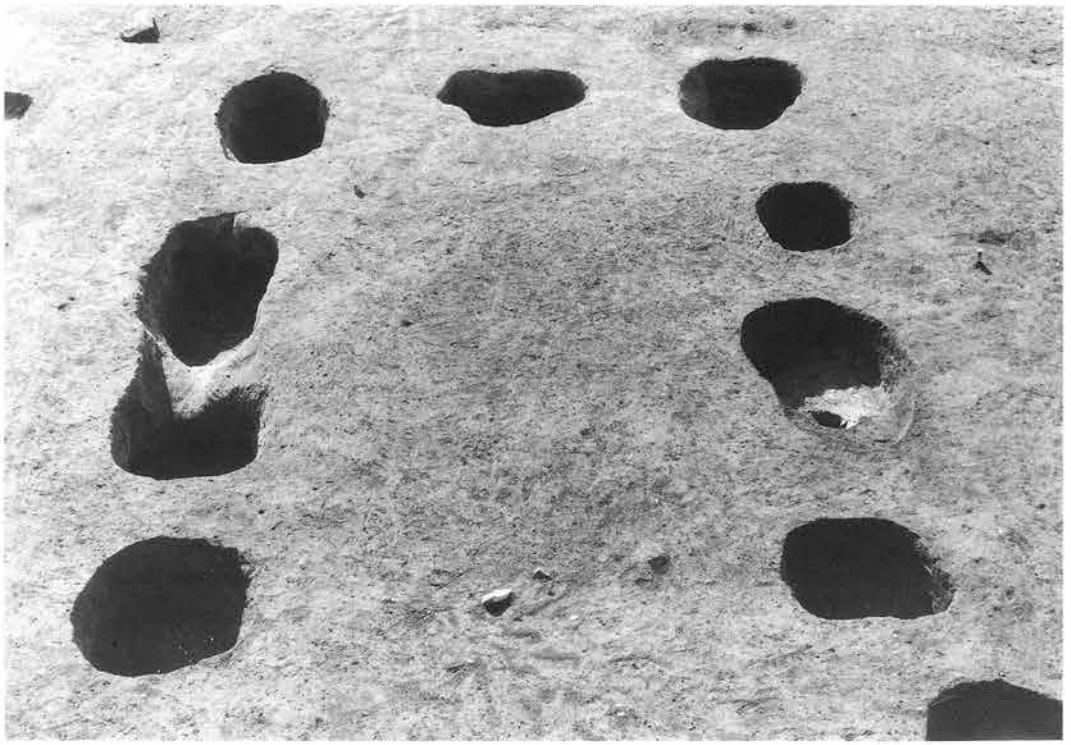
↑Ｆ５号掘立柱建物址（東から）



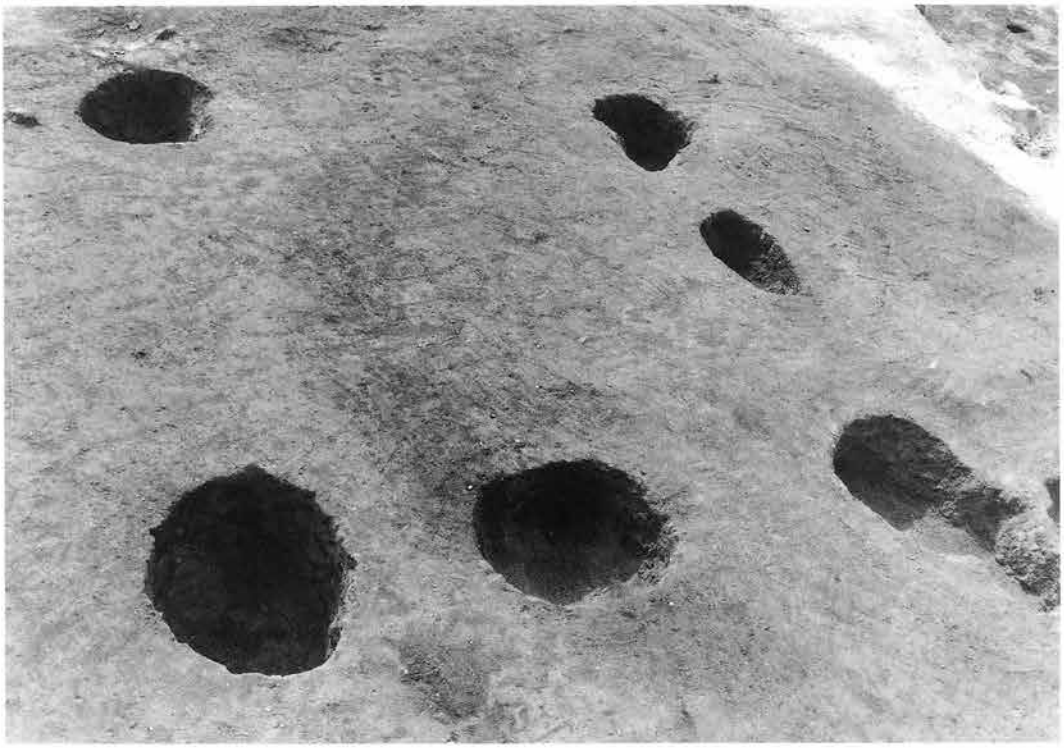
Ｆ６号掘立柱建物址（南から）



↑Ｆ７号掘立柱建物址（東から）

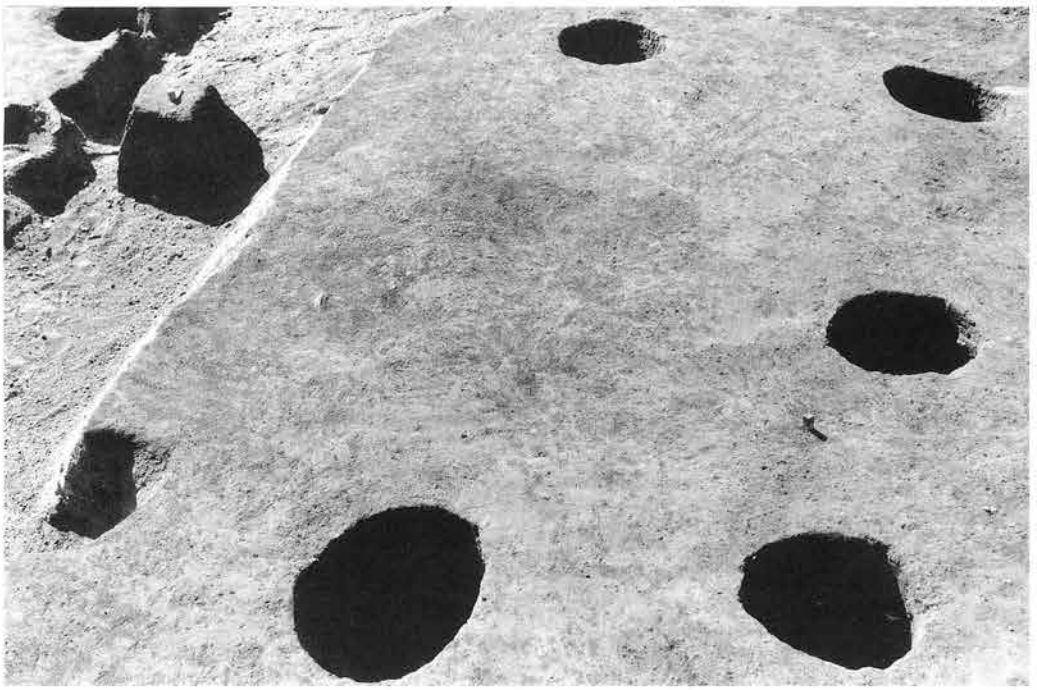


Ｆ８号掘立柱建物址（東から）

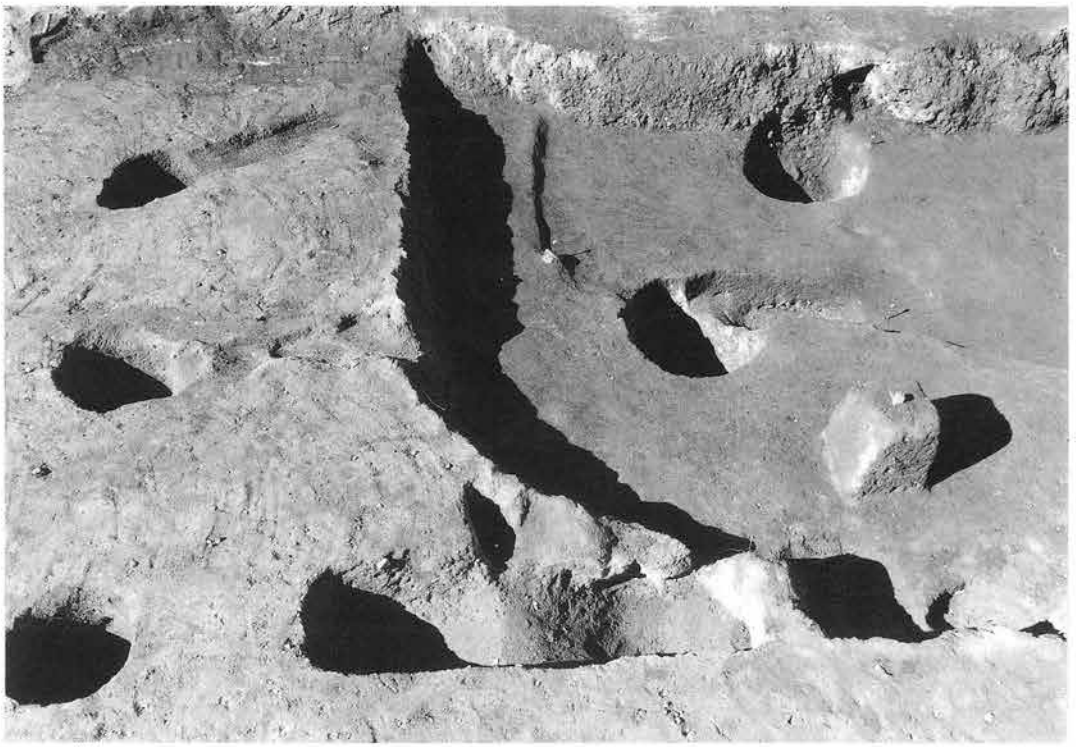


↑F10号掘立柱建物址（北から）

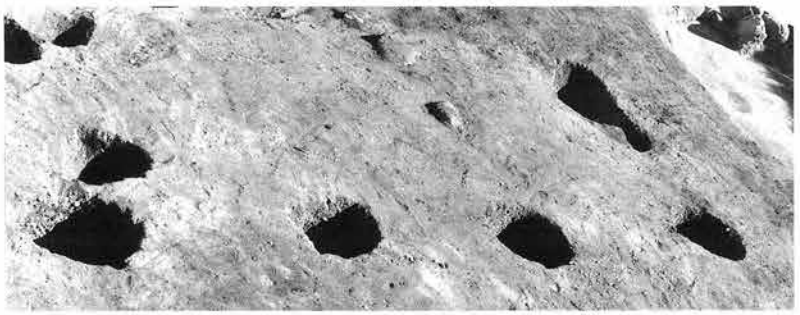
F11号掘立柱建物址（南から）



↑F12号掘立柱建物址（東から）

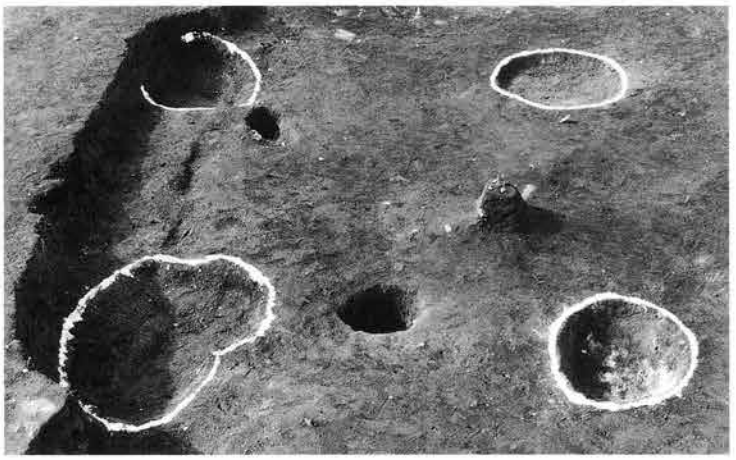


F14号掘立柱建物址（東から）



←F15号掘立柱建物址
（西から）

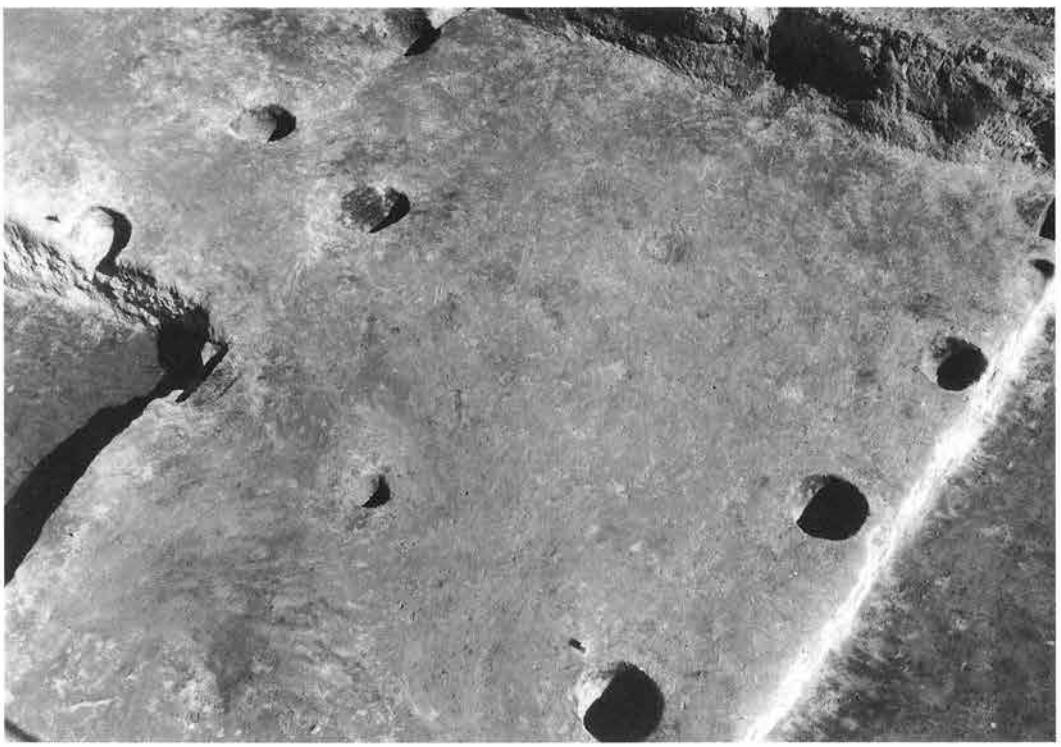
F16号掘立柱建物址→
（東から）



←F17号掘立柱建物址
（北西から）

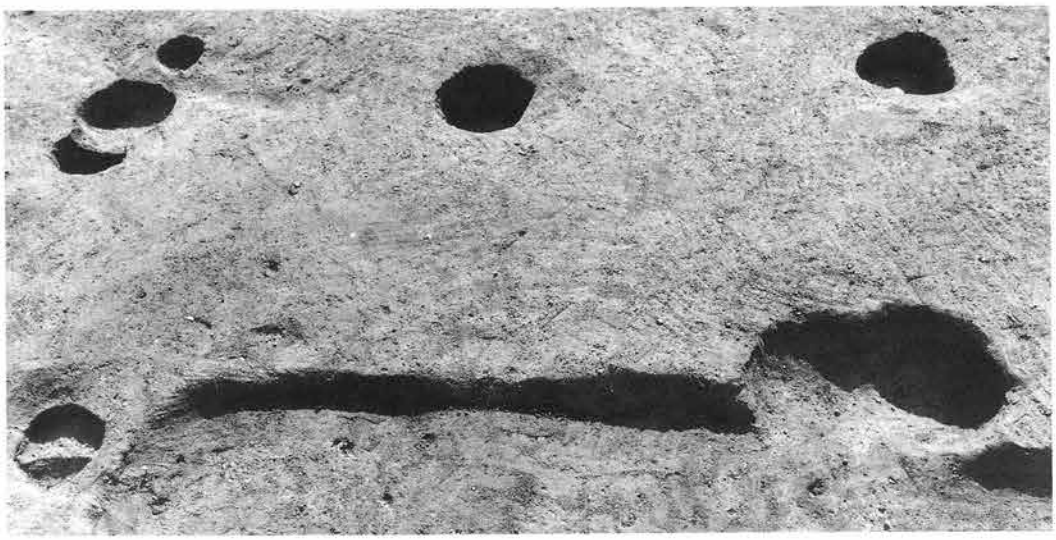
F18号掘立柱建物址
↓　（北から）

↑Ｆ22号掘立柱建物址（南から）

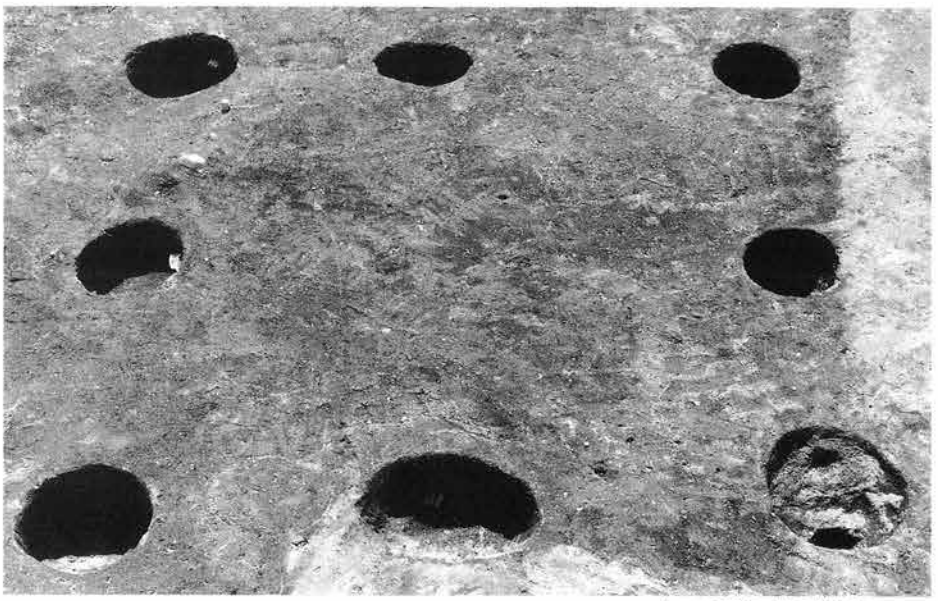


Ｆ23号掘立柱建物址（西から）

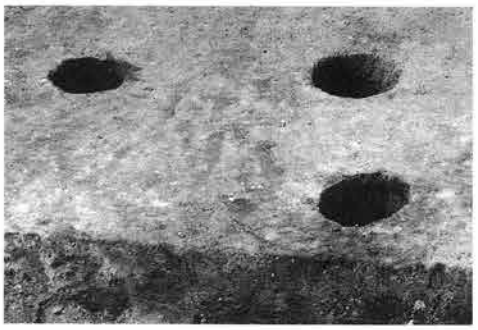
↑Ｆ26号掘立柱建物址（南から）



Ｆ27号掘立柱建物址（北から）

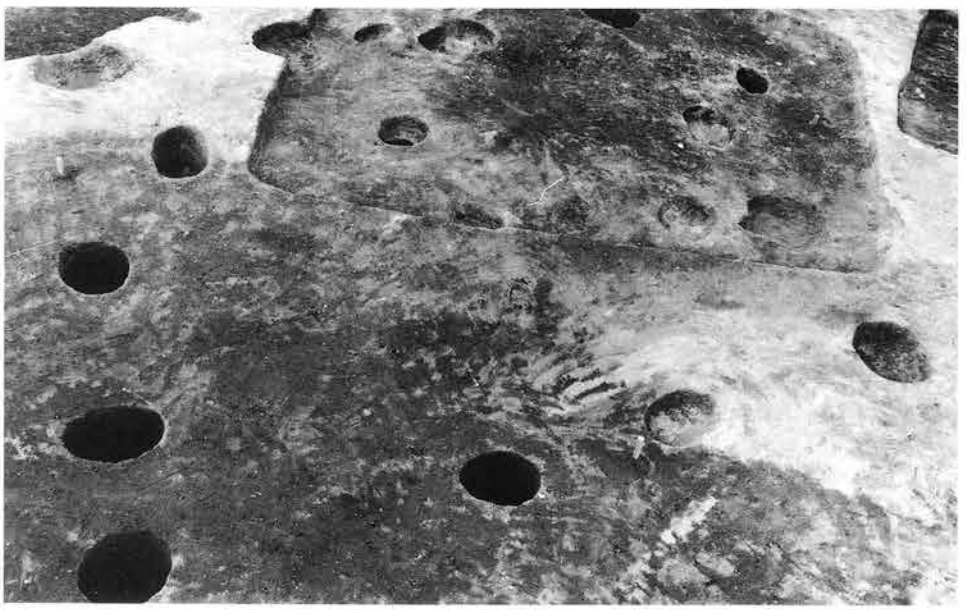


↑ F13号掘立柱建物址



←F27号掘立柱建物址
（南から）

↓ F29号掘立柱建物址（南東から）



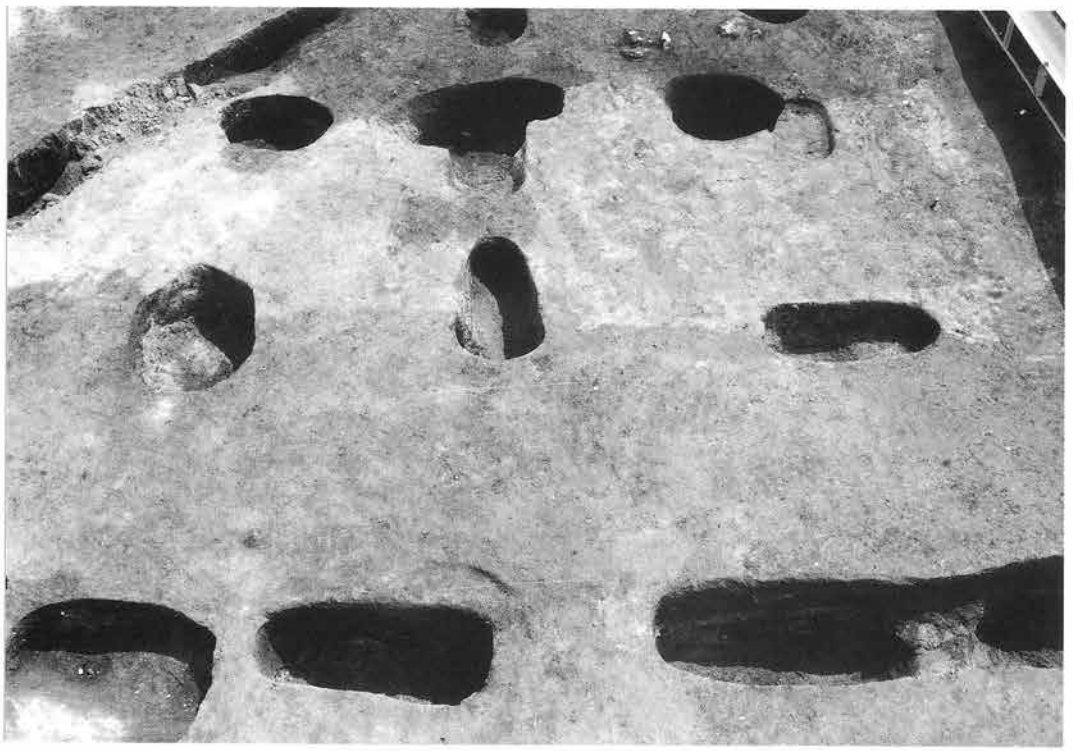
↑Ｆ28号掘立柱建物址（南から）

Ｆ31号掘立柱建物址（北から）

↑Ｆ33号掘立柱建物址（東から）

Ｆ34号掘立柱建物址（南から）

↑Ｆ35号掘立柱建物址（北から）



Ｆ36号掘立柱建物址（北から）

↑Ｆ37号掘立柱建物址（東から）

Ｆ38号掘立柱建物址（西から）

↑Ｆ39号掘立柱建物址（南西から）

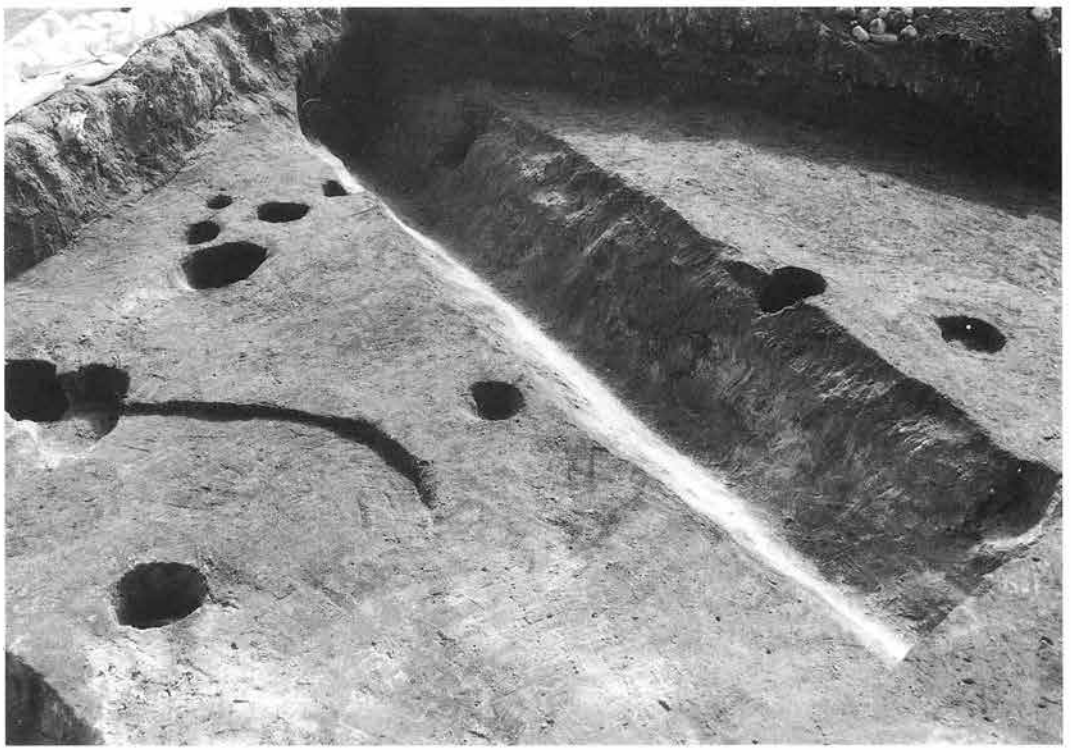
Ｆ40号掘立柱建物址（北西から）

↑Ｆ41号掘立柱建物址（南から）

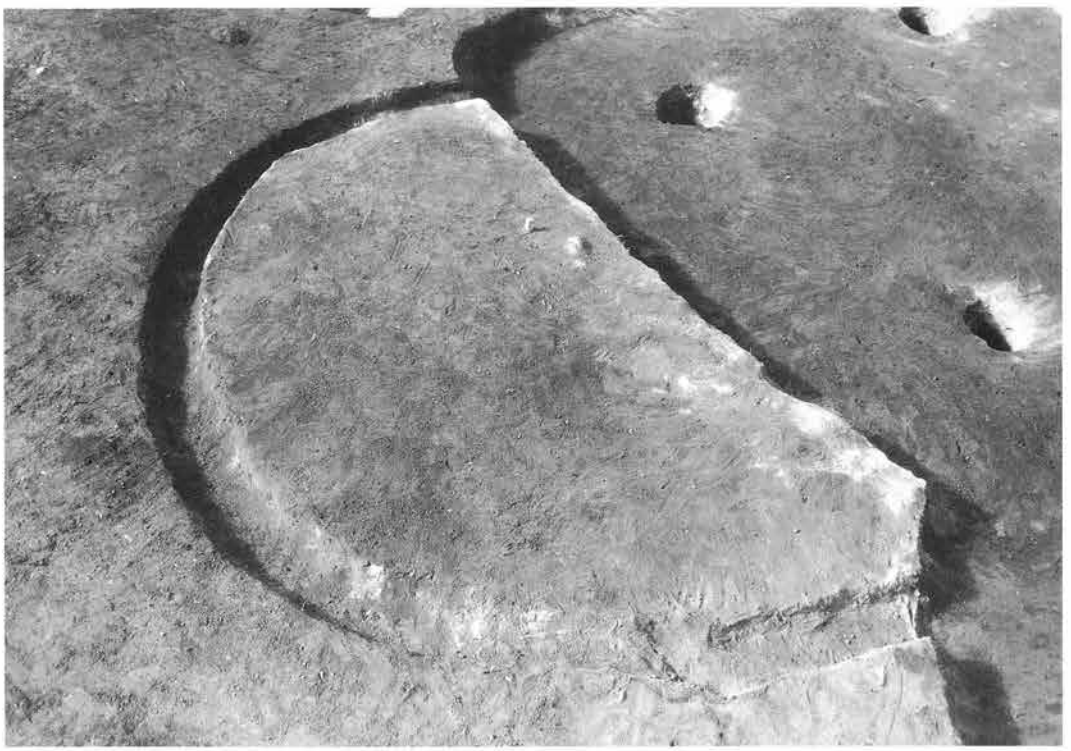
Ｆ42号掘立柱建物址（北から）

↑Ｆ44号掘立柱建物址（西から）

Ｍ１号溝址セクション

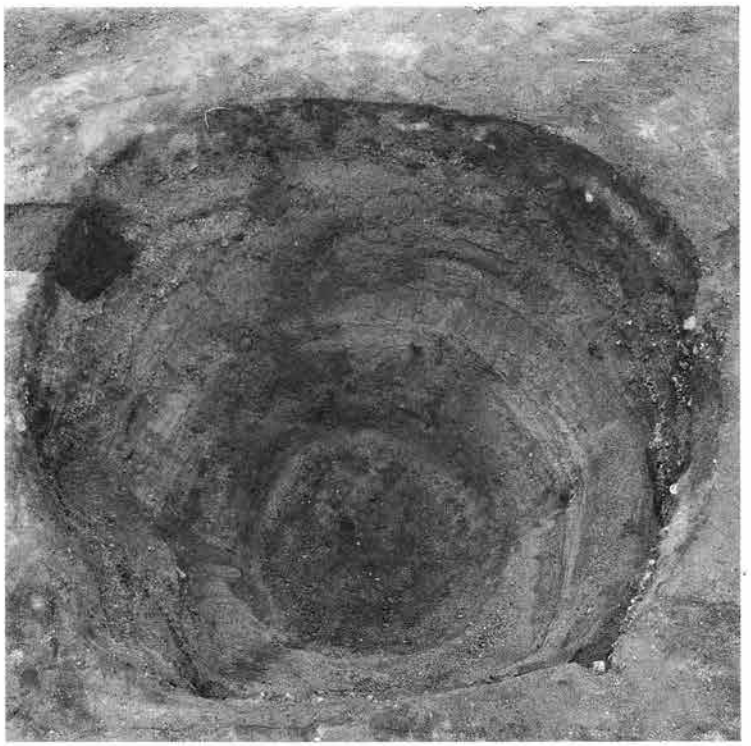


↑Ｍ８号溝址は、断面「Ｖ」字形を呈し、多量の弥生土器を出土した。



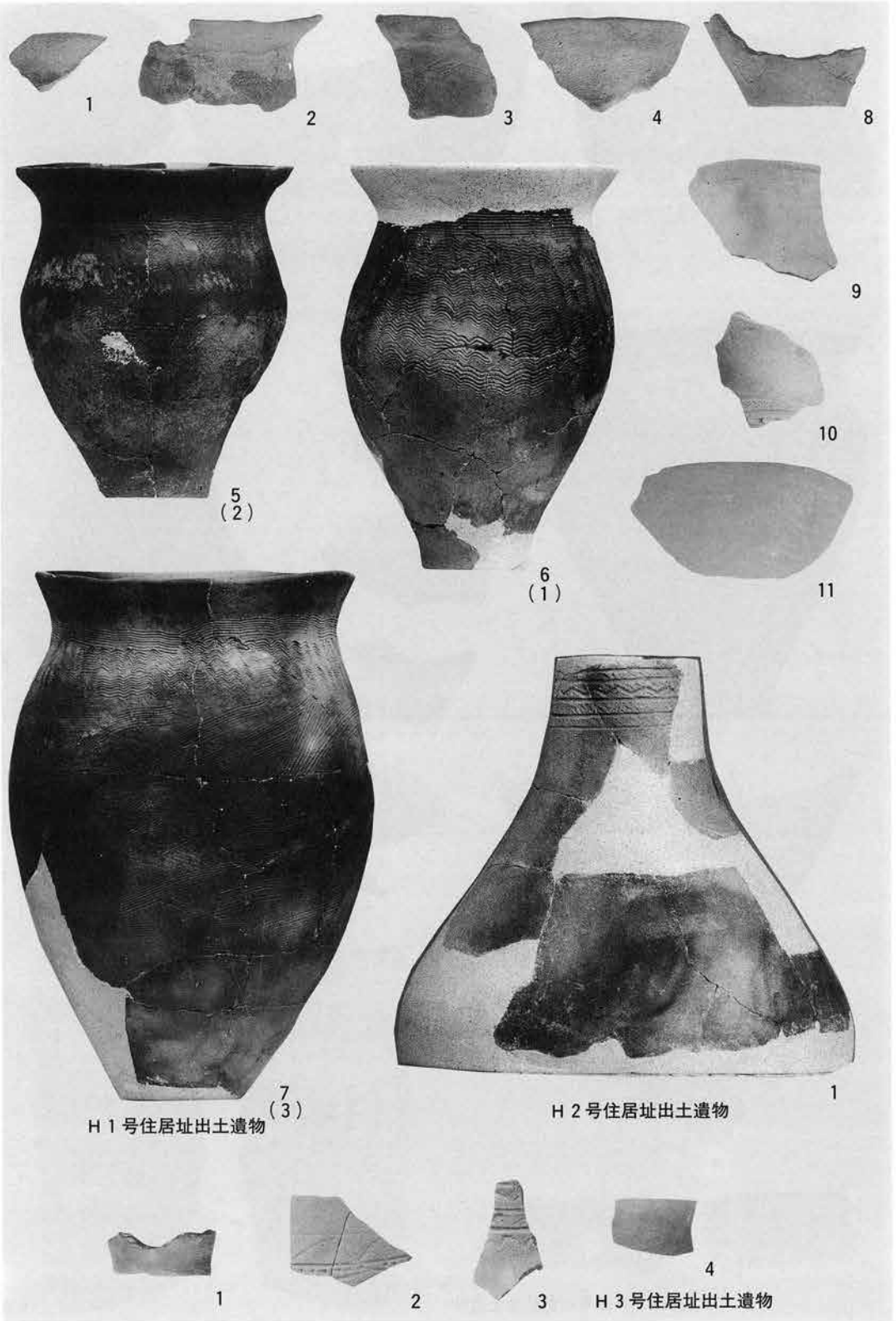
Ｍ９号溝址は円形を呈する。他にＭ７号が同様な内容の遺構であるが、性格は不明である。

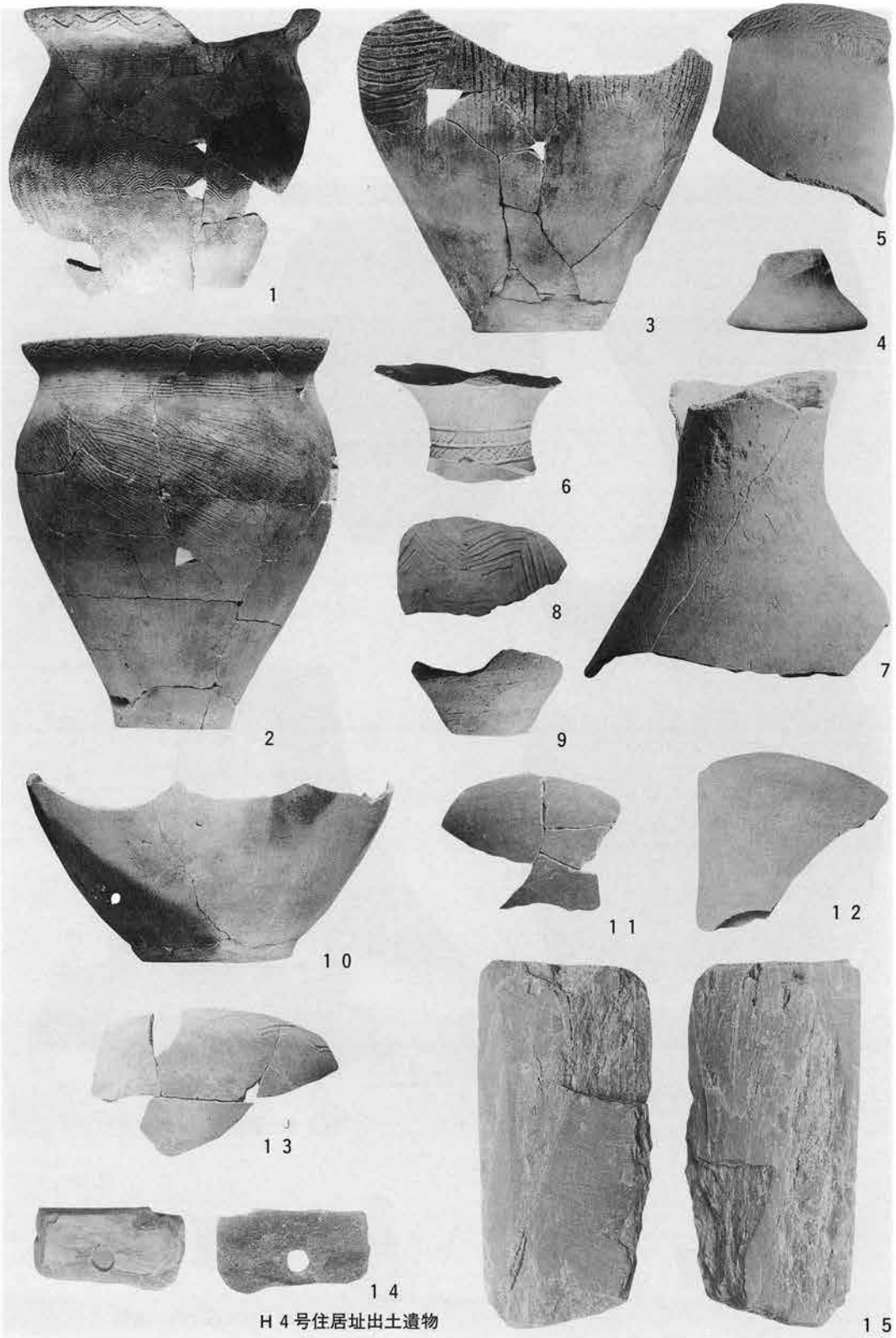
図版　九十七



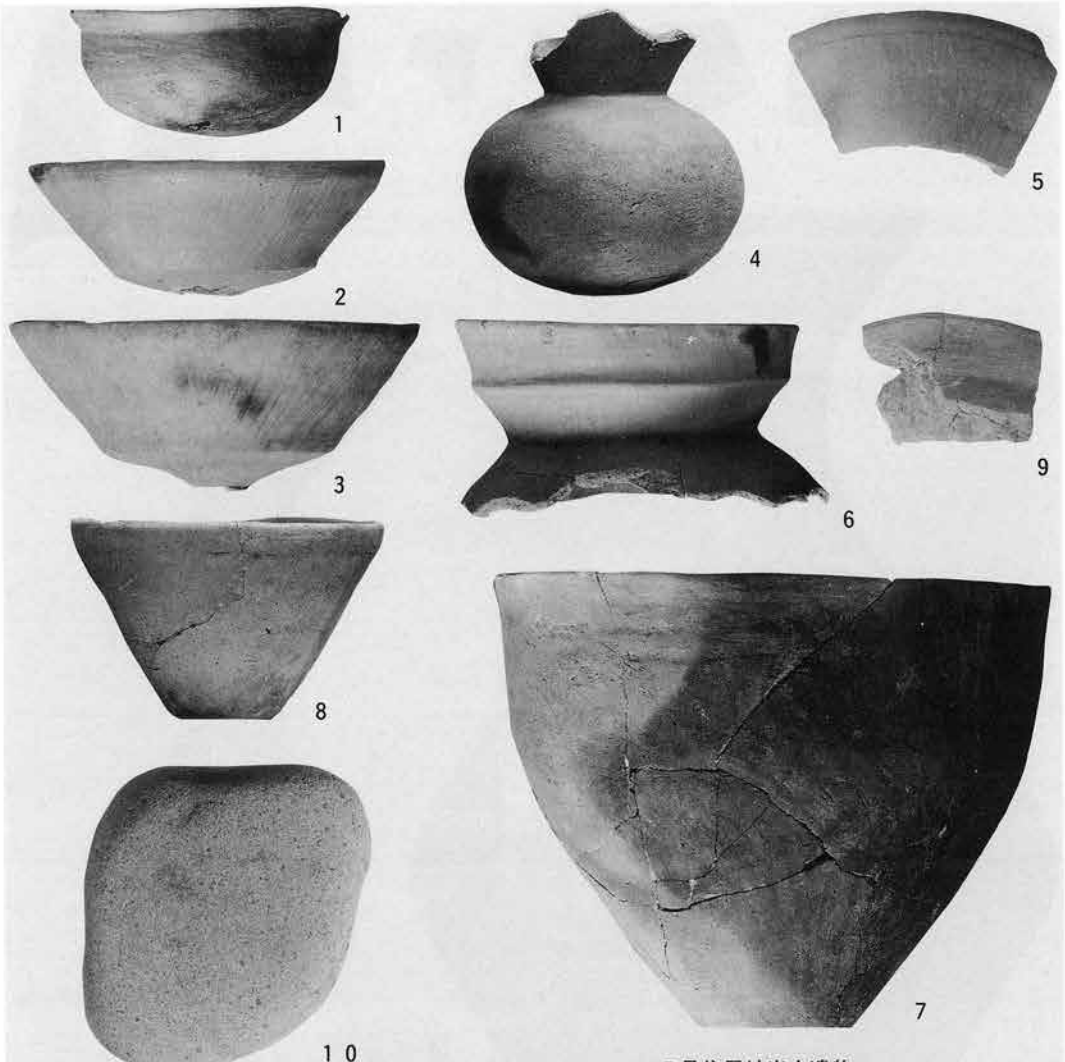
Ｄ５号土坑（上）
Ｄ10号土坑（下）
塵芥処理の為の土坑と言う見解もあるが、そのような単純な機能の遺構としては、その分布の広がり、時期的な集中、形状の規格性等に統一性がある事が、かえって不自然ではないだろうか。

↑Ｄ５号土坑セクション

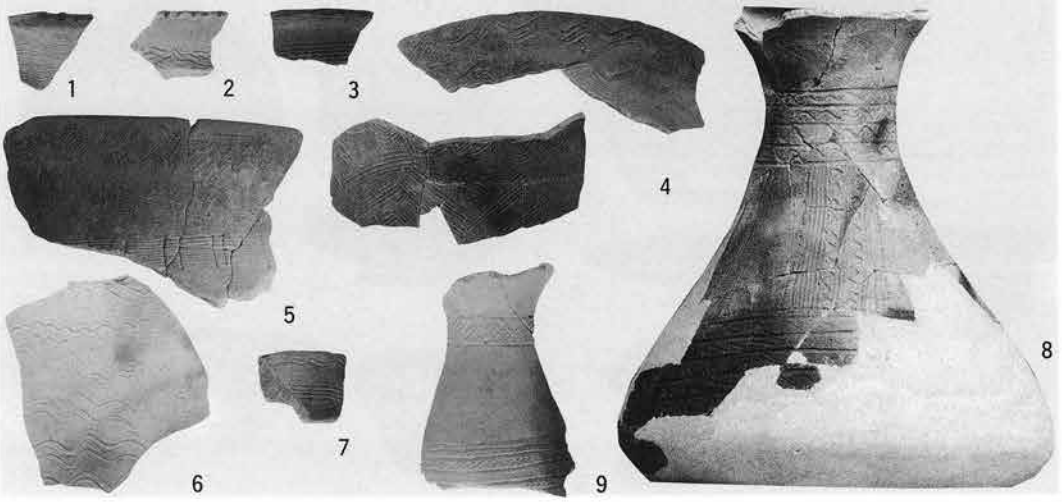

1
2
3
4
8
5
(2)
6
(1)
9
10
11
7
(3)
1
H1号住居址出土遺物
H2号住居址出土遺物
1
2
3
4
H3号住居址出土遺物



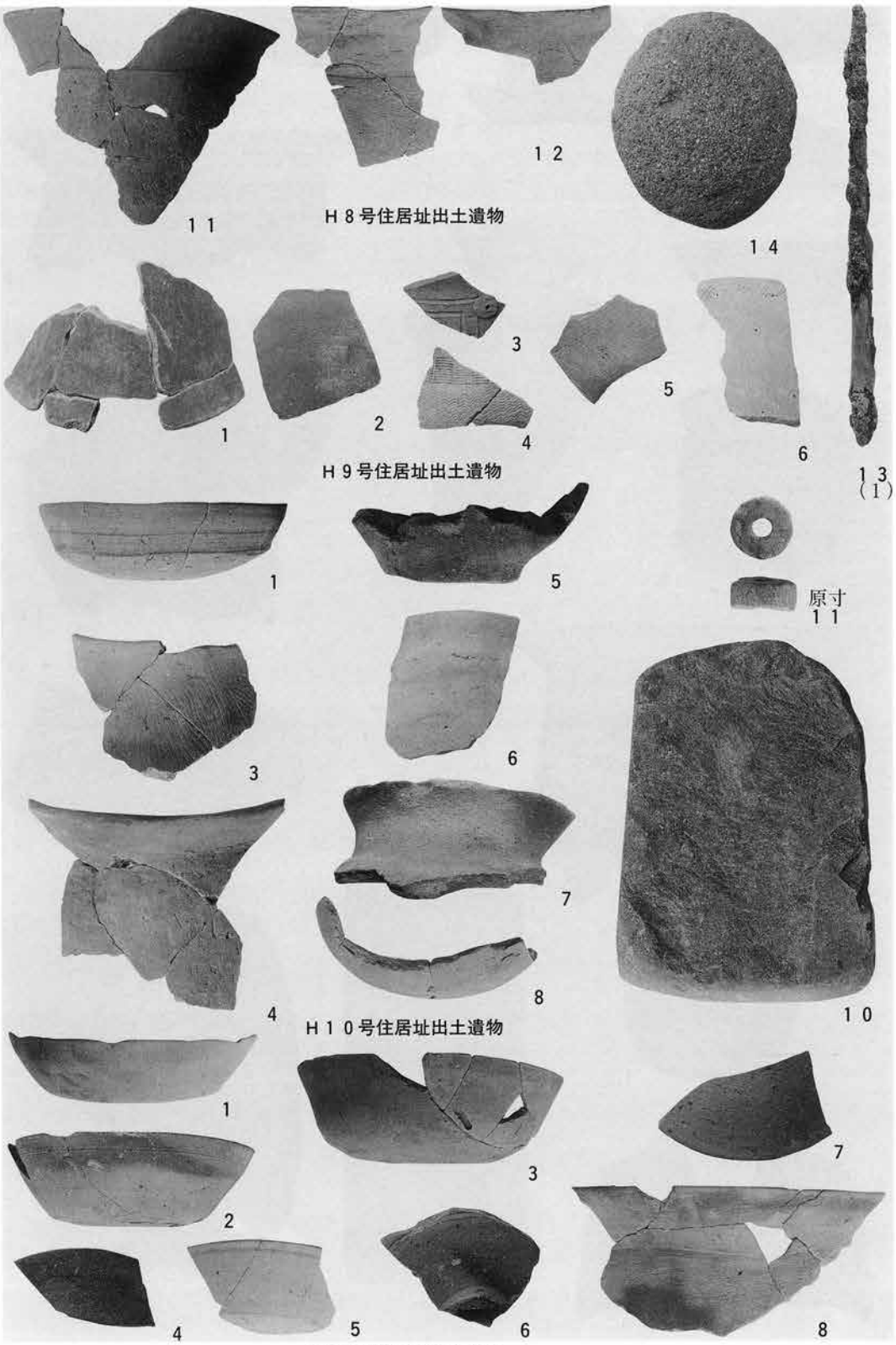
H４号住居址出土遺物

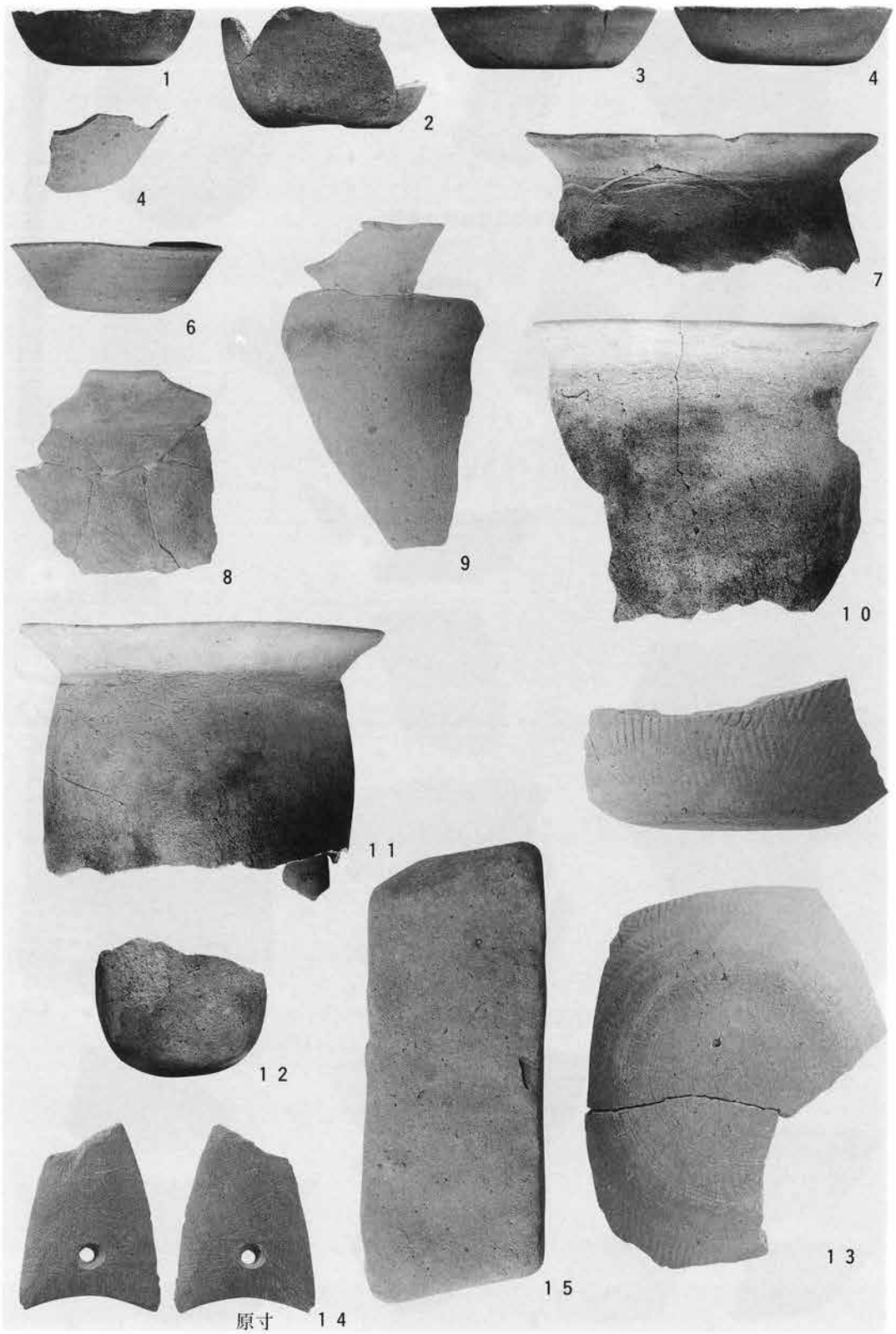


H５号住居址出土遺物

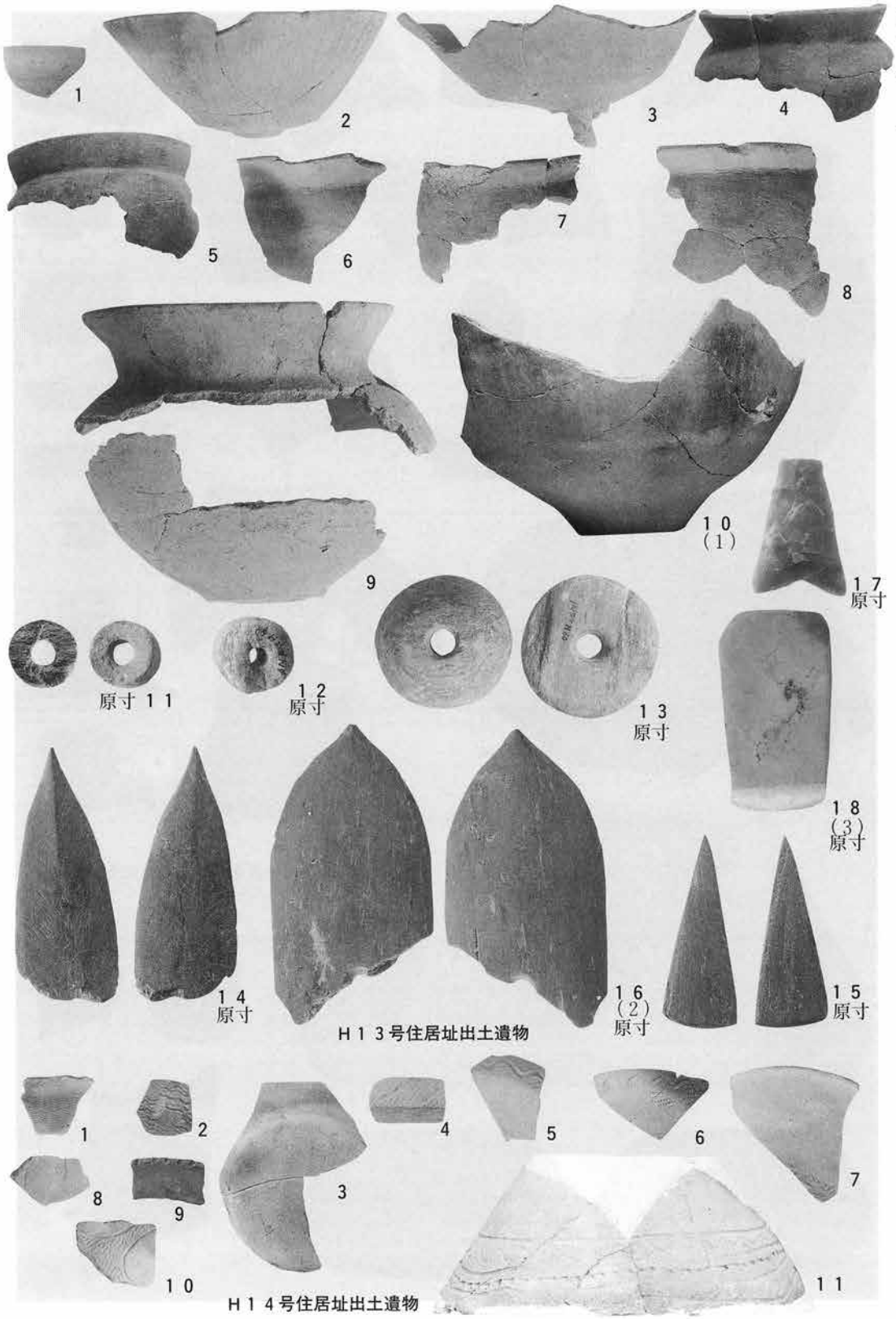


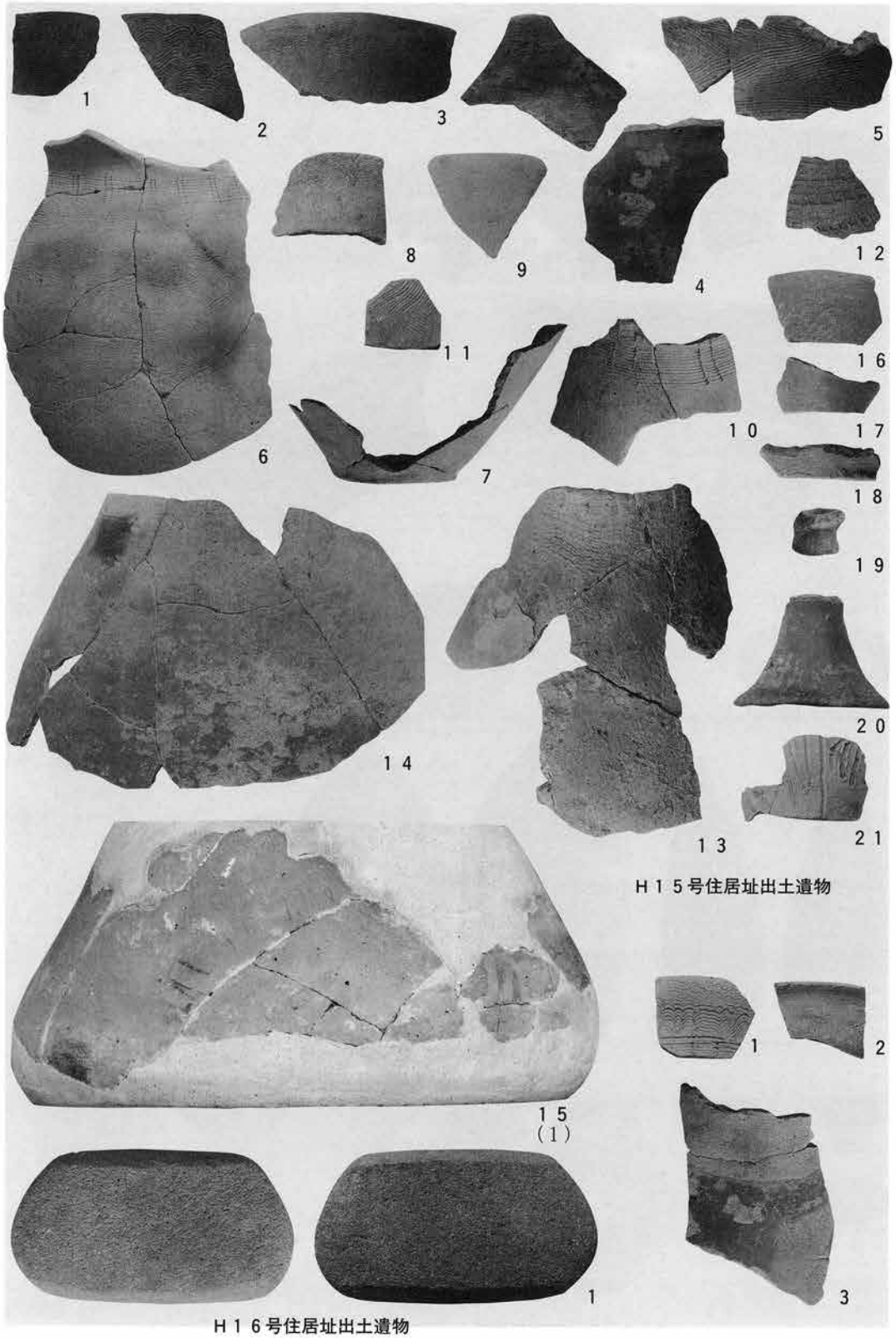
10
11
12
13
14
15
16
H6号住居址出土遺物
2
3
H7号住居址出土遺物
1
4
1
7
5
2
10
8
6
3
11
9


11
12
14
13
(1)
H 8 号住居址出土遺物
1
2
3
4
5
6
H 9 号住居址出土遺物
1
5
原寸
11
3
6
7
8
10
4
H 1 0 号住居址出土遺物
1
2
3
4
5
6
7
8
H 1 1 号住居址出土遺物



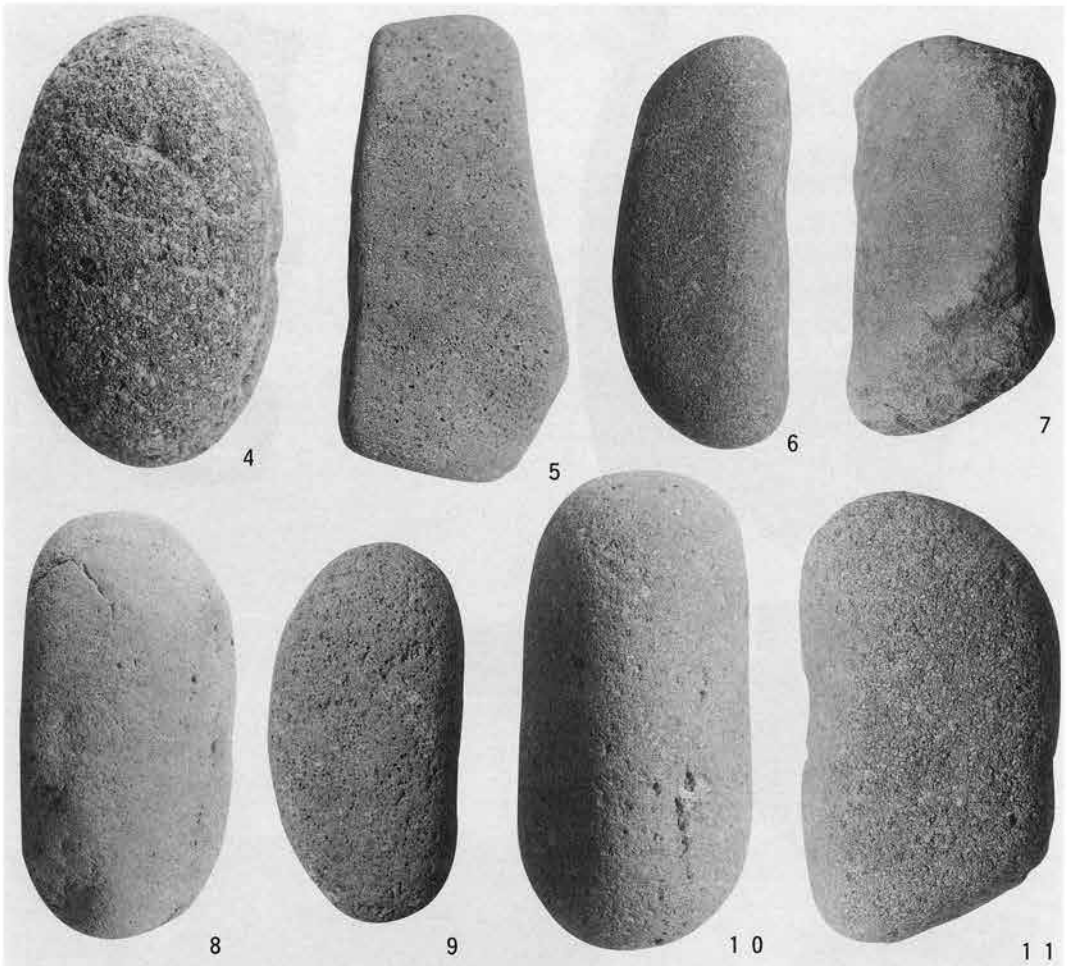
H１２号住居址出土遺物


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
(1)
17
原寸
原寸 11
12
原寸
13
原寸
18
(3)
原寸
14
原寸
16
(2)
原寸
15
原寸
H13号住居址出土遺物
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
H14号住居址出土遺物

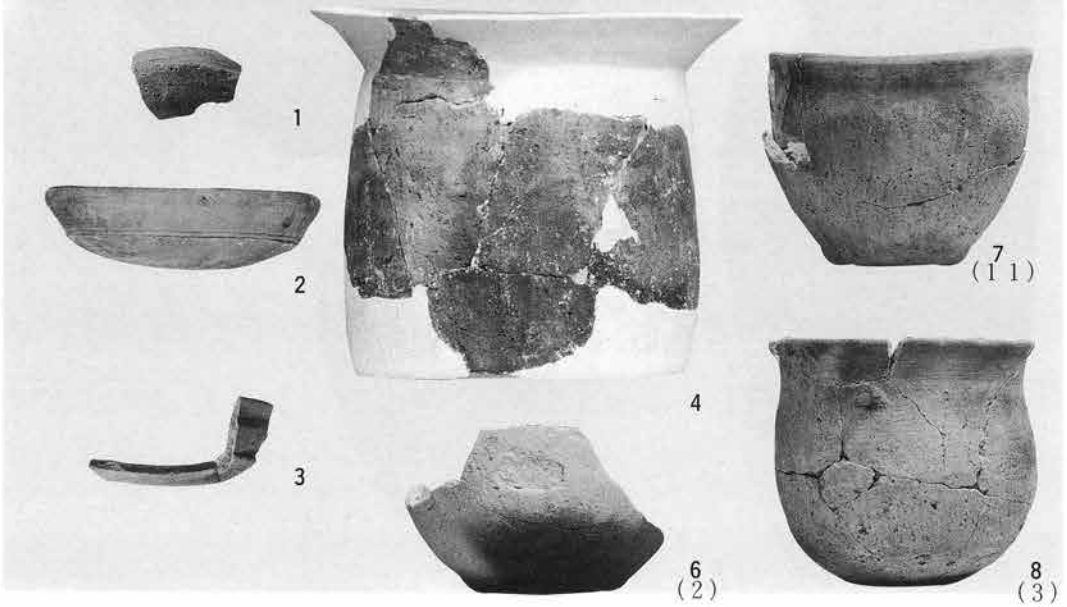


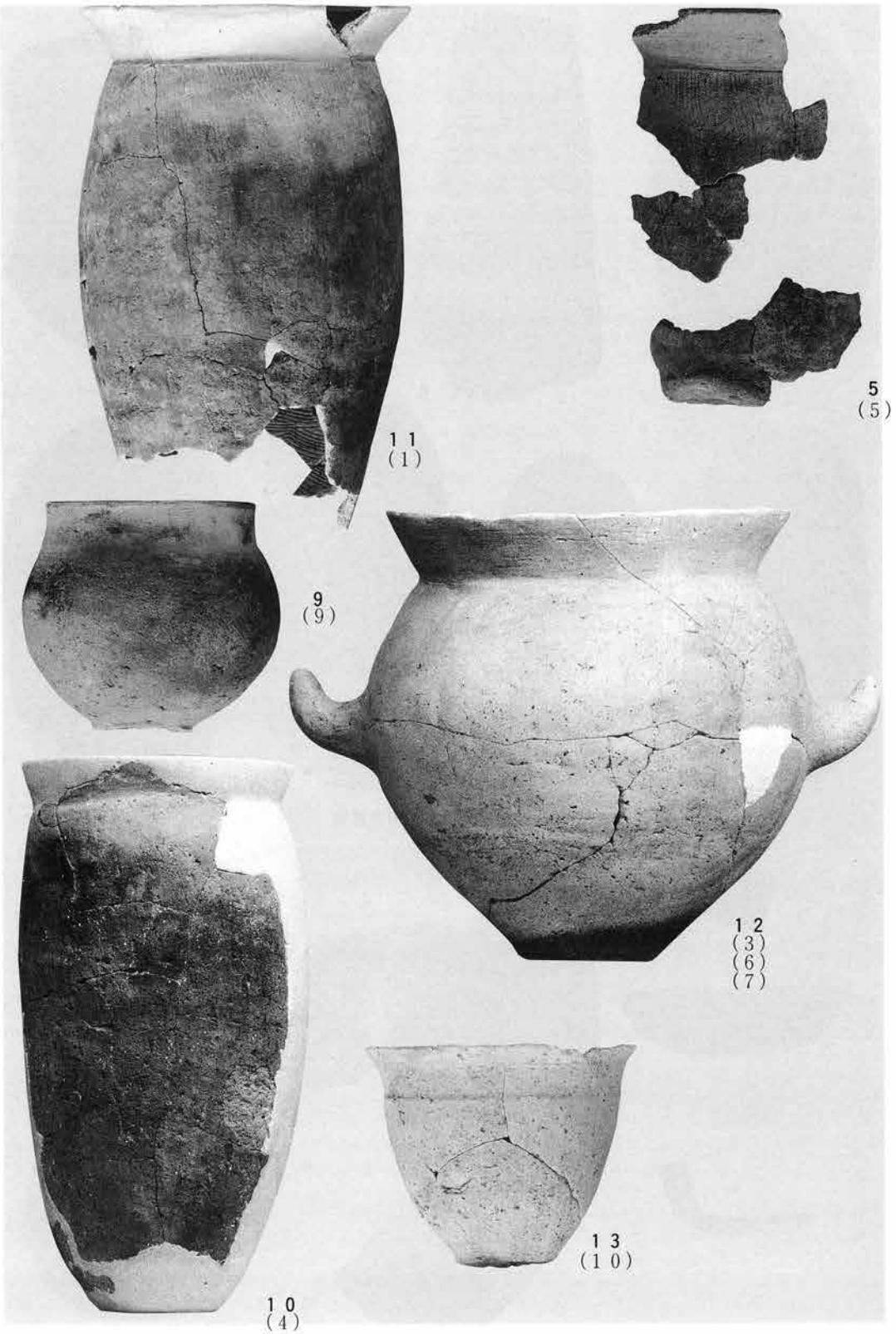
H１５号住居址出土遺物

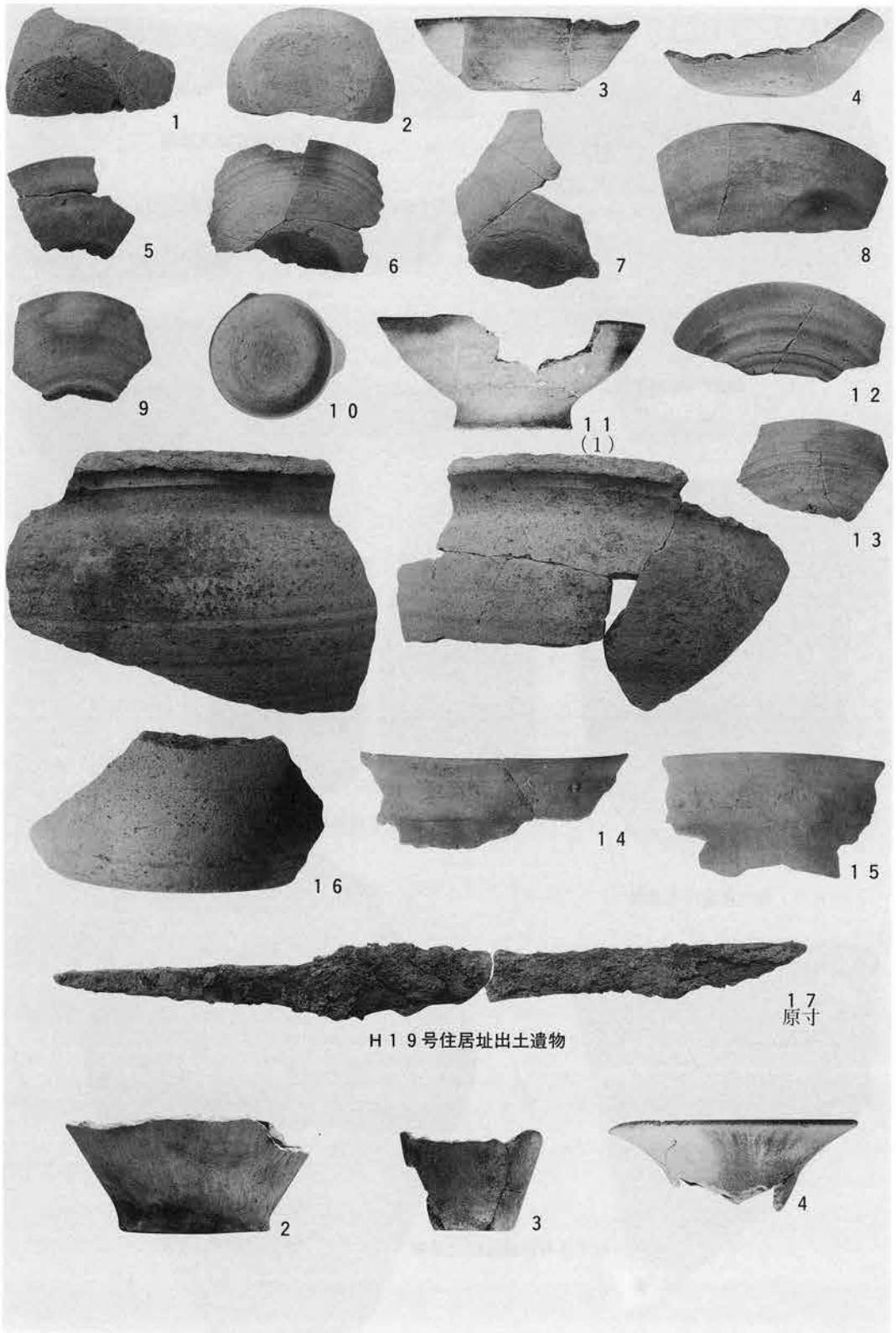
H１６号住居址出土遺物



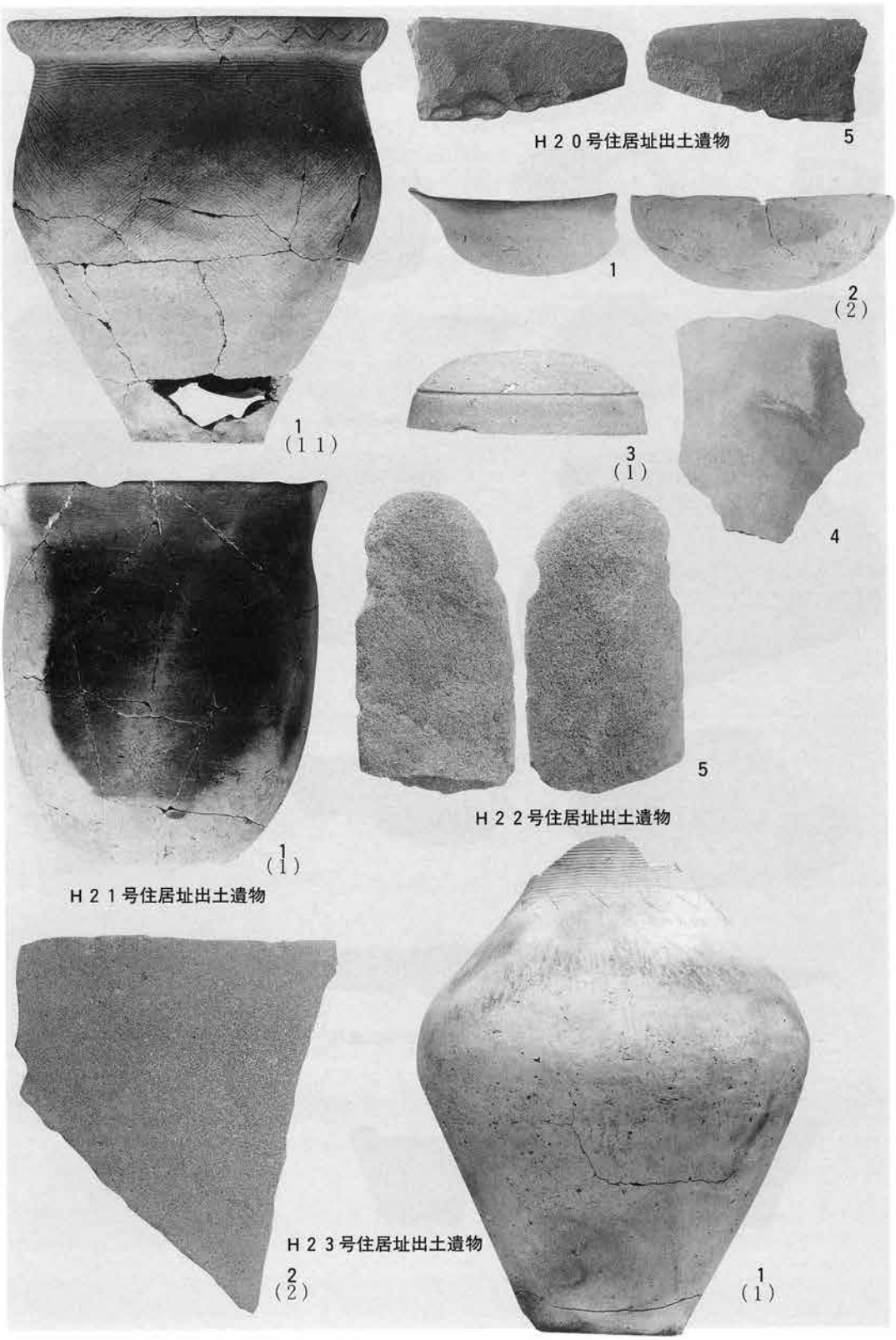
H１７号住居址出土遺物

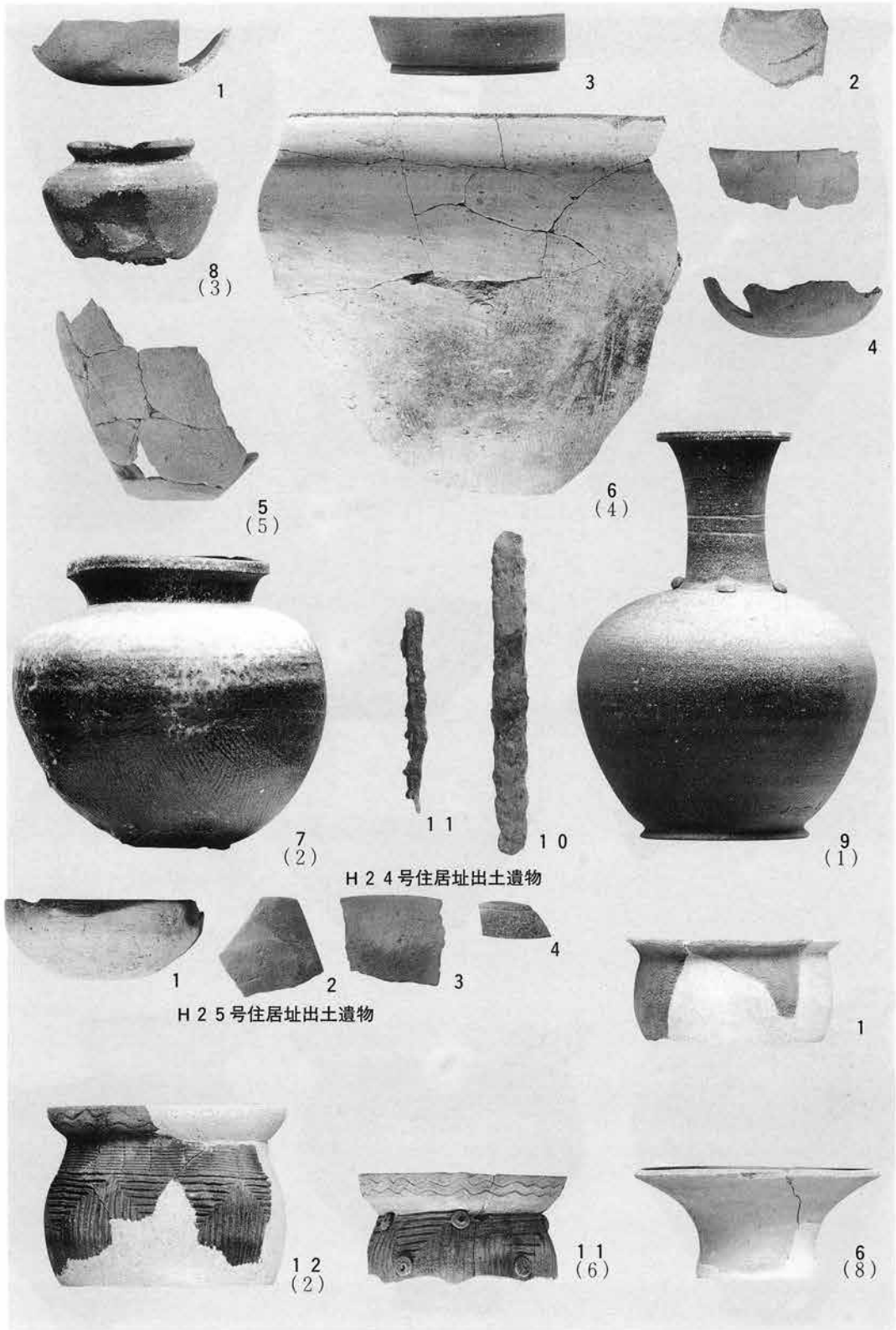


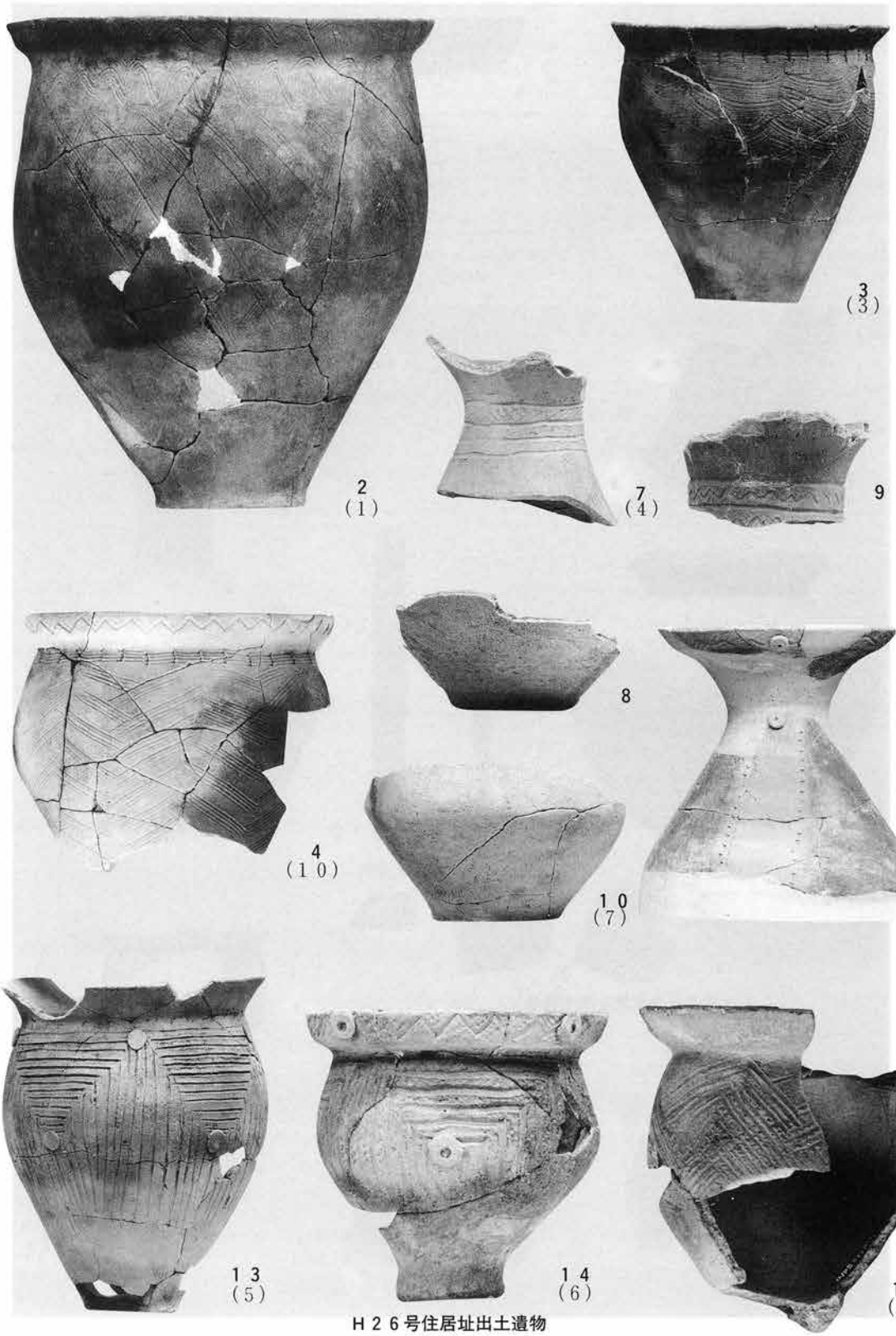

11
(1)
5
(5)
9
(9)
12
(3)
(6)
(7)
13
(10)
10
(4)



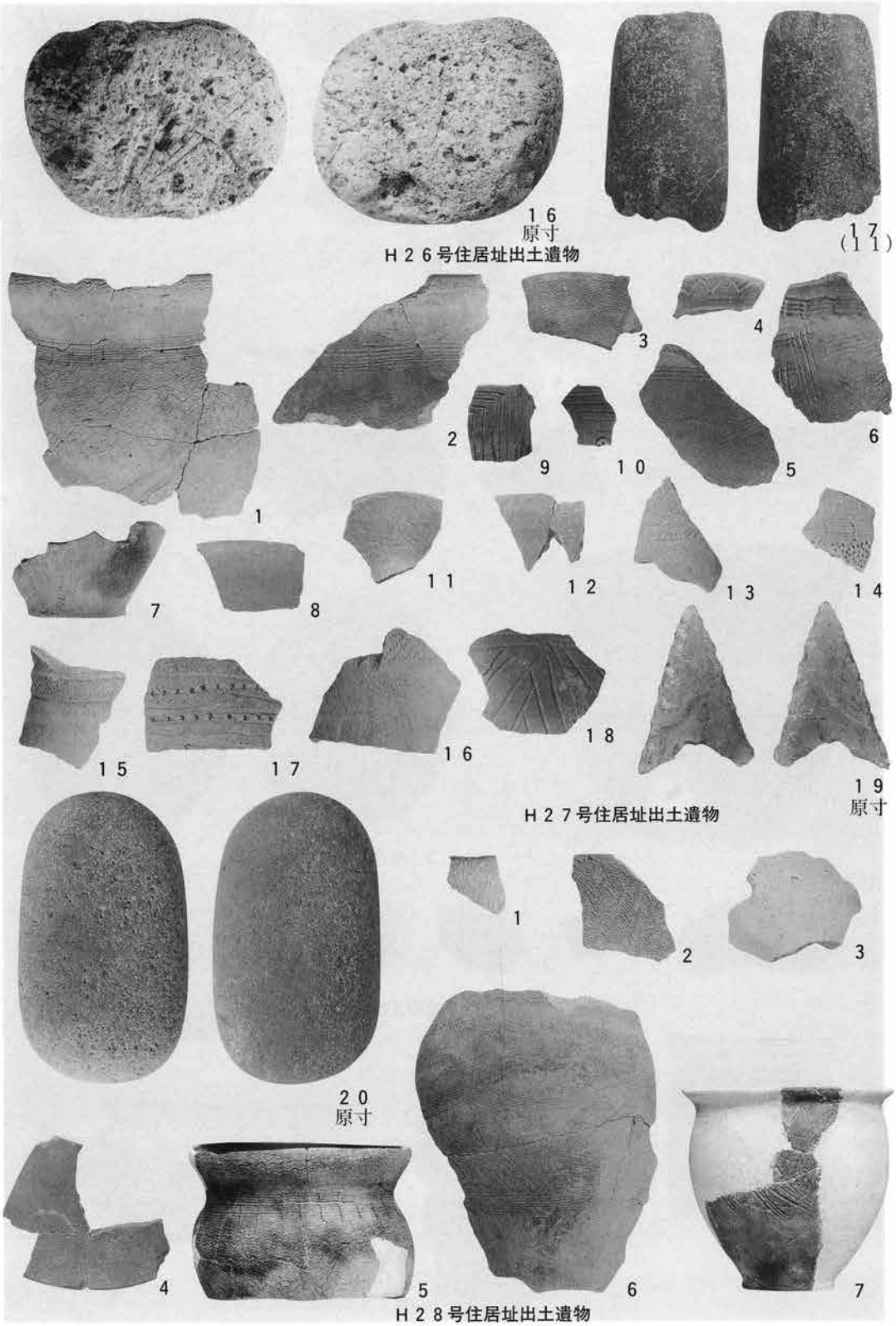
H１９号住居址出土遺物

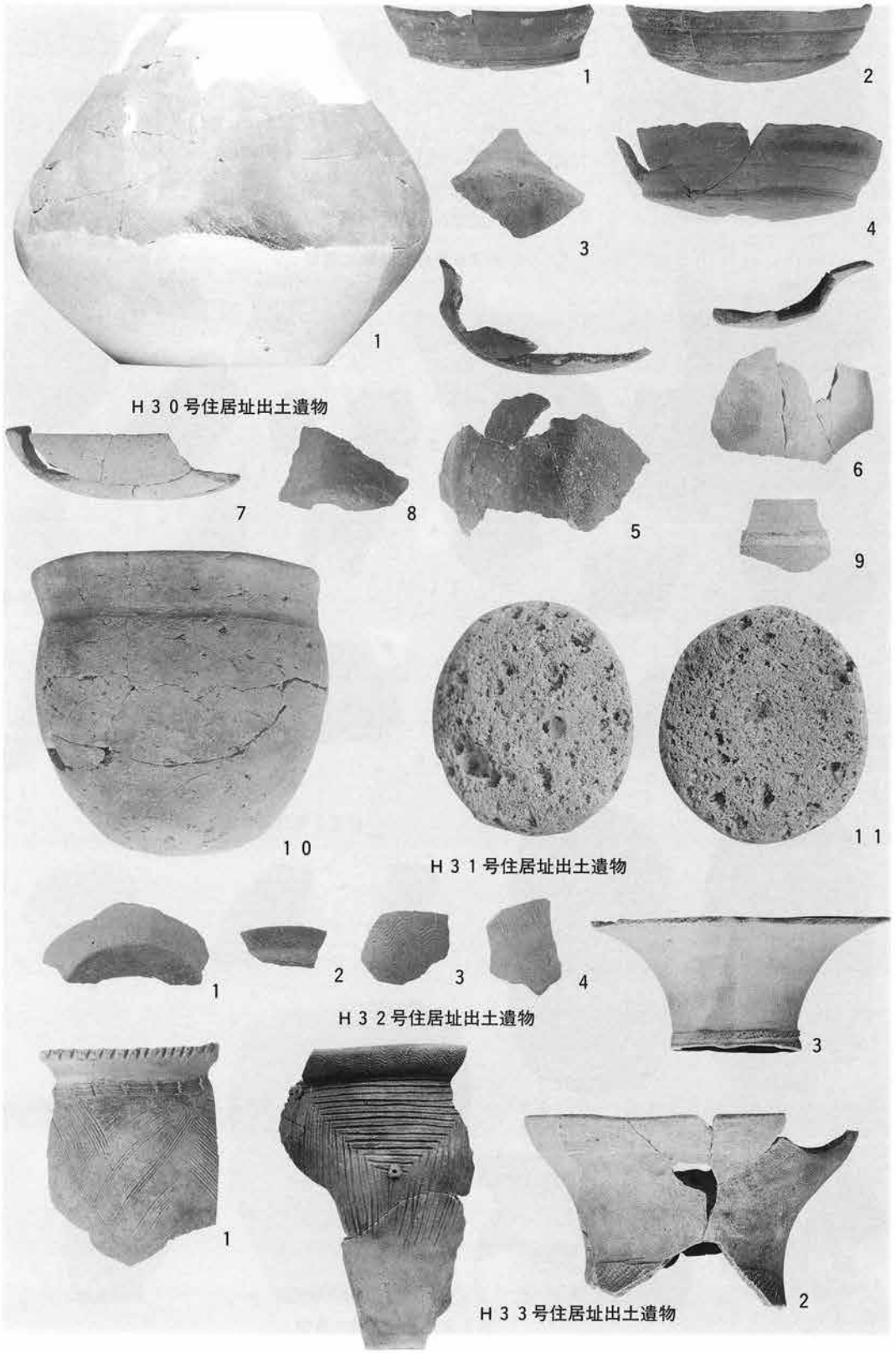

H２０号住居址出土遺物
5
1
2
(2)
3
(1)
4
1
(11)
5
H２２号住居址出土遺物
1
(1)
H２１号住居址出土遺物
H２３号住居址出土遺物
2
(2)
1
(1)

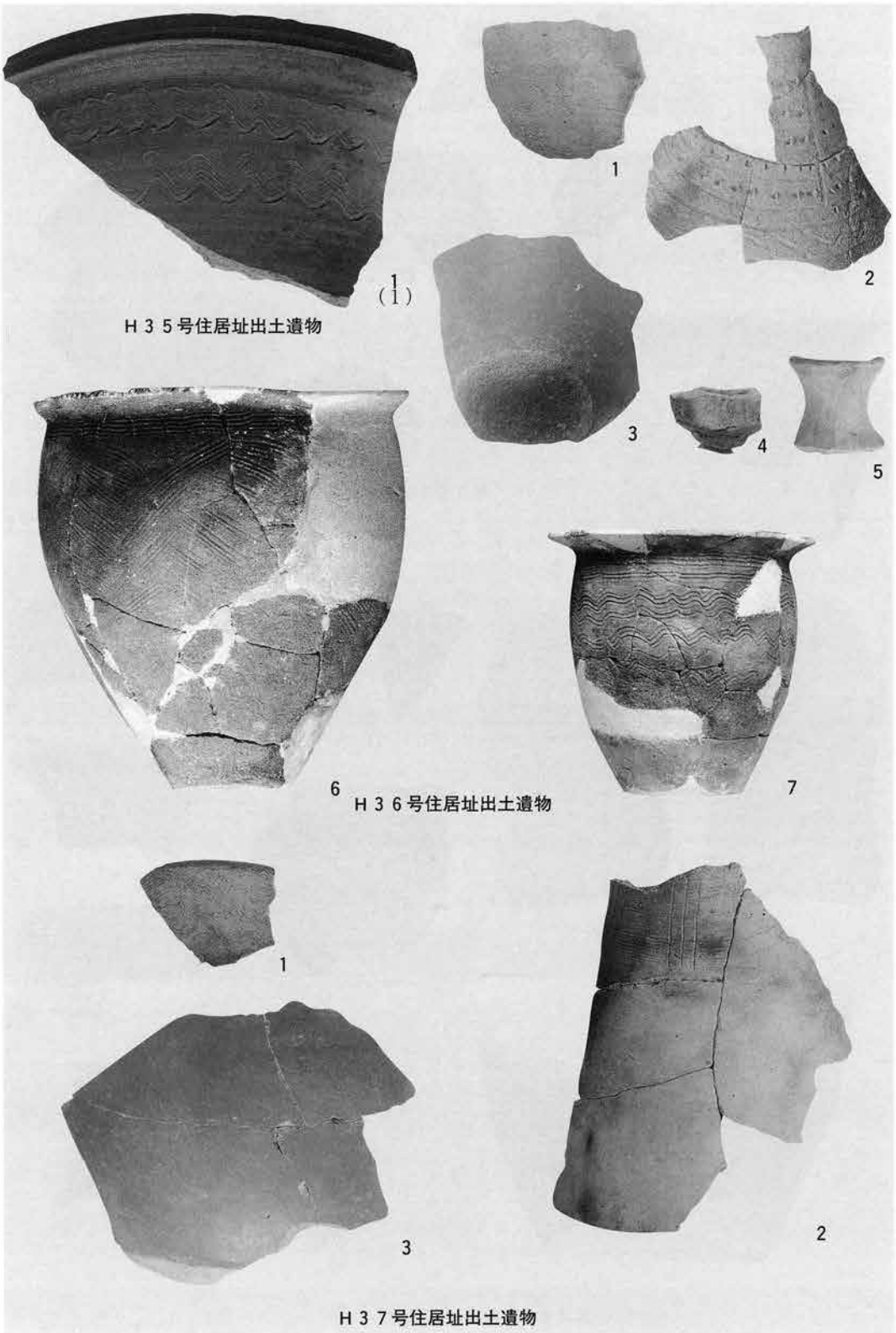

1
3
2
8
(3)
6
(4)
4
5
(5)
7
(2)
11
10
9
(1)
H24号住居址出土遺物
1
2
3
4
H25号住居址出土遺物
1
12
(2)
11
(6)
6
(8)



H26号住居址出土遺物


16
原寸
17
(11)
H26号住居址出土遺物
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
原寸
H27号住居址出土遺物
20
原寸
1
2
3
4
5
6
7
H28号住居址出土遺物

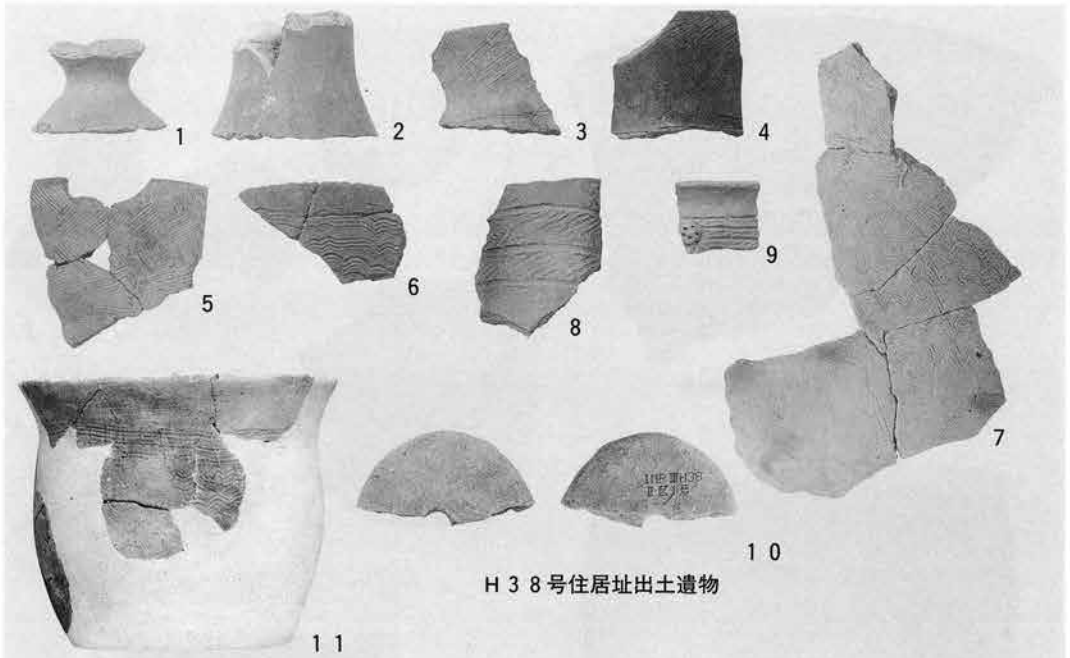

1
2
3
4
1
H３０号住居址出土遺物
7
8
5
6
9
１０
１１
H３１号住居址出土遺物
1
2
3
4
H３２号住居址出土遺物
3
1
2
H３３号住居址出土遺物



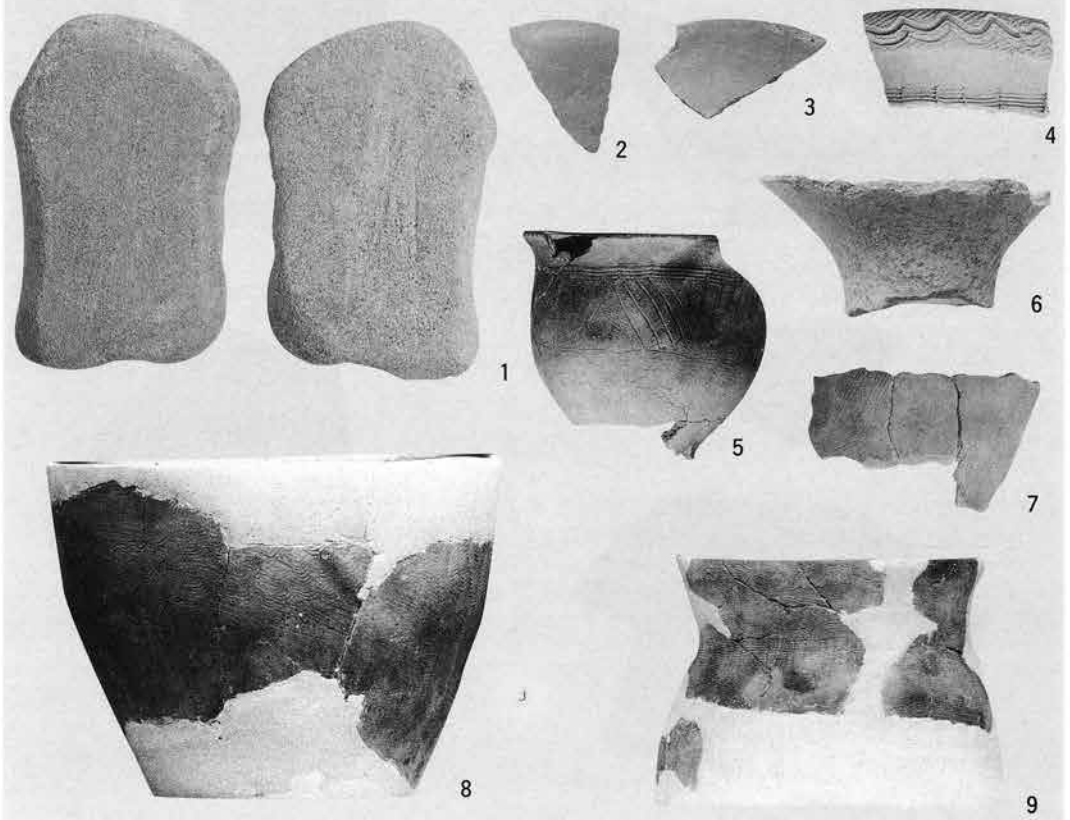
H３５号住居址出土遺物

H３６号住居址出土遺物

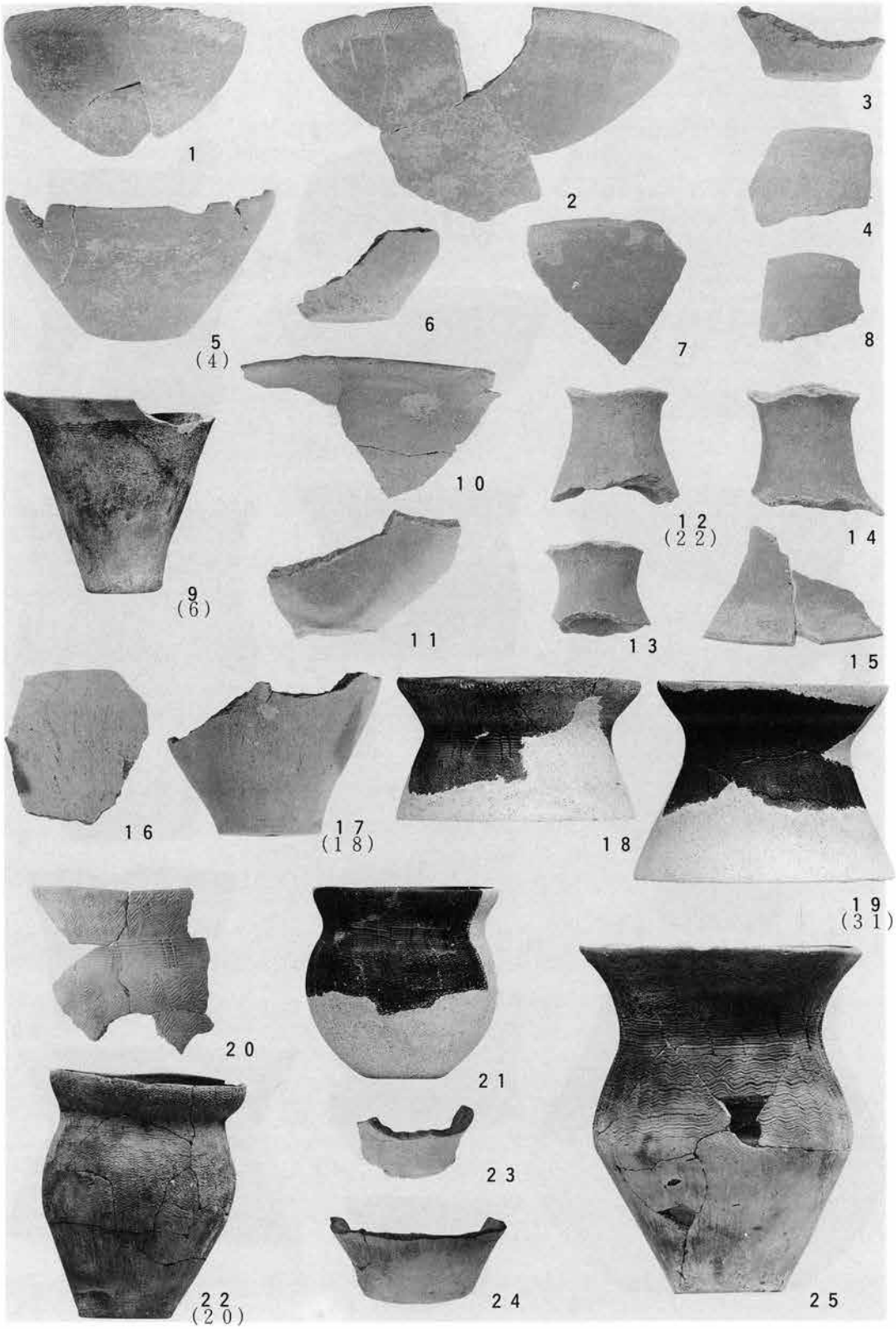
H３７号住居址出土遺物

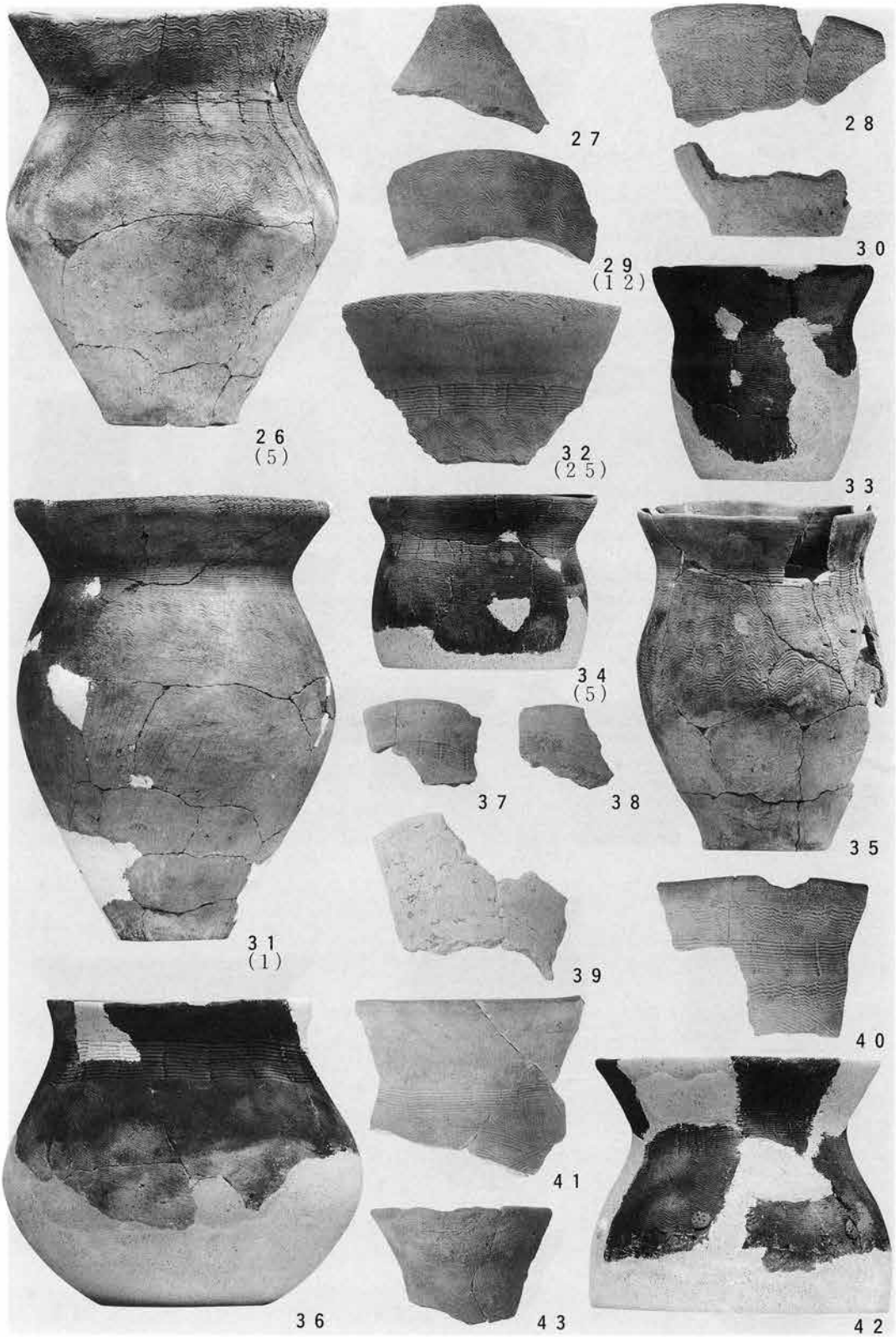


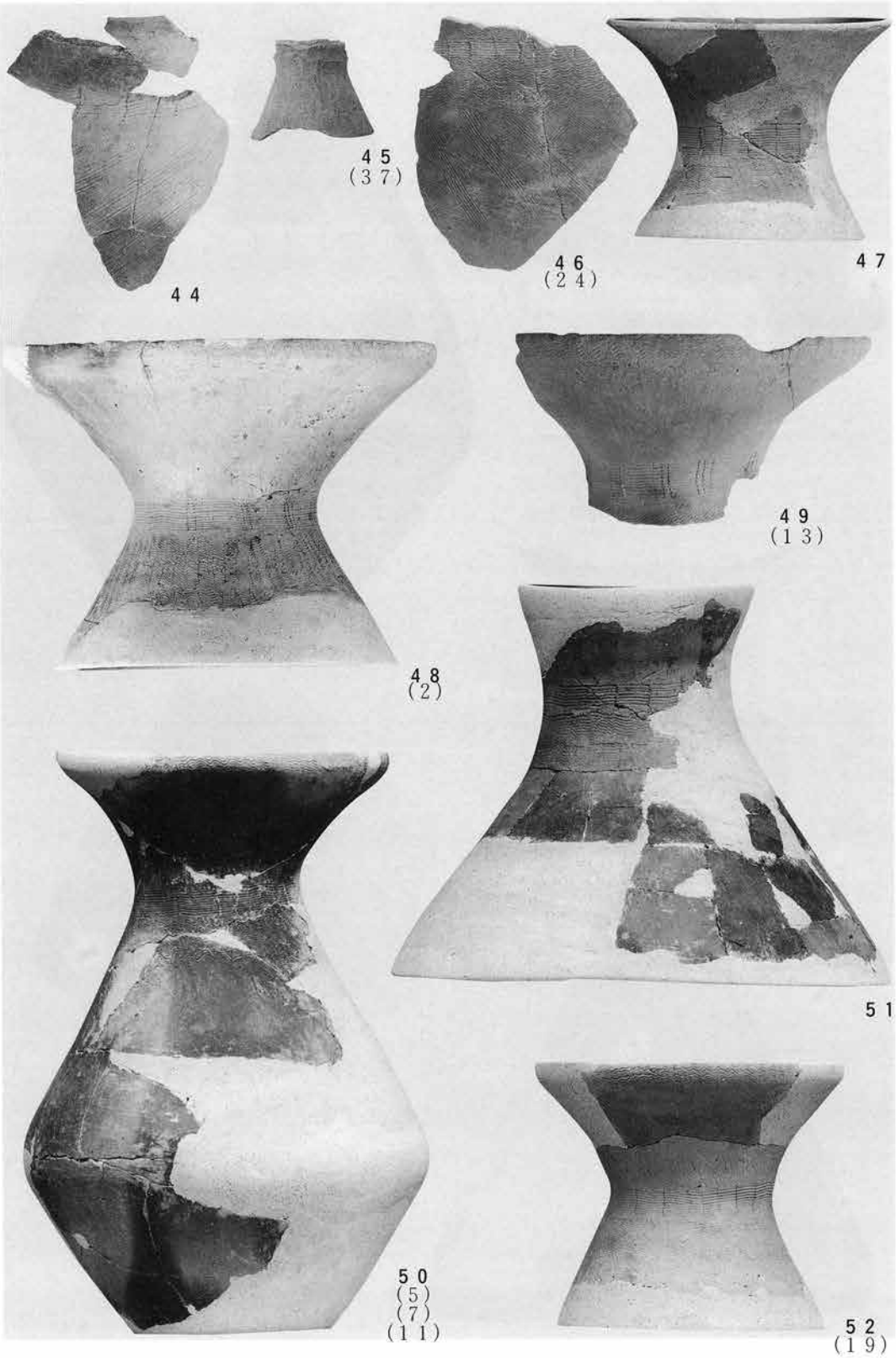
H３８号住居址出土遺物

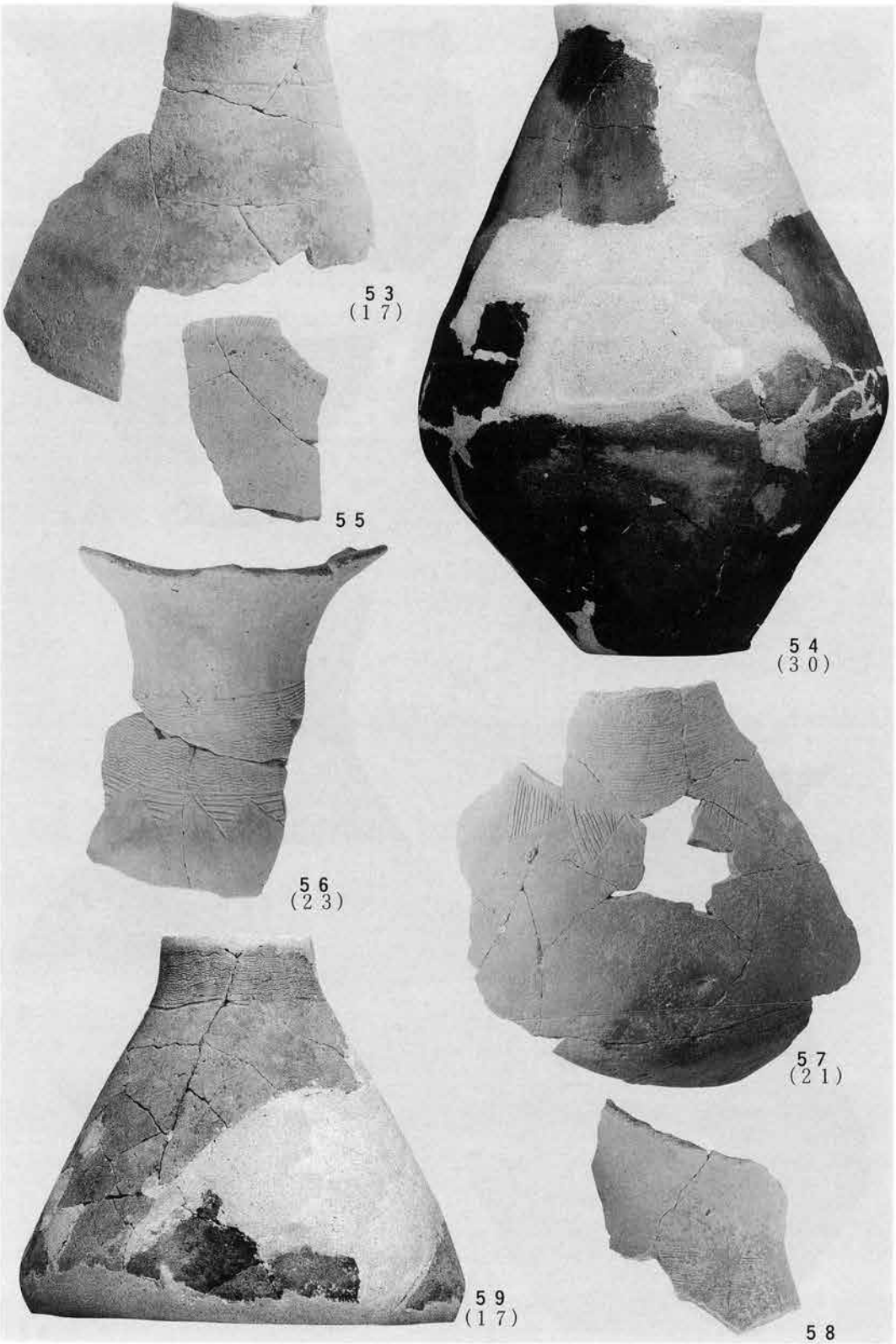


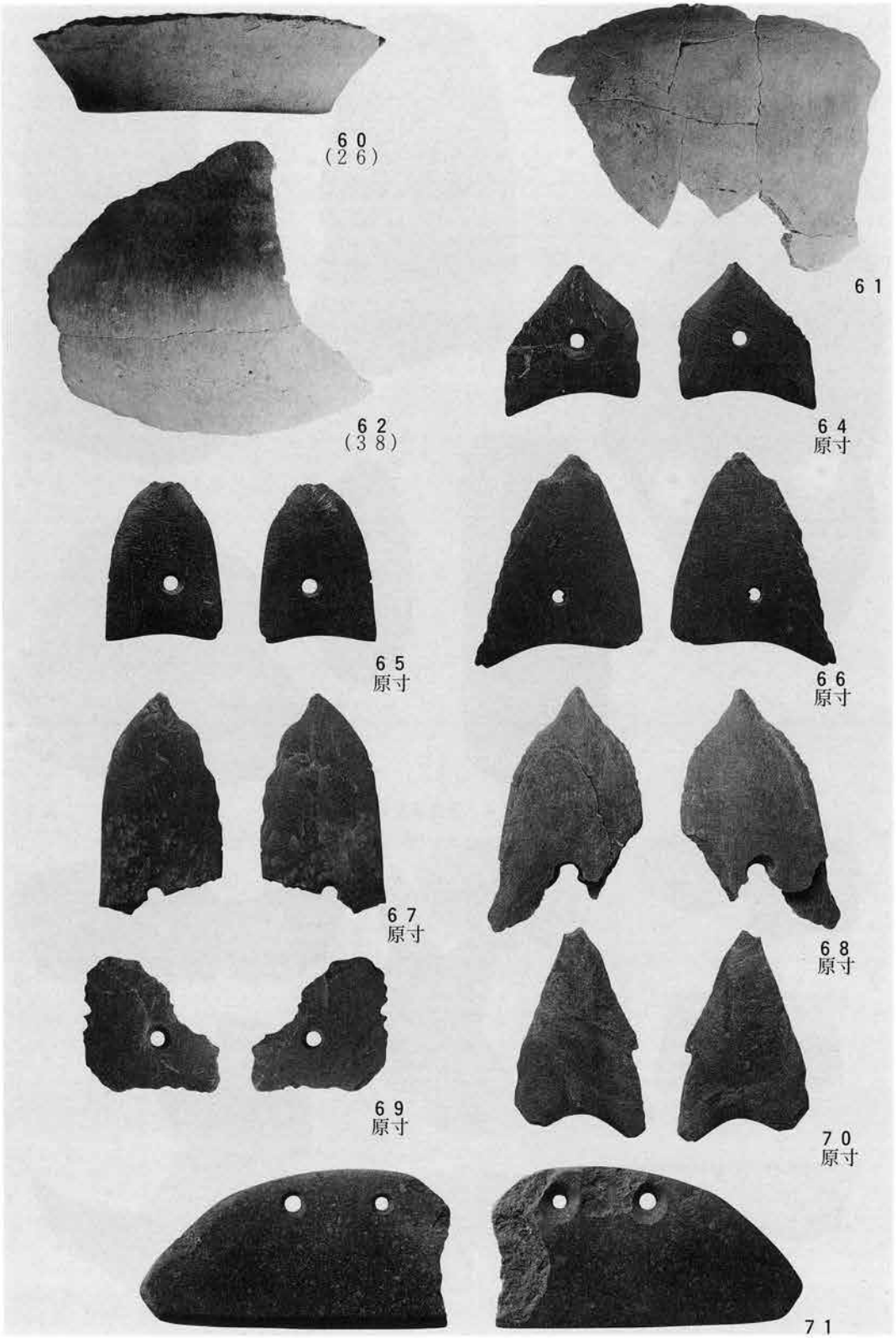
H４０号住居址出土遺物

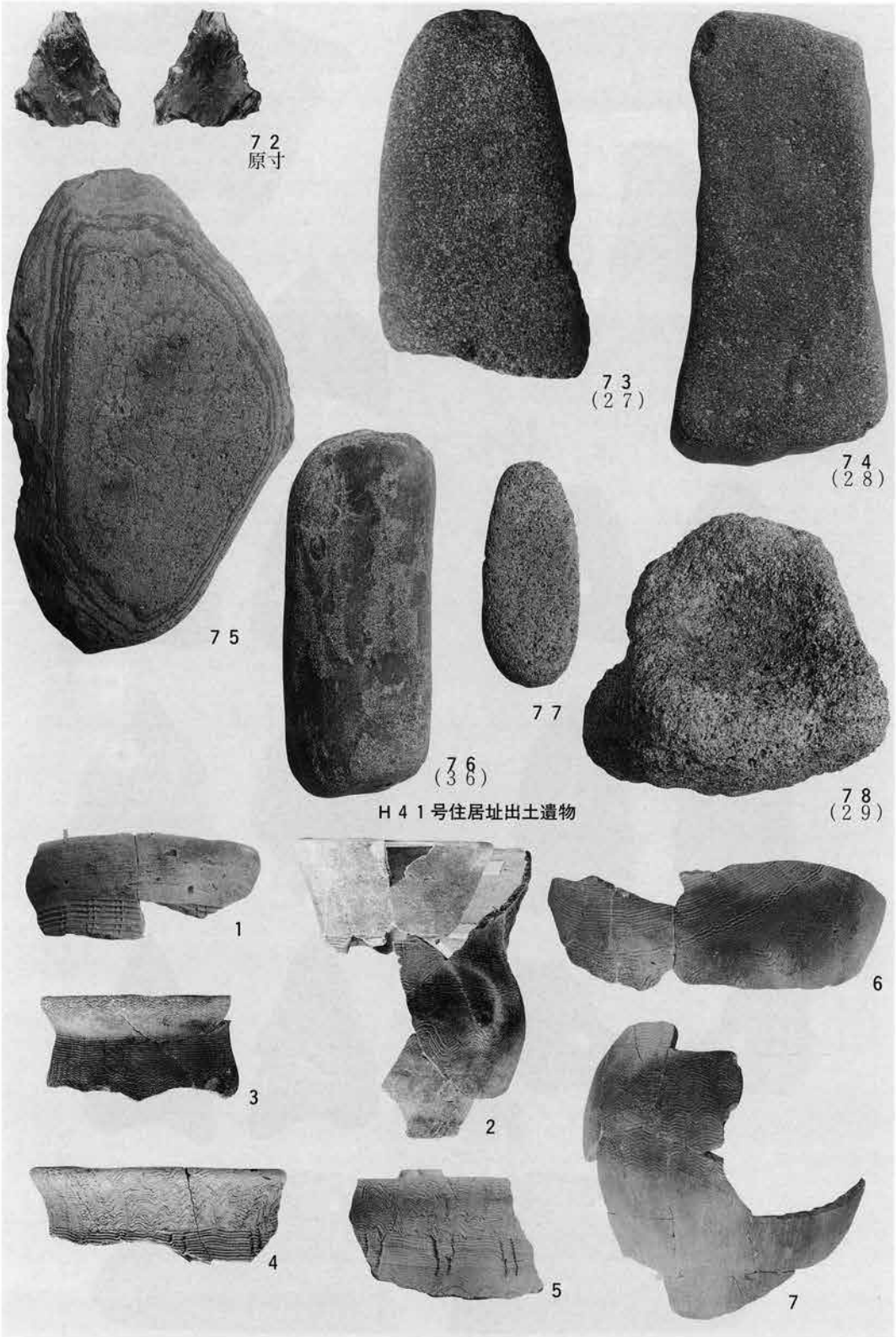

1
2
3
4
5
(4)
6
7
8
9
(6)
10
11
12
(22)
13
14
15
16
17
(18)
18
19
(31)
20
21
22
(20)
23
24
25

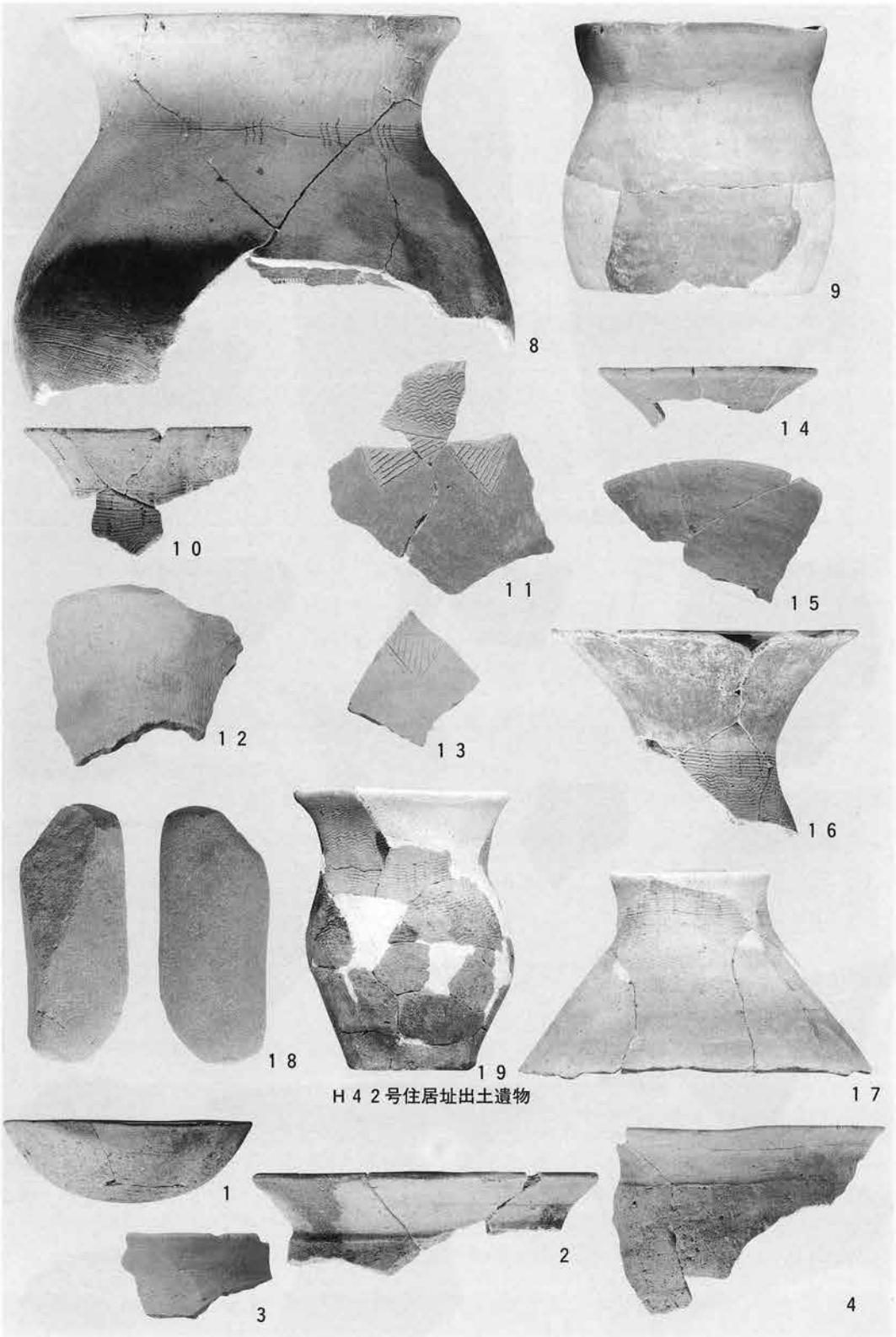

26
(5)
27
28
29
(12)
30
32
(25)
33
31
(1)
34
(5)
35
37
38
39
40
36
41
43
42


44
45
(37)
46
(24)
47
48
(2)
49
(13)
50
(5)
(7)
(11)
51
52
(19)

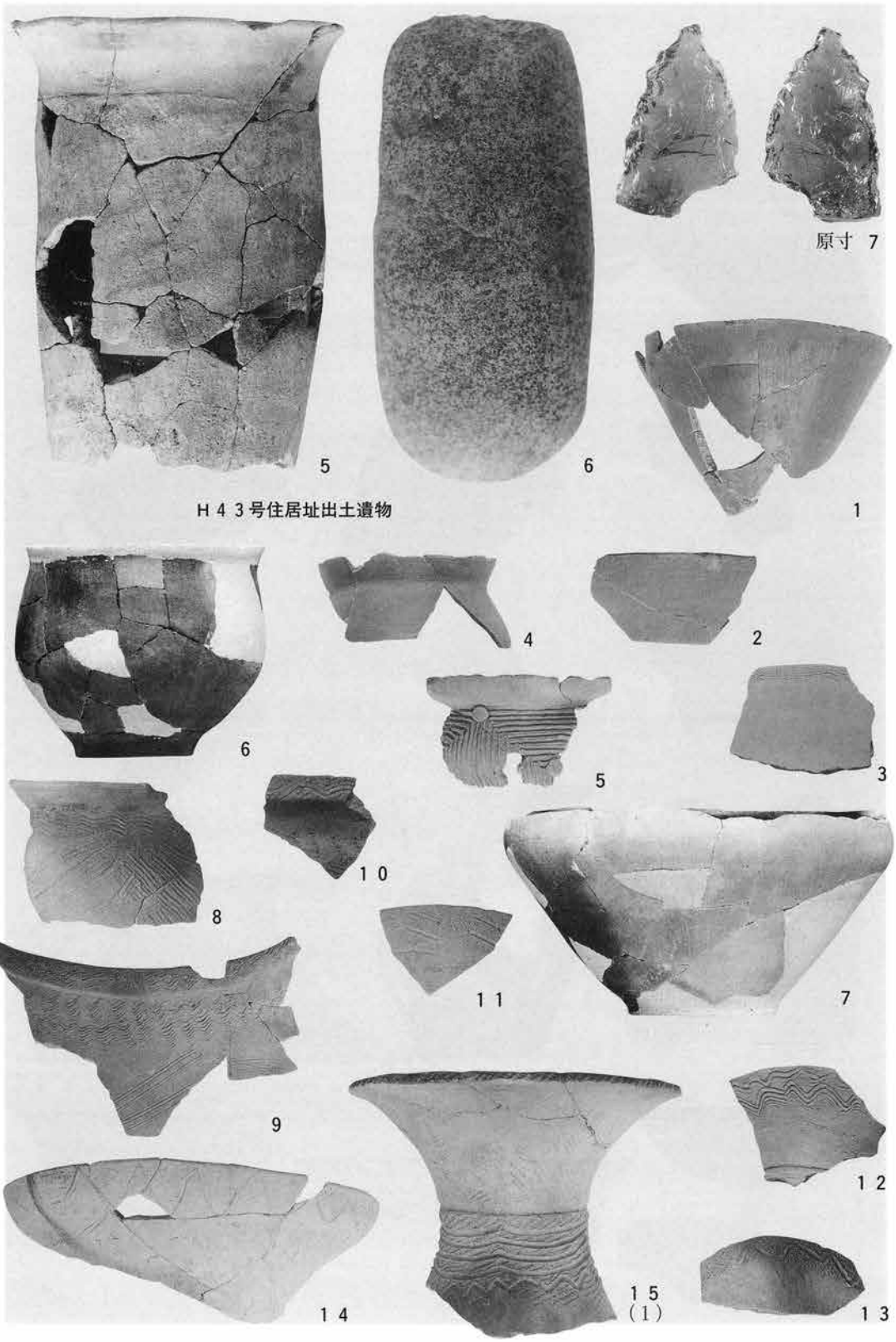

53
(17)
55
54
(30)
56
(23)
57
(21)
59
(17)
58

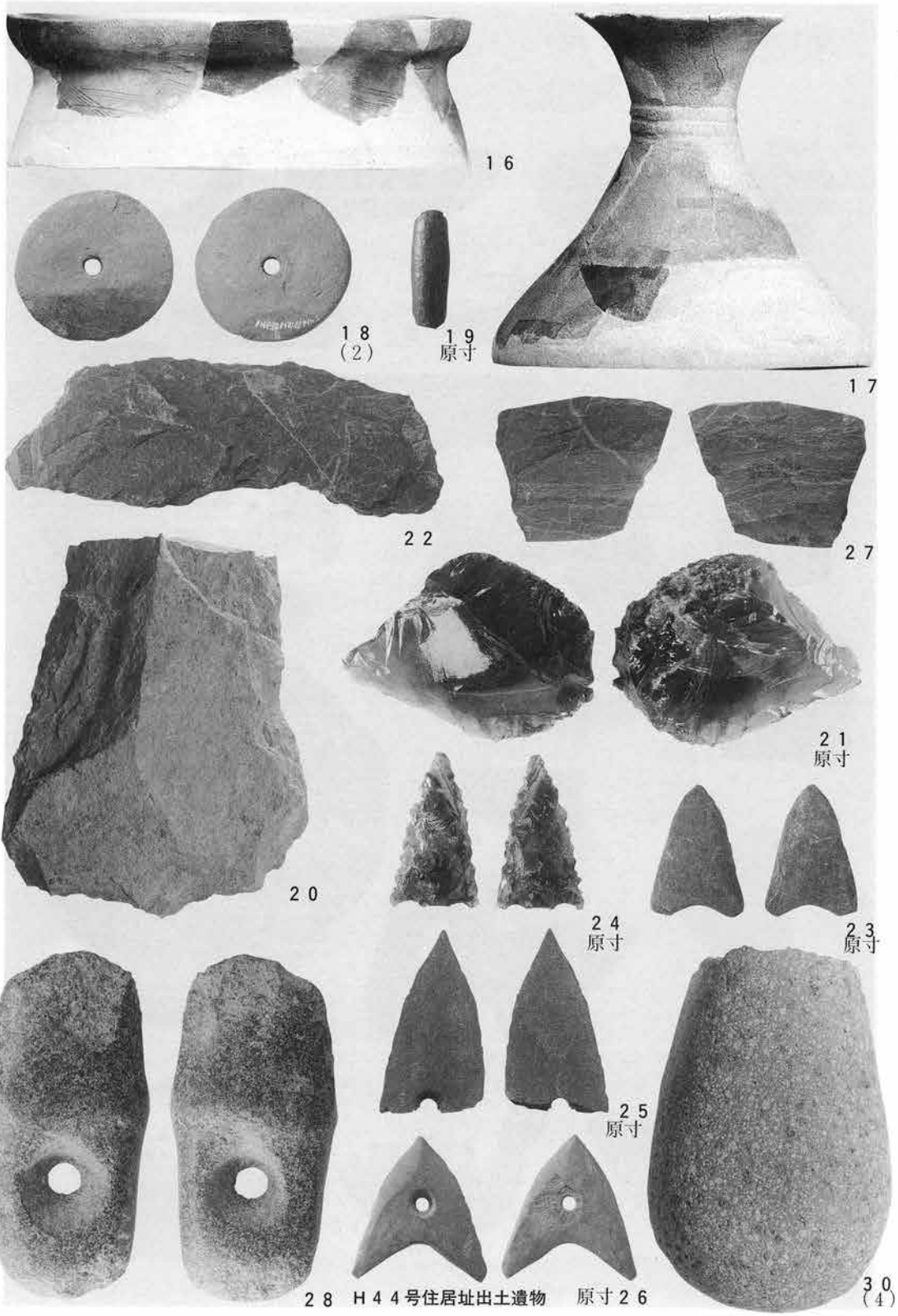

60
(26)
61
62
(38)
64
原寸
65
原寸
66
原寸
67
原寸
68
原寸
69
原寸
70
原寸
71


72
原寸
73
(27)
74
(28)
75
76
(36)
77
78
(29)
H41号住居址出土遺物
1
2
3
4
5
6
7

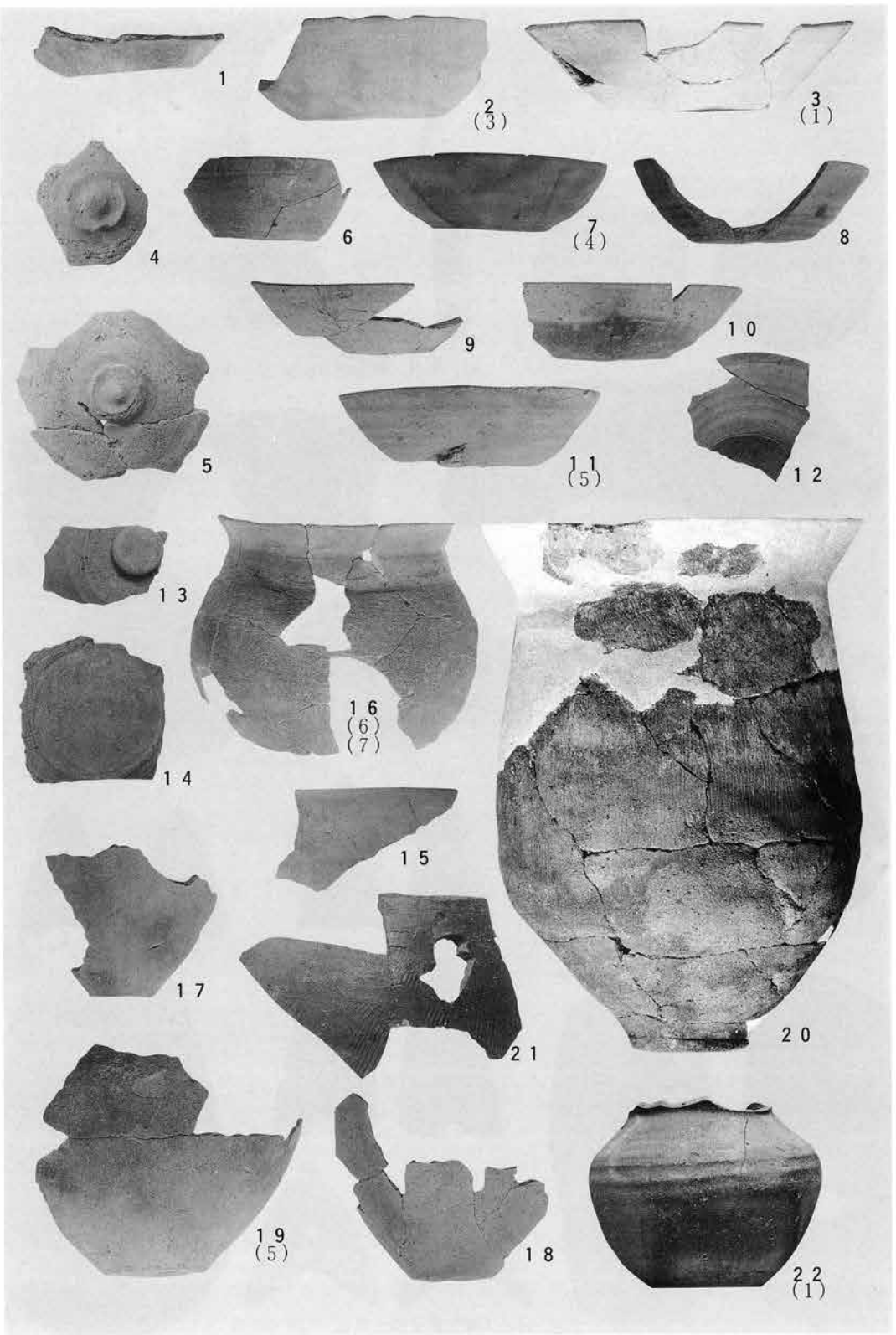


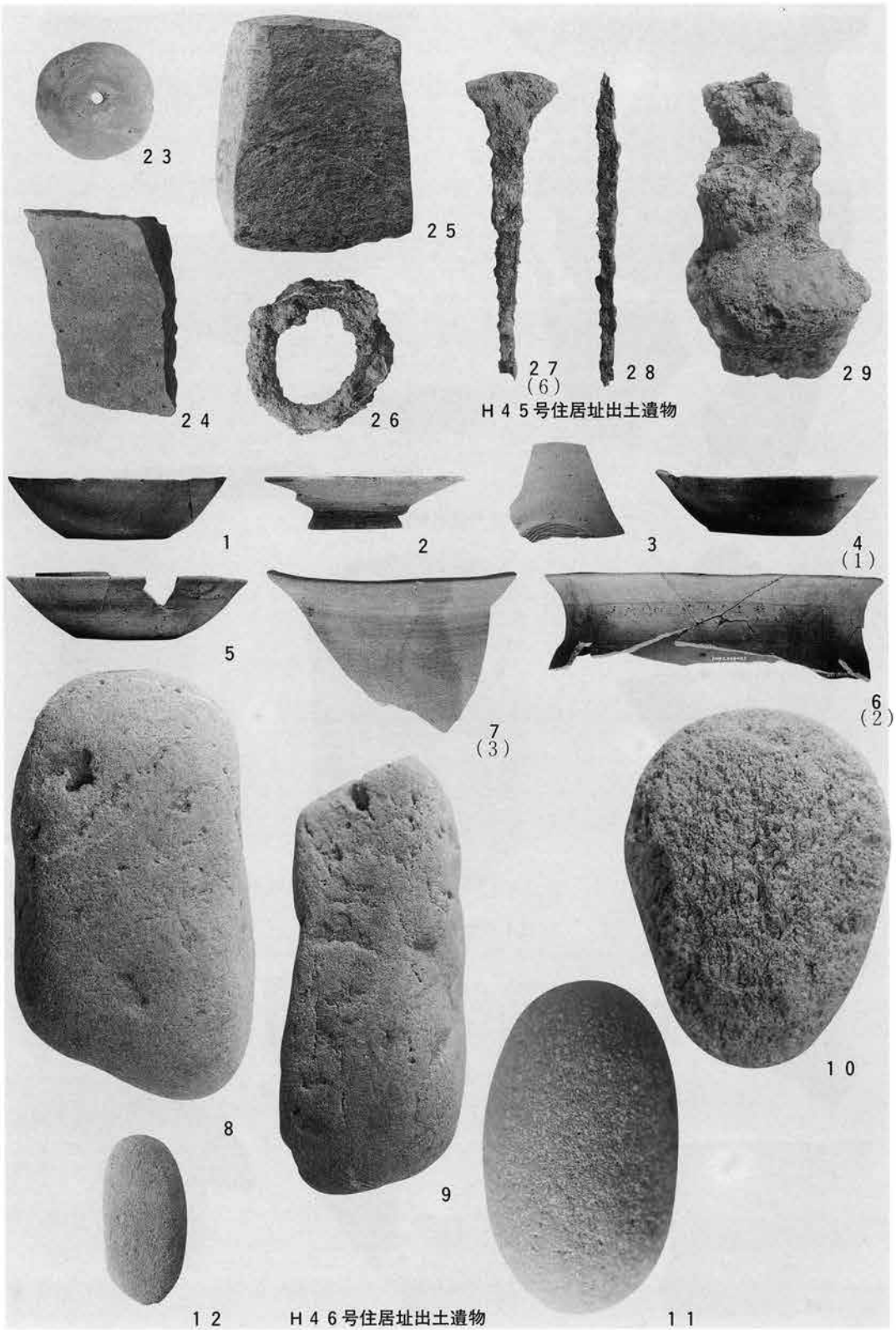
H４２号住居址出土遺物


原寸　7
5
6
1
H４３号住居址出土遺物
4
2
6
5
3
１０
8
１１
7
9
１２
１４
１５
(1)
１３

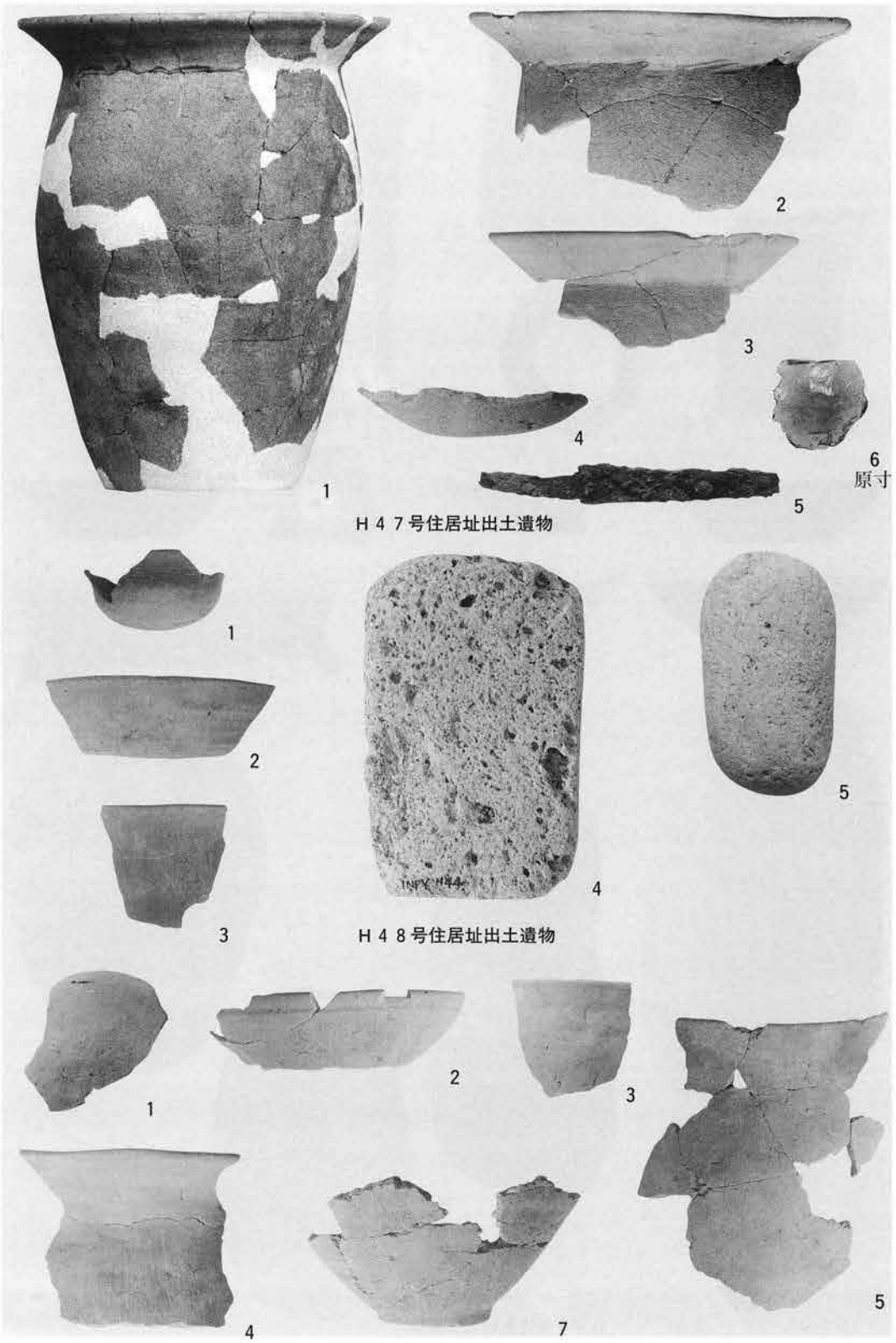


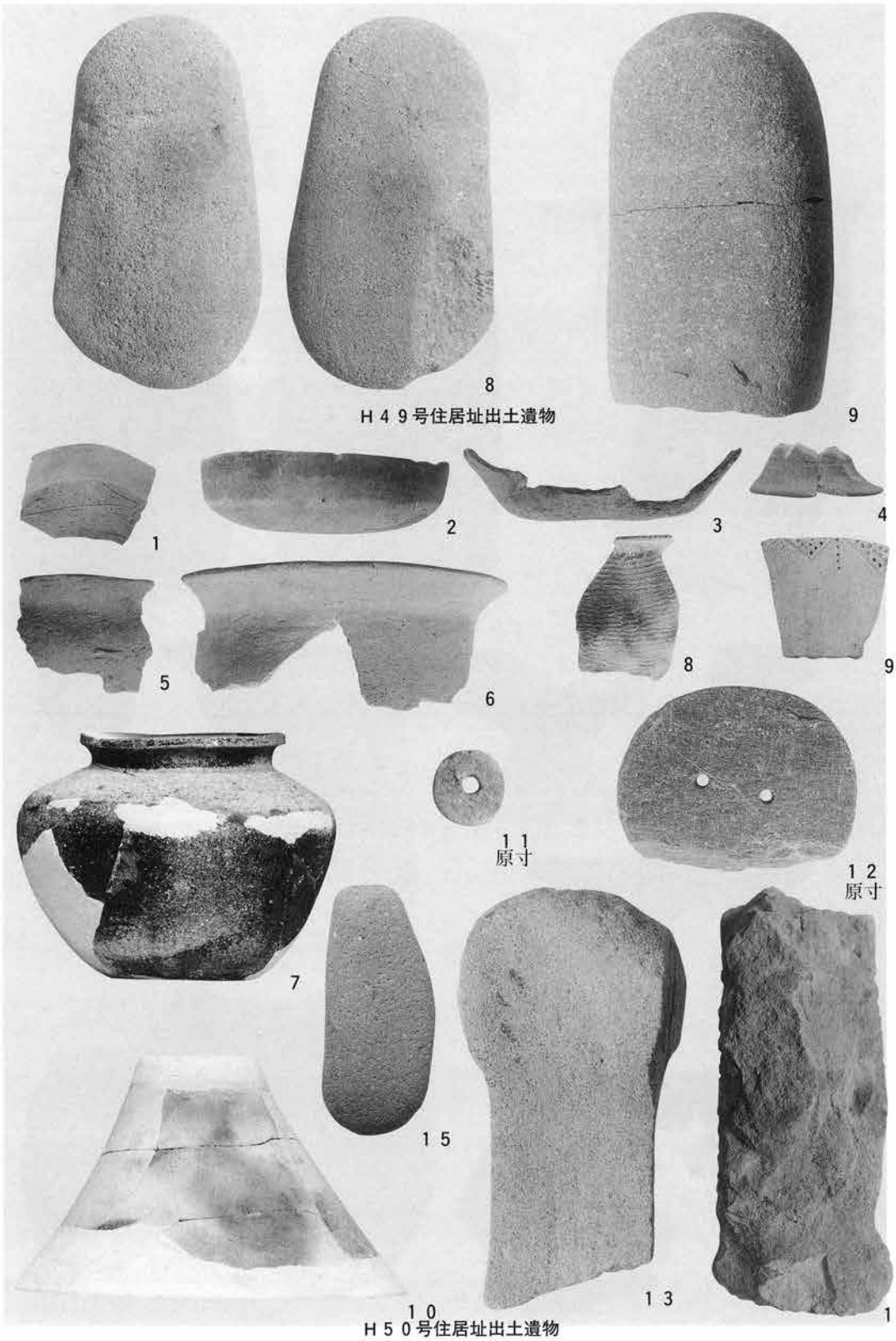
H44号住居址出土遺物　原寸26


1
2
(3)
3
(1)
4
6
7
(4)
8
9
10
5
11
(5)
12
13
16
(6)
(7)
14
15
17
21
20
19
(5)
18
22
(1)


23
25
24
26
27
(6)
28
29
H45号住居址出土遺物
1
2
3
4
(1)
5
6
(2)
7
(3)
8
9
10
12
H46号住居址出土遺物
11

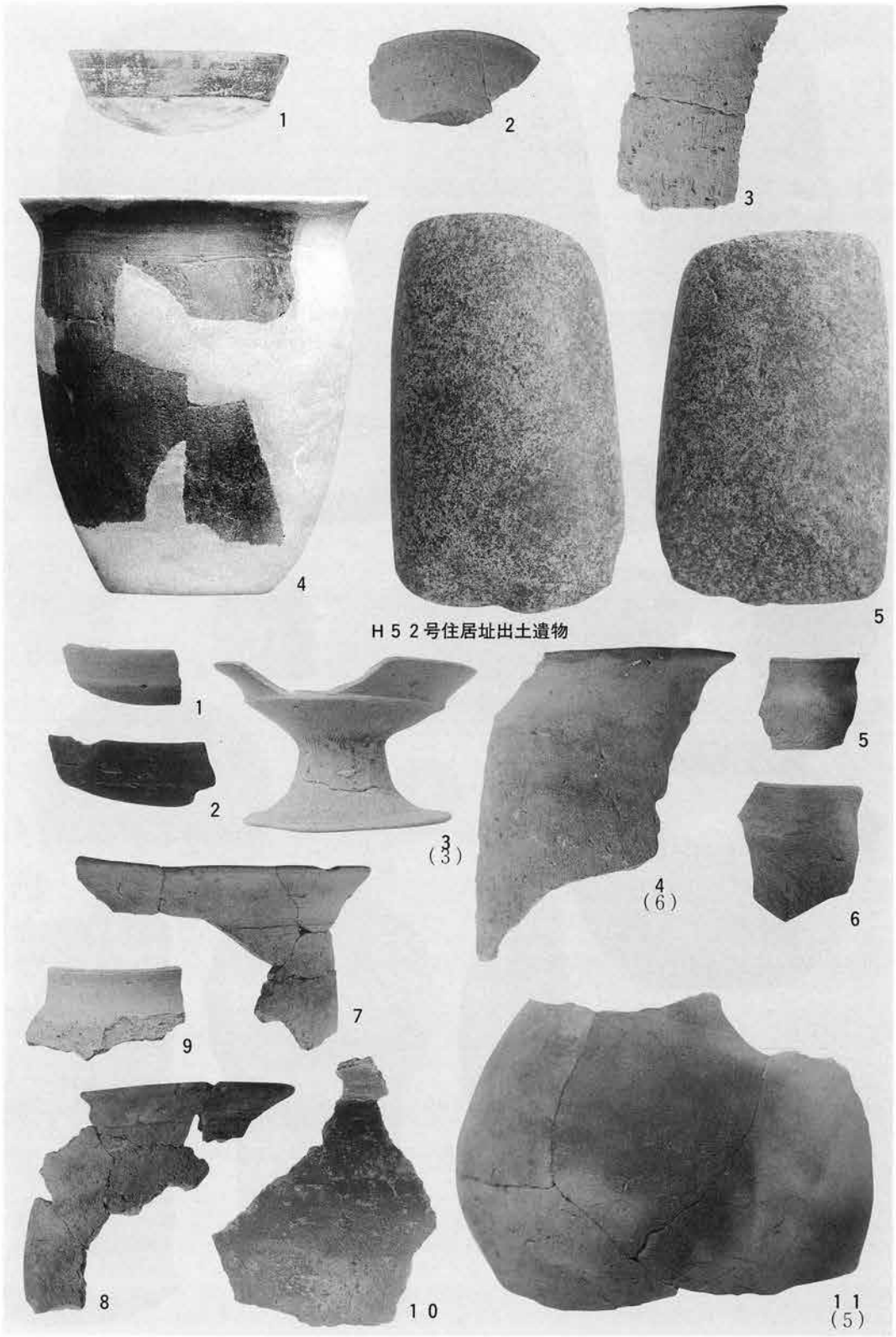
図版　百二十八

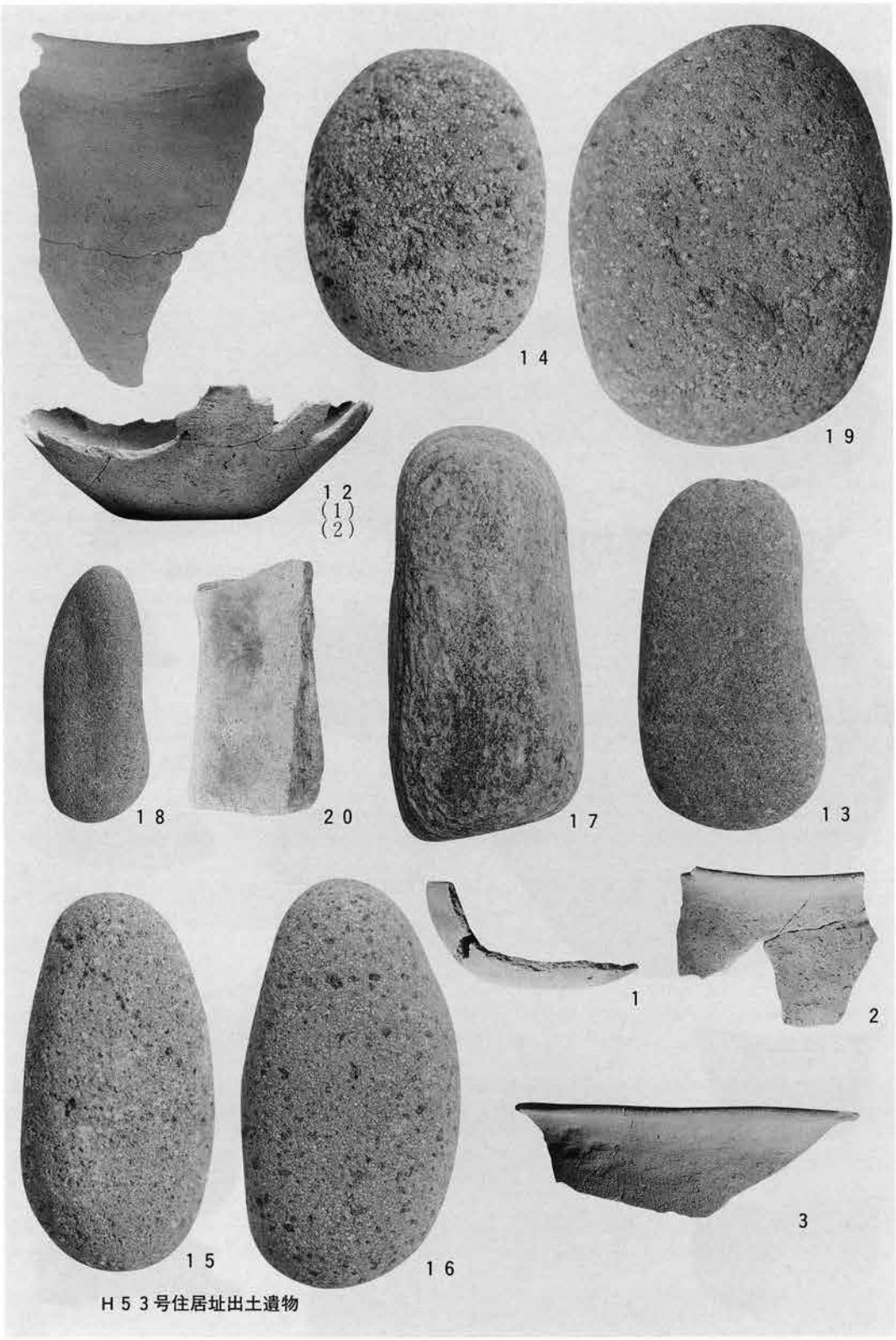




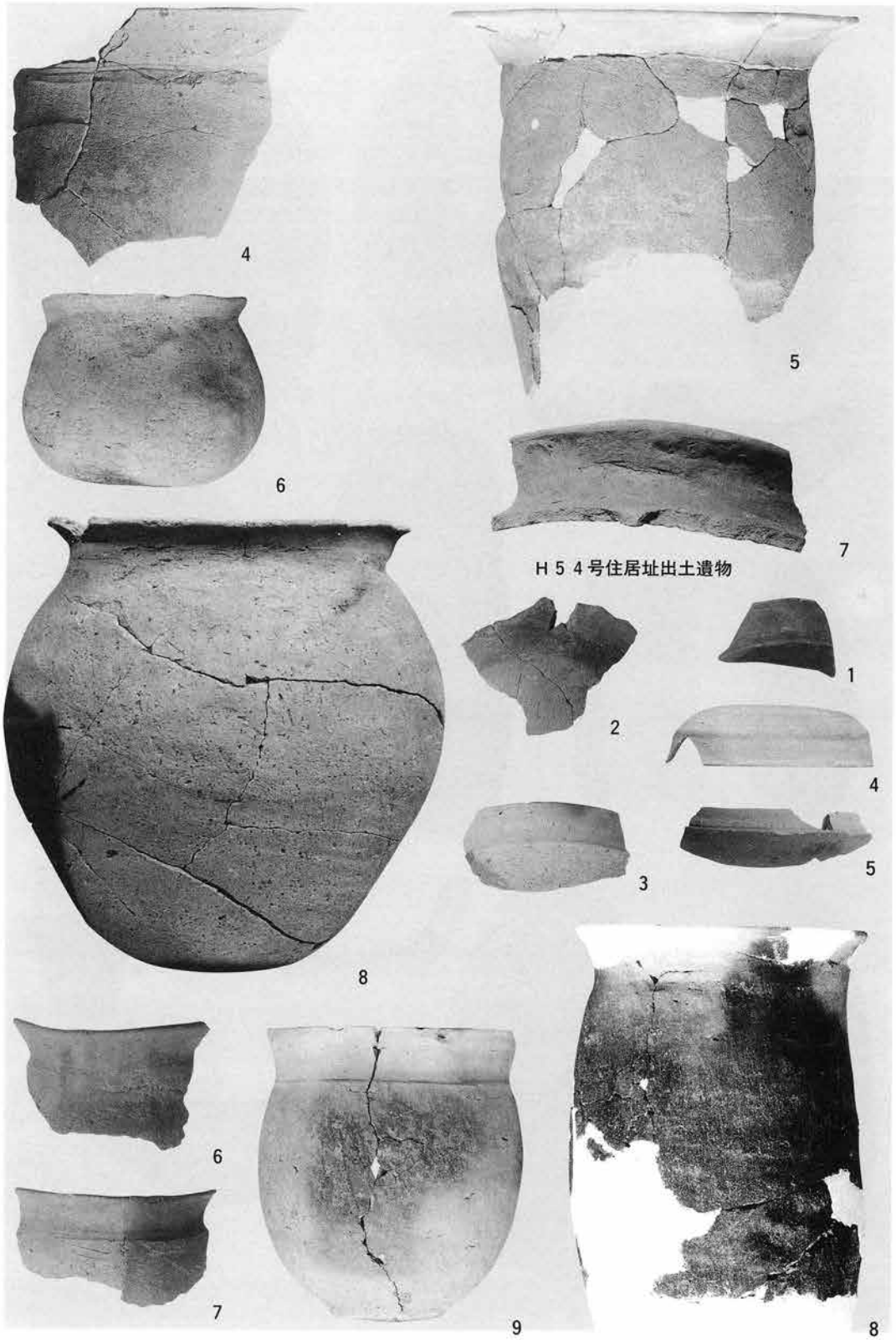
H４９号住居址出土遺物

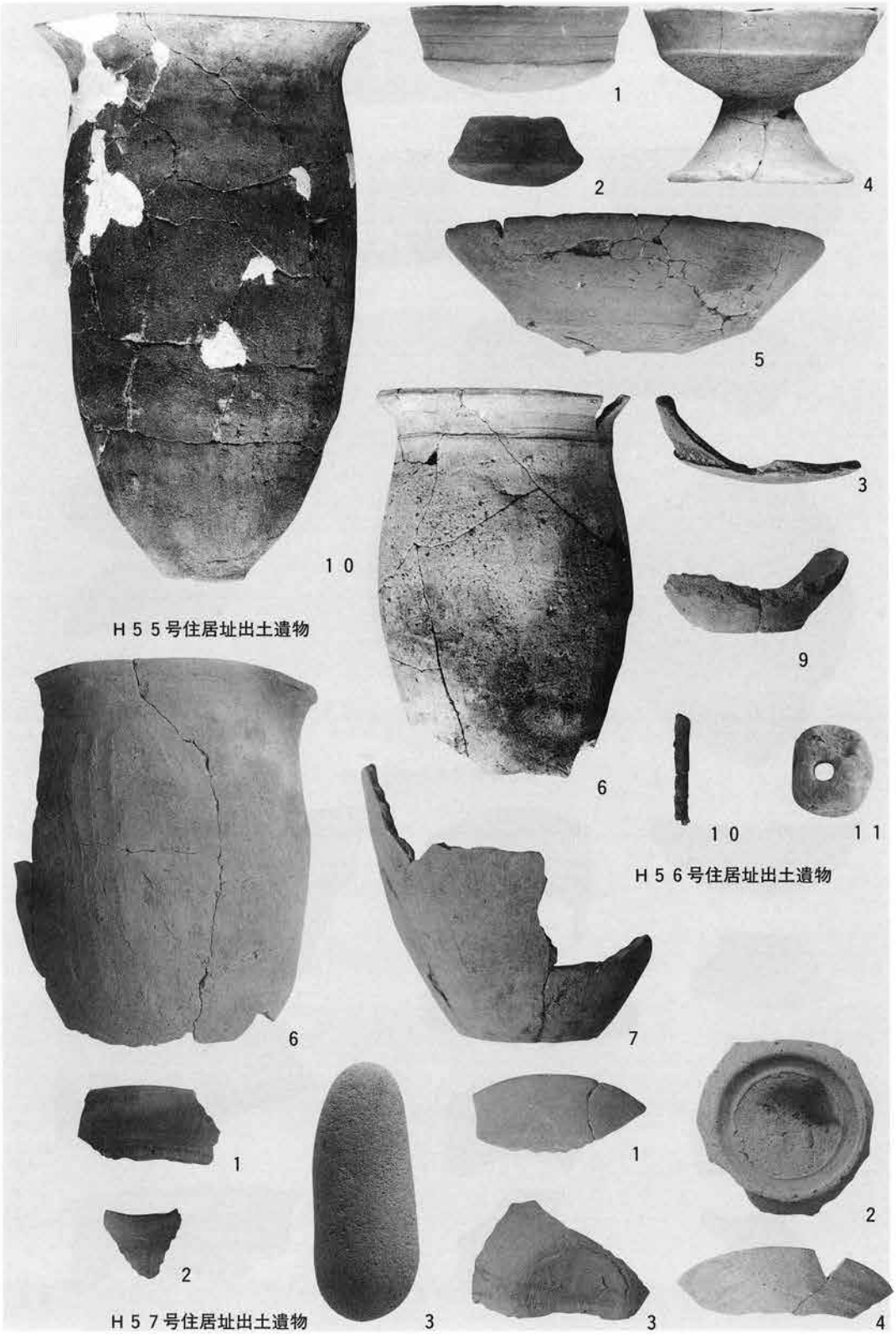
H５０号住居址出土遺物

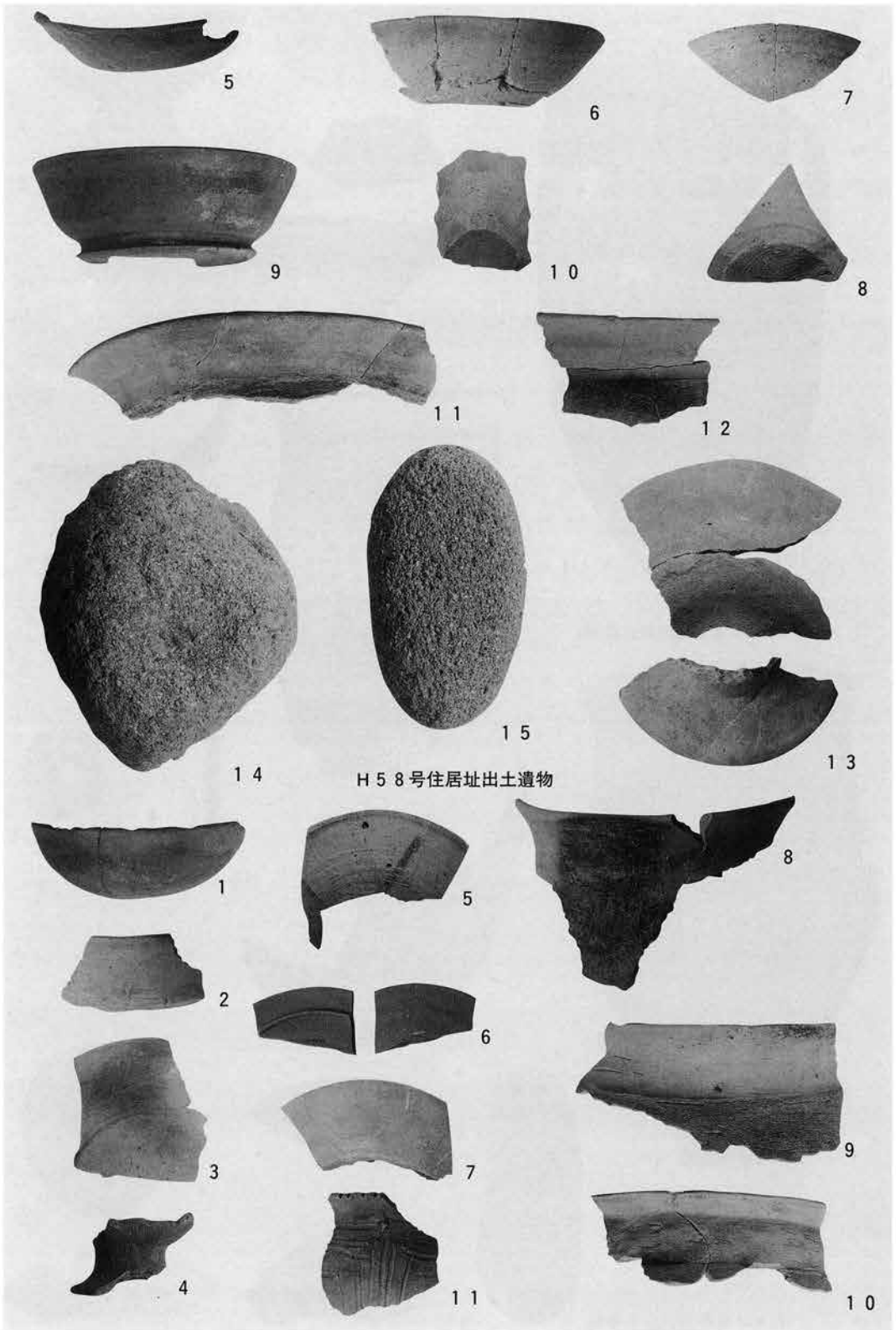

1
2
3
4
5
H５２号住居址出土遺物
1
2
3
(3)
4
(6)
5
6
7
9
8
10
11
(5)



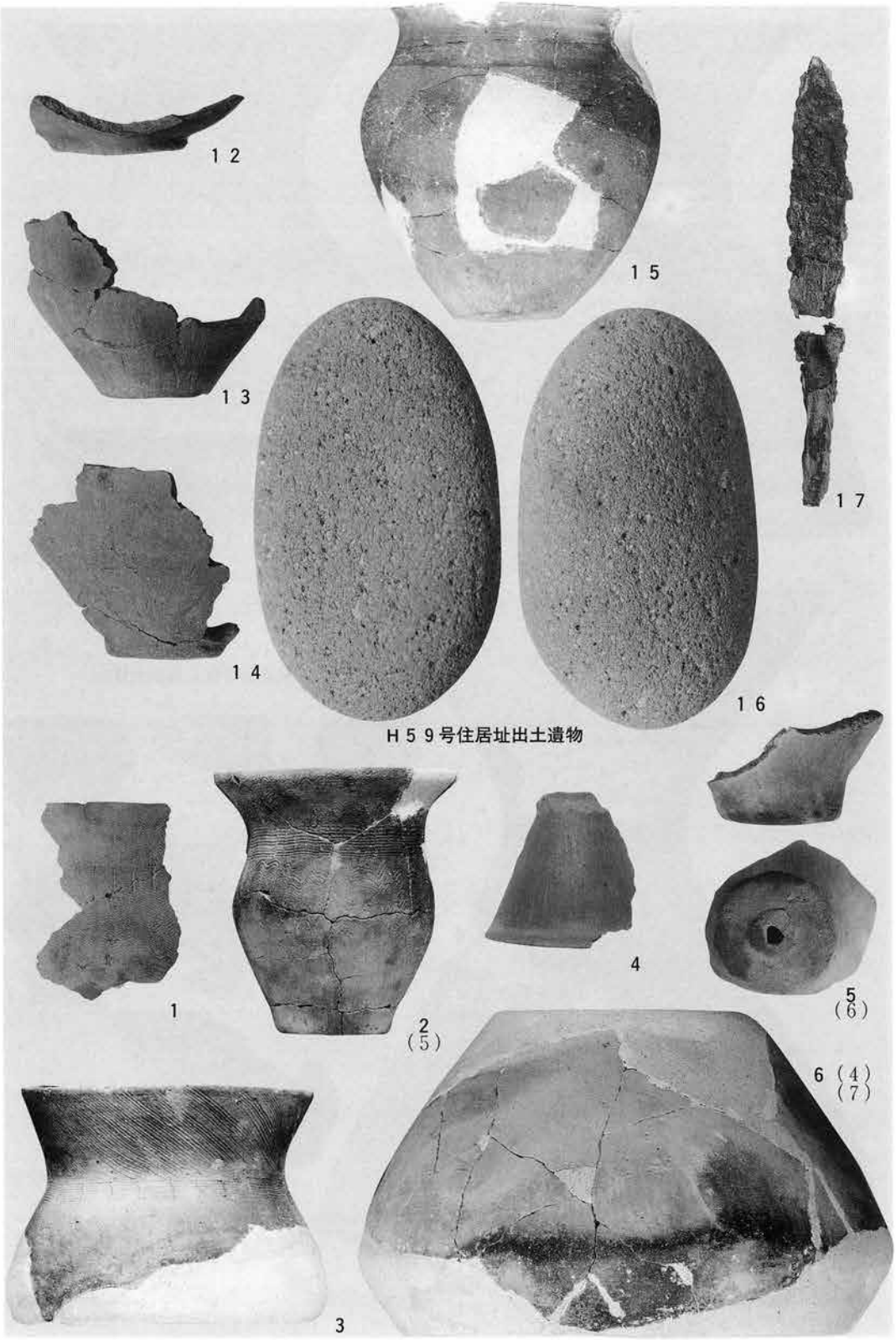
H５３号住居址出土遺物

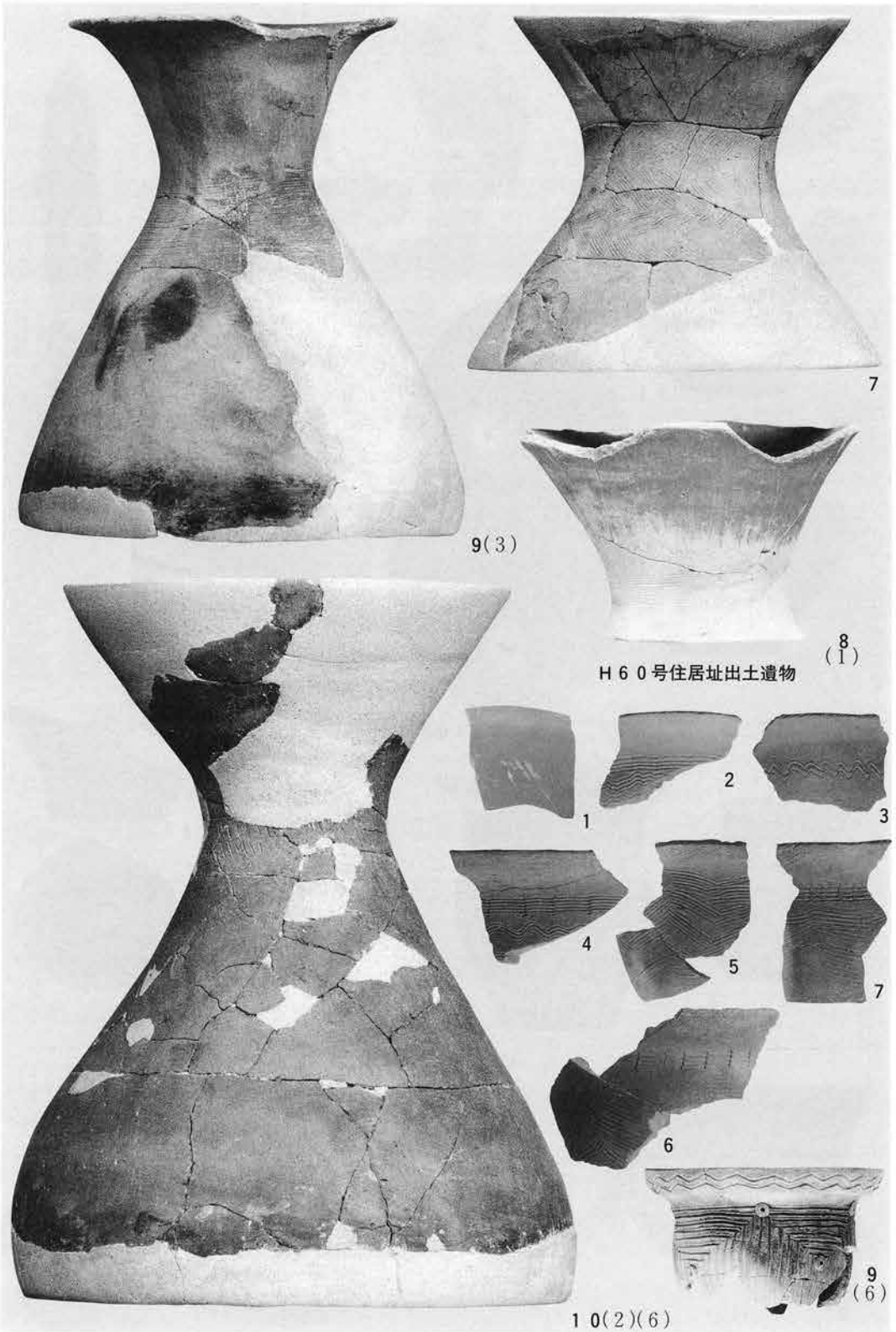

4
5
6
7
H５４号住居址出土遺物
1
2
4
3
5
8
6
7
9
8

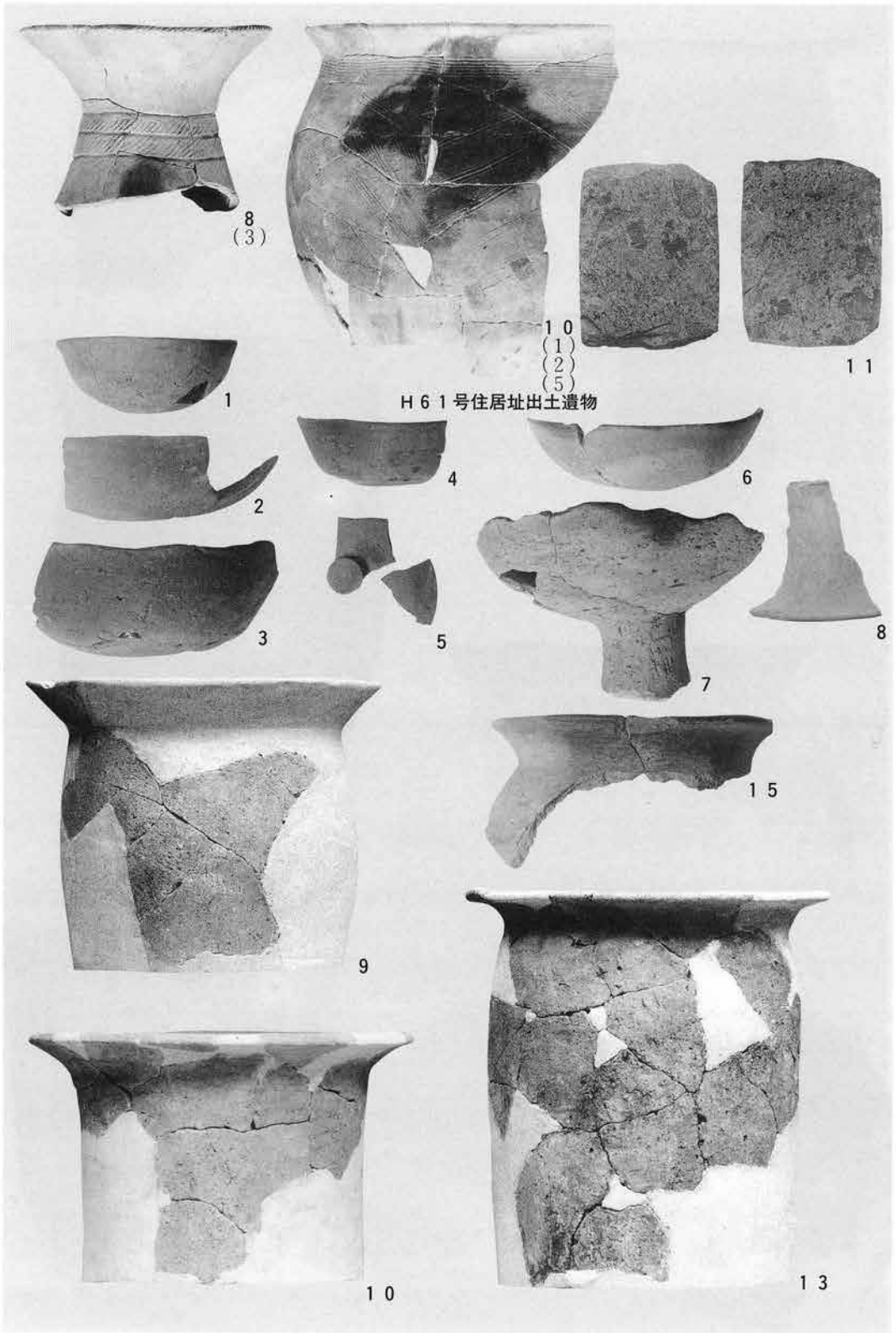

1
2
4
5
10
3
9
6
H５５号住居址出土遺物
10
11
H５６号住居址出土遺物
6
7
1
2
3
1
2
3
4
H５７号住居址出土遺物



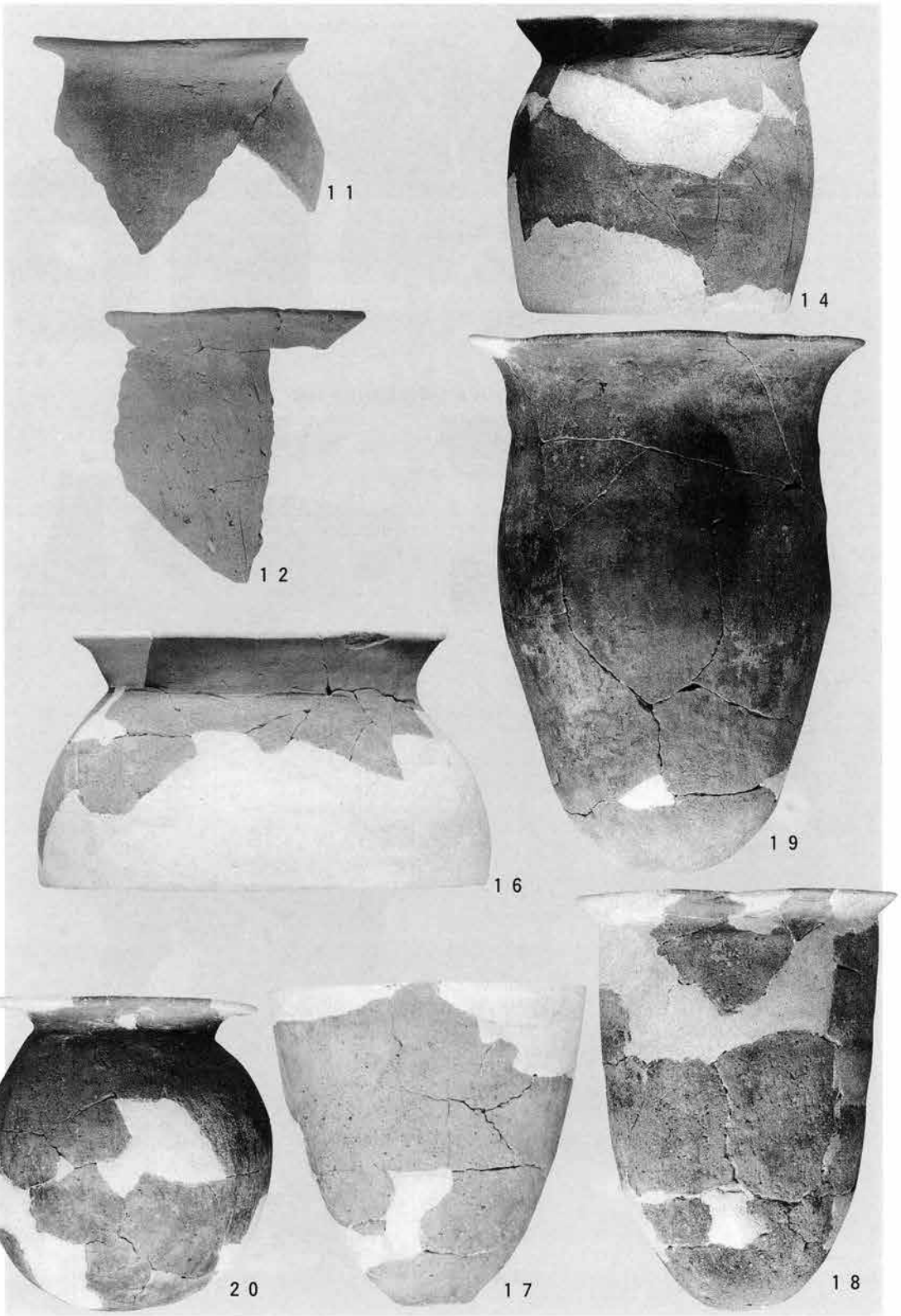
H５８号住居址出土遺物

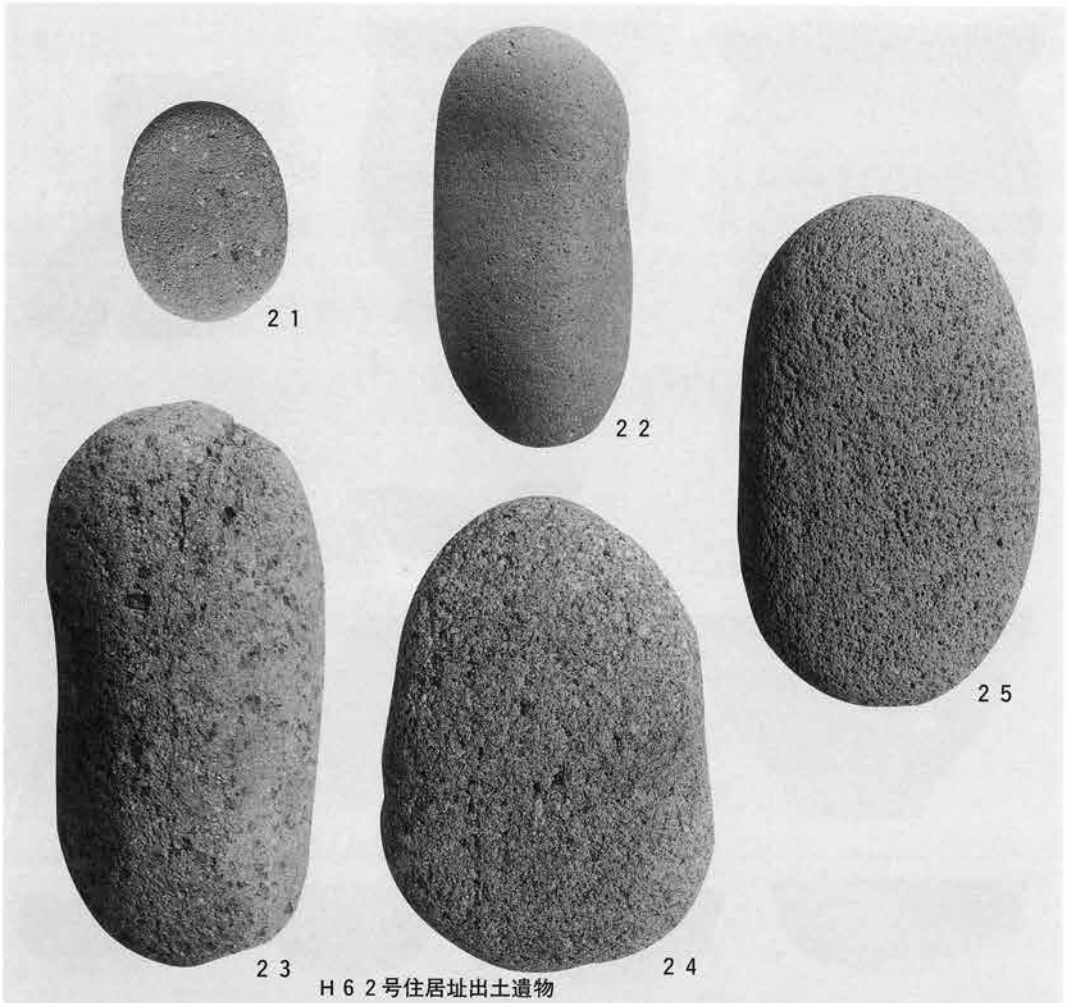

12
15
17
13
14
16
H59号住居址出土遺物
1
2
(5)
4
5
(6)
6 (4/7)
3


9(3)
7
8
(1)
H60号住居址出土遺物
1
2
3
4
5
7
6
9
(6)
10(2)(6)

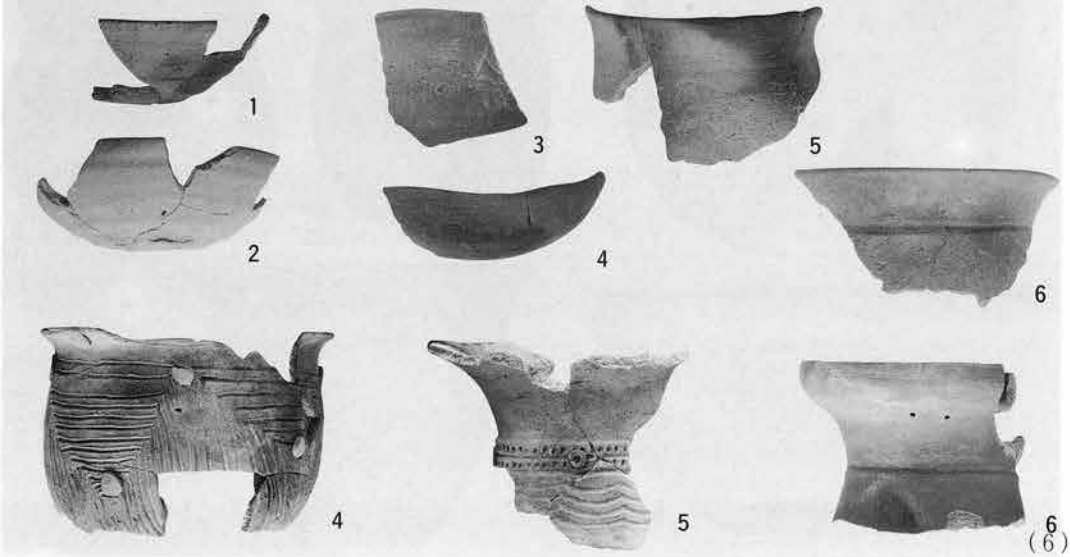


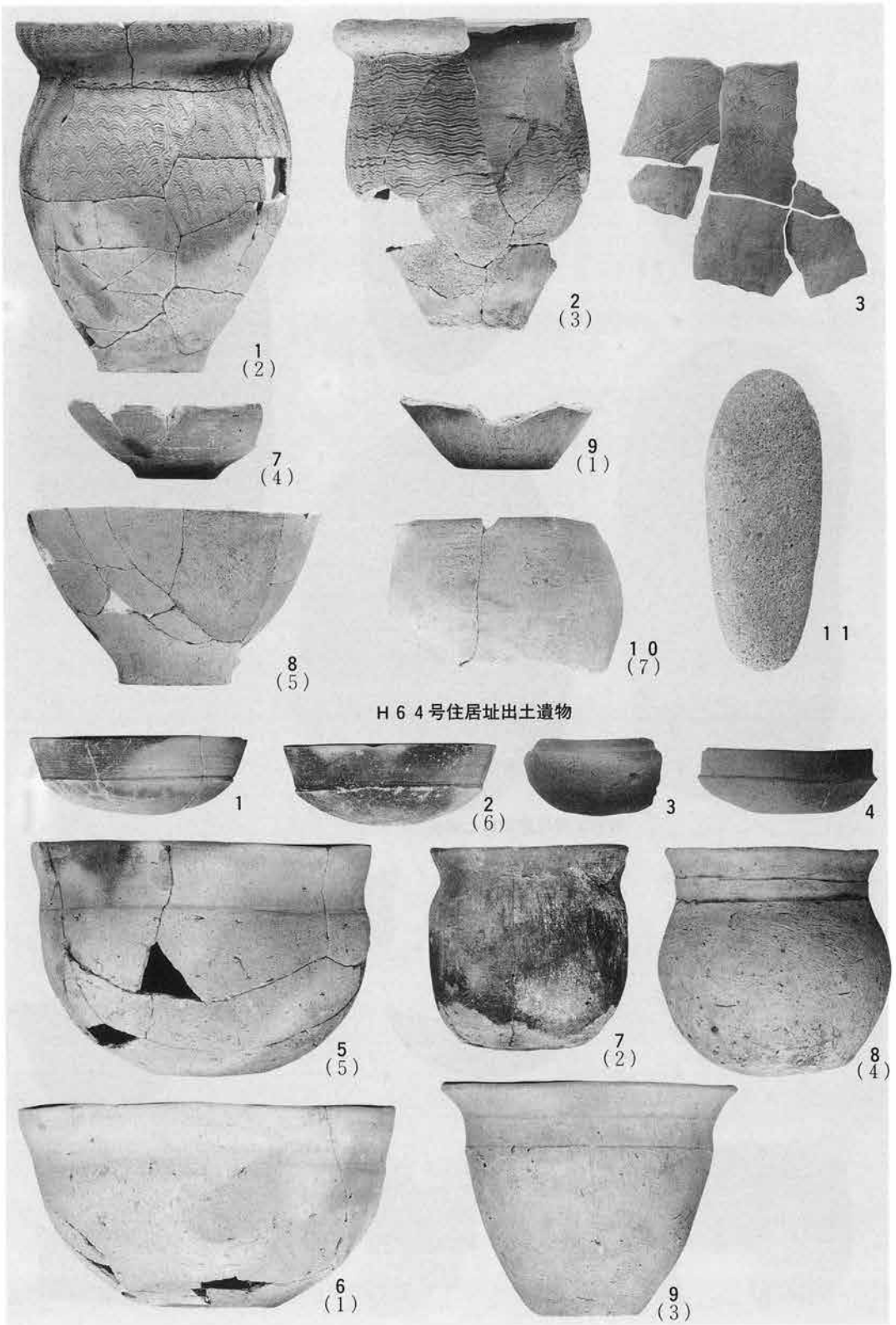
H61号住居址出土遺物


11
14
12
19
16
20
17
18

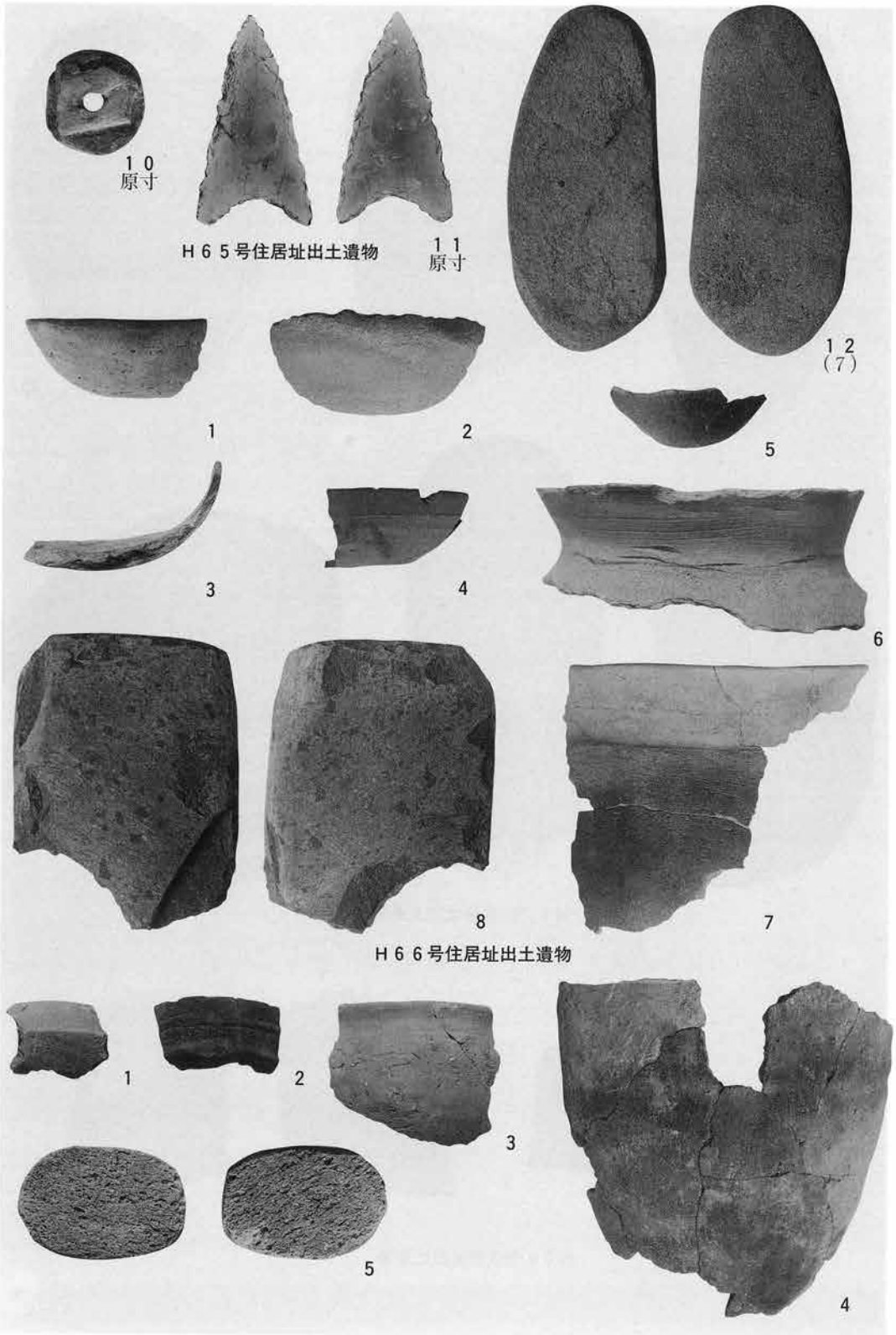


H62号住居址出土遺物



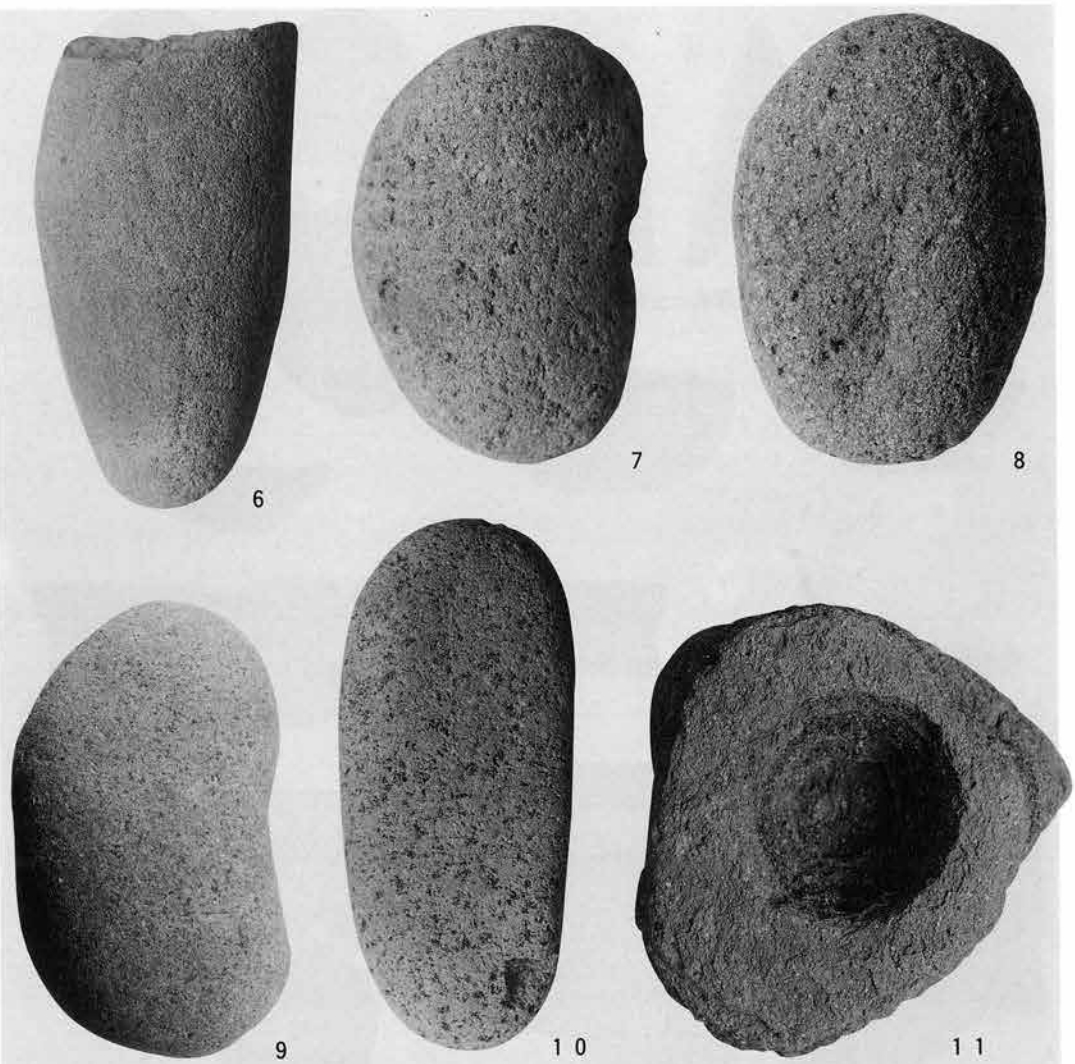


H６４号住居址出土遺物



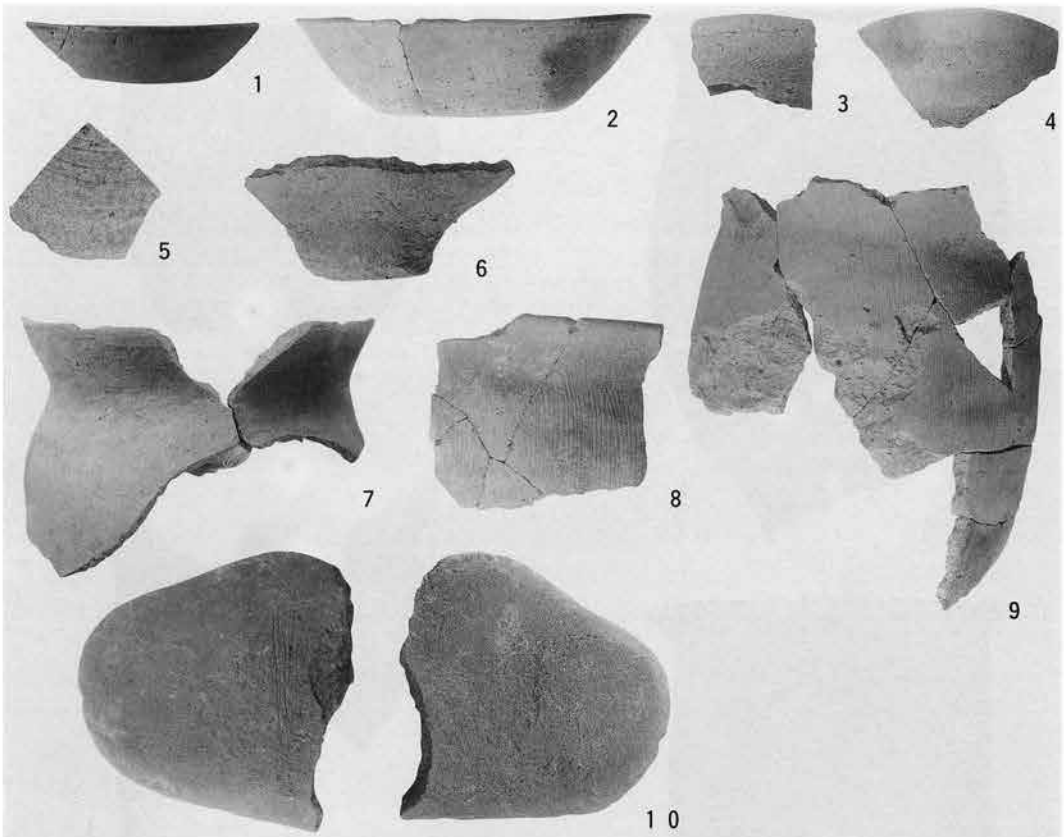
H65号住居址出土遺物

H66号住居址出土遺物

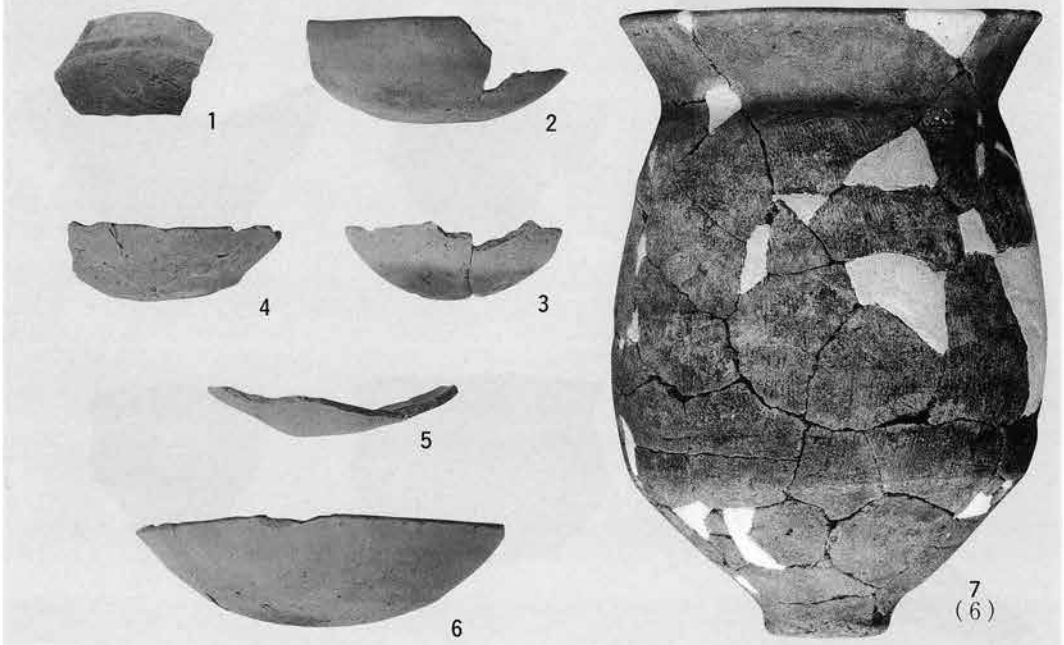


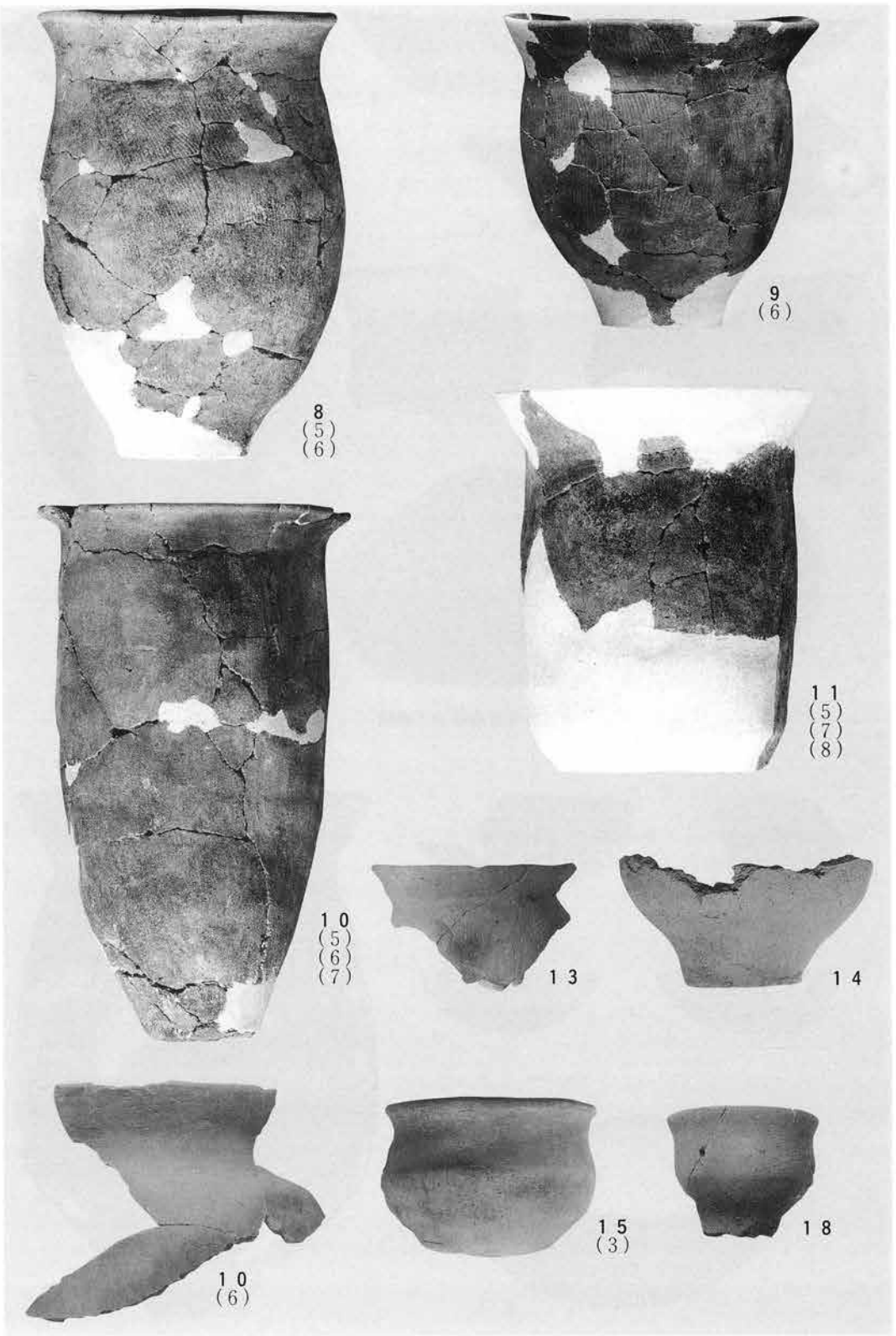
H６７号住居址出土遺物

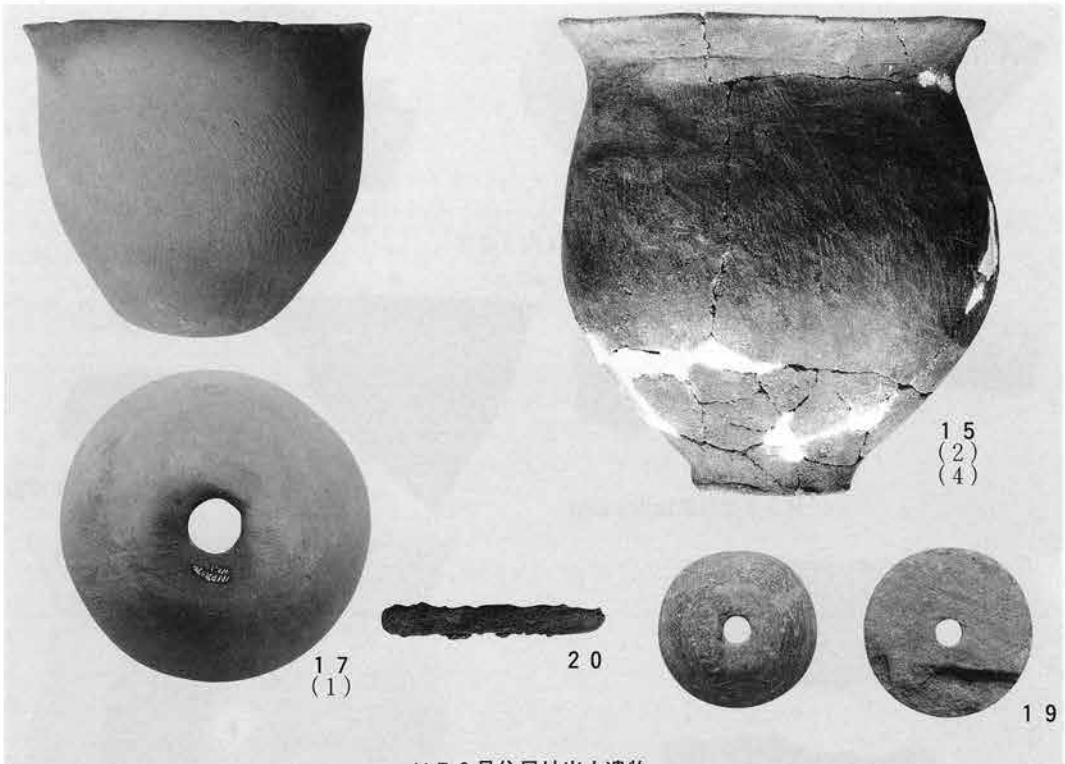
H６８号住居址出土遺物



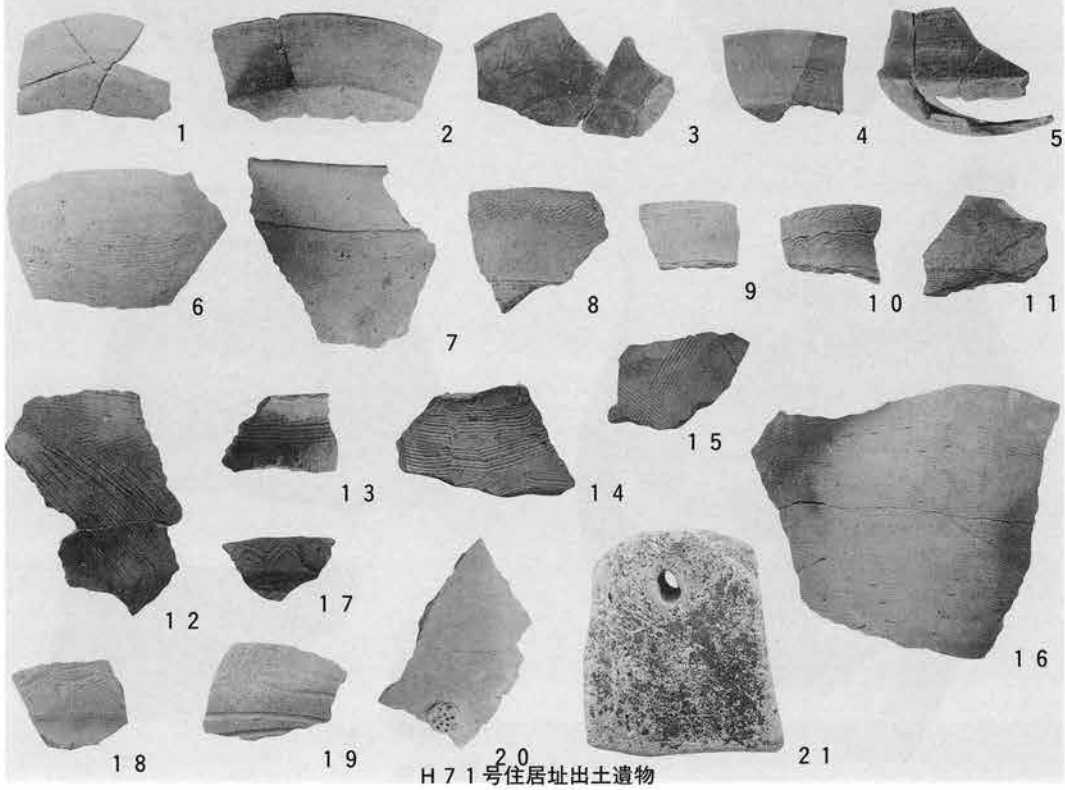
H６９号住居址出土遺物




8
(5)
(6)
9
(6)
10
(5)
(6)
(7)
11
(5)
(7)
(8)
13
14
10
(6)
15
(3)
18



H７０号住居址出土遺物

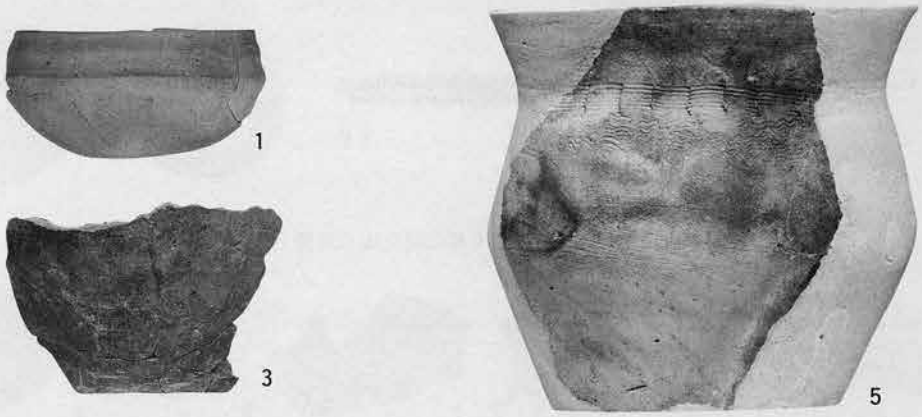


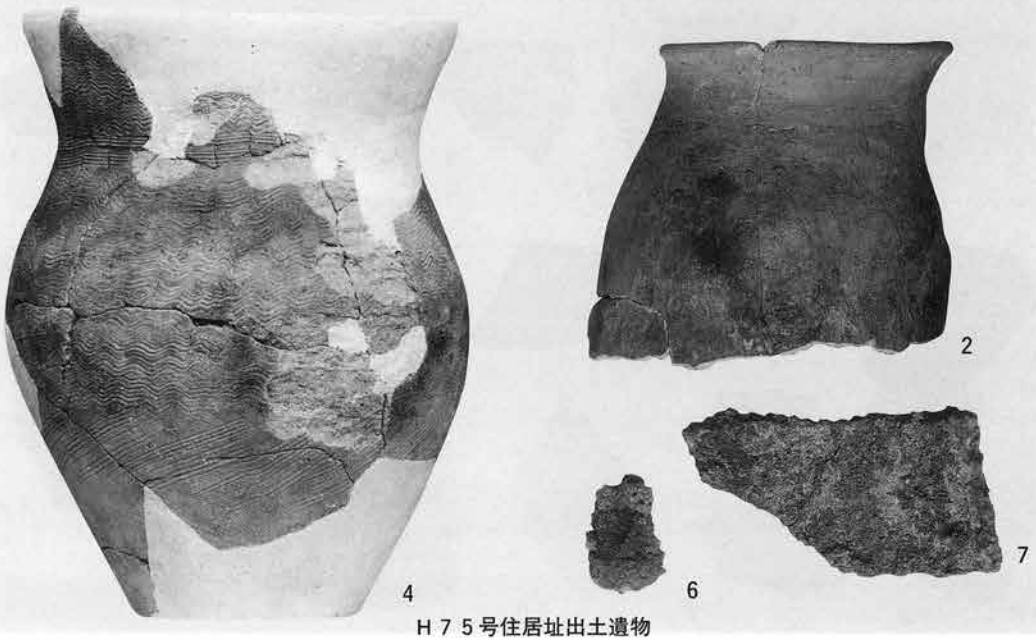
H７１号住居址出土遺物

H７２号住居址出土遺物

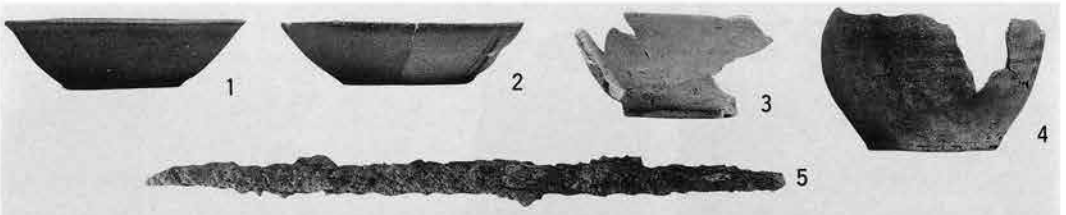
H７３号住居址出土遺物

H７４号住居址出土遺物

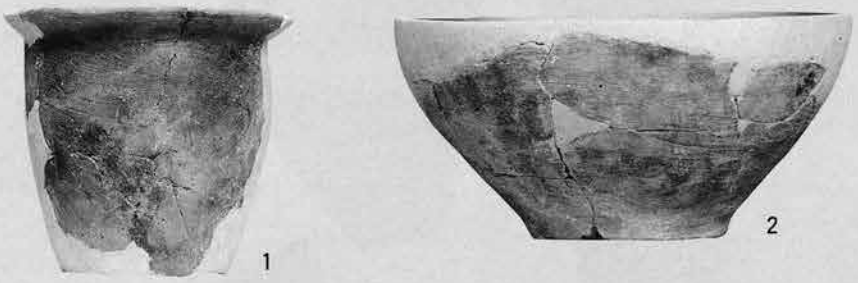




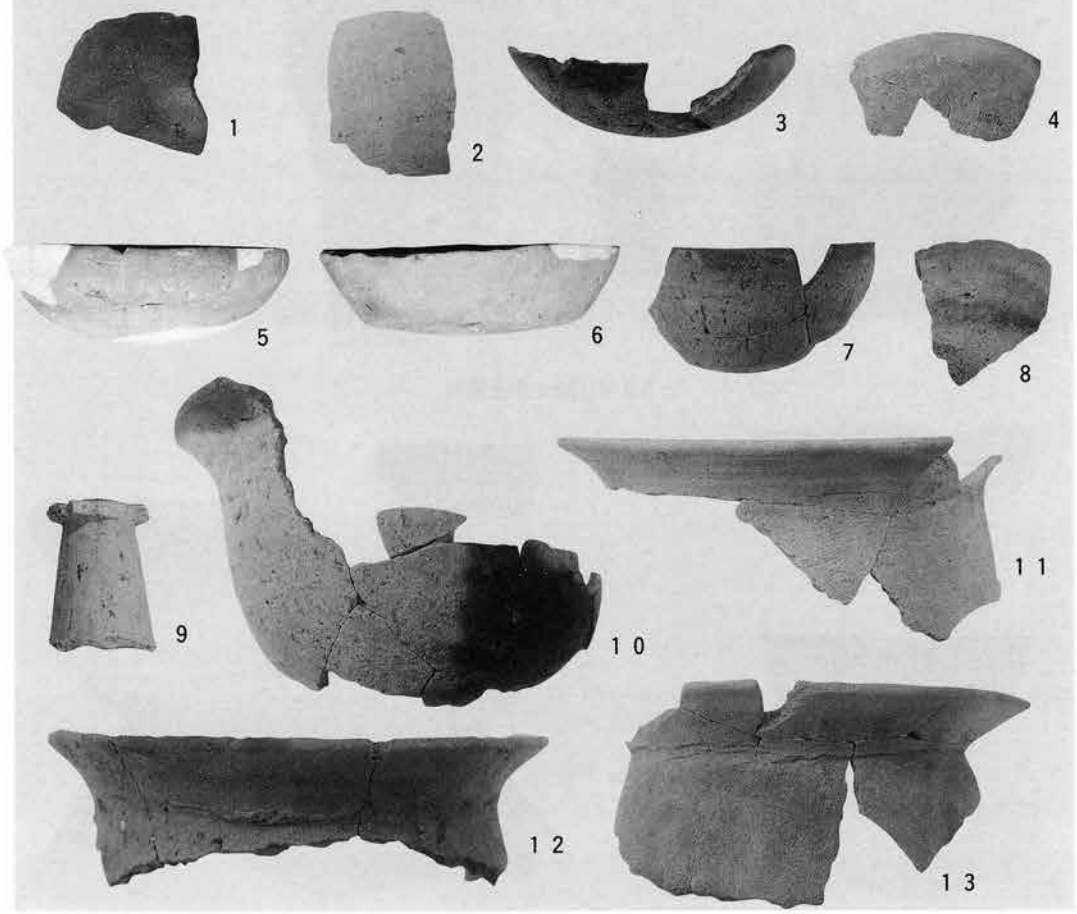
H７５号住居址出土遺物

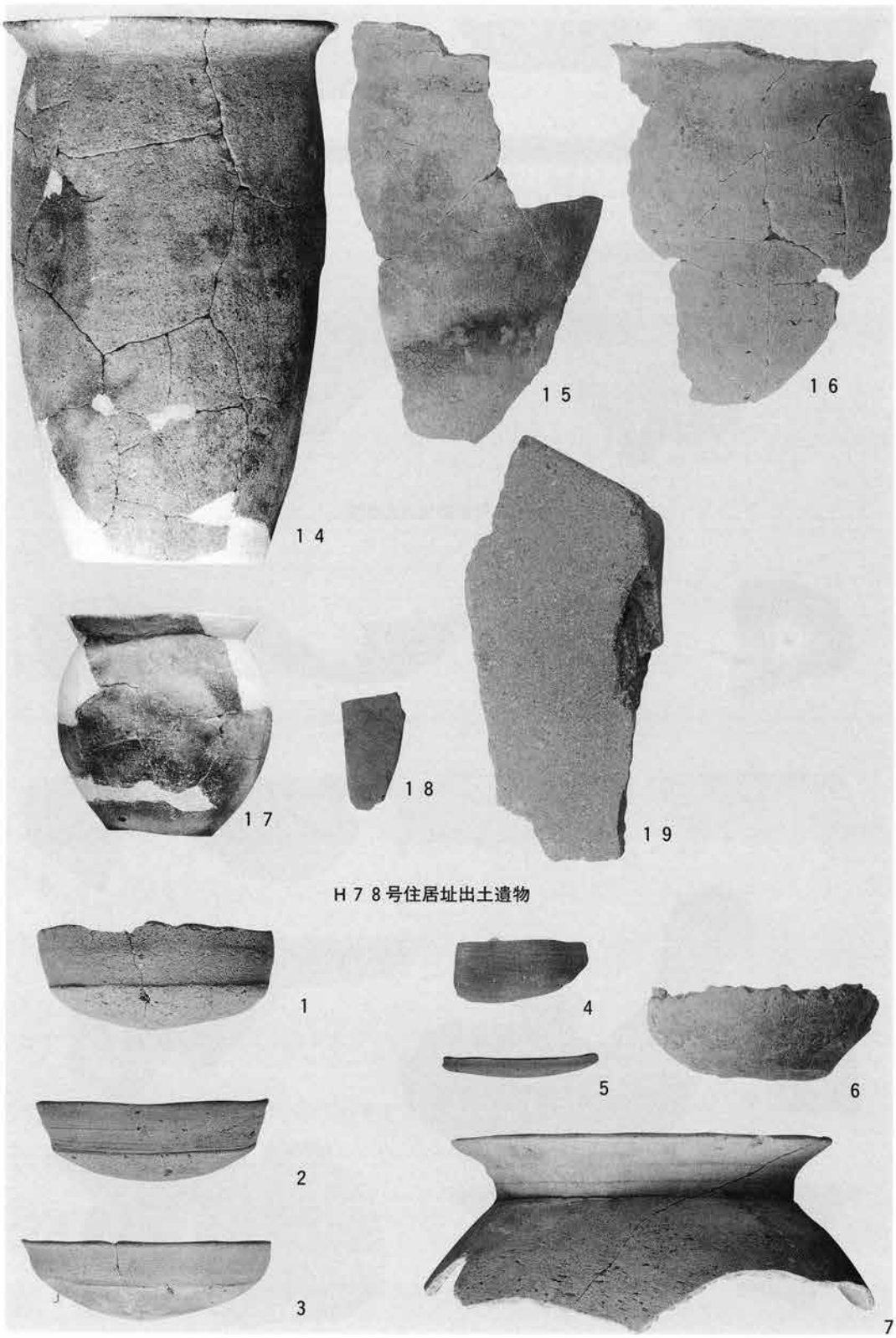


H７６号住居址出土遺物

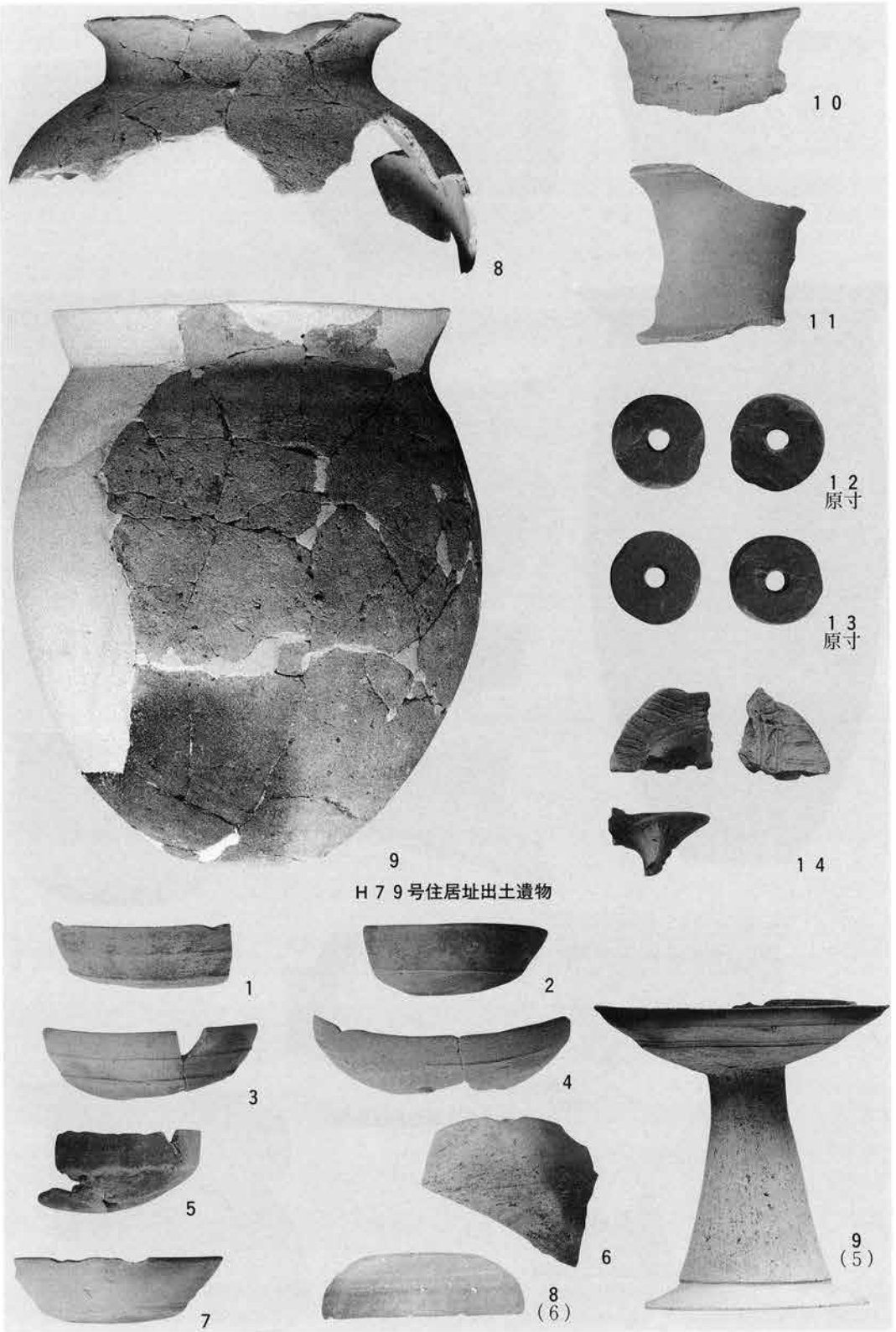


H７７号住居址出土遺物

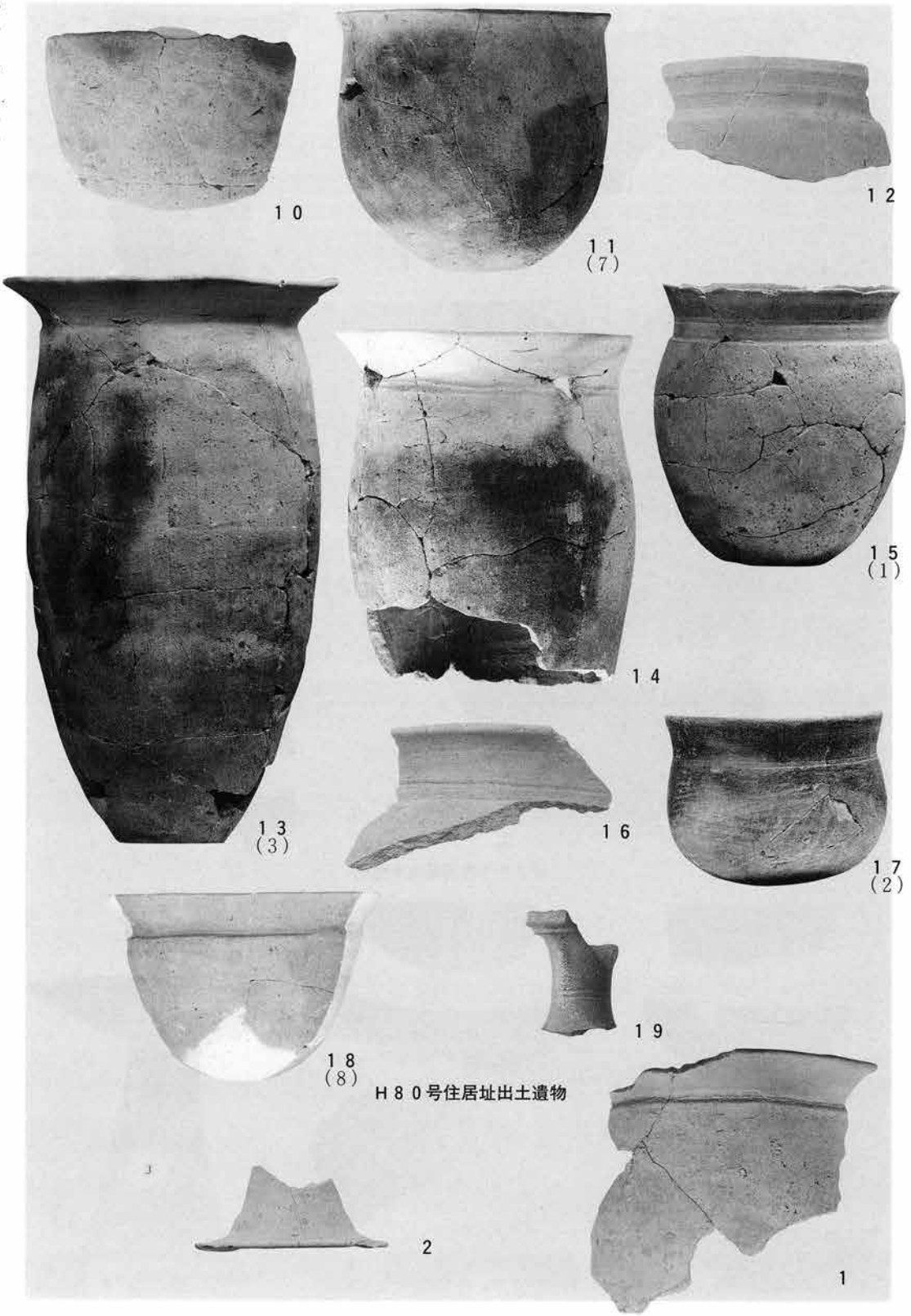




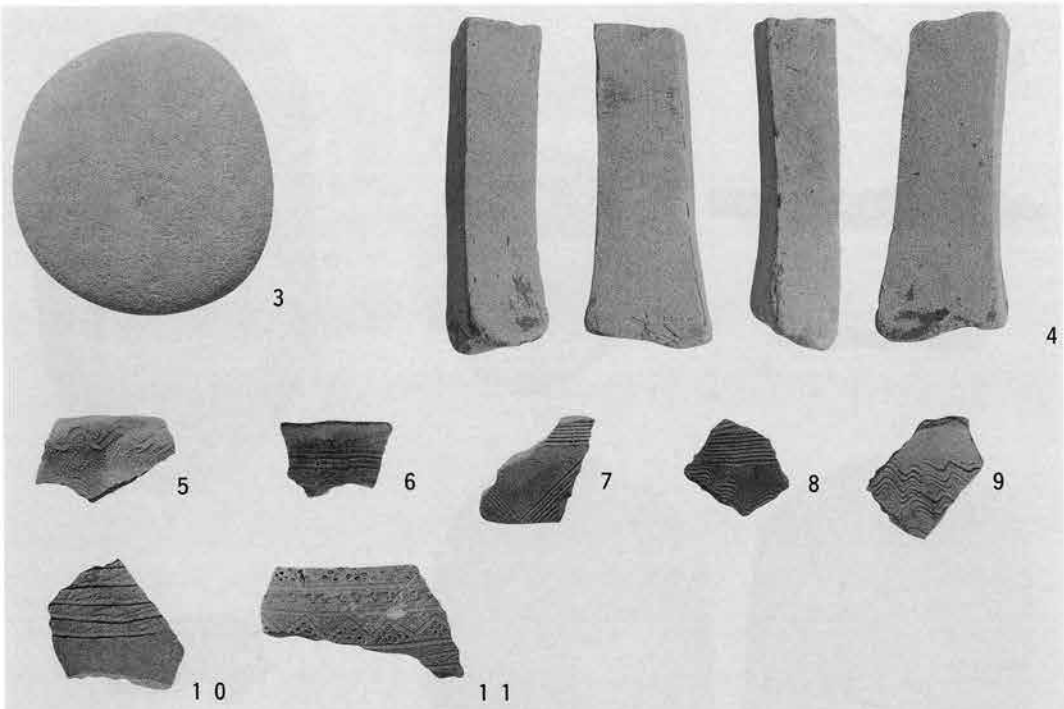
H７８号住居址出土遺物



H７９号住居址出土遺物

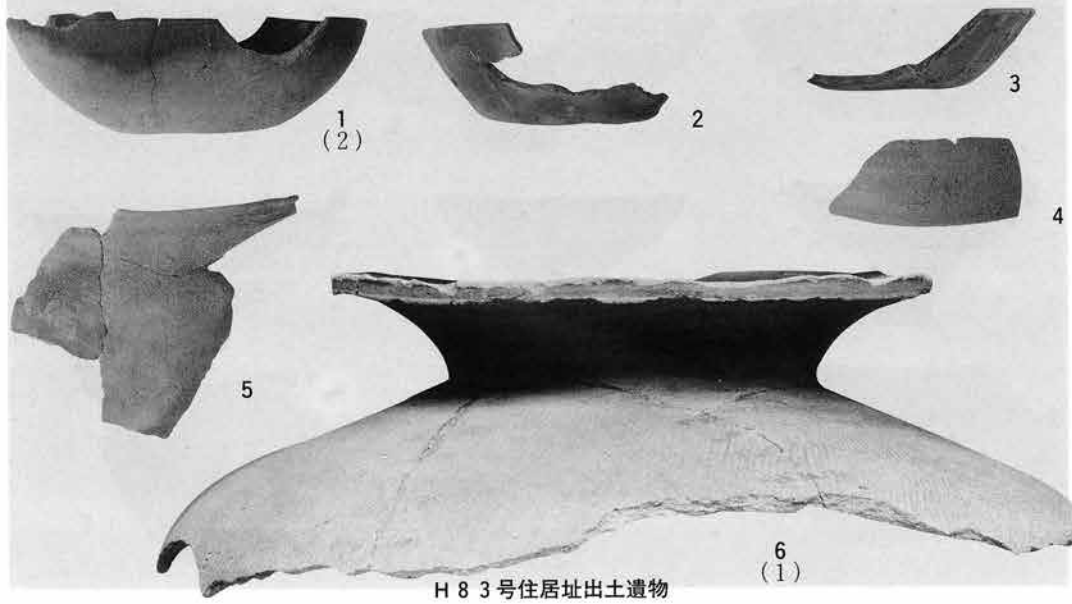


H80号住居址出土遺物

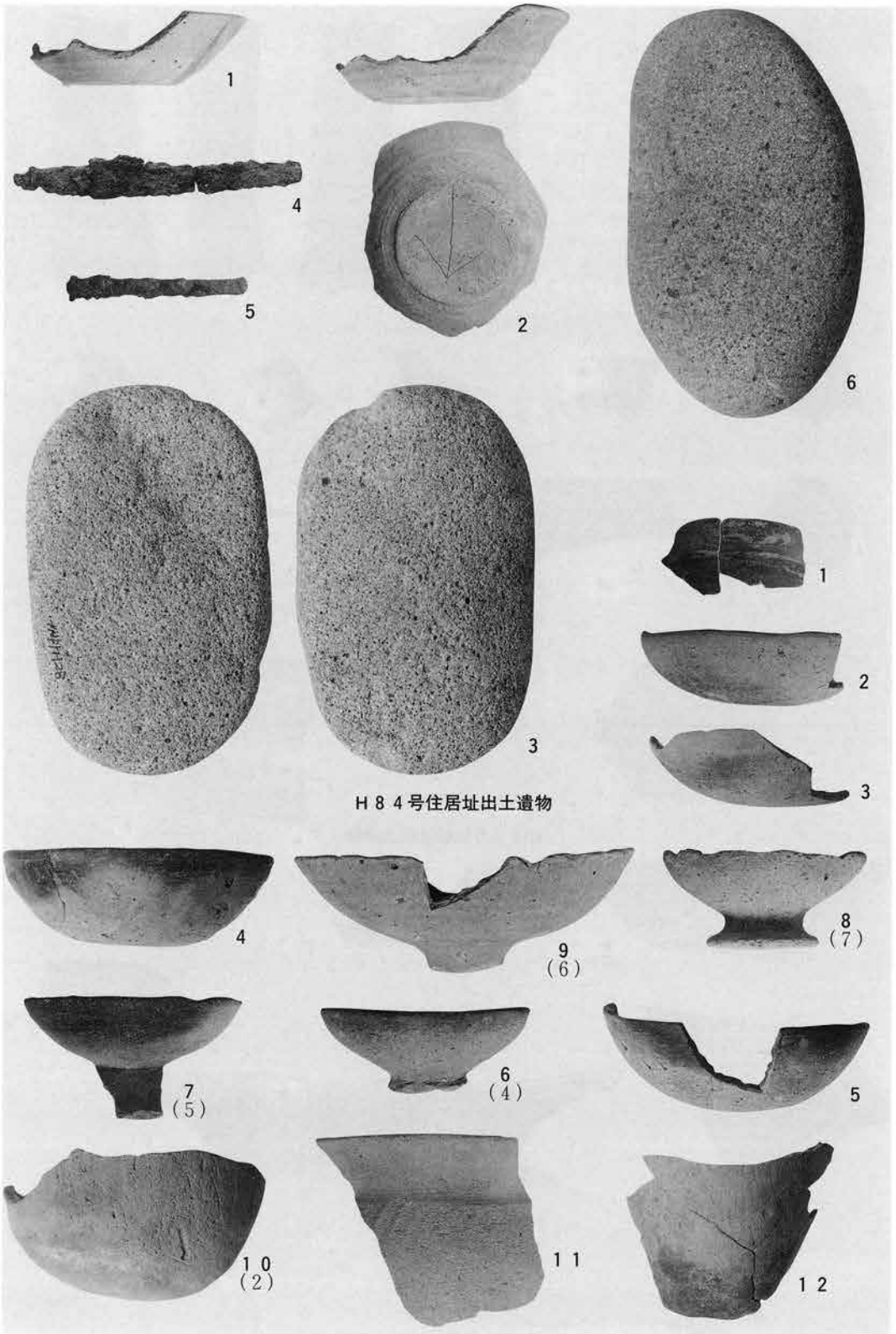


H８１号住居址出土遺物

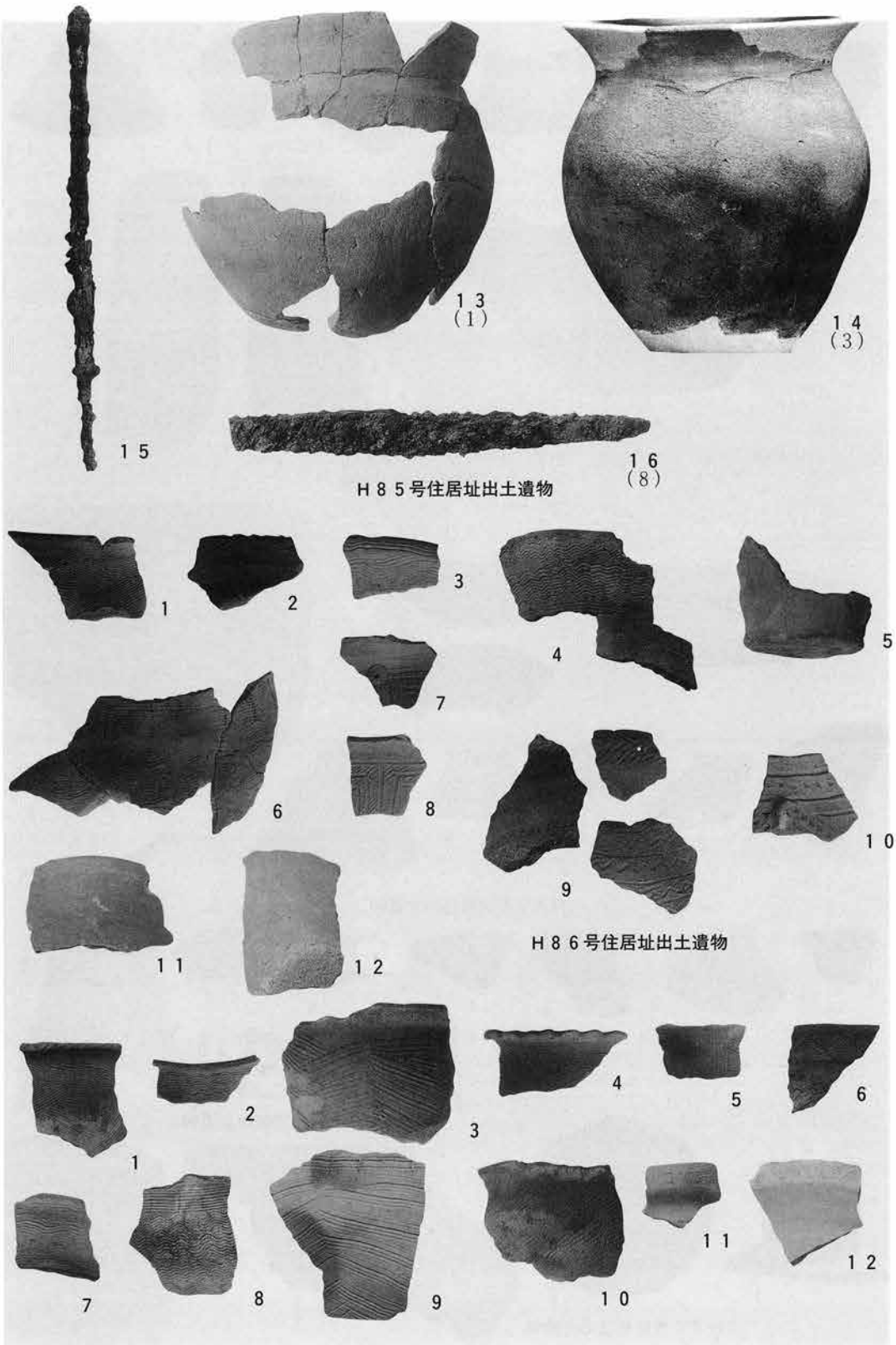
H８２号住居址出土遺物

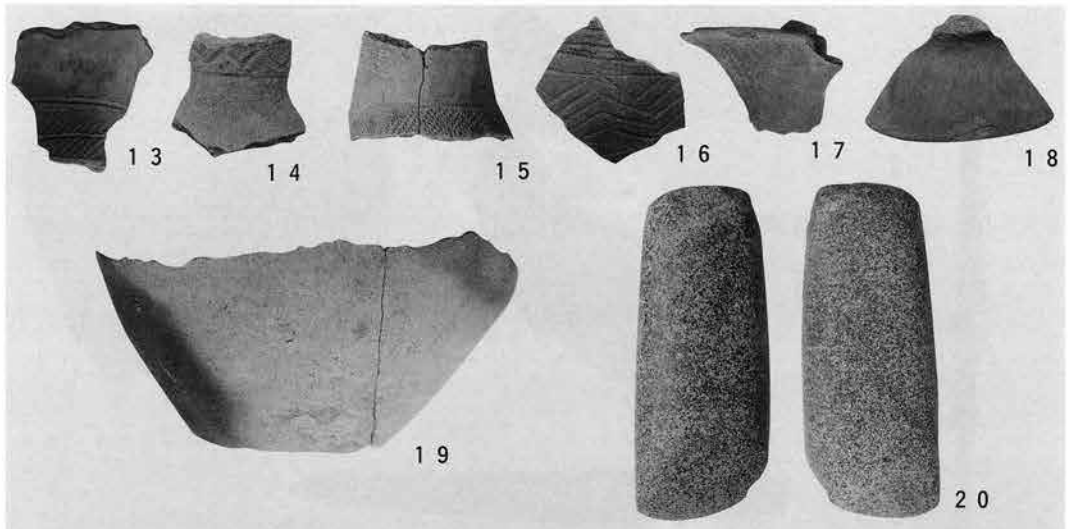


H８３号住居址出土遺物



H８４号住居址出土遺物

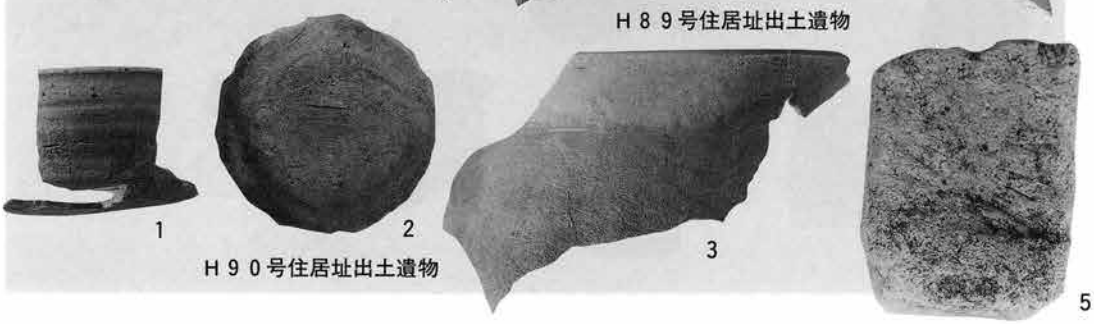

15
13
(1)
14
(3)
16
(8)
H85号住居址出土遺物
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
H86号住居址出土遺物
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12



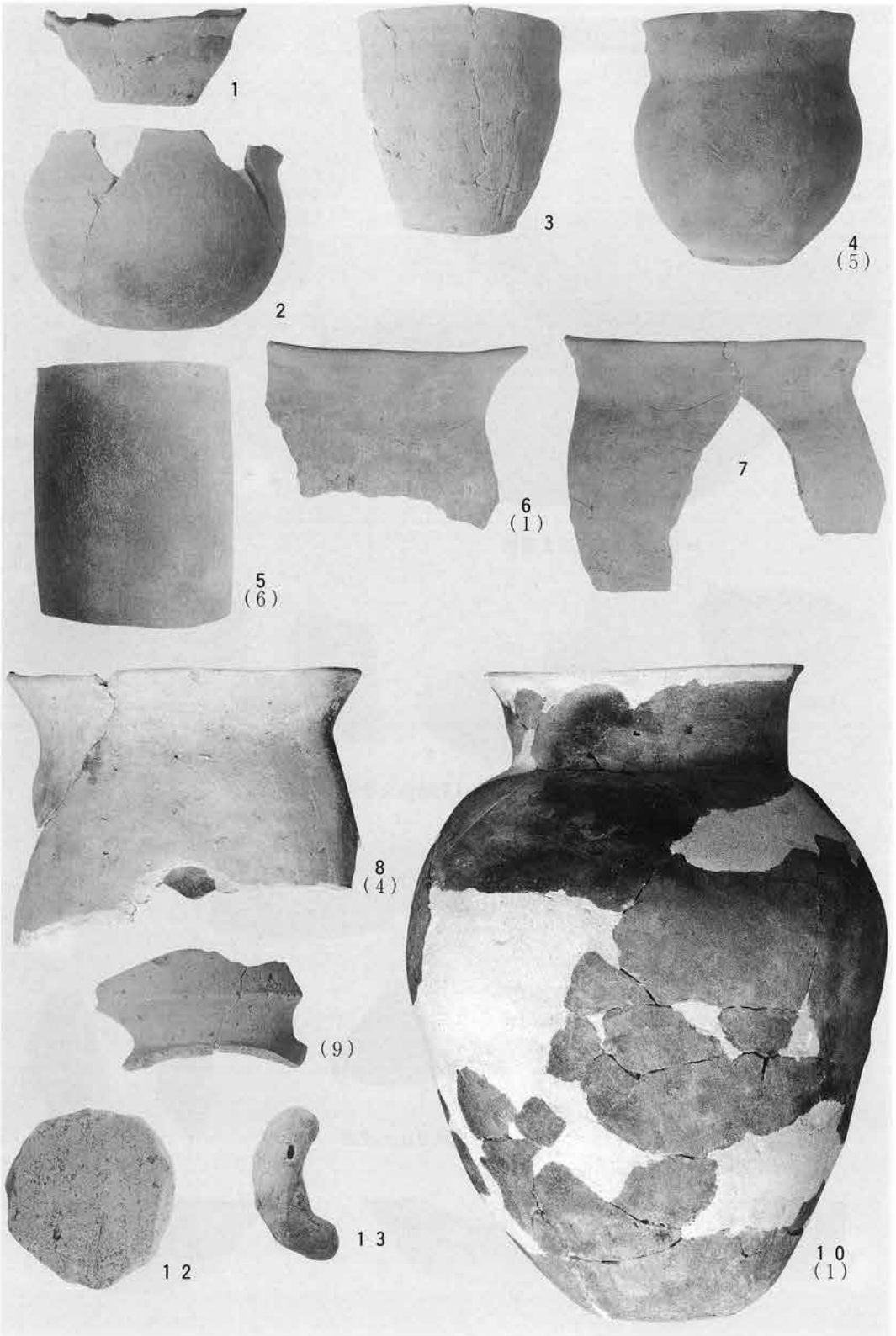
H８７号住居址出土遺物

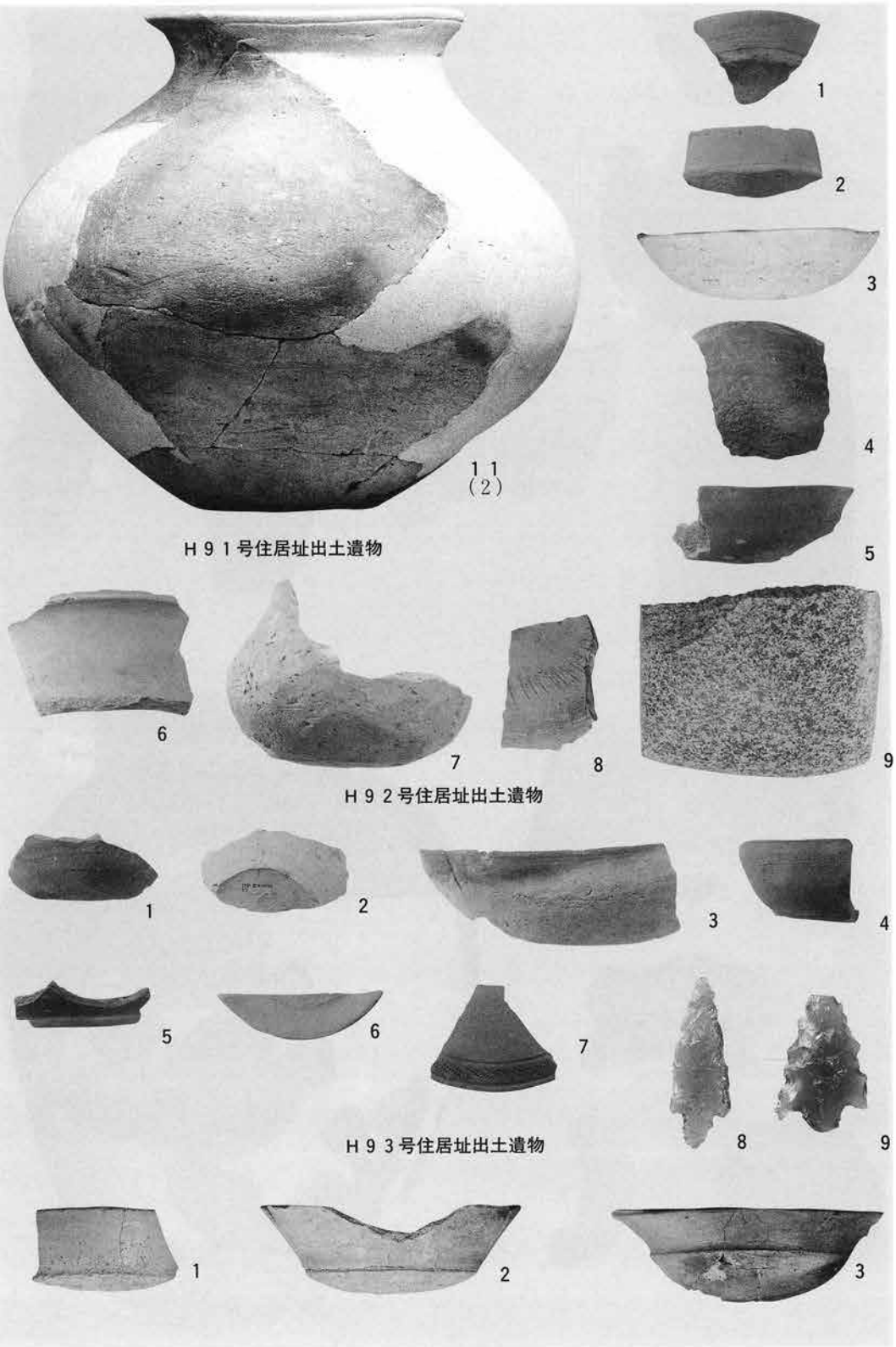
H８８号住居址出土遺物

H８９号住居址出土遺物



H９０号住居址出土遺物

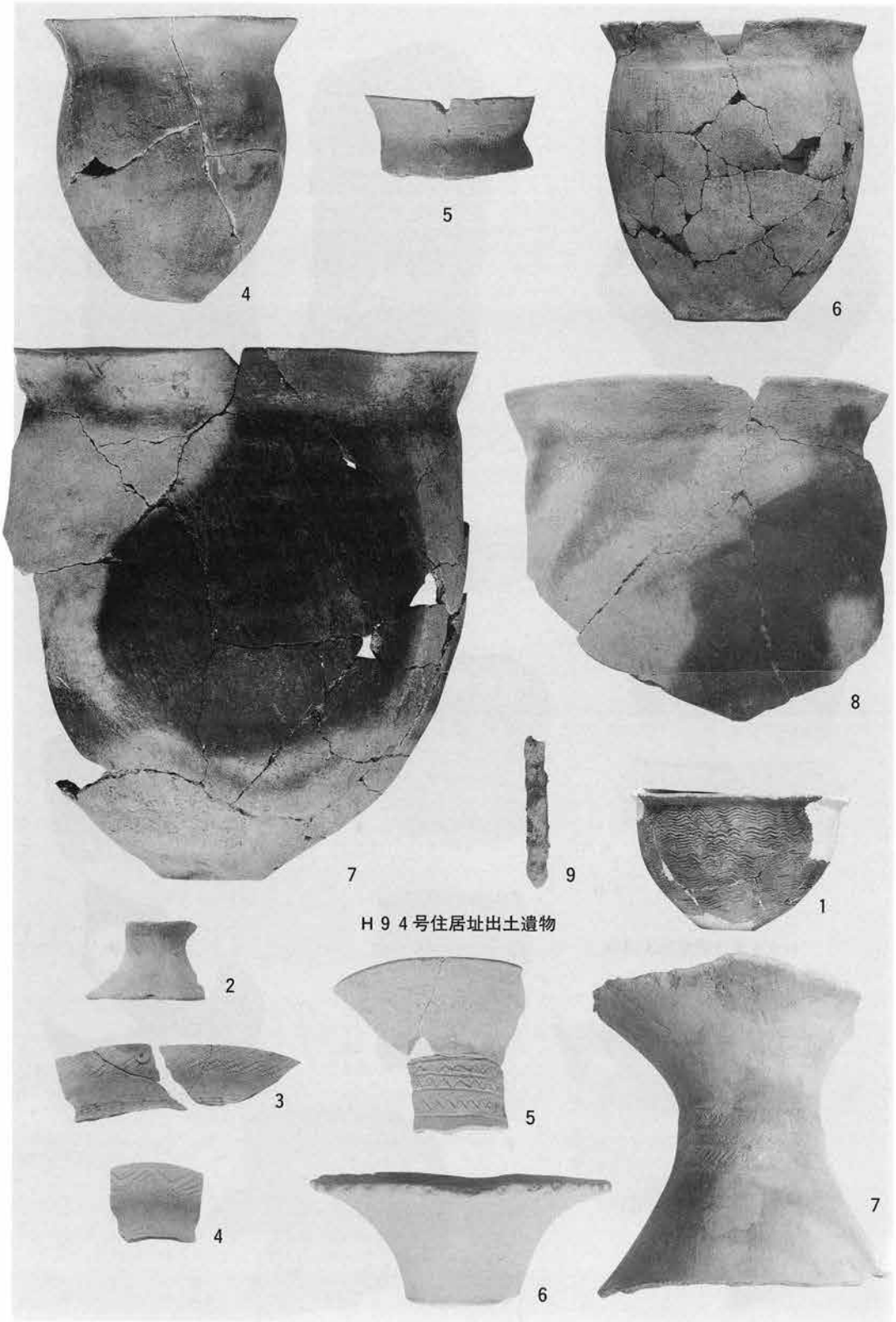

1
2
3
4
(5)
5
(6)
6
(1)
7
8
(4)
(9)
10
(1)
12
13



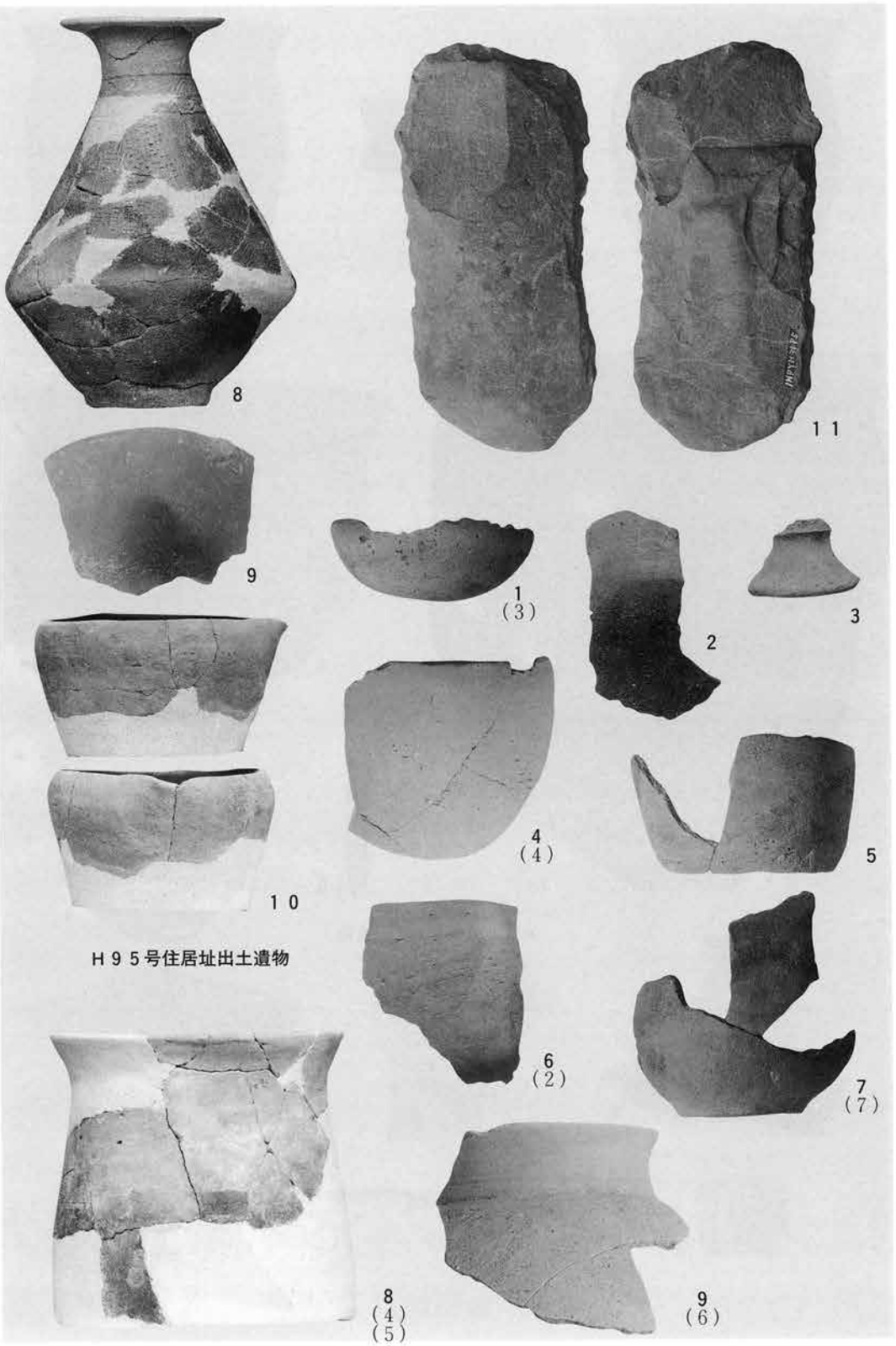
H９１号住居址出土遺物

H９２号住居址出土遺物

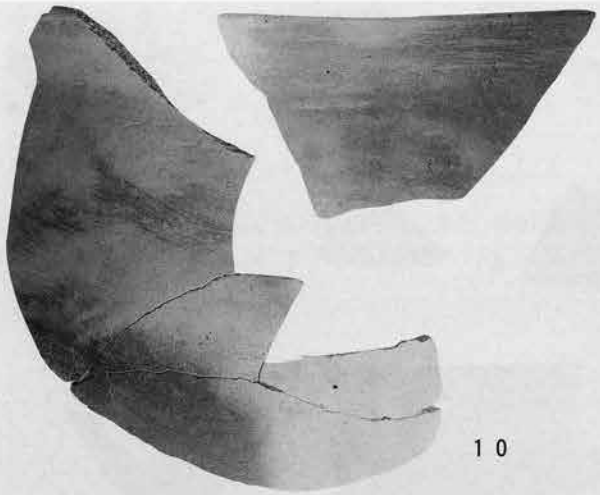
H９３号住居址出土遺物



H９４号住居址出土遺物



H９５号住居址出土遺物

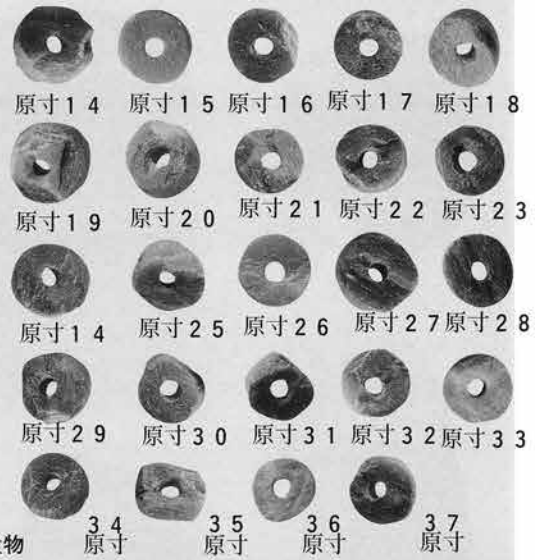


10

11
(1)

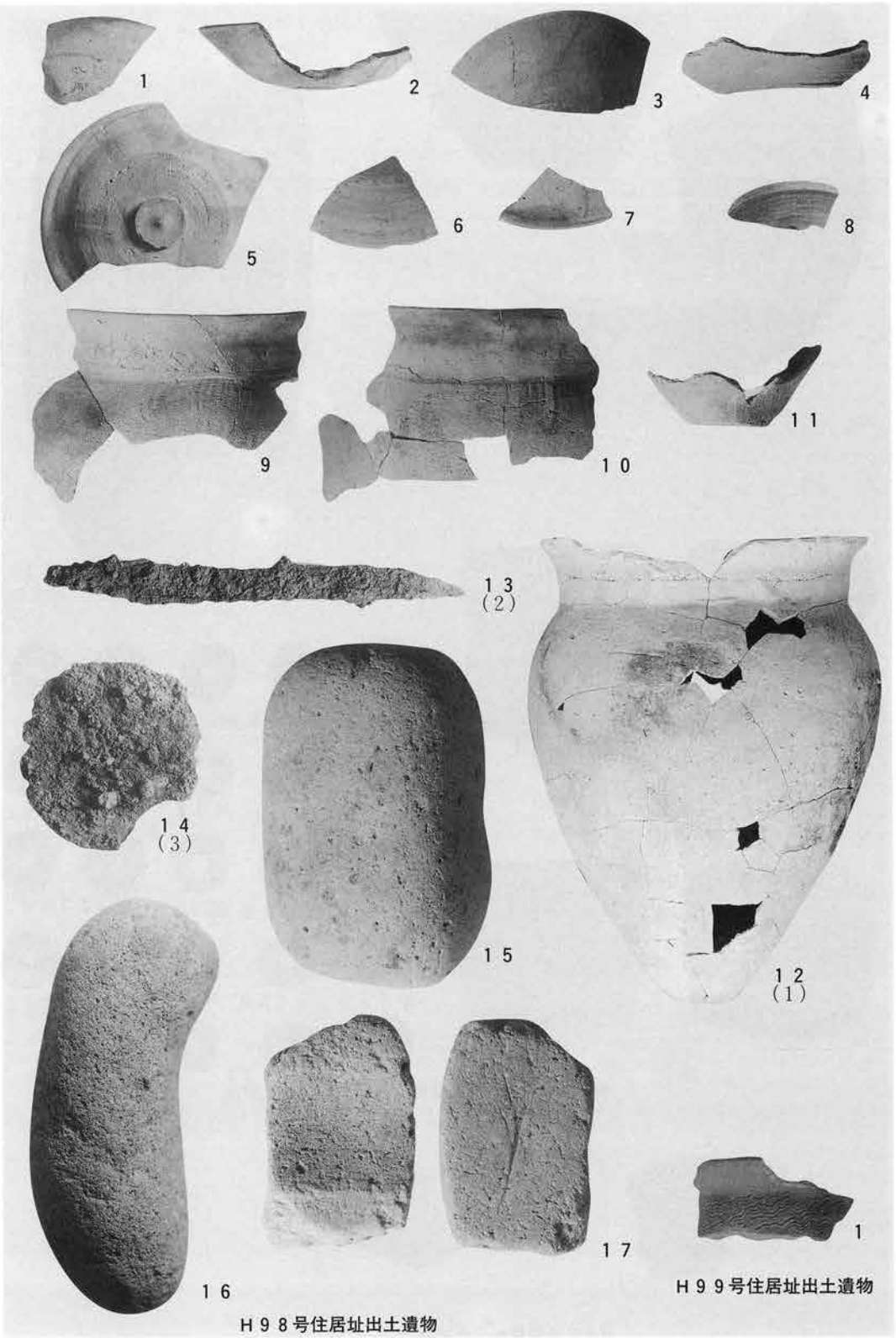
12
原寸

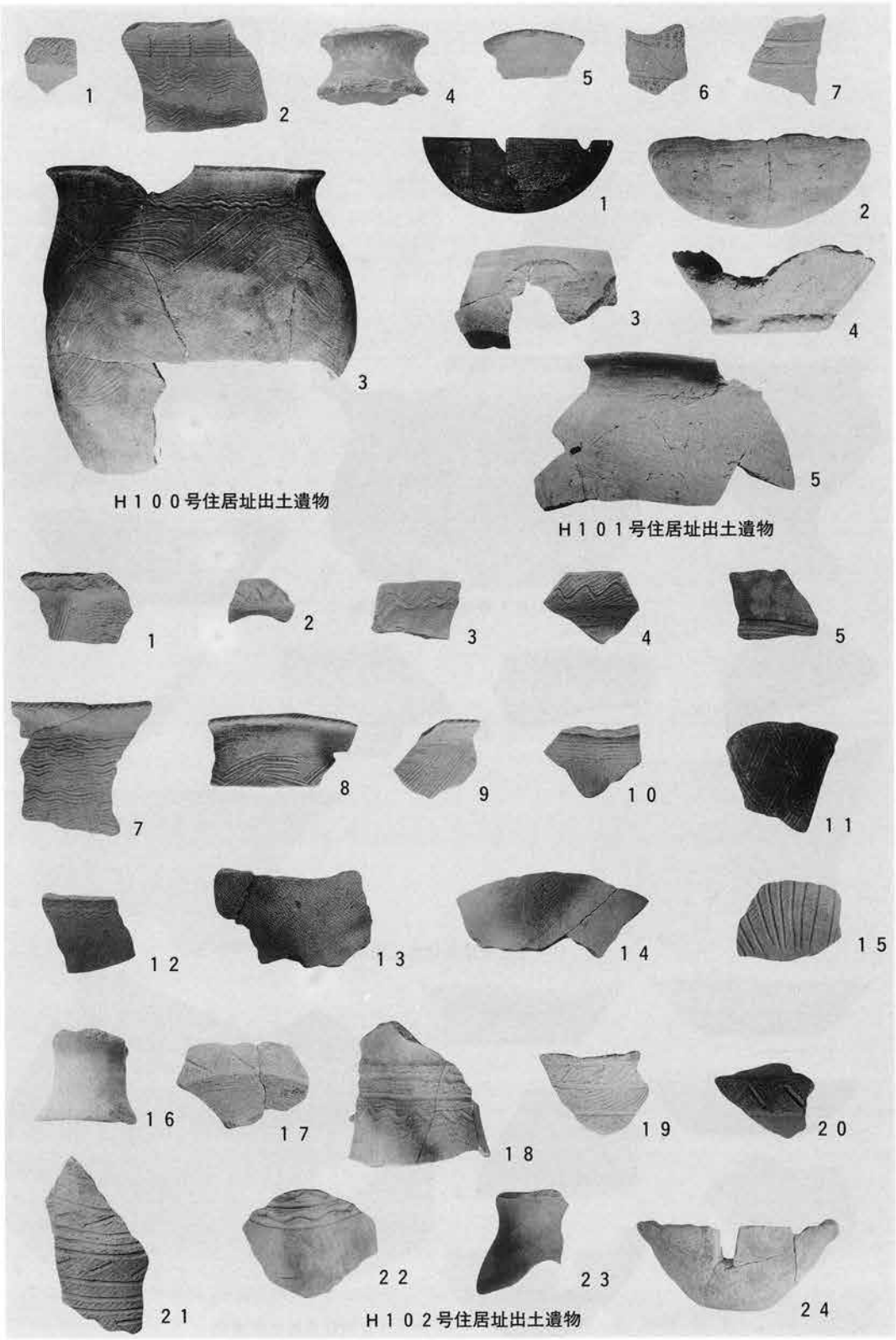
13
原寸

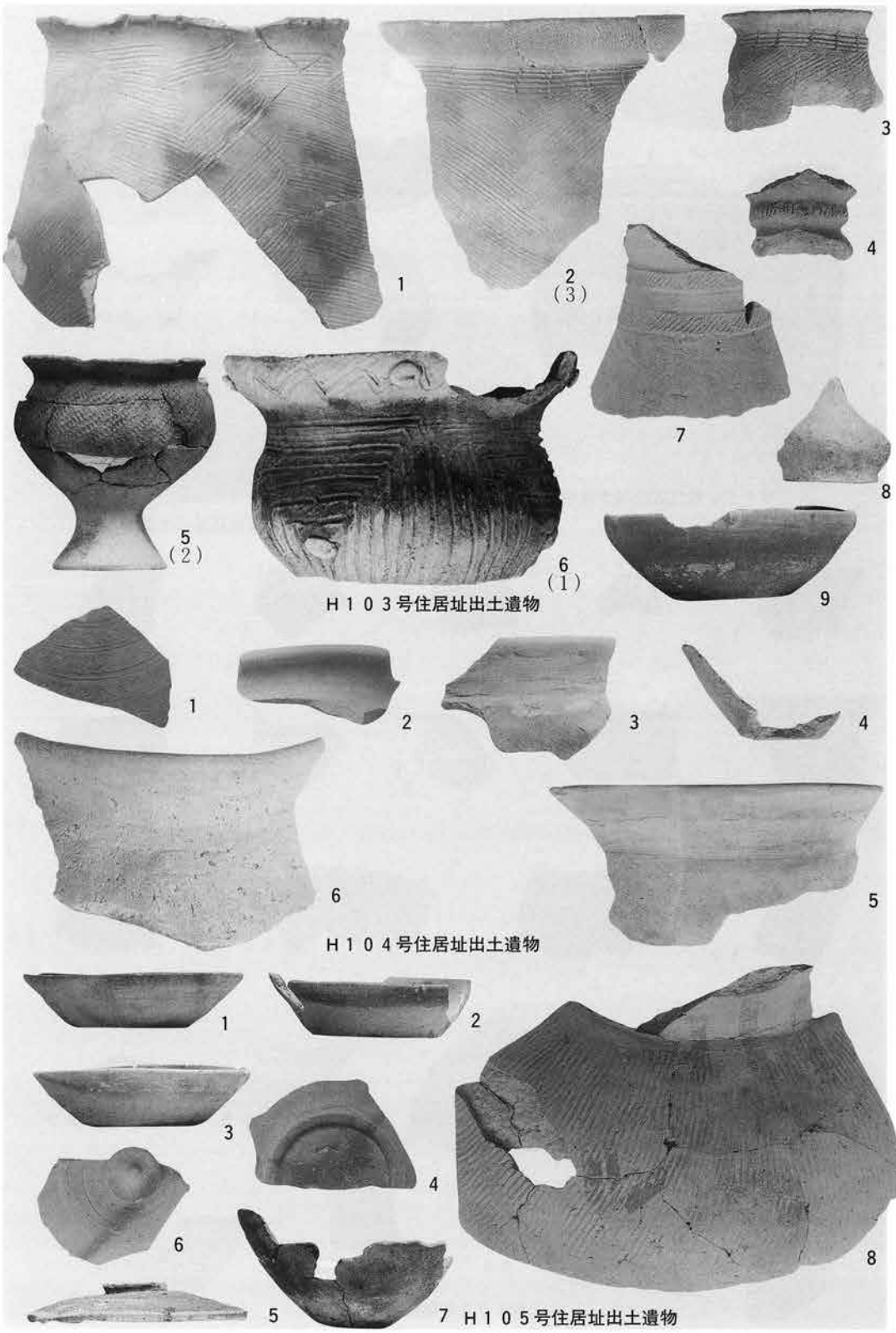


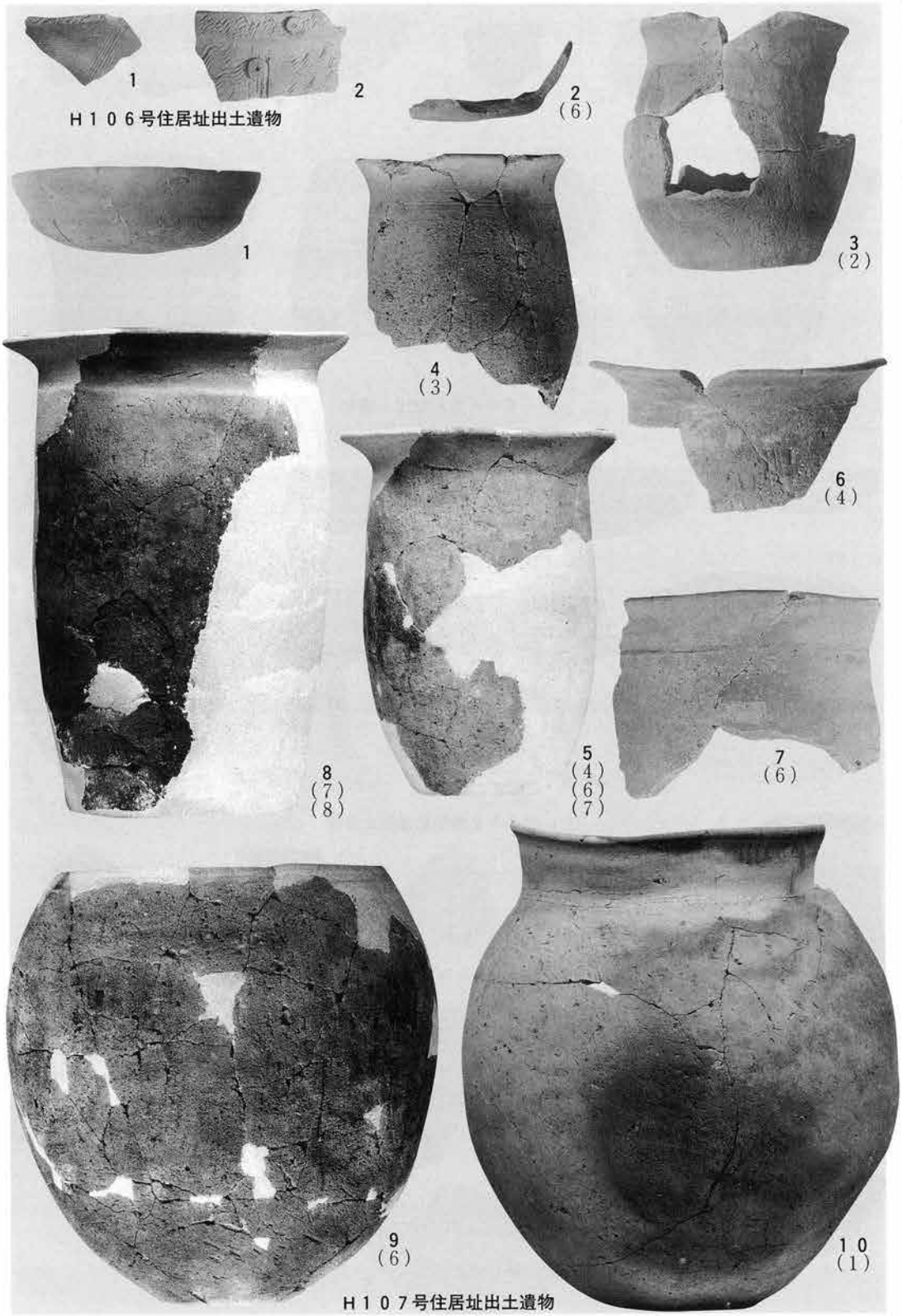
H９６号住居址出土遺物

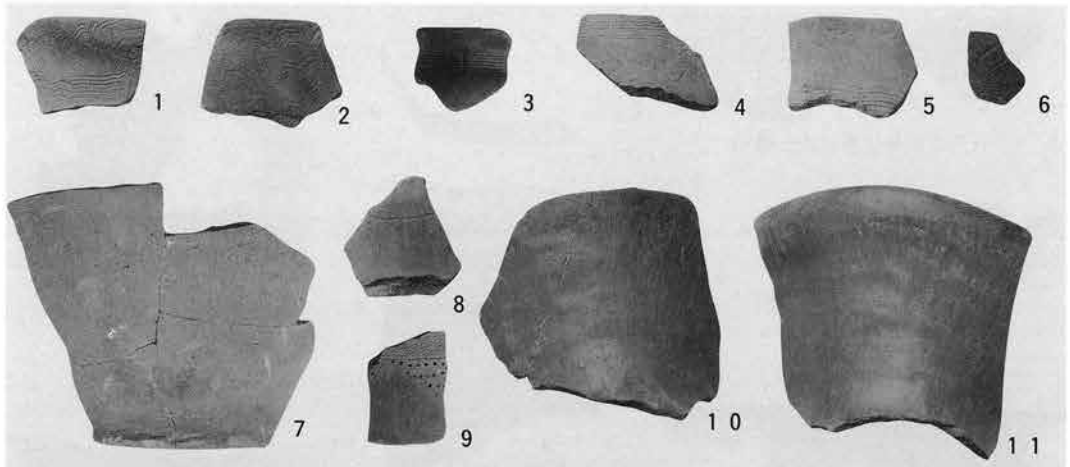
H９７号住居址出土遺物


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
13
(2)
14
(3)
15
12
(1)
16
17
1
H９８号住居址出土遺物
H９９号住居址出土遺物

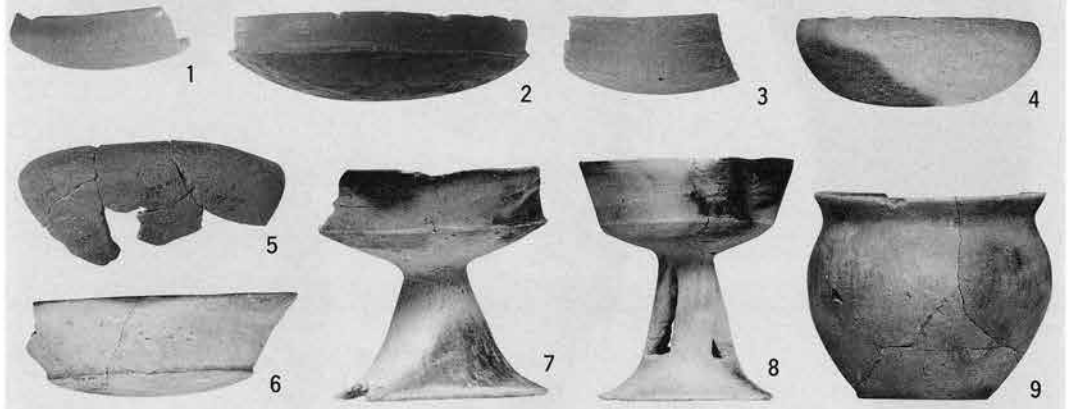

1
2
4
5
6
7
3
H１００号住居址出土遺物
1
2
3
4
5
H１０１号住居址出土遺物
1
2
3
4
5
7
8
9
１０
１１
１２
１３
１４
１５
１６
１７
１８
１９
２０
２１
２２
２３
２４
H１０２号住居址出土遺物


1
2
(3)
3
4
5
(2)
6
(1)
7
8
9
H１０３号住居址出土遺物
1
2
3
4
5
6
H１０４号住居址出土遺物
1
2
3
4
5
6
7
8
H１０５号住居址出土遺物


1
2
H１０６号住居址出土遺物
2
(6)
3
(2)
1
4
(3)
6
(4)
8
(7)
(8)
5
(4)
(6)
(7)
7
(6)
9
(6)
10
(1)
H１０７号住居址出土遺物

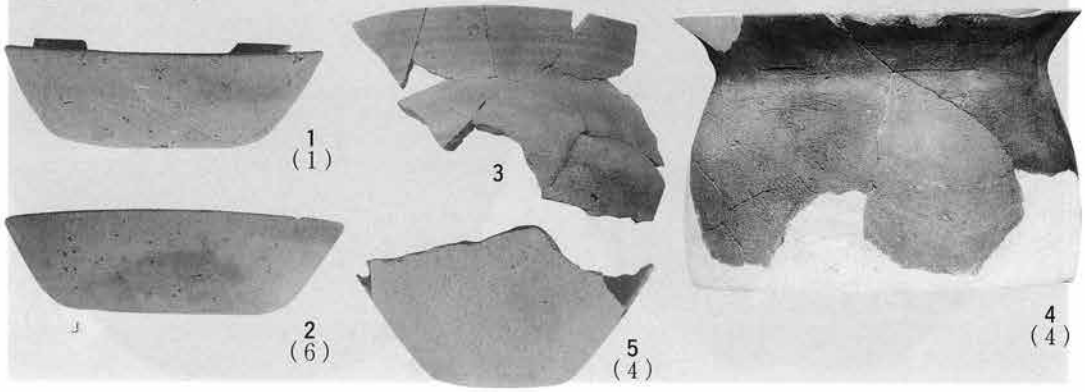


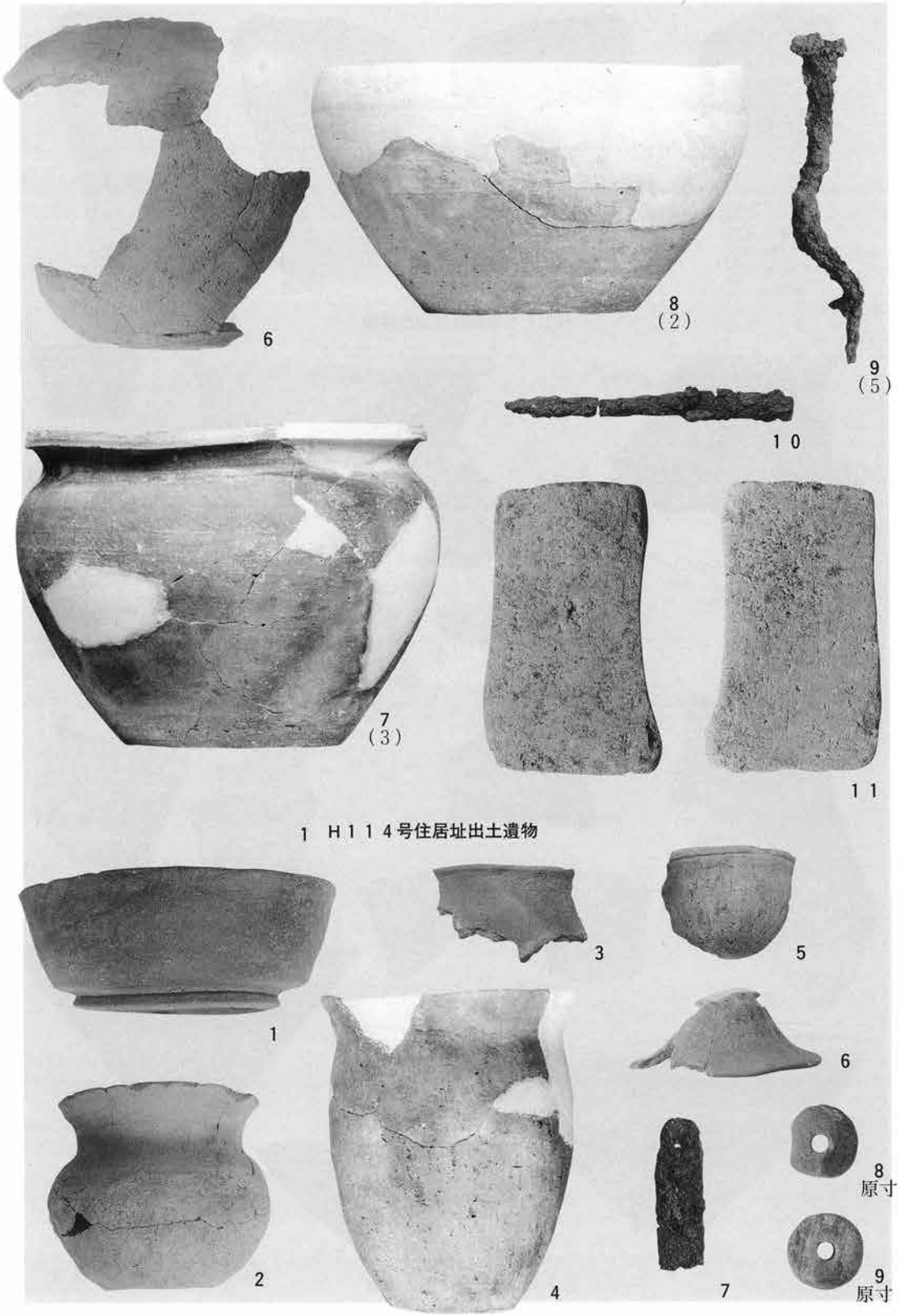
H１０９号住居址出土遺物



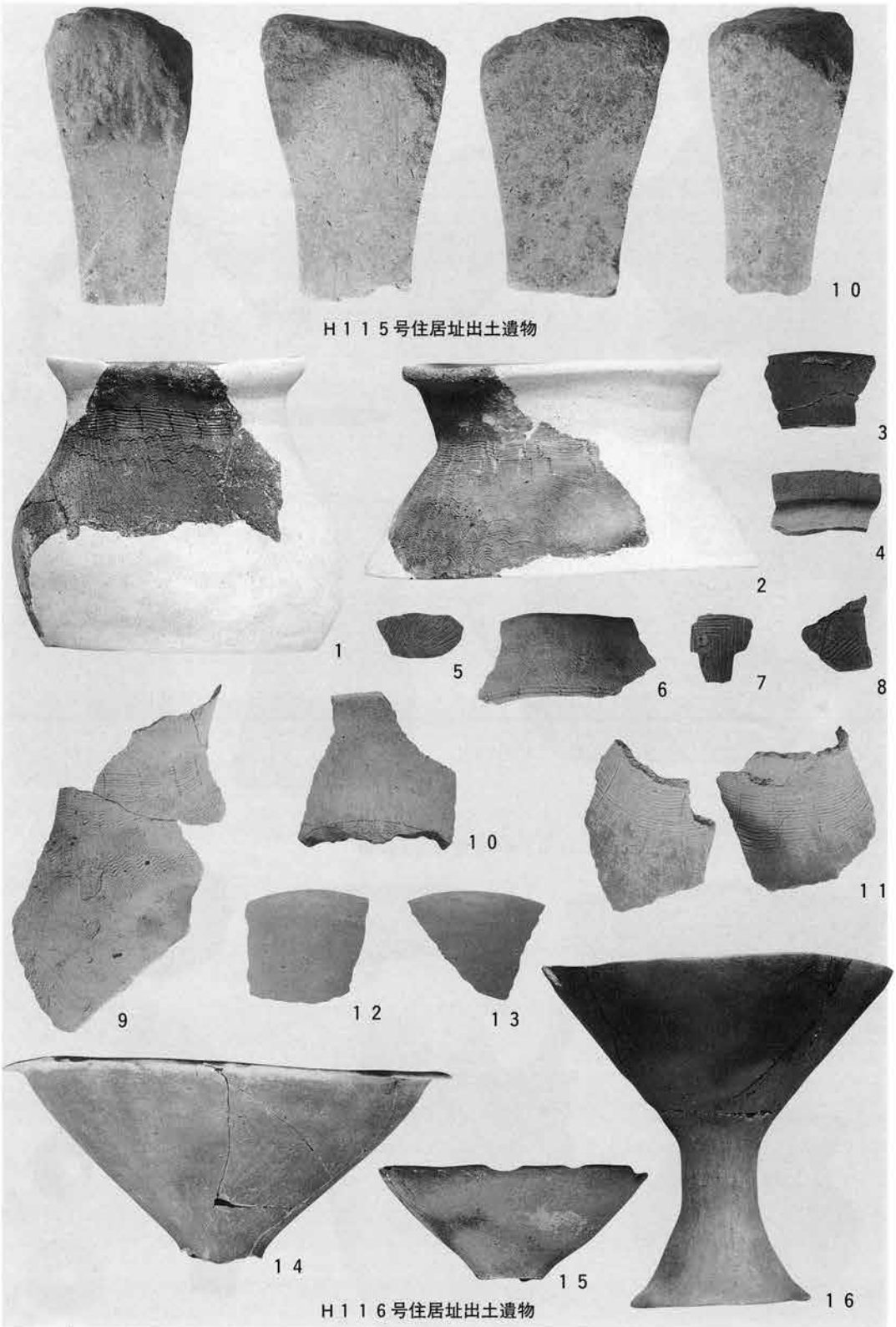
H１１０号住居址出土遺物

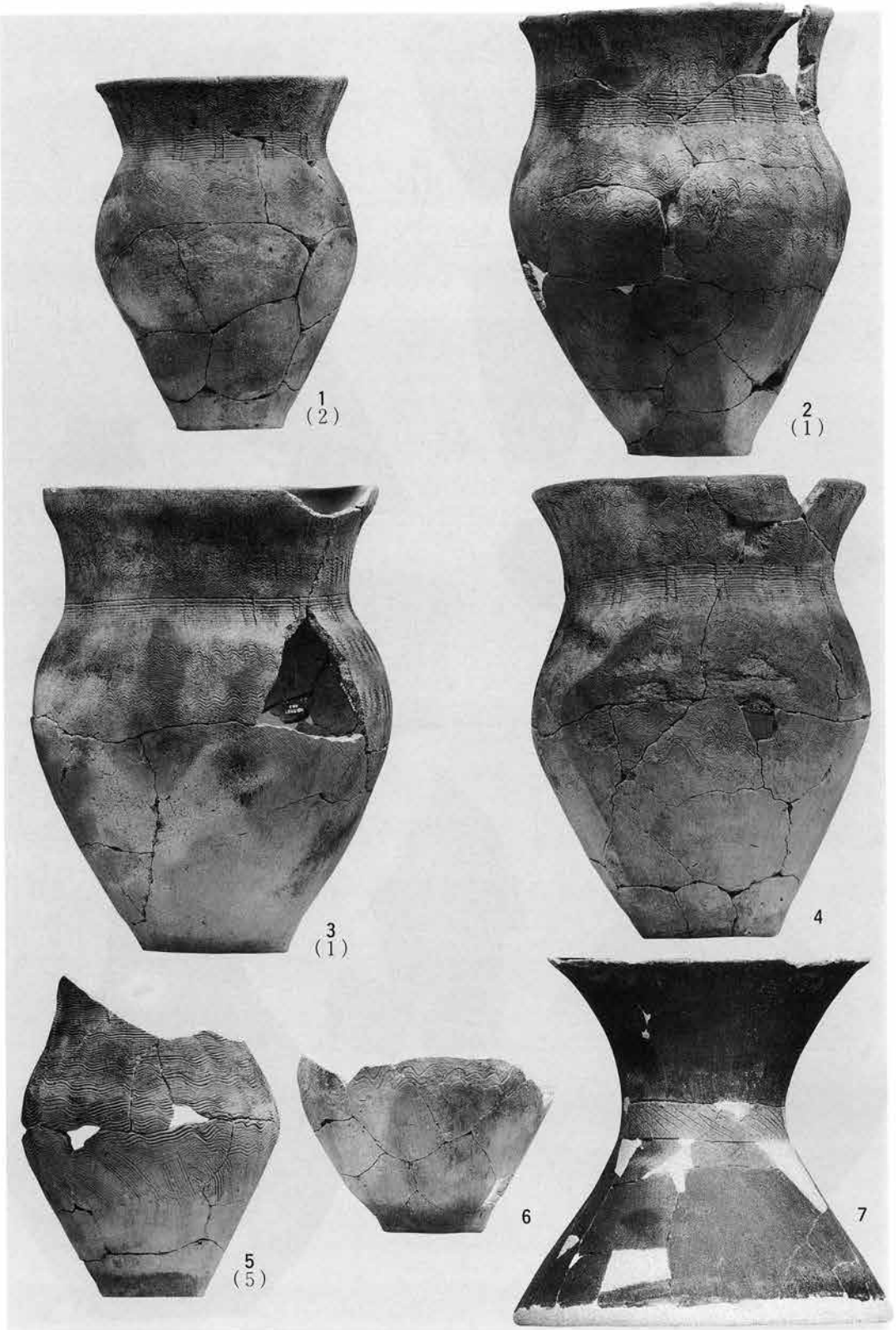
H１１３号住居址出土遺物

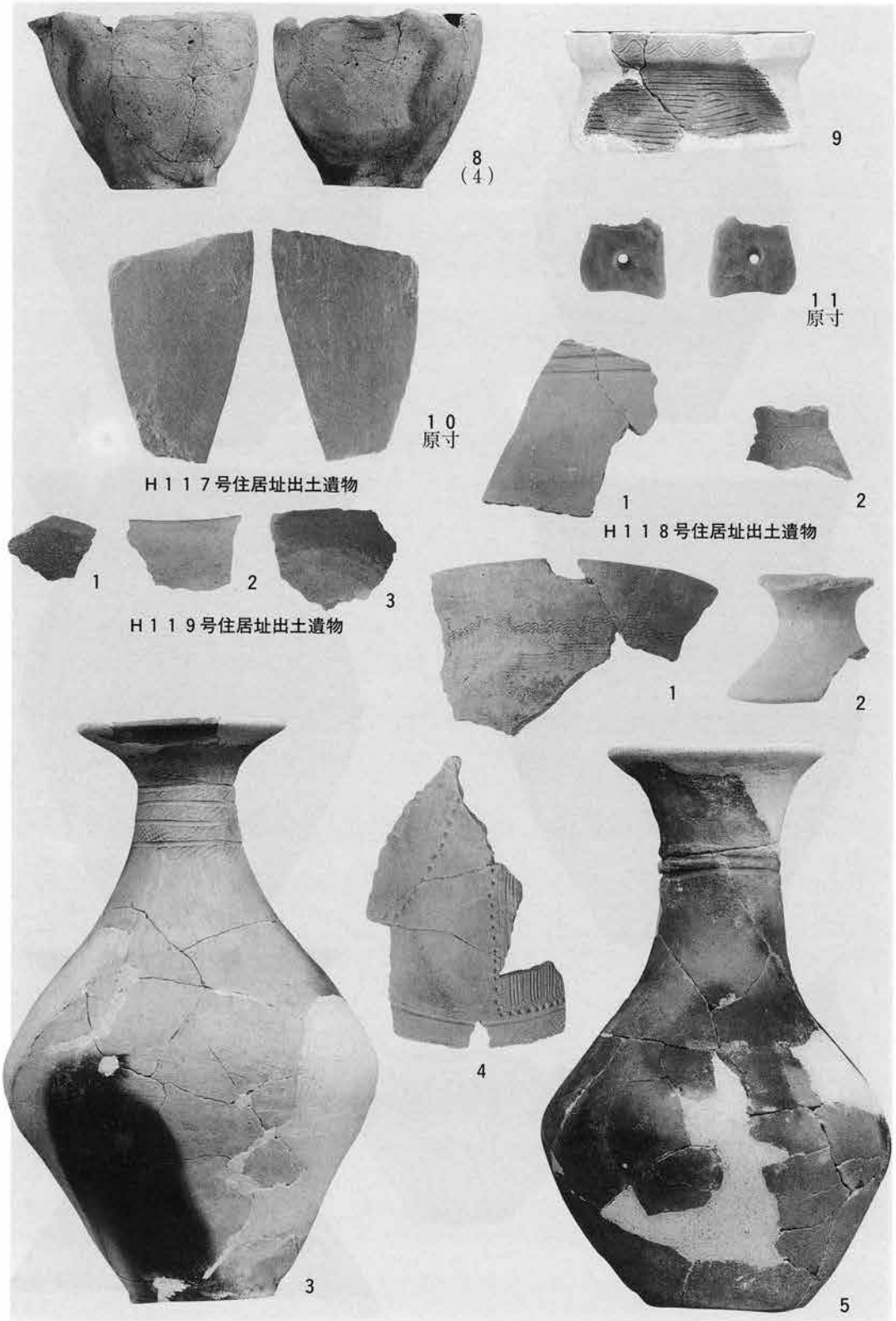


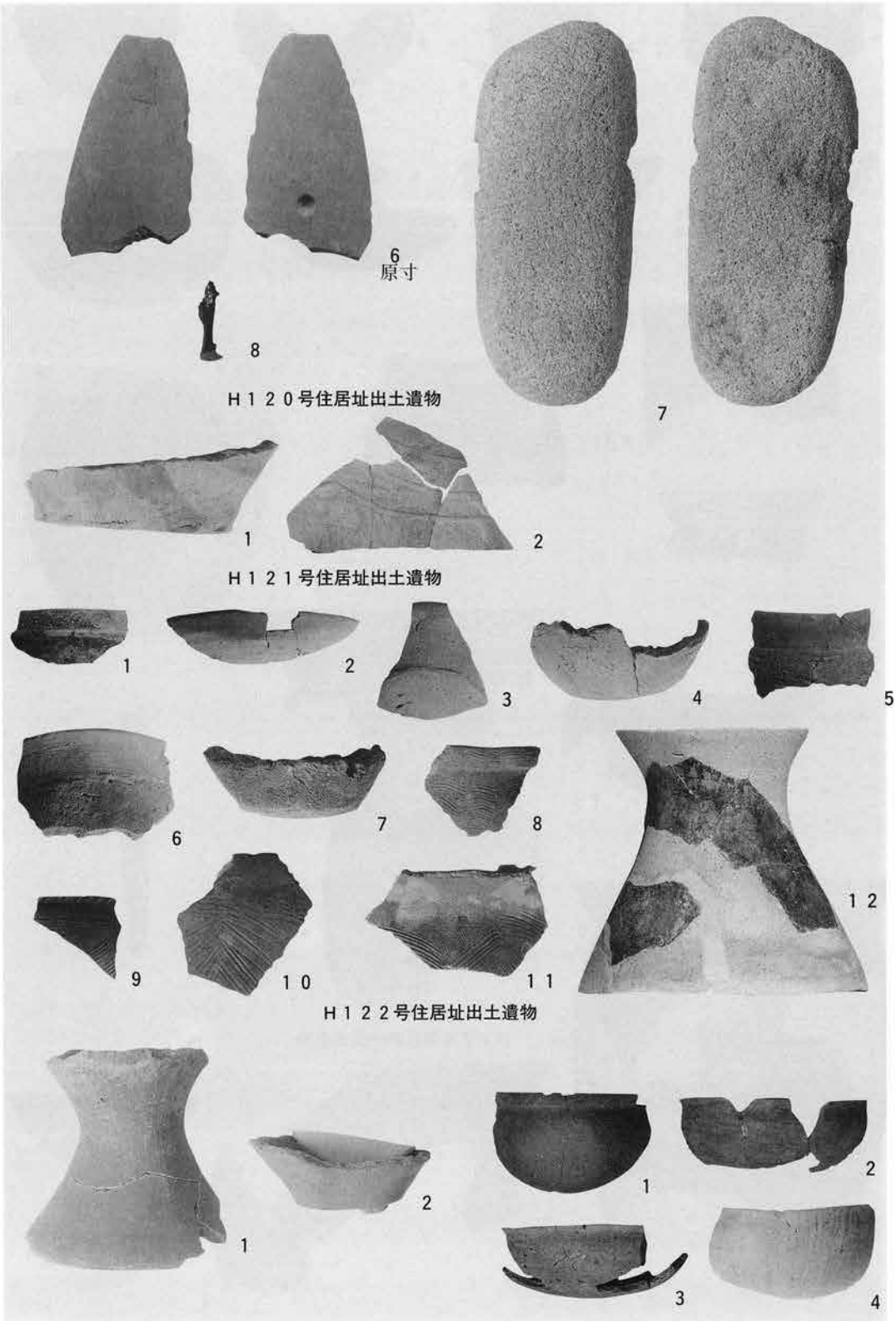


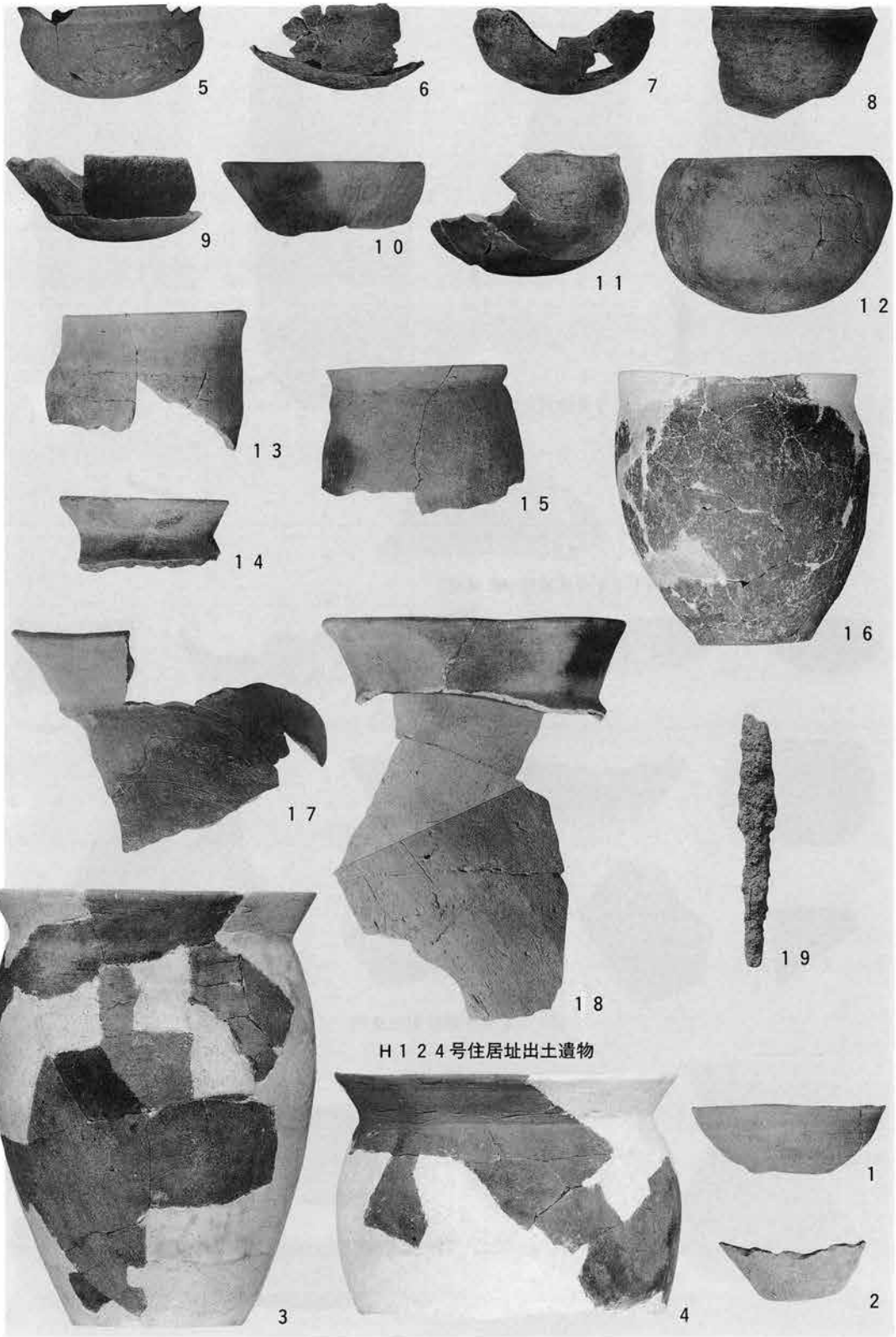
1　H１１４号住居址出土遺物


10
H115号住居址出土遺物
3
4
2
1
5
6
7
8
10
11
9
12
13
14
15
16
H116号住居址出土遺物

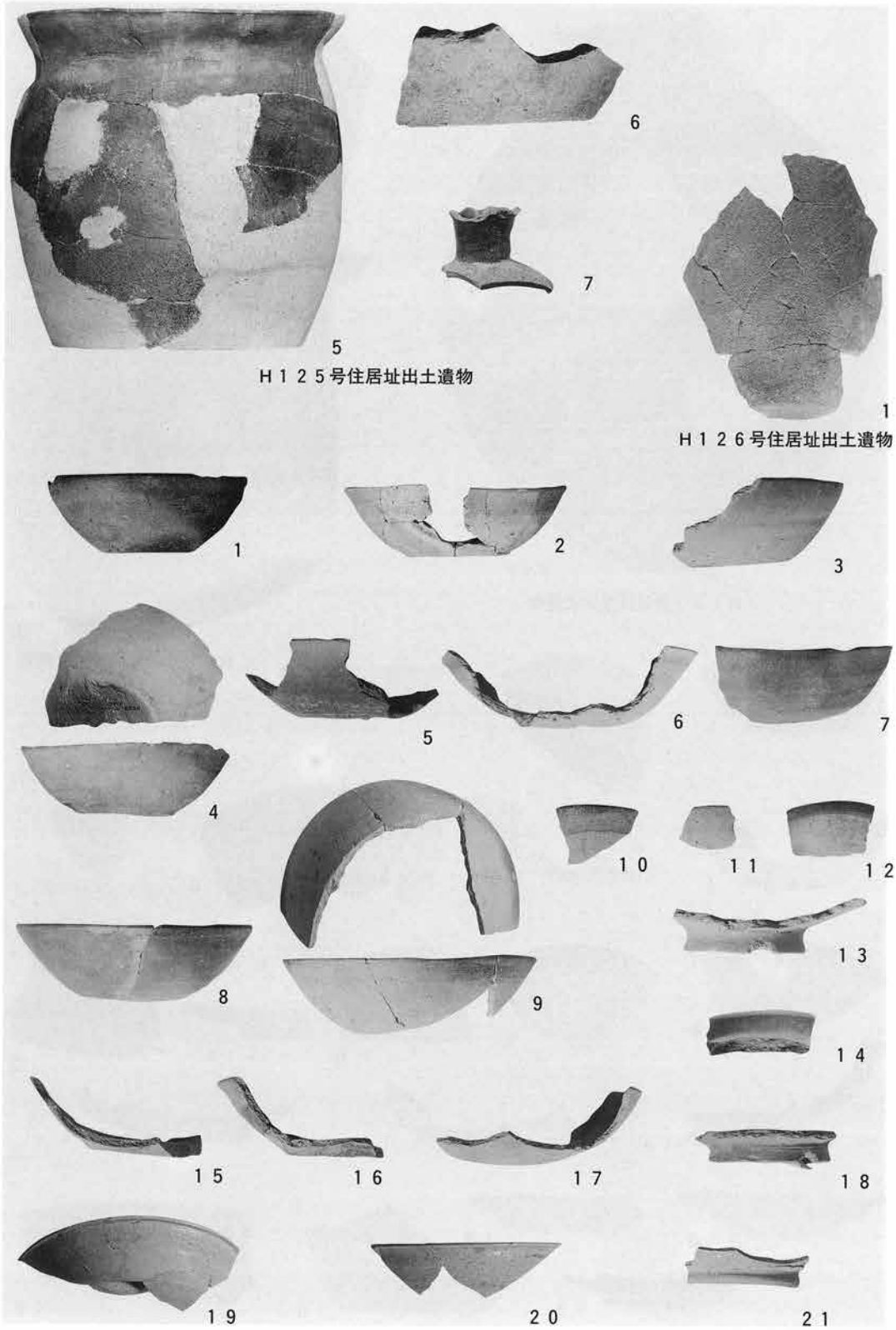

1
(2)
2
(1)
3
(1)
4
5
(5)
6
7

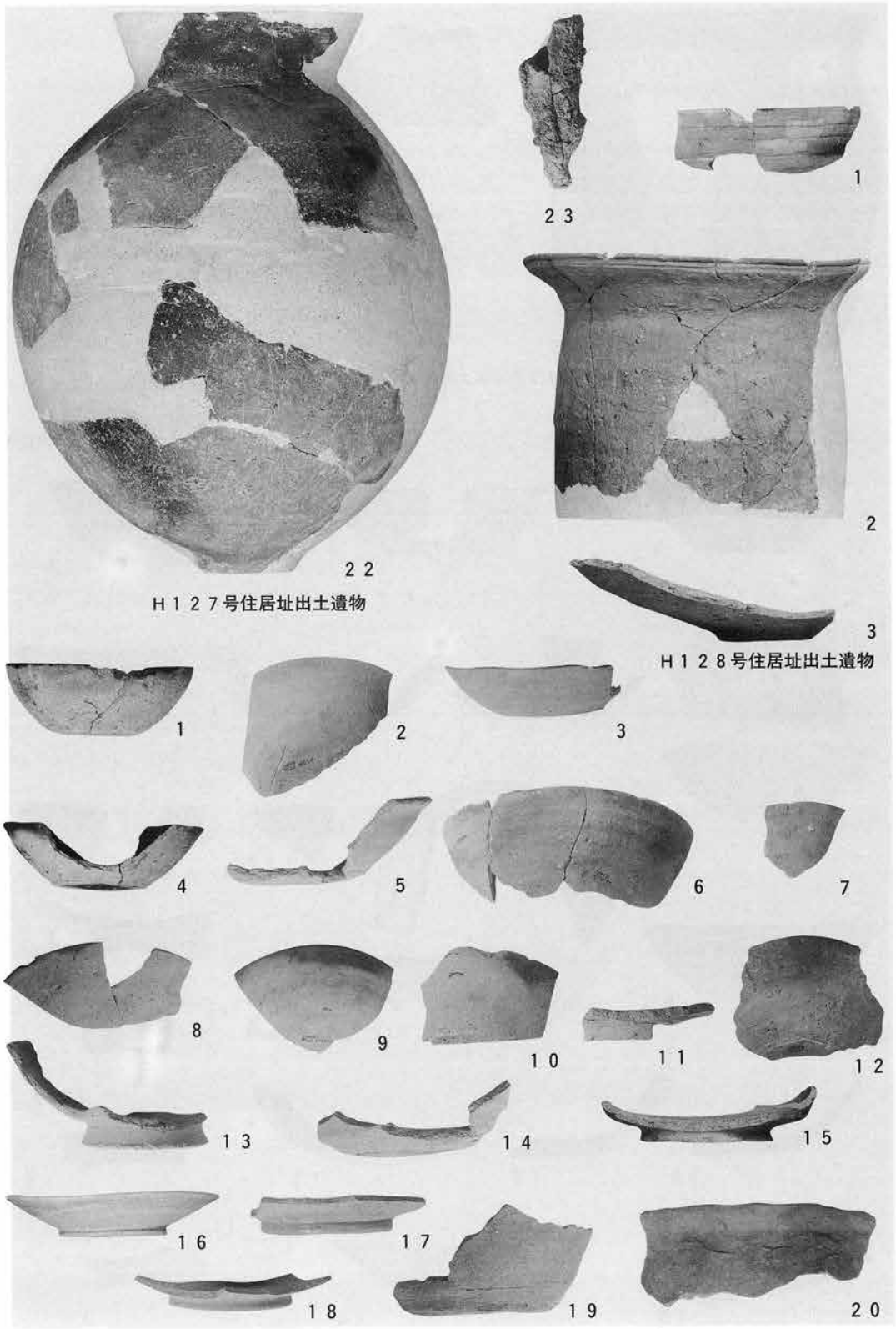

8
(4)
9
11
原寸
10
原寸
H１１７号住居址出土遺物
1
2
H１１８号住居址出土遺物
1
2
3
H１１９号住居址出土遺物
1
2
3
4
5

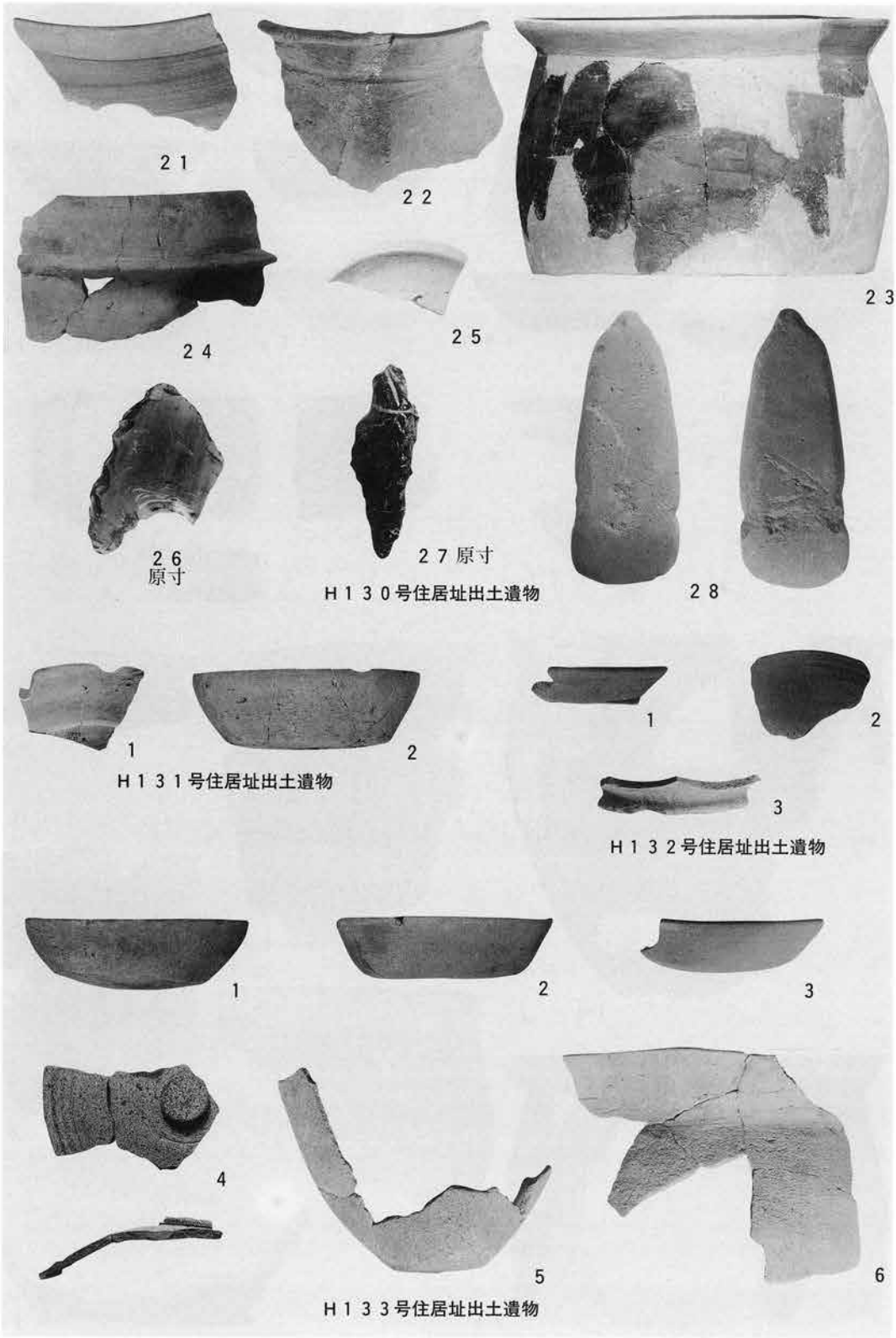

6
原寸
8
7
H１２０号住居址出土遺物
1
2
H１２１号住居址出土遺物
1
2
3
4
5
6
7
8
9
１０
１１
１２
H１２２号住居址出土遺物
1
2
1
2
3
4

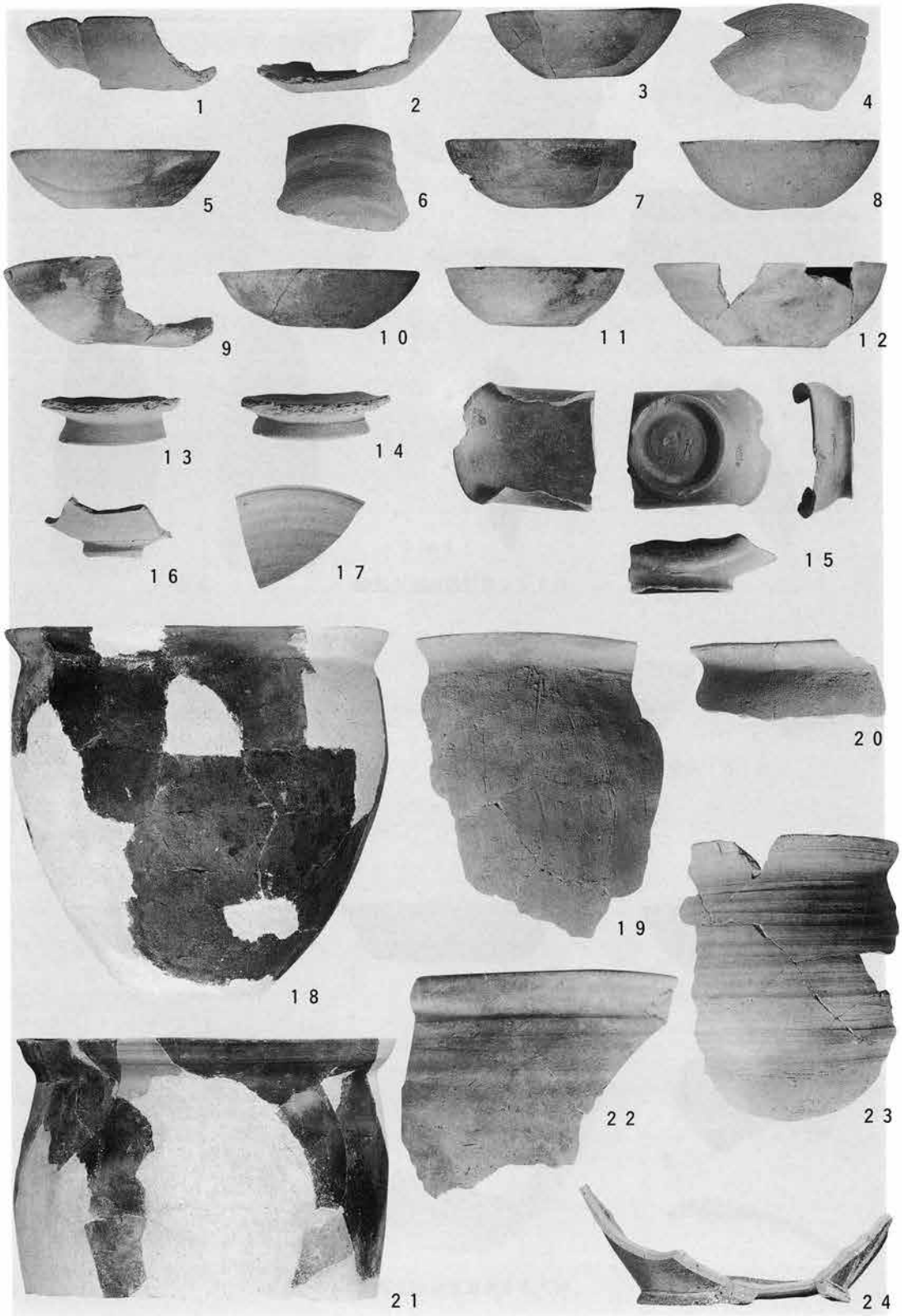


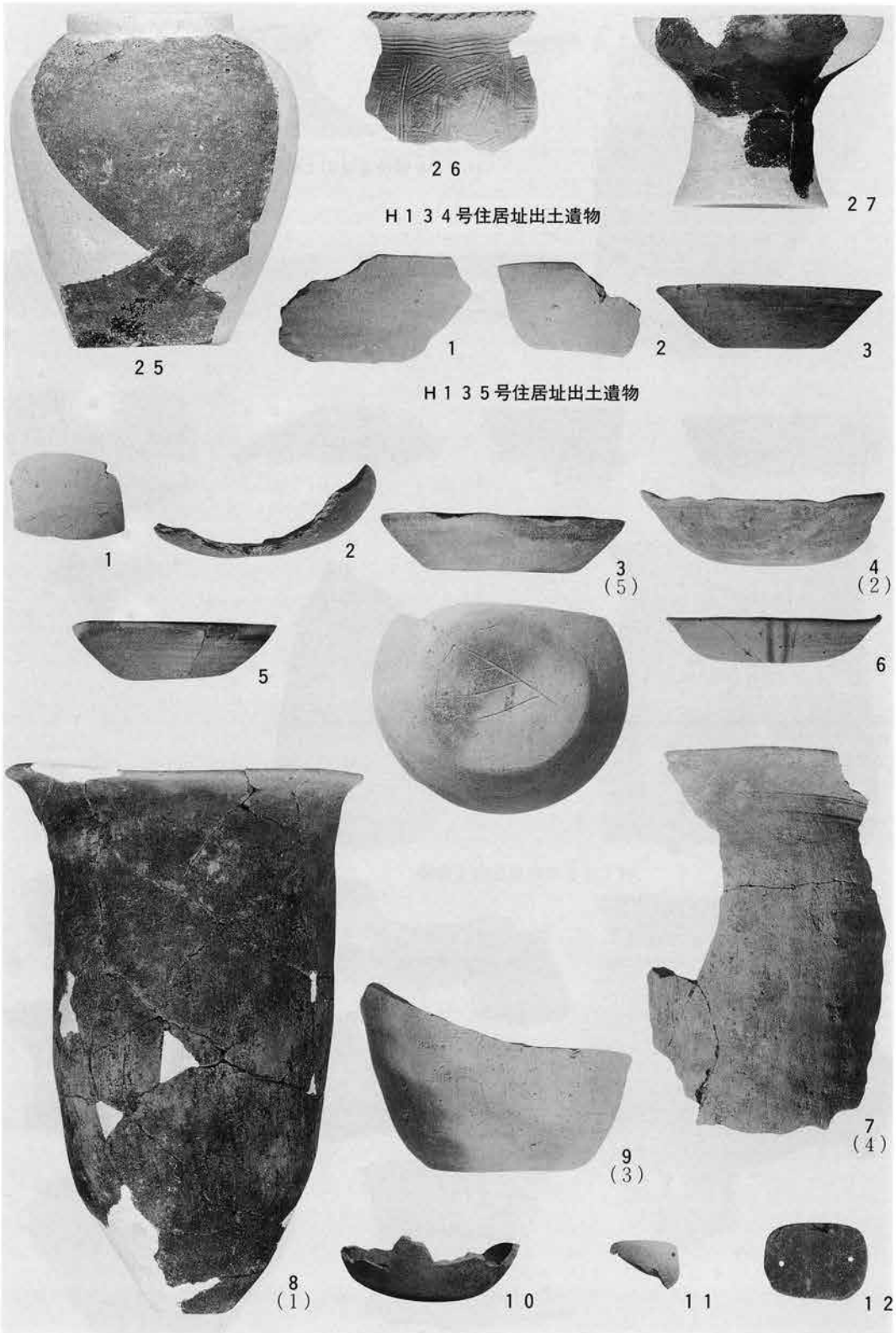
H１２４号住居址出土遺物

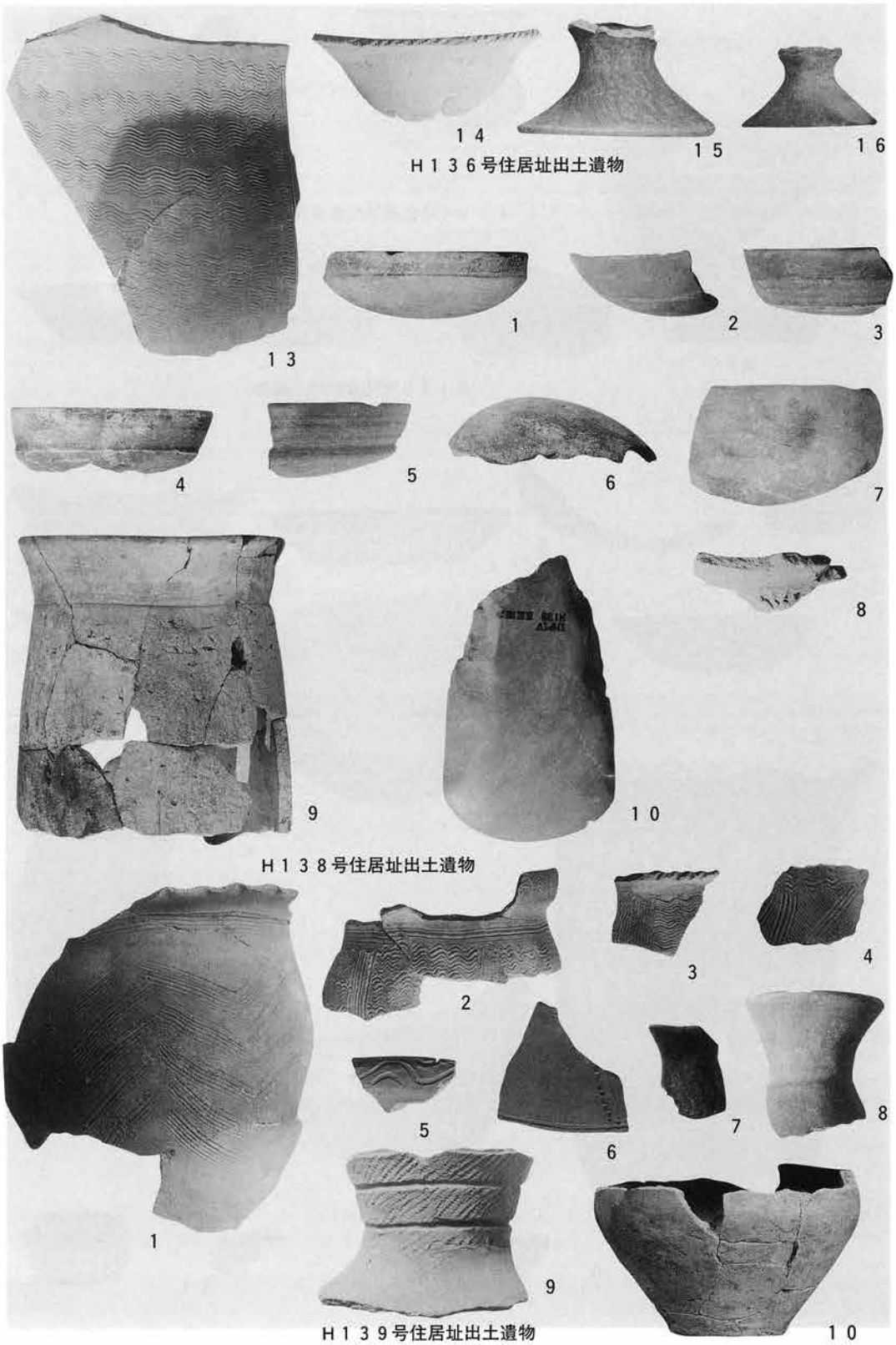

5
6
7
H１２５号住居址出土遺物
1
H１２６号住居址出土遺物
1
2
3
4
5
6
7
8
9
１０
１１
１２
１３
１４
１５
１６
１７
１８
１９
２０
２１

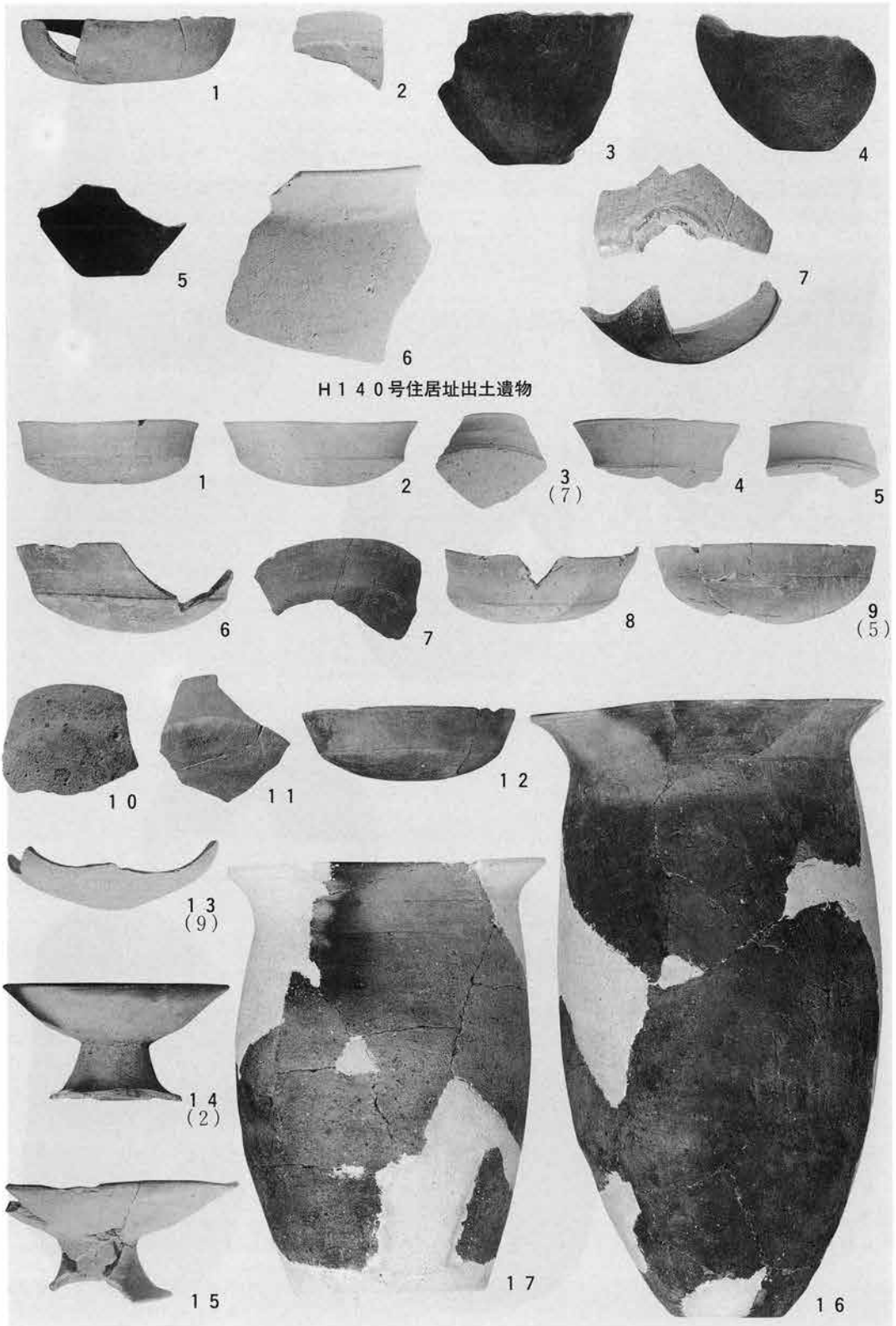

22
H127号住居址出土遺物
23
1
2
3
H128号住居址出土遺物
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20

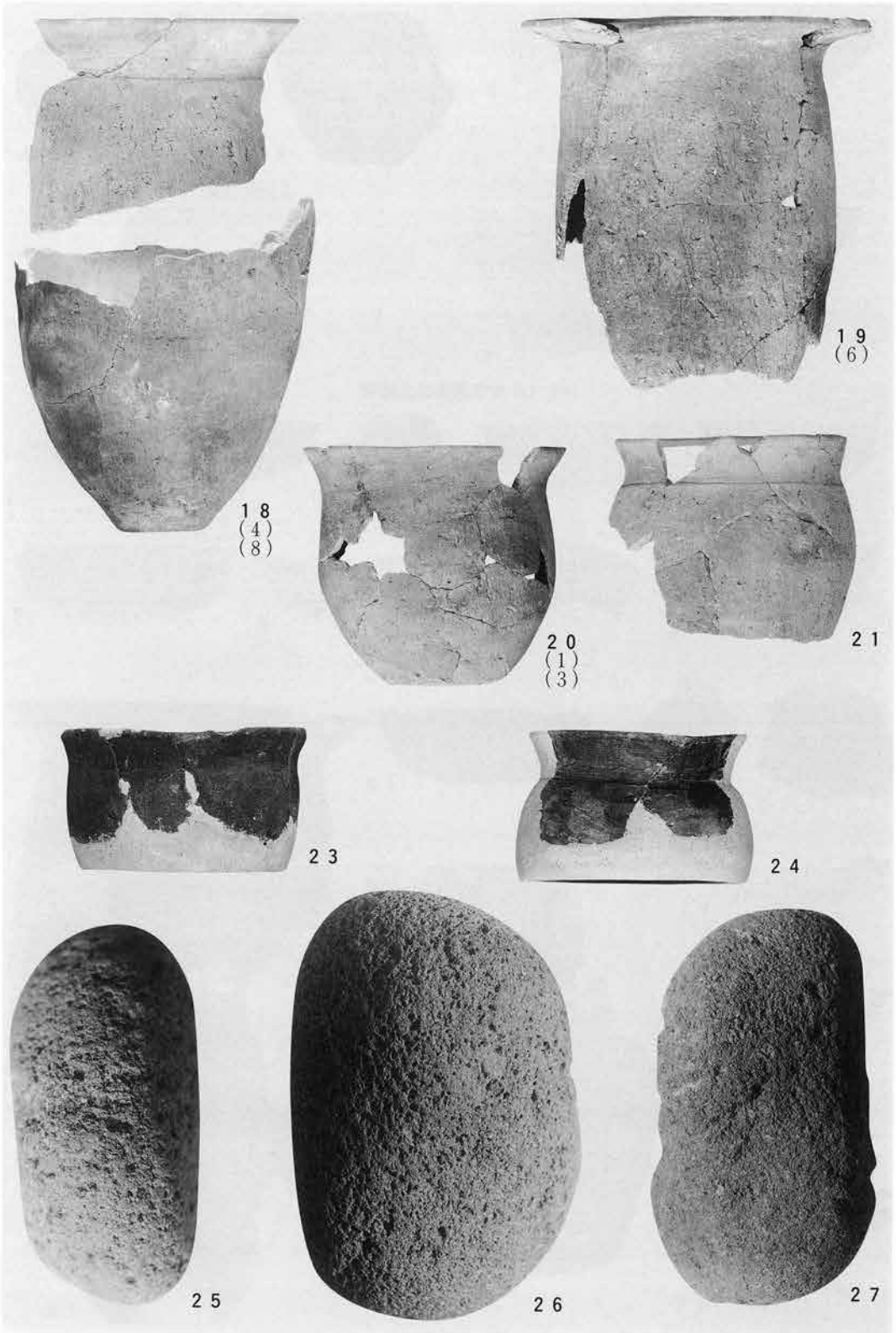

21
22
23
24
25
26
原寸
27 原寸
28
H130号住居址出土遺物
1
2
H131号住居址出土遺物
1
2
3
H132号住居址出土遺物
1
2
3
4
5
6
H133号住居址出土遺物

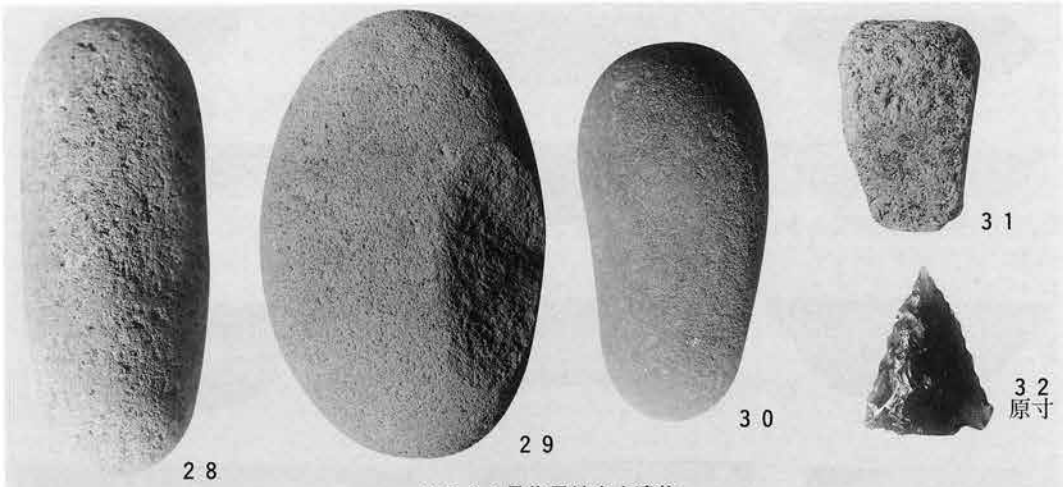

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24


26
27
H134号住居址出土遺物
25
1
2
3
H135号住居址出土遺物
1
2
3
(5)
4
(2)
5
6
8
(1)
9
(3)
7
(4)
10
11
12


13
14
15
16
H１３６号住居址出土遺物
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
H１３８号住居址出土遺物
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
H１３９号住居址出土遺物

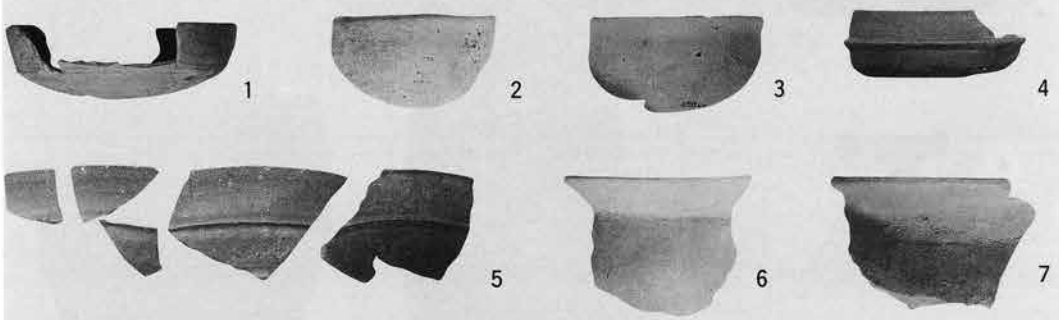

1
2
3
4
5
6
7
H１４０号住居址出土遺物
1
2
3
(7)
4
5
6
7
8
9
(5)
10
11
12
13
(9)
14
(2)
15
17
16


18
(4)
(8)
19
(6)
20
(1)
(3)
21
23
24
25
26
27

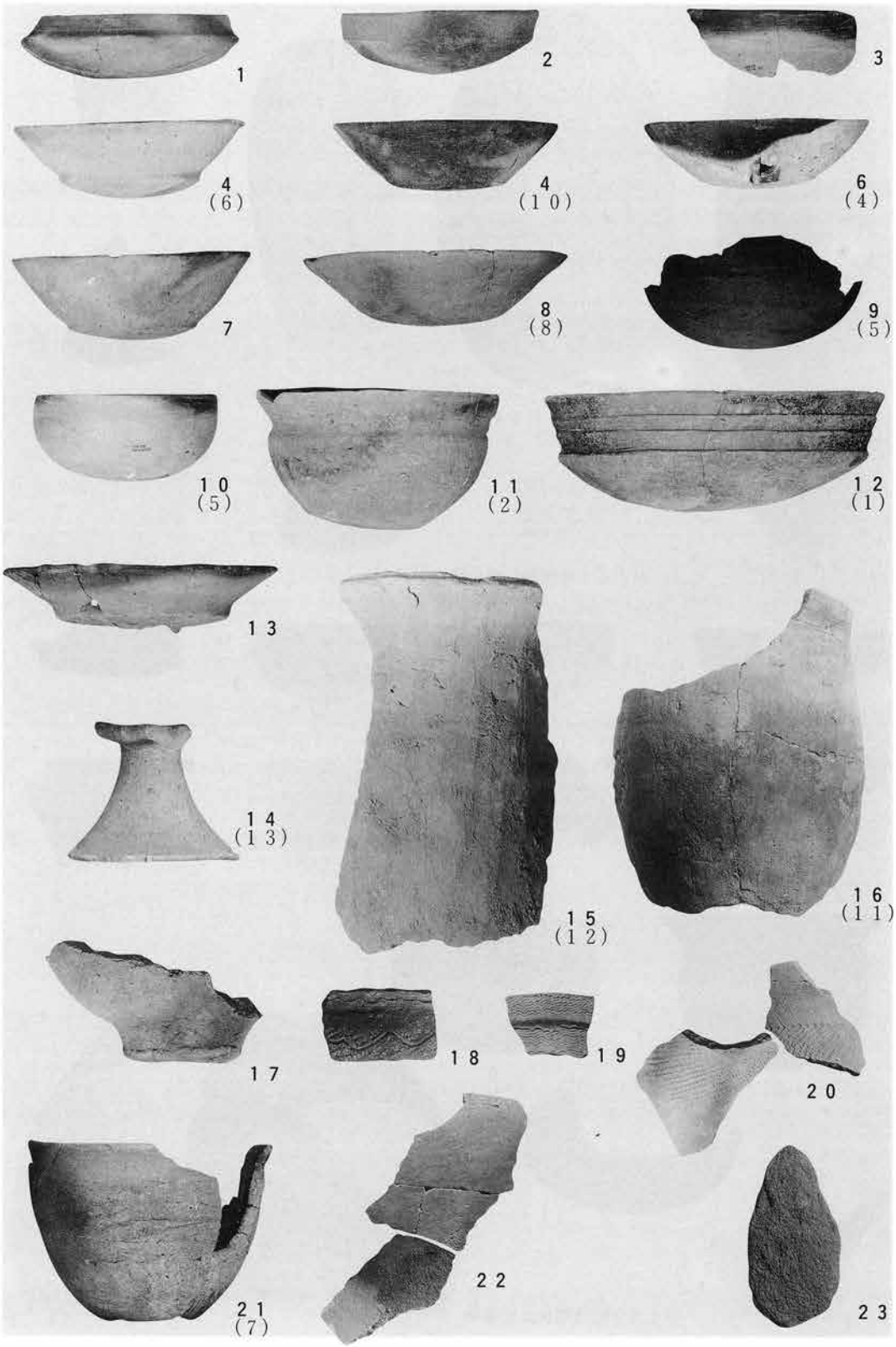


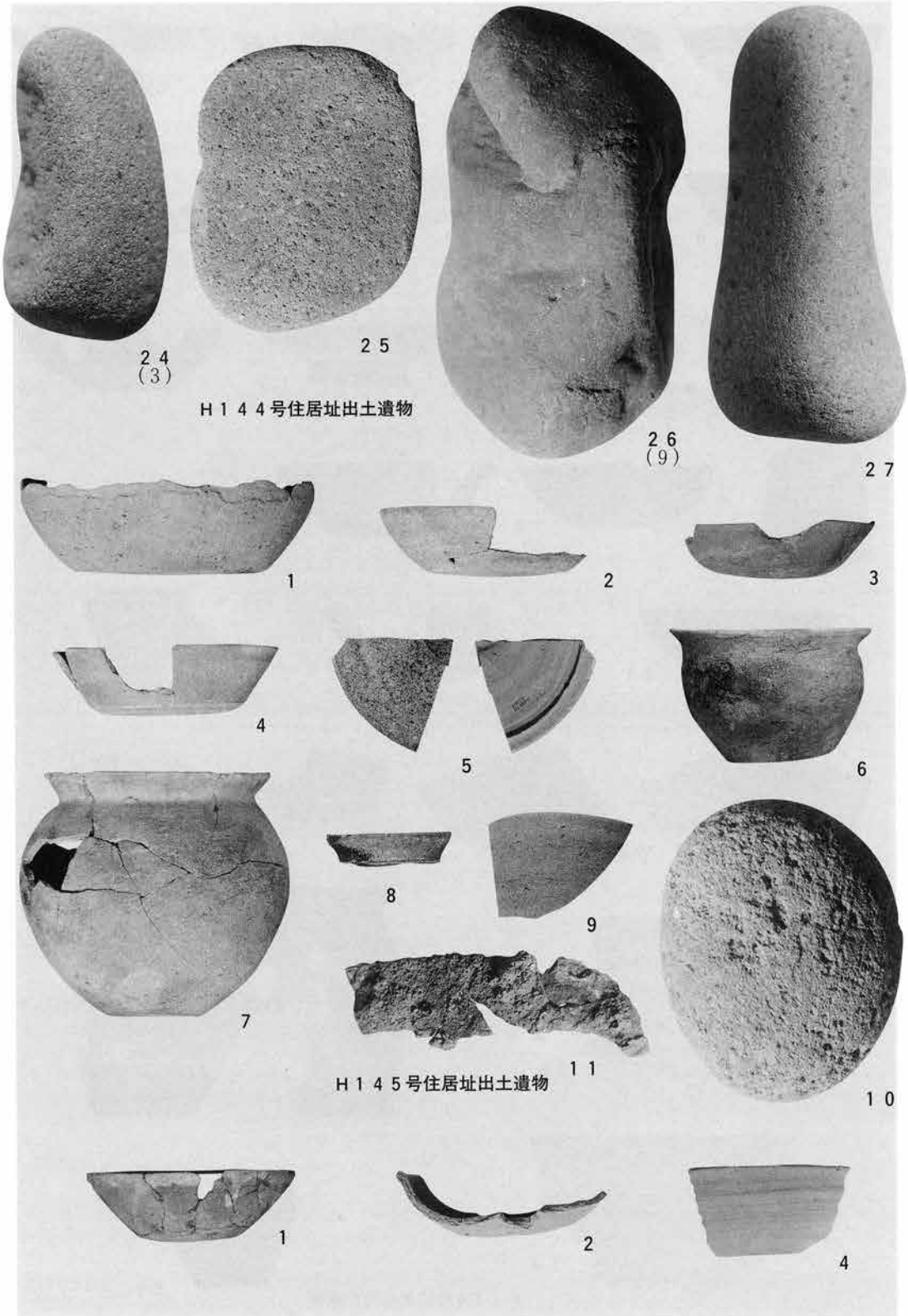
H１４１号住居址出土遺物

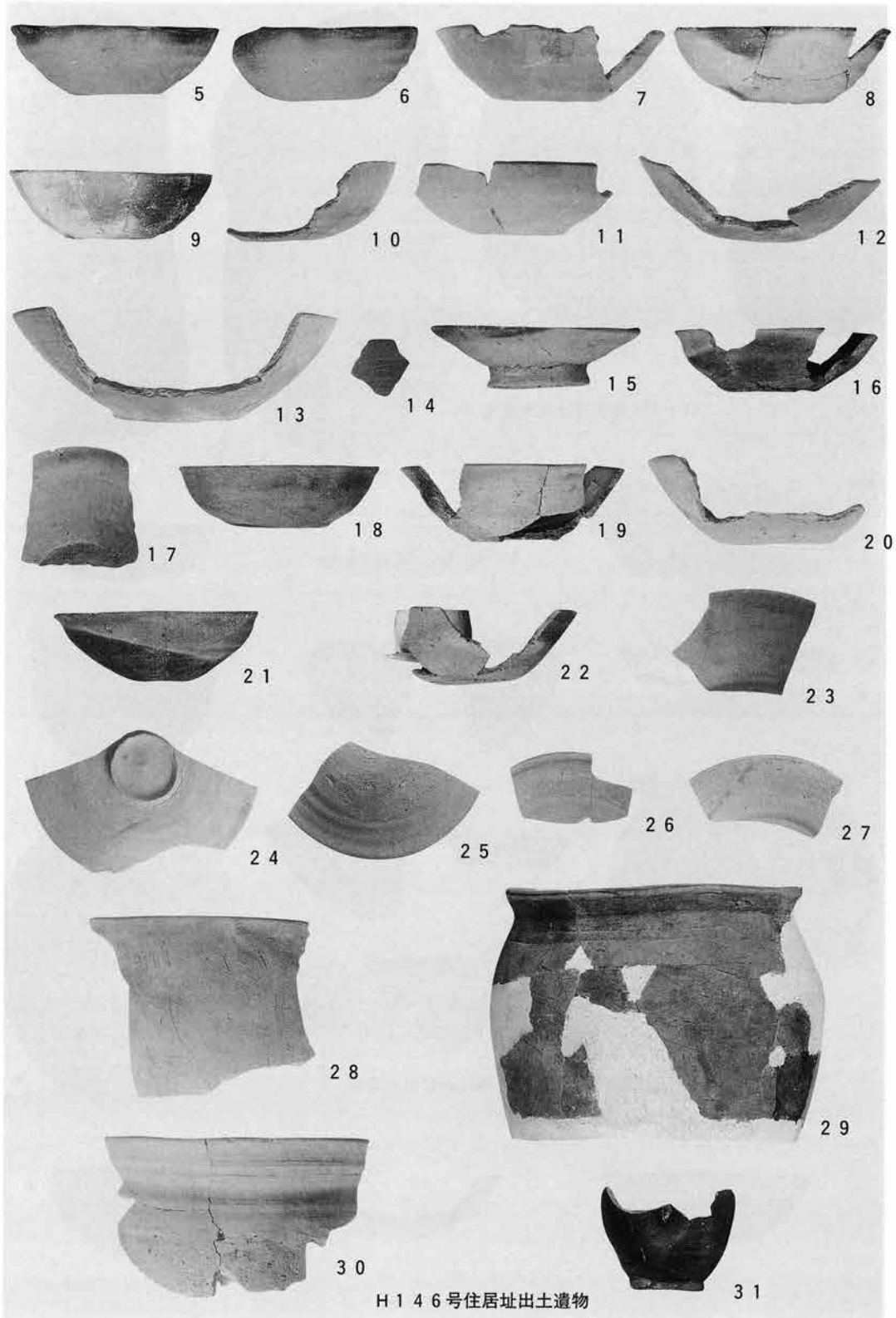
H１４２号住居址出土遺物



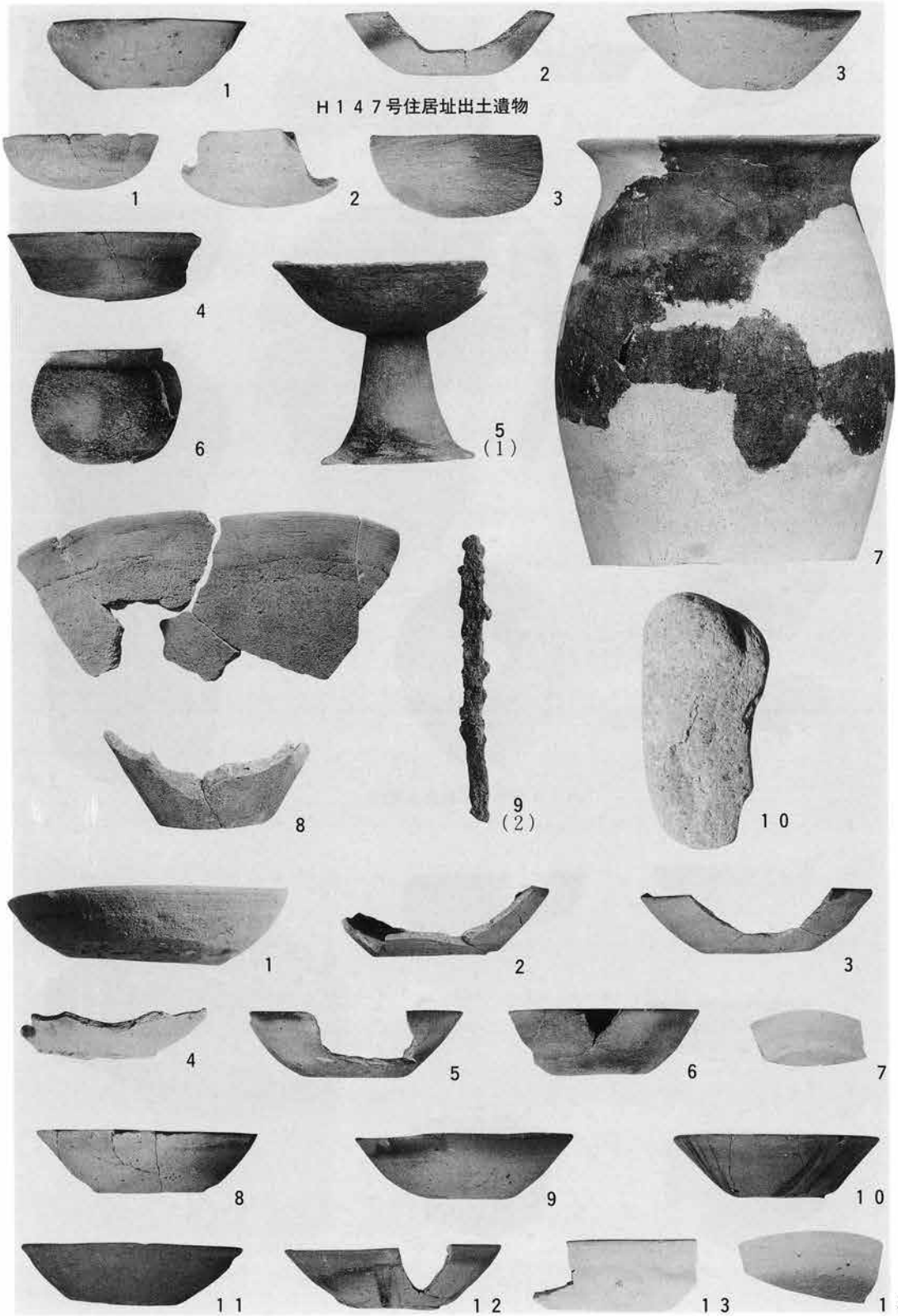
H１４３号住居址出土遺物

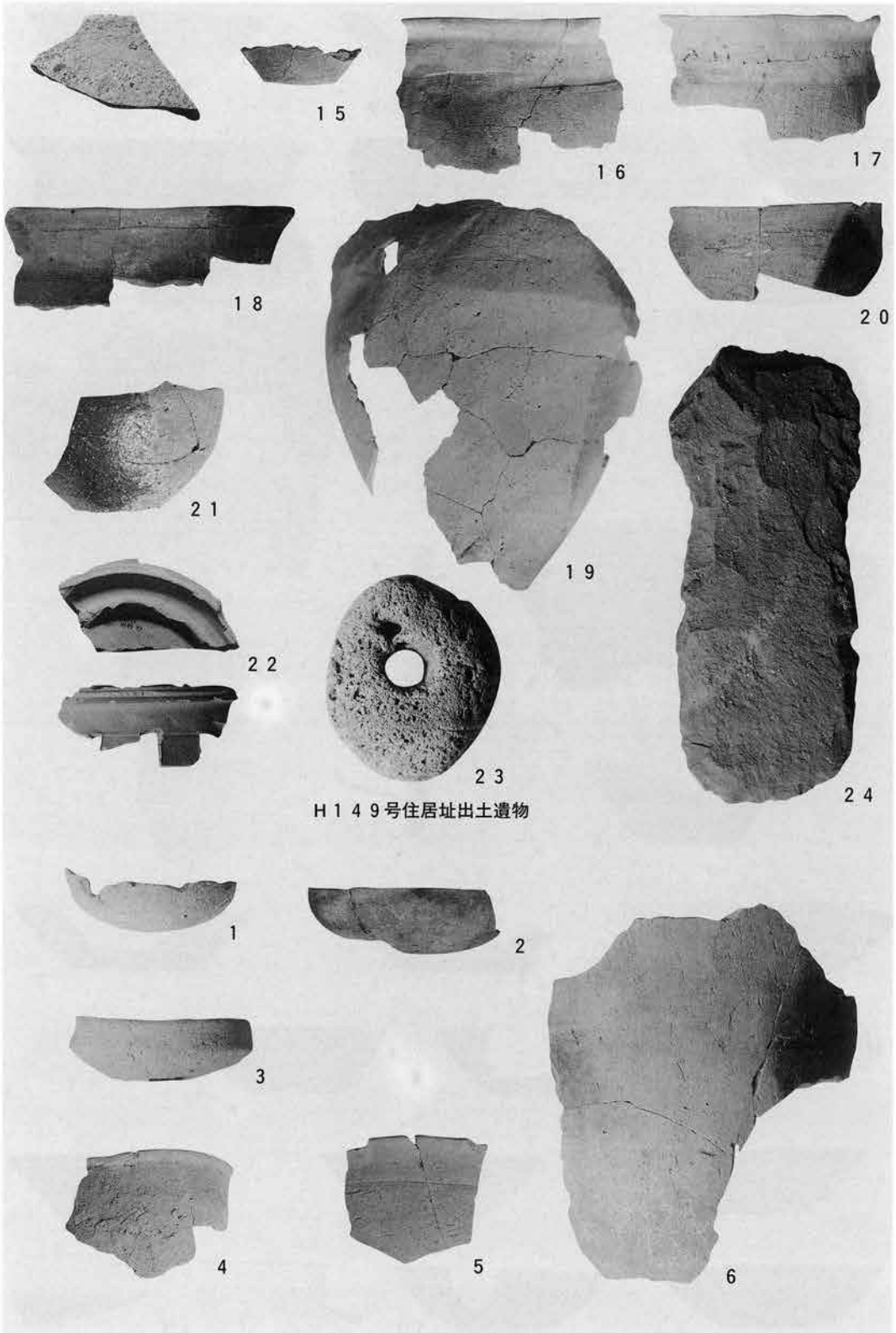

1
2
3
4
(6)
4
(10)
6
(4)
7
8
(8)
9
(5)
10
(5)
11
(2)
12
(1)
13
14
(13)
15
(12)
16
(11)
17
18
19
20
21
(7)
22
23


24
(3)
25
26
(9)
27
H144号住居址出土遺物
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
H145号住居址出土遺物
1
2
4



H１４６号住居址出土遺物


1
2
3
H１４７号住居址出土遺物
1
2
3
4
5
(1)
6
7
8
9
(2)
10
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14


15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
H149号住居址出土遺物
1
2
3
4
5
6

7

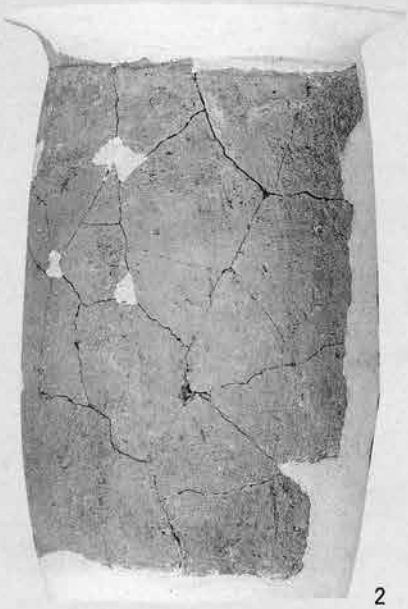
8

H１５０号住居址出土遺物

1

H１５１号住居址出土遺物

1



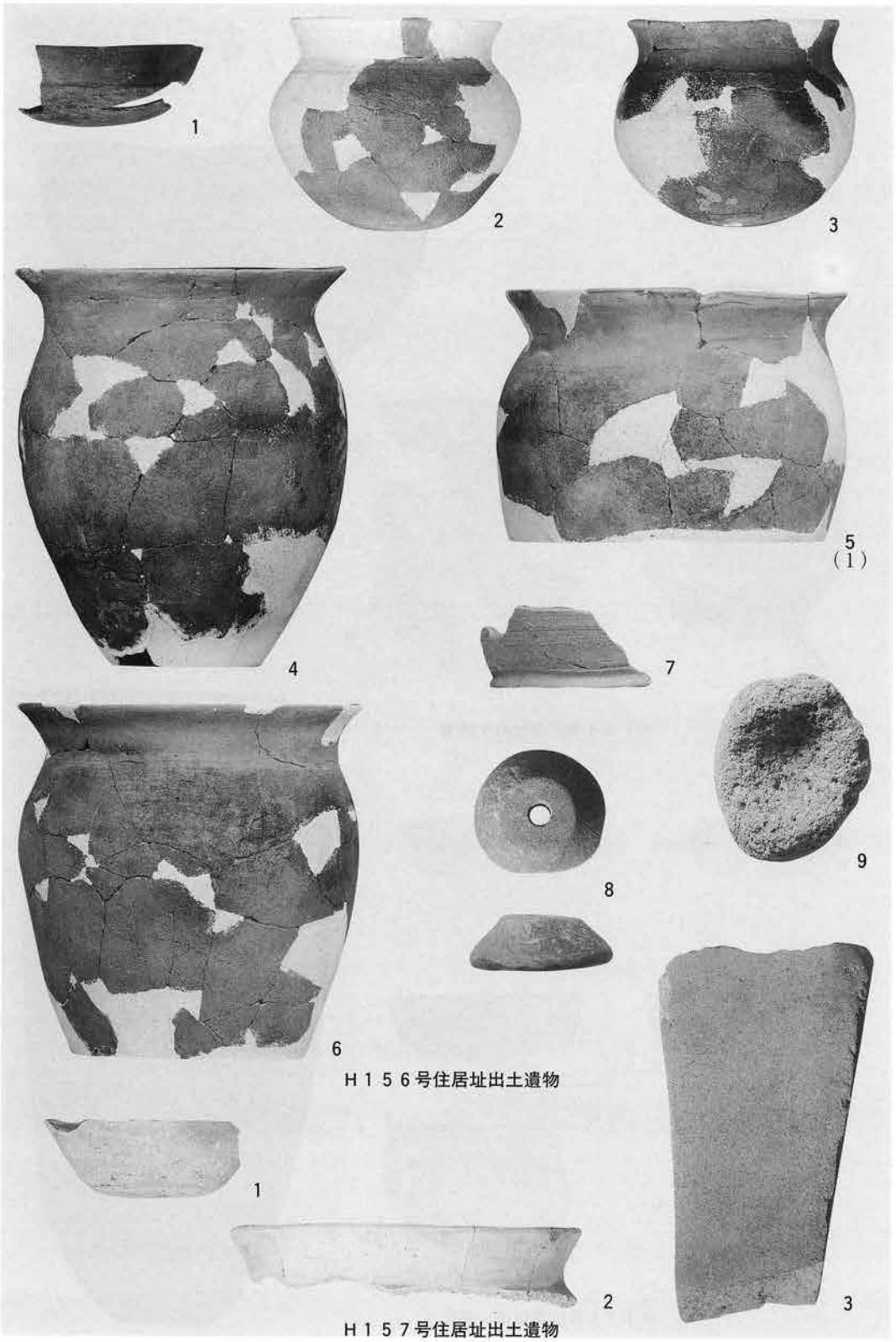
2

3

4

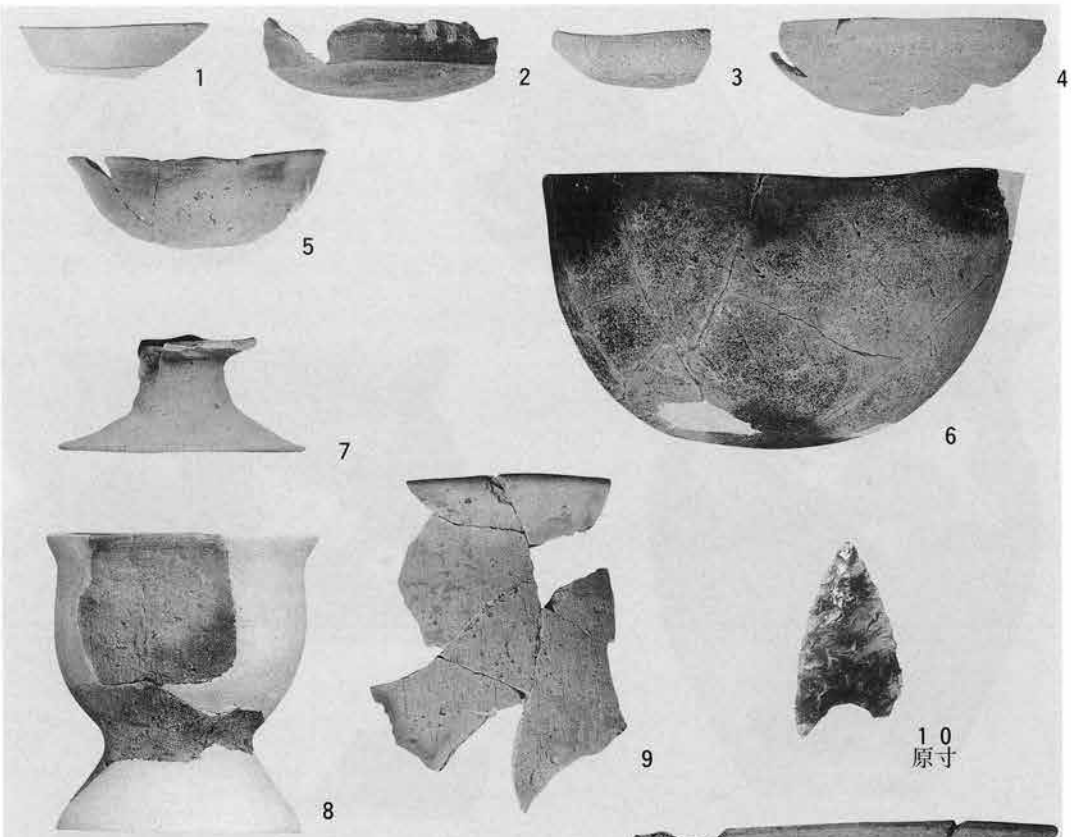
H１５０号住居址出土遺物

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
H１５３号住居址出土遺物
1
2
3
4
5
6
H１５４号住居址出土遺物

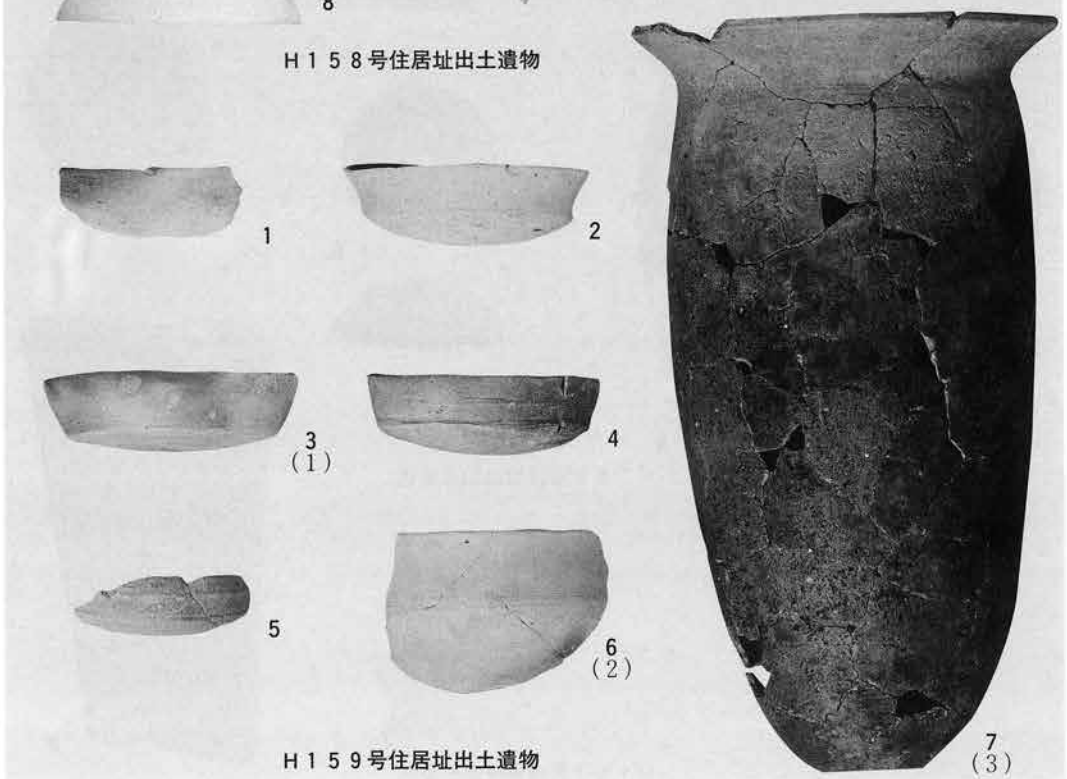


H１５６号住居址出土遺物

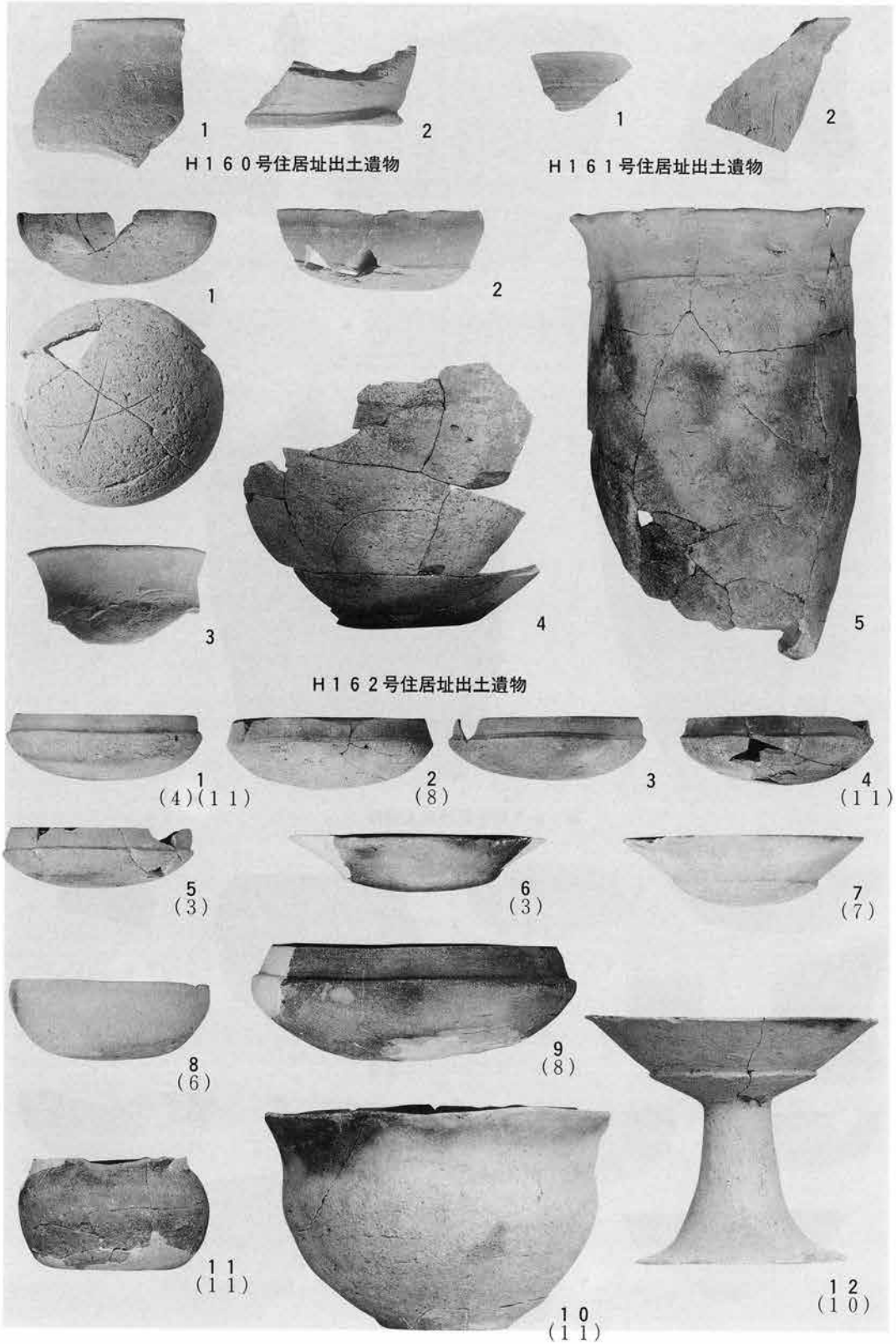
H１５７号住居址出土遺物

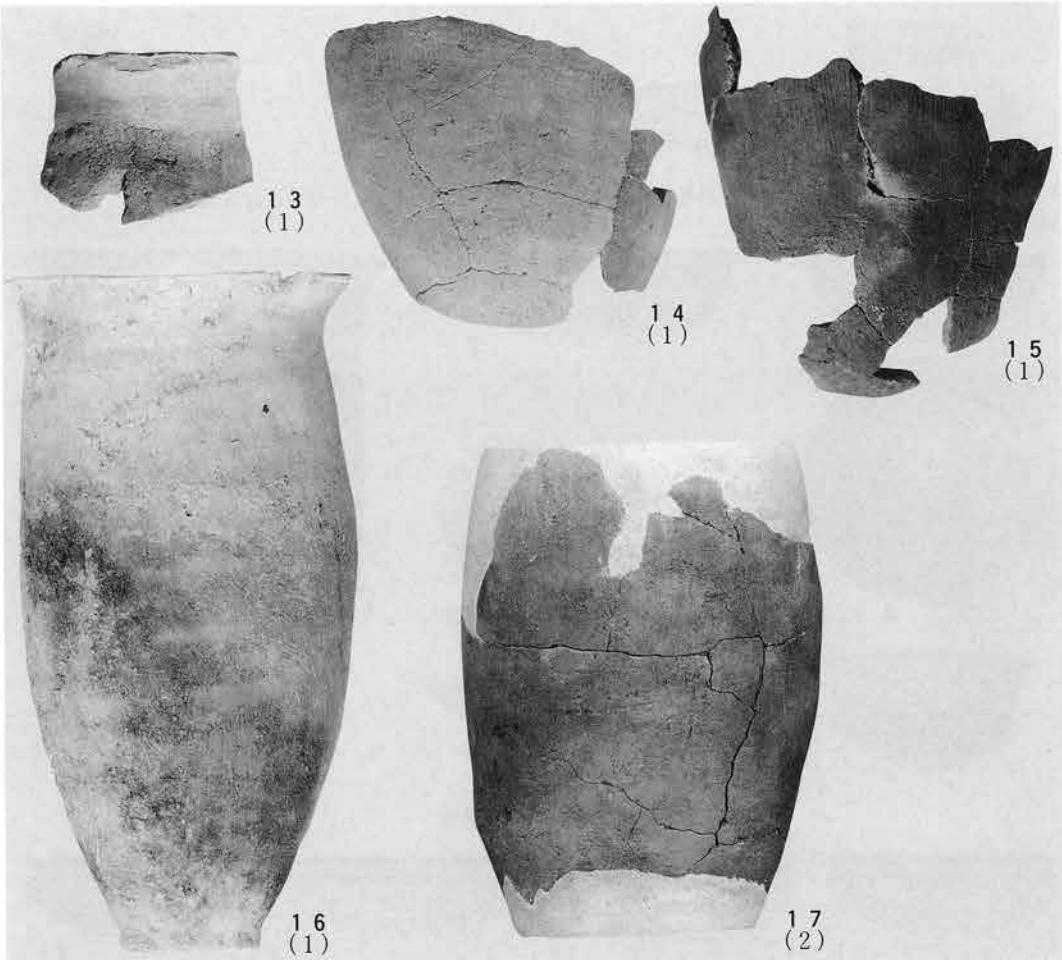


H１５８号住居址出土遺物

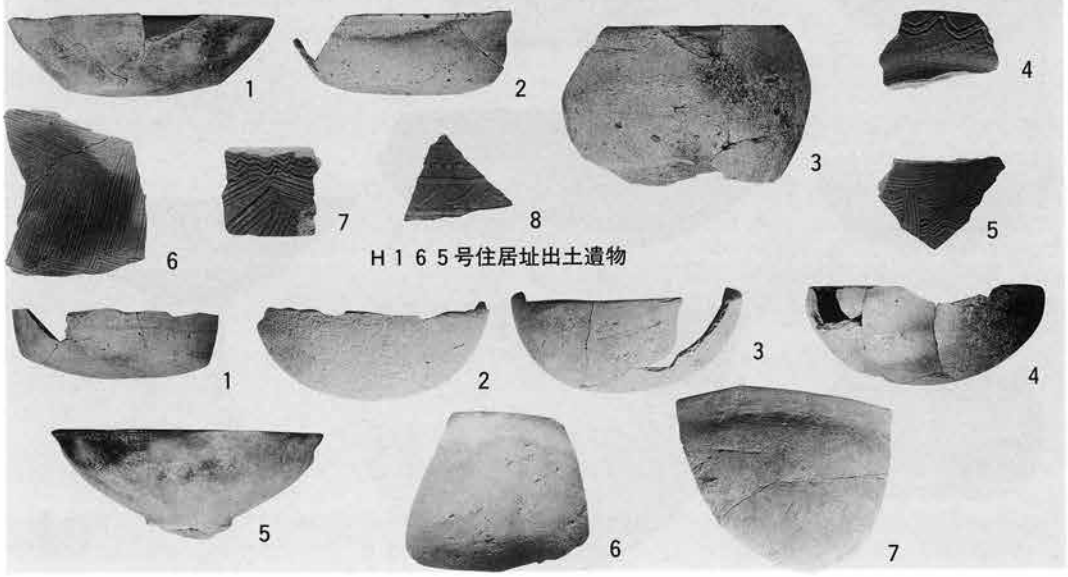


H１５９号住居址出土遺物

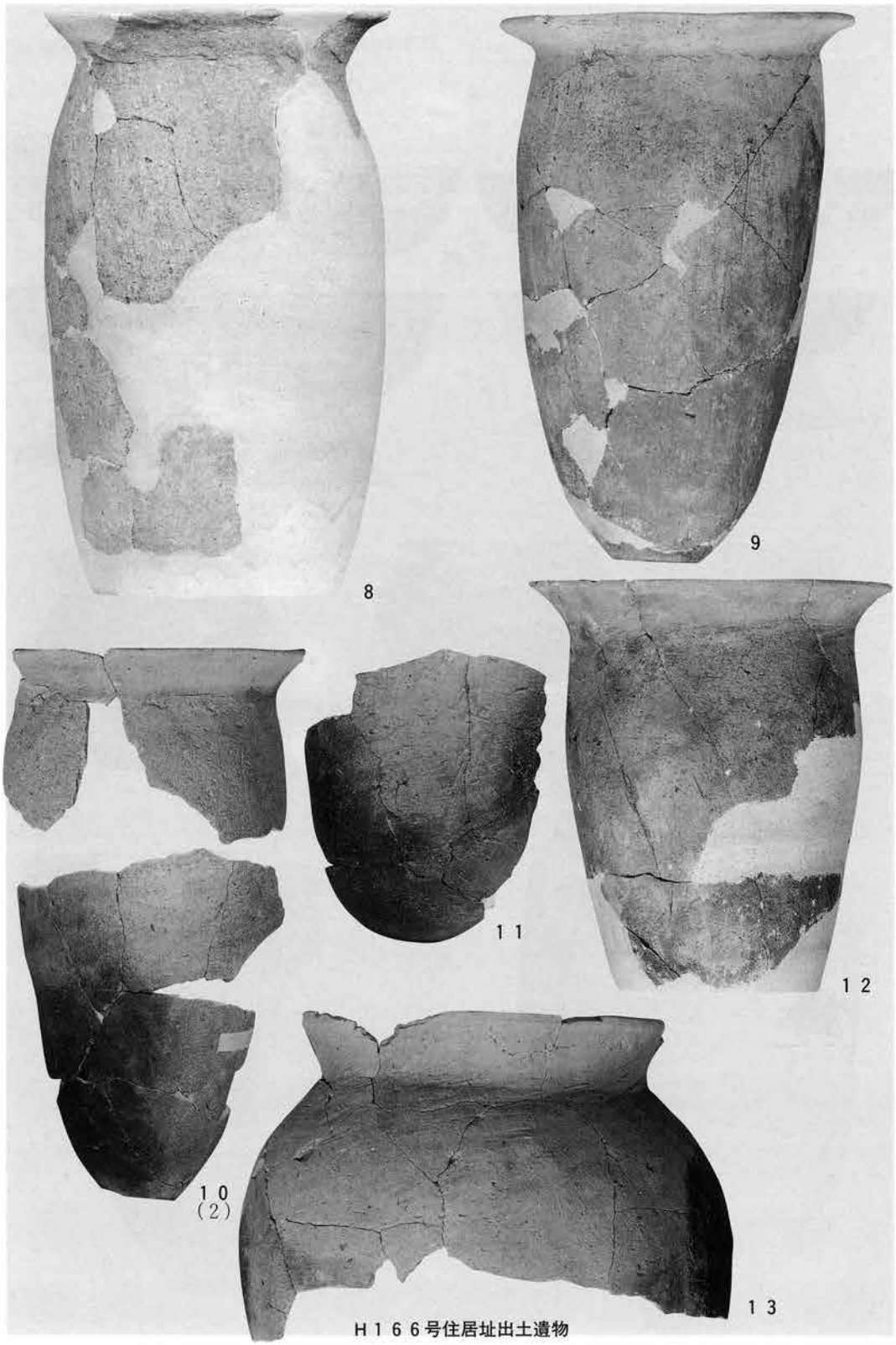

1
2
H１６０号住居址出土遺物
1
2
H１６１号住居址出土遺物
1
2
3
4
5
H１６２号住居址出土遺物
1
(4)(11)
2
(8)
3
4
(11)
5
(3)
6
(3)
7
(7)
8
(6)
9
(8)
11
(11)
10
(11)
12
(10)



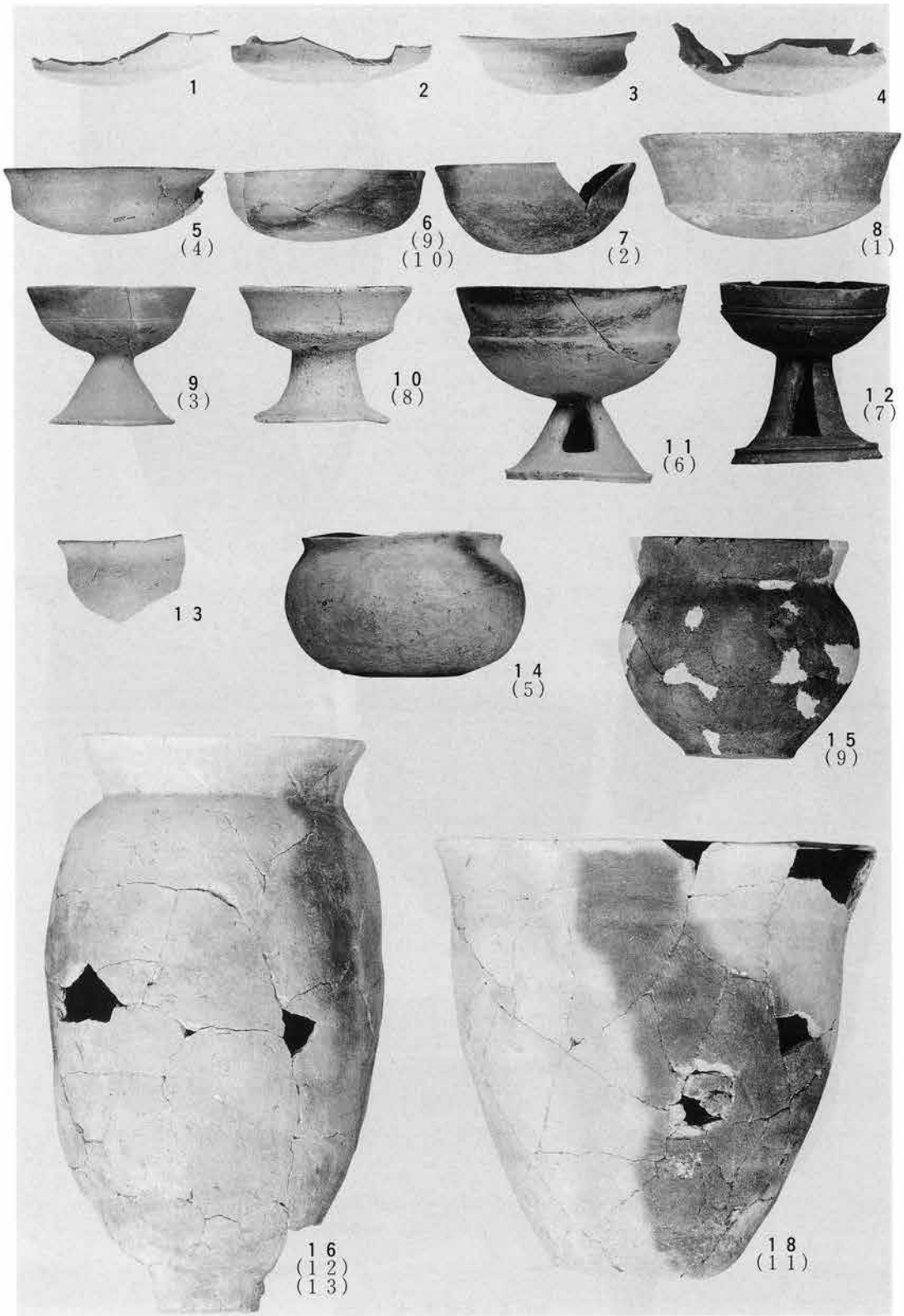
H１６３号住居址出土遺物

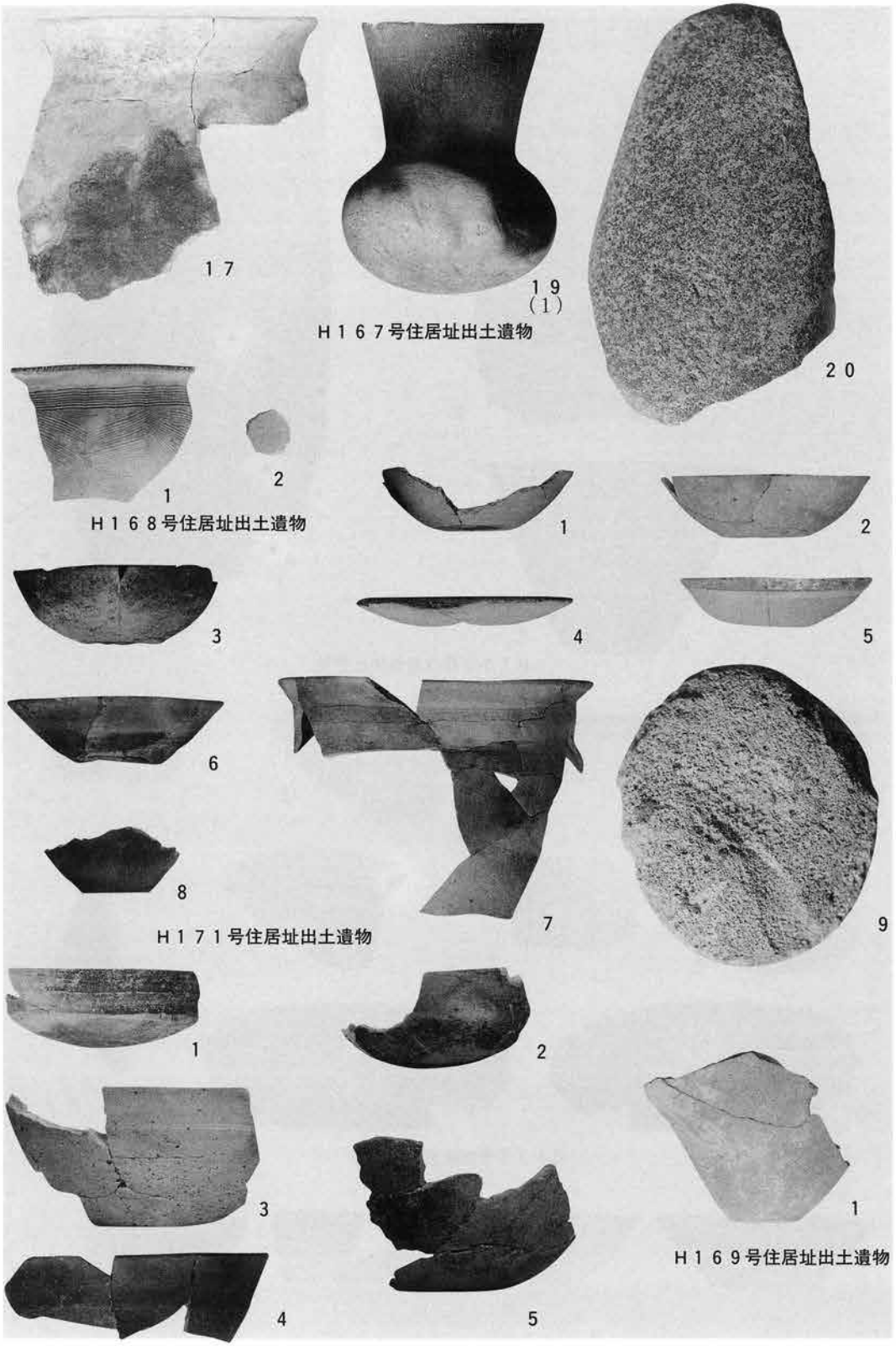


H１６５号住居址出土遺物

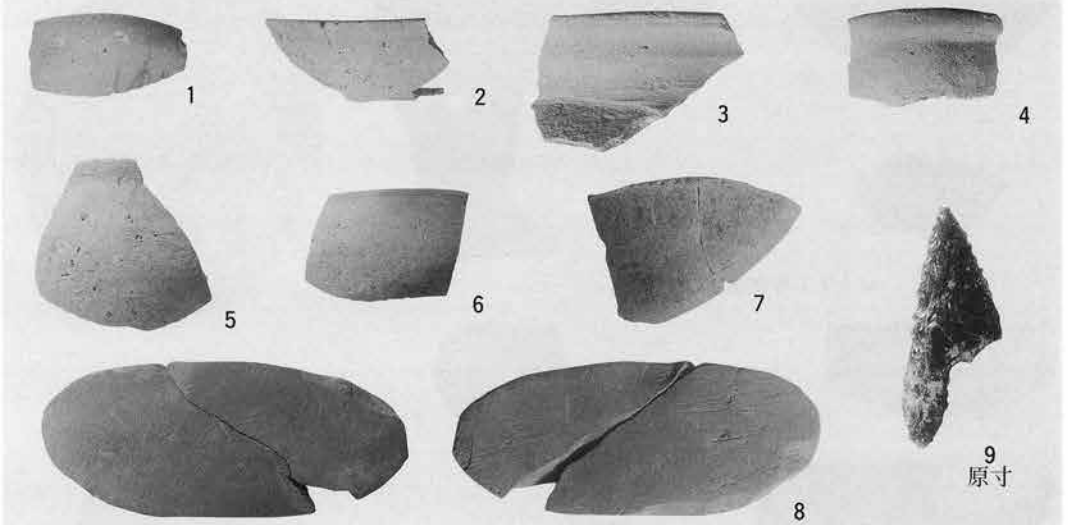


H１６６号住居址出土遺物

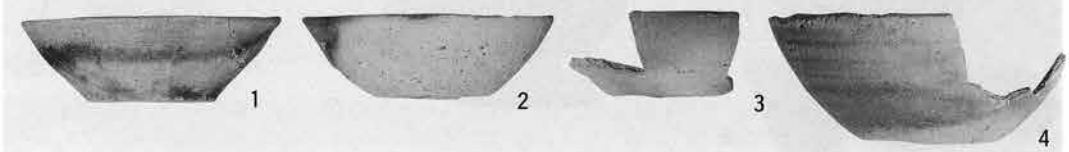

1
2
3
4
5
(4)
6
(9)
(10)
7
(2)
8
(1)
9
(3)
10
(8)
11
(6)
12
(7)
13
14
(5)
15
(9)
16
(12)
(13)
18
(11)

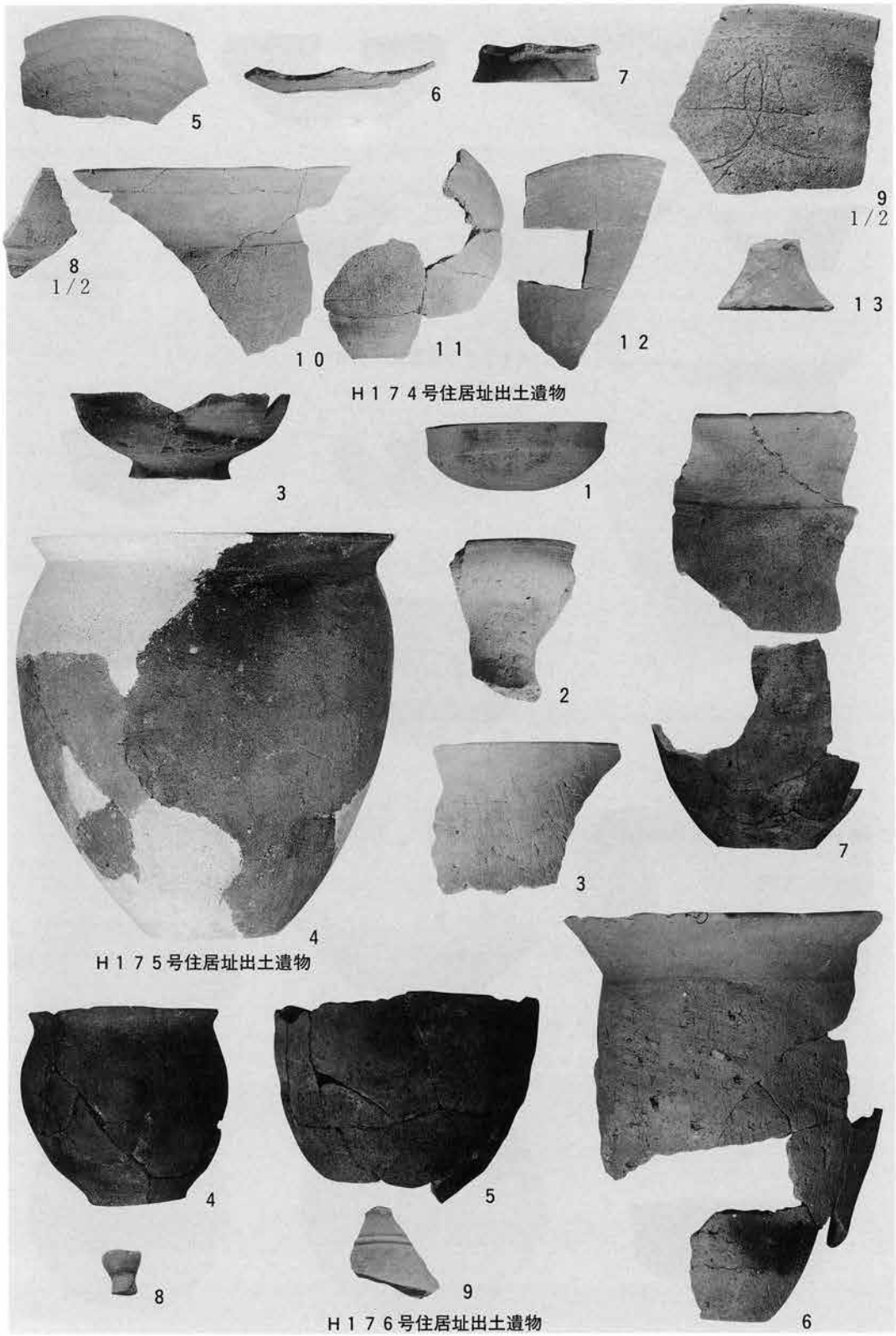

17
19
(1)
H１６７号住居址出土遺物
20
1
2
H１６８号住居址出土遺物
1
2
3
4
5
6
7
8
H１７１号住居址出土遺物
9
1
2
3
4
5
1
H１６９号住居址出土遺物

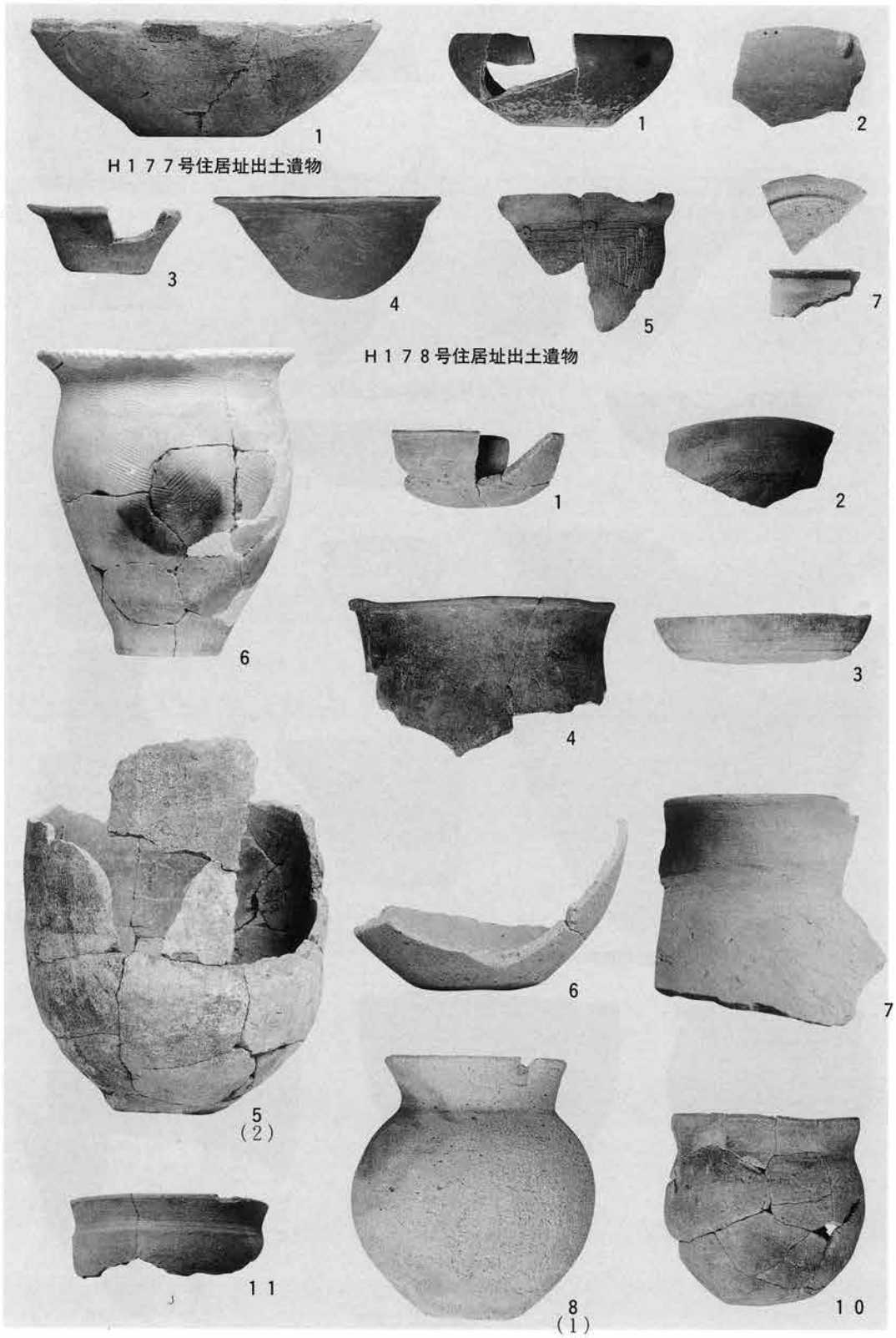
H１７２号住居址出土遺物

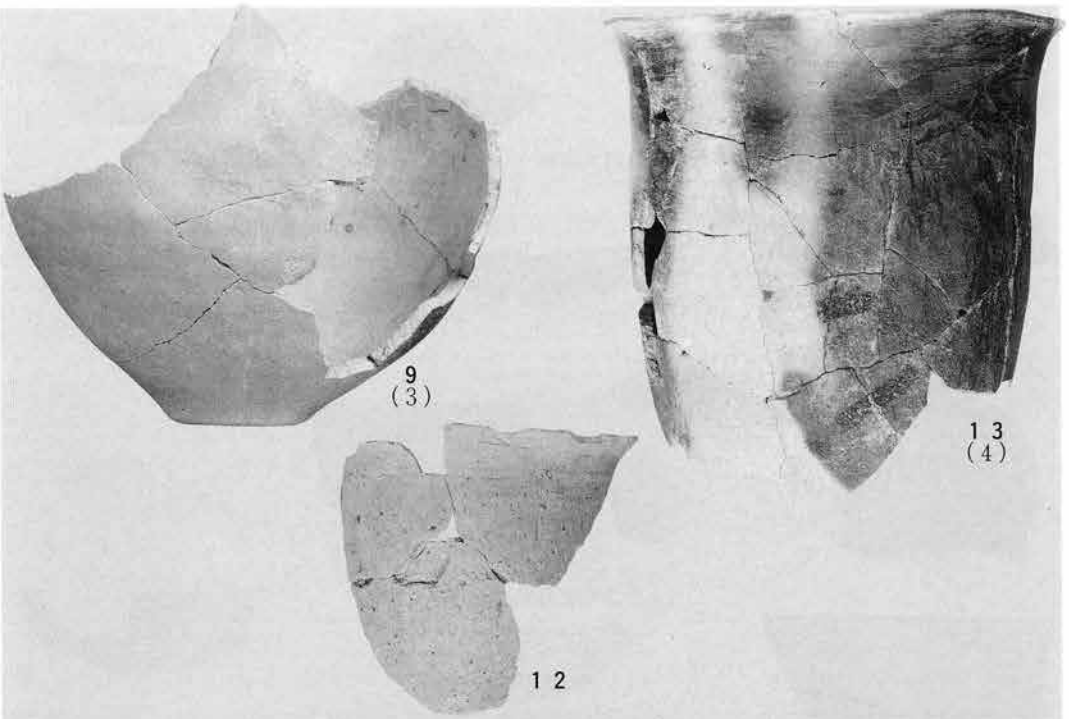


H１７３号住居址出土遺物

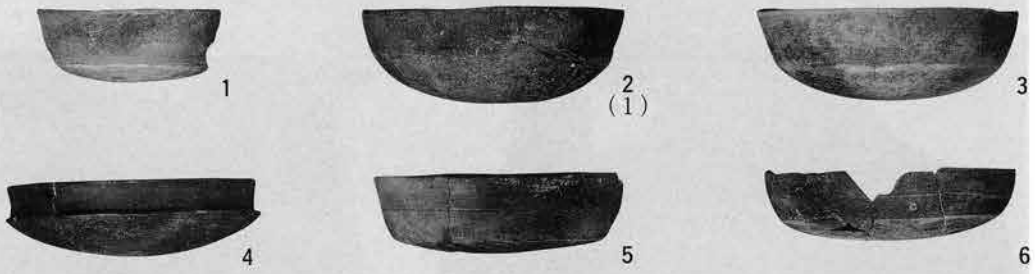



5
6
7
9
1/2
8
1/2
10
11
12
13
H１７４号住居址出土遺物
3
1
2
4
3
7
H１７５号住居址出土遺物
4
5
8
9
6
H１７６号住居址出土遺物


1
H１７７号住居址出土遺物
1
2
3
4
5
7
H１７８号住居址出土遺物
1
2
6
4
3
5
(2)
6
7
11
8
(1)
10

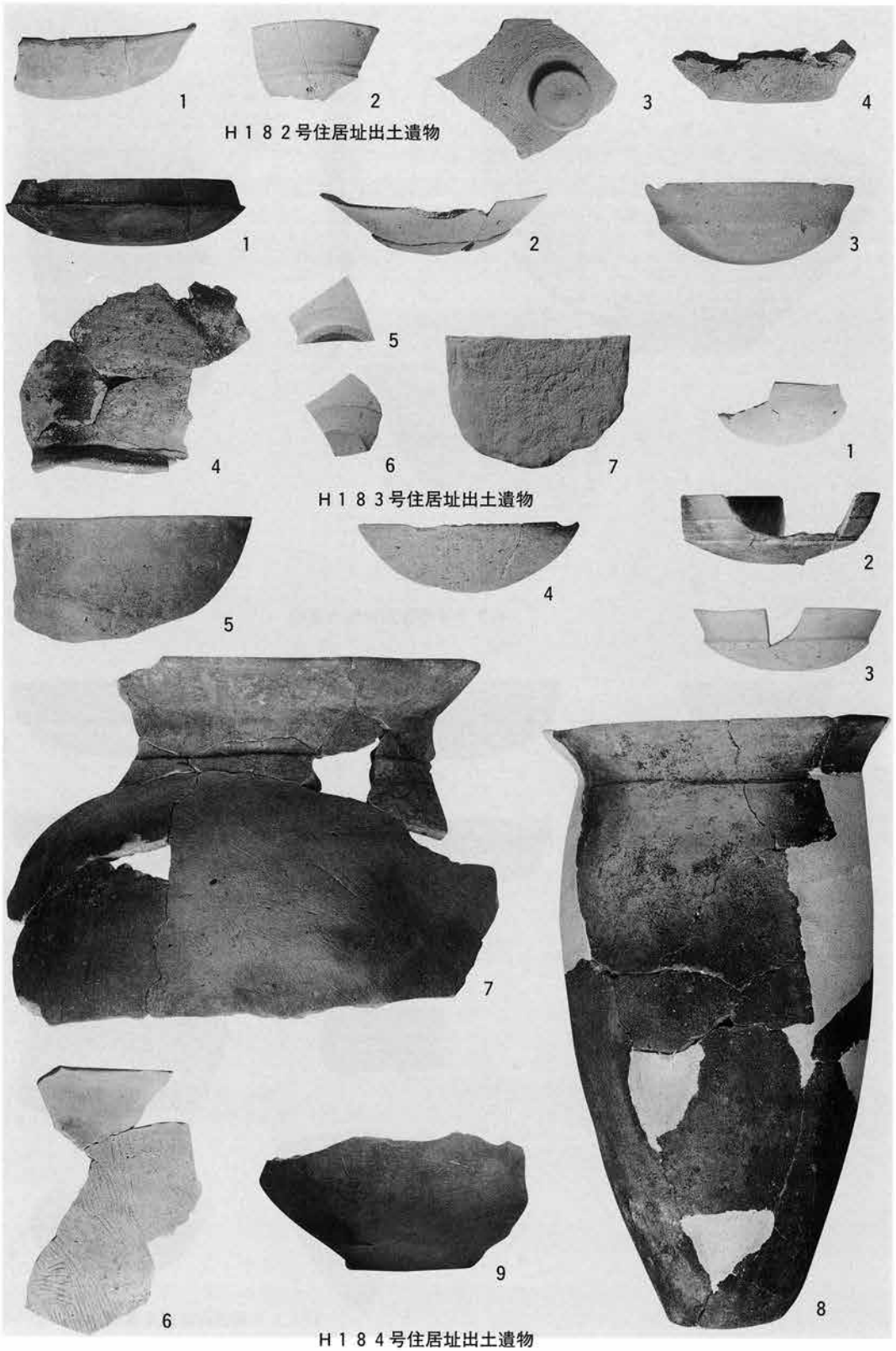


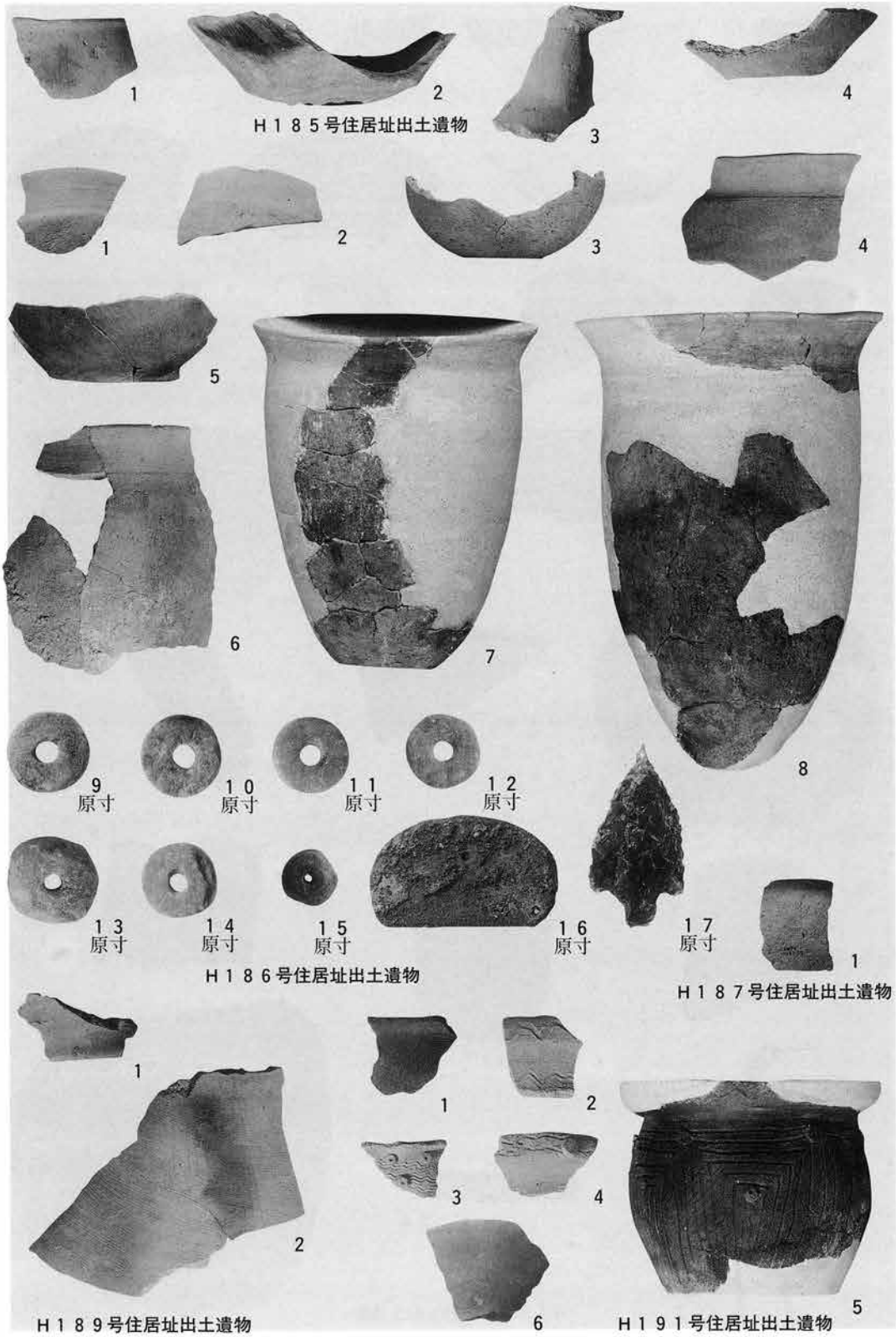
H１７９号住居址出土遺物

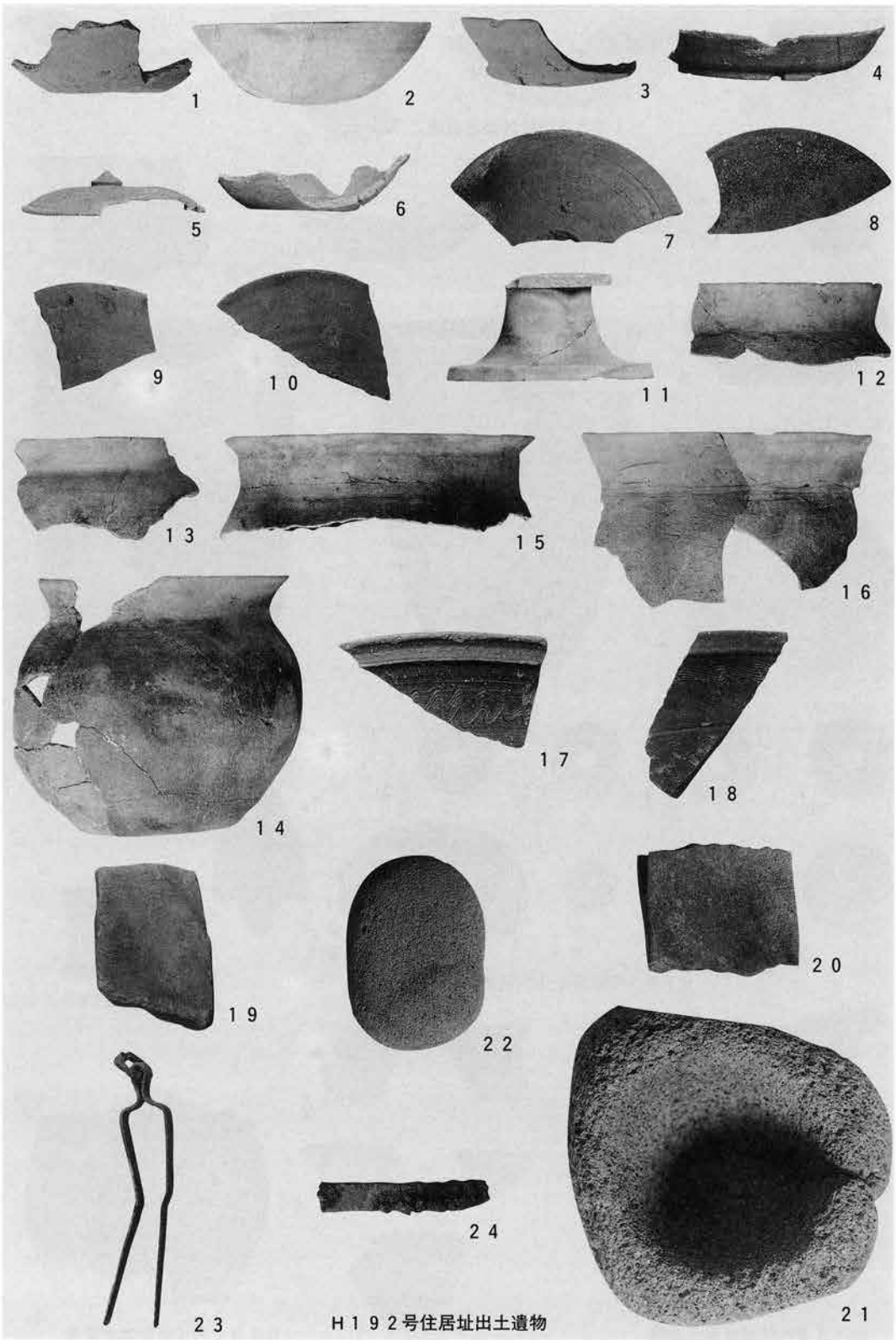


H１８０号住居址出土遺物

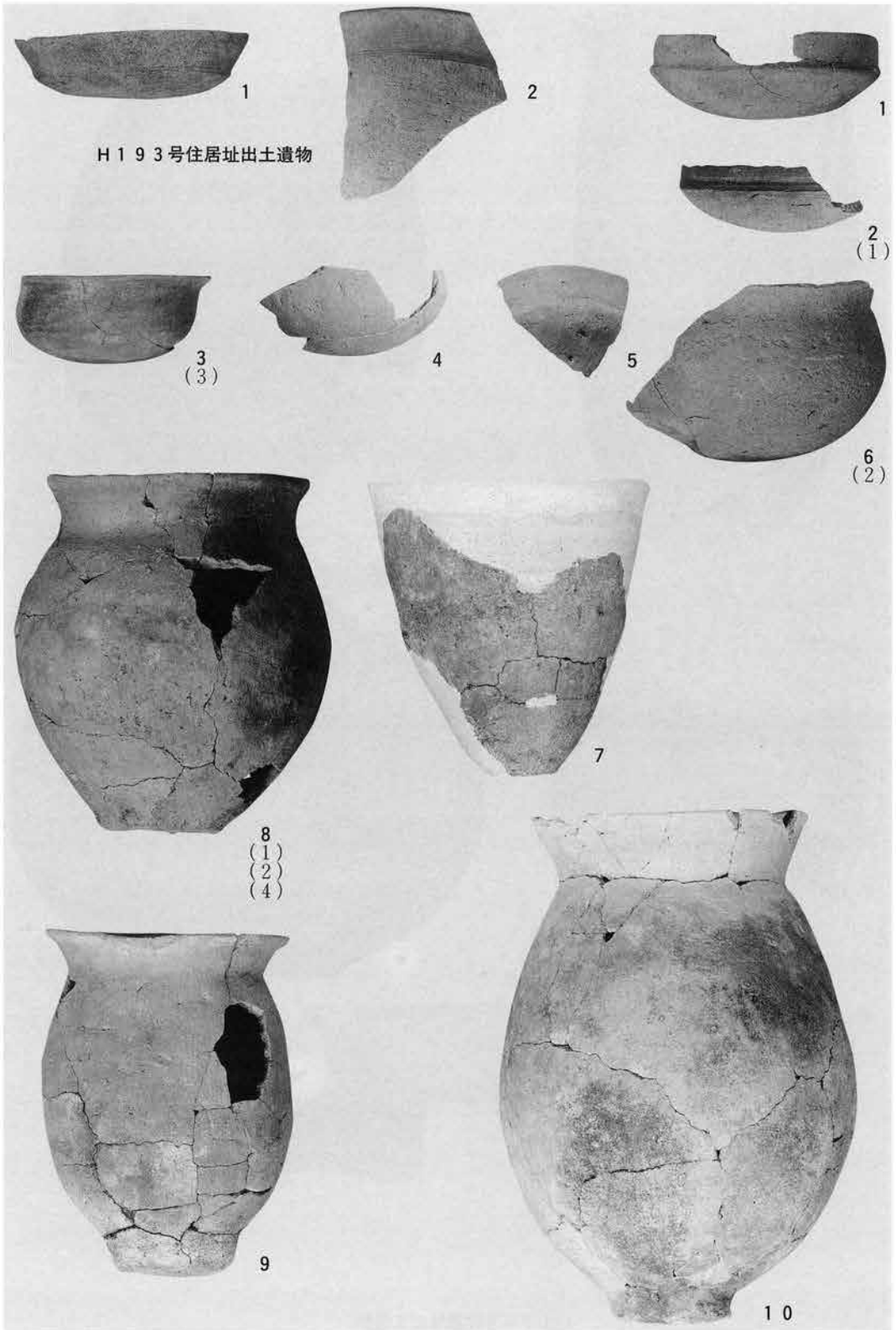
H１８１号住居址出土遺物

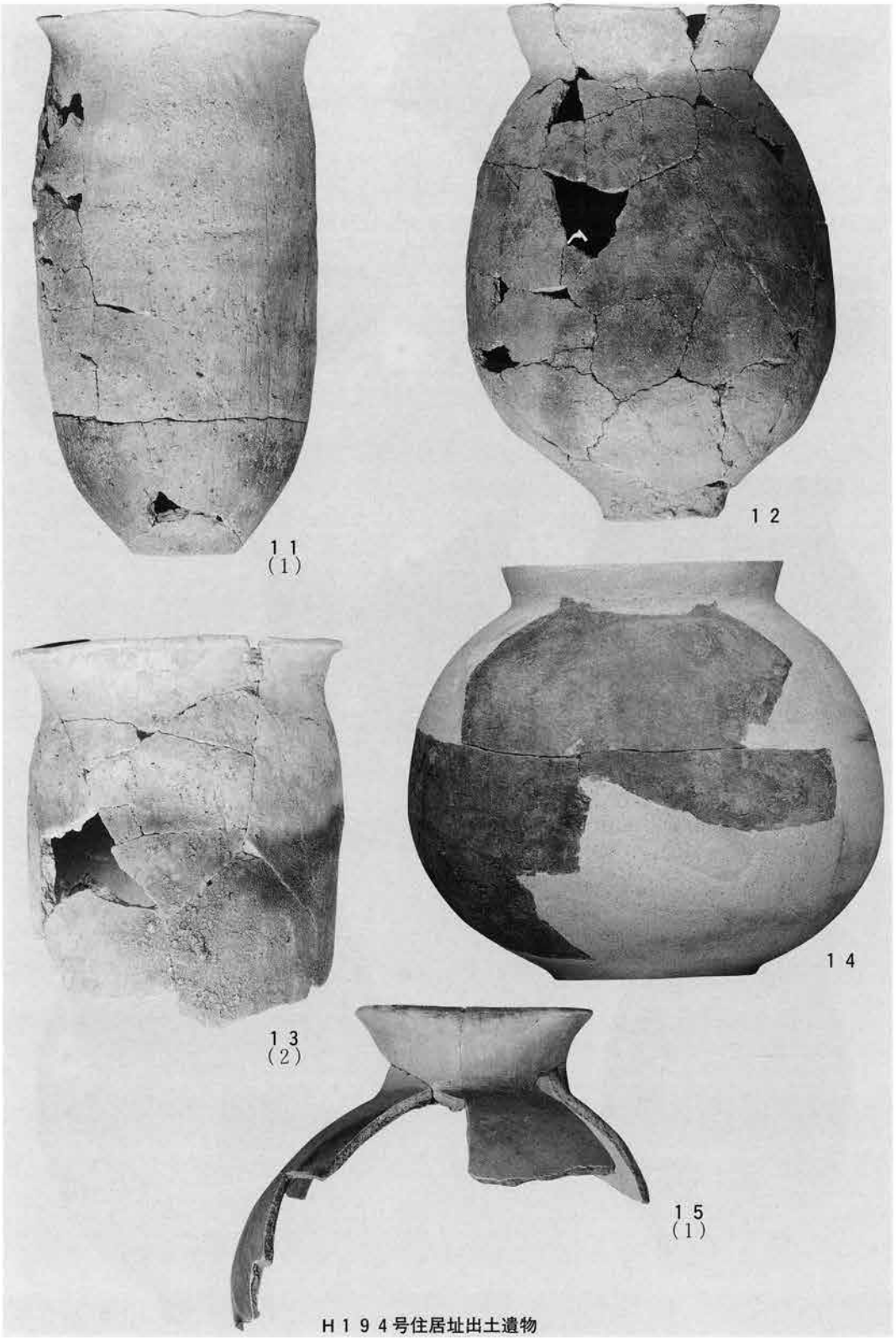

1
2
3
4
H１８２号住居址出土遺物
1
2
3
4
5
6
7
H１８３号住居址出土遺物
1
2
3
4
5
7
6
9
8
H１８４号住居址出土遺物


1
2
3
4
H１８５号住居址出土遺物
1
2
3
4
5
6
7
8
9
原寸
10
原寸
11
原寸
12
原寸
13
原寸
14
原寸
15
原寸
16
原寸
17
原寸
H１８６号住居址出土遺物
1
H１８７号住居址出土遺物
1
2
H１８９号住居址出土遺物
1
2
3
4
5
6
H１９１号住居址出土遺物

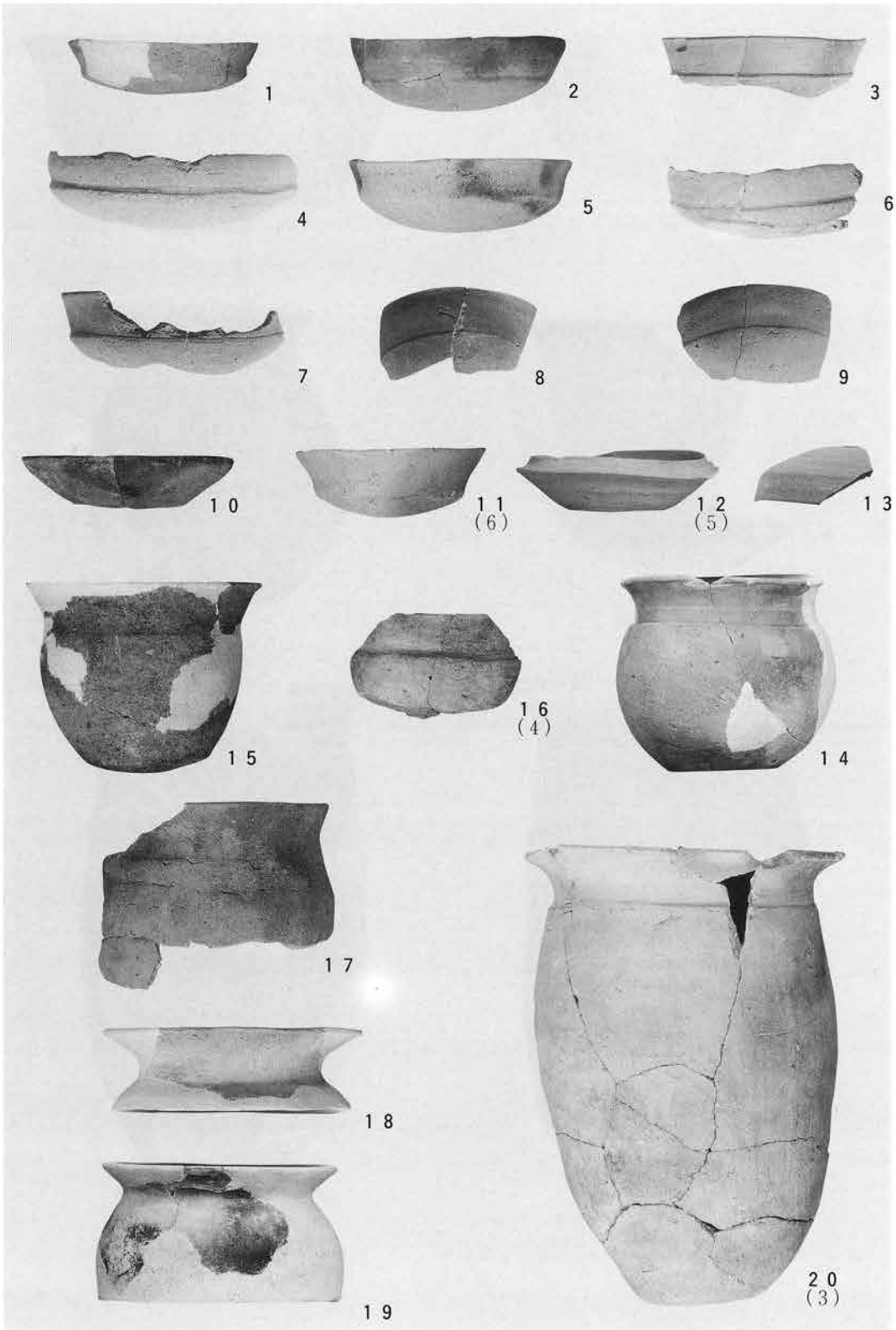


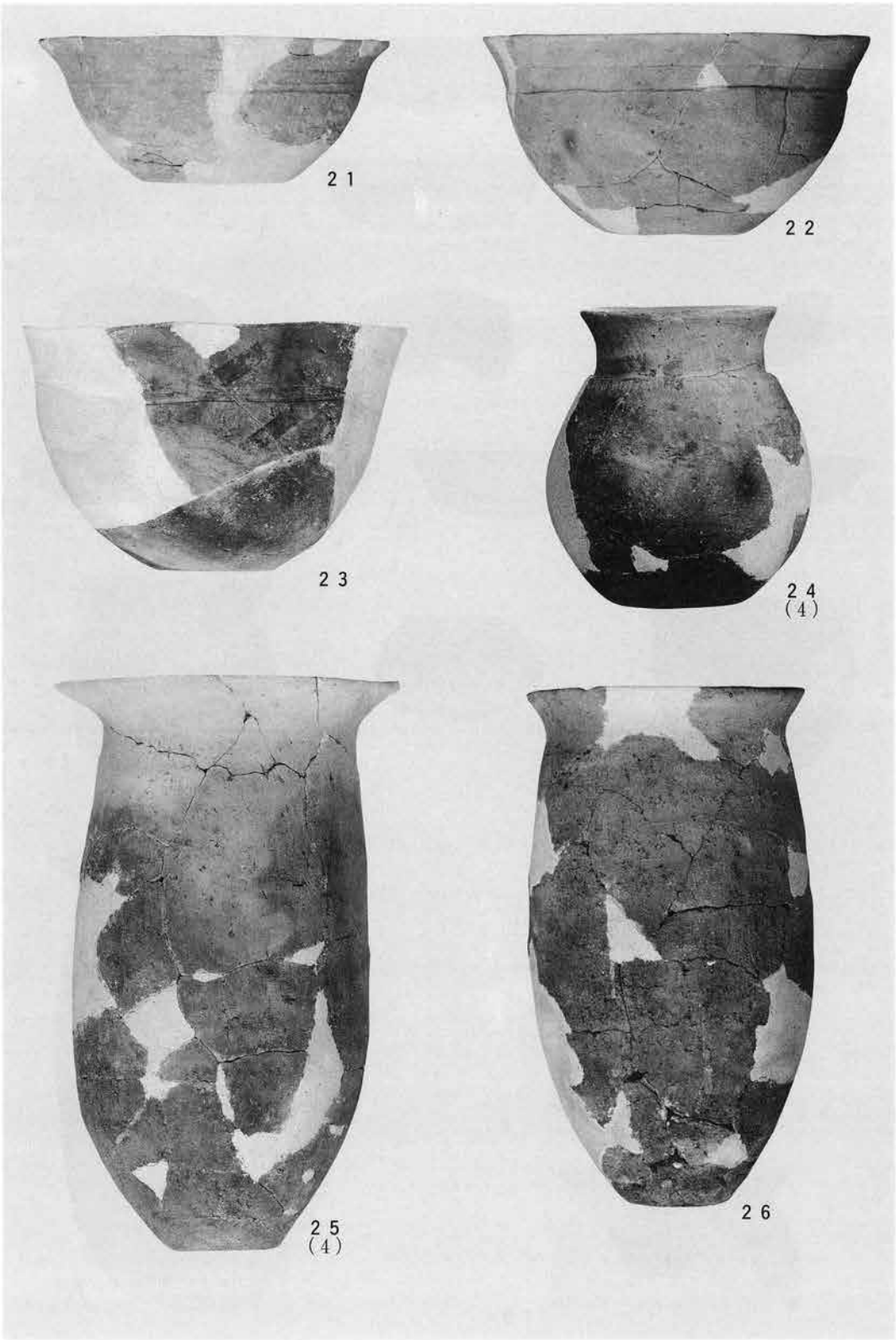
H192号住居址出土遺物

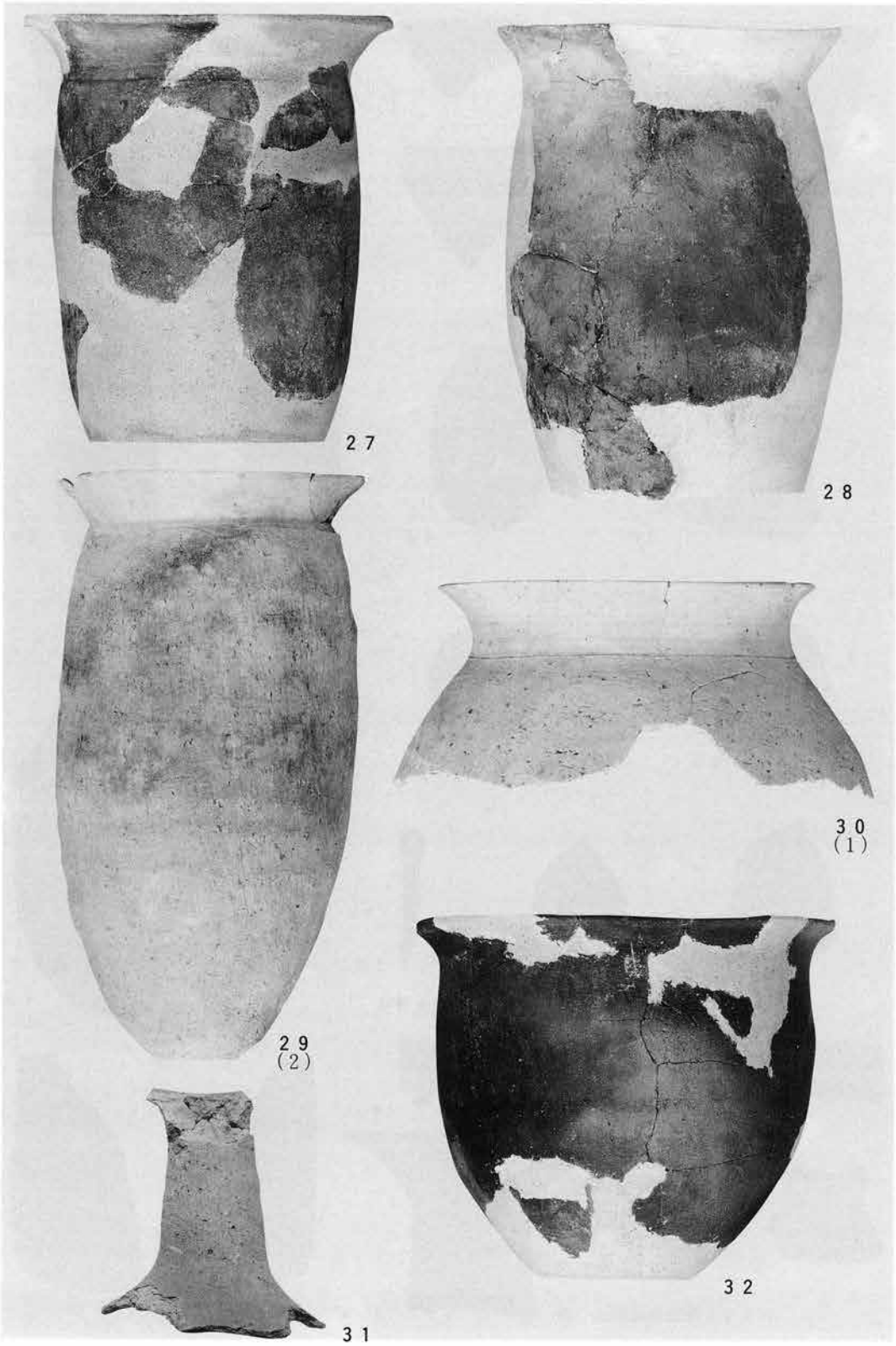

1
2
H193号住居址出土遺物
1
2
(1)
3
(3)
4
5
6
(2)
7
8
(1)
(2)
(4)
9
10

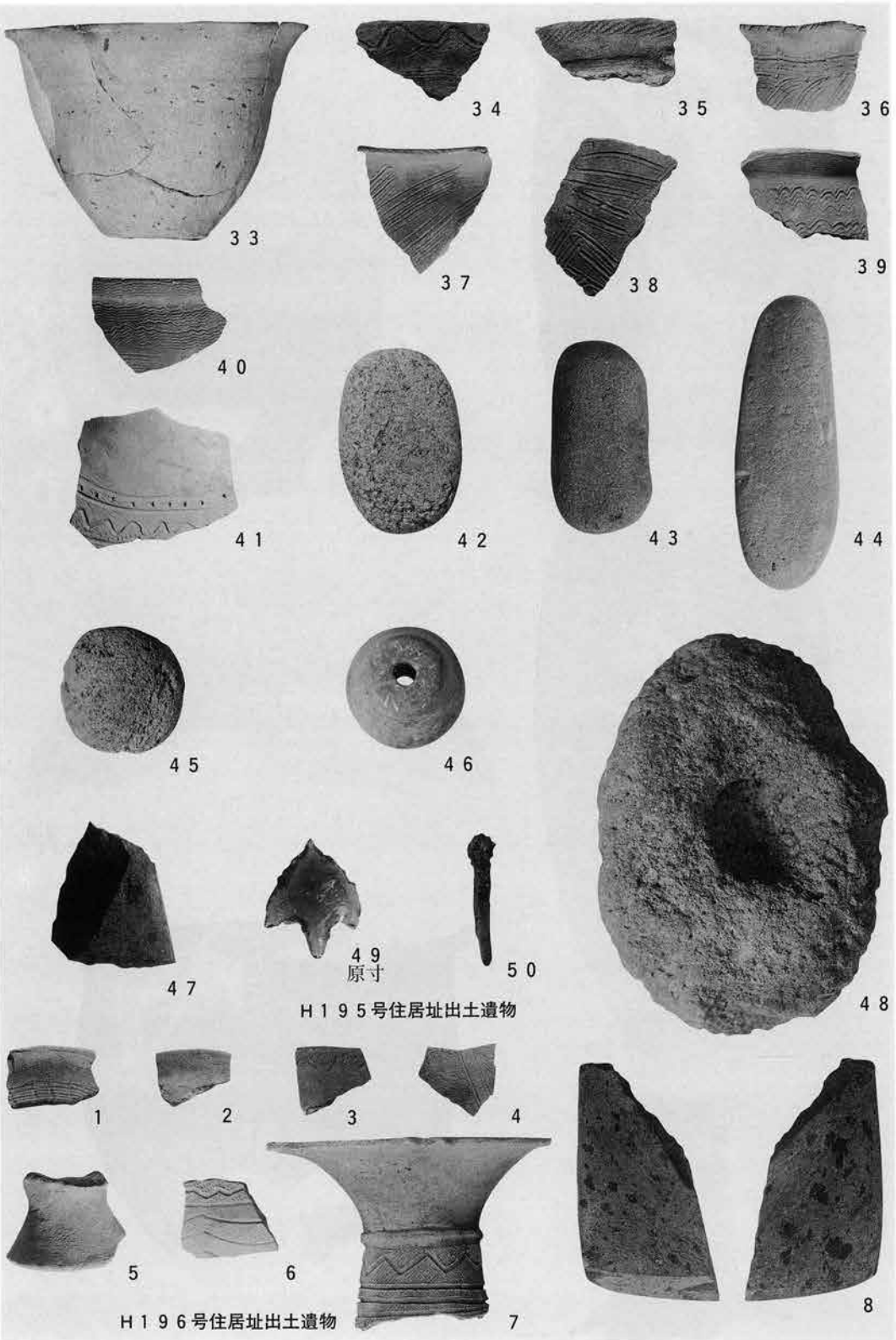


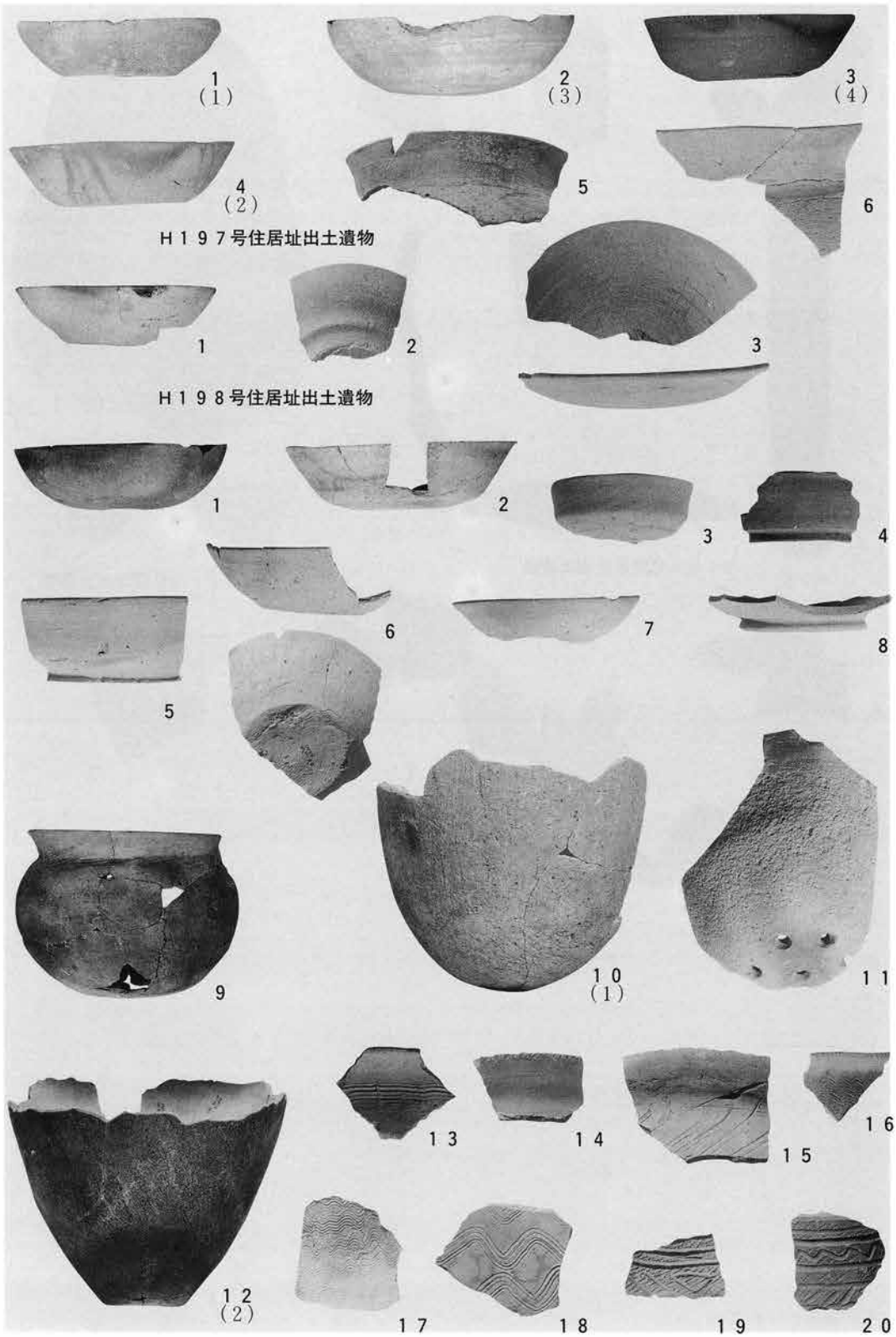
H194号住居址出土遺物

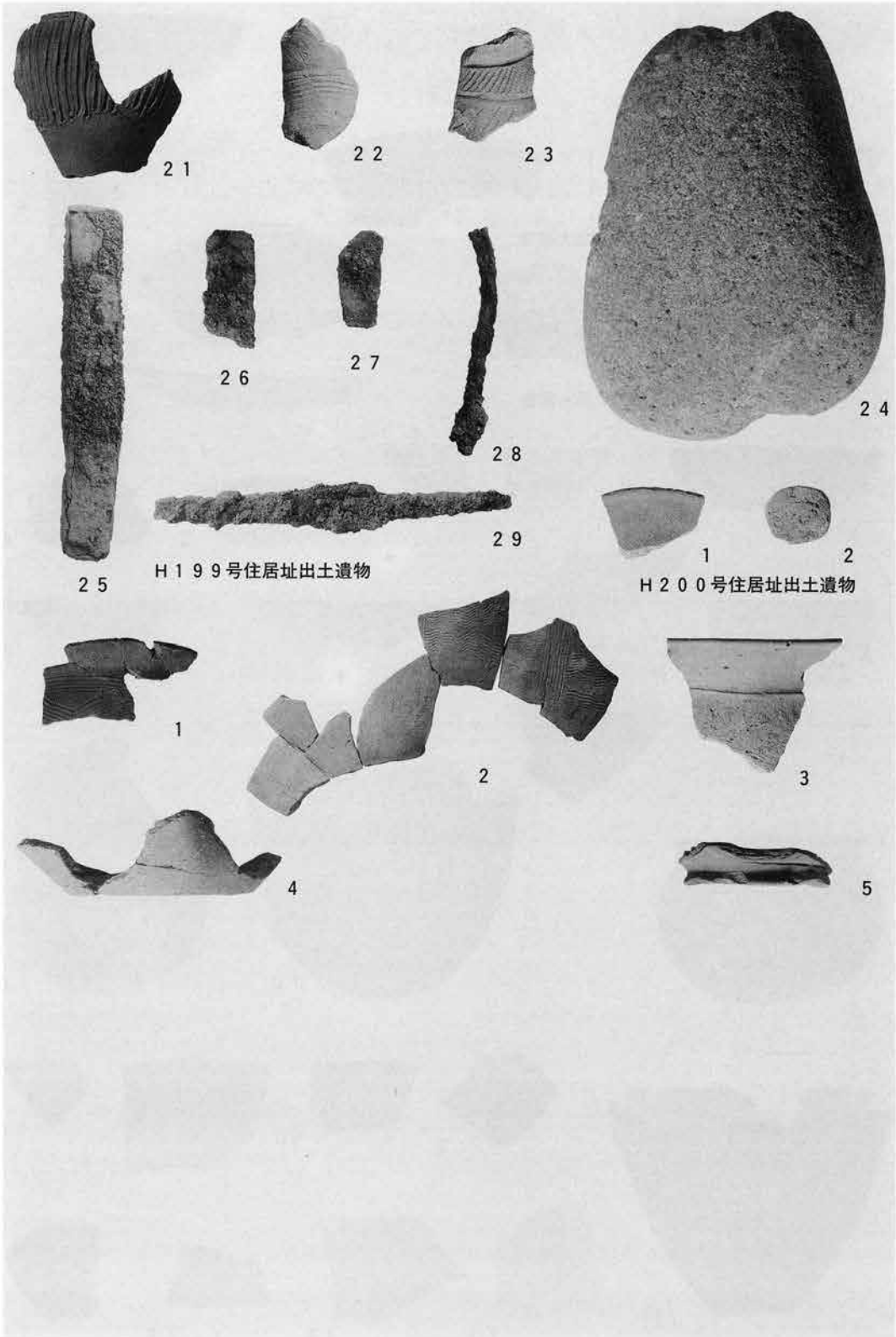

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
(6)
12
(5)
13
15
16
(4)
14
17
18
19
20
(3)


21
22
23
24
(4)
25
(4)
26


27
28
29
(2)
30
(1)
31
32


33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
49
原寸
50
48
H195号住居址出土遺物
1
2
3
4
5
6
7
8
H196号住居址出土遺物


1 (1)
2 (3)
3 (4)
4 (2)
5
6
H197号住居址出土遺物
1
2
3
H198号住居址出土遺物
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10 (1)
11
12 (2)
13
14
15
16
17
18
19
20


21
22
23
24
25
26
27
28
29
H１９９号住居址出土遺物
1
2
H２００号住居址出土遺物
1
2
3
4
5

1

F 3 号掘立柱建物址出土遺物

1 原寸

F 7 号掘立柱建物址出土遺物

1

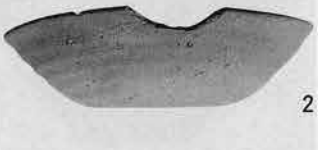
F 8 号掘立柱建物址出土遺物

1

2

F 1 3 号掘立柱建物址出土遺物

1



2

3

F 3 2 号掘立柱建物址出土遺物

1

F 3 3 号掘立柱建物址出土遺物

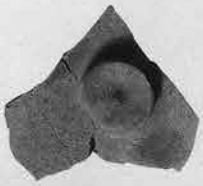
1

2

F 3 4 号掘立柱建物址出土遺物

1

F 3 6 号掘立柱建物址出土遺物



1

F 4 0 号掘立柱建物址出土遺物

1 2

F 3 8 号掘立柱建物址出土遺物

3

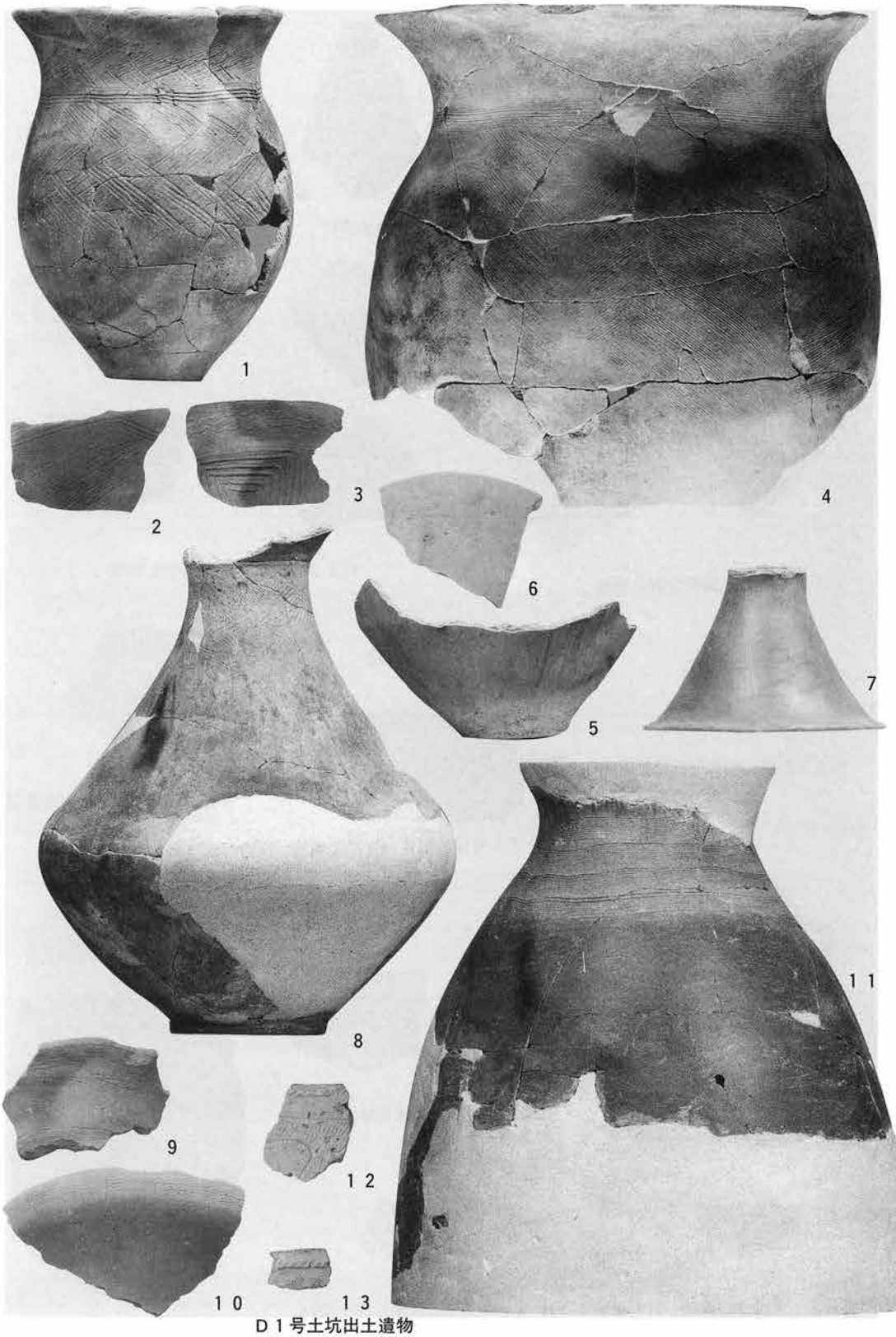
1

2

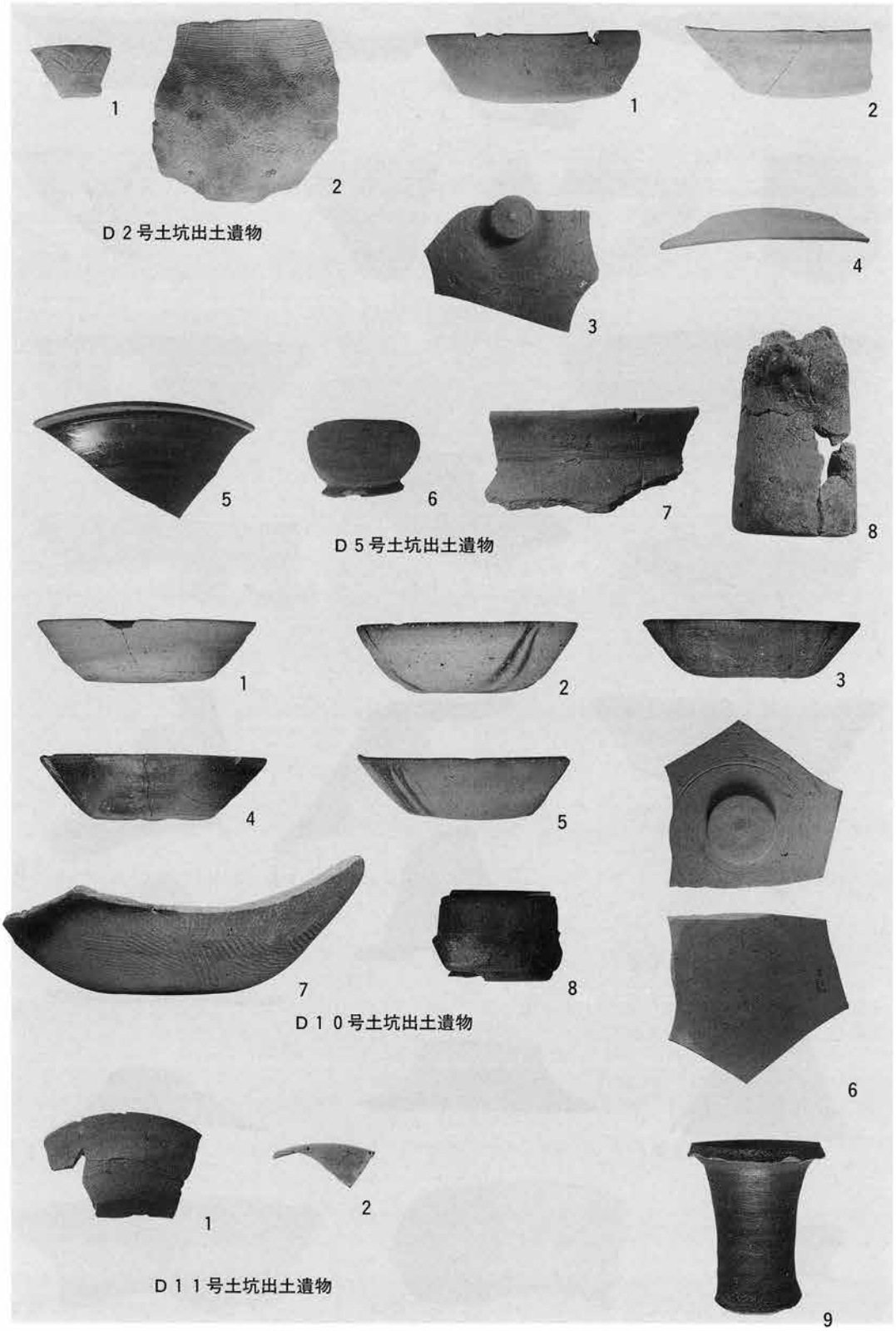
F 4 3 号掘立柱建物址出土遺物

1

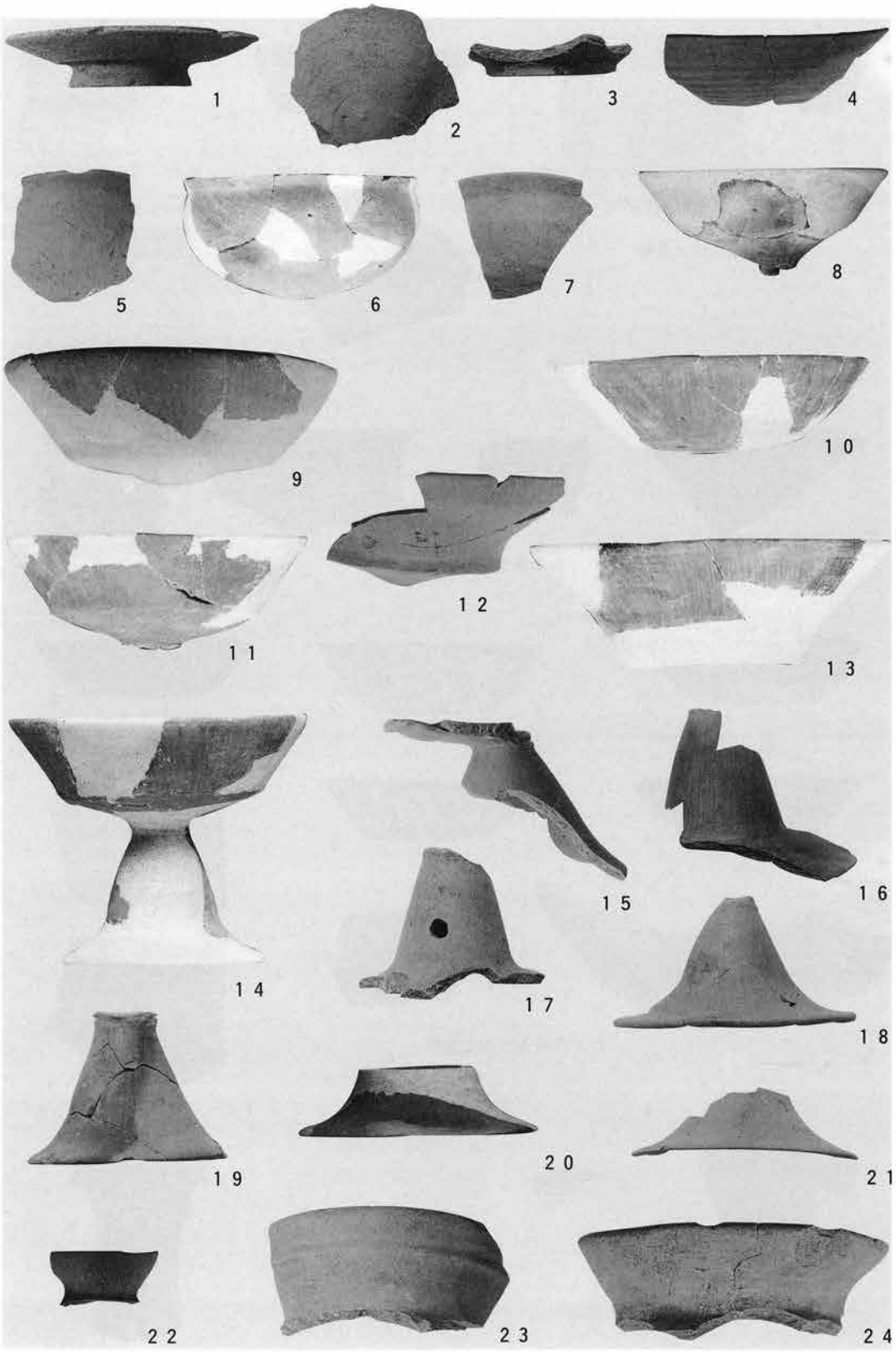
F 4 4 号掘立柱建物址出土遺物

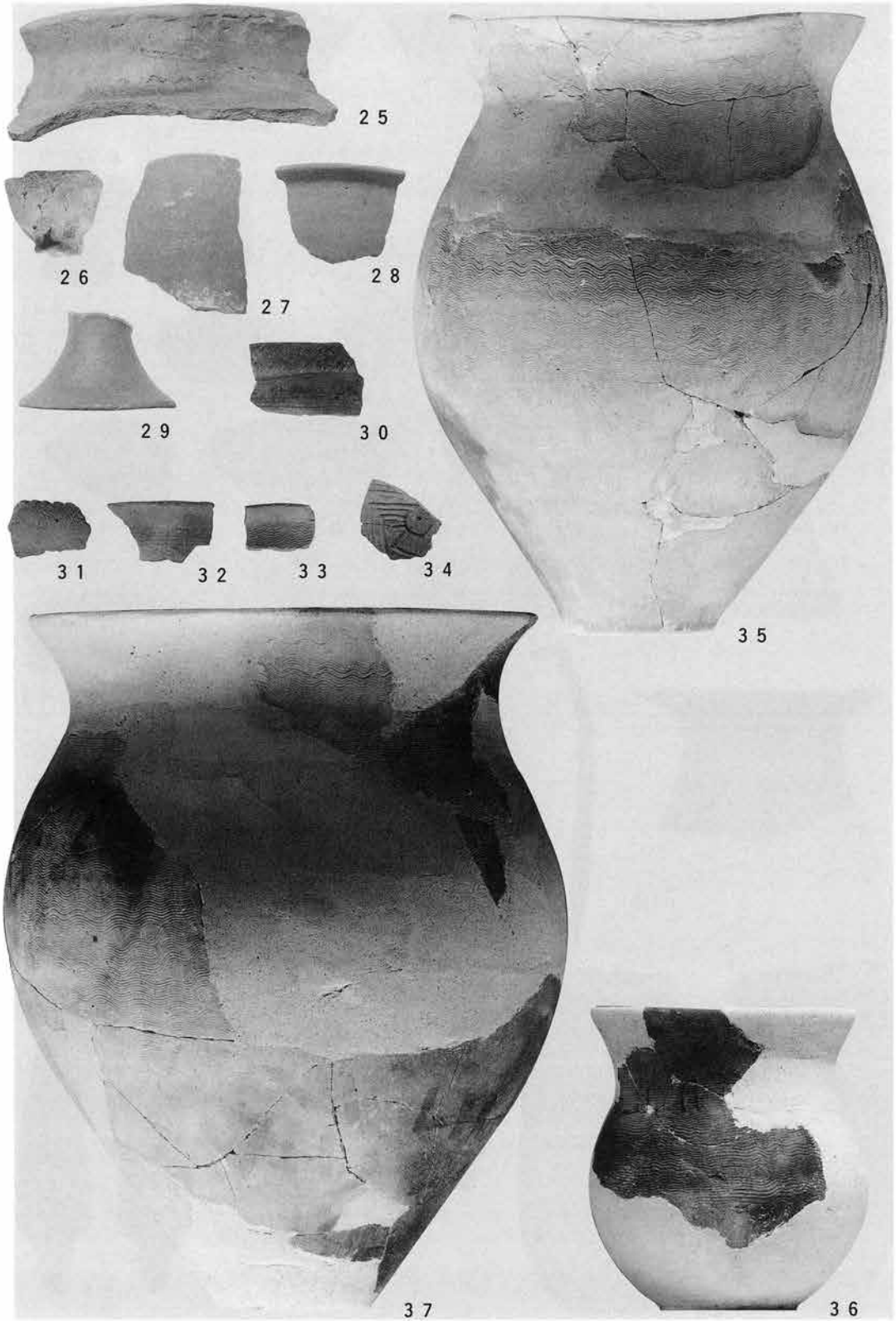


D１号土坑出土遺物

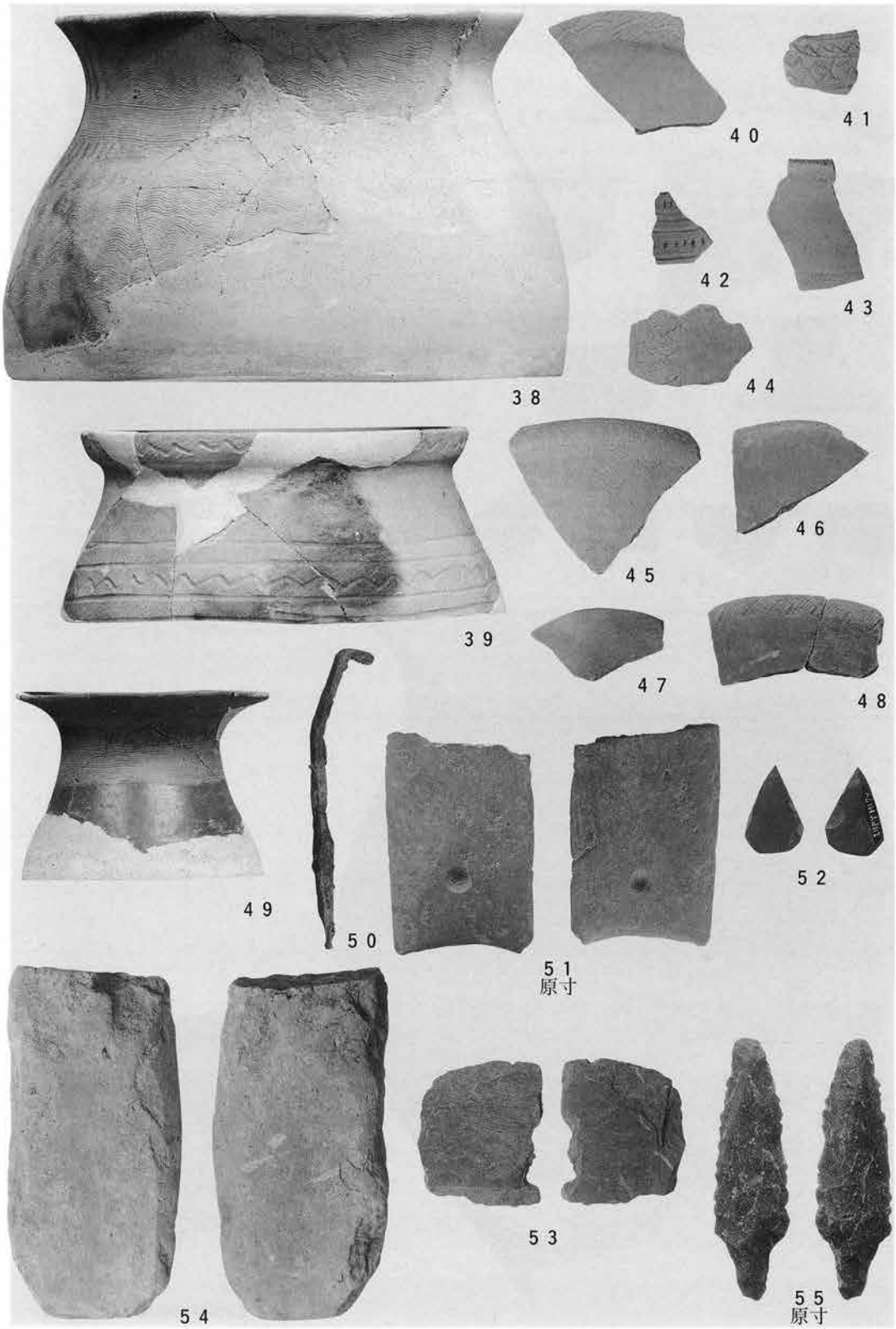

1
2
D２号土坑出土遺物
1
2
3
4
5
6
7
8
D５号土坑出土遺物
1
2
3
4
5
6
7
8
D１０号土坑出土遺物
1
2
D１１号土坑出土遺物
9

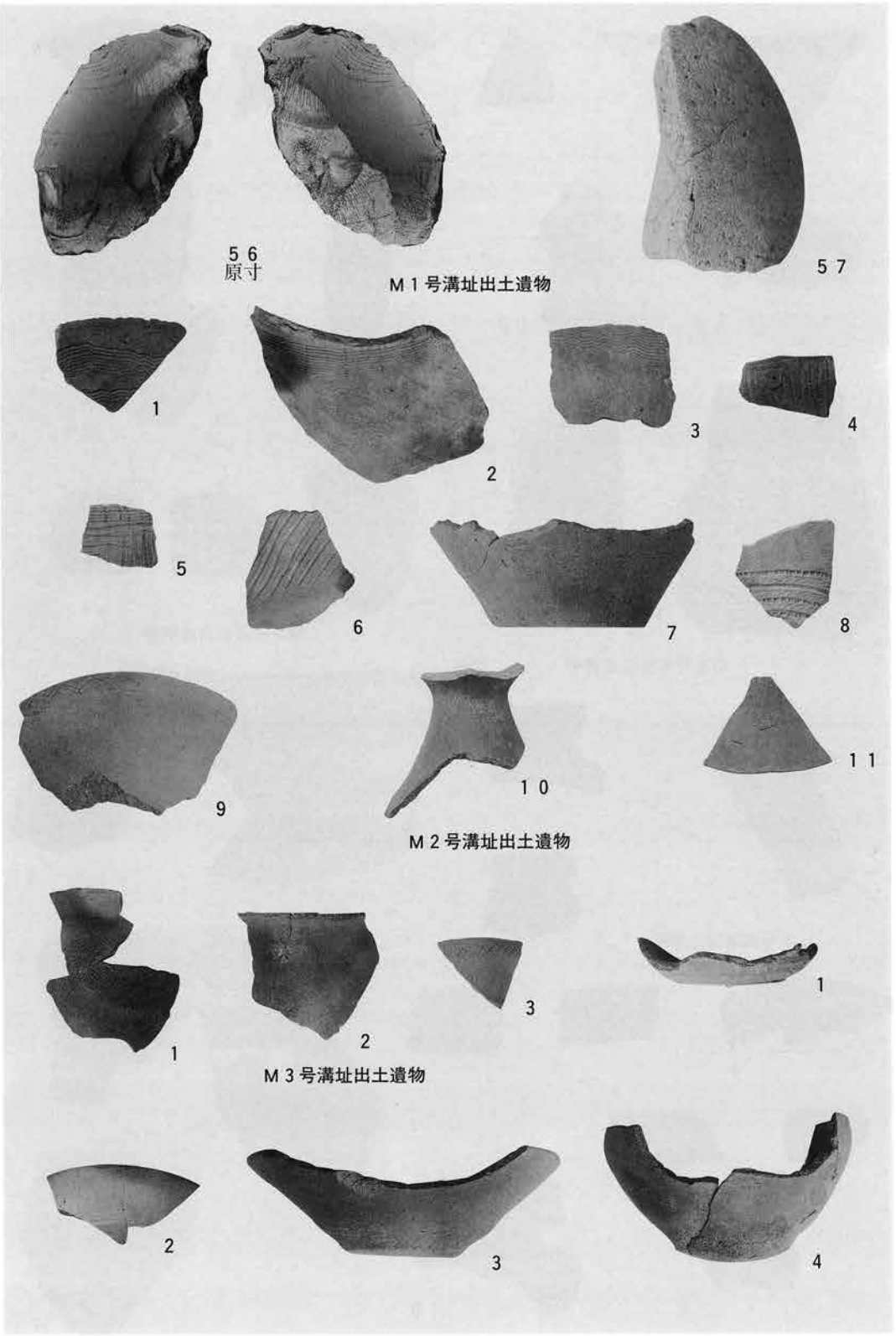
図版 二百十二

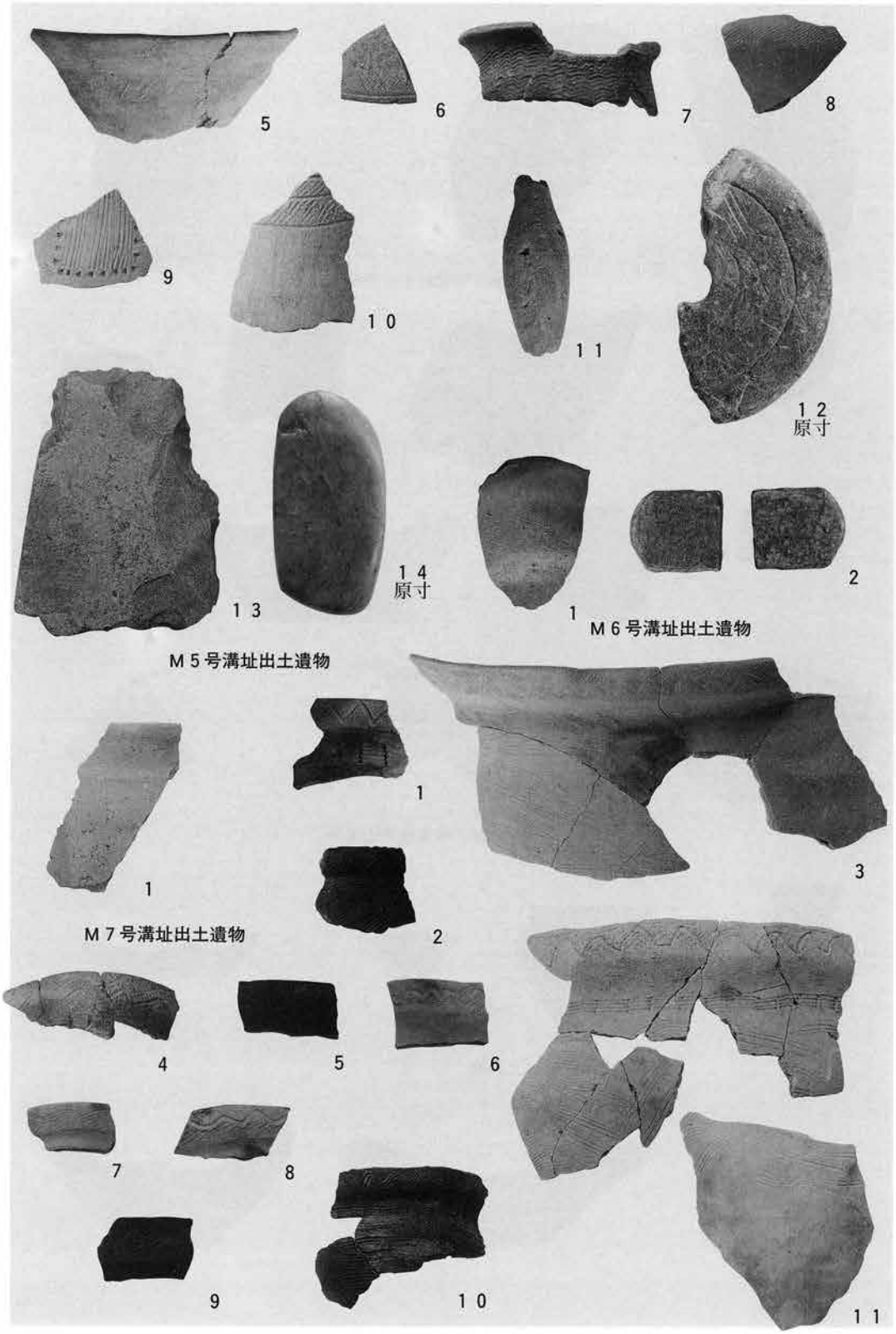


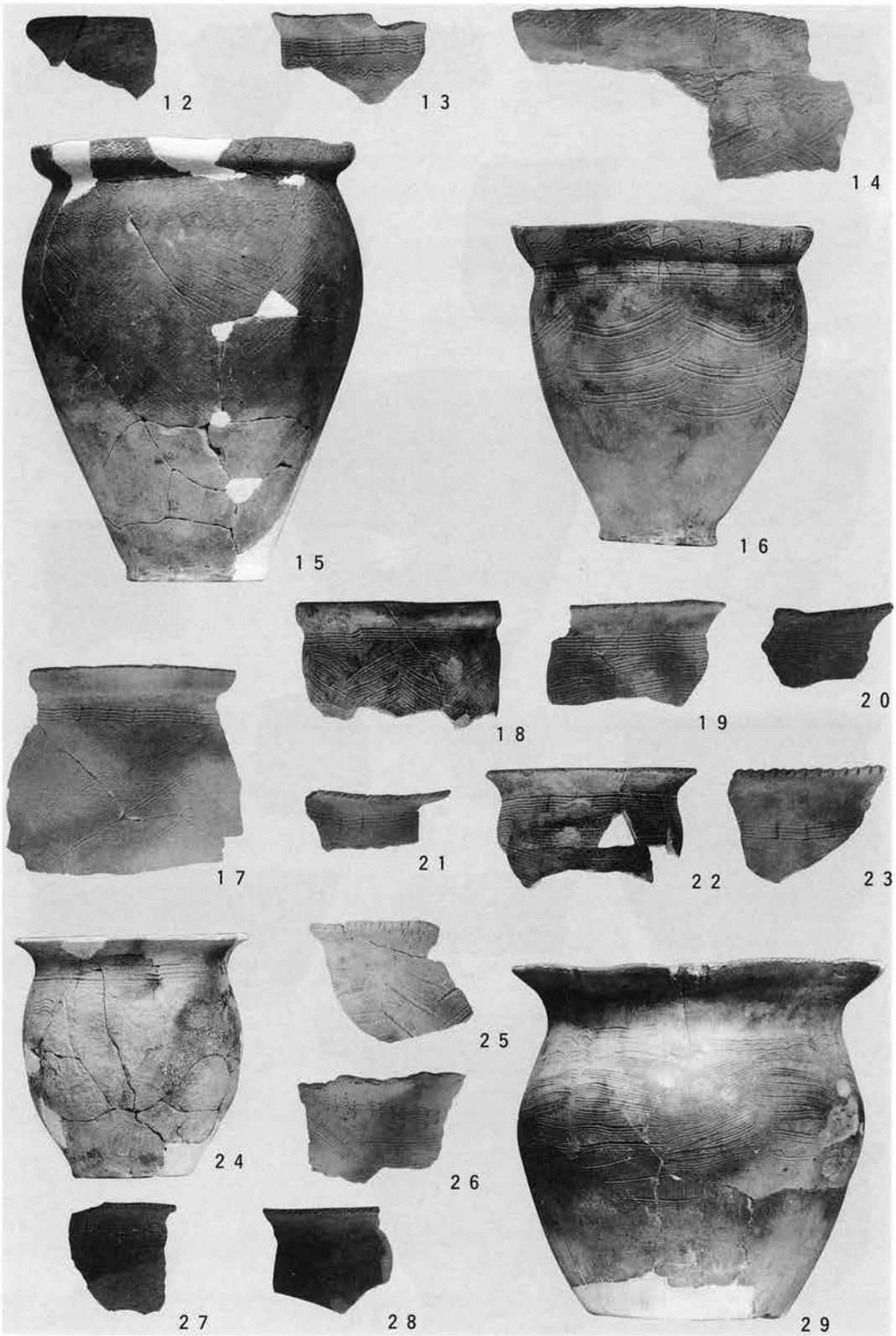

25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
37
36

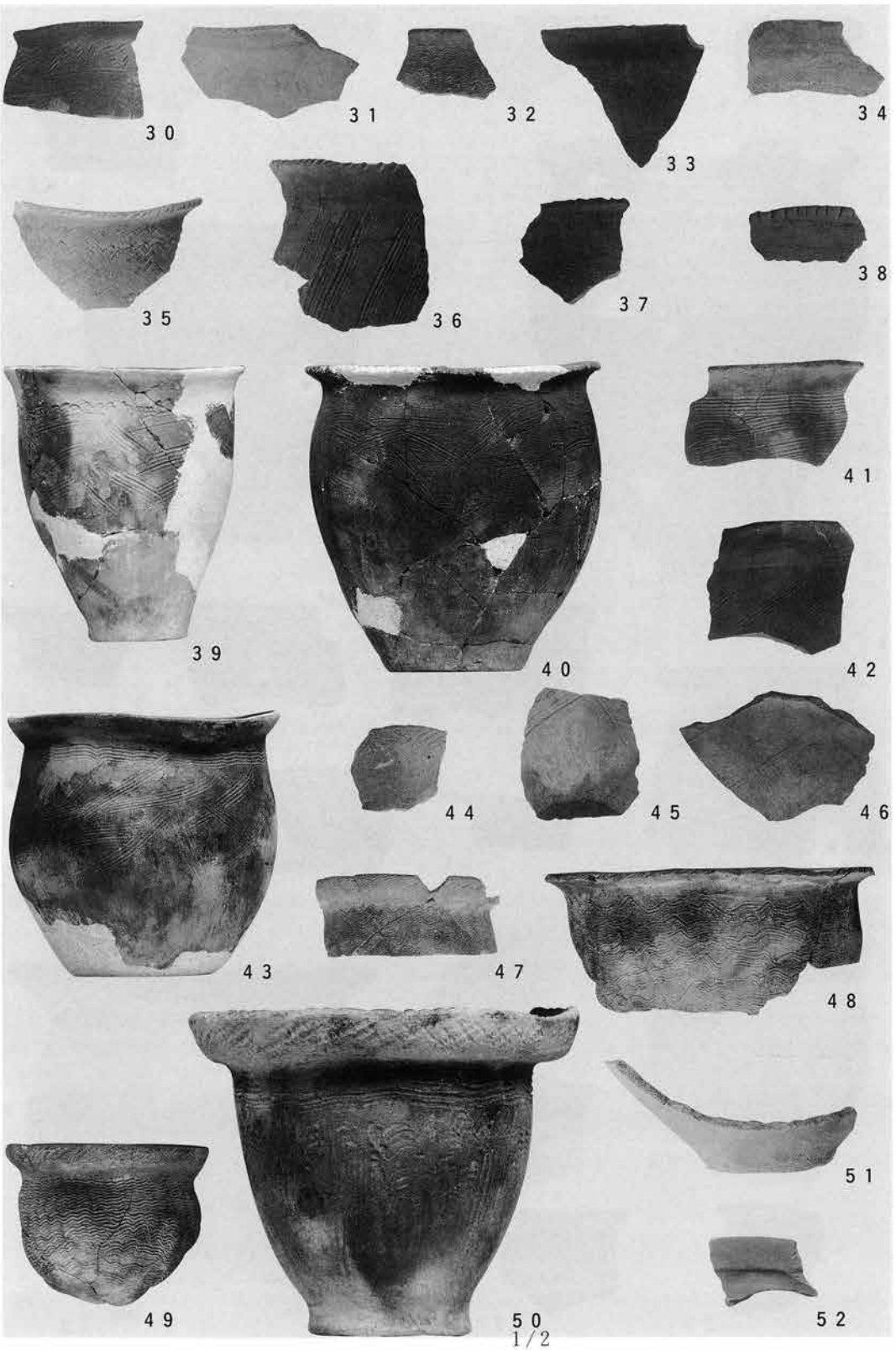
図版　二百十四



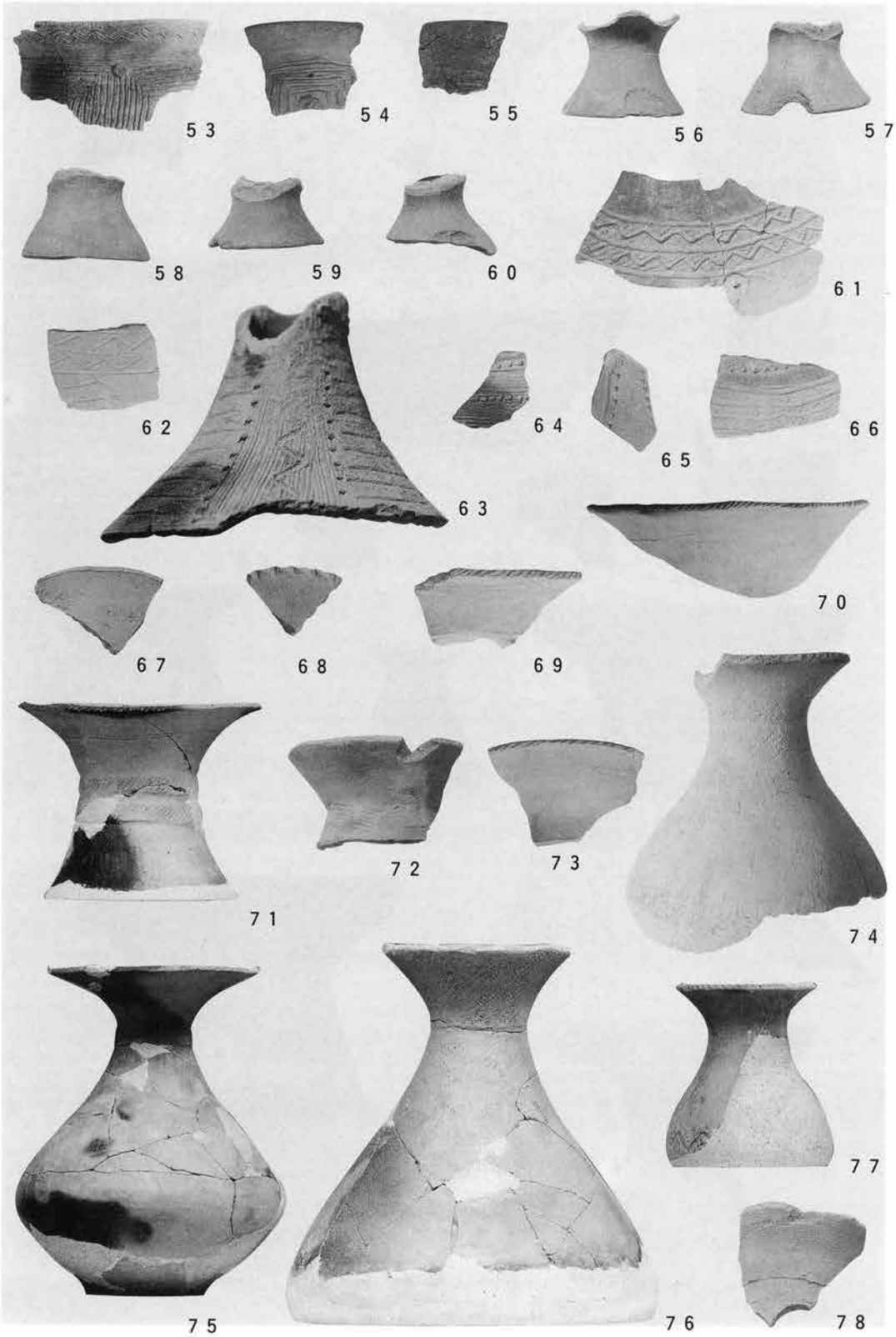

5 6
原寸
5 7
M 1 号溝址出土遺物
1
2
3
4
5
6
7
8
9
1 0
1 1
M 2 号溝址出土遺物
1
2
3
1
M 3 号溝址出土遺物
2
3
4

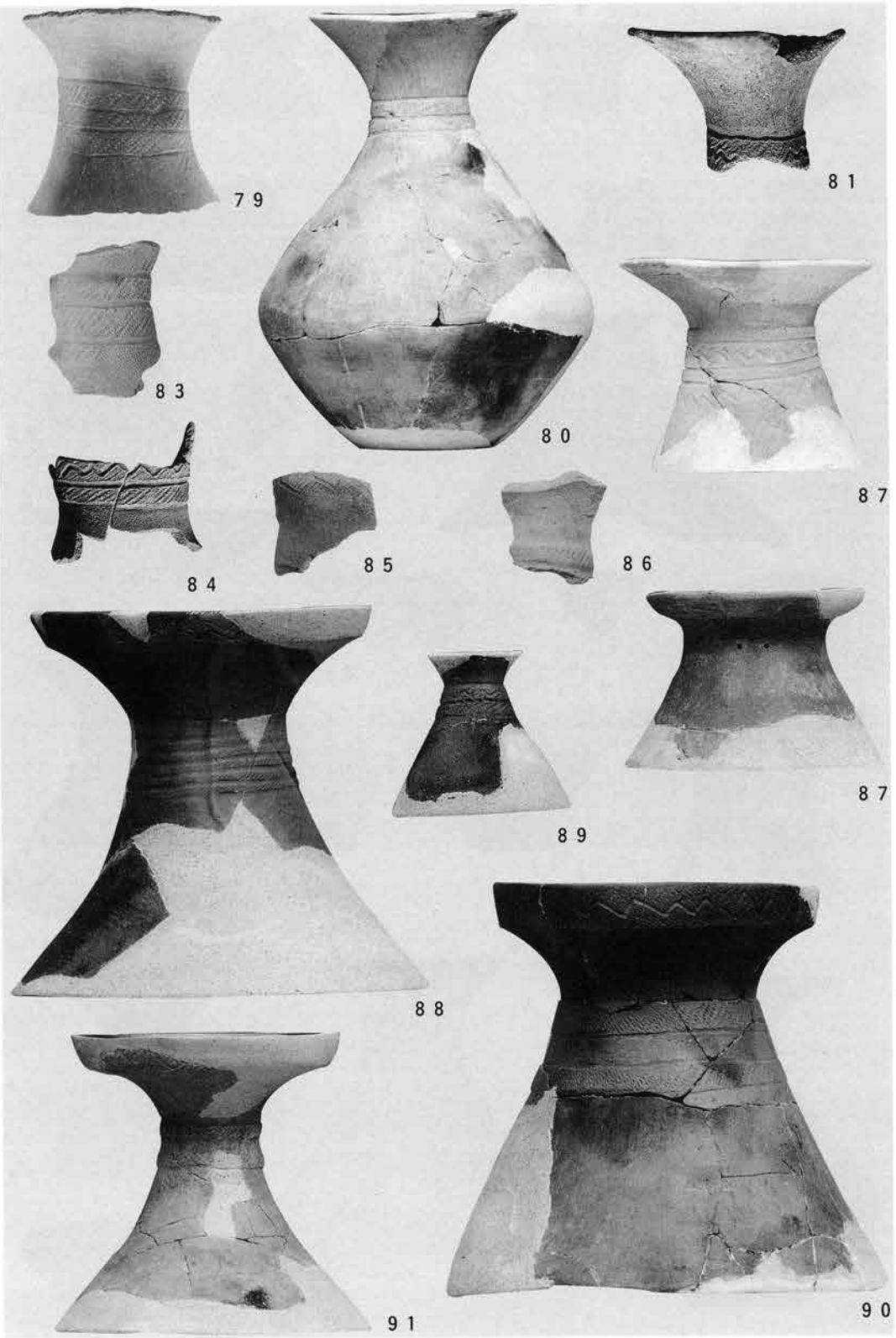

5
6
7
8
9
10
11
12
原寸
13
14
原寸
1
2
M６号溝址出土遺物
M５号溝址出土遺物
1
1
3
2
M７号溝址出土遺物
4
5
6
7
8
9
10
11

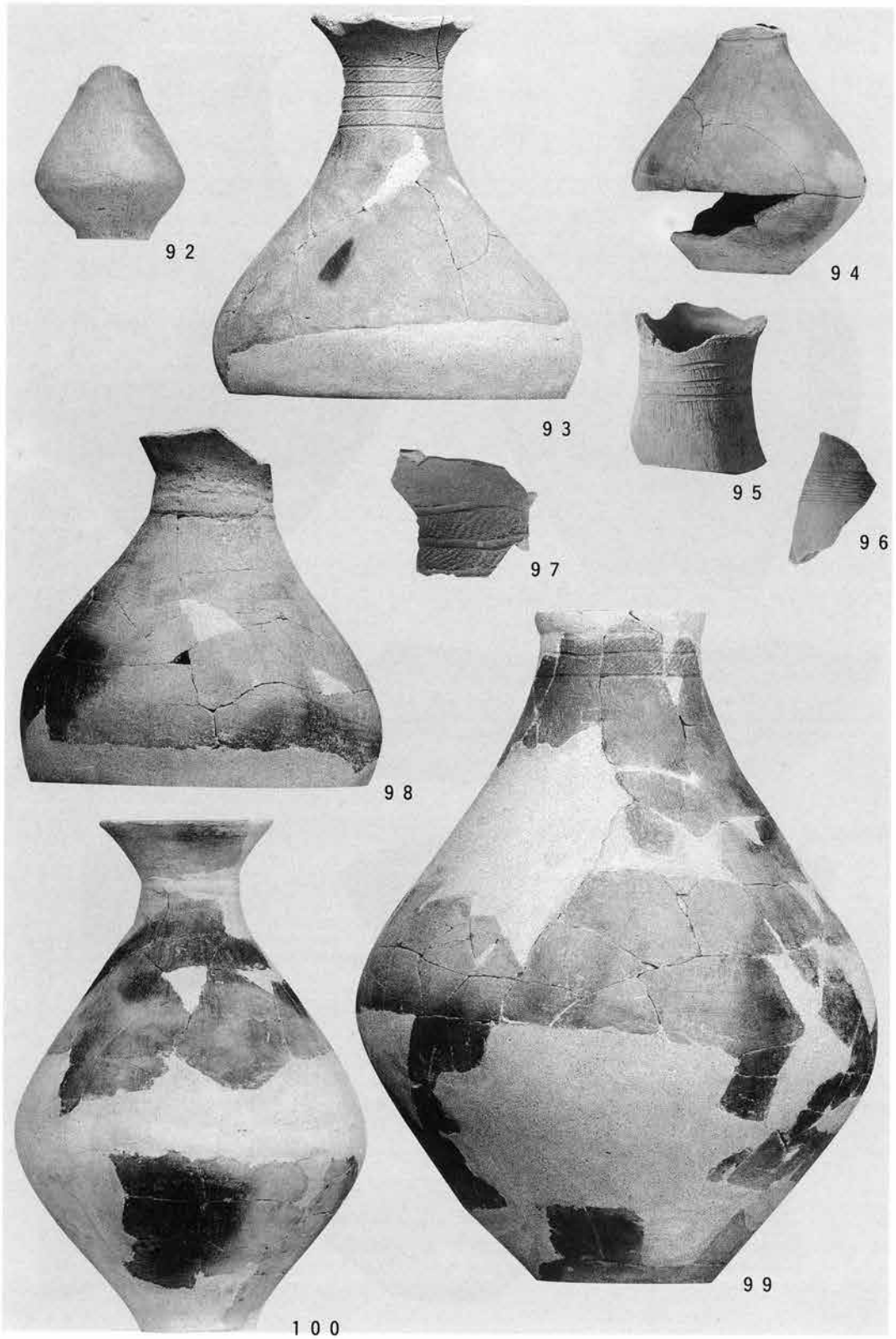

12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29



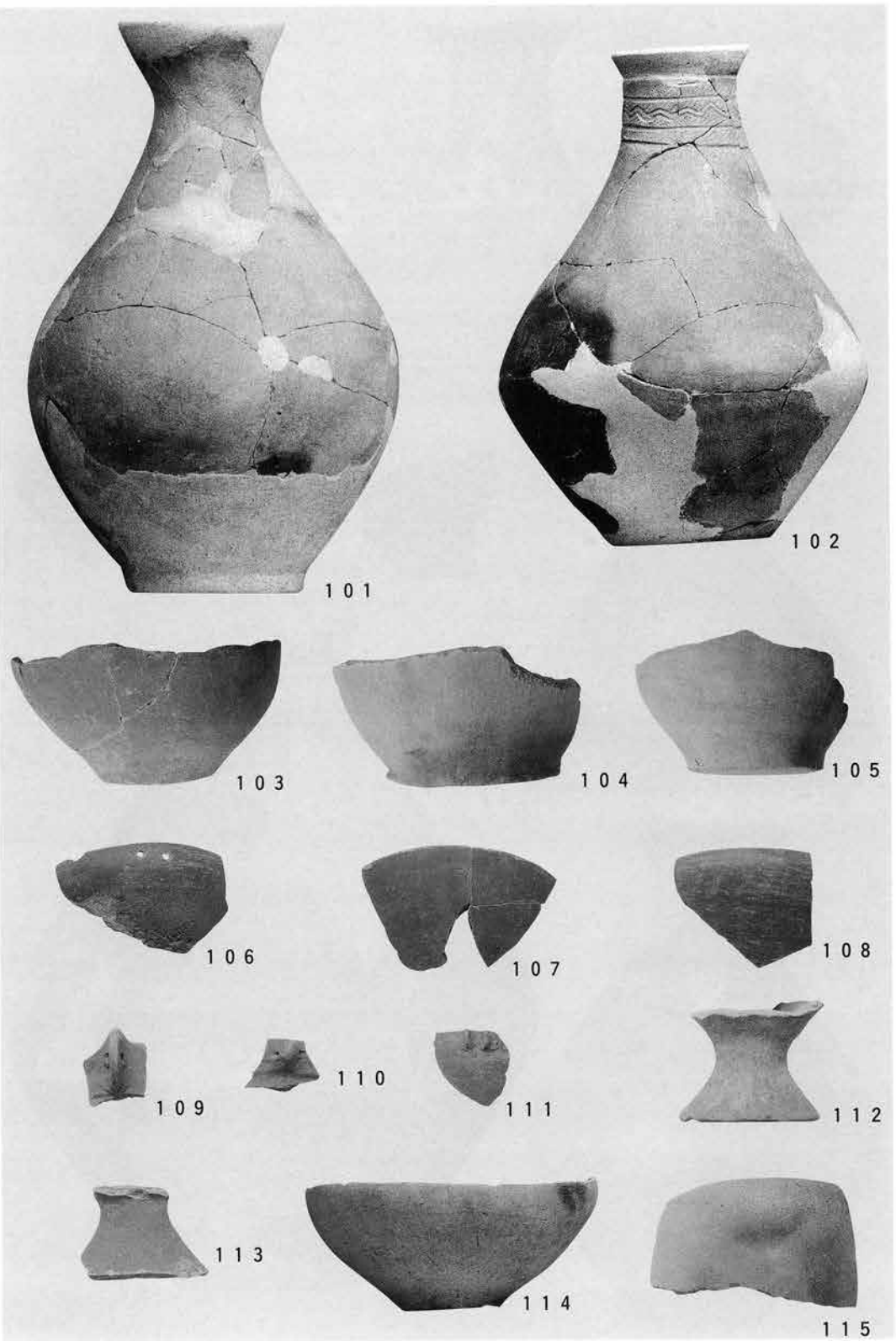
1/2

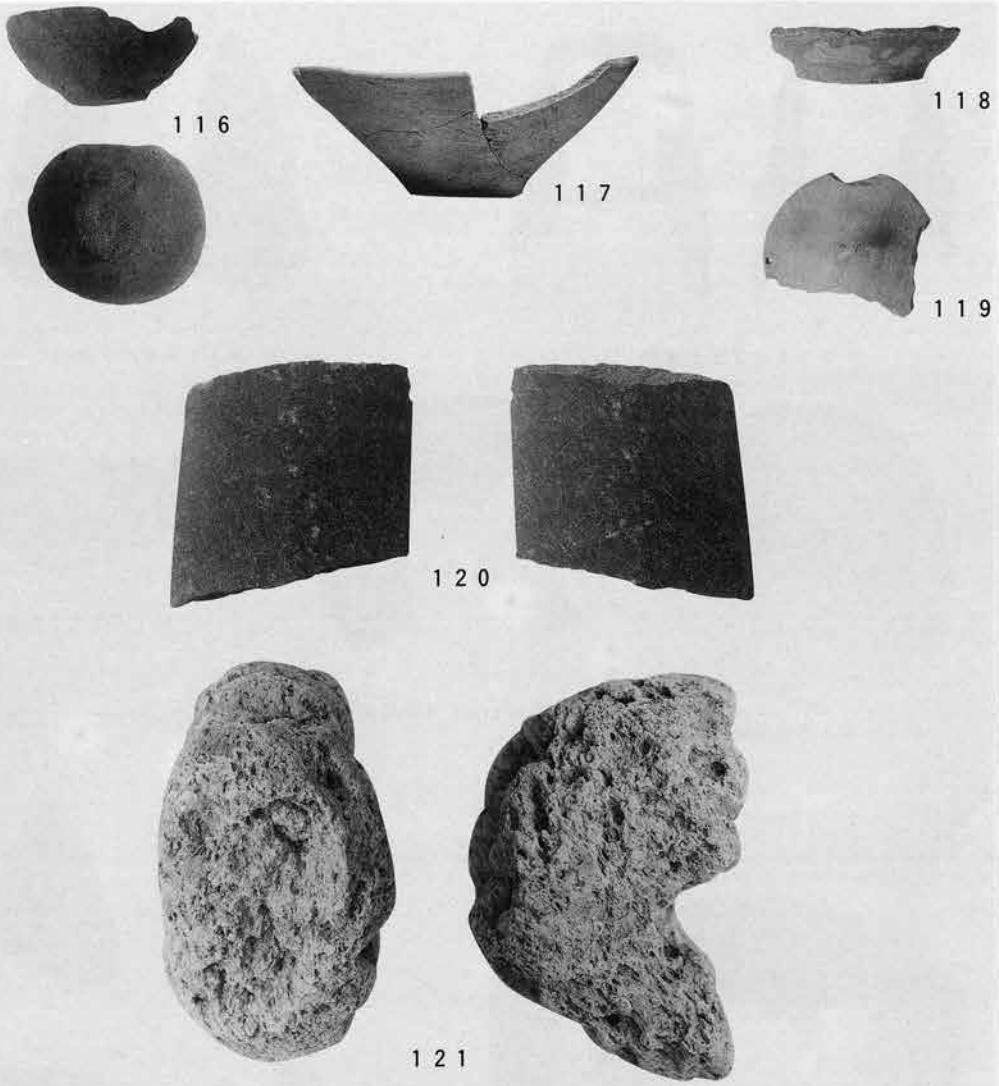

53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
66
67
68
69
70
71
72
73
74
75
76
77
78


79
80
81
83
87
84
85
86
87
88
89
90
91


92
93
94
95
96
97
98
99
100

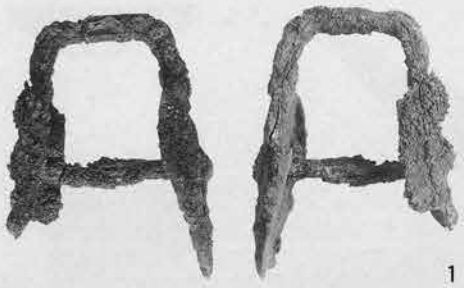
図版 二百二十二





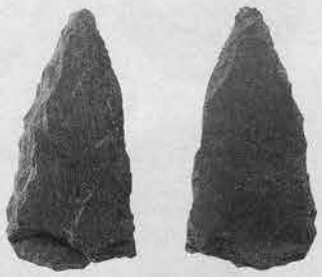
M８号溝址出土遺物

M９号溝址出土遺物



1

Ｐｉｔ４２出土遺物

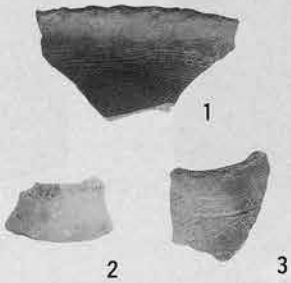


1

Ｐｉｔ５５出土遺物

1

Ｐｉｔ７４出土遺物



1 2 3

Ｐｉｔ１７９出土遺物

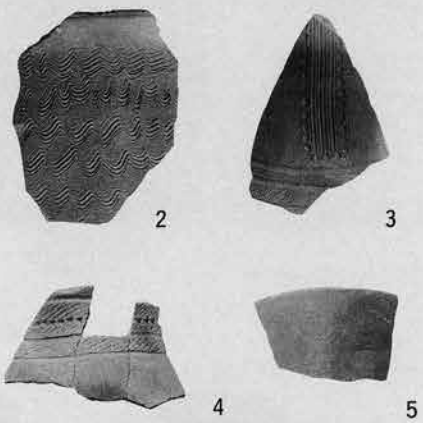
1

Ｐｉｔ１８２出土遺物

1

1

Ｐｉｔ３２０出土遺物

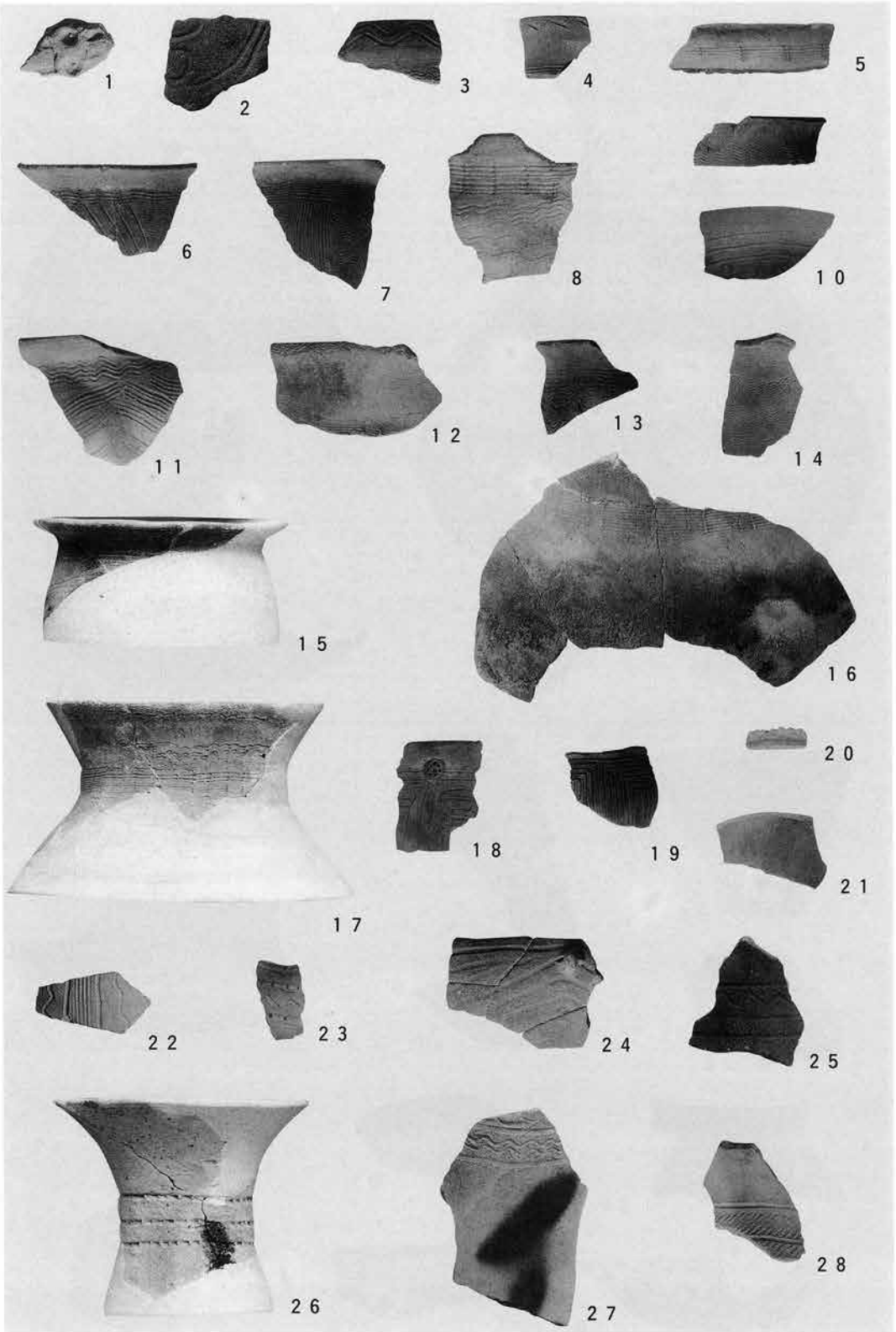


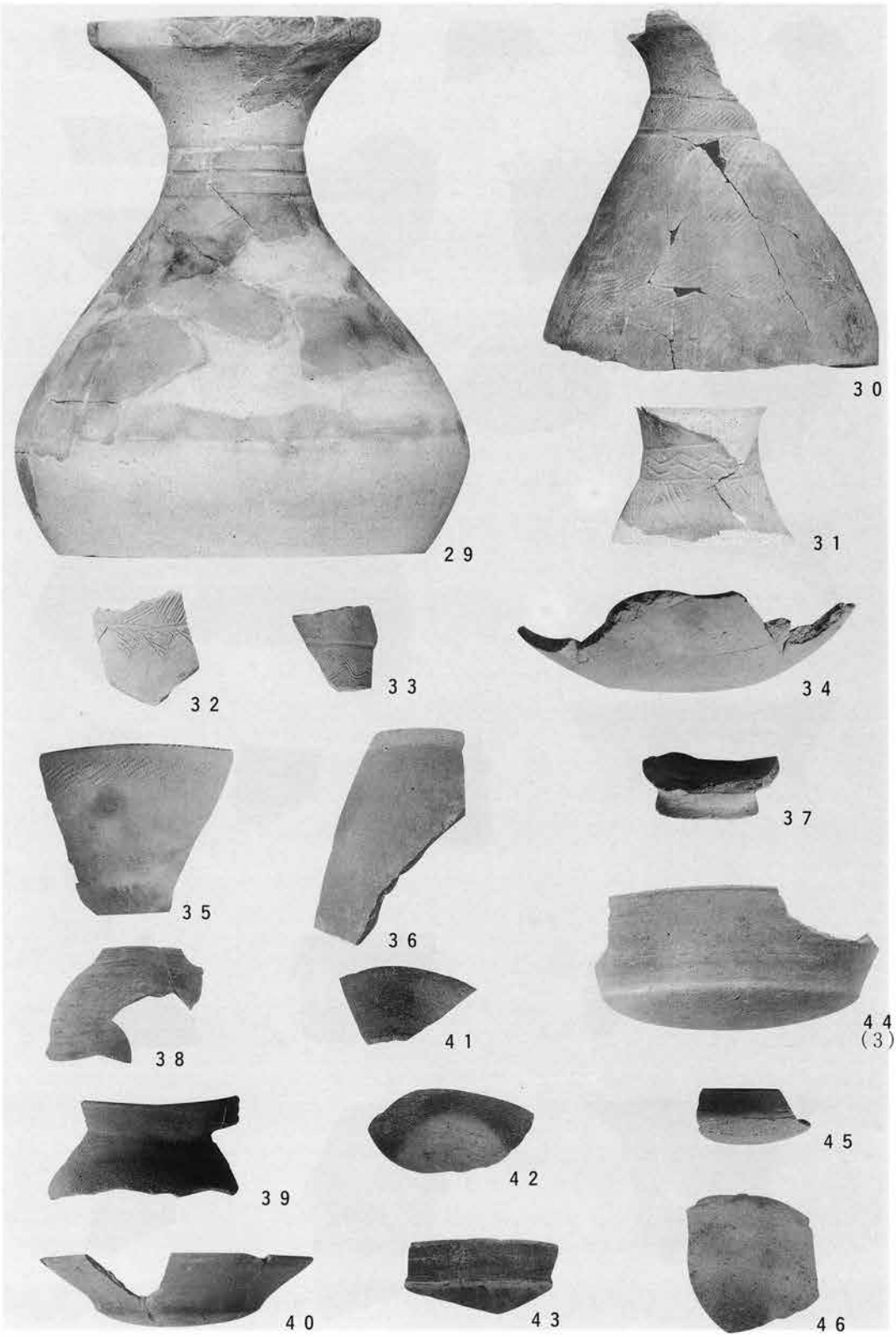
2 3 4 5

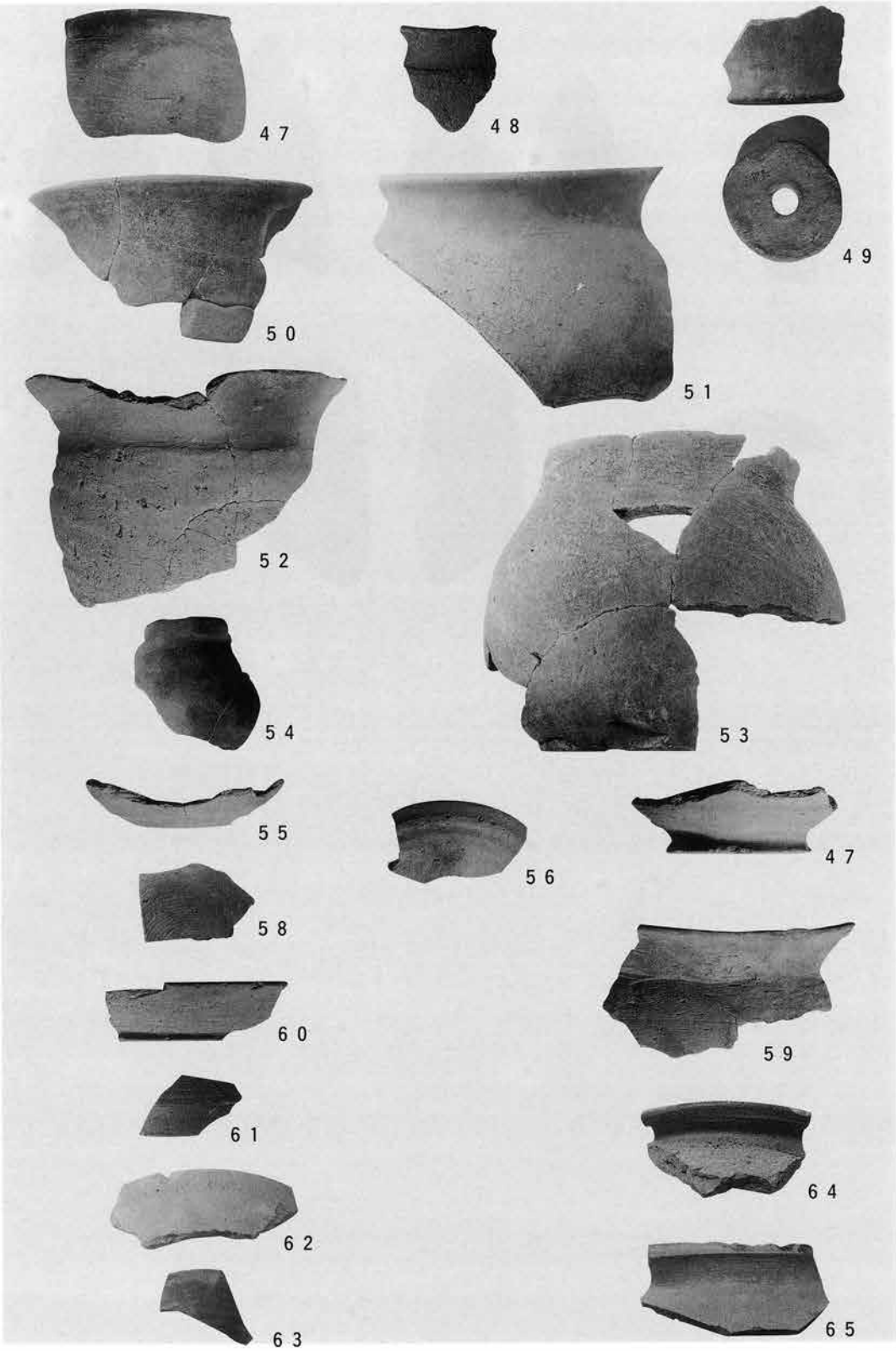
Ｐｉｔ２９６出土遺物

1

Ｐｉｔ３２６出土遺物


1
2
3
4
5
6
7
8
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28


29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
41
44
(3)
39
42
45
40
43
46


47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
47
58
59
60
61
62
63
64
65

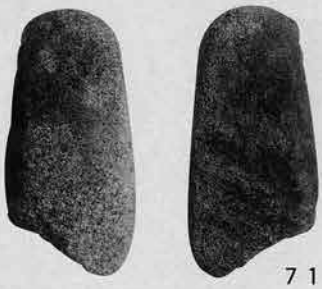
66

69
原寸

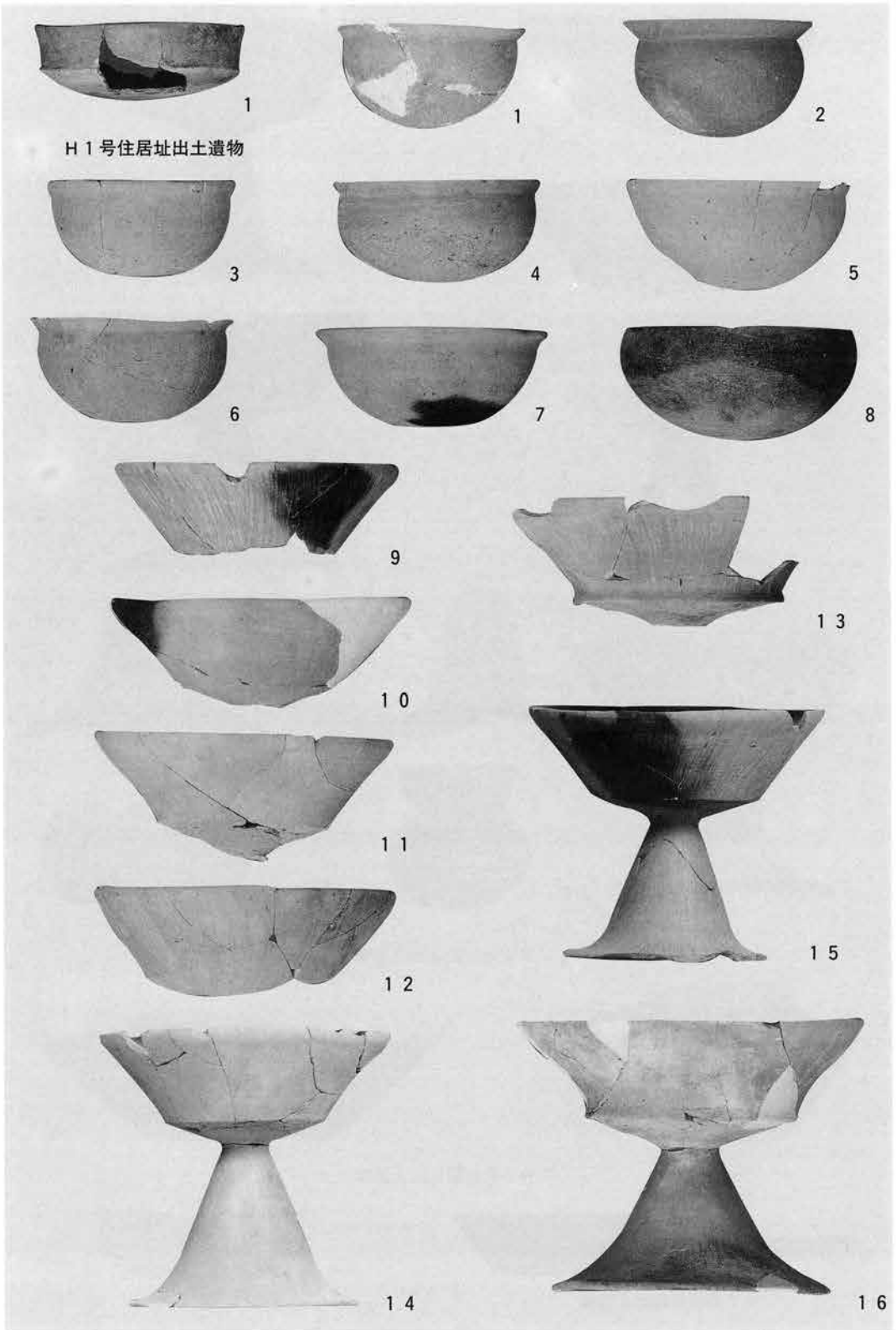
70
原寸

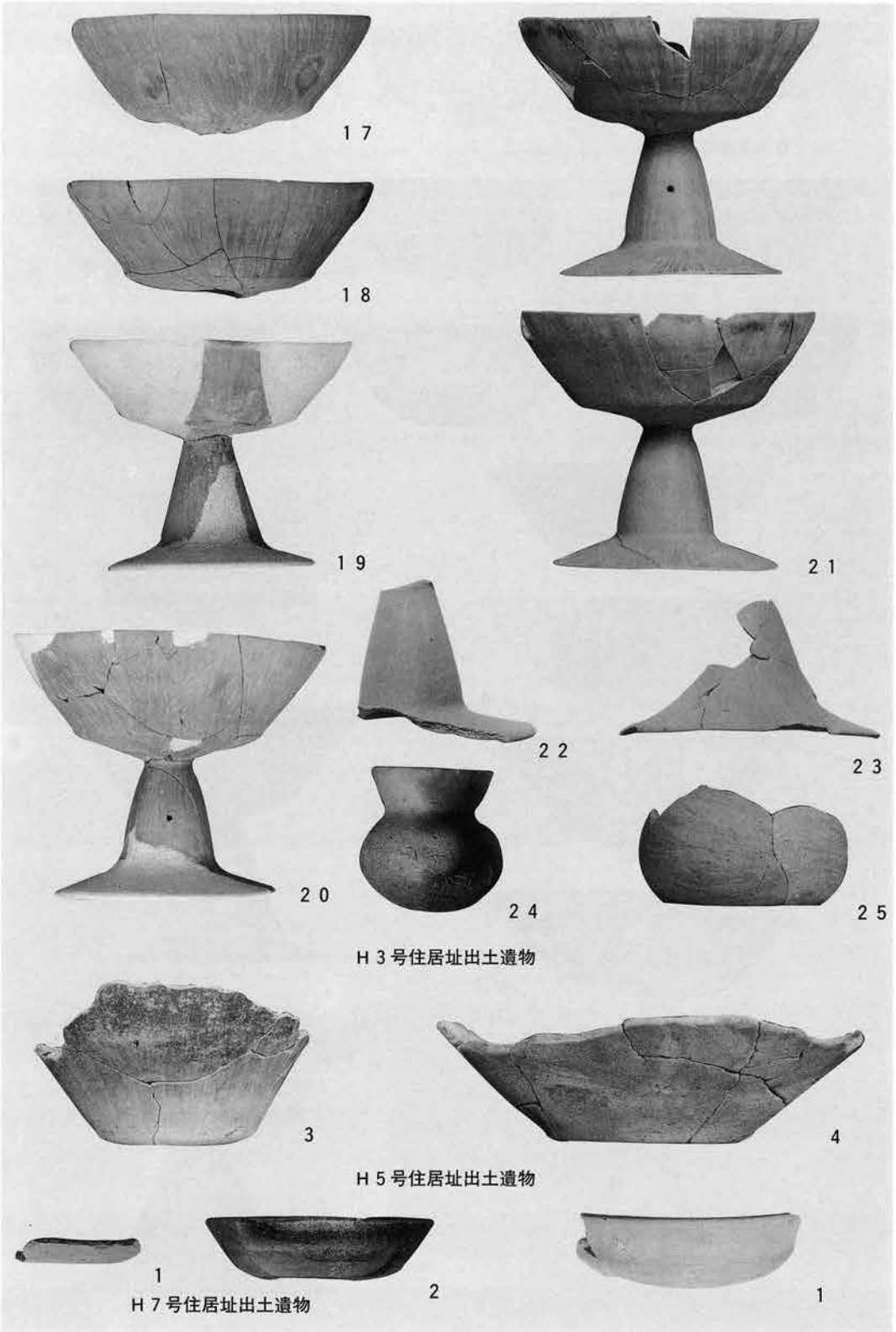
67

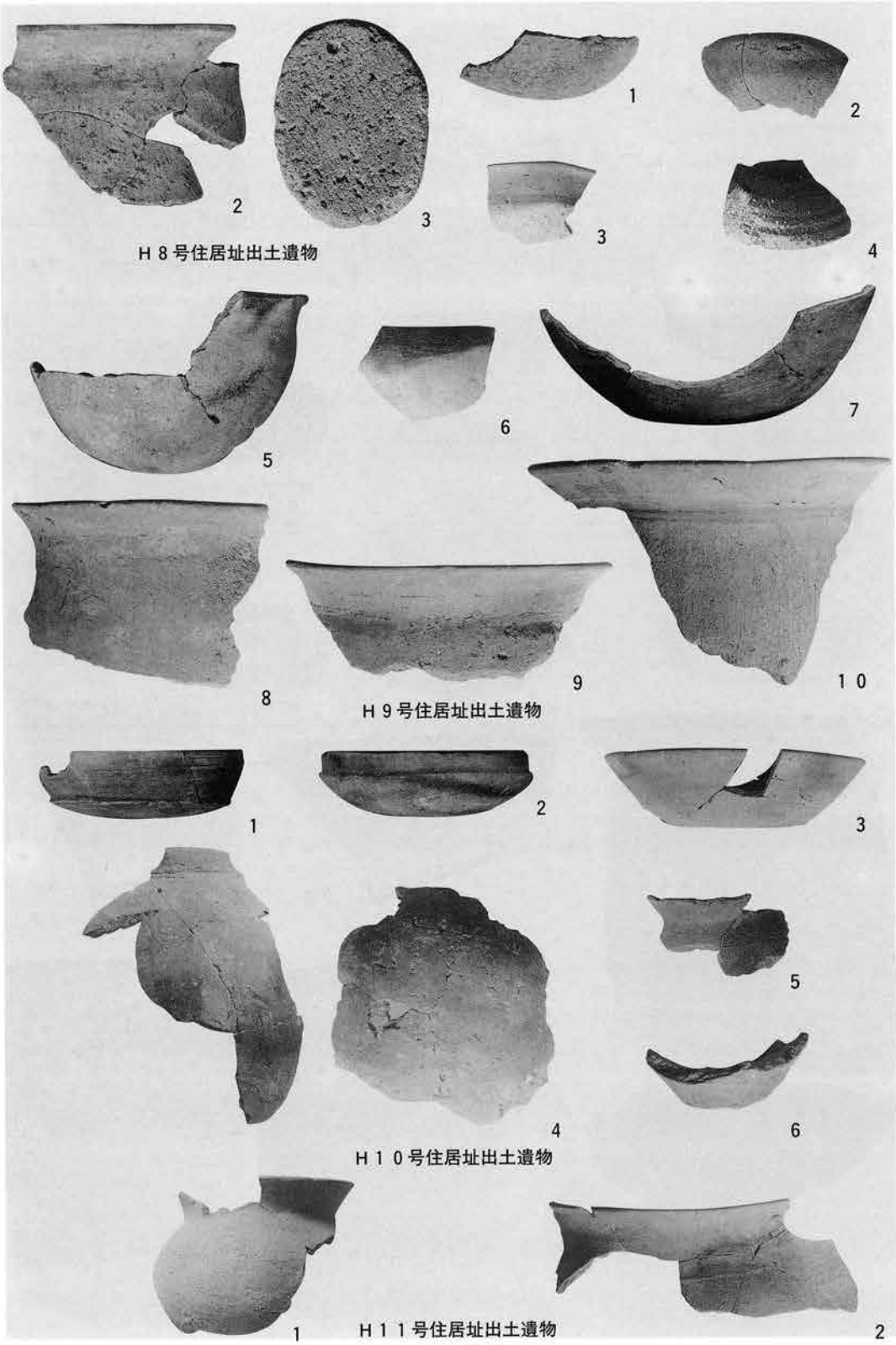
68

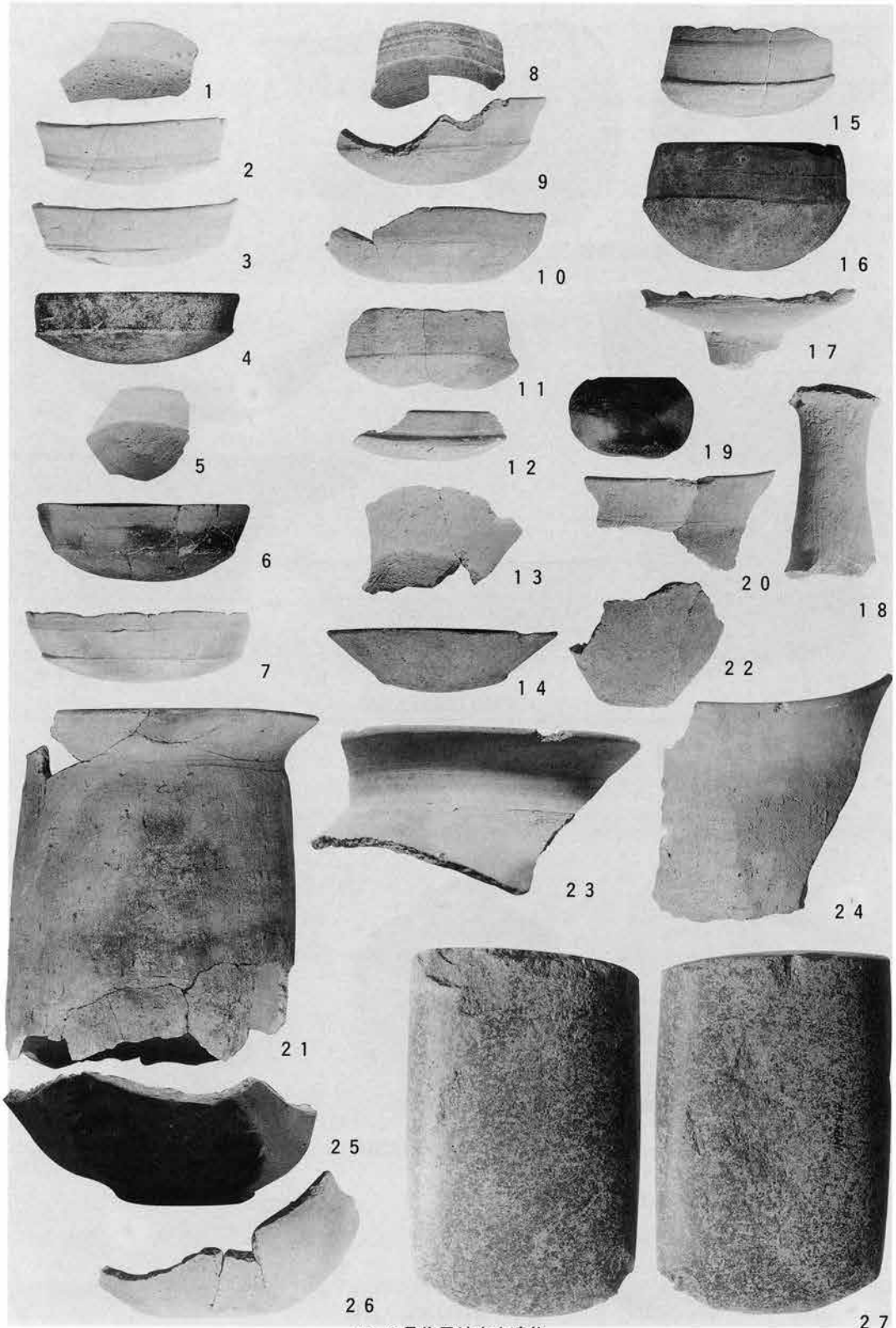


71


1
1
2
H１号住居址出土遺物
3
4
5
6
7
8
9
13
10
11
15
12
14
16


17
18
19
21
20
22
23
24
25
H３号住居址出土遺物
3
4
H５号住居址出土遺物
1
2
1
H７号住居址出土遺物


2
3
1
2
3
4
H８号住居址出土遺物
5
6
7
8
9
10
H９号住居址出土遺物
1
2
3
4
5
6
H１０号住居址出土遺物
1
2
H１１号住居址出土遺物

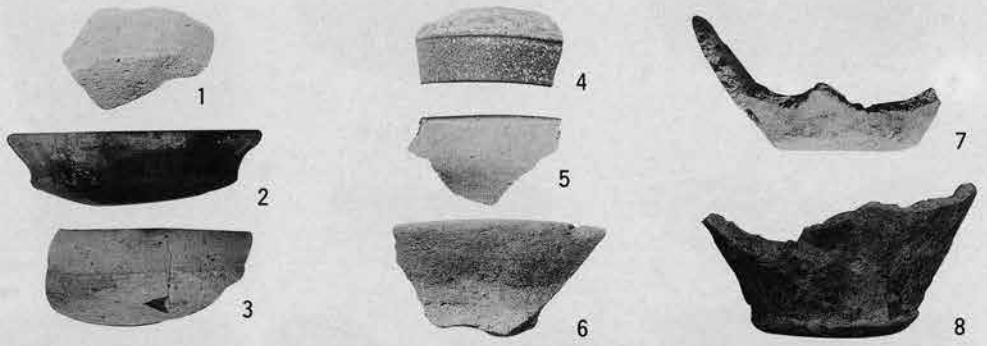


H１２号住居址出土遺物

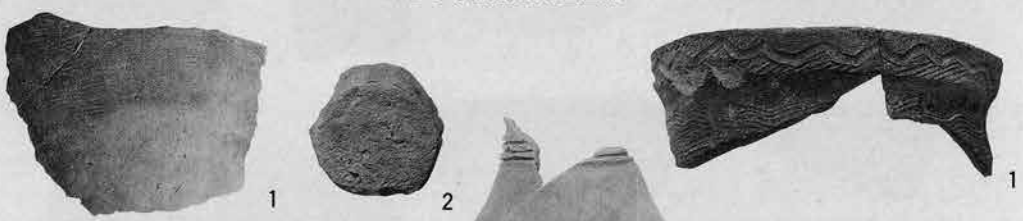
H１８号住居址出土遺物

H１９号住居址出土遺物

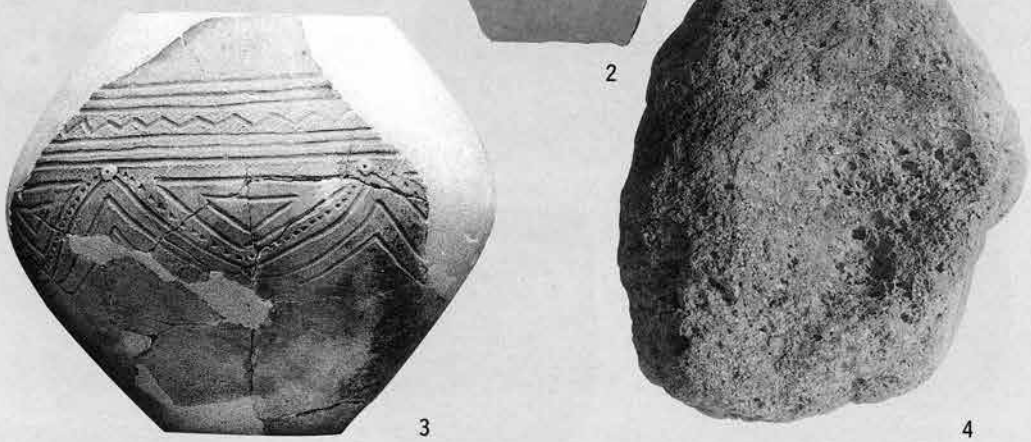
H２１号住居址出土遺物



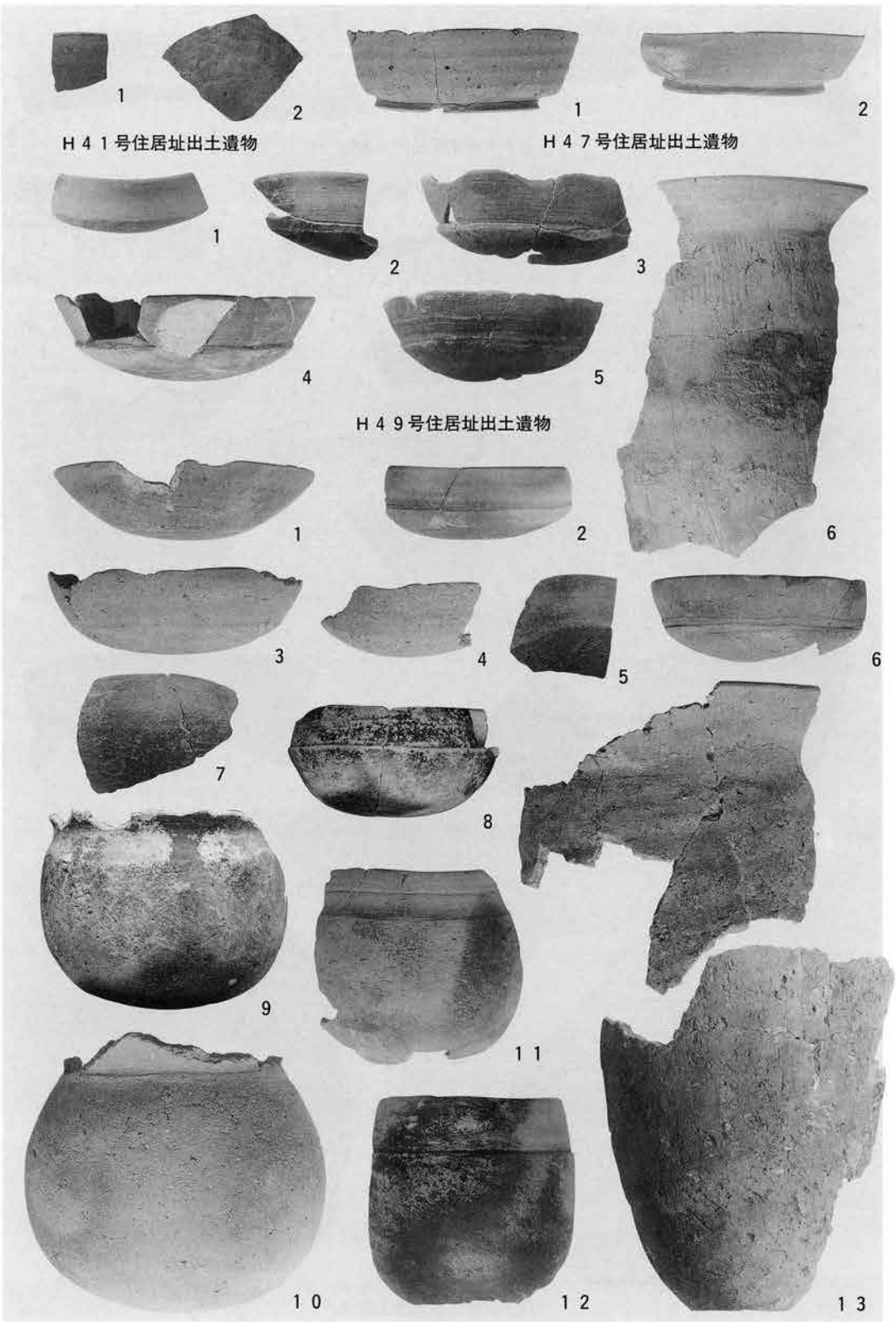
H２３号住居址出土遺物

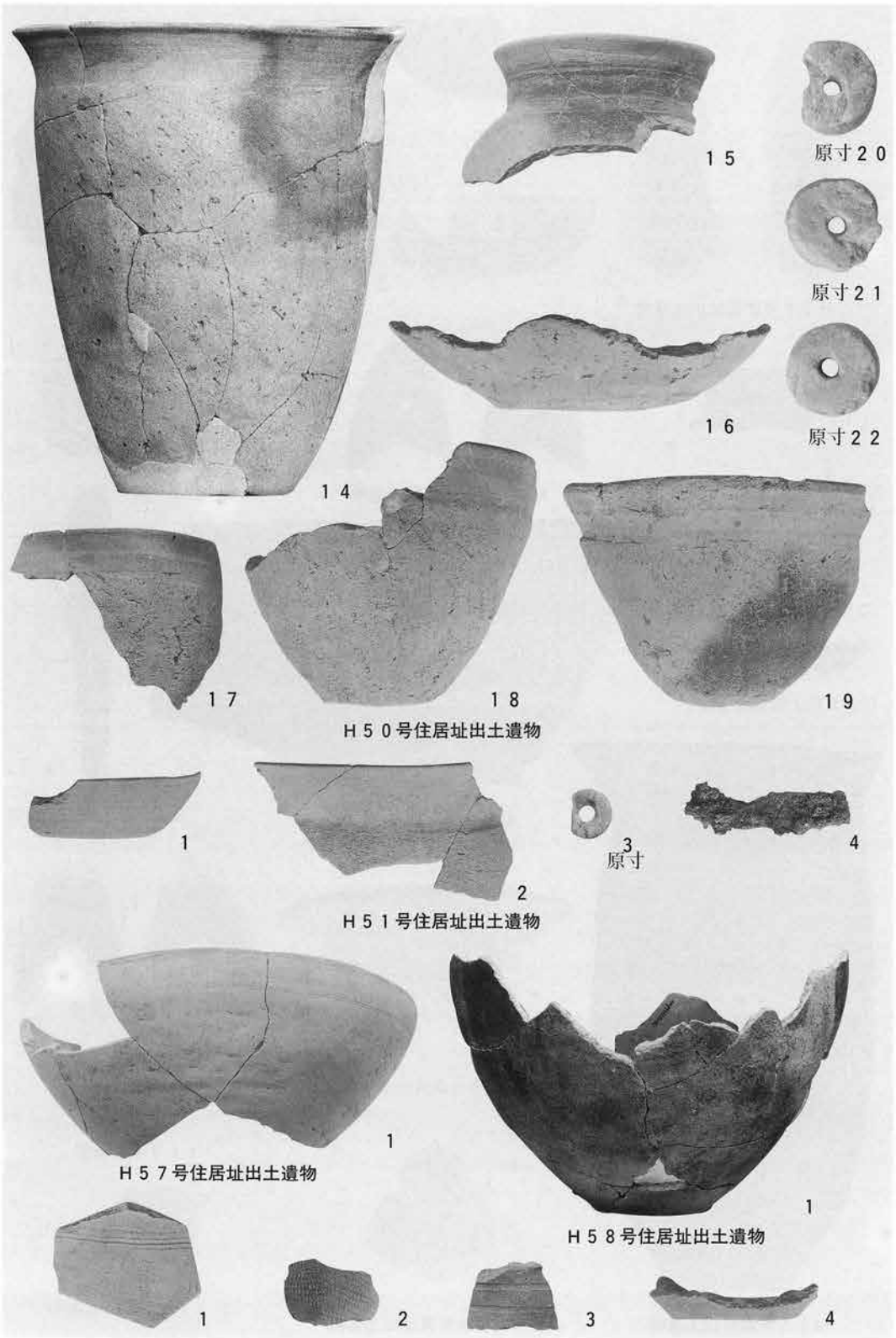


H２６号住居址出土遺物

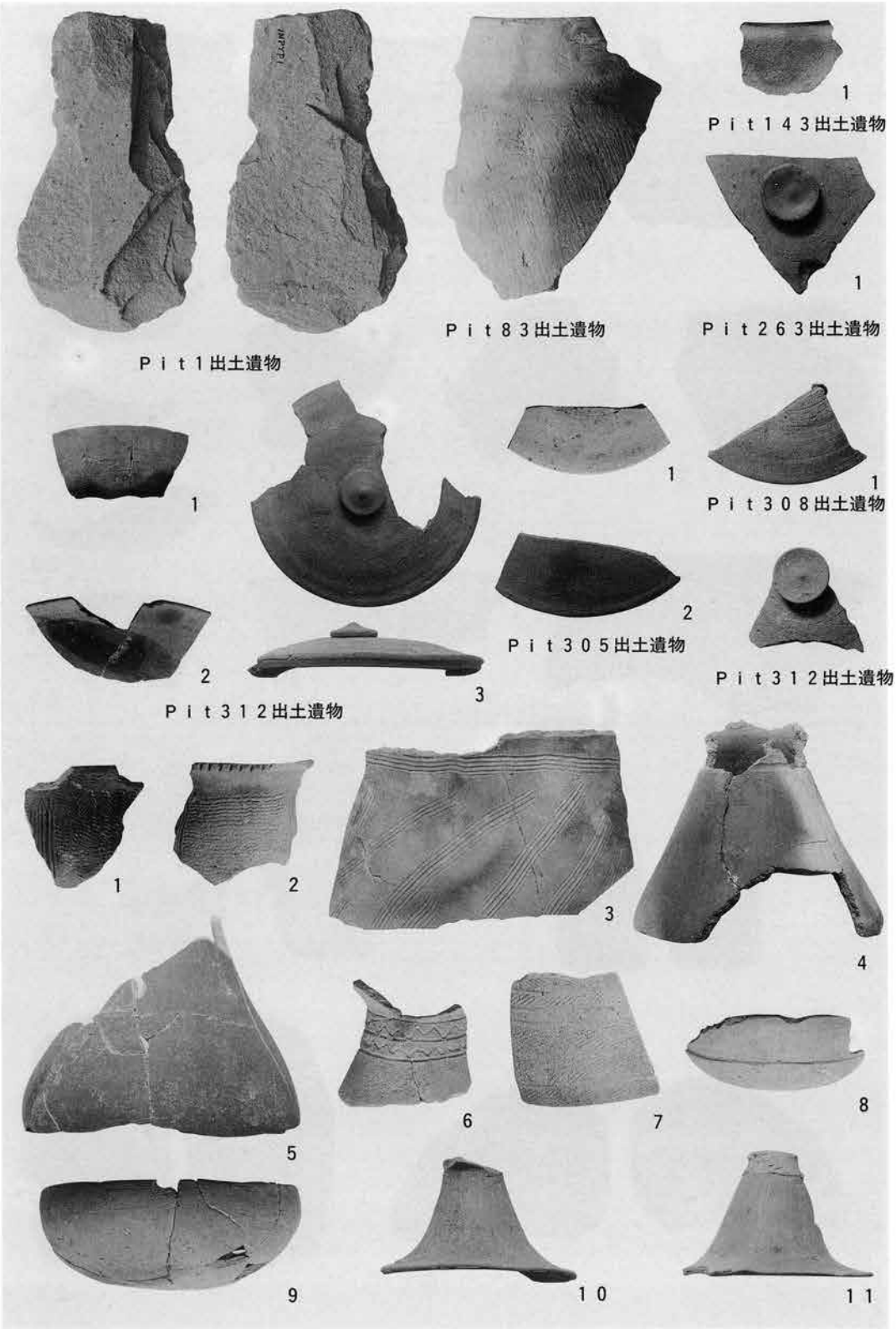


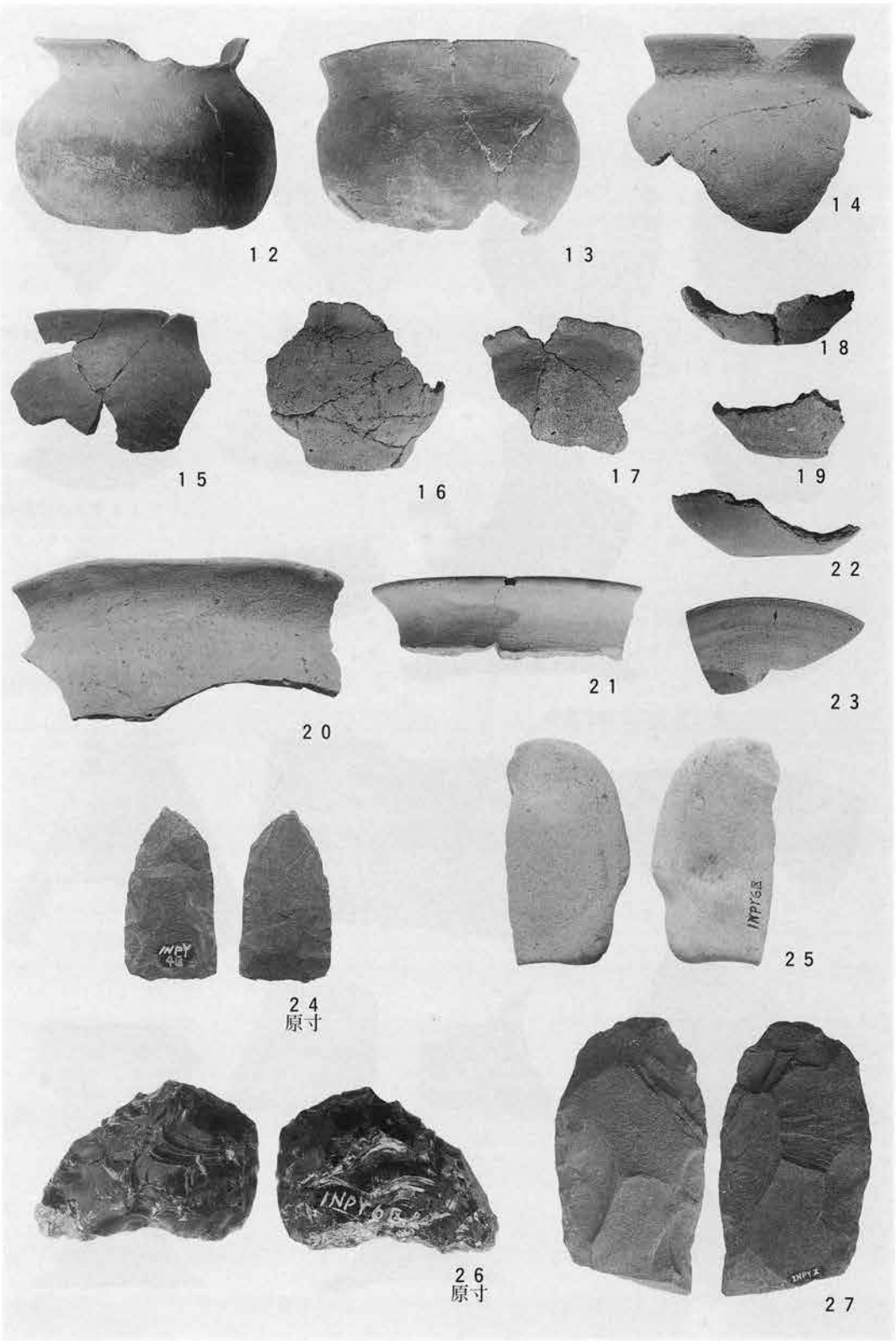
H３０号住居址出土遺物


1
2
H４１号住居址出土遺物
1
2
H４７号住居址出土遺物
1
2
3
4
5
H４９号住居址出土遺物
1
2
6
3
4
5
6
7
8
9
11
10
12
13

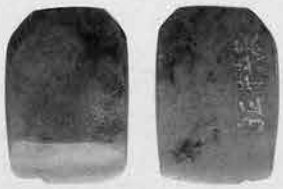

14
15
16
17
18
19
原寸20
原寸21
原寸22
H50号住居址出土遺物
1
2
3
4
原寸
H51号住居址出土遺物
1
H57号住居址出土遺物
1
H58号住居址出土遺物
1
2
3
4

1
2
3
4
5
5
原寸
H５９号住居址出土遺物
6
7
原寸
8
H６４号住居址出土遺物
1
D８号土坑出土遺物
1
D３１号土坑出土遺物
1
D１０号土坑出土遺物
1
D１１号土坑出土遺物
1
M１６号溝址出土遺物
1
M５号溝址出土遺物
Pit８出土遺物
1
原寸
1
Pit９出土遺物
1
M１５号溝址出土遺物
1
Pit１２６出土遺物


Pit1出土遺物
Pit83出土遺物
1
Pit143出土遺物
1
Pit263出土遺物
1
2
Pit312出土遺物
3
1
Pit305出土遺物
2
1
Pit308出土遺物
Pit312出土遺物
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11


12
13
14
15
16
17
18
19
22
20
21
23
24
原寸
25
26
原寸
27

28



29

30

佐久市埋蔵文化財調査報告書

第１集　『金井城跡』
第２集　『市内遺跡発掘調査報告書1990』
第３集　『石附窯址群Ⅲ』
第４集　『大ふけ』
第５集　『立科Ｆ遺跡』
第６集　『上曽根遺跡』
第７集　『三貫畑遺跡』
第８集　『瀧の下遺跡』
第９集　『国道141号線関係遺跡』
第10集　『聖原遺跡Ⅱ』
第11集　『赤座垣外遺跡』
第12集　『若宮遺跡Ⅱ』
第13集　『上高山遺跡Ⅱ』
第14集　『栗毛坂遺跡』
第15集　『野馬久保遺跡』
第16集　『石並城跡』
第17集　『市内遺跡発掘調査報告書1991』（１月～３月）
第18集　『西曽根遺跡』
第19集　『上芝宮遺跡』
第20集　『下聖端遺跡Ⅲ』
第21集　『金井城跡Ⅲ』
第22集　『市内遺跡発掘調査報告書1991』
第23集　『南上中原・南下中原遺跡』
第24集　『上聖端遺跡』
第25集　『上久保田向Ⅳ』
第26集　『藤塚古墳群・藤塚Ⅱ』
第27集　『上久保田向Ⅲ』
第28集　『曽根新城Ⅴ』
第29集　『筒村遺跡Ｂ　山法師遺跡Ｂ』
第30集　『市内遺跡発掘調査報告書1992』
第31集　『山法師遺跡Ａ　筒村遺跡Ａ』
第32集　『東ノ割』
第33集　『聖原遺跡Ⅶ　下曽根遺跡Ⅰ　前藤部遺跡２』
第34集　『西一本柳遺跡Ⅰ』
第35集　『市内遺跡発掘調査報告書1993』
第36集　『蛇塚Ｂ遺跡Ⅲ』
第37集　『西一本柳遺跡Ⅱ　中西ノ久保遺跡Ⅰ』
第38集　『南下中原遺跡Ⅱ』
第39集　『中屋敷遺跡』
第40集　『寺畑遺跡』
第41集　『曽根新城遺跡Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅵ
上久保田向遺跡Ⅰ・Ⅱ・Ⅴ・Ⅵ・Ⅶ
西曽根遺跡Ⅱ・Ⅲ』
第42集　『寄山』
第43集　『権現平遺跡・池端遺跡』
第44集　『寺添遺跡』
第45集　『市内遺跡発掘調査報告書1994』
第46集　『濁り遺跡』
第47集　『上芝宮遺跡Ⅴ』
第48集　『池端城跡』
第49集　『根々井芝宮遺跡』
第50集　『藤塚遺跡Ⅲ』
第51集　『寺中遺跡　中屋敷遺跡Ⅱ』
第52集　『坪の内遺跡』
第53集　『円正坊遺跡Ⅱ』
第54集　『市内遺跡発掘調査報告書1995』
第55集　『番屋前遺跡Ⅰ・Ⅱ』
第56集　『聖原遺跡Ⅹ』
第57集　『高師町遺跡Ⅱ』
第58集　『下穴虫遺跡Ⅰ』
第59集　『市内遺跡発掘調査報告書1996』
第60集　『曽根城遺跡Ⅱ』
第61集　『割地遺跡』
第62集　『野馬久保遺跡Ⅱ』
第63集　『西大久保遺跡Ⅲ』
第64集　『梨の木遺跡Ⅳ』
第65集　『中宿遺跡』
第66集　『中西ノ久保遺跡Ⅱ　仲田遺跡　寺畑遺跡Ⅱ』
第67集　『供養塚遺跡』
第68集　『前藤部遺跡』
第69集　『高山遺跡Ⅰ・Ⅱ』
第70集　『観音堂』
第71集　『市内遺跡発掘調査報告書1997』
第72集　『市道Ⅱ』

佐久市埋蔵文化財調査報告書　第73集
一本柳遺跡群　西一本柳Ⅲ・Ⅳ
－長野県佐久市岩村田西一本柳遺跡Ⅲ・Ⅳ発掘調査報告書－
１９９９年３月
編集・発行　佐久市教育委員会
〒385-8501　長野県佐久市大字中込3056
埋蔵文化財課
〒385-0006　長野県佐久市大字志賀5953
TEL　0267－68－7321
印刷所　株式会社佐久印刷所